

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第163集

山賀遺跡

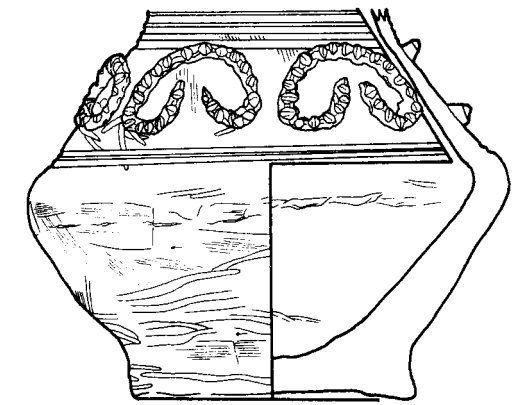
— 本文編 —

八尾市

# 山賀遺跡

寝屋川水系改良工事（一級河川寝屋川 新家調節池）に伴う発掘調査報告書

— 本文編 —

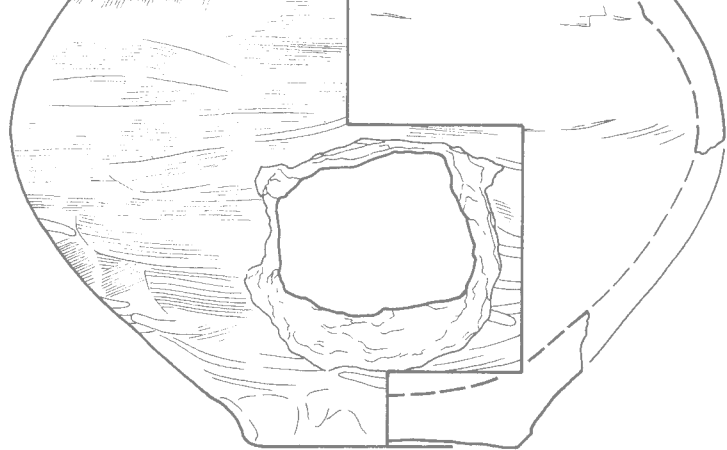


2007年9月

財団法人 大阪府文化財センター

二〇〇七年九月

財団法人 大阪府文化財センター

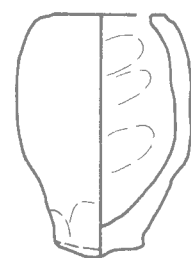
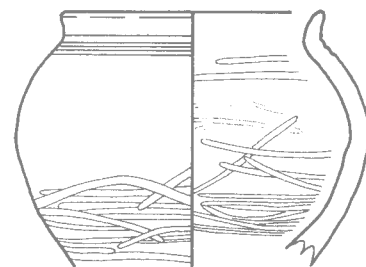
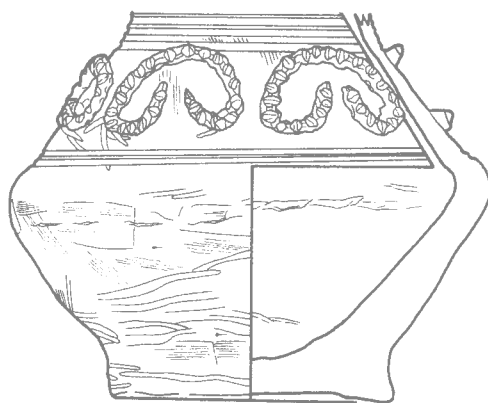
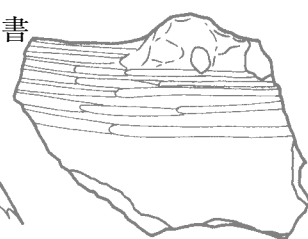
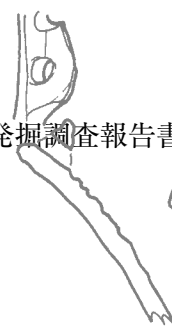
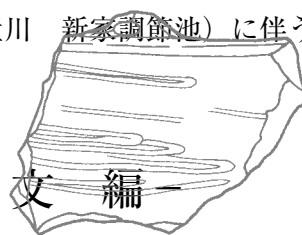
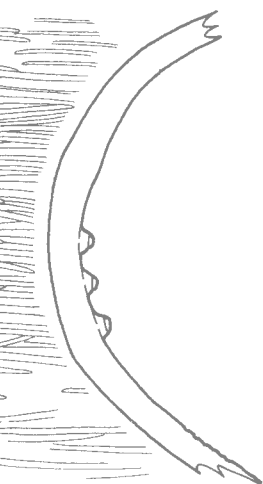
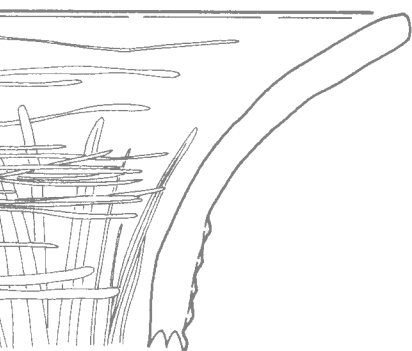


八尾市

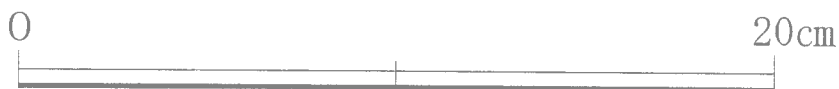
# 山 賀 遺 跡

寝屋川水系改良工事（一級河川寝屋川 新家調節池）に伴う発掘調査報告書

一本 文 編



財団法人 大阪府文化財センター







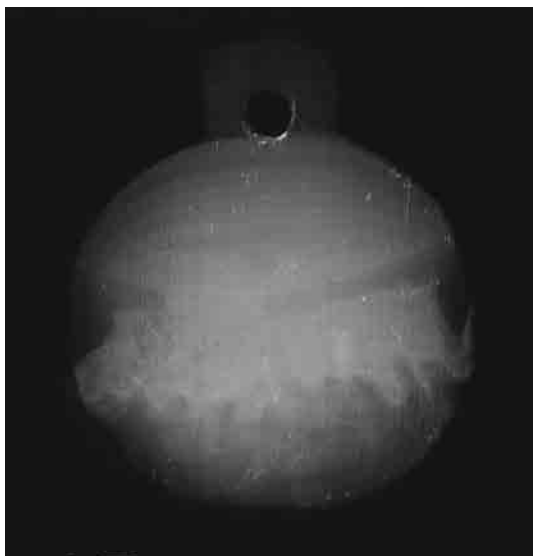
### 調査地を南上空から望む

中央手前の丸い調査区が03-1-2区、その左手前、小さな長方形の調査区が03-1-3区。調査地の右（東）側を北流するのが楠根川。左手前（南西）から中央奥（北）にのびるのが近畿自動車道天理吹田線で、その建設に伴い昭和54年から昭和57年にかけて山賀遺跡として初めての大規模な発掘調査が実施された。03-1-2区第10面調査中の2005年4月撮影。





流水文のある「垂飾」形木製品



X線写真

03-1-2区第11-2面、弥生時代前期の1400土坑から出土した。

木製品の上部に鈕が付き、体部の表面には流水文が刻まれている。X線写真で明らかなように、抉り孔が左右に貫通しており、下部の切り込みの奥は棒状のものが刺さっていたような形状をしている。



# 序 文

山賀遺跡は、旧大和川が形成した河内平野の中央部に位置する。遺跡の発見は、昭和46（1971）年、楠根川改修工事の際に、弥生時代の土器や石器、古墳時代の須恵器や土師器などが出土した事による。その後、数多くの発掘調査が実施され、弥生時代をはじめ各時代の遺構・遺物が確認されている。この遺跡のもつ歴史的重要性が特に注目されるようになったのは、当センターの前身である大阪文化財センターが昭和54（1979）年から行った近畿自動車道建設に伴う山賀遺跡の発掘成果であった。遺跡を南北1 kmに及ぶ区間で縦断し、弥生時代前期から中期を中心とする水田、掘立柱建物、井戸などの多くの遺構と大量の遺物が検出され、弥生時代を研究する上で重要な遺跡であることを強く印象づけることとなった。

そして今回の調査でも、そうした印象をさらに強める膨大な遺構・遺物が検出された。とりわけ、他に類例のない弥生時代前期の「垂飾」形木製品の出土は、調査に携わった者のみならず、多くの方々に驚きをもって迎えられたのである。さらに、遺構では弥生時代の溝群や木棺墓、遺物では多量の弥生土器、打製石器や木器など、遺跡の内容の豊富なことは特筆すべきものであった。今後の弥生時代研究に大いに資することが期待されよう。

今回の調査では、大阪府教育委員会、大阪府八尾土木事務所、そして地元他関係各位に、多大なるご理解とご協力並びにご指導を賜った。心よりお礼申し上げますとともに、今後ともなお一層のご支援をお願いする次第である。

2007年 9 月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水 野 正 好





## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市に所在する山賀（やまが）遺跡03 - 1・05 - 1の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府八尾土木事務所から財団法人 大阪府文化財センターが平成16年2月2日から平成19年6月29日までの間委託を受け、平成16年2月2日から平成17年9月30日まで第1次調査を行い、平成17年10月3日から平成19年3月31日まで第2次調査と遺物整理作業を行い、平成19年度に、本書刊行を以って完了した。
3. 発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

平成15年度 調査部長玉井 功、中部調査事務所長小野久隆、調査第二係長金光正裕、  
調整課長赤木克視

平成16年度 調査部長玉井 功、中部調査事務所長小野久隆、調査第二係長金光正裕、  
技師本間元樹、専門調査員宮田佳代、調整課長赤木克視

平成17年度 調査部長赤木克視、中部調査事務所長小野久隆、調査第二係長森屋美佐子、  
技師本間元樹、専門調査員向井 妙・降矢哲男、調整課長田中和弘

平成18年度 調査部長赤木克視、中部調査事務所長小野久隆、調査第二係長森屋美佐子、  
技師本間元樹、専門調査員向井 妙、主査片山彰一〔写真〕、調整課長田中和弘
4. 木器・金属器などの保存処理および樹種鑑定は中部調査事務所主査山口誠治・専門調査員岩立美香が行った。また、遺物整理においては当センター係長三好孝一・技師船築紀子・専門調査員長嶺睦、影山美智与のそれぞれ協力を得た。さらに、出土土器については係長三好孝一はじめ当センター職員より全般にわたって教示を得た。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会をはじめとし、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

辻本裕也・辻 康男・松田順一郎・西山要一・森田拓馬・島津 功・橋本俊範・赤田昌倫  
・安部みき子・光谷拓実・大河内隆之・一瀬和夫・田中清美・野口 淳・野口 舞
6. 調査・整理の実施にあたっては、次の分析等をお願いし、ご教示、玉稿などを頂いた（敬称略）。

管玉・サヌカイトの産地分析	藁科哲男
人骨・動物遺体の同定	安部みき子
木棺等の年輪年代測定	光谷拓実
土器付着物・木製品に対する分析	西山要一

7. 調査の実施にあたっては、次の分析・作成作業を委託した。

古環境分析（花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析）	パリノ・サーヴェイ株式会社
土壌微細形態学的分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
サヌカイト付着物の赤外分光分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
サヌカイトの原材産地分析	有限会社遺物材料研究所
「垂飾」形木製品の保存処理	奈良大学文学部保存科学研究室
「垂飾」形木製品の複製品製作	森田拓馬

8. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ寄稿し、執筆分担は下記に示す通りである（敬称略）。

本間元樹	第1章、第2章、第3章、第4～8章第1節、第4～8章第3節の主に遺構、第9章第1節、第10章第1～2節
向井 妙	第4～8章第2節、第4～8章第3節の主に遺物、第10章第3節
パリノ・サーヴェイ	第9章「山賀遺跡の微化石分析」「山賀遺跡における弥生時代堆積物の堆積構造の検討」「山賀遺跡サヌカイト付着物赤外分光分析」
遺物材料研究所	第9章「山賀遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析」
船築紀子	第9章「山賀遺跡252大溝下層・1397溝出土石器について」
藁科哲男	第9章「山賀遺跡出土管玉の産地分析」
安部みき子	第9章「山賀遺跡出土の動物遺体」「山賀遺跡出土の人骨」
岩立美香	第9章「山賀遺跡出土人骨の保存処理」
光谷拓実	第9章「山賀遺跡出土木材の年輪年代」
山口誠治	第9章「山賀遺跡の植物遺体及び木製遺物について」「山賀遺跡出土黒色物質付着弥生土器についての科学的調査」
森田拓馬	第9章「山賀遺跡出土「垂飾」形木製品の複製品製作」

9. 編集は本間元樹・向井 妙が行った。

10. 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

## 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、T.P.値（東京湾平均海面）を使用している。
2. 遺構平面図の座標値は、世界測地系（測地成果2000）に基づく国土座標第Ⅵ系で表記する。報告書内での単位はkmである。
3. 遺構実測図等に付す方位針は、全て国土座標第Ⅵ系の座標北を示す。
4. 調査区平面図に示す等高線数値は、標高の高い方を数字の天とする。
5. 現地調査および遺物整理は（財）大阪文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』（1988年）、（財）大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年）に準拠した。
6. 土層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所監修を用いた。
7. 遺構は、第1次調査の03 - 1 - 1・2・3区については調査区および遺構種類に関わらず通し番号（1～1431）とし、さらに整理作業の過程で追加（1501～1506）した。  
第2次調査の05 - 1 - 1区（2001～2074）と05 - 1 - 2区（2075～2089）では、調査区内で遺構種類に関わらず通し番号とし、さらに05 - 1 - 1区で追加（2090）した。  
遺構番号付与の実際は、第3章の表1・2を参照されたい。
8. 掲載遺物番号は整理作業の都合上、各調査区に分けた。具体的には、以下のようになる。

03 - 1 - 1区	10001～10108	05 - 1 - 1区	40001～40047
03 - 1 - 2区	20001～21129	05 - 1 - 2区	50001～50018
03 - 1 - 3区	30001～30167		

なお、第4～8章（各区の調査成果）に掲載せず、第9章（分析）でのみ報告した分析対象遺物は「No.」を付けて現場での遺物登録番号のまま表示している。
9. 本書内の本文・図・表・写真図版は通し番号とする。
10. 掲載図面の縮尺は、調査区平面図は1/100・1/200、遺構図は1/10・1/20、土器1/4、磨製石器1/2、打製石器2/3、木器1/4・1/8を基本とする。なお、必要に応じてやむをえず縮尺を変更したものについては、各図中に縮尺を明示した。

11. 遺物実測図に異なる縮尺の図が混在する場合は一本線で区別した。また、異なる遺構や層位出土遺物が混在する場合は二重線で区別した。

12. 土器類の断面は、須恵器・施釉陶器・磁器を黒塗り、瓦をアミフセ30%、その他を白抜きとした。土器表面に付着した赤色顔料はアミフセ10%、煤はアミフセ30%、土器表面の発泡した部分はアミフセ10%で表現した。

図上復原できない土器の小片は、「内面－断面－外面」と配置した。

13. 打製石器の凡例は以下の通りである。



14. 写真掲載遺物の縮尺は任意である。

15. 土器・石器・木器は、それぞれ観察表を作成した。石器・木器については図面報告のできなかった資料についても掲載している。参考にされたい。

16. 出土遺物の記述については第10章に挙げた文献を参考にした。

弥生土器は寺沢・森井（1989）によって時期を記したが、（ ）内に三好（1993）を参考にして併記したものがある。

# 山 賀 遺 跡

寢屋川水系改良工事（一級河川寢屋川 新家調節池）に伴う発掘調査報告書

## 本 文 目 次

《第1分冊》

巻頭カラー図版

序文	i
例言	iii
凡例	v
本文目次	vii
図目次	xii
表目次	xx
写真目次	xxii
写真図版目次	xxiii

第1章 調査にいたる経緯と経過 (本間) 1

第2章 位置と環境 (本間) 2

第3章 調査・整理の方法 (本間) 5

第4章 03-1-1区の調査成果

第1節 概要 (本間) 11

第2節 層序 (向井) 11

第3節 遺構と遺物 (本間・向井) 15

(1) 03-1-1区盛土層・第0層の遺物	15	(11) 03-1-1区第5層の遺物	27
(2) 03-1-1区第1面	17	(12) 03-1-1区第6面の遺構と遺物	27
(3) 03-1-1区第1層の遺物	17	(13) 03-1-1区第6層の遺物	38
(4) 03-1-1区第2面の遺構と遺物	19	(14) 03-1-1区第7面の遺構と遺物	39
(5) 03-1-1区第2層の遺物	19	(15) 03-1-1区第7層の遺物	39
(6) 03-1-1区第3面の遺構と遺物	21	(16) 03-1-1区第8面の遺構と遺物	43
(7) 03-1-1区第3層の遺物	23	(17) 03-1-1区第8層の遺物	44
(8) 03-1-1区第4面の遺構と遺物	23	(18) 03-1-1区第9面の遺構と遺物	46
(9) 03-1-1区第4層の遺物	26	(19) 03-1-1区第9層の遺物	46
(10) 03-1-1区第5面の遺構と遺物	26	(20) 03-1-1区第10面の遺構と遺物	46

(21) 03 - 1 - 1 区第10層の遺物	51	(27) 03 - 1 - 1 区第11 - 3層の遺物	54
(22) 03 - 1 - 1 区第11面の遺構と遺物	53	(28) 03 - 1 - 1 区第12面の遺構と遺物	54
(23) 03 - 1 - 1 区第11層の遺物	54	(29) 03 - 1 - 1 区第12層の遺物	56
(24) 03 - 1 - 1 区第11 - 2面の遺構と遺物	54	(30) 03 - 1 - 1 区第13面の遺構と遺物	56
(25) 03 - 1 - 1 区第11 - 2層の遺物	54	(31) 03 - 1 - 1 区第13層の遺物	56
(26) 03 - 1 - 1 区第11 - 3面	54		

## 第5章 03 - 1 - 2 区の調査成果

第1節 概要	(本間)	61	
第2節 層序	(向井)	61	
第3節 遺構と遺物	(本間・向井)	70	
(1) 03 - 1 - 2 区盛土層・第0層の遺物	70	(19) 03 - 1 - 2 区第9層の遺物	257
(2) 03 - 1 - 2 区第1面の遺構と遺物	74	(20) 03 - 1 - 2 区第9 - 2面の遺構と遺物	266
(3) 03 - 1 - 2 区第1層の遺物	77	(21) 03 - 1 - 2 区第9 - 2層の遺物	272
(4) 03 - 1 - 2 区第2面の遺構と遺物	80	(22) 03 - 1 - 2 区第10面の遺構と遺物	275
(5) 03 - 1 - 2 区第2層の遺物	86	(23) 03 - 1 - 2 区第10層の遺物	323
(6) 03 - 1 - 2 区第3面の遺構と遺物	86	(24) 03 - 1 - 2 区第10 - 2面の遺構と遺物	332
(7) 03 - 1 - 2 区第3層の遺物	90	(25) 03 - 1 - 2 区第10 - 2層の遺物	355
(8) 03 - 1 - 2 区第4面の遺構と遺物	94	(26) 03 - 1 - 2 区第11面の遺構と遺物	358
(9) 03 - 1 - 2 区第4層の遺物	97	(27) 03 - 1 - 2 区第11層の遺物	374
(10) 03 - 1 - 2 区第5面の遺構と遺物	100	(28) 03 - 1 - 2 区第11 - 2面の遺構と遺物	381
(11) 03 - 1 - 2 区第5層の遺物	105	(29) 03 - 1 - 2 区第11 - 2層の遺物	397
(12) 03 - 1 - 2 区第6面の遺構と遺物	108	(30) 03 - 1 - 2 区第11 - 3面の遺構と遺物	400
(13) 03 - 1 - 2 区第6層の遺物	156	(31) 03 - 1 - 2 区第11 - 3層の遺物	400
(14) 03 - 1 - 2 区第7面の遺構と遺物	163	(32) 03 - 1 - 2 区第12面の遺構と遺物	401
(15) 03 - 1 - 2 区第7層の遺物	173	(33) 03 - 1 - 2 区第12層の遺物	401
(16) 03 - 1 - 2 区第8面の遺構と遺物	174	(34) 03 - 1 - 2 区第13面の遺構と遺物	401
(17) 03 - 1 - 2 区第8層の遺物	189	(35) 03 - 1 - 2 区第13層の遺物	405
(18) 03 - 1 - 2 区第9面の遺構と遺物	195	(36) 側溝・サブトレンチ出土遺物	405

## 第6章 03 - 1 - 3 区の調査成果

第1節 概要	(本間)	414	
第2節 層序	(向井)	414	
第3節 遺構と遺物	(本間・向井)	417	
(1) 03 - 1 - 3 区盛土層・第0層の遺物	417	(5) 03 - 1 - 3 区第2層の遺物	421
(2) 03 - 1 - 3 区第1面の遺構と遺物	417	(6) 03 - 1 - 3 区第3面の遺構と遺物	421
(3) 03 - 1 - 3 区第1層の遺物	421	(7) 03 - 1 - 3 区第3層の遺物	421
(4) 03 - 1 - 3 区第2面の遺構と遺物	421	(8) 03 - 1 - 3 区第4面の遺構と遺物	421

(9) 03 - 1 - 3 区第4層の遺物……………424	(20) 03 - 1 - 3 区第9面の遺構と遺物……………441
(10) 03 - 1 - 3 区第4 - 2面の遺構と遺物……………424	(21) 03 - 1 - 3 区第9層の遺物……………448
(11) 03 - 1 - 3 区第4 - 2層の遺物……………424	(22) 03 - 1 - 3 区第10面の遺構と遺物……………450
(12) 03 - 1 - 3 区第5面の遺構と遺物……………426	(23) 03 - 1 - 3 区第10層の遺物……………458
(13) 03 - 1 - 3 区第5層の遺物……………431	(24) 03 - 1 - 3 区第11面の遺構と遺物……………463
(14) 03 - 1 - 3 区第6面の遺構と遺物……………431	(25) 03 - 1 - 3 区第11層の遺物……………466
(15) 03 - 1 - 3 区第6層の遺物……………435	(26) 03 - 1 - 3 区第11 - 2面の遺構と遺物……………469
(16) 03 - 1 - 3 区第7面の遺構と遺物……………437	(27) 03 - 1 - 3 区第12面の遺構と遺物……………469
(17) 03 - 1 - 3 区第7層の遺物……………437	(28) 03 - 1 - 3 区第12層の遺物……………469
(18) 03 - 1 - 3 区第8面の遺構と遺物……………438	(29) 03 - 1 - 3 区第13面の遺構と遺物……………469
(19) 03 - 1 - 3 区第8層の遺物……………440	(30) 03 - 1 - 3 区第13層の遺物……………472

## 第7章 05 - 1 - 1 区の調査成果

第1節 概要……………(本間)……………478	
第2節 層序……………(向井)……………478	
第3節 遺構と遺物……………(本間・向井)……………480	
(1) 05 - 1 - 1 区盛土層・第0層の遺物……………480	(15) 05 - 1 - 1 区第7層の遺物……………488
(2) 05 - 1 - 1 区第1面……………480	(16) 05 - 1 - 1 区第8面の遺構と遺物……………488
(3) 05 - 1 - 1 区第1層の遺物……………481	(17) 05 - 1 - 1 区第8層の遺物……………489
(4) 05 - 1 - 1 区第2面の遺構と遺物……………481	(18) 05 - 1 - 1 区第9面の遺構と遺物……………489
(5) 05 - 1 - 1 区第2層の遺物……………481	(19) 05 - 1 - 1 区第9層の遺物……………490
(6) 05 - 1 - 1 区第3面……………481	(20) 05 - 1 - 1 区第10面の遺構と遺物……………492
(7) 05 - 1 - 1 区第3層の遺物……………481	(21) 05 - 1 - 1 区第10層の遺物……………495
(8) 05 - 1 - 1 区第4面……………482	(22) 05 - 1 - 1 区第11面の遺構と遺物……………496
(9) 05 - 1 - 1 区第4層の遺物……………482	(23) 05 - 1 - 1 区第11層の遺物……………496
(10) 05 - 1 - 1 区第5面……………482	(24) 05 - 1 - 1 区第11 - 2面……………496
(11) 05 - 1 - 1 区第5層の遺物……………482	(25) 05 - 1 - 1 区第11 - 2層の遺物……………498
(12) 05 - 1 - 1 区第6面の遺構と遺物……………483	(26) 05 - 1 - 1 区第11 - 3面……………498
(13) 05 - 1 - 1 区第6層の遺物……………487	(27) 05 - 1 - 1 区第11 - 3層の遺物……………498
(14) 05 - 1 - 1 区第7面の遺構と遺物……………487	

## 第8章 05 - 1 - 2 区の調査成果

第1節 概要……………(本間)……………499	
第2節 層序……………(向井)……………499	
第3節 遺構と遺物……………(本間・向井)……………499	
(1) 05 - 1 - 2 区盛土層・第0層の遺物……………499	(4) 05 - 1 - 2 区第2面の遺構と遺物……………504
(2) 05 - 1 - 2 区第1面の遺構と遺物……………499	(5) 05 - 1 - 2 区第2層の遺物……………506
(3) 05 - 1 - 2 区第1層の遺物……………504	



## 《第2分冊》

### 第9章 分析

第1節 山賀遺跡における各種分析の概要	(本間)	507
山賀遺跡の微化石分析	(パリノ・サーヴェイ)	509
はじめに		509
1 山賀遺跡とその周囲の遺跡における 完新世後半の堆積環境変遷		509
2 調査地点・試料		513
3 分析方法		515
4 結果		516
5 考察		527
山賀遺跡における弥生時代堆積物の堆積構造の検討	(パリノ・サーヴェイ)	541
はじめに		541
1. 試料		541
2. 分析方法		541
3. 結果		541
4. 調査地域における弥生時代前期から 中期の堆積物の特徴		551
5. まとめ		552
山賀遺跡サヌカイト付着物赤外分光分析	(パリノ・サーヴェイ)	554
はじめに		554
1. 試料		554
2. 分析方法		554
3. 結果		556
4. 考察		556
山賀遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析	(遺物材料研究所)	557
はじめに		557
山地分析の方法		557
サヌカイト、ガラス質安山岩原石の分析		559
結果と考察		560
山賀遺跡252大溝下層・1397溝出土石器について	(船築紀子)	572
1. はじめに		572
2. 石器組成		572
3. 剥片の属性		572
4. 微細剥離痕のある剥片		577
5. 被熱した石器		577
6. まとめ		578
山賀遺跡出土管玉の産地分析	(藁科哲男)	579
はじめに		579
非破壊での産地分析の方法と手段		579
碧玉原石の蛍光X線分析		580
碧玉の原産地と原石の分析結果		580
山賀遺跡出土の管玉と国内産碧玉原材との比較		582
蛍光X線法による産地分析		582
ESR法による産地分析		583
結論		583
山賀遺跡出土の動物遺体	(安部みき子)	595
1. 動物遺体の出土状況		595
2. 加工骨製品		596
3. 層位・面および遺構の特徴		596
4. まとめ		596

山賀遺跡出土の人骨	(安部みき子)	618
第8面検出323木棺人骨		618
第9面検出424木棺人骨		618
第10面検出431木棺人骨		618
第9層検出No.693人骨		618
山賀遺跡出土人骨の保存処理	(岩立美香)	621
1. はじめに		621
2. 骨の構造と劣化要因		621
3. 424木棺出土人骨概要		621
4. 保存処理		622
5. おわりに		622
山賀遺跡出土木材の年輪年代	(光谷拓実)	623
【試料と方法】		623
【結果】		623
山賀遺跡の植物遺体及び木製遺物について	(山口誠治)	625
〔裸子植物〕	樹種鑑定・植物遺体から推定される	625
〔被子植物〕	植生と古環境	625
同定結果について		626
山賀遺跡出土黒色物質付着弥生土器についての科学的調査	(山口誠治)	640
はじめに		640
1. デジタル顕微鏡による黒色物質部分の観察		640
2. 科学的調査		641
まとめ		643
山賀遺跡出土「垂飾」形木製品の複製品製作	(森田拓馬)	645
①資料観察・清掃		645
②箔貼り・分割線設定		645
③シリコン作業		645
④型外し・資料清掃		646
⑤樹脂製品製作		646
⑥彩色作業		646
⑦カットモデル製作		646
<b>第10章 まとめ</b>		
第1節 遺構の変遷	(本間)	650
第2節 木棺の検出	(本間)	654
第3節 遺物の検討	(向井)	657
土器・土製品観察表		669
井戸瓦観察表		737
石器観察表		739
木器観察表		781
写真図版		787
報告書抄録		巻末

# 目 次

## 第2章 位置と環境

図1 遺跡分布	4
---------	---

## 第3章 調査・整理の方法

図2 地区割	7
--------	---

## 第4章 03-1-1区の調査成果

図3 03-1-1区 土層断面	12・13	図25 03-1-1区 第8面61溝断面	42
図4 03-1-1区 第1面	16	図26 03-1-1区 第8面、第8面61・62溝出土遺物	43
図5 03-1-1区 第1層・第2層出土遺物	17	図27 03-1-1区 第8層出土遺物	44
図6 03-1-1区 第2面	18	図28 03-1-1区 第9面	45
図7 03-1-1区 第3面	20	図29 03-1-1区 第9層出土遺物	46
図8 03-1-1区 第3層中板材出土状況	21	図30 03-1-1区 第10面	47
図9 03-1-1区 第3層出土木器	22	図31 03-1-1区 第10面検出128遺構	48
図10 03-1-1区 第4面	24	図32 03-1-1区 第10面127土坑、 129・130溝出土遺物	49
図11 03-1-1区 第5面	25	図33 03-1-1区 第10面127土坑、1502杭列	50
図12 03-1-1区 第5面25溝、第5層出土遺物	26	図34 03-1-1区 第10層出土遺物	51
図13 03-1-1区 第6面	28	図35 03-1-1区 第11面	52
図14 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(1)	30	図36 03-1-1区 第11面160落ち込み、 165溝状落ち込み、第11層出土土器	53
図15 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(2)	31	図37 03-1-1区 第11-2面	55
図16 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(3)	32	図38 03-1-1区 第11-2面171溝状落ち込み、 第12面170溝状落ち込み出土土器	56
図17 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(4)	33	図39 03-1-1区 第11-3面	57
図18 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(5)	34	図40 03-1-1区 第12面	58
図19 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(6)	35	図41 03-1-1区 第12層出土木器	59
図20 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(7)	36	図42 03-1-1区 第13面	60
図21 03-1-1区 第6面22溝出土木器	38		
図22 03-1-1区 第6層出土遺物	39		
図23 03-1-1区 第7面	40		
図24 03-1-1区 第8面	41		

## 第5章 03-1-2区の調査成果

図43 03-1-2区 南北土層断面	62・63	図47 03-1-2区 第1面34高まり断面	74
図44 03-1-2区 東西土層断面	64・65	図48 03-1-2区 第1層出土遺物	77
図45 03-1-2区 第0層出土遺物	71	図49 03-1-2区 第2面	78・79
図46 03-1-2区 第1面	72・73	図50 03-1-2区 第2面101・102土坑	81

図51 03-1-2区第2面109・110土坑 ……………82	図79 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(5) ……………126
図52 03-1-2区第2面111・112土坑 ……………83	図80 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(6) ……………127
図53 03-1-2区第2面113・114・115土坑 ……………84	図81 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(7) ……………128
図54 03-1-2区第3面 ……………88・89	図82 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(8) ……………129
図55 03-1-2区第3層出土遺物(1) ……………90	図83 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(9) ……………130
図56 03-1-2区第3層出土遺物(2) ……………91	図84 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(10) ……………131
図57 03-1-2区第4面 ……………92・93	図85 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(11) ……………132
図58 03-1-2区第4面176溝断面 ……………94	図86 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(12) ……………133
図59 03-1-2区第4面176溝の木杭153 ……………95	図87 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(13) ……………134
図60 03-1-2区第4面176・185溝出土土器 ……………95	図88 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(14) ……………135
図61 03-1-2区第4層出土土器 ……………97	図89 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(15) ……………136
図62 03-1-2区第5面 ……………98・99	図90 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(16) ……………137
図63 03-1-2区第5面208溝、209土坑 ……………101	図91 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(17) ……………138
図64 03-1-2区第5面220・226土坑出土遺物 ……………104	図92 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(18) ……………139
図65 03-1-2区第5層出土遺物(1) ……………106	図93 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(19) ……………140
図66 03-1-2区第5層出土遺物(2) ……………107	図94 03-1-2区第6面252大溝北法面 出土遺物(1) ……………141
図67 03-1-2区第6面出土遺物 ……………108	図95 03-1-2区第6面252大溝北法面 出土遺物(2) ……………142
図68 03-1-2区第6面 ……………110・111	図96 03-1-2区第6面252大溝南法面 出土遺物 ……………143
図69 03-1-2区第6面252大溝断面のスケッチ ……………112	図97 03-1-2区第6面252大溝内277木群、 278杭群 ……………145
図70 03-1-2区第6面252大溝上層 出土遺物(1) ……………114	
図71 03-1-2区第6面252大溝上層 出土遺物(2) ……………115	
図72 03-1-2区第6面252大溝上層 出土遺物(3) ……………116	
図73 03-1-2区第6面252大溝上層 出土遺物(4) ……………117	
図74 03-1-2区第6面252大溝上層 出土遺物(5) ……………118	
図75 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(1) ……………121	
図76 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(2) ……………122	
図77 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(3) ……………123	
図78 03-1-2区第6面252大溝下層 出土遺物(4) ……………125	

図98	03 - 1 - 2区 第6面252大溝内277木群、 278杭群、1504・1505杭列出土木器 ……………	146	図125	03 - 1 - 2区 第8面 284・290・294落ち込み出土土器 ……………	188
図99	03 - 1 - 2区 第6面252大溝内 1504・1505杭列 ……………	148	図126	03 - 1 - 2区 第8面281・286・ 287・295・296高まり出土遺物 ……………	191
図100	03 - 1 - 2区 第6面237溝出土遺物 ……………	150	図127	03 - 1 - 2区 第8面 323木棺周辺、298高まり出土遺物 ……………	192
図101	03 - 1 - 2区 第6面247溝出土遺物（1） ……………	151	図128	03 - 1 - 2区 第8面 299高まり、第8層出土遺物 ……………	194
図102	03 - 1 - 2区 第6面247溝出土遺物（2） ……………	152	図129	03 - 1 - 2区 第9面上出土土器 ……………	195
図103	03 - 1 - 2区 第6面248・255溝出土遺物 ……………	154	図130	03 - 1 - 2区 第9面 ……………	196・197
図104	03 - 1 - 2区 第6面258土坑出土遺物 ……………	155	図131	03 - 1 - 2区 第9面330溝出土遺物 ……………	198
図105	03 - 1 - 2区 第6面 242落ち込み出土遺物 ……………	156	図132	03 - 1 - 2区 第9面337溝出土遺物（1） ……………	200
図106	03 - 1 - 2区 第6面 233・240・250・251高まり出土遺物 ……………	158	図133	03 - 1 - 2区 第9面337溝出土遺物（2） ……………	201
図107	03 - 1 - 2区 第6面253高まり出土遺物 ……………	159	図134	03 - 1 - 2区 第9面337溝出土遺物（3） ……………	202
図108	03 - 1 - 2区 第6面254・256高まり、 第6層出土遺物 ……………	160	図135	03 - 1 - 2区 第9面337溝出土遺物（4） ……………	203
図109	03 - 1 - 2区 第6面 253・254・256高まり出土遺物 ……………	162	図136	03 - 1 - 2区 第9面342・343溝出土遺物 ……………	205
図110	03 - 1 - 2区 第7面 ……………	164・165	図137	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝木製高杯出土状況 ……………	206
図111	03 - 1 - 2区 第7面 261・264溝出土遺物 ……………	166	図138	03 - 1 - 2区 第9面1397溝遺物出土状況 ……………	207
図112	03 - 1 - 2区 第7面267溝出土遺物（1） ……………	168	図139	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝上半出土遺物（1） ……………	209
図113	03 - 1 - 2区 第7面267溝出土遺物（2） ……………	169	図140	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝上半出土遺物（2） ……………	210
図114	03 - 1 - 2区 第7面267溝出土遺物（3） ……………	170	図141	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝上半出土遺物（3） ……………	212
図115	03 - 1 - 2区 第7面270落ち込み、 271高まり、第7層出土遺物 ……………	172	図142	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝上半出土遺物（4） ……………	213
図116	03 - 1 - 2区 第8面288・297溝出土土器 ……………	175	図143	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝上半出土遺物（5） ……………	214
図117	03 - 1 - 2区 第8面 ……………	176・177	図144	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝下半出土遺物（1） ……………	216
図118	03 - 1 - 2区 第8面検出323木棺 ……………	178・179	図145	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝下半出土遺物（2） ……………	217
図119	03 - 1 - 2区 第8面323木棺材 ……………	180	図146	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝下半出土遺物（3） ……………	218
図120	03 - 1 - 2区 第8面 291・300土坑出土土器 ……………	183	図147	03 - 1 - 2区 第9面 1397溝下半出土遺物（4） ……………	219
図121	03 - 1 - 2区 第8面302土坑 ……………	184	図148	03 - 1 - 2区 第9層中検出429木棺 ……………	220・221
図122	03 - 1 - 2区 第8面302土坑出土遺物 ……………	185			
図123	03 - 1 - 2区 第8面 305・306・307・308・309ピット ……………	186			
図124	03 - 1 - 2区 第8面308ピット、 317土坑出土遺物 ……………	187			

図149	03 - 1 - 2区 第9層中検出429木棺材	222	図179	03 - 1 - 2区 第9 - 2層出土遺物(1)	273
図150	03 - 1 - 2区 第9層中検出430木棺	224・225	図180	03 - 1 - 2区 第9 - 2層出土遺物(2)	274
図151	03 - 1 - 2区 第9面検出325木棺	227	図181	03 - 1 - 2区 第10面上出土土器	275
図152	03 - 1 - 2区 第9層中検出420木棺	228・229	図182	03 - 1 - 2区 第10面	276・277
図153 - 1	03 - 1 - 2区 第9面検出 421木棺	230・231	図183	03 - 1 - 2区 第10面 441・443溝出土遺物	279
図153 - 2	03 - 1 - 2区 第9面検出421木棺	232	図184	03 - 1 - 2区 第10面445溝出土遺物(1)	280
図154	03 - 1 - 2区 第9面検出421木棺材	233	図185	03 - 1 - 2区 第10面445溝出土遺物(2)	281
図155	03 - 1 - 2区 第9面検出422木棺	234	図186	03 - 1 - 2区 第10面473溝出土土器	282
図156	03 - 1 - 2区 第9層中検出423木棺	235	図187	03 - 1 - 2区 第10面542溝出土遺物(1)	283
図157	03 - 1 - 2区 第9面325・422木棺周辺、 338高まり出土遺物	237	図188	03 - 1 - 2区 第10面542溝出土遺物(2)	284
図158	03 - 1 - 2区 第9面検出324木棺	238・239	図189	03 - 1 - 2区 第10面443溝	286
図159	03 - 1 - 2区 第9面検出324木棺材	240	図190	03 - 1 - 2区 第10面543溝出土遺物(1)	289
図160	03 - 1 - 2区 第9面検出367木棺	242・243	図191	03 - 1 - 2区 第10面543溝出土遺物(2)	290
図161	03 - 1 - 2区 第9面検出367木棺材	244	図192	03 - 1 - 2区 第10面 545・575・582・1014溝出土遺物	292
図162	03 - 1 - 2区 第9面検出424木棺	246	図193	03 - 1 - 2区 第10面1430溝	293
図163	03 - 1 - 2区 第9層中検出425木棺	247	図194	03 - 1 - 2区 第10面検出431木棺	294
図164	03 - 1 - 2区 第9層中検出426木棺	248	図195	03 - 1 - 2区 第10面1051石群	295
図165	03 - 1 - 2区 第9層中検出427木棺	249	図196	03 - 1 - 2区 第10面南部	296・297
図166	03 - 1 - 2区 第9層中検出428木棺	251	図197	03 - 1 - 2区 第10面456土坑	298
図167	03 - 1 - 2区 第9面367・424・第9層中 425木棺周辺、366高まり出土遺物	252	図198	03 - 1 - 2区 第10面 477・599・657・804土坑出土遺物	299
図168	03 - 1 - 2区 第9面332土坑	254	図199	03 - 1 - 2区 第10面 542溝断面、585・599土坑	300
図169	03 - 1 - 2区 第9面347土坑、334・361・ 364・368・370落ち込み出土遺物	256	図200	03 - 1 - 2区 第10面657土坑	301
図170	03 - 1 - 2区 第9面329高まり出土石器	257	図201	03 - 1 - 2区 第10面 746ピット、762・831土坑	302
図171	03 - 1 - 2区 第9面331高まり出土遺物	258	図202	03 - 1 - 2区 第10面951土坑出土土器	303
図172	03 - 1 - 2区 第9面 360・363高まり出土遺物	260	図203	03 - 1 - 2区 第10面951土坑	304・305
図173	03 - 1 - 2区 第9層出土遺物(1)	262	図204	03 - 1 - 2区 第10面580・661・788・ 845ピット、444落ち込み出土遺物	322
図174	03 - 1 - 2区 第9層出土遺物(2)	263	図205	03 - 1 - 2区 第10面 442・433高まり出土遺物	324
図175	03 - 1 - 2区 第9 - 2面	264・265	図206	03 - 1 - 2区 第10面 435・446高まり出土遺物	325
図176	03 - 1 - 2区 第9 - 2面 488溝、487・510土坑出土土器	266	図207	03 - 1 - 2区 第10層出土遺物(1)	327
図177	03 - 1 - 2区 第9 - 2面510土坑	267	図208	03 - 1 - 2区 第10層出土遺物(2)	328
図178	03 - 1 - 2区 第9 - 2面 509土坑、518・521・524・534ピット	268			

図209	03 - 1 - 2 区 第10層出土遺物 (3) ……………	329	図238	03 - 1 - 2 区 第11面1043溝状落ち込み ……………	373
図210	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面 ……………	330・331	図239	03 - 1 - 2 区 第11面 1044溝状落ち込み出土石器 ……………	373
図211	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面南部 ……………	332・333	図240	03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物 (1) ……………	374
図212	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1037溝 ……………	334	図241	03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物 (2) ……………	375
図213	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面 1029・1140・1225溝出土石器 ……………	335	図242	03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物 (3) ……………	376
図214	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1016木棺 ……………	336・337	図243	03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物 (4) ……………	377
図215	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面 1061・1194・1216土坑出土遺物 ……………	338	図244	03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物 (5) ……………	379
図216	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1216土坑 ……………	339	図245	03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物 (6) ……………	380
図217	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1274土坑 ……………	340	図246	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面 ……………	382・383
図218	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面 1274土坑出土石器 ……………	341	図247	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面1398土坑 ……………	384
図219	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1282土坑 ……………	350	図248	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面 1398土坑出土遺物 (1) ……………	385
図220	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面 1277・1282・1291土坑、 1097・1130・1304ピット出土遺物 ……………	351	図249	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面 1398土坑出土遺物 (2) ……………	386
図221	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1102・1114・ 1115・1120・1121・1153ピット ……………	353	図250	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面1399土坑 ……………	387
図222	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 面1238・1247・ 1264・1276ピット、1277土坑 ……………	354	図251	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面1400土坑 ……………	388・389
図223	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 層出土遺物 (1) ……………	356	図252	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面 1400土坑出土遺物 (1) ……………	391
図224	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 層出土遺物 (2) ……………	357	図253	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面 1400土坑出土遺物 (2) ……………	392
図225	03 - 1 - 2 区 第10 - 2 層出土遺物 (3) ……………	358	図254	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面1402土坑 ……………	393
図226	03 - 1 - 2 区 第11面1506石列 ……………	359	図255	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面1404土坑 ……………	394
図227	03 - 1 - 2 区 第11面 ……………	360・361	図256	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面 1404土坑出土遺物 ……………	395
図228	03 - 1 - 2 区 第11面検出1018木棺 ……………	362	図257	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面1405土坑 ……………	396
図229	03 - 1 - 2 区 第11面1017土坑 ……………	362	図258	03 - 1 - 2 区 第11 - 2 層出土遺物 ……………	397
図230	03 - 1 - 2 区 第11面1017土坑出土木器 ……………	363	図259	03 - 1 - 2 区 第11 - 3 面 ……………	398・399
図231	03 - 1 - 2 区 第11面1323土坑 ……………	364	図260	03 - 1 - 2 区 第11 - 3 層出土遺物 ……………	400
図232	03 - 1 - 2 区 第11面1324土坑 ……………	365	図261	03 - 1 - 2 区 第12面 ……………	402・403
図233	03 - 1 - 2 区 第11面 1324・1327・1374土坑出土遺物 ……………	366	図262	03 - 1 - 2 区 第12面1406土坑 ……………	404
図234	03 - 1 - 2 区 第11面1326土坑 ……………	367	図263	03 - 1 - 2 区 第12面 1406土坑出土遺物 (1) ……………	405
図235	03 - 1 - 2 区 第11面1374土坑 ……………	368	図264	03 - 1 - 2 区 第12面 1406土坑出土遺物 (2) ……………	406
図236	03 - 1 - 2 区 第11面1352ピット ……………	371	図265	03 - 1 - 2 区 第12層出土石器 ……………	407
図237	03 - 1 - 2 区 第11面 1040・1043溝状落ち込み出土石器 ……………	372	図266	03 - 1 - 2 区 第13面 ……………	408・409
			図267	03 - 1 - 2 区 第13層出土遺物 ……………	410

図268 断面・側溝出土遺物（1）……………411  
 図269 断面・側溝出土遺物（2）……………412

図270 断面・側溝出土遺物（3）……………413

**第6章 03-1-3区の調査成果**

図271 03-1-3区 土層断面……………416・417  
 図272 03-1-3区 第1面……………418  
 図273 03-1-3区 第2面……………419  
 図274 03-1-3区 第3面……………420  
 図275 03-1-3区 第3層出土土器……………421  
 図276 03-1-3区 第4面……………422  
 図277 03-1-3区 第4面1503畦、第4層、  
     第4-2層出土土器……………423  
 図278 03-1-3区 第4-2面……………425  
 図279 03-1-3区 第2～5面断面模式……………426  
 図280 03-1-3区 第5面……………427  
 図281 03-1-3区 第5面371溝、408土坑、  
     383ピット、第5層出土遺物……………428  
 図282 03-1-3区 第5面399～401杭……………430  
 図283 03-1-3区 第6面、  
     第6面414溝出土遺物……………431  
 図284 03-1-3区 第6面……………432  
 図285 03-1-3区 第6面418溝出土遺物……………434  
 図286 03-1-3区 第6面419溝、  
     417高まり出土土器……………435  
 図287 03-1-3区 第7面……………436  
 図288 03-1-3区 第7面1296溝、  
     1294・1298高まり出土遺物……………437  
 図289 03-1-3区 第8面……………439  
 図290 03-1-3区 第8面1316溝、  
     1311高まり、第8層出土遺物……………440  
 図291 03-1-3区 第9面……………442  
 図292 03-1-3区 第9面1382溝出土遺物……………443  
 図293 03-1-3区 第9面1397溝出土遺物……………445  
 図294 03-1-3区 第9面1379落ち込み、  
     1381高まり出土遺物……………446

図295 03-1-3区 第9面検出1383～1396杭……………447  
 図296 03-1-3区 第9層出土遺物……………449  
 図297 03-1-3区 第10面……………451  
 図298 03-1-3区 第10面1407溝出土遺物……………452  
 図299 03-1-3区 第10面1409溝出土遺物……………453  
 図300 03-1-3区 第10面1414溝出土遺物……………454  
 図301 03-1-3区 第10面1420溝出土土器……………455  
 図302 03-1-3区 第10面1411土坑……………456  
 図303 03-1-3区 第10面1411土坑出土土器……………456  
 図304 03-1-3区 第10面1415～1417杭……………457  
 図305 03-1-3区 第10面1408高まり出土遺物……………458  
 図306 03-1-3区 第10面  
     1410高まり出土遺物（1）……………459  
 図307 03-1-3区 第10面  
     1410高まり出土遺物（2）……………460  
 図308 03-1-3区 第10面1418高まり出土遺物……………461  
 図309 03-1-3区 第10層出土遺物……………462  
 図310 03-1-3区 第11面……………464  
 図311 03-1-3区 第11面1421矢板列……………465  
 図312 03-1-3区 第11層出土遺物……………467  
 図313 03-1-3区 第11-2面……………468  
 図314 03-1-3区 第11-2面1425ピット……………469  
 図315 03-1-3区 第12面……………470  
 図316 03-1-3区 第13面……………471  
 図317 03-1-3区 第13面1426・1427土坑……………472  
 図318 03-1-3区 第13層出土土器（1）……………474  
 図319 03-1-3区 第13層出土土器（2）……………475  
 図320 03-1-3区 第13層出土土器（3）……………476  
 図321 03-1-3区 第13層出土土器（4）……………477

**第7章 05-1-1区の調査成果**

図322 05-1-1・05-1-2区 土層断面……………479

図323 05-1-1区 第1面……………480



図324	05 - 1 - 1 区 第 2 面	480	図334	05 - 1 - 1 区 第 8 面	488
図325	05 - 1 - 1 区 第 3 面	481	図335	05 - 1 - 1 区 第 9 面	489
図326	05 - 1 - 1 区 第 4 面	481	図336	05 - 1 - 1 区 第 10 面	489
図327	05 - 1 - 1 区 第 5 面	482	図337	05 - 1 - 1 区 第 9 面 2010 溝出土土器	490
図328	05 - 1 - 1 区 第 6 面	482	図338	05 - 1 - 1 区 第 9 面 2011 高まり出土遺物	491
図329	05 - 1 - 1 区 第 6 面 2002 溝出土遺物	483	図339	05 - 1 - 1 区 第 10 面 2054・2073 ピット、 2014 高まり出土遺物	492
図330	05 - 1 - 1 区 第 6 面 2004 溝出土遺物 (1)	484	図340	05 - 1 - 1 区 第 11 面、第 11 層出土遺物	496
図331	05 - 1 - 1 区 第 6 面 2004 溝出土遺物 (2)	485	図341	05 - 1 - 1 区 第 11 面	497
図332	05 - 1 - 1 区 第 6 面 2003 高まり、 第 7 面 2007 高まり出土遺物	486	図342	05 - 1 - 1 区 第 11 - 2 面	497
図333	05 - 1 - 1 区 第 7 面	488	図343	05 - 1 - 1 区 第 11 - 3 面	497

## 第 8 章 05 - 1 - 2 区の調査成果

図344	05 - 1 - 2 区 第 1 面	500	図347	05 - 1 - 2 区 第 1 面 2078 井戸瓦 (2)	503
図345	05 - 1 - 2 区 第 1 面 2078 井戸	501	図348	05 - 1 - 2 区 第 2 面	505
図346	05 - 1 - 2 区 第 1 面 2078 井戸瓦 (1)	502			

## 第 9 章 分析

### 山賀遺跡の微化石分析

図349	山賀遺跡の位置	509	図354	主要珪藻化石群集	521
図350	山賀遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡	510	図355	花粉化石群集	524
図351	河内平野とその周辺の地形	511	図356	植物珪酸体群集	526
図352	山賀遺跡各調査区の柱状断面図	512	図357	山賀遺跡 (その 5・6) の 花粉化石群集層位分布	533
図353	微化石分析調査地点と柱状断面図	514			

### 山賀遺跡における弥生時代堆積物の堆積構造の検討

図358	試料採取地点と柱状断面図	542	図361	C 地点試料の X 線写真	547
図359	A 地点試料の X 線写真	543	図362	D 地点試料の X 線写真	549
図360	B 地点試料の X 線写真	545	図363	D 地点第 8 層試料の土壤薄片写真	550

### 山賀遺跡サヌカイト付着物赤外分光分析

図364	黒色付着物の FT - IR スペクトル	555
------	----------------------	-----

### 山賀遺跡出土サヌカイト製遺物の原産地分析

図365	サヌカイトおよびサヌカイト様岩石の原産地	563
------	----------------------	-----

### 山賀遺跡 252 大溝下層・1397 溝出土石器について

図366	剥片の属性	574	図371	打面の形状	575
図367	剥片法量分布	575	図372	背面構成	576
図368	R F 法量分布	575	図373	末端の形状	576
図369	M F 法量分布	575	図374	接合資料	577
図370	石核法量分布	575			

山賀遺跡出土管玉の産地分析

図375 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル ……586	図378 碧玉原石のE S Rスペクトル ……586
図376 弥生(続縄文)時代の碧玉製、 緑色凝灰岩製玉類の原材使用分布圏 および碧玉・碧玉様岩の原産地 ……587	図379 - (1) ~ (4) 碧玉原石の信号(Ⅲ)の E S Rスペクトル ……588・589
図377 山賀遺跡出土管玉(98449)の 蛍光X線スペクトル ……586	図380 山賀遺跡出土管玉の信号(Ⅱ)、(Ⅲ)の E S Rスペクトル ……590

山賀遺跡出土の動物遺体

図381 層・面および遺構ごとの総数と出現頻度 ……600
-------------------------------

山賀遺跡424木棺出土人骨の保存処理

図382 骨の構造 ……621
-----------------

山賀遺跡出土黒色物質付着弥生土器についての科学的調査

図383 土器(図145 - 20655)黒色物質部分の 赤外分析結果 ……641	図385 土器(図145 - 20655)黒色物質部分の X線回折結果 ……642
図384 土器(図70 - 20072)黒色物質部分の 赤外分析結果 ……641	図386 土器(図70 - 20072)黒色物質部分の X線回折結果 ……642

第10章 まとめ

図387 第10面全体図 ……651	図393 - 1 03 - 1 - 2区 高まり別 出土土器の比率 ……658
図388 第9面全体図 ……651	図393 - 2 03 - 1 - 2区 溝・落ち込み別 出土土器の比率 ……658
図389 第8面全体図 ……653	図394 石器組成比 ……661
図390 第6面全体図 ……653	図395 石錐・石鏃サイズ ……661
図391 第4面全体図 ……655	
図392 第1面全体図 ……655	

# 表 目 次

## 第3章 調査・整理の方法

表1 調査順の遺構番号(1)・(2)……………8・9

表2 調査面と遺構番号……………10

## 第4章 03-1-1区の調査成果

表3 03-1-1区第2面土坑・ピット一覧……………19

## 第5章 03-1-2区の調査成果

表4 03-1-2区第1面溝一覧(1)・(2)……………75・76

表5 03-1-2区第1面土坑・ピット一覧……………77

表6 03-1-2区第2面土坑・ピット一覧……………85

表7 03-1-2区第5面溝一覧……………102

表8 03-1-2区第5面土坑・ピット一覧……………103

表9 03-1-2区第8面土坑・ピット一覧……………182

表10 03-1-2区第9面土坑・ピット一覧……………255

表11 03-1-2区第9-2面土坑・ピット一覧  
(1)～(3)……………269～271

表12 03-1-2区第10面溝一覧

(1)・(2)……………287・288

表13 03-1-2区第10面土坑・ピット一覧

(1)～(16)……………306～321

表14 03-1-2区第10-2面溝一覧……………335

表15 03-1-2区第10-2面土坑・ピット一覧

(1)～(8)……………342～349

表16 03-1-2区第11面土坑・ピット一覧

(1)・(2)……………369・370

## 第6章 03-1-3区の調査成果

表17 03-1-3区第5面溝一覧……………426

表18 03-1-3区第5面土坑・ピット一覧……………429

## 第7章 05-1-1区の調査成果

表19 05-1-1区第10面土坑・ピット一覧

(1)・(2)……………493・494

## 第8章 05-1-2区の調査成果

表20 05-1-2区第2面土坑・ピット一覧……………506

## 第9章 分析

### 山賀遺跡の微化石分析

表21 珪藻化石の生態性区分および

環境指標種群の説明……………517

表22 珪藻分析結果(1)～(3)……………518～520

表23 花粉分析結果……………523

表24 植物珪酸体分析結果……………526

## 山賀遺跡出土サヌカイト製遺物の原産地分析

表25 - 1	各サヌカイト（安山岩）の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（1）・（2）……………564・565	サヌカイト原石66個の分類結果……………568
表25 - 2	原産地不明の組成の似たサヌカイト（安山岩）製遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（1）・（2）……………566・567	表27 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果……………568
表26	岩屋原産地からの	表28 山賀遺跡出土サヌカイト製剥片の元素比分析結果……………569
		表29 - 1・2 山賀遺跡出土安山岩製剥片の検定結果（1）・（2）…570・571

## 山賀遺跡252大溝下層・1397溝出土石器について

表30	252大溝下層・1397溝石器組成表……………573	表31	末端の形状と微細剥離痕の位置……………576
-----	----------------------------	-----	------------------------

## 山賀遺跡出土管玉の産地分析

表32 - 1	各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値……………591	表33	山賀遺跡出土管玉の元素比分析結果……………594
表32 - 2	各原産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（1）～（3）……………592～594	表34	山賀遺跡管玉の原産地分析結果……………594

## 山賀遺跡出土の動物遺体

表35	出土動物遺体の学名の一覧表……………597	表41	イヌの上腕骨の計測値……………599
表36	イタチおよびイノシシの頭骨の計測値……………598	表42	イノシシの距骨の計測値……………599
表37	イヌ、イノシシおよびシカの下顎骨の計測値……………598	表43	動物遺体の各部位の出現頻度……………599
表38	イノシシの環椎の計測値……………599	表44	山賀遺跡の動物遺体出土表（1）～（11）……………601～611
表39	イノシシの軸椎の計測値……………599		
表40	シカおよびイノシシの肩甲骨の計測値……………599		

## 山賀遺跡出土木材の年輪年代

表45	山賀遺跡出土木材の年代測定結果……………623
-----	-------------------------

## 山賀遺跡の植物遺体及び木製遺物について

表46	樹種鑑定一覧（1）～（7）……………631～637
-----	---------------------------

## 山賀遺跡出土黒色物質付着弥生土器についての科学的調査

表47	X線回折ピークの解析表……………643
-----	---------------------

## 遺物観察表

表48～51	土器・土製品観察表……………669～736
表52	井戸瓦観察表……………737・738
表53～57	石器観察表……………739～780
表58～61	木器観察表……………781～786

# 写真目次

## 第9章 分析

### 山賀遺跡の微化石分析

- 写真1 珪藻化石 ……………538  
写真2 花粉化石 ……………539

- 写真3 植物珪酸体 ……………540

### 山賀遺跡出土の動物遺体

- 写真4 弓頭状骨格器様のイノシシ中手骨 ……………612  
写真5 加工痕のあるイノシシ犬歯 ……………612  
写真6 サメ椎骨 ……………612  
写真7 穿孔のあるイノシシ下顎骨 ……………612

- 写真8・9 イノシシ骨(1)・(2) ……………613・614  
写真10 シカ骨 ……………615  
写真11 哺乳類骨 ……………616  
写真12 鳥類、ハ虫類、両生類、魚類骨 ……………617

### 山賀遺跡出土の人骨

- 写真13 424木棺人骨……………619  
写真14 424木棺の歯……………620  
写真15 424木棺に混入した歯……………620

- 写真16 No.693人骨……………620  
写真17 No.693人骨の歯(1)……………620  
写真18 No.693人骨の歯(2)……………620

### 山賀遺跡出土木材の年輪年代

- 写真19 年輪年代測定試料……………624

### 山賀遺跡の植物遺体及び木製遺物について

- 写真20・21 山賀遺跡出土木製品の  
顕微鏡写真……………638・639

### 山賀遺跡出土黒色物質付着弥生土器についての科学的調査

- 写真22 山賀遺跡03-1-2区  
第9面1397溝の土器……………640

- 写真23 山賀遺跡03-1-2区  
第6面252大溝の土器……………640

### 山賀遺跡出土「垂飾」形木製品の複製品製作

- 写真24 箔貼り完了……………647  
写真25 粘土で分割……………647  
写真26 シリコン作業……………647  
写真27 シリコンの補強……………647  
写真28 資料取り出し……………648  
写真29 シリコン型完成……………648  
写真30 樹脂の塗布……………648

- 写真31 貫通穴の復元……………648  
写真32 型合わせ……………648  
写真33 製品取り出し……………648  
写真34 彩色作業……………649  
写真35 複製品完成……………649  
写真36 カットモデル……………649

# 写真図版目次

## 第4章 03 - 1 - 1 区の調査成果 関係

- 写真図版1 03 - 1 - 1 区遺構 (1)  
第1面 第2面 第3面
- 写真図版2 03 - 1 - 1 区遺構 (2)  
第3層中板材 (10009・10010) 出土状況 第4面 第5面
- 写真図版3 03 - 1 - 1 区遺構 (3)  
第6面 第6面20大溝土器出土状況 第6面22溝周辺 第7面
- 写真図版4 03 - 1 - 1 区遺構 (4)  
第8面 第8面土器 (10083) 出土状況 第8面61溝土器 (10084) 出土状況 第8面61溝断面
- 写真図版5 03 - 1 - 1 区遺構 (5)  
第9面 第10面 第10面127土坑、1502杭群
- 写真図版6 03 - 1 - 1 区遺構 (6)  
第11面 第11層土器 (10102) 出土状況 第11 - 2面171溝状落ち込み土器 (10103) 出土状況  
第11 - 2面〔西半〕・第12面〔東半〕
- 写真図版7 03 - 1 - 1 区遺構 (7)  
第11 - 3面〔西半〕・第13面〔東半〕 第8～11層断面 第8～13層断面
- 写真図版8 03 - 1 - 1 区遺物 (1)  
第1層出土遺物 第2層出土土器 第5層出土遺物
- 写真図版9 03 - 1 - 1 区遺物 (2)  
第6面20大溝出土遺物 (1)
- 写真図版10 03 - 1 - 1 区遺物 (3)  
第6面20大溝出土遺物 (2)
- 写真図版11 03 - 1 - 1 区遺物 (4)  
第6面20大溝出土遺物 (3) 第6層出土遺物
- 写真図版12 03 - 1 - 1 区遺物 (5)  
第6面22溝出土土器 第8面出土土器 第8面61溝出土土器
- 写真図版13 03 - 1 - 1 区遺物 (6)  
第8層出土土器 第10層出土石器 第11面160落ち込み出土土器  
第11面165溝状落ち込み溝出土土器 第11層出土土器  
第11 - 2面171溝状落ち込み出土土器

## 第5章 03 - 1 - 2 区の調査成果 関係

- 写真図版14 03 - 1 - 2 区遺構 (1)  
第1面東半 第1面西半
- 写真図版15 03 - 1 - 2 区遺構 (2)  
第1面 第1面北部の溝群、石群
- 写真図版16 03 - 1 - 2 区遺構 (3)  
第2面東半 第2面西半

- 写真図版17 03 - 1 - 2 区遺構 (4)  
第2面101・102土坑 第2面109~115土坑 第2面113土坑
- 写真図版18 03 - 1 - 2 区遺構 (5)  
第3面東半 第3面西半
- 写真図版19 03 - 1 - 2 区遺構 (6)  
第4面東半 第4面西半
- 写真図版20 03 - 1 - 2 区遺構 (7)  
第4面176溝木出土状況 第4面176溝断面 第4面187溝
- 写真図版21 03 - 1 - 2 区遺構 (8)  
第5面東半 第5面西半
- 写真図版22 03 - 1 - 2 区遺構 (9)  
第5面打製石剣(20036)出土状況 第5面223・224溝 第5面208溝、209土坑
- 写真図版23 03 - 1 - 2 区遺構 (10)  
第6面
- 写真図版24 03 - 1 - 2 区遺構 (11)  
第6面252大溝断面
- 写真図版25 03 - 1 - 2 区遺構 (12)  
第6面252大溝
- 写真図版26 03 - 1 - 2 区遺構 (13)  
第6面252大溝西半 第6面252大溝277・278杭群
- 写真図版27 03 - 1 - 2 区遺構 (14)  
第6面252大溝土器(20072・20073・20370・20375)出土状況 第6面247溝土器(20406)出土状況  
第5層土器(20058)出土状況
- 写真図版28 03 - 1 - 2 区遺構 (15)  
第7面東半 第7面西半
- 写真図版29 03 - 1 - 2 区遺構 (16)  
第8面
- 写真図版30 03 - 1 - 2 区遺構 (17)  
第8面
- 写真図版31 03 - 1 - 2 区遺構 (18)  
第8面323木棺
- 写真図版32 03 - 1 - 2 区遺構 (19)  
第8面323木棺
- 写真図版33 03 - 1 - 2 区遺構 (20)  
第8面323木棺
- 写真図版34 03 - 1 - 2 区遺構 (21)  
第8面291土坑 第8面300土坑 第8面302土坑遺物出土状況  
第8面305ピット 第8面306ピット
- 写真図版35 03 - 1 - 2 区遺構 (22)  
第9面
- 写真図版36 03 - 1 - 2 区遺構 (23)  
第9面329高まり土器(20567・20569)出土状況 第9面331高まり土器(20568)出土状況  
第9面1397溝 第9面1397溝骨等出土状況 第9面1397溝木製高杯(20640)出土状況

- 写真図版37 03 - 1 - 2 区遺構 (24)  
第9面324木棺 第9面325木棺
- 写真図版38 03 - 1 - 2 区遺構 (25)  
第9面367木棺
- 写真図版39 03 - 1 - 2 区遺構 (26)  
第9層中420木棺
- 写真図版40 03 - 1 - 2 区遺構 (27)  
第9面421木棺
- 写真図版41 03 - 1 - 2 区遺構 (28)  
第9面421木棺 第9面422木棺 第9層中423木棺
- 写真図版42 03 - 1 - 2 区遺構 (29)  
第9面424木棺
- 写真図版43 03 - 1 - 2 区遺構 (30)  
第9面424木棺 第9層中425木棺
- 写真図版44 03 - 1 - 2 区遺構 (31)  
第9層中426木棺
- 写真図版45 03 - 1 - 2 区遺構 (32)  
第9層中427木棺 第9層中428木棺
- 写真図版46 03 - 1 - 2 区遺構 (33)  
第9層中429木棺
- 写真図版47 03 - 1 - 2 区遺構 (34)  
第9面430木棺 第9面332土坑 第9面334落込み土器(20727)出土状況
- 写真図版48 03 - 1 - 2 区遺構 (35)  
第10面
- 写真図版49 03 - 1 - 2 区遺構 (36)  
第10面
- 写真図版50 03 - 1 - 2 区遺構 (37)  
第10面 第10面446高まり上面
- 写真図版51 03 - 1 - 2 区遺構 (38)  
第10面443溝 第10面1430溝
- 写真図版52 03 - 1 - 2 区遺構 (39)  
第10面431木棺断面 第10面1051石群
- 写真図版53 03 - 1 - 2 区遺構 (40)  
第10面456土坑 第10面585土坑 第10面657土坑 第10面762土坑 第10面831土坑
- 写真図版54 03 - 1 - 2 区遺構 (41)  
第10面951土坑木
- 写真図版55 03 - 1 - 2 区遺構 (42)  
第10 - 2面南高台
- 写真図版56 03 - 1 - 2 区遺構 (43)  
第10 - 2面1016木棺、第11面1017土坑
- 写真図版57 03 - 1 - 2 区遺構 (44)  
第10 - 2面1029溝周辺 第10 - 2面1282土坑周辺 第10 - 2面南東部



- 写真図版58 03 - 1 - 2 区遺構 (45)  
第10 - 2面1216土坑 第10 - 2面1274土坑 第10 - 2面1282土坑半掘
- 写真図版59 03 - 1 - 2 区遺構 (46)  
第11面北半
- 写真図版60 03 - 1 - 2 区遺構 (47)  
第11面南半
- 写真図版61 03 - 1 - 2 区遺構 (48)  
第11面南半 第11面1018木棺 第11面1017土坑
- 写真図版62 03 - 1 - 2 区遺構 (49)  
第11面1324土坑 第11面1324土坑遺物出土状況 第11面1323土坑半掘  
第11面1326土坑 第11面1374土坑 第11面1352ピット
- 写真図版63 03 - 1 - 2 区遺構 (50)  
第11面南東部のピット群 第11面1357～1373ピット
- 写真図版64 03 - 1 - 2 区遺構 (51)  
第11 - 2面北半
- 写真図版65 03 - 1 - 2 区遺構 (52)  
第11 - 2面1398土坑遺物出土状況 第11 - 2面1399土坑 第11 - 2面1400土坑  
第11 - 2面1400土坑「垂飾」形木製品出土状況
- 写真図版66 03 - 1 - 2 区遺構 (53)  
第11 - 2面1400土坑 第11 - 2面1400土坑遺物出土状況
- 写真図版67 03 - 1 - 2 区遺構 (54)  
第11 - 2面1402土坑 第11 - 2面1404土坑 第11 - 2面1405土坑
- 写真図版68 03 - 1 - 2 区遺構 (55)  
第11 - 3面北半
- 写真図版69 03 - 1 - 2 区遺構 (56)  
第12面
- 写真図版70 03 - 1 - 2 区遺構 (57)  
第12面1406土坑 第12面1406土坑遺物出土状況
- 写真図版71 03 - 1 - 2 区遺構 (58)  
第13面
- 写真図版72 03 - 1 - 2 区遺物 (1)  
第0層出土遺物 第1層出土土器
- 写真図版73 03 - 1 - 2 区遺物 (2)  
第3層出土土器 第4面185溝出土土器 第4面176溝出土土器 第4層出土土器
- 写真図版74 03 - 1 - 2 区遺物 (3)  
第5面出土遺物 第5層出土遺物 (1)
- 写真図版75 03 - 1 - 2 区遺物 (4)  
第5層出土遺物 (2)
- 写真図版76 03 - 1 - 2 区遺物 (5)  
第6面252大溝出土遺物
- 写真図版77 03 - 1 - 2 区遺物 (6)  
第6面252大溝上層出土遺物

- 写真図版78 03 - 1 - 2 区遺物 (7)  
第6面252大溝下層出土遺物 (1)
- 写真図版79 03 - 1 - 2 区遺物 (8)  
第6面252大溝下層出土遺物 (2)
- 写真図版80 03 - 1 - 2 区遺物 (9)  
第6面252大溝下層出土遺物 (3)
- 写真図版81 03 - 1 - 2 区遺物 (10)  
第6面252大溝下層出土遺物 (4)
- 写真図版82 03 - 1 - 2 区遺物 (11)  
第6面252大溝下層出土遺物 (5)
- 写真図版83 03 - 1 - 2 区遺物 (12)  
第6面252大溝北・南法面出土遺物 277木群 278杭群
- 写真図版84 03 - 1 - 2 区遺物 (13)  
第6面237溝出土石器 第6面247溝出土土器 第6面250高まり出土土器
- 写真図版85 03 - 1 - 2 区遺物 (14)  
第6面高まり出土石器
- 写真図版86 03 - 1 - 2 区遺物 (15)  
第7面261溝出土土器 第7面267溝出土遺物
- 写真図版87 03 - 1 - 2 区遺物 (16)  
第7面270落ち込み出土土器 第7面271高まり出土土器
- 写真図版88 03 - 1 - 2 区遺物 (17)  
第8面323木棺
- 写真図版89 03 - 1 - 2 区遺物 (18)  
第8面288溝出土土器 第8面291土坑出土土器 第8面300土坑出土土器  
第8面302土坑出土土器
- 写真図版90 03 - 1 - 2 区遺物 (19)  
第8面284落ち込み出土土器 第8面290落ち込み出土土器  
第8面294落ち込み出土土器 第8面286高まり出土土器
- 写真図版91 03 - 1 - 2 区遺物 (20)  
第8面287高まり出土石器 第8面298高まり出土遺物 第8面299高まり出土遺物 (1)
- 写真図版92 03 - 1 - 2 区遺物 (21)  
第8面299高まり出土遺物 (2)
- 写真図版93 03 - 1 - 2 区遺物 (22)  
第9面出土土器 第9面330溝出土木器 第9面337溝出土遺物 (1)
- 写真図版94 03 - 1 - 2 区遺物 (23)  
第9面337溝出土遺物 (2)
- 写真図版95 03 - 1 - 2 区遺物 (24)  
第9面1397溝上半出土遺物 (1)
- 写真図版96 03 - 1 - 2 区遺物 (25)  
第9面1397溝上半出土遺物 (2) 第9面1397溝下半出土遺物 (1)
- 写真図版97 03 - 1 - 2 区遺物 (26)  
第9面1397溝下半出土遺物 (2)

- 写真図版98 03 - 1 - 2 区遺物 (27)  
第9層中429木棺
- 写真図版99 03 - 1 - 2 区遺物 (28)  
第9面421木棺
- 写真図版100 03 - 1 - 2 区遺物 (29)  
第9面324木棺
- 写真図版101 03 - 1 - 2 区遺物 (30)  
第9面367木棺
- 写真図版102 03 - 1 - 2 区遺物 (31)  
第9面338高まり出土土器 第9面366高まり出土遺物
- 写真図版103 03 - 1 - 2 区遺物 (32)  
第9面334落ち込み出土土器 第9面361落ち込み出土土器 第9面364落ち込み出土土器  
第9面368落ち込み出土土器 第9面329高まり出土土器
- 写真図版104 03 - 1 - 2 区遺物 (33)  
第9面331高まり出土遺物 第9面360高まり出土土器 第9面363高まり出土土器
- 写真図版105 03 - 1 - 2 区遺物 (34)  
第9層出土遺物
- 写真図版106 03 - 1 - 2 区遺物 (35)  
第9 - 2層出土遺物
- 写真図版107 03 - 1 - 2 区遺物 (36)  
第10面出土土器 第10面441溝出土土器 第10面445溝出土土器  
第10面443溝出土土器
- 写真図版108 03 - 1 - 2 区遺物 (37)  
第10面542溝出土土器 第10面543溝出土土器 第10面582溝出土土器  
第10面1014溝出土木器
- 写真図版109 03 - 1 - 2 区遺物 (38)  
第10面442高まり出土遺物 第10層(南)出土土器
- 写真図版110 03 - 1 - 2 区遺物 (39)  
第10 - 2面1216土坑出土土器 第10 - 2層出土土器 第10 - 2面1304ピット出土木器  
第11面1324土坑出土遺物 第11面1327土坑出土土器 第11面1374土坑出土土器
- 写真図版111 03 - 1 - 2 区遺物 (40)  
第11面1040溝状落ち込み出土土器 第11面1043溝状落ち込み出土土器  
第11層出土遺物 第11 - 2面1398土坑出土木器
- 写真図版112 03 - 1 - 2 区遺物 (41)  
第11 - 2面1400土坑出土遺物(1)
- 写真図版113 03 - 1 - 2 区遺物 (42)  
第11 - 2面1400土坑出土遺物(2) 第11 - 2面1404土坑出土遺物  
第11 - 2層出土遺物
- 写真図版114 03 - 1 - 2 区遺物 (43)  
サブトレンチ(6~8層)木器 第12面1406土坑出土遺物

## 第6章 03 - 1 - 3 区の調査成果 関係

- 写真図版115 03 - 1 - 3 区遺構 (1)  
第1面 第2面 第3面
- 写真図版116 03 - 1 - 3 区遺構 (2)  
第4面 第4面1503畦 第4 - 2面350～356畦 第4 - 2面
- 写真図版117 03 - 1 - 3 区遺構 (3)  
第5面 第5面東部の遺構群 第5面372溝ほか 第5面400・401杭  
第5面400杭 第5面401杭
- 写真図版118 03 - 1 - 3 区遺構 (4)  
第6面 第6面土器(30021)出土状況 第6面417高まり 第7面
- 写真図版119 03 - 1 - 3 区遺構 (5)  
第8面 第9面 第9面1382溝、1383～1396杭 第9面1383～1390杭
- 写真図版120 03 - 1 - 3 区遺構 (6)  
第9面1383～1396杭 第9面1397溝
- 写真図版121 03 - 1 - 3 区遺構 (7)  
第10面 第11面 第11面1421矢板
- 写真図版122 03 - 1 - 3 区遺構 (8)  
第11面1421矢板 第11 - 2面1425ピット 第12面 第13面
- 写真図版123 03 - 1 - 3 区遺構 (9)  
西辺第0～13層断面 東辺第6～12層断面 北辺第0～13層断面 調査終了面
- 写真図版124 03 - 1 - 3 区遺物 (1)  
第4面1503畦出土土器 第4層出土土器 第4 - 2層出土土器 第5面371溝出土土器
- 写真図版125 03 - 1 - 3 区遺物 (2)  
第5面408土坑出土土器 第6面出土土器 第6面418溝出土遺物 第7層出土土器
- 写真図版126 03 - 1 - 3 区遺物 (3)  
第8面1316溝出土土器 第8面1311高まり出土土器 第8層出土土器  
第9面1382溝出土遺物
- 写真図版127 03 - 1 - 3 区遺物 (4)  
第9面1397溝出土土器
- 写真図版128 03 - 1 - 3 区遺物 (5)  
第9面1381高まり出土遺物 第9層出土遺物
- 写真図版129 03 - 1 - 3 区遺物 (6)  
第10面1407溝出土土器 第10面1409溝出土遺物
- 写真図版130 03 - 1 - 3 区遺物 (7)  
第10面1414溝出土土器 第10面1420溝出土土器 第10面1408高まり出土土器
- 写真図版131 03 - 1 - 3 区遺物 (8)  
第10面1411土坑出土土器 第10面1410高まり出土土器 第10層出土土器
- 写真図版132 03 - 1 - 3 区遺物 (9)  
第11層出土遺物
- 写真図版133 03 - 1 - 3 区遺物 (10)  
第13層出土土器

## 第7章 05 - 1 - 1 区の調査成果 関係

- 写真図版134 05 - 1 - 1 区遺構 (1)  
第1面 第2面 第3面
- 写真図版135 05 - 1 - 1 区遺構 (2)  
第4面 第5面 第6面
- 写真図版136 05 - 1 - 1 区遺構 (3)  
第7面 第8面 第9面
- 写真図版137 05 - 1 - 1 区遺構 (4)  
第10面2014高まり上遺構 第10面2015高まり上遺構 第10面
- 写真図版138 05 - 1 - 1 区遺構 (5)  
第10面セクションベルト上追加調査 第11面石周辺 第11面 第11 - 2面  
第11 - 3面
- 写真図版139 05 - 1 - 1 区遺構 (6)  
第0～4層断面 第4～11層断面 東辺第11～11 - 3層断面
- 写真図版140 05 - 1 - 1 区遺物 (1)  
第6面2002溝出土遺物 第6面2004溝出土遺物
- 写真図版141 05 - 1 - 1 区遺物 (2)  
第6面2003高まり出土石器 第7面2007高まり出土石器 第9面2010溝出土土器
- 写真図版142 05 - 1 - 1 区遺物 (3)  
第9面2011高まり出土遺物 第10面2014高まり出土土器 第11層出土土器

## 第8章 05 - 1 - 2 区の調査成果 関係

- 写真図版143 05 - 1 - 2 区遺構 (1)  
第1面 第1面2078井戸 第1面2078井戸の瓦
- 写真図版144 05 - 1 - 2 区遺構 (2)  
第2面 第2面2080～2083ピット 中央部北東辺断面 調査終了面

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

山賀遺跡は、昭和46（1971）年、楠根川改修工事の際に、弥生時代の土器や石器、古墳時代の須恵器や土師器などが出土した事により発見された。その後、地元の東大阪市教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、東大阪市文化財協会、八尾市教育委員会、八尾市文化財調査研究会や近畿大学による発掘調査が続けられ、弥生・古墳時代をはじめ各時期の遺構面が調査されている。

特に大規模な調査としては、昭和54（1979）年から大阪文化財センターが遺跡の西半部を南北に貫く近畿自動車道建設に伴う発掘を行っている。この調査では、縄文時代晩期から中世・近世にわたる各時代の遺構や遺物を検出した。なかでも、弥生時代前期の遺構面から水田、掘立柱建物、井戸などの遺構と多数の遺物が出土した事から、近畿地方における最古級の弥生遺跡のひとつとして注目された。

このたびの発掘調査は、大阪府八尾土木事務所が計画・実施する寝屋川水系改良事業（一級河川寝屋川 新家調節池）に伴うもので、平成16（2004）・17（2005）年度に現地調査を行った。

**山賀遺跡03-1調査** 03-1調査地は、近畿自動車道の東約100mの地点に位置する。

03-1調査では対象の2846㎡を、北東側の03-1-1区（排気塔部：307㎡）、中央の03-1-2区（本体部：2272㎡）、南西側の03-1-3区（給気塔部：267㎡）に分割して発掘した（図2）。

各調査区で、奈良・平安時代（第1面）、古墳時代後期（第2・3面）、弥生時代後期（第4・5面）、弥生時代中期前半～前期後半（第6～10面）、弥生時代前期（第11～13面）、さらに下層の縄文時代後期の遺物包含層まで10数面を調査した。検出遺構数は1430以上、出土遺物は土器、石器、木製品など680コンテナに及ぶ。

03-1調査では、弥生時代前期末～中期初頭の堤を伴う溝群が平行して西南西～東北東にはしる景観が特徴的であった。また、盛土による溝間の堤などに築かれた19基の木棺墓を検出した。弥生時代中期初頭頃の、主に未成人棺と推定される。弥生人骨も出土した。

**山賀遺跡05-1調査** 03-1調査の追加調査で、03-1調査の整理作業と平行して実施した。

05-1調査では、対象の74.8㎡を、東側の05-1-1区（立坑部：24.3㎡）とその西側の05-1-2区（圧送管部：50.5㎡）の2区に分割し、05-1-1区は03-1調査と同様に現地地表下4.6mまで、05-1-2区は1.9m下の第2層途中まで発掘調査を行った。

堆積環境や遺構検出状況は基本的に03-1-2区の南部に似ており、遺物も03-1調査区と同様に盛土層である第6～9層から多く出土した。検出遺構数は90、出土遺物は約15コンテナであった。

**普及広報活動** 現地調査で溝群や木棺が検出されるとともに見学希望も多く寄せられたため、平成17（2005）年2月27日（日）、03-1-2区（本体部）第9面（弥生時代中期初頭）調査中に現地説明会を開催した。それ以外にも随時、国内外から多くの研究者・見学者が訪れた。

調査・整理と並行して、平成17（2005）年3月および12月には大阪府立弥生文化博物館において調査状況や出土遺物を速報展示した。文化庁主催の「発掘された日本列島2006」展にも弥生時代前期の「垂飾」形木製品と土器を出展した。また、専門雑誌や図録などに山賀遺跡の最新情報を提供した。

**整理作業** 平成17（2005）年10月3日から平成19（2007）年3月31日に行った。遺構・遺物は多種多様多量。基礎整理作業からはじめ、専門性を有する同僚諸氏の援助を、また自然科学的分野には研究者の方々のご指導を受けながら、図・表・写真・原稿などを作成し、報告書にまとめた。

## 第2章 位置と環境

山賀遺跡<sup>やまが</sup>は大阪府八尾市の北西端である山賀町・新家町などから、隣接する東大阪市の若江南町など南北約1km、東西約0.8kmの範囲に広がる大規模遺跡である。

今回の調査地はその北中部、八尾市新家町5丁目に位置する（図1・巻頭カラー図版1）。

**河内平野と大和川** 大阪府の中東部に広がる河内平野は旧大和川によって形成された沖積平野で、北を淀川、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地に囲まれた標高3～10mの低湿地帯である。

山賀遺跡は、その河内平野の中央部に立地する。

大和川は奈良盆地南東部、桜井市笛吹橋付近に源を發し、多くの中小河川を集め、生駒山地と金剛山地との間の亀瀬溪谷を経て大阪平野に入る。

江戸時代前期まで、旧大和川である恩智川<sup>おんち</sup>、玉串川<sup>たまぐし</sup>、楠根川<sup>くすね</sup>、長瀬川<sup>ながせ</sup>、平野川<sup>ひらの</sup>などは、山賀遺跡の南南東約8km、河内平野の南東部にあたる現在の柏原市役所付近から分流して北西方向に流下していた。旧大和川が上流から運んできた肥沃な土砂は、河内平野の地力を高めた。その反面、大雨などのために水かさが増すと洪水になりやすく流域の人々を苦しめた。

そこで、中甚兵衛らが中心となり、1704（宝永元）年、約7ヵ月半という短期間で、石川との合流点からほぼ直線的に堺に向けて新しい流路が開かれた。これが現在の大和川である。

**各時期の遺跡** 今回の調査では、縄文時代後期から古代まで各時代の遺構面を調査した。それらに該当する時期の山賀遺跡周辺の遺跡変遷を概観しておく。

旧石器時代の資料として、若江北遺跡<sup>わかえきた</sup> [97]（〔 〕内は図1の遺跡番号。市ごとに付けられているので、複数の市にまたがる場合は遺跡番号が複数となる）から翼状剥片が出土しているが、原位置ではない。山賀遺跡からみて東方の生駒山麓や南方の羽曳野丘陵に旧石器時代の遺跡が存在する。

縄文時代前期頃、河内地域中央部の低地には、縄文海進により北の高槻市平野部から南の八尾市中部にかけて河内湾が広がった。山賀遺跡周辺ではこの時期の遺跡は少ない。

縄文時代中期中頃に形成されていた浅い海域は、中期末～後期には三角州河口付近の堆積場へと変化し、晩期にはさらに陸化が進んだ。そこに位置する新家<sup>しんけ</sup> [102]、巨摩廢寺<sup>こまはいじ</sup> [96]、若江北 [97] の各遺跡から後～晩期の縄文土器が出土している。山賀遺跡周辺は河内湾南岸の干潟であったと考えられているが、今回の調査では遺構は見つからず、第13層から縄文時代後期末の宮滝式土器が出土した。

縄文時代晩期～弥生時代前期以降には、それ以前に形成された開析流路が河川堆積物により充填され河岸はアシ原となった。人々の生活空間は、山麓だけでなく、河内湾の水辺や河川の堆積によって広がった微高地にも及んだ。

弥生時代前期前半の若江北遺跡 [97] に居住域がみられ、前期中段階以降には、新家<sup>うりゅうどう</sup> [102]、瓜生堂 [95]、山賀 [125・32]、美園<sup>みその</sup> [34] の各遺跡でも大量の遺構遺物が調査された。山賀遺跡の東方約2kmの池島<sup>いけしま</sup>・福万寺遺跡<sup>ふくまんじ</sup> [72・93] は、弥生時代から現代まで連綿と続く耕作地である。

弥生時代中期になると、瓜生堂 [95]、若江北 [97]、若江 [98]、美園 [34]、萱振<sup>かやふり</sup> [65] などの遺跡で集落が、瓜生堂 [95]、巨摩廢寺 [96]、山賀 [125・32] などの遺跡で墓域が検出された。なかでも瓜生堂遺跡 [95] は、河内平野最大規模の弥生遺跡で、方形周溝墓が非常に良好に残っていた。

弥生時代後期には、上小阪遺跡<sup>かみこさか</sup> [103] の集落、巨摩廢寺遺跡 [96] の方形周溝墓などがみられる。

山賀遺跡は今回の調査では、近畿自動車道関係の調査で検出された中期後半の集落・墓・水田はきわめて希薄であった。しかし、弥生時代前期後半～中期初頭の第11面～第6面から、溝・木棺・土坑・ピットなどの遺構、土器・石器・木器・骨など多数の遺物が出土した。さらに、後期の水田面（第4面・第4-2面）も検出できた。

これら弥生遺跡の調査成果から、自然との闘いとその克服、河内潟・河内湖や淀川を利用した他地域との交流、中期後半を中心とする争乱、といった、躍動感のある弥生社会の姿が明らかになってきた。

古墳時代前期には、大阪府北部の淀川水系に注目すべき古墳が多く分布する。大和川水系でも柏原市から羽曳野市にわたる玉手山古墳群や石川流域にも前期古墳が存在する。

山賀遺跡の南方の約2kmに分布する東郷<sup>とうごう</sup> [37]、小阪合<sup>こさかい</sup> [40]、成法寺<sup>じょうぼうじ</sup> [73]、中田 [28] 遺跡などからなるいわゆる東郷・中田遺跡群は、庄内式期から布留式期にかけて大規模な集落域となる。西岩田 [100]、瓜生堂 [95] 久宝寺 [140・23] などの遺跡でも居住域が調査され、山賀遺跡の西方約0.5kmに位置する小若江式（布留式新段階）の指標となる小若江遺跡 [104] から大量の土器が出土した。また、小形方墳の検出例も多く、美園遺跡 [34] では家形埴輪が、萱振遺跡1号墳 [65] では靴形埴輪も出土している。

古墳時代中～後期、河内湖は大阪湾との出入りが狭くなり陸化が進む。藤井寺市・羽曳野市の古市古墳群や堺市の百舌鳥古墳群が造営される。山賀遺跡近くでは、生駒山西麓に心合寺山古墳がある。集落遺跡は、新家 [102]、意岐部<sup>おきべ</sup> [101]、西岩田 [100]、瓜生堂 [95]、小若江 [104]、友井東 [105]、東郷 [37]、小阪合 [40]、成法寺 [73] 遺跡など数多い。また、岩田 [115]、瓜生堂 [95]、巨摩廢寺<sup>こまはいじ</sup> [96]、小若江 [104] などの遺跡からは埴輪が出土しており、古墳の存在も推定できる。

山賀遺跡の今回の調査では、古墳時代の遺構遺物は顕著ではないが、須恵器を含む洪水砂層（第2層）を検出した。

山賀遺跡の東に隣接する西郡廢寺<sup>にしこおりはいじ</sup> [48] は、白鳳時代に創建された錦織連の氏寺である。

奈良時代以降は、瓜生堂遺跡 [95] や美園遺跡 [34] などに集落がみられる。

今回の調査では、古代と推定される条里地割に則った耕作面（第1面）を検出した。

**遺跡周辺の現況** 一見由緒ありげに響く山賀という地名は実は新しく、昭和35（1960）年、八尾市旧西郡村の一部に付けられた。錦部・錦織とも書く「にしこおり」の名は古く、平安時代中期の『和名類聚抄』に河内国若江郡七郷のひとつとして記載されている。

現在、調査地のすぐ東を楠根川が北流する。楠根川は八尾市内の長瀬川と玉串川との分流点付近を水源とする排水河川で、今回の調査地の約150m北で西流する第二寝屋川と合流している。なお、東大阪市若江南町5丁目と八尾市山賀町5丁目との間の第二寝屋川に架かる橋は「山我橋」という。

調査地の西方100mには、近畿自動車道と主要地方道大阪中央環状線が併設され南北に通っている。田園地帯に敷設された大規模道路であり、1980年代には交通量の増加とともに、その両側に量販店、ガソリンスタンド、自動車販売店などが並ぶ郊外型の店舗構成が出来上がった。現在は、高層住宅なども増加し、都市型の景観を呈している。しかし、その背後には、小工場、倉庫、個人住宅が立ち並び、一部には農地も残っている。

なお、山賀遺跡のこれまでの報告書は、市村慎太郎編『新上小阪遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第94集 2003年 258頁にまとめて掲載されている。





『大阪府文化財分布図2001年度版』を一部改変

図1 遺跡分布

### 第3章 調査・整理の方法

**調査区の位置** (財)大阪府文化財センターの山賀遺跡03・05調査地は、遺跡範囲内の北部、八尾市新家町5丁目に位置する(図1)。

**調査区の呼称** 「山賀遺跡」の後の「03」・「05」は第1次調査に着手した2003(平成15)年度および第2次調査を行った2005(平成17)年度の下2桁。次の「-1」はその年度の発注(工事請負)。最後の「-1~3」は調査区(トレンチ)を表す。

たとえば、「山賀遺跡05-1-2区」は、2005年度調査、1つめの工事発注、2番目の調査区を意味する。

**地区割** 当センターの『遺跡調査基本マニュアル』(2003年)に定められた方法で地区割を行った。世界測地系(2002年4月以降)の国土座標軸に準拠し、調査対象地にメッシュをかける方法である。以下、その手順を述べる(図2)。

当センターが調査領域とする大阪府内は、全て国土座標軸(世界測地系)の第VI座標系に相当する。大阪府の南西端は、第VI座標系の $X=-192\text{km}$ ・ $Y=-88\text{km}$ にあたる。

第I区画は、ここを基準とし大阪府全域を南北(縦)6kmごとにA~Oに、東西(横)8kmごと0~8に分割したもので、1/10000地形図の範囲に相当する。今回の調査範囲は「H6」。

第II区画は、第I区画を南北(縦)1.5km、東西(横)2kmごとに各4分割、すなわち16等分したもので、1/2500地形図(都市計画図)の範囲に相当する。第II区画は、南西端を1とし、東へ4まで、1から順に北に5・9・13、北東端を16と平行式に表示する。今回の調査範囲は「2」。

第III区画は、第II区画内の北東端を基点とし、1辺100mの正方形に、南北(縦)をA~Oの15に、東西(横)を1~20に区画したもので、今回の調査範囲は「8L・9L・8M・9M」。

第IV区画は、第III区画内の北東端を基点に、南北(縦)をa~jの15に、東西(横)を1~20の1辺10mの正方形に区画したもので、表示は横・縦の順に「6g」など。

したがって、今回の調査範囲の内10×10mグリッドは、「H6(第I区画)-2(第II区画)-8L(第III区画)-6g(第IV区画)」などと表示される。第I・II区画の「H6-2」は全域共通なので、図2の下半に第III・IV区画名を表示した。第IV区画が、遺物取り上げなどの基本単位となる。

さらに必要に応じて、第IV区画内を1辺5mの正方形に区画(第V区画)したり、同じく第IV区画内の北東端を基点として西と南への距離を表示すること(第VI区画)もある。また、国土座標上において3次元で出土位置を特定して取り上げた遺物もある。

なお、今回の調査では全て世界測地系を使用しているが、従来の調査成果と平面位置を対照するために、日本測地系(2002年3月以前)の座標値を図2の中に8か所(◊)示した。

**方位** 国土座標軸の座標北を採用した。第1次調査中に航空測量を実施した2004・2005(平成16・17)年では遺跡周辺の座標北は、磁北より東へ $6^{\circ}26'$ 、真北より西へ $14'$ 振れていた。

**高さ** 東京湾平均海面(T.P.)を適用した。T.P.と大阪湾最低干潮面(O.P.)とは、 $T.P.0.0\text{m} = O.P.+1.3\text{m}$ の関係にある。

**面と層の呼称法** 人力による調査の開始される面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下

同様である。なお、ここでいう算用数字の「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、ある面と次の面との間の堆積は土層観察の結果○付き数字の土層に細分されることがある。

この面と層の番号は、先に着手した03-1-1区を基準とし、その他の調査区でも「面」や「層」が同じものを指すように留意して調査を進めた。しかし、03-1-2・3区および05-1-1区では部分的にその他の面も調査したので、それらについては枝番号をつけた。

**遺構番号** 第1次調査の03-1-1・2・3区については調査区および遺構種類に関わらず通し番号(1~1431)とした。さらに遺構整理において1501~1506を追加した。

第2次調査の05-1-1区(2001~2074)と05-1-2区(2075~2089)では、調査区ごとに遺構種類に関わらず通し番号とし、遺構整理において05-1-1区の2090を追加した。

遺構番号については、調査順の遺構番号を表1に示し、それを調査区と調査面ごとに整理したものを表2に掲載した。

**遺物の取り上げ** 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに、平面的には国土座標の10×10mの区画(第Ⅳ区画)ごとの取り上げを基本とし、さらに必要に応じて出土位置を3次元などで記録した。遺物登録番号は取り上げ単位ごとに付した。

**図面作成** 各区の調査区全体図は、航空測量、または地区杭を基準とした測量で縮尺1/50ないし1/100で作成した。地層断面図は縮尺1/20に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況などは対象物に応じて適宜図化した。

**各種分析** 専門的知識を必要とする管玉の産地分析を藁科哲男氏に、骨・歯の同定を安部みき子氏(大阪市立大学)に、木棺の年輪年代測定を光谷拓実氏(奈良文化財研究所)に、出土遺物のFTIR分析の指導を西山要一氏(奈良大学)にお願いした。

また、花粉・珪藻・植物珪酸体分析・土壌微細形態学分析・サヌカイトの付着物分析をパリノ・サーヴェイ株式会社、サヌカイトの産地同定を有限会社遺物材料研究所に、「垂飾」形木製品の保存処理を奈良大学保存科学研究室に、「垂飾」形木製品のレプリカ作製を森田拓馬氏にそれぞれ委託した。

当センター職員にも、サヌカイト剥片分析、人骨保存処理、植物遺体鑑定、樹種鑑定、付着物分析について、それぞれの専門分野からの参加を得た。

それらの成果を分析編に掲載した。

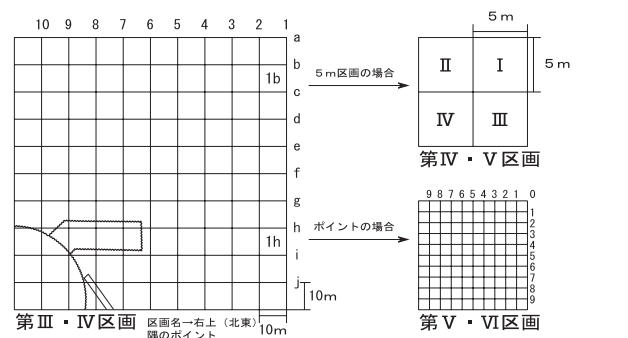
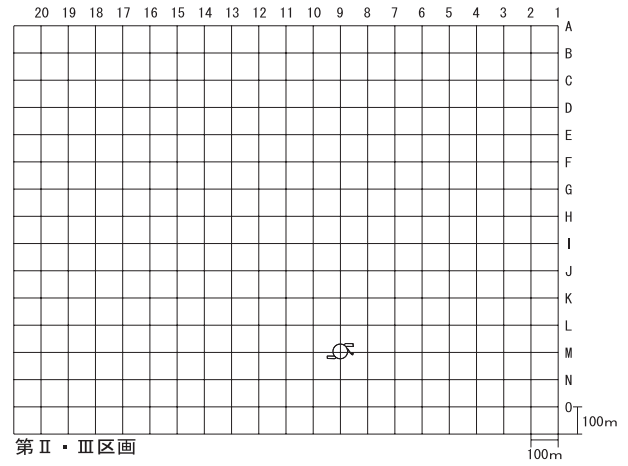
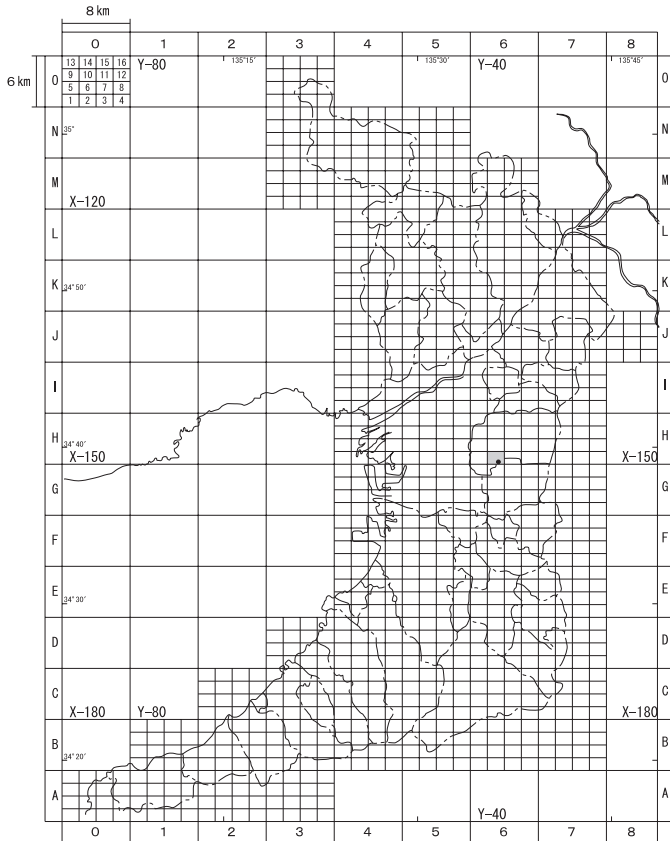
**遺物整理** 調査現場で登録と洗浄を優先し、注記も行った。ただし、今回の調査では出土遺物量(約700コンテナ)、遺構(1520以上)と多量であったため、現場では完了できなかった。整理期間に入り、それら作業と並行し、登録番号ごとに分類と集計を行った後、報告書掲載のものを優先して復元、実測、写真撮影などを進めた。

**遺物の編年観** 土器をはじめとする遺物の年代は、一般的な年代観に従った。なお、主要遺物の編年や用語については、主に次の文献を参考とした。

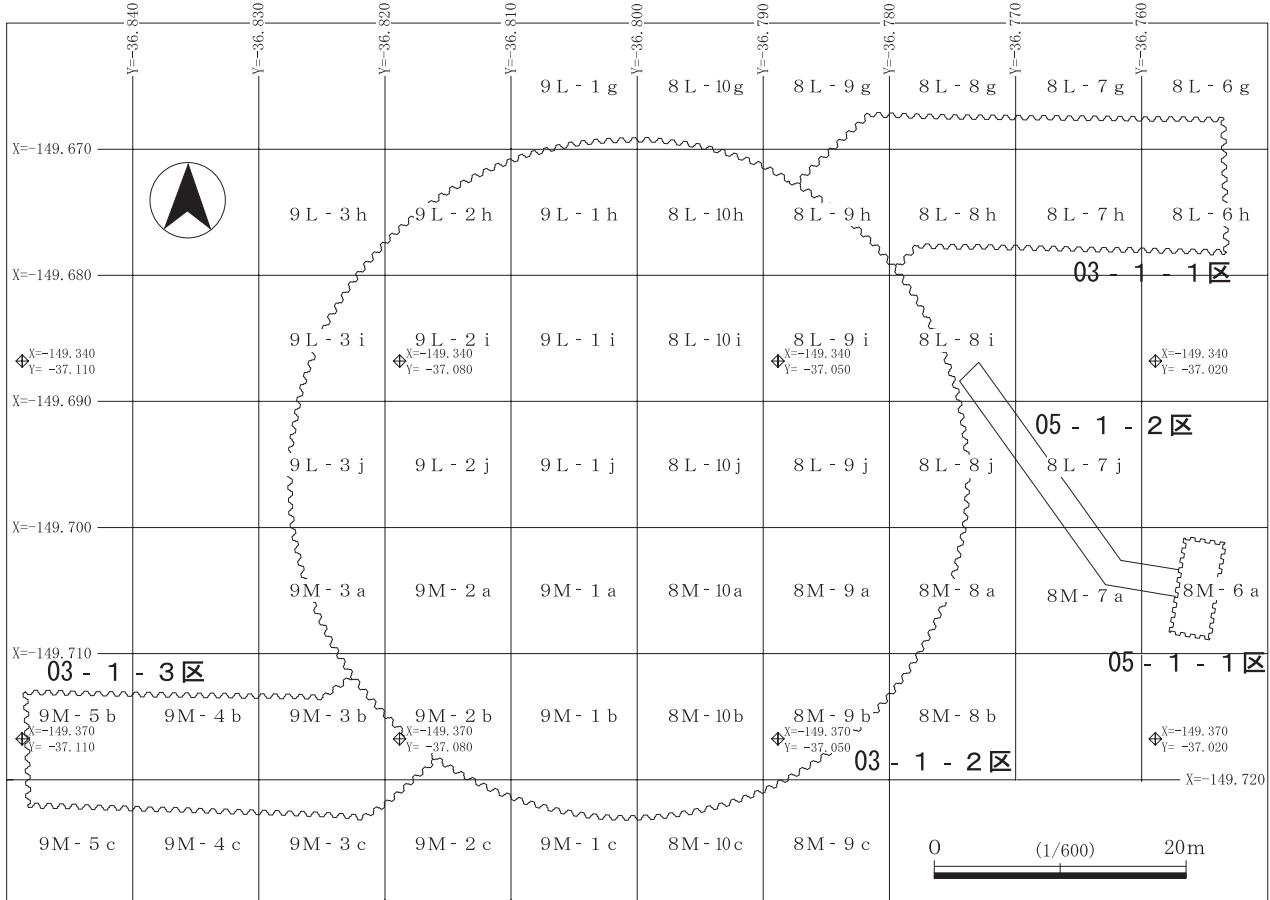
弥生土器：寺沢 薫・森井貞雄1989「各地域の様式編年 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

須恵器：田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

中村浩1978「和泉陶邑出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会



大阪府全図・第I・II区画



◇: 日本測地系(旧座標)の座標値

図2 地区割

表1 調査順の遺構番号(1)

遺構番号	調査区	調査面	同じ面のその他の遺構番号・[備考]
03-1調査(03-1-1区・03-1-2区・03-1-3区)			
1~11	03-1-1区		第2面
12~15	03-1-1区		第3面
16~19	03-1-1区		第4面
20~23	03-1-1区		第6面
24	03-1-1区		第7面
25	03-1-1区		第5面 1501
26~59		03-1-2区東半	第1面
60~62	03-1-1区		第8面
63~97		03-1-2区西半	第1面
98~125		03-1-2区	第2面
126~130	03-1-1区		第10面 1502
131~159		03-1-2区	第3面
160~167	03-1-1区		第11面 [161・162欠番]
168~170	03-1-1区		第12面
171・172	03-1-1区		第11-2面
173			[欠番]
174~187		03-1-2区	第4面
188~226		03-1-2区	第5面
227~258		03-1-2区	第6面 277・278・1504・1505
259~272		03-1-2区	第7面
273~276		03-1-3区	第1面
277・278		03-1-2区	第6面 227~258・1504・1505
279~320		03-1-2区	第8面 323
321・322		03-1-3区	第2面
323		03-1-2区	第8面 279~320
324~348		03-1-2区	[326欠番]・359~370・[364欠番]・421・422・424
349~358		03-1-3区	第4-2面
359~370		03-1-2区	第9面 324~348・[326・364欠番]・421・422・424
371~410		03-1-3区	第5面
411~419		03-1-3区	第6面
420		03-1-2区	第9層中 [第9面で報告]
421・422		03-1-2区	第9面 324・325・327~348・359~363・411~419・424
423		03-1-2区	第9層中 [第9面で報告]
424		03-1-2区	第9面 324・325・327~348・359~363・411~419・421・422
425~430		03-1-2区	第9層中 [第9面で報告]
431~486		03-1-2区	第10面 542~1015・1045~1051・1428~1430
487~541		03-1-2区	第9-2面 1019~1028
542~1015		03-1-2区	第10面 431~486・1045~1051・1428~1430
1016		03-1-2区	第10-2面 1029~1037・1052~1292・1299~1309・1431

表1 調査順の遺構番号(2)

遺構番号	調査区		調査面	同じ面のその他の遺構番号・[備考]
03-1調査(03-1-1区・03-1-2区・03-1-3区)				
1017・1018		03-1-2区	第11面	1038～1044・1320～1376・1506
1019～1028		03-1-2区	第9-2面	487～541
1029～1037		03-1-2区	第10-2面	1016・1052～1292・1299～1309・1431
1038～1044		03-1-2区	第11面	1017・1018・1320～1376
1045～1051		03-1-2区	第10面	542～1015・1045～1051・1428～1430
1052～1292		03-1-2区	第10-2面	1016・1029～1037・1299～1309・1431
1293～1298		03-1-3区	第7面	
1299～1309		03-1-2区	第10-2面	1016・1052～1292・1029～1037・1431
1310～1317		03-1-3区	第8面	
1318・1319				[欠番]
1320～1376		03-1-2区	第11面	1017・1018・1038～1044・1506
1377～1397		03-1-3区	第9面	
1398～1405		03-1-2区	第11-2面	
1406		03-1-2区	第12面	
1407～1420		03-1-3区	第10面	
1421～1424		03-1-3区	第11面	[1422欠番]
1425		03-1-3区	第11-2面	
1426・1427		03-1-3区	第13面	
1428～1430		03-1-2区	第10面	
1431		03-1-2区	第10-2面	
03-1調査(03-1-1区・03-1-2区・03-1-3区)追加分				
1501	03-1-1区		第5面	25
1502	03-1-1区		第10面	126～130
1503		03-1-3区	第4面	
1504・1505		03-1-2区	第6面	227～258・277・278
1506		03-1-2区	第11面	1017・1018・1038～1044・1320～1376
05-1調査(05-1-1区・05-1-2区)				
2001	05-1-1区		第2面	
2002～2005	05-1-1区		第6面	
2006・2007	05-1-1区		第7面	
2008・2009	05-1-1区		第8面	
2010～2013	05-1-1区		第9面	[2012欠番]
2014～2058	05-1-1区		第10面	2060～2074
2059	05-1-1区		第11面	2090
2060～2074	05-1-1区		第10面	2014～2058
2075～2078		05-1-2区	第1面	
2079～2089		05-1-2区	第2面	
2090	05-1-1区		第11面	2059

表2 調査面と遺構番号

調査面			←西 03-1調査				05-1調査 東→	
呼称	出土土器	性格	3区	2区		1区	2区	1区
				西半	東半			
第1面	古代	耕作面	273~276	63~97	26~59	なし	2075~2078	なし
第2面	古墳後期	砂層上面	321・322	118~125	98~117	1~11	2079~2089	2001
第3面		砂層下面	なし	146~159	131~145	12~15		なし
第4面	弥生Ⅱ様式	水田面	1503	183~187	174~182	16~19		なし
第4-2面		水田面	349~358	/				/
第5面		水田ベース面	371~410			212~226	188~211	25・1501
第6面		溝埋没面	411~419	227~258・277・278・1504・1505			20~23	2002~2005
第7面		同上ベース面	1293~1298	268~272	259~267	24	2006・2007	
第8面		溝機能面	1310~1317	279~320・323			60~62	2008・2009
第9面		溝機能面	1377~1397	324・325・359~363・365~370・421・422・424・1015	327~348	328・330	2010・2011・2013	
第9層中				420・423・425~430			/	/
				南半	北半			
第9-2面				487~541・1019~1028	/	/	/	
第10面		溝掘削面	1407~1420	431・446~486・542~1010・1014・1045~1051・1428~1430	432~445・1011~1013	126~130・1502	2014~2058・2060~2074	
第10-2面				1029~1033・1052~1292・1299~1309・1431	1016・1034~1037・1506	/	/	
第11面		自然層上面	1421・1423・1424	1320~1376	1017・1018・1038~1044	160・163~167	2059・2090	
第11-2面		1425	1398~1405	なし	171・172	なし		
第11-3面			なし	なし	なし	なし		
第12面	土壌化層上面	なし	なし	1406	168~170			
第13面		1426・1427	なし	なし	なし			

注1 枠内右下がり斜線は該当面未調査

注2 「なし」は面として調査したが、番号をつけた遺構なし

注3 欠番、**161・162**(もと03-1-1区第11面の溝)、**173**(もと03-1-1区第13面の川)、**326・364**(もと03-1-2区第9面の落ち込み)、**1318・1319**(もと03-1-3区第8面の溝)、**1422**(もと03-1-3区第11面の溝)、**2012**(もと05-1-1区第9面の溝)

注4 整理中に追加した遺構番号、**1501溝**(03-1-1区第5面)、**1502杭群**(03-1-1区第10面)、**1503畦**(03-1-3区第4面)、**1504・1505杭列**(03-1-2区第6面)、**1506石列**(03-1-2区第11面)、**2090落ち込み**(05-1-1区第11面)

## 第4章 03 - 1 - 1 区の調査成果

### 第1節 概要

03 - 1 - 1 区は、今回の調査範囲の北東部に位置する。調節池の排気塔建設に伴う調査で、東西約34m、南北10.5mと細長く、その面積は307㎡である。

調査前地盤高はおよそT.P.+4.6m。盛土層を重機で1.0～1.2m除去し、T.P.+3.4～3.6mから調査限界のT.P.0.0mまでの包含層を人力掘削した。13面を調査し、48か所の遺構を検出した。

出土遺物は、土器類6262片、金属製品2点、石・石製品68点、木・木製品18点、種子・実5点、計6355点と骨・歯である。

土器類6262片のうち、弥生土器が4258片（68.0%）と主体を占めることは他のトレンチと同様である。しかし、古墳時代を主体とする土師器1095片（17.5%）や須恵器731片（11.7%）の割合が高いことが03 - 1 - 1 区の土器組成の特徴といえる。

### 第2節 層序

03 - 1 - 1 区では調査区の東・北・西辺で、攪乱層を除去したT.P.+3.7mから掘削限界のT.P.0.0m（一部T.P.-0.2m）まで観察・図化を行った。東辺は西から、北辺は南から、西辺は東から見た状態である（図3）。なお、東辺は崩落のため第3層以下から図化を行った。

第0層（現代の盛土：①～②） ①褐灰7.5YR5/1シルト。中礫をやや含み、マンガン斑をやや多く含む。②は暗灰黄2.5Y5/2シルト。中礫をやや多く、マンガン斑を多く含む。

第1層（オレンジシルト：③） 灰オリーブ5Y6/2粗砂混じりシルト。マンガン・鉄分を多く含む。

第2層（砂層：④～⑥） 第3面14溝を境に、東へ粗粒化しラミナが発達する（④）。西側では植物遺体やマンガンを含む層が堆積する（⑤・⑥）。

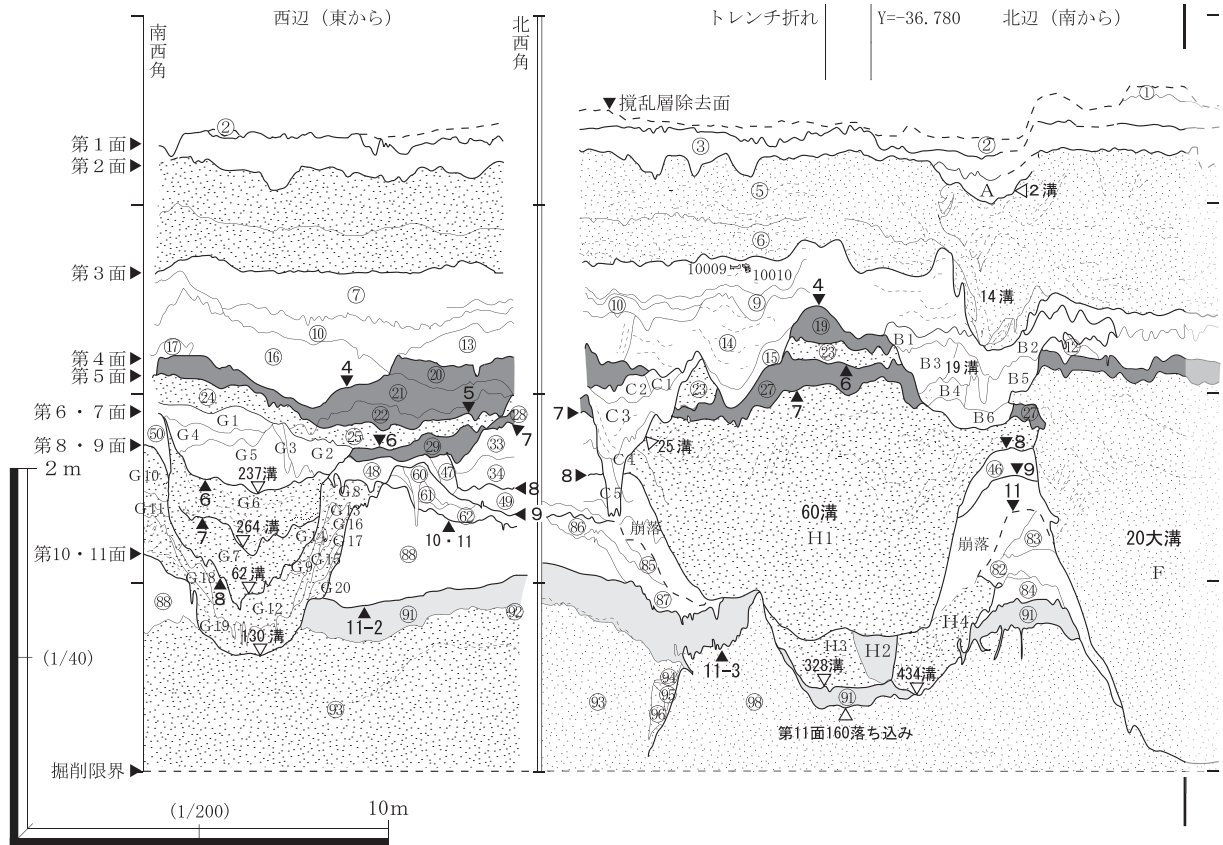
④は灰10YR8/2細砂～中礫を主体としてラミナが形成される。層の下方では灰白2.5Y7/1細砂・褐5YR5/8中～粗砂が水平方向のラミナをなす。西側⑤は灰7.5Y5/1細砂。上方粗粒化し、粘性のある極細砂2層と弱いラミナを形成する。植物遺体痕・マンガンが多い（西辺断面でもっとも多く、下層との層界付近では少なくなる）。下半⑥は、灰5Y6/1細砂と黄褐10YR5/6極細砂とのラミナが水平に見られる。植物の地下茎と推測されるマンガンを垂直方向にやや多く含む。

第3層（自然堆積層：⑦～⑰） 調査区東半では大きく3層に、西半ではさらに細かく分層される。全体に堆積する⑦は灰10Y4/1粗砂を主体とし、上層との層界付近は粘性の強いシルトとなる。ラミナはやや弱く、マンガンを多く含む。層の中位に、植物遺体薄層が部分的に形成される。

東半の中位⑧は灰10Y4/1粗砂。ラミナが発達する。上層（⑦）との層界は粘質シルトで植物遺体やマンガンを多く含む。西半中位には⑨灰10Y4/1シルトが堆積し、弱いラミナが水平方向に見られる。その下⑩は、同じく弱いラミナの見られる灰10Y5/1シルトで、西辺南側で細砂を多く含む。

東半部下半には⑪、暗オリーブ灰2.5GY4/1シルトがたまる。層の上位にラミナが顕著に見られ、マン





ガンが多く、植物遺体をわずかに含む。層の西端⑫で、灰10Y4/1シルト～細砂・黄橙10YR8/6細砂・黄橙10YR7/8細砂がラミナを形成する。

西半下位の⑬は黄橙10YR8/6細砂で、西端では灰10Y5/1細砂とラミナを形成する。⑭は、灰10Y4/1シルト～細砂・黄橙10YR8/6・黄橙10YR7/8細砂がラミナをなし、東へ細粒化する。上層(⑨)との境でマンガン(浅黄5Y7/4)が水平堆積し、植物遺体がわずかに見られる。下層には、⑮オリーブ黒7.5Y3/1がたまり、東側で細砂とラミナを形成する。西辺⑯は黄灰2.5Y4/1細砂・灰10Y4/1・黄橙10YR8/6シルト～細砂がラミナ形成するが、攪拌を受ける。⑰では黄灰2.5Y4/1細砂が主体となる。

第4層(土壤化層・畦畔検出面:⑱～⑳) 土壤化層である黒色シルト層が一面に薄く広がり(層厚およそ10cm、40cmを測る部分〔西辺〕もある)、炭化物が含まれる。

西辺と東半⑱・⑲は黒7.5Y2/1粗砂混じりシルトで、⑱は東へ細粒化する。西部には⑳・㉑オリーブ黒7.5Y3/1シルトが広がり、⑳は細～粗砂を、㉑は粗砂を含む。下半の㉒では、黒7.5Y2/1シルトに明黄褐10YR6/8粗砂を多く含む。

第5層(第4層基盤層:㉓～㉕) 第5層には灰色のシルト～細砂が第6面の溝からオーバーフローして堆積する。

西半㉓～㉕は灰10Y5/1シルト～細砂を主体とし、それぞれ黄橙10YR8/6細砂(㉓・㉕)、黄灰2.5Y4/1細砂(㉔)とラミナをなし、攪拌が見られる。

第6層(土壤化層・溝底絶面:㉖～㉙) 層厚10～20cmほどの土壤化した黒色シルト～細砂が広がる。㉖はオリーブ黒5Y2/2細砂、炭化物を含むやや粒径の粗い層が広がる。60溝上層に堆積する㉗は土壤

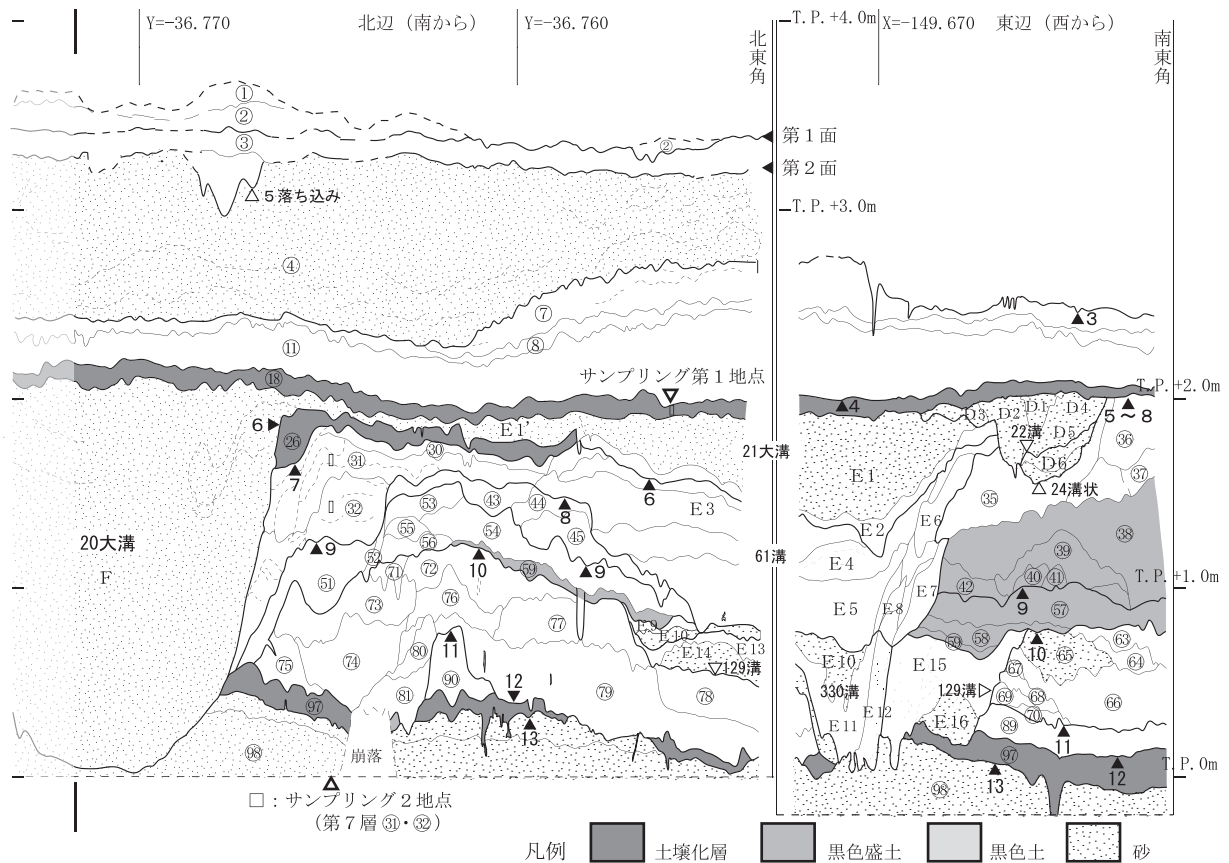


図3 03-1-1区 土層断面

化が弱く、灰10Y4/1シルトをベースに黒7.5Y3/1シルト・黄橙10YR8/6細砂とがよく攪拌されている。調査区北西部の⑳はオリーブ黒5Y2/2シルト～細砂、植物遺体を多く含む。㉑オリーブ黒7.5Y2/2シルト～細砂。

**第7層（第6面基盤層：⑳～㉔）** 溝による堆積と盛土で構成される。第6面20大溝の東、㉓は灰10Y4/1シルトと黄橙10YR7/8細砂の攪拌。㉑・㉒は、暗青灰5BG4/1シルトに黄5Y8/6細砂が混じる。㉑では攪拌が、㉒ではラミナが顕著である。㉓・㉔は、黄5Y8/6細砂で攪拌され、㉓オリーブ黒7.5Y3/1シルト～細砂主体、㉔オリーブ黒5Y2/2シルト～細砂主体である。

**第8層（[黒色]盛土層：㉕～㉙）** 東半には黒色を主体とした土が顕著である。どの層もよく攪拌されブロック土が目立つ。

東辺の上半㉕～㉗は粘土ブロックを含む。第8面61溝の肩にあたる㉕は暗緑灰7.5GY4/1粗砂～礫混じりシルトで、しまりがある。オリーブ黒5Y3/1粘土ブロック・黄褐2.5Y5/6細砂ブロックとよく攪拌される。㉖は暗緑灰5G3/1粘土、粗砂～中礫を極めて多く含む。㉗は暗オリーブ灰5GY4/1細砂を主体とし、粗砂を多く含む。この層の北半では黄褐2.5Y5/6細砂ブロックが主に含まれ、南半では暗緑灰10Y4/1粘土ブロックが多くなる。下半㉘は東辺を広く覆うオリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルトで、炭化物を含む。灰オリーブ5Y5/3細砂ブロック（直径～0.5cm）とよく攪拌され、北の土ほどブロックが多くなる。その下層㉙は、黒2.5GY2/1とやや色が濃く、北側で帯状に細砂ブロックが並ぶ。㉚は細砂ブロック（直径～0.3cm）を含み、㉛は細砂とマーブル状に攪拌される。㉜では細砂ブロックをあまり含まない。

北辺61溝と20大溝との間に㉜～㉞が堆積する。㉜は暗オリーブ灰2.5GY3/1粗砂混じりシルト。㉝はオ

リーブ黒7.5Y3/2シルトで、明黄褐2.5Y6/6細砂と攪拌され、粗砂は少ない。④5は灰10Y4/1粘質シルト。上方に植物薄層が、下方にラミナが顕著に見られる。20大溝と60溝の間の④6は④3と似るが、崩落のため詳細不明。

北西部の④7～④9はやや攪拌の弱い層。④7オリーブ黒7.5Y3/1シルトでラミナが見られる。④8黒2.5GY2/1細砂をやや多く含み、細かいブロックで攪拌される。④9は暗灰色10GY3/1粘質シルト。62溝の南は、④9暗オリーブ灰5GY3/1細砂で、粗砂・粘土ブロックをわずかに含む。黄褐2.5Y5/4細砂を層状に含む。

**第9層**〔黒色〕盛土層：④9～④10 東半では攪拌が強く、炭化物が目立つ。西半では攪拌が弱く、土の堆積も少ない。

第6面20大溝の東④9には黒10Y2/1粘質シルト。上方は上から攪拌を受け、下方は植物遺体をわずかに含む。東では粗砂をはさんで④10暗オリーブ灰2.5GY3/1粘質シルトに変わる。細砂と攪拌され、炭化物をやや含む。④11は黒2.5GY2/1細砂混じり粘質シルト。上方は粗砂をやや多く含む。④12は灰オリーブ5Y4/2細～粗砂混じりシルト。下方ではオリーブ黒7.5Y3/2細砂混じりシルト。④13・④14との層界付近で粗砂が多く、細砂の流入が見られる。④15は暗オリーブ灰2.5GY3/1シルト。粘土がやや混じり、中位に植物遺体が薄層をなす。層境で細砂を含む。④16は暗緑灰10GY4/1粘質シルト。ラミナは顕著だが、下層との層界付近でやや弱くなり、炭が多くなる。溝のある西から細砂が流入する。東辺には④17オリーブ黒10Y3/1粗砂混じりシルトが広がる。層中に炭化物を含む。その下には④18黒2.5GY2/1粘質シルトが薄く堆積する。粗砂・炭をわずかに含み、下部に細砂ラミナが見られる。北辺から東辺にかけて広く堆積する④19は黒10Y2/1粘質シルトで炭や植物遺体をやや含む。

西辺④20はオリーブ黒5Y3/1粘土で、下層との境に粗砂がたまる。④21は黒2.5GY2/1粘質シルトで下方粗粒化して細砂が多い。その下に薄く広がる④22は、暗オリーブ灰5GY3/1粘質シルトで、弱い細砂ラミナが見られ、炭化物を少量含む。

**第10層**（盛土層下半：④23～④31）シルトを主体とし、細砂や黒色ブロック土と攪拌される。

東辺では④23灰10Y4/1粘質シルト、下方は細砂と攪拌される。④24は黄5Y7/8細砂～粗砂。④25はオリーブ黄5Y6/4細砂で溝からのオーバーハングによって堆積したと考えられる。④26はオリーブ黒7.5Y3/1粘質シルトで、細砂がやや混じり、黒色の小ブロックを含む。その北には④27灰5Y4/1シルトが細砂ブロックを含んで堆積する。④28はオリーブ黒5Y3/1粘質シルトで黒色のブロックが混じる。④29は灰7.5Y4/1細砂混じり粘質シルト。④30はオリーブ黄5Y6/4細砂を主体として灰7.5Y4/1シルトと攪拌。

北辺第6面20大溝東肩、④31は暗オリーブ5GY3/1粗砂混じりシルトで、上層との境に細～粗砂が、下層との境に粗砂が堆積する。その下に④32・④33暗緑灰10GY4/1シルト。粗砂～中礫を極めて多く含み、縦方向の植物遺体がやや多い。④31との層境にラミナが顕著である。④33では弱いラミナが見られ、粗砂が多い。④34は灰10Y4/1細砂・黄褐2.5Y5/4粗砂～中礫（直径0.5cm以下）が互層となり、ラミナを形成する。下層との層境で植物遺体の薄層が見られる。④35はオリーブ黒7.5Y3/1粘質シルトで上方は粗砂がわずかに混じり、ラミナは弱い。

④36は暗オリーブ灰5GY3/1粘土～粗砂の攪拌。層の西では細砂となる。④37浅黄2.5Y7/4細砂・暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂がラミナを形成。植物遺体を多く含み、東端で粗砂がやや多い。④38はオリーブ黒10Y3/1細砂混じり粘質シルト。炭をやや多く含む。層の下位では東方向へ粗砂が少なくなる。④39はオリーブ黒7.5Y3/1細砂・オリーブ5Y5/4細～粗砂との互層。木片を多く含み、下位には植物遺体・炭がや

や多く見られる。⑧は上半で灰10Y4/1粗砂混じりシルト。しまりがなくラミナも弱いいため崩落土かと考えられる。下半は暗オリーブ灰2.5GY4/1粘土～細砂がラミナを形成し、植物遺体薄層がやや多く見られる。下層との層境で粗砂が流入する。⑨はオリーブ黒10Y3/1シルト。層の上位は粗砂混じりシルトとラミナをなし、中位西半ではブロック状の攪拌、下位は炭化粒（直径0.3cm以下）がやや多く見られる。

**第11層（自然堆積層：⑫～⑯）** 第11層以下はほとんど攪拌の見られない自然堆積層だが、後世の溝の掘削によって大半が削られている。

⑫～⑭は溝の間に残存する。⑫は上方オリーブ黒7.5Y3/1粘土～下方暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂。この間に貫入する⑬は浅黄7.5Y7/3細砂～粗砂で弱いラミナが見られる。⑭はオリーブ黒5Y3/1粗砂混じりシルト。縦方向の植物遺体をやや多く含む。

60溝以西では、⑮～⑱が堆積する。⑮は黒2.5GY2/1粘質シルトで粗砂、植物遺体をやや含む。⑯は灰7.5Y4/1粘質シルトで暗オリーブ5Y4/4細砂と顕著なラミナを形成する。⑰は暗オリーブ灰5GY3/1粘質シルト。⑰との層界付近で細～粗砂をわずかに含む。植物遺体も多く含む。⑱は暗緑灰7.5GY3/1粘質シルト。水平方向のラミナが顕著に見られる。T.P.+1.0m付近で植物遺体薄層が堆積する。東辺⑲はオリーブ黒5Y3/1粘質シルトでラミナを形成する。北辺東の⑲はオリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト。明黄褐色2.5Y7/6細砂の弱いラミナが水平方向に形成される。

西半⑲はオリーブ黒10Y3/1シルトで、一時的な土壌化層と捉えて上面を第11 - 2面とした。⑲～⑳は自然河川の埋土と考えられ、その下面を第11 - 3面としている。㉑黒褐2.5Y3/1シルト、㉒オリーブ黒7.5Y3/1細砂から下方細粒化してシルト、㉓はオリーブ黒7.5Y3/1粘土。明黄褐2.5Y7/6細砂と弱いラミナを形成する。㉔は暗緑灰5GY4/1粗砂、㉕黒5Y2/1粘土～シルトが堆積する。

**第12層（土壌化層：㉖）** 北辺から東辺に広がる土壌化層である。黒10Y2/1シルトで下方へ粗粒化する。植物遺体を上方でわずかに含む。北辺の東では土壌化が弱く、木片を多く含む。第8面60溝の下層ではオリーブ黒7.5Y3/1細砂・暗オリーブ灰2.5GY3/1粘土・オリーブ黄5Y6/4粗砂～中礫のラミナが顕著。

**第13層（自然堆積層、第12面基盤層：㉗）** 自然堆積層である。下方へ、暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂、灰オリーブ7.5Y4/2粗砂～大礫（直径0.7cm以下）、灰白2.5Y7/1粗砂～大礫（直径1.0cm以下）と粗粒化する。

### 第3節 遺構と遺物

#### （1）03 - 1 - 1区盛土層・第0層の遺物

現代の盛土層である。当初設計に従い、現地表面のT.P.+4.6mから0.8m下、すなわちT.P.+3.6mまで重機で掘削した。磁器31片、陶器13片、瓦2片、瓦器・瓦質土器2片、須恵器65片、サヌカイト剥片2点、小礫2個、計117点出土した。

さらに、その下層にも盛土層が残っていたため、重機と人力を併用し第1面まで掘り下げた。この間を第0層とする。第0層からは、磁器9片、陶器10片、瓦3片、瓦器・瓦質土器7片、須恵器23片、土師器65片、弥生土器33片、金属製のキセル1点、サヌカイト剥片1点、計152点出土した。

また、第0～2層相当の側溝を掘削した際に、磁器5片、陶器5片、瓦1片、瓦器・瓦質土器9片、

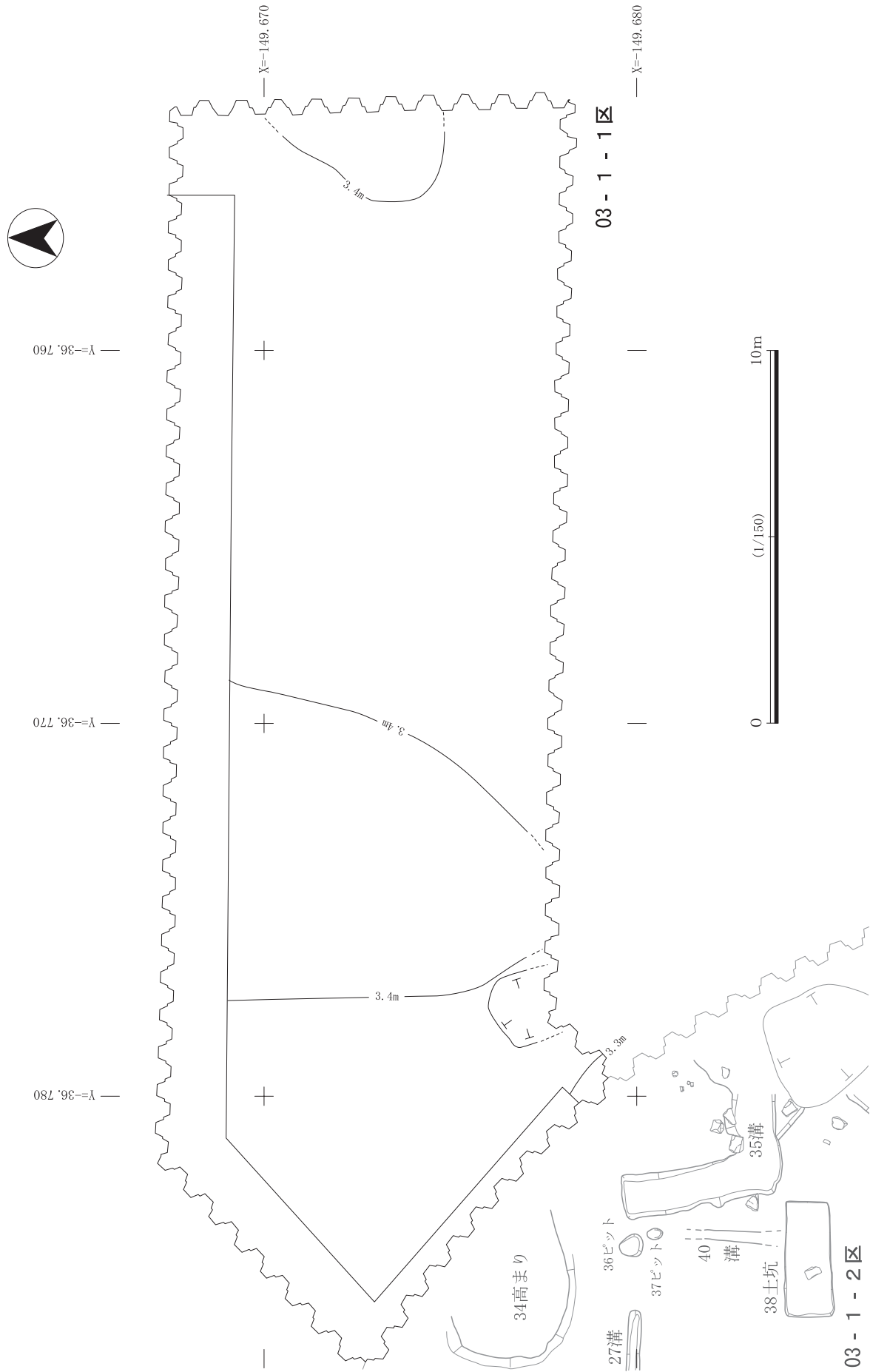


図4 03-1-1区第1面

須恵器35片、土師器30片、弥生土器13片、計98点出土した。

(2) 03-1-1区第1面(図4・写真図版1)

オレンジ色を呈するシルト層の上面である。

面の高さはおよそT.P.+3.4mで、調査区東端と中央やや西側がわずかに高い。遺構は見いだせなかった。

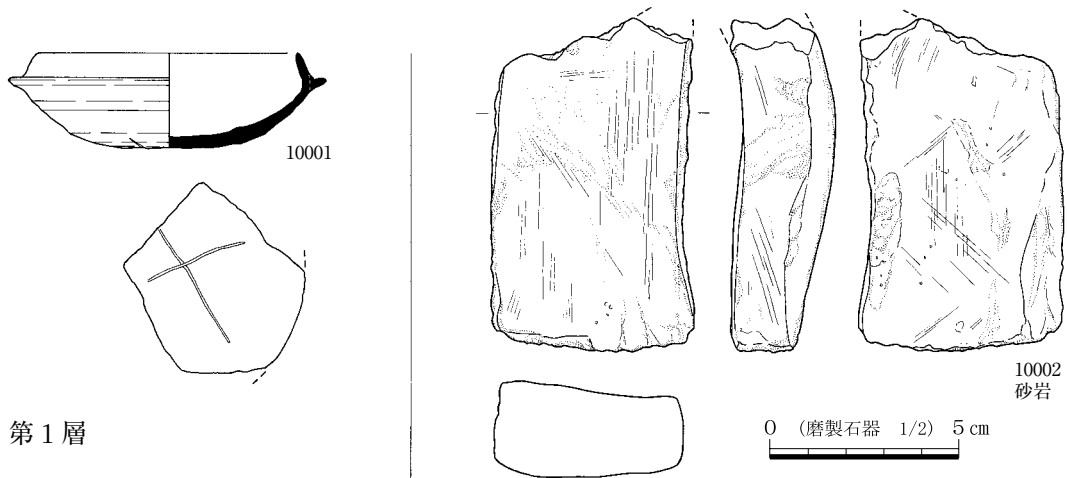
(3) 03-1-1区第1層の遺物(図5・写真図版8)

磁器19片、陶器9片、瓦24片、瓦器・瓦質土器16片、黒色土器5片、須恵器530片、土師器646片、弥生土器60片、銅鈴1点、砥石1点、サヌカイト剥片1点、ウマ歯1点、計1313点出土した。

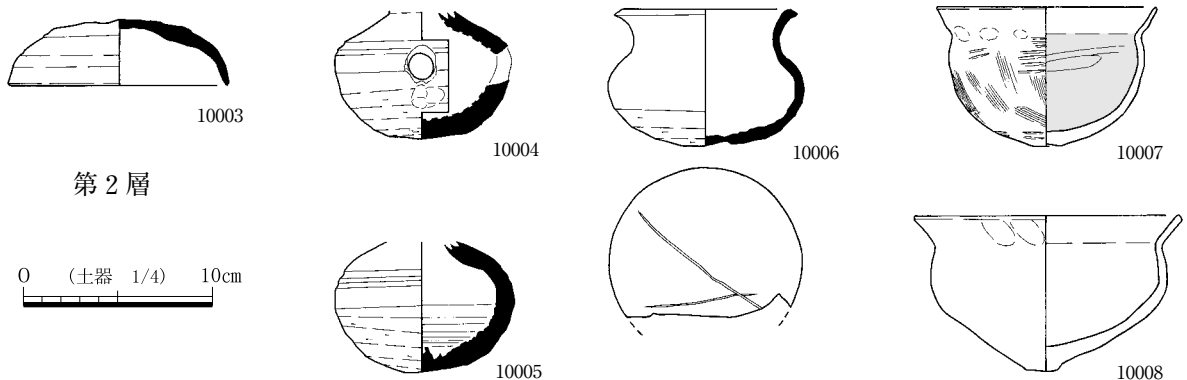
細片が多く確定しがたいが、古墳時代～近代の包含層と考えられる。

図示したのは2点である。図5-10001(写真図版8)は須恵器杯身。口径13.7cmで、回転ヘラケズリは全体の2分の1程度。立ち上がりは短く内傾し、端部はまるくおさめる。TK43型式であろう。底部に「×」状のヘラ記号が入る。

10002(写真図版8)は細粒の砂岩製砥石で長軸8.80cm、短軸5.22cm、厚み2.5cmを測る。図に示した3面が使用され、凹面では擦痕のはしる斜め方向に凹む。



第1層



第2層

図5 03-1-1区第1層・第2層出土遺物

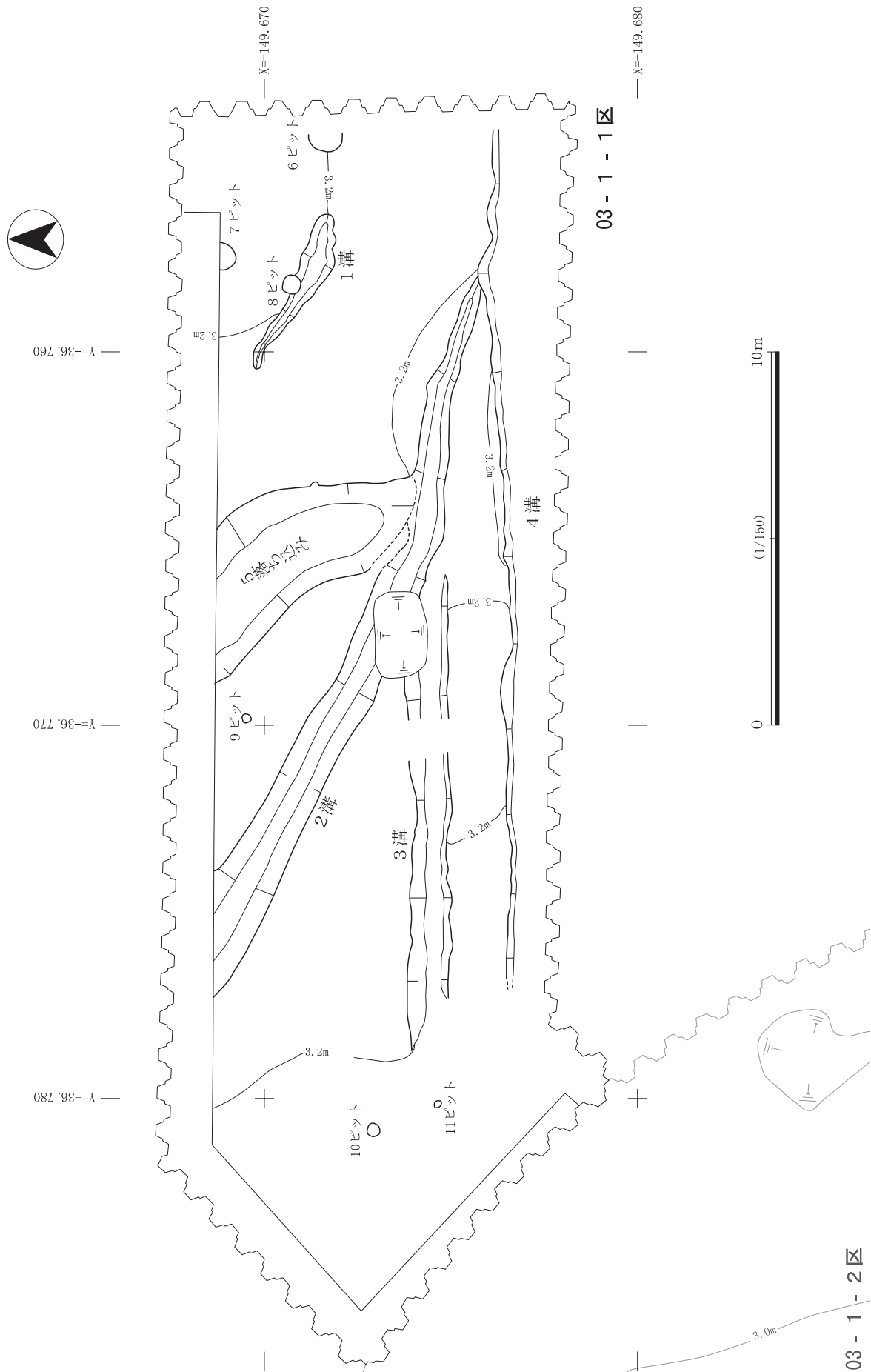


図6 03-1-1区第2面

## (4) 03-1-1区第2面の遺構と遺物(図6・写真図版1)

洪水砂層の上面である。

面の高さはおよそT.P.+3.2mで、ほぼ平坦。溝4条、ピット6個、落ち込み1カ所、計11か所(遺構番号1~11)を調査した。

1溝 03-1-1区北東部に位置する。やや屈曲するが、東南東から西北西を主軸とする。長さ4.6m、幅22~93cm、深さ9cm。埋土は、灰黄褐10YR4/2シルトに黒褐7.5YR3/2シルトが斑状に混じる。土師器8片のみ出土。

2溝 調査区中央部を東南東から西北西にはしる。長さ20m以上、幅0.4~1.7m、深さ36cm。埋土(図3)は、A灰5Y4/1粗砂混じりシルト、鉄分を多く含む土が堆積する。出土遺物は、須恵器2片と土師器11片。

3溝・4溝 東西方向を主軸とする。埋土は、いずれも第1層と同じくマンガン・鉄分を多く含んだ灰オリーブ5Y6/2粗砂混じりシルトが堆積する。両溝とも出土遺物はない。3溝は、長さ12m以上、幅0.8~1.1m、深さ8cm。4溝は、長さ23m以上、幅2mの平面規模に対し、深さは5cmと浅い。

5落ち込み 調査区中央やや東に位置する。2溝の北に接し、溝状に北西に伸びる。幅2.5~2.9m、深さ30~40cm。出土遺物は、土師器35片、須恵器17片、瓦器1片、弥生土器2片、計55点。

ピットを6個調査した。調査区北東部に3個、中央部北側に1個、西部に2個と散在する。検出状況からみて、溝群と大きな時期差はないと考えられるが、8ピットが1溝を切っており、ピットの方が新しい。個々のピットのサイズや埋土などは、表3にまとめた。

## (5) 03-1-1区第2層の遺物(図5・写真図版8)

磁器1片、陶器1片、瓦1片、瓦器・瓦質土器2片、須恵器118片、土師器196片、弥生土器64片、サヌカイト剥片4点、計387点出土した。

うち須恵器と土師器計6点を図示した。図5-10003は須恵器杯蓋。端部はまるくおさめ、回転ナデのみで仕上げる。口径11.5cm。TK209型式に位置づけられよう。

10004(写真図版8)・10005は須恵器の<sup>はら</sup>。10005は円孔部が残存していない。いずれもヘラケズリを体部上半まで施しており、6世紀前半と考えられる。

表3 03-1-1区第2面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト			その他	
								I 様式	I II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類			
6ピット	8L-6h	円		81		20	①褐灰7.5Y5/1、粗・中砂混じる、植物遺体含む ②褐灰5Y5/1、中~粗砂混じる、植物遺体含む										0
7ピット	8L-6g	円		73		18	黒褐7.5YR3/2						8				8
8ピット	8L-6h	円		51	49	19	暗褐10YR3/3										0
9ピット	8L-7g	円		25	23	6	灰黄褐10YR4/2粗砂										0
10ピット	8L-9h	円		30	28	10	灰黄褐10YR4/2						1				1
11ピット	8L-8h	円		22	21	10	褐7.5YR4/3										0



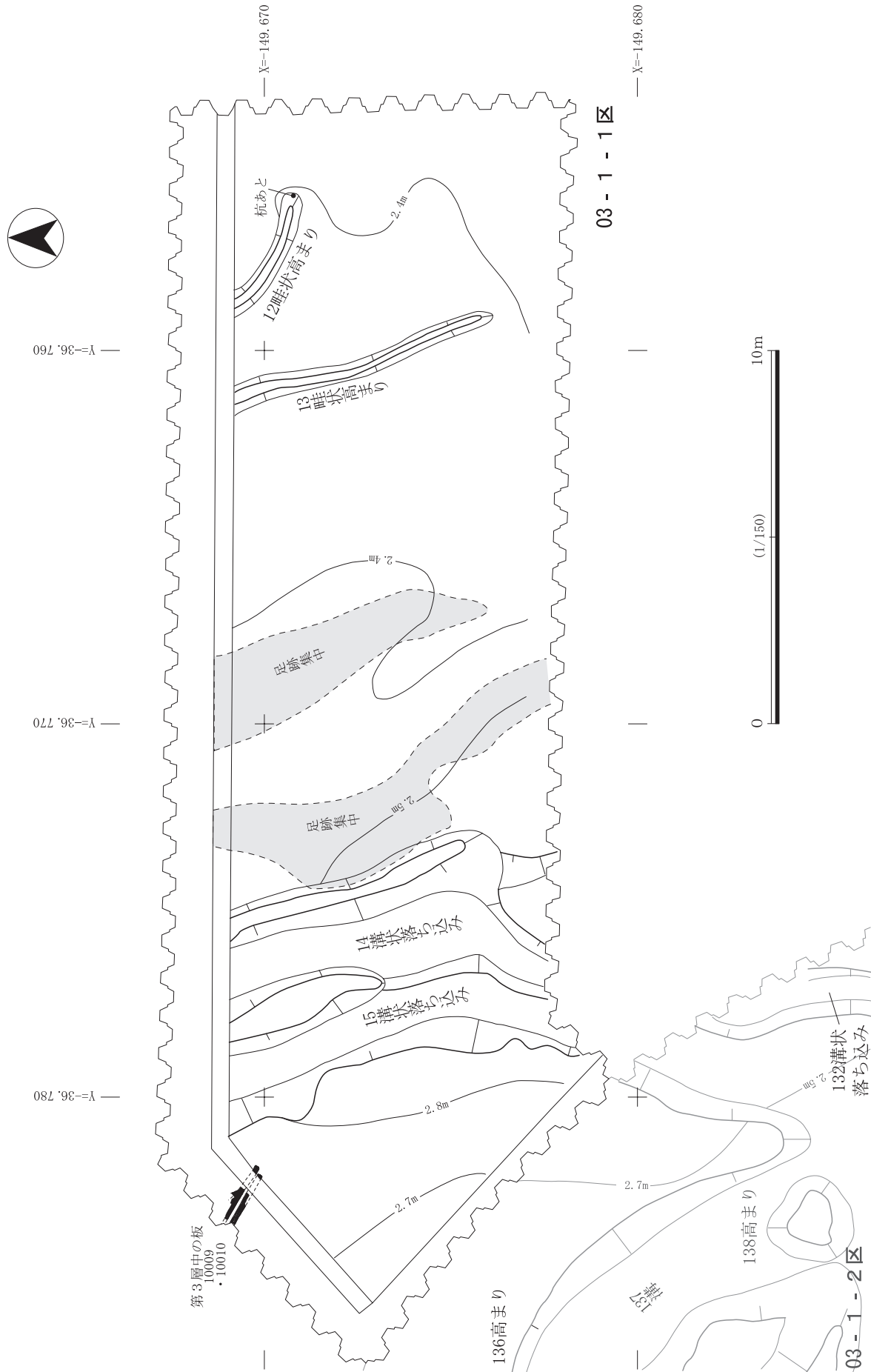


図7 03-1-1区第3面

10006（写真図版8）は須恵器小壺。底部に「×」状のヘラ記号が入る。

10007・10008は土師器の小形鉢。10007は底部が残り、完全な丸底には至っていない。庄内式期に相当するか。10008の底部は小さくなっているものの明確で、V様式に位置づけられる。

（6）03 - 1 - 1区第3面の遺構と遺物（図7・写真図版1）

第2層の洪水砂層を除去した、自然堆積のシルト層上面である。

面の高さは、中央部以東がおおよそT.P.+2.4mで、調査区西側は03 - 1 - 2区から続く136高まりとなりT.P.+2.7~2.8mと高い。畦状高まり遺構2条、溝状落ち込み2条、計4条の遺構（番号12~15）を調査した。

12・13畦状高まりは、03 - 1 - 1区の東部にある。2条の畦状遺構は平行しない。地層観察からは第3層は水田土壌とは認めがたく、また、上下の層でも畦は検出できなかったため、遺構の性格は不明。形状から畦状高まりと呼ぶ。

12畦状高まり 弧状に屈曲するが、西北西から東南東に主軸をもつ。基底部の幅47~58cm。畦状高まりの頂部はT.P.+2.45~2.47m。第3面の高さは、畦状高まりの北東側がT.P.+2.4m台の前半、南西側がおおよそT.P.+2.35mと10cm弱の高低差がある。遺構の東端に直径4cmの杭跡が見られた。

13畦状高まり 12畦状高まりと同様にゆるく弧状に屈曲し、北北西から南南東にのびる。基底部の幅46~70cm。この遺構周辺の第3面の高さはおおよそT.P.+2.3mで、遺構の頂部は、T.P.+2.33~2.39m。

14溝状落ち込み 調査区西部に位置する。03 - 1 - 2区の132溝状落ち込みとつながり、やや屈曲する

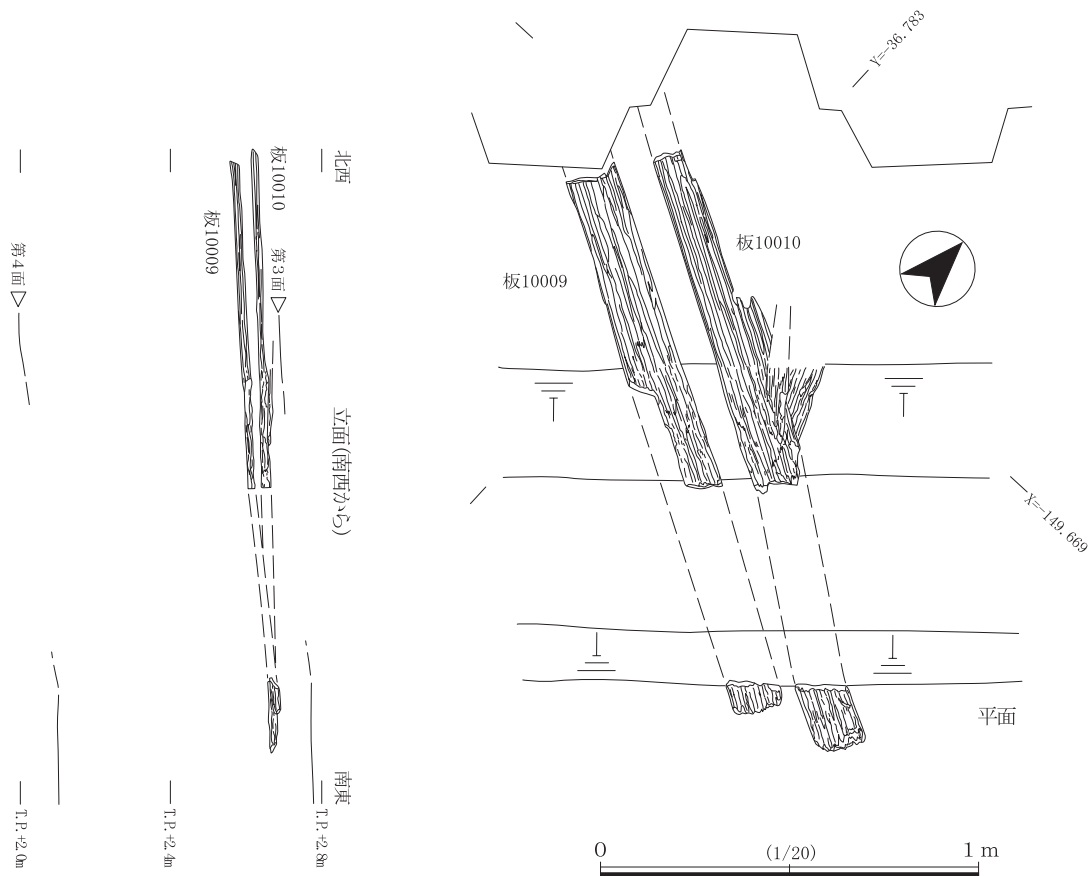


図8 03 - 1 - 1区 第3層中板材出土状況

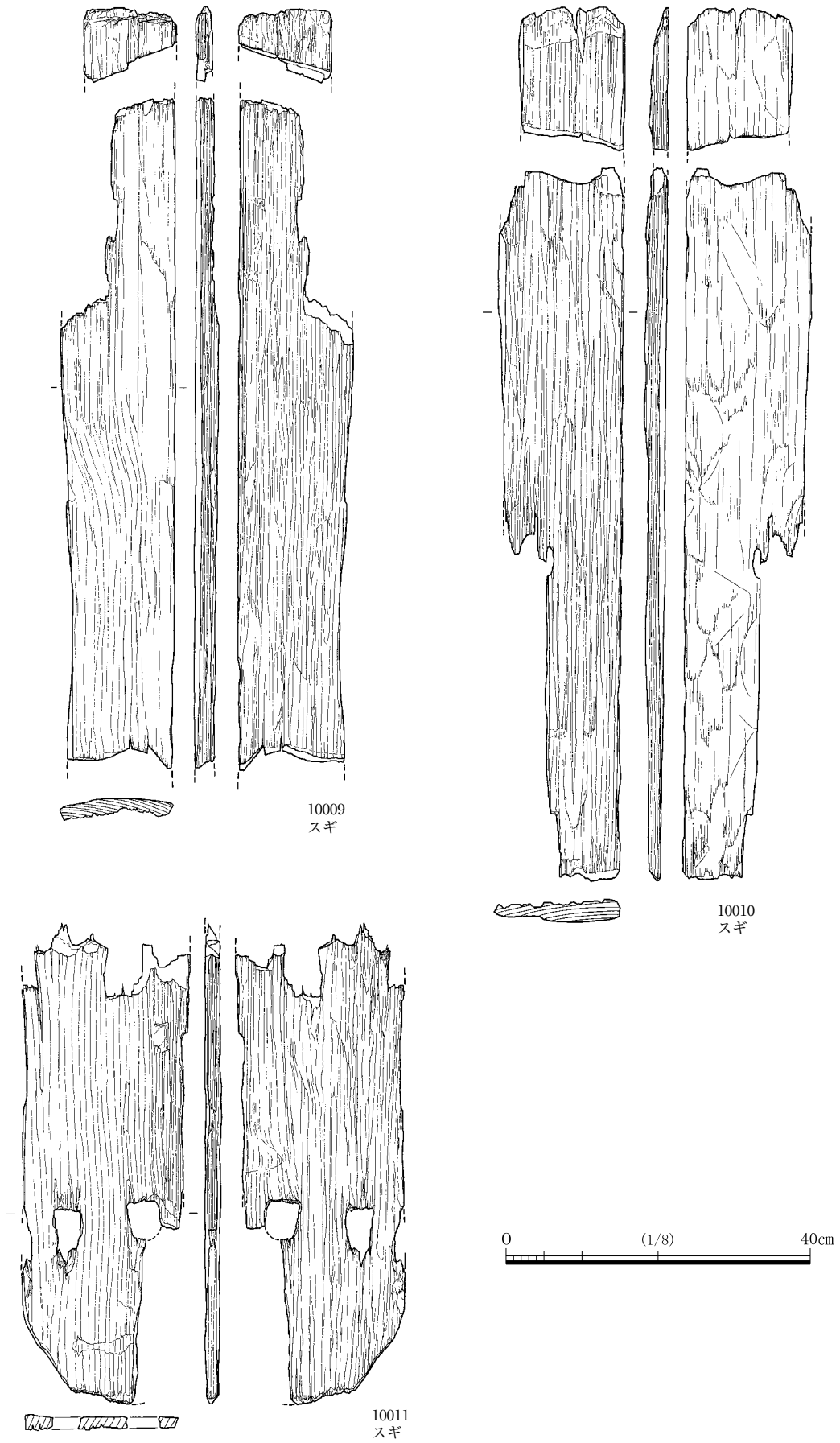


図9 03-1-1区 第3層出土木器

が基本的に南北を主軸とする。長さ45m以上、幅は03-1-1区で1.5~1.8m、最深部分で約70cm。埋土(図3)は、灰白10YR8/1細砂~粗砂で、大礫を含む層が西へオーバーハングする。上方で灰白10YR8/2細砂~粗砂、直径0.1cm以上の礫を含む層が堆積し、下方で灰白2.5Y7/1細砂、明赤褐5YR5/8粗砂~中礫が水平方向にラミナをなす。出土遺物はない。

15溝状落ち込み 14溝状落ち込みの西側に平行する。溝底はT.P.+2.5~2.6mで、14溝より数10cm高く、03-1-2区の136高まりと132溝との間につながる。当調査区での幅は1.4~2.4m。埋土(図3)は第2層⑥と同じで、灰5Y6/1細砂と黄褐10YR5/6極細砂とのラミナが水平に見られる。出土遺物なし。

調査区中央には、動物の足跡集中部分がある。この周辺では第3層の厚さが約20cmあり、その上面からの踏み込みとは考えにくいので、動物の足跡は第4面に印されたものである可能性が高い。

#### (7) 03-1-1区第3層の遺物(図8・9 写真図版2)

第3層からは、土師器10片、弥生土器14片、板材3点、計27点出土した。

板材のうち図9-10009・10010の2点は、図8・写真図版2に示すように、調査区北西部、第3面の下5~12cm、第4面の上方約60cmの第3層中から出土した。いずれも側溝・矢板に切られており全長は不明だが、側溝掘削時に破損した部分を含めて10009が154cm以上、10010が180cm以上の長いものとなる。スギの柾目材だが、板目に近い。加工痕などは観察できなかった。

10011は3孔式の田下駄か。両端部の破損のため全体形は不明。孔間の長さが、長軸方向に26.8cm、短軸方向に6.2cmで、長軸方向にかなり長いいため他の部材である可能性もある。スギの柾目材。

さらに、第3層以下の相当層に側溝掘削した際に、土師器11片、弥生土器26片、棒状木製品1点、計38点出土した。

#### (8) 03-1-1区第4面の遺構と遺物(図10・写真図版2)

水田土壌と考えられる黒色土壌化層の上面である。

面の高さはT.P.+2.0~2.2mで、西が高い傾向にある。溝状落ち込み3条、溝1条、計4条の遺構(番号16~19)を調査した。水田畦畔の検出はないが、層相からみて弥生時代後期の水田面の可能性が高い。

16溝状落ち込み 03-1-1区中央やや東に位置する。北北東から南南西を主軸とする。長さ10m以上、幅45~86cm、深さ5cm、検出範囲の南端で17溝状落ち込みと接する。

17溝状落ち込み 調査区中央に位置する。屈曲するが、北西から南東に主軸をもつ。長さ11m以上、幅48~117cm、深さ8cm。

18溝状落ち込み 調査区南西部に位置する。北北西から南南東を主軸とする。長さ4m以上、幅1.2~2.3m、深さ27cm。

16・17・18溝状落ち込みとも、埋土は、第3層と同じ⑩暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト。層の上位にラミナが顕著に見られ、マンガンを多く、植物遺体をわずかに含む。出土遺物はない。

19溝 調査区西部に位置する。南北を主軸とする。長さ10m以上、幅2.0~3.7m、深さ27cm。埋土はB1~B6層に分かれる(図3)。B1は灰5Y4/1シルト~細砂。B2はやや粘性をもつ灰10Y5/1シルト。B3灰7.5Y4/1シルト~細砂と黄橙10YR8/6・黄橙10YR7/8細~粗砂の攪拌。B4灰7.5Y4/1と黄橙10YR7/8細~粗砂とが攪拌され、粗砂が多い。B5では灰7.5Y4/1シルトで細砂をやや含む。最下層B6はオリーブ黒7.5Y3/1細~粗砂混じりシルト。攪拌が見られる。出土遺物は、弥生土器2片のみ。

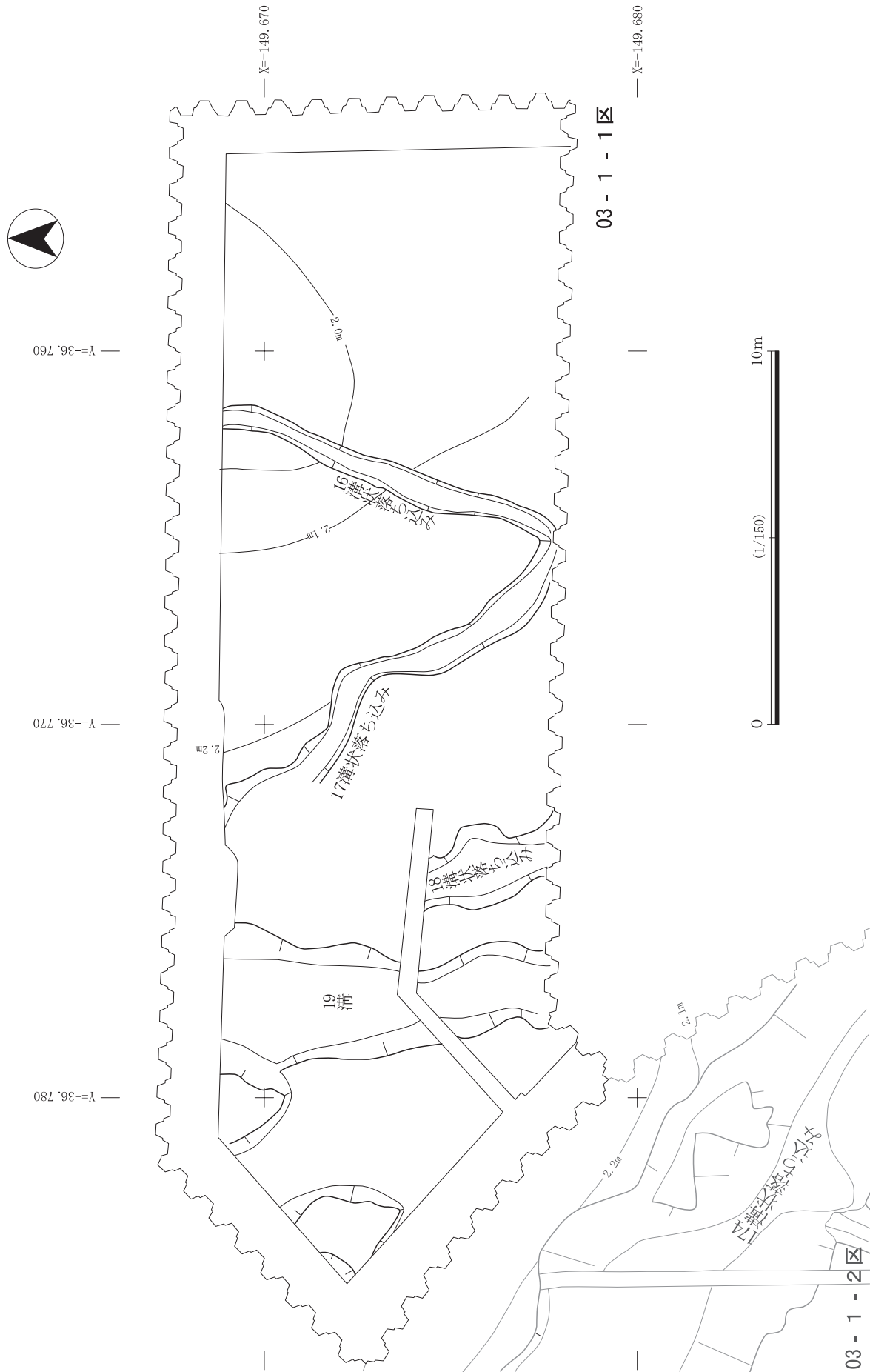


図10 03-1-1区第4面

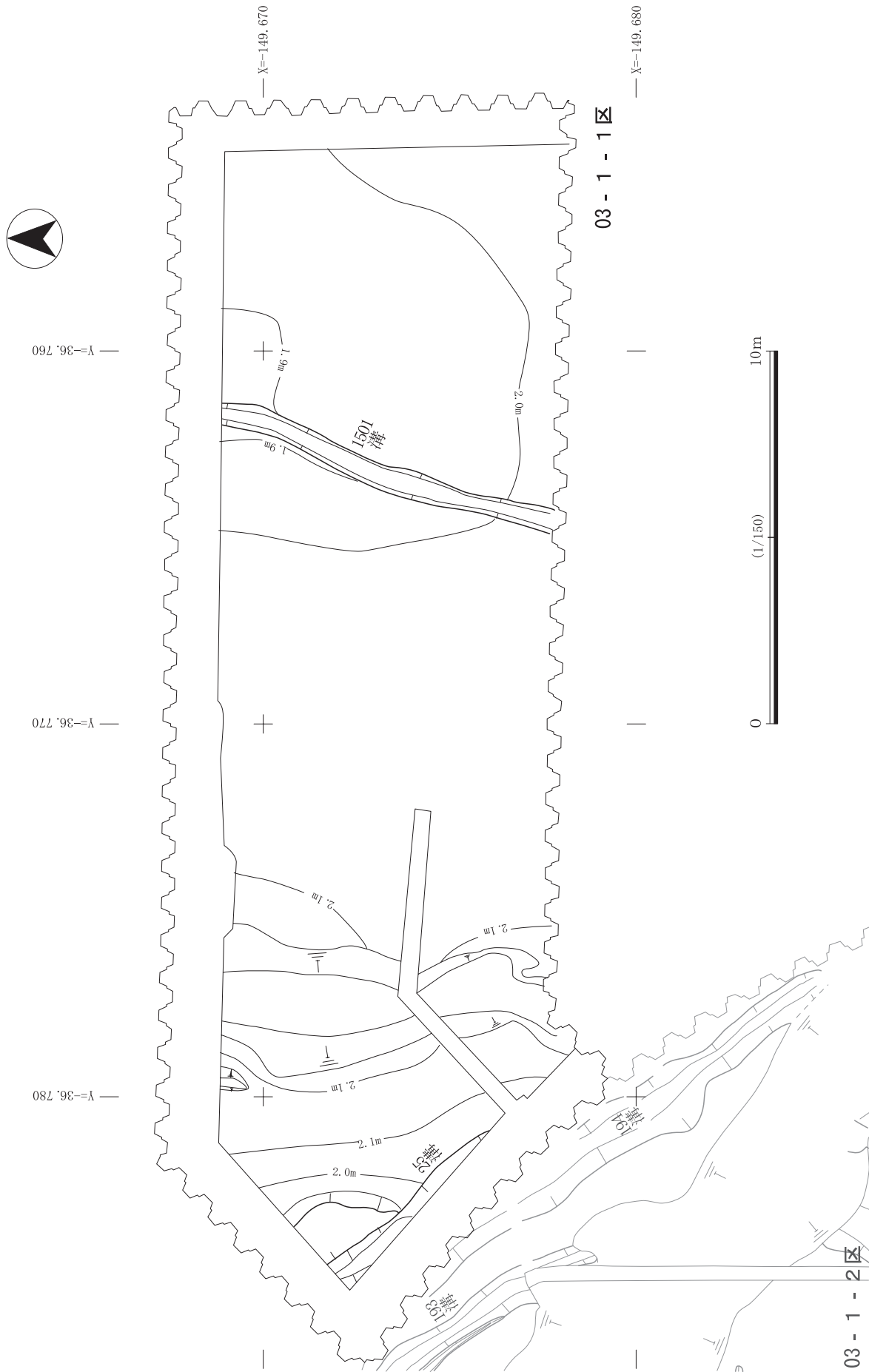


図11 03-1-1区第5面

(9) 03-1-1区第4層の遺物

土師器12片、弥生土器20片（うちI様式1片）、サヌカイト剥片2点、計34点出土した。

(10) 03-1-1区第5面の遺構と遺物（図11・12 写真図版2）

第4層の黑色土壌化層を除去した、洪水砂層の上面である。

面の高さはおよそT.P.+1.9~2.1mで、調査区北東部がわずかに低い。溝を2条（遺構番号25・1501）調査した。

25溝 調査区西端で検出した。03-1-2区の194溝と同一遺構で、北西から南東を主軸とし、長さ14m以上、幅0.8~2.5m、深さ68cm。

埋土は5層に分かれる（図3）。C1灰10Y5/1シルト~細砂で、黄橙10YR8/6粗砂と攪拌される。C2灰10Y4/1シルト~細砂、粗砂・炭化物を含む。C3灰10Y5/1シルト~細砂に灰色細~粗砂とラミナを形成し、一部攪拌される。炭化物含む。C4灰10Y5/1シルト~細砂の攪拌。C5灰10Y5/2シルト~細砂で炭化物を含む。弥生土器2片とサヌカイト剥片1点が出土した。

図示したのは弥生土器の甕1点（図12-10012）。口縁部はヨコナデによってやや肥厚する。頸部はしぼられ、胴部は球形となるだろう。IV様式に位置づけられる。

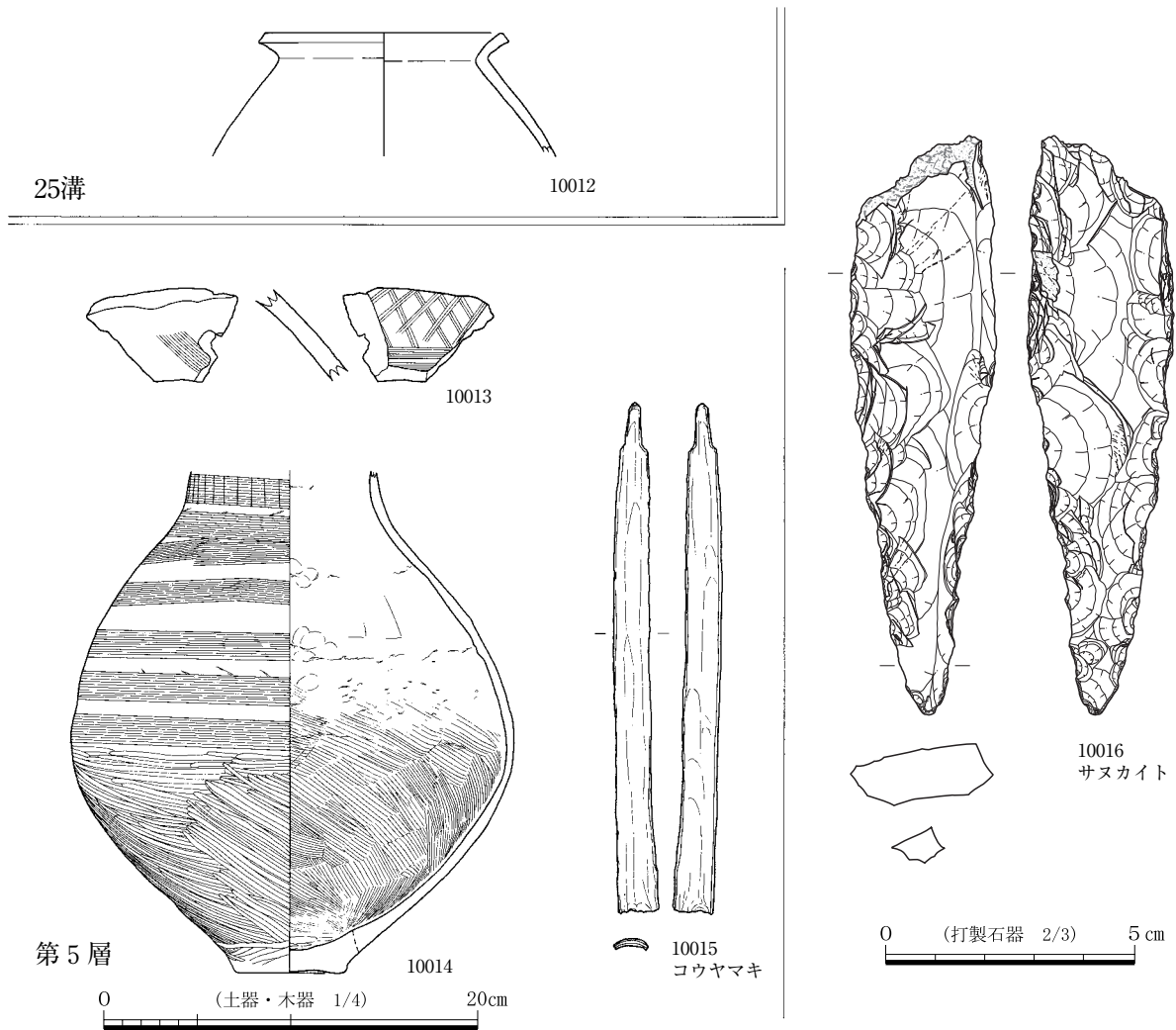


図12 03-1-1区第5面25溝、第5層出土遺物

1501溝 調査区東部に位置する。北北東から南南西を主軸とする。長さ10m以上、幅0.5～0.7m、深さ17cm。埋土は、第4層と同じ黒7.5Y2/1粗砂混じりシルト。出土遺物はない。

なお、調査区西部にある南北方向の溝状のくぼみは、第4面19溝による攪乱である。この攪乱は、第7面にまで及ぶ。

#### (11) 03 - 1 - 1区第5層の遺物 (図12・写真図版8)

土師器1片、弥生土器127片 (うちⅠ様式16片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式2片、Ⅲ様式1片、Ⅳ様式1片)、石錐1点、サヌカイト剥片1点、木片1点、計131点と骨・歯が出土した。

図12 - 10013は大形細頸壺の肩部で、斜格子文とクシ描き直線文で飾られる。Ⅳ様式に特徴的な文様である。10014 (写真図版8) は体部を簾状文、クシ描き直線文で飾る。体部下半は時計回りのミガキが施される。Ⅲ - 1様式。

10015は用途不明の加工木。原木のまゝにそって湾曲した板材で、先端の幅を約半分にして突起を作る。コウヤマキを用いる。

10016 (写真図版8) はサヌカイト製石器。先端に回転痕が残っているため、石錐と考えられる。尖頭器の未成品を用いたものか。

また、第5層以下に側溝を掘削した際にも、土師器1片、弥生土器112片 (うちⅠ様式7片)、小礫1個、計114点出土した。

#### (12) 03 - 1 - 1区第6面の遺構と遺物 (図13～21 写真図版3・9～12)

黒色土壌化層の上面である。

面の高さは、大部分でT.P.+1.9～2.0mだが、調査区北東部ではT.P.+1.7～1.8mと低くなる。遺構として、大溝1条、溝3条、高まり1か所、計5か所 (遺構番号20～23・237) を検出した。

20大溝 (写真図版3) 03 - 1 - 1区中央部に位置し、南北を主軸とする。幅8.0～11.9m、深さ1.0～1.3m。埋土 (図3) は、F灰10Y4/1シルト～細砂と黄2.5Y7/8細～粗砂がラミナを形成し、上位に堆積する。大半は粒径が粗く、黄5Y8/6粗砂～礫。溝の下半は粗砂～礫を主とするが、T.P.+1.4m以上から暗青灰5BG4/1シルト～細砂が入り、ラミナを形成する。T.P.+1.6m付近では、粒径がやや大きい。

20大溝の出土遺物は、瓦器1片、土師器1片、弥生土器1607片、石庖丁2点、砥石1点、石錐2点、削器5点、尖頭器未成品3点、サヌカイト剥片14点、木片・木製品5点、トチの実2点、計1643点と比較的多い。弥生土器が圧倒的多数 (97.9%) を占める。さらに、南西岸のヤナギの下からも、弥生土器5片とサヌカイト剥片1点が出土した。

図14 - 10017～10026にはⅡ様式後半～Ⅲ様式初頭の壺と高杯を示した。10017 (写真図版9) は有段口縁の広口壺。口径は復原で43.8cmと大きい。口縁端部が上下に拡張され、クシ描き文が縦方向、やや右に傾けて連続して施される。上端は厚く、内面のミガキは屈曲部に及ぶ。頸部外面にはクシ描き直線文が3単位確認される。Ⅲ - 1様式に位置づけられよう。なお、03 - 1 - 2区南部の第6層から出土した破片と接合しており、第6層出土のものは表面の風化が比較的進んでいる。

10018は広口壺。口縁端部は簾状文、頸部は直線文と列点文で多彩に飾られる。口縁端部は垂下せず、肥厚する。Ⅲ - 1様式 (Ⅲ様式古段階)。10019は高杯脚部。破損部に杯部との接合部が残り、端部はナデによって短く外反、上方に肥厚させる。Ⅲ - 1様式。10020 (写真図版9) は鉢あるいは高杯杯部。



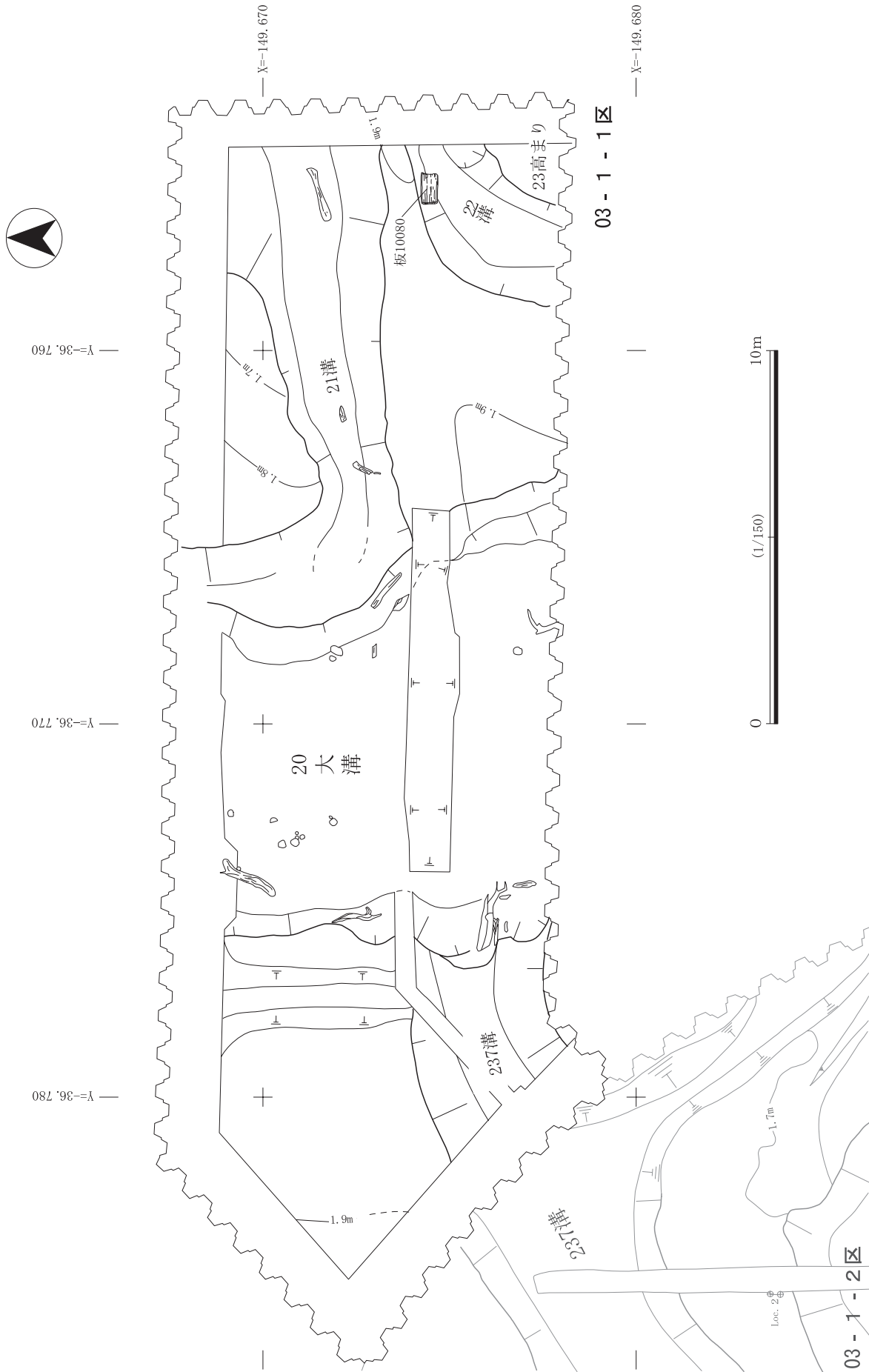


図13 03-1-1区第6面

列点文の施された口縁は内湾し、端部はナデによってやや内面側に肥厚する。Ⅲ - 1 様式（Ⅱ～Ⅲ様式古段階）。

10021～10023は壺の口縁部。10021は肥厚した口縁に大きく刻み目を入れる。内外面ともにハケ調整がよく残る。10022は口縁端部が垂下し、下端に刻み目が入られる。10023は口縁端部が肥厚し、下端に刻み目が入るが、やや古くⅡ様式に位置づけられるか。

10024（写真図版9）は細頸壺の体部である。体部上半はクシ描き直線文で飾られ、やや低い位置で張る。Ⅱ様式末～Ⅲ様式。10025（写真図版9）は壺で口縁部を欠く。頸部がしまり、体部はクシ描き直線文と波状文で飾られる。Ⅲ様式。10026（写真図版9）は無文の広口壺。端部が肥厚し、やや垂下傾向にある。頸部の屈曲がやや強くⅡ様式末～Ⅲ様式に位置づけられる。体部上半の外面調整は磨耗のため不明だが、下半はミガキが残る。

図15 - 10027～10039はⅡ様式に位置づけられる。10027は広口壺の口縁部。端部の拡張は少なく、頸部は直線的に外反する。ハケ調整で整えられ、口縁部のみナデが施される。10028は長頸の広口壺。頸部径は太く、最大径は胴部上半にある。ミガキは観察できない。Ⅱ様式前半か。10029（写真図版9）は無文の広口壺体部。外面はハケ調整の後、体部下半のみミガキが施される。体部下半、煤の付き方が内外面に対応しており、器体を傾けて液体がたまったかのような形で観察される。10030は大形の広口壺で口縁部と体部下半を欠く。頸部にはクシ描き文がめぐり、ハケ調整が残る。体部内面には炭化物が付着している。

10031（写真図版10）の壺は頸部に3条、体部下半に4条のクシ描き直線文が施され、三角列点文が直線文帯の縁を飾るようにめぐらされる。縦方向のハケ調整の後、ややまばらなミガキを施す。Ⅱ様式前半で瀬戸内系の土器か。

10032は壺の口縁端部。内外面とも横方向にハケ調整し、上端に刻み目を入れる。外面のハケは弱い。近江系か。10033は細頸壺あるいは鉢の口縁部であろう。クシ描き直線文で飾られる。

10034～10036は壺体部片。10034の文様は上部のクシ描き直線文の屈曲から、流水文と考えられる。直線文の下には三角列点文を配しており、10031と同じく瀬戸内系かと思われる。10035もクシ描き文で飾られる。上部には波状文が一部残る。流水文は直線文間をすり消し、同一工具でつないでいる。10036はクシ描き直線文と扇形文で飾られる。一部剥離して不明だが、擬似流水文を意図するものか。

10037は無頸壺の口縁部。口縁直下にクシ描き直線文、その下に波状文と扇形文を交互に配した装飾的な土器である。Ⅱ - 2～3 様式か。

10038は壺または甕の上げ底部分であろう。指押さえ成形されており、Ⅱ - 3 様式に位置づけられる。

10039（写真図版10）はやや小ぶりの甕である。外面は縦向きのハケ調整、内面はヘラ状工具によるナデが施される。内外面ともに煤の付着が著しい。胴部は張り、端部はやや肥厚しており、Ⅱ様式でも後半に位置づけられよう。

図16 - 10040～10046はⅠ様式末～Ⅱ様式初頭の広口壺の口縁部。10040～10043は口縁端部に綾杉文が飾られる。10040は上面にも刻み目がめぐり。10043は外面ハケ調整で、端部の綾杉文は木の小口などを押し当てて施されているらしく、刻み目内には繊維のような痕が観察される。

10044は口縁端部に沈線1条と刻み目、頸部に沈線9条がめぐり。10045は口縁下端に刻み目を入れ、頸部に沈線13条が密に引かれる。10046は大頸の広口壺。頸部に8条、肩部に7条以上の沈線をめぐらせている。

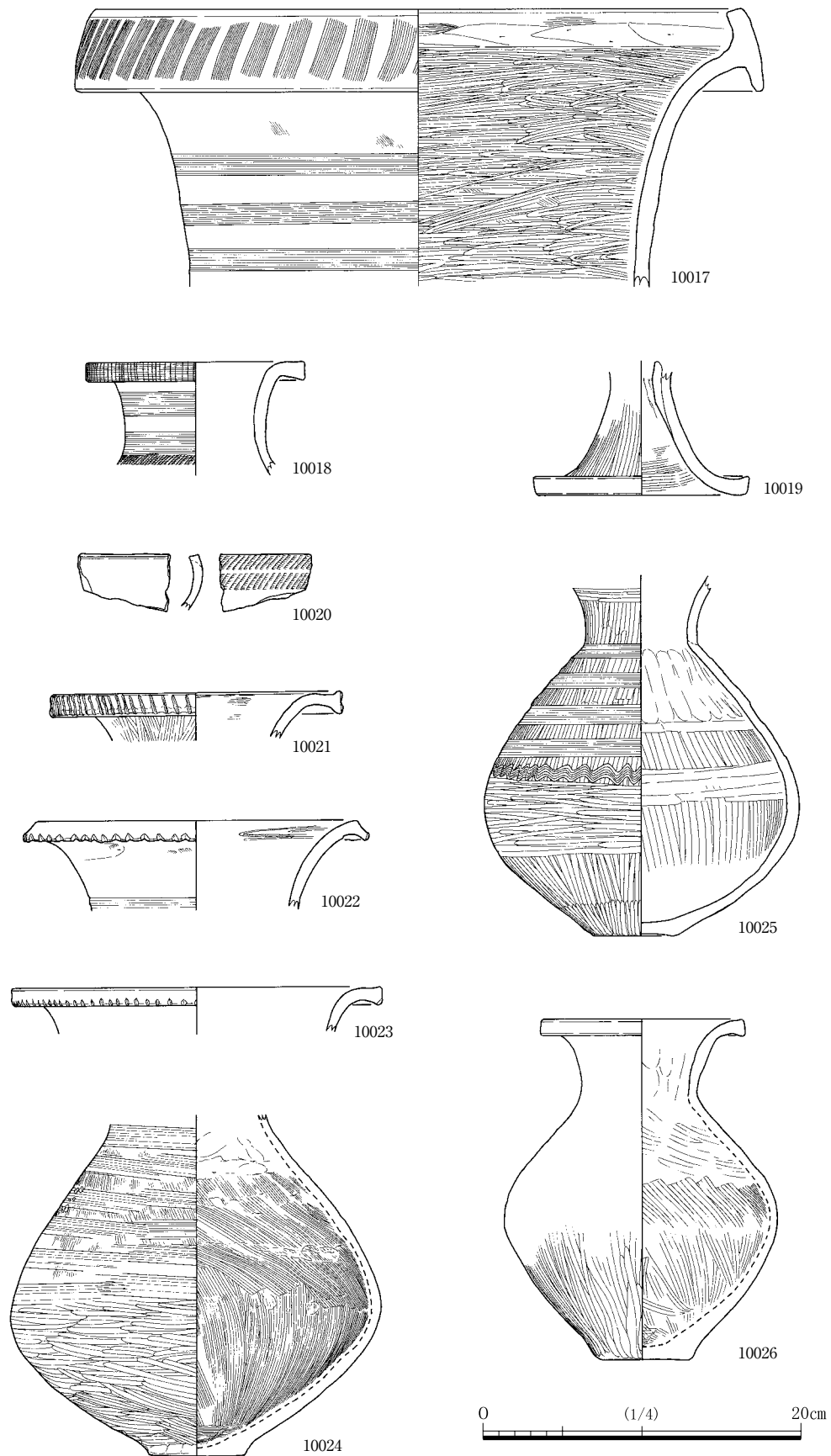


図14 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(1)

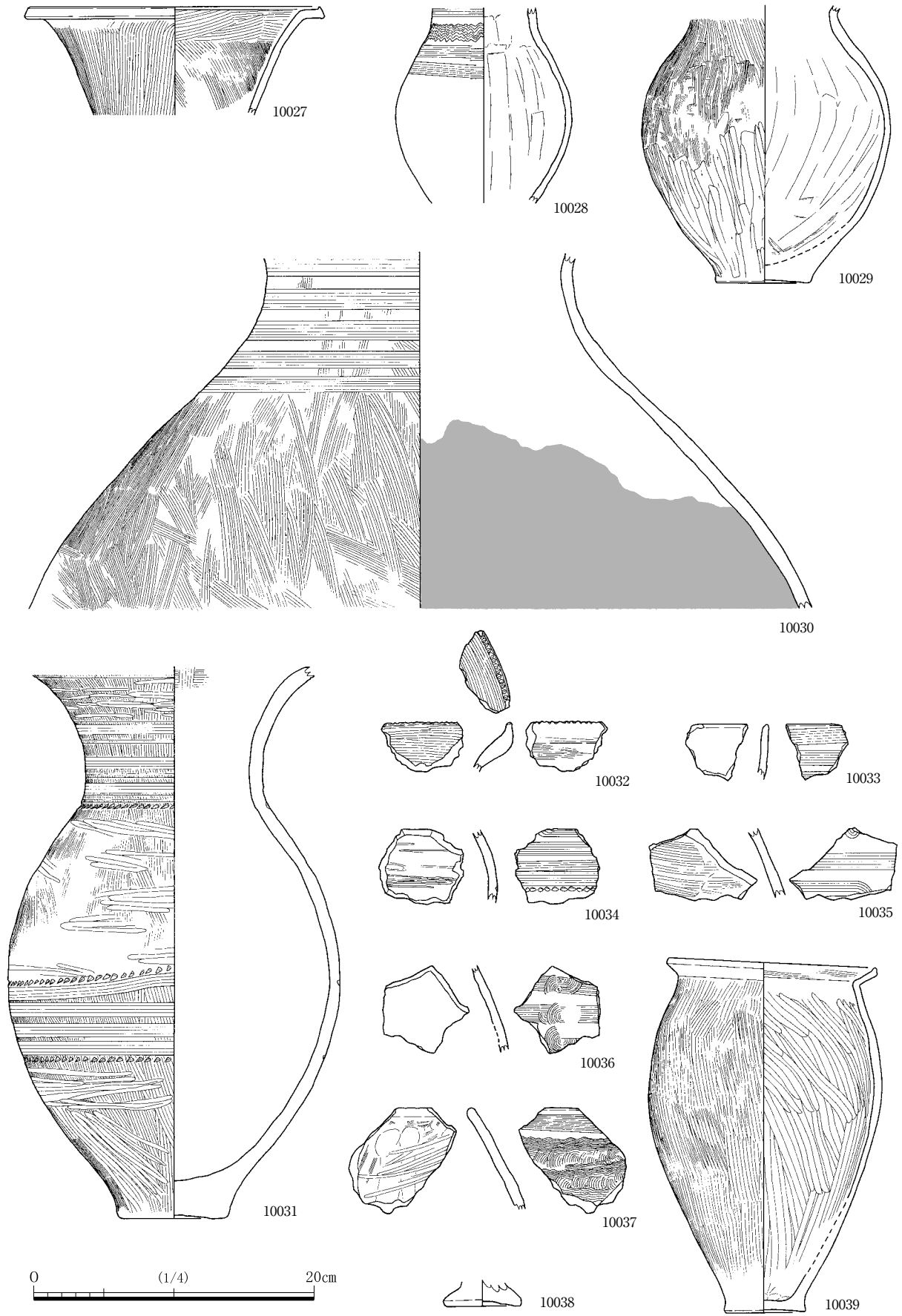


図15 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(2)

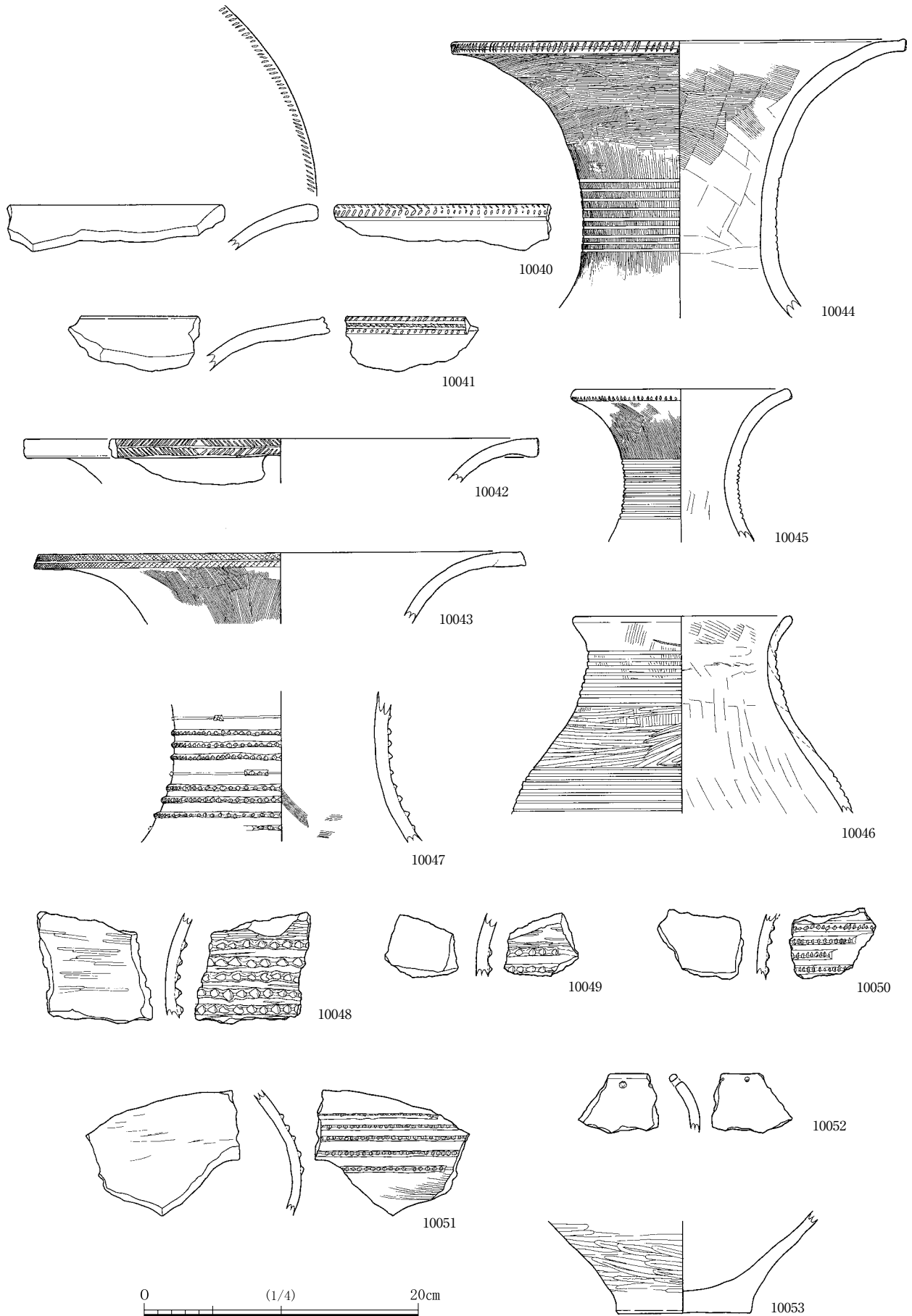


図16 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(3)

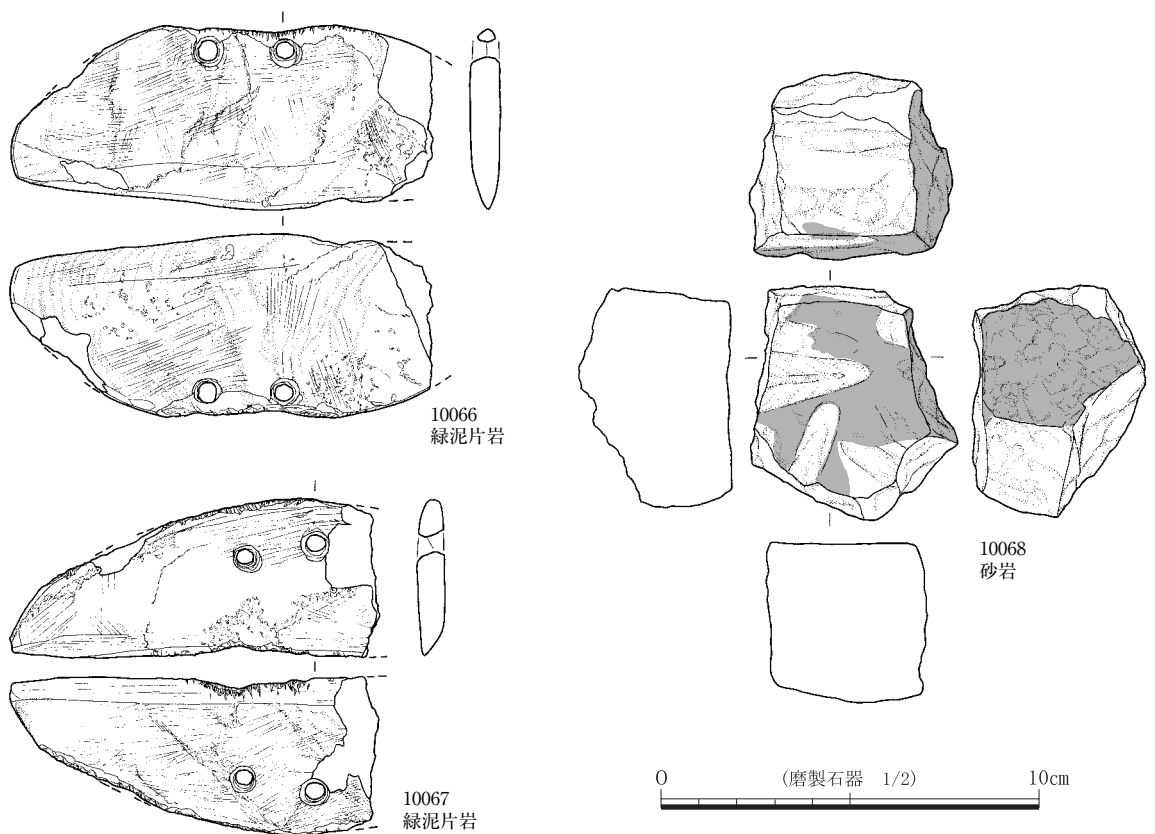
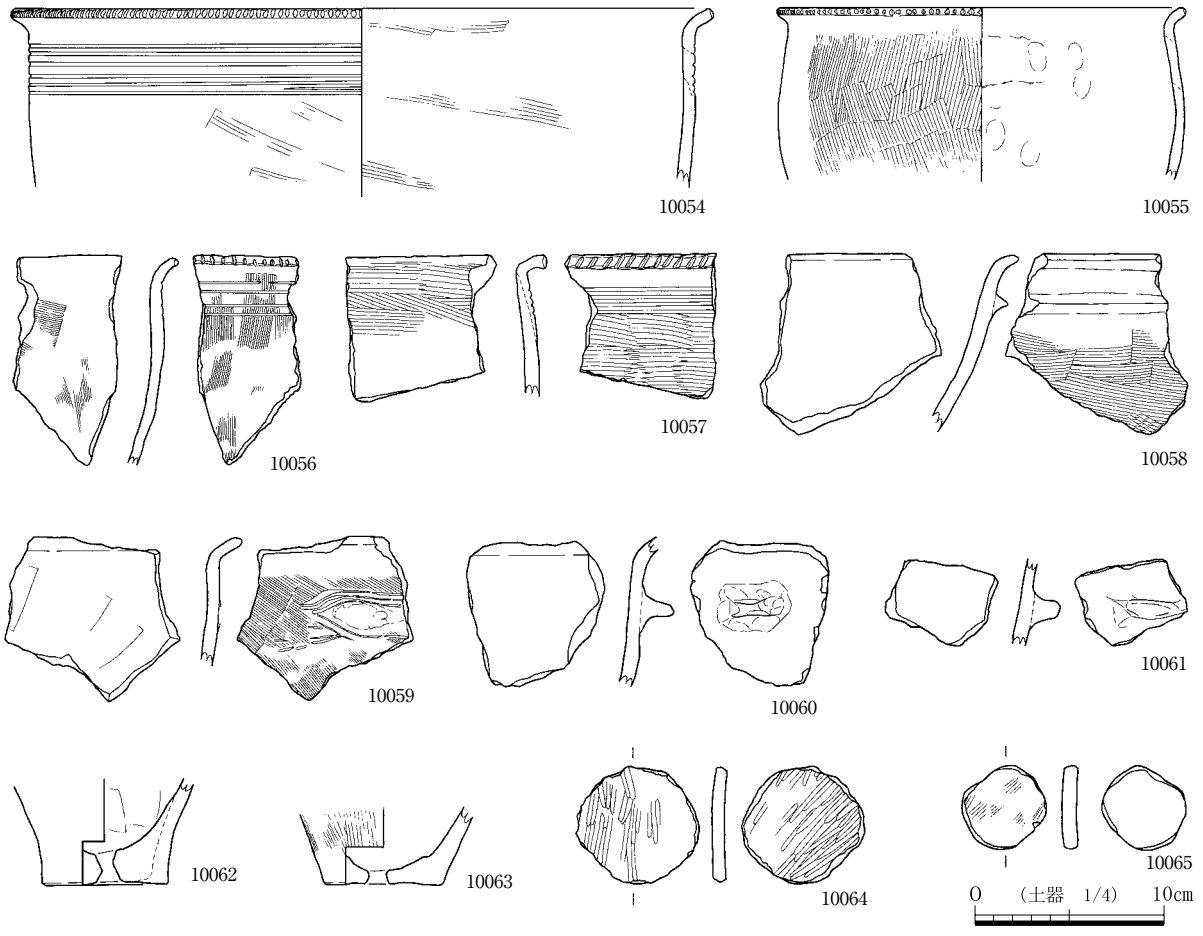


図17 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(4)

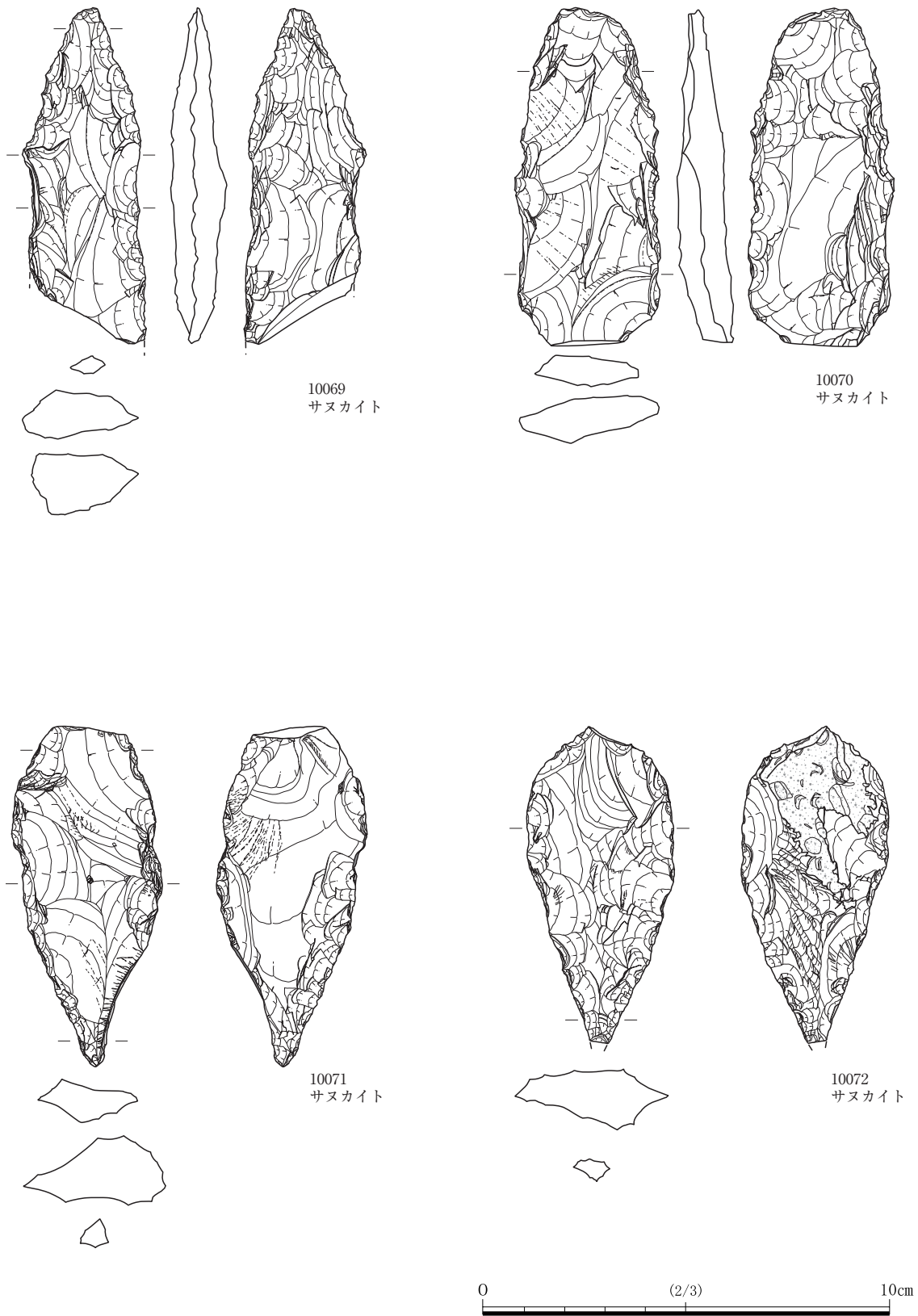


図18 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物(5)

10047～10051は壺で、貼り付け突帯のある頸部あるいは体部片。いずれもI様式末に位置づけられる。10047には9条の貼り付け突帯が残り、布目圧痕が刻まれる。一部突帯が剥離して、下の沈線が露出する。10048と10049も布目圧痕のある貼り付け突帯をめぐらす。10051は広口壺肩部、刻み目のある貼り付け突帯が5条めぐる。

10052は無頸壺の口縁部。内湾した口縁には紐孔が2つ確認できる。I様式後半。10053は壺底部。横方向のミガキが残り、体部は横にひらく。I～II様式のものだろう。

図17 - 10054～10057は甕の口縁から体部片。I様式後半～II様式前半に位置づけられる。

10054は口縁端部に刻み目、体部に6条の沈線を施す。内外面は条痕のほとんど見えないハケ調整。10055は口縁端部に刻み目のみが施され、体部はややまるみを帯びる。外面は断続的なハケ調整。I様式後半か。10056は端部に刻み目、体部に沈線4条が施される。全面に煤の付着が著しい。10057も刻み目と沈線の施される甕。内外面ともに横方向にハケ調整で、口縁の屈曲が強い。大和型との折衷様式か。I様式後半。

10058は鉢。口縁の屈曲は強く、口縁下に三角突帯をめぐらす。I様式。

10059～10061は瘤状突起の付く外反口縁の鉢でI - 3～II - 1様式に位置づけられる。10059（写真図版10）には突起を貼り付けた痕跡と、その周囲に浅い工具痕が残る。10060は瘤状突起の先が船底状に細くやや退化傾向にある。10061の突起は小さいものの、先端まで厚く作られる。

10062と10063は甕底部で焼成後穿孔が行われる。10064・10065は土器片を転用した土製円板。10064は内外面にミガキが、10065は外面にハケが残る。

10066～10068は磨製石器。10066・10067（写真図版10）ともに片刃の石庖丁。10066は背潰しが両孔まで及んでいる。10067は表面に光沢があり、煤が付着している。刃部の敲打によって挟りが入って

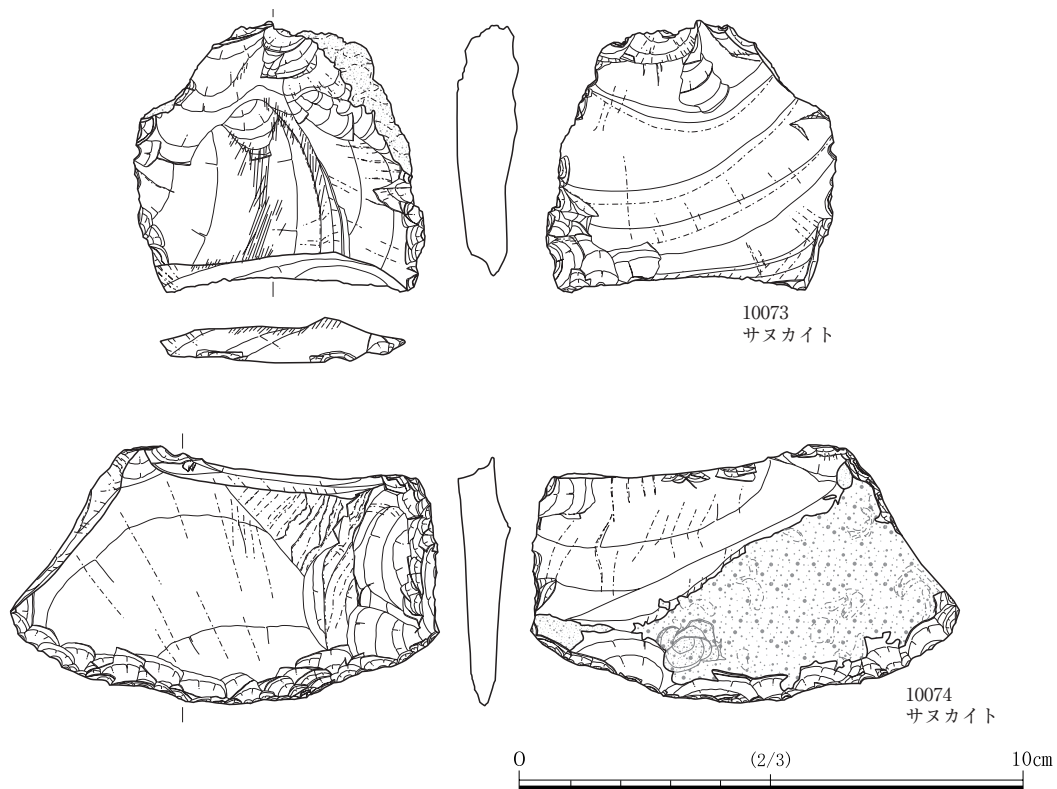


図19 03 - 1 - 1区 第6面20大溝出土遺物（6）



おり石錘として転用した可能性が指摘される。

10068は砂岩製の砥石。砥石としての使用面は主に2面と考えられ、正面の広い面にごく浅い筋状の凹みが横・斜め方向に観察される。上側の狭い面には横方向の凹みが2条走る。下面も丸みを帯び、一部分が利用されていたのだろう。全体が被熱して赤変するが、自然面あるいは破損面も赤変していることから、二次的な被熱があったと考えられる。しかし図示したように、黒変は正面の凹み部分には及んでいない。この面の断面形は曲線を描き、緻密な岩質であることから、鑄型として作られ砥石として再利用された可能性も指摘される。なお、右側の自然面も一面が黒変する。

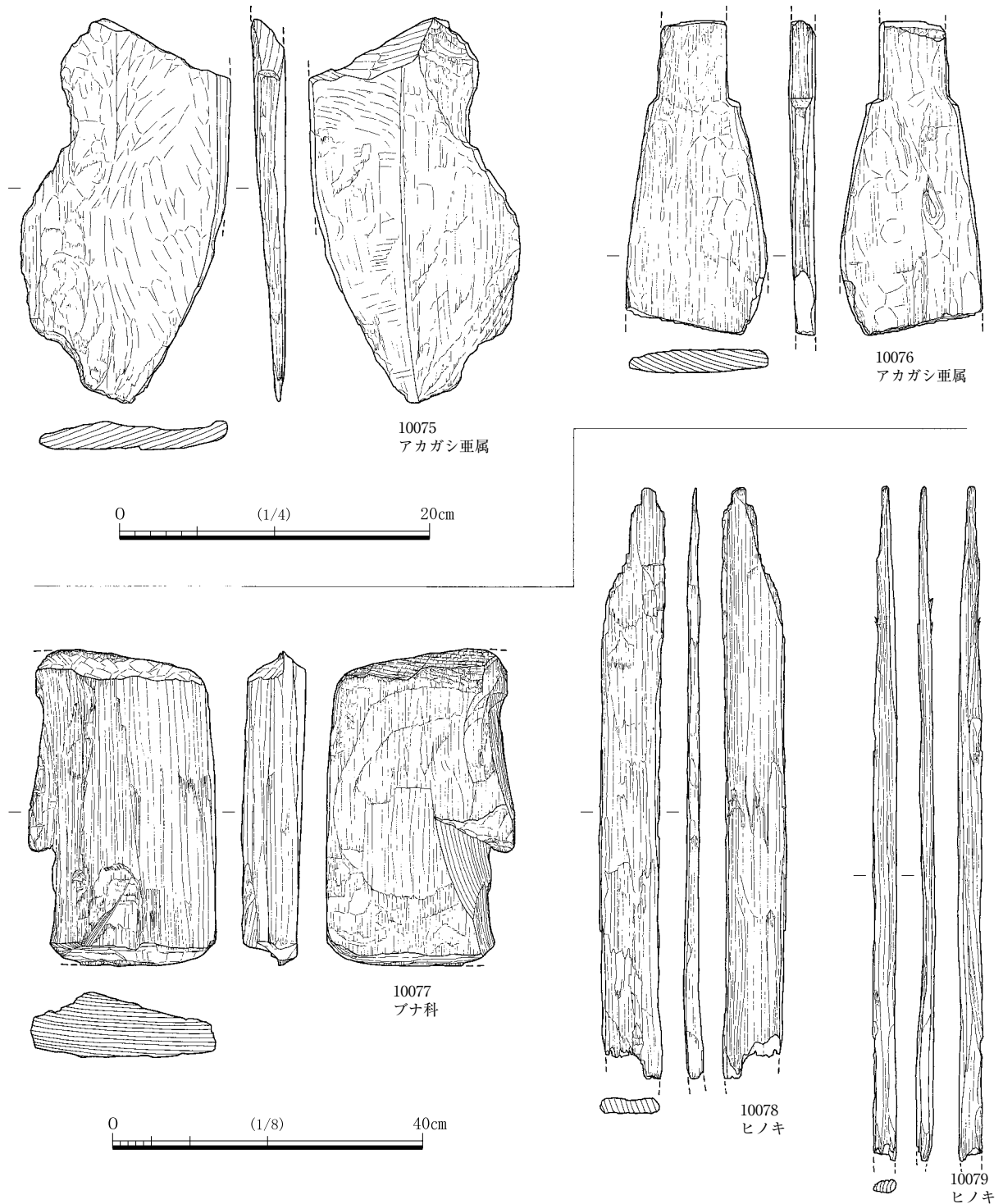


図20 03-1-1区 第6面20大溝出土遺物（7）

図18 - 10069～10072（写真図版11）はサヌカイト製打製石器。10069は大形尖頭器の未成品で、肩部の瘤が取りきれしていない。基部を欠損するが、欠損して得られた端部を再調整する。錐として再利用したものか。10070も尖頭器の未成品。欠損はなく、未成品であると考えられる。10071は石錐か。錐部の作り出しが不明瞭で、削器の可能性もある。10072は涙滴形の石錐。錐部先端を欠く。

図19 - 10073・10074（写真図版11）は削器。10073は刃部・表面ともに光沢があり、縦方向の研磨痕が観察される。10074は原礫面が大きく残っている。

図20 - 10075～10079は木器。10075は鋤の身か。前面中央がややふくらみ、後面は平坦、横断面形は両端部がやや立ち上がるものとなろう。ふくらんだ部分を中軸と想定すれば、身幅は約16cmに復原される。横断面形から櫛の可能性は否定される。アカガシ亜属の柾目材。10076は農具（鋤・鍬）の未成品と思われる。段の明瞭なややなで肩の肩部を作り、刃部と軸部の幅はあまり変わらない。刃部には加工痕が見られるが、厚みは均一である。このままの形状であれば、曲柄平鍬あるいは曲柄鋤、一本鋤に近い。樹種はアカガシ亜属、木取りは柾目材であり、農具として適している。

10077は礎板あるいは鋤・鍬の未成品か。長さ41.0cm、残存幅24.0cm、片面が山形に盛り上がる板材である。木口には両面から行われた切断の痕がはっきり残る。平坦な一面は表面が煤け、その中央が不整な楕円形に薄く剥離している。この剥離痕から礎板の可能性を考えたが、断面形からは安定性に欠ける。鍬や鋤といった農具にも加工可能であるが、ブナ科の板目材で適していない。

10078・10079は用途不明品。残存する端辺に二段の突起が作り出される。5cmほどの突起部はやや厚みを減らし、加工痕か擦痕が観察できるため、組み合わせて使う部材の可能性はある。柄穴はないため箱にはならず、2段の突起と厚みが1.1cmと薄いことから大足の可能性も低い。10079は断面が楕円形に近い棒状の部材。先端が細くなり、その反対側には約7cmの平坦面が削り出される。いずれもヒノキの柾目材。

21溝と03 - 1 - 2区から続く237溝は一連の溝で、20大溝に切られており、それより古い。

21溝 調査区東部に位置し、東西を主軸とする。幅2m以上で、調査区東端でさらに北に広がる。深さは14cm程度と、20大溝に比べ著しく浅い。埋土（図3）は、E1はオリーブ灰2.5GY5/1シルト～細砂と黄2.5Y7/8細～粗砂がラミナをなし、下方では植物遺体薄層がたまる。西に続く部分E1'では下方細粒化して灰10Y4/1シルトが堆積する。E2はオリーブ黒5Y2/2シルト～細砂で肩口に細砂、底に植物遺体が目立つ。出土遺物は、弥生土器4片（うちⅡ様式1片）、サヌカイト剥片1点、計5点のみ。

237溝 21溝の西への延長上にある。後述する03 - 1 - 2区237溝および03 - 1 - 3区411溝と同一の溝と考えられる。当調査区での幅は3.2～3.5m、深さ41cm。埋土は5層に分かれる（図3）。G1は黒7.5Y2/1シルト～細砂G2～G4は溝廃絶後の流入土であろう。G2はオリーブ灰5GY5/1シルト～細砂。G3は緑灰7.5GY5/1シルト・黄灰2.5Y4/1粗砂の攪拌。G4は、緑灰7.5GY5/1シルトで下方粗粒化してG5緑灰7.5GY5/1シルト～細砂となる。

22溝（写真図版3） 調査区南東部に位置し、南西から北東に屈曲する。幅2.0～2.8m、溝底からの高さは、北西側が17～30cm。南東側では34～40cmと、南東側が高い。埋土（図3）D1は、黄2.5Y7/8細～粗砂を主体とし、灰10Y4/1シルトが混じる。D2は、オリーブ灰2.5GY5/1シルト～細砂と黄2.5Y7/8細～粗砂とがよく攪拌されている。西にオーバーハングするD3は、黄2.5Y7/8細～粗砂を主体とし、灰10Y4/1シルトが混じる。D4オリーブ灰2.5GY5/1シルト～細砂と黄2.5Y7/8細～粗砂で攪拌が弱く、上位では黄色細砂が多い。下位ではラミナが見られる。D5オリーブ黒7.5Y3/1シルトで、炭化物が上

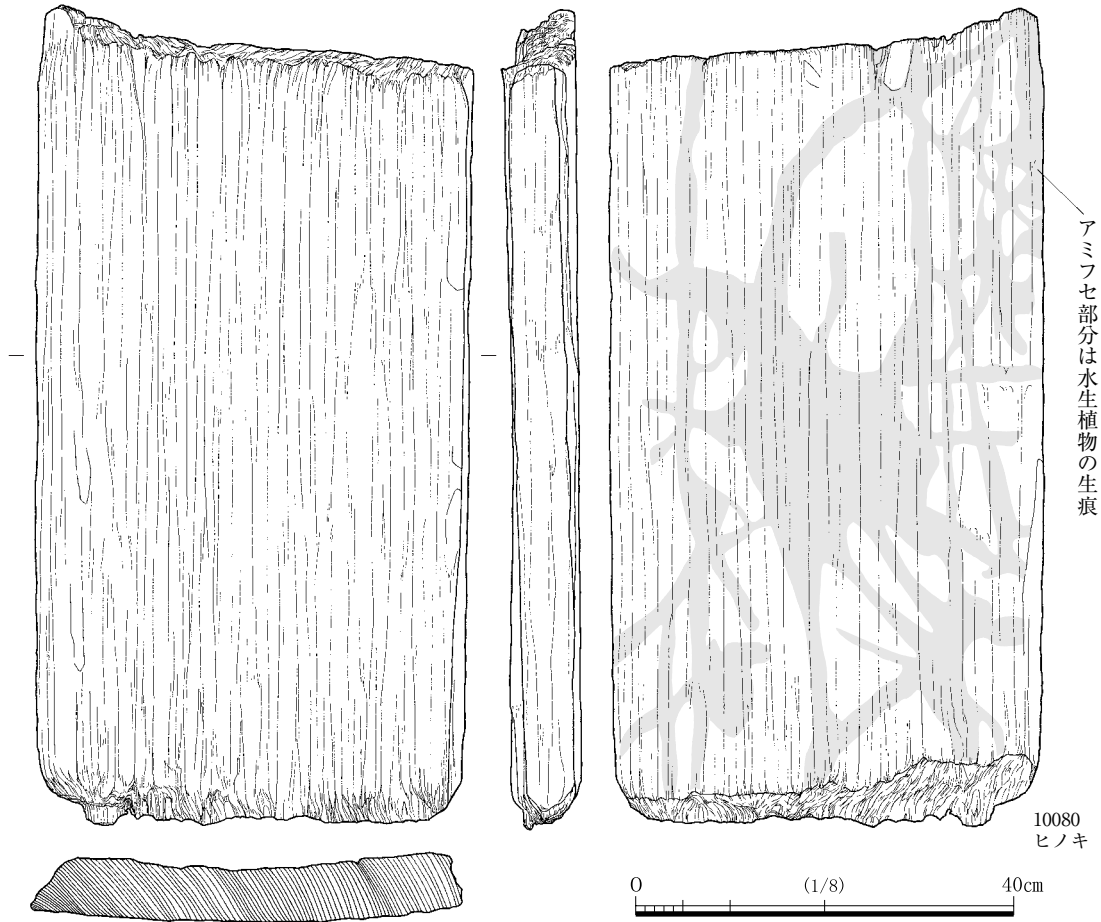


図21 03-1-1区 第6面22溝出土木器

層との層界に薄層をなす。

弥生土器27片（うちⅠ様式2片、Ⅰ～Ⅱ様式1片）、転用土製円板1点、板1枚、サヌカイト剥片2点、計31点出土した。弥生土器のうち、Ⅰ様式としたものは沈線の施された壺と甕の小片が各1片、Ⅰ～Ⅱ様式としたものは無文の甕の口縁部片である。その他は、中期前半と思われる甕の体部片が多い。

図21-10080（写真図版3・12）は、溝底から出土した板。長辺83.0cm、短辺45.8cm、厚み5～6cmを測る長大なものである。表面、小口とも風化して明らかな加工痕などは観察できない。ヒノキの大径材を柁目取りしている。年輪年代測定によって残存最外年輪の年代は紀元前235年と確定した（第9章 光谷拓実「山賀遺跡出土木材の年輪年代」参照）。

この22溝の南東側、溝で囲まれた高い部分の盛土層を23高まりと名づけ、方形周溝墓の墳丘であると想定し精査した。しかし、埋葬主体等は見いだせなかった。この高まりからは、土師器1片、弥生土器16片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式1片）、計17片が出土した。

### (13) 03-1-1区第6層の遺物（図22・写真図版11）

弥生土器141片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式2片、Ⅱ様式9片、Ⅲ様式1点）、砥石1点、板1点、計143点出土した。

図22-10081（写真図版11）は弥生土器鉢。口縁内湾して、端部はヨコナデによって外上方にのび、刻み目を施す。Ⅲ様式か。外面は摩滅著しく、煤けている。

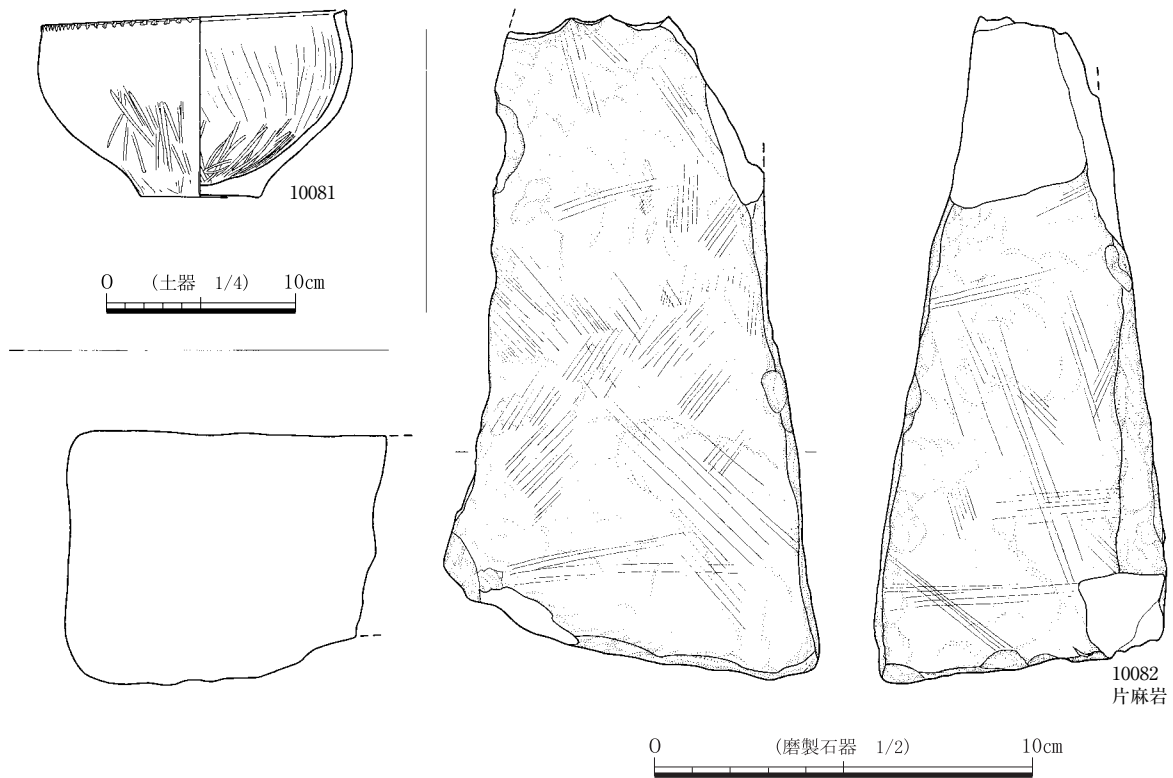


図22 03 - 1 - 1区 第6層出土遺物

10082（写真図版11）は粗粒の砥石。長軸16.6cm、短軸・厚みともに7.7cmを測る。隣接する2面に、多方向の擦痕が観察できる。

(14) 03 - 1 - 1区第7面の遺構と遺物（図23・写真図版3）

第6層の黒色土壌化層を除去した面である。

面の高さは、調査区東部でT.P.+1.6~1.8m、西部ではおよそT.P.+1.9mと、西が高い傾向にある。溝1条と溝状落ち込み1条（遺構番号24・264）を検出した。

264溝 第6面20大溝に切られているが、03 - 1 - 2区から続く一連の溝と考えられる。当調査区での幅は3.0m以上で、調査区北東部で北に広がる。深さ42cm。埋土（図3）はG6オリーブ灰2.5GY5/1シルト。肩口から細砂ラミナが見られ、植物遺体を含む。

24溝状落ち込み 調査区南東部、第6面22溝の下層に位置し、同様に南西から北東に屈曲する。幅2.1~2.6m、深さは溝の北西側は13cmだが、南東側ではさらに数cm深くなる。埋土（図3）は、D6灰10Y4/1シルト~細粒砂と黄2.5Y7/8で細粒砂~粗粒砂がラミナを形成する。

この24溝状落ち込みの南東側も、第6面同様に溝の北西側に比べ20~30cm高くなっていたので、方形周溝墓の墳丘の可能性を考え精査したが、その痕跡は見いだせなかった。

(15) 03 - 1 - 1区第7層の遺物

弥生土器が330片（うちI様式15片、I~II様式5片、II様式14片）、サヌカイト剥片2点、計332点出土した。

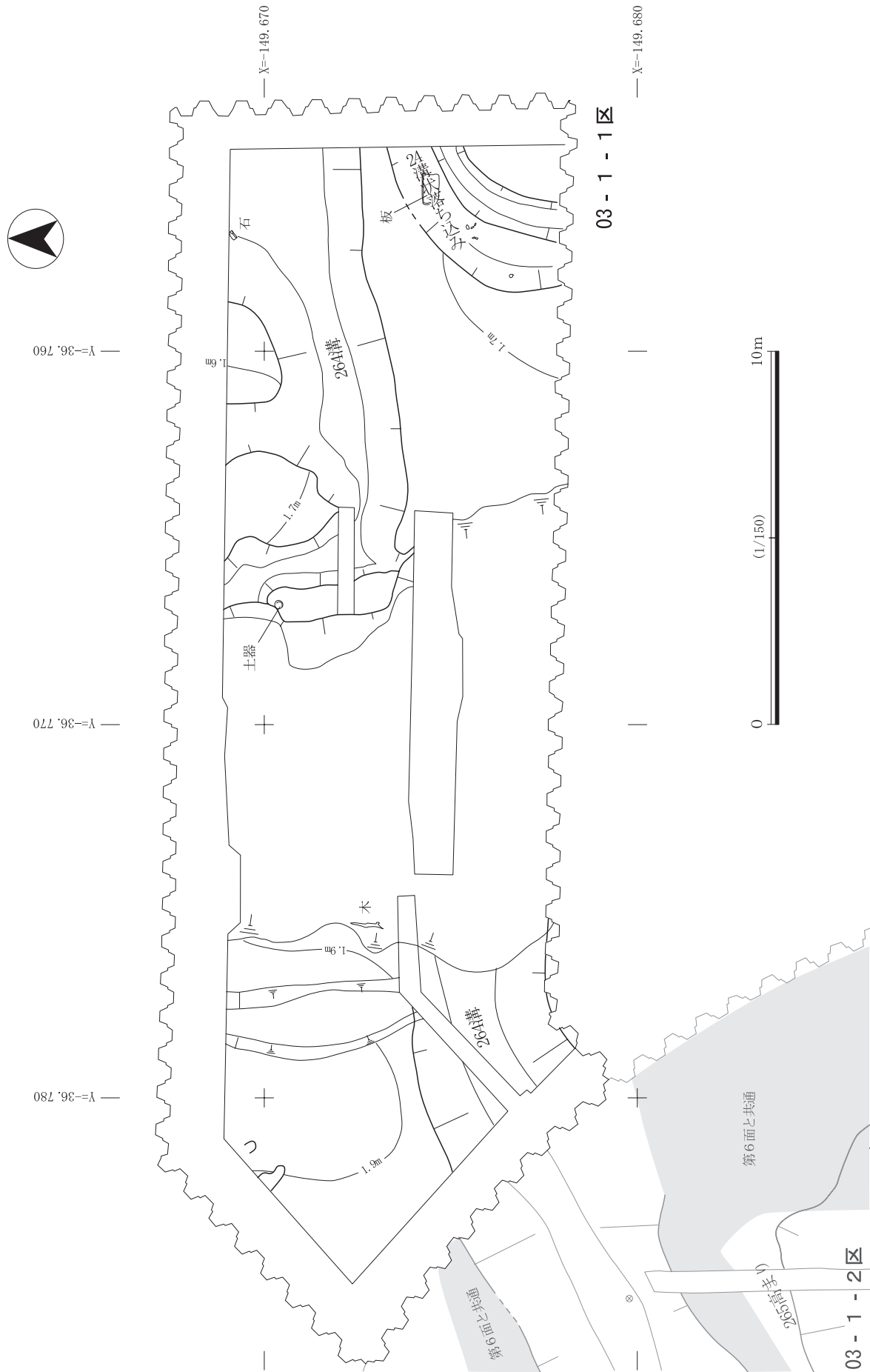


図23 03-1-1区 第7面

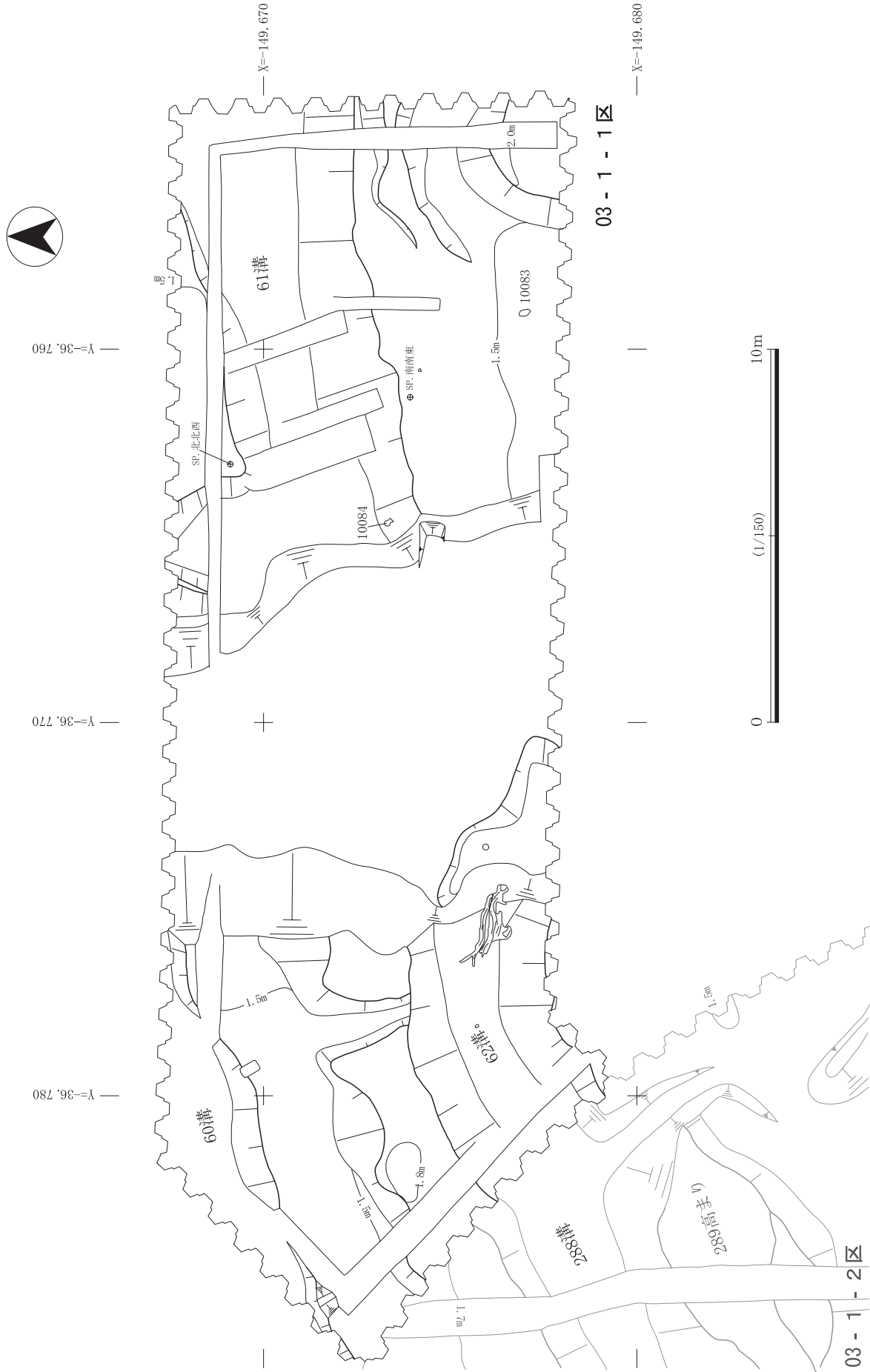
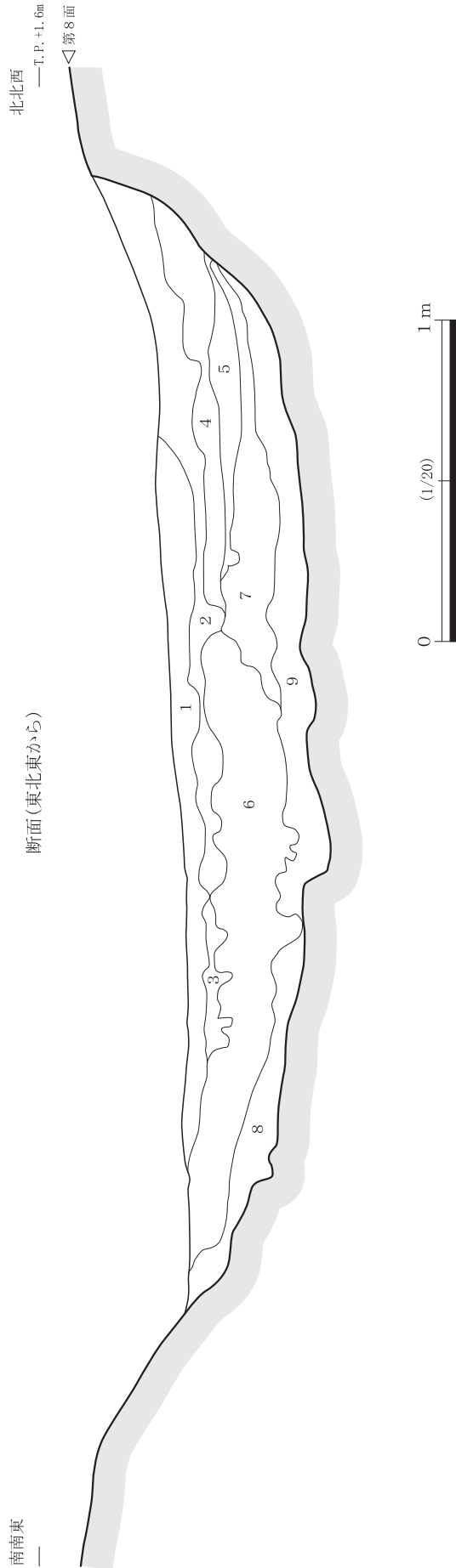


図24 03-1-1-1区 第8面



- 1 オリープ黒5Y2/2シルト、細砂を多く含む、植物遺体をわずかに含む
- 2 黄5Y7/6細砂、灰7.5Y5/1細砂、ラミナ顕著、炭化物、植物遺体をわずかに含む
- 3 暗オリープ7.5GY4/1極細砂、灰7.5Y5/1細砂、ラミナはやや認められる、炭化物をごくわずかに含む
- 4 オリープ黒10Y3/1シルト、粘質ごくわずかに帯びる、ややシマリ有り、炭化物をごくわずかに含む
- 5 オリープ黒5Y3/1シルト、粘質わずかに帯びる、ややシマリ有り、2と同色の細砂を多く含む、ラミナ顕著
- 6 オリープ黒10Y3/1シルト粘性わずかに帯びる、シマリやや無し、灰7.5Y5/1細砂を多く含む(攪拌)
- 7 直径1cm以下の粗砂をやや含む、植物遺体をわずかに含む
- 8 暗オリープ2.5GY3/1シルト、粘性帯びる、シマリ有り、灰7.5Y5/1細砂を多く含む
- 9 オリープ黒7.5Y3/1シルト、粘性帯びる、シマリ有り、直径0.2cm以下の粗砂、灰7.5Y5/1細砂をわずかに含む、植物遺体ごくわずかに含む
- 9 オリープ黒10Y3/1極細砂、緑灰7.5GY5/1細砂をやや多く含む、炭化物・植物遺体をやや含む

図25 03-1-1区第8面61溝断面

(16) 03 - 1 - 1区第8面の遺構と遺物 (図24~26 写真図版4・12)

黒色土層の上面である。

面の高さは大部分でT.P.+1.3~1.6mだが、南東隅はT.P.+2.0mと高くなる。溝を3条(遺構番号60~62)調査した。

調査区南東部の第8面上から無文の広口壺(図26-10083 写真図版4・12)が出土した。口縁端部はわずかに面をもち、長頸化の傾向にある。Ⅱ様式前半であろう。

60溝 調査区北西部に位置する。03-1-2区第8面283溝と続く一連の溝と考えられる。調査区の北辺に近いので、南肩のみを検出した。埋土は、H1にぶい黄褐10YR5/4粗砂~細砂。上半は粒径粗く、ラミナが顕著である。弥生土器16片(うちⅠ~Ⅱ様式1片、Ⅱ様式3片)出土した。

61溝と62溝は、第6面20大溝に切られているが、03-1-2区第8面288溝から続く一連の溝と考えられる。

61溝 調査区北東部に位置する。東北東-西南西を主軸方位とする部分の幅は4.3~4.6m。調査区北辺中央部で北にも延びる。深さは89cm。埋土は6層に分かれる(図25・写真図版4)。出土遺物は、須恵器1片、弥生土器89片(うちⅠ様式3片、Ⅰ~Ⅱ様式4片、Ⅱ様式5片)、削器2点、サヌカイト剥片1点、モモ核2点、計95点である。

図26-10084(写真図版4・12)は長頸の広口壺。口縁部と底部を破損する。頸部径は太く、クシ描き直線文9条で飾られるが、煤のため調整不明瞭。外面に籠目様の線がわずかに観察できたが、薄く格

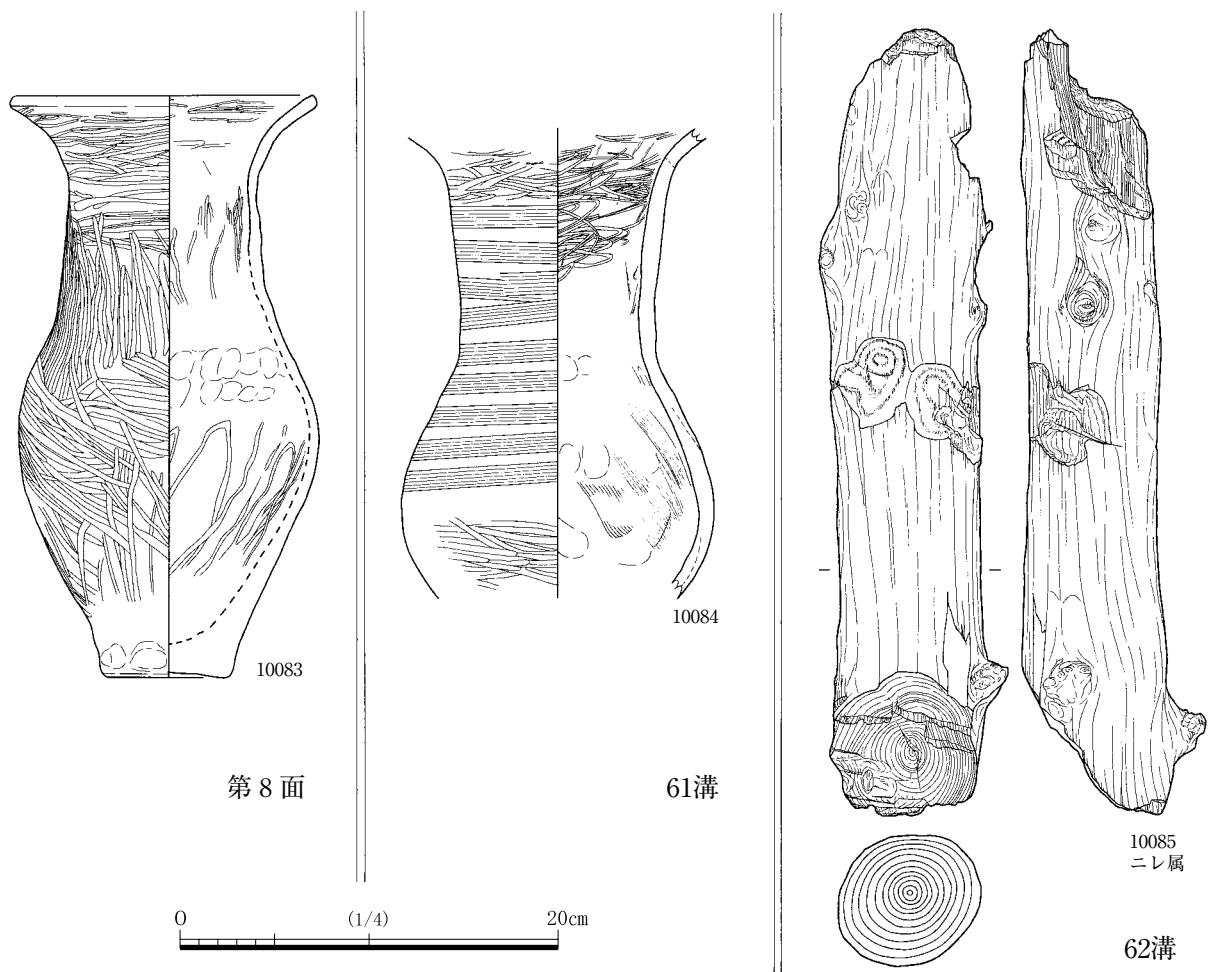


図26 03 - 1 - 1区第8面、第8面61・62溝出土遺物



子状にならないことから植物遺体の痕跡と判断した。Ⅱ様式前半に位置づけられる。

62溝 調査区南西部にあり、03-1-2区第8面288溝につながる。主軸方位は、61溝同様に東北東-西南西。幅3.6~4.2m、深さ81cm。埋土は、G7暗オリーブ灰5GY5/1シルト。植物薄層がラミナを形成し、下半に炭化物が堆積する。弥生土器25片（うちⅠ様式2片、Ⅰ~Ⅱ様式3片、Ⅱ様式1片）と木杭1点が出土した。

図26-10085は直径7.7~8.9cmの杭である。枝を払った程度のほぼ原木のままの材の両端を斜めに切断する。長軸やや中央にも表面を削ったような加工痕が観察される。切断面では加工痕が段差になって残る。ニレ属である。

(17) 03-1-1区第8層の遺物 (図27・写真図版13)

第8層掘削時に、弥生土器381片、サヌカイト剥片2点、木製平鋏1点、計384点が出土した。

図27-10086は壺底部。Ⅰ様式後半~Ⅱ様式前半。体部が張るため、やや古いか。10087(写真図版13) 広口壺体部を再利用して無頸壺としている。体部上半はヘラ描き沈線、三角列点文、刻み目のある貼り付け突帯で飾られる。瀬戸内系か。Ⅰ様式新段階。10088は甕。肩はあまり張らず、ハケ調整が左上がりに断続的に行われる。Ⅰ様式後半~Ⅱ様式前半。

10089は厚み1cm前後の板材。長軸22.3cm、短軸15.8cmを測る。大きさと木取りから、鋤・鋏の未成品の可能性もあるが、薄すぎるため積極的に評価する根拠に欠ける。コウヤマキの柁目材。

第8層以下の堆積状況が複雑だったので、各所にサブトレンチを設定した。

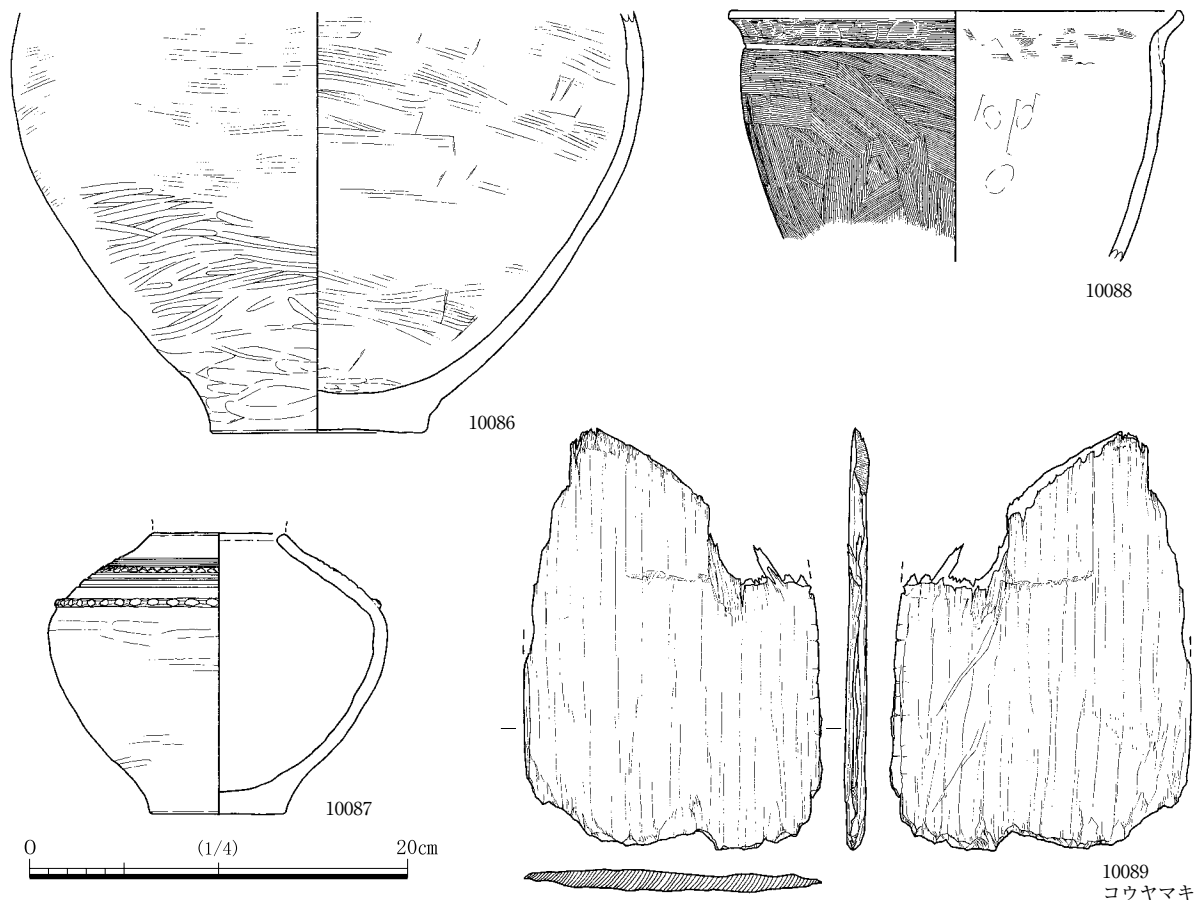


図27 03-1-1区第8層出土遺物

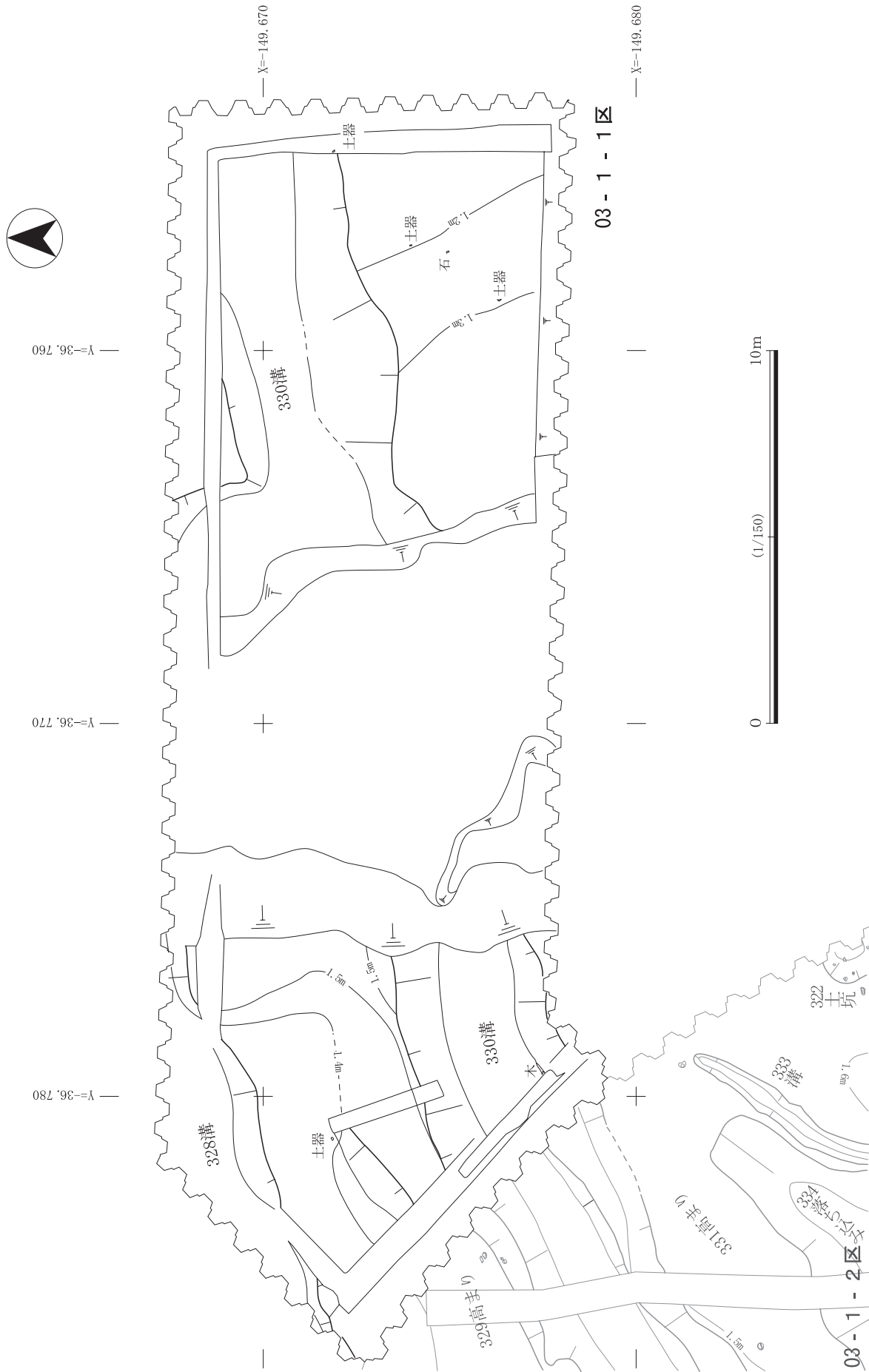


図28 03-1-1区第9面

第8～11層相当層では、弥生土器18片が出土した。

第8～12層相当層では、弥生土器4片が出土した。

第8～13層相当層からは、土師器11片（混入か）、弥生土器253片、サヌカイト剥片3点、計267点出土した。

#### (18) 03-1-1区第9面の遺構と遺物（図28・写真図版5）

第8層の粗砂混じり黒色土を除去した面であるが、第9面も黒色の盛土層を基盤とする。

面の高さは、調査区東部でT.P.+1.1～1.4m、西部ではおよそT.P.+1.3～1.5mと、西が高い傾向にある。遺構として、03-1-2区から続く溝を2条（遺構番号328・330）検出した。

**328溝** 調査区北西部に位置する。03-1-2区から続く一連の溝である。第8面60溝の下層にあたる。調査区の北辺に近いので、南肩のみを検出した。埋土（図3）は、H2オリーブ黒7.5Y3/1粘土。中央部は細砂ラミナが顕著である。暗オリーブ灰2.5GY4/1粘土ブロック（直径～1.0cm）をやや含む。H3灰10Y4/1シルト。粗砂を多く含みラミナは弱い。

**330溝** 第6面20大溝に切られているが、03-1-2区から続く一連の溝で、調査区南西部から北東部に貫通する。第8面61溝・62溝の下層にあたる。主軸方位は東北東-西南西。幅4.3～4.6m、深さは89cm。埋土は4層に分かれる（図3）。E9灰7.5Y5/1シルト・オリーブ黄5Y6/4細～粗砂が粗いラミナを形成する。E10は明黄褐2.5Y6/6細～粗砂。中央部で下層を削る。E11黒7.5Y2・1粘質シルト。灰7.5Y5/1細砂、植物遺体をやや含む。E12灰7.5Y4/1粗砂混じりシルト。粒径は粗い。

#### (19) 03-1-1区第9層の遺物（図29）

弥生土器323片（うちI様式34片）、石庖丁1点、サヌカイト剥片1点、計325点出土した。

図29-10090は瀬戸内系の甕。逆「L」字状の口縁をもち、内側にも突帯がのびる。10091は甕体部片。ヘラ描き直線文と平行斜線文が残る。いずれもI様式後半に位置づけられる。

10092は片岩系の石庖丁。片刃で先端部のみの破片。

#### (20) 03-1-1区第10面の遺構と遺物（図30～33 写真図版5）

黒っぽい盛土層の上面である。

面の高さはT.P.+0.9～1.5mで、西に向かって高まる。溝3条、木棺状遺構1基、土坑1基、杭群1か所、計6か所の遺構（番号126～130・434・1502）を調査した。

**126溝** 調査区南東部に位置する。主軸方位は北西-南東。長さ3m以上、幅0.4～0.9m、深さ33cm。埋土は、第9層と同じ黒10Y2/1粘質シルト。I様式の弥生土器壺1片のみ出土した。

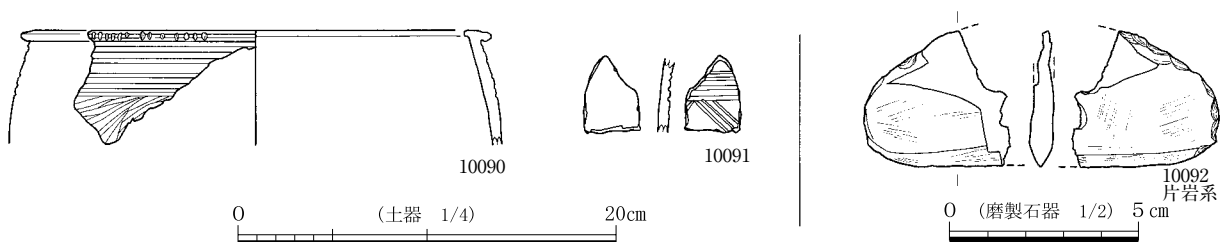


図29 03-1-1区第9層出土遺物

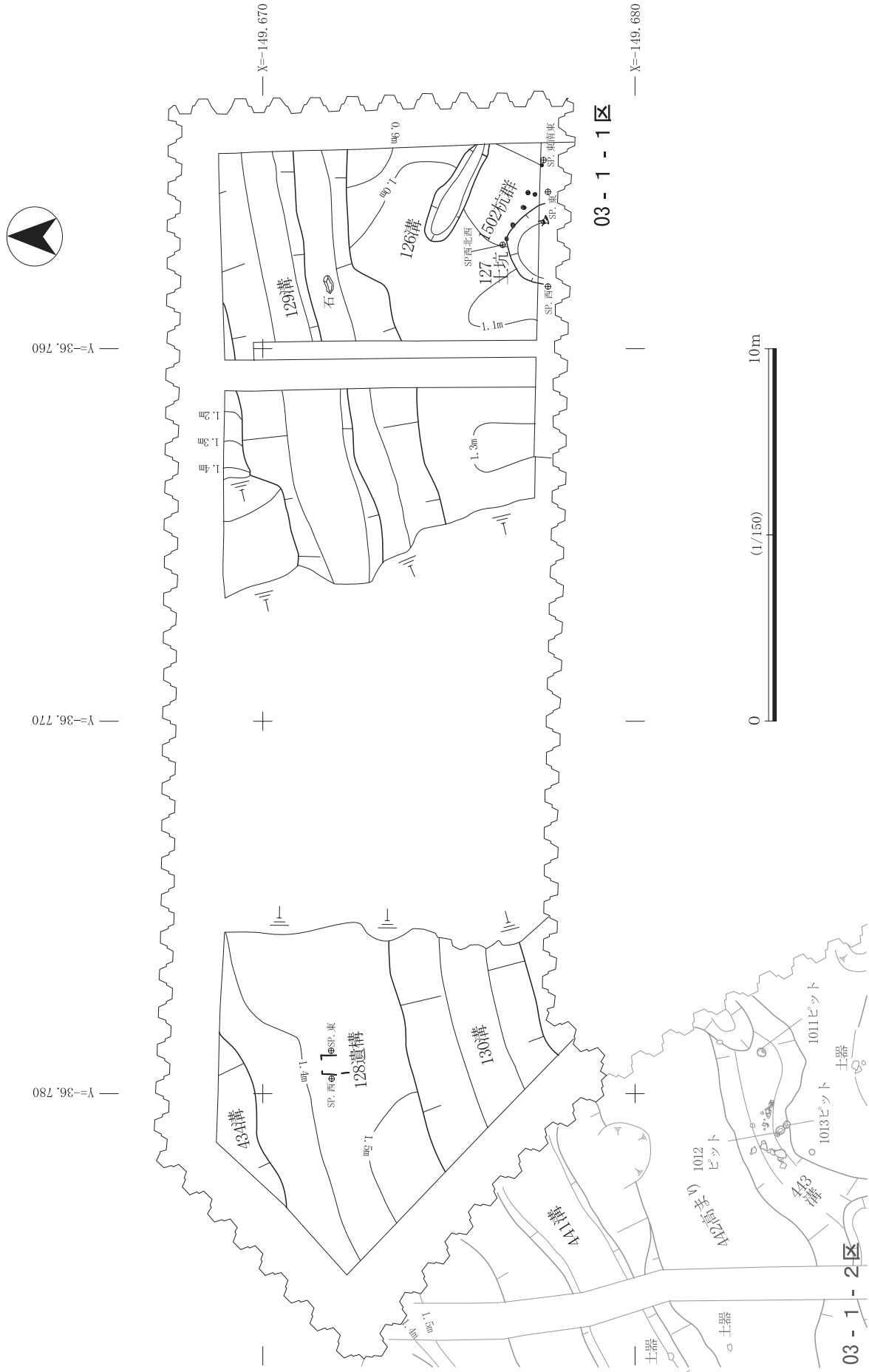


図30 03-1-1-1区第10面

129溝と130溝は、第6面20大溝に切られているが、03-1-2区第10面441溝から続く一連の溝と考えられる。

**129溝** 調査区北東部に位置する。東北東-西南西を主軸方位とする。幅3.7~4.8m、深さ97cm。埋土は4層に分かれる(図3)。E13オリーブ黒10Y3/1細砂混じりシルトでラミナが見られる。E14灰5Y6/1細砂。粗砂がやや混じり、ラミナが顕著。E15灰7.5Y4/1粗砂混じりシルト。粘土ブロック、植物遺体を多く、炭化物もやや多く含み、木片も散見される。E16は灰5Y6/1粗砂混じりシルト。上層E15とほぼ同質だが、粘土ブロック、炭化物が少なく、ラミナも弱い。弥生土器122片(I様式を含む)とサヌカイト剥片1点、計123点出土した。

図32-10095は壺の体部片。布目圧痕のある貼り付け突帯を4条以上もつ。I-3~4様式。

**130溝** 調査区南西部にあり、03-1-2区441溝につながる。主軸方位は、129溝同様に東北東-西南西。幅3.6~3.8m、深さ72cm。

埋土(図3)はG8~G20。G8暗オリーブ灰5GY4/1シルトで炭化物を含み、北岸上位では粗砂が混じる。G9暗オリーブ灰7.5GY4/1細砂混じりシルト。62溝の南肩部の上半では、G10暗緑灰7.5GY3/1粘質シルトと黄5Y8/6細砂が攪拌され、暗オリーブ灰5GY3/1ブロックを含む。下半にはG11灰



図31 03-1-1区 第10面検出128遺構

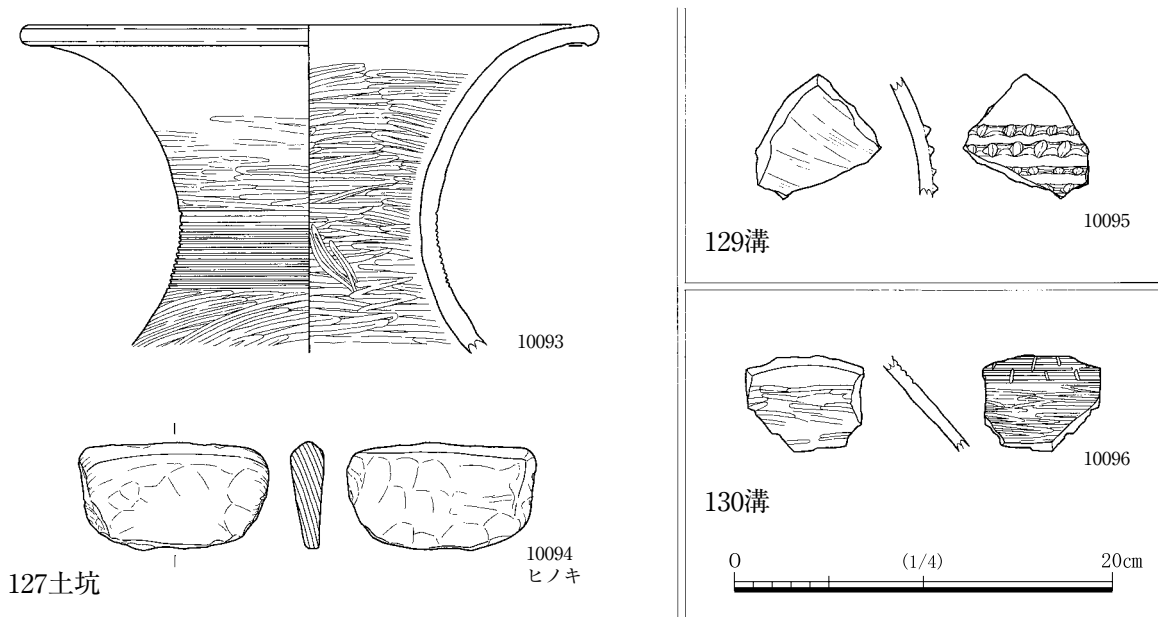


図32 03 - 1 - 1区 第10面127土坑、129・130溝出土遺物

7.5GY3/1シルトがたまる。G12オリーブ黒10Y3/1シルトで、炭化物を多く含み、ラミナが攪拌される。G13暗オリーブ灰5GY5/1シルト。細砂ブロックが混じる。G14暗オリーブ灰5GY4/1粗砂混じりシルトでG16に貫入する。G15暗オリーブ灰5GY4/1粗砂混じりシルトで炭化物を含む。G16暗オリーブ灰5GY4/1粘質シルトで横方向のラミナが見られる。G17暗オリーブ灰5GY5/1シルトで細砂ラミナが形成される。G18オリーブ黒10Y3/1粗砂混じりシルト。植物遺体を含む。最下層G19暗緑灰5GY3/1シルト。細砂ラミナ・黒色ブロック（炭化物か）と攪拌。南肩口へオーバーフローして細砂ラミナの見られるオリーブ灰5GY5/1粘質シルトとなる。上半に細砂が多く、炭化物を少量含む。G20暗オリーブ灰5GY5/1シルト。細砂ラミナ。オリーブ黒10Y3/1ラミナが顕著。弥生土器35片（うちI様式9片、I～II様式1片）が出土した。

図32 - 10096は壺の体部片。5条以上のヘラ描き直線文に、垂直方向の短い直線文を互い違いに配して文様帯を構成する。I - 2～4様式。

434溝 調査区北西部に位置する。03 - 1 - 2区から続く一連の溝である。調査区の北辺に近いので、南肩のみを検出した。埋土（図3）はH4オリーブ黄5Y6/4粗砂～中礫。当調査区での出土遺物なし。

128木棺状遺構（図31） 調査区西部に位置する。第10面精査時に幅2～5mm（cmではない）の「コ」字形に検出した。主軸方位はほぼ南北。

北辺の東西幅50cm。南側でわずかに広がり、東西幅54cmを測る。「コ」形の周縁にわずかに木質が残っていた。東辺北部に残る材はコウヤマキ、北辺は不明。木棺とした場合の蓋板や南側の小口板は残存していなかった。また、南北および東西にサブトレンチを設定し下層を観察したが、底板・下部構造は認められなかった。出土遺物はない。

127土坑（図33・写真図版5） 調査区南東部に位置する。土坑北部のみの検出にとどまったが、平面円形と推定でき、東西2.1m以上、深さは46cm以上をはかる。埋土は図33のように3層に分かれる。

出土遺物は、弥生土器10片（うちI様式2片、I～II様式2片）、削器1点、木杭1点、木片1点、計13点である。図32 - 10093は弥生土器の広口壺。頸部のヘラ描き沈線は14条と多条化し、口縁端部はやや肥厚する。I - 4～II - 1様式に位置づけられる。10094は用途不明木器。長軸10.0cm、短軸5.6cm、

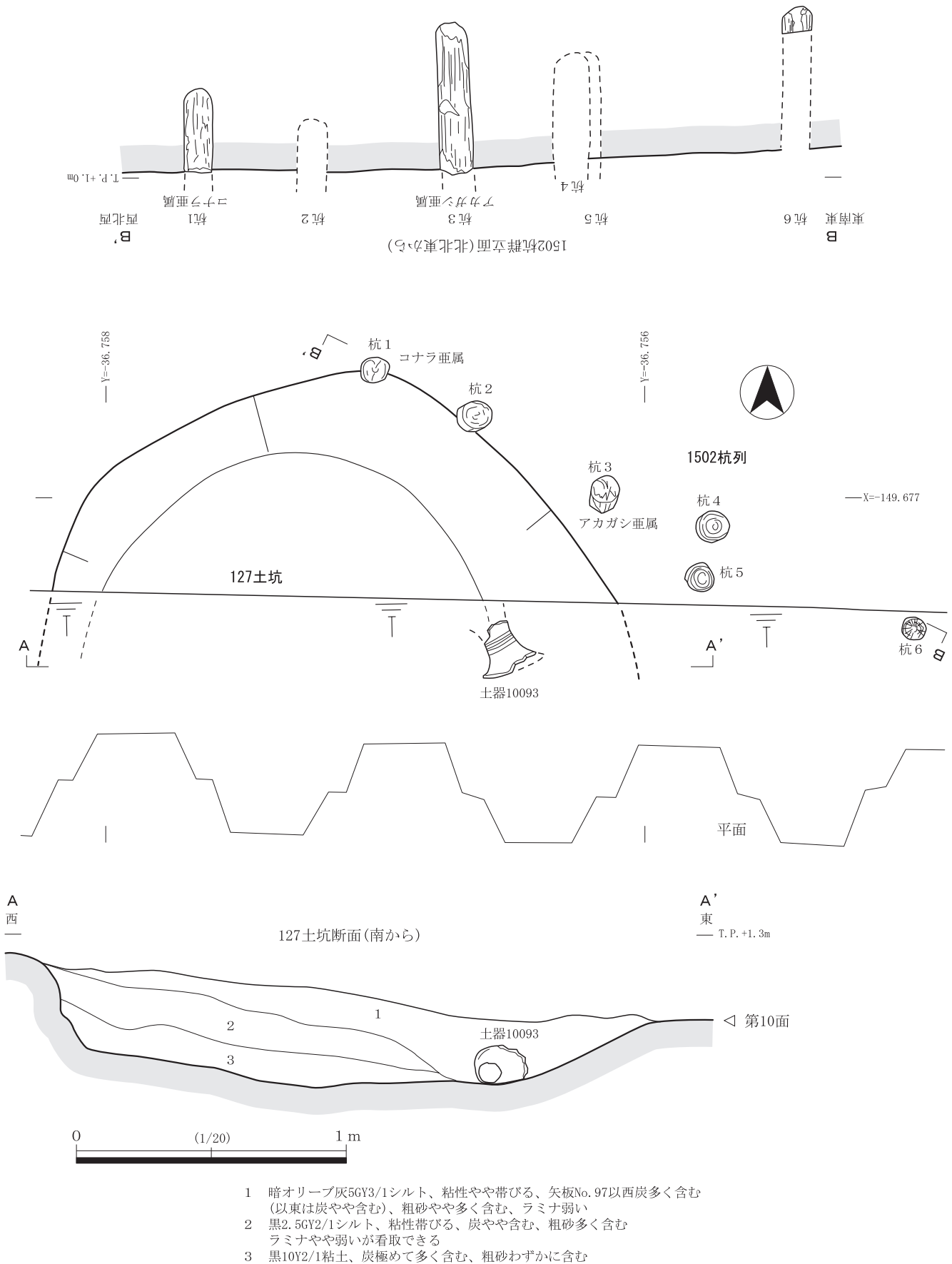


図33 03-1-1区 第10面127土坑、1502杭列

厚み1.8cmを測る。長辺と短辺の各一辺にそれぞれ2か所へこみが見られる。これを紐の圧痕とすれば、木錘や浮きの可能性が考えられる。ヒノキの柃目材。

1502杭列(図33・写真図版5) 127土坑の北端から南東に向かって6本(杭1~6)以上並ぶ。検出はいずれも第10面のT.P.+0.95~0.99m。この範囲の上面・第9面(T.P.+1.2~1.25m)には特に遺構はなく、下面・第11面(T.P.+0.7~0.8m)には1502杭列の並びとは無関係な南北方向の溝状落ち込みが見られることから、この1502杭列は、127土坑とともに第10面の遺構である可能性が高い。

1502杭列を構成する杭1~6は、いずれも直径10~12cmの丸太で、先端の加工痕はあまり先鋭ではない。芯々距離で、杭1と杭2が21cm、杭2と杭3が28cm、杭3と杭4が21cm、杭4と杭6が42cm。杭5が杭4と杭6の中間にあれば、6本の杭がほぼ等間隔に並ぶことになるが、杭4・杭5とも大きくゆがむことなくほぼ垂直に打ち込まれている。杭の遺存状況はいずれも悪く、遺物としての取り上げはできなかった。かろうじてサンプリングできた杭1の樹種はコナラ亜属、杭3はアカガシ亜属であった。

(21) 03-1-1区第10層の遺物(図34 写真図版13)

弥生土器176片(うちI様式34片)、石剣1点、サヌカイト剥片2点、自然礫1個、クルミ1点、計181点出土した。

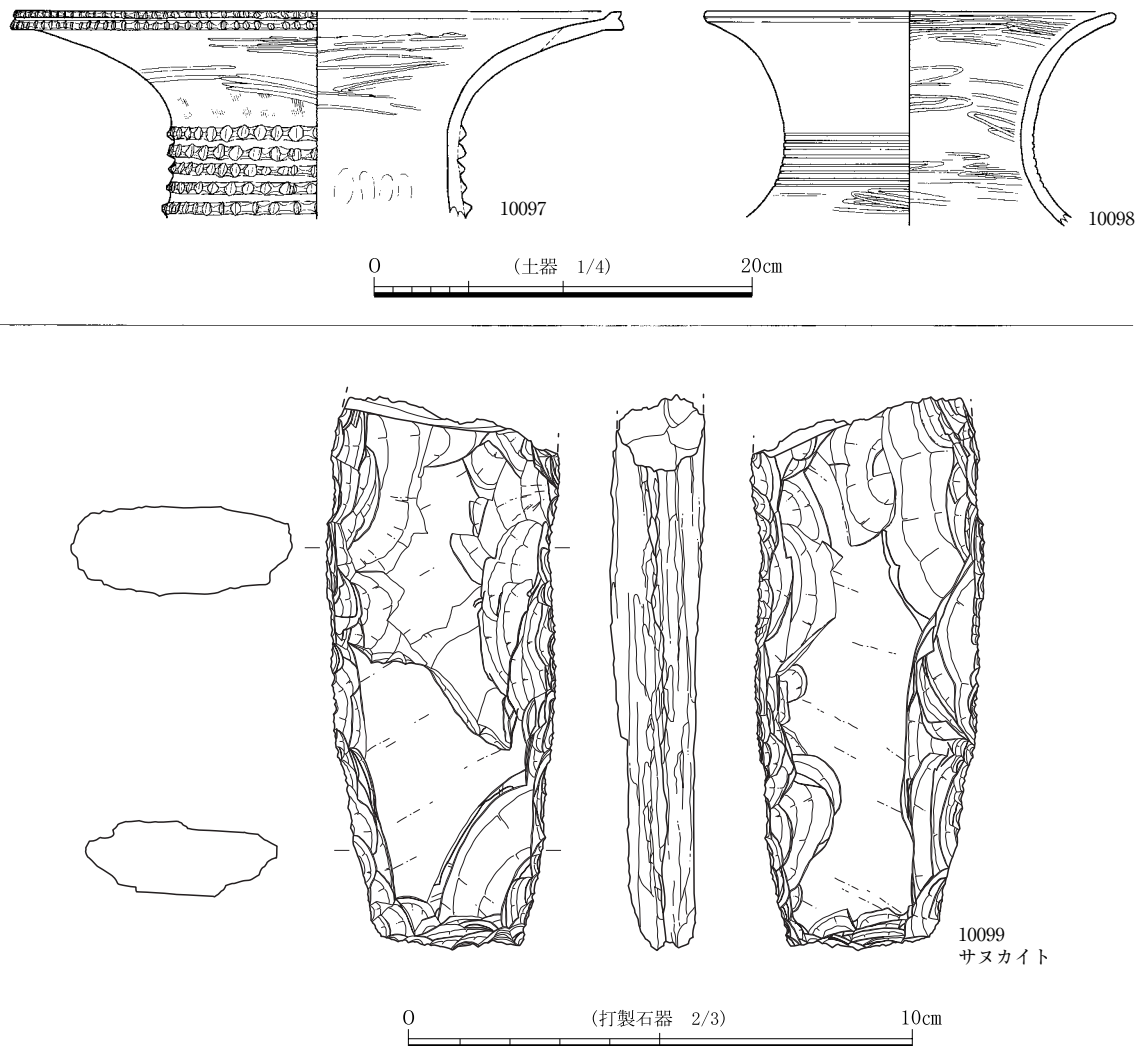


図34 03-1-1区第10層出土遺物



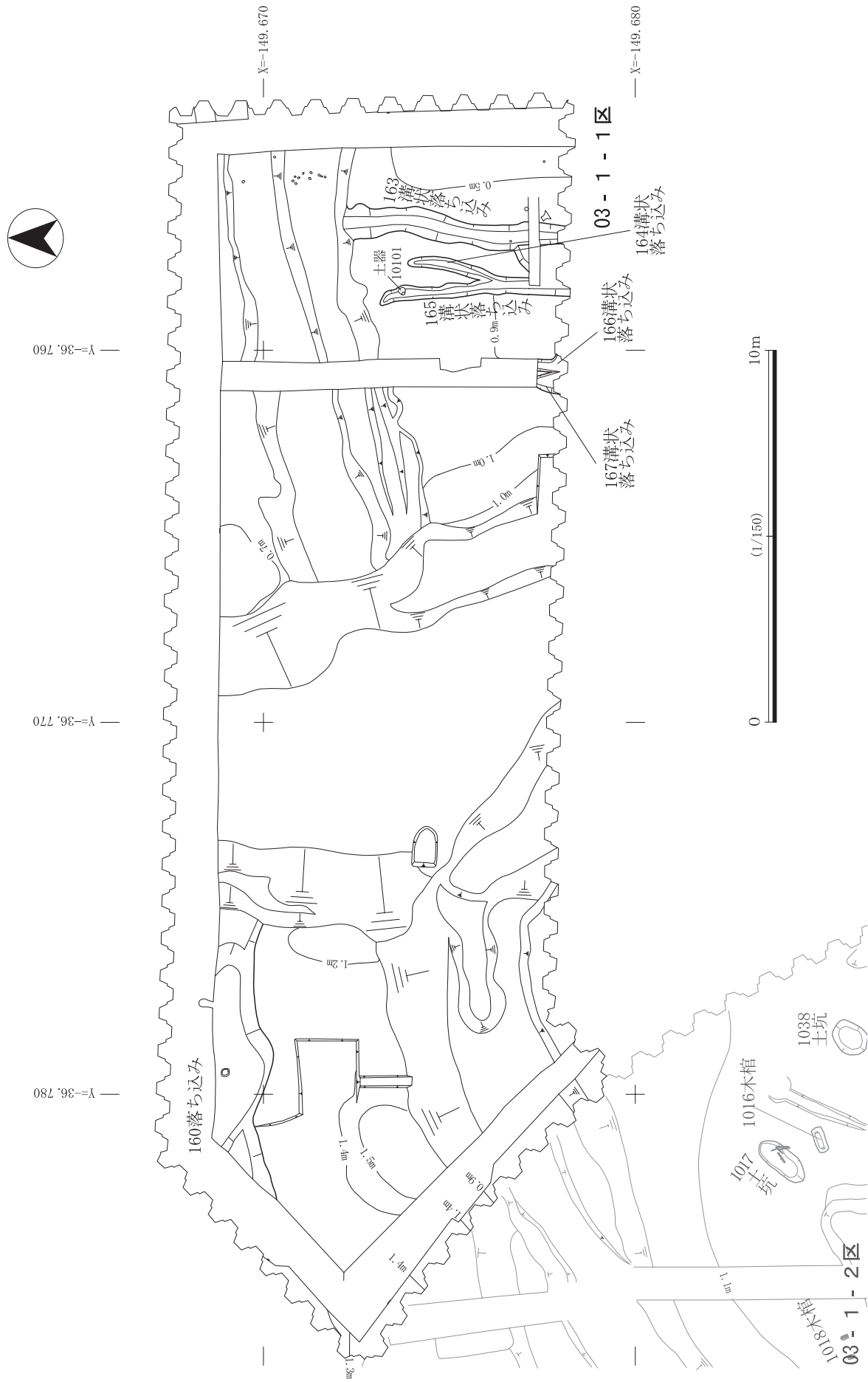


図35 03-1-1区第11面

図34・10097は広口壺。口縁端部に1条の沈線を引き、刻み目を施す。頸部には布目圧痕をもつ貼り付け突帯が5条残る。I - 3～4様式。10098は広口壺。口縁部はまるく、沈線1条。頸部にヘラ描き沈線8条を配する。I - 3～4様式。10099（写真図版13・資料番号98500）は先端部を欠損した打製石剣。原礫面が残り、層状に剥離している。二上山産のサヌカイト（第9章 有限会社遺物材料研究所「山賀遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析」参照）。

(22) 03 - 1 - 1区第11面の遺構と遺物（図35・36 写真図版6・13）

第10層の砂層を除去した面で、シルトを主体とする自然堆積層の上面でもある。

面の高さはT.P.+0.5～1.5mで西が高く、東への傾斜が第10面よりきつくなる。落ち込み1か所、溝状落ち込み5か所、計6か所（遺構番号160・163～167）を検出した。

160落ち込み 調査区北西部に位置する。断面と合わせて検討すると、03 - 1 - 2区から続く溝群はこの第11面では掘り込まれていない。ただし、この160落ち込みの範囲は、上層とは形状が異なっており、第10面434溝に先行する落ち込みであったと考えられる。埋土は、オリーブ黒10Y3/1細砂混じりシルト。弥生土器が2片出土した。

図36・10100（写真図版13）は広口壺。頸部に縁取り沈線を入れた突帯、体部上半には削り出し突帯がめぐる。器体のカーブは連続的で、I - 2～3様式に位置づけられよう。

163～167溝状落ち込み 調査区南東部に位置する。いずれも基本的に南北を主軸方位とする。東から順に遺構番号を付した。これら溝状落ち込みの埋土（図3）はいずれも第10層と同じで⑧オリーブ黒5Y3/1粘質シルトがたまり、ラミナを形成する。

163溝状落ち込みは、長さ6m以上、幅43～90cm、深さ19cm。

164溝状落ち込みと165溝状落ち込みは、北部で枝分かれする。164溝状落ち込みは163落ち込みがやや東に屈曲する部分に平行する。165溝状落ち込みはまっすぐ北に延びる。長さ5m以上、幅48～117cm、深さ8cm。

166溝状落ち込みと167溝状落ち込みは、サブトレンチにより北部を破壊されたため、延長1mほどの検出に止まった。166溝状落ち込みは、幅28～39cm、深さ14cm。167溝状落ち込みは、幅29～52cm、深さ

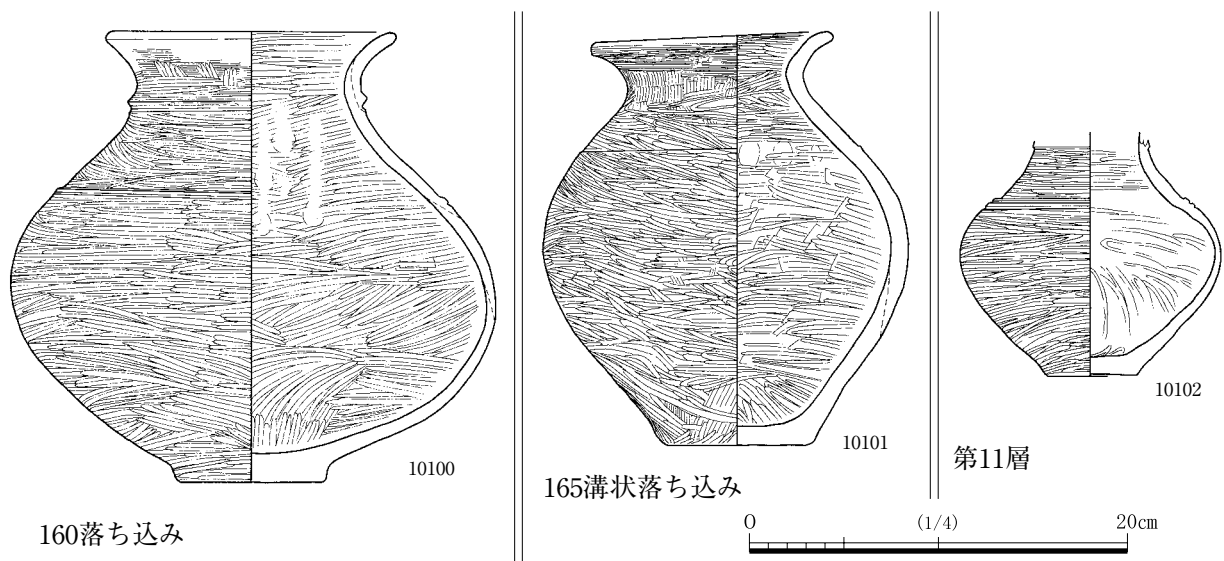


図36 03 - 1 - 1区 第11面160落ち込み、165溝状落ち込み、第11層出土土器

13cm。

これらの溝状遺構からの出土遺物は、165溝状落ち込みの北部から出土した弥生土器の壺（図36-10101・写真図版13）のみである。やや細長の器形で、胴部上半に沈線を入れる。ミガキは沈線の後に施され、沈線はところどころで消えている。器体のカーブはなく、I-1～2様式に位置づけられよう。

(23) 03-1-1区第11層の遺物（図36 写真図版6・13）

弥生土器73片（うちI様式7片、I～II様式2片）、サヌカイト剥片1点、計74点出土した。

図36-10102（写真図版6・13）はやや小ぶりの広口壺。頸部に段、体部上半には屈曲をもち、体部は低く張って板付Ⅱ式の特徴をよく残す。体部上半の削り出し突帯上には、1条の沈線が施される。I-1～2様式。

(24) 03-1-1区第11-2面の遺構と遺物（図37・38 写真図版6・13）

今回の調査範囲（全調査区）北半に分布する第11層中に薄く堆積した植物遺体層の上面である。03-1-1区ではその西部でのみ検出した。

面の高さはT.P.+0.4～0.1mで、起伏に富む。北西-南東に幅1m程度の馬の背状の172高まりがあり、その北東側で171溝状落ち込みを、南西側でも地形的なくぼみを検出した。

171溝状落ち込み 調査区北西部に位置する。判明する部分で幅3.3m、深さ65cm。弥生時代前期の壺1点と木器1点が出土した。

図38-10103（写真図版6・13）はやや大形の壺。頸部に沈線1条、胴部上半の削り出し突帯上に沈線1条が施される。口縁部には紐孔があげられる。器体の屈曲と厚みの変化はまだ残っている。I-1～2様式。

(25) 03-1-1区第11-2層の遺物

出土遺物なし。

(26) 03-1-1区第11-3面（図39・写真図版7）

第11層の下部に堆積した粗砂の上面である。

調査区西部でのみ検出した。面の高さはT.P.+0.4～0.8mで、南西に傾斜している。自然地形であり、遺構は存在しない。

(27) 03-1-1区第11-3層の遺物

弥生土器3片のみ出土。

(28) 03-1-1区第12面の遺構と遺物（図38・40 写真図版6）

黒色土壌化層の上面である。調査区の東部でのみ検出した。

面の高さはT.P.+0.4～0.9mで、調査区東端から西に向かって高まる。溝2条、溝状落ち込み1か所、計3か所の遺構（番号168～170）を検出した。

第12面は、調査中央部で西に傾斜し、03-1-2区での検出状況と合わせ考えると、第12面は当03-

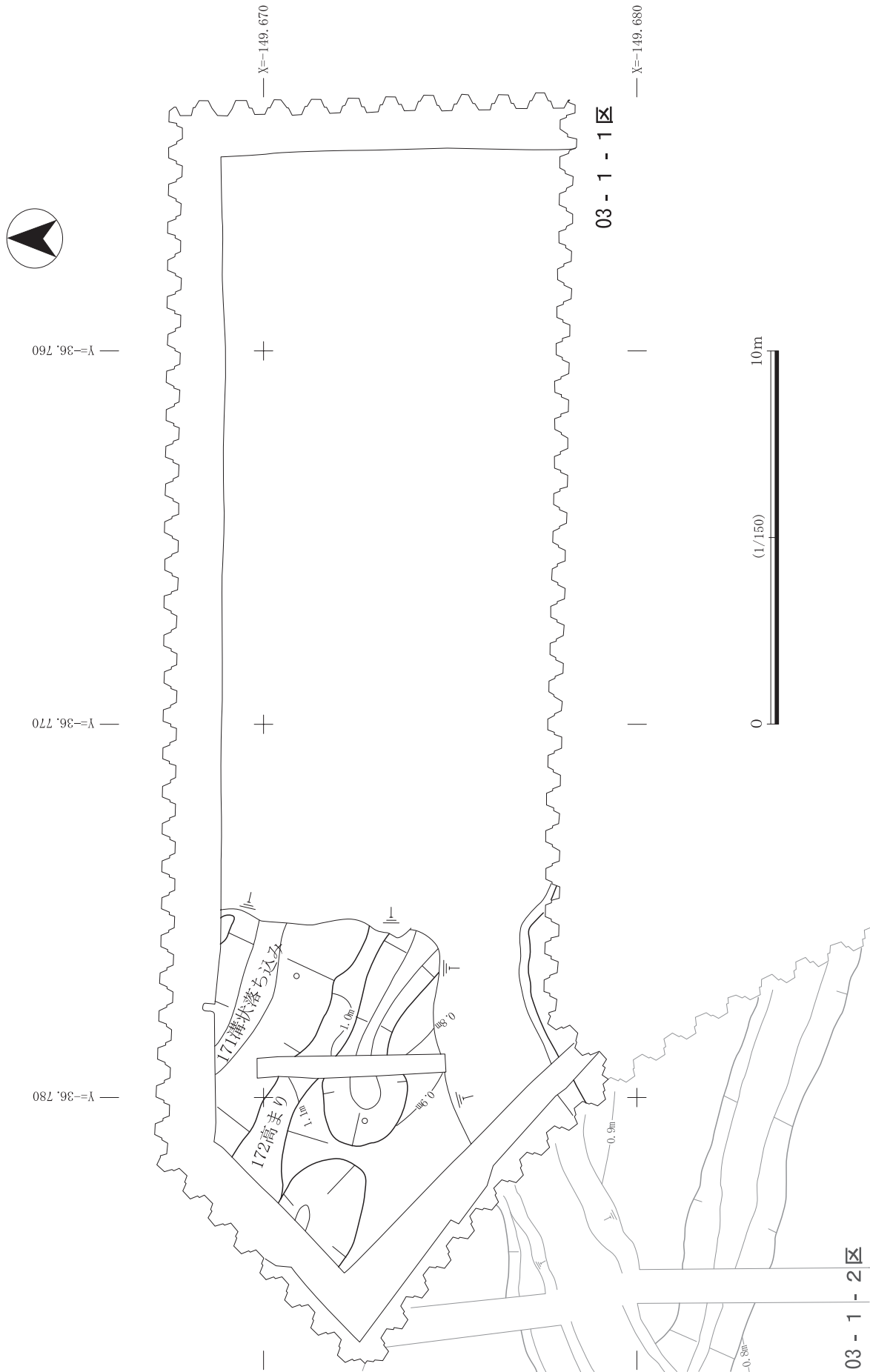


図37 03-1-1-1区第11-2面

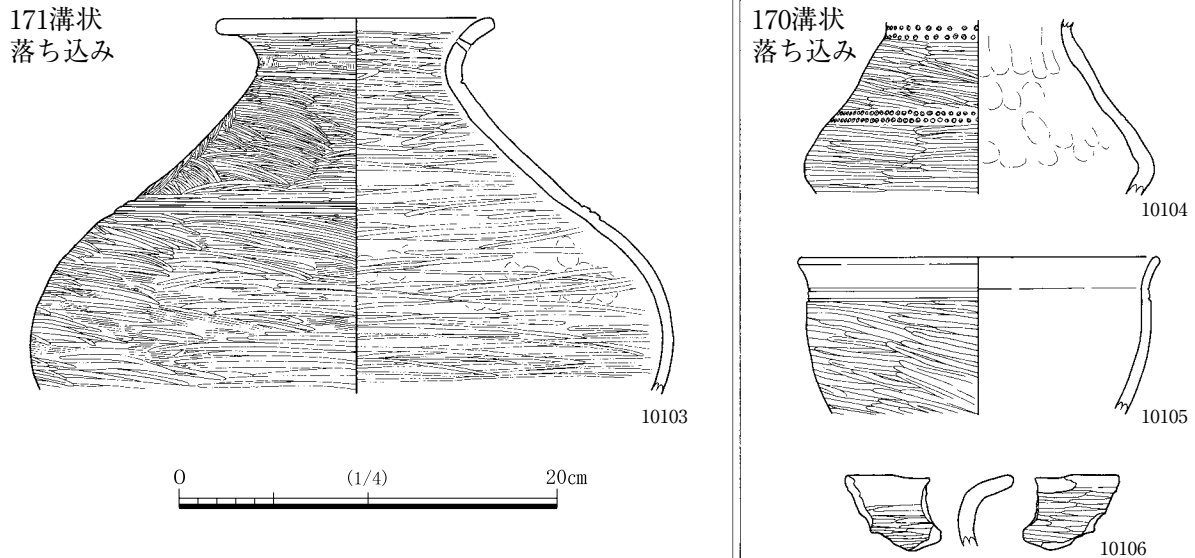


図38 03-1-1区 第11-2面171溝状落ち込み、第12面170溝状落ち込み出土土器

1-1区の西部では調査限界のT.P.0.0mよりさらに深くもぐる。

168溝・169溝 ともに調査区南東部に位置し、主軸方位は北西-南東で平行する。168溝は、長さ3m以上、幅11~21cm、深さ4cm。169溝は、長さ6m以上、幅27~38cm、深さ10cm。いずれも埋土は第11層と同じ㊸オリブ黒5Y3/1粘質シルトだが、やや粗粒。出土遺物はない。

170溝状落ち込み 169溝あたりから南西側に落ち込む。切り合いからみて169溝に先行する。弥生土器15片が出土した。

図38-10104は広口壺。頸部と体部上半には竹管文を配する。文様帯の上下で器体のカーブが異なっている。I-2~3様式か。10105は甕。口縁部は立ち上がり気味に外反し、頸部に2条のヘラ描き沈線が入る。I様式後半~II様式前半。10106は壺あるいは甕の口縁部か。端部をまるくおさめ、内外面ともにミガキを施す。I様式か。

(29) 03-1-1区第12層の遺物 (図41)

弥生土器40片、木器2点、計42点出土した。

図41-10107は有頭棒。残存長軸48.3cm、短軸3.5cm、厚み2.1cm。端部に切り込みを入れ、2.5cm程度の頭部を作り出す。織機(経(緯)巻具)の形に近いが、根拠に欠ける。ヒノキの柾目材。10108は板材。一方の木口に向かって5mmほど緩やかに厚みを減らす。両面には加工痕が明らかで、平坦面を作りだして厚みを減らしている。用途は不明。ヒノキの柾目材。

(30) 03-1-1区第13面の遺構と遺物 (図42・写真図版7)

第12層を除去した青灰色シルトの上面である。調査区東部でのみ検出した。

面の高さはT.P.0.2~0.6mで、第12面と同様に調査中央部で急激に西に傾斜し、調査区西部では調査限界のT.P.0.0mよりさらに深くもぐる。遺構は存在しない。

(31) 03-1-1区第13層の遺物

第13面調査後、掘削限界のT.P.0.0mまで掘り下げた。しかし、遺物は出土しなかった。

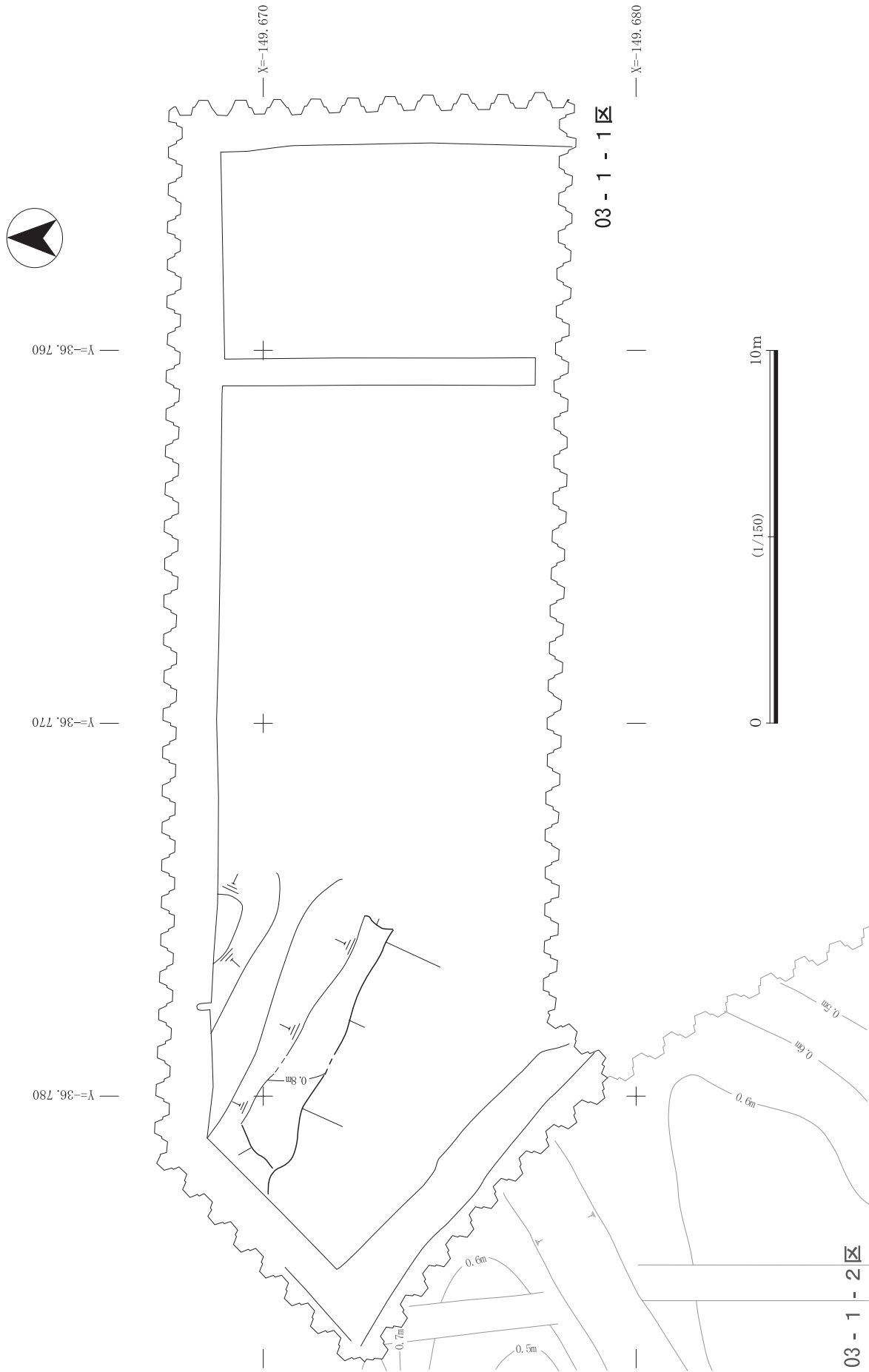


図39 03-1-1区第11-3面

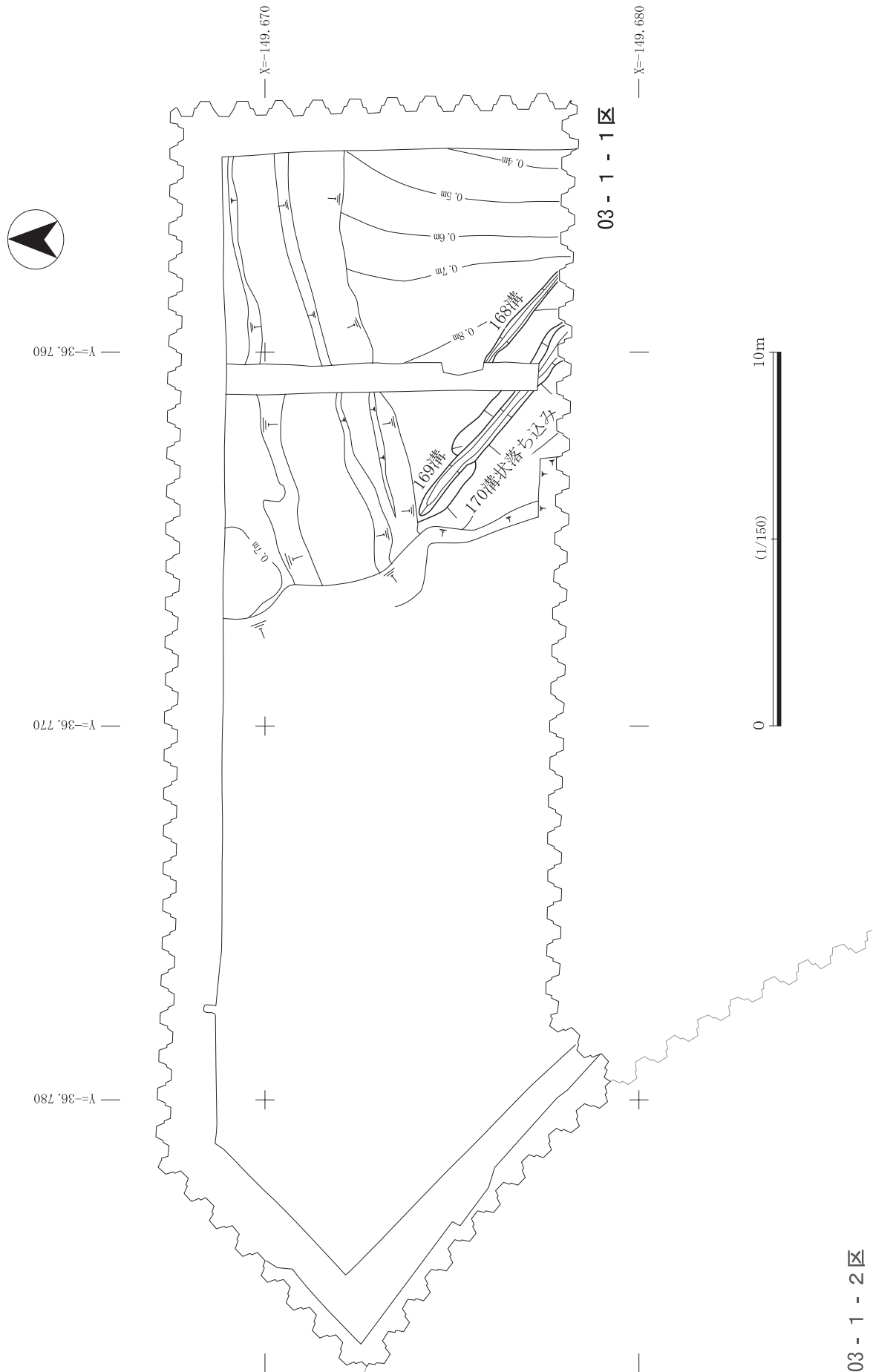


図40 03-1-1区第12面

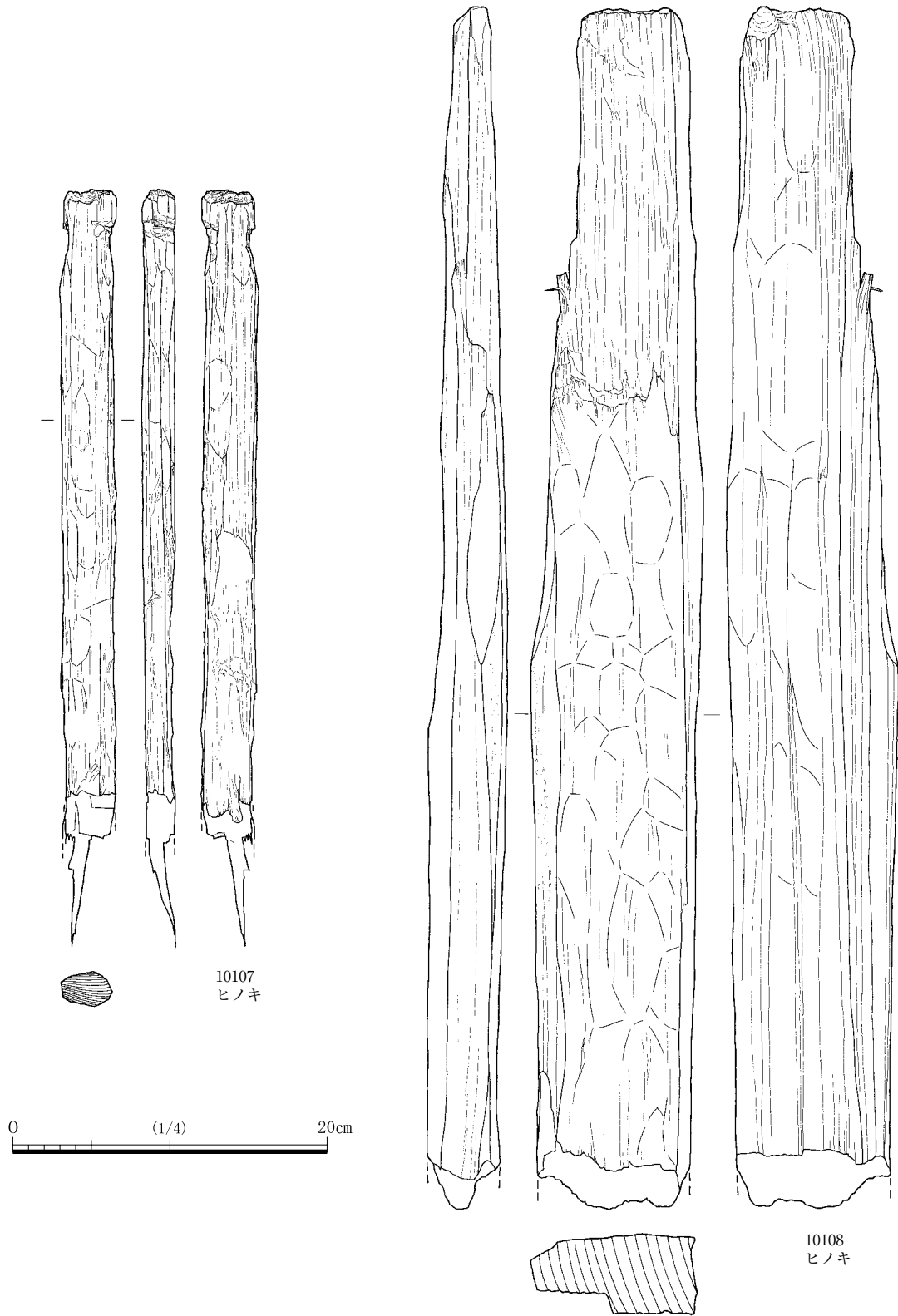


図41 03-1-1区 第12層出土木器



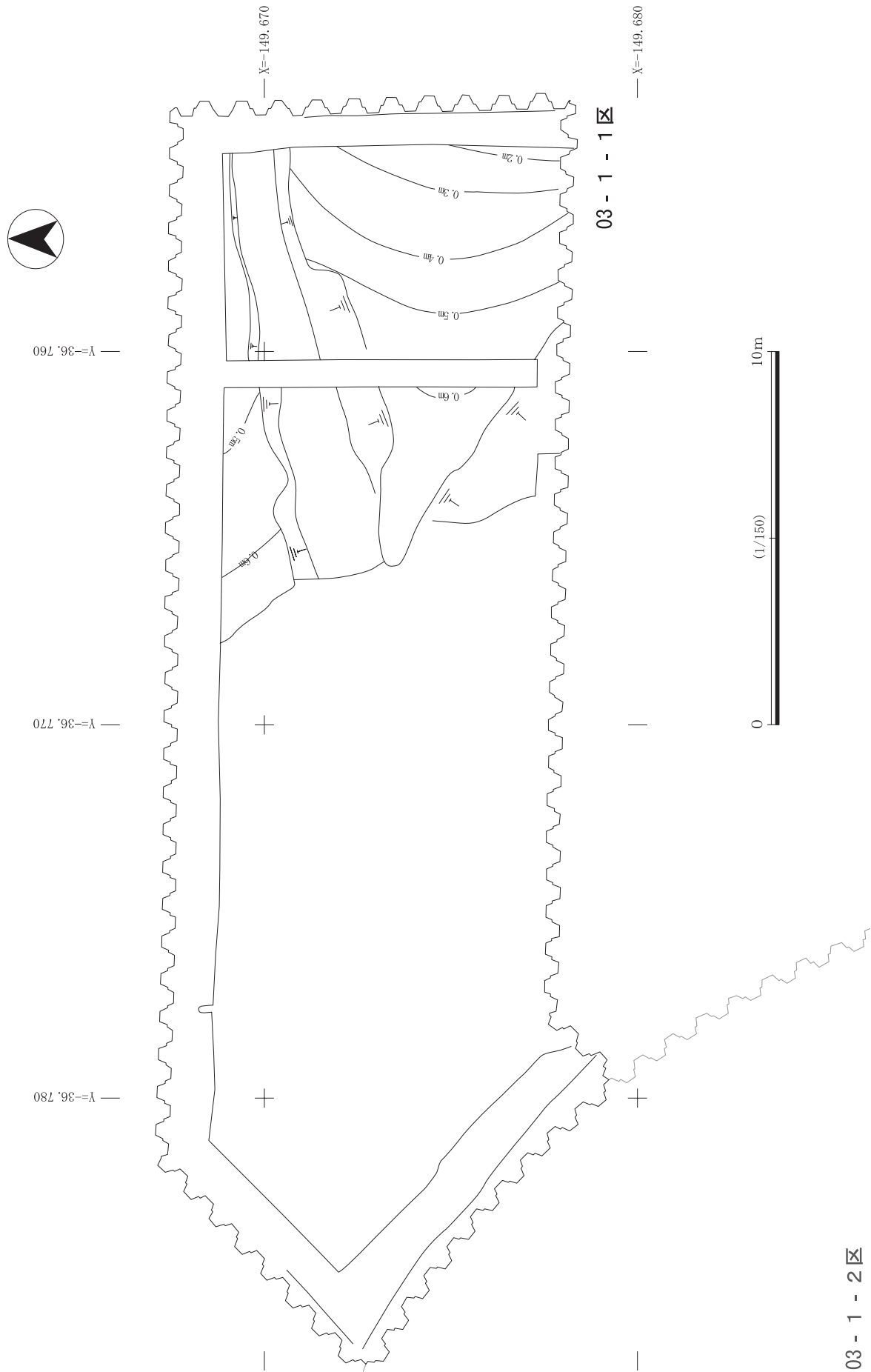


図42 03-1-1区第13面

03-1-2区

## 第5章 03 - 1 - 2 区の調査成果

### 第1節 概要

03 - 1 - 2 区は、今回の調査範囲の中央部に位置する平面円形の調査区で、直径53.8m、面積は2272㎡。調節池本体部建設に伴うもので、調査位置・面積・遺構・遺物ともに、今回の調査の中心である。

調査前地盤高はおよそT.P.+4.6m。盛土層を重機で1.0～1.3m除去し、T.P.+3.3～3.6mから調査限界のT.P.0.0mまでの包含層を人力掘削した。17面を調査し、1326か所の遺構を検出した。

出土遺物は、土器類101989片、金属製品4点、石製品・石3163点、木・木製品288点以上、種子・実65点以上、骨・歯137点以上、計105646点以上に及ぶ。

なお、円形の03 - 1 - 2 区では、第2節の冒頭にも述べるように、調査区の中を通る東西および南北方向に地層観察用のセクションベルトを設定した。さらに、東西方向のセクションベルトの南側と南北方向のセクションベルトの西側に、排水と下層観察のために側溝を設定した。中心から見てのびる方向を冠し、「東」「西」「南」「北」側溝と表示する。

### 第2節 層序

03 - 1 - 2 区では地層観察用の断面を、調査区中心をはしる南北 (Y=-36.800) と東西 (X=-149.695) に設定した。観察・図化は、東西・南北各53.8mを、攪乱層除去面 (T.P.+4.3～4.6m) からT.P.0.0mまで行った。南北断面 (図43) は西から、東西断面 (図44) は南から観察している。なお、遺構埋土は03 - 1 - 1 区から続いてJ～Rまでを配し、各遺構の項で述べる。

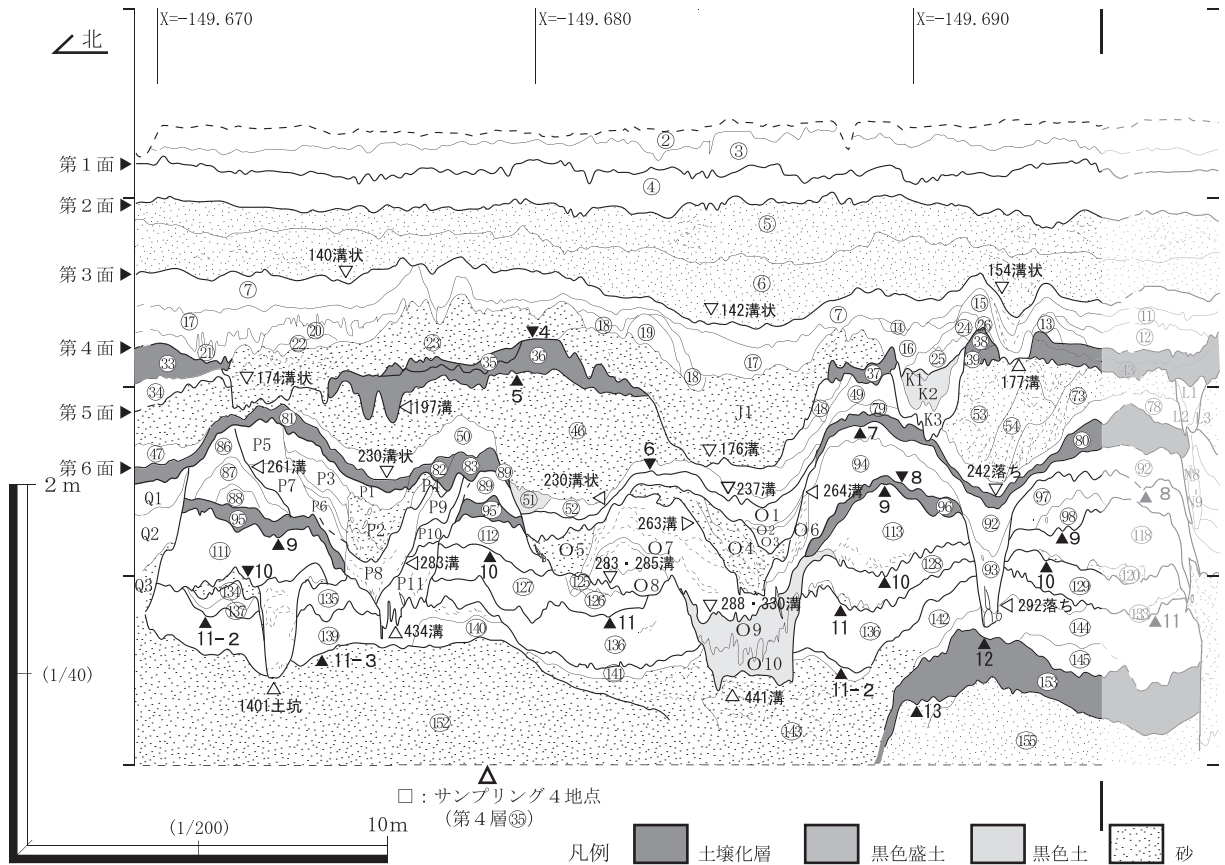
**第0層 (機械掘削停止・盛土層：①～③)** 現代の攪乱土で褐灰～黄灰の粗砂混じりシルト主体。現地表面から1.1～1.4mの層厚で堆積する。①機械掘削残土で攪乱を受ける。②褐灰7.5YR5/1シルト。粗砂 (直径～0.3cm) をやや含み、タテ方向にマンガンがやや多い。③黄灰2.5Y5/1粗砂混じりシルト。マンガン斑がやや多く、炭をわずかに含む。

**第1層 (オレンジシルト：④)** 現代の盛土層。鉄分の付着やマンガン斑の多い、粗砂混じりオレンジシルト層。上層からの染み込みが強い。土色は一定しないが、調査区全域に同様な土質で堆積する。層厚20cm前後。褐灰10YR4/1シルトで、下方は粗粒化して細砂となる。鉄分の付着・マンガン斑が多い。

**第2層 (砂層：⑤～⑥)** 洪水砂層で主に褐灰・黄灰の粗砂～中礫が堆積し、下方へ粗粒化する。東方向へ粒径が大きく、ラミナが顕著になる。層厚は東から西へ薄くなる。

南北：⑤褐7.5YR4/6細砂・灰5Y5/2細～粗砂がラミナをなす。南へ粒径が粗く、ラミナ顕著になる。⑥上：にぶい黄2.5Y6/4細砂 (シルトやや含む)、中：暗オリーブ灰5GY4/1細砂 (シルトわずか) で褐灰10YR4/1粘土の薄層が中位に入る、下：灰7.5Y4/1シルト (粘性ややあり) と細砂のラミナ、の3層に分かれる。北辺中央でマンガン斑多く、その南 (X=-149.690付近) では粗砂ブロックが帯状に入る。

**第3層 (自然堆積層：⑦～⑳)** 自然堆積層。黄灰～灰、オリーブ灰のシルトを主体とする。上層との境には植物遺体が薄層をなし、落ち込み部には細～粗砂が堆積する。層厚は第2層と同様、西へ薄くな



り、およそ20~50cm、最大70cmを測る。

南北：一面に広く堆積する。⑦黄灰2.5Y4/1シルト。粘性を帯び、ラミナ顕著。植物遺体・マンガン斑が多い。北ではオリーブ黒7.5Y3/1に変わり、植物遺体薄層が2層入る。下層との層境で粗砂をやや多く含む。

南の高まり部は⑧オリーブ黒5Y3/1シルト。⑨オリーブ黒5Y3/1砂混じりシルト。炭化物やや、マンガン斑を含む。粗砂をやや多く含む。その下に広く堆積するのは⑩黒褐2.5Y3/1粗砂混じりシルト。炭化物・マンガン斑を含む。

北では⑪オリーブ黒5Y3/1粗砂混じりシルト。マンガン斑がやや多く、炭化物をやや含む。⑫黒褐2.5Y3/1シルト。やや粘性を帯び、炭化粒がかなり多い。下位では灰5Y4/1粘土とマーブル状に攪拌される。⑬オリーブ黒5Y2/2シルト~粗砂。植物遺体をわずかに、マンガン斑・炭化粒をやや含む。⑭オリーブ黒7.5Y3/1シルト。植物遺体・マンガンをやや含む。炭化粒をわずかに含み、ラミナは弱い。

⑮オリーブ黒7.5Y3/1細砂~シルト（下方細粒化）。やや粘性を帯び、粗砂やや多く含む。高まり部はシルトでマンガン斑が認められる。⑯オリーブ黒5Y3/1細砂~粗砂混じりシルト。マンガン斑わずか。植物遺体、炭化粒がやや多く、炭酸カルシウムの結核がわずかに見られる。⑰オリーブ黒5Y3/1シルト。X=-149.680付近の高まり部ではマンガン斑・炭化粒顕著だが、以北ではマンガン斑はわずかになる。植物遺体をわずかに含む。第3面142溝の下方では炭酸カルシウムの結核をやや多く含む。

⑱灰7.5Y4/1粘性を帯びるシルト。植物遺体、炭粒をやや含む。南側ではオリーブ黒5Y3/1と変化し、植物遺体・炭化粒が多く、ラミナが顕著となる。⑲オリーブ黒7.5Y3/1シルト・オリーブ黄5Y6/3細砂の攪拌。下方にはオリーブ黒7.5Y3/1粘土、植物遺体・炭化粒も含まれる。

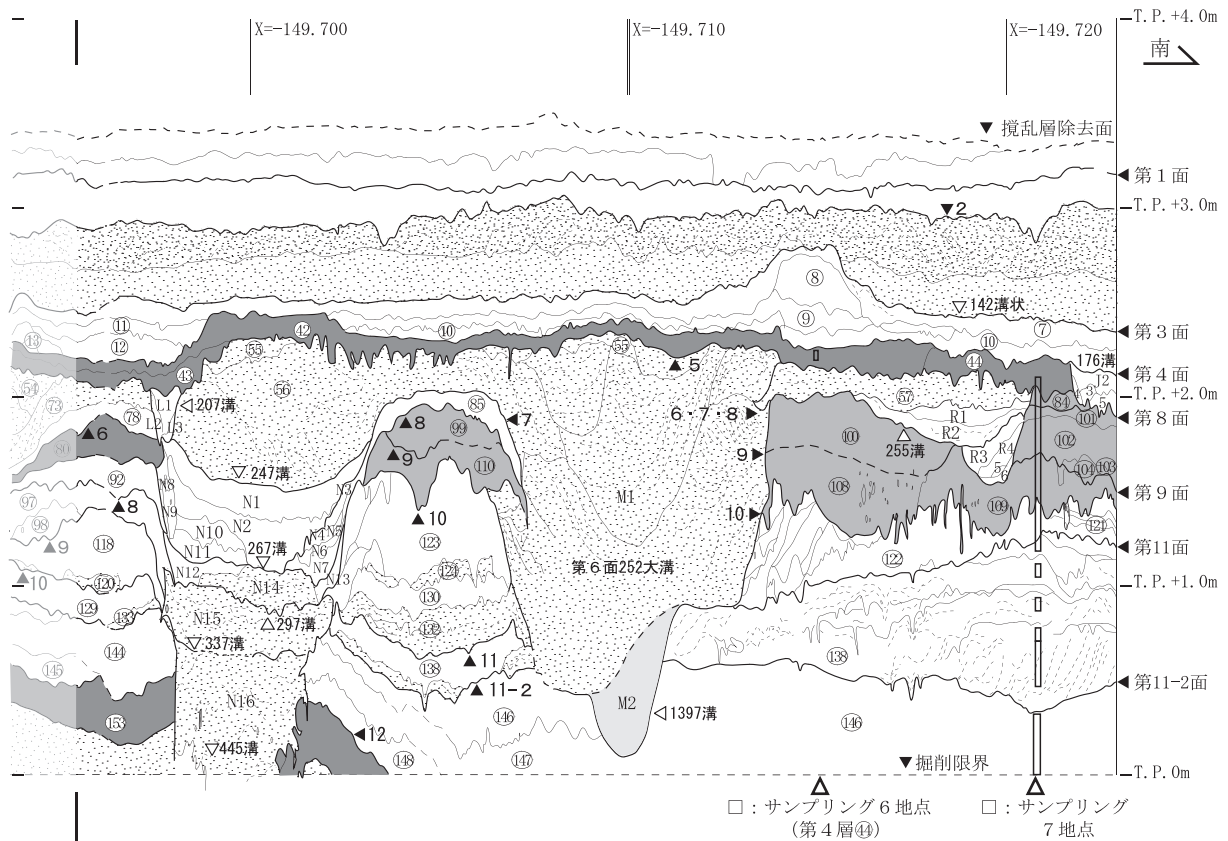


図43 03-1-2区南北土層断面（西から）

北端⑳暗オリーブ灰2.5GY4/1粘質シルト。ラミナ顕著で植物遺体を多く含む。㉑暗オリーブ灰2.5GY4/1粘質シルト。上方では㉒に影響され、南側では炭化粒・植物遺体をやや含み、細砂が多い。北の層終わりでは細砂がラミナをなす。㉒層は暗オリーブ灰2.5GY3/1シルト・暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂がラミナをなす。植物遺体・炭化粒をやや含む。

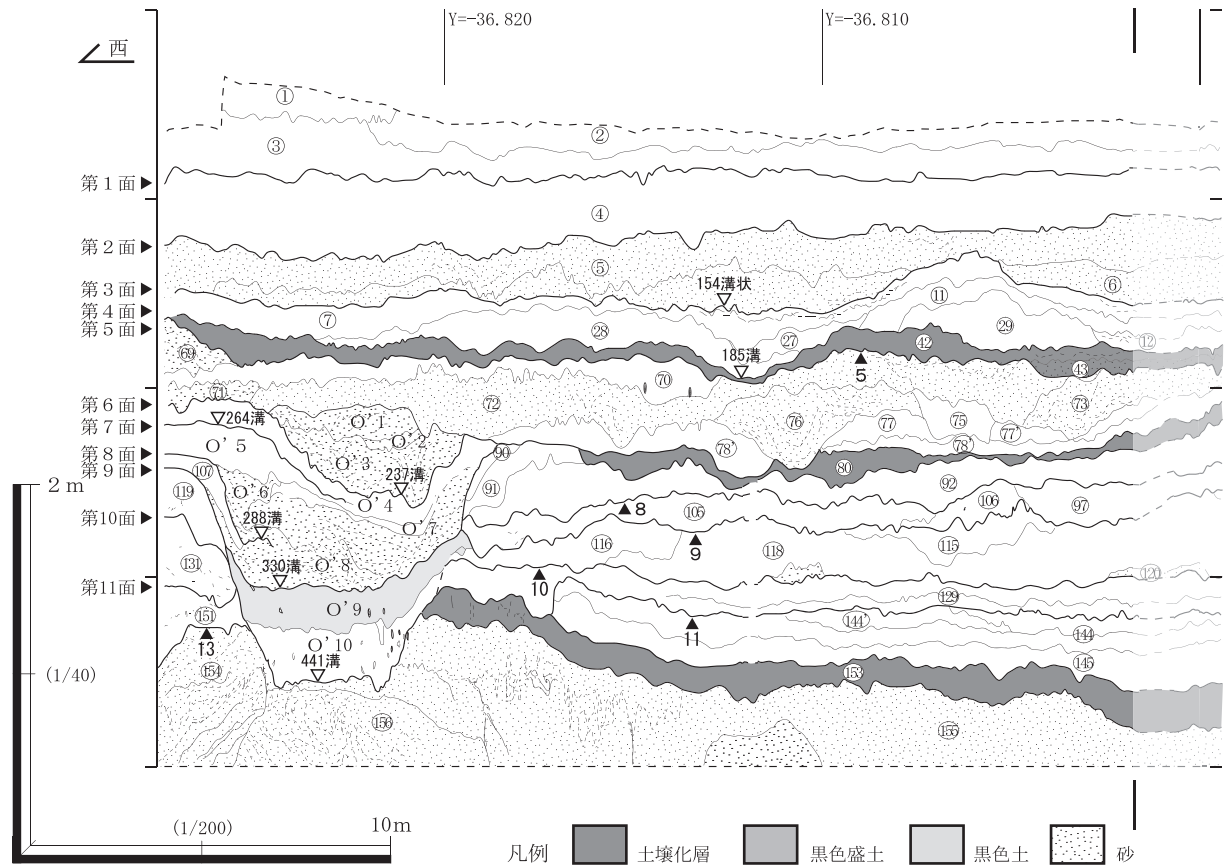
第4面174溝状落ち込みには㉓ラミナの顕著な砂層が堆積する。北ではオリーブ5Y5/4シルト混じり細砂、南ではにぶい黄橙10YR6/4シルト混じり細砂が主体となる。層の中位～下位には灰7.5Y4/1シルト～細砂とオリーブ黒10Y3/1とがラミナをなす。

㉔黄褐10YR5/6細砂・オリーブ黒5Y3/2シルトの攪拌。植物遺体・炭化粒をわずかに含む。㉕オリーブ黒5Y3/1シルト・黄褐2.5Y5/4細砂のラミナが顕著。植物遺体・炭化粒・マンガン斑を含む。㉖オリーブ黒5Y3/2細砂。オリーブ褐2.5Y4/3細砂と攪拌。

東西：㉗オリーブ黒5Y3/2細砂混じりシルト。下方に植物遺体・炭化物・マンガン斑がやや多く、ラミナ顕著。㉘オリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト。炭化物をやや含む。ラミナはあまり見られない。㉙オリーブ褐2.5Y4/3細～粗砂混じりシルトを主体として灰7.5Y4/1シルト・オリーブ黒5Y3/2細砂をブロック状に含む。㉚灰7.5Y5/1シルト。マンガン斑をやや含み、下層を攪拌する。短く途切れるラミナが観察される。㉛灰7.5Y5/1シルト。マンガンやや多く、水平方向のラミナが顕著。植物遺体が多く、下層を攪拌する。

㉜上（東端隆起部のみ）：明黄褐10YR6/8、中：明オリーブ灰2.5GY3/1シルト、下：明黄褐2.5Y7/6シルト～細砂。ラミナが強く、植物遺体・マンガン斑はわずか。

第4層（土壌化層・畦畔検出面：㉜～㉝、㉞） 水田面。土壌化した黒色シルトを主体とし、植物遺体



や炭化物を多く含む。一部では上下に分けることができた。層厚は平均10cm前後。

南北：③黒5Y2/2粘土。植物遺体をやや含み、北に行くにつれ明黄褐10YR6/6細～粗砂のラミナが顕著となる。④黒2.5GY2/1細砂を主体とし、上方へ細粒化する。植物遺体やや含む。⑤オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト。マンガン斑・植物遺体・炭化物をやや含む。(土壌サンプリング4地点) ⑥オリーブ黒10Y3/1細砂。粘土が混じる。上方は黄褐2.5Y6/6細砂と攪拌される。植物遺体はわずかで、マンガン斑がやや見られる。⑦黒10Y2/1細砂。粗砂を多く、粘土をやや含む。植物遺体も散見される。

185溝 (K) の南側には土壤化した高まりが見られる。⑧オリーブ黒7.5Y2/2シルト。暗オリーブ5Y4/4細砂と攪拌。植物遺体、炭化物をわずかに含む。⑨オリーブ黒7.5Y3/1シルト。やや粘性があり、上層と同じ暗オリーブ5Y4/4細砂がより多く含まれる。粗砂・植物遺体・マンガン斑もわずかに含む。

南北へ広く広がるのは⑩黒7.5Y2/1シルト。粗砂・炭化粒をやや多く含む。高まり部ではマンガン斑が顕著で、南へいくほど黒色が強くなる (土壌サンプリング6地点)。⑪黒褐2.5Y3/1細砂。粘土がわずかに混じり、粗砂やや含む。⑫オリーブ黒5Y3/1、粘性の強いシルトで、下方粗粒化して細砂となる。南端では細粒化して粘土が主体となる。粘土植物遺体・炭化物がやや多く、粗砂も多く混じる。ラミナがわずかに見られる。

東西：⑬・⑭は畔の可能性ある。⑬黒5Y2/2シルト。粗砂・マンガン斑・植物遺体・炭化物がやや多い。⑭黒褐2.5Y3/2シルト。やや粘性がありラミナ顕著。植物遺体・炭化物をやや多く含む。⑬の基盤層か。東に広がるのは⑮黒5Y2/1細～粗砂混じりシルト。粘性がやや強く、マンガン斑もやや多い。植物遺体・炭化物をやや含む。176溝 (J') 肩部ではオリーブ黒7.5Y2/2シルト混じり細砂となる。

第5層 (第4層ベース面：⑯～⑰・⑱・⑲、⑳～㉑) 洪水砂層。シルト～細砂を主体とし、前時期

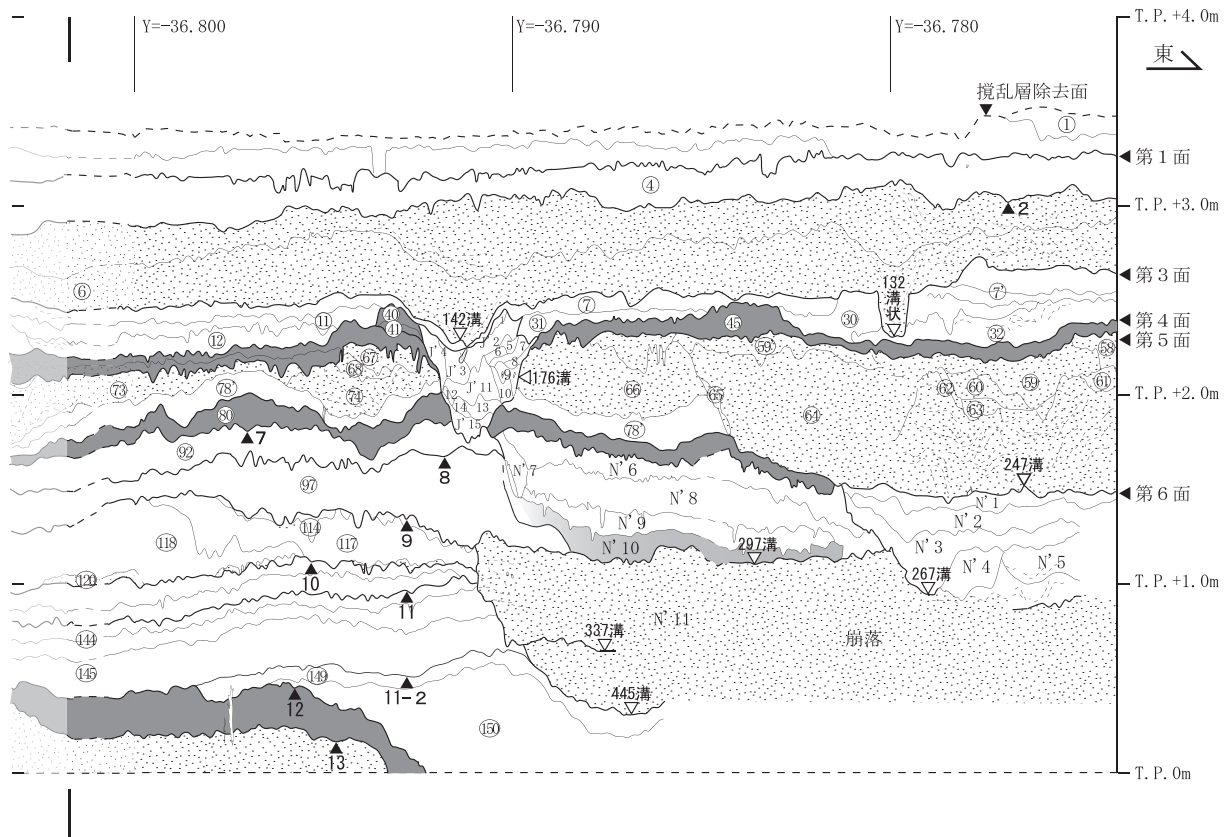


図44 03-1-2区 東西土層断面 (南から)

までの溝を粗砂で埋める。層厚は場所によって変わるが、おおよそ20~40cmを平均とする。

南北：④砂層。暗オリーブ灰5GY4/1シルト~細砂・オリーブ黄5Y6/4細砂がラミナをなす。X=-149.680付近を流心としてラミナが顕著。以北でラミナが弱くなり、北端落ち込み部で強くなる。北端228溝状落ち込みには④オリーブ黒5Y3/2シルトが堆積する。粘性は強く、ラミナはやや弱い。植物遺体・炭化物をやや含む。

176溝状落ち込みの下層④は3層に分かれる。上~中：暗オリーブ灰5GY3/1シルト混じり細砂・明黄褐2.5Y6/6細砂・灰10Y4/1細砂のラミナ。上方は細粒化し、マンガン斑を多く含む。中位では植物遺体を含む。下：暗オリーブ灰5GY4/1細砂混じりシルト。ラミナは下方ほど強くなる。④暗オリーブ灰5GY3/1細砂。粘土がやや混じる。上方にはぶい黄2.5Y6/4粗砂・オリーブ黒7.5Y3/1シルト混じり細砂とラミナを形成し、マンガン斑がやや観察される。232溝状落ち込み(O)の上方ではラミナ顕著。

230溝状落ち込みや237溝には⑤~⑥が広がる。⑤暗オリーブ灰5GY4/1粘質シルト。植物遺体・炭化物がやや混じり、ラミナが見られる。⑥オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト。粗砂をわずかに含む。⑦オリーブ黒7.5Y3/1シルト。粘性あり、植物遺体・炭化物がやや多く、弱いラミナが見られる。

185溝から南では⑧暗オリーブ灰5GY4/1シルト質細砂・ぶい黄2.5Y6/4細砂がほぼ同量含まれ、ラミナをなす。中央でラミナが強くなる。⑨暗オリーブ灰5GY4/1細砂を主体とする。上方のみシルトで、ぶい黄2.5Y6/4細砂とラミナをなす。下方に粗砂が堆積する。⑩オリーブ黒5Y3/2細砂混じりシルト。第4層の高まり部で見られ、やや土壌化する。⑪明褐7.5YR5/6粗砂~灰白2.5Y8/2粗砂~灰5Y6/1粗砂(粒径大)がラミナをなす。

252大溝の南側では⑫が堆積する。⑫上：暗オリーブ5Y4/4粗砂混じり細砂、下：灰7.5Y4/1粘質シル

トで炭化物がやや多い。植物遺体をわずかに含み（上方が多い）、ラミナもわずかに観察される。

トレンチのほぼ中央に灰～黒のシルトが薄く広がる。⑦⑧灰7.5Y4/1粘質シルト。水平方向のラミナがやや目立ち、植物遺体・炭化物をやや含む。⑨オリーブ黒10Y3/1粘質シルト。マンガン斑・炭化物をわずかに含む。

東西：東から⑧黒7.5Y2/1粘質シルト・粘土の攪拌。⑨灰10Y4/1シルト。やや粘性を帯びる。マンガン斑はわずかで、東へ粗粒化する。西へ薄く広がるのは⑨' 黒7.5Y2/1細砂混じりシルト。上層（④）からの染み込みによって黒色化する。マンガン斑・植物遺体は上層より少なく、粘性の強い土が上層より多い。⑨との層境ではオリーブ黒7.5Y3/1細砂混じり粘質シルトとなり、植物遺体をわずかに含む。

⑩暗オリーブ灰5GY4/1シルト～細砂。やや弱いラミナが見られ、粗砂わずかに含む。⑪オリーブ黒7.5Y3/1シルト～細砂・オリーブ黒7.5Y2/2シルトのラミナ。東端では灰5Y4/1シルトとなる。下層、④との層界では攪拌。植物遺体をわずかに含む。⑫上：オリーブ黒5Y3/2シルト～細砂、中：黄褐2.5Y5/3細砂、下：暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト。⑬灰10Y4/1シルト。ラミナはほとんど見られず、植物遺体をわずかに含む。

④上：黄褐2.5Y5/6細砂、中：オリーブ褐2.5Y4/3細～粗砂、下：灰オリーブ7.5Y5/2細～粗砂を主体としてラミナを形成する。上・中位はラミナが顕著で流れが強いが、下位は水平方向に弱いラミナが見られ、植物遺体も下位に多く、水平方向に堆積する。⑭灰10Y4/1上：細砂～下：シルト。ラミナ、植物遺体がわずかに見られ、西の層界で粗砂多い。

⑭上：黄褐2.5Y5/4細～粗砂。下：明黄褐10YR6/6。下層（⑦⑧'）との層界部分では灰10Y4/1シルトがたまり、水平方向のラミナが顕著。⑮黄褐2.5Y5/4細砂。シルトがやや混じる。⑯灰10Y4/1シルト～細砂・黄褐2.5Y5/4シルト～細砂の攪拌。植物遺体をやや含む。

西端⑰オリーブ褐2.5Y4/3細砂。⑱黒7.5Y2/1細砂混じり粘質シルト。マンガン斑・植物遺体を含む。⑲暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト～にぶい黄2Y6/4細砂のラミナ。上方では細砂が多い。⑳暗灰黄2.5Y4/2細砂（シルトやや混ざる）を主体とする。オリーブ黒10Y3/1粘土混じり細砂が層厚の厚い部分では下方に堆積し、薄い部分では攪拌する。

中央に広がるのは㉑。灰オリーブ5Y5/3細砂・暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂の攪拌。シルトがやや混じる。㉒灰オリーブ5Y4/2シルト・明黄褐2.5Y6/6細砂がラミナ顕著に形成。植物遺体の薄層が入り、炭化物やや含む。西方は粗粒化する。

㉓上：オリーブ黒10Y3/1シルト、下：オリーブ黒5Y2/2シルト。上方は粘性ややあり。炭化物は下方で多く含み、ややラミナが顕著。植物遺体をやや含む。㉔暗灰黄2.5Y4/2細砂～オリーブ褐2.5Y4/4粗砂～オリーブ黒10Y3/1細砂混じりシルト～にぶい黄2Y6/4細砂・暗オリーブ灰2.5GY4/1の攪拌でラミナ顕著。㉕暗オリーブ灰2.5GY3/1シルト。粘性ややあり、植物遺体・炭化物やや含む。

㉖によって分かれるのは㉗' オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト。ラミナ形成し、植物遺体・炭化物を多く含む。薄く広がる㉘' は南北断面より色調が暗くなり、暗オリーブ灰5GY4/1粘質シルト。

第6層（土壌化層・溝廃絶面：⑧⑨～⑩⑪） 土壌化した黒色シルト層。溝の最終機能面で、大溝が掘られた時期である。土壌化の見られない部分では第7層と共通する。層厚は5cm～20cm。

南北：溝を覆い、基本的に暗灰黄色のシルトで構成される。単一層は北半でのみ見られる。⑩暗灰黄2.5Y4/2シルト～粗砂の攪拌。盛土か。X=-149.645より南ではシルト～細砂となる。⑪暗灰黄2.5Y4/2シルト。北端では植物遺体を多く含む。⑫黄褐2.5Y5/3粗砂。⑬暗灰黄2.5Y4/2シルト。

東西：⑧はオリブ黒10Y3/1シルトとなる。粗砂・マンガン斑を少量、炭化物をわずかに含む。オリブ黒5Y3/2粘土がわずかに混じる（攪拌か?）。西辺では細～粗砂を含む。

第7層（第6面基盤層・盛土：⑧～⑨・⑩・⑪、⑫～⑬） 基本的に暗灰黄、砂混じりシルトで構成される盛土層である。盛土の単位は大きい。暗灰黄色、細砂混じりシルトを主体とする。層厚は、30～40cmで高台上に盛られるが、2区の東西では20cm弱となる。南の盛土上ではほとんど堆積しない。

南北：南側では⑭オリブ黒7.5Y3/2シルト～粗砂。X=-149.705付近では、⑮黒褐2.5Y3/2シルト～粗砂の攪拌。北端⑯～⑰は黄灰2.5Y4/1で、⑱シルト～粗砂、⑲シルト～細砂、⑳シルト、と下層へ細粒化する。溝によって削られる㉑はオリブ褐2.5Y4/3シルト。

溝を挟んで北では㉒黄褐2.5Y5/3シルト～粗砂の攪拌。落ち込みを経て南へ黄褐2.5Y5/3シルトへ漸次的に変化する。第8面292落ち込みには㉓黄褐2.5Y5/3シルトが堆積し、下半には木片を多く含む。その北は㉔暗灰黄2.5Y4/2シルト。攪拌が見られる。

東西：㉕灰オリブ5Y4/2シルト。㉖灰オリブ5Y4/2細～粗砂混じりシルト。西辺では炭酸カルシウムの結核を含み、溝肩部では粗砂ブロックを下半に多く含む。炭化物も含む。

第8層（黒色盛土層：㉗～㉘）（黒色）盛土層。調査区北側では上層が一部土壌化するが、暗オリブや灰オリブの粗砂混じりシルトの盛土を主体とする。南側では黒色の盛土の上半で、粗砂混じりシルト。ブロックを多く含む攪拌土で構成される。層厚は30cm前後だが、1区の東、第5～8層までの共通層では1m近い。

南北：㉙は土壌化層で黒褐2.5Y3/2シルト。炭化物・ビビアンナイトを少量含み、攪拌は弱い。粗砂を少量含む。南の㉙'では粗砂を含まない。㉚オリブ黒10YR3/2シルトで炭化物を含む。

南部では、砂やブロックの混じる黒色盛土が基本となる。㉛灰オリブ5Y4/2シルト～礫で、攪拌され粗砂が目立つ。灰2.5GY4/1粘土・暗オリブ灰2.5GY4/1シルトをブロック状に含み、後者は特に下層との層界に多い。

南半の溝（N）肩部では、上半に植物遺体とビビアンナイトを含み、中位に炭化物を含むやや黒い土が見られる。㉜暗オリブ5Y4/3シルト～粗砂で攪拌される。

252大溝の北側は㉝黒2.5Y2/1シルトに暗オリブ5Y4/3細砂ブロック（直径5～7cm）が混じる盛土で構成される。北側では黄褐色の盛土となる。

252大溝の南側では㉞黒5Y2/1シルト。灰オリブ5Y5/2のブロックが混じり、攪拌が著しい。㉟黒5Y2/1細砂混じりシルト。㊱黒10Y2/1シルト。黒7.5Y2/1・オリブ黒7.5Y3/1のシルトブロック、暗オリブ5Y4/3の細～粗砂ブロックを含む。㊲オリブ黒7.5Y3/2シルト。粘土ブロックを含む。㊳緑黒7.5GY2/1細～粗砂混じりシルト。黒色ブロック、炭化物を含む。

東西：㊴南北と同色同質だが、およそY=-36.790以東で中位に細かいラミナが顕著となる。297溝の埋土（N' 10）へ漸次的に変化する。㊵オリブ黒5Y3/2細～粗砂混じりシルト。暗オリブ5Y4/3の細砂ブロック、ビビアンナイト・炭化物含む。㊶オリブ黒5Y3/2シルト。灰オリブ5Y4/2シルト・細～粗砂ブロック・木片を含む。北端で288溝（O'）の肩部を形成するのは㊷上半灰オリブ7.5Y4/2シルト。下半は暗緑灰7.5GY4/1と暗くなり、粘性が強くなる。

第9層（（黒色）盛土層：㊸～㊹・㊺、㊻～㊼）（黒色）盛土層。調査区北部では、第8面の基盤層で暗灰黄色の粗砂混じりシルトを主体とする。調査区南側では黒色盛土の下半。第8層に比べて粗砂多く、ブロックやビビアンナイト・炭化物を多く含む傾向にある。層厚は第8層と同じく30cm前後であ



る。

南北：南端の高台部、黒色盛土層下半を構成する⑩は黒5Y2/1シルト。上層⑩と明確には分け難い。灰オリーブ5Y5/2のブロックが混じり、攪拌著しい。上層に比べて粗砂が多く、大きいブロックが含まれる（直径5～10cm）。⑨オリーブ黒7.5Y3/1細砂混じりシルト。やや明るい色のブロック（直径5cm）を含み、南端では炭化物が多く含まれる。ピットの埋土として下層へ貫入する。

252大溝の北の高台は⑩黒5Y2/1シルトで構成される。灰オリーブシルト・オリーブ黒粘土ブロックを含む。やはり上層との境ははっきりしない。

北半では、よく似た黄色の盛土で、南半のように炭化物やブロックは顕著ではない。⑪暗灰黄2.5Y4/2シルト。ビビアンナイトを含む。⑫黄灰2.5Y4/1シルト。ビビアンナイトを含む。⑬暗灰黄2.5Y4/2シルトを基本とし、にぶい黄褐10YR5/4細砂を多く含む盛土で攪拌が著しい。下層（⑭）との層境には溝からオーバーフローしたと思われる細砂も堆積する。⑭灰オリーブ5Y4/2シルト～粗砂。炭化物・ビビアンナイトを含む。攪拌された盛土である。

東西：東辺⑮はオリーブ黒7.5Y3/1シルト。灰オリーブ5Y4/2粘土ブロック（直径約1cm）を含む。炭化物をやや含み、粗砂は少ない。⑯オリーブ黒5Y3/2シルト。粗砂～細礫含み、炭化物・ビビアンナイトも少量見られる。⑰オリーブ黒5Y3/2粗砂混じりシルト。黒5Y2/1シルトブロックや粗砂をブロック状に含み、ビビアンナイトが見られる。⑱オリーブ黒7.5Y3/2粗砂混じりシルト。上半では粗砂を多量に含む。Y=-36.798あたりのくぼみでは粗砂が少なくなり、弱いラミナが見られる。⑲は東辺下半と西辺ではやや色調が暗くなり（オリーブ黒5Y3/1）、下部に炭化物を多く含む。

北端⑲灰オリーブ5Y4/2粗砂混じりシルト。灰オリーブ7.5Y4/2・黒7.5Y2/1のブロックが混じり、攪拌される。⑲はにぶい黄2.5Y6/4細～粗砂。流路のオーバーフローか。

第10層（黒色盛土層下：⑳～㉓・㉔・㉕、㉖～㉗） 盛土層。溝の掘削と盛土が開始される。黒褐～灰オリーブのシルトを主体とし、植物の地下茎が多く観察される。攪拌は上層に比べて弱く、細砂ラミナが一部に確認される。下層、第11層との層界には粗砂が一面に薄く堆積する。層厚は高台部で40～50cm、北半部では15cm前後を測る。

南北：南端の高台は自然堆積である。㉘上から灰7.5Y4/1シルト・黒7.5Y2/1シルト・灰オリーブ5Y4/2中砂がラミナを形成。㉙は盛土でオリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト。粗砂～中砂多い。暗オリーブ5Y4/3のブロックを多く含み、植物の根が多く見られる。

M（252大溝）の肩部では北から南へ盛られた様相が、ブロックや細砂の含まれる方向によって観察される。肩部では炭化物多く、一部では灰状のものも見られる。

中央の高台㉚も盛土である。オリーブ黒5Y3/2シルト。黒5Y2/1のシルト・粘質シルトブロックを含む。下半では暗オリーブ5Y4/3・オリーブ黒5Y3/2シルトブロックを含み、植物の根が多く見られる。炭化物も含まれる。北の溝肩部では南高台と同様、北から南へ盛られる様相が一部見られる。㉛灰オリーブ5Y5/3細～粗砂。黒色ブロックを含む。

北半の10層は南より薄く層厚25cm以下となる。北辺㉜暗灰黄2.5Y4/2粗砂。㉝黄褐2.5Y5/3粗砂。㉞灰黄褐10YR4/2細砂～シルト。炭化物を含む盛土。㉟オリーブ黒5Y3/2シルト。炭化物を含み、攪拌の見られる盛土。㊱暗灰黄2.5Y4/2シルト。ところどころに灰オリーブ5Y5/2細砂ラミナが見られる。炭化物を少量、ビビアンナイトを多く含む。㊲オリーブ黒5Y3/1シルト。短い細砂ラミナと、灰オリーブ5Y4/2・黒5Y2/1シルトブロックを含む。

⑬ オリーブ黒5Y3/1シルトと暗オリーブ5Y4/3細～粗砂がラミナをなし、炭化粒をやや含む。⑭ 灰オリーブ5Y5/3細～粗砂。第11層との層界で広く見られ、分層できない部分でも下位に細砂を含む。

東西：⑮は東西では暗オリーブ灰5GY3/1シルトを基本とする。中位でラミナが顕著に見られ、下半でオリーブ黒10Y3/1粗砂混じりシルトとなる。下層（⑯）との境には、細～粗砂が堆積し、西半溝肩部ではオリーブ黒5Y3/2シルトへと変化する。炭化物を含む。西端⑰はオリーブ黒5Y3/2シルト。細砂～粗砂を層状に含み、木片も含む自然堆積層。

なお、⑱の砂層を⑲と同一と考えるならば、南半部の盛土⑲・⑳以下を第10面と捉えることもできる。

第11層（自然堆積層：⑲～⑳、㉑・㉒～㉓） 第11層以下は自然堆積層で、基本的に上方へ細粒化する。オリーブ黒～灰シルトを主体とし、ラミナが顕著である。第12層がT.P.0.0m以下へ下がっていく部分では、植物遺体薄層を含む粘質シルトが堆積し、第11-2面を形成する。03-1-2区では南半で地震による貫入が上下の層に認められる。層厚は第12面上では20～30cmを測る。

北辺㉔～㉖は植物遺体薄層を含む粘性の強いシルトである。㉔黒褐2.5Y3/2。㉕黒褐10YR3/2。㉖暗灰黄2.5Y4/2。㉗暗灰黄2.5Y4/2細砂ラミナ。

南ではラミナが顕著な㉘が堆積する。基本的にはオリーブ黒5Y3/1～灰5Y4/1粘質シルトと暗オリーブ5Y4/3～オリーブ5Y6/6細～粗砂がラミナをなす。T.P.+1.0～+0.8mあたりで、やや粒径の粗い粗砂が間層として入り、地震による攪拌が顕著に見られる。下半部には木片を含む。

第11-2層は、北半では植物遺体薄層を基準とすれば㉙以下で、㉚の流路の存在を考慮に入れば㉛以下で形成される。また、南半では堆積環境の変化が見られる㉜以下で形成される。

北半、一連の植物遺体薄層は㉙暗灰黄2.5Y4/2粘質シルト。㉚では黄灰2.5Y4/1となる。㉛は暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト～細砂で、ラミナをなす。㉜灰オリーブ5Y4/2でX=-149.690以北で細砂となり㉝へと漸次的に変化する。それより南ではシルトとなる。

また、第8面272落ち込み（㉞）より南では炭化物・ビビアンナイトを含む。㉞は流路と思われ、暗オリーブ灰5GY3/1シルト・黄褐2.5Y5/3細砂の細砂がラミナをなす。

中央部に堆積する㉟は黒褐色2.5Y3/2シルトで、炭化物・ビビアンナイトを少量含む。㊱は黄灰2.5Y4/1シルト。南では植物遺体を含む。

南半に広く堆積する㊲は黒7.5Y2/1の粘質シルトで弱いラミナが見られ、ヒシの実を多く含む。㊳はオリーブ黒10Y3/1粘質シルトで、植物遺体を多く含み、灰オリーブ5Y4/2の踊り層が上層と攪拌する。㊴はオリーブ黒10Y3/1粘質シルトで植物遺体を多く含む。

東西：基本的には南北と共通する。㊵は5Y4/1シルトで粘性がやや強い。ビビアンナイト含む。東では㊶黒10Y2/1粘質シルト。ビビアンナイト含む。㊷オリーブ黒7.5Y3/1シルト～細砂がたまる。西端㊸オリーブ黒5Y3/1～暗オリーブ灰5GY4/1シルト。中位に植物遺体や黒色ブロックが帯状に入る。

第11-3層北半では粒径が大きく変化する㊹の上面を11-3層として捉えた。㊹黄褐2.5Y5/3の粗砂～礫である。

第12層（土壌化層：㊺） 土壌化層。10～20cmの層厚で土壌化が強い。黒～オリーブ黒のシルトを主体とし、一部に地割れが生じている。近畿自動車道建設に伴う調査時（大阪文化財センター）の第一黒色土に相当すると考えられる。㊻黒褐2.5Y3/1～暗灰N3/シルト。西端では細砂がブロック状に混じる。

第13層（自然堆積層、第12面基盤層：㊼～㊽） 自然堆積層。青灰シルト～粗砂を主体とする。ほぼ

無遺物層でローリングを受けた土器細片が出土する程度。

西端では、㊸暗オリーブ5Y4/4～緑灰5GY5/1細砂・オリーブ黒7.5Y3/2シルト～細砂がラミナを形成。東の層と切り合い関係にあるため、流路の可能性がある。㊹暗オリーブ灰5GY4/1細砂混じりシルト。西辺ではT.P.+0.6m付近で亀裂が入り、細砂が入る。㊺オリーブ5Y5/4・灰オリーブ5Y6/2細～粗砂のラミナ。ラミナは顕著だが、乱れている。

### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 03-1-2区盛土層・第0層の遺物 (図45 写真図版72)

現代の盛土層である。

当初設計では、現地表面のT.P.+4.6mから0.8m下、すなわちT.P.+3.6mまで重機で掘削する予定であった。しかし、先行調査した03-1-1区での堆積状況から、さらに数10cm掘り下げることが可能であると判明し、結果的に重機で1.0～1.3m除去した。この過程で、土師器1片と弥生土器21片が出土した。さらに調査区北東部では、遺物としては取り上げなかったが人頭大の角礫が多く含まれていた。

さらに、その下層にもわずかながら盛土層が残っていたため、人力により第1面まで掘り下げた。この間の第0層からの出土遺物は、磁器95片、陶器78片、瓦122片、瓦器・瓦質土器81片、須恵器1765片、土師器1334片、弥生土器137片、金属製品2点、石斧1点、サヌカイト剥片3点、砥石2点、中礫4個、焼土塊1点、土製人形1点、陶製人形1点、骨・歯4点、計3631点である。

図45-20001 (写真図版72) は土人形。型抜きで作られ、線のはっきりした精緻な造形である。宝珠と錫杖をもつ地藏像か。

20002 (写真図版72) は金属製の鈴。直径約2.5cm、厚みは約0.2mmと薄い。重さは現状で8.4g。紐孔は直径約2mmと考えられるが、錆によってふさがれる。体部中央には、接合部分がめぐり鈴孔は紐と直交方向にある。

20003 (写真図版72) は軒丸瓦。直径約4mmの珠文と、巴文の円頭部が残る。外縁は低く幅広い。18世紀代の所産であろう。

20004 (写真図版72) は須恵器杯蓋。天井部は高く、まるみをもつ。天井部と口縁境の稜は鋭さを欠き、口縁端部は内傾する凹面をなす。復原口径12.3cm、器高5.1cm。TK23～TK47型式 (I型式第4～5段階) であろう。20005 (写真図版72) も須恵器杯蓋。天井部は高く、ややまるみをもつ。口縁端部は内傾する凹面をなす。ヘラケズリは天井部の2分の1以上で、体部には強い回転ナデを施す。復原口径12.1cm、器高4.3cmでTK23型式 (I型式第4段階) に位置づけられる。自然釉が全体にかかり、天井部に他の個体の破片が付着する。

20006は須恵器杯身。たちあがりが高く内傾し、端部は内傾する凹面をなす。ヘラケズリは体部の3分の1ほどにとどまる。復原口径10.8cm、器高5.0cm。TK23型式 (I型式第4段階) に比定される。

20007は砥石。砥面は平坦な2面で、図上で斜位方向に擦痕が目立つ。残存長7.50cm、短軸5.61cm、重さ86.6g。

20008 (写真図版72) は抉り入りの柱状石斧。緑泥片岩製で、断面形は台形をなす。後主面は平滑に研磨されるが、両側面と全主面は磨かれず成形時のままである。後主面には、基部の近くと刃部から約

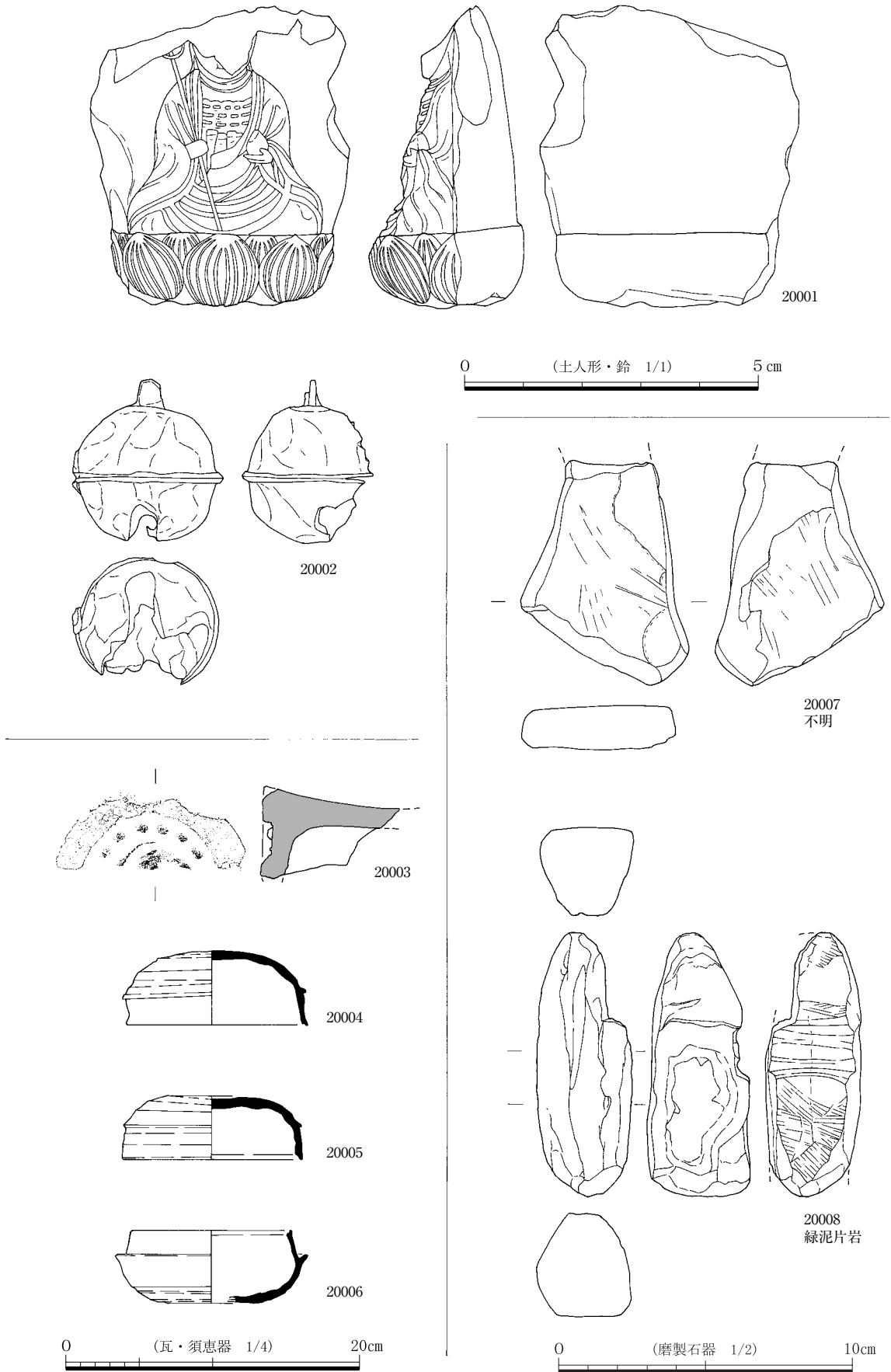


図45 03-1-2区第0層出土遺物



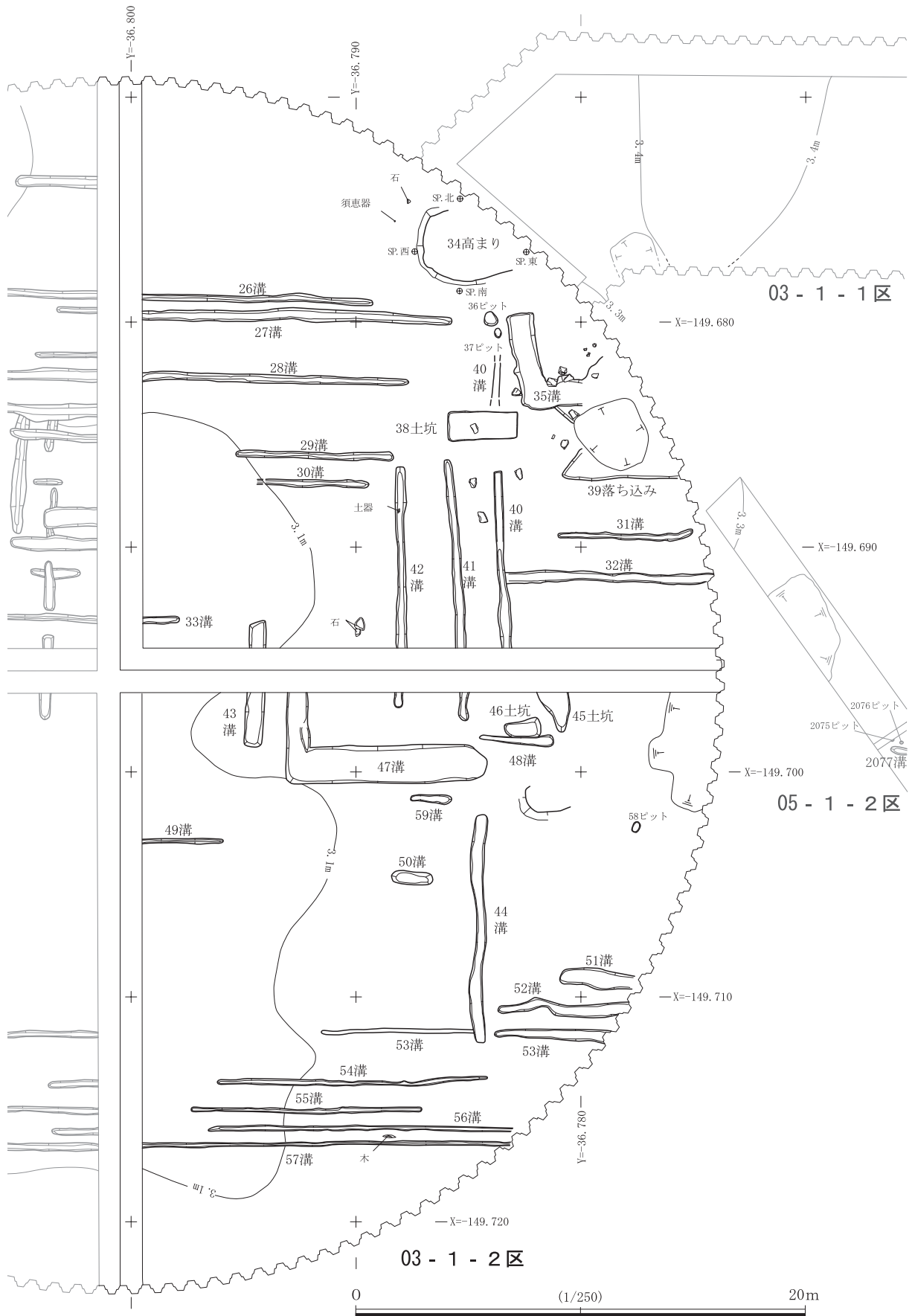


図46 03-1-2区第1面

3.5cmの部分に、敲打痕とやや摩滅したような凹みが観察される。また、挟り部分には両脇に浅い溝が走り、擦り切りによって加工されたものと推測される。刃を欠いており、製品として使われたものであろう。残存長8.94cm、幅3.19cm、厚み3.5cm、重さ148.6g。

このほかに第0層以下の側溝などから、磁器4片、陶器10片、瓦2片、瓦器・瓦質土器3片、須恵器110片、土師器83片、弥生土器28片、サヌカイト剥片1点、計241点出土した。

(2) 03-1-2区第1面の遺構と遺物 (図46・47 写真図版14・15)

オレンジ色の粗砂混じりシルト層の上面である。

面の高さはおよそT.P.+3.1mで、ほぼ平坦である。遺構として、高まり1か所、溝57条、土坑4基、ピット6個、落ち込み1か所、計69か所(遺構番号26~59・63~97)を調査した。

**34高まり** 調査区北東隅、35溝の北側にある。東西5m以上、南北約3.5mの不整楕円形の範囲が、周囲の第1面よりも4~10cm盛り上がっていた。何らかのマウンドとも推定されたので、第1面で記録後、東西・南北に断ち割って確認した。その結果、図47の2~4の層は周囲の状況と同じであったが、1の層は周囲に分布する第1層に比べやや硬く、須恵器36片、土師器112片、弥生土器3片、計151片と、細片ではあるが土器の包含も多かった。

第1面の景観の特色は、幅20~50cm程度の比較的細く、深さ10cm程度までの浅い溝が、東西あるいは南北にはしることである。

調査の順に従って、03-1-2区東半の東西方向の溝を26~33・48~57・59溝、南北方向の溝を40~44溝、L字状の溝を35・47溝とし、調査区西半の東西方向の溝を63~84溝、南北方向の溝を85~89・91~93・97溝とした。

35溝は調査区北東隅、47溝は調査区中央やや東部に位置し、両者とも平面「L」字形を呈する。それらの周辺から人頭大の角礫が出土しているが、角礫石は機械掘削した第0層にも多く含まれていた。

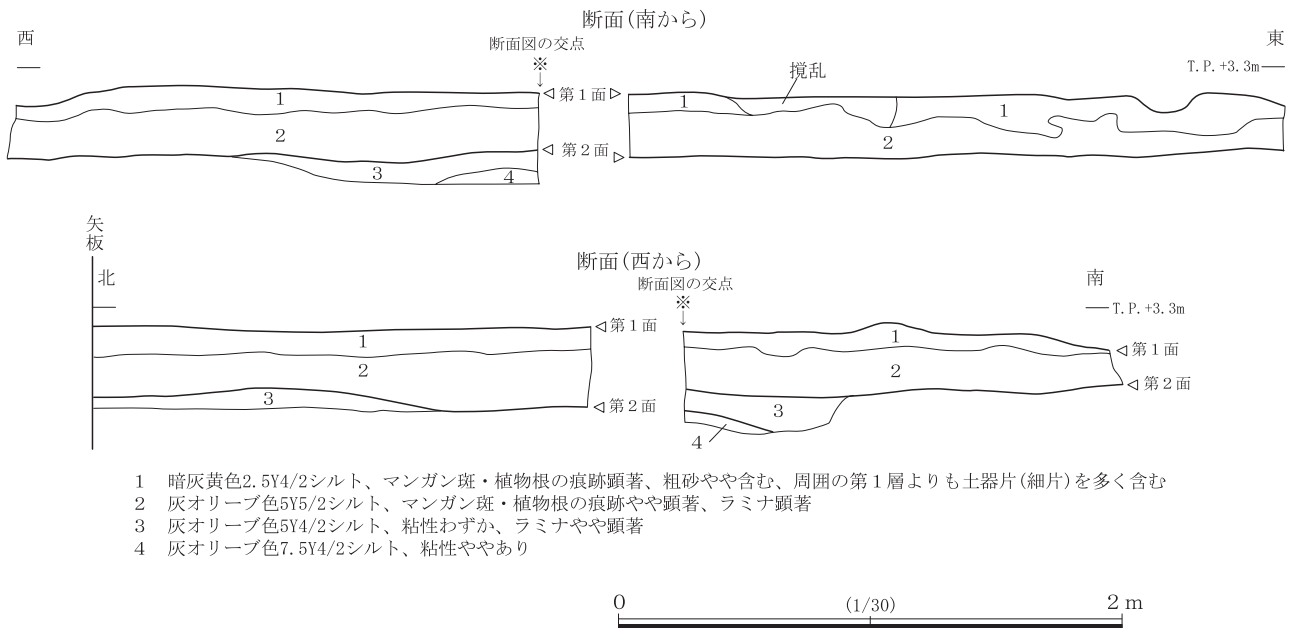


図47 03-1-2区第1面34高まり断面

表4 03-1-2区第1面溝一覧(1)

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数			
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		土師器	須恵器	その他	合計
26	8L-10h他	東西	(31.7)	23~35	11	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む		2		2
27	8L-10h他	東西	17.5	26~58	10	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む		2		2
28	8L-10i他	東西	(27.6)	27	35	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2	6		8
29	8L-10i他	東西	7.0	26~42	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
30	8L-10i・8L-9i	東西	(4.6)	23~36	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
31	8L-8i・9i	東西	6.0	21~35	?	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
32	8L-8j・9j	東西	(9.4)	32~55	8	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	13	24		37
33	8L-10j・9L-1j	東西	7.9	23~34	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1			1
35	8L-10i他	L字形	(5.9)	100~121	15	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む			弥生土器1	1
40	8L-9i・9j	北	(7.9)	28~56	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む		1	弥生土器1	2
41	8L-9i・9j	北	11.7	31~47	11	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
42	8L-9i・9j	北	10.7	29~46	11	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
43	8L-10j	北	5.7	73~82	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
44	8M-9a・9b	北	10.3	37~62	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2	1		3
47	8L-10j・9j他	L字形	(11.5)	95~175	8	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む		5		5
48	8L-9j	東西	3.2	16~45	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	25	15		40
49	8M-10a	東西	3.7	18~23	?	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
50	8M-9a	東西	1.8	55~60	7	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
51	8M-8a・9a	東西	(3.3)	57~92	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1	1		2
52	8M-9b・8b	東西	(6.0)	30~62	7	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	6			6
53	8M-9b・8b	東西	(13.2)	15~60	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	5	1		6
54	8M-10b・9b	東西	12.0	13~25	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2	2		4
55	8M-10b・9b	東西	10.3	14~26	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
56	8M-10b・9b	東西	(13.5)	15~27	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2			2
57	9M-1b他	東西	(33.8)	13~30	9	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1	1		2
59	8M-9a	東西	1.9	55~60	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	3	1		4
63	9L-1h	東西	(3.6)	45~52	9	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2	2		4
64	9L-1i	東西	(2.8)	21~27	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
65	9L-1i	東西	(4.7)	35~70	10	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
66	9L-1i	東西	(3.9)	29~46	8	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
67	9L-1i	東西	1.31	22~24	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
68	9L-1i	東西	(2.4)	79~93	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
69	9L-2i・1i他	東西	(24.9)	47~70	8	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1		瓦器・瓦質1	2
70	9L-1i	東西	(2.2)	24~49	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
71	9L-2j	東西	7.1	30~48	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1			1
72	9L-3j	東西	1.11	18~22	3	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0



表4 03-1-2区第1面溝一覧(2)

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数			
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		土師器	須恵器	その他	合計
73	9M-2a他	東西	(18.7)	26~80	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
74	9M-2a・1a	東西	11.7	50~85	7	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
75	9M-2a・1a	東西	(3.4)	28~36	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
76	9M-2b・3b	東西	(11.7)	24~43	4	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
77	9M-2b・1b	東西	(17.2)	23~32	7	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
78	9M-2b・3b	東西	(9.4)	22~38	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
79	9M-2b・1b	東西	(17.2)	25~35	7	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
80	9M-2b・1b	東西	(18.1)	16~30	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1	1		2
81	9M-1b	東西	(2.1)	30	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
82	9M-2b・1b	東西	(11.4)	25~30	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
83	9M-2b・1b	東西	5.5	20~31	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
84	9M-2b・1b	東西	4.6	15~22	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	1			1
85	9L-1i	北	(1.4)	30~45	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
86	9L-1i・1j	北	10.3	24~42	16	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
87	9L-1i	北	(5.3)	42~63	10	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2	2		4
88	9L-1j・2j	北	(2.4)	28~35	3	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
89	9L-2j・2i	北	(6.8)	37~45	9	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む			磨石1	1
91	9L-2j	北	2.0	24~49	6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
92	9L-3i	北	5.9	28~38	7	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
93	9L-3j	北	(3.9)	28~53	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
97	9L-2j	北	(3.3)	27~47	5	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0

35・47溝以外の大部分の溝は、東西あるいは南北の主軸方向の違いはあるが、基本的に直線的に伸びる。埋土はいずれも第0層と同じ黄灰2.5Y5/1粗砂混じりシルト。出土遺物は須恵器や土師器の細片がほとんどである。これらの溝は、条里地割りに即した耕作に伴ういわゆる素掘り溝であろう。

個々の溝の主軸方位・寸法・埋土・出土遺物などは、表4にまとめた。

38土坑 調査区北東部に位置する。平面長方形で、東西310cm、南北130cm、深さ12cm。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂混じりシルト。出土遺物は、須恵器2片、土師器6片、計8片。

45土坑 調査区東部に位置する。側溝掘削により北部は失われた。平面不整形で、北北西-南南東を主軸とする。長径2m以上、短径130cm、検出面からの深さ8cmを測る。埋土は第0層と同じ褐灰7.5YR5/1シルト。出土遺物は、須恵器4片、土師器4片、計8片。

46土坑 45土坑の南西隣にある。平面楕円形で、東西方向を主軸とする。長径162cm、短径85cm、深さ11cm。埋土は第0層や45土坑と同じ褐灰7.5YR5/1シルト。出土遺物なし。

90土坑 調査区西部に位置する。東西方向に伸びる71溝に切られており、南部を欠く。平面隅丸方形と推定され、東西93cm、南北は58cm以上108cm以下。出土遺物はない。

ピットを6個検出した。

表5 03-1-2区第1面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数			
				長径	短径	深さ		土師器	須恵器	その他	合計
36ピット	8L-9h・9i	楕円		66	56	8	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
37ピット	8L-9i	楕円	北	45	30		黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
38土坑	8L-9i	長方	東西	310	130	12	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	6	2		8
45土坑	8L-9j	不整	北北西		130	8	褐灰7.5YR5/1	4	4		8
46土坑	8L-9j	楕円	東西	162	85	11	褐灰7.5YR5/1				0
58ピット	8M-8a	楕円	北北東	50	33	13	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む	2	2		4
90土坑	9L-2j	隅丸方	東西	93		6	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
94ピット	3L-3j	円		45	40	11	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
95ピット	9M-1b	楕円	東西	35	22	2	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0
96ピット	9M-1b	円		36	34	2	黄灰2.5Y5/1、粗砂混じる、マンガン斑・炭含む				0

調査区北東部、34高まりの南に、36・37ピットが隣接して存在する。58ピットは調査区南東部に、94ピットは西部に位置する。95・96ピットは、調査区南部やや西にあり、95ピットは80溝の底で検出された。36・37・58ピットは、一応平面楕円形に見えるが、その輪郭は不明瞭で、埋土も上層の第0層と区別できない。人為的な掘り込みではなく、水溜りのようなものと考えられる。58ピットから須恵器2片と土師器2片が出土したが、他のピットからの出土遺物はない。埋土や分布の状況からみると、いずれも柱穴とは言いがたい。

以上の土坑・ピットのデータを表5にまとめた。

39落ち込み 調査区北東隅、35溝の南東側に位置する。北部は攪乱されている。南辺は東西方向に5m以上あるが、西辺は北東-南西にのびる。深さは3cm程度と浅い。埋土は第0層と同じ黄灰2.5Y5/1粗砂混じりシルト。出土遺物はない。

(3) 03-1-2区第1層の遺物 (図48・写真図版72)

磁器1片、瓦器・瓦質土器3片、須恵器337片、土師器196片、弥生土器9片、計546点出土した。出土遺物とその組成から、古墳時代～近代の包含層と考えられる。

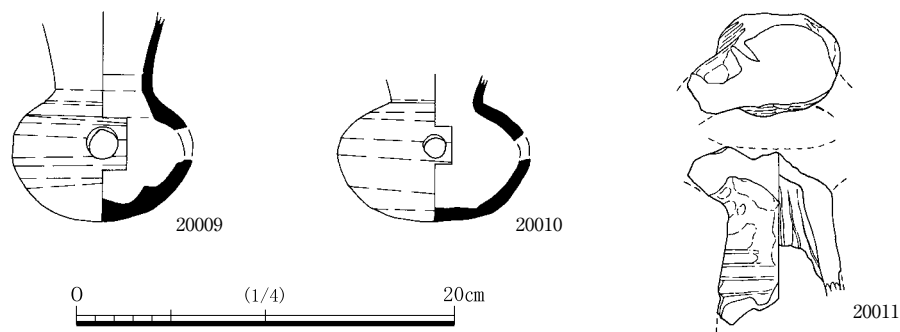
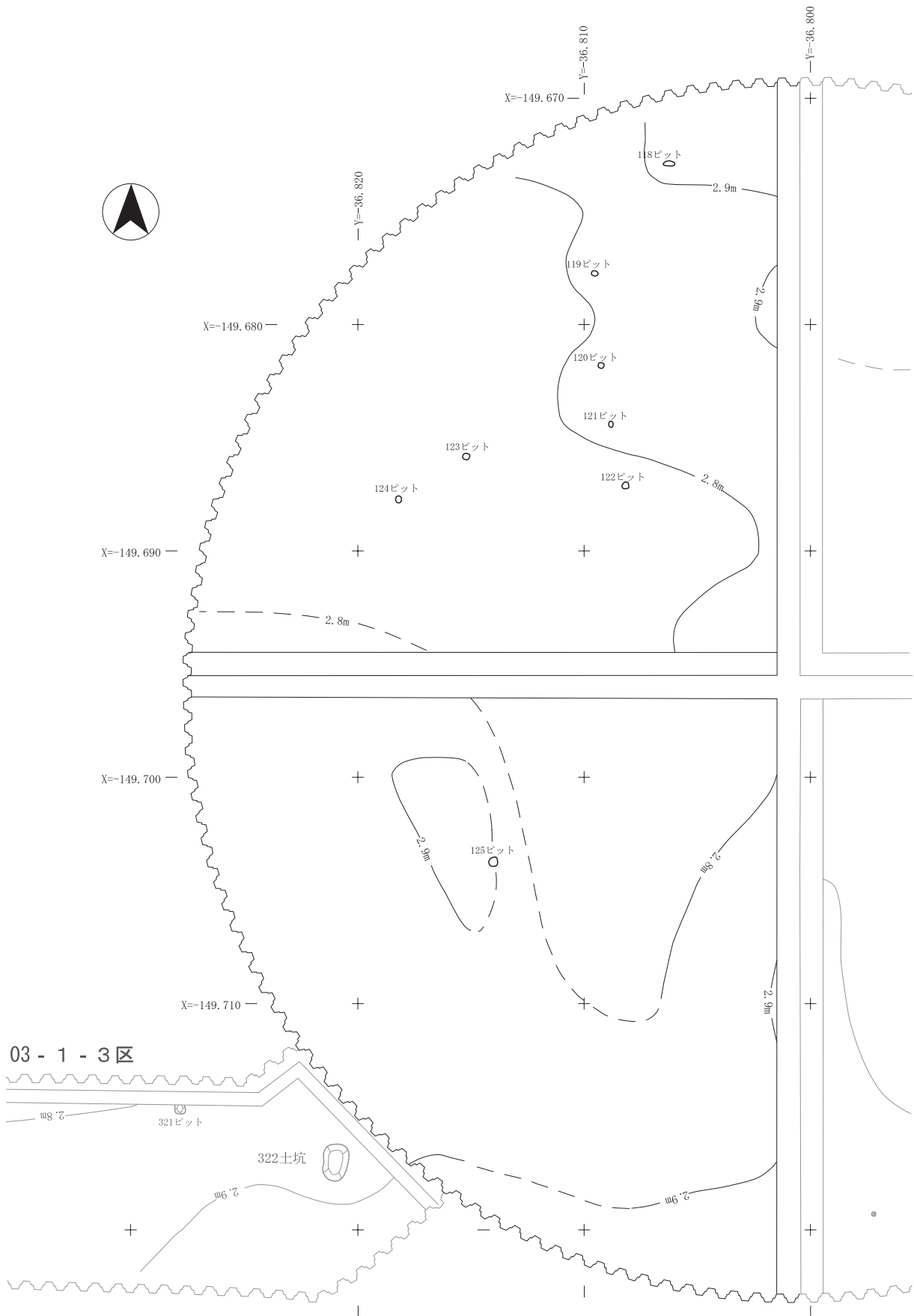


図48 03-1-2区第1層出土遺物



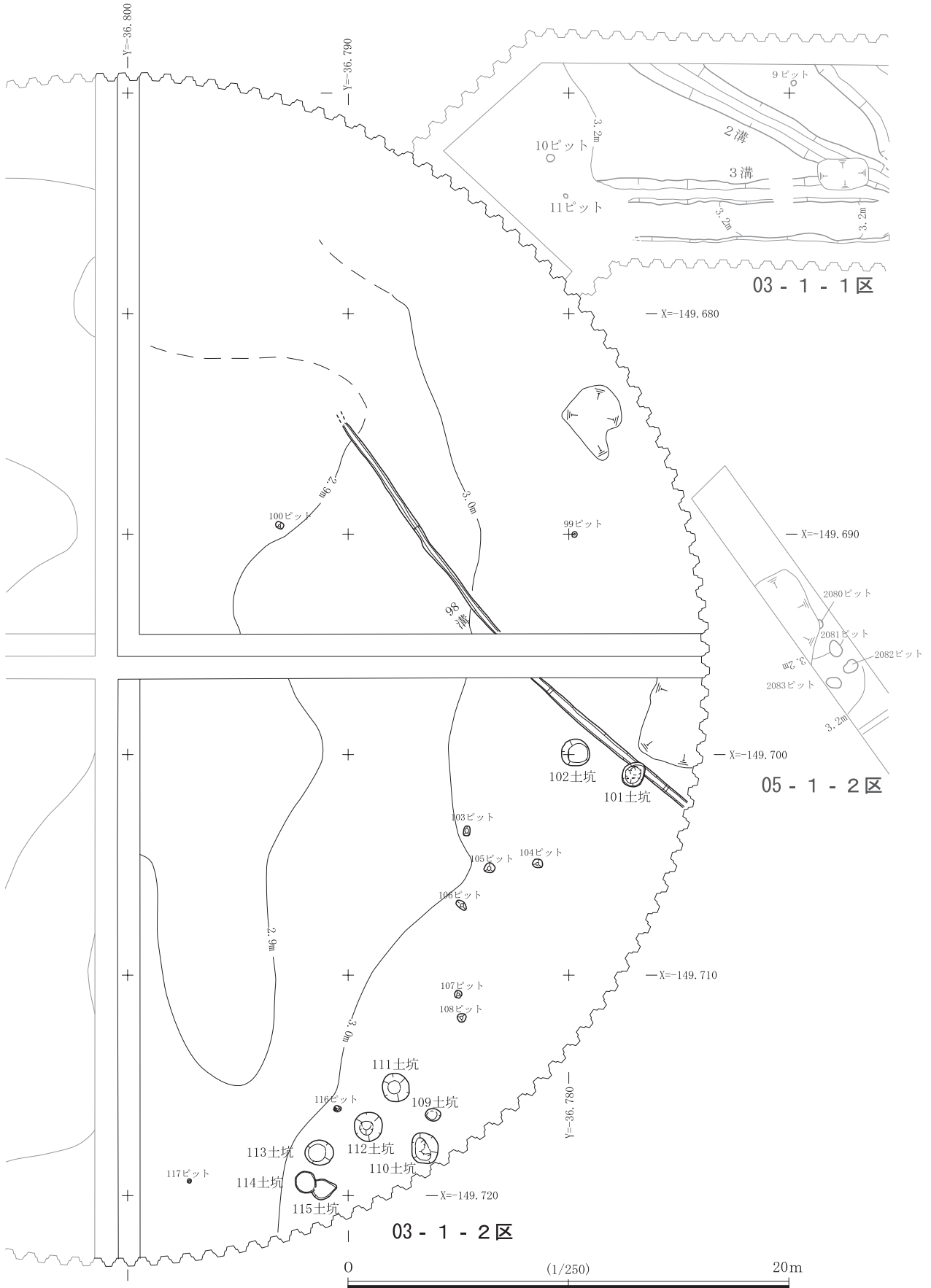


図49 03-1-2区第2面

図48-20009・20010(写真図版72)は須恵器<sup>はつ</sup>甕。20009の最大径は体部中位にあり、底部は丸い。ヘラケズリ後、回転ナデが体部全面に施される。頸部を欠くため時期を特定できないが、TK47~TK10型式(I型式第5段階~II型式第3段階)のうちにおさまらるだろう。20010の頸部は細くしまり、体部の最大径を中位にもつ球体で、底部は丸い。体部上位に沈線1条をめぐらし、中位から底部までヘラケズリ調整を行う。TK10型式の新段階(MT85型式・II型式第3段階)に相当しよう。

山陰系の土製支脚も出土した(20011・写真図版72)。下方に広がる裾と突起を欠くが二又のものと推定される。脚部には横方向のタタキとユビオサエが施され、内面にはシボリメが観察できる。庄内~布留式期のものであろう。

#### (4) 03-1-2区第2面の遺構と遺物(図49~53 写真図版16・17)

砂層上面である。

面の高さは、およそT.P.+2.8~3.2mで、調査区中央部から西部にかけて低く、北部・南部・東部が高い傾向にある。溝1条、土坑9基、ピット18個、計28か所の遺構(番号98~125)を調査した。

98溝 調査区東部に位置する。主軸方位は南東-北西で、わずかに南西に張り出すが、ほぼ直線的にのびる。検出長24m、幅20~43cm、深さ13cm、埋土は、北部で灰7.5Y4/1シルト、南部では灰オリーブ5YR4/2細砂で、全体にマンガン斑が顕著に見られる。出土遺物はない。

調査区南東部で、直径1m数10cm程度の円形を基本とする土坑を9基検出した。

そのうち101・102土坑の2基は、調査区東部、98溝の近くに位置する。

101土坑(図50・写真図版17) 98溝を切っており、それより新しい。主軸方位を北北東-南南西とする平面不整円形で、長径119cm、短径98cm、深さ22cm。埋土は2層に分かれる。大型哺乳類の骨のみ出土した。

102土坑(図50・写真図版17) 101土坑の西北西に約1.6m離れて位置する。平面円形で、直径121~130cm、深さ33cm。埋土は3層に分かれる。出土遺物なし。

109~115土坑(写真図版17)の7基は、調査区南部に分布する。

109土坑(図51) 他の8基の土坑に比べて小さく、ピットとの判別に迷う。平面円形だが東西にやや長く、東西径69cm、南北径57cm、深さ21cm。埋土は単層で、灰5Y4/1シルトに、マンガン斑が顕著に見られる。土師器2片のみ出土した。

110土坑(図51) 南北に主軸を持つ隅丸方形に近い平面円形をなす。南北径136cm、東西径119cm、深さ21cm。出土遺物は、土師器3片。

111土坑(図52) 平面円形で、直径121~133cm、深さ18cm。埋土は単層で、暗灰黄2.5Y5/2シルト。出土遺物なし。

112土坑(図52) 平面円形で、直径126~133cm、深さ19cm。埋土は2層に分かれる。出土遺物なし。

113土坑(図53・写真図版17) 平面円形だが東西にやや長く、東西径129cm、南北径113cm、深さ20cm。埋土は2層に分かれる。出土遺物なし。

114土坑と115土坑は切りあっており、114土坑の方が新しい。

114土坑(図53) 平面円形で、直径93~102cm、深さ5cm。埋土は単層で、暗灰黄2.5Y5/2シルト。出土遺物はない。

115土坑(図53) 平面不整円形で、長径116cm、短径92cm、深さは3cmと浅い。埋土は単層で、灰

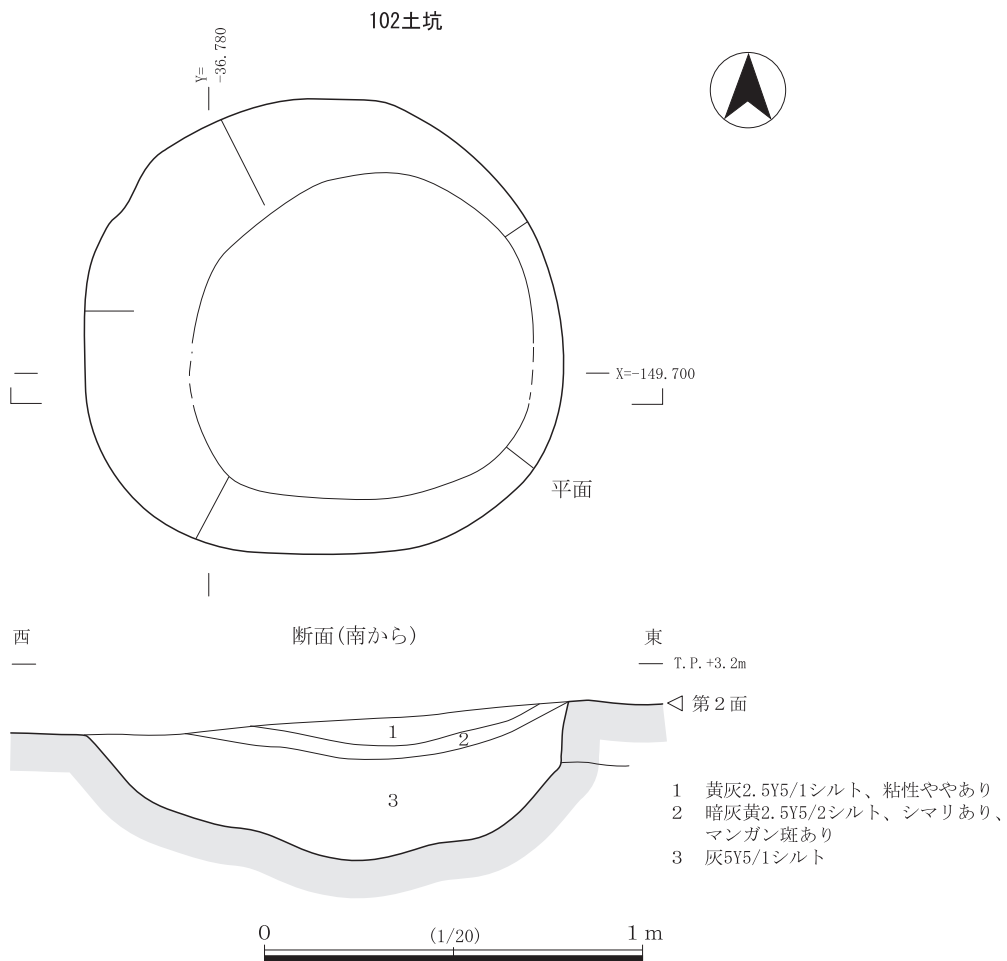
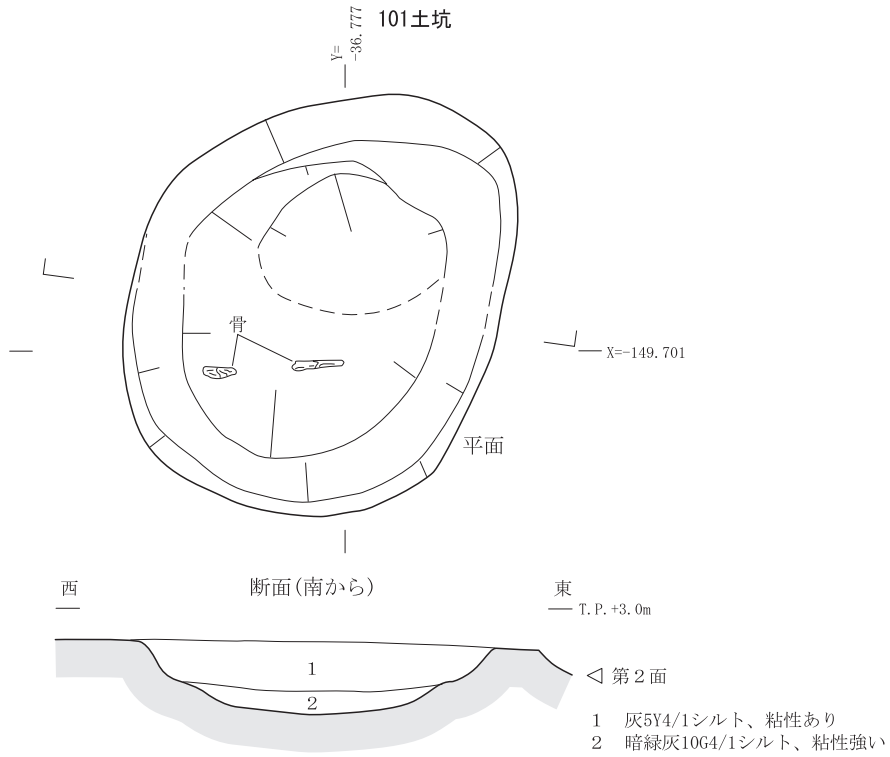


図50 03-1-2区 第2面101・102土坑

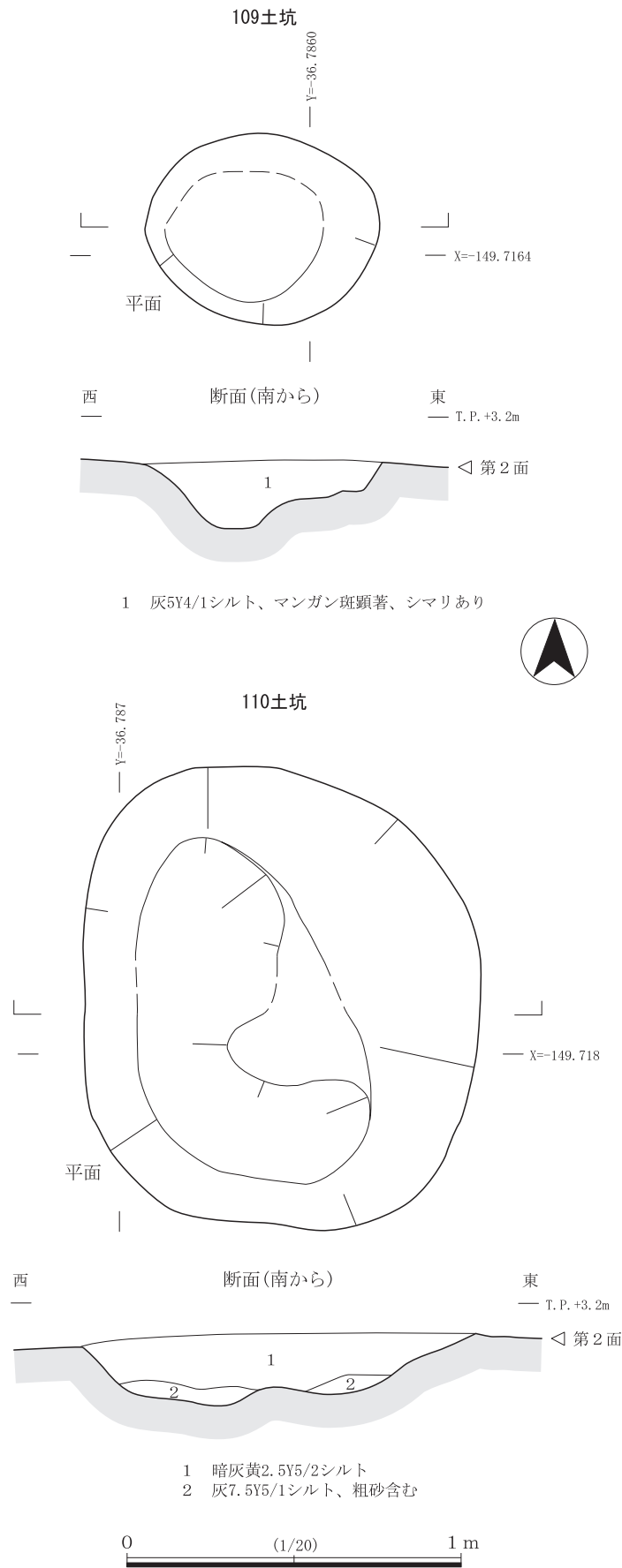


図51 03-1-2区 第2面109・110土坑

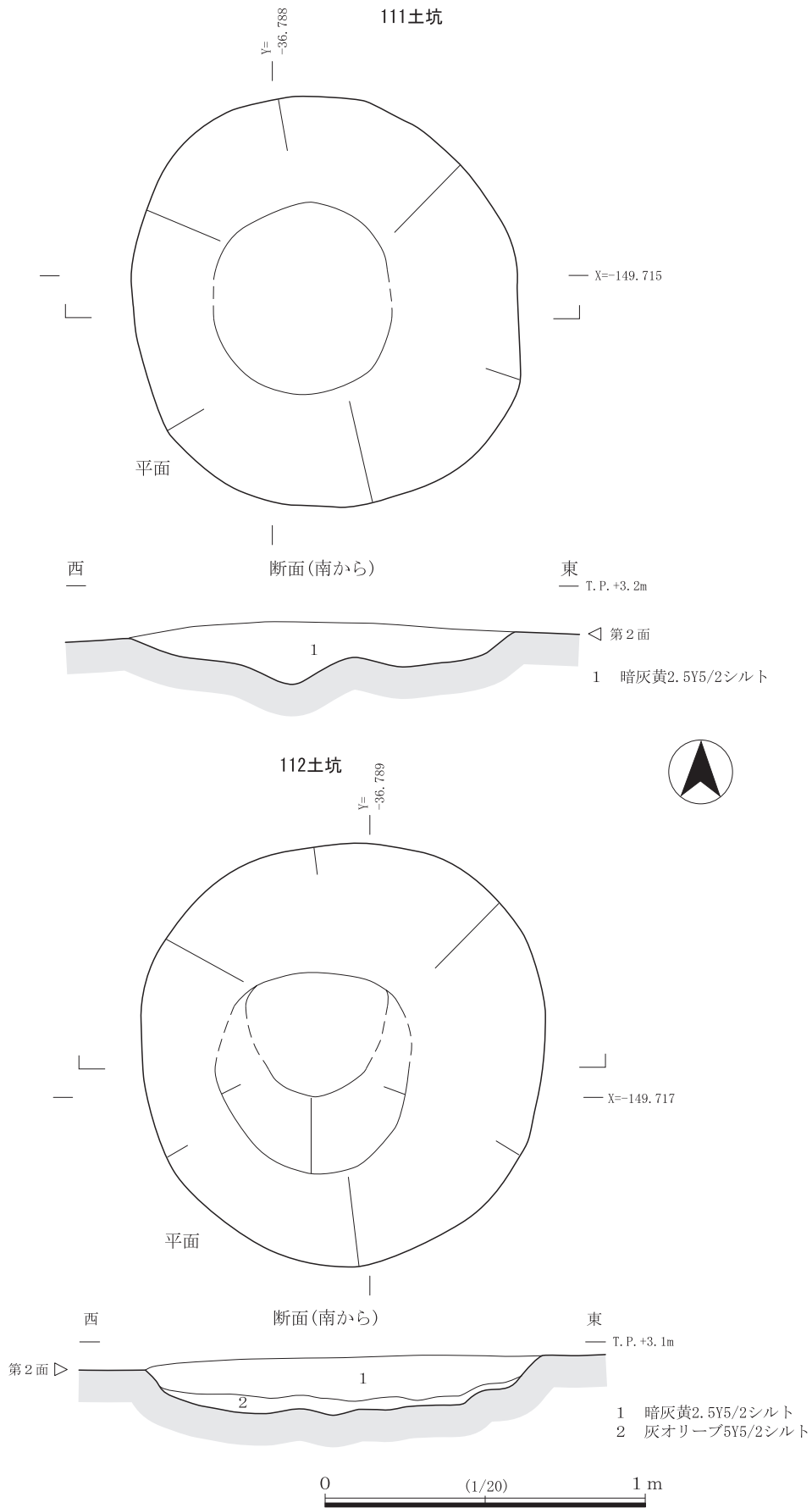


図52 03-1-2区 第2面111・112土坑



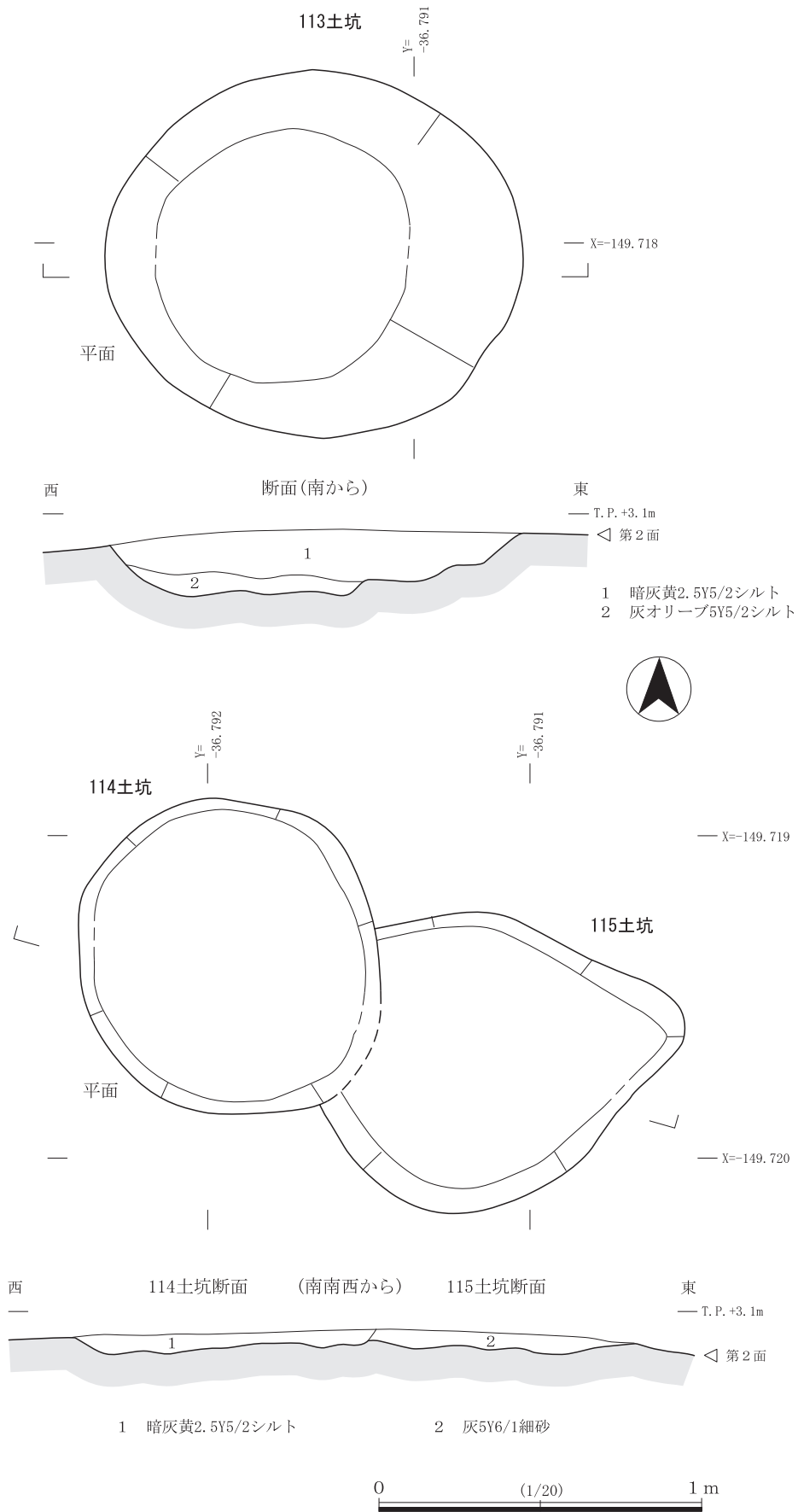


図53 03-1-2区 第2面113・114・115土坑

表6 03-1-2区 第2面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数		
				長径	短径	深さ		土師器	その他	合計
99ピット	8L-8i・8j	円		25	23	13	暗灰黄2.5Y4/2	2		2
100ピット	8L-10i	円		39	34	5	暗灰黄2.5Y4/2			0
101土坑	8M-8a	不整円	北北東	119	98	22	図50参照		骨1	1
102土坑	8M-8a他	円		130	121	33	図50参照			0
103ピット	8M-9a	楕円	北	40	30	16	暗緑灰7.5GY4/1粘土、マンガン斑顕著	1		1
104ピット	8M-9a	円		45	40	9	暗灰黄2.5Y4/2、粘土混じる、マンガン斑顕著			0
105ピット	8M-9a	円		50	45	17	暗灰黄2.5Y4/2、粘土混じる、マンガン斑顕著	1		1
106ピット	8M-9a	楕円	北西	55	34	6	暗灰黄2.5Y4/2、粘土混じる、マンガン斑顕著			0
107ピット	8M-9b	円		38	33	16	灰5Y4/1、マンガン斑あり			0
108ピット	8M-9b	円		38	36	4	暗灰黄2.5Y4/2、粘土混じる、マンガン斑顕著			0
109土坑	8M-9b	円		69	57	21	図51参照	2		2
110土坑	8M-9b	円		136	119	21	図51参照	3		3
111土坑	8M-9b	円		133	121	18	図52参照			0
112土坑	8M-9b	円		133	126	19	図52参照			0
113土坑	8M-10b	円		129	113	20	図53参照			0
114土坑	8M-10b	円		102	93	5	図53参照			0
115土坑	8M-10b・10c	不整円		116	92	3	図53参照			0
116ピット	8M-10b	円		34	28		灰5Y4/1、マンガン斑あり			0
117ピット	8M-10b	円		23	21	28	黄灰2.5Y4/1粘土			0
118ピット	9L-1h	楕円	東北東	48	21	6	①灰白7.5Y7/1 ②灰7.5Y4/1、粘性あり ①②ともマンガン多く含む			0
119ピット	9L-1h	円		26	22	5	暗灰黄2.5Y4/2、粘性弱い、マンガン含む			0
120ピット	9L-1i	円		25	22	35	灰オリーブ5Y5/2と暗灰黄2.5Y4/2細砂粘性弱い、その2種がラミナをなす、マンガン含む			0
121ピット	9L-1i	円		24	21	4	暗灰黄2.5Y4/2粘性弱い、マンガン含む			0
122ピット	9L-1i	楕円	北	35	27	5	暗灰黄2.5Y4/2粘性弱い、マンガン含む			0
123ピット	9L-2i	円		27	24	16	①黄灰2.5Y5/1細砂 ②灰5Y4/1粘性弱い、マンガン含む			0
124ピット	9L-2i	楕円	北	29	23	10	暗灰黄2.5Y4/2粘性弱い、マンガン含む			0
125ピット	9M-2a	円		44	43	5	灰7.5Y4/1粘土、マンガン含む			0

5Y6/1細砂。出土遺物なし。

ピットを18個調査した。個々のピットのデータは、表6にまとめた。

99・100ピットは、調査区北東部にあり、98溝をはさんで、約13m離れて、ほぼ東西に並ぶ。

103～117ピットは、調査区南東部、上述の9基の土坑群の近くに存在する。中でも103～108ピットの6個は、101・102土坑と109～115土坑との間に分布し、特に103・106・107・108ピットは芯々距離3.3m、4.0m、1.1mをもって北から南に並び、104ピットと105ピットは、2.2m離れて東西に並ぶ。

118～124ピットは調査区北西部に、125ピットは南西部に位置する。119～122ピットは芯々距離4.1m、2.6m、2.8mで北から南に並ぶ。

これらのピットのうち、土師器が99ピットから2片、103ピットから1片、105ピットから1片、それぞれ出土した。

#### (5) 03-1-2区第2層の遺物

瓦1片、須恵器3片、土師器3片、弥生土器12片、サヌカイト剥片1点、計20点出土した。

#### (6) 03-1-2区第3面の遺構と遺物 (図54・写真図版18)

第2層の砂層を除去して検出した面で、基本的に第4面の上に自然堆積したシルト層の上面である。

図面にすると溝や畦などの遺構にも見えるが、第4面の遺構の反映、あるいは、第2層の砂層が運ばれた際に形成された地形と考えられる。

面の高さはT.P.+2.4～2.5mで、南東側がわずかに高い傾向にある。高まりとした部分は、周辺よりも10～20cm高い。起伏については、溝状落ち込み6条、畦状高まり7条、高まり16か所、計29か所(遺構番号131～159)に番号を付けて記録した。

溝状落ち込みと畦状高まりを先に記述する。

132溝状落ち込み 調査区東部に位置する。屈曲しながらも南北に主軸をもち、北方の03-1-1区15溝状落ち込みにつながる。03-1-2区での検出長30m以上、幅1.1～3.0m。深さ26～44cm。埋土は、灰7.5Y4/1で粘性をややもつシルトと細砂のラミナ。出土遺物は、須恵器1片、弥生土器29片、サヌカイト剥片1点、計31点である。

132溝南半部の東側に133畦状高まり、西側に134畦状高まりがある。両畦とも132溝状落ち込みに従って、南北に伸びることを基調としながらも西側に弧状に屈曲する。

133畦状高まり 検出長約10.5m、上面の幅は14～58cm、高さは南部でT.P.+2.58m、北部でT.P.+2.68mと北に向かうにつれて徐々に高まる。第3面の高さはこの畦状高まりの南方でT.P.+2.48m、中部東側から北方にかけてはT.P.+2.50mなので、畦状高まりの比高は南部で約10cm、中部以北では10～18cmとなる。平面図をみると中部やや南で細くくびれている部分があるが、第3面との比高は周辺と同様に10cmあり、水口とはいいがたい。

134畦状高まり 検出長約12.5m、上面の幅は15～55cm、高さは南部でT.P.+2.58m、中部でT.P.+2.62m、北部でT.P.+2.57mと中部でわずかに高くなる。第3面の高さはこの畦状高まりの南方でT.P.+2.44m、中部西側でT.P.+2.50～2.55m、北方ではT.P.+2.56mなので、比高は南部で14cm、中部で10～12cm程度、そこから北部に向けては徐々に低くなる。

137溝状落ち込み 調査区北東部に位置する。主軸方位は北西-南東。北西側に135高まりが、南東側に

138高まりがそれぞれ存在する。検出長約5m、幅0.9～1.7m、深さ14cm。埋土は、第2層と同様に3層に分かれる。上層はにぶい黄2.5Y6/4細砂（シルトやや含む）、中層は暗オリーブ灰5GY4/1細砂（シルトわずか）で褐灰10YR4/1粘土の薄層が中位に入る、下層は灰7.5Y4/1シルト（粘性ややあり）と細砂のラミナ。出土遺物はない。

140溝状落ち込み 調査区北部に位置する。屈曲しながらも北西 - 南東を主軸とする。検出長約30m、幅0.5～1.6m、深さ4～27cm。北西に向かうにつれて幅・深さともに小さくなる。埋土はにぶい黄2.5Y6/4細砂。出土遺物はない。

142溝状落ち込み 調査区南部から中央部にかけてのび、北北東 - 南南西を主軸とする。検出長約34m、幅2.7～4.5m、深さ27～31cm。埋土は、基本的に第2層や137溝状落ち込みと同じだが、中央でマンガン斑多く、X=149.690付近では粗砂ブロックが帯状に入る。出土遺物はない。

142溝南半部の東側に145畦状高まり、西側に144・157畦状高まりがある。いずれも142溝状落ち込みと同様に、北北東 - 南南西を主軸とする。

145畦状高まり 検出長約5.5m、上面の幅は69～94cm、高さはT.P.+2.56～2.58mとほぼ平坦。第3面の高さはこの畦の東側でT.P.+2.62mから北に向かって緩やかに傾斜し、145畦状高まり北東部ではT.P.+2.50m程度と低くなる。畦状高まりの比高は、中部で1～2cmと小さく、北端では水口状に開口しているため10cm程度と大きい。

144畦状高まり 長さ約16mで、南部で156高まりにつながる。上面の幅は46～150cm、高さは南部でT.P.+2.77m、中部でT.P.+2.73mとわずかに低くなり、北部では再びT.P.+2.78mとなる。第3面の高さはこの畦の西方一帯ではおよそT.P.+2.55mなので、畦状高まりの比高は10cm程度である。

157畦状高まり 144畦状高まりからの南方約4mに位置する。長さ約2.5m、上面の幅は南部で18cm、北部では30cmと広がる。高さは北部と南部でT.P.+2.52m、中部でT.P.+2.56mとやや高まる。第3面の高さはこの畦の周辺で西方一帯ではおよそT.P.+2.42mなので、畦状高まりの比高は10～14cmである。144畦状高まりに比べて上面が約20cm、周辺も10数cm低い。

147溝状落ち込み 調査区北部に位置する。北東 - 南西を主軸とする。検出長約7m、幅1.6～2.0m、深さ16cm。140溝状落ち込みと交差しており、147溝状落ち込みの方が深い。平面検出状況からは同時に埋没したと認められる。埋土は第2層と同じ。出土遺物はない。

154溝状落ち込み 調査区西部から中央部にかけて位置する。主軸方位は西南西 - 東北東。検出長約33m、幅1.1～2.2m。隣接する153畦状高まりないし155畦状高まりからの深さ12～30cm。埋土は、灰7.5Y4/1シルトと細砂のラミナ。出土遺物なし。

154溝状落ち込みの北側に沿って153畦状高まり、南側に155畦状高まりがある。

153畦状高まり 検出長約30m、東側で143高まりにつながる。上面の幅は20～52cm、高さは西部でおよそT.P.+2.55m、東部でT.P.+2.45mと東に向かうにつれて徐々に低くなる。第3面の高さはこの畦北側の西部でT.P.+2.45m、東部でT.P.+2.36mなので、畦の比高は南部で約10cmである。

155畦状高まり 検出長約29m、上面の幅は32～57cmで、西側が幅広い傾向にある。上面の高さはT.P.+2.52～2.66m。第3面の高さはこの畦の南方の東側でT.P.+2.39m、西側でT.P.+2.52m。すなわち、153畦同様に畦上面も周辺の第3面も西側が高く、東側が低い傾向にある。

16か所の高まりに番号を付けて記録した。方形周溝墓のマウンドなどを想定して調査したが、平面・断面での観察の結果、人為的な盛土ではなく自然地形の高まりと判断した。



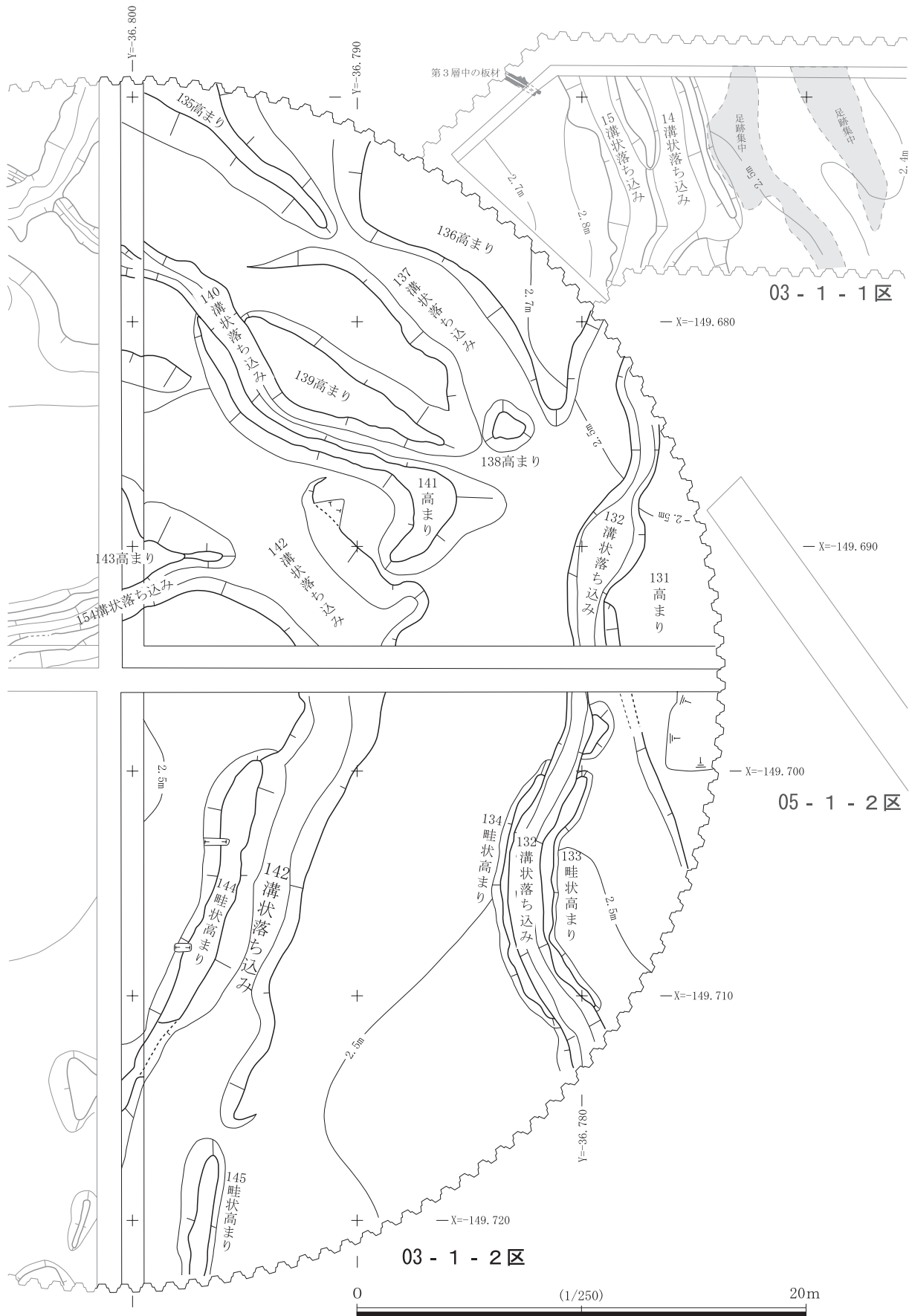


図54 03-1-2区第3面

(7) 03-1-2区第3層の遺物 (図55・56 写真図版73)

須恵器1片、弥生土器887片、削器2点、楔3点、サヌカイト剥片8点、砥石4点、大礫1個、木杭1点、木1片、種子1点、計909点出土した。弥生土器が主体を占める。

図55-20012 (写真図版73) は小形化した長頸壺と考えられる。外面はハケ調整で、横ナデによって口縁部へ続く屈曲を作る。V様式であろう。内面、体部上半には黒色の付着物が観察される。光沢や皺から漆と判断した。20013 (写真図版73) は小形の壺で、口縁部がごくわずかに外反する。長頸壺を模したものか。外面は細かなハケ調整によって整えられる。V様式に相当しよう。

20014は高杯脚部。中空で、透かし孔は二方に残存する。裾はやや広がり、端部は肥厚しない。V様式前半か。20015は鉢体部片。口縁部が段状に肥厚するもので、内外面ともにハケ調整。IV-1~3様式に位置づけられるが、肥厚した部分に文様がなく、新しい傾向をもつ。

20016・20017は壺口縁。20016は上下に拡張した受け口状口縁をもつものだが、粘土帯の接合部で破損して下部を欠く。クシ描き簾状文と円形刺突文、扇形文で飾られる。III-2様式。20017の口縁端部はやや肥厚してクシ描き簾状文で飾られる。II様式末~III様式初頭であろう。

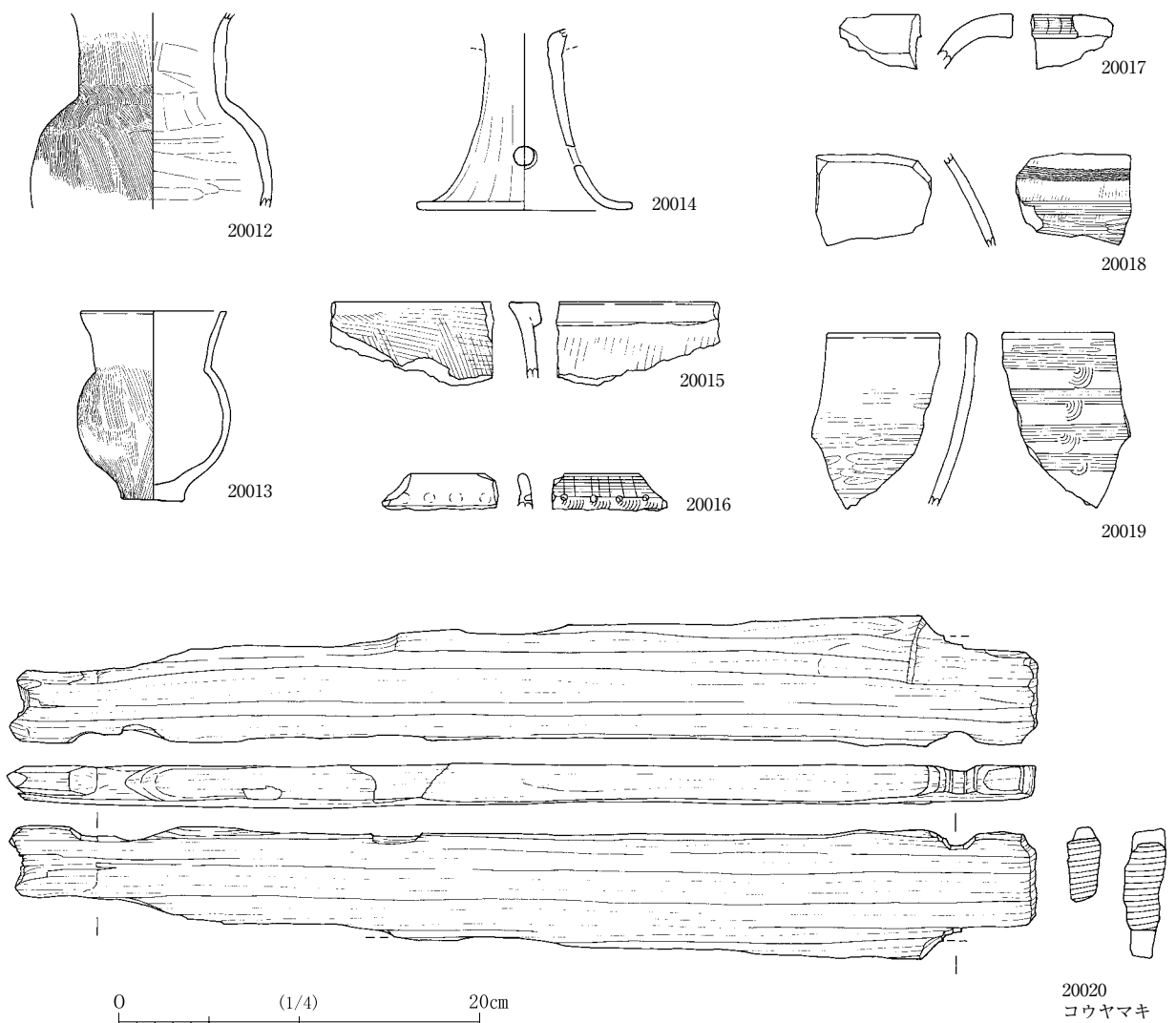


図55 03-1-2区第3層出土遺物(1)

20018は壺の体部片。ピッチの細かいクシ描き波状文と、直線文がめぐる。20019は鉢。深い体部をもつもので、クシ描き文による擬似流水文が描かれる。いずれもⅡ様式。

20020は両側に削り込みのある板材である。柁目取りで、長辺57.0cm、短辺7.0cm、厚み2.0cmを測る。織機の部材の可能性はあるが、断定できない。樹種はコウヤマキ。

図56 - 20021～20023は砥石。20021は断面円形で、磨製石斧の基部の可能性もある。20022は粘板岩製で全面を砥面とする。とくに左側一面は敲打と摩滅によって凹み、よく利用されている。また、図の下面では、断面V字の溝が縦横に走り、金属器の研ぎを推測させる。20023は砂岩製。砥面は2面で斜方向に擦痕が観察される。

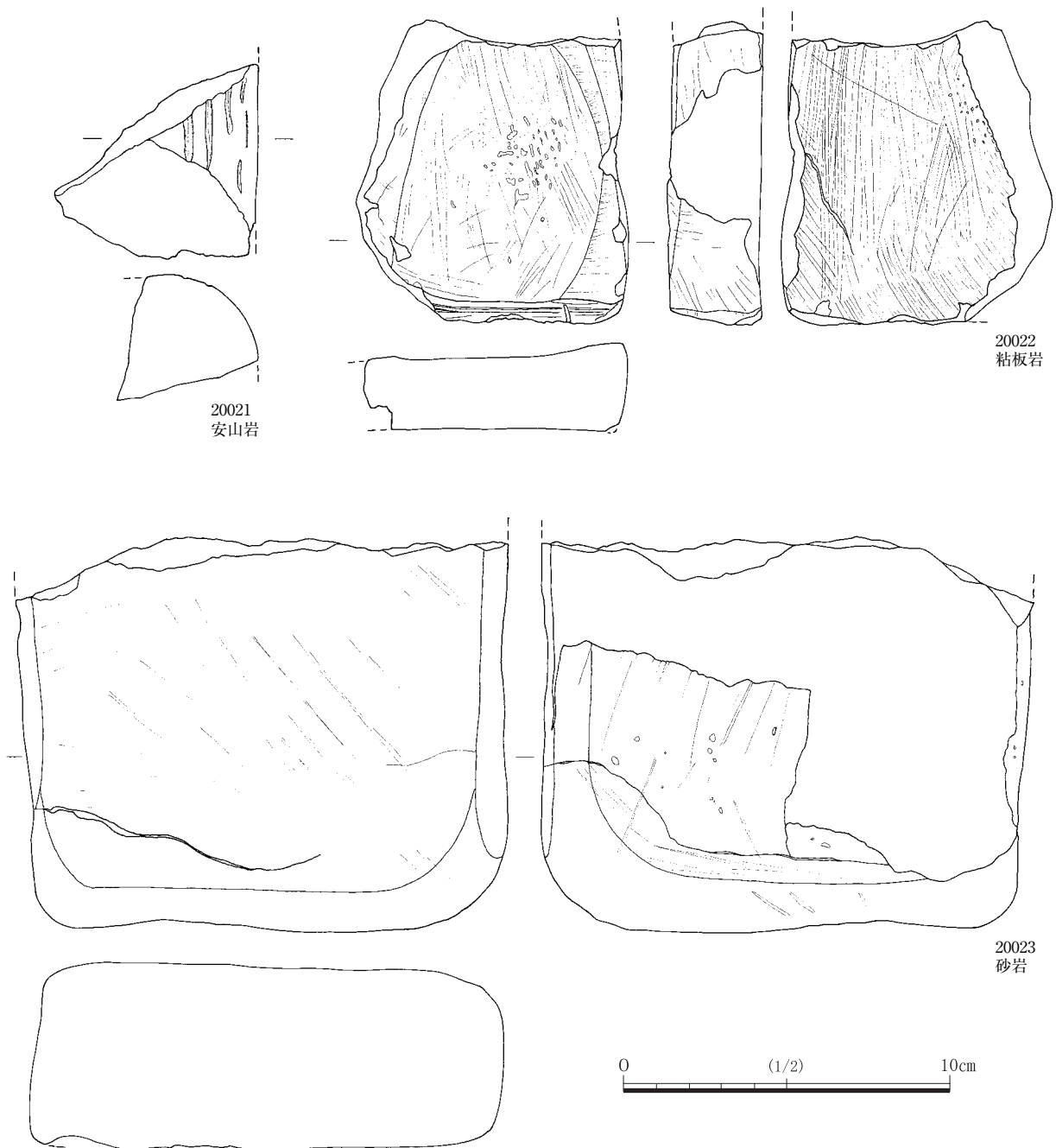
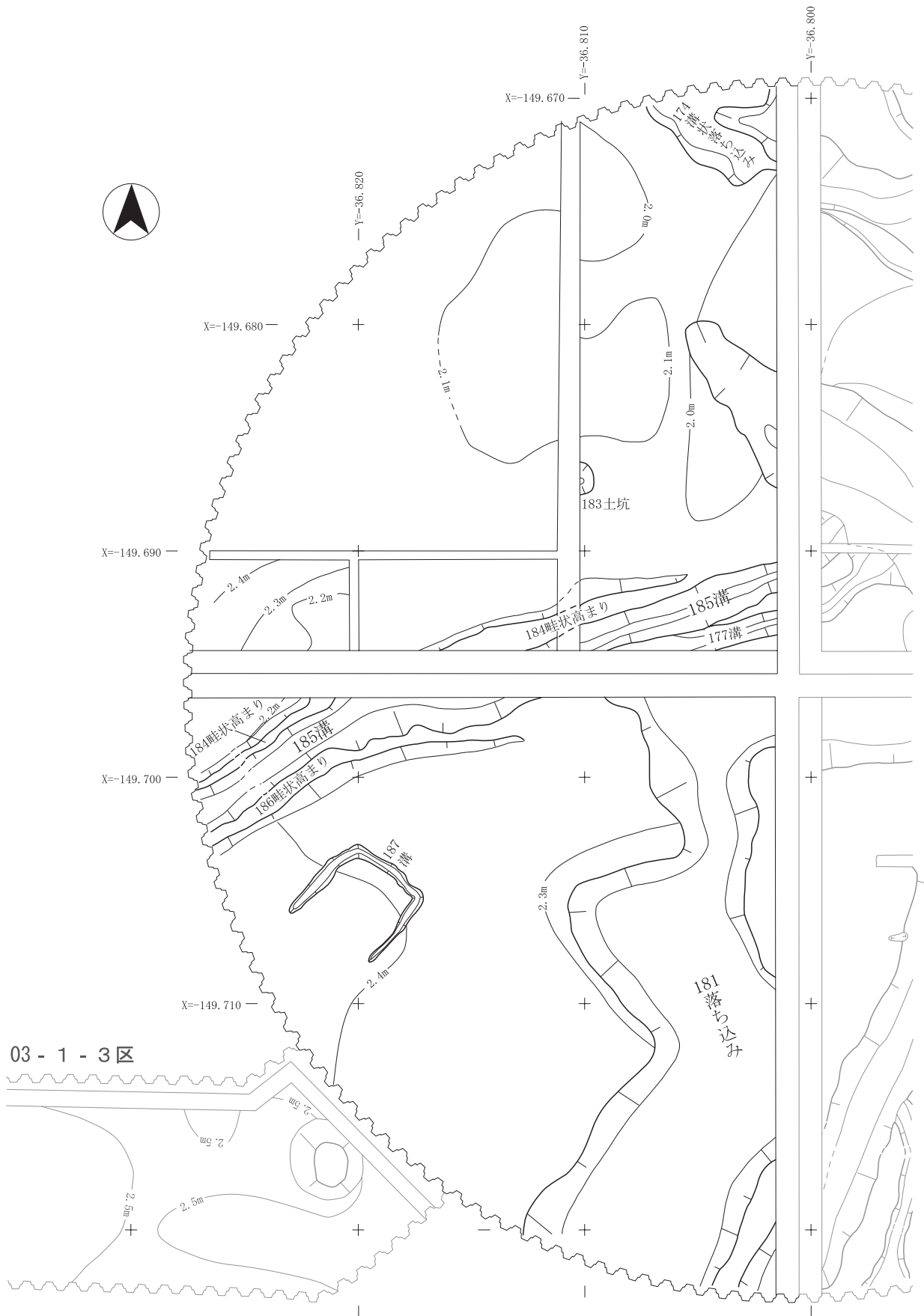


図56 03-1-2区 第3層出土遺物(2)





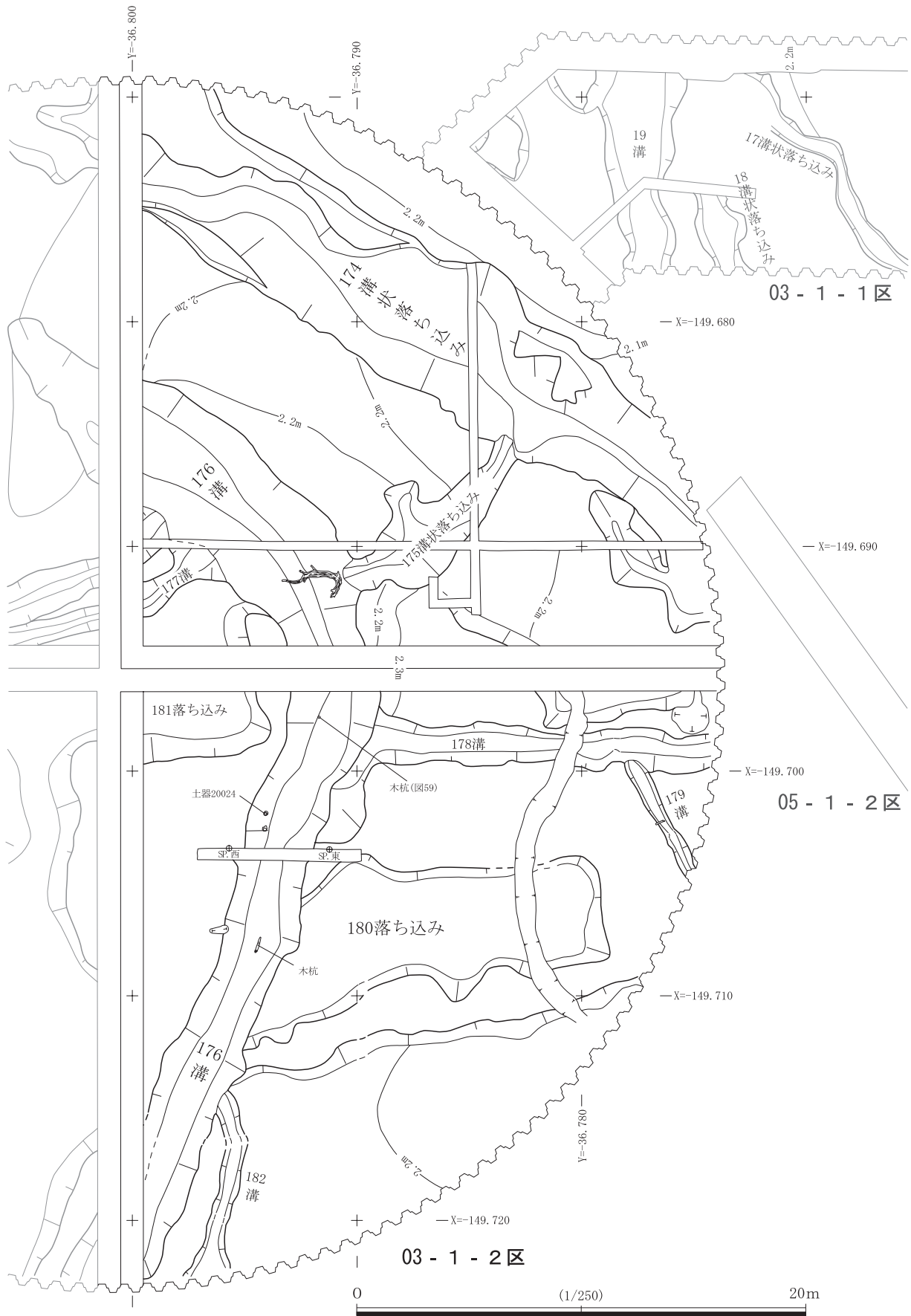


図57 03-1-2区第4面

また、第3層以下の側溝などからは、陶器2片、須恵器2片、土師器2片、弥生土器704片、転用土製円板1点、石器類14点、計725点出土した。

その内訳は、第3～5層相当の東辺側溝から、弥生土器36片、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、計38点。

第3～5層相当の南辺側溝・セクションベルトから、弥生土器135片、石庖丁1点、サヌカイト剥片1点、計137点。

第3～6層相当の側溝から、弥生土器333片、石庖丁2点、不明石製品1点、サヌカイト剥片6点、計342点。Ⅱ～Ⅲ様式に属する淀川水系あるいは近江系の甕の口縁などが出土。

第3層以下約1m掘り下げた（地点により達する下層の層位が異なる。図43・44参照）南側溝から、弥生土器178片、石庖丁1点、計179点。クシ描き扇形文の施された壺の肩部片が出土している。

第3層以下の側溝から、陶器2片、須恵器2片、土師器2片、弥生土器22片、楔1点、計29点である。

(8) 03-1-2区第4面の遺構と遺物 (図57～60 写真図版19・20・73)

水田土壌と考えられる黒色土壌化層の上面である。

面の高さは、北西部がT.P.+2.0～2.1mと低く、東半がおおむねT.P.+2.2mで、南西部はT.P.+2.3～2.4mと高い傾向にある。溝7条、畦状高まり2か所、土坑1基、溝状落ち込み2条、落ち込み2か所、計14か所の遺構（番号174～187）を調査した。

なお、当03-1-2区ではないが、南西側の03-1-3区第4-2面で水田畦畔を検出している。

溝とそれに接する畦状高まり、土坑、溝状落ち込み、落ち込みの順に述べる。

176溝 (図58・写真図版20) 調査区南部から中央部にかけて北北東にのび、さらに北西に曲がる。第3面142溝状落ち込みの下層にあたる。検出長約50m、幅2.5～5.5m、深さ38～61cm。埋土は6層に分かれる。出土遺物は、弥生土器348片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式4片、Ⅲ様式1片）、石庖丁1点、石鎌1点、削器1点、サヌカイト剥片6点、叩き石1点、サヌカイト原礫1点、木杭2本、計361点である。

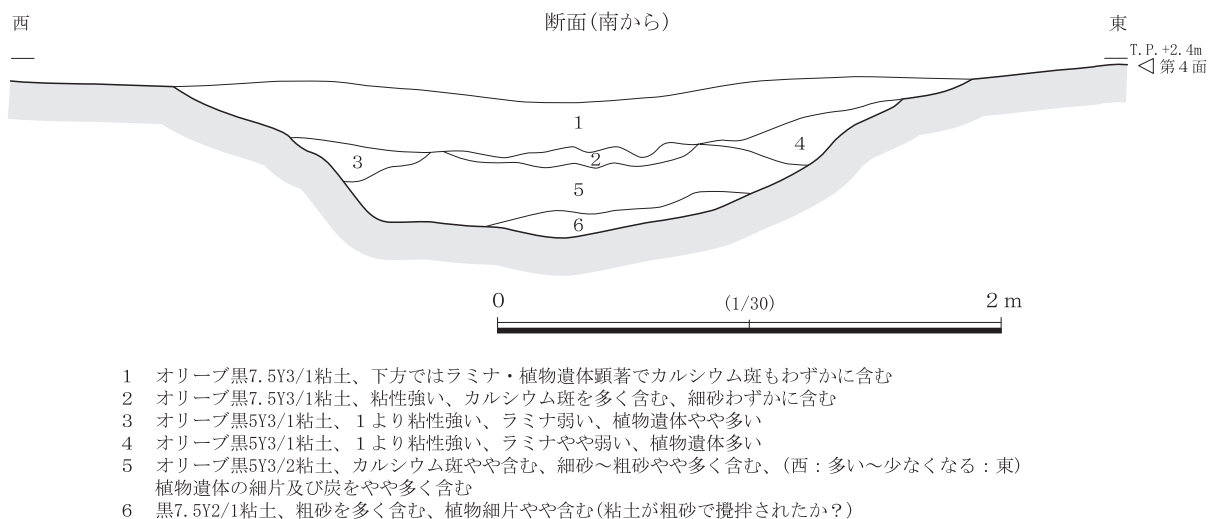


図58 03-1-2区第4面176溝断面

木杭のうち1本は、東側溝の1mほど南で、溝底に打ち込まれた状態で検出できた(図59)。木杭の先端は、溝底下50cmにまで及んでいる。木杭は、現存長74cm、直径4cm、先端(下端)は消失しているが、先鋭に加工された痕跡が窺える。溝底よりも上部に露出している部分は、溝の水流によるためか上端に近いほどやせている。樹種はコウヤマキ。

また、176溝が175溝状落ち込みと接する所で、ヤマグワの立木(写真図版20)を検出した。

出土遺物のうち7点を図示した。図60-20024(写真図版73)は甕。口縁部はナデで整えられ、受け口状になる。体部外面はタタキの後、斜め方向のハケが施される。Ⅴ-3様式に位置づけられよう。

20025・20026は壺。上下に肥厚する受け口状口縁の端部である。20025は分厚く、外面にはクシ描き直線文が斜位に入る。20026にはクシ描き波状文が施される。いずれもⅢ-1様式。20027は壺の頸部から体部。下方に折れ曲がる口縁をもつものとなろう。頸部にはクシ描き直線文、簾状文、列点文が施され、体部はミガキ調整。Ⅲ様式(Ⅲ-b~c段階)。

20028(写真図版73)は鉢。外面はミガキ、内面は粗いハケで調整が施され、内側にやや肥厚する口

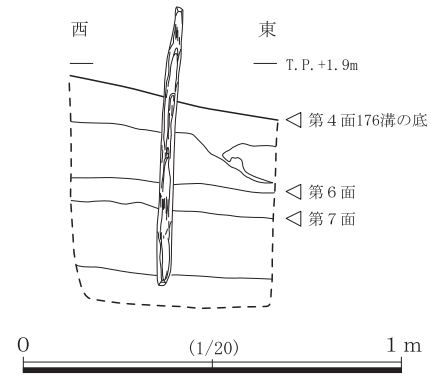


図59 03-1-2区 第4面176溝の木杭

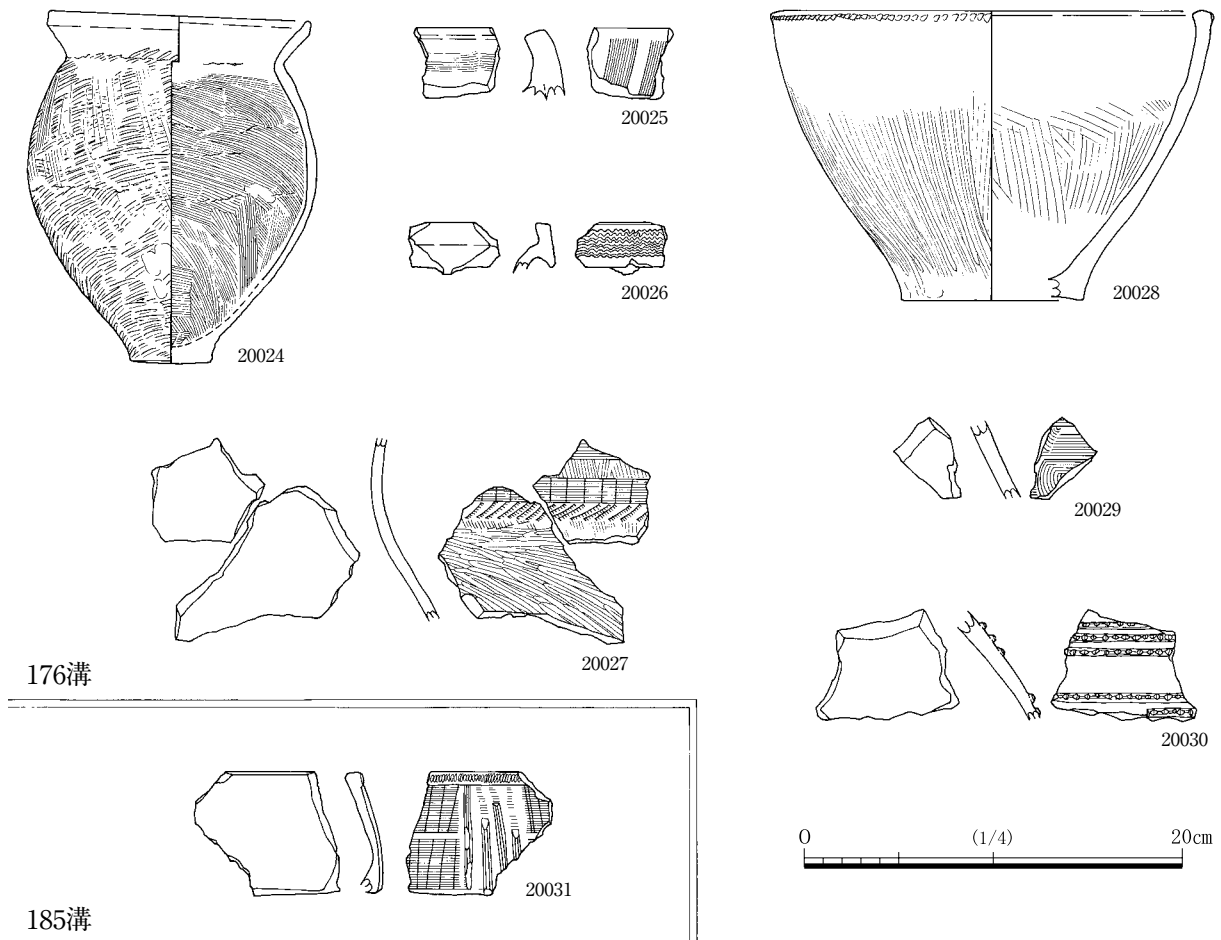


図60 03-1-2区 第4面176・185溝出土土器

縁端部には刻み目がめぐる。Ⅲ様式初頭か。なお、第4層出土の破片と接合している。

20029・20030は壺の体部片。20029には粗い原体でクシ描き流水文が施される。Ⅱ様式。20030には刻み目の施された貼り付け突帯が2帯残る。Ⅰ様式後半であろう。

177溝 調査区中央部に位置する。主軸方位は東北東-西南西。長さ約12m、幅0.9~1.5m、深さ14cm。埋土はオリーブ黒5Y3/2細砂混じりシルト。植物遺体・炭化物・マンガン斑やや多く、ラミナ顕著。出土遺物なし。

178溝 調査区東部にある。東西を主軸とし、西端が176溝につながる。検出長15.5m以上、幅1.1~1.9m、深さ19cm。埋土は黒5Y2/1シルト。出土遺物はない。

179溝 調査区東部、178溝の南側に位置する。主軸方位は北北西-南南東。北端が178溝に接する。検出長約6.5m、幅49~88cm、深さ9cm。埋土は黒5Y2/1シルト。出土遺物はない。

182溝 調査区南部に位置する。南から北北東に向かい、次いで北北西に向きを変え、北端で176溝につながる。検出長約8.5m、幅77~162cm、深さ16cm。埋土は黒褐2.5Y3/1シルト。出土遺物なし。

185溝 調査区西部から中央部にかけて位置する。主軸方位は西南西-東北東。第3面154溝状落ち込みの下層にあたる。検出長約31m、幅1.3~2.5m。南北に接する184・186畦状高まりからの深さ23~32cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト。炭化物やや含む。ラミナあまり見られない。出土遺物は弥生土器1点のみ。

図60-20031(写真図版73)は台付鉢。口縁は内湾し、狭い幅の段状口縁に浅い刻みが施される。棒状浮文が屈曲部に及び、刻みの施されない新しい傾向をもつ。棒状浮文が剥がれた面には、体部の簾状文が残っている。Ⅳ-3様式(Ⅳ様式古段階)に位置づけられよう。

185溝の北側に184畦状高まり、南側に186畦状高まりがある。

184畦状高まり 検出長約24m、上面の幅は24cm~130cm以上、高さは西部でT.P.+2.40mあり、第4面との比高は10数cmある。しかし、東に向かって徐々に低くなり、東端では周囲の第4面と同じT.P.+2.05mとなる。

186畦状高まり 検出長は約15.5m。上面の幅は36~92cmだが、185溝と接する北側での出入りが目立つ。上面の高さはおよそT.P.+2.45mで、第4面の高さはこの畦の南方の西側でT.P.+2.40m、東側でT.P.+2.37mなので、東側の方が比高が大きい。

187溝(写真図版20) 調査区南西部に位置し、平面「コ」字形に屈曲する。溝の外周は長径(北西-南東)4.5m、短径(北東-南西)4.4m、北西-南東の内径は3.5m。溝の幅は20~71cm、深さ8cm。埋土は、オリーブ黒5Y3/1シルトにマンガンを含む。出土遺物は弥生土器4片。

187溝を第4面で検出したが、第4面は黒色土壌化層の上面でこの周辺での第4層の厚みは約10cm、第5面はそれを除去した面である。下層の第5面には03-1-2区南西部から03-1-3区東部にかけて、視覚的に187溝と同一面であっても違和感のない遺構群がみられる。第5面自体は地表面ではなく、第4層の土壌化層下面なので、第5面検出の遺構は、第4面あるいは第4層の形成過程に掘り込まれたものと考えられる。したがって、187溝は、第5面検出のそれら遺構群と一連のもの可能性が高い。この溝の形状とサイズは、一見すると竪穴住居の壁溝や方形周溝墓の周溝に見える。しかし、それらと断定できる根拠はないので、周溝状の溝として報告するだけに止める。

183土坑 調査区北西部に位置する。平面円形と推定されるが、西半は側溝により破壊された。南北径155cm、深さ37cm。埋土は、土坑周辺の第4層オリーブ黒7.5Y3/1シルトによく似ているが、やや明るく、

粘性が強い。出土遺物はない。

174溝状落ち込み 調査区北東部に位置する。西北西 - 東南東を主軸とする。検出長38m、幅4.0~6.4m、深さ27~58cm。埋土はオリブ5Y5/4シルト混じり細砂。層の中位~下位には灰7.5Y4/1シルト~細砂とオリブ黒10Y3/1がラミナをなす。出土遺物はない。

175溝状落ち込み 174溝状落ち込みの南西側につながり、ほぼ直交方向の北東 - 南西を主軸とする。長さ約9m、幅は1.0~2.0mだが、中央部で北西側に突出しその部分を幅として測ると4.4mになる。深さ8~21cm。埋土は、第3層と同じオリブ黒7.5Y3/2シルト。出土遺物なし。

180落ち込み 調査区南東部、176溝の東側の低い部分である。東西約17m、南北4.5~6.0m程度の長方形に近い不整形をなす。深さ10~14cm。埋土は基本的に第3層と同じだが、炭化物やマンガン斑を含む。出土遺物はない。

181落ち込み 調査区南部から中央部にかけて広がる。範囲は広いが明確な形をなさない。深さ13~24cm。埋土は黒褐2.5Y3/1シルト。粘性やや帯び、炭化粒がかなり多い。下位では灰5Y4/1粘土とマーブル状に攪拌される。出土遺物はない。

以上の溝状落ち込みや落ち込みは、自然地形であろう。

#### (9) 03 - 1 - 2区第4層の遺物 (図61・写真図版73)

弥生土器611片 (うちI様式1片、II様式が主体)、削器2点、楔3点、サヌカイト剥片3点、磨石1点、砥石1点、木杭1点、計622点出土した。

うち弥生土器4点を図示した。図61 - 20032は細頸壺。口縁端部は垂下して列点文が施される。頸部は短く、クシ描き直線文と列点文で飾られる。IV様式前半 (III様式古段階) であろう。20033 (写真図版73) は水差形土器の把手。把手の断面形は丸く、体部にはハケ調整と、クシ描き直線文が残る。IV様式。20034は高杯の裾部。端部は上方へ大きく拡張し、内面はヘラケズリによって器壁を薄く仕上げる。IV様式前半。

20035 (写真図版73) は小形の壺。口径4.5cm、器高は残存で7.0cm。口縁部はナデによってやや外側へひらき、外面にはミガキが施される。内面は未調整で粘土紐の単位が明らかである。

以上が、第4層出土の遺物である。

このほか、第4層以下の側溝から、弥生土器3片が出土した。

第4~6層相当の側溝からも、弥生土器85片が出土した。

第4~7層相当の側溝からは、弥生土器500片、削器1点、サヌカイト剥片3点、計504点出土した。

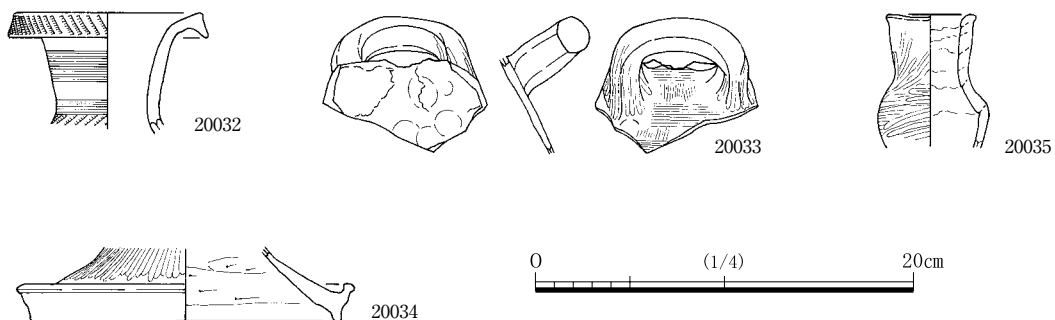
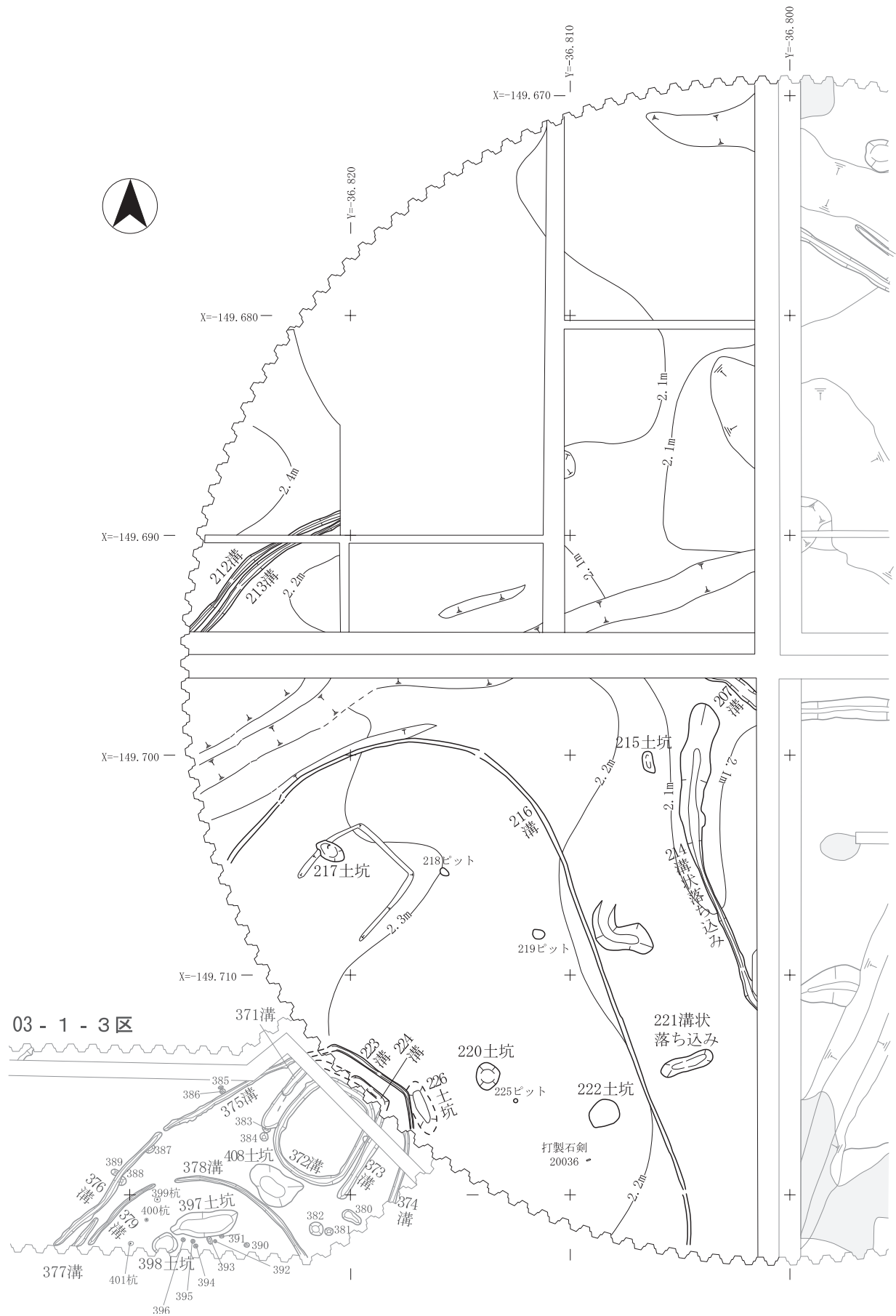


図61 03 - 1 - 2区第4層出土土器



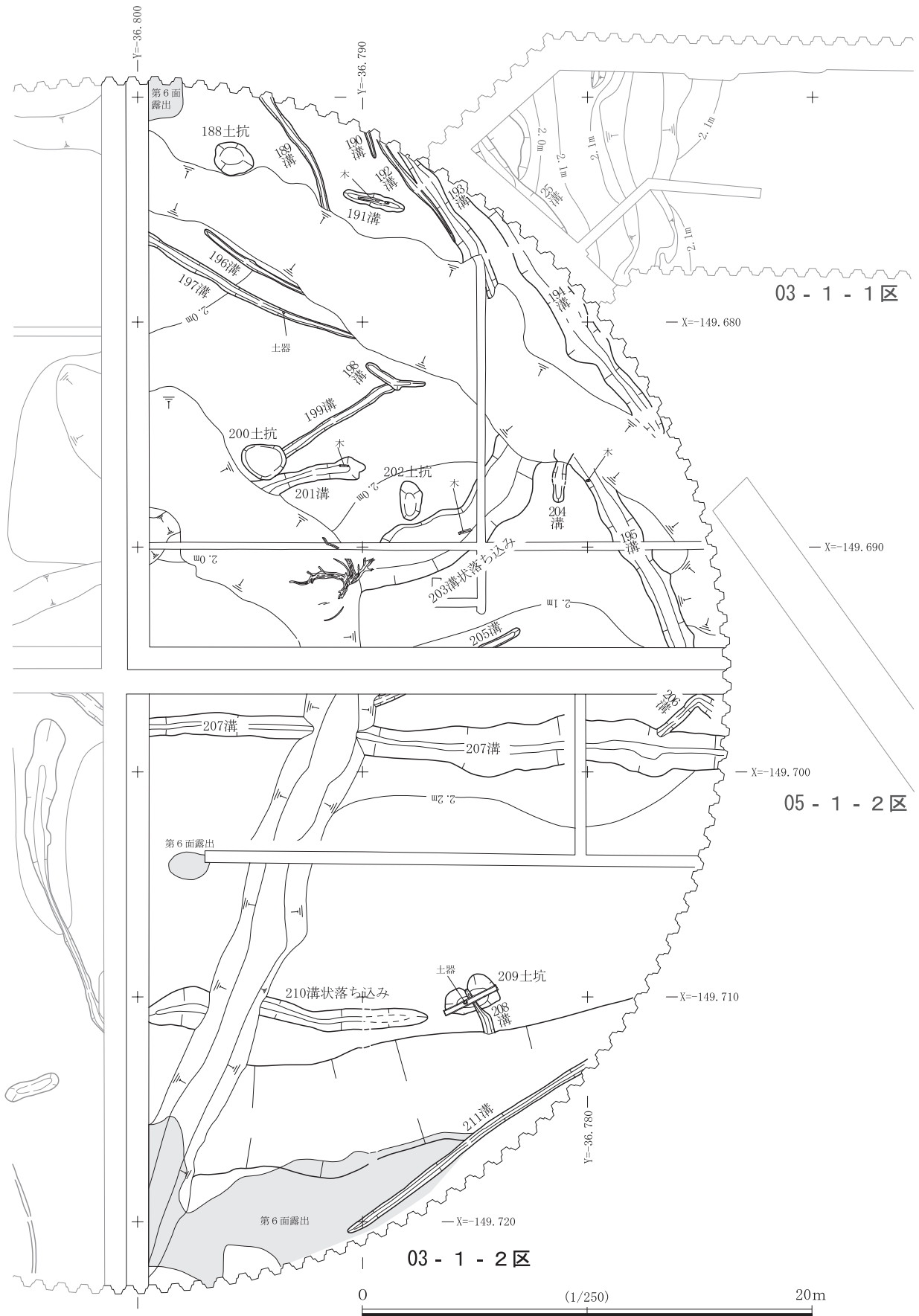


図62 03-1-2区第5面



(10) 03 - 1 - 2 区第5面の遺構と遺物 (図62~64 写真図版21・22・74)

第4層の黒色土壌化層を除去した面で、第5層の砂層上面である。

面の高さはT.P.+2.0~2.4m。高低の傾向は第4面と同様に、北西部がT.P.+2.0~2.1mと低く、東半がT.P.+2.1~2.2mで、南西部はT.P.+2.2~2.3mと高い。遺構として、溝23条、土坑9基、ピット3個、溝状落ち込み4条、計39か所(番号188~226)を調査した。

遺構検出のため第5面を精査中に、調査区南西部(9M-1bグリッド:図2参照)、後述する222土坑の南約1.5mの地点において打製石剣(図64-20036)を検出した。ほぼ水平に第5面上にあり、切先は東北東を向いていた(写真図版22)。周辺を精査したが、遺構は認められなかった。

図64-20036(写真図版74)はサヌカイト製打製石剣。中央でわずかに幅広になるが、直線的な側縁をもつもので、基部の刃潰しを行っていない。断面は紡錘形で整っており、稜線に鋭さはなくまるみを帯びる。長軸15.60cm、短軸3.24cm、厚み1.2cm、重さ75.0g。

また、調査区東部、207溝の上面にあたる第5面で小形の鉢を検出した。20037(写真図版74)の口縁直下には沈線3条がめぐる。約半周が残る口縁部は、ほぼ直角の位置にある2箇所を注口状にくぼませている。破損した口縁部にも指圧痕が残っており、あるいは四方に凹みがあったのかもしれない。I様式であろう。

溝を23条検出した。分布と特徴的な溝について記述し、個々の溝のデータは表7にまとめた。

189~198溝は、調査区北東部に位置する。基本的に北西(北北西・西北西)-南東(南南東・東南東)に主軸をもつ一群である。

194溝 03-1-1区の25溝と同一遺構で、北西から南東を主軸とし、長さ14m以上、幅88~172cm、深さ23cm。埋土は5層に分れる(図3)。25溝部分から弥生土器2片と石1点、194溝部分から弥生土器15片、合わせて弥生土器17片と石1点、合計18点出土した。

199・201・205溝も、調査区北東部にある。北東(東北東)-南西(西南西)を主軸方位とする。204溝は、南北を主軸とする。

206溝 調査区東部に位置する。主軸方位が北東-南西の部分と北西-南東の部分とがほぼ直角に接し、平面「L」字形を呈する。幅40~68cm、深さ12cm。埋土は黒7.5Y2/1シルト混じり細砂。弥生土器7片が出土した。

207溝 調査区中央部では北西-南東に主軸をもつがそこから東にのびる。幅0.7~2.2m、深さ42cm。埋土(図43)はオリーブ黒10Y3/1粘土を基本とする。L1黒5Y2/1シルト。粘性帯び炭化物やや多い。L2~L3は黒褐2.5Y3/1で、L2:細砂主体(粗砂混じり)L3:粗砂、である。弥生土器3片出土。

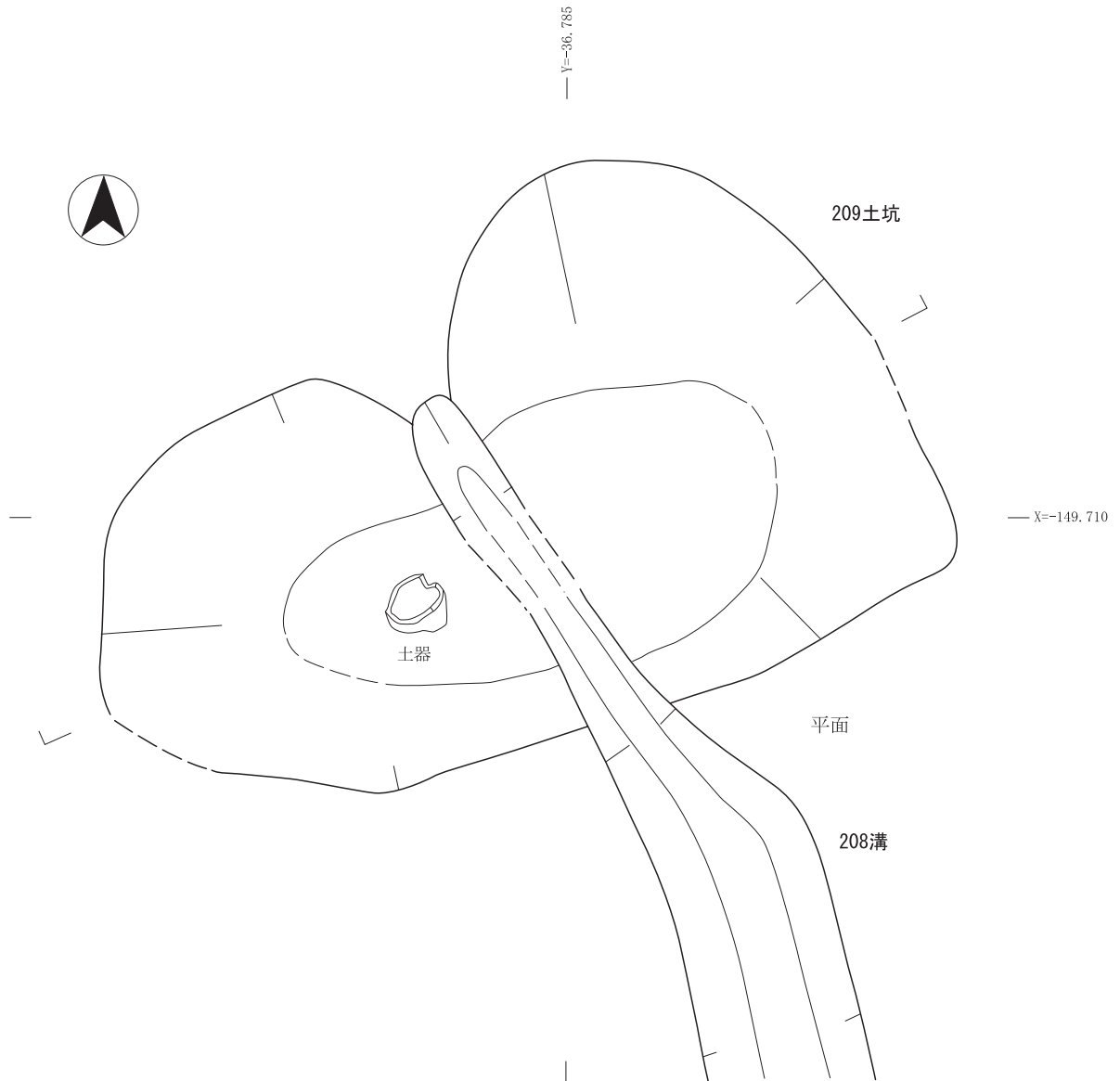
208溝と209土坑(図63・写真図版22)は、調査区南東部に位置する。

208溝 やや屈曲するが、北北西-南南東を主軸とする。検出長約2.2m、幅16~45cm、深さは3cmと浅い。埋土は黒5Y2/1細砂混じりシルト。出土遺物はない。

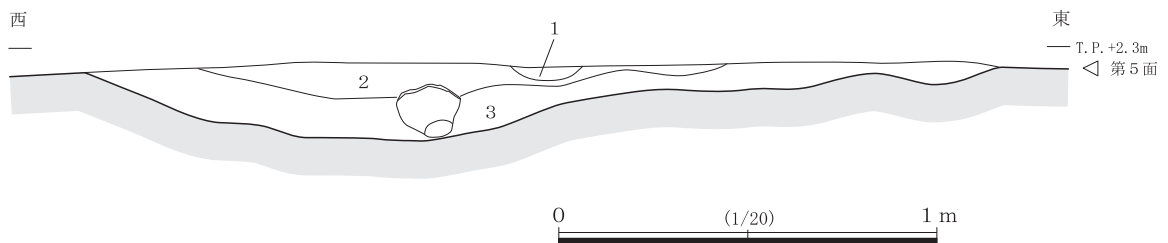
209土坑 中央部を208溝に切られている。平面は不整形、例えるとひしゃげたハート形をなす。東北東-西南西に249cm、北北西-南南東に153cm、深さ20cm。埋土は2層に分かれる(図63の2・3層)。弥生土器の壺下半部1点のみ出土。

211溝 調査区南東に位置する。主軸方位は北東-南西。幅35~45cm、深さ8cm。埋土は黒7.5Y2/1粗砂混じり粘土で、植物遺体を含む。出土遺物はない。

212・213溝は、調査区西部に位置し、平行して北東-南西にのびる。



208溝・209土坑断面(南南東から)



- 1 208溝 黒5Y2/1シルト～細砂
- 2 209土坑 オリーブ黒7.5Y3/1シルト、粘性ややあり、細砂やや混じる
- 3 209土坑 黒7.5Y2/1シルト、粘性強い

図63 03 - 1 - 2区 第5面208溝、209土坑

216溝 調査区南西部に位置する。平面は、北に向かって半径約8mの半円形を描き、その東端から南南東にはほぼ直線的にのび、さらにわずかに屈曲して南に向かう。検出延長は38.4mに及ぶ。03-1-3区第5面東部の372溝などの遺構群を取り巻くようにのびているようにも見える。しかし、幅は12~25cm、深さも6cmと、長さ比べて著しく狭く浅い。埋土は黒7.5Y2/1シルト。出土遺物はない。

223・224溝（写真図版22）は、調査区南西隅にあり、223溝は03-1-3区の374・375溝と、224溝は03-1-3区の371・373溝と、それぞれ一連の溝である。

表7 03-1-2区 第5面溝一覧

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数		
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		弥生土器		合計
							時期不詳	その他	
189	8L-10h	北北西	(5.7)	24~45	5	オリーブ黒10Y3/1細砂、粘土混じる、植物遺体・マンガン斑含む			0
190	8L-9h	北北西	(1.2)	22	3	オリーブ黒7.5Y3/1細砂、シルト混じる			0
191	8L-9h・10h	西北西	(2.8)	39~62	9	灰7.5Y4/1、細砂混じる			0
192	8L-9h	北西	(5.8)	24~39	9	オリーブ黒7.5Y3/1、細砂混じる、植物遺体含む			0
193	8L-9h	北西	(7.5)	53~106	14	黒7.5Y2/1、細砂混じる、粘性あり、植物遺体含む			0
194	8L-9h・8i他	北西	(13.5)	88~172	23	①黒7.5Y2/1、粘性あり、炭・植物遺体含む ②黒7.5Y2/1、細砂混じる、粘性あり、炭・植物遺体含む	15		15
195	8L-8i・8j他	北北西	(9.4)	100~135	30	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる			0
196	8L-10h	北西	(5.2)	20~37	7	暗オリーブ灰5GY3/1極細砂、植物遺体含む			0
197	8L-10h・10i	北西	(10.1)	25~55	12	暗オリーブ灰5GY3/1極細砂、植物遺体含む			0
198	8L-9i	北西	2.95	20~44	8	オリーブ黒7.5Y3/1、細砂混じる、粘性あり、植物遺体含む			0
199	8L-10i・9i	北東	(7.0)	30~42	8	暗オリーブ灰5GY3/1、細砂混じる			0
201	8L-10i・9i	東北東	(4.7)	70~75	14	オリーブ黒5Y3/2細砂、オリーブ黒10Y3/1シルトブロック混じる	2		2
203溝状	8L-9i・9j	北東	(9.3)	180~260	27	黒7.5Y2/1		木杭1	1
204	8L-9i	北	(1.8)	43~64	10	オリーブ黒10Y3/1、細砂混じる			0
205	8L-9j	東北東	(7.3)	35	7	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる			0
206	8L-8j	L字	(3.1)	40~68	12	黒7.5Y2/1細砂、シルト混じる	7		7
207	8L-9j・10j他	東西	(30.4)	70~220	42	オリーブ黒10Y3/1粘土、細砂混じる、ラミナをなす、炭含む	3		3
208	8M-9a・9b	北北西	(2.2)	16~45	3	黒5Y2/1、細砂混じる			0
210溝状	8M-9b・10b他	東西	(12.5)	76~80	16	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、炭化粒含む			0
211	8M-9b・10c他	北東	(13.1)	35~45	8	黒7.5Y2/1粘土、粗砂混じる、植物遺体含む			0
212	9L-3j・3i	北東	(9.0)	17~35	10	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、炭化粒含む			0
213	9L-3j・3i	北東	(8.1)	15~36	7	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、炭化粒含む			0
214溝状	9M-1a・1b他	北北西	(14.3)	23~137	9	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、炭化粒含む	1		1
216	9M-1b・2a他	弧	(38.4)	12~25	6	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、炭化粒含む			0
221溝状	9M-1b	西北西	2.5	60~75	17	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、炭化粒含む			0
223	9M-2b・3b	L字	(5.8)	14~24	10	黒10YR2/1、細砂混じる	1		1
224	9M-2b	北西	(2.0)	26	11	黒10YR2/1、細砂混じる	2		2

土坑9基とピット3個を調査した。個々のデータは表8にまとめた。

200・202土坑は、調査区北東部に位置する。200土坑は199溝および201溝を切っており、それらよりも新しい。

209土坑は既述。208溝に切られている。

215・217・220・222・226土坑、218・219・225ピットは、いずれも調査区南西部に分布する。

220土坑 平面円形で、直径108～122cm、深さ9cm。埋土は、オリーブ黒7.5Y2/2シルトに細砂～粗砂が混じる。出土遺物は、弥生土器6片。

図64-20038は高杯杯部。口縁下部にはクシ描き列点文を2段に飾り、そのほかはミガキを施して仕上げている。杯部の屈曲は弱く、Ⅲ-2様式～Ⅳ-1様式(Ⅲ-b～c段階)に位置づけられよう。

226土坑 調査区南西部に位置し、223溝に切られている。平面楕円形で、北北西-南南東を主軸とする。長径252cm、短径96cm、深さ49cm。埋土は黒5Y2/1細砂混じりシルト。弥生土器16片が出土した。

図64-20039は甕。口縁端部は上方にやや拡張して、凹線状に強いナデで調整される。内外面ハケ調整で、内面はその後ナデ。外面に煤が付着する。Ⅳ様式前半。20040は台付無頸壺。口縁部と脚部を欠く。体部上半はクシ描き簾状文3条と、ごく幅の狭い扇形文で飾られる。外面全面に煤が付着している。体部最大径が上部にあり、やや古い要素をもつ。Ⅲ-2～Ⅳ-1様式(Ⅲ-b～c段階)。

20041・20042は壺。20041は体部片。外面はクシ描き波状文と直線文で飾られる。20042は頸部へと内傾気味に屈曲する破片。クシ描き直線文の下にハケ調整が残っている。いずれもⅡ～Ⅲ様式。20043は甕底部。器壁は薄く、外面のミガキ調整が底までおよぶことからⅣ-1～2様式(Ⅲ様式新段階)に位置づけられる。

20044は壺の体部から底部。ハケ調整の後、底部を残して横方向に粗くミガキが施される。器壁は薄く仕上げられ新しい要素をもつ。Ⅱ～Ⅲ様式。20045は長頸の広口壺。頸部は直線的にのび、体部とと

表8 03-1-2区 第5面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数					
				長径	短径	深さ		弥生土器					合計
								I様式	I～II様式	II様式	III様式	不詳	
188土坑	8L-10h	不整円	北西	184	145	7	オリーブ黒10Y3/1細砂、シルト混じる						0
200土坑	8L-10i	不整円	西北西	202	156	9	オリーブ黒7.5Y3/1、粘性強い、細砂・植物遺体多く含む、炭含む					3	3
202土坑	8L-9i	楕円	北	180	95	17	オリーブ黒10Y3/1、細砂混じる						0
209土坑	8M-9a・9b	不整	東北東	249	153	20	図63参照					1	1
215土坑	9M-1a他	楕円	北北西	96	54	6	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる						0
217土坑	9M-3a	楕円	西北西	144	80	21	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる					1	1
218ピット	9M-2a	楕円	北西	45	28	8	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる					1	1
219ピット	9M-2a	楕円	西北西	56	42	5	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる						0
220土坑	9M-2b	円		122	108	9	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる					6	6
222土坑	9M-1b	円		150	124	23	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる						0
225ピット	9M-2b	円		21	20	5	オリーブ黒7.5Y2/2、細砂～粗砂混じる						0
226土坑	9M-2b	楕円	北北西	252	96	49	黒5Y2/1、細砂混じる					16	16

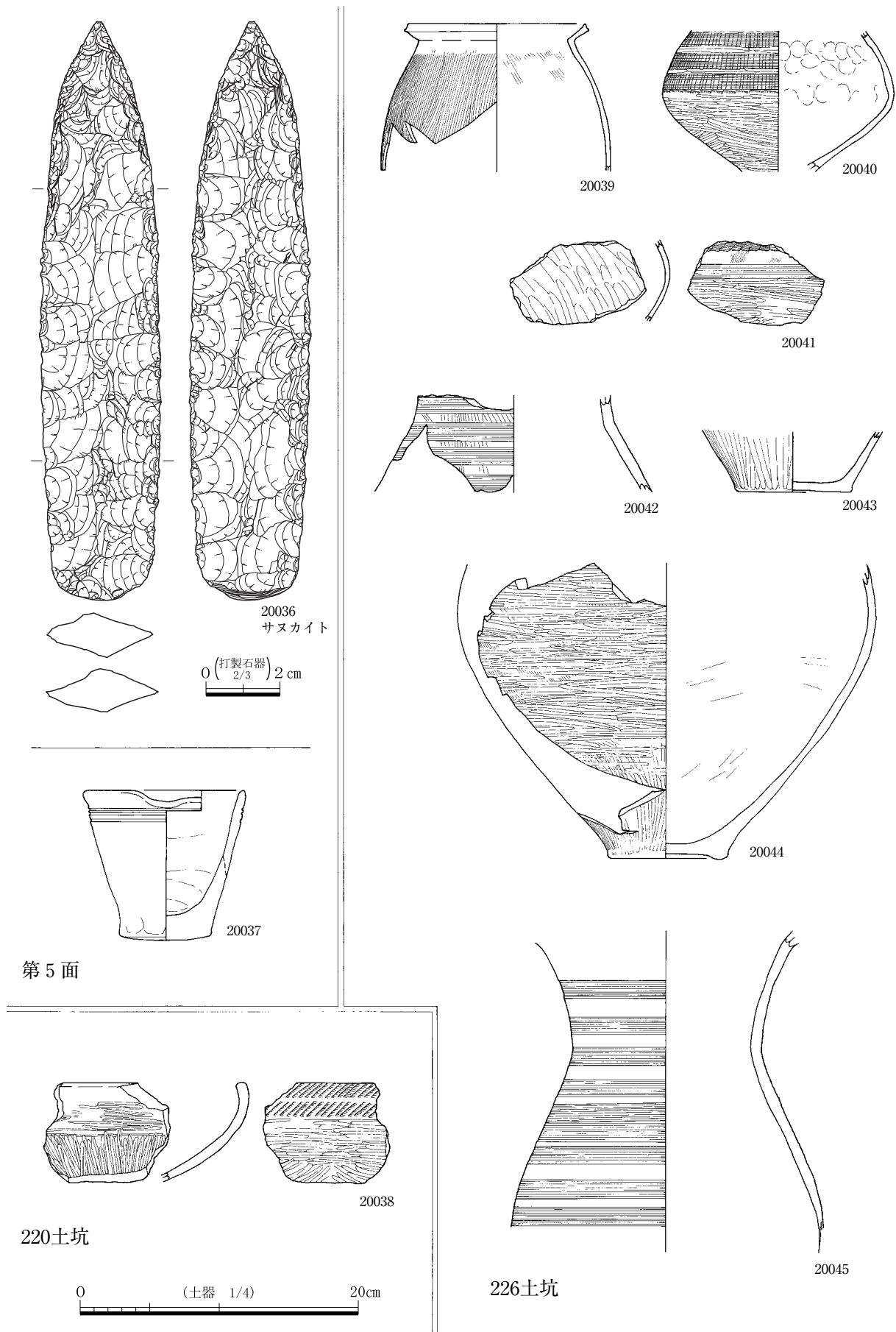


図64 03-1-2区 第5面220・226土坑出土遺物

ものにクシ描き直線文で飾られる。Ⅱ様式であろう。

その他の、土坑とピットについては、表8を参照されたい。

203溝状落ち込み 調査区北東部に位置する。第4面175溝状落ち込みの下層にあたり、やや屈曲するが、北東-南西を主軸とする。検出長約9.3m、幅1.8~2.6m、深さ27cm。埋土は、第4層と同じ黒7.5Y2/1シルト。出土遺物は木杭1本。

210溝状落ち込み 調査区南部にあり、ほぼ東西を主軸とする。検出長約12.5m、幅76~80cm、深さ16cm。埋土は、第4層と同じ黒7.5Y2/1シルト。粗砂・炭化粒をやや多く含む。出土遺物なし。

214溝状落ち込み 調査区中央やや南にある。検出長約14.3m、深さ9cm。南北にのびる部分と216溝の一部と平行して北北西-南南東にのびる部分からなり、幅は前者が最大137cm、後者で最小23cmと、北部の方が広い。埋土は、第4層と同じ黒7.5Y2/1シルトで、粗砂・炭化粒をやや多く含む。弥生土器1片のみ出土した。

221溝状落ち込み 調査区南部、214溝状落ち込みと216溝との間に位置する。検出長約2.5m、幅60~75cm、深さ17cm。埋土は、第4層と同じ黒7.5Y2/1シルト。粗砂・炭化粒をやや多く含む。出土遺物なし。

なお、調査区北東部にある西北西-東南東の溝状のくぼみは第4面174溝状落ち込みによる攪乱で、また、調査区南部から中央部にかけて北北東にのび、さらに北西に曲がる溝状のくぼみは第4面176溝による攪乱である。

#### (11) 03-1-2区第5層の遺物 (図65・66 写真図版74・75)

弥生土器2056片(Ⅱ~Ⅲ様式が主体)、石庖丁2点、石斧1点、打製石剣1点、石錘1点、石鋸1点、削器10点、楔1点、石核1点、サヌカイト剥片30点、砥石1点、叩き石4点、木杭2点、計2111点出土した。

図65-20046(写真図版74)は鉢。体部は外に開き、口縁部上面にやや肥厚した面をもつ。体部はクシ描き波状文と貼り付け突帯2条で飾られる。20047(写真図版74)は台付鉢、あるいは水差形土器の体部片と考えられる。「ハ」の字状にややひらく2本の棒状浮文の両側を、扇形文で飾る珍しいものである。いずれもⅣ-2~3様式(Ⅲ様式末~Ⅳ様式前半)に位置づけられる。

20048は壺。頸部は短くなり、口縁端部は垂下して刻み目が施される。口縁端面と体部は11条のクシ描き簾状文、頸部のみ直線文で飾られる。外面は磨耗して調整不明瞭。

20049(写真図版74)は鉢。口縁端部は肥厚してクシ描き簾状文が施される。体部上半は内傾して、クシ描き直線文で飾られる。20050は鉢の口縁部。内傾した体部からつづく口縁部は下方にやや垂下する。器面はクシ描き簾状文で飾られる。20048~20050は20050がやや古いが、Ⅳ-1~2様式(Ⅲ-b~c段階)に位置づけられる。

20051~20054はⅡ様式末~Ⅲ様式初頭の壺の口縁部。20051は全体に黒褐色を呈する。頸部はゆるやかに外反して下方へ大きく垂下し、その端面にクシ描き波状文を飾る。20052・20053はいずれも同様の形態で、垂下した口縁端部に刻み目が施される。胎土は非生駒山西麓産。20054(写真図版74)は、口縁端面に刻み目を入れた後、指で鋸歯状に整えている。

20055(写真図版74)は壺、あるいは器台の口縁部か。端部は長く垂下して沈線5条が施されている。壺であればⅡ様式、器台であればⅤ様式に位置づけられるが、類例を見ない。

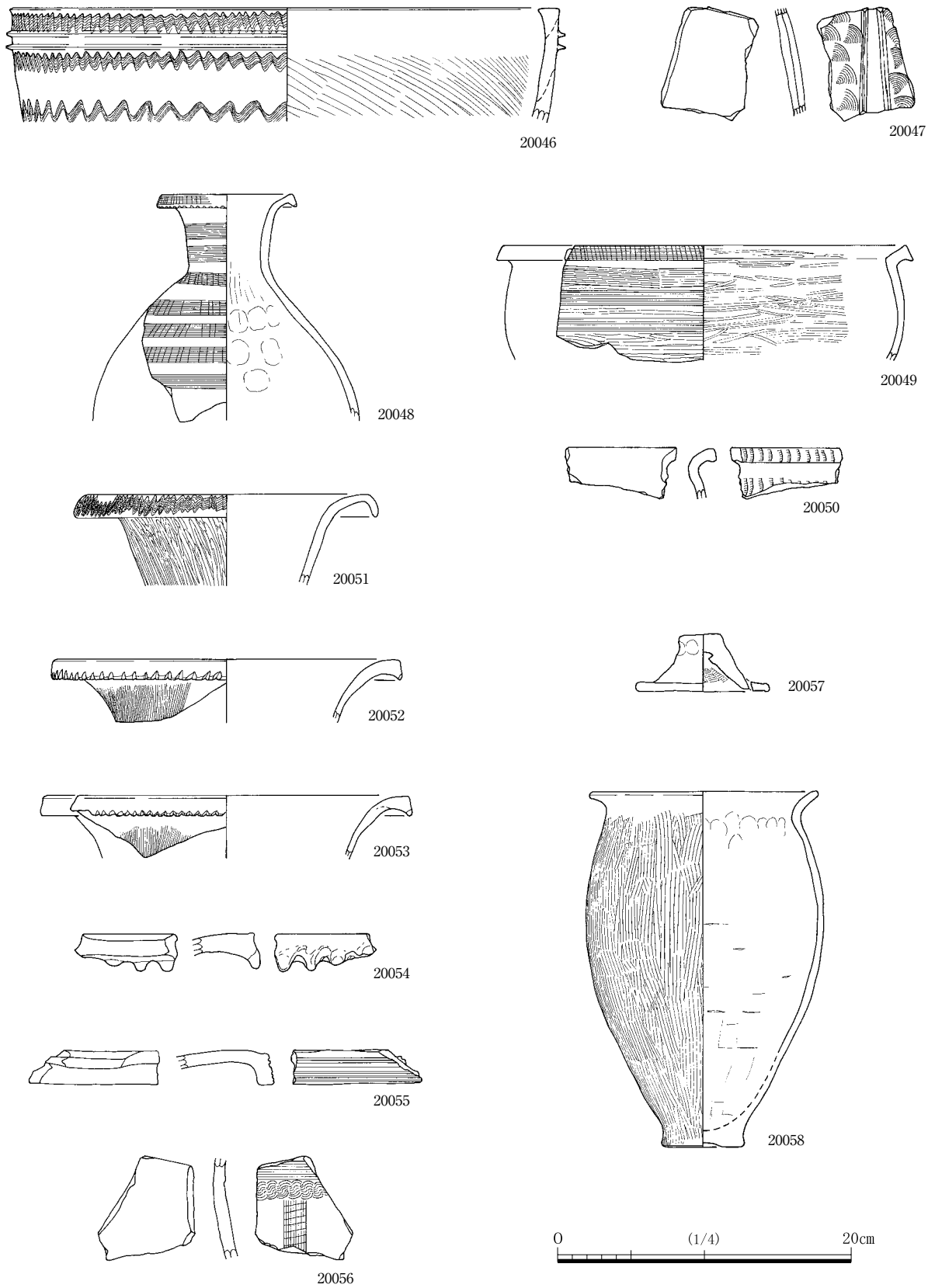


図65 03-1-2区 第5層出土遺物(1)

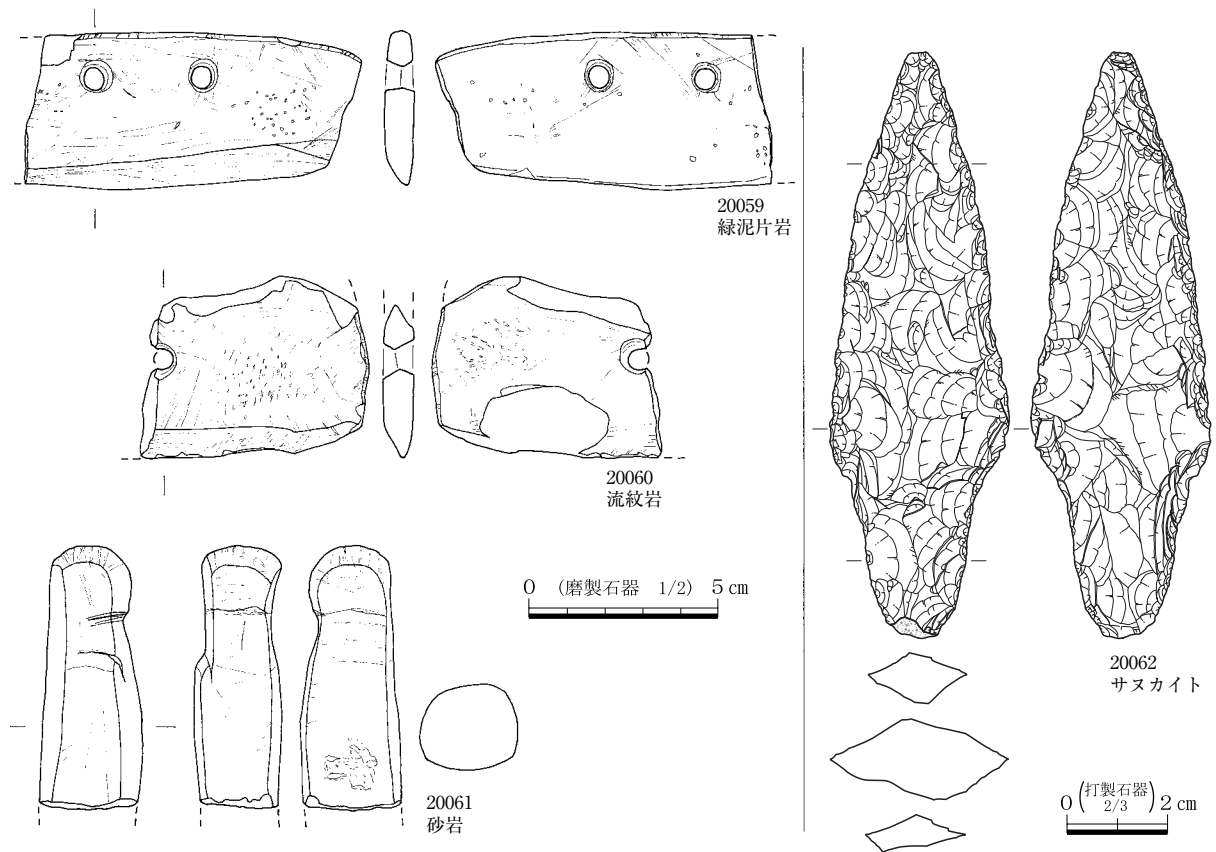


図66 03-1-2区第5層出土遺物(2)

20056 (写真図版74) は壺の頸部。クシ描き直線文の下には、扇形文を連続で施して横1帯とする。さらに縦方向にも扇形文状に工具を細かく留めて、1帯を垂らす。Ⅱ様式。20057 (写真図版74) は蓋。紐孔は二方向にあく。頂部には指頭圧痕が残り、指による成形がよくわかる。

20058 (写真図版75) は甕。第6面418溝の近くから出土した (写真図版27)。外面は縦方向のハケ調整で、口縁部は横方向のナデによって「く」の字状に外反する。体部上半がまるみを帯び、底部はやや横に張って上げ底気味である。底部下面を除いて外面全体に煤付着する。Ⅱ様式に位置づけられよう。

図66-20059・20060は片刃の石庖丁。20059 (写真図版75) はA面右側端面の欠損部をさらに研磨する。再利用されたものか。もとは直線刃半月形であったと考えられる。敲打痕とは別に、背部の右側端部から約2cmの位置で、背部・刃部ともに抉りをもつ。敲打痕はほとんどなく平滑に研磨される。20060 (写真図版75) は、流紋岩製。刃部・背部ともに欠け、あるいは人為的に打ち欠く。A面右端にも研磨が及び、欠損後石斧に転用した可能性がある。長辺6.00cm、幅4.60cm、厚み0.9cm、重さ38.4g。

20061 (写真図版75) は石錘か。やや広めの溝がめぐる柱状の砂岩で、基部には敲打痕が残る。環状石斧の穿孔具の可能性もある。

20062 (写真図版75) はサヌカイト製の打製石剣。尖頭部から段をもって幅を減じ、茎状の基部をもつもので、断面は紡錘形。長軸11.60cm、短軸3.54cm、厚み1.6cm、重さ56.6g。

以上が、第5層出土の遺物である。

このほか、第5層以下のサブトレンチから、Ⅲ様式前半に属する無頸壺など弥生土器236片、サヌカイト剥片4点、中礫1個、計241点出土している。



(12) 03-1-2区第6面の遺構と遺物 (図67~105 写真図版23~27・76~84)

黒色土壌化層の上面である。弥生時代中期前半~中頃の溝群が展開する。

面の高さはT.P.+1.7~2.1mで、調査区南東側が高い傾向にある。また、複数の比較的規模の大きな溝が西南西から東北東にはしるために、きわめて起伏に富んだ景観を呈する。遺構として、溝8条、溝状落ち込み2条、木群1か所、杭群3か所、土坑4基、ピット4個、落ち込み1か所、高まり13か所、計36か所(遺構番号227~258・277・278・1504・1505)を調査した。さらに立ち木を検出した。

まず、第6面上の遺物を報告する。

調査区北西部、233高まりの上面で壺(図67-20063)を、調査区南西部の251高まり上面で結晶片岩大礫1個を、調査区南部で壺(20064)と打製石鏃(20065)を検出した。

図67-20063は長頸壺。体部は球形でⅢ様式的な器形をもつが、頸部はあまりのびず、文様は施されない。Ⅱ様式末からⅢ様式初頭に位置づけられる。口縁部は下方へ折れ曲がるものとなろう。胎土は白色系統で、非生駒山西麓産。20064は壺の体部。胴部最大径39.5cm、残存高46.3cmを測る大形のもの。最大径は体部上半にあり、ハケ調整後、体部上半と下半に分けてまばらなミガキが施されている。内面下

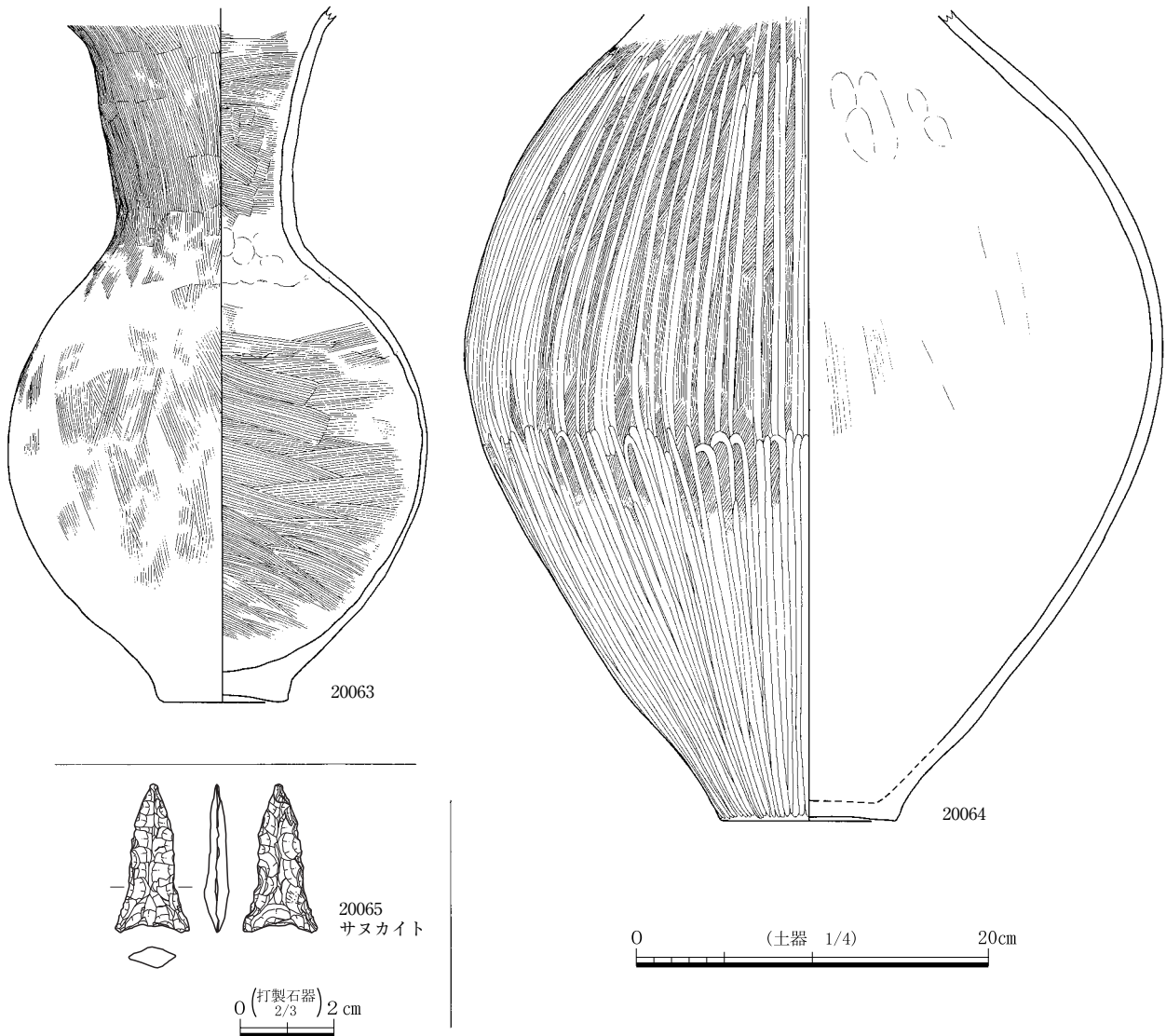


図67 03-1-2区第6面出土遺物

半は器面の剥離が著しい。Ⅱ様式。

20065はサヌカイト製の石鏃。凹基無頸式で丁寧に調整される。長軸3.18cm、短軸1.59cm、厚み0.4cm、重さ1.5g。

溝8条と溝状落ち込み2条を検出した。断面観察によりこの面で人為的に掘削されたと考えられるものを溝、そうではなく地形的なものを溝状落ち込みとした。

東北東 - 西南西を主軸とする規模の大きな溝と溝状落ち込み（252大溝、228・230溝状落ち込み、237・247・255溝）、それらとほぼ直交する大きな溝（232・248溝）、その他の小規模な溝（236・241溝）の順に記述する。

252大溝（写真図版24～27） 溝の最初に、252大溝とそれに関連する木群・杭群を報告する。252大溝は03 - 1 - 1区第6面の20大溝と同様に最大規模の溝で、出土遺物も抜群に多く、さらに埋没も他の溝以後である。

252大溝は、調査区南部にあり、東北東 - 西南西を主軸とする。検出長約30m、幅6.1～9.2m、深さ1.3mである。

埋土（図43）は、M1最上部で橙7.5YR6/6粗砂が一部に堆積し、溝の肩口は細～粗砂・黒色シルトのラミナが見られる。大半は灰白5Y7/2粗砂で、5Y3/1シルトが数条ラミナをなす。その下には粗砂が、さらに下層1397溝との層境には石鏃が多数出土した礫層がたまる。

図69・写真図版24に示すように、横断面（Y=-36.800ライン）では、シルト、細砂、粗砂がラミナ（トラフ型斜行層理）をなし、その間に植物遺体層もみられる。埋没の過程で流芯が徐々に北に移動していった状況も見て取れる。一方、縦断面（セクションポイント（S.P.）は図68を参照）では、ラミナが東北東に向かって下がっている傾向にあり、この調査区では252大溝が西南西から東北東に流下していたと判断できる。

252大溝からの出土遺物が多い。各層合わせて、弥生土器28055片（うちⅠ様式2572片、Ⅰ～Ⅱ様式1189片、Ⅱ様式1355片、Ⅲ様式35片）、転用土製円板103点、管玉1点、石器・石1324点、木製品・木36点、炉壁1点、焼土塊4点、炭2片、種子4点、炭化米2粒、計29532点と骨・歯である。以下、上層、下層、北法面、南法面に分けて報告する。

252大溝上層の出土遺物（図70～74 写真図版76・77）は、弥生土器3807片（うちⅠ様式359片、Ⅰ～Ⅱ様式197片、Ⅱ様式236片、Ⅲ様式15片）、転用土製円板5点、三日月形垂飾1点、大型石庖丁1点、石庖丁3点、磨石2点、砥石7点、叩き石2点、打製石剣2点、石錐1点、削器19点、楔3点、サヌカイト剥片40点、大礫4個、中礫3個、小礫1個、礫1個、木製品・木10点、炉壁1点、焼土塊1点、計3914点と骨・歯である。西部の北法面では、ヤマグワの立木も検出した。

図70 - 20066～20070は壺の口縁部で、Ⅳ様式前半（Ⅲ - b～c段階）を主体とする。この時期の土器はごくわずかにしか出土していない。

20066の端部は下方へ折れて、やや厚めに垂れる。口縁には波状文、頸部には簾状文が施される。やや新しくⅣ - 2～3様式。20067の口縁部は上方へ立ち上がり、拡張部にはクシ描き波状文と、上下の端には刻み目が施される。内面は赤変している。Ⅲ様式的である。20068は壺の口縁端部。上下に拡張した口縁には、簾状文が2段にわたって施される。20069の口縁部は上下に拡張して内傾するもので、列点文が施されている。第6面253高まり出土の20443と接合。20070の上下に拡張した口縁は内傾し、ややまるみを帯びる。文様は簾状文を2段にもつ。



03-1-3区

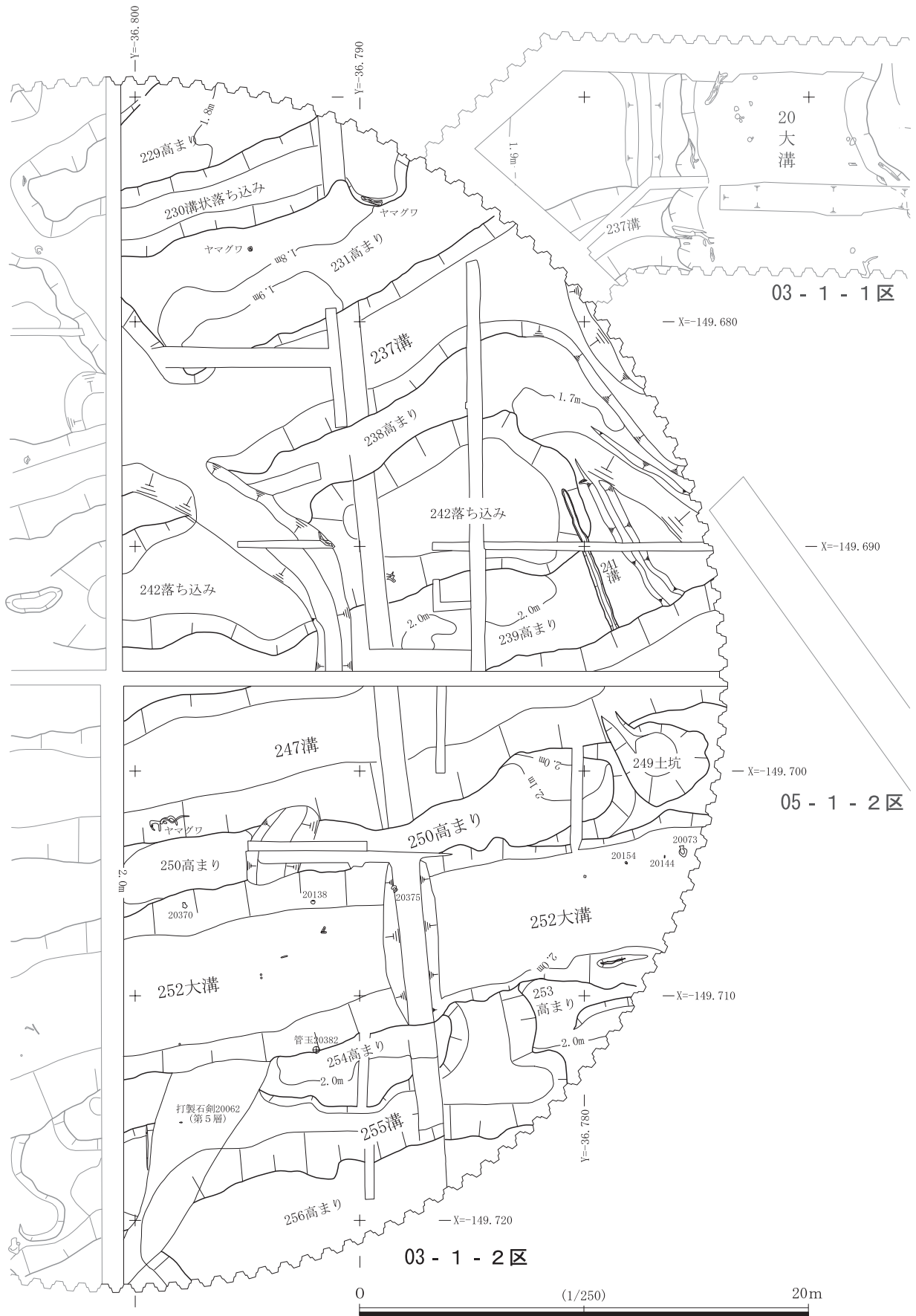


図68 03-1-2区第6面



図69 03-1-2区 第6面252大溝断面のスケッチ

20071は鉢。体部はほぼ垂直にたち、端部に面をもつ。簾状文の間隔は狭く、Ⅲ様式後半からⅣ - 1様式(Ⅲ - b～c段階)に位置づけられよう。

20072(写真図版77)は生駒山西麓型の壺。体部はほぼ中央で張り、短い頸部から外反して上下に拡張する口縁部に至る。拡張した口縁部は内傾してややまるみをもち、内面に施文時のものであろう爪痕を残す。口縁部の文様は2段構成で、上段は簾状文、下段は約半周ずつを簾状文、扇形文で分ける。頸部は胴部と頸部の境が簾状文になるほかは直線文で、胴部上半まで飾られる。Ⅳ - 1様式(Ⅲ - b段階)。

図71 - 20073(写真図版77)は受口状口縁をもつ無文の壺。口縁部はやや内傾し、端部は横方向のナデによってわずかに肥厚する。頸部は短く、胴部は体部上半に最大径をもつ。口縁部に凹線をもち始める前後の時期の土器と考えられる。Ⅲ - 2～Ⅳ - 1様式(Ⅲ - b～c段階)。

20074～20077はⅡ様式～Ⅲ様式初頭に位置づけられる壺。20074の口縁部は垂下し、下端に刻み目が施される。垂下が大きく、Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭か。20075(写真図版77)は壺の口縁。端部は薄く下方へ折れ曲がり、口縁端面にはクシ描き波状文が施される。内面には淀川水系の地域に特徴的な2個一対の瘤状隆起をもち、上面に扇形文を並べる。Ⅱ様式。なお、外面のちょうど扇形文の裏側には、爪痕らしき圧痕が1cm内外の間隔で並ぶ。施文時のものか。20076も無文の壺。長くのびた頸部外面に縦方向のミガキが見られるだけの無文のもの。口縁端部はわずかに垂下しており、Ⅱ - 3様式に位置づけられよう。20077は無頸壺。丸い体部から短く外反する口縁に続く。Ⅱ～Ⅲ様式初頭。

20078(写真図版76)は甕。口縁は「く」の字状に屈曲し、端部はやや肥厚する。体部の調整は縦方向のミガキ。Ⅲ～Ⅳ様式前半。

20079は高杯の脚部。脚柱部は中実で長く、端部は面をもつ。Ⅲ - 1～2様式か。器面は磨耗して不明瞭だが、ミガキが施されるものであろう。

20080(写真図版77)は壺の体部。クシ描きによって直線文を施し、その下に円形を描いた珍しいもの。内面は剥離している。Ⅱ様式であろう。

図72はおおよそⅠ - 3～4様式に位置づけられる土器を示している。Ⅰ - 2様式のもの破片が少数含まれる程度である。

20081(写真図版76)は壺で、頸部に沈線13条をもつ。体部は球形で口縁端部は丸い。Ⅰ - 4様式。

20082・20083は壺の口縁部で、上面を沈線によって飾る。20082は端部をまるく仕上げ、口縁にそって2条の沈線をめぐらせ、さらに沈線8条を重ねて、連弧文をつくる。うち1条は失敗したのか歪みを生じている。20083の端部は面をもち、上面に3条、端面に1条の沈線を飾る。いずれもⅠ - 3～4様式に位置づけられよう。

20084は無頸壺。口縁部は短く立ち上がり、紐孔が1つ残る。端部はまるく、Ⅰ - 3～4様式。

20085・20086は壺の口縁部で内面に貼り付け突帯がめぐる。20085の突帯は左上の破損部でやや曲がり始めており、注ぎ口のようにひらく部分か。Ⅰ - 4様式。20086は内面に断面三角形の貼り付け突帯4条、外面に刻み目のある貼り付け突帯1条が残る。Ⅰ様式後半か。

20087は壺頸部。長頸化傾向にあるもので、刻み目のある貼り付け突帯が5条めぐる。褐色で胎土の粗い頸部と対照的に、突帯には白色系で砂粒を含まない粘土が使われており装飾的である。Ⅰ - 4様式であろう。

20088は壺の体部。胴部は強く横に張り、上半には刻み目のある貼り付け突帯が3条めぐる。Ⅰ - 4様式に位置づけられよう。20089(写真図版77)も壺の体部。削り出し突帯の下に、蕨手の浮文がつく

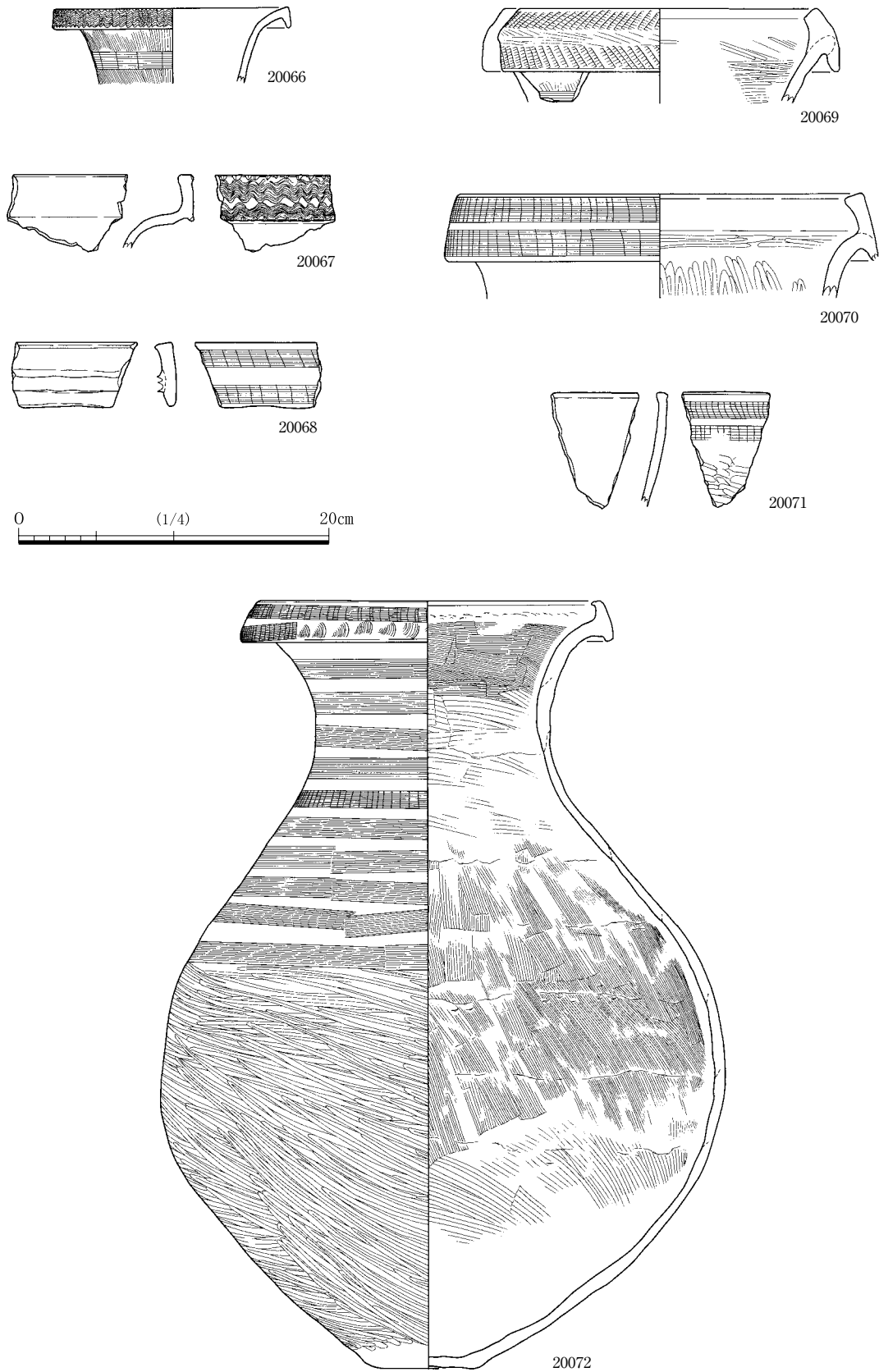


図70 03-1-2区 第6面252大溝上層出土遺物(1)

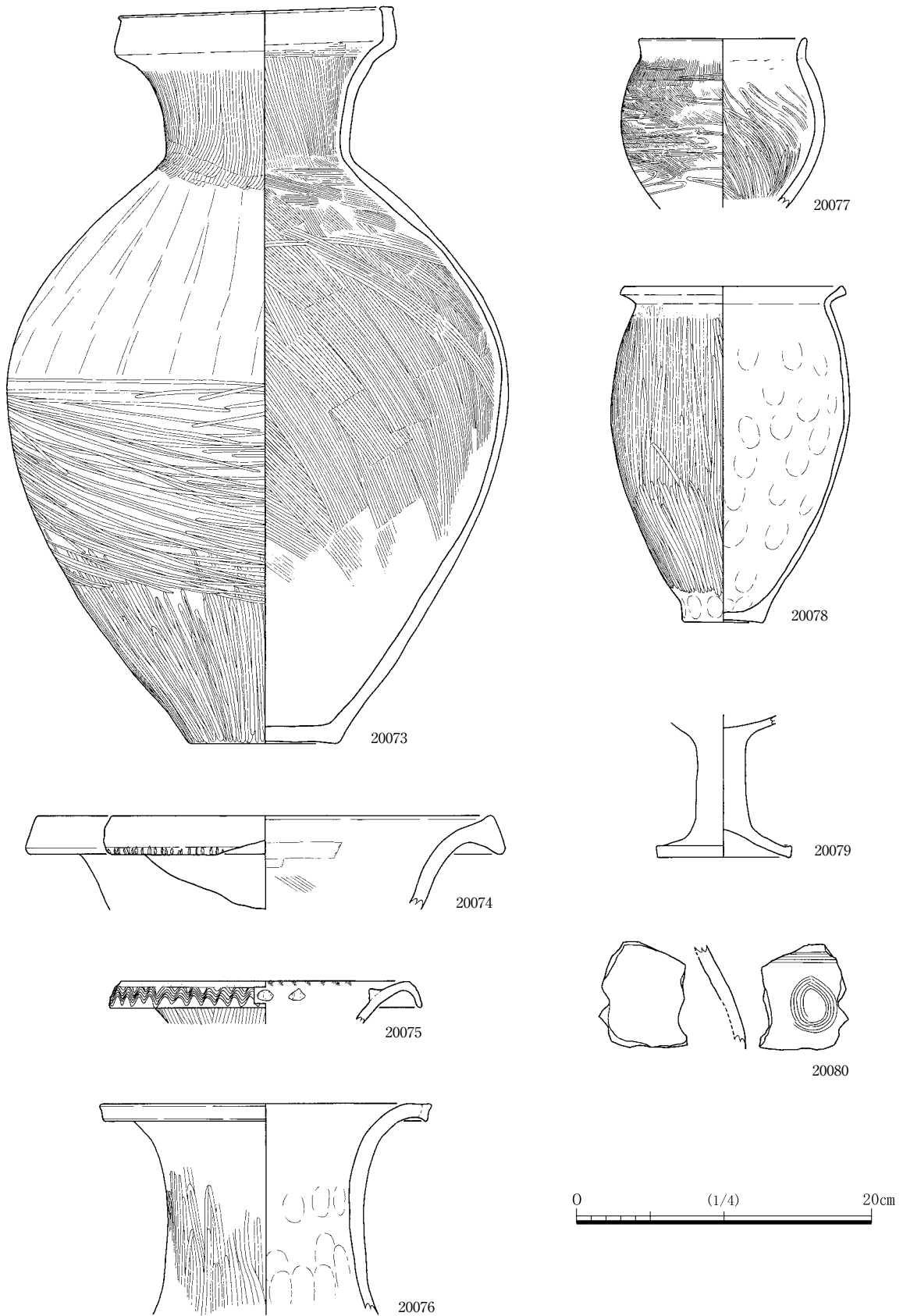


図71 03-1-2区 第6面252大溝上層出土遺物(2)



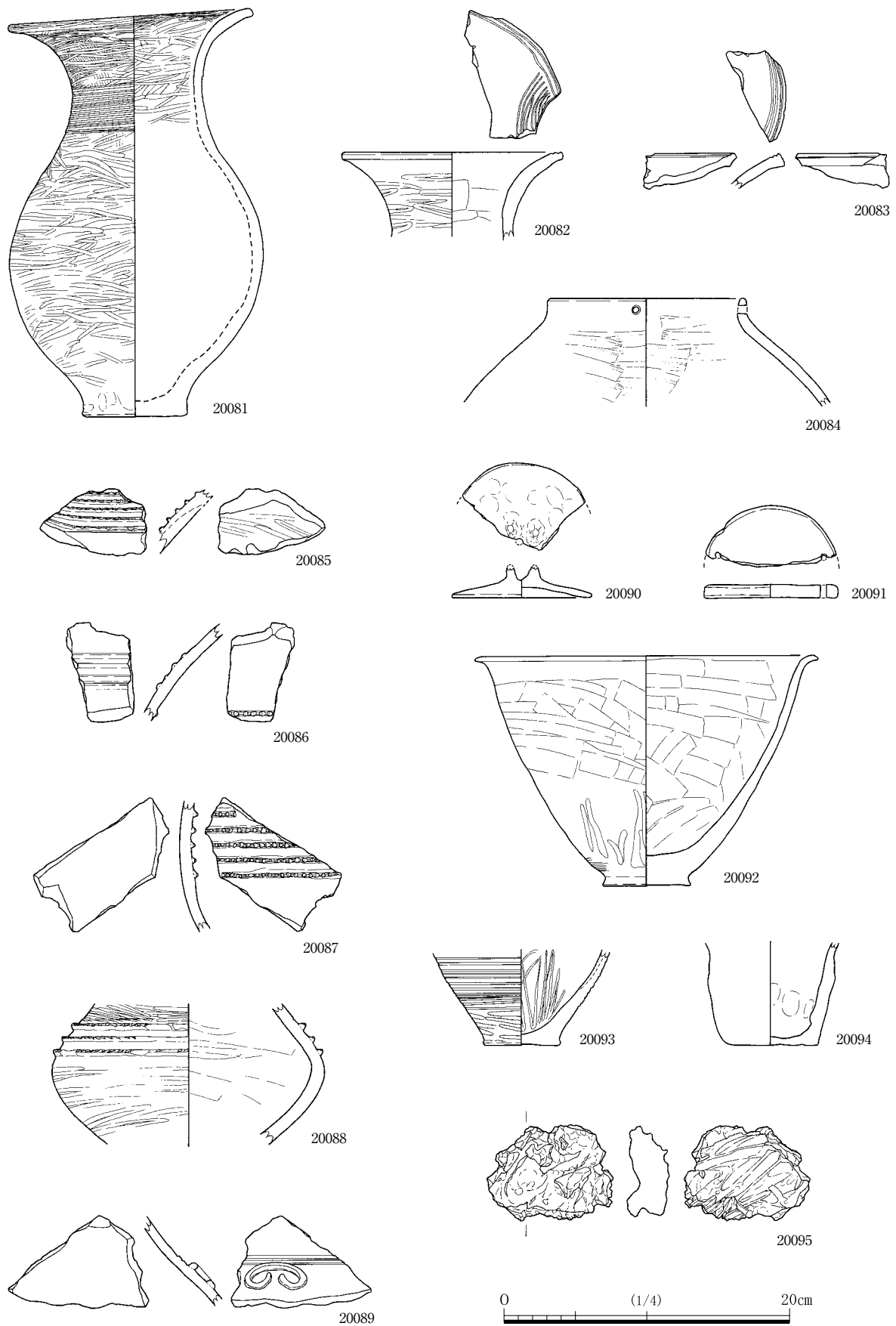


図72 03-1-2区 第6面252大溝上層出土遺物(3)

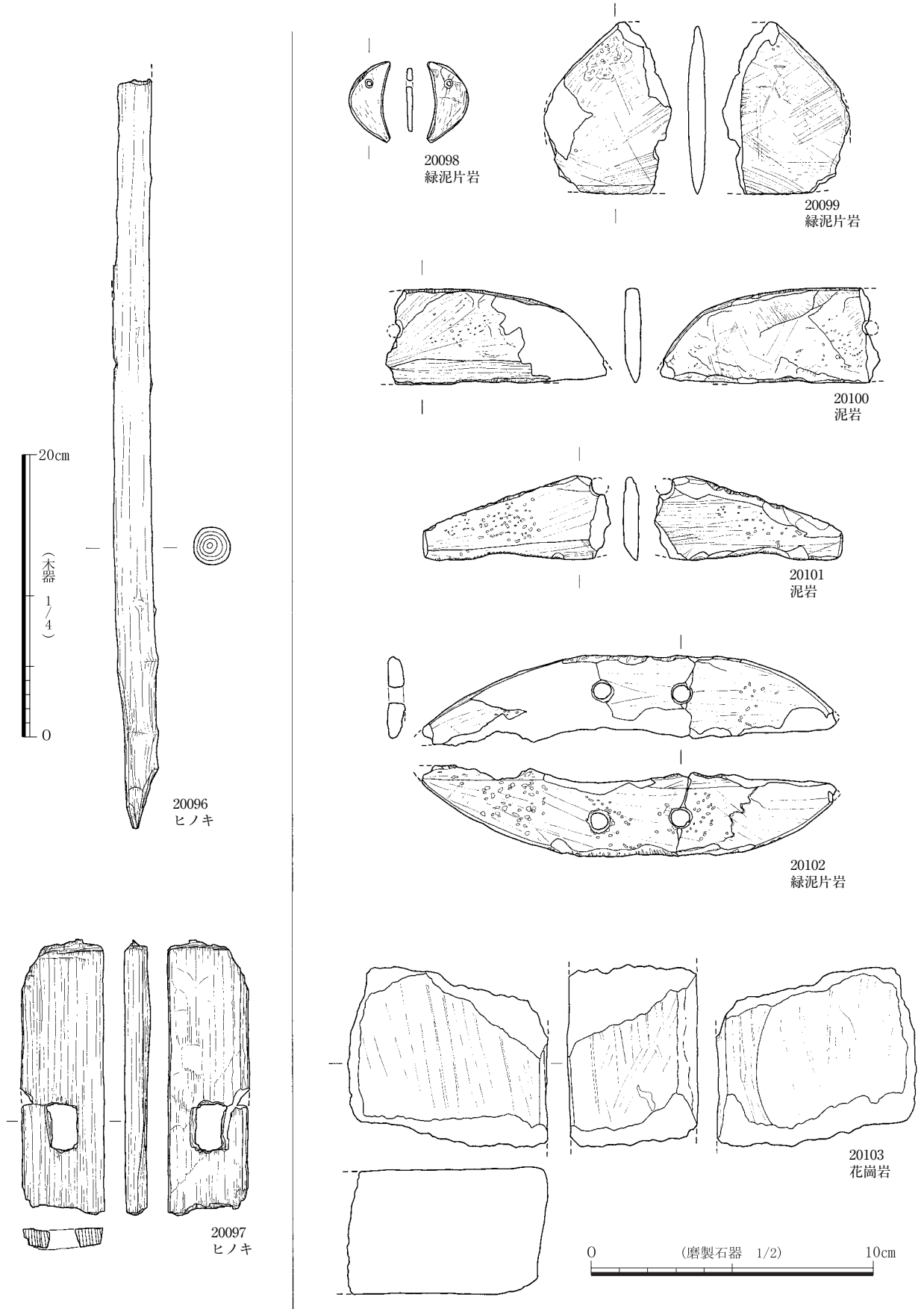


図73 03-1-2区 第6面252大溝上層出土遺物(4)

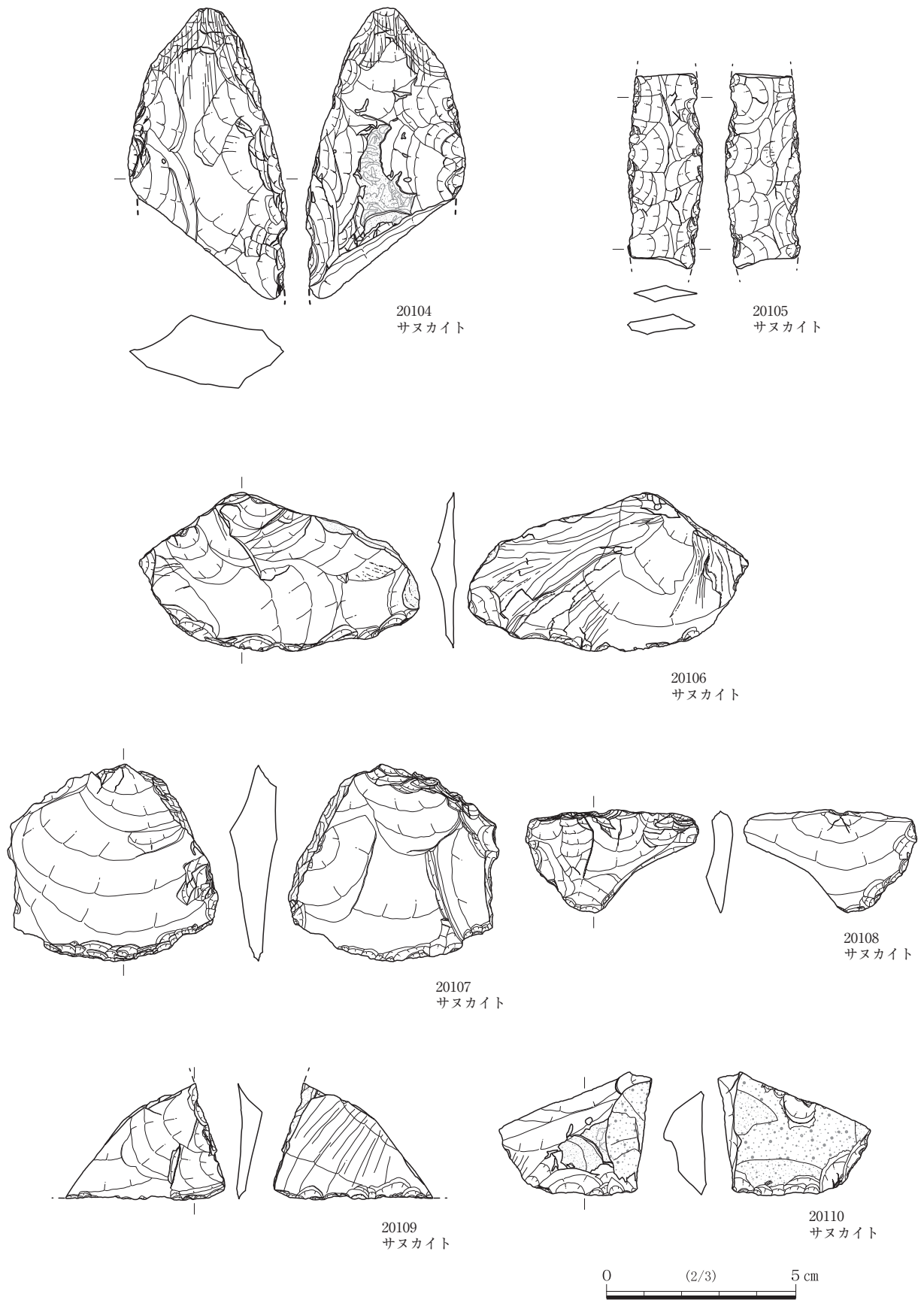


図74 03-1-2区 第6面252大溝上層出土遺物(5)

ものでⅠ - 2 様式。

20090・20091は壺の蓋。中央に孔があき突起のついた20090と、扁平で2孔が残る20091がある。

20092は鉢。体部は内湾気味にひらき、口縁は水平方向へと外反してまるくおさまる。底部は台状に厚い。体部下半にのみ太いミガキが施されている。Ⅰ - 3～4 様式か。20093は鉢の底部であろう。沈線11条が残り、Ⅰ - 4～Ⅱ - 1 様式か。20094は鉢、あるいは甕の小形品か。やや外方にひらく円柱状の体部をもつ。口縁部は欠けるが、薄く屈曲しつつあることから、外反する口縁に続くものと思われる。外面はきれいにナデが施される一方で、内面は指頭圧痕が残る。Ⅰ 様式か。

20095（写真図版77）は焼土塊である。スサ状の太い繊維痕を多く含み、ゆるくカーブする。外面は赤く、酸化鉄が付着している。内面は発泡土器と似たような器面で、黒く変色し、黒い付着物が見られる。建物の壁や、炉壁、ファイゴの羽口のようなものか。美園遺跡の発泡土器や焼土塊に類似する。

図73 - 20096は杭。直径3.8cmの心持ち材で節を残す。先端は8面の加工面をもって尖る。ヒノキ。20097は板材。長軸19.5cm、短軸5.9cm、厚み1.8cmを測る。短軸方向中央、長軸方向の端に偏って3.3×2.8cmの方形孔があく。破損部分は、腐朽のため不明だが、長軸方向にのびるか。ヒノキの柁目材。

20098（写真図版77）は三日月形の石製品。緑泥片岩製で、長軸2.84cm、短軸1.42cm、厚み0.2cmの体部に直径3mm弱の小さい孔があく。重さ1.3gを量る。装飾品か。

20099～20102は石庖丁。20099は大型石庖丁の端部か。緑泥片岩製で残存長4.53cm、残存幅6.10cm、厚み0.6cmを測る。20100は片刃で直線刃半月形。20101は泥岩製。背部だけでなく刃部にも敲打痕が残る。20102も刃部に敲打を施し、体部へ湾曲する。背部、体部にも敲打痕が目立つ。緑泥片岩製で、長辺14.69cm、短辺2.89cm、厚み0.6cm、重さ42.3g。

20103は砥石。砥面は3面で、図示していない部分は欠損する。

図74はサヌカイト製の打製石器。20104・20105は打製石剣。20104は破損部側が分厚く、先端部には縦方向に研磨痕がある。残存長7.60cm、幅4.57cm、厚み2.3cm。20105は先端、基部ともに欠損する。幅2.07cmの小形品。

20106～20110は削器。20107は周囲にも調整を加え、円形を志向する。20110は削器としたが、刃部の調整はあまい。

252大溝下層の出土遺物（図75～93・写真図版78～82）は、弥生土器22545片（うちⅠ様式2060片、Ⅰ～Ⅱ様式959片、Ⅱ様式1015片、Ⅲ様式15片）、転用土製円板96点、石庖丁36点、蛤刃形石斧2点、扁平片刃石斧1点、打製石斧3点、打製石剣13点、磨製石剣1点、磨製石鎌1点、磨石3点、砥石8点、叩き石1点、不明磨製石器3点、打製石鎌116点、石小刀4点、石錐33点、削器63点、楔95点、石核14点、サヌカイト剥片782点、サヌカイト原礫2点、小礫7個、木製品・木20点、焼土塊3点、炭2片、種子1点、計23855点と骨である。

図75の土器はⅢ～Ⅳ様式前半に位置づけられる。20111（写真図版78）は壺。口縁は上方のみに拡張し、クシ描き列点文と簾状文が施される。原体幅は広く、2段構成となる。頸部にはクシ描き直線文が残っている。Ⅳ様式前半（Ⅳ - a段階）に位置づけられる。20112は壺口縁の拡張部。上下に広がってやや内傾し、列点文、簾状文、列点文、と文様は3段にわたる。Ⅳ様式前半（Ⅲ - c段階）であろう。

20013のクシ描き列点文は2段にわたって施されている。Ⅲ - 2 様式（Ⅲ - b段階）であろう。20114も壺。口縁部は上下に拡張するが、上下の幅は狭く、厚みがある。文様は口縁部にクシ描き扇形文が2段にわたり、頸部にはクシ描き直線文が残っている。Ⅲ - 1 様式（Ⅲ - a～b段階）となろう。

20115も壺の口縁部。口縁端部は外下方に粘土を貼り付けて、厚めに垂下させ、上端・下端に太目の刻み目を施す。刻み目の間と頸部にはクシ描き直線文がめぐる。あまりスマートではないが端部を肥厚させる傾向を捉えるとⅢ-1様式(Ⅲ-a段階)と捉えられるか。20116の上下に分厚く拡張した口縁部には波状文が施され、下端には刻み目がめぐる。Ⅲ-1様式(Ⅱ様式末～Ⅲ-a段階)。

20117(写真図版78)は壺。頸部は長大で、口縁端部は垂下して刻み目が施される。体部は球形で、かろうじて残った上半には焼成後に施されたと考えられる穿孔がある。口縁から体部に至るまで簾状文がめぐり、Ⅲ-2様式(Ⅲ-b段階)に位置づけられる。

20118・20119(写真図版78)は20117と同形の壺の口縁部。前者は口縁下端に刻み目が施され、後者は頸部にクシ描き直線文の痕跡が残る。いずれもⅢ-2様式(Ⅲ-b段階)であろう。

20120は鉢。口縁はほぼ直立し、端部は肥厚して面をもつ。文様は列点文を口縁にめぐらし、その下に簾状文が2条残る。Ⅲ様式(Ⅲ-b段階)。20121も鉢。体部上半が内傾し、口縁部は横にのびてやや肥厚する。口縁端部と体部上半には波状文が施される。Ⅲ様式(Ⅲ様式前半)。

20122は椀状の杯部をもつ高杯。体部は内湾し、口縁端部をなでて平坦面を作る。口縁直下には列点文を施す。Ⅲ様式(Ⅲ-b段階)。20123は水平口縁の高杯。内面に低い突帯をつけた形態で出現期のもの。口縁上面には煤が付着しており、蓋へ転用したものであろう。Ⅲ-1様式(Ⅲ-a段階)。

図76-20124(写真図版78)は直線的にひらいた口縁部を垂下させ、そこをクシ描き直線文と波状文、円形浮文、刻み目で飾る。さらに口縁部上面には扇形文を配した装飾的なもの。色調も浅黄橙色で、生駒山西麓産の土器とは異なる。Ⅲ様式初頭であろう。20125(写真図版78)は口縁端部が垂下して、上下に刻み目が施される。上面には口縁に沿ってクシ描き波状文が施され、扇形文をポイントにすえる。Ⅱ様式。

20126は大形の広口壺。口頸部が短く外反する形態をもつもので、文様は複合クシ描き文を用いている。2帯複合クシによる波状文、7組14条が施される。1組の幅は1.8~2.0cmで、原体の強弱が同じであるため、同一原体を用いたものであろう。Ⅱ様式後半に位置づけられよう。摂津系の土器か。

20127(写真図版78)も大形の壺。無頸壺だが、長頸壺の頸部を擦って二次加工したものである。胴部の張りは大きく、上半はクシ描きによる3段の流水文で飾られ、その間に扇形文、最下段に波状文2条を配置する。流水文は3分の1周を一単位として、胴部を3分割するように施されている。Ⅱ様式で淀川水系の土器か。

図77はⅠ~Ⅱ様式の土器。20128は長頸壺。頸部の中ほどに最小径があり、口縁端部は面をもつ。クシ描き直線文は条痕のはっきりした原体で深くひかれる。Ⅱ-1様式であろう。

20129は壺の口縁端部。端部は肥厚してクシ描き波状文が2条施され、外面にはクシ描の流水文が描かれる。Ⅱ様式。20130は壺の頸部。太い条痕のクシ原体で縦型流水文を描く。Ⅱ様式。20131は壺の体部。クシ描き直線文、扇形文によって流水文が描かれる。

20132は無頸壺の体部。すぼまった底部には、両脇に焼成前の孔があいて貫通している。しかし一方にあいた2個の孔のうち、下の孔は大きめで貫通していない。通常、2孔一対とすることを考えるとやや特異である。体部にはクシ描き直線文がめぐるⅡ様式。20133は壺の底部。器面は内外面・断面ともにやや磨耗し、内面は黒変している。Ⅰ~Ⅱ様式か。

20134は壺の口縁部。口縁は下方へやや肥厚する。頸部にはクシ描き直線文2条が残る。Ⅱ様式後半か。20135も壺の口縁部。口縁端部は中央が凹むが、面をなさない。頸部には3条一対となった沈線が

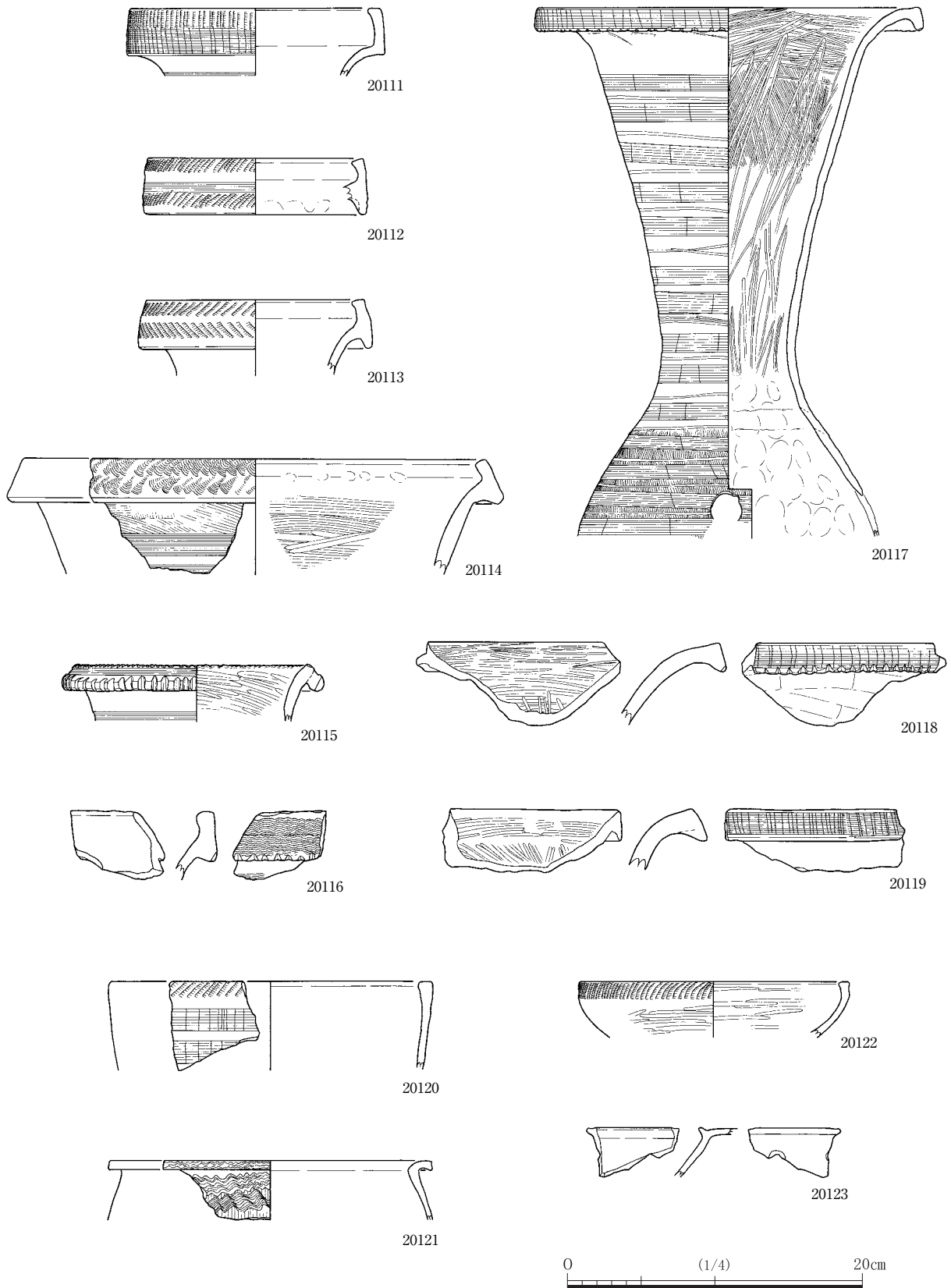


図75 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(1)

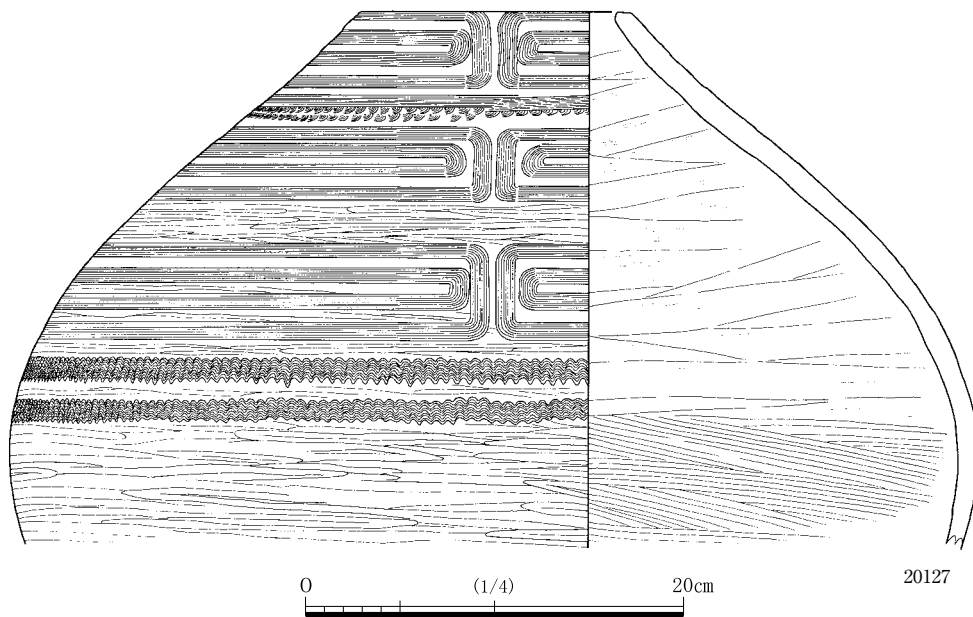
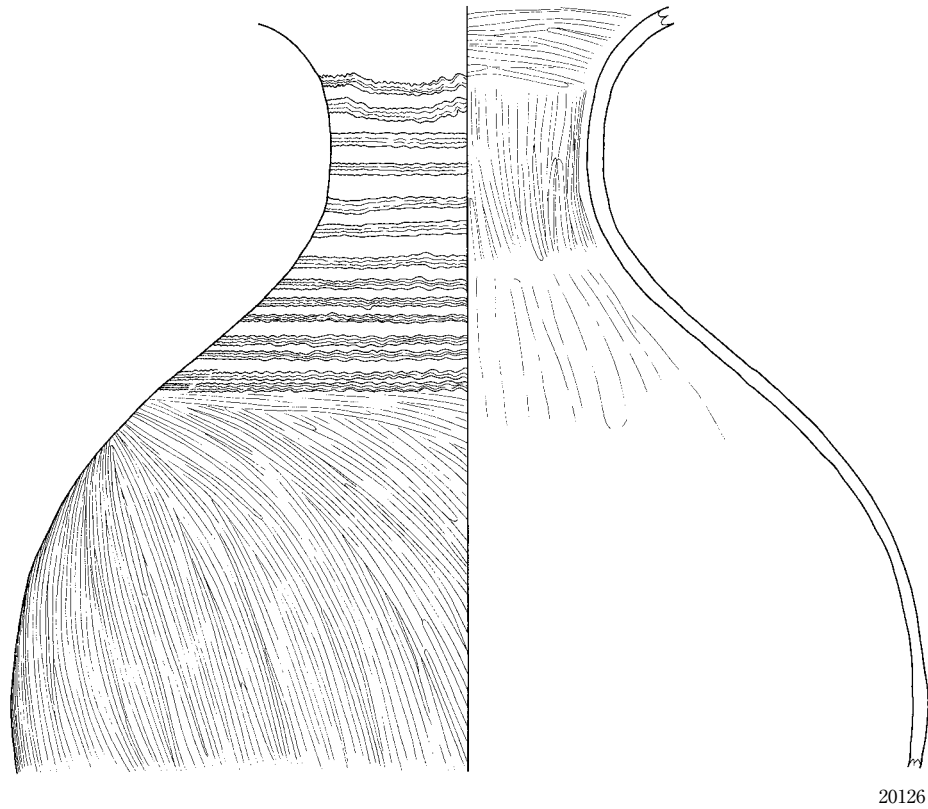
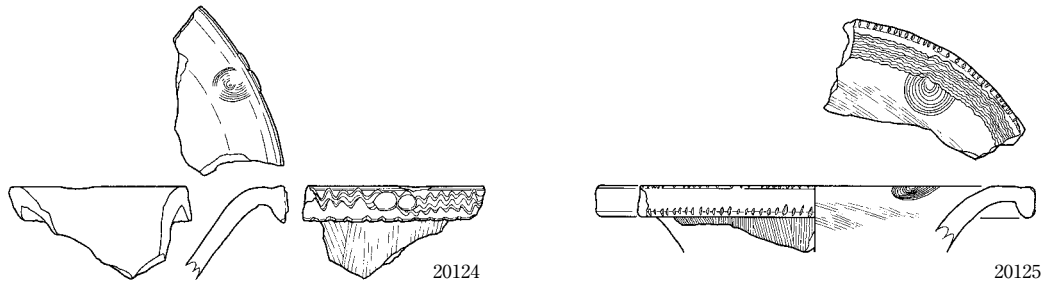


図76 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(2)

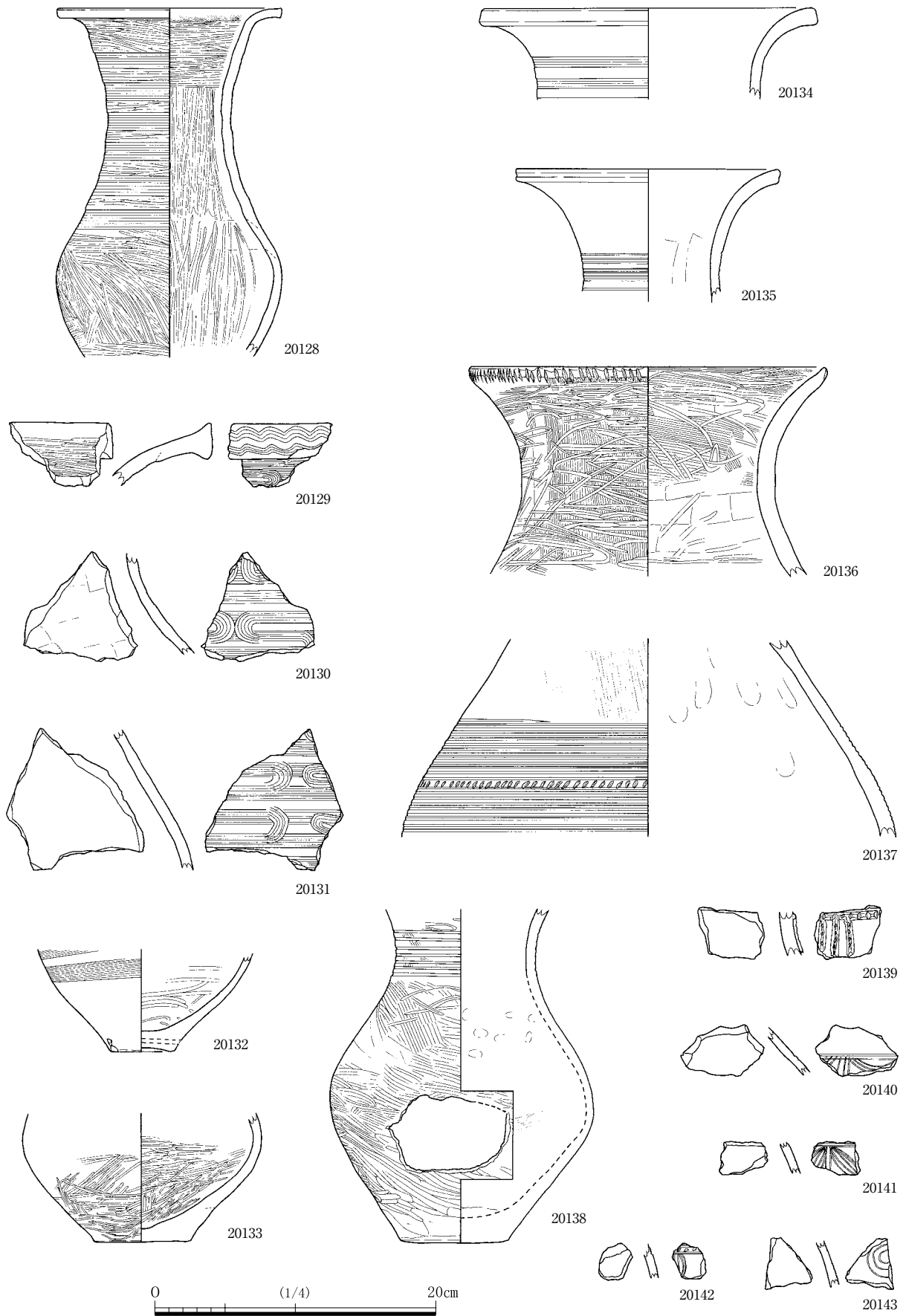


図77 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(3)



2帯以上めぐる。I - 4 様式に位置づけられよう。

20136 (写真図版78) は壺の口頸部。やや間延びした頸部はあまり広がらずに口縁部に至り、下面に深い刻み目がめぐる。内外面ともに条痕のはっきりしたハケ調整の後、粗いミガキが施されている。淀川水系や近江地域の影響を感じさせる。なお、内面頸部下はモザイク状に器面が剥離する。I 様式末からII 様式初頭に位置づけられよう。

20137は壺の体部上半。多条沈線帯の間に、沈線と同一工具で刻み目、というより刺突文をめぐらせる。上の沈線は途中で終わるものを含めると13条を数える。I - 4 様式。20138 (写真図版76) は頸部に沈線7条がめぐる壺。胴部の穿孔は一部しか確認できていない。口縁部を欠く。I - 3 ~ 4 様式。

20139~20143は壺の頸部や肩部片。20139 (写真図版78) の刻み目をもつ貼り付け突帯は、体部よりやや色調の淡い異種粘土で作られ、横位に1条、縦位に3条残る。I - 3 ~ 4 様式。20140は太い横位の沈線の下に、浅く細い沈線で直線と連弧文を組み合わせた文様を描く。I - 2 様式であろう。20141 (写真図版78) には、浅い沈線による無軸木葉文が描かれる。上部の沈線は段の可能性もあるが、破損と磨耗のため明らかではない。I - 1 ~ 2 様式。20142は小片だが、沈線間に刻み目と、おそらく有軸の木葉文が施されている。I - 1 ~ 2 様式。20143 (写真図版78) は沈線3条が弧を描く。I 様式か。

図78 - 20144~20149はI 様式の甕の口縁部。20144の口縁は強く外反して端部に面をもち、刻み目が施される。体部には沈線4条。20145のゆるく屈曲した口縁下端には刻み目が、体部には沈線1条・刻み目突帯・沈線6条の順に施される。突帯の存在は珍しいが、I - 3 ~ 4 様式に位置づけられるものであろう。20146は復原口径34.6cmを測る大形品。口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部には刻み目、体部には沈線3条を1組として山形文を施す。山形文の中央を分割するように垂直方向にも沈線が入る。20147は甕の体部。横位の沈線にはさまれた平行斜線文が残る。I - 3 ~ 4 様式。

20148・20149は瀬戸内系の甕。いわゆる逆「L」字状口縁をもつ。20148は口縁よりやや下がって突帯がつき、浅く細かい刻み目が施される。いずれもI - 3 ~ 4 様式。

20150は底部。ハケ調整が目立つ外面は一部粘土が剥がれており、一度形を作った後、さらに外側に粘土を貼り付けたためかと思われる。I 様式か。20151 (写真図版78) は鉢の底部か。底部の円周に沿ってめぐる溝に、粘土の皺がよっている。製作時の乾燥が足りずに、自重によって体部が垂れたものであろう。底部は内外面ともにケズリを施して厚みを減らし、なんとか形態を整えようとしている努力が認められる一品である。

20152は壺蓋。円板状の上面には、3条一組の沈線が交差する。焼成前穿孔が1つ、破損部に残っている。I 様式。

20153は無頸壺の底部。高台状となった裾には一對の紐孔があく。体部は沈線と刺突文で飾られている。I - 3 ~ 4 様式であろう。

20154 (写真図版78) は鉢あるいはミニチュアの甕か。底部はナデによって高台状に作り出され、体部は膨らんで、口縁部は「く」の字状に外反する。作りは粗く、器厚もまちまちである。体部中央には、外から粘土を継ぎ足した円形の痕跡が残ることからも、作りの粗さが露呈する。内外面ともに煤が付着している。なお、頸部は粘土の継ぎ目にあたり、破損した部分に煤が付着していることから、口縁部が欠けた後も使われていたものと考えられる。

20155は土器片転用紡錘車。端に削り出し突帯が残っており、おそらくI - 2 様式の壺を利用したものと思われる。20156~20158は土器片転用円板。20156の外面はハケ調整で煤が付着する。20157には、

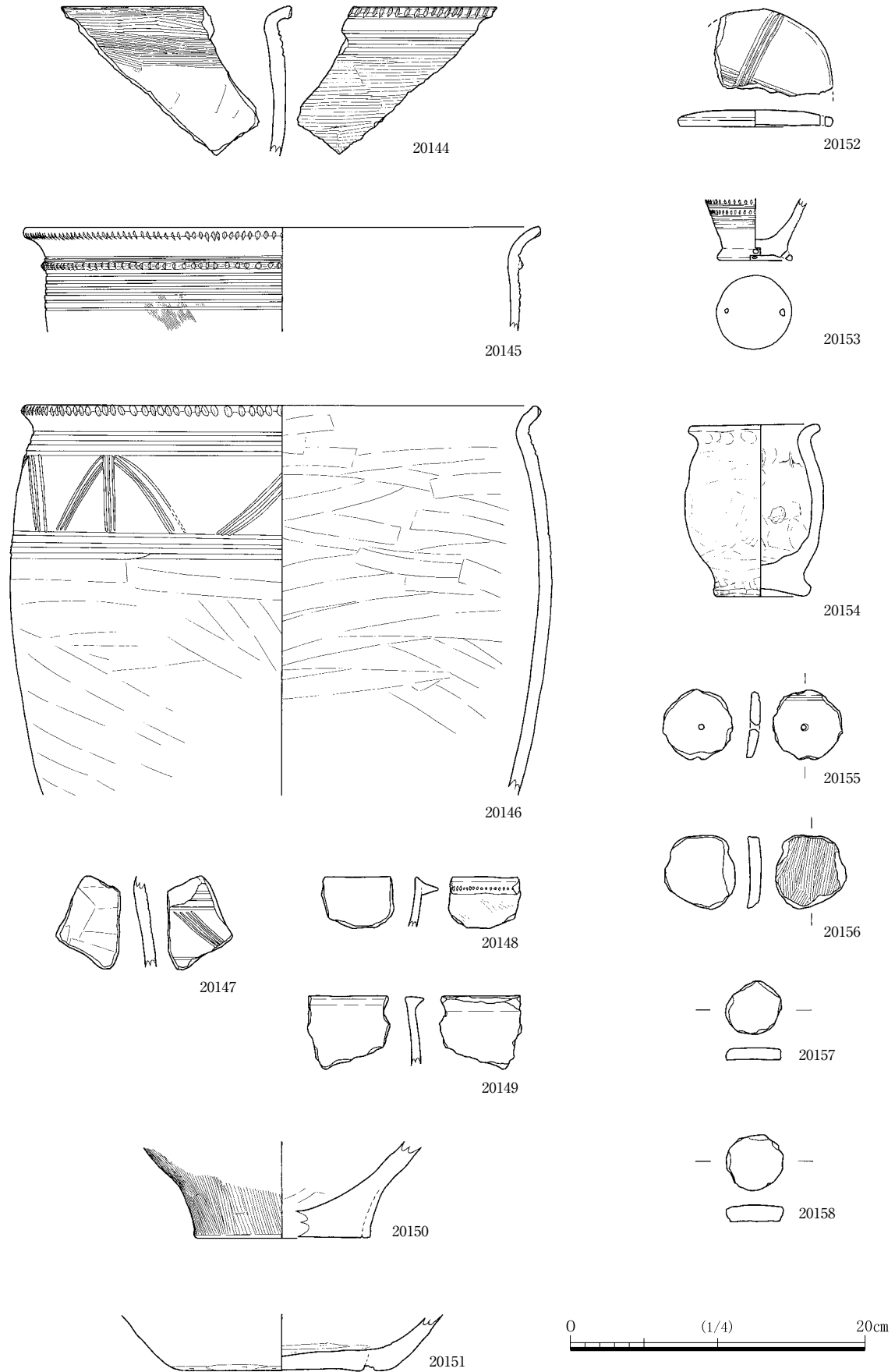


図78 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(4)

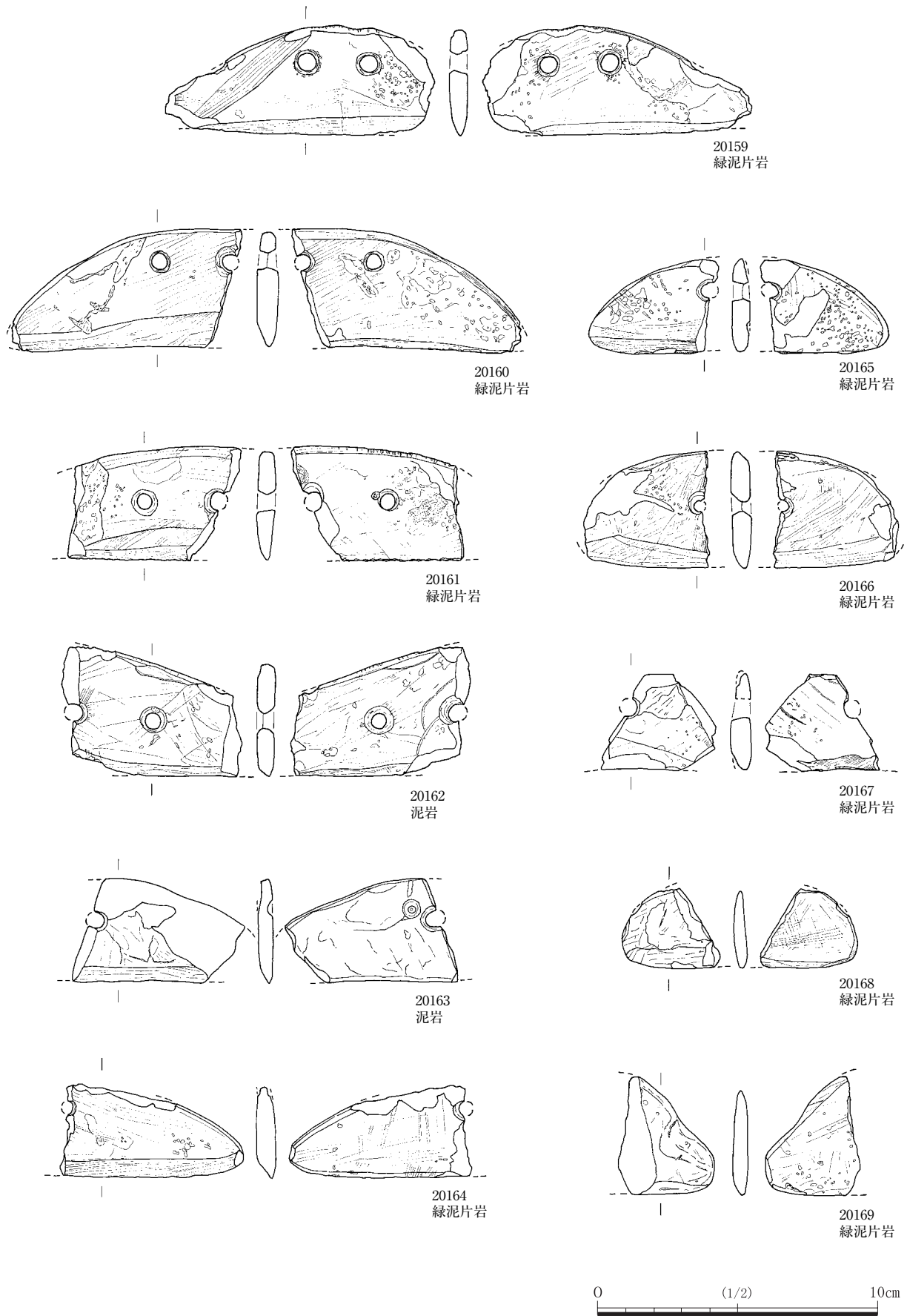


図79 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物（5）

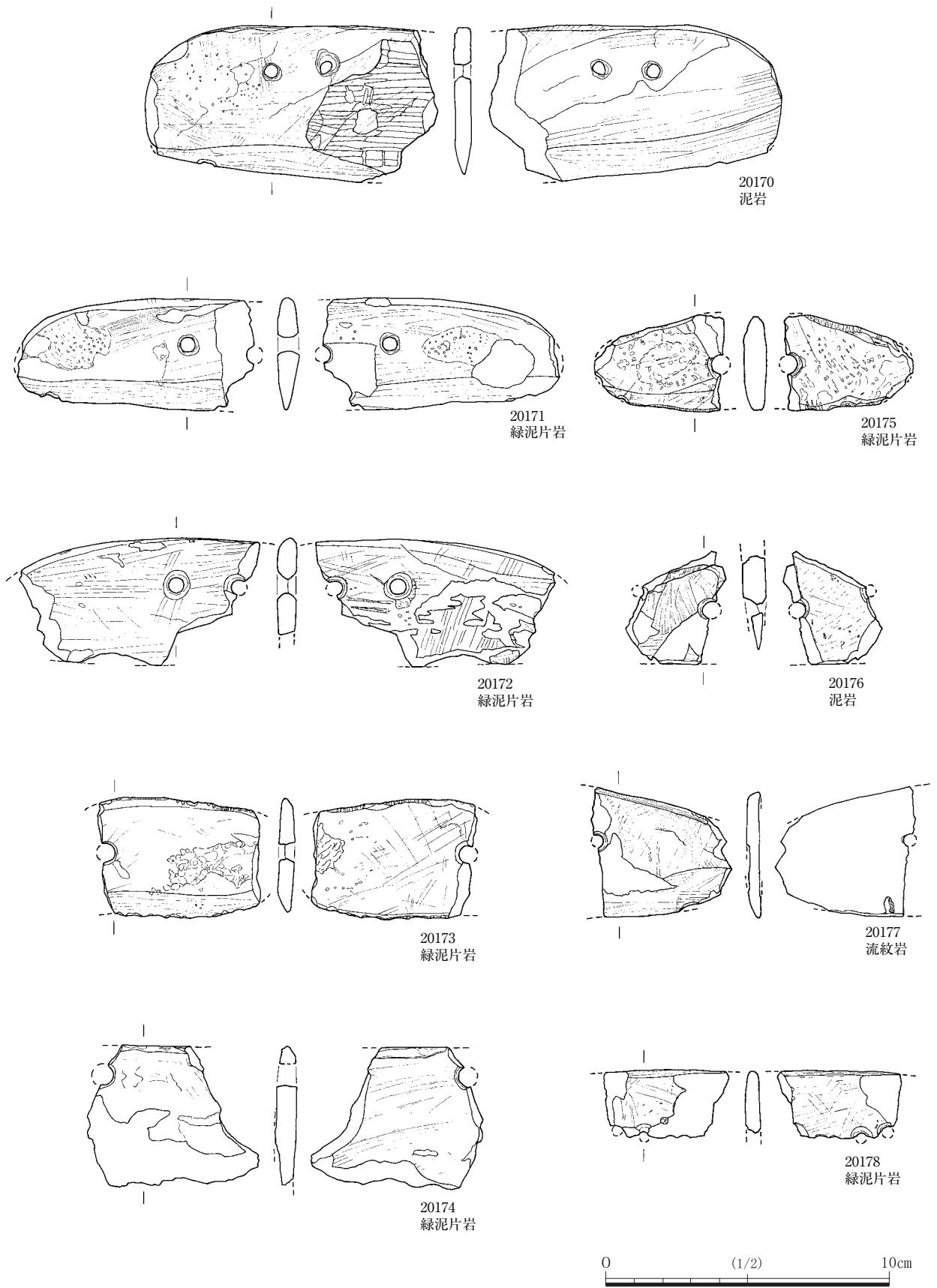


図80 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(6)

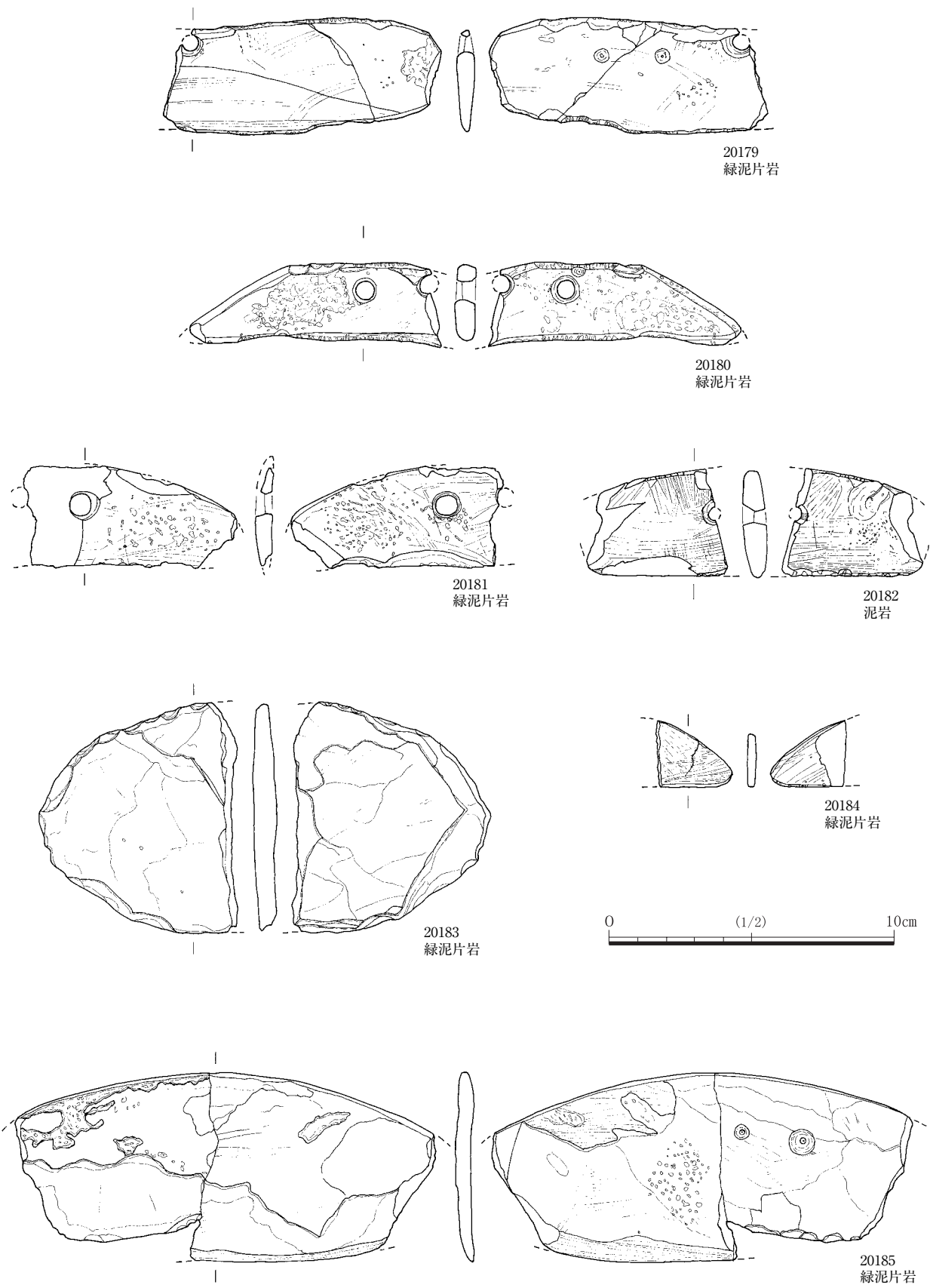


図81 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(7)

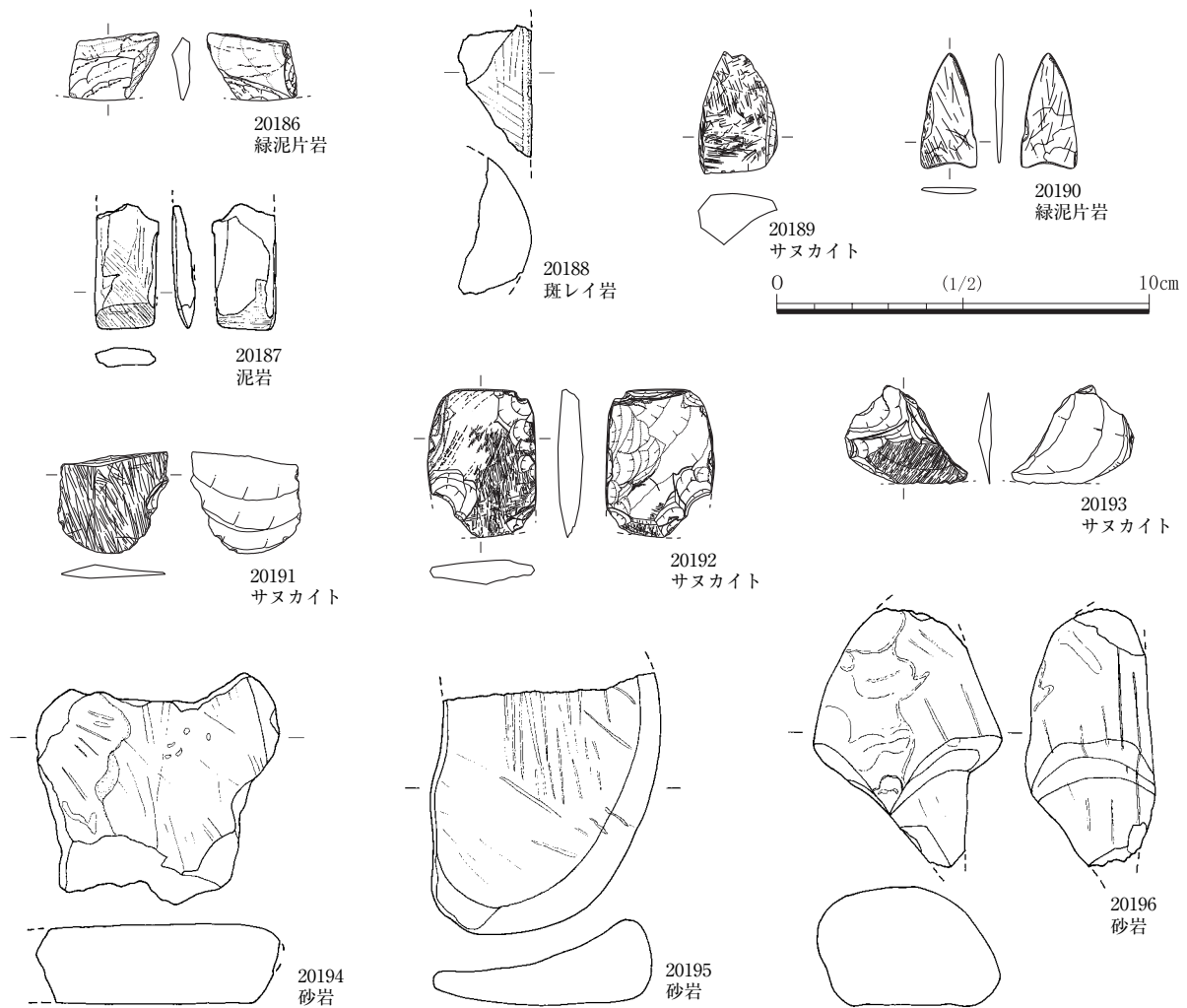


図82 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(8)

穿孔を途中でやめたような痕跡がある。

図79～82(写真図版76・79)は磨製石器。図79-20159～図81-20185は石庖丁。20159～20169は直線刃半月形、20170・20171は長方形の平面形。また20179～20185は再加工品あるいは未成品である。

うち、20161(写真図版79)には紐孔の横に穿孔途中の痕跡が残る。20170(写真図版79)は片面に原礫面を残す。20174は刃部を打ち欠いている。20177は流紋岩で節理に沿って片面が剥落する。20178は紐孔が隣接し、さらに穿孔途中の痕跡も見られる。20179(写真図版79)は2点が接合したもので、片面に穿孔痕が残る。背部には紐孔が残り、再加工品であることが分かる。20180(写真図版79)は刃部、背部を敲打によって潰している。20181は刃部を欠く。20182は破損した端部側を磨く。端部を刃として柱状石斧へ再加工しようとしたものか。20183(写真図版76)は緑泥片岩で、整形しただけの未成品である。20184は刃部が作り出されていない。20185(写真図版79)は残存長14.49cm、短軸6.62cmのやや大形のもの。片面に穿孔途中の紐孔が残る。刃部が曲線的で杏仁形となるか。図82-20186は石庖丁の破片か。20187(写真図版76)は扁平片刃石斧。20188・20189は柱状蛤刃石斧の破片と考えられる。20190(写真図版79)は磨製石鏃。周縁部の加工はあまく、未成品か。緑泥片岩製。20191は磨製石剣の破片か。中央よりやや左でゆるいカーブをもってふくらむ。右上部の調整以外は欠損か。20192・20193はサヌカイト製の不明磨製石器。20192は石斧となるか。

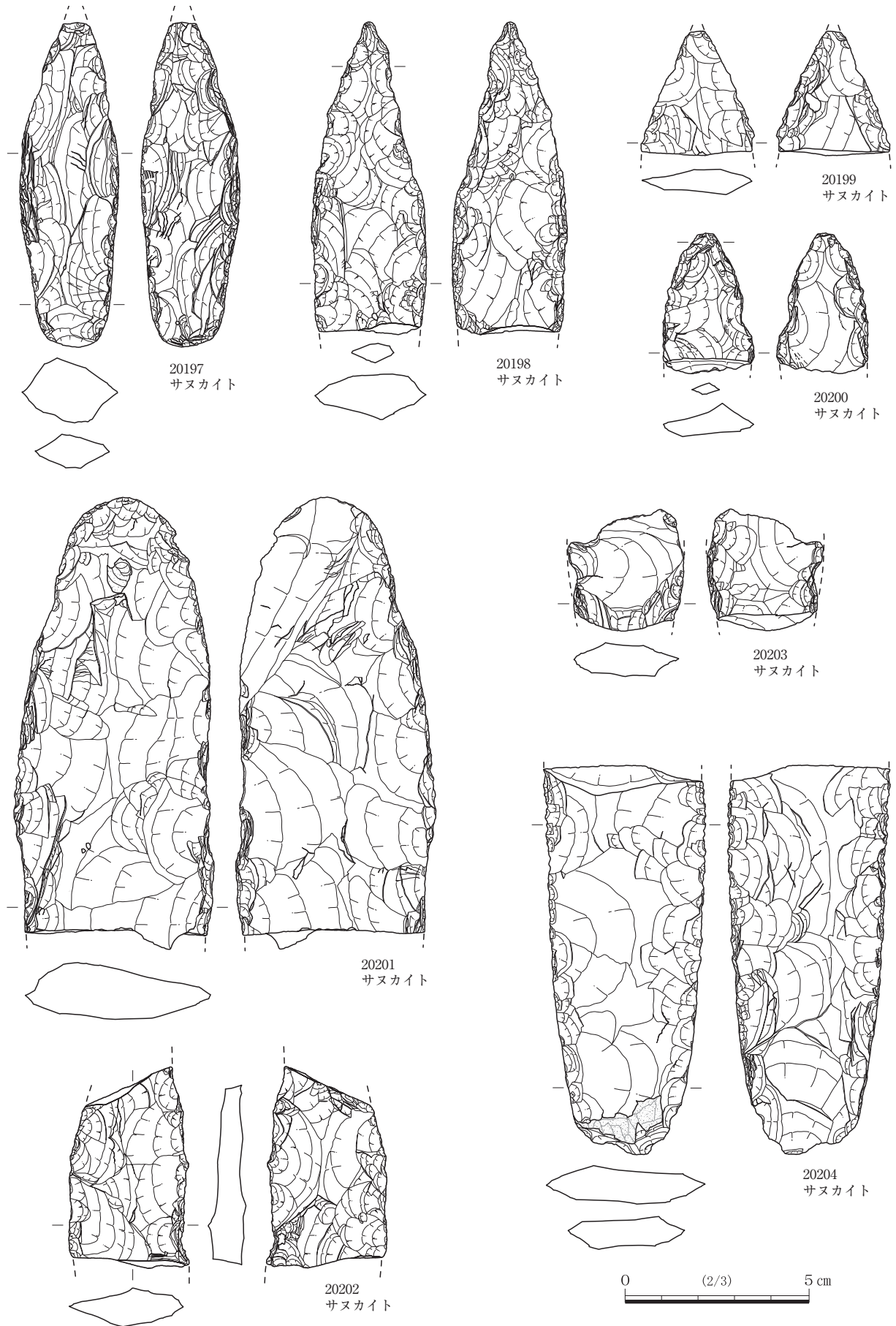


図83 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物(9)

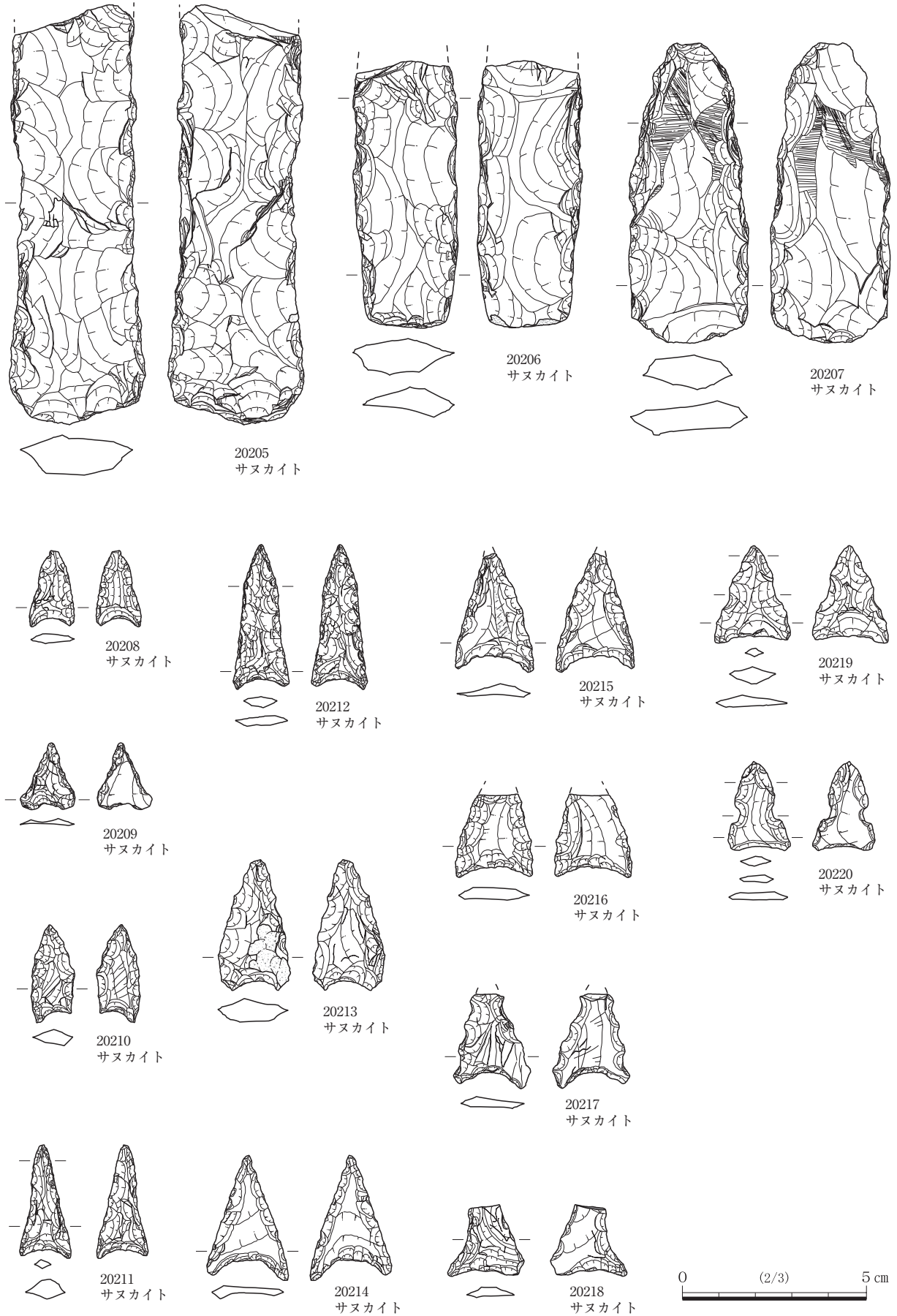


図84 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (10)



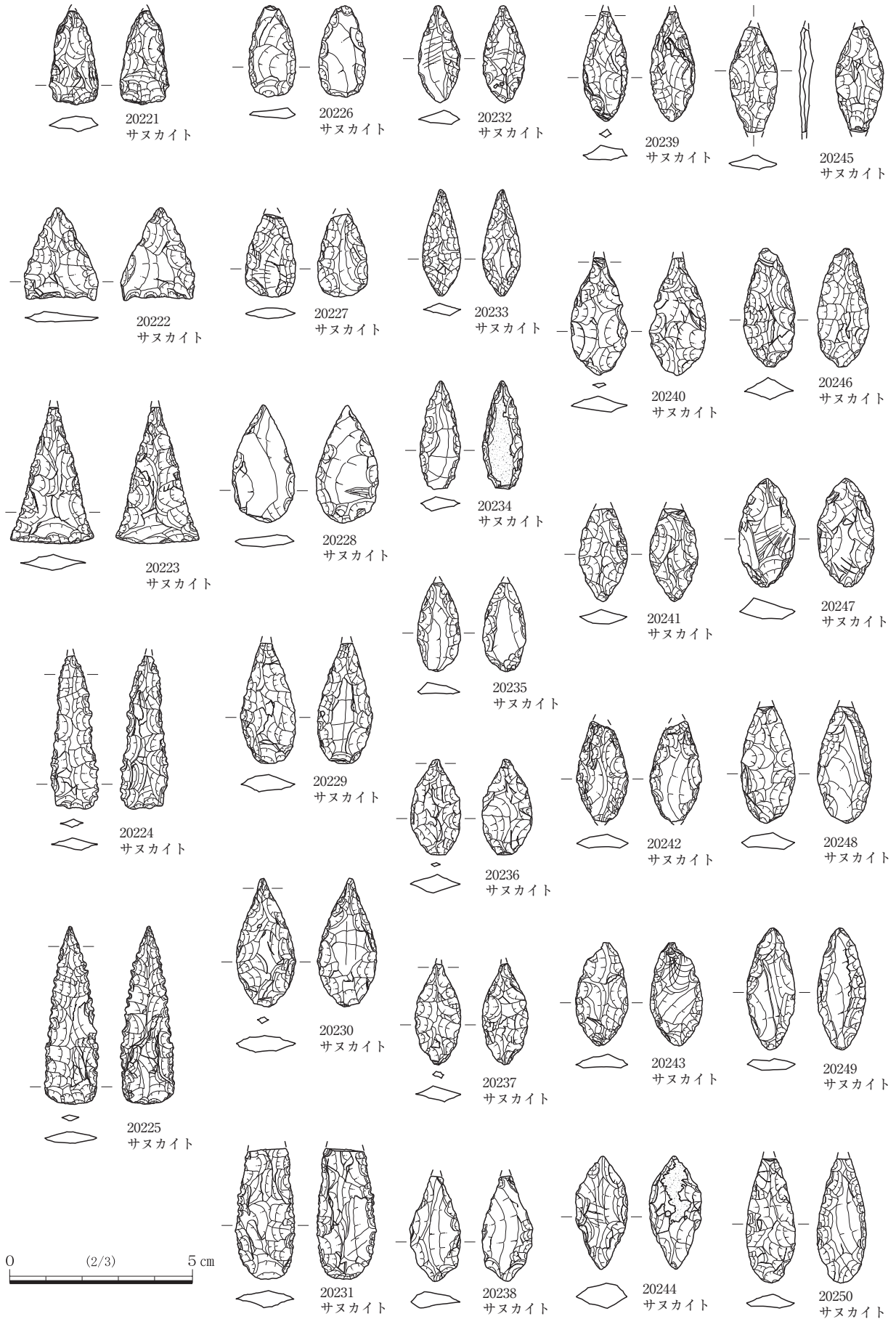


図85 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (11)

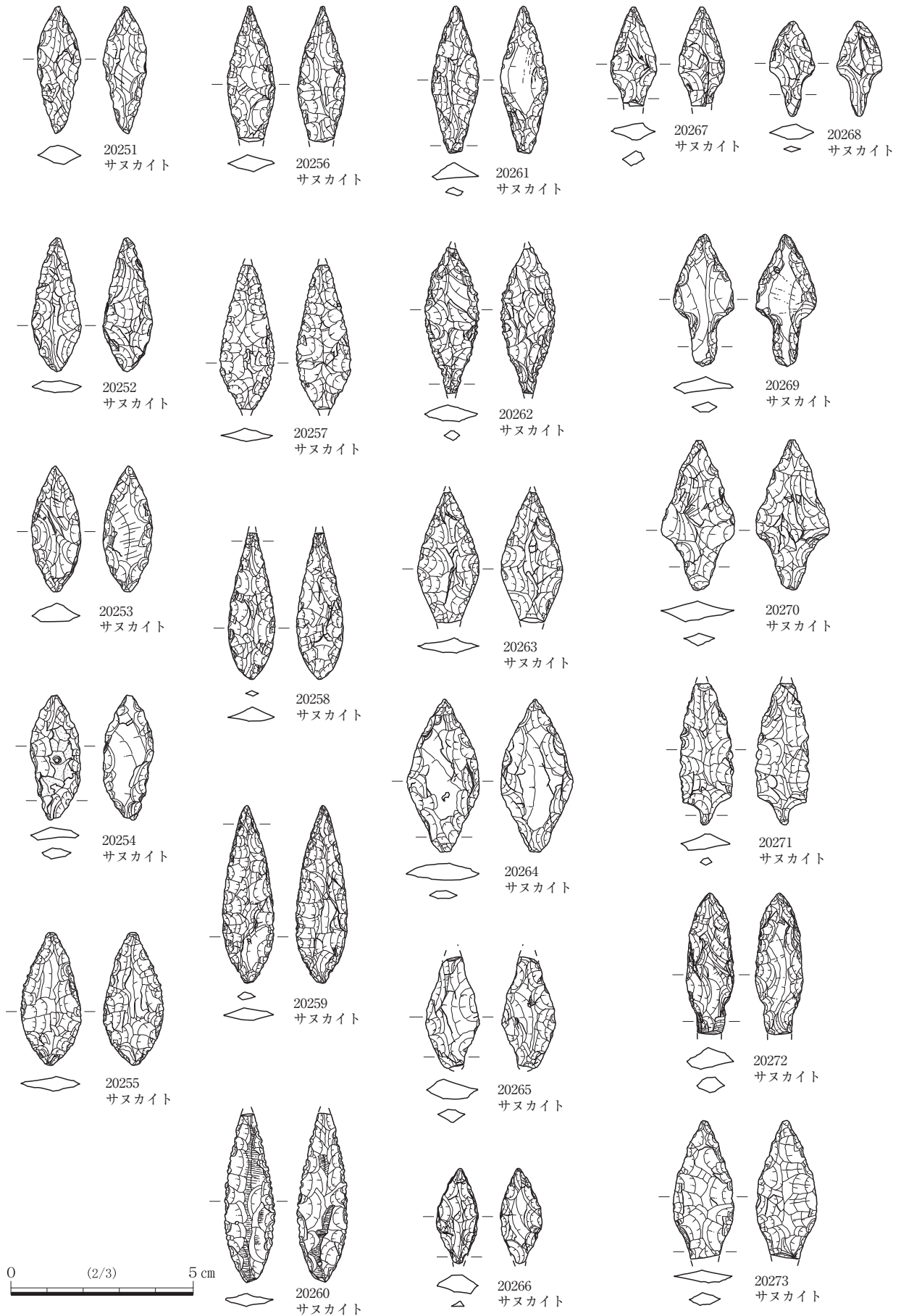


図86 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (12)

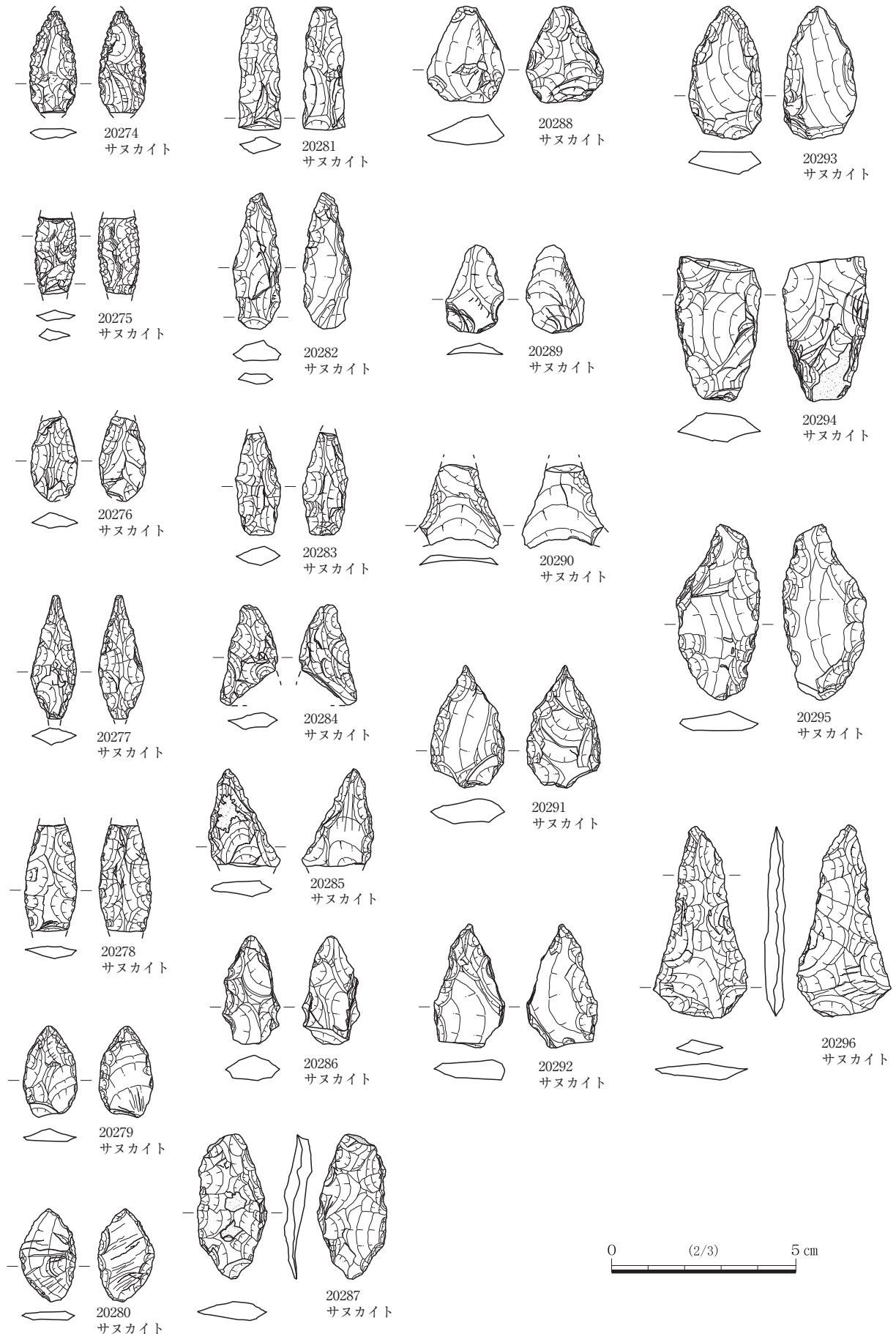


図87 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (13)

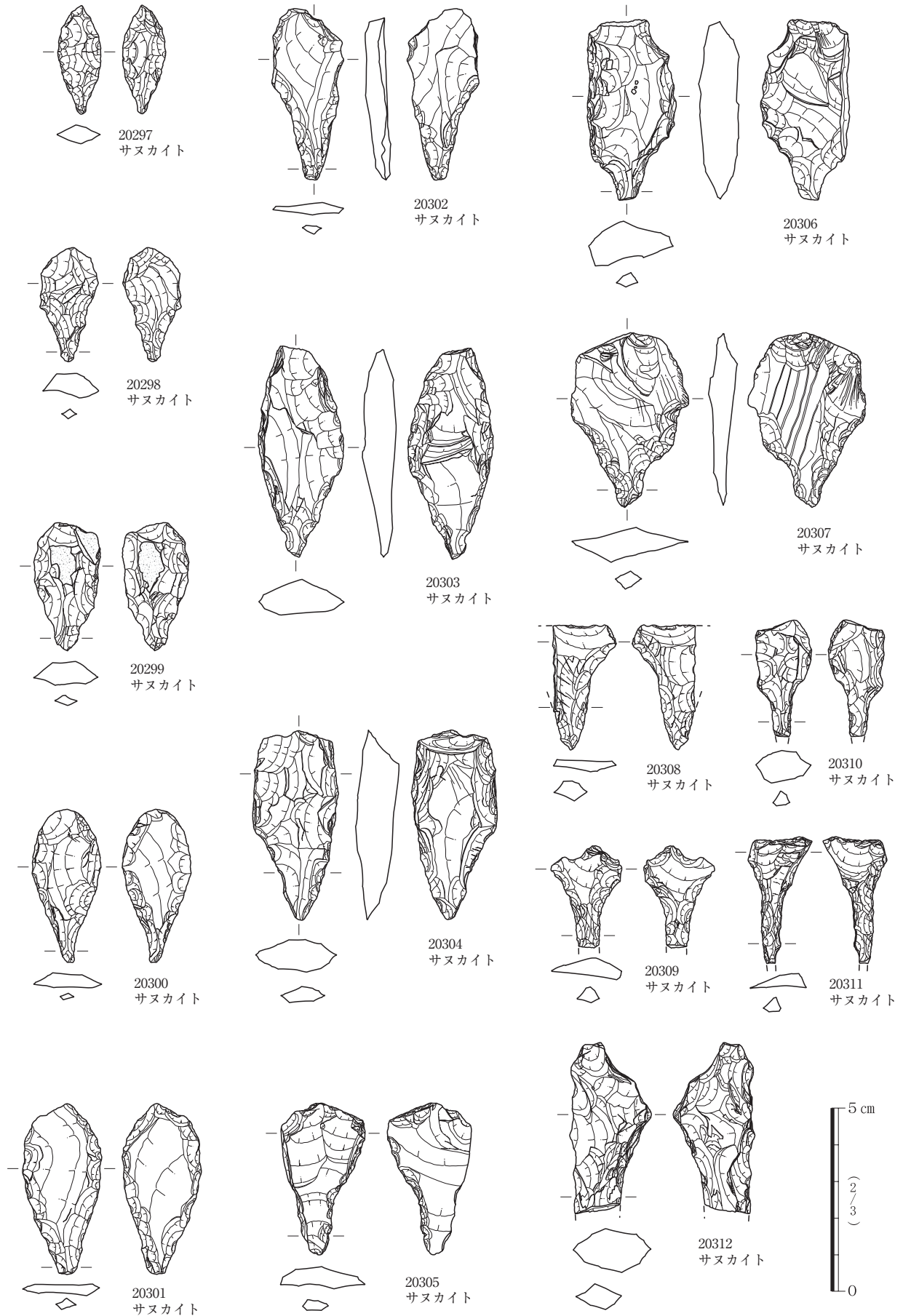


図88 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (14)

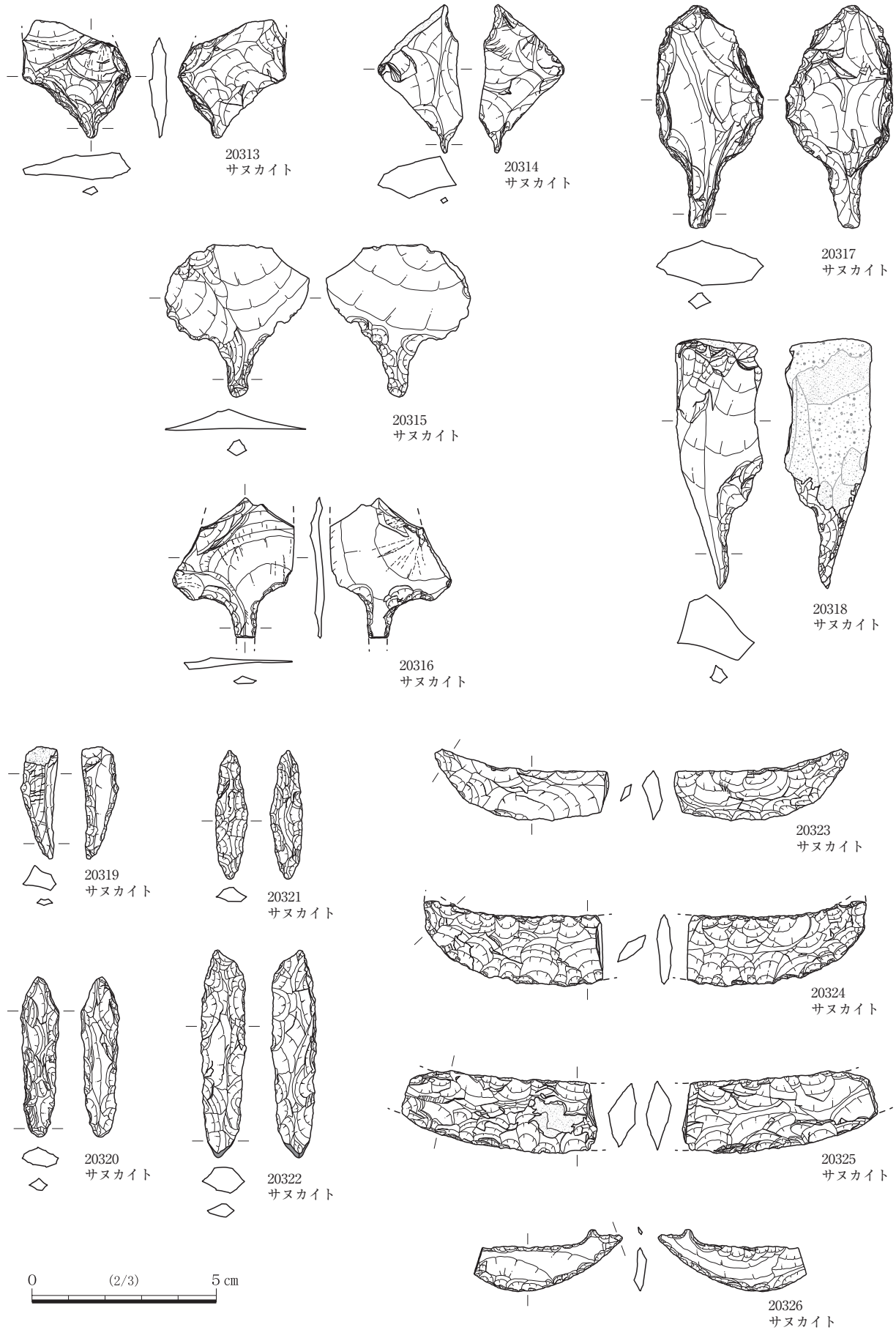


図89 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (15)

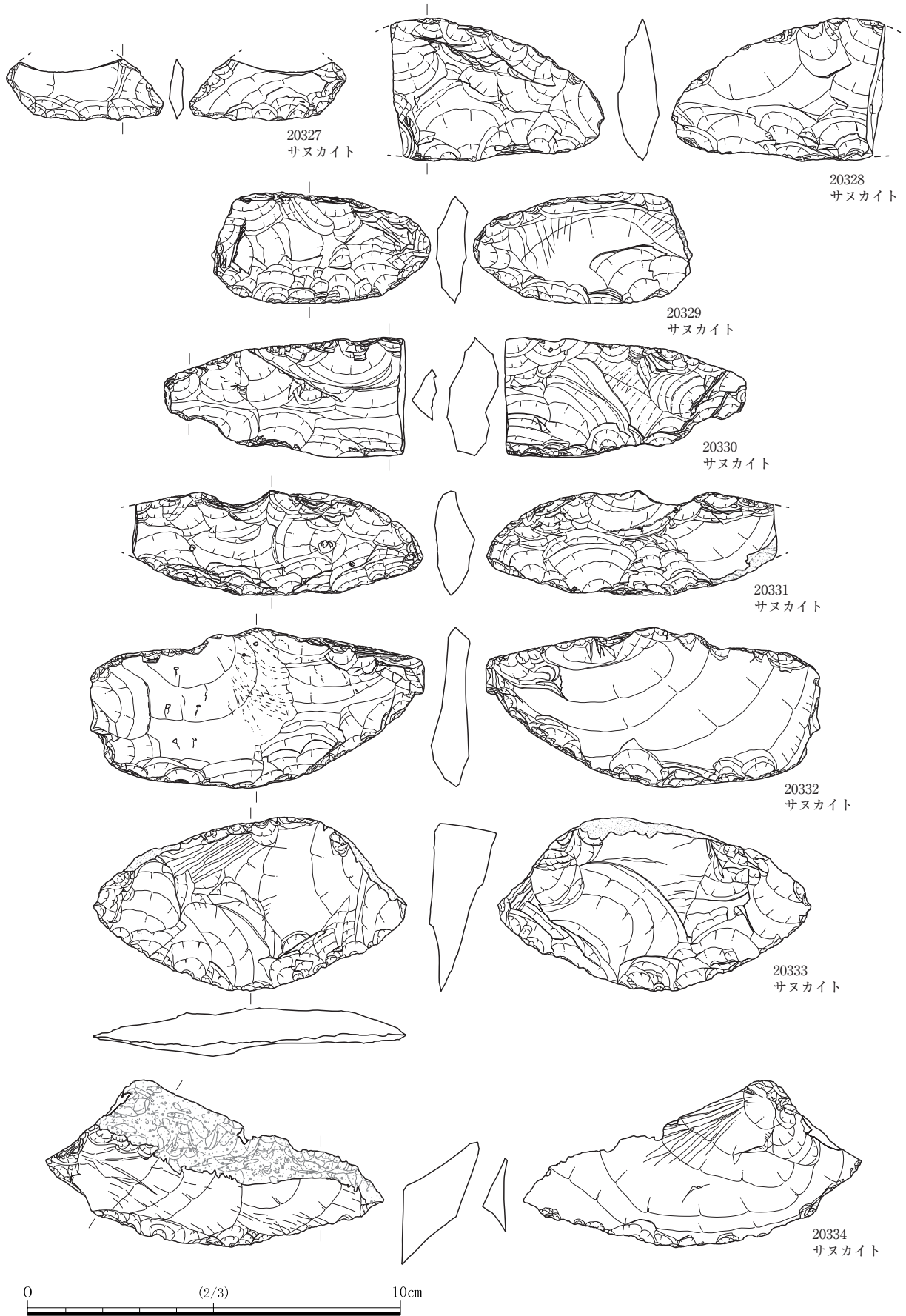


図90 03 - 1 - 2区 第6面252大溝下層出土遺物 (16)

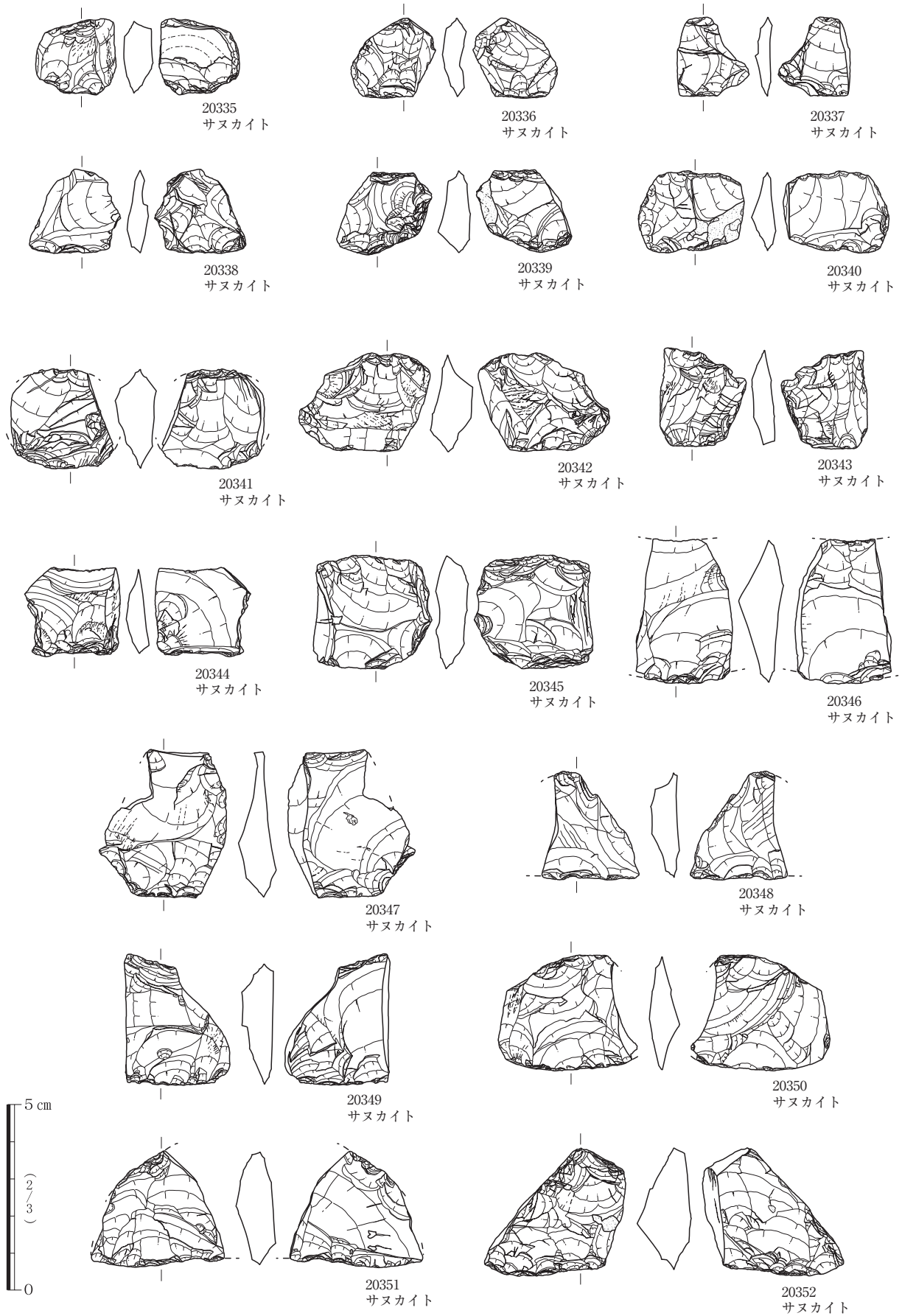


図91 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (17)

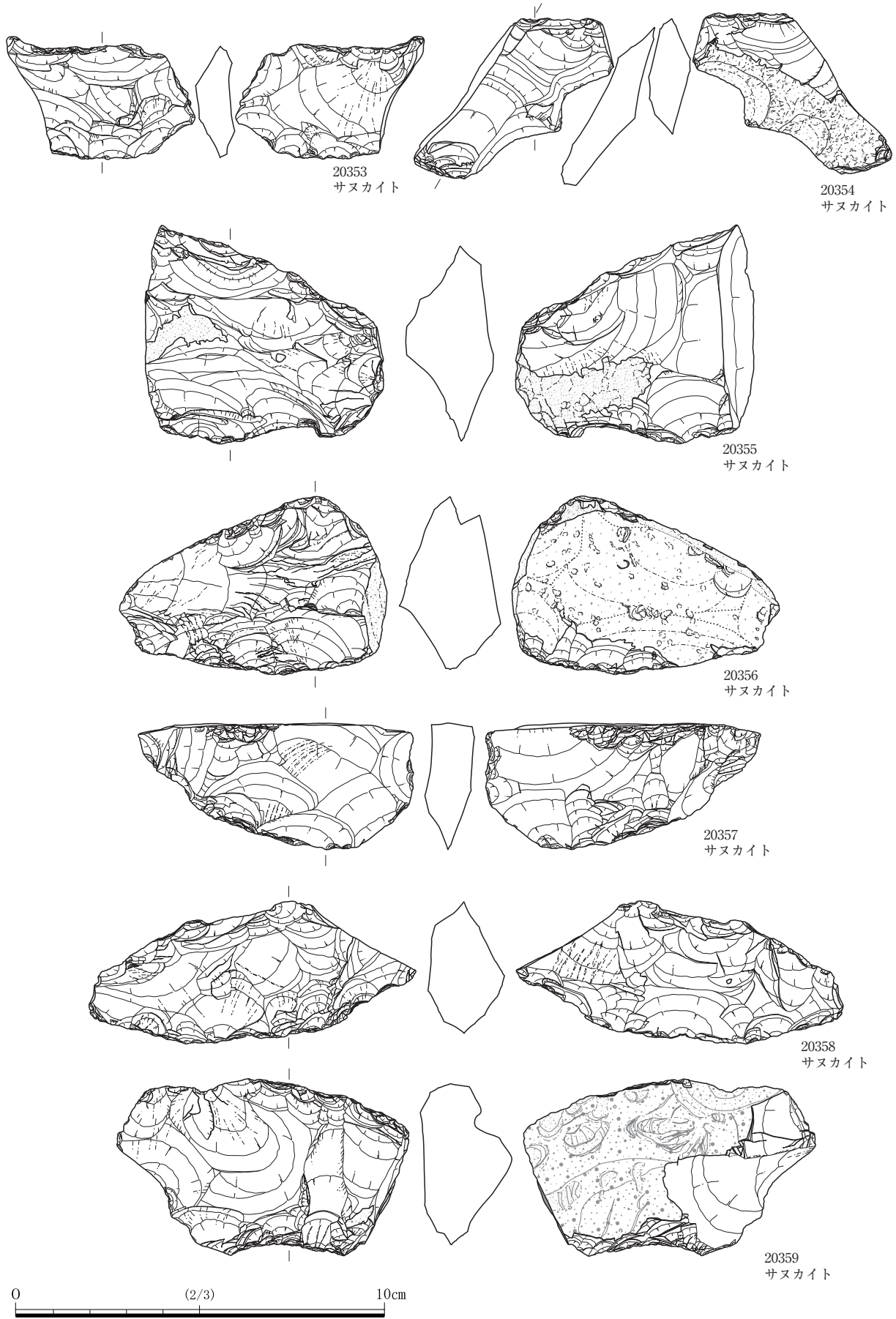


図92 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (18)



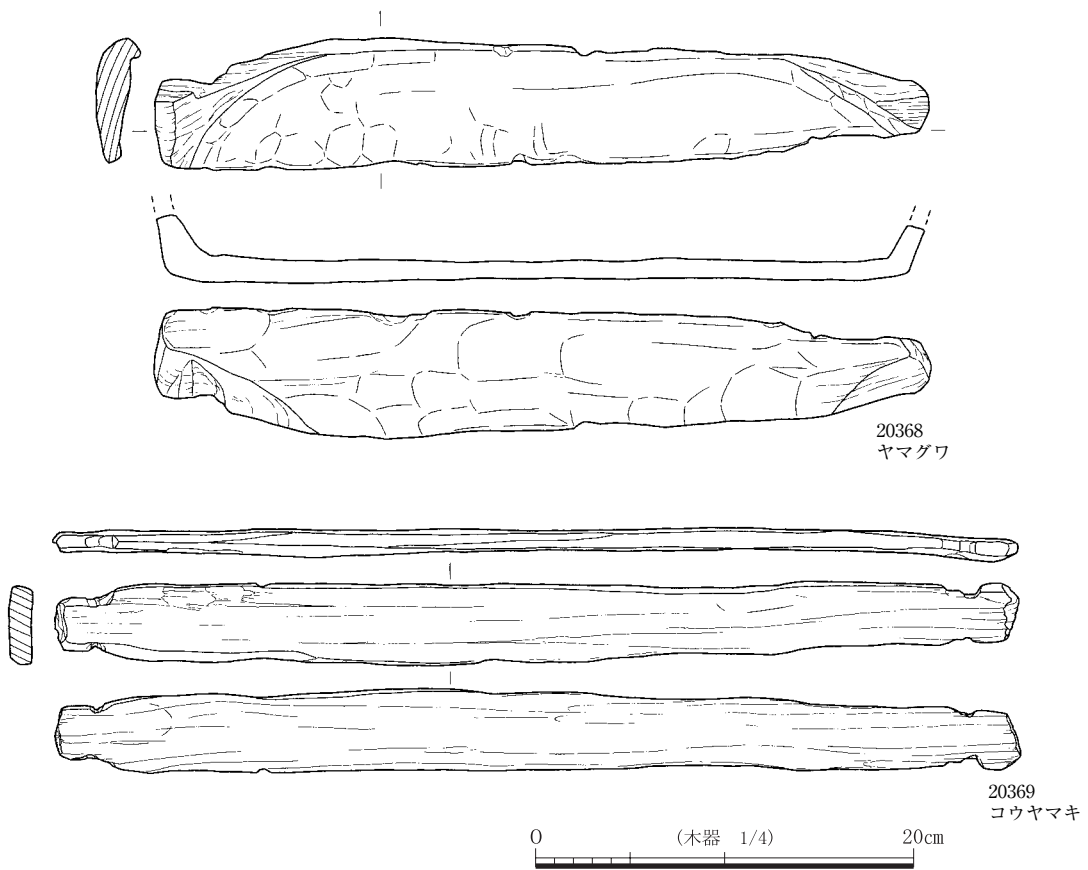
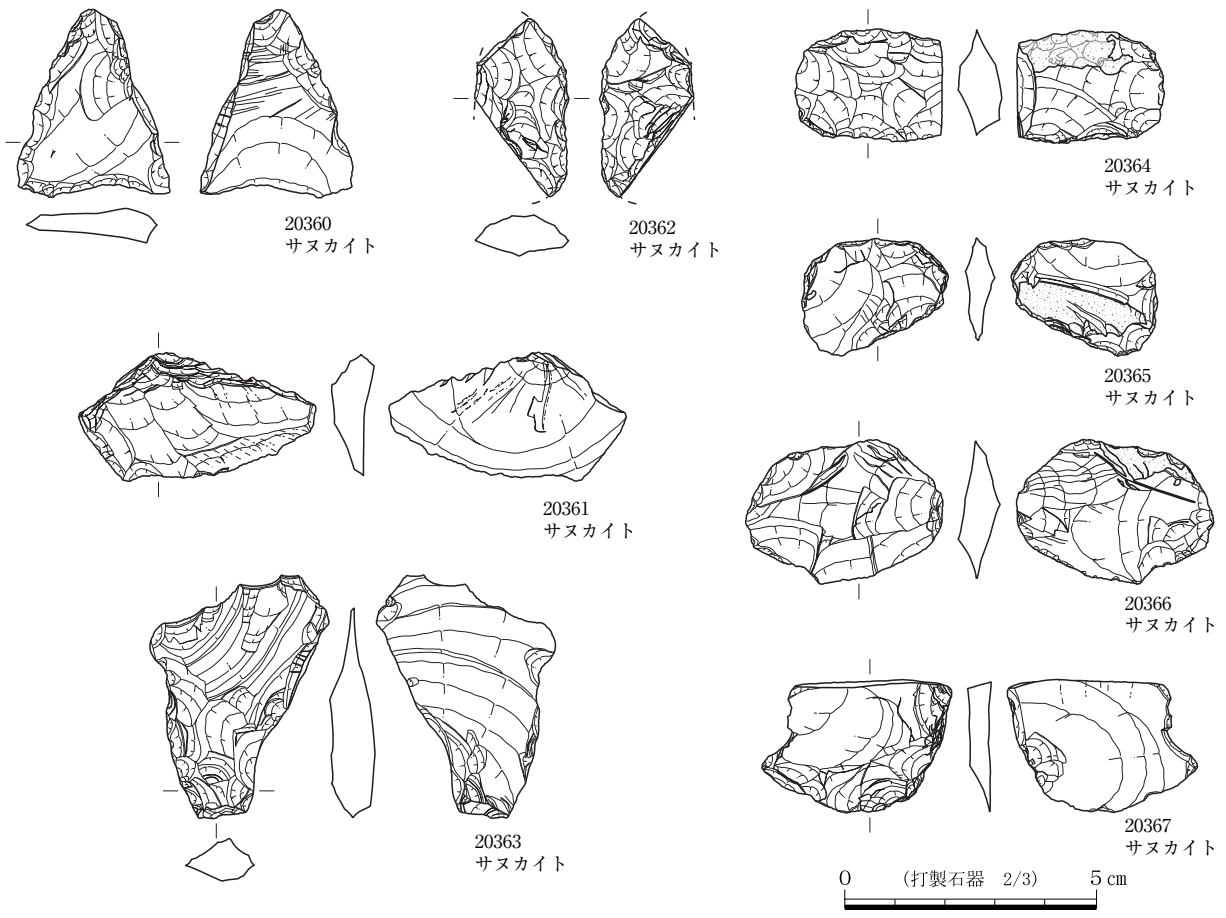


図93 03-1-2区 第6面252大溝下層出土遺物 (19)

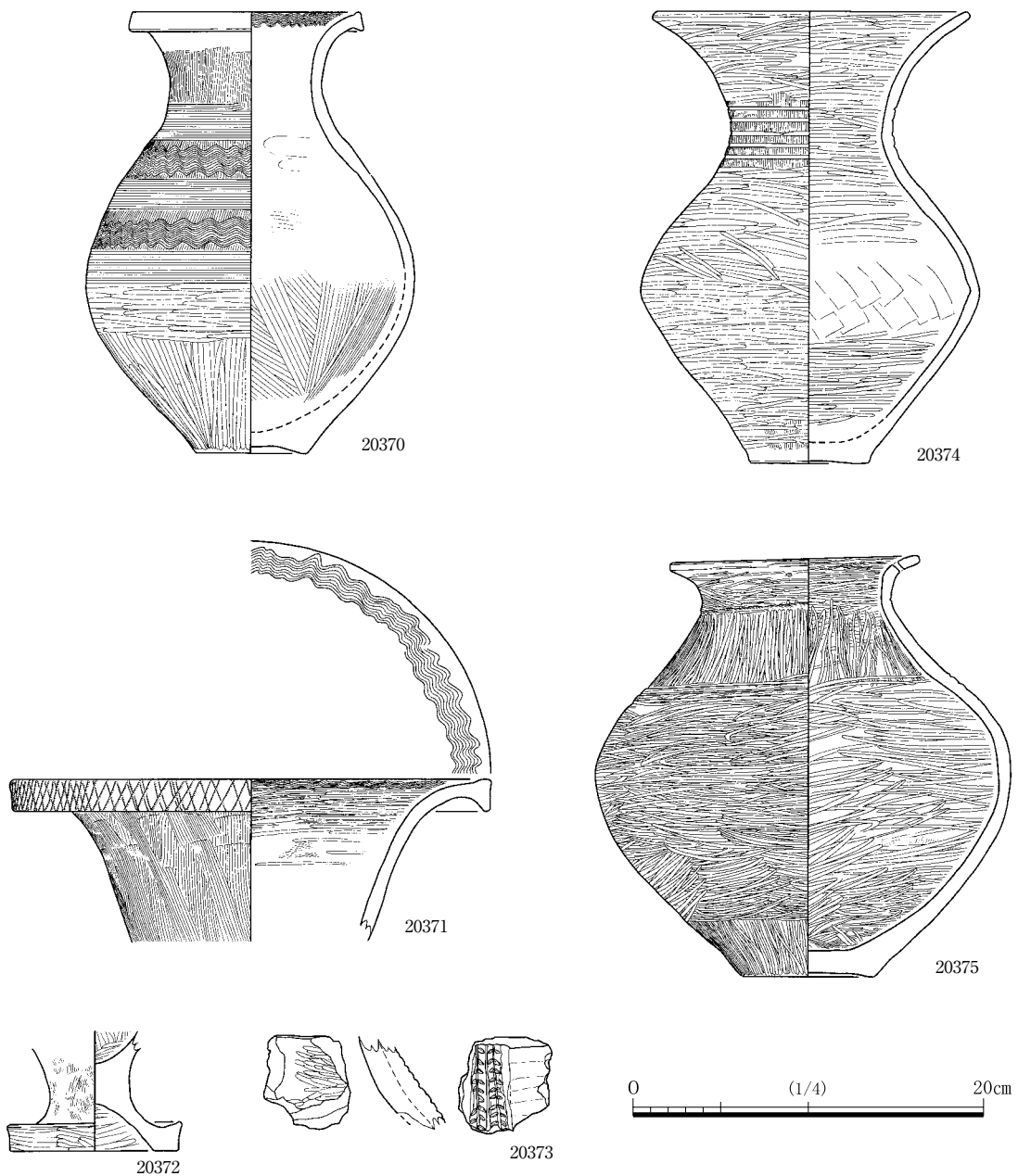


図94 03 - 1 - 2区 第6面252大溝北法面出土遺物（1）

20194・20195は砂岩製の砥石。20194は粒子の細かい緻密な石質。20196は径2～3cmの楕円柱に、円錐状の頭部をもつ。砥石あるいは石棒か。

図83～93はサヌカイト製の打製石器。図83 - 20197～図84 - 20207（写真図版80・81）は打製石剣。20197は先端部を欠損する。側縁に階段状の剥離が見られ、楔として再利用したものか。20198は先端がまるくなっており、錐として再利用していた可能性がある。20200は側縁の加工があまく、削器の可能性もある。20201は調整が粗く、厚みが均一ではない。20204は側縁を鋸歯状に加工する。20205は基部側にも調整が及ぶ。20207は両面とも一部研磨が施されており、未成品と考えられる。

図84 - 20208～図87 - 20296（写真図版80・81）は打製石鎌。長さ4cm以下、幅2.5cmの小形品を主体とする。20260は両面にやや光沢をもつ部分がある。研磨あるいは擦痕か。20218・20240・20265・20281・20282・20286・20292は石錐、20285～20296は剥片や未成品の可能性ある。

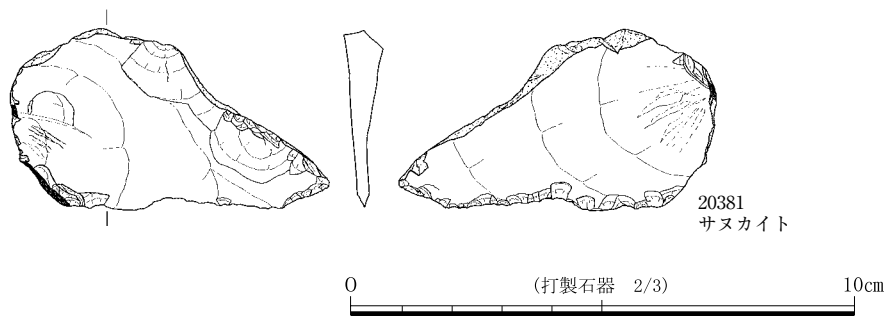
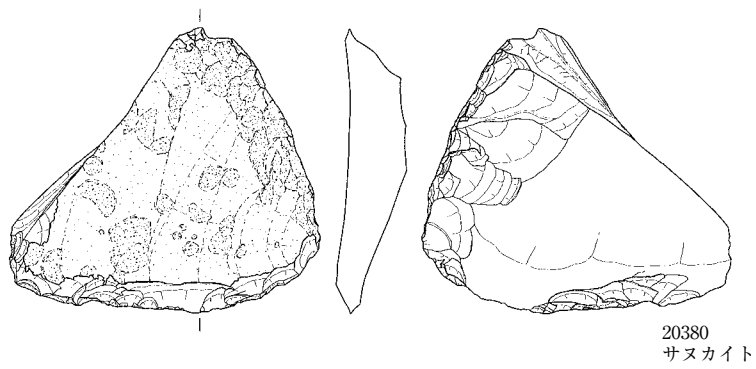
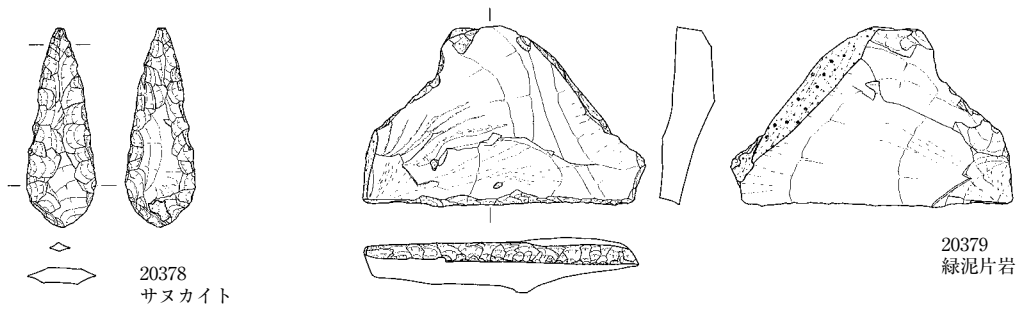
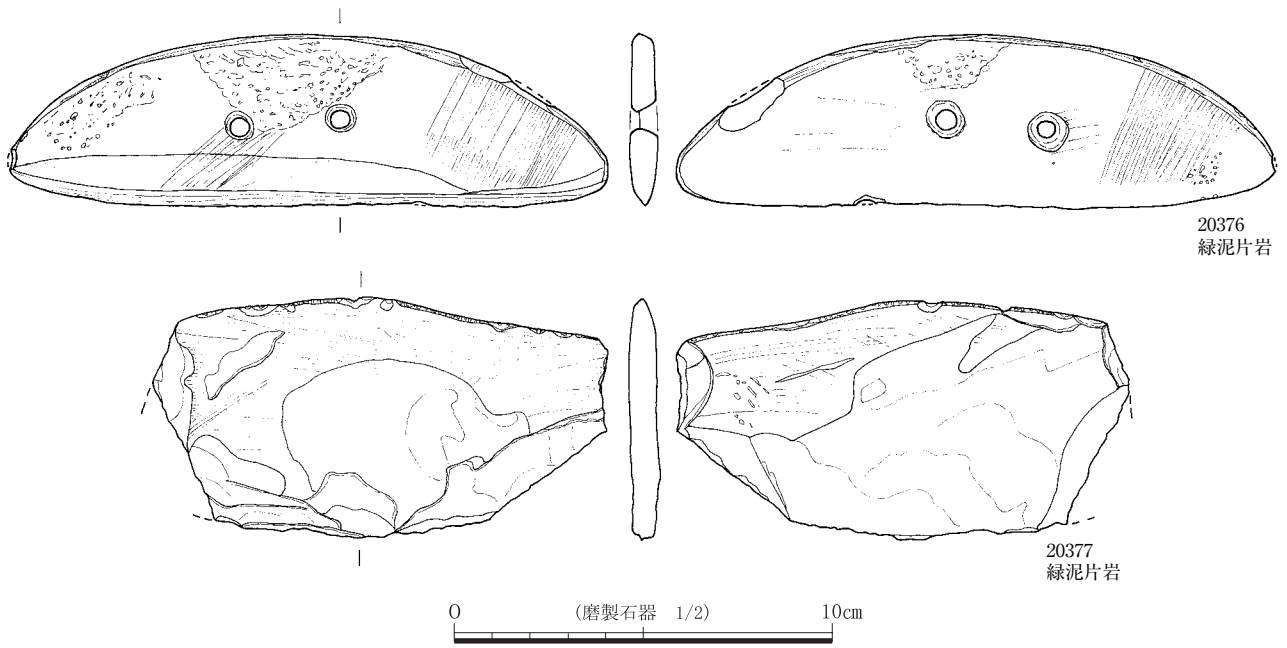


図95 03-1-2区 第6面252大溝北法面出土遺物(2)

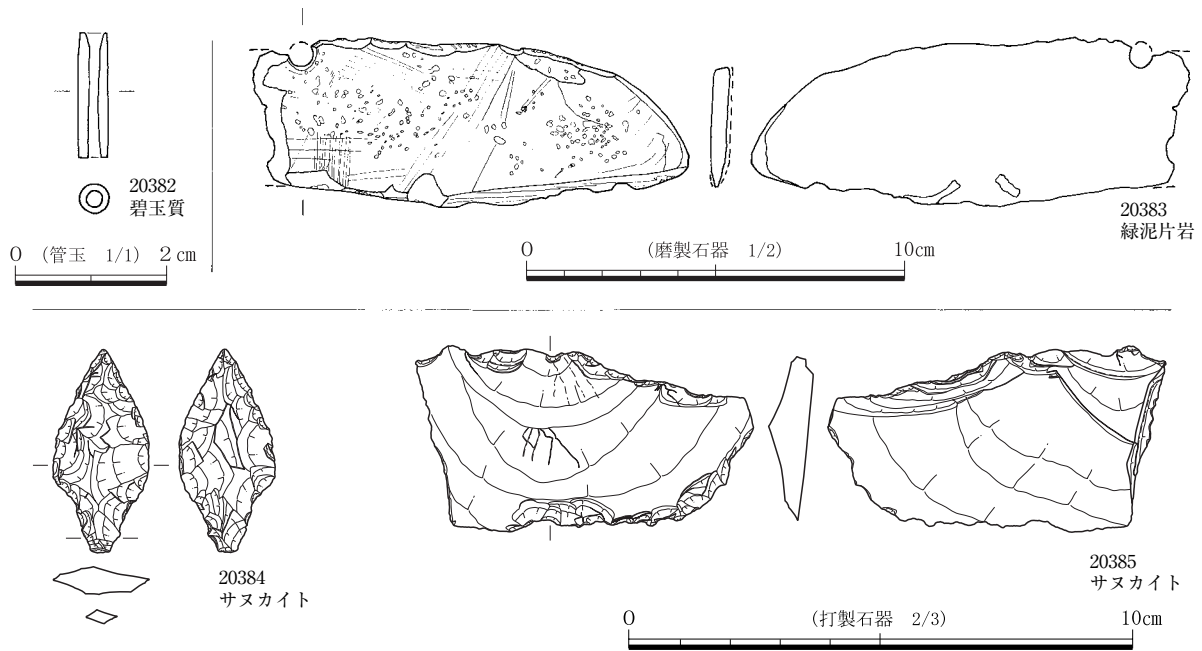


図96 03 - 1 - 2区 第6面252大溝南法面出土遺物

図88 - 20297～図89 - 20322 (写真図版82) は打製石錐。20297～20299は調整が体部側縁におよび、石鏃の可能性を残す。20300・20301は体部が扁平で非常に持ちやすい。体部中央にはわずかだが黒色に変化する。使用による擦れか。20306は錐部の稜がややあまくなる。20322は錐部の回転痕がよく残り、体部も、持ち手の部分となると推測されるややくぼむ部分の稜があまくなる。

図89 - 20323～20326 (写真図版82) は石小刀。20325はやや厚いが、薄く、丁寧に調整される。

図90 - 20327～20334 (写真図版82) は削器、図91 - 20335～図92 - 20359 (写真図版82) は楔とした。図93 - 20360～20367 (写真図版82) は調整のある剥片。20360は石鏃の未成品、20364～20367は楔の可能性はある。

図93 - 20368 (写真図版82) は木製の容器。長軸方向に破損し、長軸40.8cm、残存幅6.8cm、器高5.8cmを測る。平底で、平面形は右側の尖った涙形となるものか。破損部位が分かりにくいだが、口縁を欠くと考えてもあまり深い容器にはならないだろう。長軸方向の隅は厚く残して加工するため残りが良い。横木取りでヤマグワを用いている。20369は織機(布(経)巻具)か。長軸51cm、短軸4.4cmの板材の両端に切り欠きをもつ。コウヤマキの柁目材。

252大溝北法面の出土遺物(図94・95 写真図版83)は、弥生土器1108片(うちⅠ様式87片、Ⅰ～Ⅱ様式7片、Ⅱ様式71片、Ⅲ様式1片)、転用土製円板2点、石庖丁1点、石庖丁未成品1点、石皿1点、磨石2点、砥石3点、叩き石1点、打製石鏃1点、石錐1点、削器3点、サヌカイト剥片17点、木杭4本、マクワウリの仲間の種子2個、計1147点と骨である。

図94 - 20370 (写真図版27・83) は短頸の広口壺。頸部は短く外反して肥厚する。口縁上面にクシ描き波状文を、胴部上半には直線文と波状文を交互に施す。体部と口頸部外面には煤が付着する。Ⅲ様式初頭であろう。20371は壺の口縁部。漏斗状にひらき、口縁端部は上下に肥厚する。口縁端面には、おそらくクシ描き文の原体を利用して斜格子文を描く。上面には波状文が描かれている。摂津系で、Ⅱ様式の後半であろう。

20372は高杯脚部である。脚は短く、厚い。裾端部は上方につまみあげられ面をなし、内面とともに

ミガキが施される。Ⅱ様式。

20373は壺の肩部。縦位の太い棒状浮文上に、綾杉文状の沈線が施される。Ⅰ-3～4様式。20374(写真図版83)は壺。頸部に沈線5条をもち、頸部と底部以外にはミガキが密に施される。Ⅰ-3様式。

20375(写真図版27・83)も壺。口縁の一部を欠くほかは完形である。頸部に段、胴部上半に削り出し突帯上の沈線1条をもち、頸部の段はハケ原体の小口をあてて形成されている。口縁部は上方へひらく。紐孔を1つ確認した。対となる孔は対面側には確認できなかったが、破損部にずれて存在するものか。ハケ調整後のミガキは内面、底部下面まで丁寧に施される。削り出し突帯の上下には横方向のミガキを入れ、突帯を強調する。また、段と削り出し突帯の間には縦方向にミガキ。讃岐地域の影響を受けたものか。Ⅰ-2様式。

図95-20376(写真図版83)は直線刃半月形の石庖丁。今回の調査では珍しく完形で出土した。片刃で緑泥片岩製。背部に敲打痕を残さないきれいな作り。長軸15.80cm、短軸4.50cm、厚み0.75cm、重さ97.0g。20377(写真図版76)は石庖丁の未成品と考えられる。刃部は作り出されていないが、図面上部に配置した一辺は細かい敲打痕が観察され、背部になる部分か。左右両端は欠損。

20378は打製石鏃。20379～20381は削器とした。20379(写真図版83)は刃部が急角度に付き、体部側の稜はあまい。刃端は微細剥離が見られ、使用痕と考えられる。20381の調整は一辺のみ。錐部が作り出されていないため削器とした。石錐の未成品の可能性もあろう。

252大溝南法面の出土遺物(図96・写真図版83)は、弥生土器595片(うちⅠ様式66片、Ⅰ～Ⅱ様式26片、Ⅱ様式33片、Ⅲ様式4片)、碧玉質管玉1点、石庖丁1点、打製石鏃1点、削器1点、サヌカイト剥片12点、木片2片、炭化米2粒、マクワウリの仲間の種子1個、計616点と歯である。

図96-20382(写真図版83)は管玉。長さ1.64cm、径0.38～0.40cm、重さ0.4gで中細型に分類される。孔は両端から0.2～0.5cmでわずかに広がって、穿孔は両側から行われていると考えられる。分析の結果、現段階では産地不明、石材は緻密で「碧玉質に近い」とされる(第9章 藁科哲男「山賀遺跡出土管玉の産地分析」参照)。

20383(写真図版83)は石庖丁。背部に紐孔が残り、再加工品と判断される。一面はすべて剥離面で、加工途中で廃棄されたものか。緑泥片岩製で、加工後は直線刃半月形となるものと予想される。

20384は打製石鏃。凸基有莖式で完形品。長軸4.04cm、短軸1.93cm、厚み0.5cm、重さ4.0g。20385は削器あるいは楔か。対面する辺に調整が見られる。

418溝 252大溝の西部北岸の一段高くなったテラス状の部分は、03-1-3区から続く418溝である。この部分からは、弥生土器59片(うちⅠ様式3片、Ⅰ～Ⅱ様式5片、Ⅱ様式9片)、砥石1点、花崗岩の中礫1点、計61点出土した。

277木群(図97・写真図版26) 252大溝内の西部北岸に位置する。252大溝と03-1-3区から続く418溝が接する地点でもある。

いずれも直径10cm程度の4本の木が、252大溝の岸に沿って北東-南西方向を主軸として並ぶ。南東から順に木A～Dとする。木Aと木Cの北東端、木A・B・Dの南西端の位置がほぼ揃っており、木群としての長さは約3.8mである。木Aの南西端と木Cの両端は、252大溝の北法面に接している。木Bの南西端と木Cの北東端に伐採痕と思しき道具痕跡が認められた。木Aと木Cの中心がT.P.+1.0～1.1m程度にほぼ水平にあり、その直上に木Bと木Dが乗っている。277木群全体のレベルはT.P.+0.94～1.36mで、252大溝のこの付近での肩部T.P.+1.6～1.8m、底部はT.P.+0.7～0.9mなので、277木群は252大溝の中

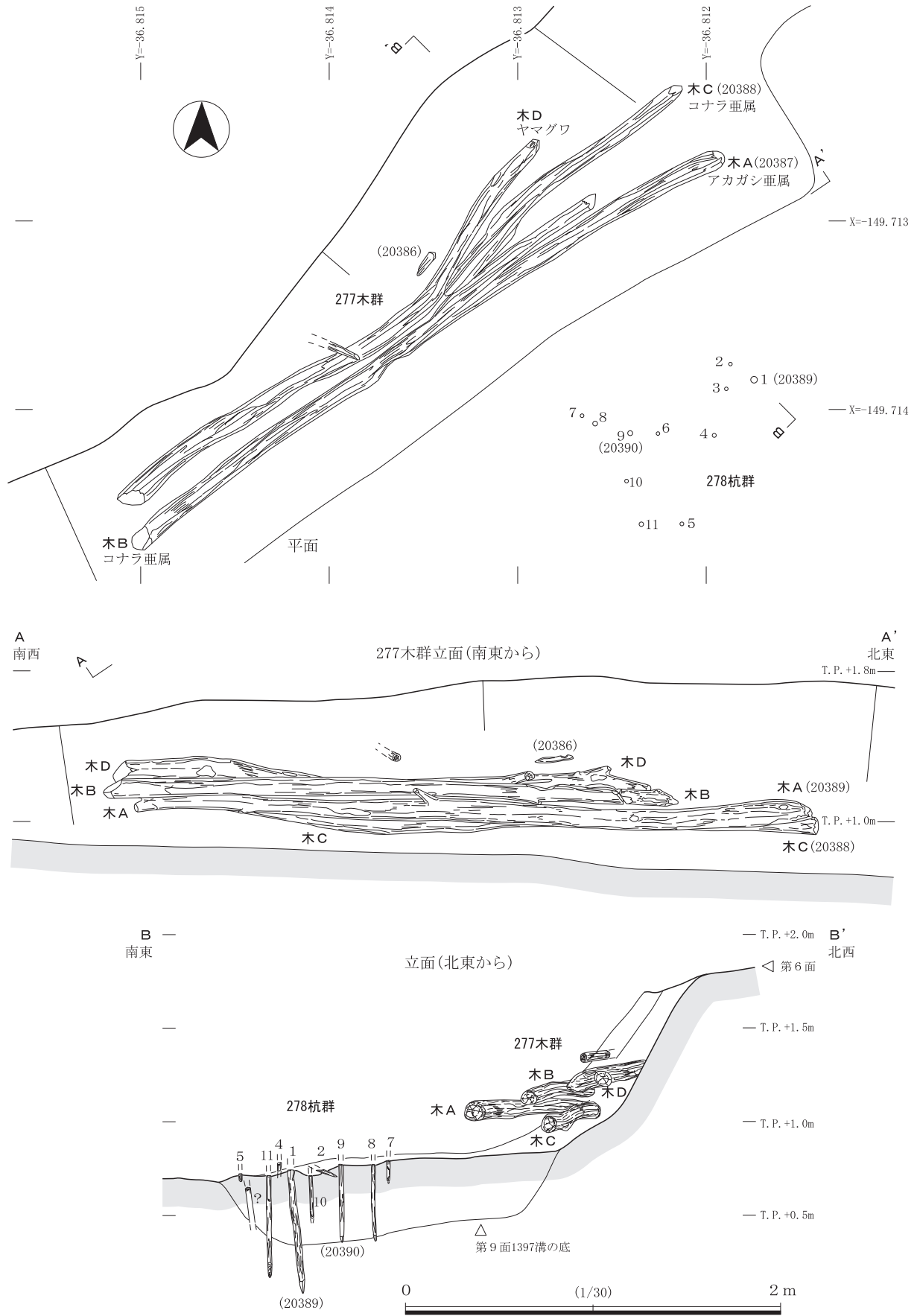


図97 03 - 1 - 2区 第6面252大溝内277木群、278杭群

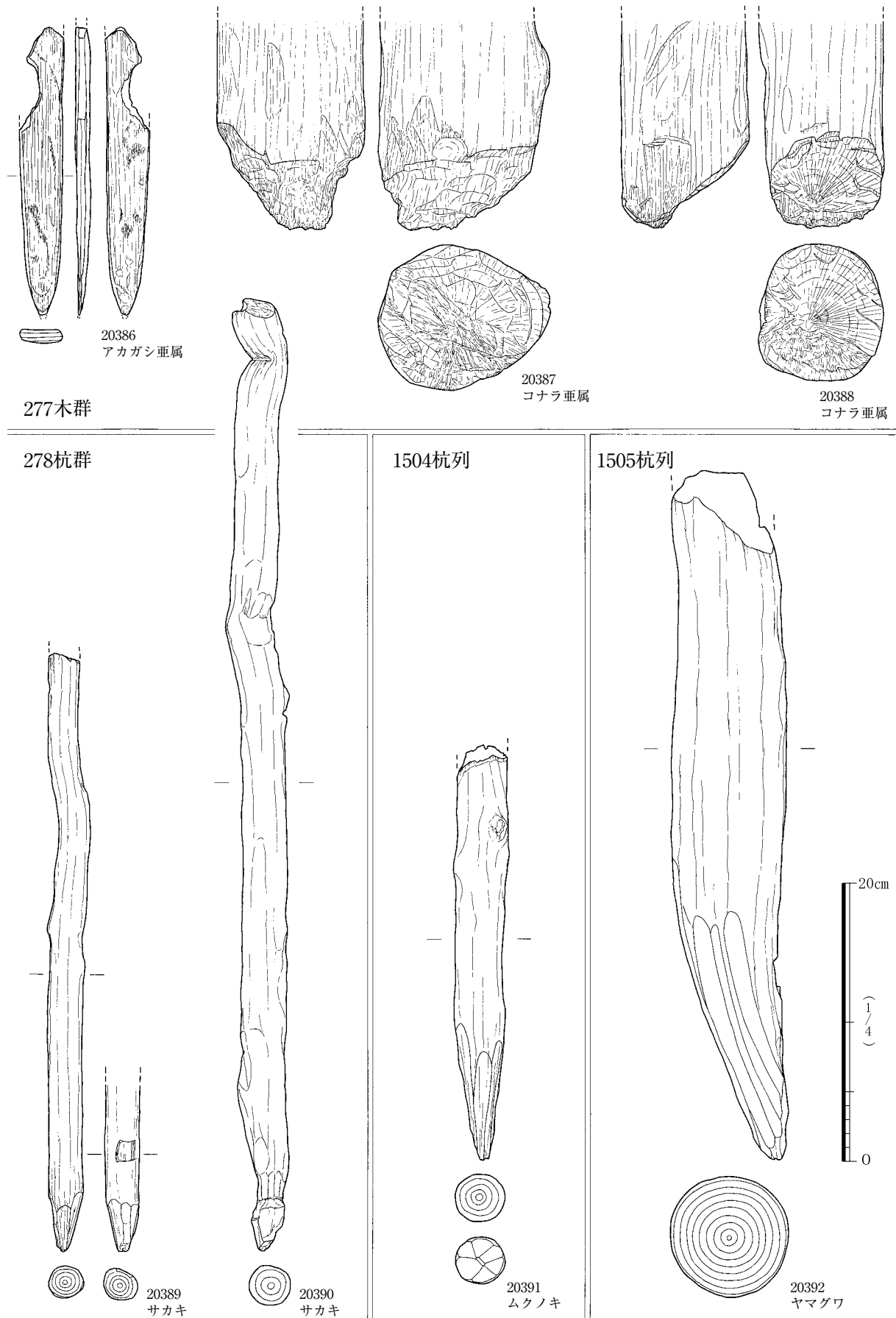


図98 03-1-2区 第6面252大溝内277木群、278杭群、1504・1505杭列出土木器

位に大きな高低差なく収まっていることになる。

図98 - 20387 (木A)・20388 (木C) はそれぞれ直径11.0cm、9.0cmを測る。心持ち材で、先端は加工というより、伐採時のままであるかのようである。粗く段差のある加工痕が中心へ向かい、中央あるいは片側を尖らせる。樹種は、木Aはアカガシ亜属、木Bはコナラ亜属クスギ節、木Cはコナラ亜属コナラ節、木Dはヤマグワである。

277木群中央部の10～15cm上方で、直径4cmの細い杭が252大溝斜面に突き刺さっていた。また、木Dのやや北東側、上方約10cmから木器(20386)が出土した。しかし、277木群調査中も、木A～Cの取り上げ後その下面でも、縦杭は見当たらなかった。

縦杭がなく恒久的な構造ではないので、252大溝がわずかに屈曲しているこの地点に流されてきたか、あるいは貯木されていたと考えるのが自然ではある。しかし、両端が揃っていることと検出レベルが水平に近いことから、想像を逞しくするとカワヤ、テラスあるいは船着場のような場とすることもできる。

図98 - 20386 (写真図版83) は又鋏(鋤)の先端と考えられる。残存長20.8cm、幅3.0cm、厚み1.0cm。当初、図示した側の側面にわずかに段をもつことから剣形木器かという意見もあった。しかし、短軸断面に示すように、先端まで端部をまるく仕上げ、刃部や稜を作り出していないことから、又鋏(鋤)の先端部とした。アカガシ亜属との樹種鑑定も農具であることを補強する。なお両面に冬目(木目)が観察され、先端へ薄く仕上げていることが分かる。

278杭群(図97・写真図版26) 277木群の南東約80cm隔てた位置から南東側に分布する。平面位置は第9面1397溝の中にあたるが、図97に明らかのように杭の先端が1397溝の底にまで達していないものが多いことから、第6面252大溝の底に打ち込まれたものと考えられる。確認できた杭の数は11本だが、252大溝の底より上の部分は失われていた。252大溝の底部には粗砂～礫が堆積していたため、それらを運んだ強い水流で失われた可能性が高い。

杭の現存長は4～67cm、直径は杭8や10が2cm、杭1でも4cmしかなく全体に細い。いずれの杭も残りは悪く、かろうじてサンプリングできた1と6の杭の樹種はサカキである。

杭の平面分布をみると、杭7～11が252大溝の西南西からの流下方向に対してほぼ直交してゆるい弧状に並ぶ。また、北から南には杭2～5が、西から東へは杭7・8・9・6・4が並ぶ。比較的長い杭1・6・7・11の配列はランダムにみえる。平面分布と打ち込まれた深さを見る限り、堰や護岸としては認めにくい。定置網のような漁撈施設の可能性もあろう。

図98 - 20389・20390はいずれも心持ち材で、先端を削って尖らせる。20389(杭1 写真図版83)は径2.6cm。一端を6方向から加工して尖らし、先端から6cmほどの位置にごく浅い抉りが長方形に入っている。20390(杭9 写真図版83)は径3.0cm。一端に頭部を作り出し、先端を尖らす。上部は原木のままねじれている。

1504杭列(図99) 252大溝の西部南岸に位置する。杭A～Cの3本が南東から北西に、芯々距離で杭Aと杭Bが92cm、杭Bと杭Cが78cm離れてほぼ直線上に並び、252大溝の流路にほぼ直交して、垂直に打ち込まれている。

杭A(図98 - 20391)はムクノキで、径3.6cm、残存長30.0cmでやや細く、節が残る。先端は中心に向かって6面を削り、先鋭に作る。杭Bは直径6～7cmのヤナギ属だが、遺存状況は悪い。杭Cは直径9cmのコナラ亜属で、先端の加工痕はあまり先鋭ではない。

杭Aと杭Cは、252大溝の底より上部では、樹皮がはがれてやせた状態で検出された。また、杭Bは



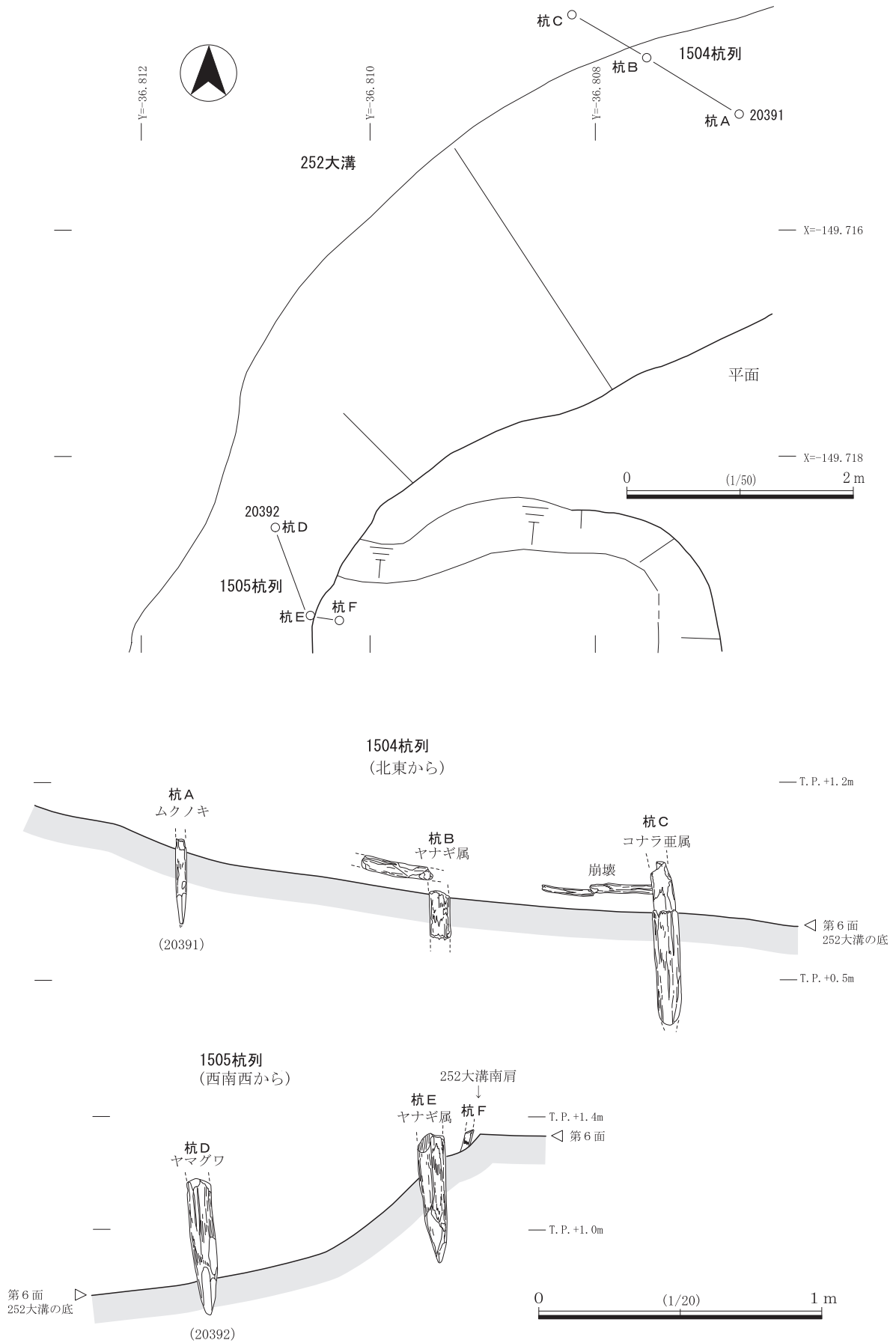


図99 03-1-2区 第6面252大溝内1504・1505杭列

252大溝の底の高さで折れており、溝底に横たわる部位はやせている。これらの状況は、1504杭群は252大溝の底に打ち込まれ、大溝に水流がある状態で杭として存在していたことを示す。

1505杭列(図99) 252大溝の西部南岸、1504杭群の南西約5mにある。杭Dと杭Eが芯々距離83cmで北北西と南南東に並び、杭Eの東南東26cmに杭Fが打ち込まれている。杭D(図98-20392)は直径8~9cmのヤマグワで、杭Eは直径10cmのヤナギ属で、両者とも先端はやや先鋭に加工されており、ほぼ垂直に打ち込まれている。252大溝の底よりも上部に露出していた部分は、1504杭列の杭Aや杭Cに比べるとやせは目立たない。杭Fの遺存状況は悪い。

なお、検出状況では杭Dの根入れが12cmしかない。252大溝の下部には粗砂~礫が堆積し、一方基盤層はシルト層なので、両者の弁別は容易である。したがって、杭の打設後に水流により溝底が削られたものか、あるいは252大溝がある程度埋まった段階で打ち込まれたものと考えられる。

これら277木群・278杭群・1504杭列・1505杭列は、252大溝調査範囲の南西部、西に418溝が、北には248溝を経て247溝に続く、東西8.5m、南北7.5m程度の狭い範囲に集中している。具体相は提示できないが、これらが一体となって水利や漁撈関係の機能を担っていた可能性もある。

以上、第6面252大溝およびその関係の遺構と出土遺物である。

228溝状落ち込みと230溝状落ち込みは、調査区北部に位置する。ほぼ平行して東北東-西南西を主軸とする。調査時には溝としていたが、その後断面などを検討した結果、第6面以前に存在した下層の溝を反映した溝状落ち込みとした。

228溝状落ち込み 第7面259溝の上層にあたり、それらの埋没の過程でくぼみが第6面段階でも残っていたものと考えられる。幅3.5~4.3m以上、深さ65cm。埋土はオリブ黒5Y3/2シルト。粘性強く、ラミナやや弱い。植物遺体・炭化物やや含む。南岸でヤマグワの立木を検出した。出土遺物は、弥生土器11片のみ。

230溝状落ち込み 259溝の数m南に平行する。第7面261溝・第8面283溝の上層にあたる。南西側で233高まりに突き当たる。幅2.8~3.4m、深さは23cmと比較的浅い。埋土は、暗オリブ灰5GY4/1~オリブ黒7.5Y3/1シルト。粘性強く、粗砂わずかに含む。植物遺体・炭化物やや多く、弱いラミナが見られる。出土遺物はない。

237溝、247溝、252大溝の3条も、ほぼ平行して東北東-西南西を主軸とする。

237溝 第7面264溝の上層にあたる。当03-1-2区のみならず、03-1-1区の237溝と21溝、03-1-3区の411溝と一連の溝で、検出長だけでも約105mに及ぶ。幅2.5~5.2m、深さ38~62cm。

埋土は、図44からO'1暗オリブ灰2.5GY4/1シルト~にぶい黄・2Y6/4細砂のラミナ。植物遺体を上方でわずかに含む。西方では攪拌される。O'2オリブ灰2.5GY/5/1細砂。植物遺体わずかでラミナやや弱い。O'3暗オリブ灰2.5GY3/1細砂、シルト・にぶい黄2.5Y6/3細砂のラミナ。下方はオリブ黒10Y3/1シルト。ラミナ顕著で、植物遺体・炭化物わずかだが、下方では多い。出土遺物は、弥生土器220片、石庖丁1点、打製石剣1点、削器2点、サヌカイト剥片3点、木杭1本、ヤマグワ2点、計230点である。南肩でヤマグワの立木も検出した。

図100-20393は細頸壺の頸部。口縁部は内湾して、外面にはクシ描き直線文6条を残す。破損部は肥厚し始めており、体部との接合部で破損したものと思われる。Ⅲ様式前半であろう。

20394は無頸壺。口縁端部はまるみを帯びる。体部にはクシ描き波状文と直線文が施される。Ⅱ様式か。

20395は鉢。体部はやや内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。外面にはクシ描き直線文が3条残り、

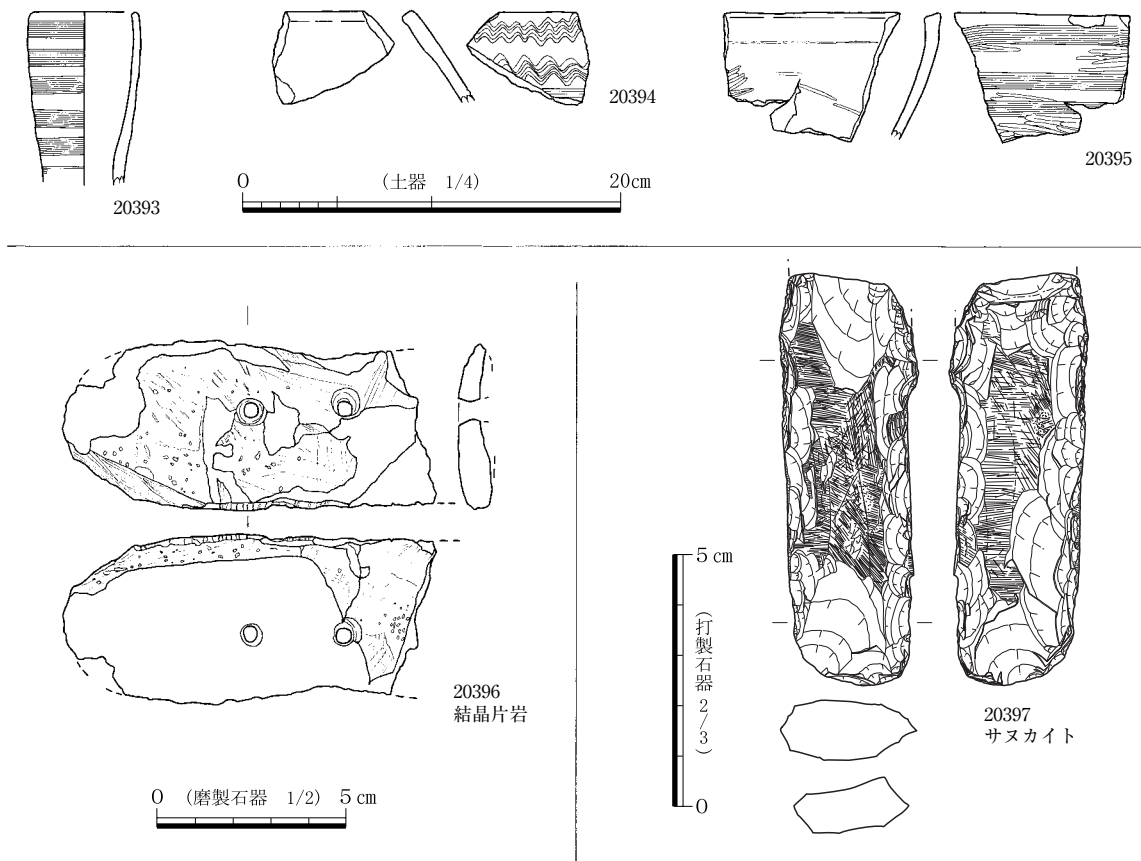


図100 03-1-2区 第6面237溝出土遺物

間にミガキが施される。内面には横方向の工具痕とミガキが観察される。Ⅱ様式。

20396は結晶片岩製の石庖丁。節理に従い、剥落が著しい。背部に敲打痕を認めるが、刃部は欠損あるいは打ち欠きによって不明である。

20397 (写真図版84) はサヌカイト製の石剣。剥離調整後に、両面を研磨し、やや幅狭くなった基部の側縁も磨いて刃潰しを行う。長軸8.18cm、短軸2.74cm、厚み1.2cm、重さ39.6g。

247溝 調査区中部に位置し、第7面267溝の上層にあたる。03-1-3区の414溝とつながる。幅4.0～6.5m、深さ28～73cm。埋土は南北断面(図43⑤)では、明褐7.5YR5/6粗砂～灰白2.5Y8/2粗砂～灰5Y6/1粗砂(粒径大)がラミナをなす。東西断面(図44④)では、上：黄褐2.5Y5/6細砂、中：オリブ褐2.5Y4/3細～粗砂、下：灰オリブ7.5Y5/2を主体としてラミナを形成する。上・中位はラミナ顕著で流れが強いが、下位は水平方向に弱いラミナが見られ、植物遺体も下位に多く、水平方向に堆積する。

また、中央部の南法面でヤマグワの立木、西部の北法面下部でヤナギ属の立木を検出した。

後述する248溝の北北西の延長上は第7面270落ち込みの名残か、240高まり方向に突出している。

247溝の出土遺物は、弥生土器730片、転用土製円板1点、打製石鏃2点、サヌカイト剥片6点、砥石1点、サヌカイト原礫1点、小礫2個、木杭1本、計744点である。

図101-20398・20399はやや新しくⅢ様式後半～Ⅳ-1様式に位置づけられる。20398(写真図版84)は壺の上半。頸部は短く、屈曲は弱い。口縁端面と頸部にはクシ描き簾状文と直線文を飾る。20399は甕。口縁部はゆるく外反して面をもち、体部外面はハケ調整。Ⅲ様式(Ⅲ-b段階)。

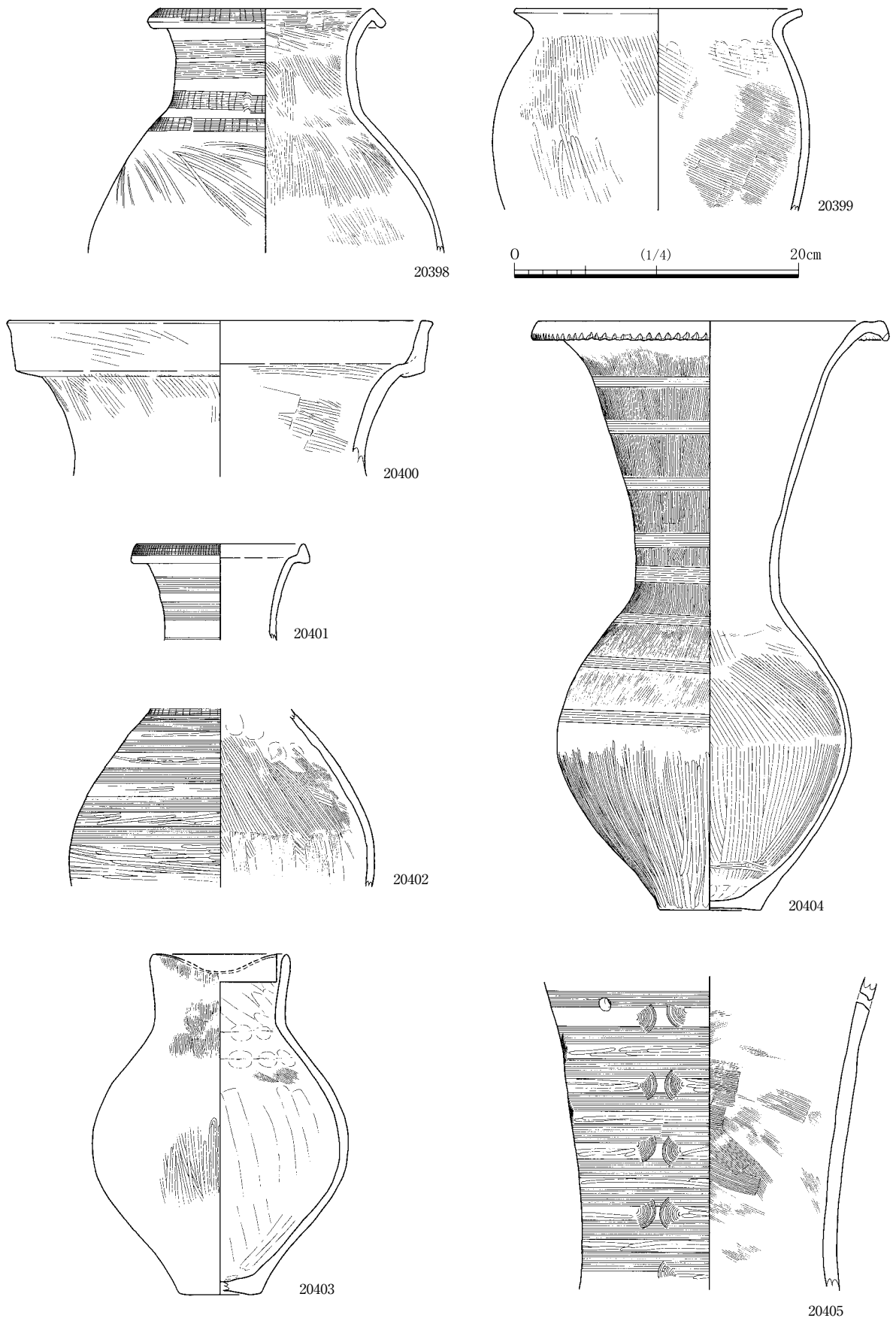


図101 03 - 1 - 2区 第6面247溝出土遺物 (1)

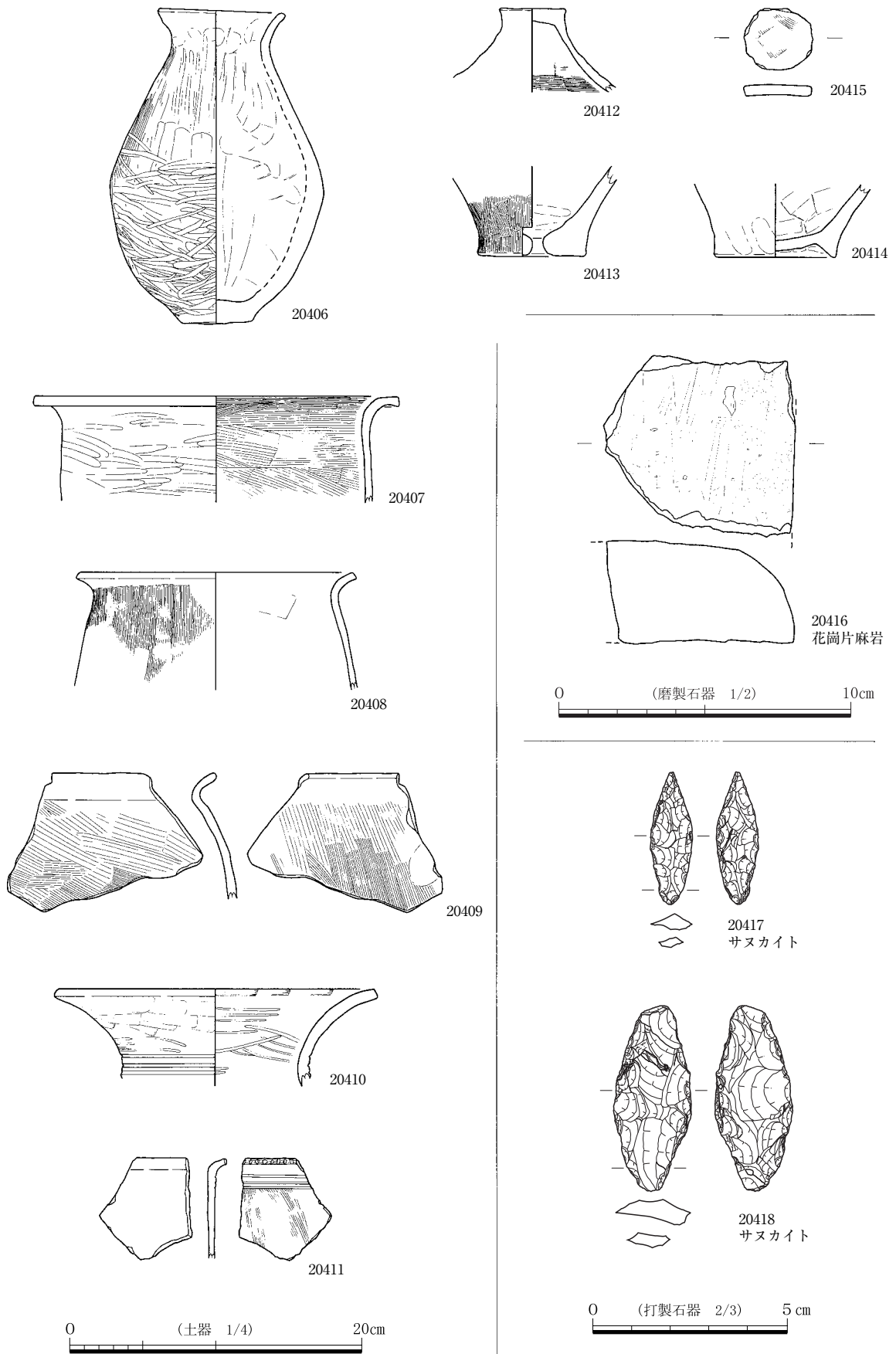


図102 03-1-2区 第6面247溝出土遺物(2)

20400～20402はⅢ - 1～2様式。20400は壺の口縁。口縁は受け口状に段をもち、上方へ大きく拡張する。調整はハケ目がよく残る粗雑なもので、橙色系の色味をもつ。南河内や石川流域に多く見られる器形。

20401は細頸壺の頸部。口縁部は上方へのび、稚拙な簾状文で飾られる。20402は壺の胴部。頸部と体部との境に簾状文、その下にクシ描き直線文6条がめぐる。

20403（写真図版84）は水差形。内外面ともに被熱して煤付着し、特に外面は剥離が著しい。底部から約5cmは煤の付着が少ない。口縁部は欠ける部分もあるが、短く直口し、片口になるものであろう。無文で口縁部の作りなどはやや粗い。摂津地域の水差形土器で、Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭。

20404（写真図版84）は長頸の広口壺。頸部は大きくひらいて垂下し、下端に刻み目がめぐる。頸部から体部上半にかけてはクシ描き直線文が8条施される。Ⅱ - 3様式。20405（写真図版84）は壺の頸部。いわゆる「日明山型」<sup>ひやりやま</sup>の壺で、クシ描き直線文と扇形文によって擬似流水文が描かれる。口縁部側には焼成後穿孔があり、補修孔として用いられたものか。Ⅱ様式。

図102 - 20406（写真図版27・84）は無文の壺。体部外面にはケズリ調整の後、乱雑で太いミガキが施される。内面はナデ調整で、頸部には絞り目が残るやや粗い作り。Ⅱ様式。

20407～20409は甕。20407の口縁部は水平にひらき、端部に面をもつ。ハケ調整の後、外面には幅広のミガキが粗く施される。Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭。20408の口縁は「く」の字状に外反し、胴部の最大径は上半にある。外面のハケ調整の下にはケズリの痕跡が見られる。Ⅱ様式。20409の頸部はしまり、口縁端部はまるみを帯びる。口径は20cm前後になるだろう。Ⅰ様式～Ⅱ様式初頭か。

20410は壺。口縁はひらき、端部は面をもち始めている。頸部には沈線4条以上が施されており、Ⅰ - 3～4様式であろう。20411は甕。刻み目と沈線3条が施され、器壁は薄い。Ⅰ様式後半。

20412は甕蓋。内面はハケ調整で、内外面ともに煤付着。外面は剥離して著しく荒れる。Ⅱ様式か。

20413・20414は底部。20413は焼成後、底部下に穿孔が施されている。外面はハケ調整。Ⅱ様式の甕か。20414は低い高台を作り出したもので、平面形はやや楕円に歪む。

20415は転用土製円板。ハケ調整が残る。

20416は砥石。曲線的な2面が砥面かと考えられるが、磨製石斧の体部片の可能性もある。20417・20418は打製石鏃。サヌカイト製で20417は片面基部が縦方向に磨耗あるいは研磨される。20418は横長の剥片を用いたもので、厚み0.6cmと薄い、調整が粗く長軸4.79cm、短軸2.03cmで比較的大形である。255溝 調査区南東部に位置する。以上の溝群と同様に北北西 - 南南東を主軸とする部分を主体とするが、254高まりを取り巻くように巡り、その北東側は252大溝に切られ、西側は幅広くなるとともに、西に傾斜している。幅2.3～3.8m以上、深さ23～56cm。埋土（図43）は、R 1黄褐2.5Y5/4細～粗砂。植物遺体やや多い。R 2オリーブ黒5Y3/1シルト。下方で粗砂が帯状に堆積。ラミナ顕著で植物遺体、炭化物やや多い。出土遺物は、弥生土器562片（うちⅠ様式6片、Ⅱ様式7片、Ⅱ～Ⅲ様式1片）、石庖丁1点、石庖丁素材1点、打製石鏃1点、削器1点、楔1点、サヌカイト剥片33点、石皿1点、計601点である。

なお、254高まりと255溝とは平面形では方形周溝墓のようにもみえる。しかし、254高まりの上面で精査を行ったが遺構は検出されず、さらに254高まりを含めてサブトレンチを設定し断面を観察したところ、盛土層ではあるが埋葬主体などは存在しなかった。

図103 - 20420・20421は壺の口縁部。20420は口縁端部が上方に大きく拡張し、斜位のクシ描き直線

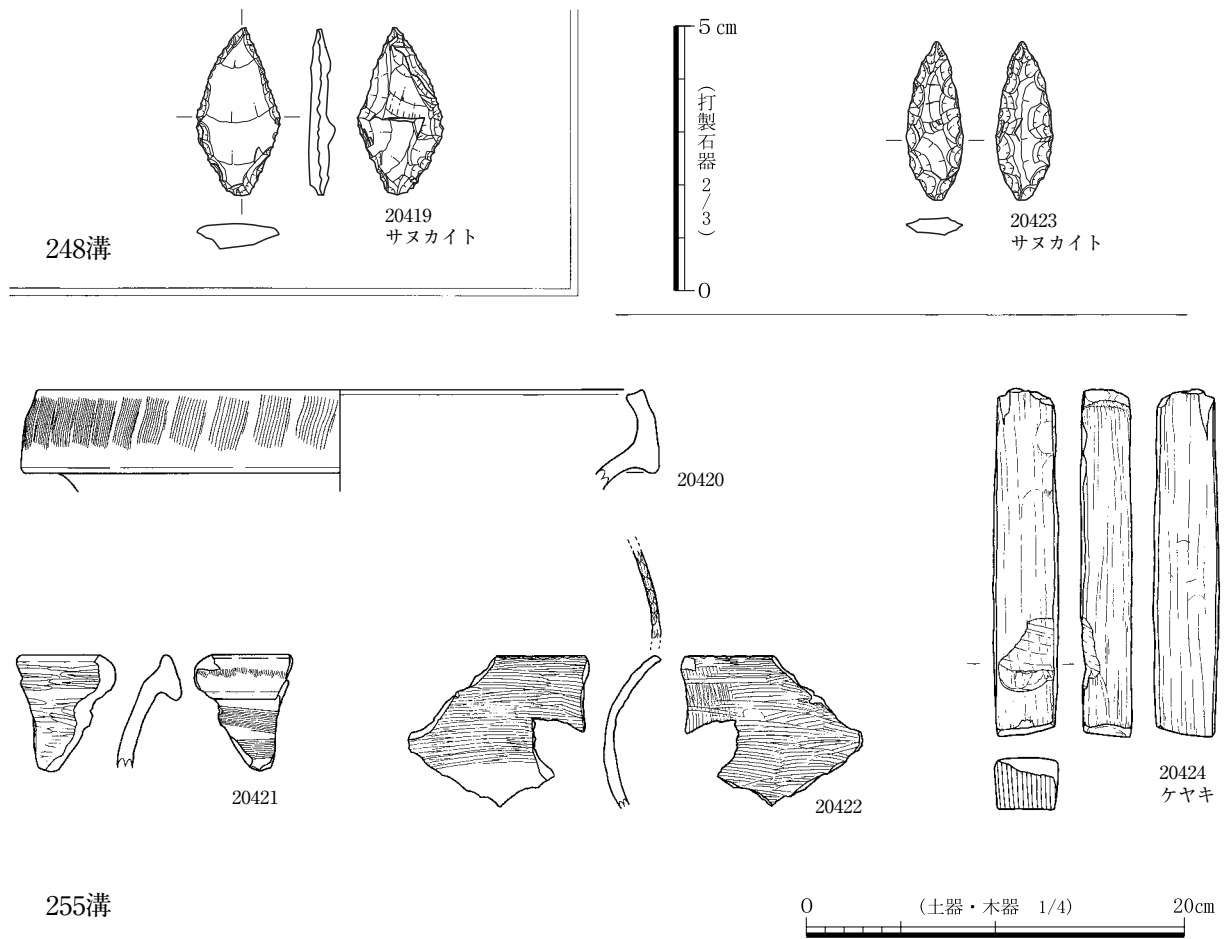


図103 03-1-2区 第6面248・255溝出土遺物

文を並べて飾る。口縁上端は指ナデによって面が整えられる。Ⅲ-1様式。20421の端部は厚みをもって上下に拡張し、端面に横位のクシ描き扇形文を並べる。20420の壺の前段階に位置づけられる。Ⅱ様式末。

20422は甕。内面は横ハケだが、外面は粗い条痕で、口縁端部に刻み目を入れたもの。淀川水系からの搬入品か。Ⅱ様式。なお、第10面542溝出土の20834と接合した。

20423はサヌカイト製の打製石鏃。凸基無茎式で先端側に厚みをもつ。

20424は角材で、残存で長軸18.4cm、一辺2.7cm~3.4cm。一辺に抉り状の加工痕が入るが、整ったものではない。ケヤキの柁目材。溝の下層で出土した。

232溝 232溝は以上の溝や溝状落ち込みとは主軸方向が異なり、228溝状落ち込みと237溝とをつなぐように北西-南東にのびる。第7面263溝の上層にあたる。幅約2.2~2.8m、深さ36cm。途中、東側に230溝状落ち込みがつながる。埋土は暗オリーブ灰5GY4/1粘質シルト。植物遺体・炭化物やや混じり、ラミナ見られる。遺物は出土しなかった。

248溝 調査区南西部に位置する。北北西-南南東を主軸とし、247溝と418溝を結ぶ。この北北西の延長上は、247溝が240高まりに向かって突出している。248溝の幅は2.6~4.1m、深さ29cm。出土遺物は、弥生土器124片（うちⅠ様式9片、Ⅰ~Ⅱ様式9片、Ⅱ様式7片）、打製石鏃1点、削器1点、楔1点、サヌカイト剥片2点、計129点である。

図103-20419はサヌカイト製の打製石鏃。剥片の周縁に調整を加えるのみ。長軸3.18cm、短軸1.57cm、

厚み0.4cm、重さ1.7g。

次に比較的小規模な236溝と241溝を報告する。

236溝 調査区西部、237溝の北側に位置し、それと平行して東北東 - 西南西を主軸とする。輪郭は不整で、幅11～57cmだが30cm程度の部分が多い。深さ6cm。埋土は灰10Y4/1シルトに細砂を多く含む。出土遺物はない。

241溝 調査区東部に位置する。北北西 - 南南東を主軸とし、南側で247溝に接する。幅26～42cm、深さ4cm。埋土は黒7.5Y2/1シルトだが、細砂をやや多く含む。出土遺物は、弥生土器85片、転用土製円板1点、計86点である。

土坑を4基調査した。

243土坑 調査区中央やや北西、240高まり上に位置する。平面楕円形で、東北東 - 西南西を主軸とする。長径254cm、短径93cm、深さ27cm。埋土は暗緑灰10GY4/1粘土だが、下部には細砂が多く混じる。出土遺物なし。

244土坑 243土坑の西側、同じく240高まり上に位置する。平面不整円形を呈する。直径243～340cm、深さ16cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1細砂混じりシルト。弥生土器33片（うちⅡ様式7片）出土した。

249土坑 調査区東部、250高まり上に位置する。平面不整円形だが、北西側が247溝に向かって溝状にのびる。直径366～392cm、深さ14cm。埋土は、オリーブ灰2.5GY5/1粗砂で、247溝から流れ込んだ粗砂で一挙に埋まったと考えられる。出土遺物は、弥生土器36片（うちⅠ様式1片、Ⅱ様式3片）、サヌカイト剥片1点、モモ核4点、計41点。

258土坑 調査区南部やや西、252大溝の南岸に位置する。平面不整円形と推定される。直径220～242cm、深さ59cm。埋土は、暗褐7.5YR3/3シルトに植物遺体が多く含まれる。出土遺物は、弥生土器47片（うちⅡ様式5片）、打製石鏃1点、サヌカイト剥片5点、計53点である。

図104 - 20425・20426はⅢ - 2様式（Ⅲ - b段階）に位置づけられる。20425の壺口縁は上下に拡張してやや内湾し、列点文と扇形文の2段構成の文様が施される。下段の扇形文は一部波状文風に見えるが、連続性はない。頸部にはクシ描き直線文が飾られる。20426は甕。口縁端部はやや肥厚し胴部が張る。外面ともにミガキが施される。外面には煤の付着が著しい。

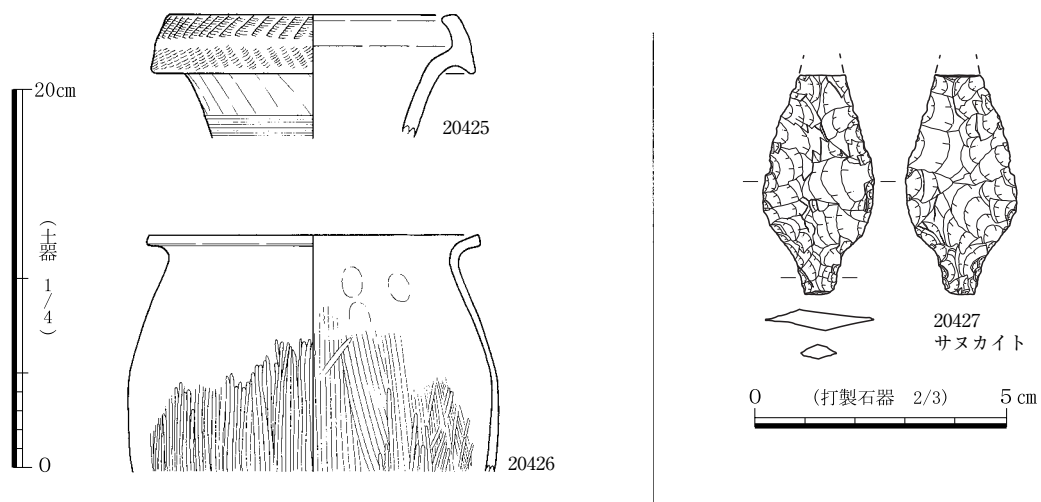


図104 03 - 1 - 2区 第6面258土坑出土遺物



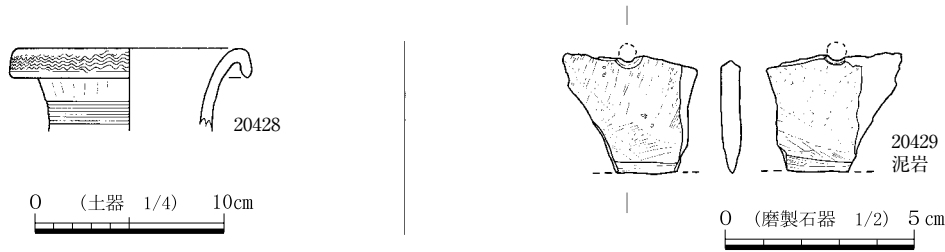


図105 03-1-2区 第6面242落ち込み出土遺物

20427はサヌカイト製の打製石鏃。厚み0.4cmと非常に薄く調整され、先端部を欠く。

ピットを4個調査した。

234ピット 調査区北西部、233高まり上に位置する。平面隅丸長方形で、ほぼ南北を主軸とする。長径42cm、短径31cm、深さ11cm。埋土はオリーブ黒10Y3/1細砂混じりシルト。出土遺物はない。

235ピット 233高まり上、234ピットの南1.9mに位置する。平面楕円形で、東北東-西南西を主軸とする。長径27cm、短径19cm、深さ4cm。埋土は黒7.5Y2/1細砂混じりシルト。出土遺物なし。

245ピット 調査区中央やや西、240高まり上にある。平面円形で、直径33~39cm、深さ7cm。埋土は黒7.5Y2/1粗砂混じり粘土。第6面のピットでは唯一、弥生土器3片が出土した。

246ピット 240高まり上にあるが、北方の237溝に近い。平面円形で、直径30~31cm、深さ4cm。埋土はオリーブ灰2.5GY5/1細砂。出土遺物はない。

242落ち込み 調査区北東部、238・239・240高まりに囲まれた範囲に位置する。第7面266落ち込みの上層にあたる。237・247溝などと同様に東北東-西南西方向にのび、平面不整楕円形を呈する。長径約25m、短径約7.5m、深さ39cm。弥生土器61片（うちⅡ~Ⅲ様式1片）、石庖丁1点、サヌカイト剥片2点、計64点出土した。

図105-20428は壺。口縁を折り曲げて垂下させ、端部は丸い。口縁端面にクシ描き波状文、頸部にクシ描き直線文がめぐるが、口縁端部に刻み目は施されない。Ⅲ-1様式（Ⅲ-a段階）。

20429は泥岩製の石庖丁の破片。体部に比べて刃部はよく研磨され、両刃のものと思われる。

溝間の盛土による部分を図68のとおり、229・231・233・238・239・240・250・251・253・254・256・257高まりとして番号を付けた。

233高まりと251高まり上面からの出土遺物については、この面の冒頭で述べた。このほかに、231高まりの上面でヤマグワの立木、233高まりの上面でヤナギ属とヤマグワの立木、240高まりの北辺（237溝の南肩）でヤマグワの立木を、それぞれ検出した。

第6層の遺物は、基本的に高まりごとに取り上げた。

### (13) 03-1-2区第6層の遺物（図106~109 写真図版84・85）

03-1-2区の第6層全体から出土した遺物は、弥生土器4273片（うちⅠ様式218片、Ⅰ~Ⅱ様式185片、Ⅱ様式266片、Ⅱ~Ⅲ様式1点、Ⅲ様式8点）、転用土製円板5点、石器成品類47点、サヌカイト剥片114点、礫8個、木の皮1点、計4448点である。それらを第6面で名づけた高まりの範囲ごとにもみると次のようになる。

調査区北部の229高まり内からの出土遺物は、弥生土器8片のみ。

調査区北部東寄りの231高まり内からは、弥生土器18片が出土した。

調査区北西部の233高まり内からの出土遺物は、弥生土器81片（うちⅠ様式1片、Ⅱ様式6片）、サヌカイト剥片2点、砥石1点、計84点である。これとは別に、既述のように、233高まりの上面で弥生土器の壺（図67 - 20063）を検出した。

図106 - 20430は鉢。胴部は内湾して、肥厚、内傾する上端面につづく。口縁直下からクシ描き簾状文、断面三角形の突帯、波状文、直線文で飾られる。Ⅳ - 1～2様式（Ⅲ様式新段階）。後述する図179 - 20779（第9 - 2層）とはクシ原体が共通し、同一個体と思われる。

20431は砂岩製の砥石。1面のみが残った使用面は平らで、部分的に黒変している。

調査区北東部の238高まり内からは、弥生土器132片（うちⅡ様式1片）、砂岩製石錘1点、サヌカイト剥片2点、小礫1個、計136点出土した。

調査区東部の239高まり内からは、弥生土器106片（うちⅡ様式3片）、楔1点、サヌカイト剥片1点、計108点出土した。

調査区中央部から西南西にのびる240高まり内の出土遺物は、弥生土器213片（うちⅠ様式4片、Ⅱ様式4片）、石庖丁1点、楔1点、削器2点、計217点である。

20432は壺口縁。端部はやや肥厚して単位の大いクシ描き波状文が施される。20433は甕。口縁は、ゆるやかに外反して端部をまるくおさめる。ミガキは縦方向と斜め方向に施される。いずれもⅡ様式。

20434は緑泥片岩製の石庖丁。片刃で、両端を欠損するが、直線刃半月形となるものか。短軸5.22cm、厚み0.6cmを測る。

250高まりは、調査区中部やや南側にあり、東北東 - 西北西を主軸とする。この高まり内からの出土遺物は多く、弥生土器1047片（うちⅠ様式39片、Ⅰ～Ⅱ様式19片、Ⅱ様式48片、Ⅲ様式1片）、転用土製円板5点、石鏃1点、削器6点、楔1点、サヌカイト剥片25点、中礫1個、小礫2個、計1088点である。

20435（写真図版84）は高杯。体部は椀状に深く、外反して横にのびた口縁に刻み目が施される。Ⅲ様式の高杯の初現的形態をもち、Ⅱ様式末～Ⅲ - 1様式に位置づけられる。

ほかはⅡ様式の甕と鉢である。20436は甕。外面縦方向、内面横方向のハケ調整。口縁端部はやや下に垂れ、下端に刻み目が施される。淀川水系のものであろう。20437は甕の体部下半。底部を横ナデによって整形した後、縦方向のハケ調整を施す。20438（写真図版84）は鉢。体部は深く、クシ描き直線文と扇形文による擬似流水文が描かれる。なお、第9面338高まり出土の20697と接合した。

20439は打製石鏃の未成品か。基部側に細かな調整が加えられており、石錐となる可能性もなる。

20440（写真図版85）は削器、あるいは石小刀か。両側縁に細かい調整が施される。両面に擦痕が観察されるが、新しいものか。20441は削器あるいは尖頭器未成品か。図面上部に原礫面が一部残るが、周縁はすべて調整され、成形される。

調査区南西部、250高まり南西側の第6面251高まり上面で大礫1個を検出した。高まり内からは、弥生土器266片（うちⅠ様式8片、Ⅱ様式14片）、削器3点、楔1点、サヌカイト剥片2点、計272点出土した。

20442は無頸壺の蓋。内外面ハケ調整で、2孔一組の穿孔が1箇所残る。残存部位と、同一個体と思われる2孔の残る破片から、穿孔部位は2ヶ所であった可能性が高い。Ⅱ～Ⅲ様式初頭。

調査区南東隅、252大溝の南岸東部に位置する第6面253高まり内からの出土遺物は、弥生土器301片（うちⅠ様式21片、Ⅰ～Ⅱ様式27片、Ⅱ様式8片）、打製石剣2点、サヌカイト剥片17点、計320点であ

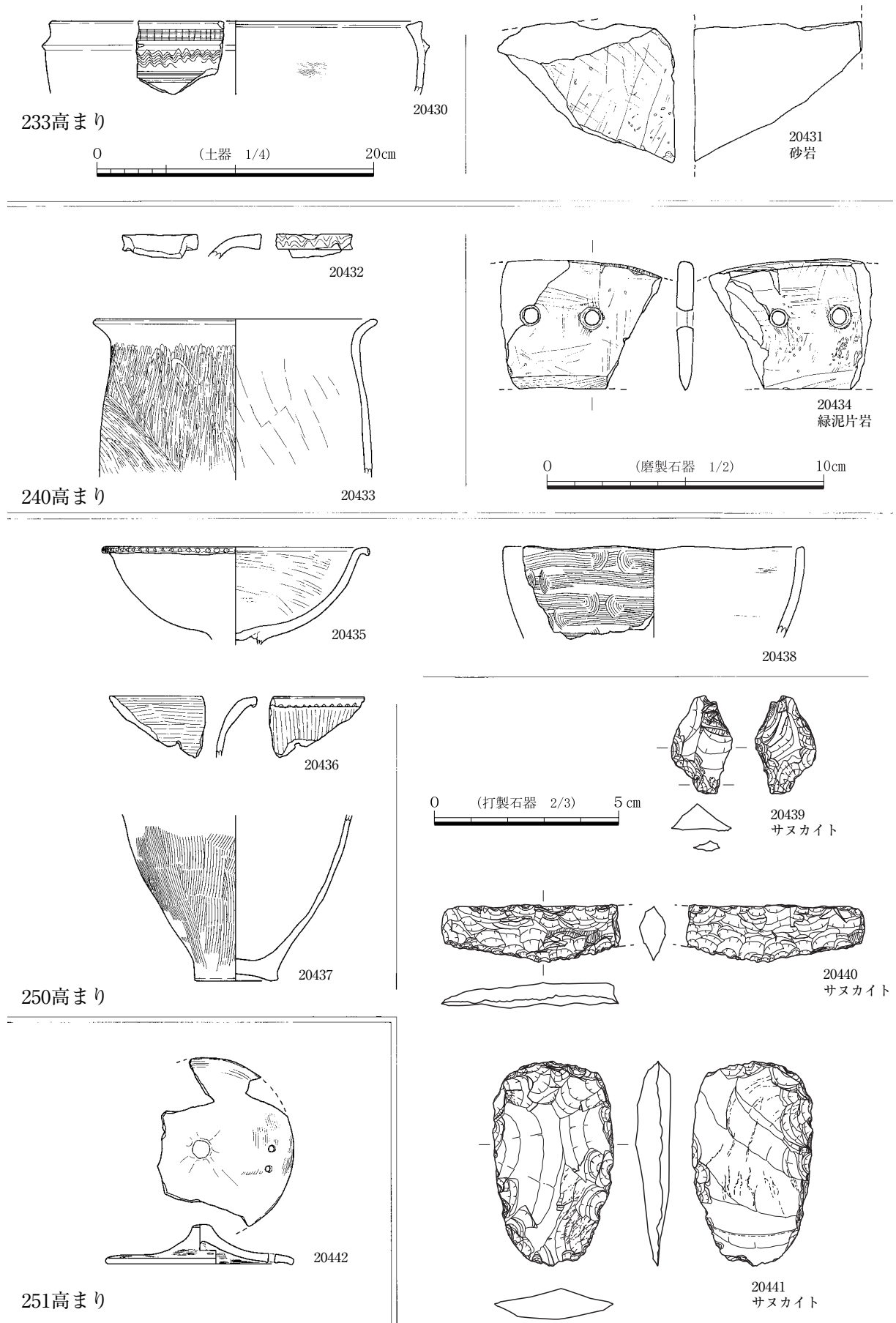


図106 03-1-2区 第6面233・240・250・251高まり出土遺物

る。

図107 - 20443は受け口状口縁をもつ壺。口縁部は上下に肥厚し、曲線的である。端面には綾杉列点文が施され、文様間には施文時のものかと思われる工具痕が明瞭に見られる。頸部はクシ描き直線で飾られ、Ⅳ - 1様式(Ⅲ - b段階)に位置づけられる。第6面252大溝出土の20069と接合した。

20444も壺。口縁端部に沈線とその上下に刻み目が施される。頸部には、貼り付け突帯の剥離痕が沈線上にめぐり。20445は甕。口縁端部に刻み目、胴部に沈線3条がめぐり、外面は一部横方向のミガキ調整。20444・20445はⅠ - 3～4様式に位置づけられる。

20446・20447(写真図版85)はサヌカイト製の打製石剣。それぞれ基部、先端部を欠損する。20447の側縁は直線的に加工され、特に基部側は擦れて稜線があまい。刃潰しか。

調査区南東部、252大溝と255溝との間の第6面254高まり内からは、弥生土器198片(うちⅠ様式22片、Ⅰ～Ⅱ様式8片、Ⅱ様式11片)、扁平片刃石斧1点、削器1点、サヌカイト剥片2点、計202点出土した。

図108 - 20448(写真図版85)は扁平形石斧。両刃で、石庖丁を転用したものと考えられる。緑泥片岩製で長軸2.51cm、短軸2.23cm、厚み0.5cm、重さ4.8cm。

調査区南部東側の第6面256高まり内の出土遺物は、弥生土器339片(うちⅠ様式14片、Ⅰ～Ⅱ様式2片、Ⅱ様式31片、Ⅱ～Ⅲ様式1点、Ⅲ様式1点)、石庖丁1点、砥石1点、石鎌1点、サヌカイト剥片

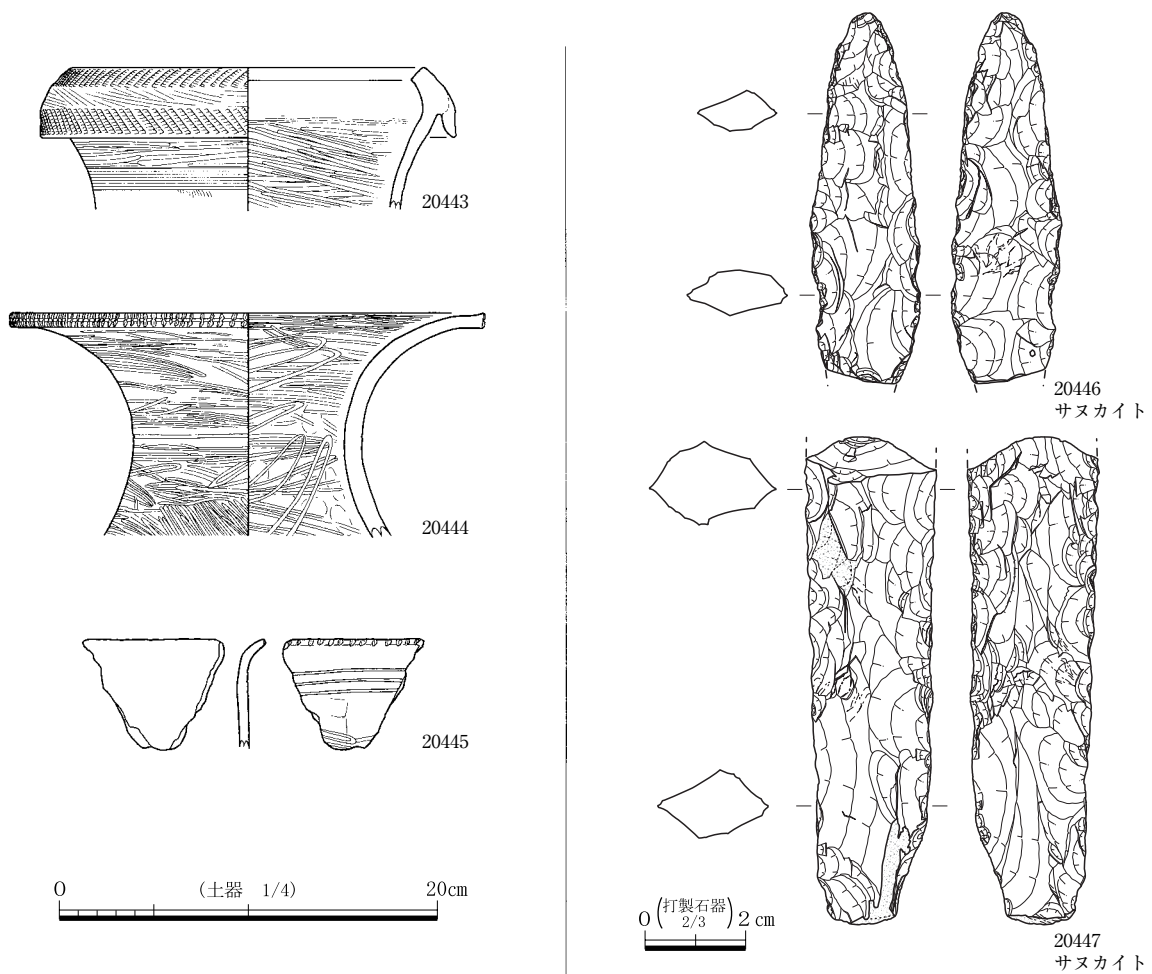


図107 03 - 1 - 2区 第6面253高まり出土遺物

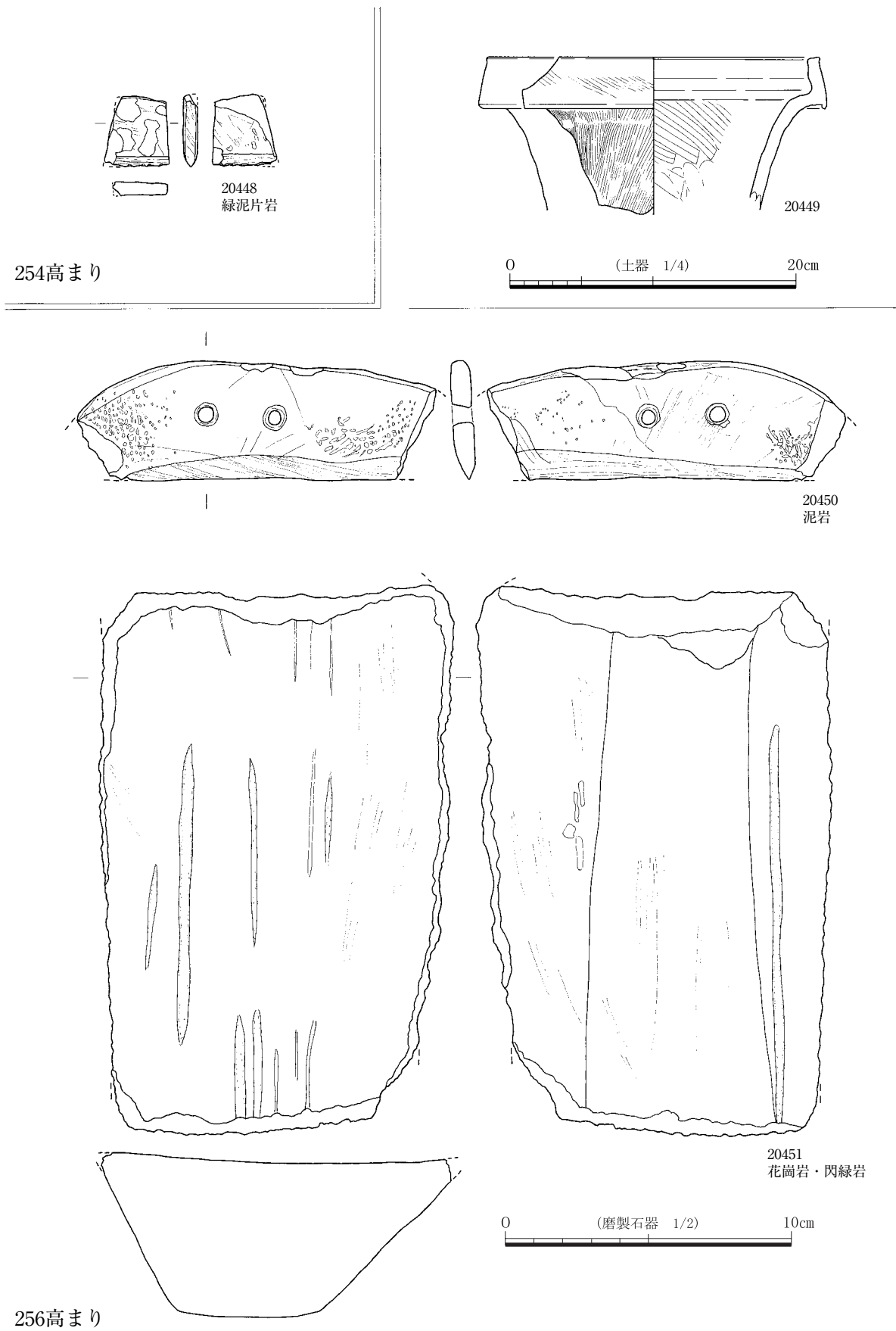


図108 03-1-2区 第6面254・256高まり、第6層出土遺物

19点、計361点である。

20449は壺の口縁部。内外面はハケ、あるいは板ナデで粗く調整され、上方へのびる口縁には文様が施されない。胎土は白色系で砂粒が多く、粗雑な作り。Ⅲ - 1～2様式（Ⅲ - a～b段階）で石川流域のものであろう。

20450（写真図版85）は石庖丁。泥岩を用いたもので両刃である。背部はやや抉れて成形されている。体部の敲打痕は紐孔の両脇に集中する。

20451（写真図版85）は花崗岩あるいは閃緑岩製の砥石。断面台形で長辺4面すべてが砥面となる。擦痕は長軸方向に走り、よく使われている。

調査区南部西側隅の第6面257高まり内からは、弥生土器44片（うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式4片、Ⅱ様式1片）、サヌカイト剥片4点、計48点出土した。

このほか、253・254・256高まり内および255溝の下層にあたる第6層（8M - 9 b グリッド 図2参照）から、弥生土器848片（うちⅠ様式60片、Ⅰ～Ⅱ様式63片、Ⅱ様式82片、Ⅲ様式3点）、扁平片刃石斧1点、打製石剣1点、削器3点、楔3点、サヌカイト剥片16点、石棒1点、小礫1個、計874点出土している。

また、254・256高まり内および255溝の下層にあたる第6層（8M - 10 b・10 c グリッド）からも、弥生土器517片（うちⅠ様式36片、Ⅰ～Ⅱ様式50片、Ⅱ様式50片、Ⅲ様式3点）、石庖丁1点、紡錘車未成品1点、打製石剣2点、石小刀1点、石鏃未成品1点、削器3点、楔2点、サヌカイト剥片23点、礫3個、木の皮1点、計555点出土した。

図109 - 20452は壺の口縁部。口縁は垂下して波状文と端部に刻み目を施す。Ⅲ - 1～2様式（Ⅲ - a段階）。20453は鉢の口縁部。簾状文の施された体部はやや内傾し、口縁端部は肥厚する。Ⅲ - 1様式（Ⅲ様式古段階）。

20454・20455は甕。20454は外面縦方向、口縁内面に横方向のハケ調整を施し、上端に刻み目をもつ大和型の甕。体部がふくらみ、やや新しい様相をもつか。Ⅱ～Ⅲ様式初頭。20455は調整をほぼ同じくするが、口縁端部に刻み目はなく面をもち、口縁直下はナデを施している。大和型の土器が変容したものか。Ⅱ様式であろう。

20456（写真図版85）は扁平形石斧。両刃で、石庖丁の刃部の再利用か。緑泥片岩製。20457（写真図版85）は石棒か。石英質の石を用い、棒状に研磨する。20458は紡錘車の未成品であろう。緑泥片岩製で、一部に石庖丁の紐穴が残っており、転用品と考えられる。

20459～20461サヌカイト製の打製石器。20459（写真図版85）は打製石剣。一部大きく抉れてしまいが、調整は丁寧に施される。20460（写真図版85）は石小刀。基部をわずかに欠くがほぼ完形。20461（写真図版85）は削器か。弧状に加工され、内湾部の調整は階段状となる。刃部は不明瞭である。なお、20452～20455・20459～20461・20458は254・256高まりから、20456・20457は253・254・256高まり内から出土している。

このほか特定の高まりに属さない第6層から、弥生土器155片（Ⅰ様式12片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式7片）、転用土製円板2点、石庖丁1点、サヌカイト剥片1点、計159点出土した。

以上が、第6層出土の遺物である。以下に、第6層を含む包含層からの遺物点数を列举する。

南側溝の第6面250高まり部分の第5・6層に相当する部分から、弥生土器16片（うちⅡ様式1片）が出土した。

第5章 03-1-2区の調査成果

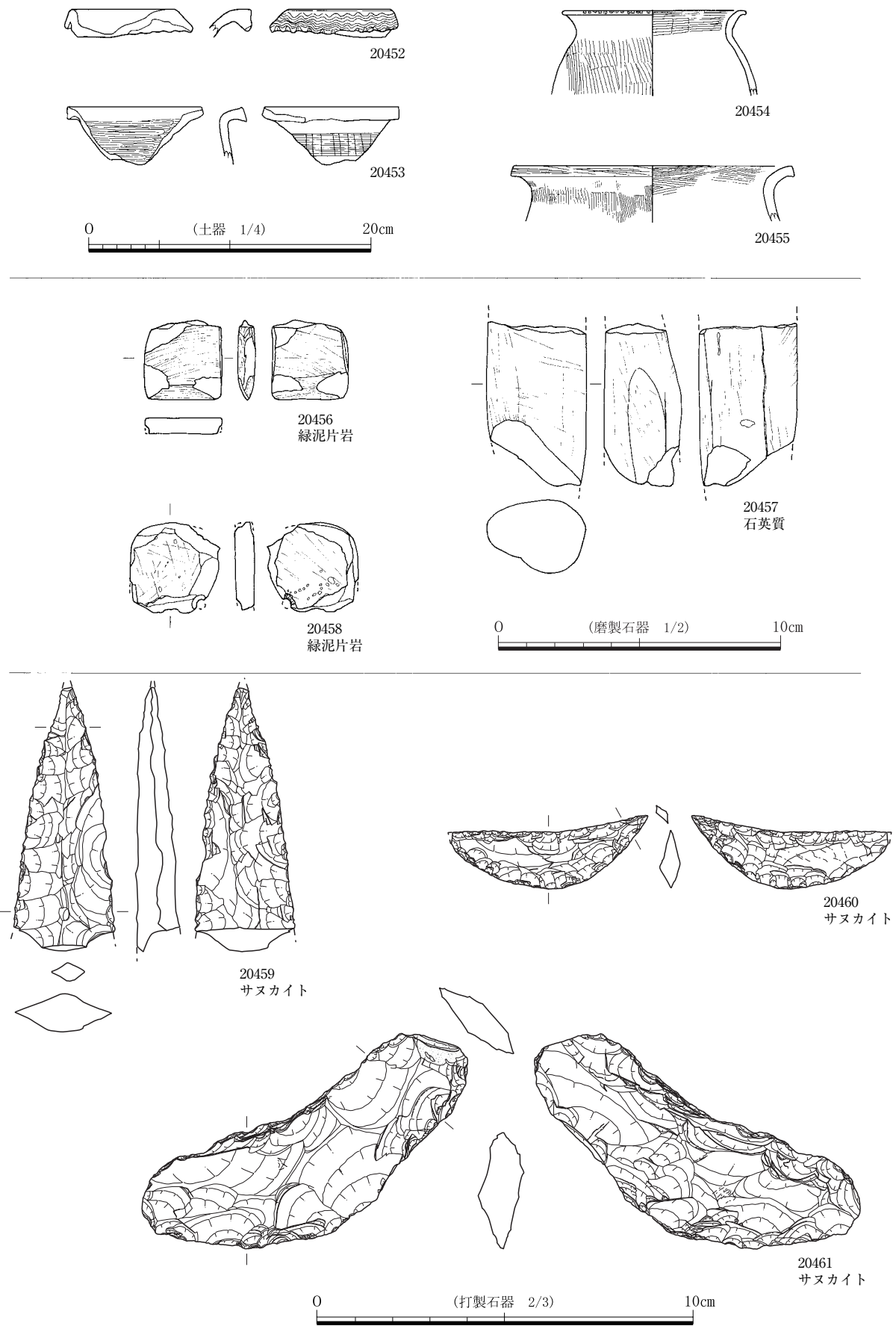


図109 03-1-2区第6面253・254・256高まり出土遺物

調査区各所に設定した第6～8層に相当するセクションベルトから、弥生土器611片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式23片、Ⅱ様式14片）、石庖丁3点、磨製石斧1点、砥石2点、叩き石2点、打製石剣1点、削器3点、サヌカイト剥片13点、サヌカイト原礫1点、木製把手1点、計638点出土。

第6～9層に相当するサブトレンチからは、弥生土器443片（うちⅠ様式63片、Ⅰ～Ⅱ様式45片、Ⅱ様式32片、Ⅲ様式1片）、石庖丁1点、叩き石1点、打製石剣1点、石鏃未成品1点、サヌカイト剥片16点、大礫1個、中礫1個、小礫4個、木片2点、焼土塊1点、計472点と骨が出土。

第6層以下の側溝からも、弥生土器867片（Ⅱ様式が多い）、石庖丁1点、叩き石1点、サヌカイト剥片13点、大礫1個、木杭1本、木製ヤス1点、トチの実1点、計886点と骨・歯が出土した。

#### (14) 03 - 1 - 2区第7面の遺構と遺物（図110～115 写真図版28・86・87）

第6層の黒色土壌化層を除去した面である。さらに、調査区北東部および南部の図110中アミフセした範囲は第6面と共通する。したがって、景観は第6面と大きくは変わらない。

調査区北西部から西部にかけての第7面として検出した部分の高さは、T.P.+1.6～1.9mで、西が高い傾向にある。遺構として、溝5条、ピット1個、落ち込み2か所、高まり6か所、計14か所（遺構番号259～272）検出した。

溝を5条調査した。北から順に259・261・264・267溝の4条は、ほぼ平行して東北東 - 西南西を主軸とする。263溝はそれらとは異なり、北西 - 南東を主軸とする。

259溝 調査区北部に位置する。第6面228溝状落ち込みの下層、第8面279溝の上層にあたる。北肩は調査区外だが、底部の形状から幅5m程度と推定できる。深さ62cm。埋土は、暗灰黄2.5Y5/2細砂と黄灰2.5Y4/1シルトがラミナをなす。出土遺物は、弥生土器8片（うちⅠ様式1片）のみ。

261溝 259溝の数m南に平行する。第6面230溝状落ち込みの下層、第8面283溝の上層にあたる。南西側で268高まりにさえぎられ、調査区を貫通してはいない。幅3.1～4.1m、深さ67cm。埋土は、P1黄灰2.4Y4/1シルト。下層の砂を含む。P2黄褐2.5Y5/3細～粗砂のラミナ。暗黄灰2.5Y5/2シルトブロックを含む。P3暗灰黄2.5Y5/2シルト～細砂。P4黄灰2.5Y4/1シルトで植物遺体を含む。P5灰オリーブ5Y4/2シルト～細砂。P6オリーブ黒5Y3/1シルト。P7暗灰黄2.5Y4/2シルト。ブロックを多く含む。弥生土器の壺1点のみ出土した。

図111 - 20462（写真図版86）は短頸壺。頸部は短く外反し、クシ描き直線文4条と扇形文が施される。Ⅱ様式。

264溝 第6面237溝の下層、第8面288溝の上層にあたる。当03 - 1 - 2区のみならず、03 - 1 - 1区の264溝や03 - 1 - 3区の1293溝と一連の溝で、検出長約105mに及ぶ。幅3.8～5.3m、深さ81～100cm。埋土は南北断面（図43）では、O1北から変化して灰黄褐10YR4/2となり、植物遺体を含む。O2灰黄2.5Y6/2シルト～細砂。O3暗オリーブ褐2.5Y3/3シルト。植物遺体を多く含む。また東西断面（図44）では、O'4灰オリーブ5Y5/3シルト。出土遺物は、弥生土器64片（うちⅠ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式3片）、木杭1点、板材2点、木の棒1本、木片1点、桃核1点、計70点である。

図111 - 20463は容器あるいは杓子か。径11cm強の丸底状の板で周囲を欠損する。やや高く残った部分は黒変しており、炭化していると判断される。これが加工時のものかどうかは不明だが、樹皮等は残っておらず、炭化部分も薄く仕上げられている。また残存部位の少なさから考えて二次的な炭化である可能性が高いだろう。横木取りでヤマグワを用いている。



第5章 03-1-2区の調査成果



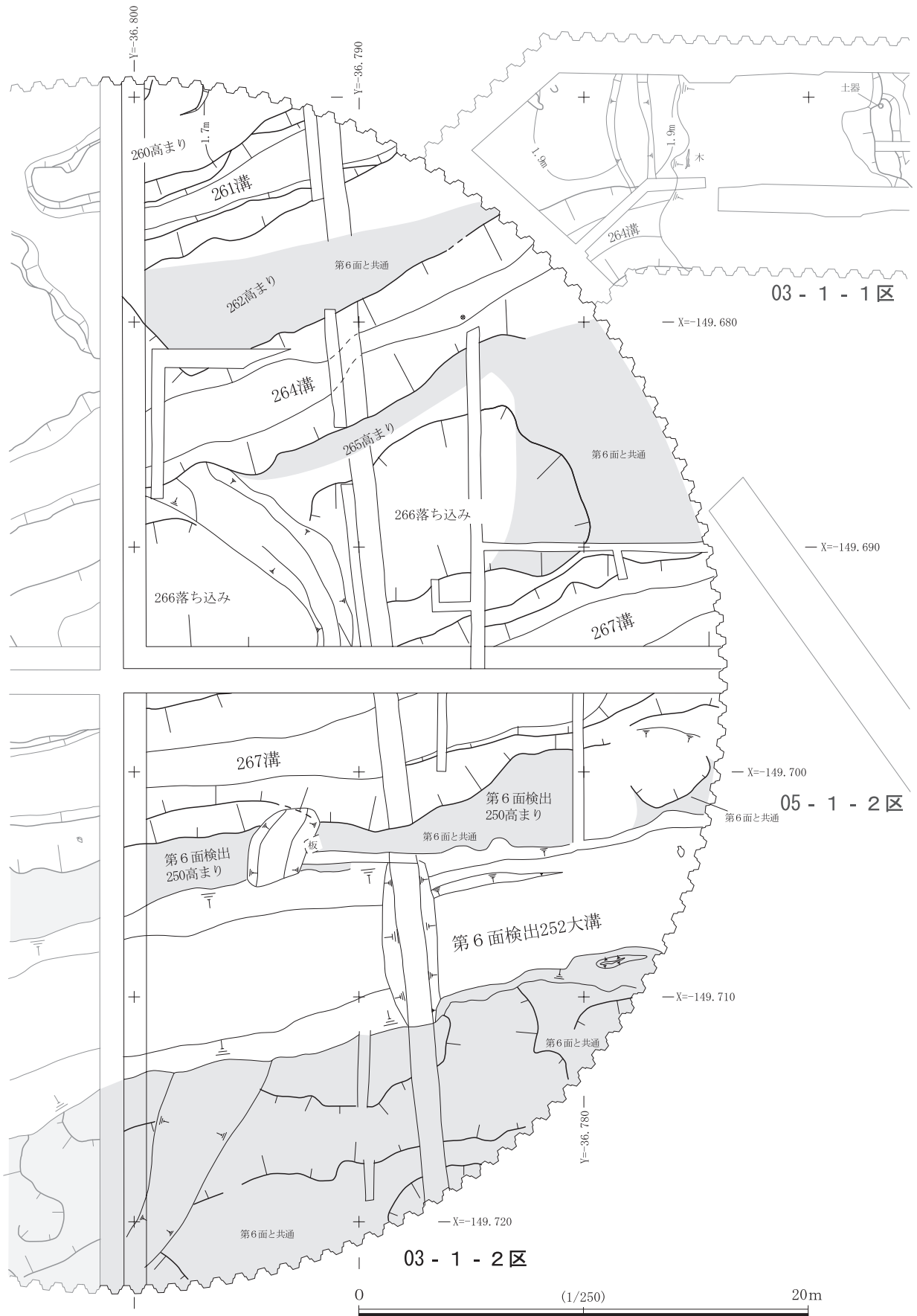


図110 03-1-2区 第7面

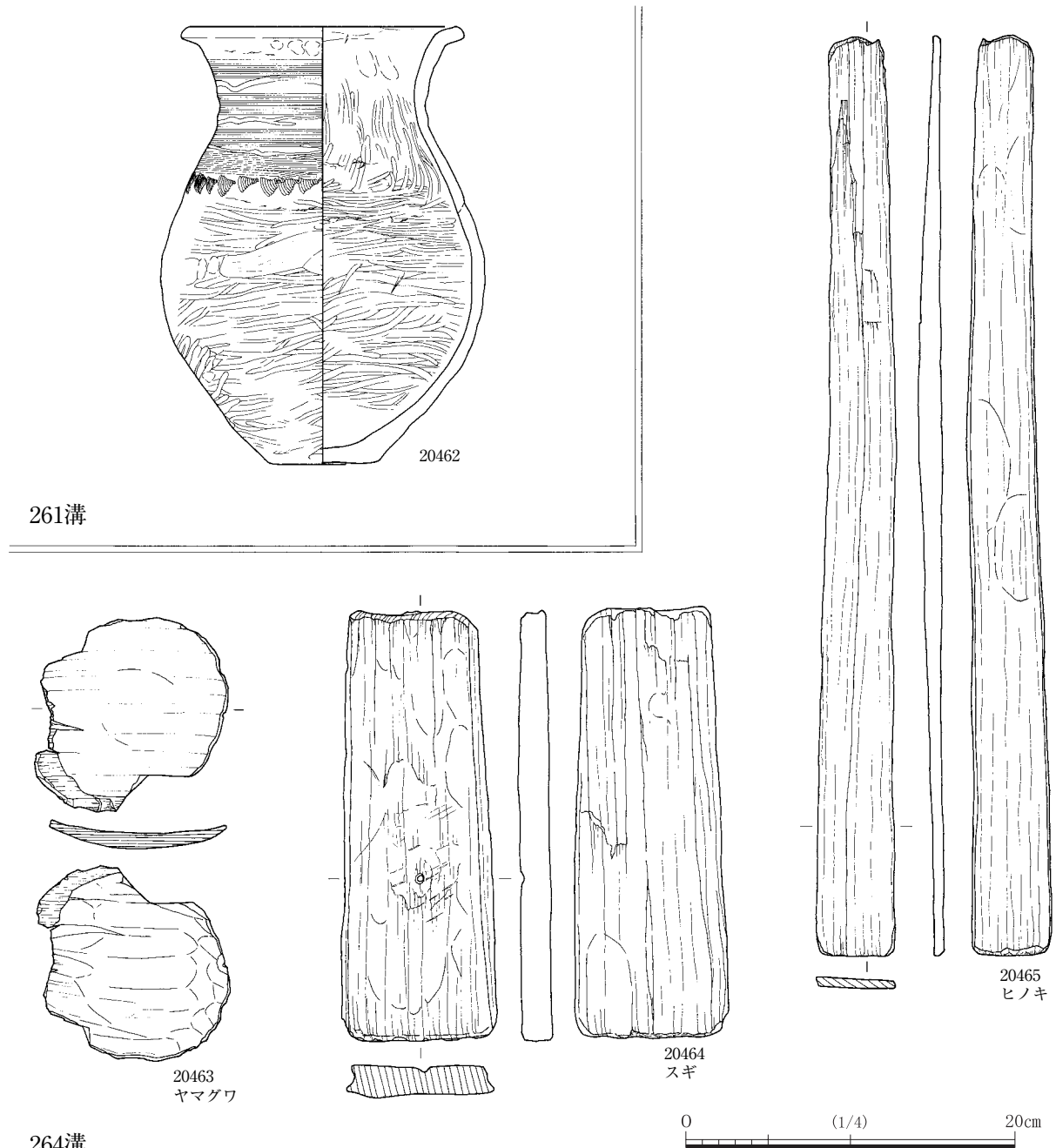


図111 03-1-2区 第7面261・264溝出土遺物

20464は板材。片面のほぼ中央には穿孔途中かと思われるような孔がみられ、周囲には擦痕も観察される。あるいは何らかの穿孔を行う際の台として用いられたものかもしれない。長軸26.2cm、残存幅9.4cm、厚み2.0cmを測る。スギの柾目材。

20465も板材。残存長56.0cm、残存幅4.8cm、厚み1.3cm。長軸ほぼ中央に厚みをもち、両端へ徐々に薄くなっている。ヒノキの柾目材を用いる。

267溝 調査区中部に位置し、第6面247溝の下層、第8面297溝の上層にあたる。03-1-3区の1296溝に連なる。幅4.6~6.9m、深さ50~84cm。埋土(図43)は、N1黒褐2.5Y3/1シルト。オリーブ5Y6/8のブロック(直径5cm)を含む。N2オリーブ黒5Y3/1シルト。上半はオリーブ5Y6/8のブロック、下半は木片を多く含む。N3~7はN2に削られる。N3黒5Y2/1シルト、N4灰オリーブ5Y4/2シルト~

細砂でブロック混じる、N5オリーブ黒5Y3/1細砂ラミナ、N6オリーブ黒5Y3/1粘質シルト、N7黒5Y2/1細～粗砂混じりシルト。N8崩落土で黒5Y2/2シルトでブロック含む。N9オリーブ黒5Y3/1細～粗砂混じりシルト。細かな粘土ブロック含む。N10オリーブ黒5Y3/2シルト。細砂ブロック含む。N11灰10Y4/1粘質シルト・灰オリーブ5Y5/2細砂が細かなラミナをなす。

出土遺物は、弥生土器868片（うちⅠ様式12片、Ⅱ様式24片、Ⅲ様式1片）、転用土製円板1点、石庖丁1点、太型蛤刃石斧2点、砥石2点、叩き石2点、石鏃未成品1点、削器7点、楔1点、サヌカイト剥片12点、大礫2個、中礫1個、小礫1個（磨製石器の欠片か）、計901点である。

図112-20466は壺の口縁部。端部はやや拡張し、水平にひらいた口縁下面（外面）に煤が付着する。Ⅳ-1～3様式。20467は壺の口縁部。口縁は上方へ折れ曲がり、下方へも拡張傾向にある。端面には扇形文が2段に飾られ、破片の下端にはクシ描き直線文が残る。Ⅲ-1様式（Ⅲ-a段階）にあたる。20468も壺口縁。垂直気味に立つ受け口状の口縁をもつもので、やや垂下する。狭い口縁端面には簾状文が施される。Ⅲ-1様式。

20469は壺。垂下した口縁端面にはクシ描き波状文が、頸部には直線文とその間にミガキが施される。内面は条痕のはっきりしないハケ調整で、口縁から3～4cm以下が黒変し器面が剥離する。外面もそれに対応するように帯状に黒変する。煮炊きの痕跡か。Ⅲ-1様式（Ⅲ-a段階）に位置づけられよう。20470は壺の口縁部。肥厚した口縁には刻み目と波状文が施される。施文はⅢ様式の特徴を示すが、器形・胎土はⅡ様式的である。Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭。

20471（写真図版86）は短頸壺。胴部は中央やや下で張り、なだらかに続く口縁は短くひらく。口縁端部は横ナデによって面をもち、やや拡張傾向を示している。Ⅱ様式後半～Ⅲ様式初頭。

20472～20474は甕。いずれも胴部が張りⅢ様式古段階に位置づけられる。20472（写真図版86）は内外面ともハケ調整で、口縁端部は面をもたない。煤は外面胴中部と口縁下、内面は底部付近に付着する。20473は器壁薄く、外反した口縁はナデによって整えられる。外面に煤が付着して観察しづらいが、ミガキが施されている。20474（写真図版86）は内外面ともにミガキ調整が施される生駒山西麓産の甕。口径19.9～20.8cmを測る大形品で、口縁端部は横ナデによって中央が凹み、肥厚する。内外面とも頸部にミガキ前のハケ調整が認められる。底部内外面には煤が付着し、器面が剥離する。

20475は鉢。口縁上端面は面をなし、端面は浅い刻み目で飾られる。Ⅲ様式初頭であろう。

20476は土器転用円板。外面にはハケ調整が残る。

図113-20477～20484はⅡ様式の壺。20477の大きく開いた口縁部はやや垂下し、下端に指で広げられた刻み目が飾られる。端面には頸部と同じくクシ描き直線文が施され、原体の凸部分によって沈線状にも見える。また、補修のためと考えられる上下からの穿孔が口縁の端に1か所認められる。

20478は短頸壺。口縁端部はわずかに肥厚し、クシ描き波状文が施される。頸部はクシ描き直線文が施される。Ⅱ-2～3様式。外面は赤変、内面黒変して表面に剥離部分がある。

20479の口縁端部は肥厚して下端に刻み目が施される。

20480は壺。口縁部はわずかに肥厚して刻み目が、頸部にはクシ描き直線文が施される。器面はにぶい橙色を呈する。20481も壺。口縁下部はわずかに垂下し、頸部にはクシ描き直線文が施される。内面は剥離が著しい。20482（写真図版86）は頸部から体部。クシ描き直線文、連続扇形文、流水文で飾られる。Ⅱ様式。20483も頸部から体部。クシ描き直線文間に波状文の一種である連続扇形文が施される。

20484（写真図版86）は無頸壺。外面はクシ描き直線文、扇形文、波状文で飾られ、一部波状文が直

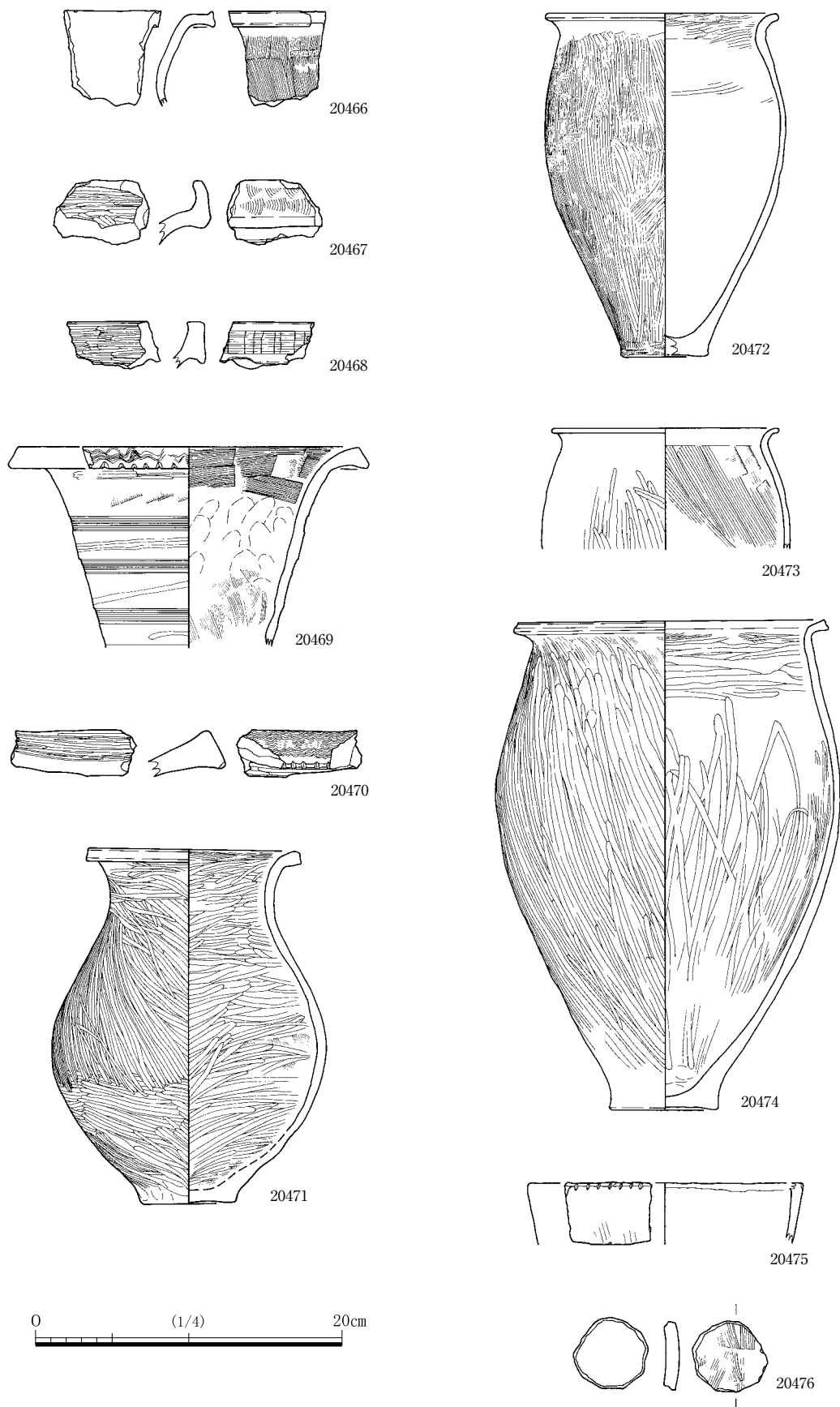


図112 03-1-2区 第7面267溝出土遺物(1)

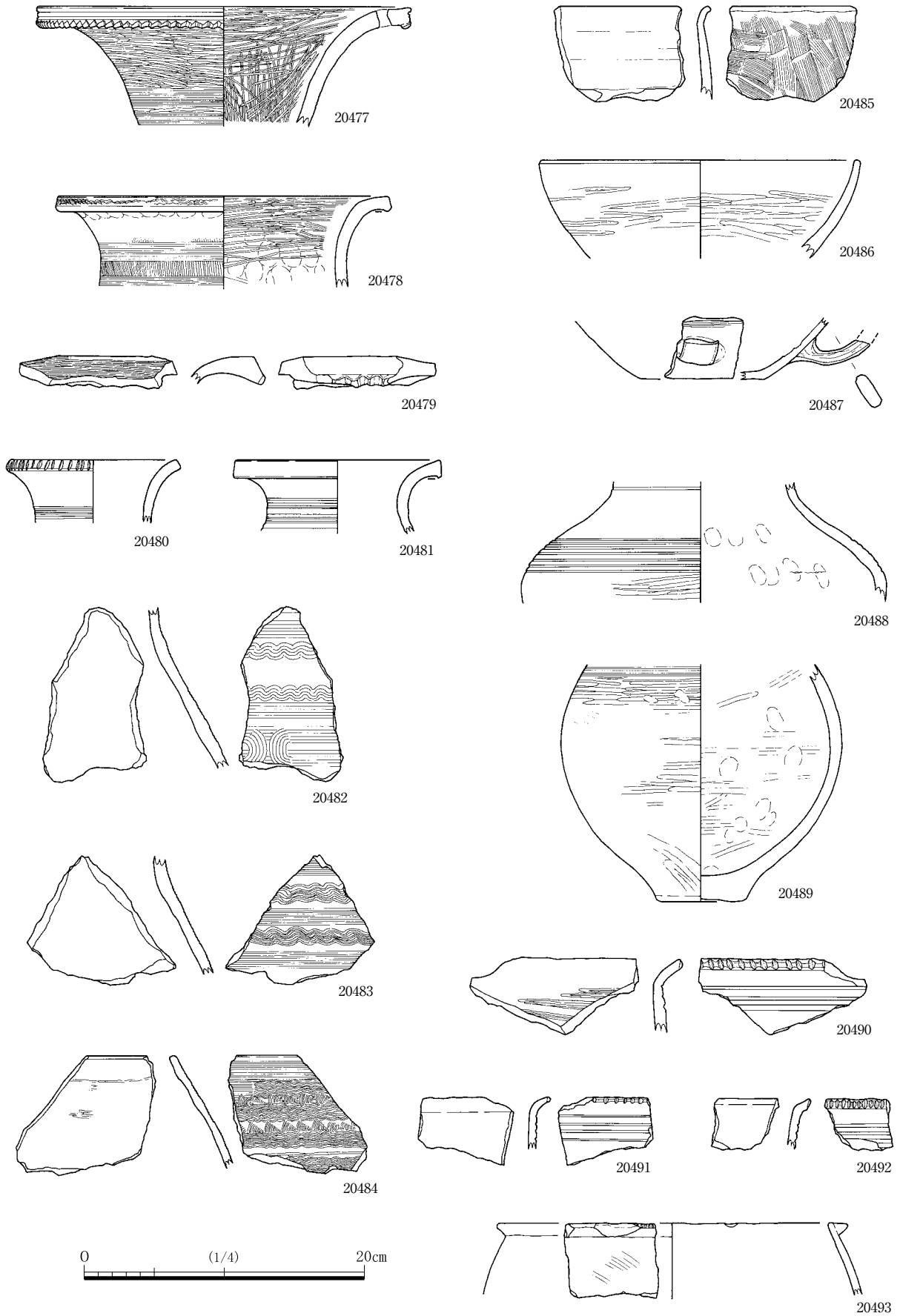


図113 03-1-2区 第7面267溝出土遺物(2)

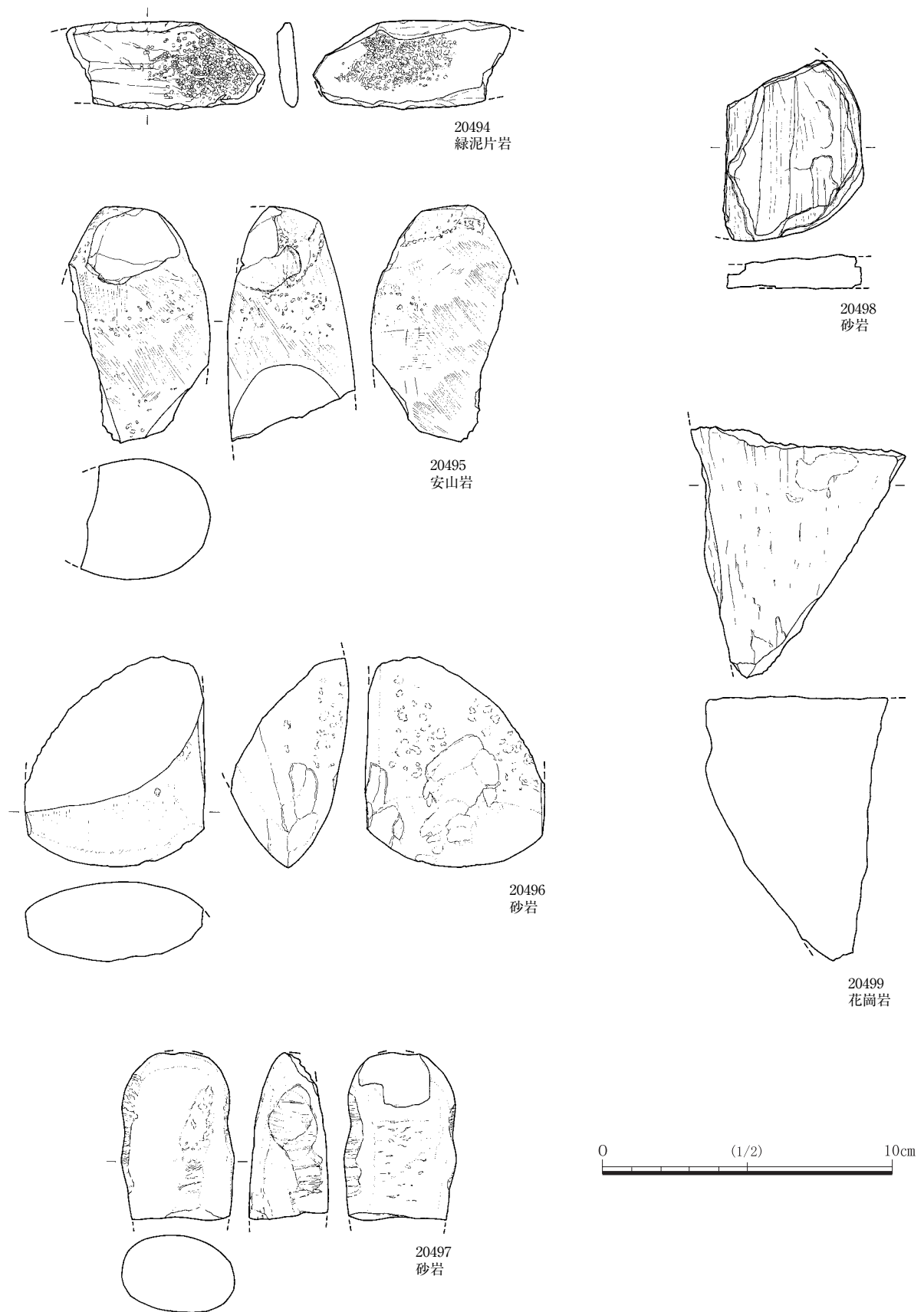


図114 03-1-2区 第7面267溝出土遺物(3)

線文に変化している。ミガキが暗文風に入るのは、口縁にある直線文の下部と、下方の波状文間で、破損部には扇形文の端が観察できるため、おそらく同様の文様帯が下に続くものと思われる。口縁端部は面をもち、内面は剥離が著しい。Ⅱ様式のうちにおさまるだろう。

20485は甕。口縁はゆるく外反し、端部は丸い。外面は不揃いなハケ調整で、内面には指頭圧痕が残る。外面から口縁部内面まで黒変する。Ⅱ様式か。

20486は鉢。粗くミガキが施され、口縁端部は部分的に面をもつ。Ⅱ様式。

20487（写真図版86）は把手付きの鉢である。体部にはクシ描き直線文が残り、底部からやや上がったところに板状の把手がつく。内面は黒変し、表面が剥離する。鬼虎川遺跡に類例があり、生駒山西麓産でⅡ様式に位置づけられよう。

20488は壺。頸部に沈線1条が残り、体部上半には7条一帯が施される。胎土は生駒山西麓産。Ⅰ-3～4様式。20489も壺。体部ほぼ中位に最大径をもち、上半にクシ描き直線文が1条残る。外面は煤の付着が著しい。

20490～20493は甕口縁。いずれもⅠ-3～4様式。うち20493は口縁へ内湾する器形で、口縁直下には浅い刻み目をもつ断面三角形の貼り付け突帯が付される。瀬戸内系であろう。

図114・20494は緑泥片岩製の石庖丁。両面ともに敲打痕が著しく、背部・刃部も潰されている。再加工あるいは未成品か。残存長6.76cm、幅2.97cm、厚み0.7cm、重さ22.0gを量る。

20495・20496（写真図版86）は太形蛤刃石斧で、それぞれ刃部と基部を欠く。

20497は叩き石。砂岩製で断面形は3.83～2.65cmの楕円形。敲打によって両側面は凹み、擦痕が見られる。被熱して全体が赤変する。

20498・20499は砥石。20498は砥面がくぼみ、長軸方向に擦痕が付く。円板状に加工したものか。砂岩製で風化著しい。20499は花崗岩か。砥面は明瞭ではない。

263溝 263溝は以上4条の溝とは異なり、259溝と264溝とをつなぐように北西-南東を主軸とし、途中東側に261溝が取り付く。幅約2.5m、深さは53～77cmで南側が深い。埋土は、O4黒褐2.5Y3/2シルト（植物遺体を含む）とオリーブ褐2.5Y4/3細砂がラミナをなす。弥生土器17片（うちⅠ様式1片、Ⅱ様式1片）が出土した。

269ピット 調査区北西部、268高まり上に位置する。平面楕円形で、主軸方位は南北。長径45cm、短径35cm、深さ14cm。出土遺物はない。

266落ち込み 調査区北東部、265・271高まりの上面に位置する。第6面242落ち込みの下層にあたる。264・267溝などと同様に東北東-西南西方向に長く、平面不整楕円形である。長径約26m、短径約8m、深さ58cm。出土遺物は、弥生土器87片（うちⅠ様式4片、Ⅱ様式3片）、転用土製円板1点、削器1点、サヌカイト剥片1点、計90点と炭化米、骨である。

270落ち込み 調査区西部、265・271・272高まりに囲まれた範囲に位置する。落ち込みの北部が側溝とセクションベルトにかかっているが、断面観察などから、東西約8m、南北約3mの平面楕円形と推定される。深さは35cm。出土遺物は、弥生土器56片（うちⅡ様式2片）、砥石1点、磨石1点、サヌカイト剥片1点、計59点。

図115・20500～20502はⅡ様式の甕。20500（写真図版87）の口縁部上端には木口による刻み目が施され、外面縦方向、口縁部内面は横方向のハケ調整。いわゆる大和型の甕。外面は体部中位、また口縁直下に帯状の煤が付着する。20501（写真図版87）は口縁を「く」の字に屈曲させ、外面には整形時の



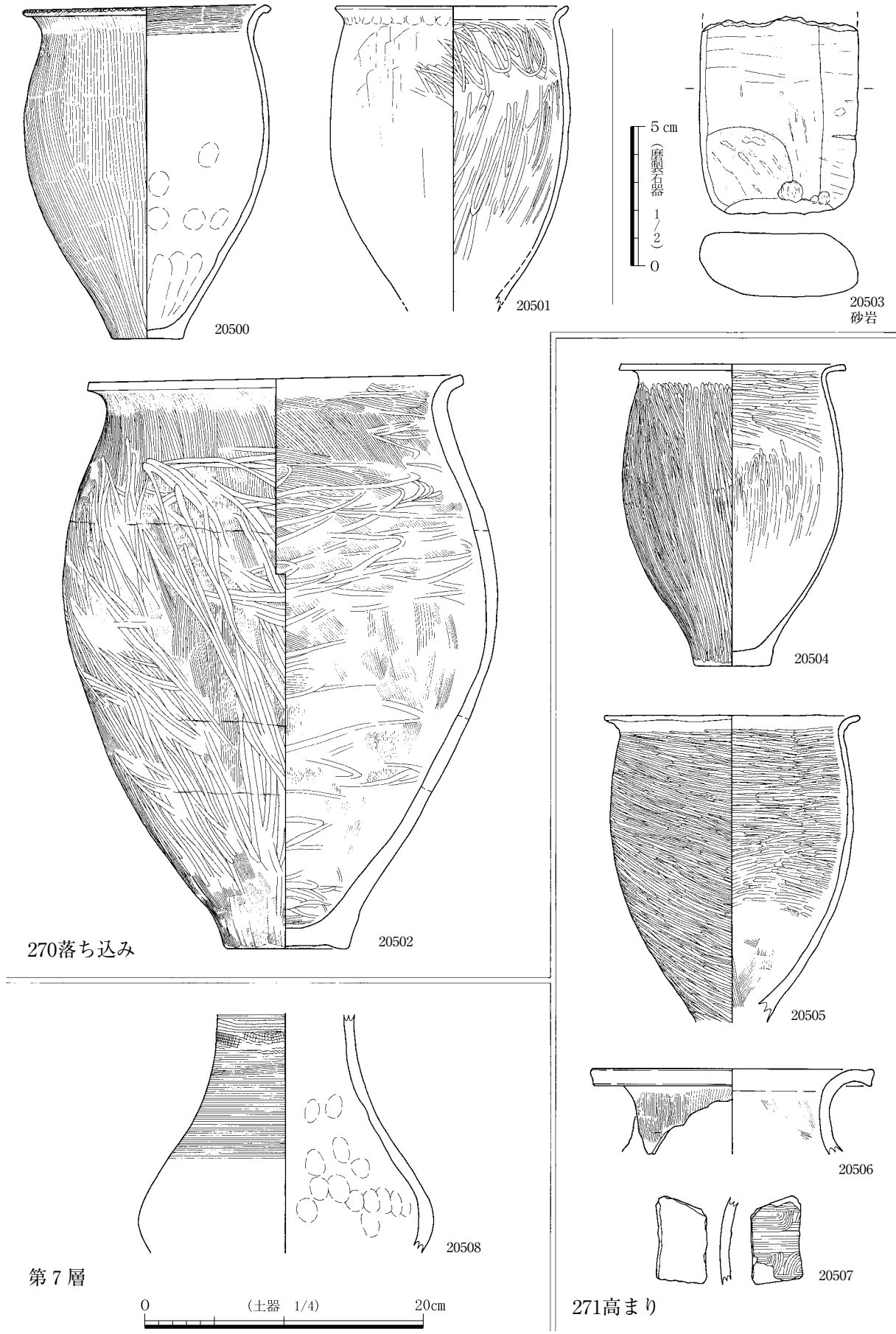


図115 03-1-2区 第7面270落ち込み、271高まり、第7層出土遺物

指頭圧痕が残る。内外面ともに煤が付着し、底部付近は器面が荒れる。外面のミガキは不明瞭だが、斜めから縦方向に施される。

20502（写真図版87）は口径26.6cm、器高41.4cmを測る大形の甕。内外面ともにハケ調整後に縦方向を基本としたミガキが施されるが、非常に粗い。外面には粘土の接合痕が認められる。

20503は砂岩製の砥石。平たい方形で砥面ははっきりしない。

溝間の盛土による部分を図110のとおり260・262・265・268・271・272高まりとして番号を付け、第7層の遺物を高まりごとに取り上げた。

#### (15) 03 - 1 - 2 区第7層の遺物（図115・写真図版87）

03 - 1 - 2 区の第7層全体から出土した遺物は、弥生土器1044片（うちⅠ様式41片、Ⅰ～Ⅱ様式8片、Ⅱ様式75片）、転用土製円板1点、石器類14点、礫2個、計1061点と骨である。それらを第7面で名づけた高まりの範囲ごとにまとめると次のようになる。

調査区北部、第7面260高まり内からは、弥生土器31片（うちⅡ様式4片）、小礫1個、計32点出土した。

調査区北部東寄りの第7面262高まり内からは、弥生土器27片（うちⅠ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式2片）が出土した。

調査区中部に東西に広がる第7面265高まり内の出土遺物は、弥生土器117片（うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式9片）、削器1点、サヌカイト剥片2点、計120点である。

この265高まりの南側に平行する271高まり内からは、弥生土器691片（うちⅠ様式32片、Ⅱ様式53片）、転用土製円板1点、石錐1点、削器3点、サヌカイト剥片3点、計699点出土した。

図115 - 20504・20505（写真図版87）は甕。20504は水平方向に口縁をひらき、端部をやや拡張させる。ミガキは縦方向を基本とし、内面上部のみ横方向。器壁は薄く、Ⅲ様式（古段階）に位置づけられる。外面は全体に煤が付着する。20505の口縁部は横ナデによってややまるみを帯びてひらく。斜めから横方向のミガキ調整を施す。外面胴中部には煤が付着する。Ⅱ様式後半であろう。

20506・20507はⅡ様式の壺。20506は無文の壺。頸部は短く外反し、端面がやや垂下する。外面は黒変し、口縁部上面はやや剥離する。被熱か。20507は壺の頸部。クシ描き直線文と扇形文による擬似流水文が描かれる。

調査区北西部、第7面268高まり内からの出土遺物は、弥生土器14片、砥石片1点、削器1点、計16点と、面積の割に少ない。

調査区西部の第7面272高まり内からは、遺物が出土しなかった。

その他、特定の高まりに属さない第7層部分から、弥生土器150片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式6片）、サヌカイト剥片2点、中礫1個、計153点と骨が出土した。

図115 - 20508は長頸壺の頸部から体部。頸部から体部上半まで、クシ描き直線文を基本として施文する。頸部の一部は、ごく揺れの少ない波状文、極めてとめの弱い簾状文風の施文となっており、Ⅲ様式への展開を思わせる。Ⅱ様式後半であろう。

以上が、第7層出土の遺物である。

さらに、第7層以下のサブトレンチから、弥生土器177片、サヌカイト剥片2点、中礫1個、計180点出土した。

第7～10層相当のサブトレンチからも、弥生土器127片、サヌカイト剥片2点、小礫1個、計130点出土した。

調査区各所に設定した第7～11層相当のサブトレンチからの出土遺物は、弥生土器1293片（うちⅠ様式115片、Ⅰ～Ⅱ様式48片、Ⅱ様式39片）、転用土製円板3点、石庖丁原材1点、磨石1点、砥石2点、叩き石1点、打製石鏃1点、削器2点、サヌカイト剥片12点、大礫1個、焼土塊1点、木製鋤未成品2点、木片6点、計1326点と種子多数である。

#### (16) 03-1-2区第8面の遺構と遺物（図116～125 写真図版29～34・88～90）

黒色土層の上面である。

面の高さはT.P.+1.4～2.1mで、調査区南東側が高い傾向にある。第6面同様に、複数の比較的規模の大きな溝が東北東から西南西にはしるために、きわめて起伏に富んだ景観を呈する。遺構として、溝6条、木棺1基、土坑9基、ピット13個、落ち込み4か所、高まり10か所、計43か所（遺構番号279～320・323）を調査した。

溝を6条検出した。北から順に279・283・288・297溝の4条は、ほぼ平行して東北東-西南西を主軸とする。

279溝 調査区北部に位置する。第7面259溝の下層、第9面359溝の上層にあたる。北肩は上層の溝により攪乱されているが、底部の形状から幅5m程度と推定できる。深さ55cm。埋土はオリーブ褐2.5Y4/3シルト。279溝としての埋土が薄いのか、出土遺物はない。

283溝 279溝の数m南に平行する。第7面261溝の下層、第9面328溝の上層にあたる。南西側で282・287高まりにさえぎられ、調査区を貫通してはいない。幅2.1～3.5m、深さ47cm。埋土（図43）は、P8黄灰2.5Y4/1シルト。上位ではシルト・細砂がラミナをなし、下位では植物遺体を多く含む。P9暗灰黄2.5Y4/2シルトで植物遺体を含む。この溝からも出土遺物はない。

288溝 第7面264溝の下層、第9面330溝の上層にあたる。当03-1-2区のみならず、03-1-1区の61・62溝、03-1-3区の1310溝と一連の溝である。幅3.8～4.5m、深さ50～94cm。

埋土は南北断面（図43）では、O6黄褐2.5Y5/3シルト・にぶい黄2.5Y6/3細砂がラミナをなす。O7オリーブ褐2.5Y4/3シルト・にぶい黄2.5Y6/3細～粗砂がラミナをなす。中位で暗オリーブ褐2.5Y3/3シルト～細砂。植物遺体を多く含み、南では上層との境があいまいになり、黒褐2.5Y3/2シルトの植物遺体のたまりになる。下半は黒2.5Y2/1シルトで植物遺体多い。

東西断面（図44）では、O'5灰オリーブ5Y4/2シルト。東側の層厚が薄い部分ではカルシウムの結核含む。O'6灰オリーブ5Y5/3細砂。O'7オリーブ黒5Y3/2シルト。O'8の上半の灰オリーブ5Y5/3細砂を主体とするシルト～粗砂のラミナ。西部の溝底には、工具の痕跡が明瞭に残る。

出土遺物は、弥生土器69片（うちⅠ様式1片、Ⅱ様式3片）、サヌカイト剥片2点、クルミ属核1点、計72点である。

図116-20509（写真図版89）は把手付きの鉢。口縁を一部欠く以外は完形である。底部は厚く、口縁部へ外傾してひろく。被熱の痕跡が明瞭で、把手の直上から口縁を縁取るように帯状に黒変し、口縁部以下、体部外面の器面はほぼ剥離している。内面、特に上半にハケ調整後のミガキが残る。Ⅰ様式後半であろう。

297溝 調査区中部に位置する。第7面267溝の下層、第9面337溝の上層にあたる。03-1-3区の

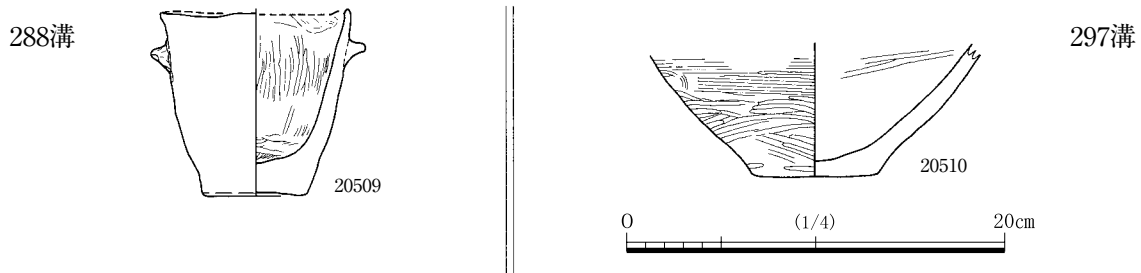


図116 03-1-2区 第8面288・297溝出土土器

1316溝に連なる。幅5.5～8.2m、深さ39～85cm。

埋土は南北断面（図43）では、N12黒褐2.5Y3/2シルト。肩口付近では細砂ラミナをなす。N13オリーブ黒5Y3/1シルト。細砂ラミナが見られる。N14黒5Y2/1シルト・暗オリーブ5Y4/4粗砂がラミナ形成。植物遺体・炭化物を含み、下半に多い。

東西断面（図44）ではN' 6 オリーブ黒7.5Y3/2粘質シルト。木片多く、溝肩口で植物遺体・木片多い。N' 7 崩落土。オリーブ黒5Y2/2粘質シルト。木片多く、炭化物やや含む。N' 8 オリーブ黒7.5Y3/2シルト。東方で黄色細砂のラミナ顕著。植物遺体やや含む。N' 9 灰オリーブ5Y4/2シルト。ラミナ顕著。上層との境で植物遺体やや含む。N' 10 灰オリーブ5Y4/2～黒5Y2/1シルト。

出土遺物は、弥生土器127片（うちⅠ様式6片、Ⅱ様式9片）、削器1点、楔1点、計129点である。図116-20510は壺の底部。外面に残るクシ描き直線文は、施文の深さが一定ではなく、さらに上からミガキが施されたため、ところどころで途切れている。流水文を意図したのか、最下段の直線文は下へカーブして終わっている。Ⅱ様式。

285溝 以上4条の溝とは異なり、279溝と288溝とをつなぐように北西-南東を主軸とする。幅約1.8～2.9m以上、深さは34cm。埋土（図43）は、O 8 暗灰黄2.5Y4/2シルトとラミナをなす。途中、東側に283溝が取り付く。出土遺物なし。

303溝 調査区南東部に位置する。基本的に南北を主軸とし北方で北西に曲がる。幅47～115cm、深さは5cmとごく浅く、底は北に向けて下がる。出土遺物はない。

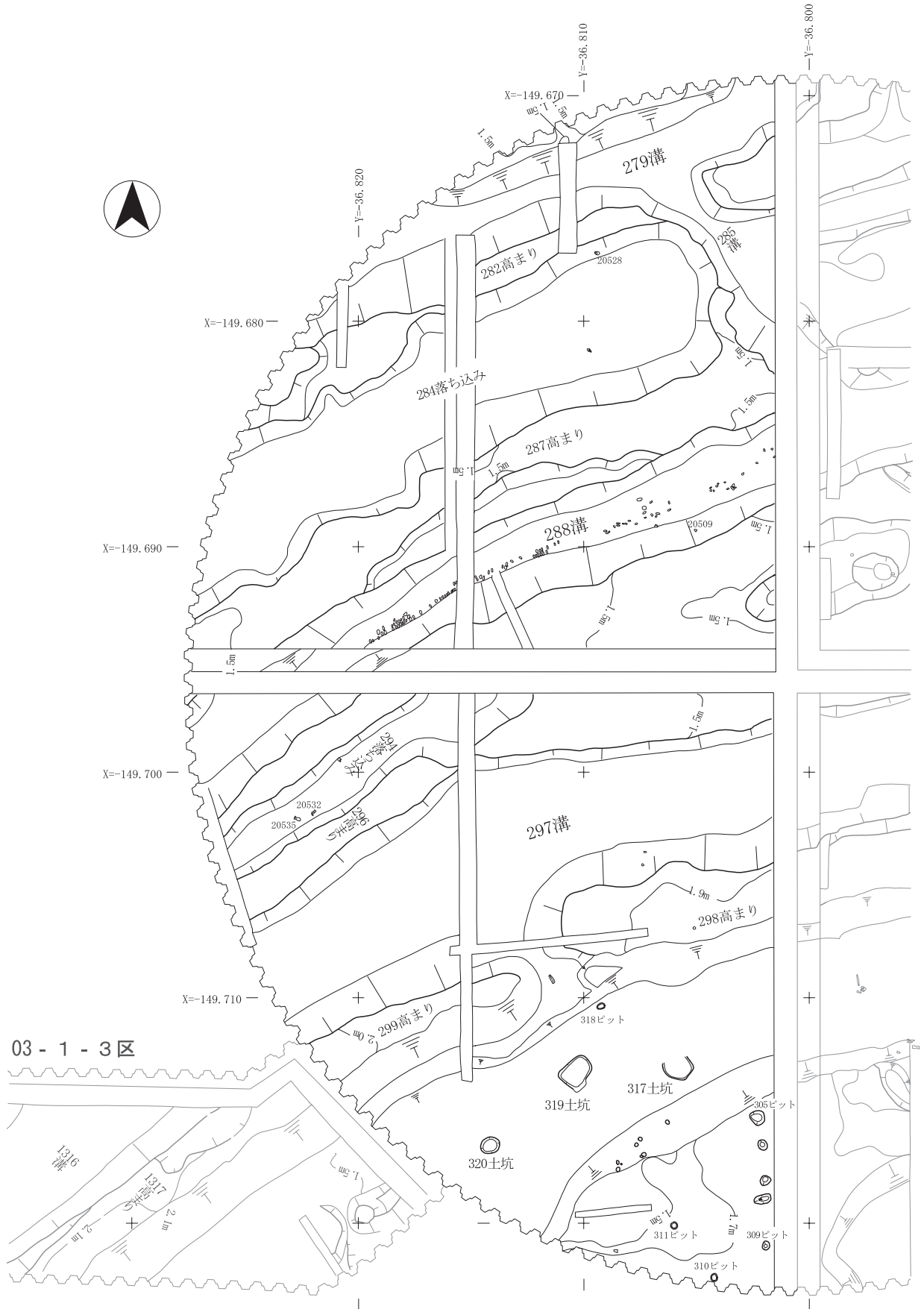
木棺を1基検出した。

323木棺（図118 写真図版31～33） 調査区中央から南東側、298高まり上に位置する。第4面176溝の東法面に323木棺の蓋板が現れたので、それ以降の各面で掘りかたを探し、サブトレンチで断面も観察したが、掘りかたは認識できなかった。第8面で蓋板を検出した。次いで、蓋板除去、棺内断ち割り、底板検出、底板上の人骨記録、小口と思しき材露出、底板下断ち割りの順に調査した。

墓壙の平面形は不詳だが、わずかに残る痕跡から長さ1.4m以上、幅0.8m程度と推定される。主軸方位は東北東-西南西（北70°東）。

蓋板は北側の大、南側の中、中央の小の3枚が残っており、その範囲は長さ142cm、幅64cm。大きな北側の板は長さ142cm、幅29cm、厚み6cmのコウヤマキ。350年分の年輪が数えられ、未だ確定していないコウヤマキ年輪年代697年間分の空白部分を埋めうるデータが採取された（第9章 光谷拓実「山賀遺跡出土木材の年輪年代」参照）。南側の板は長さ119cm、幅16cm、厚み4cmのコウヤマキ。中央の小さな板は残りが悪く取り上げられなかった。北側の蓋板の西端は掘りかたと思しきラインよりも西に出ている。

底板は、4枚の板を短軸方向に並べたもので、その範囲は木棺の長軸方向に105cm、短軸方向に71cm。



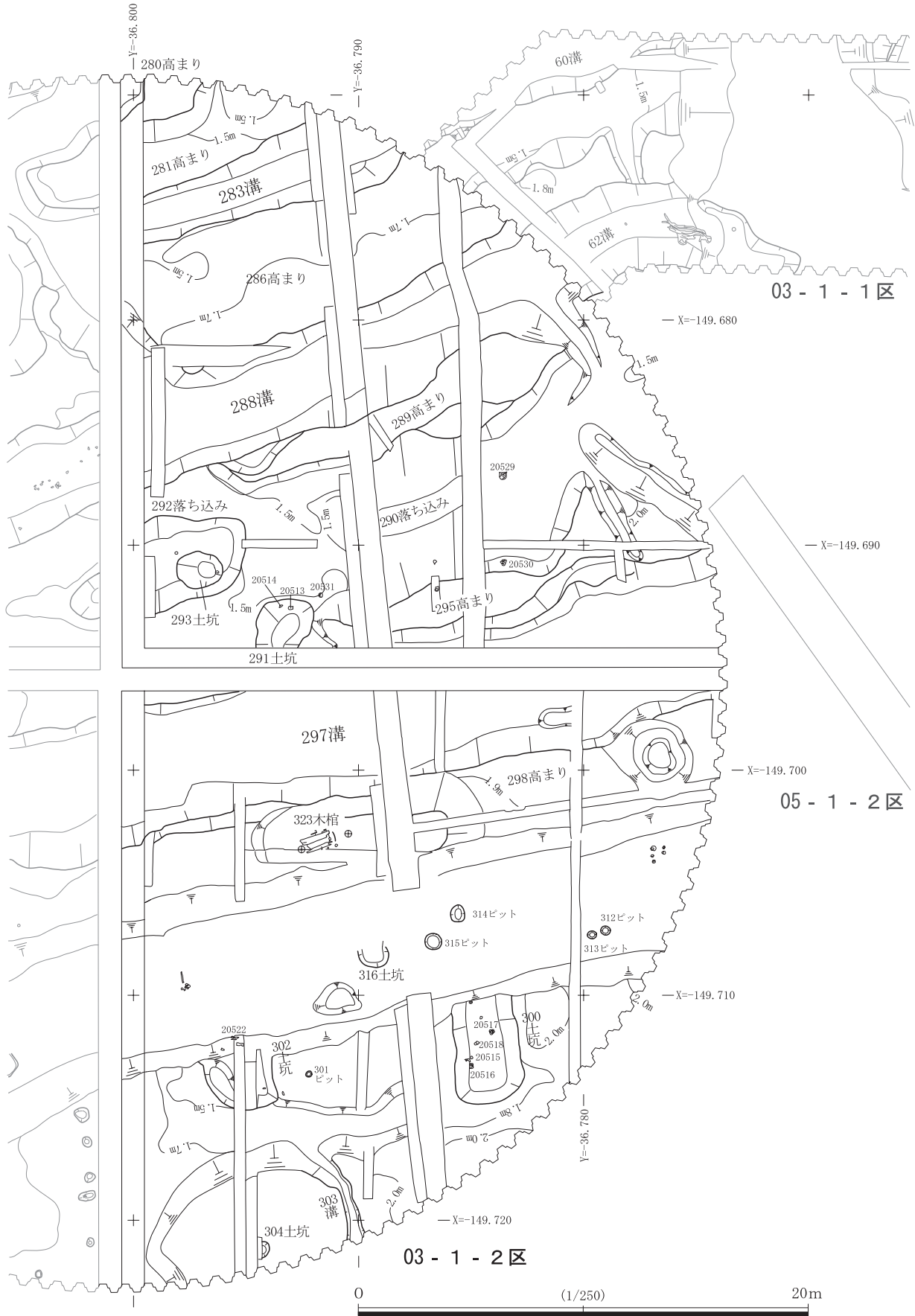
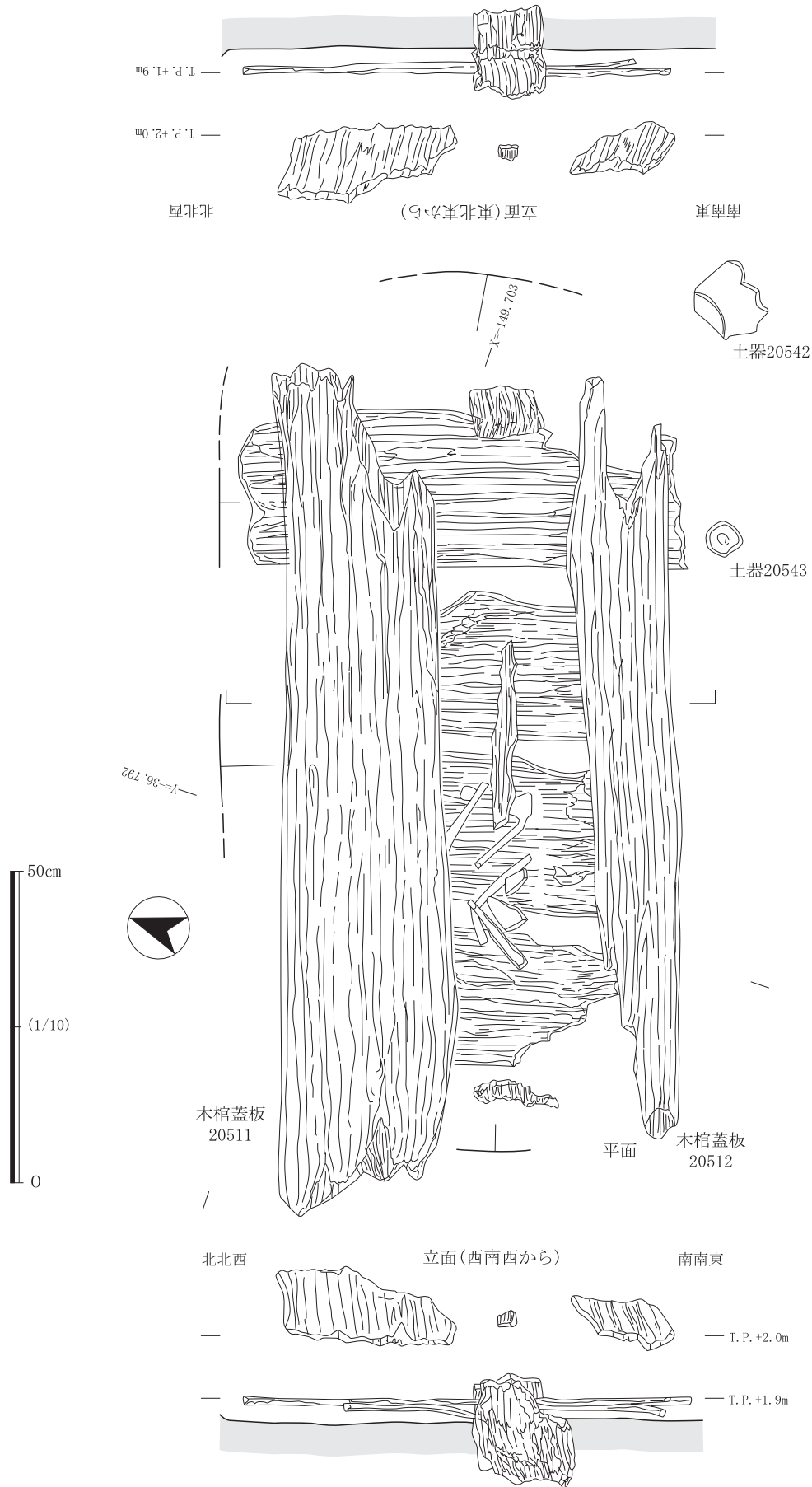


図117 03-1-2区 第8面

第5章 03-1-2区の調査成果







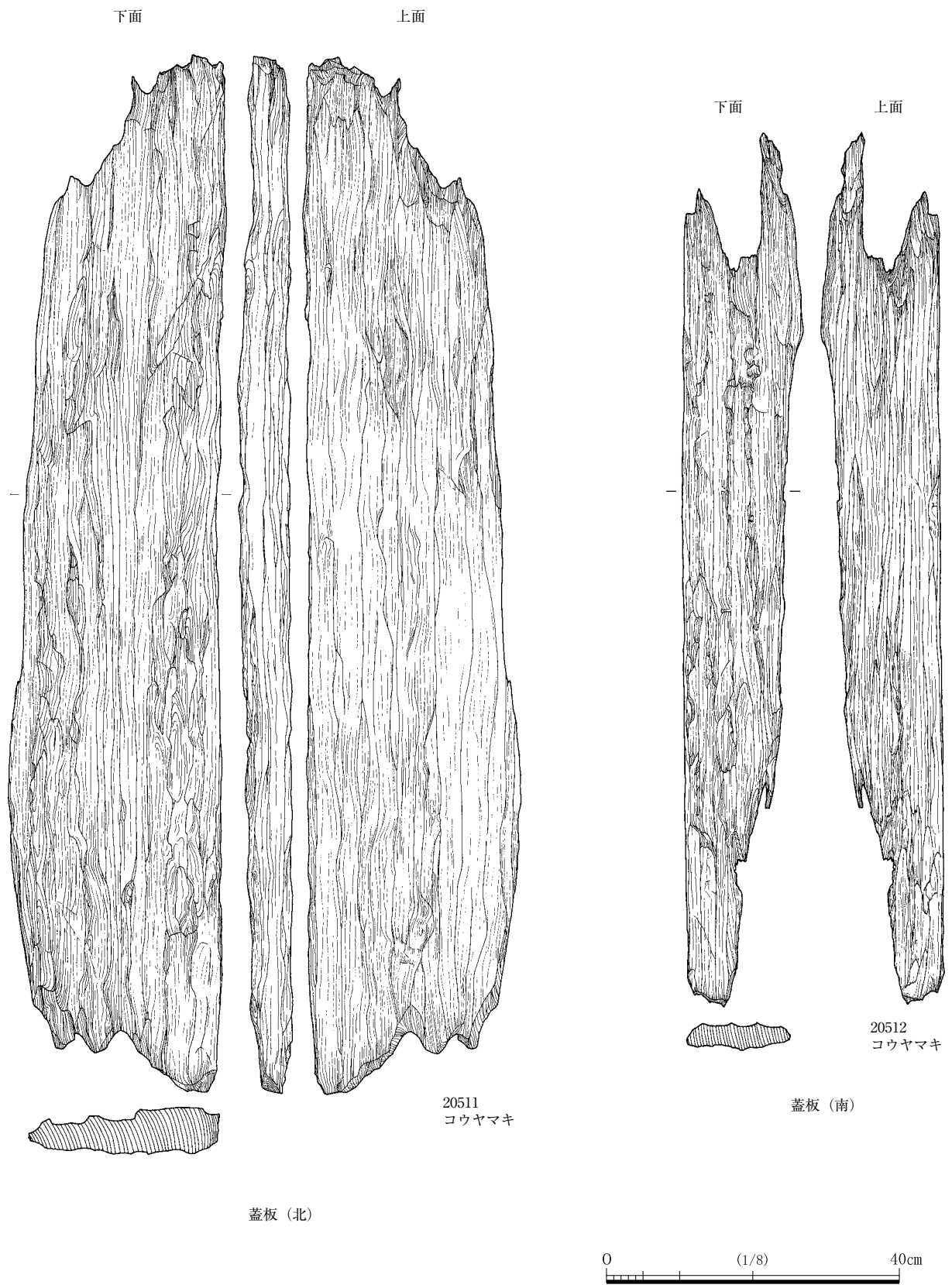


図119 03-1-2区 第8面323木棺材

4枚とも残りが悪く取り上げられなかったが、サンプルからスギと判明した。西から2枚目の底板上を中心にヒトの下肢骨が残っていた(第9章 安部みき子「山賀遺跡出土の人骨」参照)。下肢骨が棺の西側に寄っていることと東の底板が最も大きい(棺幅が広い)ことから、頭位方向は東北東(北70°東)と考えられる。蓋板と底板との間隔は、現状では10cm程度しかない。

側板は痕跡すら検出できなかった。

小口部分は東西ともに棺の長軸中央にあり、東側では幅11cm、上部は棺内にやや傾き高さ20cm、西側では幅16cm、わずかに「く」字に折れ高さ16cmである。両小口ともにスギ。

323木棺周辺の第8層は、黒2.5Y2/1シルトに暗オリーブ5Y4/3細砂ブロックが混じる盛土である。一方、棺内および小口穴の埋土は第8層よりもやや明るい黒褐2.5Y3/1シルトで棺外よりも砂やブロックの混じり少なく、小口穴は第8層よりも粘性が強い。

棺内からの出土遺物は、弥生土器35片(うちⅠ様式2片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式2片)と中礫3点だが、土器片は棺外から流入したと思われる細片で副葬品とはいいがたい。掘りかたからは、サヌカイト剥片1点出土。

他に蓋板とほぼ同レベルで、図127-20542・20543の土器底部2点が出土した。前者は位置的に323木棺掘りかた内遺物の可能性がある。

図119-20511・20512(写真図版88)は蓋板の材である。いずれもコウヤマキの柾目材で、20511が北、20512が南に位置するもの。20511は長軸141.8cm、短軸最大29.2cm、最大厚6.2cmを測る長大な板。前述したように年輪の測定から、大径材であったことが判明している。20512は長軸119.0cm、短軸16.4cm、最大厚3.8cmを測る。両端は腐朽しており、上・下面・側面ともに加工痕は観察できなかった。

土坑を9基、ピットを13個調査した。個々のデータは表9にまとめ、主な遺構に触れる。

291土坑(写真図版34) 調査区中央やや東、297溝の北岸に位置する。平面不整形だが南北に長い。長径210cm以上、390cm以下、短径249cm、深さ38cm。埋土はオリーブ黒5Y2/2粘土。出土遺物は、弥生土器79片(うちⅡ様式6片)、転用土製円板1点、昆虫遺体1点、計81点である。

図120-20513(写真図版89)は無文の短頸壺。頸部は内傾気味に伸び、口縁部の屈曲ははっきりしている。口縁端部は横ナデによって整形されるが、面としての形成は弱い。ミガキは口縁端部を除き、底部下面にまで密に施される。Ⅱ様式であろう。なお、体部と頸部の半周ほどが煤けている。20514は分厚い壺の底部。Ⅰ様式か。

293土坑 291土坑の約2.5m北西、292落ち込みの中に位置する。平面不整形で、東西方向にやや長い。長径206cm、短径168cm、深さ39cm。埋土は黄褐2.5Y5/3シルト。出土遺物は、弥生土器113片(うちⅠ様式9片、Ⅱ様式11片)、削器1点、サヌカイト剥片2点、計116点である。

300土坑(写真図版34) 調査区南東部に位置する。平面隅丸長方形と推定でき、溝状に南北方向に長い。第6面252大溝に北部を切られている。長径不詳、短径312cm、深さ57cm。埋土は、オリーブ黒7.5Y3/2シルト～粗砂。出土遺物は、弥生土器71片(うちⅠ様式5片、Ⅱ様式3片)、木1点、計72点である。

図120-20515は無文の広口壺。頸部は太く短く、胴部との境ははっきりしている。口縁部はわずかに上下に拡張する。20516(写真図版89)は壺。器壁は薄い。作りが非常に粗く、特に体部上半では粘土の接合部分が段状に残る。外面は下から上へハケ調整が施されるが、粘土の乾きが悪かったのか、砂粒が動いてケズリ状となる。内面は横ナデを基本とするが、整形時の指痕も多く観察される。長石が

表9 03-1-2区 第8面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計	
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他		
								I様式	I・II様式	II様式	III様式	不詳	成品			剥片類
291土坑	8L-10j	不整	北	390	249	38	オリーブ黒5Y2/2粘土			6		73			転用土製円板1、昆虫遺体1	81
293土坑	8L-10j	不整円	東西	206	168	39	黄褐2.5Y5/3、木片含む	9		11		93	削1	2		116
300土坑	8M-9b	隅丸方	北		312	57	オリーブ黒7.5Y3/2シルト～粗砂	5		3		63			木1	72
301ピット	8M-10b	楕円	北東	28	22	11	オリーブ黒5Y3/1									0
302土坑	8M-10b	不整			303	70	図121参照	5		8		64		4	木器2	83
304土坑	8M-10c				73	9	オリーブ黒5Y2/2、細砂混じる									0
305ピット	9M-1b	不整円	北北西	60	58	10	図123参照							2		2
306ピット	9M-1b	円		40	36	4	図123参照									0
307ピット	9M-1b	不整円	東北東	48	39	9	図123参照									0
308ピット	9M-1b	楕円	東北東	78	39	24	図123参照	1	1		1	13	錐1	2		19
309ピット	9M-1c	楕円	北北東	40	25	10	図123参照					3				3
310ピット	9M-1c	楕円	北	36	25	8	黒7.5Y2/1粘土、細砂やや含む、炭含む			1		2				3
311ピット	9M-1b・1c	円		30	27	11	①黒2.5Y2/1粘土、細砂混じる ②黒5Y2/1植物遺体の層		1			1		1		3
312ピット	8M-8a	円		40	38	11	オリーブ黒7.5Y3/1粘土、細砂・粗砂混じる									0
313ピット	8M-8a	円		40	34	10	オリーブ黒5Y2/2、細砂・粗砂混じる									0
314ピット	8M-9a	不整円	北	71	60	13	灰白5Y7/2粗砂					5		1		6
315ピット	8M-9a	円		73	72	16	灰白5Y7/2粗砂			1		6				7
316土坑	8M-9a・10a	楕円			133	16	灰白5Y7/2粗砂									0
317土坑	9M-1b	不整			125	19	オリーブ黒5Y3/1粘土、橙7.5YR6/6粗砂層混じる、植物遺体・炭含む	9	8	8	1	87	削1	2		116
318ピット	9M-1b	楕円	東北東	37	23	13	黒7.5Y2/1粘土、粗砂混じる									0
319土坑	9M-1b・2b	隅丸	北東	148	105	48	灰白5Y7/2粗砂	1		3		22	削1			27
320土坑	9M-2b	円		83	68	7	オリーブ黒10Y3/1粘土、粗砂混じる	3				22				25

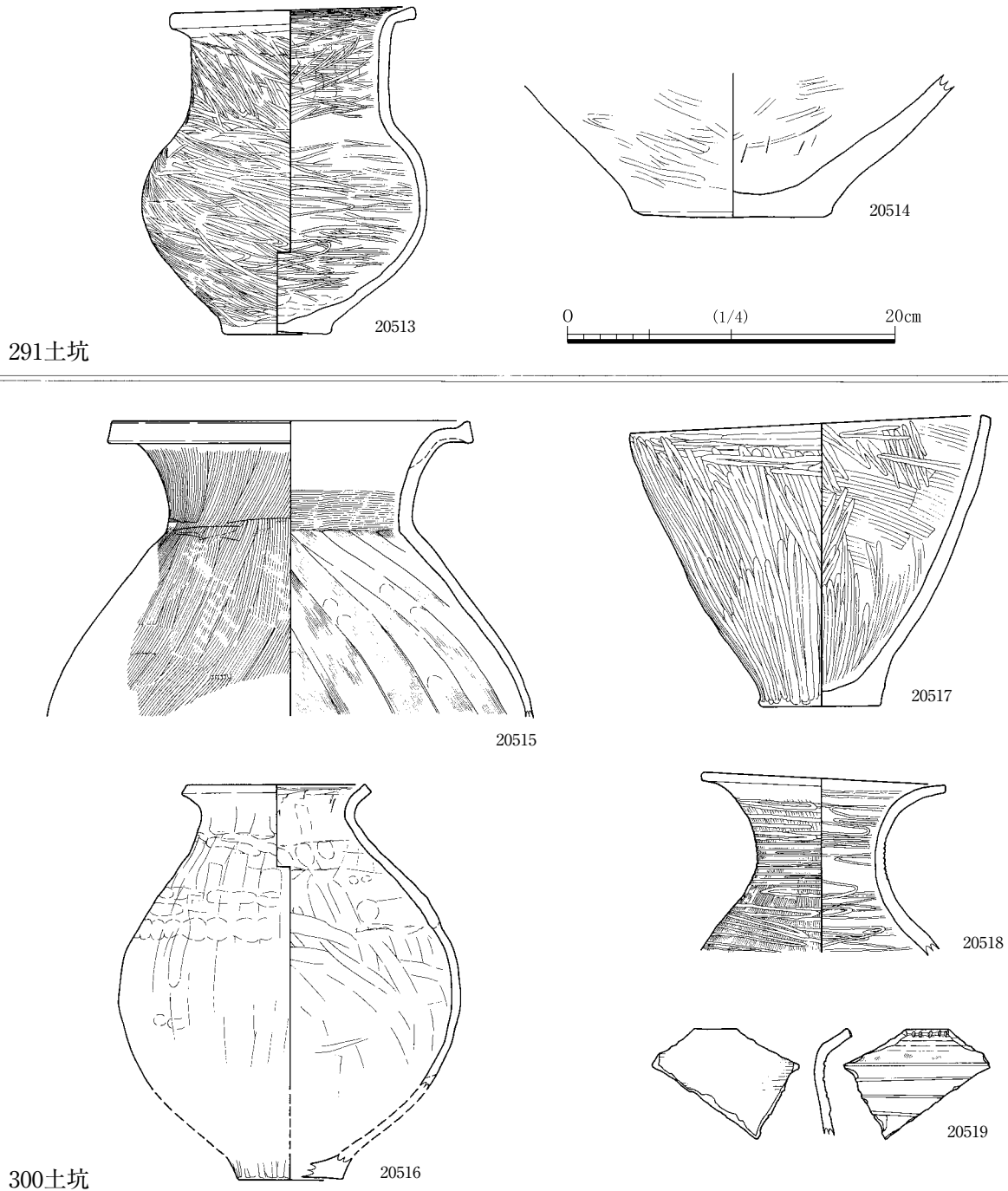
多く、灰黄色の胎土を基本とする。いずれもⅡ様式末～Ⅲ様式におさまるものであろう。

20517 (写真図版89) は鉢。体部はやや内湾して口縁部は面をもつ。やや太めのミガキが体部に縦方向、口縁には横方向に施される。Ⅱ～Ⅲ様式。

20518・21519はⅠ-3～4様式と古い。20518は壺。頸部は直立気味に立ち上がってひらく。頸部には沈線8条が施される。

20519は甕。口縁端部は刻み目、胴部には沈線が間隔をおいて施される。

302土坑 (図121・写真図版34) 調査区南部やや東にあり、300土坑と同様に第6面252大溝に北部を切られている。平面不整形で、西側は弧状、東側は直線状の輪郭をもつ。径303cm、深さ70cm。埋土は、



291土坑

300土坑

図120 03 - 1 - 2区 第8面291・300土坑出土土器

黒2.5Y2/1細砂～シルトに黒褐10YR2/2シルトが筋状に入り、下層には木片が多く含まれる。弥生土器77片（うちⅠ様式5片、Ⅱ様式8片）、サヌカイト剥片4点、木器2点、計83点出土した。

図122 - 20520（写真図版89）は壺。頸部のクシ描き直線文の原体は太く、最上段の簾状文のとめはごく弱く、間隔も広い。20521は高杯。杯部と柱状部が残る。杯部は椀状となるもので、脚は短い。外面は縦方向のミガキが施される。Ⅲ様式でも最古段階のものとなろう。杯部内面は煤が付着し、外面も黒変している。脚部の破断面はやや磨耗しており、脚台部の破損後に蓋に転用したものか。両者からは、Ⅱ様式末からⅢ様式初頭に位置づけられるが、古い鉢も出土する。

20522（写真図版89）は口径9.0cm、器高9.3cmを測る小形の鉢。口縁はわずかに外反する部分もある。

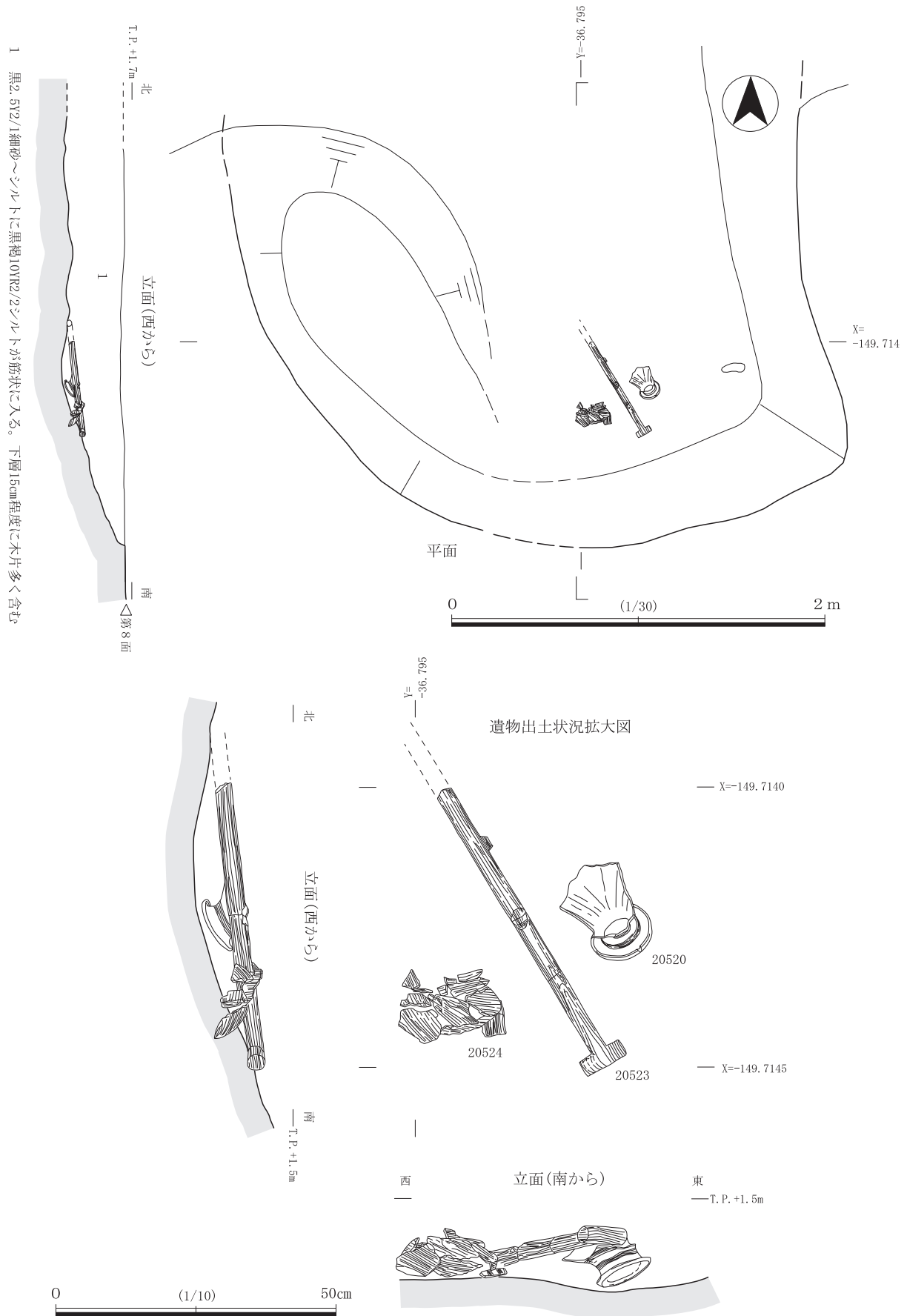
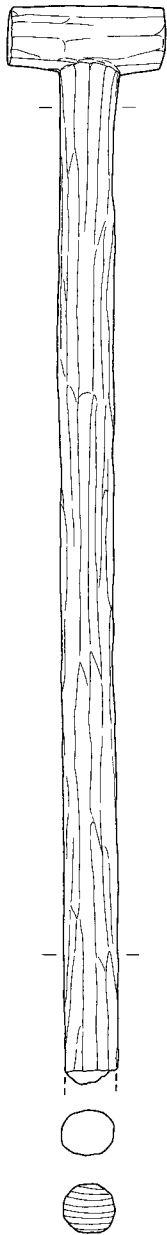
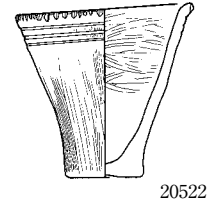
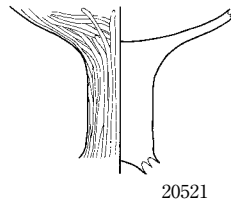
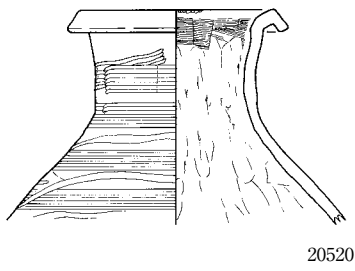


図121 03-1-2区 第8面302土坑



20523  
アカガシ亜属

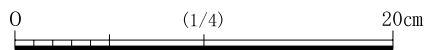
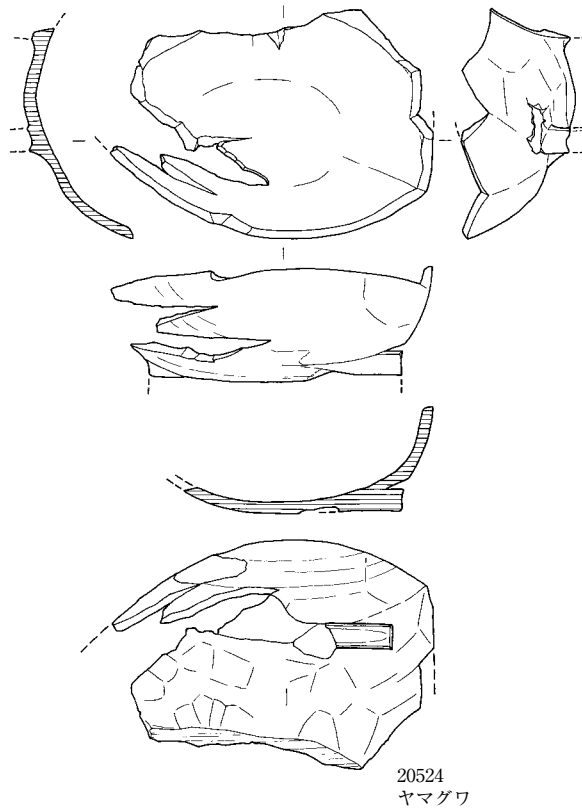


図122 03 - 1 - 2区 第8面302土坑出土遺物

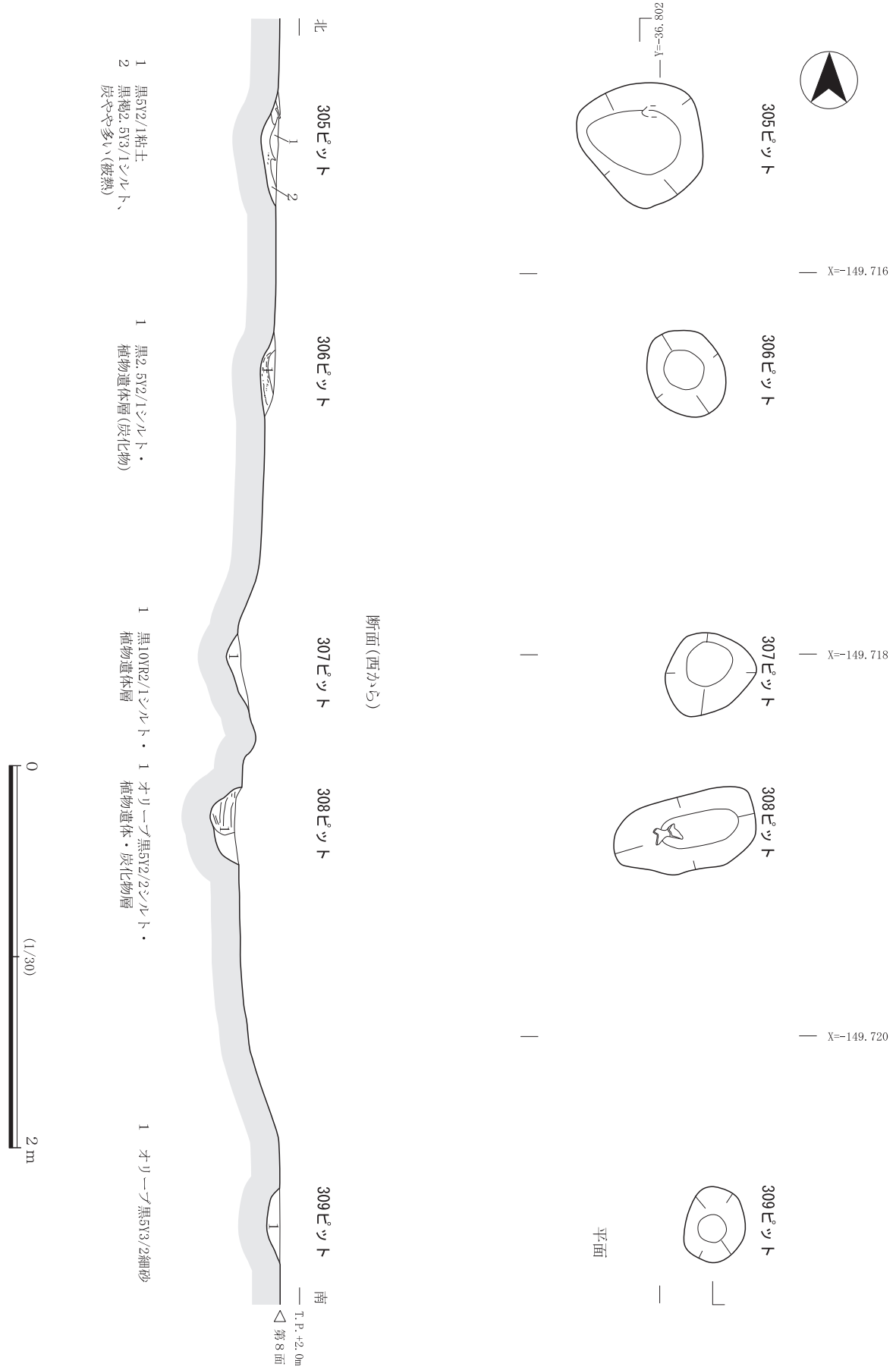


図123 03-1-2区第8面305・306・307・308・309ピット

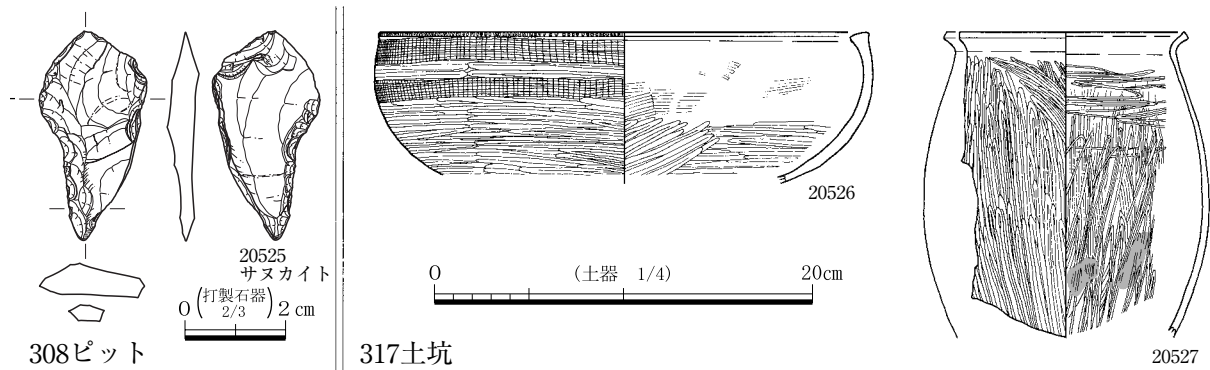


図124 03-1-2区第8面308ピット、317土坑出土遺物

口縁端部には刻み目、その下に沈線3条がひかれる。内外面ともに煤が付着する。文様からはⅠ様式後半に位置づけられる。

20523（写真図版89）は鋤柄であろう。頭部をT字型に削りだしたもので、アカガシ亜属を用いる。下端を欠き、残存長57.2cm、径8.4cm、頭部幅8.4cmを測る。

20524は脚付きの容器か。残存で長さ17.1cm、短軸11.1cm、高さ6.1cm。破損・変形が著しく判然としないが、平面形は一端をカットした紡錘形、短軸の一方が尖った形に復原される。容器部分は深く、口縁は屈曲部ごとに弧を描いて波状口縁状となる。脚部は、現状で底部より短くなるため、さらに長く伸びていたものと考えられる。ヤマグワの横木取りで製作される。

305～309ピット（図123・写真図版34） 調査区南部において、ほぼ南北に並ぶ。北の305ピットから芯々距離1.2m、1.6m、0.8m、2.1mをもって南の309ピットまで並ぶ。305ピット（写真図版34）・306ピット（写真図版34）・308ピットの埋土には炭化物が含まれる。これらのうち305ピットからサヌカイト剥片2点が、また308ピットから弥生土器16片（うちⅢ様式1片）、石錐1点、サヌカイト剥片2点、計19点出土した。

図124-20525は308ピット出土の石錐。横長の剥片の一辺を調整し、錐部を作り出す。錐部には回転痕が認められ、まるく磨り減っている。

316・317・319・320土坑と312～315・318ピットは、第6面252大溝の底面で検出した。これら4基の土坑と6個のピットは、埋没状況からは第6面以前であり、レベル的には第11面ないし第11-2面に近い。本来の掘り込み面は確定しがたいが、現地での検出に合わせてこの第8面に掲載しておく。個々の遺構については表9を参照されたい。

図124-20526・20527は317土坑出土。20526は高杯の杯部。口縁は内湾して、端部を肥厚させる。口縁端部には刻み目がめぐり、杯部上半には簾状文が2条施される。Ⅳ-1～3様式（Ⅲ-b～Ⅳ-a段階）。この20526は第6面252大溝南法面出土の破片と接合している。20527は甕。口縁端部はやや肥厚し、最大径は胴部にある。ミガキの方向は基本的に縦だが、内面口縁下では横に施される。Ⅲ-1様式。外面には煤が付着し、内面にも炭化物が残る。

落ち込みを4か所で検出した。形状の違いこそあれ、いずれも溝の多くと同様に東北東-西南西に主軸方向をもつ。

284落ち込み 調査区東部やや北に位置する。282高まりと287高まりにはさまれ、長さ28m以上、幅およそ5～7mと広い範囲に広がる。深さは8～34cm。出土遺物は、弥生土器416片（うちⅠ様式21片、Ⅰ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式25片）、転用土製円板3点、削器1点、楔2点、サヌカイト剥片3点、計425点



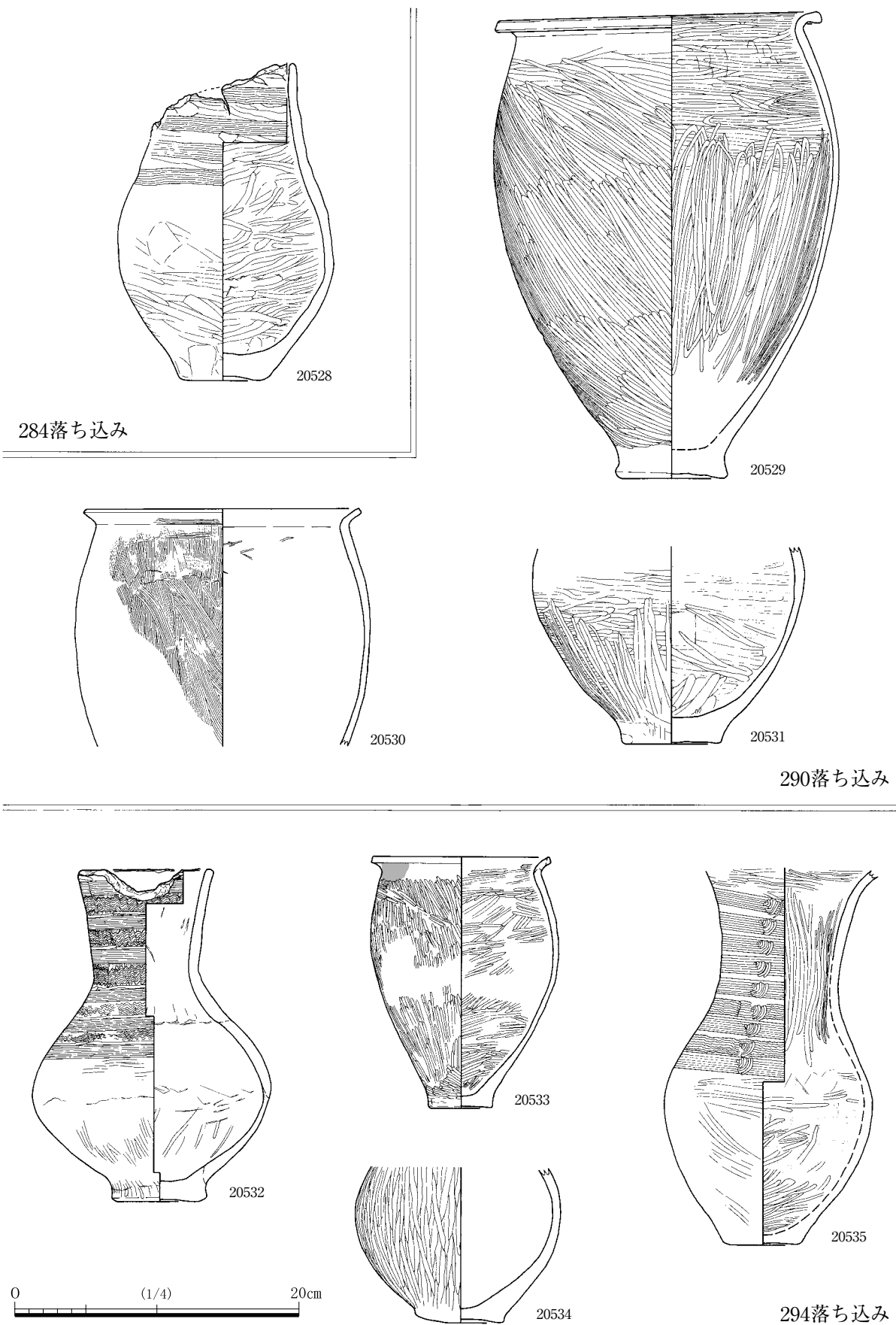


図125 03-1-2区 第8面284・290・294落ち込み出土土器

である。

図125 - 20528 (写真図版90) 長頸の広口壺。口縁部は斜めに打ち欠かれ、破損部が磨耗していることから、水差形にして再利用しているものと考えられる。頸部にめぐるクシ描き直線文からⅡ様式に位置づけられる。図の右側、頸部が多く残る部分から体部にかけて、赤変する。

290落ち込み 調査区北西部に位置する。289高まりと295高まりにはさまれ、長さ約15m、幅6～8m程度に広がる。深さは中央部で70cmと深い。出土遺物は弥生土器278片(うちⅠ様式13片、Ⅱ様式25片)、転用土製円板5点、石庖丁未成品1点、計284点である。

図125 - 20529 (写真図版90) は甕。口径22.3cm、器高32.8cmの大形品。胴部は張り、口縁は拡張傾向にある。内外面ともに丁寧にミガキが施されるいわゆる河内型の甕である。内外面ともに煤が付着し、外面体部上半は一部器面が剥離する。Ⅲ様式に位置づけられる。20530も甕。最大径は胴部にあり、胴部の調整はケズリ後ハケを施す。Ⅱ様式末～Ⅲ様式であろう。

20531は壺の体部から底部。内外面は単位の大いミガキが粗く施される。Ⅱ様式か。

292落ち込み 調査区中央やや北に位置する。平面不整楕円形だが、やはり東北東-西南西を主軸とする。長径8.5m、幅4.0m、深さ54cm。落ち込み底の東寄りに293土坑がある。292落ち込みからは、弥生土器の底部1点のみ出土した。

294落ち込み 調査区西部、296高まりの上面に位置する。長さ約15m以上、南西側では幅2.2～2.5mだが、北東側では3.5mに広がる。深さは36cm。出土遺物は弥生土器149片(うちⅠ様式5片、Ⅱ様式16片)、転用土製円板1点、サヌカイト剥片3点、計153点出土した。

図125 - 20532 (写真図版90) は壺。口縁部は打ち欠かれて片口状になる。もとは、口縁部が水平方向にひらく撰津系の長頸壺と考えられる。頸部から体部にかけてクシ描き直線文と、波状文が交互に施される。胎土は白っぽく、長石やチャートを多く含む。Ⅲ - 1～2様式。

20533 (写真図版90) は復原口径12.3cm、器高17.7cmの小形の甕。口縁端部はやや肥厚する。内外面ともにミガキ調整で、最後に底部に横ナデが施される。Ⅲ - 1～2様式。内外面ともに胴部中央が帯状に黒変し、一部赤変する。外面胴部上半には器面の剥離する部分もある。

20534は壺の体部。球形の体部には縦方向のミガキが目立つ。Ⅱ様式か。外面は煤が付着する。

20535 (写真図版90) は長頸壺。頸部下端に最小径をもち、口縁部に向けて緩やかに広がる。文様は、頸部から体部上半にかけてクシ描き直線文とゆれの少ない波状文がひかれ、扇形文をその直線文あるいは波状文上の3方向におく。Ⅱ様式でも後半に位置づけられよう。なお、頸部の破損部には、わずかに磨耗している部分が確認される。二次的に利用していた可能性もあろう。

この第8面でも第6面以下と同様に、溝間の盛土による部分を図117のとおり280・281・282・286・287・289・295・296・298・299高まりとして10か所に番号を付け、第8層の遺物を高まりごとに取り上げた。

#### (17) 03 - 1 - 2区第8層の遺物 (図126～128・写真図版90～92)

03 - 1 - 2区の第8層全体から出土した遺物は、弥生土器5865片(うちⅠ様式409片、Ⅰ～Ⅱ様式340片、Ⅱ様式366片、Ⅲ様式2片)、転用土製円板14点、土錘1点、石器34点、石器未成品2点、サヌカイト剥片83点、礫6個、木器2点、木杭1本、木片20点以上、流木5点、炭1点、焼土塊1点、計6035点と骨・歯である。

それらを第8面で名づけた高まりの範囲ごとにまとめると次のようになる。

調査区北部、第8面280・281高まり内からは、弥生土器77片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式2片）、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、木器2点、計81点出土した。

281高まりから出土した図126-20536は部材か。2辺を欠損する厚み0.9cmの板材。隅には径約5mmの貫通孔をもつ。コウヤマキの板目材。

調査区北西部の第8面282高まり内からは、遺物が出土しなかった。

調査区北部東寄りの第8面286高まり内からは、弥生土器ばかり98片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式7片）が出土した。

図126-20537は甕。口縁部は強めに屈曲し、器壁は薄い。全面が赤変し、器面が荒れているためわかりにくい。斜め方向のミガキが一部確認される。Ⅲ様式初頭であろう。

20538（写真図版90）は鉢。深い椀状で、体部はやや外傾して立ち上がり、口縁端部はまるみを帯びる。体部上半にはクシ描き直線文と扇形文によって擬似流水文を描いている。Ⅱ様式に特徴的な器形である。ほぼ全面が赤変する。

調査区北西部の第8面287高まり内からの出土遺物は、弥生土器61片（うちⅠ様式2片、Ⅰ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式4片）、打製石剣1点、削器1点、計63点である。

図126-20539（写真図版91）はサヌカイト製の打製石剣。先端側の大きい剥離によって厚みが減り、先端は一方がやや弧状にふくらみ、対称形とはならない。

調査区北東部の第8面289高まり内からは、弥生土器224片（うちⅠ様式10片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式19片）、削器1点、計225点出土した。

調査区東部やや北の第8面295高まり内からは、弥生土器815片（うちⅠ様式47片、Ⅰ～Ⅱ様式31片、Ⅱ様式46片）、転用土製円板3点、石錐未成品1点、削器2点、サヌカイト剥片6点、砥石1点、計828点出土した。

図126-20540は長頸壺。頸部にクシ描き直線文を8条ひき、その間の空間に扇形文を飾る。頸部はゆるやかに屈曲する。Ⅱ様式。

調査区中央部から西南西にのびる第8面296高まり内の出土遺物は、弥生土器738片（うちⅠ様式60片、Ⅰ～Ⅱ様式34片、Ⅱ様式56片）、転用土製円板2点、打製石剣1点、削器2点、サヌカイト剥片11点、大礫2個、木片3点、計759点である。

図126-20541は打製石剣の破片。断面紡錘形で剥離痕は滑らかに連続する。

第8面298高まりは、調査区中部やや南側にあり、東北東-西北西を主軸とし、第6面250高まりの下層にあたる。この高まり内からの出土遺物は多く、弥生土器2804片（うちⅠ様式236片、Ⅰ～Ⅱ様式182片、Ⅱ様式164片、Ⅲ様式2片）、転用土製円板3点、土錘1点、石錘1点、石庖丁2点、扁平片刃石斧1点、磨石2点、砥石3点、叩き石1点、打製石剣3点、削器3点、楔3点、サヌカイト剥片37点、礫4個、木片2点、焼土塊1点、計2871点と骨および小木片多数である。

そのうち第8面で検出した323木棺周辺で木棺よりも層位的に先行するものは、弥生土器744片（うちⅠ様式48片、Ⅰ～Ⅱ様式45片、Ⅱ様式37片）、石錘1点、磨石1点、砥石2点、楔1点、サヌカイト剥片5点、中礫2個、小礫1個、計757点と小木片多数である。

図127-20542～20544は323木棺周辺の包含層から出土したものである。20542は底部。胎土粗く、Ⅰ～Ⅱ様式か。20543（写真図版91）は鉢の底部か。粘土を指で引き出して上げ底状になる。全体に磨

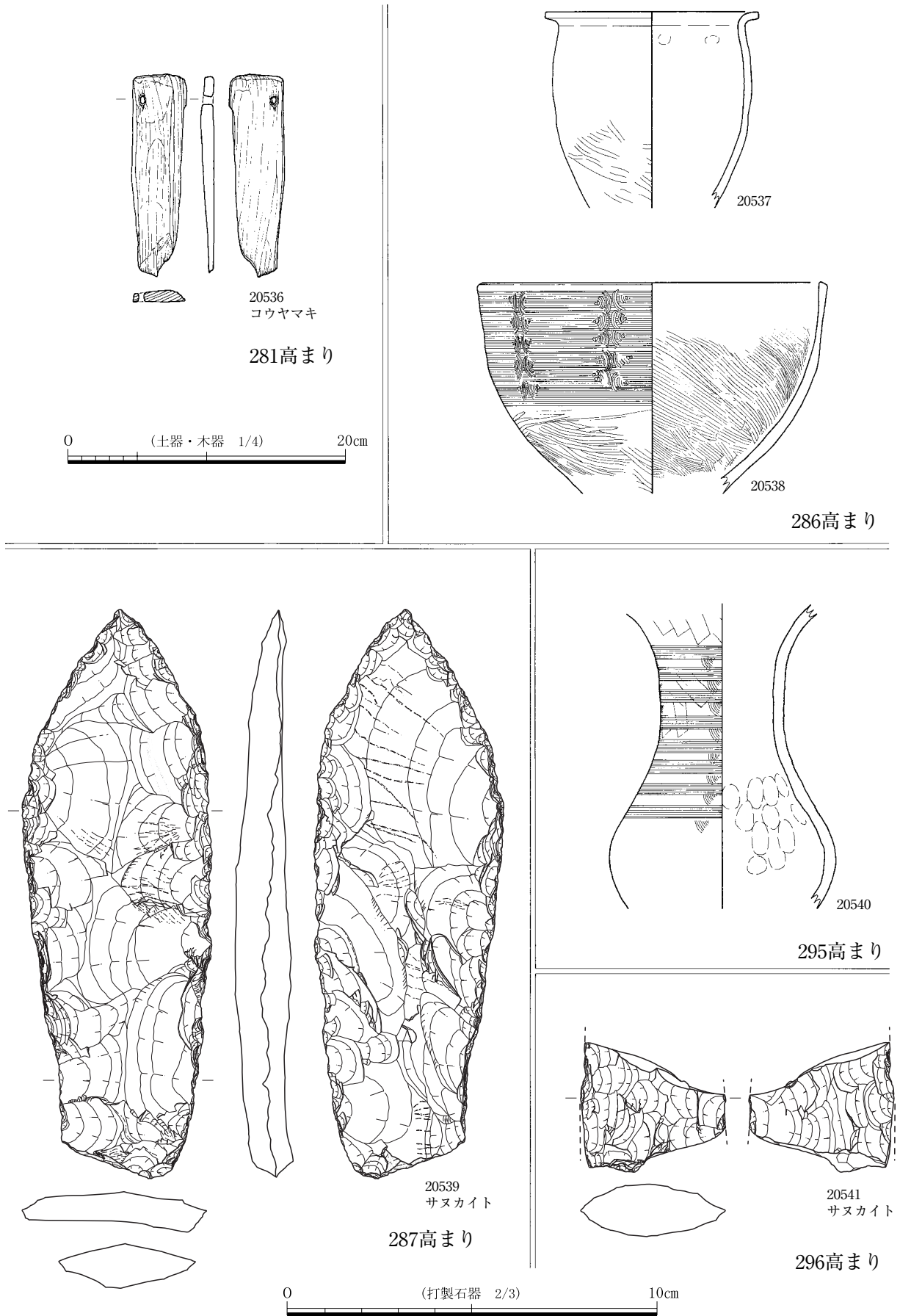


図126 03-1-2区 第8面281・286・287・295・296高まり出土遺物

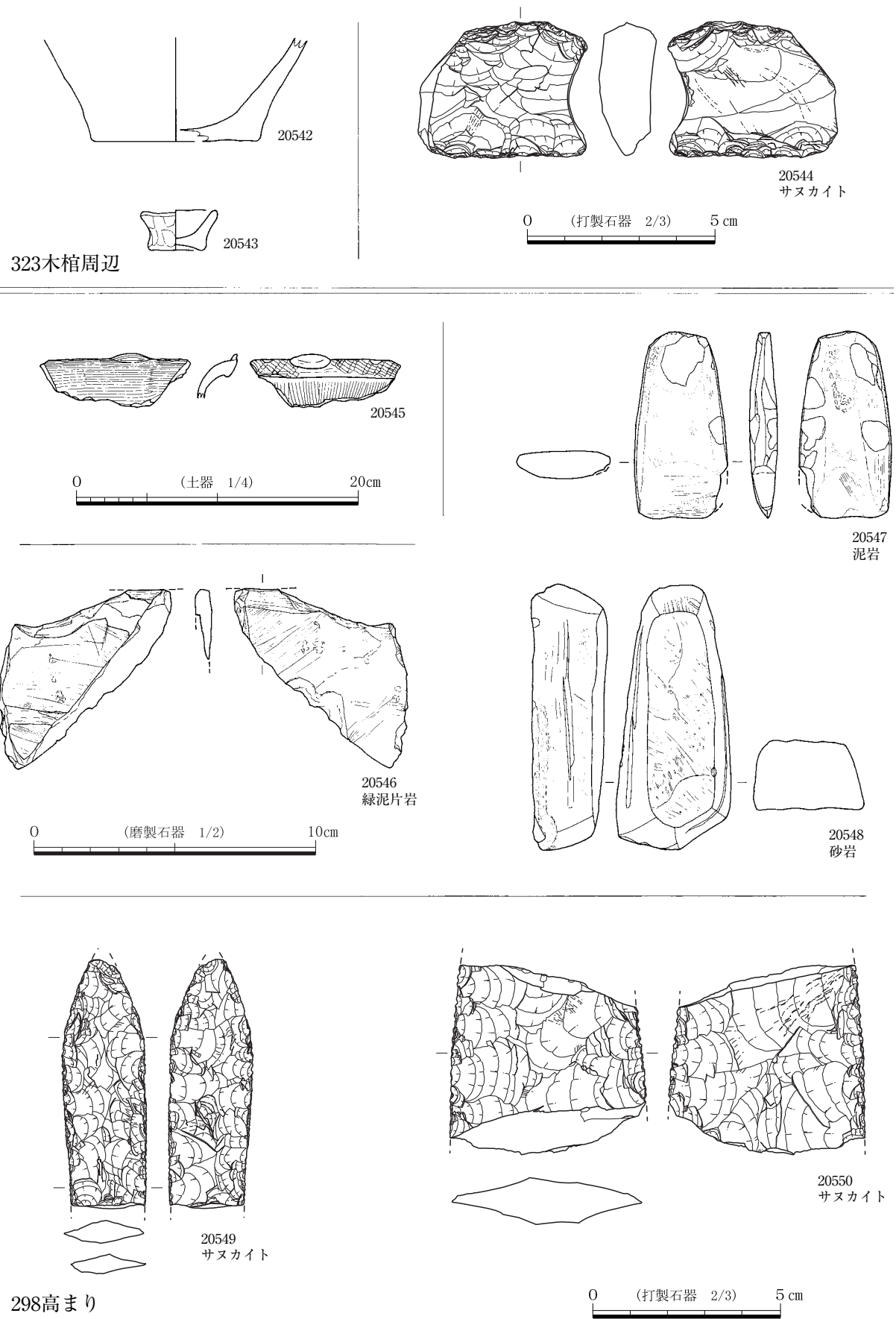


図127 03-1-2区 第8面323木棺周辺、298高まり出土遺物

耗し、特に口縁部は欠けて磨耗しているため、鉢等を転用してミニチュアとして利用した可能性もある。長石の多い胎土でⅡ様式か。

20544は楔。対面する辺が潰れて階段状に剥離する。大きさから石剣を転用した可能性もあろう。

以下は298高まりの出土である。20545（写真図版91）は甕の口縁。口縁端面は拡張して、ハケ原体を横方向に施すが、強いとめによって刻み目状の溝が入る。端部には、押捺によって突起が作られる。ハケ調整は外面縦方向、内面横方向に施される。近江から山城系で、Ⅱ様式後半に位置づけられる。

20546は大型石庖丁の破片か。一端が直線的に研磨されており、石庖丁とすれば背部になる部分と考えられる。緑泥片岩製。20547は扁平形石斧。よく研磨され、基部側には横方向の研磨痕が目立つ。20548は砥石。側面には筋状の研ぎ痕が残る。

20549・20550（写真図版91）はサヌカイト製の打製石剣。いずれも側縁を鋸歯状に加工する。

調査区南西部の第8面299高まり内からは、弥生土器820片（うちⅠ様式41片、Ⅰ～Ⅱ様式72片、Ⅱ様式60片）、転用土製円板5点、打製石鏃1点、削器4点、楔1点、サヌカイト剥片26点、木製ヤス8点、同未成品7点、流木5点、炭1点、計878点と骨が出土した。

また、特定の高まりに属さない第8層部分から、弥生土器228片（うちⅠ様式6片、Ⅰ～Ⅱ様式4片、Ⅱ様式8片）、石製紡錘車未成品1点、サヌカイト剥片2点、木杭1本、計232点と骨・歯が出土した。

図128 - 20551（写真図版91）は復原口径31.4cmを測るやや大形の壺。口縁端部は上下に肥厚し、クシ描き直線文が横方向と、それとほぼ直交して縦方向にも入って格子状となる。縦方向の直線文が施される間隔は一定しておらず、ほぼ隙間なく施される部分もある。Ⅱ - 3様式。

20552（写真図版91）は壺の体部。胴部最大径は上半にあり、復原で35.2cmを測る。頸部を欠くが、有段口縁の広口壺であろう。体部にはクシ描き流水文が描かれ、最下段は一見波状文風のとめの幅の狭い簾状文が施される。Ⅱ様式末に位置づけられるか。

20553・20554は蓋。20553（写真図版92）は中央に突起を2つもち、4条一組の沈線が放射状に飾られる。孔は一部残存するのみ。20554（写真図版92）は2孔一対の紐孔が確認できる。内面中央にやや煤が付く。いずれもⅠ様式であろう。

20555（写真図版92）は鉢。浅い椀状の器形で、端部まるく、ミガキが密に施される。内面全体が赤変し、底から4分の3ほどの器面が荒れる。外面も一部荒れるが内面ほどではない。内容物を入れたまま被熱したものか。20556（写真図版92）も鉢。体部は内湾し、底部はやや上げ底になって、2孔一対の穿孔が施される。体部には上半15条、下半19条の沈線文が2帯めぐる。Ⅰ - 4様式であろう。

20557はサヌカイト製の打製石鏃。断面形は扁平で、調整は粗い。

20558～20565（写真図版92）は木製のヤス。いずれも径0.7cm前後で、残存長6.2～15.5cm。断面形は円形のものとも面をもつものがあり、加工は全面におよぶ。すべてモミ属である。

以上が、第8層出土の遺物である。

さらに、第8層以下のサブトレンチから、弥生土器97片（うちⅠ様式10片、Ⅰ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式8片）、サヌカイト剥片1点、計98点が出土した。

図128 - 20566は石庖丁の破片であろう。背部は残るが、両端と刃部を打ち欠いている。紡錘車を意図したものか。緑泥片岩製。

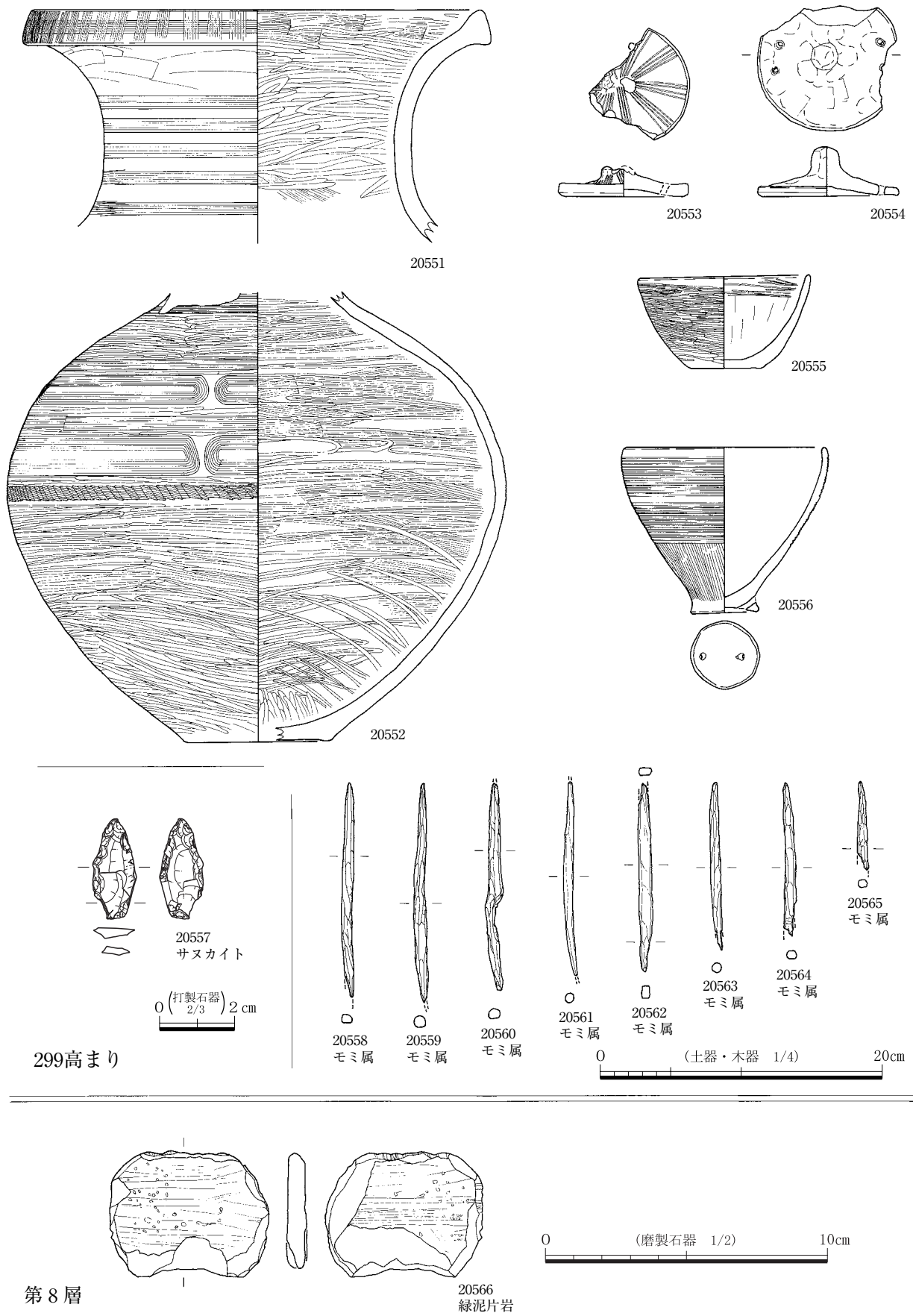


図128 03-1-2区第8面299高まり、第8層出土遺物

## (18) 03 - 1 - 2 区第9面の遺構と遺物 (図129~169 写真図版35~43・93~103)

第8層の粗砂混じり黒色土を除去した面である。第9面も黒色の盛土層を基盤とする。

面の高さはT.P.+1.3~1.9mで、第8面同様に調査区南東側が高い傾向にある。複数の比較的規模の大きな溝が東北東から西南西にはしり、きわめて起伏に富んだ景観を呈する点も第6面や第8面と同様である。遺構として、溝10条、木棺6基、土坑7基、ピット3個、落ち込み5か所、高まり8か所、計39か所(遺構番号324・325・327~348・359~363・365~370・421・422・424・1015)と03 - 1 - 3区から続く溝2条(遺構番号1382・1397)を調査した。さらに、第9層中で木棺を8基(遺構番号420・423・425~430)検出した。

第9面の遺構に先立って、調査区北東部の329高まり上面(20567・20569)や331高まり上面(20568・20570)から出土(写真図版36)した土器を報告する。

図129 - 20567(写真図版93)は無頸壺。球形の体部上半をクシ描き直線文と扇形文による擬似流水文で飾り、下端を波状文でしめる。外面、底部近くはケズリが入る。

20568(写真図版93)は無頸壺あるいは鉢。体部は内湾し、浅く、雑なクシ描き直線文2条が施される。口縁端部の処理も雑で歪みがあるが、成形時の粘土が内外面にはみでているので転用品ではない。なお、20567も同様に成形時の粘土が内面に及ぶ。

20569(写真図版93)は鉢。体部は内湾し、口縁は面をもちつつある。やや歪みのあるクシ描き直線文3条を口縁直下に飾るもの。以上3点はⅡ様式である。

20570は壺口縁。頸部には沈線3条が間隔をあけてめぐる。Ⅰ - 3様式に位置づけられよう。

溝を11条検出した。うち1382・1397溝の2条は03 - 1 - 3区調査の際に付けた遺構番号である。

北から順に、比較的規模の大きい359・328・330・337・1382溝と03 - 1 - 3区から続く1397溝の計6条は、ほぼ平行して東北東 - 西南西を主軸とする。

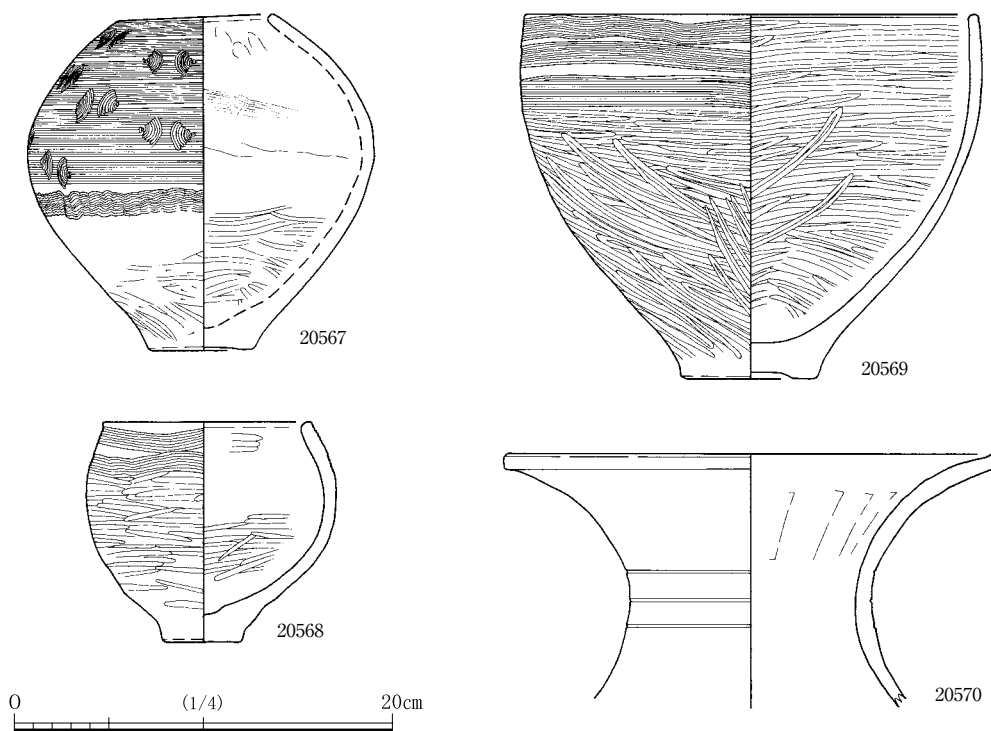


図129 03 - 1 - 2 区 第9面上出土土器



第5章 03-1-2区の調査成果



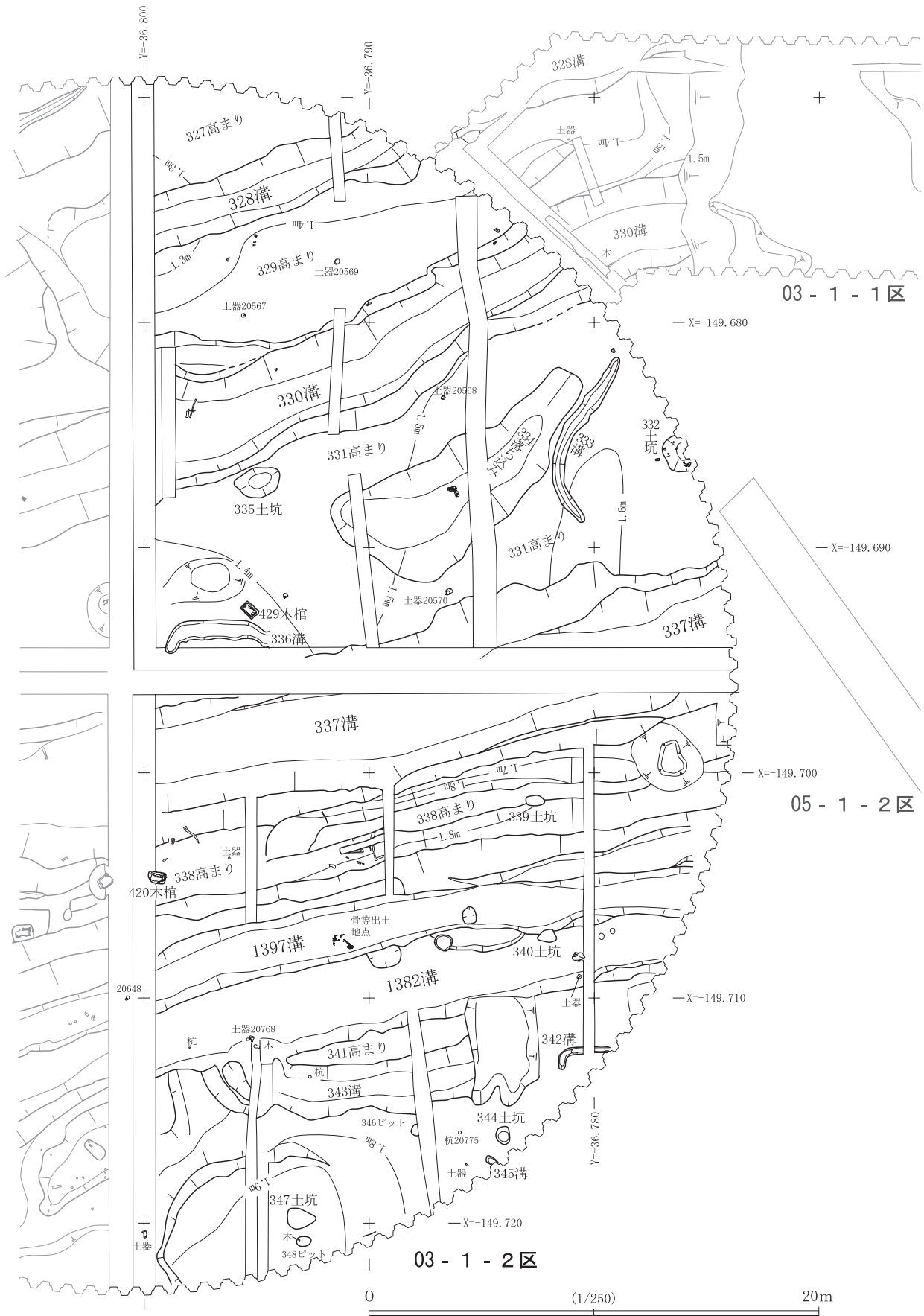


図130 03-1-2区 第9面

359溝 調査区北部に位置する。第8面279溝の下層、第10面432溝の上層にあたる。幅420cm以上、深さ77cm。埋土は黄褐2.5Y5/4粗砂。出土遺物は弥生土器32片（うちI様式4片、I～II様式1片）。

328溝 359溝の数m南に平行する。第8面283溝の下層、第10面434溝の上層にあたる。南西側で360・363高まりにさえぎられ、調査区を貫通してはいない。幅220～320cm、深さ51cm。出土遺物はない。

330溝 第8面288溝の下層、第10面441溝の上層にあたる。当03-1-2区だけでなく、03-1-1区330溝、03-1-3区の1377溝と一連の溝である。幅340～520cm、深さ66cm。出土遺物は、弥生土器60片（うちI様式4片、I～II様式6片、II様式5片）、打製石剣1点、サヌカイト剥片1点、木製高杯1点、計63点である。

図131-20571はサヌカイト製の打製石剣。対称形にはならず、一方が張って厚みを残す。側縁は鋭く、先端を欠く。

20572（写真図版93）は短脚の高杯。脚部は低小で脚台付きの椀と呼ぶ方が良いかもしれない。杯部は深く、底部からやや内湾しつつ外上方にのびる。脚柱部は短く真っ直ぐにのび、屈曲して裾部へ小さくひろく。復原口径27.0cm、復原底径6.8cm、器高12.2cm。ヤマグワの横木取り。一木式である。

337溝 調査区中央部を東北東-西南西に流れる。第8面297溝の下層、第10面445溝の上層にあたる。03-1-3区の1409溝に連なる。幅490～810cm、深さ79～152cm。埋土はオリーブ5Y5/4細～粗砂が ラ

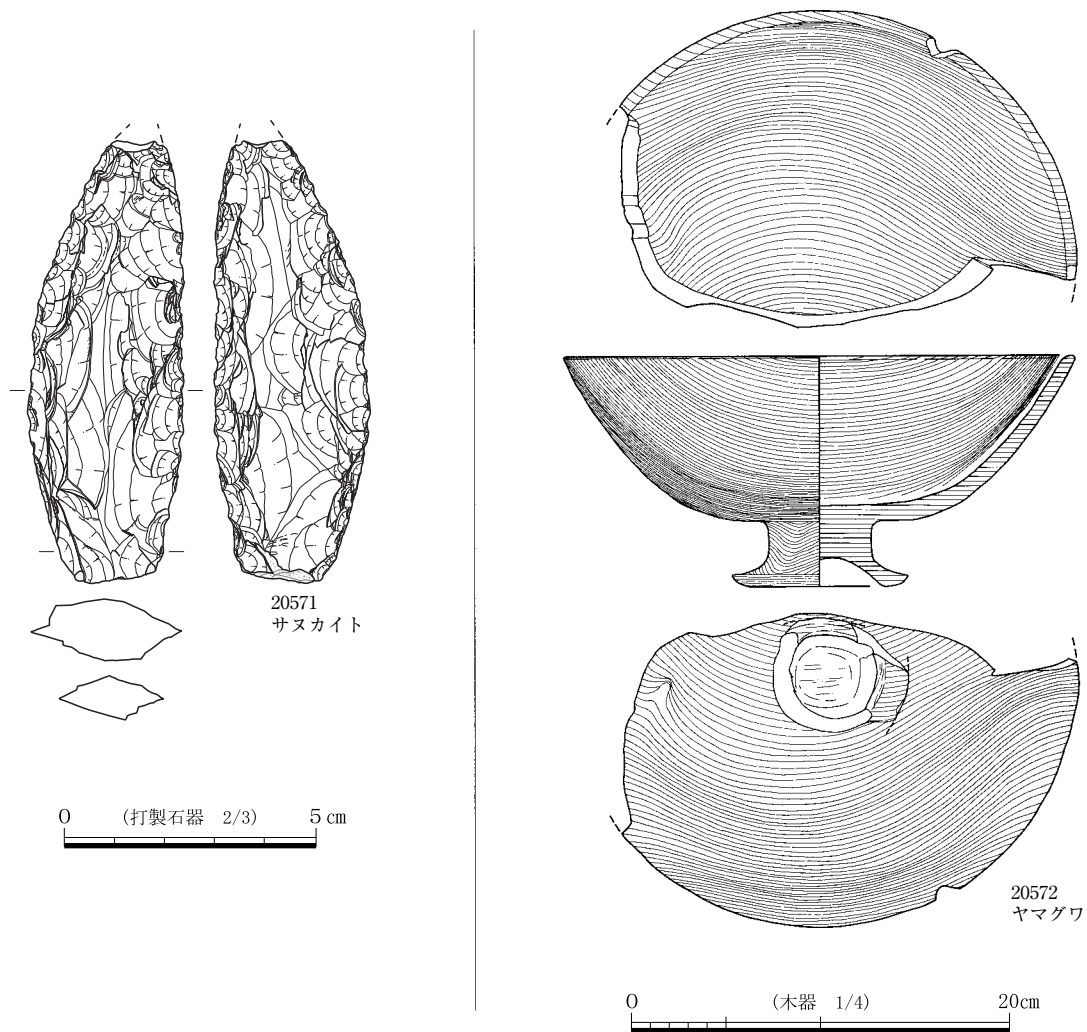


図131 03-1-2区 第9面330溝出土遺物

ミナを形成する。上層粗粒化して粗砂～中礫を主体とする（図43・44、N15・N'）。

337溝の出土遺物は多く、弥生土器3589片（うちⅠ様式265片、Ⅰ～Ⅱ様式258片、Ⅱ様式256片）、転用土製円板8点、石庖丁3点、石庖丁未成品1点、柱状片刃石斧1点、太型蛤刃石斧1点、石錘1点、磨石1点、砥石3点、叩き石2点、打製石剣1点、石小刀1点、石錐1点、打製石庖丁1点、削器3点、サヌカイト剥片35点、礫2個、木・木製品23点、トチの実1点、マクワウリの仲間の種子2点、焼土塊1点、計3681点と骨・歯である。

図132 - 20573～20580はⅡ様式の弥生土器。20573は壺。口縁端部は厚く垂下して、下端を鋸歯状に作る。端面には幅の狭いクシ描き波状文を密に飾る。Ⅱ様式末か。上面は赤変し、煤が付着する。20574は壺の口縁部。端部は外下方に折れて、布目のある刻み目が施される。頸部はクシ描きによる擬似流水文で飾られる。Ⅱ - 2～3様式。20575は口縁端部がやや垂下して端面に波状文を飾る。Ⅱ - 2様式に位置づけられよう。

20576は細頸壺。頸部はやや外湾してひらき、口縁端部に棒状の原体による刻み目を施す。頸部にはクシ描き直線文がめぐり、内外面ともに口縁から2条目まで煤が付着する。Ⅱ - 2～3様式。

20577・20578は無頸壺の体部であろう。いずれも縦方向の施文をもつ。20577はクシ描き直線文が横位に2帯あり、その間にも縦位の直線文が入る。20578（写真図版93）は縦方向の密な波状文と、その下の横位の直線文が見られる。波状文の間にはミガキが施される。いずれもⅡ様式であろう。

20579は甕。最大径は体部にあり、口縁端部は面をもつ。内外面ともにハケ調整だが、内面にはまばらなミガキが施される。Ⅱ～Ⅲ様式であろう。20580は甕あるいは鉢。頸部は屈曲し、体部にはクシ描き直線文3条。内外面ともに密なミガキが施されるが、赤変して外器面が剥離する。Ⅱ様式。

20581～20587は全体としてⅠ - 3～4様式に位置づけられる。20581は壺。頸部には沈線7条以上が間隔をあけてめぐり、内外面ともに工具痕がはっきり残る。20582は壺。口縁部はひらき、頸部には貼り付け突帯がめぐり、やや古くⅠ - 2～3様式に位置づけられよう。20583は壺。刻み目のある貼り付け突帯を縦位にももつもの。Ⅰ - 4様式か。

20584（写真図版93）は壺の体部。直線文と弧文によって、木葉文を変形させた沈線文が描かれる。やや古くⅠ - 1～2様式であろう。

20585は把手付きの鉢か。口縁直下の沈線上に、小さな把手を貼り付ける。Ⅰ - 3～4様式であろう。

20586（写真図版93）は甕。底部下面は平坦で布目がはっきりと残っている。外面は赤変し、内面には炭化物が残る。

20587（写真図版93）は脚部。中実で裾のひらきは小さく、一對の穿孔が施される。杯部に残った沈線は、上方へ弧を描いており、流水文となるだろう。ミガキが脚部下面にまで丁寧な施されるのに比べ、杯部内面は未調整で、全体的に薄く赤色顔料が残っている。台付鉢・壺の可能性もあろう。なお、脚部には紡錘形の圧痕が残るが、釉にしては深さがあり、断定できなかった。Ⅰ様式。

図133 - 20588～20591は石庖丁。すべて緑泥片岩製である。20588は平面長方形で、おそらく両刃であろう。刃部は欠損、あるいは打ち欠かされている。20589は折れた端部を磨いている。石斧への転用を意図したものか。20590は両刃のもの。20591は剥離整形段階の未成品である。現状では、直線刃半月形を志向していたと考えられるが、短く終わる。

20592は結晶片岩製の柱状片刃石斧。刃部から基部を欠く。残存長4.48cm、残存幅3.04cm、厚み1.55cmを測る。刃部は明瞭である。

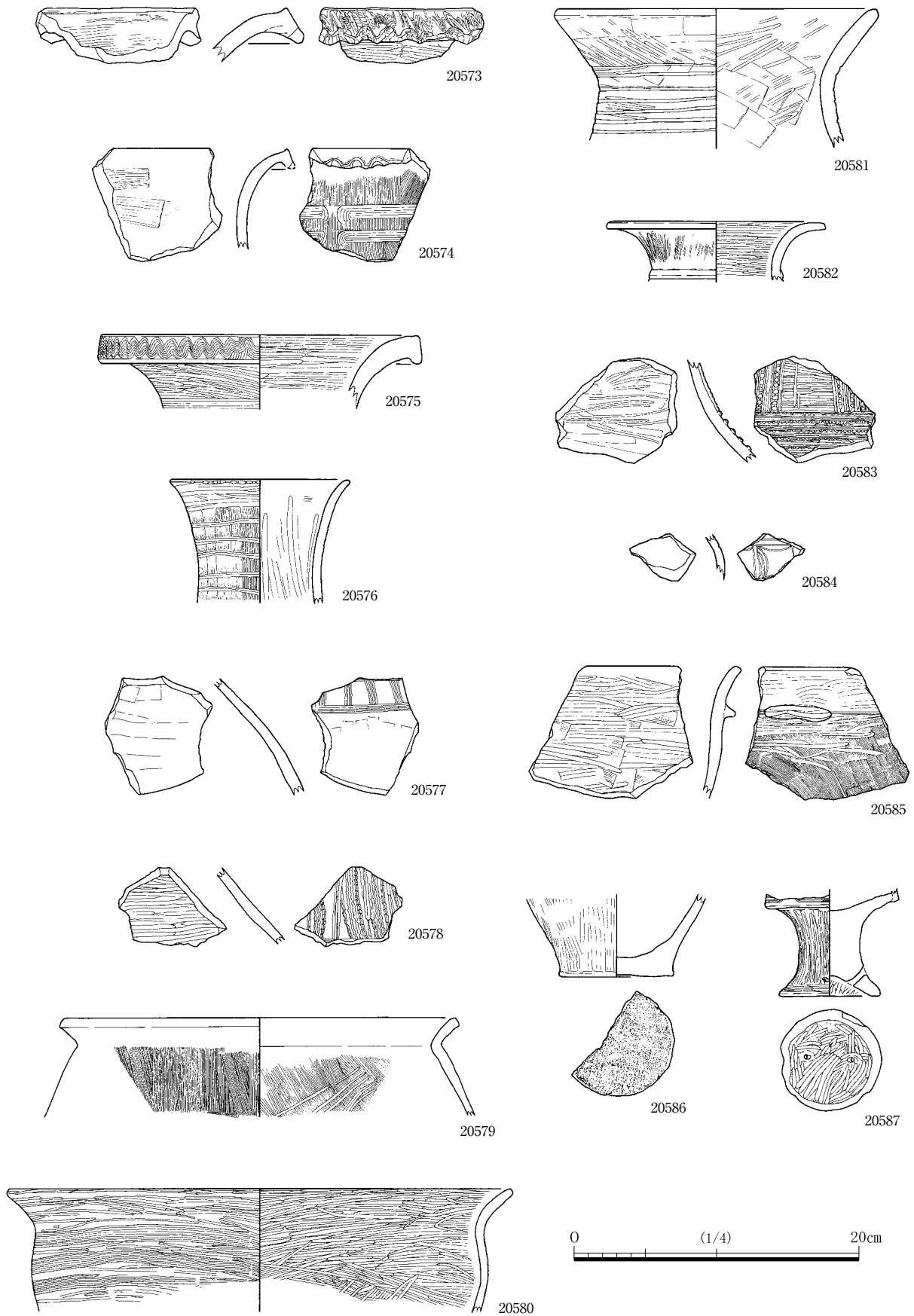


図132 03-1-2区 第9面337溝出土遺物(1)

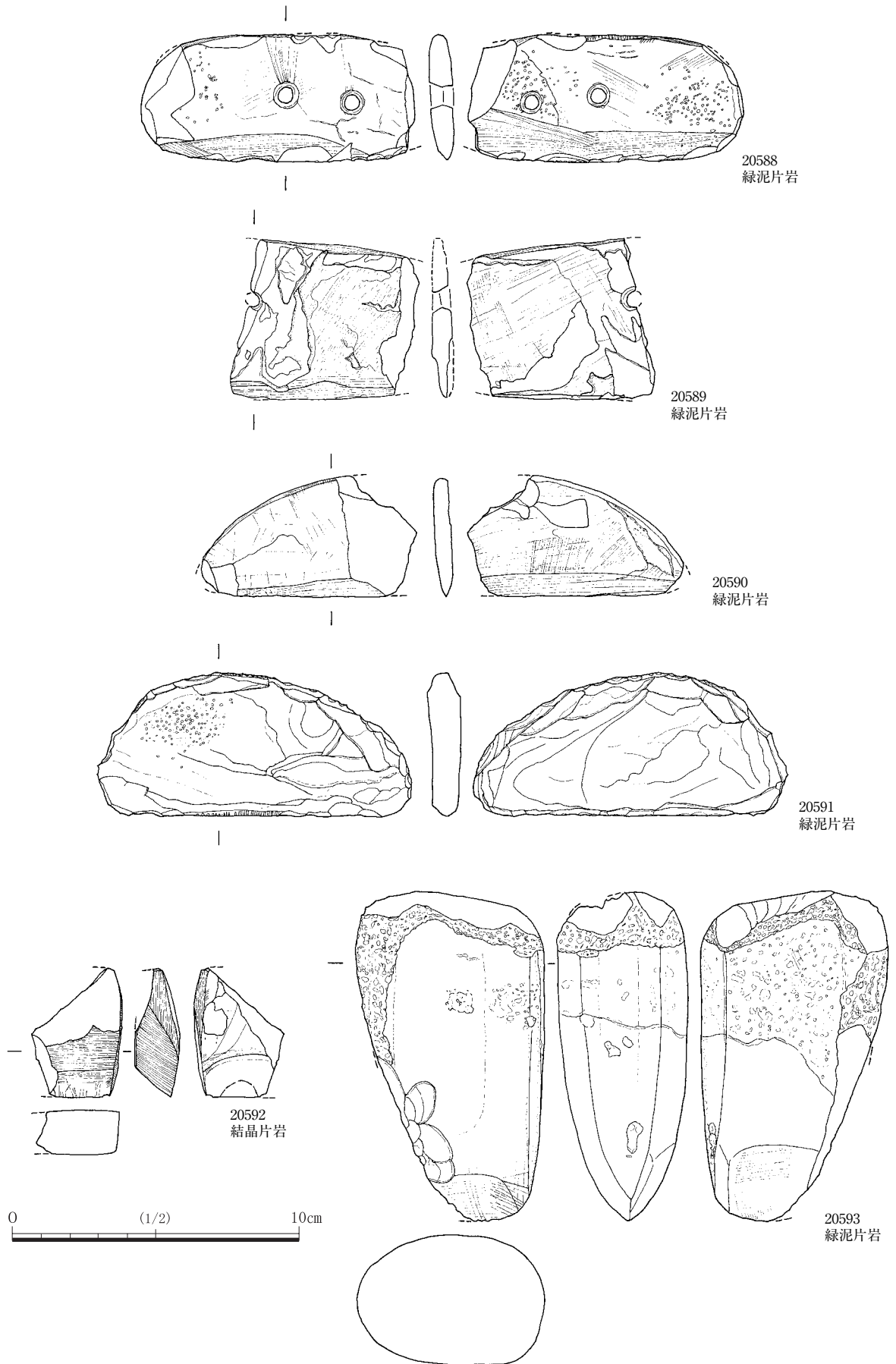


図133 03 - 1 - 2区 第9面337溝出土遺物 (2)

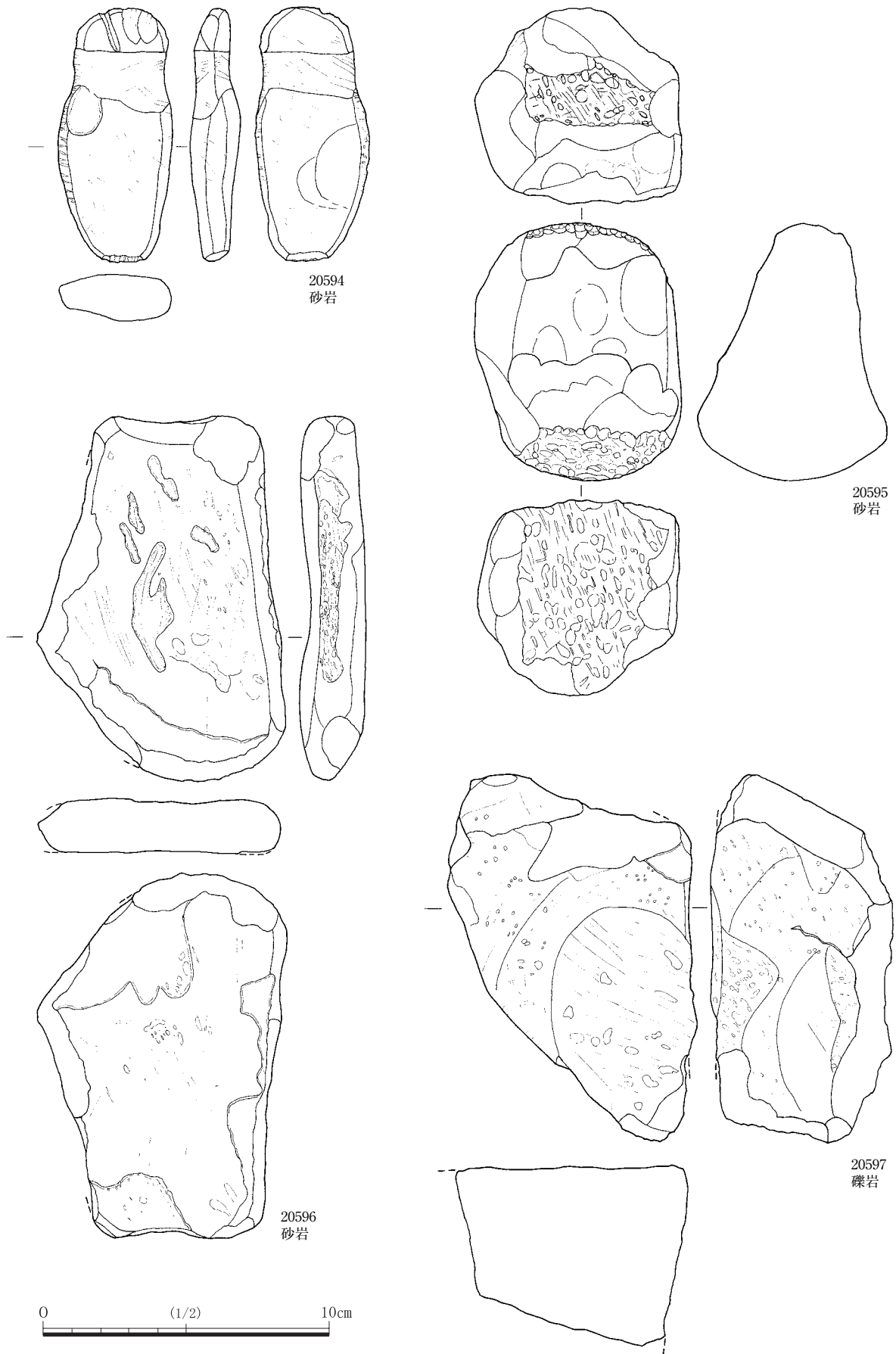


図134 03-1-2区 第9面337溝出土遺物(3)

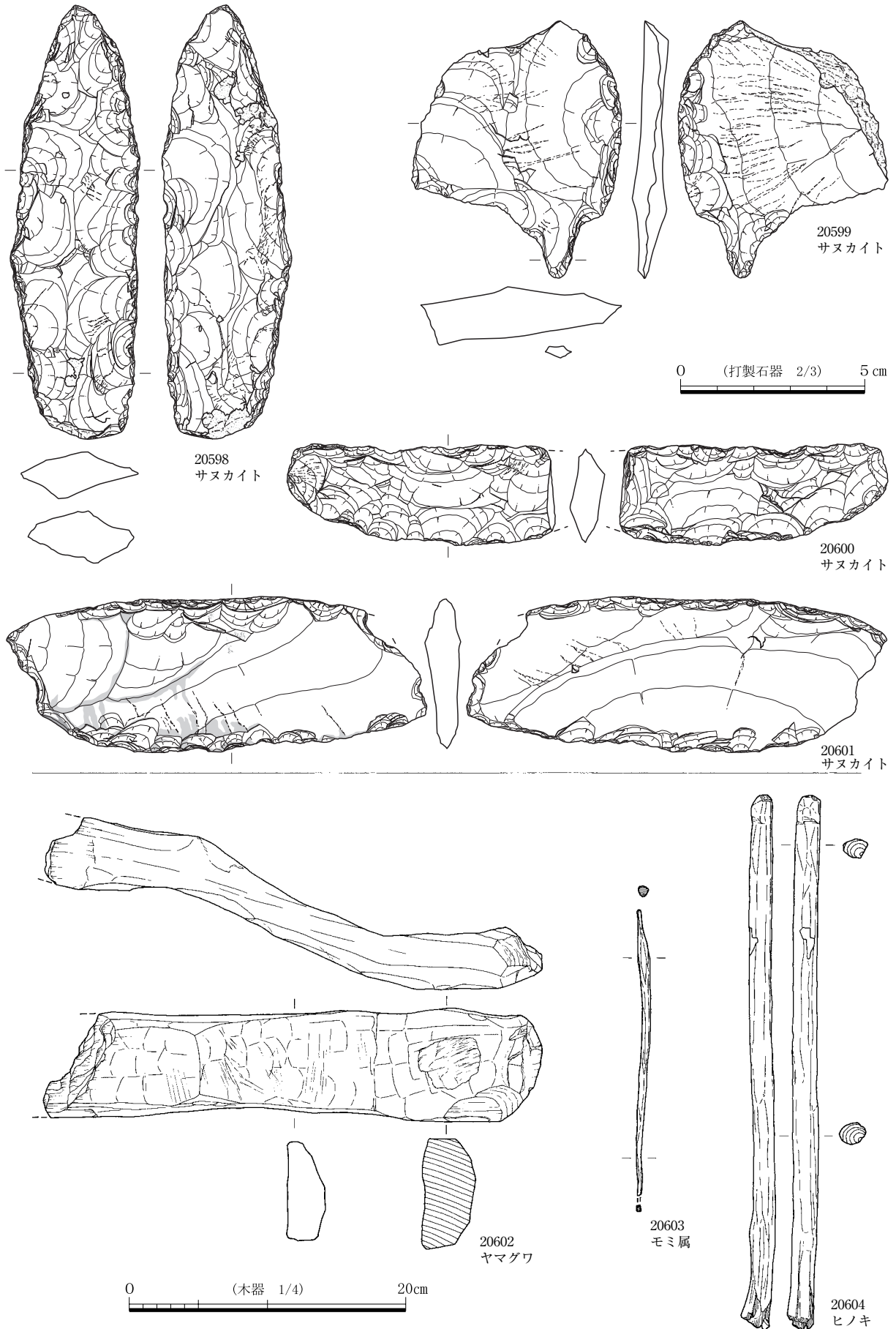


図135 03-1-2区 第9面337溝出土遺物(4)



20593（写真図版94）は大型蛤刃石斧。基部に装着痕が残る。刃部を欠損し、基部には敲打痕が著しい。叩き石として転用したものか。緑泥片岩製。

図134 - 20594は石錘であろう。砂岩製で、基部がくびれて浅い溝がめぐる。重さは74.8g。20595は叩き石。円礫の上下に敲打痕が顕著である。砂岩製。

20596・20597は砥石。20596は砂岩。周囲を敲打しており、面積の広い部分を砥面として利用する。20597は礫岩製。

図135 - 20598～20601はサヌカイト製の打製石器。20598（写真図版94）は打製石剣。完形で、基端と先端部に原礫面を残す。側縁はあまり鋭くなく、基部は刃を潰している。長軸11.78cm、短軸3.58cm、厚み1.4cm。

20599は石錐。錐部だけでなく、一方の側縁にも加工がある。

20600は長辺の両側に調整がおよぶため、石小刀とした。しかし、残存長7.27cm、短軸2.79cm、厚み1.20cmと他例より大形であり、未成品、あるいは削器の可能性を残す。

20601（写真図版94）は打製石庖丁か。横長の剥片を用い、平面形は平行四辺形に近い。両端には挟りが入り、両面ともに稜線に光沢（図中アミカケ部分）をもつが、刃部にとどまらず、全体的に稜があまり。磨耗によるものか。サヌカイト製で長軸11.36cm、短軸4.30cm、厚み1.1cm、重さ64.3g。

20602（写真図版94）は用途不明品の木器。残存長36.0cm、短軸8.2cmで2.5～3.9cmの厚みのあるしっかりした作り。側面から見ると、2段に屈曲して一端を欠損する。断面形は不定な蒲鉾形で、一面は平らに加工される。この平坦面には、材の端にあたる1段目、中央部に擦れたような丸い凹みと、長軸にほぼ直交する擦痕が見られる。加工痕も全体にはっきり残っており、何らかの未成品か。形態からは把手の可能性も指摘できよう。ヤマグワの柁目材を用いる。

20603（写真図版92）はヤス。径は0.7cm前後で残存長15.6cmを測る。樹種は他の遺構で出土しているものと同様、モミ属と鑑定されている。

20604（写真図版94）は棒状の材。心持ち材で、一端に切れ込みを入れて頭部を作り出す。残存長38.5cm、径1.5～1.9cm。一部に樹皮が残り、もう一方の端は破損する。ヒノキである。

以下に述べる333・336・342・343・345・1015溝は、小規模な溝である。

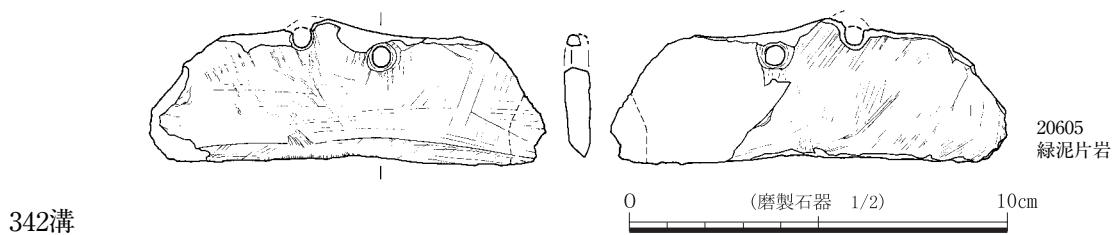
333溝 調査区北東部に位置する。直線的に北東 - 南西にのびる部分と緩やかに弧を描く部分からなる。長さ約8m、幅43～72cm、深さ14cm。埋土は、灰7.5Y4/1シルトに細砂・粗砂・炭・植物遺体を多く含む。弥生土器33片（うちI様式4片、I～II様式1片、II様式2片）出土した。

336溝 調査区中央部に位置する。東西を主軸とする部分が長く、その両端で南へゆるく曲がる。検出長約4.5m、幅57～88cm、深さ14cm。埋土は灰5Y4/1シルト。出土遺物は、弥生土器31片（うちI様式3片、I～II様式1片）。

342溝 調査区南東部に位置する。東西を主軸とする部分があり、その西端でほぼ直角に南へ曲がる。東は調査区外にのびる。検出長約2.5m、幅26～37cm、深さ8cm。埋土は、黒10Y2/1シルトに植物遺体と炭が多く混じる。弥生土器3片と石庖丁1点が出土した。

図136 - 20605は石庖丁。緑泥片岩製で、背部は紐部に至るまで敲打され、部分的に研磨される。再加工を意図したものか。片刃である。層理が強く、剥落がすすむ。

343溝 調査区南東部、1382溝の南側に位置する。ほぼ東西方向に主軸があるがゆるく南に張り出す。東側は第8面の300土坑に切られている。幅190～250cm、深さ31cm。埋土は、第8層と同じ黒10Y2/1シ



342溝

343溝

図136 03 - 1 - 2区 第9面342・343溝出土遺物

ルトに、黒7.5Y2/1・オリーブ黒7.5Y3/1のシルトブロックや暗オリーブ5Y4/3の細～粗砂ブロック含む。出土遺物は、弥生土器165片（うちⅠ様式12片、Ⅰ～Ⅱ様式6片、Ⅱ様式24片、Ⅲ様式1点）、サヌカイト剥片3点、計168点である。

図136 - 20606は細頸壺の頸部。頸部は短めで、一旦すぼまって伸びた後に、口縁で内湾する。口縁端部は強いナデによる調整痕が沈線状に残る。内外面ともに縦方向のミガキ。Ⅱ様式末～Ⅲ - 1様式。

20607は壺の口縁。薄手の器壁をもち、口縁端部は下方へ肥厚する。頸部にはクシ描き直線文が1条残る。Ⅱ様式。

**345溝** 調査区南東部の矢板際で検出した。検出長70cm、幅31cm、深さ14cm。埋土は黒5Y2/1シルト。出土遺物なし。

**1015溝** 調査区南西部、後述する1382溝の底で検出した。主軸方位は東北東 - 西南西で、溝の東部から南東へものびる。幅28cm、深さ4cm。埋土は、オリーブ黒5Y3/1シルト。出土遺物は、弥生土器10片（うちⅠ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式1片）、サヌカイト剥片1点、計11点。

**1382・1397溝**は、調査区南部に位置し、第6面252大溝の下層にあたる。これらは当03 - 1 - 2区調査時には、252大溝によって攪乱された部分と考えていたが、その後調査した03 - 1 - 3区第9面で検出した1382溝が次に報告する1397溝の上層に存在したことから、その延長部分として03 - 1 - 2区でも遺構番号を付け、出土遺物も252大溝から分離させた。

**1397溝**（図137・138 写真図版36）この溝は、03 - 1 - 2区調査時には第6面252大溝の断面観察からその下層部分として認定し、遺物を「252大溝底の黒層」として取り上げたものである。この黒層は、下層に向かうにつれて黒味としまりが強くなる傾向があり、出土遺物も多かった。そこで、遺物を底の黒層の上・下に分けて取り上げたが、厳密な層位区分ではなく、上と下で接合する土器片もある。

その後、03 - 1 - 3区調査時に、東辺断面などで再検討した結果、「252大溝底の黒層」は第9面で掘り込まれた溝と判明したので、第9面の1397溝と新たに遺構番号を付けた。第9面での幅1.7～2.6m、深さ37～83cm。埋土（図43）は、上半でM2オリーブ黒5Y3/1となり、下半は黒5Y2/1の粘質シルトである。植物遺体や木片を多く含む。

1397溝の03 - 1 - 2区部分での出土遺物は多く、弥生土器3774片（うちⅠ様式530片、Ⅰ～Ⅱ様式278片、Ⅱ様式244片）、紡錘車1点、転用土製円板9点、石器類132点、木製品・木36点、種子・実32点、

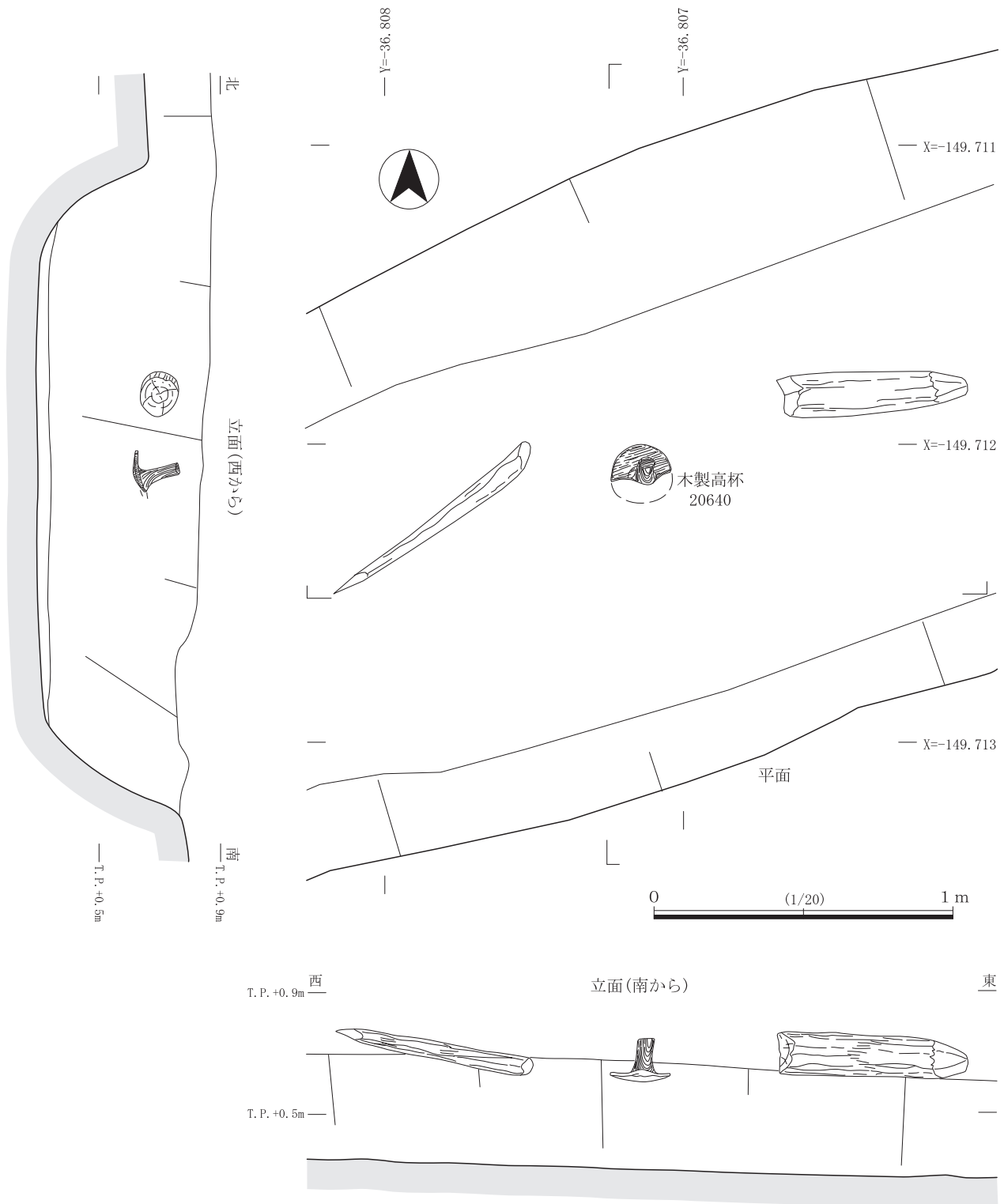


図137 03-1-2区 第9面1397溝木製高杯出土状況



図138 03-1-2区第9面1397溝遺物出土状況

炭3点、計3987点と骨・歯である。上述のように遺物を上下に分けて取り上げているので、その内訳を示す。

1397溝上半からの出土遺物は、弥生土器2364片（うちⅠ様式310片、Ⅰ～Ⅱ様式181片、Ⅱ様式179片）、転用土製円板6点、石庖丁1点、磨石1点、砥石6点、叩き石2点、打製石剣1点、打製石斧1点、石鏃未成品1点、石錐1点、削器7点、楔6点、石核1点、サヌカイト剥片38点、サヌカイト原礫1点、片岩系原礫1点、中礫2個、小礫3個、木製品・木23点、種子・実21点、炭2点、計2489点と骨・歯である。

上半の上部から木製高杯などが出土し(図137)、上半の下部からは獣骨がまとめて出土した(図138)。

1397溝下半からの出土遺物は、弥生土器1410片（うちⅠ様式220片、Ⅰ～Ⅱ様式97片、Ⅱ様式65片）、紡錘車1点、転用土製円板3点、石庖丁3点、蛤刃形石斧1点、砥石3点、叩き石2点、不明磨製石器1点、石錐1点、削器3点、楔5点、サヌカイト剥片37点、中礫2個、木片13点、種子・実11点、炭1点、計1497点と骨・歯である。

図139～143は1397溝上半出土の遺物。図139-20608～20619は壺。20608の口縁部は上下に拡張し、列点文が2段に施される。内面は拡張部の屈曲までミガキが施される。器形・調整は古い要素が見られるが、文様構成は新しい。Ⅲ～Ⅳ-1様式。

20609（写真図版95）の器壁は厚く、口縁が垂下する。口縁下端の刻み目は、指で広げて鋸歯状にし、端面には波状文、頸部には口縁部に至るまでクシ描き直線文を施しており、新しい様相をもつ。Ⅱ～Ⅲ-1様式（Ⅲ-a段階）。

20610の頸部は外傾してひらき、口縁は垂下する。口縁には連続扇形文を縦に施し、頸部には簾状文を飾る。簾状文の原体幅は細く、縦線間隔は広いもので、Ⅱ-3様式と考えられる。

20611の頸部は外傾してひらき、口縁部はやや垂下する。クシ描き直線文は深くはっきりした施文で、Ⅱ様式であろう。20612の口縁部はゆるやかにひらき、下方に拡張する。口縁端面には波状文がめぐり、頸部にはクシ描き直線文が4条残る。頸部内面は煤が付着し、器面の大部分が剥落している。Ⅱ-2～3様式。

20613の胴部上半は、クシ描き直線文が密に並び、最下段に波状文が2条施される。胴部の最大径は中位にあり、20612のような漏斗状の口縁がつくものであろう。Ⅱ様式。内面は煤付着し、器面剥離している。図137に示すように骨と共伴しており、溝の上・下半の破片が接合している。

20614（写真図版95）は口頸部。頸部は短く、口縁肥厚する。口縁部のクシ描き直線文は横方向と、それと交差するように縦方向に施される。頸部内面では表面剥落する。被熱か。

20615は頸部。クシ描き直線文2条をめぐらし、体部にかけて縦に波状文を飾っている。

20616（写真図版95）は長頸の壺。内外面ともに煤けている。

20617（写真図版95）は肩部。クシ描き直線文上に、クシ原体を一周させた円形の文様を等間隔で飾っている。20618は細頸壺の頸部。20619は無頸壺の口縁部。いずれもクシ描き流水文で飾る。白色の胎土をもつ。

図140-20620は蓋。つまみ部にくぼみをもち、内外面黒変する。大形のものでⅡ様式か。

20621・20622は甕の口縁。いずれも内面を横、外面を縦方向にハケ調整し、口縁端部に刻み目を施す。20621は端部に面をもち、そこに刻み目が入る。20622の刻み目は口縁上端に施される大和型。いずれもⅡ様式。

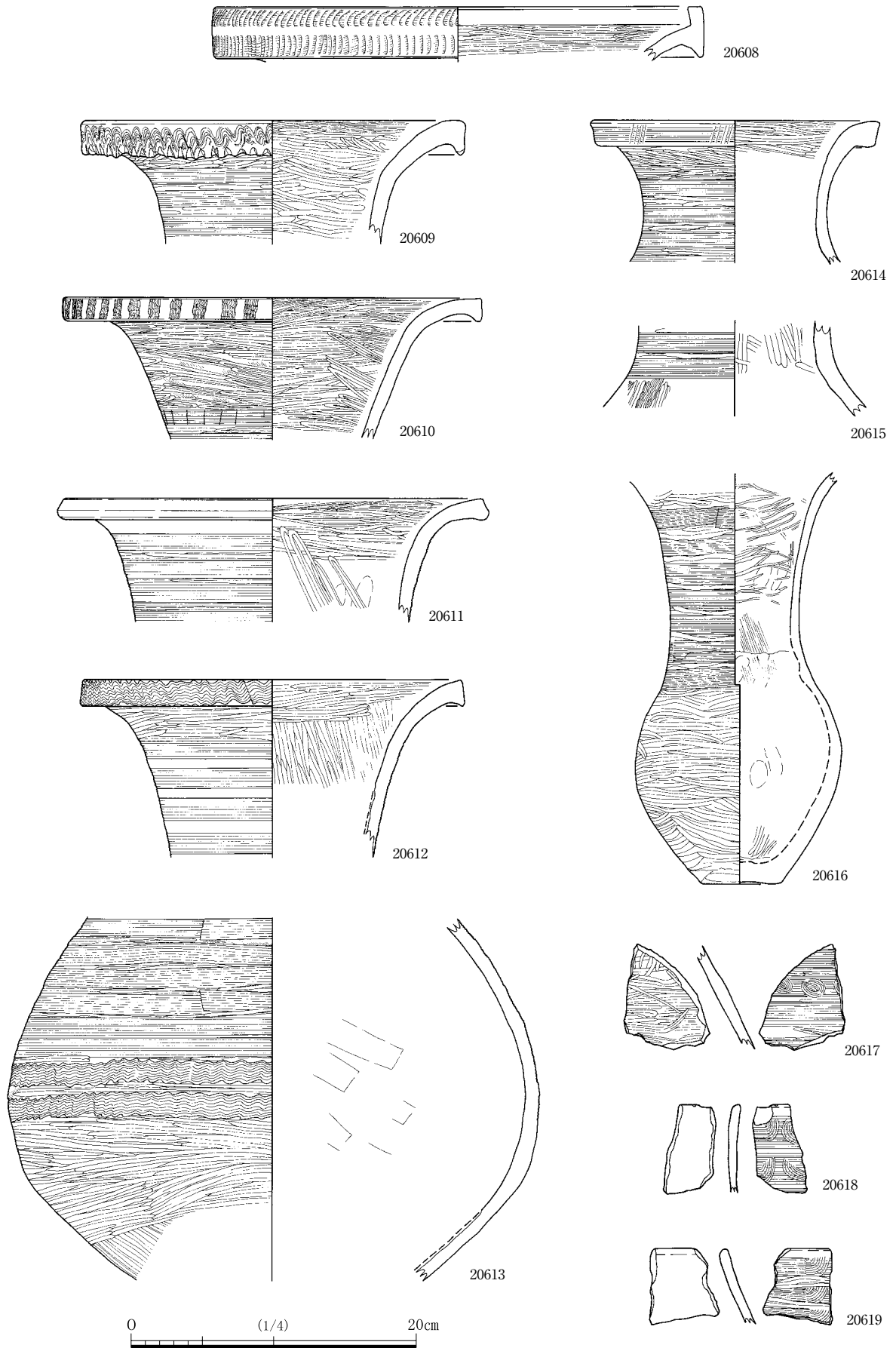


図139 03 - 1 - 2区 第9面1397溝上半出土遺物 (1)

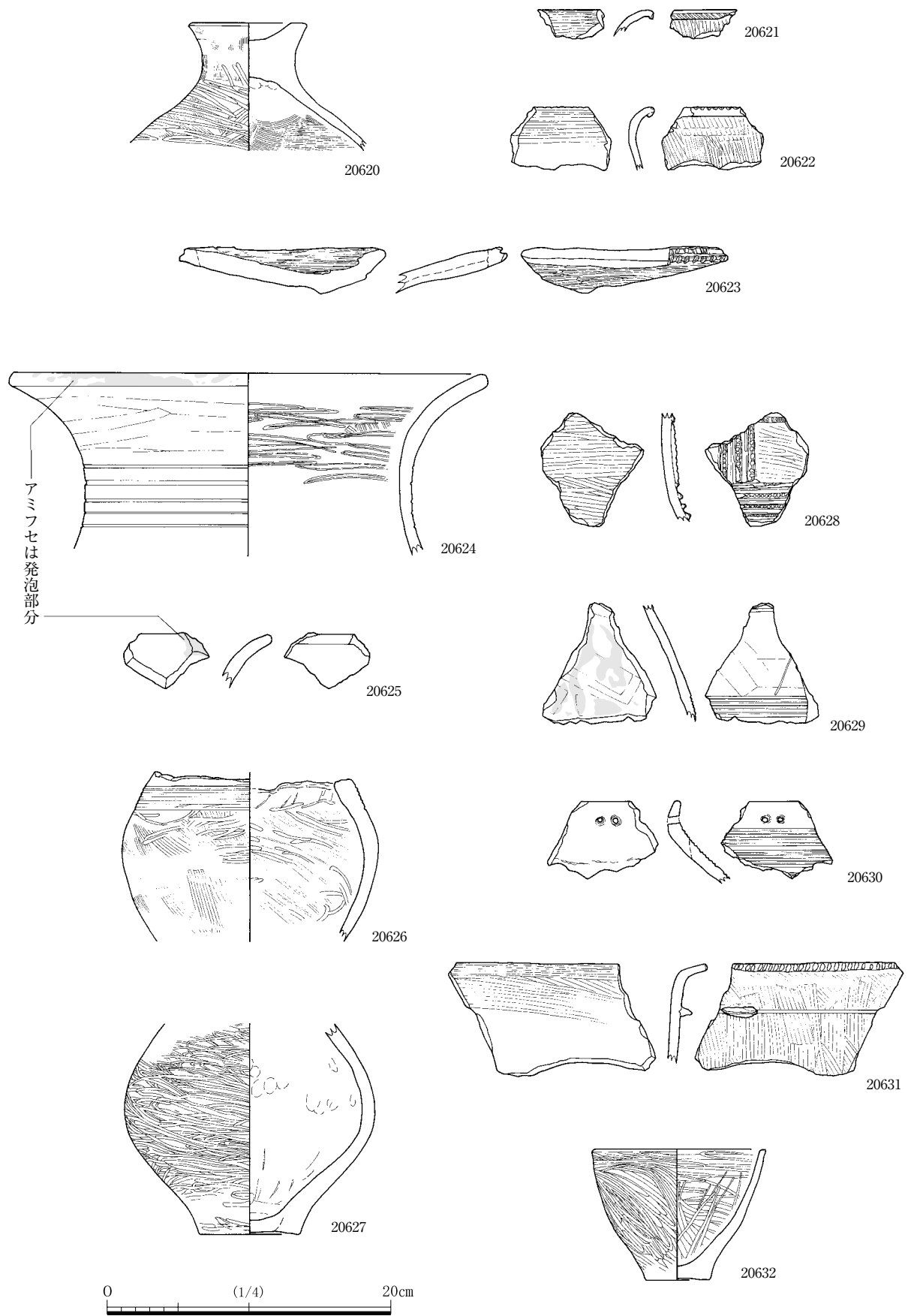


図140 03-1-2区 第9面1397溝上半出土遺物(2)

20623～20629はI様式の壺。20623（写真図版95）は壺の口縁。端面に沈線とその上下に刻み目が施される。I - 4～II - 1様式だろう。なお、口縁端部は粘土の接合部で一部剥落し、内部の接合痕を露出する。20624（写真図版95）は大形の広口壺。口縁端部は面をなしつつあり、発泡して器面が荒れる。I - 4様式。20625も壺の口縁で一部発泡する。20626（写真図版95）は胴部上半に沈線6条がめぐり、I - 3～4様式に位置づけられる。内外面ともに著しく煤が付着し、器面の一部は炭化する。頸部は打ち欠かれて摩滅し、煤が断面におよぶ。再利用されたものか。20627は壺体部。器壁厚く、外面には横方向のミガキが丁寧に施される。I - 3～4様式であろう。20628は壺の頸部。縦横に刻み目のある突帯を貼り付ける。20629は沈線を横位にもつ。内面は赤色顔料が付着している。

20630は無頸壺。口縁部は短く立ち上がり、2つの紐孔があく。体部は沈線が3帯以上見られる。I - 4様式。

20631は甕あるいは鉢。ハケ調整と口縁端部の刻み目に淀川水系の要素をもつが、体部に沈線をひき、小さな把手をつけた珍しい資料。径は大きく、同一個体と思われる把手のついた破片があるため、少なくとも2つの把手をつけたもの。近江に類例があり、II様式に位置づけられる。

20632は鉢。体部はわずかに内湾し、口縁端部はまるみをもつ。I様式か。

図141 - 20633は石庖丁。緑泥片岩製で両端を欠く。背部の敲打によって一部をくぼませる。20634は砥石。砂岩製で4面を利用する。一部黒変しており、被熱したものか。

20635～20639はサヌカイト製の打製石器。20635は石剣の先端部で薄く細かい調整。20636は凹基式の石鎌か。長軸4.91cm、短軸3.59cmと大形で、側縁の剥離が中央に及んで厚みは不均一。未成品か。20637は石錐。錐部を細く作り出すが、基部側縁にも調整が及ぶ。基部の一部に光沢をもつ。20638は削器。大形の剥片の刃部のみを調整する。20639は楔。1面には原礫面が残る。

図142 - 20640（写真図版36・96）は木製高杯。全体の形が分かる大形品である。一木式で、口径29.0cm、底径21.0cm、残存高21.5cmを測る。椀形の杯部はほぼ同じ厚みを保って曲線的にひらく。脚柱部は円柱状に長くのび、裾部で屈曲、横に広がる。脚部中央は彫りこんでくぼませている。ヤマグワの横木取りで木目が美しい。

20641（写真図版96）も木製高杯。杯部を欠く無装飾の脚部。底径13.8cm、残存高7.0cm。脚部は長く、中空のまま杯部へのび、裾部でやや屈曲して横に広がる。脚部内面には加工痕が明瞭に残る。ヤマグワの横木取り。

図143 - 20642（写真図版96）は木製容器。やや深めの長楕円の杯部に、木目に平行して長い脚台がつく。ほぼ半分を欠いており、2つの脚台をもつものとなる。杯部はなだらかに外傾してひらき、体部に比べて底部と脚台部は厚く作られる。脚台部はやや裾広がりとなる。杯部の残存長軸30.6cm、脚台部高11.6cm、脚台部幅16.6cm。杯部の外面には加工痕がわずかに残る。ヤマグワの横木取り。

20643は板目材。木材の外側を切り取っただけのような形で、長軸47.2cm、短軸7.4cm、厚み2.4cmを測る。判別がし難いが、長辺端部に小孔が1つあくだけで、他は破損しているものと見られる。スギ。

図144～147は1397溝下半出土の遺物。

図144 - 20644（写真図版96）は高杯脚部。杯部は円板充填法を用いる。裾部はひらき、端部を上方につまみあげる。内外面ともにミガキを施し、内面下位はハケ調整。III - 1様式。内外面ともに煤付着し、裾部上面は剥離が著しい。蓋へ転用したものか。20645は甕。やや胴部がはり、外面は横方向のミガキを施す。II～III - 1様式。



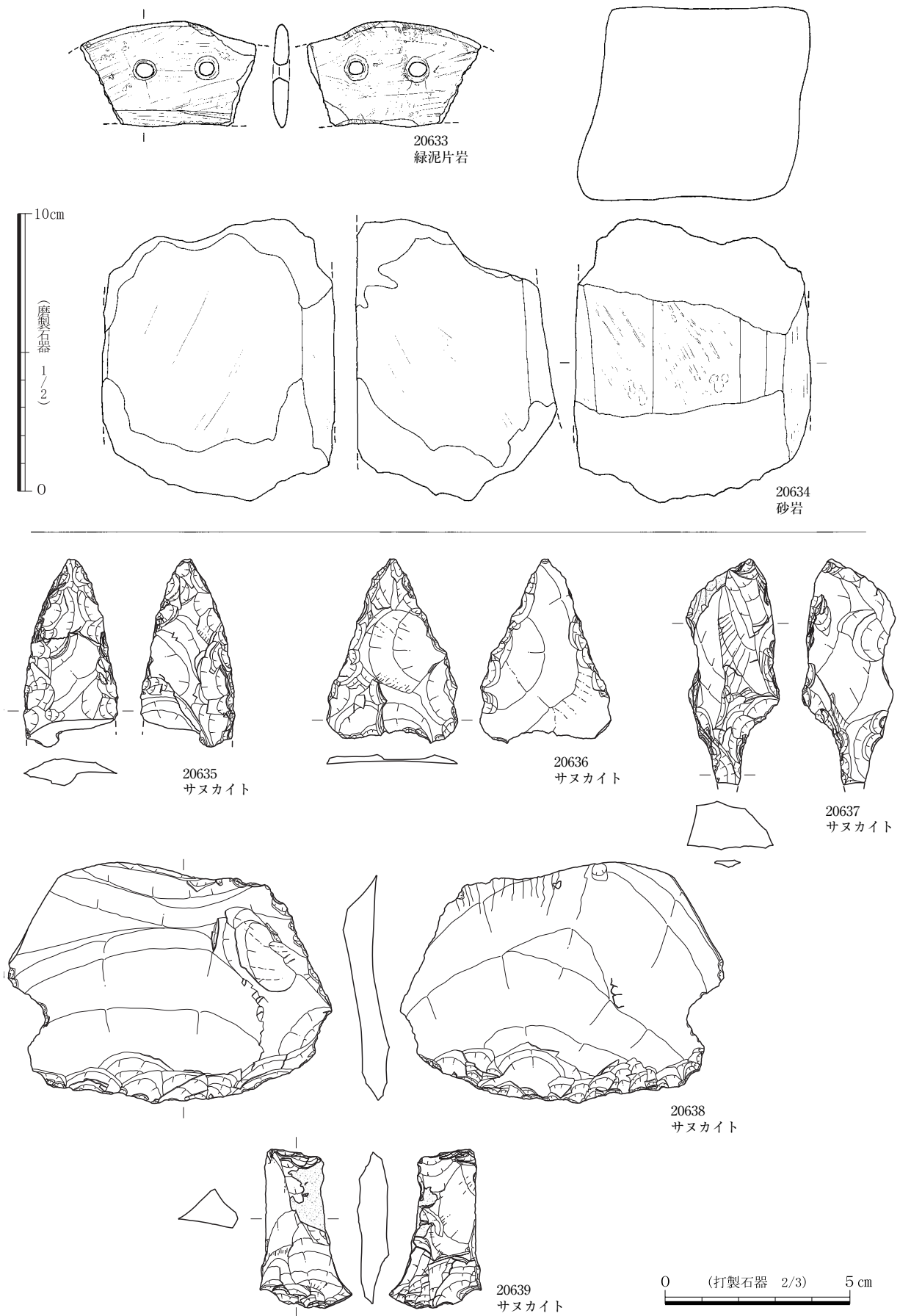


図141 03-1-2区 第9面1397溝上半出土遺物(3)

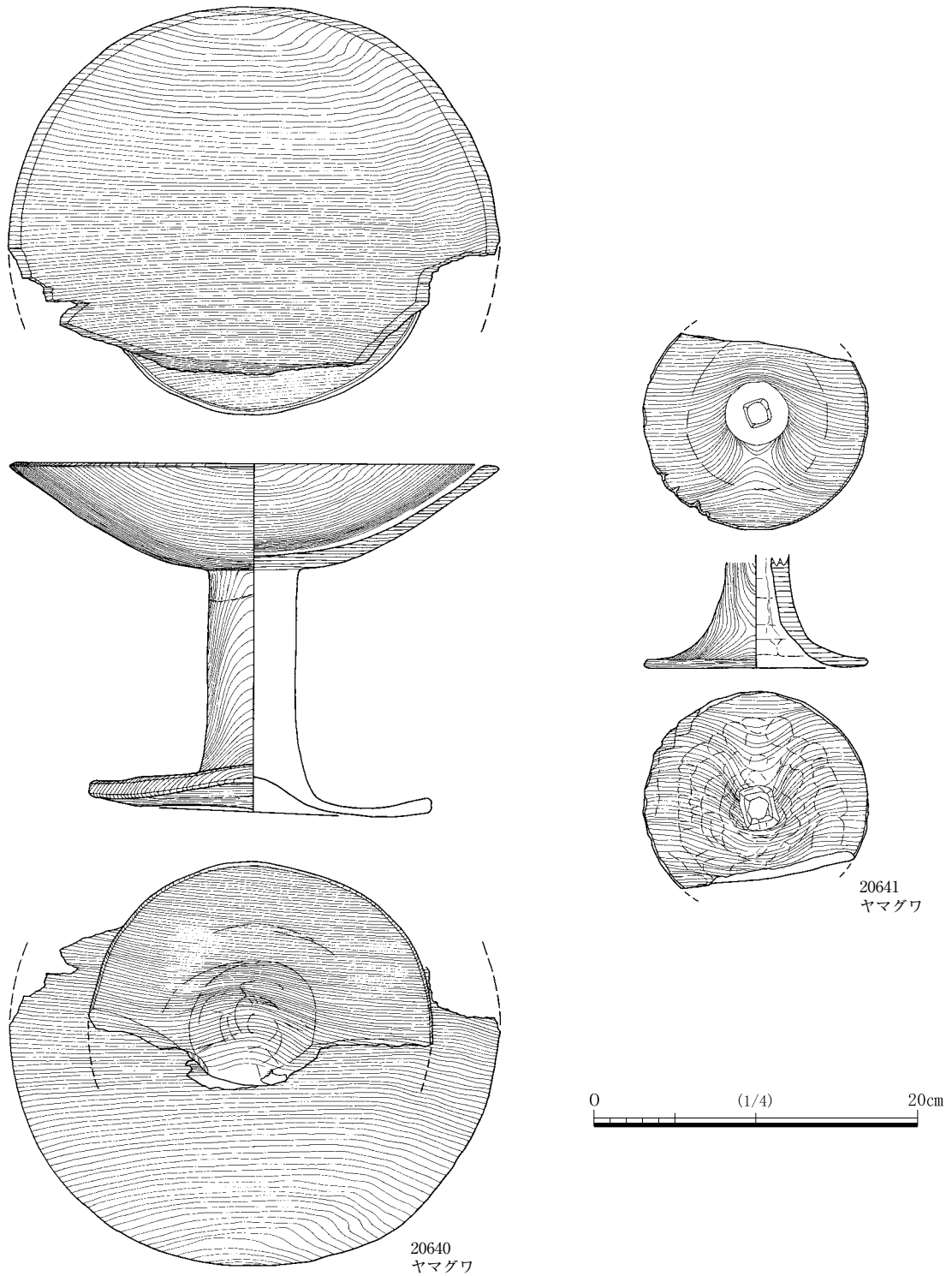


図142 03 - 1 - 2区 第9面1397溝上半出土遺物 (4)

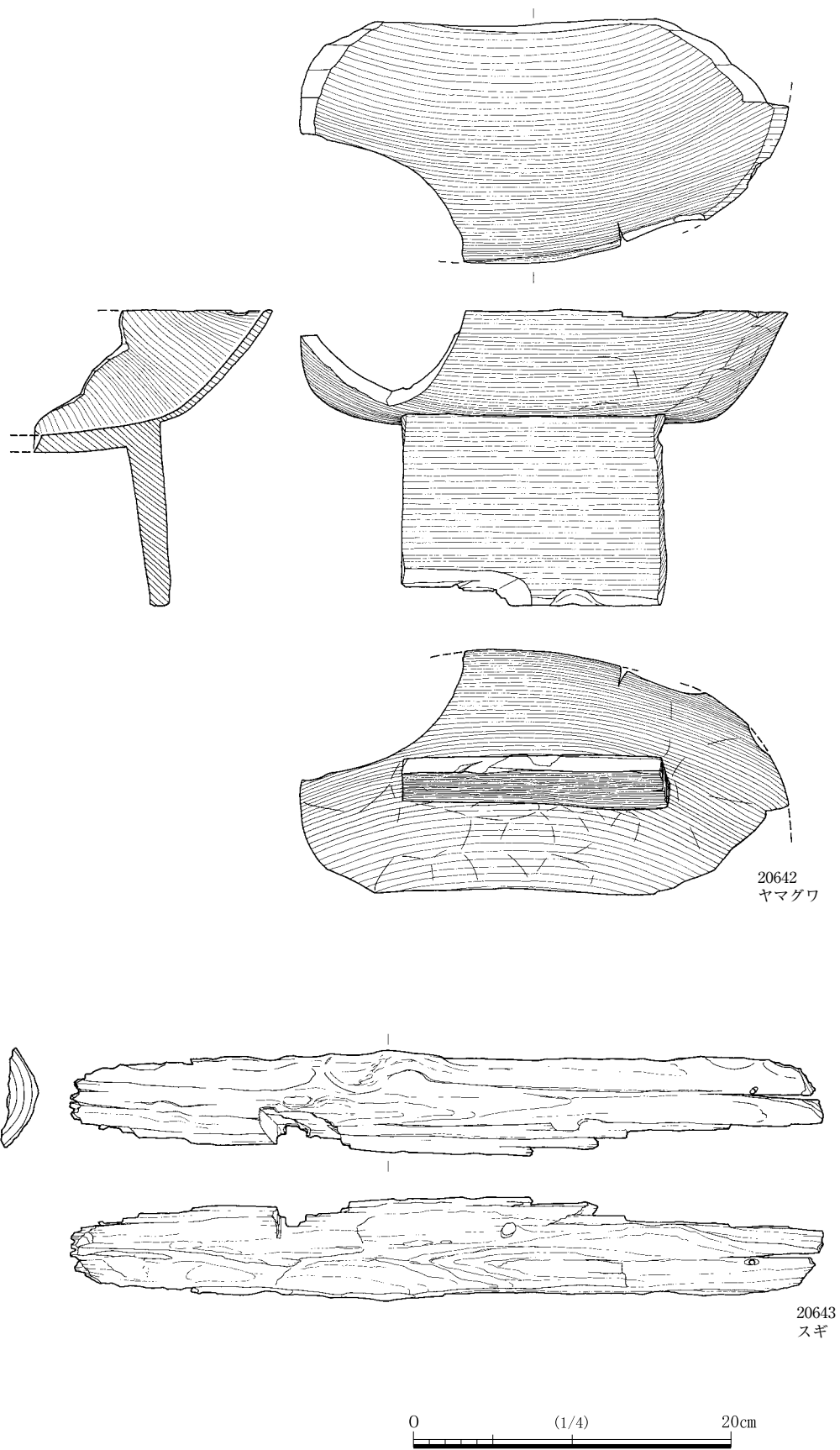


図143 03-1-2区 第9面1397溝上半出土遺物(5)

20646～20654はⅡ様式。20646は壺口縁。頸部のクシ描き直線文は、簾状文のように一部とめる。口縁部の肥厚は小さい。20647も壺の口縁。横ナデによって口縁端部に面を作った後、下端からなで上げるように粘土を押し、刻み目様に整形する。角閃石を含まず、白っぽい胎土。摂津以北の土器か。

20648（写真図版96）は長頸の壺。頸部にクシ描き直線文をめぐらし、間には太いミガキ調整を入れる。内外面ともに煤けている。

20649は壺の頸部。クシ描き流水文が描かれ、一部に赤色顔料が残る。20650は壺の肩部。クシ描き直線文を横方向だけでなく、縦方向にも配する。直線文間にはミガキを施している。

20651は甕蓋。頂部はつまみ出しによって成形される。胎土粗く、Ⅰ～Ⅱ様式か。

20652（写真図版97）は甕。底部下面に丁寧なミガキが施される。外面に煤が付着し、口縁部分は器面が剥離する。

20653（写真図版97）は鉢の把手部分。幅4.5cm程度の板状の把手で、上部にはクシ描き直線文と扇形文による流水文が3段に描かれる。上端は粘土の継ぎ目で剥がれたもので、碗の口縁に付くものとなろう。胎土は生駒山西麓産。

20654（写真図版97）は鉢。体部は内湾し、口縁端部は丸い。内外面と底部下面に不規則なミガキを施している。Ⅰ様式後半からⅡ様式か。

図145 - 20655～20666はⅠ - 3～4様式の土器。

20655（写真図版97）は壺。口縁部は大きく外反し、やや長くのびた頸部に沈線が間隔をあけてめぐらる。頸部から体部にかけて、黒色物質が付着している。はっきりと見えるのは、頸部の点と、その下の3本の斜線状の部分であるが、線の左側にも黒の広がり垂れたような痕が薄く観察される。明確な線が観察されるため、分析を行ったが炭化によるものと結論された（第9章 山口誠治「山賀遺跡出土黒色物質付着弥生土器についての科学的調査」参照）。頸部内面は筋状の部分を残し黒変する。なお、口縁部は1397溝上半から、体部は溝下半から出土し接合したものである。

20656は壺。口縁部は開き、端部の刻み目は2段にわたる。頸部はややのび、沈線文2帯と、その下に山形文が施される。20657も壺。頸部に刻み目のある貼り付け突帯がめぐり、口縁部には紐孔が1つ残る。口縁はあまりひらかず、やや古いか。

20658は復原口径43.2cmを測る大形の鉢。沈線3条を一組に山形文を施す。沈線は右から左へひき、三角形は1条を先にひいて形作った後、2条を加えて3条にしている。なお、上層出土の破片1点と接合している。20659も同様の意匠をもつもの。

20660～20662は把手付きの鉢。いずれの把手も小さく形骸化する。20660は口縁端部に刻み目を入れ、20661は作りがやや粗く、20662は把手の下に沈線をもつ。

20663（写真図版97）は甕。胴部には低い貼り付け突帯がめぐり、その下はケズリによって器厚を減らすもの。紀伊系であろう。

20664は鉢。やや内湾する深い体部をもち、沈線と三角列点文・円形列点文を交互に配する。

20665は小形の蓋。端部に面をもち、つまみは側面からみると半円形となる。紐孔が一部残っている。復原径8.3cm。20666（写真図版97）は復原口径7.5cm、器高7.5cmの小形の鉢。体部は外傾し、口縁端部には刻み目がめぐらる。底部はつまみ出されて高台状になり、2孔一対の紐孔があいている。底部下面には、紐孔間を結ぶように浅い沈線をひく。作りは粗く、沈線や円形刺突文は波打っている。Ⅰ様式。20665と20666は黄灰～灰黄色で長石が多いよく似た胎土をもつ。

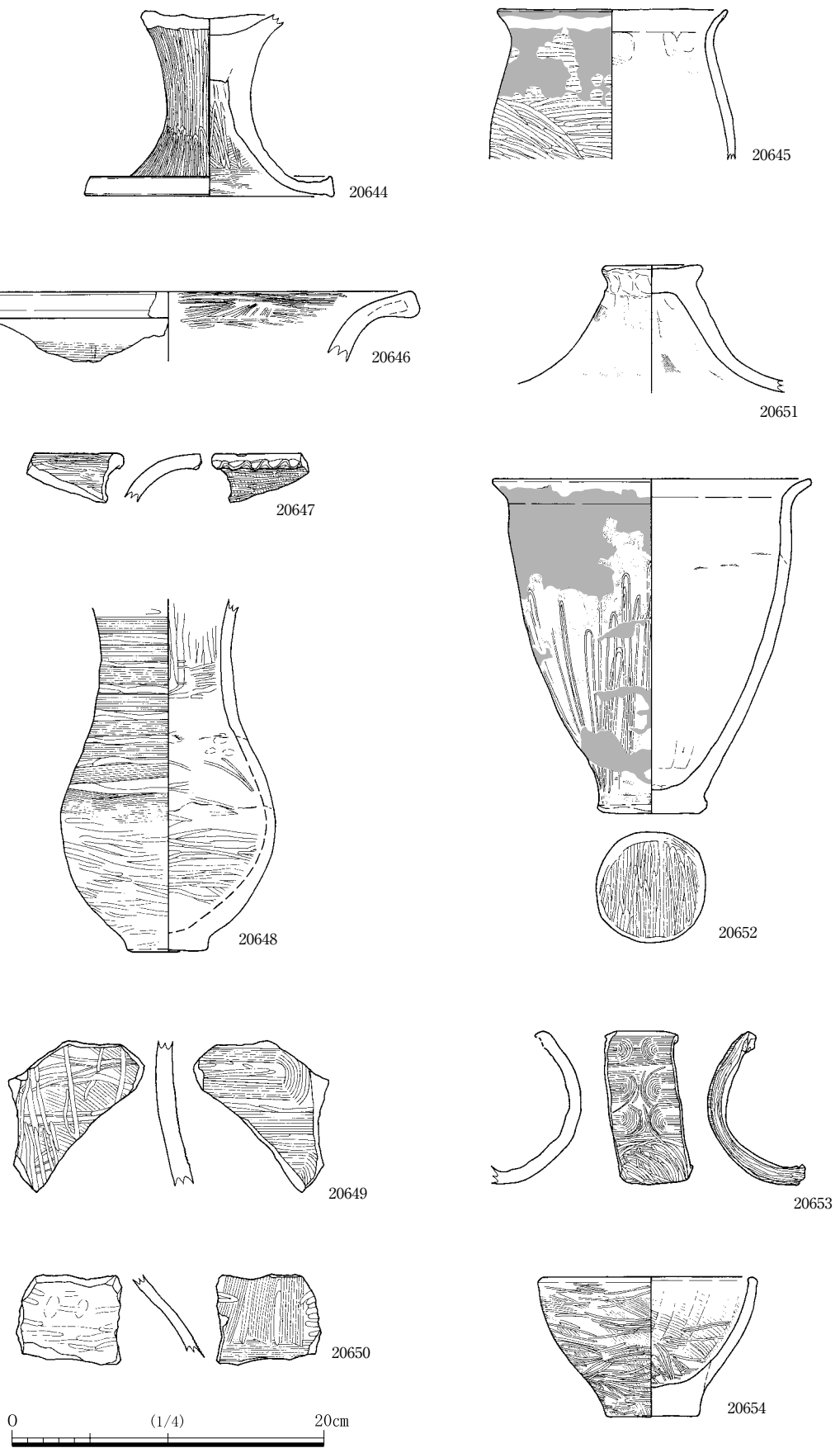


図144 03-1-2区 第9面1397溝下半出土遺物(1)

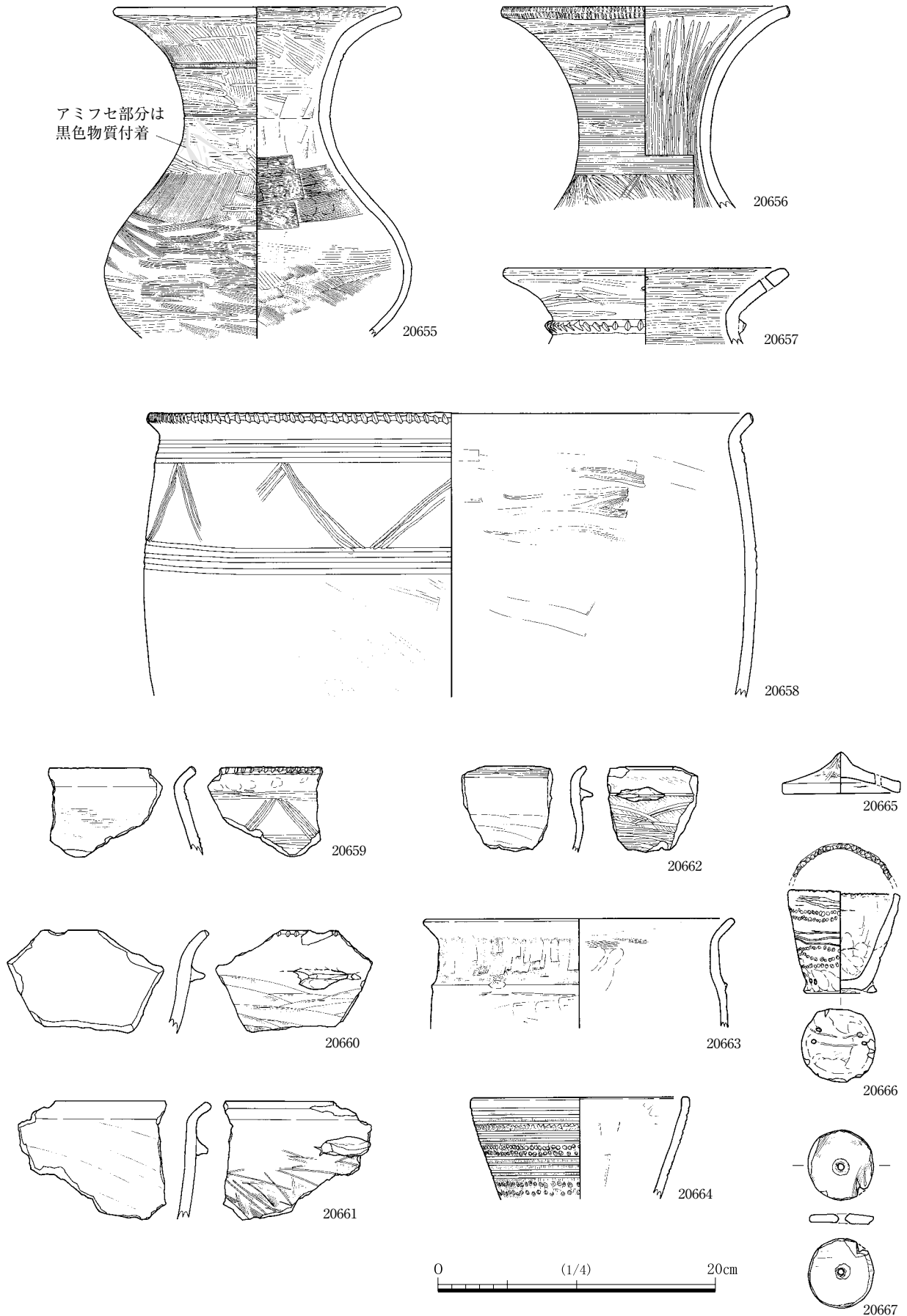


図145 03-1-2区 第9面1397溝下半出土遺物(2)

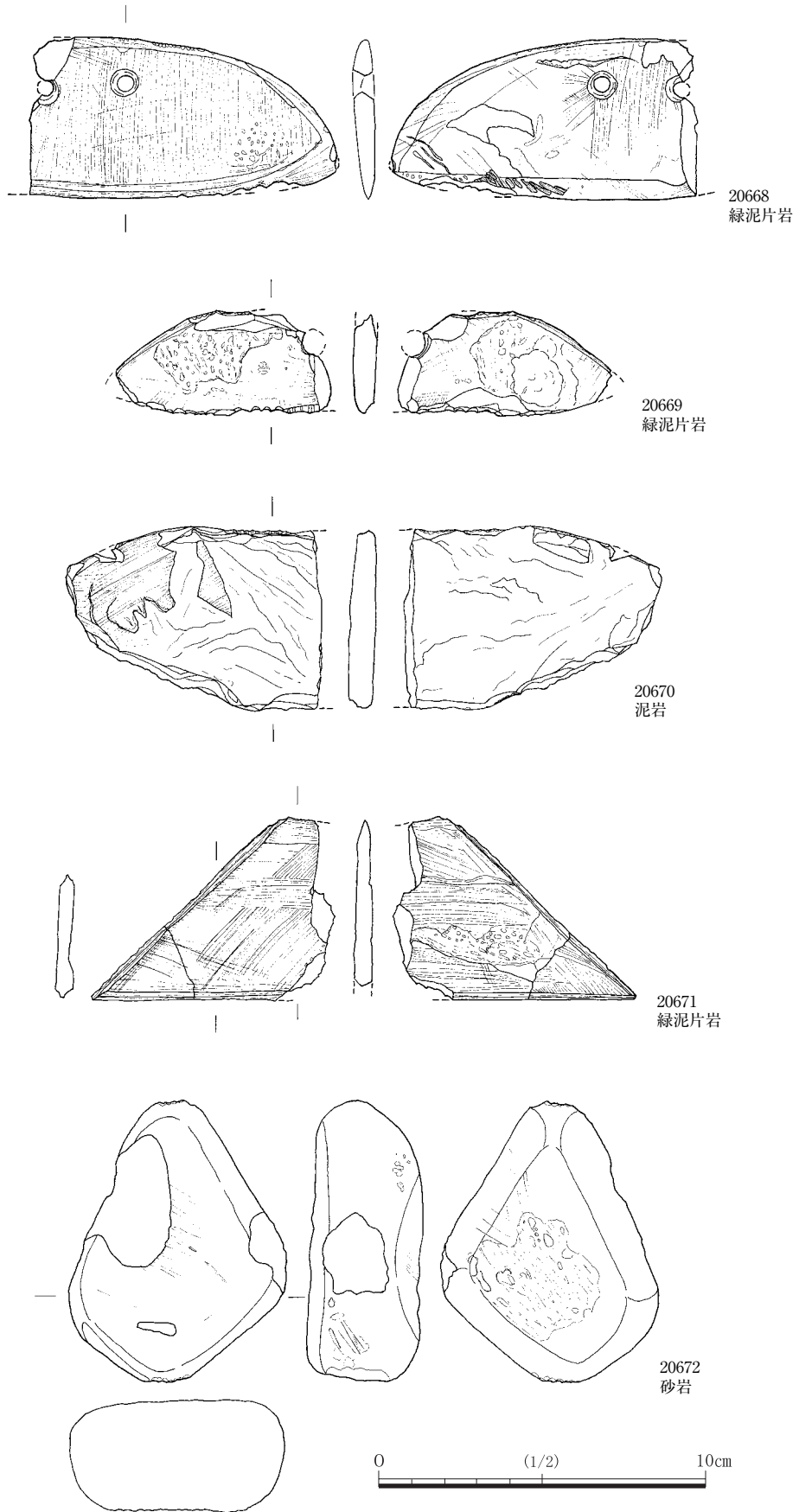


図146 03-1-2区 第9面1397溝下半出土遺物(3)

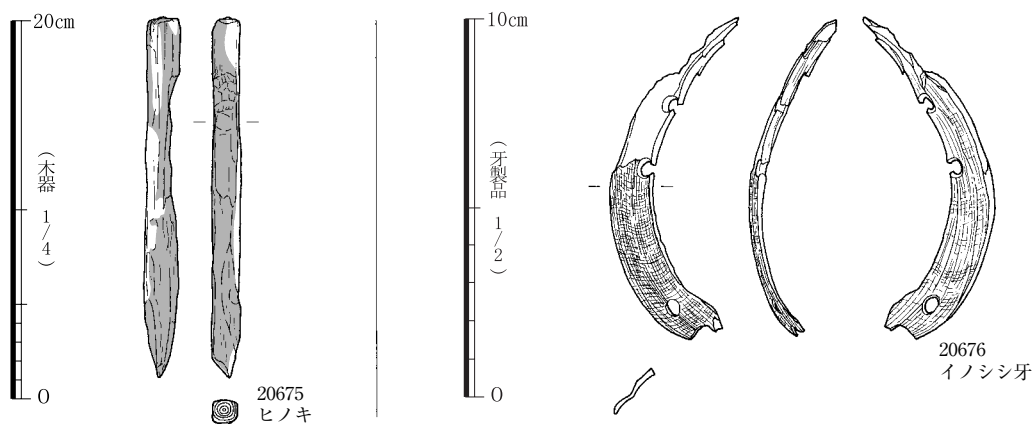
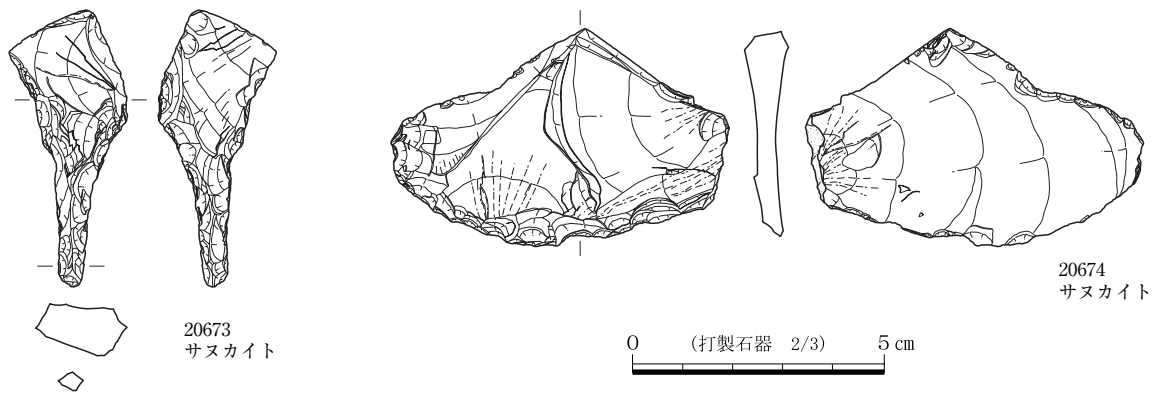


図147 03 - 1 - 2区 第9面1397溝下半出土遺物（4）

20667は土器片を転用した紡錘車。外縁、内縁ともによく摩滅している。

図146 - 20668～20670は石庖丁。20668は直線刃半月形で、片刃の緑泥片岩製。背部の一部に敲打痕が残る。20669は紐孔を残すものの、刃部は打ち欠かれて再加工中であつたものか。20670は未成品で、一部に研磨面が残る。泥岩製。

20671（写真図版97）は不明磨製石器。厚み0.55cmの緑泥片岩を用いて端部を鋭角に擦り切る。加工は両面から擦り切りによって行われており、研磨痕は明瞭である。

20672は叩き石。側面を敲打によって欠く。石錘の可能性もあろう。長軸8.42cm、短軸6.55cm、厚み3.3cm、重さ252.4g。

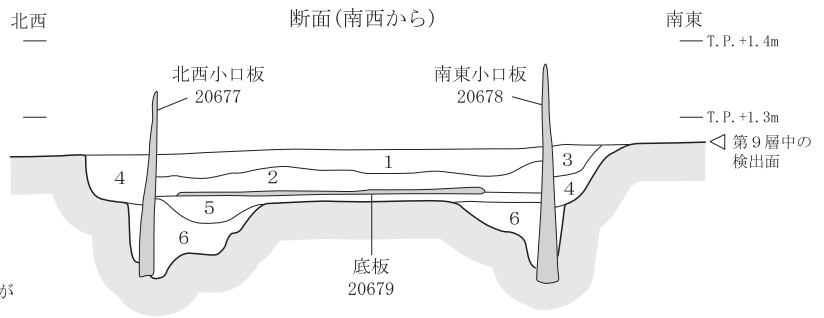
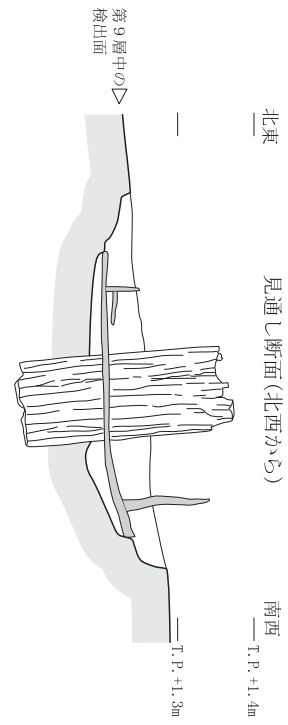
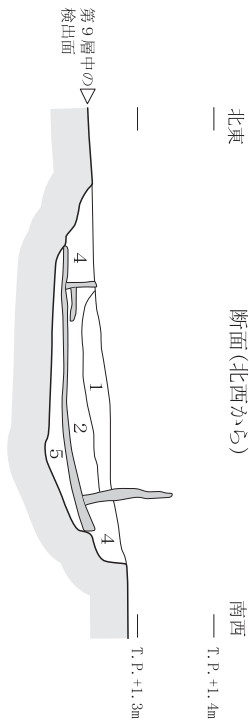
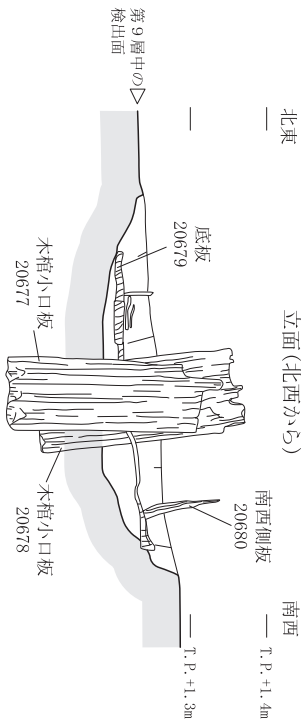
図147 - 20673はサヌカイト製の石錐。錐部を細長く作り出す。20674は削器。縦長の剥片の一辺を刃部とする。

20675は杭か。残存長19.0cm、径1.7cmの心持ち材。一端を4方向から削って先端を作り、その上方を抉って切り込みを広く入れる。樹皮等は残っていないが、全面的に黒変しており、炭化しているものと考えられる。樹種はヒノキ。

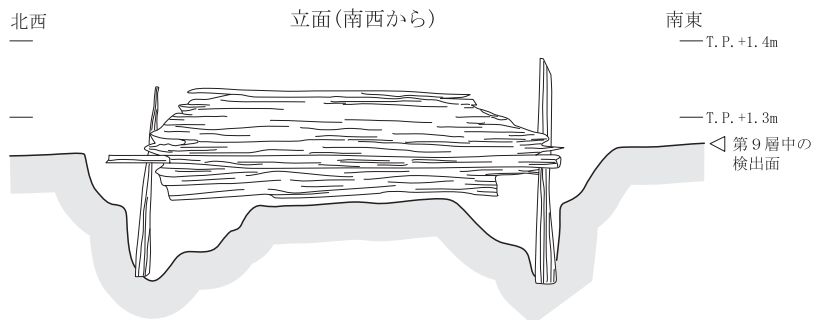
20676（写真5、第9章 安部みき子「山賀遺跡出土の動物遺体」参照）はイノシシの牙製の装飾品。溝の北法面から出土した。図の下が歯根側である。厚み0.2cm前後と薄く加工され、歯根側に穿孔1つと、内湾する側に開口した孔が2つ認められる。残存長8.5cm、幅約1.5cm。

以上、03 - 1 - 2区第9面の溝とその遺物について述べた。





- 1 オリーブ黒5Y3/1シルト、  
ピビアンナイト含む
- 2 暗灰黄2.5Y4/2シルト、  
ピビアンナイト少量含む
- 3 黄灰2.5Y4/1シルト
- 4 黒褐2.5Y3/2シルト
- 5 オリーブ黒5Y3/1シルト、粘性強い  
(底板腐朽部分か)
- 6 暗褐10YR3/3シルトと黄灰2.5Y4/1シルトが  
まだらに混じる



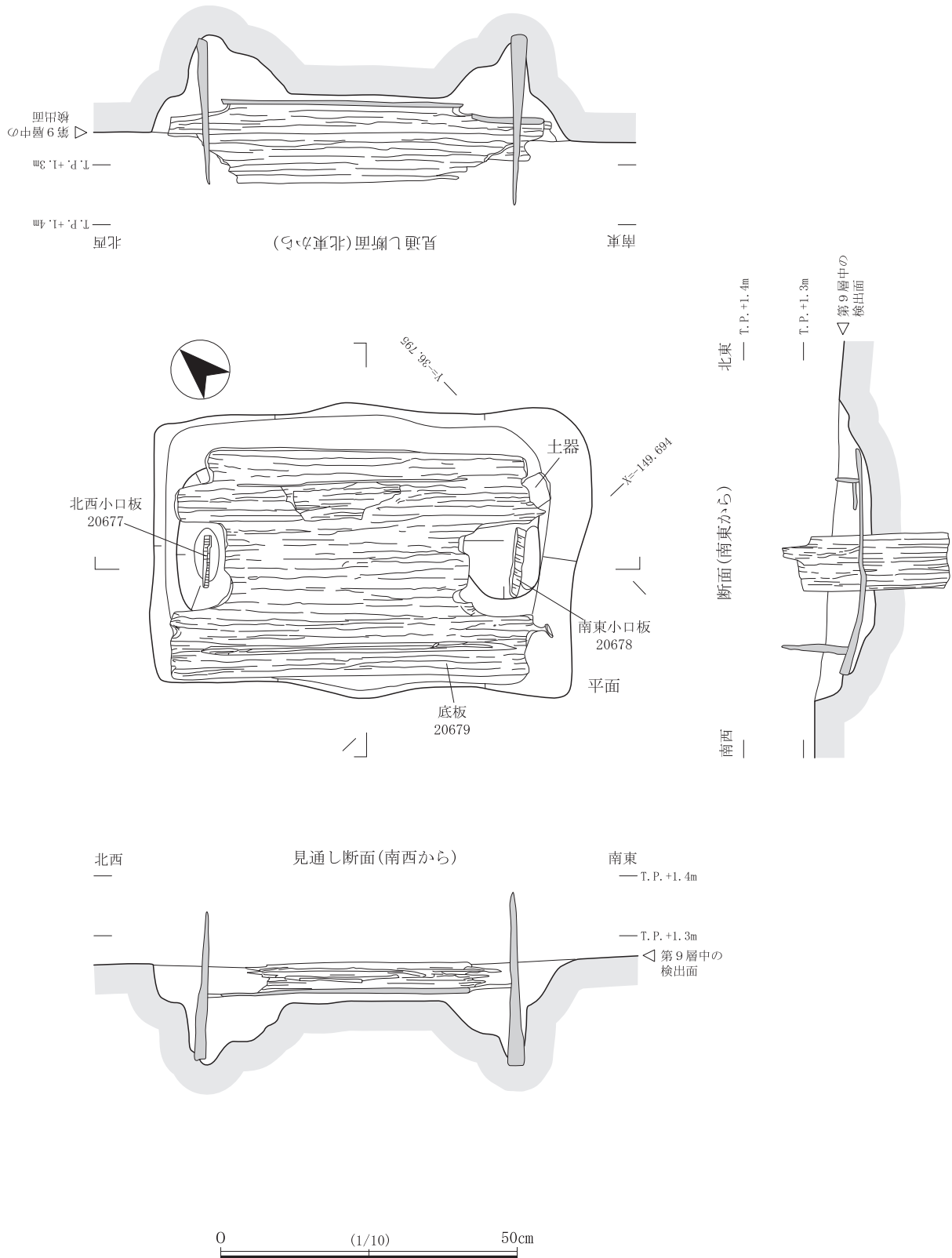


図148 03 - 1 - 2区 第9層中検出429木棺

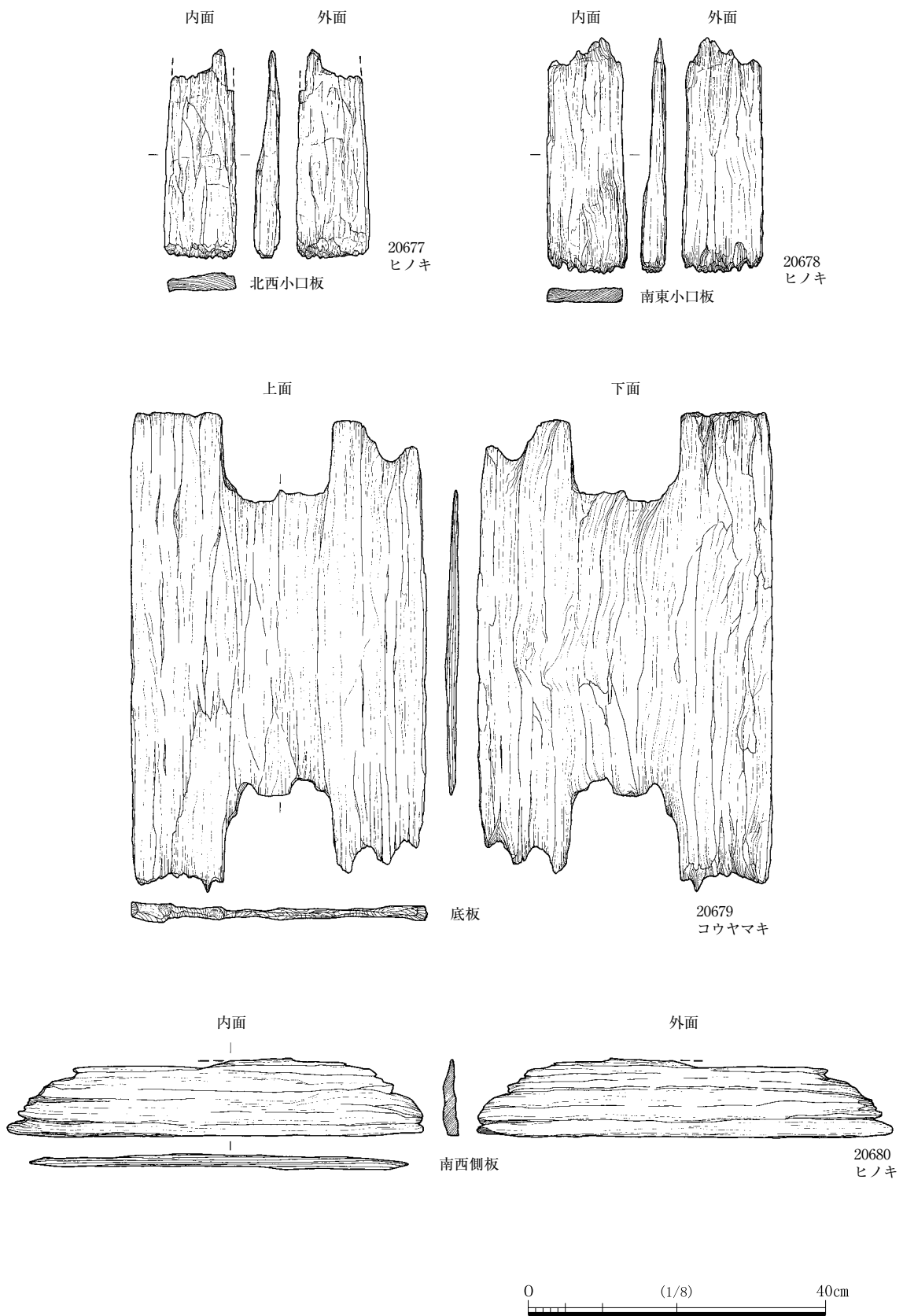


図149 03-1-2区 第9層中検出429木棺材

他の節では、基本的にこの後、土坑、ピット、落ち込み、高まりといった順に報告しているが、この03-1-2区の第9面および第9層盛土中から合わせて14基の木棺を検出した。そこで、木棺が多く分布していた338高まりおよび366高まりの遺物については木棺と合わせて報告する。その後、土坑、ピット、落ち込みについて記述する。338・366高まり以外の高まり内出土遺物は、第9層で掲載する。

木棺を第9面で6基、加えて第9層中で8基検出した。これらは上面で掘りかたを確認しそこから墓壙を掘り下げる過程で木棺を検出したものではなく、いずれも調査中に棺材が出土し木棺の存在が明らかとなったものである。木棺の構築時期はおおむねⅡ様式に位置づけられる。

第9面および第9層中で検出した計14基の木棺の分布は、大きく3つに分けられる。

ひとつめは、調査区北半に位置する429・430木棺の2基である。

次に、調査区中部やや南側にあり東北東-西北西を主軸とする338高まり上および高まり内の325・420・421・422・423木棺の5基である。

最後は、調査区南西部、やはり337溝南側で338高まりの西側にあたる366高まり上および高まり内の324・367・424・425・426・427・428木棺の7基である。

これら3群の木棺をこの順に報告する。

429木棺と430木棺は、他の木棺群とはやや離れて、それぞれ単独で存在する。

429木棺（図148・149 写真図版46・98） 調査区中央部やや北東側に位置する。掘りかたの平面形はやや不整の長方形で、長径73cm、短径50cm。木棺内法は、長さ51cm、幅27cm、高さ13cm。主軸方位は北西-南東（北45°西）である。

蓋板は失われていたが、底板と各2枚の側板・小口板を取り上げることができた。側板は底板に載っている。板の両短辺には小口板を立てるための切り込みがあり、平面「工」字形である。小口板は底板よりも11~13cm下まで埋め込まれている。底板はコウヤマキ、側板と小口板は全てヒノキ。

棺内上部の埋土は失われたが、中部はオリーブ黒5Y3/1シルト、下部は暗灰黄2.5Y4/2シルトで、これら棺の土にはビビアンナイトも含まれていた。底板直下は粘性の強いオリーブ黒5Y3/1シルトで、底板の腐朽した部分とも考えうる。小口穴では、暗褐10YR3/3シルトと黄灰2.5Y4/1シルトがまだら状に混じっている。掘りかた内は基本的に黒褐2.5Y3/2シルト。

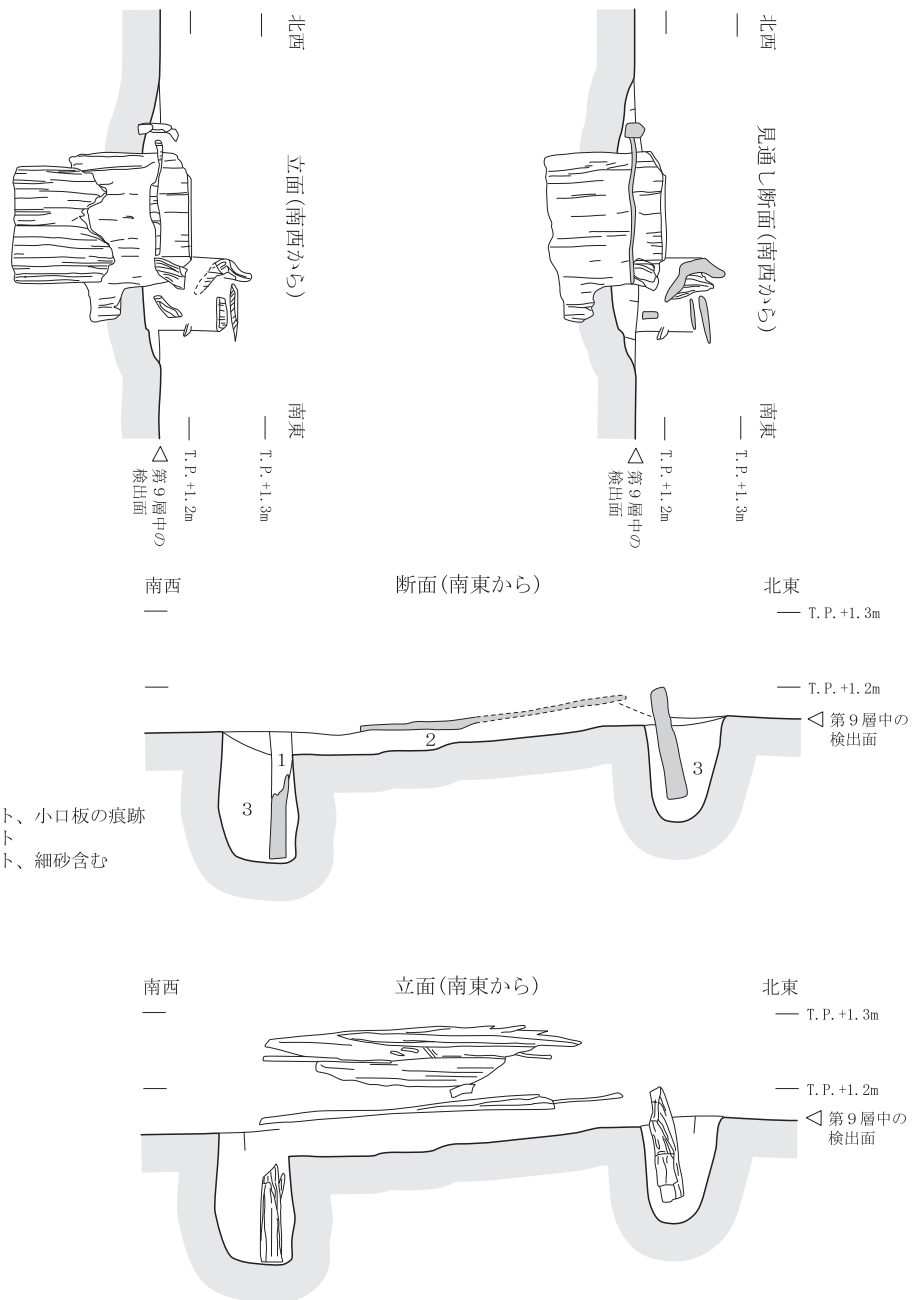
出土遺物は、棺内から弥生土器の甕の体部1片、掘りかた内からも弥生土器の甕2片（うちⅠ様式1片）のみと少ない。Ⅰ様式の弥生土器は、ヘラ描き沈線の甕片。人骨は出土していない。

図149・写真図版98-20677は北西側、20678は南東側の小口板。20679は底板、20680は南西の側板である。北東の側板は図化できなかった。

小口板20677・20678は長軸30cm、短軸10cm、厚み3~5cmとほぼ同じサイズ。底板20679は長軸41.6cm、短軸31.6cm、厚み2.4cm。約12cmの抉りが短軸側に入って「工」字状に加工される。南西側板20680は長軸55.8cm、短軸10.4cm、厚み1.8cm。他の材と比べてやや薄い。いずれも腐朽して端部はなめらかであり、加工痕は確認できなかった。木材は底板20679のみコウヤマキで、他はヒノキを用いる。すべて柾目材。

430木棺（図150・写真図版47） 調査区北西部、361落ち込みの東側に位置する。掘りかたの平面形は隅丸長方形で、北東側が丸味を帯びている。長径73cm、短径38cm。木棺内法は、長さ50cm、幅20cm、高さ8cm。主軸方位は北東-南西（北55°東）。

蓋板は検出できず、底板や側板の状況も悪かった。北東小口板が比較的よく残っていたが、取り上げ



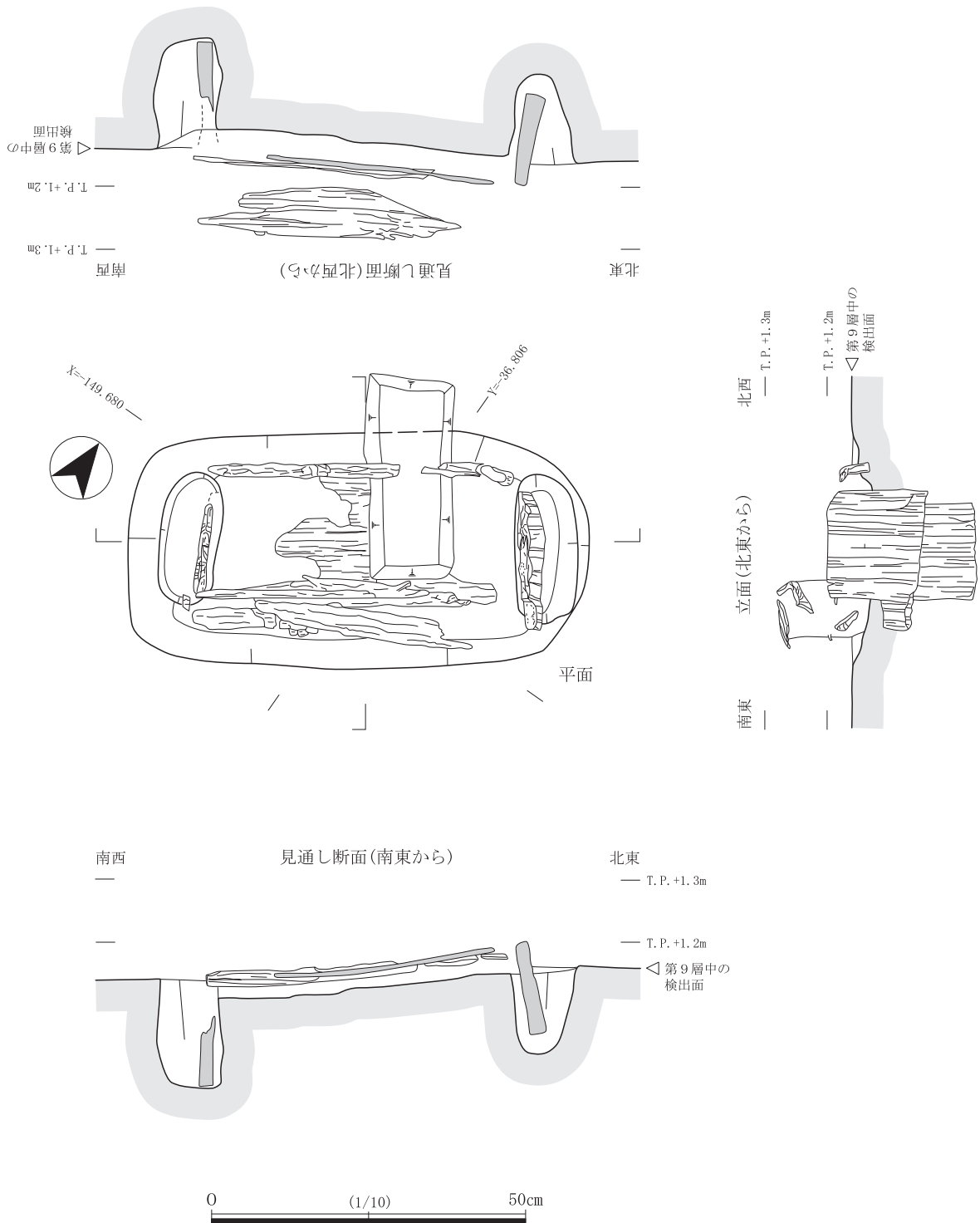


図150 03-1-2区 第9層中検出430木棺

は困難であった。側板は底板に載らず、底板の外に接して立てられているように見える。両短辺の小口板は底板よりも14~17cm下まで埋め込まれている。底板の遺存状況が悪く短辺の形状は不詳だが、小口板や小口穴の幅が棺内法の幅に近いことから、短辺に切り込みがなく、長方形の小口板を両小口に当てた構造と推定できる。棺材は、底板はサンプリングしたものの鑑定不能だったが、北西側板と北東小口板がニレ属、南東側板がヒノキ、南西小口板がスギと、多様な木材が使われている。

棺内の土を全て水洗したが、人骨や土器などの遺物は出土しなかった。掘りかた内から、弥生土器の体部が1片だけ出土した。

338高まりは、調査区中部やや南側、337溝の南側にあり、東北東-西南西を主軸とする。この高まり西部の上面および内部から、325・420・421・422・423木棺の5基を検出した。

325木棺(図151・写真図版37) 338高まりの南辺に位置するため、掘りかたの南部は第6面252大溝により失われているが、平面隅丸長方形と推定でき、長径94cm、短径72cm以上。木棺内法は、長さは約55cm、幅22cm、深さ2cm以上。主軸方位はほぼ東西(北85°東)である。

蓋板と西小口板はすでに失われており、その他の棺材も残りが悪く遺物としては取り上げられなかった。東小口板と両側板が底板の上に載っている。小口穴は見当たらない。底板・南側板・東小口板の樹種鑑定を試みたが判明しなかった。

遺物は、掘りかた内からの弥生土器の小片7片(うちI様式1片)のみで、棺内および底板下からは出土しなかった。

420木棺(図152・写真図版39) 調査区中央から約9m南の地点、第9面から約7cm下の第9面338高まり内で蓋板を検出した。掘りかたの平面形は隅丸長方形だが、南西の角が丸まっている。長径78cm、短径49cm。木棺内法は、長さ32cm、幅21cm、深さ10cm。主軸方位はほぼ東西(北80°西)。

蓋板・底板各1枚と側板・小口板各2枚、全ての棺材が残ってはいたが、個々の状態は悪い。側板は底板に載る。小口板は底板よりも7~9cm下まで埋め込まれている。底板は東側の一部にしかなく、その木目は短軸方向に一致する。底板の形状や大きさも不明。棺材は全てスギ。

棺内・掘りかたの埋土は黒2.5Y2/1粗砂混じりシルトで、分層は難しい。

出土遺物は、棺内からは弥生土器小片4片のみ。掘りかた内からも弥生土器14片(うちI様式2片、I~II様式1片)。I様式の弥生土器は、貼り付け突帯4条以上の壺肩部と沈線4条以上の甕片である。

421木棺(図153・154 写真図版40・41・99) 420木棺の西1.5mに位置し、墓壙の東半は側溝にかかっている。そのため、掘りかたの半分は失われたが、その反面、下層を含め断面の観察には便利であった。掘りかたの平面形は直径1.5~1.6mの円形と推定される。木棺内法は、長さ43cm、幅23cm、高さ15cm。木棺の主軸方位は北東-南西(北55°東)。

蓋板は形をとどめていたが、遺存状態は悪かった。側板は底板に載る。両小口板は大きめで、底板よりも14~22cm下まで埋め込まれている。底板の両小口が完存ではないが、小口板の幅が上から下までほぼ一定なことから、底板の短辺に切り込みがなく、長方形の小口板を両小口に当てた構造と推定できる。棺材のうち、蓋板は鑑定不能、底板と南東側板と両小口板がヒノキ、北西側板がコウヤマキであった。

図154・写真図版99-20681は北東側、20682は南西側の小口板。20683は底板。20684は北西側板。

北東小口板20681で長軸43.2cm、23.4cm、厚み5.3cm。底板よりも厚みをもった立派な材を使う。南西小口板20682は長軸37.0cm、短軸21.2cm、厚み4.0cm。北東側より小ぶりで、3×1.5cmほどの長方形の貫通

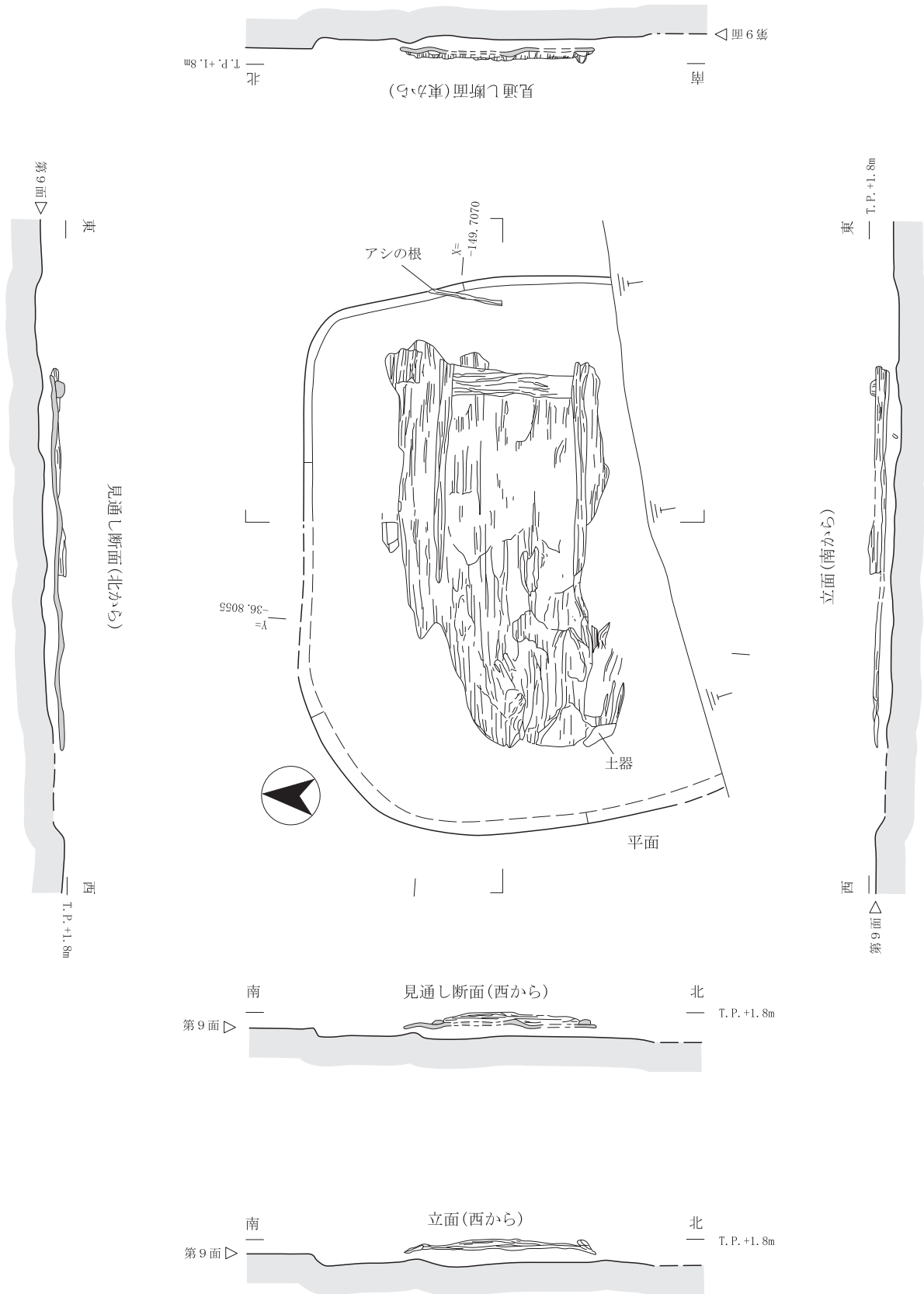
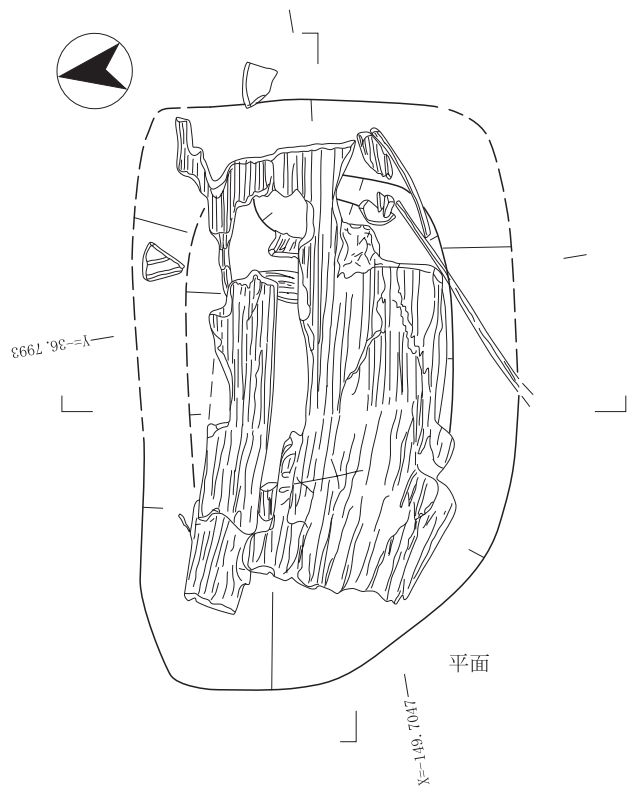
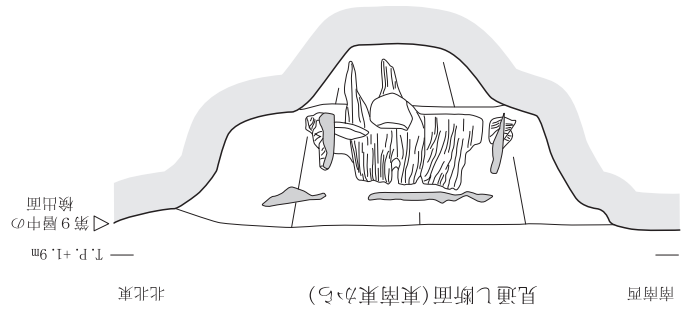


図151 03-1-2区 第9面検出325木棺

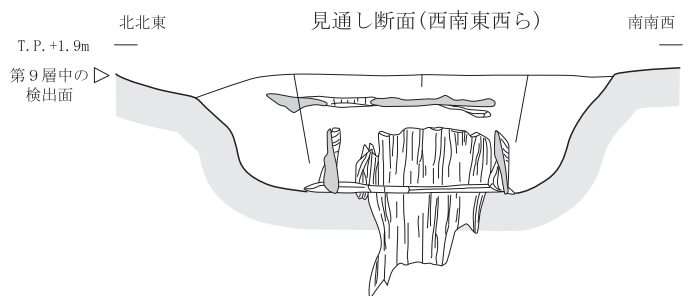




見通し断面(北北東から)



立面(北北東から)



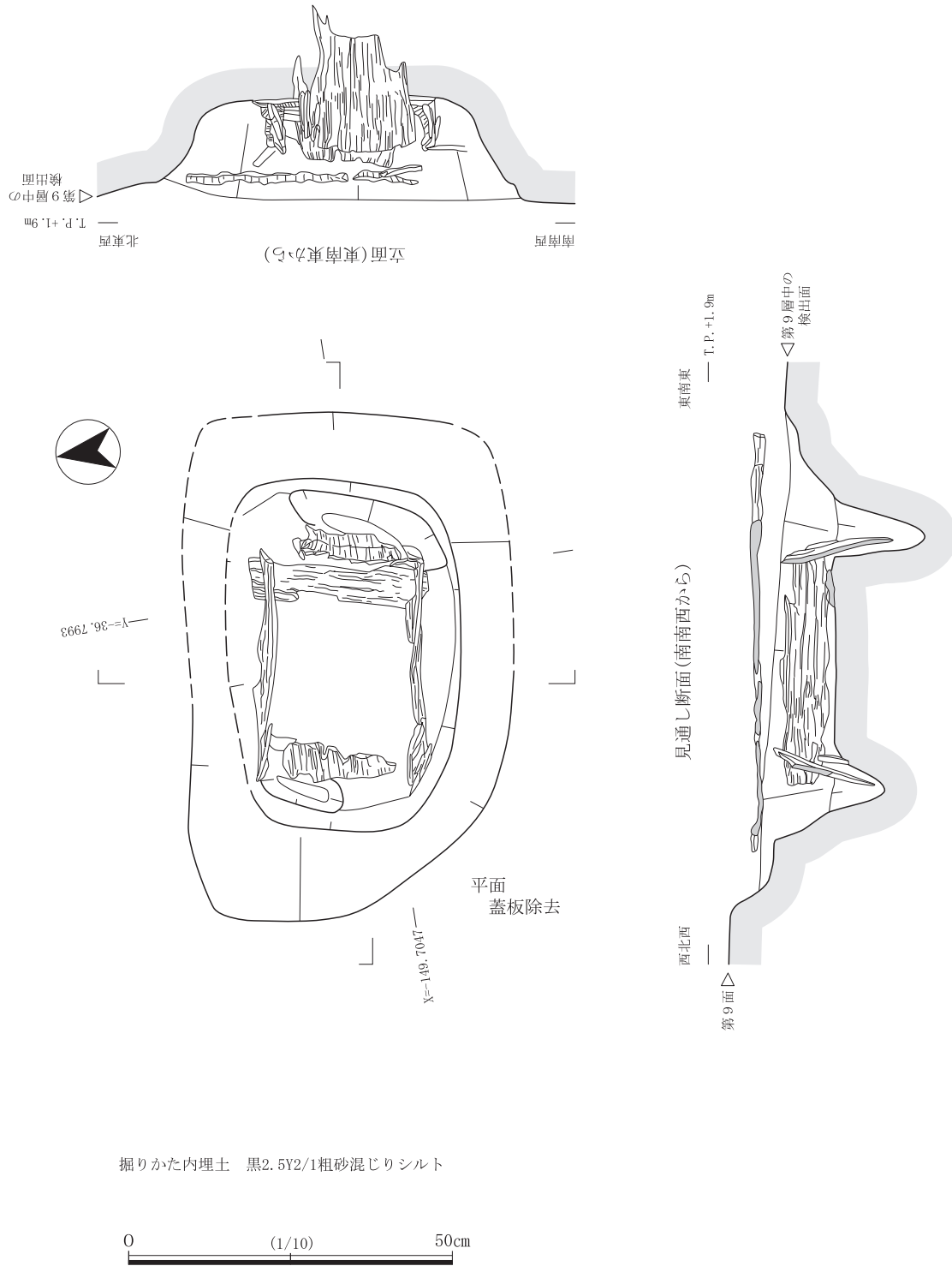
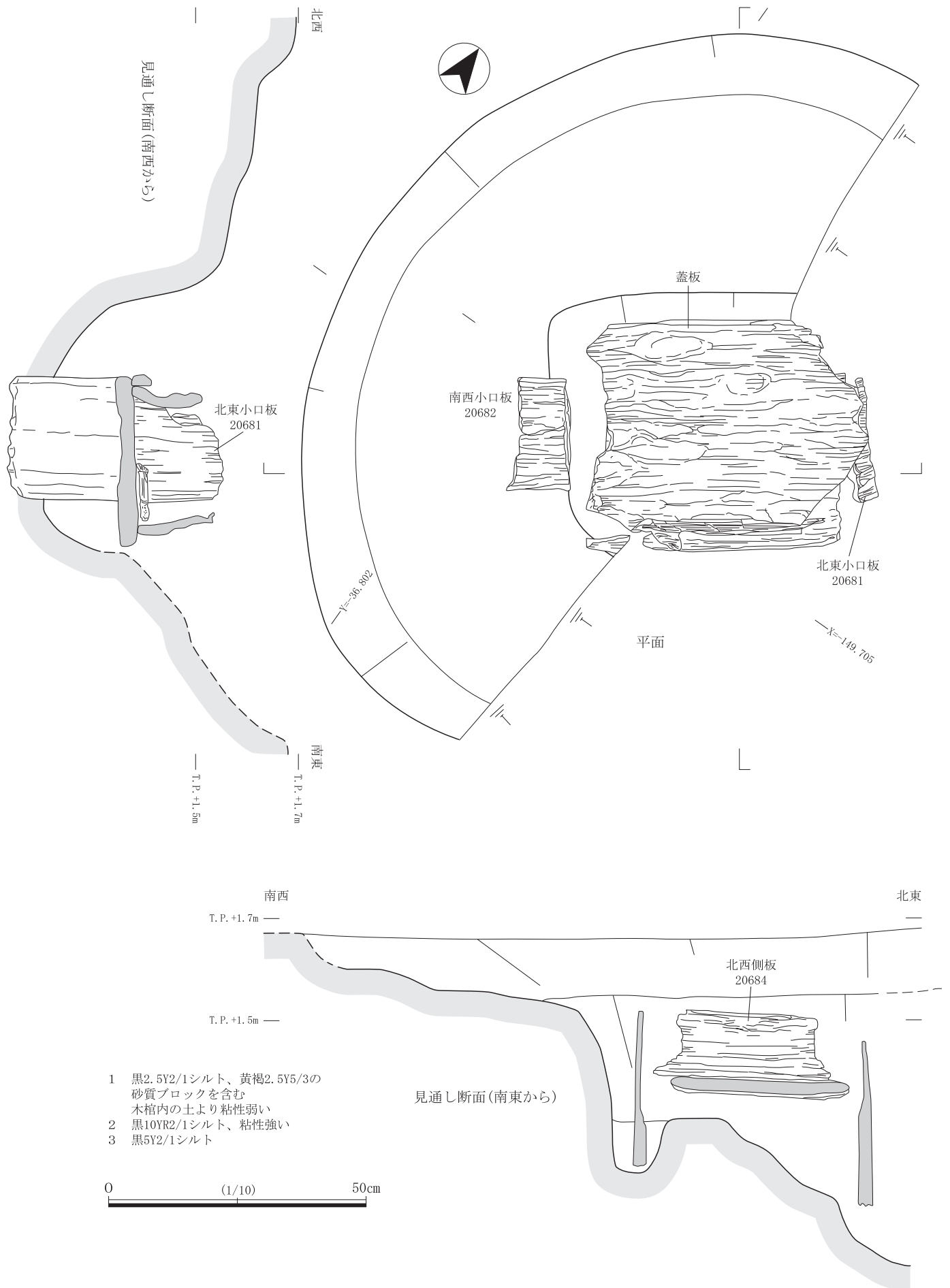


図152 03-1-2区 第9層中検出420木棺

第5章 03-1-2区の調査成果



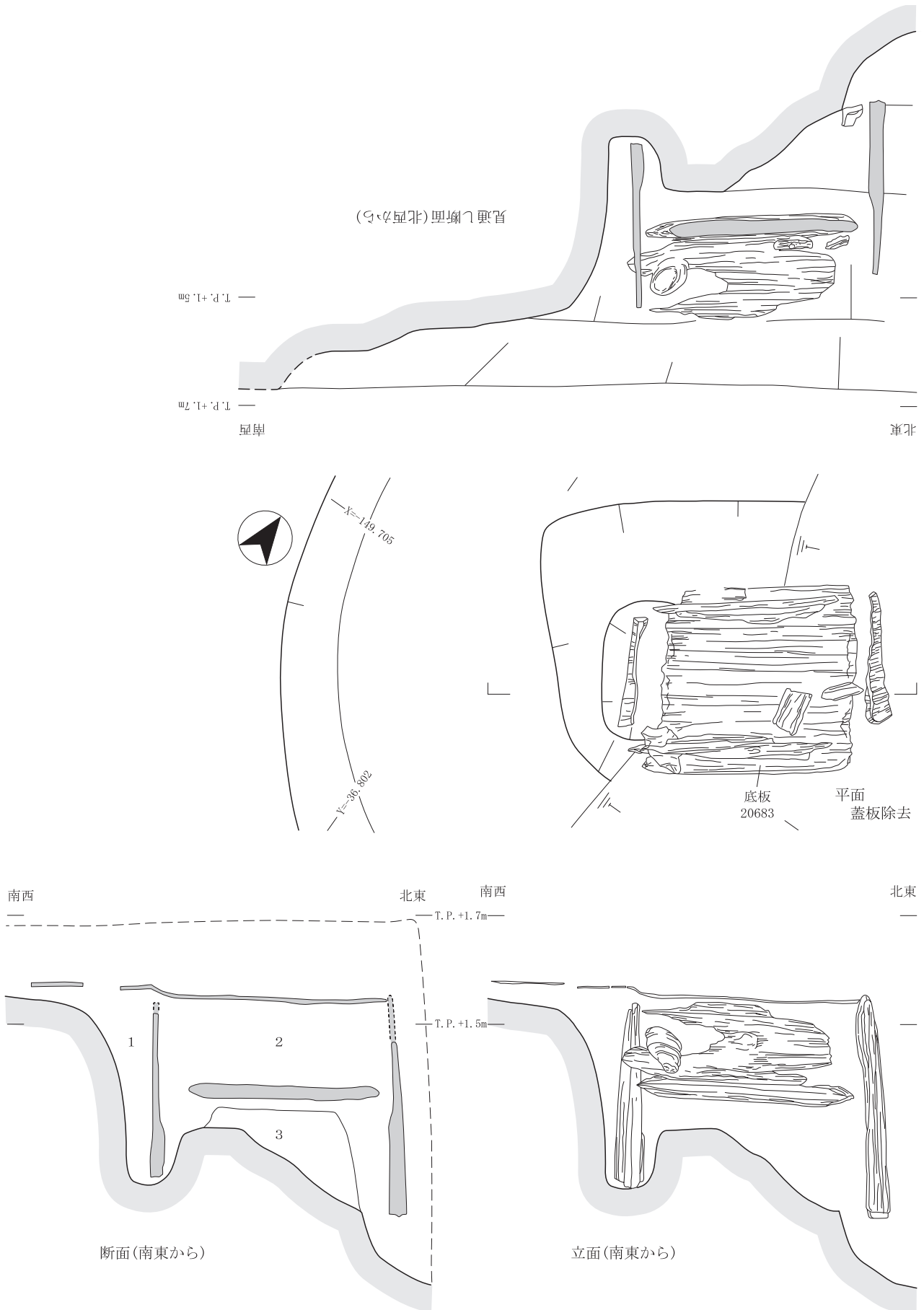


図153 - 1 03 - 1 - 2区 第9面検出421木棺

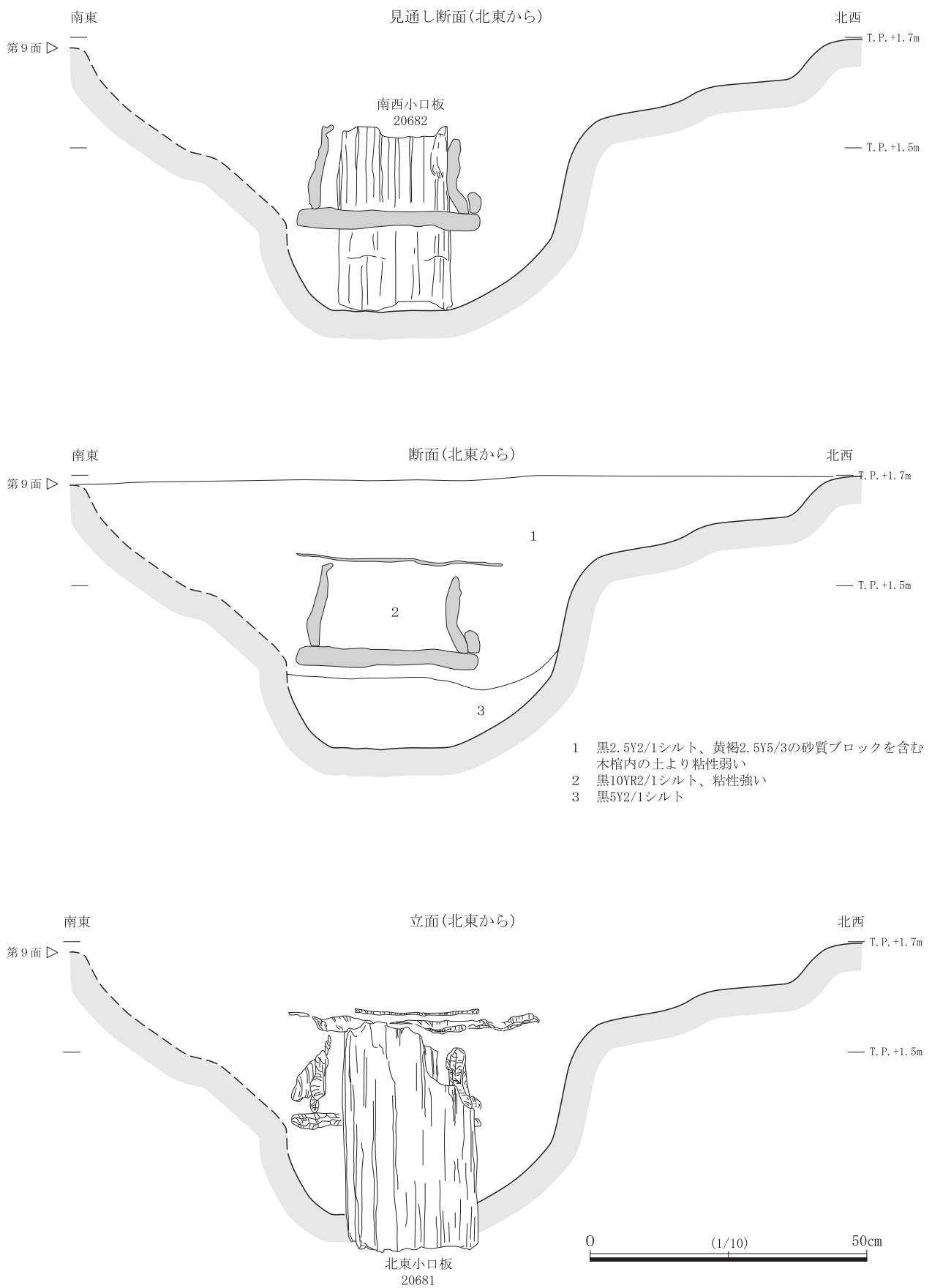


図153-2 03-1-2区 第9面検出421木棺

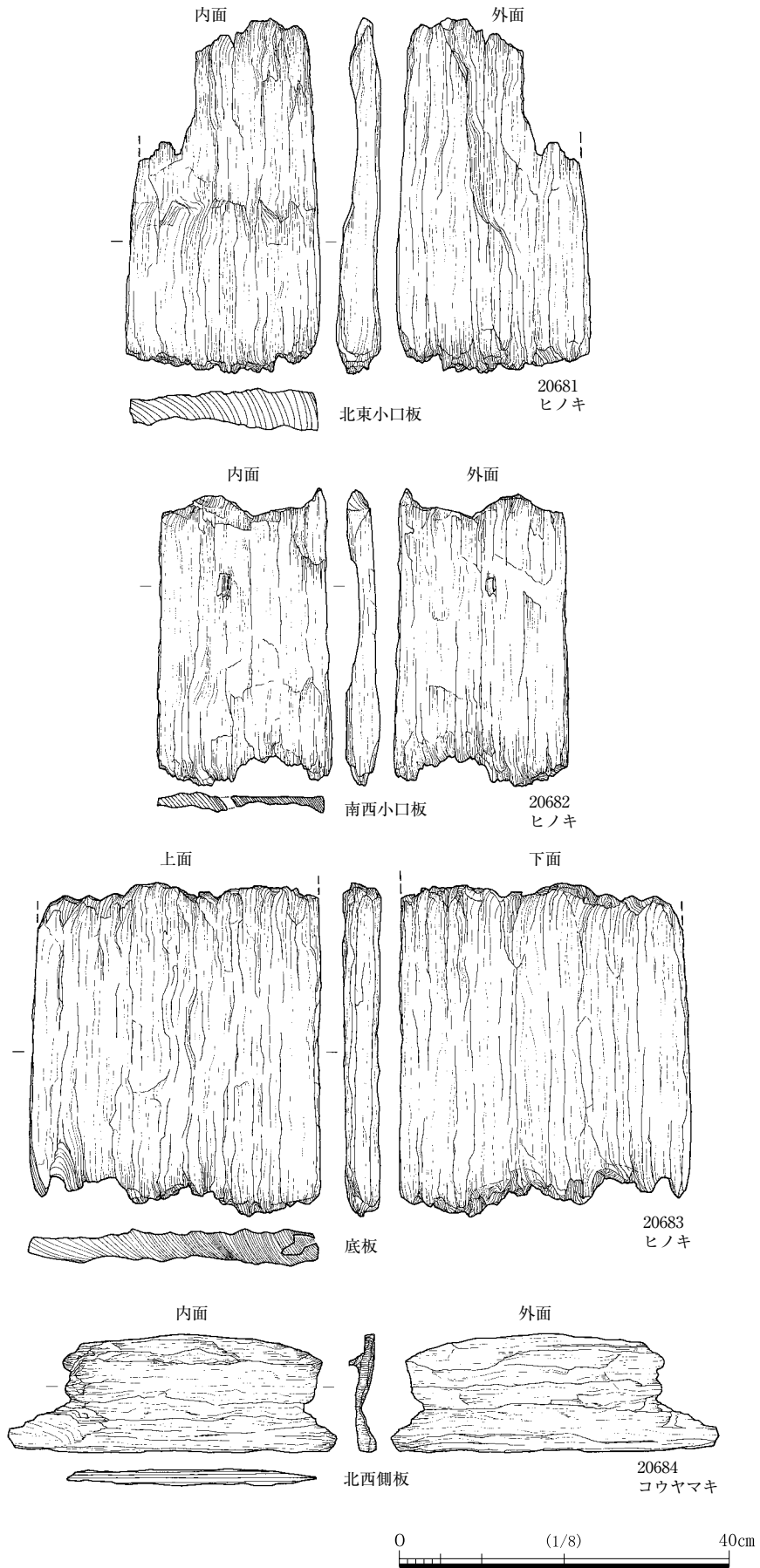


図154 03-1-2区 第9面検出421木棺材

孔が上方、やや中心からずれたところに斜めにあいている。孔の周囲は腐朽しており、木棺構築時からの加工と思われる。

底板20683は長軸40.6cm、短軸35.2cm、厚み4.0cmと方形に近く、小口側の加工もない。北西側板20684は長軸37.7cm、短軸14.1cm、厚み2.0cmで、特に半分ほどの高さで腐朽がすすむ。上部のどっぴりは木材の節の部分が残ったものであろう。

このヒノキの底板を年輪年代測定したところ、紀元前472年という値を得た。ただし、この材には辺材が残っていないので、伐採年代は紀元前472年以降となる（第9章 光谷拓実「山賀遺跡出土木材の年輪年代」参照）。

棺内の埋土は黒10YR2/1シルト、底板下は黒5Y2/1シルト、掘りかたおよび小口穴は黒2.5Y2/1シルトで黄褐2.5Y5/3の砂質ブロックを含む。いずれも黒色のシルトを基本とするが、棺内の粘性が強く、掘りかたは砂が混じる傾向にある。

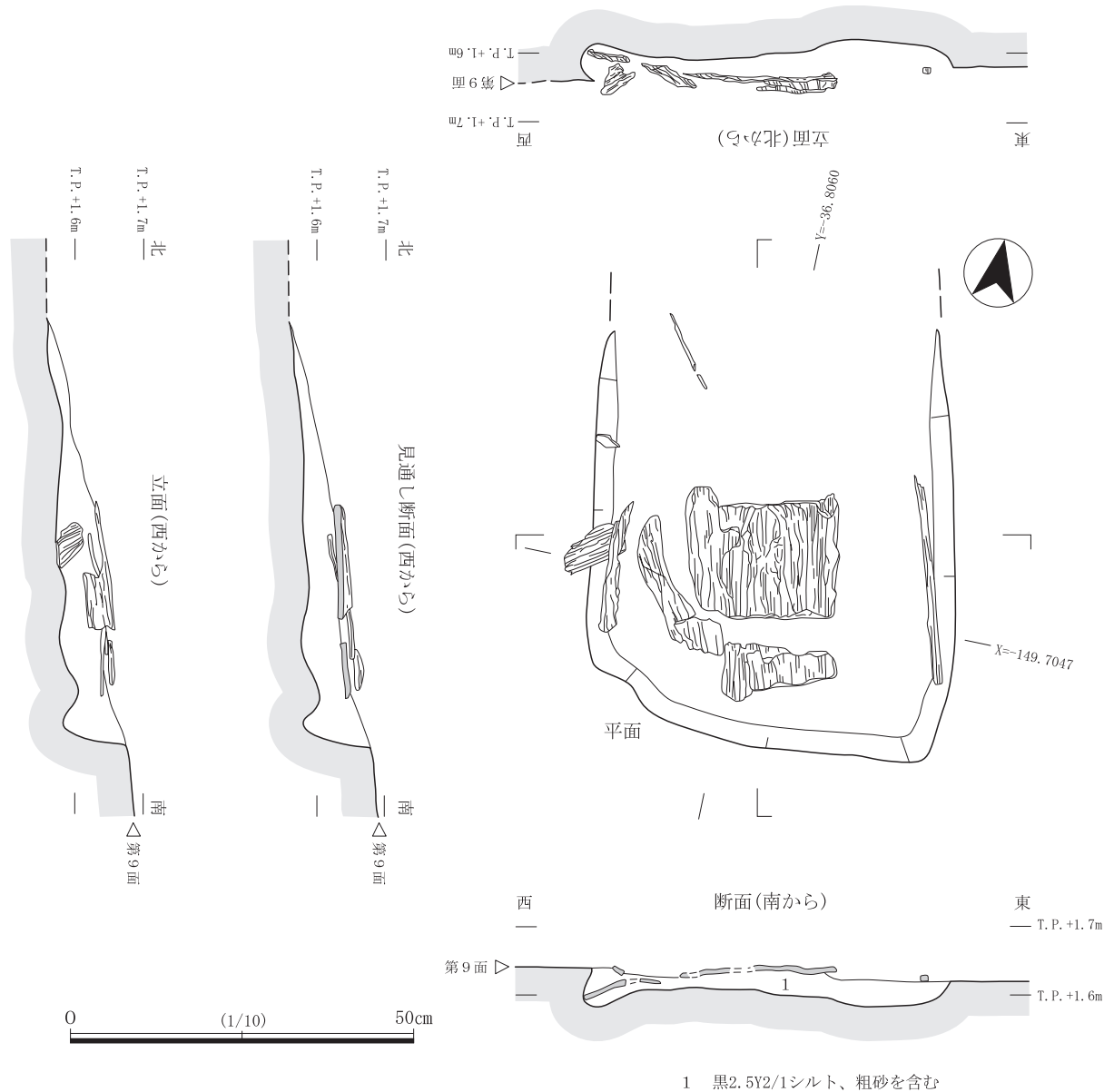


図155 03-1-2区 第9面検出422木棺

出土遺物は、棺内の埋土を水洗して検出した弥生土器小片67片（うちⅠ様式3片、Ⅰ～Ⅱ様式4片）、焼土塊1点、計68点、さらにガマガエルやイノシシの骨、炭化粒多数である。Ⅰ様式の弥生土器には、沈線が2条以上施された壺片などがある。棺内の土器片分布をみると、位置不詳23片、北部16片、東部13片、南部9片、西部6片、と北東部に多い傾向がある。また、掘りかた内からも、弥生土器62片（うちⅠ様式2片、Ⅰ～Ⅱ様式6片、Ⅱ様式2片）とサヌカイト剥片1点が出土した。土器はいずれも小片だが、他の木棺に比べて数は多い。

422木棺（図155・写真図版41） 第9面338高まりからその北側の337溝へ傾斜する斜面に位置する。掘りかたの平面形は長方形と推定される。長さ不明、幅は53cm。木棺内法は不詳。主軸方位はほぼ南北（北10°西）。

底板と思しき板などを検出したが、遺存状態は悪い。側版を埋め込んだ溝や小口穴は見当たらない。墓壙中央部と西側の材をサンプリングして鑑定を試みたものの、樹種は判明しなかった。

底板下の埋土は、黒2.5Y2/1シルトに粗砂を含む。

遺存状況が悪かったこともあり、棺内の遺物は弥生土器小片3片と小礫1個のみ。底板下からは、弥生土器9片（うちⅠ～Ⅱ様式2片）出土した。

423木棺（図156・写真図版41） 第9面から約2cm下の第9面338高まり内で掘りかたラインの一部を検出した。さらに1～2cm下から材が出土したが、材の南側以外では掘りかたのラインを追えなかった。

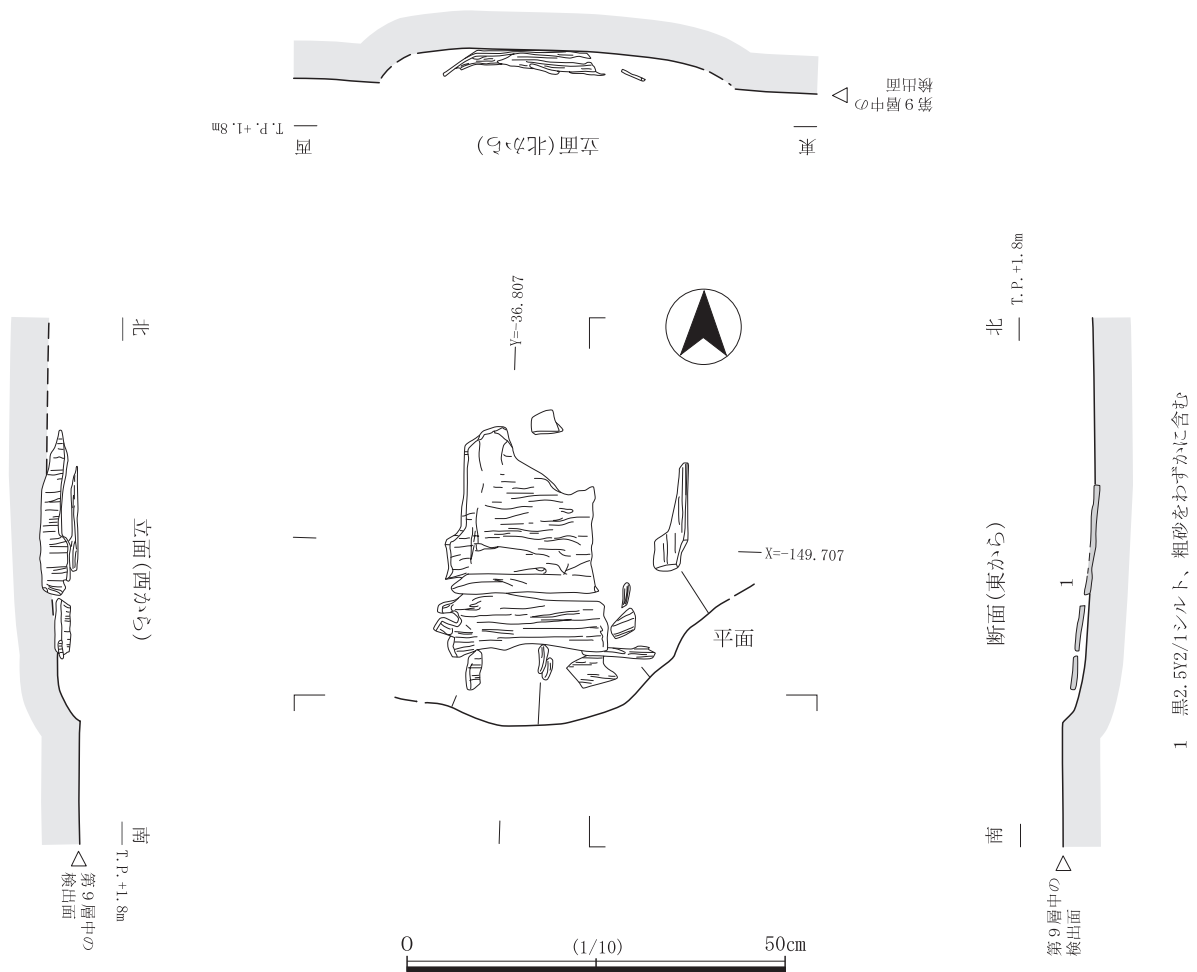


図156 03-1-2区 第9層中検出423木棺



したがって、平面形や規模は不明。主軸方位も、ほぼ南北（北5°西）または東西（北85°東）と推定できるが判然としない。

底板と考えられる材は現況で南北30cm、東西23cm。鑑定を試みたが、樹種不明。その他、小木片が南および東側に散在する。小口穴は見当たらない。

422木棺よりもさらに遺存状況が悪く、棺内・掘りかたともに遺物は検出できなかった。

以上の325・420・421・422・423木棺周辺を含む338高まり内からの出土遺物は、弥生土器3740片（うちⅠ様式305片、Ⅰ～Ⅱ様式257片、Ⅱ様式147片）、転用土製円板6点、石庖丁1点、石錘1点、砥石4点、磨石1点、石鏃3点、石錐4点、削器10点、サヌカイト剥片60点、石核1点、礫22個、焼土塊2点、木の枝1点、実1点、計3857点と骨・歯である。

それらのうち各木棺の周辺ごとに細分すると、以下のようになる。

325木棺周辺の第9面338高まり内から、弥生土器1150片（うちⅠ様式104片、Ⅰ～Ⅱ様式67片、Ⅱ様式31片）、転用土製円板2点、磨石1点、石鏃2点、石錐2点、楔3点、サヌカイト剥片22点、中礫6個、小礫10個、炭化した木の枝1本、焼土塊1点、計1200点出土。

図157-20685・20686は長頸の壺頸部。20685はヘラ描き沈線7条を2帯施し、沈線文帯の境に刻み目を入れる。上部は綾杉文、下部は垂直な刻み目である。文様帯の上下の沈線はややためにひかれている。20686は沈線と刻み目によって格子状となった文様帯が2帯残る。基本的な施文は、横位の沈線をひいた後、沈線1条をまたぐように縦位の刻み目を入れるものである。20685より沈線が浅い。いずれもⅠ-4様式であろう。

20687も壺の頸部。刻み目のある貼り付け突帯が横位に2条、縦位に3条。Ⅰ-3～4様式。

20688は壺の底部。Ⅰ～Ⅱ様式。

20689～20692はサヌカイト製の打製石器。20689・20690は石鏃。20691・20692は石錐。20691は調整が基部にもおよび、錐部の側縁には回転痕がよく残る。

420木棺周辺の第9面338高まり内から、弥生土器49片（うちⅠ様式5片、Ⅰ～Ⅱ様式5片、Ⅱ様式2片）と砥石1点が出土。

421木棺周辺の第9面338高まり内から、弥生土器206片（うちⅠ様式16片、Ⅰ～Ⅱ様式10片、Ⅱ様式2片）、削器3点、サヌカイト剥片2点、小礫1個、計212点と骨・歯が出土。

422木棺周辺の第9面338高まり内から、弥生土器29片（うちⅠ様式5片）、転用土製円板1点、石鏃1点、石核1点、サヌカイト剥片1点、計33点出土した。

図157-20693は石鏃。凹基無茎式で比較的形の整ったもの。

423木棺周辺の第9面338高まり内から、弥生土器15片（うちⅠ～Ⅱ様式3片）出土。

このほか338高まり内からは図157-20694～20702が出土した。20694（写真図版102）は口径17.4cm、器高23.0cmのやや小ぶりの甕。口縁部はなだらかにひらき、底部はナデによって中央が凹む。外面頸部は斜めに、体部は下から上へとヘラケズリを全面に施し、ごく粗いミガキを入れる。外面は全面に煤が、内面は下部3分の1に煤と炭化物が付着する。Ⅱ様式。

20695は甕。外面を縦ハケと口縁直下のみ横ハケ、内面を横ハケとハケ原体による波状文を施す。口縁端部は下方へ拡張し、上下に刻み目が施される。胎土は白色系統で淀川水系のものか。Ⅱ様式。なお、20776（第9-2面488溝出土）とは同一個体の可能性がある。

20696も甕。外面縦ハケ、内面横ハケによる調整で、口縁端部には刻み目が施される。外面口縁直下

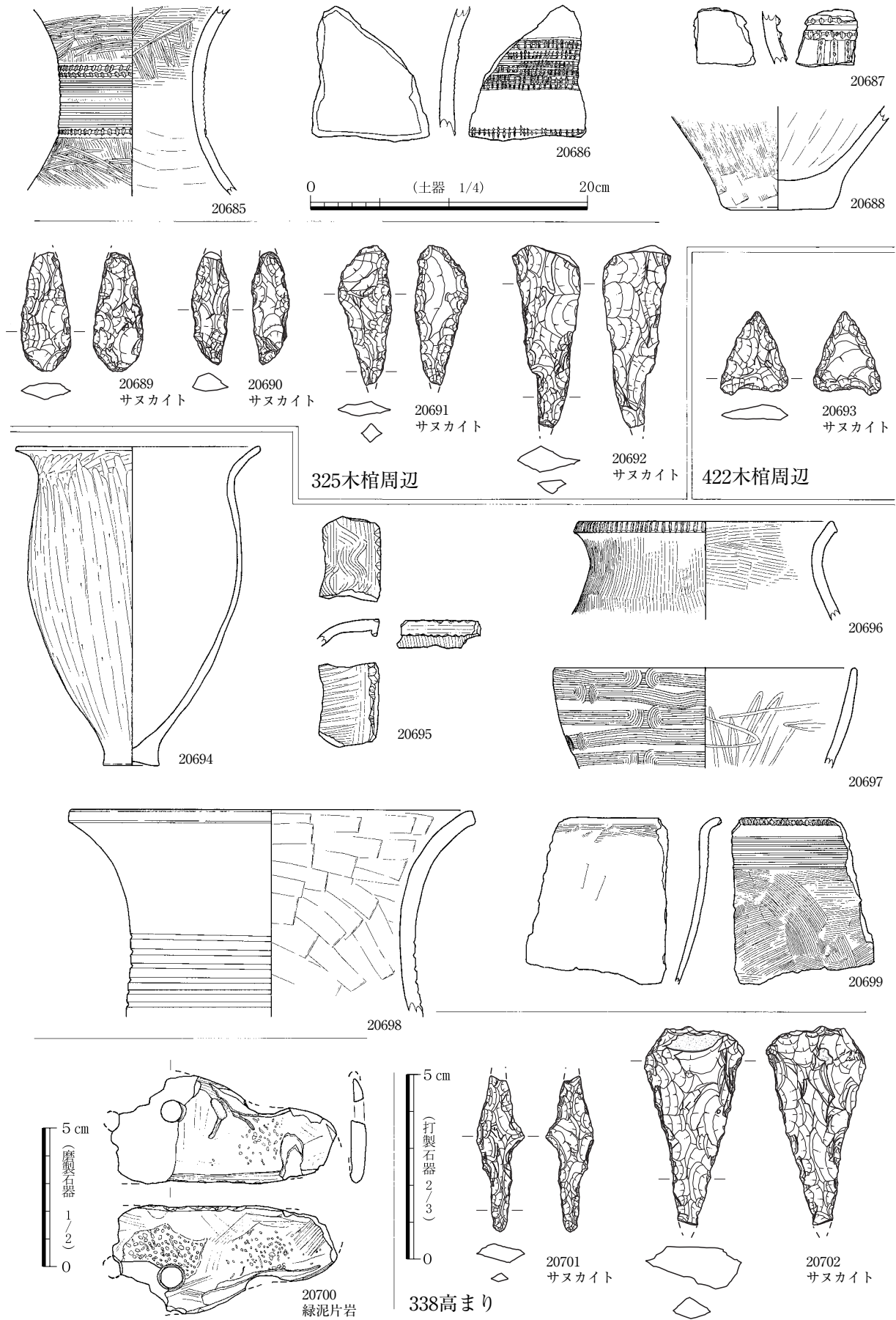
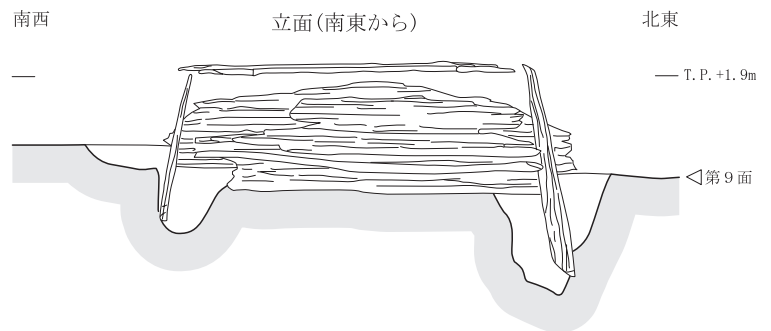
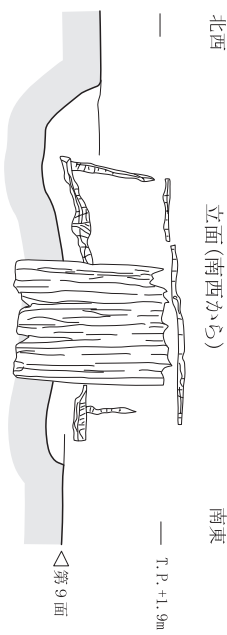
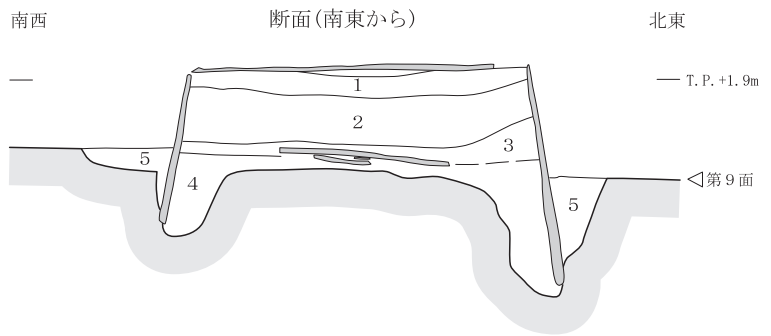
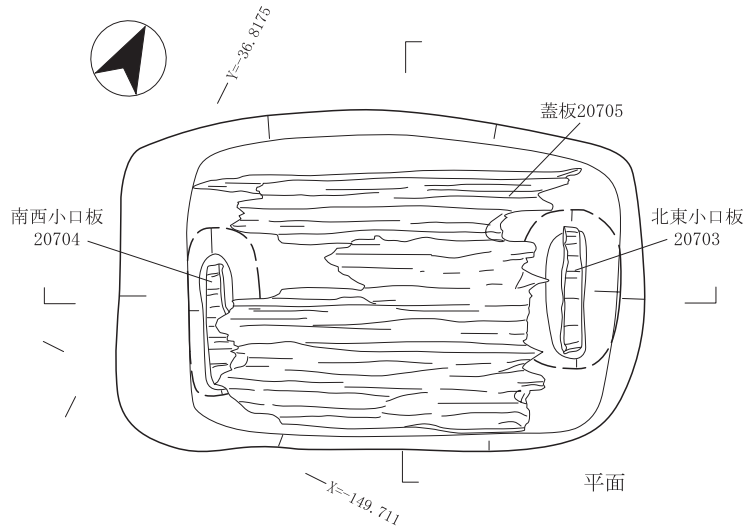
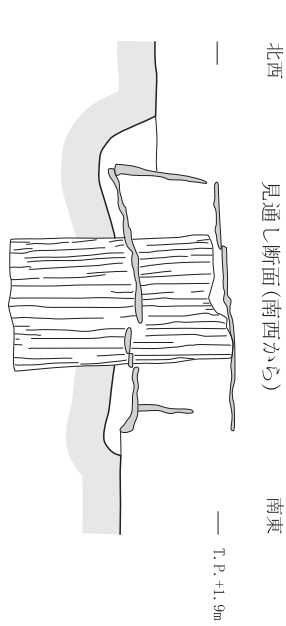
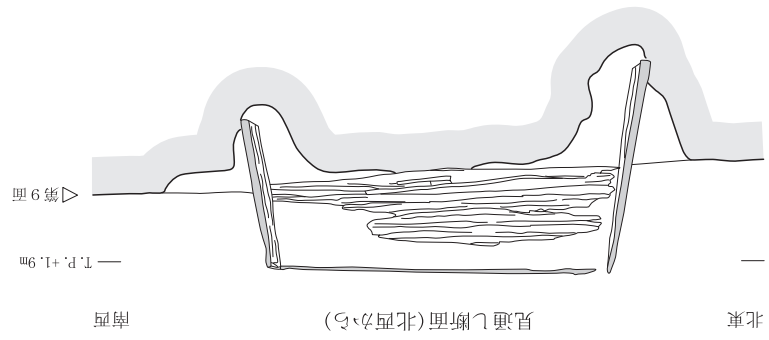


図157 03-1-2区 第9面325・422木棺周辺、338高まり出土遺物



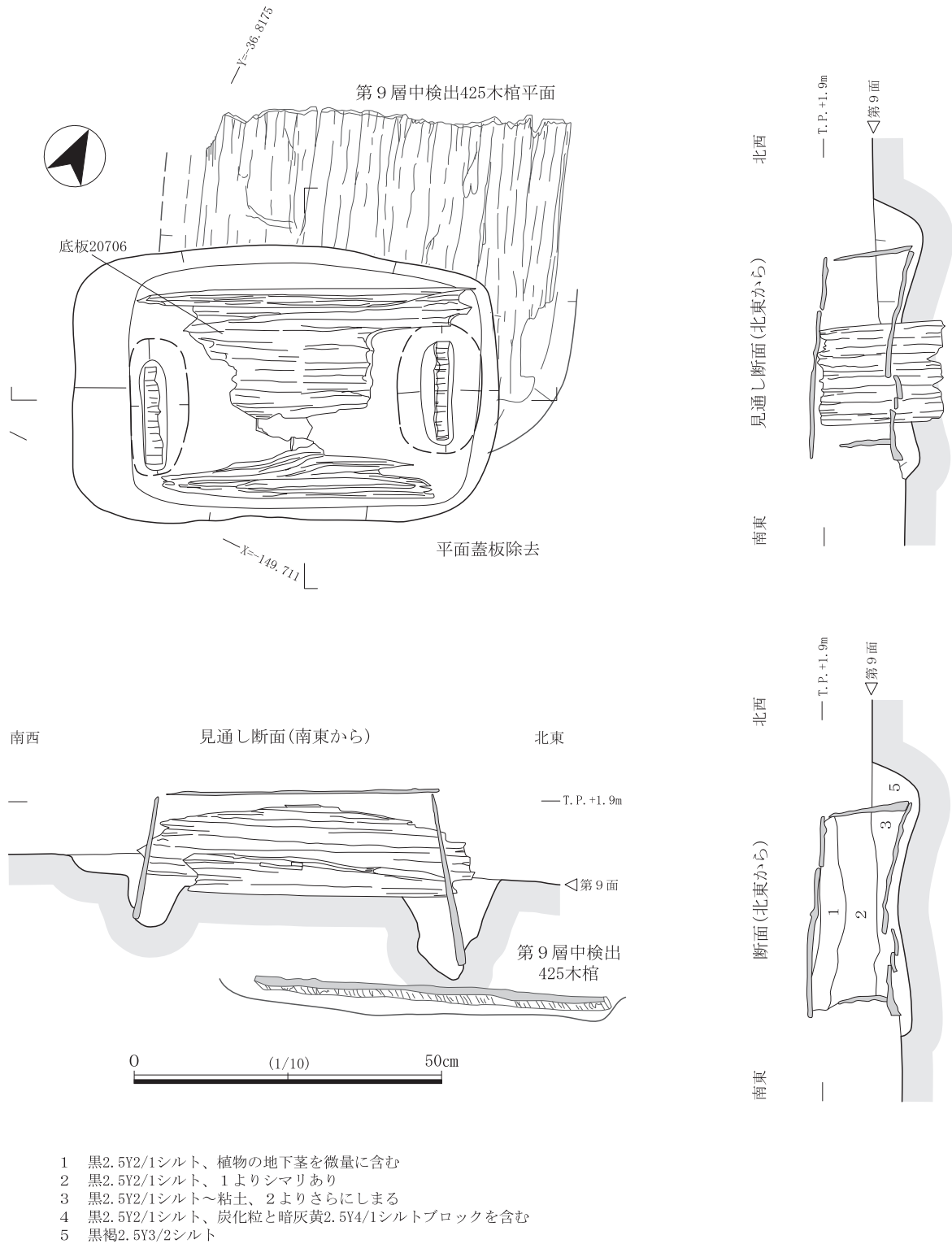


図158 03 - 1 - 2区 第9面検出324木棺

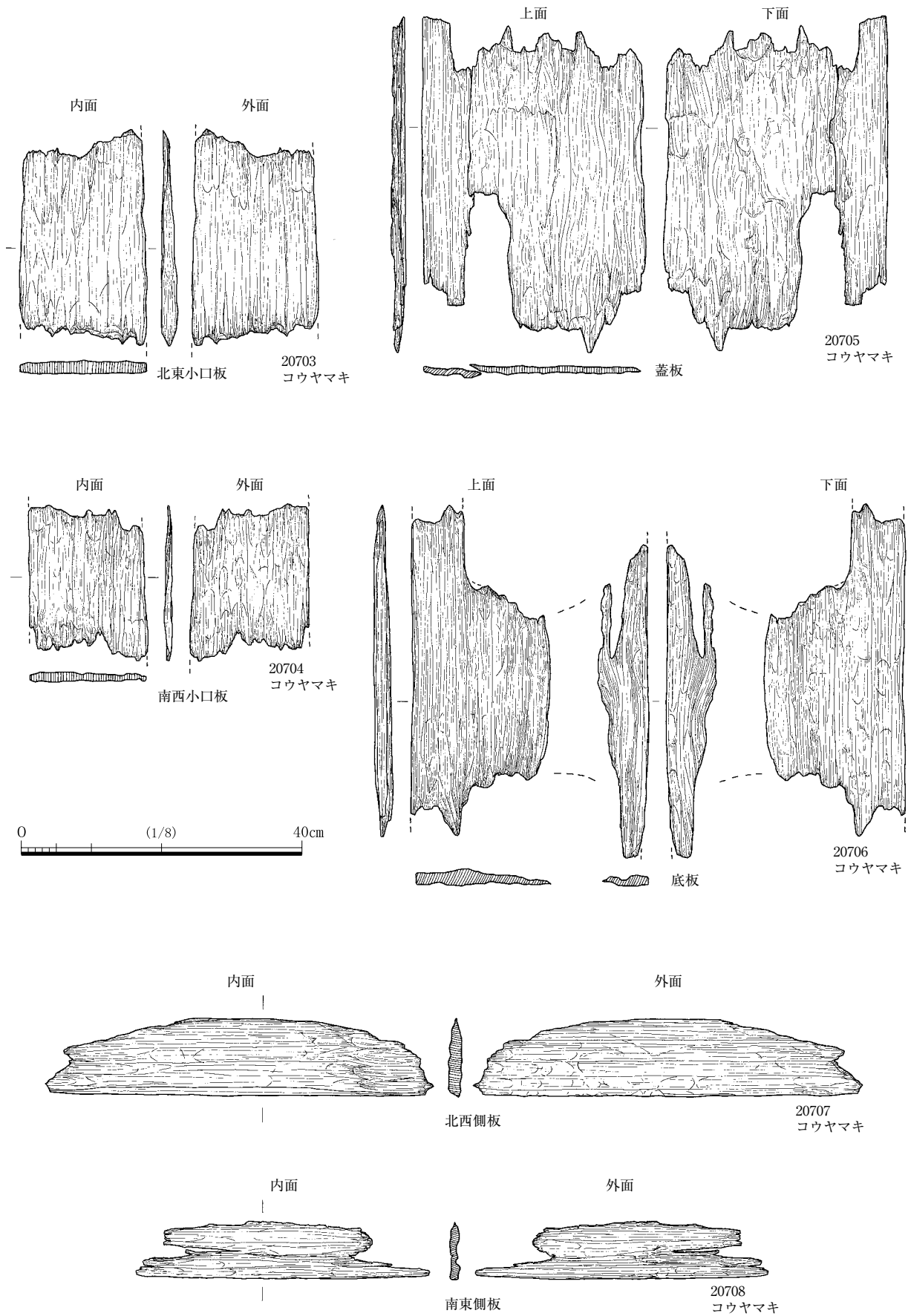


図159 03-1-2区 第9面検出324木棺材

はナデによって整形される。胎土は白色系で淀川水系からの搬入品か。Ⅱ様式。

20697は鉢。深い体部は外傾気味で、端部はまるみをもつ。クシ描き直線文と扇形文によって、擬似流水文が描かれる。Ⅱ - 1～2様式か。前述したように第6面250高まり出土の20438と同一個体である。

20698は太頸の広口壺。頸部には沈線6条以上が施される。調整は粗く、内面には工具痕を残す。Ⅰ - 3～4様式。20699は甕。口縁下の沈線は8条でⅠ - 3～4様式。

20700は石庖丁。緑泥片岩製で背部を欠損する。片刃で敲打痕をよく残す。刃部は一部潰されている。

20701・20702は石錐。20701は棒状で中央に鋭い突起をつくる。上部を欠損するが、両端ともに錐部としたものであろう。20702は基部に原礫面を残すが、調整は両辺に及ぶ。

366高まりは、調査区南西部に位置する。この高まり上で324・367・424木棺を、さらに366高まり内からも425・426・427・428木棺を検出した。

324木棺（図158・159 写真図版37・100）掘りかたの平面形は隅丸長方形で、長径69cm、短径44cm。木棺内法は、長さ44cm、幅29cm、深さ10cm。主軸方位は、366高まりの長軸と同様に東北東 - 西南西（北65°東）である。

個々の残りは良くないものの、蓋板・底板各1枚、側板・小口板各2枚、全ての棺材を取り上げることができた。側板は底板に載る。底板の両短辺には、小口板を立てるための切り込みがある。小口板は底板よりも9～16cm下まで埋め込まれている。棺材は全てコウヤマキ。

図159・写真図版100 - 20703は北東小口板、20704は南西小口板、20705は蓋板、20706は底板、20707は北西側板、20708は南東側板である。

北東小口板20703は長軸31.0cm、短軸18.0cm、厚み2.2cm、南西小口板20704は長軸22.2cm、短軸17.0cm、厚み1.4cm。後者が短くやや小ぶりだが、もとはほぼ同じサイズであったらう。

蓋板20705は2材に分かれる。2材は0.8cmほど重複しているが、全体で長軸47.8cm、短軸31.8cm、厚み1.0cmとなる。重なりあっていたことや木目の関係から考えると、もともと2枚の板を利用していたものであろう。

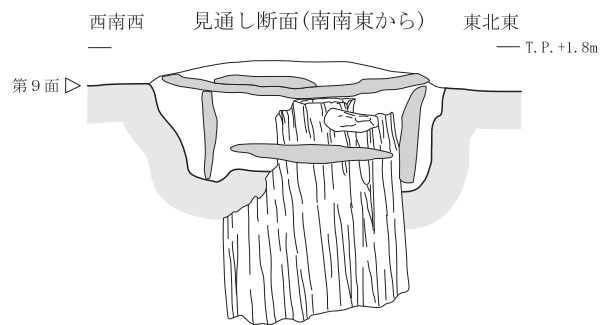
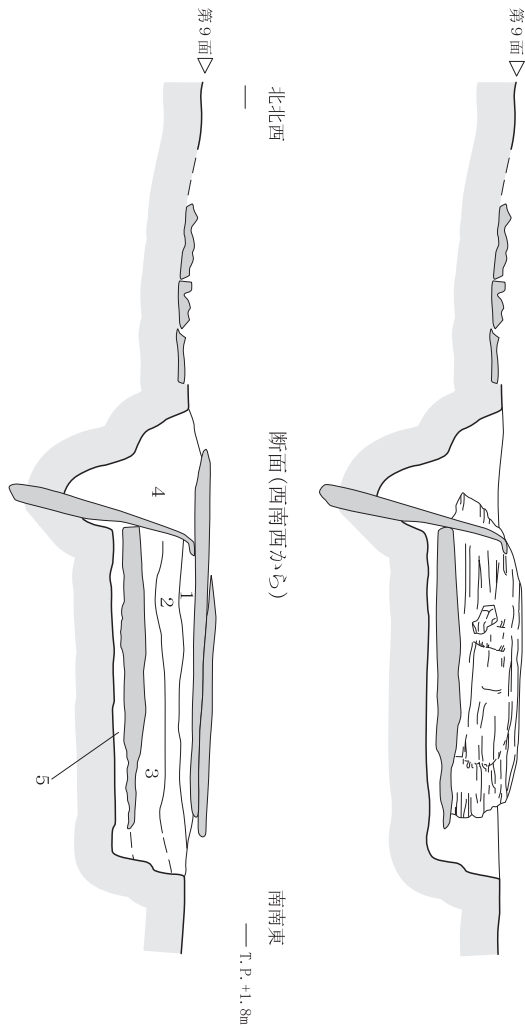
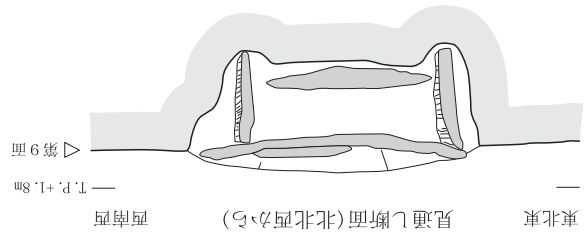
底板20706も2材に分かれるが、これは中央部が腐朽したことによるもので、もとは一枚板であったものと考えられる。長軸50.4cm、短軸は復原で34cm、厚み2.4cm（個別では北西側47.2×19.6cm、厚み2.4cm、南東側44.6×7.0cm、厚み1.6cm）を測る。蓋板とほぼ同じサイズである。

北西側板20707は長軸55.2cm、短軸11.0cm、厚み2.0cm。南東側板20708は長軸41.6cm、短軸8.2cm、厚み1.2cm。大きさが異なるのは腐朽の度合いによるものと考えられる。木材はすべて柾目材を用いる。加工痕などは確認できなかった。

棺内の埋土は黒2.5Y2/1シルトを基本とするが、上部には植物の地下茎が含まれ、下部に向かうにつれてしまりが強くなり、下部では粘土に近くなる。小口穴も棺内と似た埋土だが、炭化粒と暗灰黄2.5Y4/1シルトのブロックが混じる。掘りかた内は黒褐2.5Y3/2シルト。

棺内から、弥生土器20片（いずれも小片）、サヌカイト剥片4点、炭化粒11点、計35点出土した。これらは棺内の土を水洗して得たものである。人骨は出土していない。また、掘りかた内からも弥生土器2片が出土した。

367木棺（図160・161 写真図版38・101）324木棺の西南西約0.8mに位置する。掘りかたの平面形はほぼ長方形で、長径63cm、短径41cm。木棺内法は、長さ39cm、幅24cm、深さは6cmしかない。主軸方位



0 (1/10) 50cm

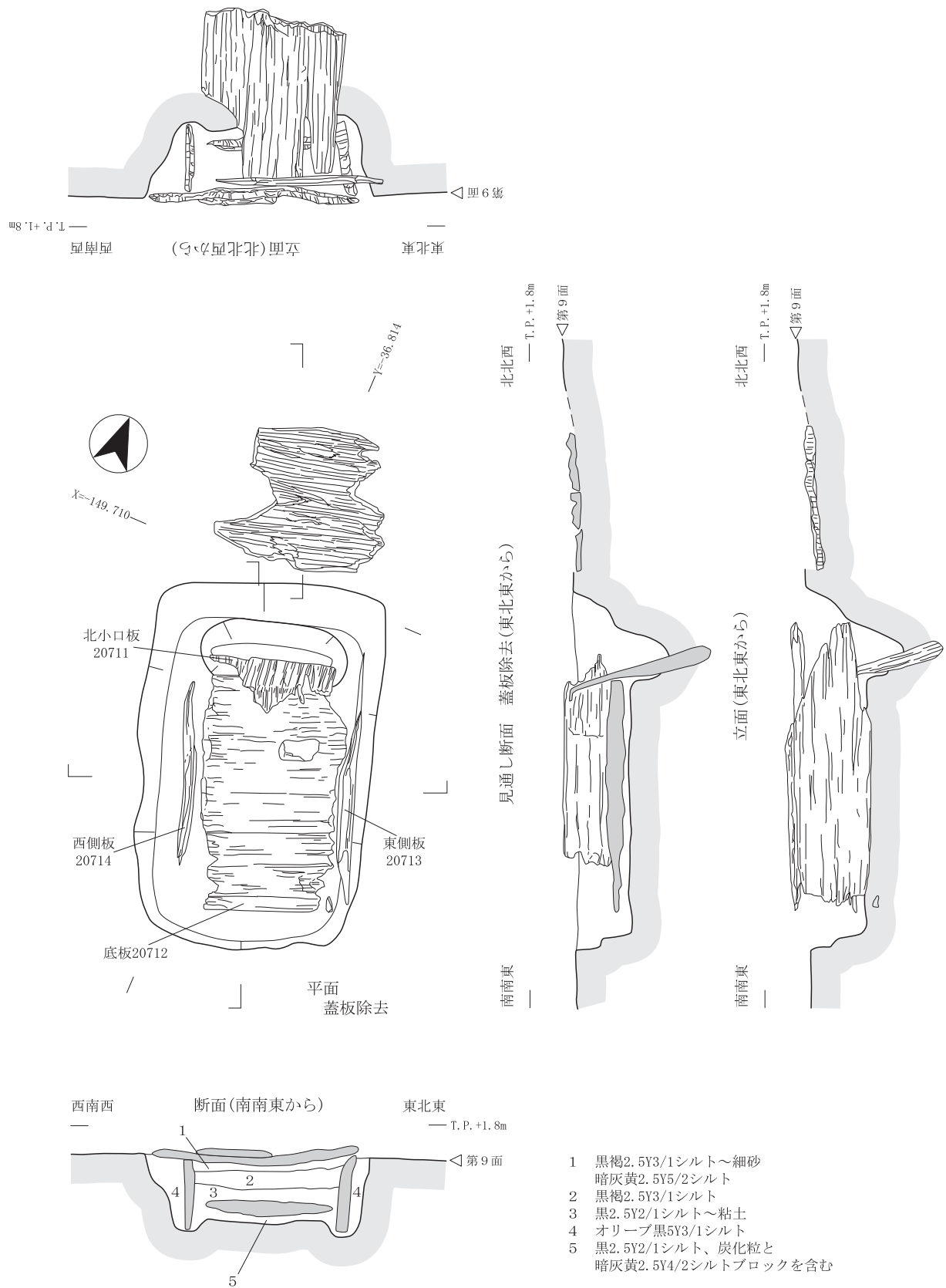


図160 03 - 1 - 2区 第9面検出367木棺



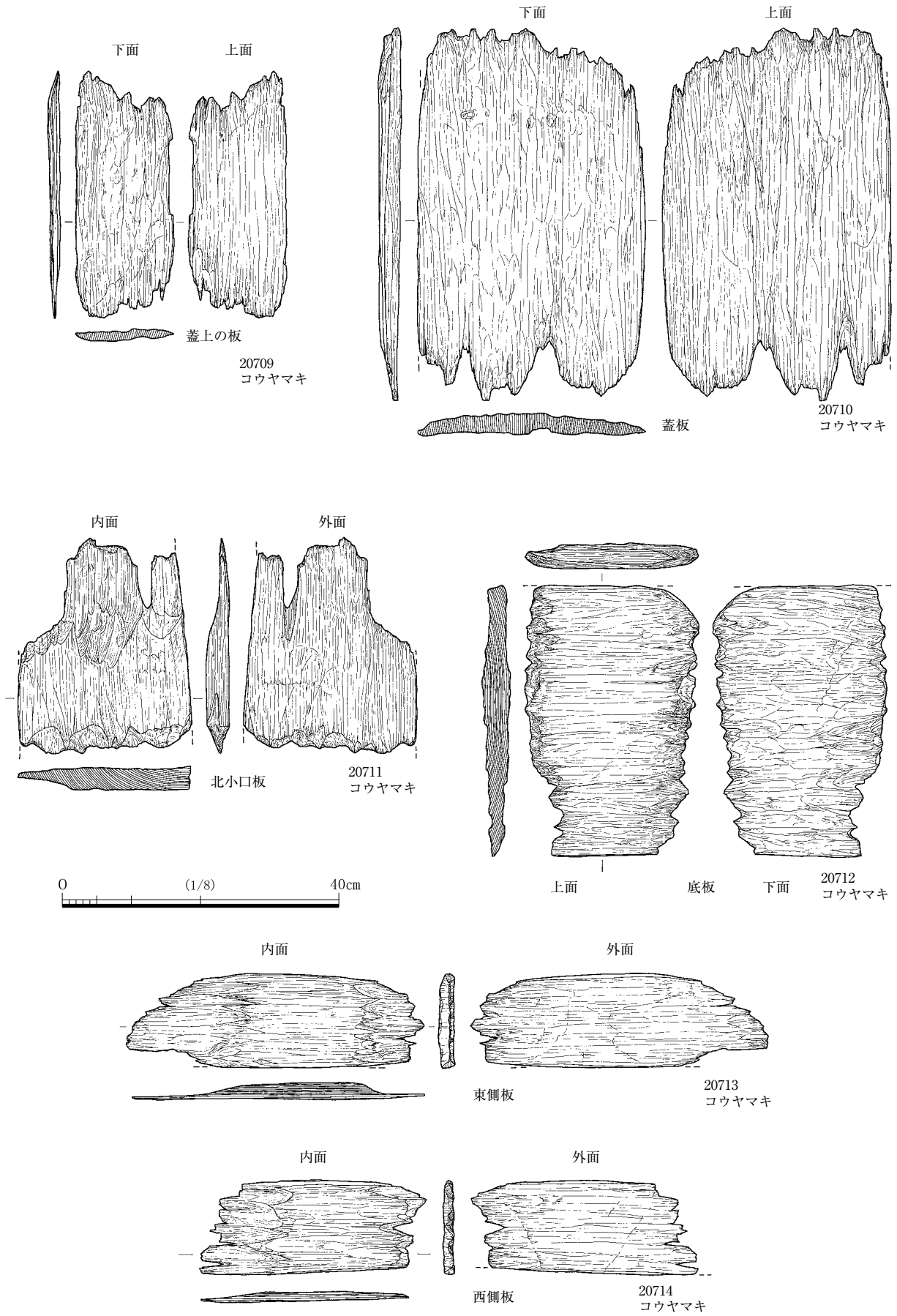


図161 03-1-2区 第9面検出367木棺材

は北北西・南南東（北20°西）で、324木棺および366高まりの長軸とほぼ直交する。

蓋板・底板・両側板・北小口板とも残りは良く、さらに蓋板上と墓壙北西側にも板材が伴っていた。側板は底板に載らず、底板の長辺に外接している。側板が墓壙底に接する部分は底板下の墓壙底よりも2cm程度深くなっている。底板は短径方向に木目が走る木取りで、小口板のための切り欠きはない。北小口板は小口穴の底よりも深く、底板下15cmまで打ち込まれている。棺材は全てコウヤマキ。北の小口穴・板ともにしっかりとしており、かつ他の部材が良好に遺存しているにもかかわらず、南側の小口板を欠いている。

南東小口板以外はすべて図化できた（図161・写真図版101）。20709は蓋の上にあった板。長軸35.8cm、短軸13.0cm、厚み1.4cmで小口板としても利用できそうな材である。

20710は蓋板、20711は北小口板、20712は底板、20713は東の、20714は西の側板。

蓋板20710は長軸54.0cm、短軸33.0cm、厚み3.2cm。北小口板20711は長軸31.2cm、短軸25.0cm、厚み3.3cm。かなり厚みのある材だが、上方の腐朽が著しい。底板20712は長軸37.0cm、短軸25.0cm、厚み2.0cm。厚みはあるが、蓋板と比べて小さな材を使う。

東側板20713は長軸42.0cm、短軸13.6cm、厚み2.4cm。西側板20714は長軸32.8cm、短軸13.6cm、厚み1.5cmを測る。長軸の違いは腐朽によるものと考え、側板はほぼ同じ大きさの材を用いている。

木取りは北小口20711と底板20712では板目で、柁目材であるほかの棺材と異なっている。

棺内の埋土は、上部は黒褐2.5Y3/1シルト～細砂と暗灰黄2.5Y5/2シルト、中部は黒褐2.5Y3/1シルト、下部は黒2.5Y2/1シルト～粘土と、下層ほど密度と黒味が強くなる傾向にある。底板下は黒2.5Y2/1シルトに暗灰黄2.5Y4/2シルトブロックが混じる。掘りかた内はオリブ黒5Y3/1シルト。

棺内の埋土を全て水洗した結果、弥生土器小片4片と歯1点を検出した。底板下および掘りかたからは遺物は出土しなかった。

なお、墓壙北西側の板材は、367木棺の蓋板の北北西の延長上にほぼ同レベルから出土したものだが、周囲に掘りかたも認められず、性格不明である。

424木棺（図162 写真図版42・43） 367木棺の東北東約1.8m、第9面366高まりの北東端に位置する。この木棺を検出する以前、第8層掘削中にヒトの頭蓋骨が出土した。ただちにその周辺を精査したが、墓壙などが見つからなかったため、出土位置を記録して骨を取り上げた。後日その直下で424木棺を検出し、座標値から相互の位置関係が判明した。さらに、人骨写真撮影の際に骨を含む土の割れ口同士が一致し、図162に示す位置関係が完全に復原できた。

検出できた掘りかたの平面形は不整形で、長径76cm以上、短径73cm。深さ20cm。木棺内法は、長さ57cm以上、幅47cm、高さ6cm。頭位方向は東（北85°東）である。

蓋板や小口板は検出できなかった。北側の材が側板だとすれば墓壙底に落ち込んでいる。南側板は、痕跡的ではあるが底板よりも外側に立った状態が見て取れる。底板の残りも悪く、小口の形態も不明、サンプリングしたが樹種の鑑定はできなかった。墓壙底に小口穴はない。

埋土は、底板より上を黒2.5Y2/1シルト、底板下を黒褐2.5Y3/2シルトに分けたが、棺内と掘りかたの識別も困難であった。

棺内から、膝関節を屈曲させた小児（7才前後）のほぼ全身骨格と2体分の成人の歯（第9章 安部みき子「山賀遺跡出土の人骨」参照）を検出した。他に、弥生土器小片12片（うちI様式1片、I～II様式1片）とサヌカイト剥片1点が出土した。I様式の弥生土器は、ヘラ描き沈線4条以上の壺片。掘

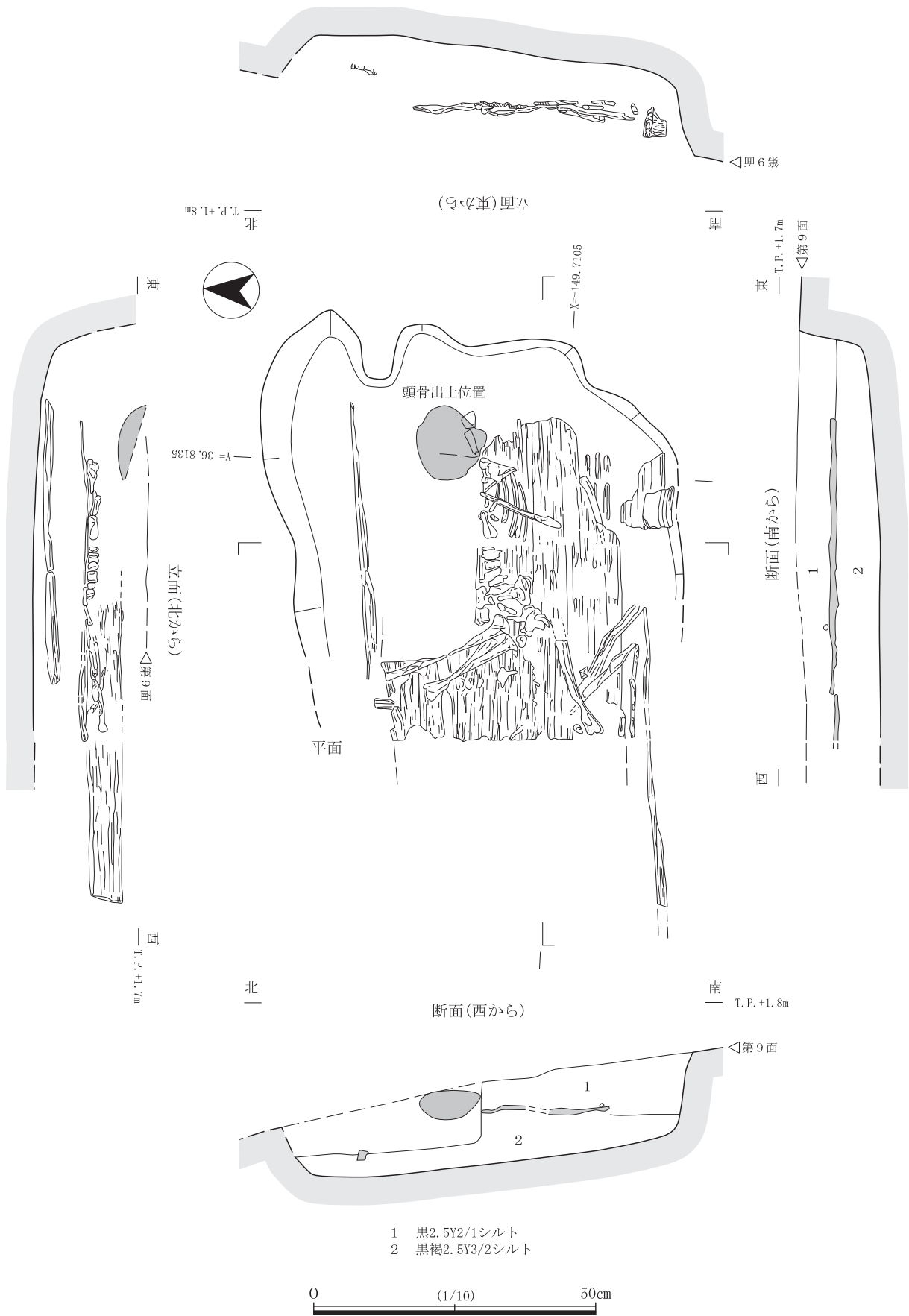


図162 03-1-2区 第9面検出424木棺

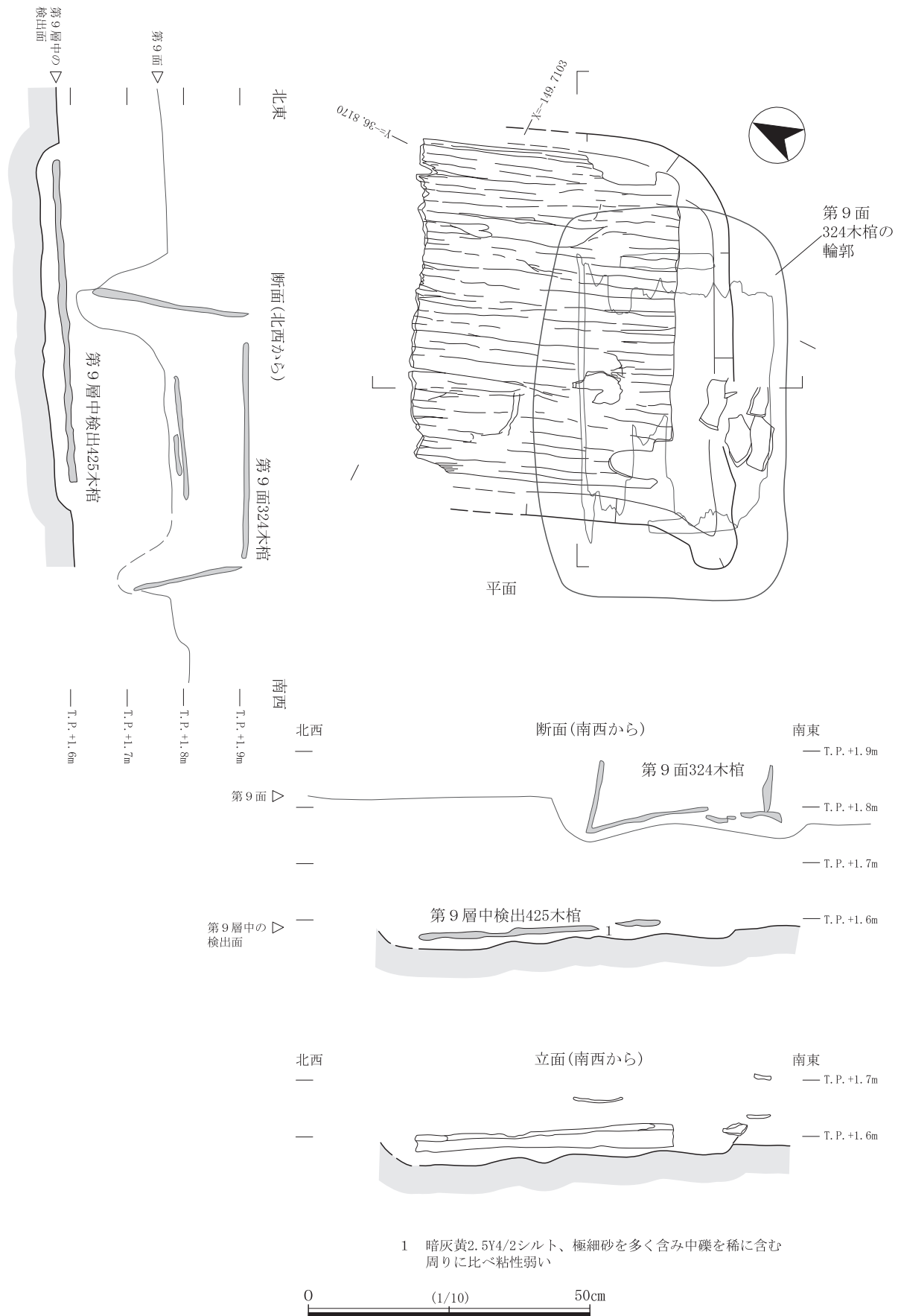


図163 03-1-2区 第9層検出425木棺

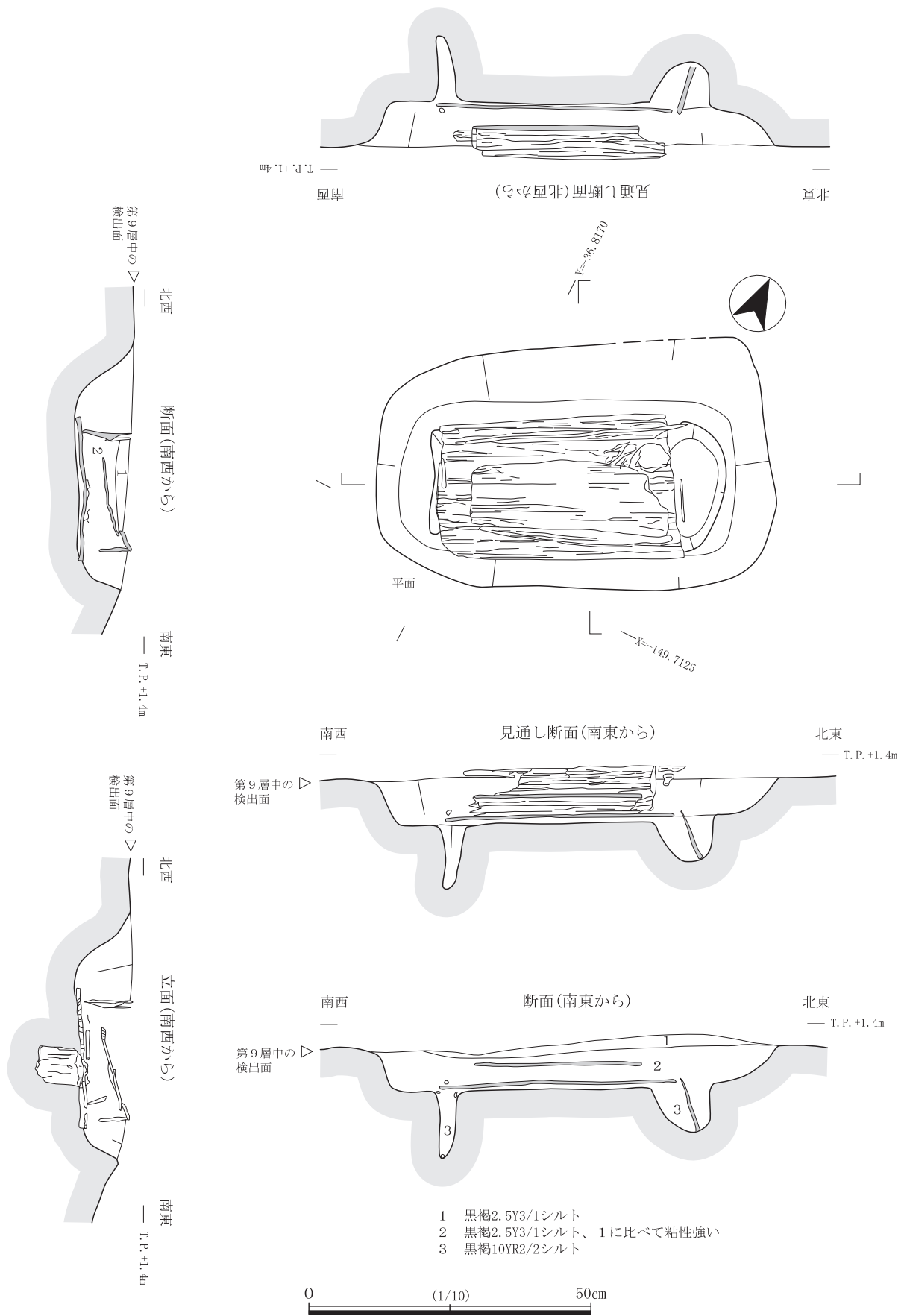


図164 03-1-2区 第9層中検出426木棺

りかた内の遺物は、弥生土器4片（うちⅡ様式1片）のみ。Ⅱ様式の弥生土器は、クシ描き直線文のみられる壺頸部である。

425木棺（図163・写真図版43） 366高まり掘削中に、324木棺底板の16cm下で、長さ58cm、幅47cm、厚み1cmの板が出土した。その高さで周辺を精査したところ、南東側で半周ほど掘りかたらしきラインを検出できた。南角が少し突出した隅丸長方形と考えられる。板の長径を主軸方位とすると、366高まりと同様に東北東-西南西（北65°東）となる。

木棺の底板と思しき材は遺物としての取り上げには耐えられなかったが、サンプルを鑑定した結果スギと判明した。蓋・側・小口に相当する部材や小口穴は見当たらなかった。

板1枚のみの検出なので、棺内からと認識できた遺物はない。ただし、第9面検出324木棺とこの第9層中検出425木棺との間から、弥生土器19片（うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式2片）が出土している。

426・427・428木棺は、調査区南西部、第9面366高まりの南斜面に位置し、東北東から428木棺、426木棺、427木棺の順に並ぶ。主軸方位は、基本的に366高まりの長軸と同じ。

426木棺（図164・写真図版44） 第9面から1～8cm下層の366高まり内で検出した。掘りかたは北東側がやや幅広の平面隅丸長方形で、長径70cm、短径44cm。棺の内法は、長さ径41cm。幅は北東側で18cm、南西側で14cmと、墓壙同様に北東側の幅が広い。主軸方位は東北東-西南西（北65°東）。

南西小口以外の板は、痕跡的ではあるが残っていた。蓋板は長さ35cm、幅15cm、厚み0.5cmと小さく、棺内に落ち込んでいた。側板は底板に載る。底板の両端とも小口板の切り込みはない。北東小口板は底

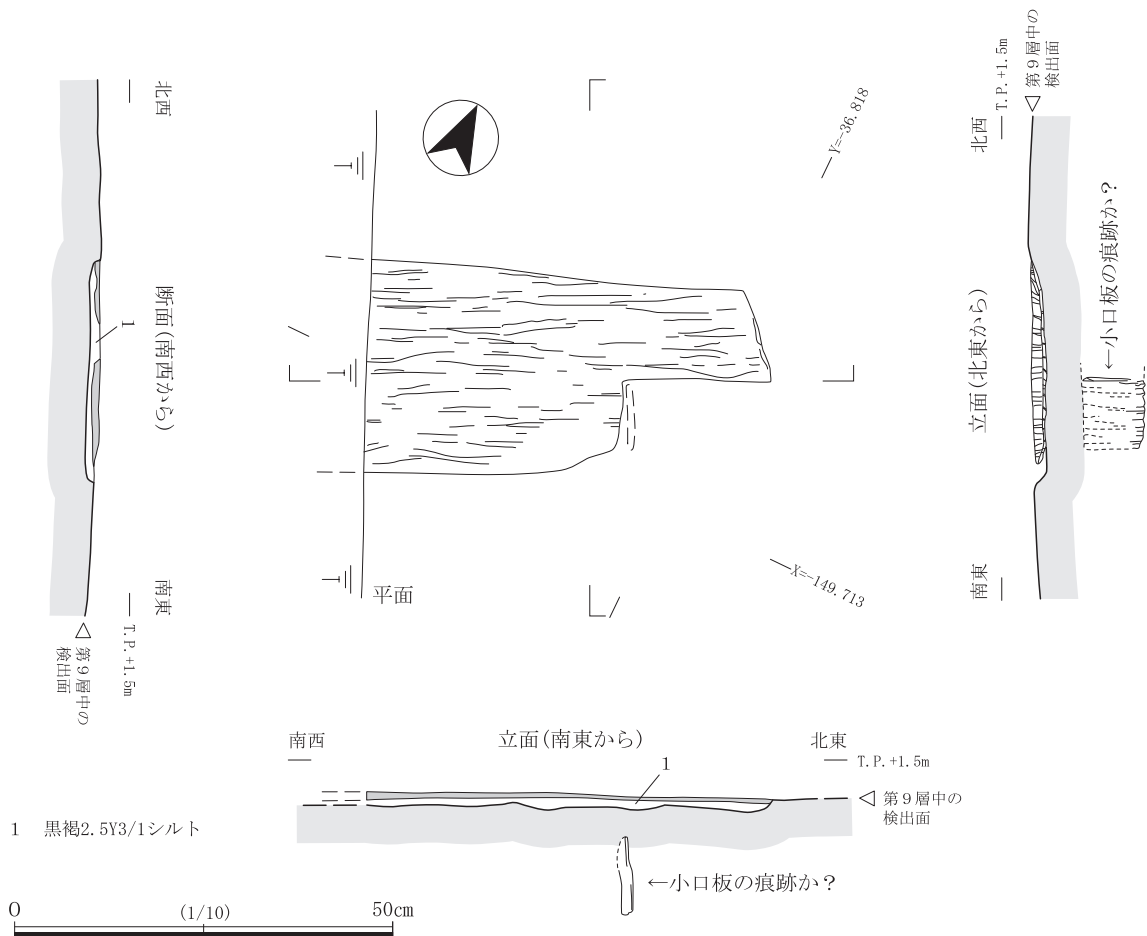


図165 03-1-2区 第9層中検出427木棺

板よりも8cm深い小口穴の底まで埋め込まれている。南西側の小口板は消失しているが、穴の底は底板下より11cm深い。

棺材は、底板・南東側板・北東小口板はヒノキ、蓋板と北西側板は鑑定を試みたが樹種は不明。

墓壙・底板・棺内とも北東側の幅は広く、底板も1cm程度だが北東側が高いことから、頭位は北東側であった可能性が高い。

埋土は、棺内外とも黒褐2.5Y3/1シルト、小口穴は黒褐10YR2/2シルト。

出土遺物は、棺内は土を全て水洗したが弥生土器小片1片とシカヤイノシシの骨片のみ、掘りかた内からも弥生土器4片と少なかった。

427木棺（図165・写真図版45） 第9面から6～15cm下層の366高まり内で検出した。主軸方位は426木棺同様、東北東-西南西（北65°東）。掘りかたは見えなかったが、小口穴と思しき切り欠きのある板材だったので木棺の底板と想定して調査を進めた。検出長は53cm、幅28cm。

板は遺存状況が悪く、取り上げが不可能だったため、一部をサンプリングし鑑定を行ったが樹種の同定は出来なかった。

長軸に沿って断ち割ったが、墓壙の底は認識できなかった。しかし、北東側で垂直に立つ薄い板状の痕跡を見つけた。位置と形状からみて、小口板下部の可能性が高い。その場合、北東小口板は底板下15cmまで埋め込まれていることになる。

板1枚だけの検出に止まったので、この427木棺に伴う遺物は不明である。

428木棺（図166・写真図版45） 第9面から15～24cm下の366高まり内で検出したが、遺存状況は悪い。掘りかたの平面形は長楕円形か。長径55cm以上、短径45cm以上、深さ12cm。木棺内法は不詳。主軸方位は、木片の向き参考とすると東西から東北東-西南西（北80°東）。

棺の構造は判然としない。検出した範囲では小口穴はない。位置的に西小口の可能性のある板材はスギ、中央から南部にかけて分布する材のサンプルも鑑定したが樹種不明であった。

棺内から弥生土器の小片7片（うちⅠ～Ⅱ様式1片）が出土した。

以上の324・367・424・425・426・427・428木棺周辺を含む366高まり内からは、弥生土器1552片（うちⅠ様式89片、Ⅰ～Ⅱ様式176片、Ⅱ様式68片）、転用土製円板2点、土錘1点、扁平片刃石斧1点、砥石2点、削器4点、楔1点、サヌカイト剥片24点、礫11個、木1点、計1599点と骨・歯が出土した。

それらのうち各木棺周辺の遺物を掲げると以下のようになる。

324木棺周辺の第9面366高まり内、弥生土器84片（うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式9片）、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、中礫3個、小礫2個、計91点出土。

324・367木棺周辺の第9面366高まり内、弥生土器215片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式24片、Ⅱ様式12片）、削器1点、サヌカイト剥片1点、計217点出土。

367木棺周辺の第9面366高まり内、弥生土器141片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式11片、Ⅱ様式4片）、石鏃1点、サヌカイト剥片5点、小礫3個、木1点、計151点出土。

図167-20715はサヌカイト製の石鏃。基部側からの調整で片側に大きく抉れる。

424木棺周辺の第9面366高まり内、弥生土器495片（うちⅠ様式22片、Ⅰ～Ⅱ様式25片、Ⅱ様式24片）、削器2点、サヌカイト剥片7点、計504点と骨・歯が出土した。

20716（写真図版102）は無頸壺。復原口径6.8cm、体部径21.4cm、底径6.0cmと胴部上半で強く張る。口縁部は屈曲して短く立ちあがるが、残された端部はやや磨耗したように観察され、頸部破損後、再加

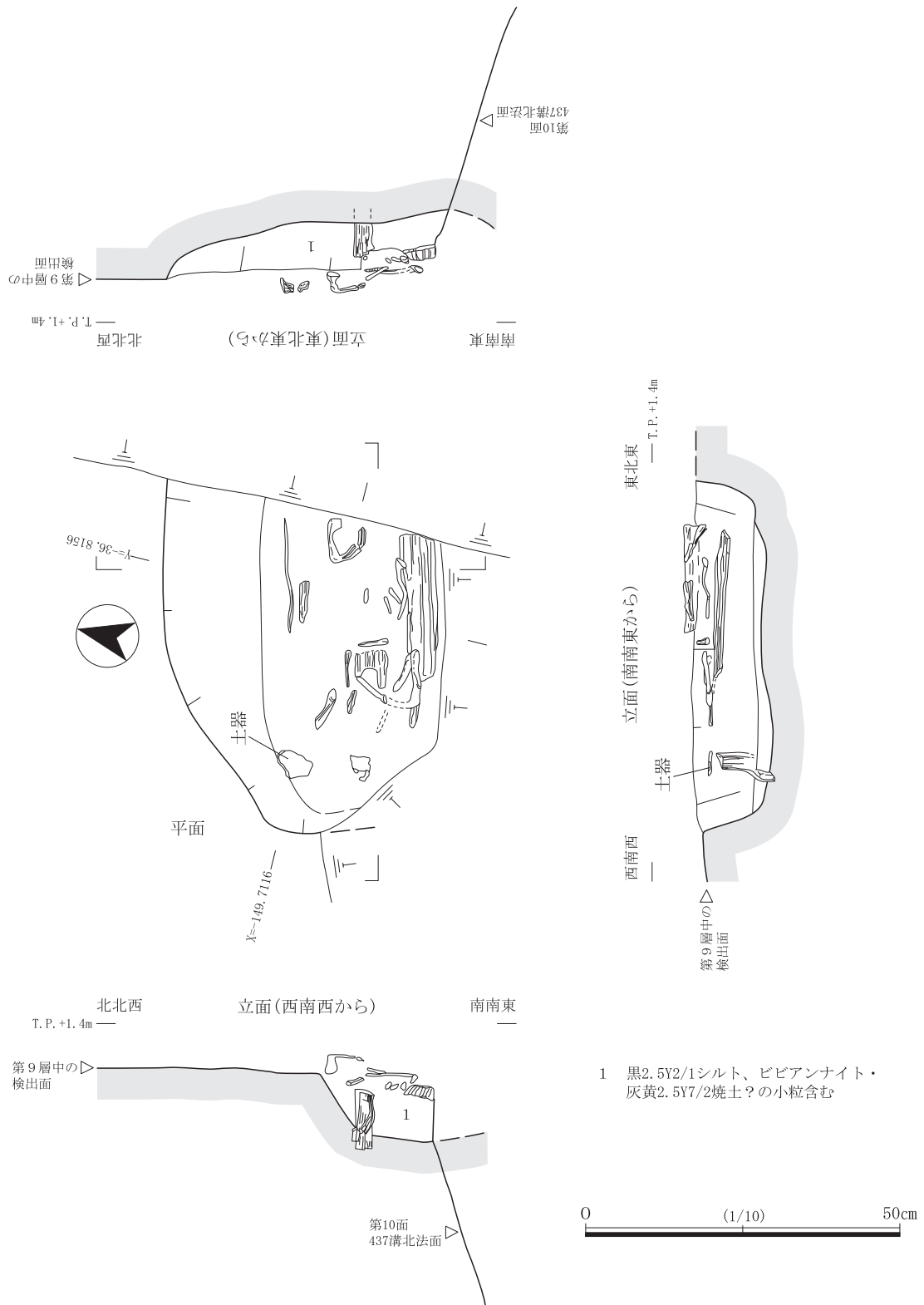
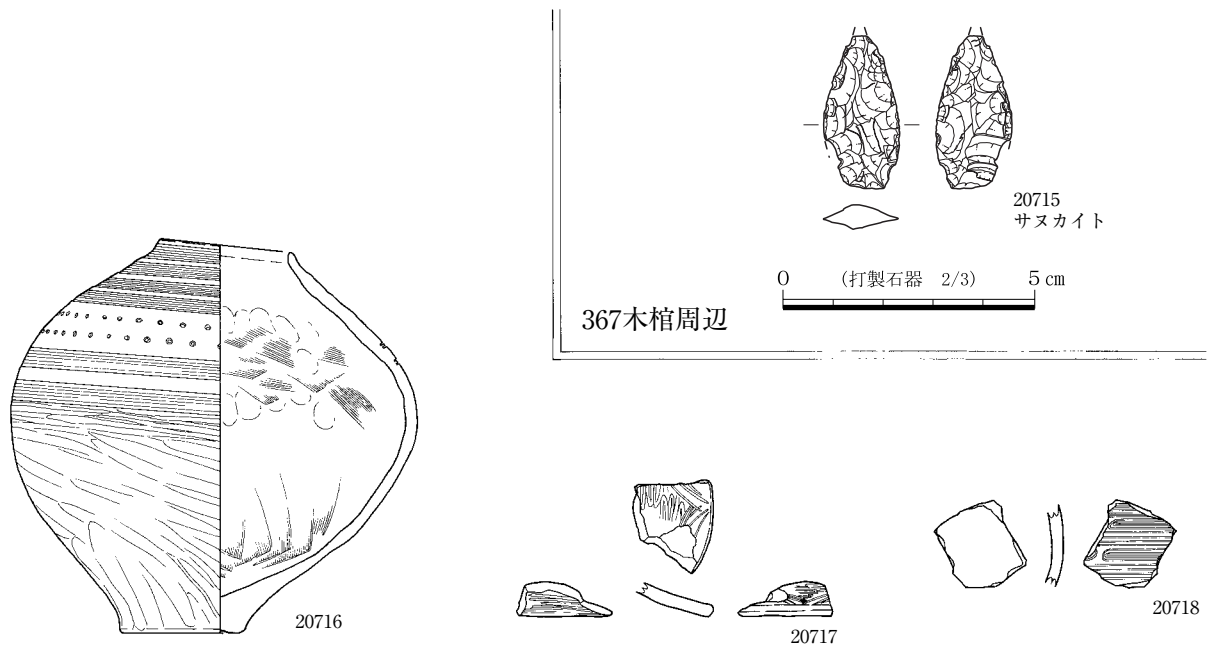


図166 03 - 1 - 2区 第9層中検出428木棺





424木棺周辺

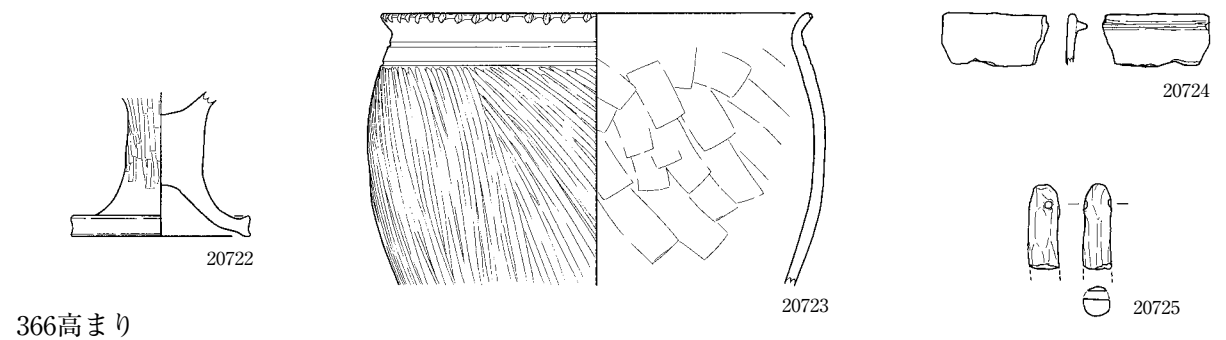
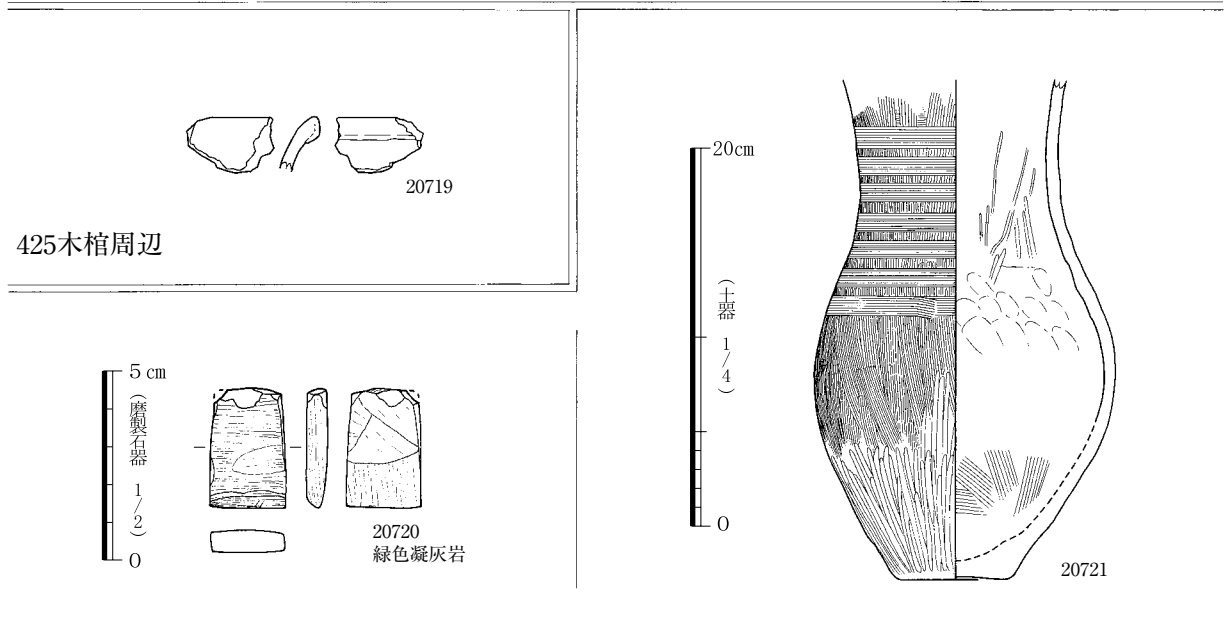


図167 03-1-2区 第9面367・424・第9層中425木棺周辺、366高まり出土遺物

工した可能性も残されている。文様は体部上半にクシ描き直線文4条、竹管文を2段にわたってめぐらし、その下にごく浅い直線文を2条入れる珍しいもの。下半は太い原体によるミガキが施される。

20717（写真図版102）は壺蓋。ヘラ描き沈線で連弧文を描くか。5重となった沈線は反対側の沈線より浅くランダムである。外面は黒変する。

20718は壺の体部。ヘラ描き沈線で丁寧に流水文を飾る。Ⅰ - 3様式。

425木棺周辺の第9面366高まり内から、弥生土器158片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式3片）と骨が出土。図167 - 20719は壺の口縁。端部を折り返す、あるいは下部に貼り付けて、まるみをもって肥厚させる。Ⅰ様式後半からⅡ様式か。長石が多く含まれる胎土。

426木棺周辺の第9面366高まり内から、弥生土器14片（うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式1片）とサヌカイト製楔1点が出土。

427木棺周辺の第9面366高まり内から、弥生土器52片（うちⅠ様式6片、Ⅰ～Ⅱ様式2片）とサヌカイト剥片1点が出土。

このほか、木棺には伴わないが、第9面366高まり内から3才前後のヒトの頭蓋骨（登録番号693）が出土した（第9章 安部みき子「山賀遺跡出土の人骨」参照）。平面的な位置は第9面324木棺の南西側（図130参照）で、上層下層とも木棺は存在しない。

366高まりからは図167 - 20720～20725が出土した。20720（写真図版102）は扁平片刃石斧。体部中央には横長楕円状に擦痕があり、光沢をもつ。装着痕か。338高まりとの間にあるやや落ち込んだ部分から出土した。緑色凝灰岩製で長軸3.13cm、短軸1.96cm、厚み0.6cm、重さ7.5g。

20721（写真図版102）は長頸壺。頸部は太くやや外傾する。頸部はあまり長いものではないだろう。クシ描き直線文7条が頸部にめぐり、文様の下は粗いハケ調整が残されたままである。Ⅱ様式。

20722（写真図版102）は高杯脚部。脚柱部は短く中実で、裾端部はナデによってつまみ上げられる。脚柱部は縦方向の工具ナデで整えられる。Ⅱ - 3様式からⅢ - 1様式。胎土は白色系で、ピンクに変色する。搬入品か。

20723は甕。刻み目と沈線をもつ甕だが、体部はやや左上がりのミガキが施される。Ⅰ様式末からⅡ様式初頭に位置づけられるか。20724は瀬戸内系の甕。口縁から少し下がった位置に貼り付け突帯をめぐらせる。Ⅰ - 3～4様式。

20725（写真図版102）は土錘。残存長軸4.6cm、短軸最大1.9cm、重さ15.2g。一端には、長軸に直交する形で穿孔がある。

土坑7基とピット3個を検出した。

332土坑（図168・写真図版47） 調査区東部に位置し、その東部を矢板に切られている。平面不整形円形か。径164cm、深さ11cm。埋土はオリブ黒7.5Y3/1シルトを基本とする。出土遺物は、弥生土器13片（うちⅠ～Ⅱ様式2片、Ⅱ様式4片）で、Ⅱ様式のうち1点は摂津型の甕である。

335土坑 調査区中央やや北東に位置する。平面不整形で、東北東 - 西南西にやや長い。長径208cm、短径135cm、深さ13cm。埋土は、オリブ黒10Y3/1粘土に炭をわずかに含む。弥生土器13片（うちⅡ様式1片）出土した。

347土坑 調査区南部やや東に位置する。平面形は三角形に近い不整形で、東西に長い。長径120cm、短径94cm、深さ5cm。埋土は黒5Y2/1粘土を基本とする。弥生土器14片（うちⅡ様式1片）と打製石鏃1



図168 03-1-2区 第9面332土坑

点が出土した。

図169 - 20726はサヌカイト製の打製石鏃。横長剥片を調整したもので左右非対称。基部を欠く。

この他の土坑とピットは表10にまとめた。

落ち込みを6か所で検出した。

334落ち込み(写真図版47・103) 調査区北東部に位置する。平面不整形だが、やはり北東-南西を主軸とする。長径12.7m、幅5.4m、深さ45cm。出土遺物は、弥生土器139片(うちI様式5片、I~II様式1片、II様式15片)、削器1点、サヌカイト剥片1点、計141点である。

図169 - 20727(写真図版103)は無文の広口壺。丸い体部から口縁部を短く外反させる器形で、底部は中央をくぼませる。外面下半には煤が付着して不明瞭だが、ハケ後粗いミガキ調整か。煤は胴部上半と底部下面には認められず、器面はあれていない。底部を地面に接して被熱したものか。II様式。20728は端部に波状文が飾られる。20729も広口壺の口縁で、大きく広がる口縁の途中で破損する。内面上半はミガキが施されている。20730(写真図版103)は甕。胴部は張るが、口縁端部はまるくおさめる。

以上の土器は20730がIII様式初頭を下る様相をもつものの、ほかはII様式におさまるものであろう。

表10 03-1-2区 第9面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計	
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト			その他
								I様式	I・II様式	II様式	III様式	不詳	成品	剥片類		
332土坑	8L-8i	不整円		164		11	オリーブ黒7.5Y3/1、粘性弱い、粗砂少量・下方に細砂混じる		2	4		7				13
335土坑	8L-10i	不整	東北東	208	135	13	オリーブ黒10Y3/1粘土、細砂・粗砂混じる、炭含む			1		12				13
339土坑	8M-9a	楕円	東西	84	46		黒5Y2/1粘土、灰色粘土ブロック混じる、炭・植物遺体含む	1	1			7		1		10
340土坑	8M-9a	不整	東北東	74	55	5	暗灰黄2.5Y4/2、粘性弱い、黄褐2.5Y5/4細砂が攪拌									0
344土坑	8M-9b	楕円	北北西	78	65	21	④黒7.5Y2/1、細砂混じる、植物遺体・炭含む ⑤黒2.5Y2/1粘土、粗砂混じる、植物遺体含む ⑥黒10Y2/1、粘性強い	1	4			15		1		21
346ピット	8M-9b	円		42		11	黒7.5Y2/1粘土、炭・植物遺体・カルシウム含む									0
347土坑	8M-10b・10c	不整	東西	120	94	5	④黒5Y2/1粘土、暗オリーブ灰2.5GY4/1シルトブロック混じる、植物遺体含む ⑤黒5Y2/1粘土、暗オリーブ灰2.5GY4/1シルトブロック混じる			1		13	鏃1			15
348ピット	8M-10c	楕円	東北東	55	49	7	黒5Y2/1粘土、灰10Y4/1粘土ブロック混じる、炭・植物遺体含む					10				10
365ピット	9L-1j	楕円	東北東	65	47	13	オリーブ黒5Y3/2、細砂～粗砂・暗オリーブ5Y4/3細砂ブロック混じる、ピビアンナイト・炭化物含む					2				2
369土坑	9M-1b	隅丸方	北東	106	55	8	黒褐10YR3/1									0

361落ち込み 調査区北西部に位置する。第8面284落ち込みの下層にあたる。比較的規模の大きな溝と同様に、東北東-西南西を主軸とする。長さ7.2m、最大幅2.6m、深さ34cm。出土遺物は、弥生土器126片（うちI様式11片、I～II様式6片、II様式1片）。転用土製円板1点、打製石剣1点、計128点。

図169-20731（写真図版103）はサヌカイト製の打製石剣。側縁は鋸歯状に細かく調整されるが、断面形はあまり整っていない。両端は腹面側から折れる。

362落ち込み 調査区西部、361落ち込みの南西側に位置する。平面不整形で、南北約7.5m、深さ35cm。矢板際から、長さ44cm、幅31cm、高さ13cm、重さ28.9kgの斑レイ岩1点のみ出土した。

364落ち込み 調査区中央に位置する。第8面292落ち込みの西側の下層にあたる。東側が側溝により切られており、西側は半円形を呈する。南北243cm、深さ38cm。弥生土器4片のみ出土。

図169-20732（写真図版103）は鉢。体部は深く、やや内湾する。外面のミガキは分割して施され、最下段の縦ミガキ部分には帯状に煤が付着する。II様式であろう。

368落ち込み 調査区南部に位置する。平面不整形で、北東-南西に長い。長径5.5～7.0m、短径3.0m、深さ24cm。土器はなく、板材1点、削器1点、サヌカイト剥片4点、計6点出土した。

図169-20733（写真図版103）・20734は大和型の甕。外面縦ハケ、内面横ハケ、口縁部に刻み目を施す。20734は口縁部を下方へ折り込んで肥厚させ、刻み目は上端にある。いずれもII様式。

20735は有孔板。長軸39.3cm、短軸8.7cm、厚み0.4～2.0cmを測る長方形で、角には両面から空けられた

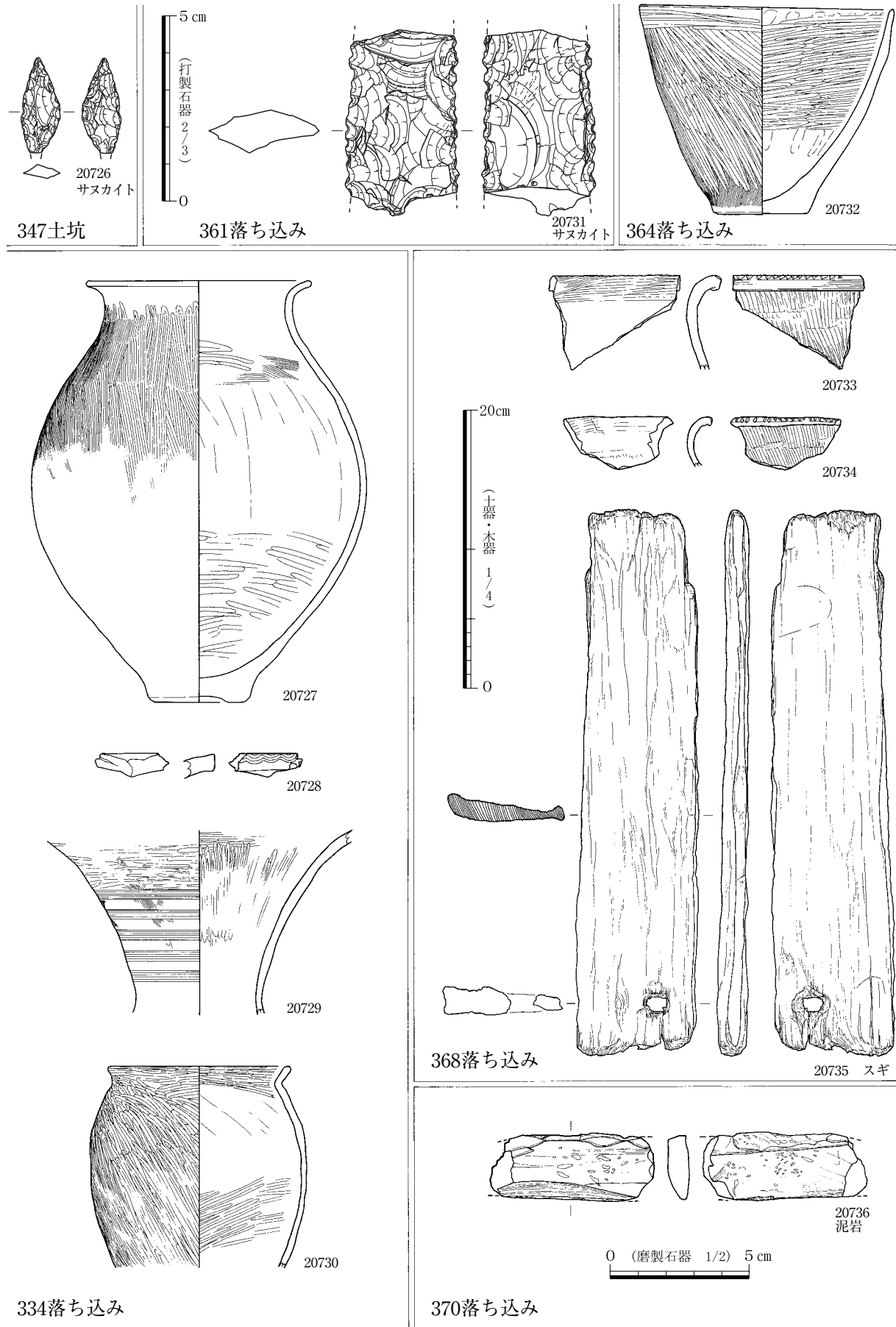


図169 03-1-2区 第9面347土坑、334・361・364・368・370落ち込み出土遺物

約1.5～2.0cm角の孔をもつ。破損の程度は不明だが、孔のある方へ幅を広げるか。一部薄くなる部分があるが、加工痕等は見られず腐朽によるものと考えられる。スギの柵目材。

370落ち込み 調査区南部やや西側に位置する。やはり平面不整楕円形だが、主軸方向はおおむね東西。長径5.0m以上、短径2.7m、深さ42cm。弥生土器24片（うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式2片）、転用土製円板1点、石庖丁1点、サヌカイト剥片1点、計27点出土した。

図169 - 20736は石庖丁か。刃部は面取りが行われるが、断面形は片面を平らに作っているため石庖丁とした。泥岩製で両端を欠損する。上端部は粗い剥離と研磨が施されている。

高まりについては、第6面以下と同様に、盛土による部分を図130のとおり、327・329・331・338・341・360・363・366高まりの8か所に遺構番号を付け、第9層の遺物を高まりごとに取り上げた。それらのうち、木棺が多く分布していた338高まりおよび366高まりについては既述。

(19) 03 - 1 - 2 区第9層の遺物 (図170～174 写真図版103～105)

03 - 1 - 2 区の第9層全体から出土した遺物は、弥生土器9518片（うちⅠ様式789片、Ⅰ～Ⅱ様式667片、Ⅱ様式299片）、タコ壺1点、土錘1点、転用土製円板12点、石器類232点、礫40個、木製品4点、木片10点、実1点、焼土塊2点、計9821点と骨・歯である。

それらを第9面で名づけた高まりの範囲ごとにまとめると次のようになる。

調査区北部、第9面327高まり内からは、弥生土器1片のみ出土した。

調査区北部東寄りの第9面329高まり内からは、弥生土器43片（うちⅠ様式10片、Ⅰ～Ⅱ様式4片）、不明磨製石器片1点、打製石剣1点、サヌカイト剥片1点、計46点出土した。

図170 - 20737は不明磨製石器。サヌカイト剥片の両面を部分的に研磨する。石庖丁か。20738 (写真図版103) は打製石剣。節理の強い横長剥片を用い、非対称に整形される。

調査区中部に東西に広がる第9面331高まり内の出土遺物は、弥生土器1737片（うちⅠ様式159片、Ⅰ～Ⅱ様式61片、Ⅱ様式51片）、転用土製円板3点、石庖丁1点、柱状片刃石斧1点、石鋏1点、削器4

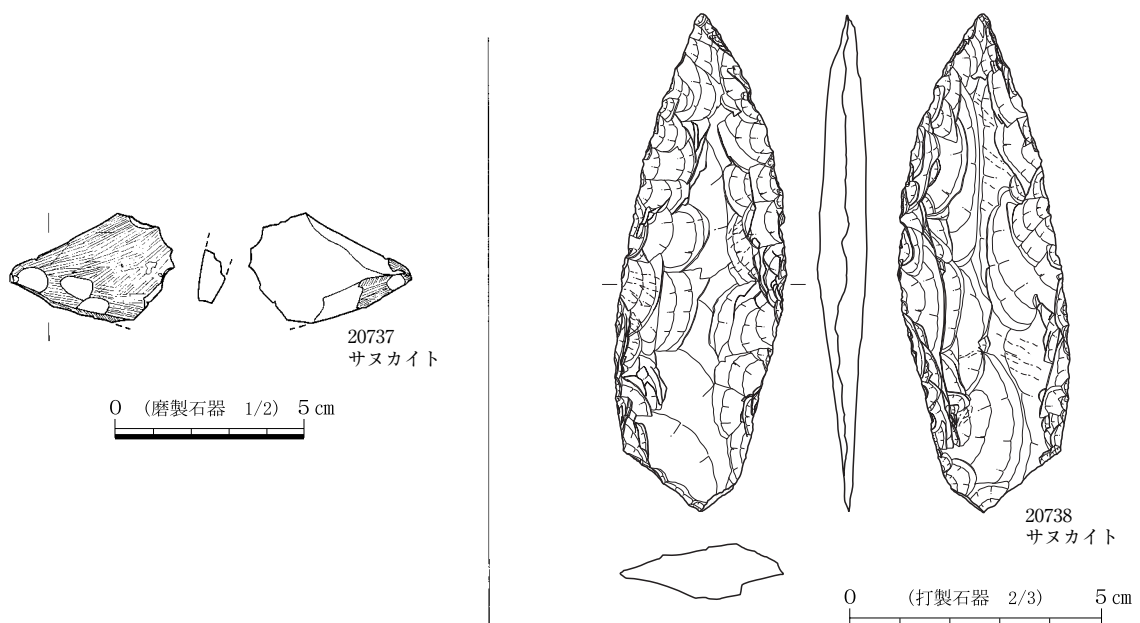


図170 03 - 1 - 2 区 第9面329高まり出土石器

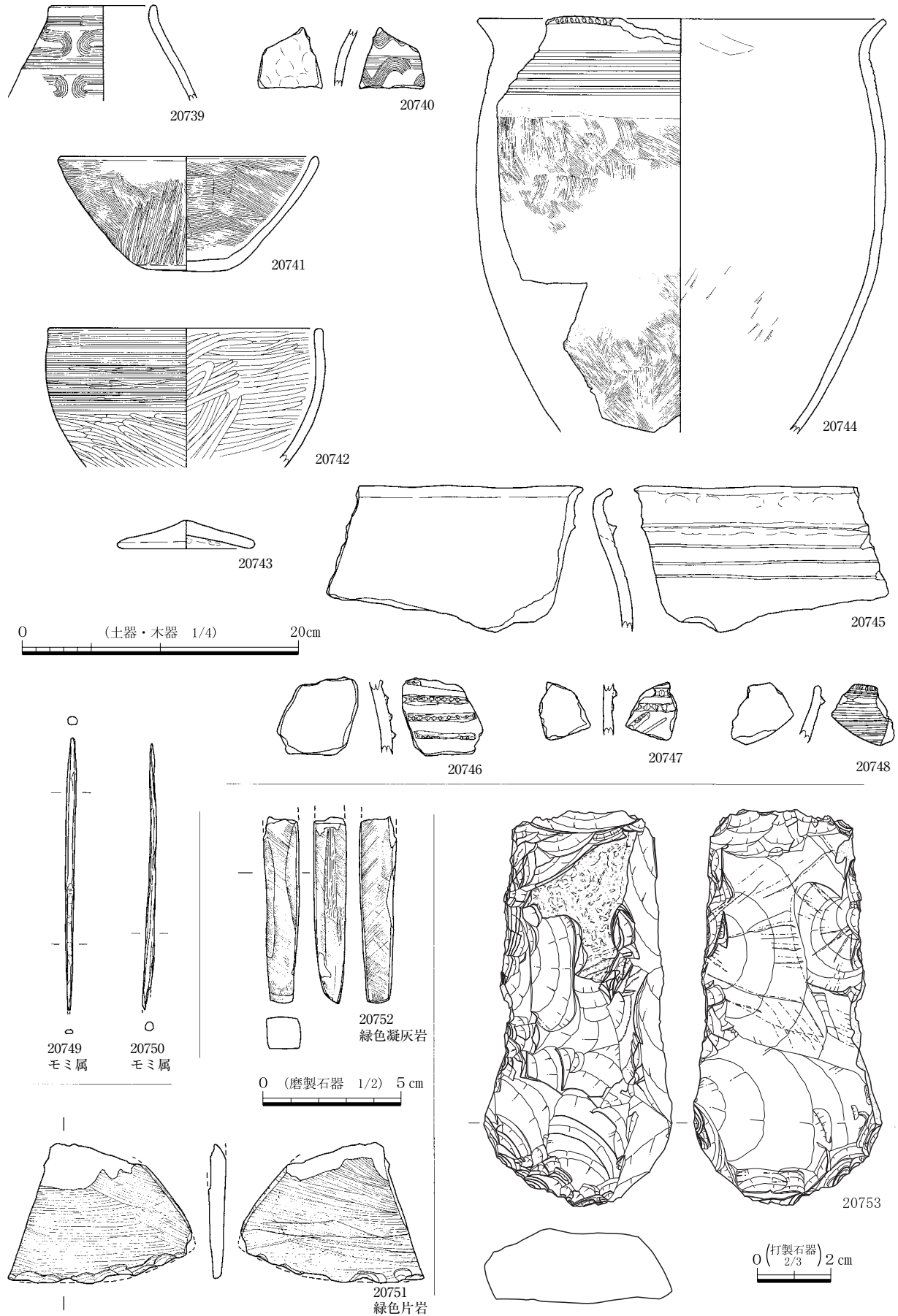


図171 03-1-2区 第9面331高まり出土遺物

点、サヌカイト剥片14点、中礫3個、小礫3個、木製ヤス2点、木片1点、計1770点である。うち429木棺周辺の第9面331高まり内の出土遺物は、弥生土器2片である。

図171 - 20739は無頸壺。口縁部はわずかに立ち上がり、体部はあまり張らない器形。器面をクシ描き流水文で飾る。Ⅱ様式。20740は壺の頸部か。クシ描き直線文と波状文が交互に施されている。第10面444落ち込み出土の20898（図204）と同一個体であろう。

20741（写真図版104）は鉢。底部の屈曲はなめらかに体部へつづき、外へひらく。口縁端部はまるく、やや歪む。外面はまばらに細いミガキが施される。Ⅱ様式か。20742も鉢。体部はやや内湾し、口縁端部は上面に面をもつ。体部上半にはクシ描き直線文を8条施し、間にはミガキが見られる。Ⅱ様式。

20743は蓋。笠形で無文。ほぼナデ整形のみによって作られる。

20744は甕。復原口径29.2cm、残存高30.2cmを測る大形のもの。胴部の沈線は7条と多条化しており、Ⅰ - 3～4様式に位置づけられる。外面は煤の付着が著しい。

20745（写真図版104）は口径40cm前後に復原される大形の甕あるいは鉢。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯と沈線3条が施される。Ⅰ - 3～4様式。内面には煤が付着する。

20746（写真図版104）は壺の体部。貼り付け突帯は、灰白色の異種粘土が使用され、器体の暗褐色と対比をなす。最下部の剥離痕から5条以上であったと推定される。Ⅰ - 3～4様式。20747（写真図版104）は甕か。破片は上方でわずかにひらき、貼り付け突帯2条をもつ。その下の平行斜線は一方が貼り付け突帯、一方が沈線となるが、剥離痕かどうかは明確に判別できなかった。Ⅰ - 3～4様式であろう。20748は鉢か。口縁はわずかに内湾し、端部に刻み目が施される。体部には上から沈線2条、貼り付け突帯、沈線8条以上がめぐる。Ⅰ - 4様式。

20749・20750は木製のヤス（写真図版92）。いずれも長軸20cm弱が残存し、径は0.6～0.7cm。20749の先端は断面形が方形となる。モミ属を用いる。

20751は石庖丁。緑色片岩製で、刃部はまるく、欠損あるいは打ち欠きがある。20752（写真図版104）は緑色凝灰岩製の柱状片刃石斧。基部を欠損するが、残存長軸6.70cm、短軸1.24cm、厚み1.2cmを測る。

20753（写真図版104）は石鋏か。平面形は分銅形に近く、一方の側縁と背面には原礫面が残る。刃部は階段状に剥離し、稜をもたない。サヌカイト製で長軸10.75cm、短軸5.11cm、厚み2.6cm。重さ178.7gを量る。

多くの木棺が検出された338高まりおよび366高まり内の遺物は、第9面の木棺の直後に既述。

調査区北部やや西寄りの第9面360高まり内からの出土遺物は、弥生土器96片（うちⅠ様式14片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式2片）、転用土製円板1点、石庖丁未成品1点、打製石剣1点、サヌカイト剥片1点、中礫1個、計101点である。

図172 - 20754は石庖丁の未成品か。緑泥片岩を粗割し、研磨は認められない。

20755（写真図版104）はサヌカイト製の打製石剣。基部が大きく曲がっており、整形途中の失敗品か。長軸13.8cm、短軸4.91cm、厚み1.7cm、重さ92.4g。

調査区北西部の第9面363高まり内からの出土遺物は、弥生土器254片（うちⅠ様式31片、Ⅰ～Ⅱ様式18片、Ⅱ様式4片）、石庖丁1点、打製石剣1点、砥石1点、木片5点、計262点である。

図172 - 20756（写真図版104）は壺の肩部であろう。クシ描き直線文2条が残る。内面には黒色物質が筋状に付着する。付着部分はわずかに凹んでいるため、器面の凹凸に植物根などが付着して腐朽したものとと思われる。Ⅱ様式以降。



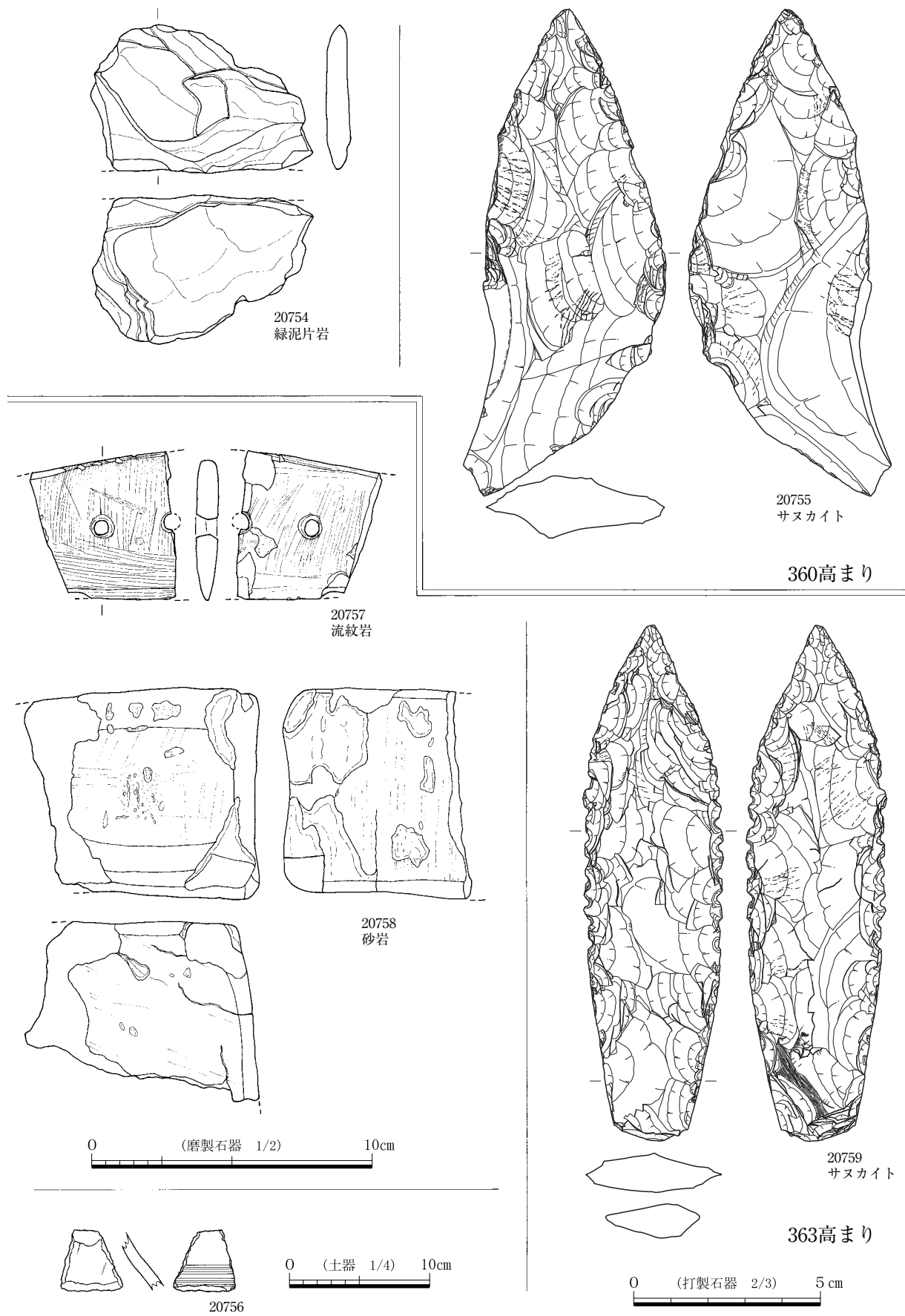


図172 03-1-2区 第9面360・363高まり出土遺物

20757は石庖丁。流紋岩製で、A面側は刃部が2段になる。20758は砂岩製の砥石。3面がよく利用されており、中央がくぼむ。刃も利用され、まるく角がとれる。

20759（写真図版104）はサヌカイト製の打製石剣。完形で基部には原礫面を残す。珍しく丁寧に加工され、側縁は鋸歯状となる。その鋸歯縁のやや下辺りまで握り部側縁を研磨して潰す。片面にも研磨が残っている。長軸13.79cm、短軸3.81cm、厚み1.1cm、重さ68.6g。

調査区南部、1382溝よりも南側の高台（341高まりを含む）内からの出土遺物は、弥生土器1736片（うちⅠ様式148片、Ⅰ～Ⅱ様式122片、Ⅱ様式135片、Ⅲ様式12片）、イイダコ壺1点、勾玉状石製品1点、石庖丁1点、磨製石斧2点、石皿1点、石棒1点、叩き石1点、石錐1点、異形石器1点、削器4点、サヌカイト剥片70点、大礫2個、礫1個、木製鋏1点、木杭1本、樹皮1点、木片1点、計1827点と骨・歯である。

図173 - 20760（写真図版105）は壺。口縁は上下に拡張し、端面に簾状文。Ⅲ - 1様式であろう。20761も壺。頸部は短く外反し、口縁端部は上下に厚く拡張する。口縁端面と頸部の屈曲には扇形文を横に並べ、頸部にはクシ描き直線文2条を間隔なく施している。体部にも直線文が残る。Ⅱ様式末。20762（写真図版105）は細頸壺の頸部。やや外反する頸部には、口縁部まで撚糸文が3帯施される。Ⅱ - 3～Ⅲ - 1様式。

20763は甕。口縁部は肥厚し、内外面ともに縦方向、内面口縁下には横方向のミガキを施す。Ⅲ - 1様式。内外面に煤付着し、内面には炭化物が付着する。

20764は鉢。体部は外傾し、口縁部は面をなす。口縁直下には貼り付け突帯が2条あり、口縁部とともに刻み目が施される。Ⅲ様式。

20765は高杯杯部。口縁部は内湾気味に立ち上がり、面を成す。体部にはクシ描き列点文が2段に施され、ミガキは分割して施される傾向にある。Ⅲ - 1様式。なお、列点文は円柱状の点が並んだように観察され、クシ描き原体に草本類状のものを束ねて用いたことがよくわかる資料である。

20766（写真図版105）は蓋。小形で器壁は薄い。内外面には煤、端部には炭化物が付着する。

20767（写真図版105）は大形の広口壺。頸部に6条、胴部に4条以上の刻み目のある貼り付け突帯がめぐり、その間、胴部上半の四方には蕨手（双頭渦文）状浮文を貼り付けて飾る。器壁は薄く、突帯は細く仕上げられているが、内面はやや剥離する。Ⅰ - 4様式に位置付けられよう。

20768は太頸の広口壺。頸部と胴部に沈線3条がめぐる。Ⅰ - 3～4様式。

20769（写真図版105）は勾玉状石製品。三日月形に加工した扁平な一品である。中央には直径約5mmの穿孔をもつ。片面は研磨が孔の付近一部にしか認められない。孔の大きさや厚みは石庖丁に似る。緑泥片岩製で、長軸3.47cm、短軸2.23cm、厚み0.6mm、重さ6.2g。

20770は小形の扁平片刃石斧。刃部を欠損する。サヌカイト製。

20771は砂岩製で、石棒か。先端が段状にやや細くなり、環状石斧の穿孔具の可能性をもつ。

図174 - 20772はサヌカイト製の石錐。錐部と頭部に境はなく、周縁を全て調整するもの。

20773（写真図版105）は異型石器。端部に抉りを入れ、舌状に作りだしたもの。逆側は欠損する。サヌカイト製で残存長軸5.60cm、短軸2.45cm、厚み1.0cm、重さ12.4g。

20774は木製の鋏。小口の両端を欠き、残存長24.3cm、最大幅6.8cm、最大厚1.0cmを測り、柄孔は長軸4.8cm、短軸3.1cmの長楕円。身部は薄く、両端を欠くことから使用後の廃棄か。直柄の狭鋏であろう。アカガシ亜属の柁目材。

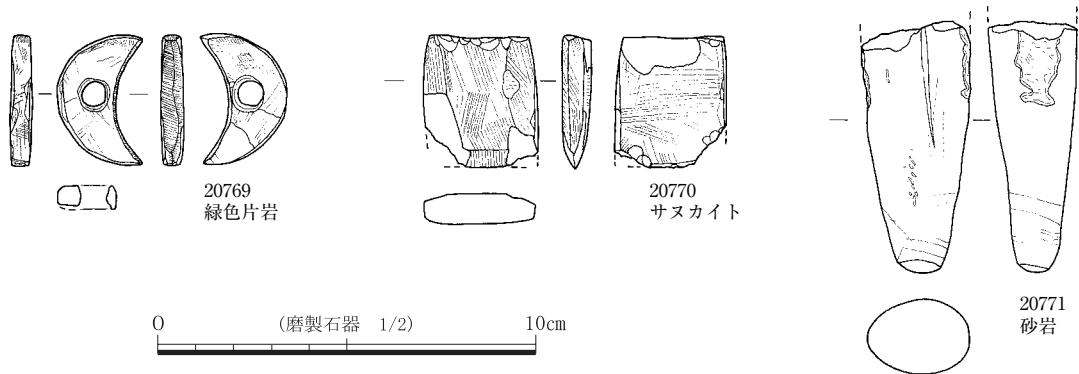
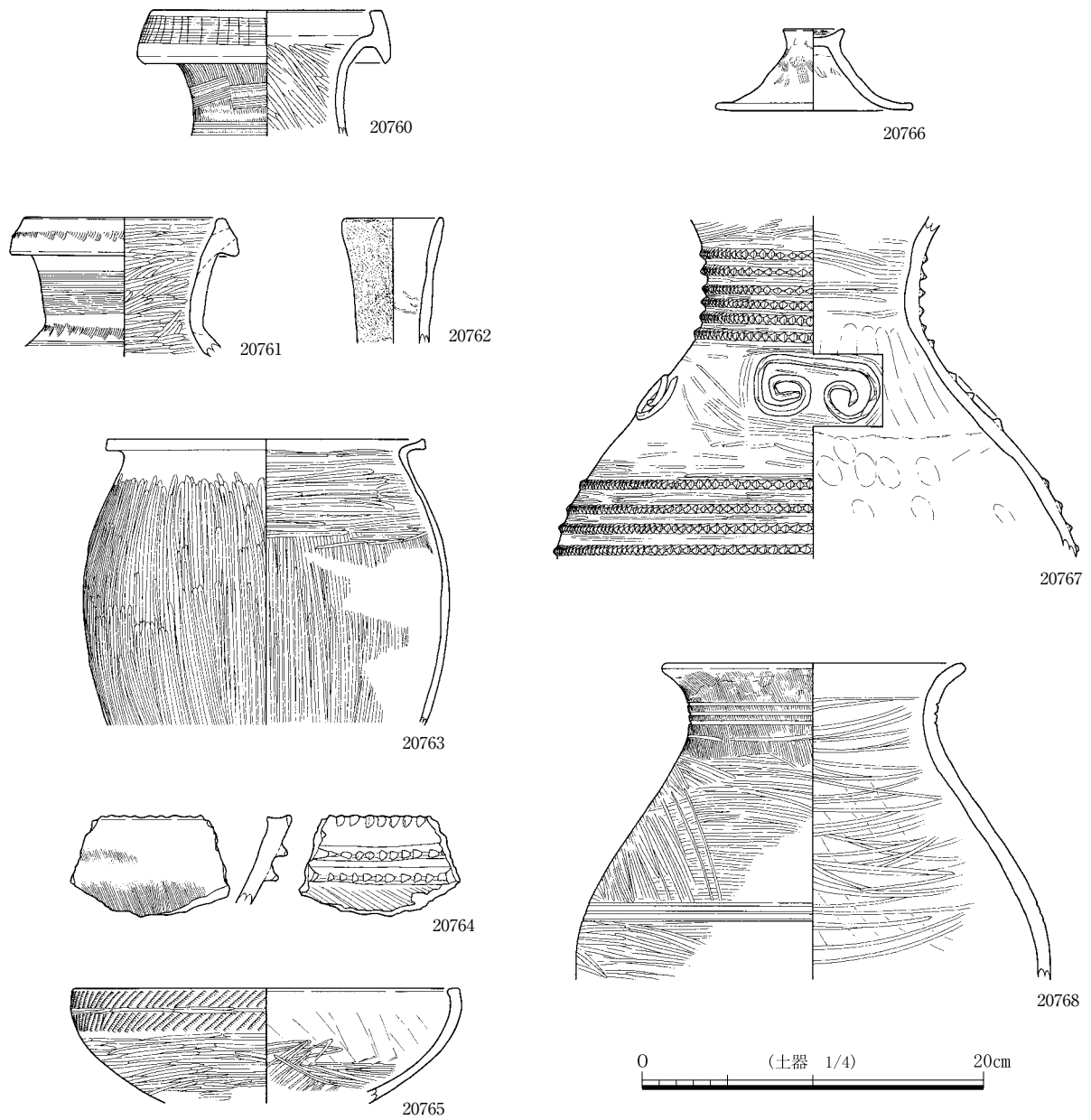


図173 03-1-2区 第9層出土遺物(1)

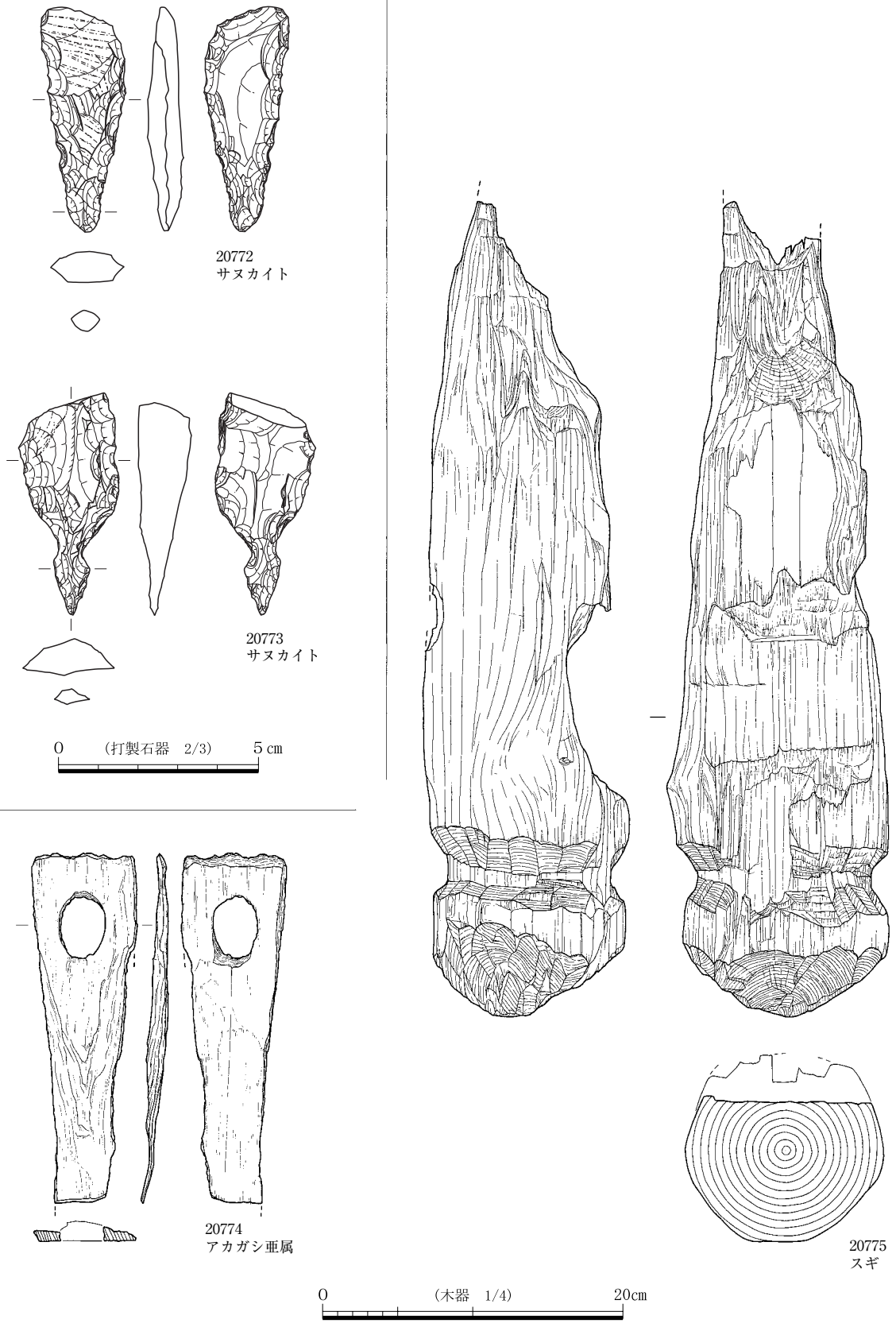
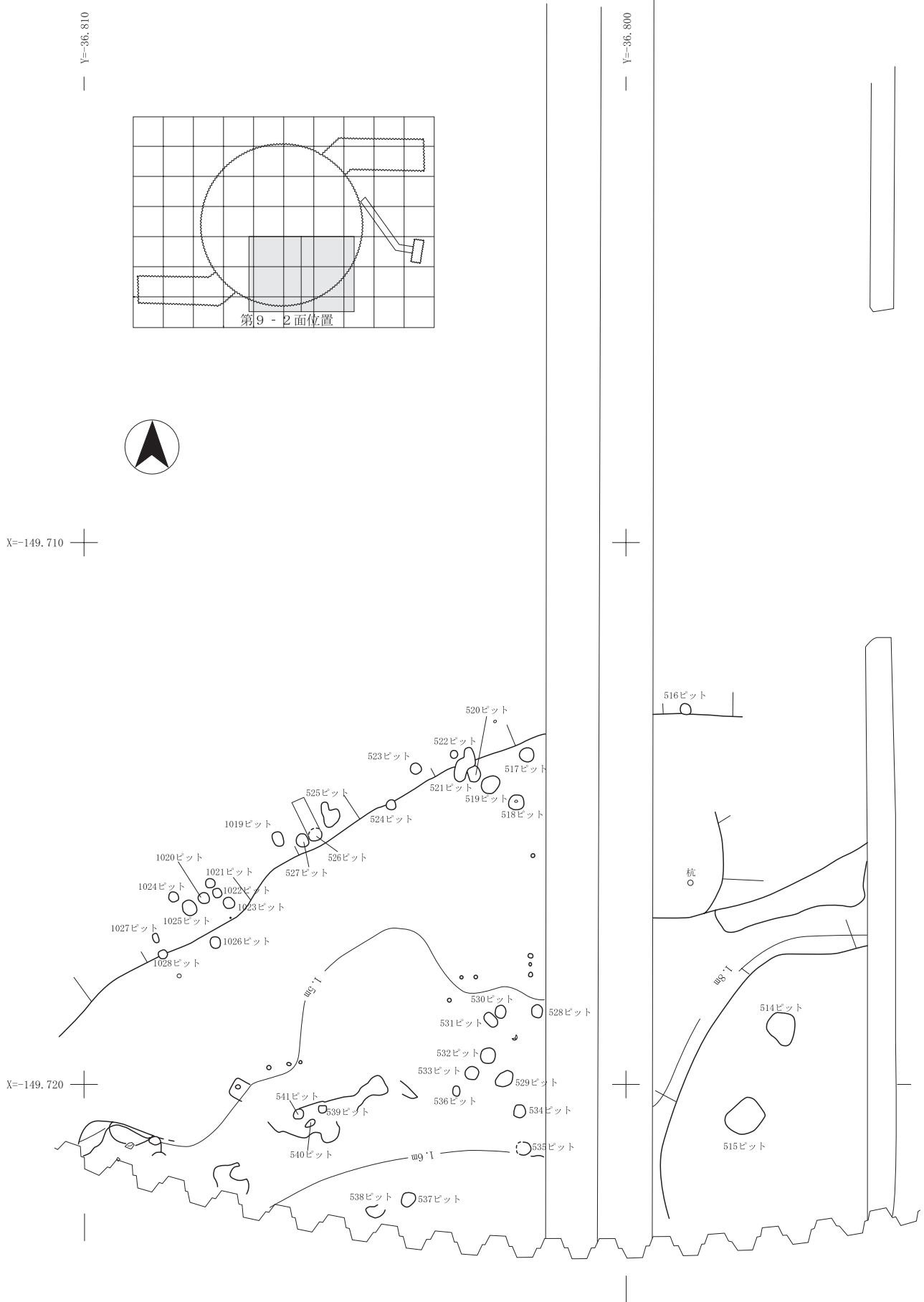


図174 03-1-2区 第9層出土遺物(2)

第5章 03-1-2区の調査成果



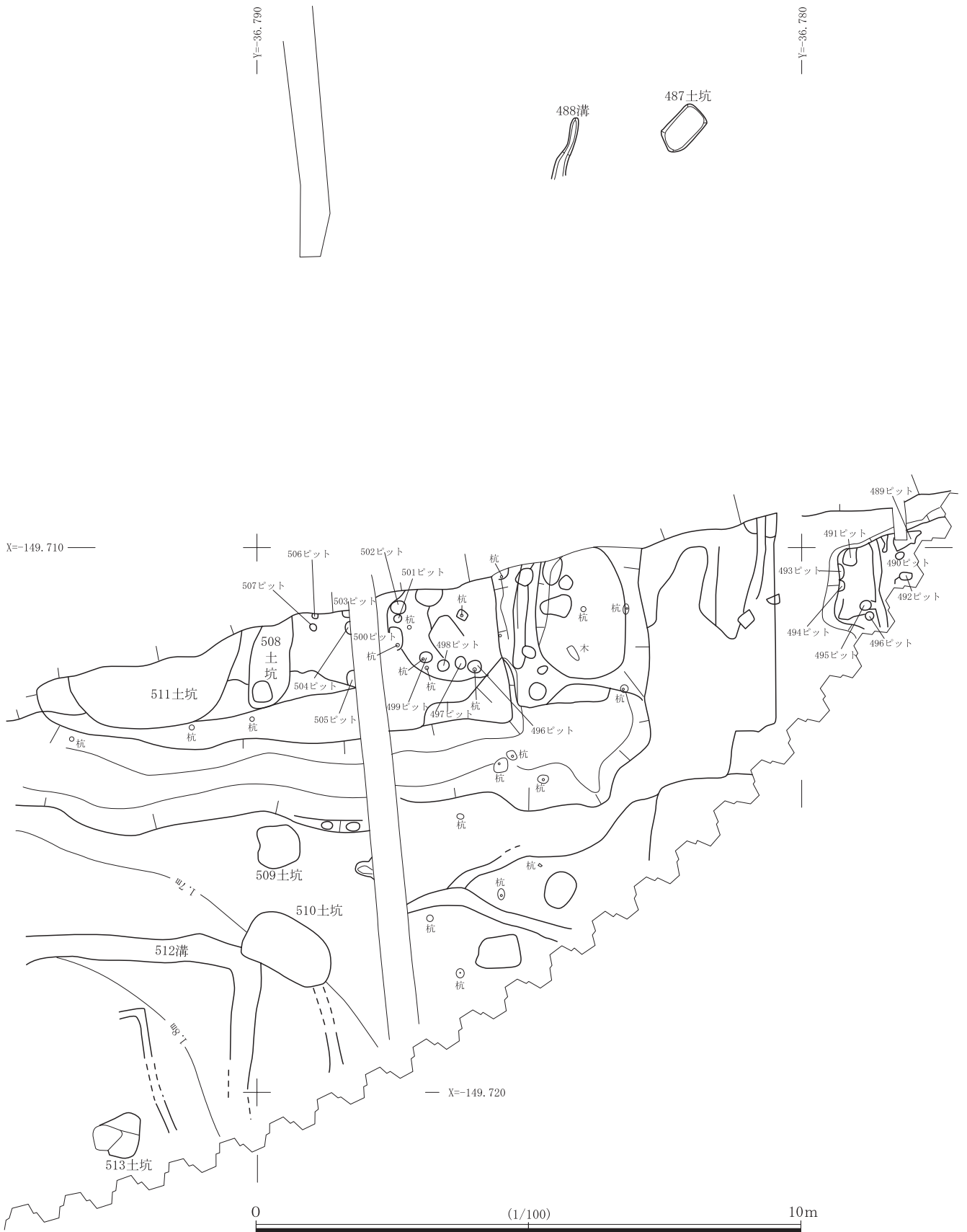


図175 03-1-2区第9-2面

また、特定の高まりに属しない第9層部分から、弥生土器359片（うちI様式33片、I～II様式26片、II様式15片）、石庖丁1点、砥石1点、サヌカイト剥片3点、計364点と木が出土した。

以上が、第9層出土の遺物である。

この他、第9層以下のサブトレンチから、弥生土器176片（うちI様式26片、I～II様式15片、II様式9片）、削器1点、楔1点、サヌカイト剥片2点、計180点出土した。

第9～10層に相当するサブトレンチからは、弥生土器20片（うちI様式5片、I～II様式2片）が出土した。

また、第9層中で検出した杭や柱は24本ある。その一例として図174-20775を図示する。

20775（写真図版105）は柱材。径13cm前後の心持ち材。根元に加工痕が明瞭に残っており、根元のやや上に溝をめぐらせて頭部を作り出す。さらにその上方には、高さ12cm、深さ3cmほどの抉りが入り、片側に段をもつ。樹皮等は認められず、全面に加工が及んでいたと考えられる。上方は腐朽しており、残存長54.5cmを測る。スギと鑑定された。

#### (20) 03-1-2区第9-2面の遺構と遺物（図175～178）

第9-2面は調査区南部、基本的に第9面1382・1397溝よりも南側の高台部分において調査した。平面図（図175）も該当範囲だけを縮尺1/100で掲載している。

この範囲の第8層・第9層ともに盛土で、第9面とした面での遺構が検出しにくかった。そこで、第9面の10～20cm下で再度遺構検出を試みた結果、ピットなどの遺構を検出したのが第9-2面である。したがって、第9-2面は旧地表面とはいいがたく、第10面から第9面にかけて盛土がなされる過程で掘り込まれた遺構群を検出した面と考えている。

検出した面の高さはT.P.+1.5～1.8mで、上述のように同地点の第9面から10～20cm下である。遺構として、溝2条、土坑6基、ピット57個、計65か所（遺構番号487～541・1019～1028）を検出した。遺構の大半はピットである。

溝を2条検出した。

488溝 調査区東部に位置する。この488溝と後述の487土坑のみ1382・1397溝よりも北側で検出した。主軸方位はほぼ南北だが、南からみてわずかに東に振れる。検出長1.2m、幅16～22cm、深さ7cm。埋土は、黒7.5Y2/1粘土に灰5Y5/1粘土ブロックがわずかに混じる。出土遺物は弥生土器39片（うちI様式2片、II様式1片）である。

図176-20776は甕の口縁部。内外面ともにハケ調整で、口縁は横ハケによって拡張し、上下に刻み

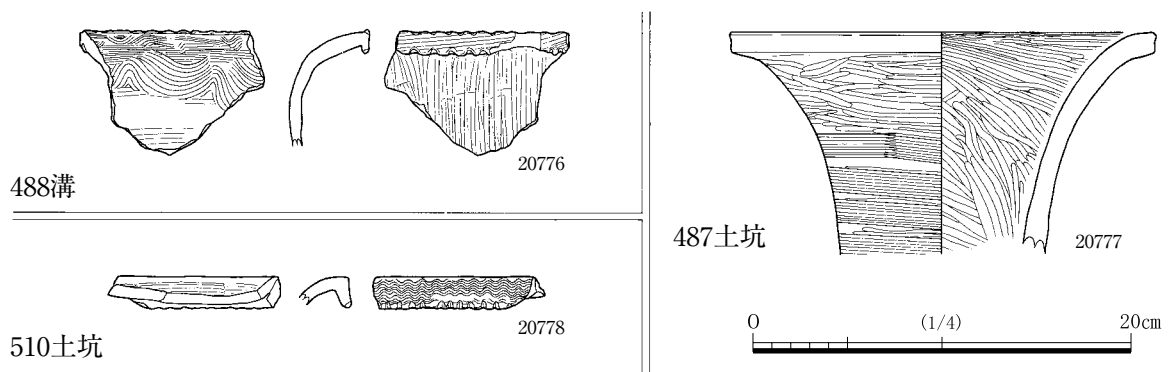


図176 03-1-2区第9-2面488溝、487・510土坑出土土器

目が施される。内面はハケ原体による波状文。胎土は白く、淀川水系の特色をもつ。Ⅱ様式。図206 - 20914（第10面446高まり）と同一個体か。

512溝 調査区南部に位置する。主軸が東西の部分と南北の部分とが北東角でつながっている。検出長は東西4.4m、南北2.5m、幅41～53cm。深さは6cmまでと浅いながら埋土は2層に分れ、上半は黒10Y2/1粘土、下半はオリーブ黒7.5Y3/1粘土で、上下とも植物遺体や炭が混じる。出土遺物はない。

土坑6基とピット57個を検出した。主要なものに触れる。

487土坑 488溝とともに、第9面の1382・1397溝よりも北側に位置する。平面隅丸長方形で、北東 - 南西を主軸とする。長径91cm、短径54cm、深さ11cm、埋土は黒7.5Y2/1。出土遺物は、弥生土器53片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式3片、Ⅱ様式2片）、転用土製円板1点、サヌカイト剥片5点、流木1点、計60点である。

図176 - 20777は壺頸部。口縁は漏斗状にひらき、頸部にクシ描き直線文が施される。Ⅱ様式。

509土坑（図178） 調査区南東部に位置する。平面は方形に近い不整形で、主軸方位は東西。長径78cm、短径69cm、深さ10cm。埋土は黒N1.5/シルトを基本とする。弥生土器13片（うちⅠ～Ⅱ様式5片、Ⅱ様式2片）、サヌカイト剥片3点、計16点出土した。

510土坑（図177） 調査区南東部、509土坑の南約1mに位置する。平面形はほぼ楕円形で、主軸方位

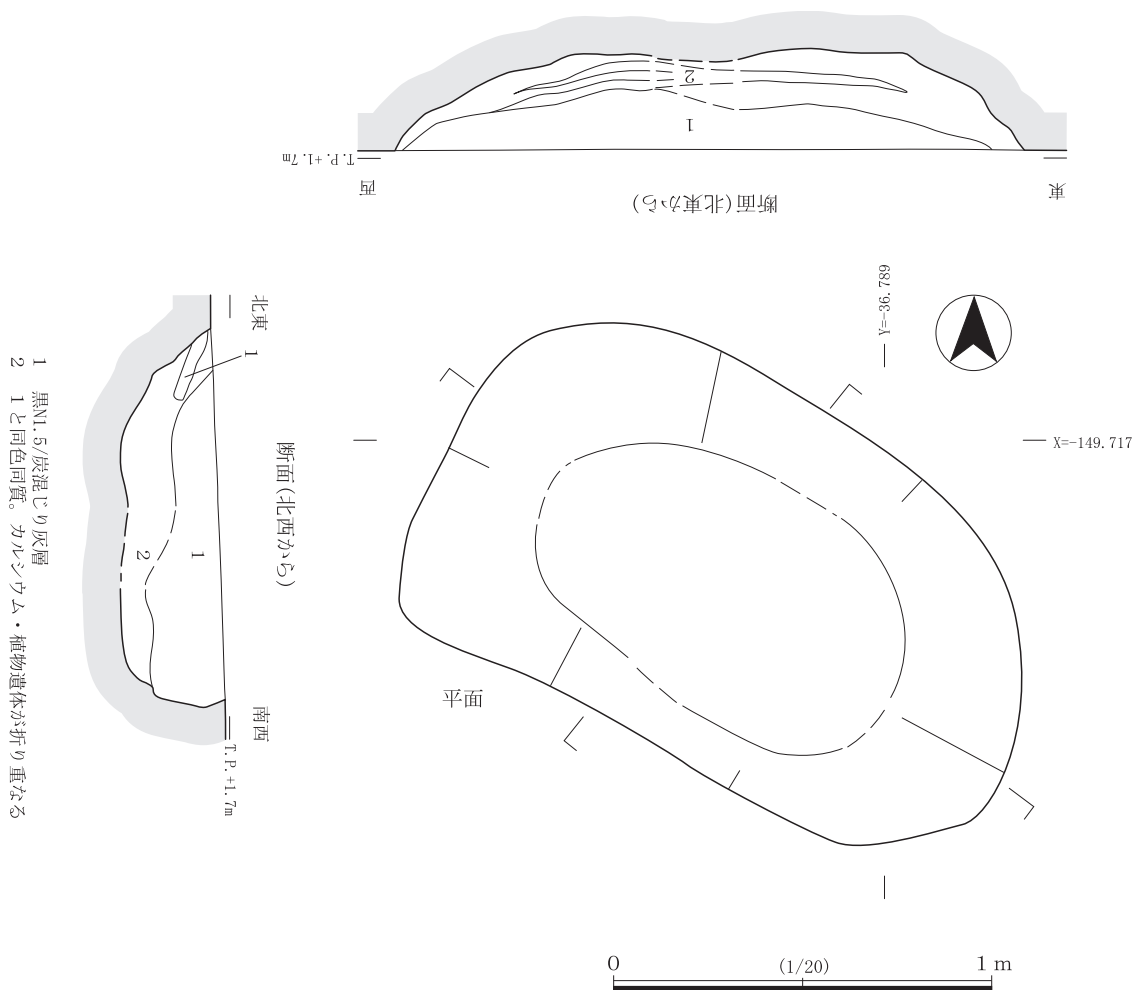


図177 03 - 1 - 2区 第9 - 2面510土坑



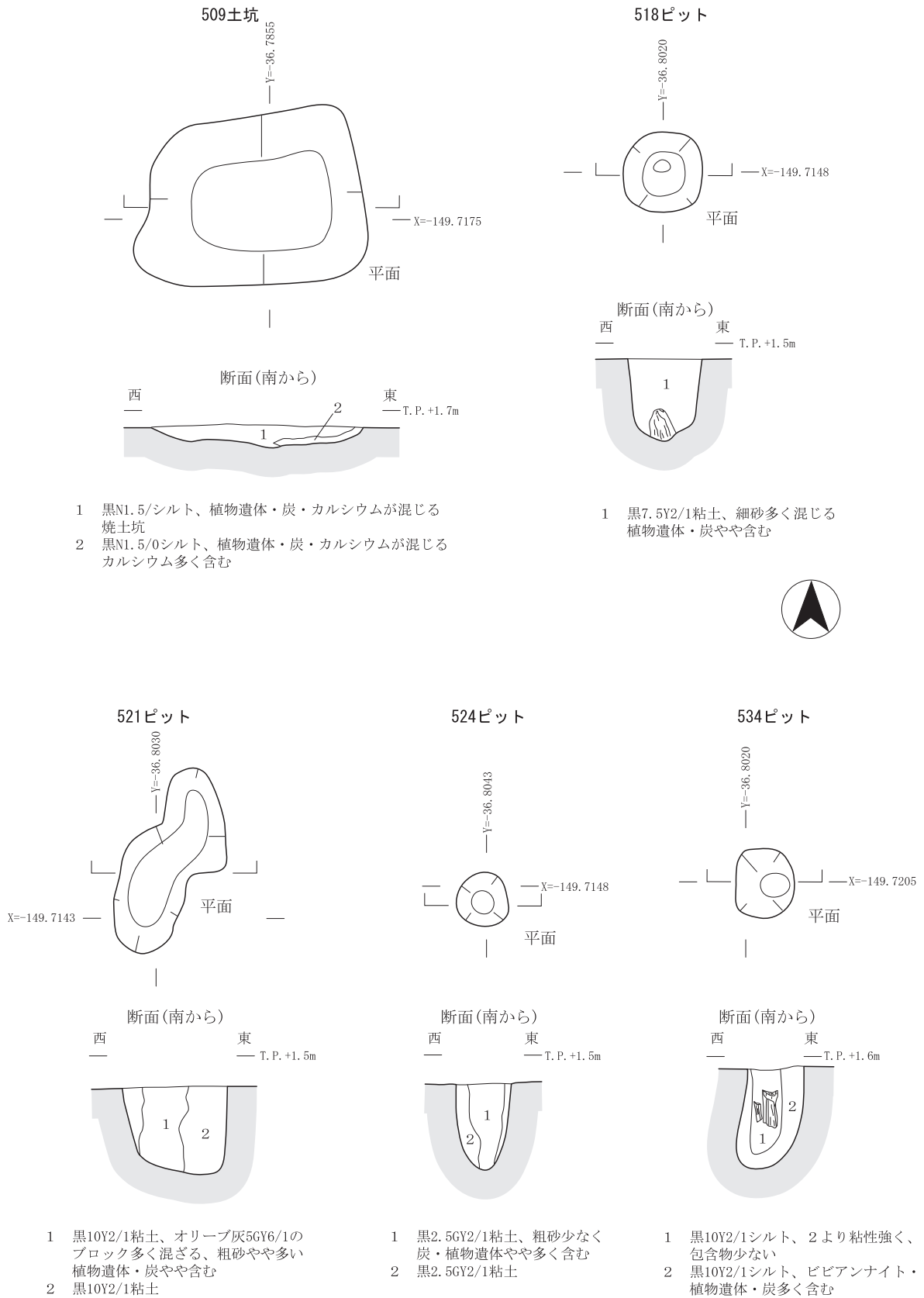


図178 03-1-2区 第9-2面509土坑、518・521・524・534ピット

表11 03-1-2区第9-2面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計
				長径	短径	深さ		弥生土器				サマカイ		その他	
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類		
487土坑	8M-9a	隅丸方	北東	91	54	11	黒7.5Y2/1	7	3	2	41	0	5	木片1、転用土製円板1	60
489ピット	8M-8b	円		17	15		オリーブ黒5Y3/1粘土、細砂混じる、植物遺体・炭含む								0
490ピット	8M-8b	楕円	北東	17	10		黒2.5Y2/1粘土、灰5Y4/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・カルシウム含む								0
491ピット	8M-8a・8b	楕円	北		26		黒2.5Y2/1粘土、灰5Y4/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭含む								0
492ピット	8M-8b	楕円	東西	25	16		黒2.5Y2/1、粗砂・灰5Y4/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭含む			1					1
493ピット	8M-8b	楕円	北	27			オリーブ黒7.5Y2/2、灰5Y4/1粘土ブロック含む								0
494ピット	8M-8b	円		21			オリーブ黒7.5Y2/2、粗砂・灰5Y4/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭含む								0
495ピット	8M-8b	楕円	北東	24	18		黒2.5Y2/1粘土、灰5Y4/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭含む								0
496ピット	8M-9b	楕円	東西	29	22		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・ビビアンナイト含む								0
497ピット	8M-9b	円		25	20		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・ビビアンナイト含む								0
498ピット	8M-9b	円		22	20		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・ビビアンナイト含む								0
499ピット	8M-9b	円		22	19		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・ビビアンナイト含む								0
500ピット	8M-9b	楕円	北	45			黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・ビビアンナイト含む								0
501ピット	8M-9b	円		17	15		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・ビビアンナイト含む				5				5
502ピット	8M-9b	円		16	14		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・ビビアンナイト含む								0
503ピット	8M-9b						黒7.5Y2/1粘土、粗砂・灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・ビビアンナイト含む								0
504ピット	8M-9b						黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・ビビアンナイト含む								0
505ピット	8M-9b	円			32		黒7.5Y2/1粘土、灰5Y5/1粘土ブロック混じる、植物遺体・ビビアンナイト含む								0
506ピット	8M-9b	円		14	13		オリーブ黒5Y3/1粘土、細砂・灰オリーブ7.5Y5/2粘土ブロック混じる、植物遺体・炭・ビビアンナイト含む								0
507ピット	8M-9b	円		14	12		オリーブ黒5Y3/1粘土、細砂混じる、植物遺体・炭含む								0
508土坑	8M-9b・10b	楕円	北		74		オリーブ黒5Y3/1粘土、細砂混じる、炭・カルシウム含む	1	2		11		19	木片1、骨(スッポン)1	35

表11 03-1-2区第9-2面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類		
509土坑	8M-9b	不整方	東西	78	69	10	図178参照		5	2	6		3		16
510土坑	8M-9b・10b	楕円	北西	175	105	36	図177参照			1	3				4
511土坑	8M-10b	不整		317			黒7.5Y2/1粘土、炭・植物遺体含む	5	2		16			シカ下顎骨(4片+歯)	24
513土坑	8M-10c	不整	北北東	81	70	8	黒7.5Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む	1	1		5	楔1			8
514ピット	8M-10b	楕円	南南西	60	52	7	灰オリーブ5Y5/2、オリーブ黒5Y3/1粘土ブロック混じる	1	2		21		1		25
515ピット	8M-10c	楕円	南	64	54	21	黒10Y2/1粘土、粗砂・オリーブ灰2.5GY5/1シルトブロック混じる	4	3	3	23		1		34
516ピット	8M-10b	円		23	21	18	黒N2/ 細砂混じる、ピビアンナイト含む								0
517ピット	9M-1b	円		27	26	26	黒7.1Y5/1粘土、細砂・粗砂混じる、植物遺体含む	1			6		1		8
518ピット	9M-1b	円		29	28	28	図178参照							柱材1	1
519ピット	9M-1b	円		37	30	4	黒10Y2/1、粗砂・オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む								0
520ピット	9M-2b	円		25	22	2	黒10Y2/1、粗砂・ブロック混じる								0
521ピット	9M-1b	不整	北北東	63	23	30	黒10Y2/1粘土、粗砂・灰オリーブ5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む(図178参照)				2				2
522ピット	9M-1b	楕円	北	16	12	9	黒2.5GY2/1粘土、粗砂混じる、植物遺体・炭含む								0
523ピット	9M-1b	円		22	20	20	黒2.5GY2/1粘土、粗砂混じる、植物遺体・炭含む				1				1
524ピット	9M-1b	円		18	14	32	図178参照								0
525ピット	9M-1b	不整		47	31	37	黒7.5Y2/1粘土、粗砂・オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む								0
526ピット	9M-1b				25	20	黒7.5Y2/1粘土、粗砂・オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む								0
527ピット	9M-1b	円		27	22	45	黒7.5Y2/1粘土、粗砂・オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭・カルシウム含む								0
528ピット	9M-1b	円		25	20	35	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む								0
529ピット	9M-1b・1c	楕円	北東	37	25	16	黒10Y2/1、粗砂混じる、植物遺体・炭含む				1				1
530ピット	9M-1b	円		24	21		黒10Y2/1、植物遺体・カルシウム含む	1							1
531ピット	9M-1b	楕円	北西	33	19		黒10Y2/1、植物遺体・炭含む								0
532ピット	9M-1b	円		28	27	24	黒10Y2/1、粗砂混じる、炭・カルシウム含む				3				3
533ピット	9M-1b	円		25	25		黒10Y2/1、炭・カルシウム含む	1			1		1		3
534ピット	9M-1c	円		24	22	34	図178参照								0
535ピット	9M-1c	不整					黒10Y2/1、灰オリーブブロック混じる				4				4

表11 03-1-2区第9-2面土坑・ピット一覧(3)

遺構 番号	グリ ッド	平面 形状	主軸 方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数						合計		
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器				サマカイ			その他	
								I 様 式	I Ⅰ Ⅱ 様 式	Ⅱ 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類			
536ピット	9M-1c	楕円	北	19	13		黒10Y2/1、植物遺体・炭含む	1				2				3
537ピット	9M-1c	円		30	24		黒10Y2/1、植物遺体・炭含む					3				3
538ピット	9M-1c	不整		34	20		黒10Y2/1、粗砂混じる									0
539ピット	9M-1c	円		15	14		黒10Y2/1、炭含む					1	1			2
540ピット	9M-1c	楕円	北東	17	11		黒10Y2/1	2								2
541ピット	9M-1c	円		22	18		黒10Y2/1、植物遺体・炭・カルシウム含む					7				7
1019ピット	9M-1b	楕円	北北西	28	21	29	黒7.5Y2/1粘土、粗砂・オリブ灰 5GY6/1ブロック混じる、植物遺体・炭・カルシウム含む									0
1020ピット	9M-1b	円		22	22	21	黒7.5Y2/1、粗砂・オリブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む									0
1021ピット	9M-1b	円		17	17	19	黒7.5Y2/1、粗砂混じる、植物遺体・炭含む					2				2
1022ピット	9M-1b	円		18	17	21	黒7.5Y2/1、粗砂・オリブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む					2				2
1023ピット	9M-1b	円		22	18	17	黒7.5Y2/1、粗砂・灰オリブ5Y5/3 細砂・オリブ灰GY6/1シルトブ ロック混じる、植物遺体・炭含む			1	1					2
1024ピット	9M-1b	円		19	18	14	黒7.5Y2/1、粗砂・オリブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる、植物遺体・炭含む									0
1025ピット	9M-1b	楕円	北西	18	14	23	黒5Y2/1、細砂・粗砂混じる、植物遺体・炭含む									0
1026ピット	9M-1b	円		23	19	8	黒5Y2/1、粗砂・オリブ黒5Y3/1 粘土ブロック混じる、植物遺体・炭含む									0
1027ピット	9M-1b	楕円	北西	18	8	9	黒7.5Y2/1粘土、粗砂混じる、植物遺体・炭含む									0
1028ピット	9M-1b	円		16	16	27	黒7.5Y2/1、炭化した植物遺体含む									0

は北西 - 南東。長径175cm、短径105cm、深さ36cm。埋土は、図177のように大きくは2層に分れるが、下層はカルシウムと植物遺体がラミナ状に積層する。出土遺物は弥生土器4片(うちⅡ様式1片)のみ。

図176-20778は壺の口縁。口縁は下方へ折れ曲がり、端部には刻み目が、端面にはクシ描き波状文を施す。Ⅲ-2様式(Ⅲ-a段階)。

以下に報告する4個のピットは、いずれも南側溝の西側に存在する。

518ピット(図178) 平面円形で、直径28~29cm、深さ28cm。埋土は、黒7.5Y2/1粘土に細砂・植物遺体・炭が混じる。取り上げはできなかったが、底部に柱の痕跡と考えられる腐朽した木が残っていた。

521ピット(図178) 平面不整形で、北北東 - 南南西を主軸とする。長径63cm、短径23cm、深さ30cm。埋土は、黒10Y2/1粘土にオリブ灰5GY6/1シルトのブロックが多く混じる。ピット中央部に柱痕とも考えうる分層線が縦に入る。弥生土器小片2片のみ出土。

524ピット(図178) 平面円形で、直径14~18cm、深さ32cm。埋土は黒2.5GY2/1粘土を基本とするが、中央部に植物遺体が多く含まれ、柱の痕跡とも考えられる。出土遺物なし。

534ピット（図178） 平面円形で、直径22～24cm、深さ34cm。埋土は黒10Y2/1シルトを基本とするが、中心部に木片・植物遺体・炭が含まれ、柱痕と考えられる。出土遺物はない。

その他の土坑とピットについては、表11にまとめた。

(21) 03 - 1 - 2 区第 9 - 2 層の遺物（図179・180 写真図版106）

調査区南部、第 9 - 2 面として調査した範囲の下層を第 9 - 2 層とする。

出土遺物は、弥生土器4113片（うちⅠ様式475片、Ⅰ～Ⅱ様式335片、Ⅱ様式170片、Ⅲ様式9片）、転用土製円板1点、石庖丁3点、扁平片刃石斧1点、砥石2点、叩き石1点、打製石剣1点、石鏃1点、石錐4点、石矛1点、削器9点、楔6点、サヌカイト剥片106点、中礫1個、小礫6個、木10点、炭1点、計4267点と骨やヒシの実である。

図179 - 20779は鉢。口縁部は肥厚し、胴部に突帯をもつ。体部にはクシ描き簾状文、波状文、直線文が施される。Ⅲ～Ⅳ様式前半。

20780（写真図版106）は壺。口縁は上方に大きく拡張し、垂下は小さい。口縁と頸部には簾状文が施されるが、頸部の簾状文のとめはごく弱い。Ⅲ - 1 様式。20781は壺の頸部。体部内面に絞り目があり、径は頸部で6cm前後と細く、細頸壺になるか。頸部と体部の境には、刻み目のある貼り付け突帯がめぐり、体部にはクシ描き直線文を施す。Ⅱ～Ⅲ - 1 様式か。

20782は壺。頸部は長くのび、口縁は水平にひらいて端部を肥厚させる。口縁下端に刻み目をもち、体部には粗い縦ハケで調整後、クシ描き直線文が施される。摂津地域に多い形態でⅡ様式。体部外面には煤が付着する。20783も壺。頸部は外反して漏斗状にひらき、口縁端部は面をなす。口縁端面は波状文、頸部に直線文がめぐり、クシ描き文の上下にミガキが入る。Ⅱ様式。胎土は白色系統。

20784（写真図版106）は蓋。一對の孔は対面する孔同士を結ぶごく弱い線刻で結ばれる。下面は凹凸が多く、粉状圧痕が残る。写真図版で示したように圧痕内部には筋状の痕跡が観察されたため、イネ科の痕跡と判断される。20785も蓋。両端にある孔から先を欠いており、横に把手状に張り出した形になるものと思われる。上部につまみをもち、内面には円周にそって幅6mm前後の溝がめぐり、壺の口縁などに押し付けて大きさと形を作ったものか。

20786～20791はⅠ - 3～4様式を主体とする。20786は壺の肩部。沈線を入れ、その上方にミガキを施すことによって段差を作り出している。沈線は全部で7条が残る。

20787は甕。屈曲した口縁の下面に長めの刻み目が入る。内面は横方向のハケ調整。20788（写真図版106）も甕。胴部には沈線で弧文が描かれており、破損部にも左上がりの沈線がわずかに見られる。流水文か。外面には煤が付着する。

20789・20790は鉢あるいは甕か。体部はほぼ直口し、口縁部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。20789は口縁部と突帯に刻み目を、20790には布目圧痕を施す。

20791は底部。高台状に中央が凹み、ミガキが接地面まで及ぶ。

20792（写真6）はサメの椎骨。中央の孔が直径約3.5mmと自然の状態よりやや大きく、人為的に加工している可能性もある（第9章 安部みき子「山賀遺跡出土の動物遺体」参照）。

図180 - 20793～20795は石庖丁。20793は残った端部では片刃で、緑泥片岩製。20794は刃部が潰される。20795（写真図版106）は石庖丁の刃部側を擦り切ったもの。加工は両面から行われており、両側から厚みの約3分の1ずつ段が残る。厚みの中心は割れており、擦り切りによって薄くしたところを

折ったものであろう。背部のやや中央と擦り切った刃部の一部に敲打を加えている。緑泥片岩製で長軸10.32cm、短軸2.45cm、厚み0.7cm、重さ28.4cm。

20796（写真図版106）は磨製石矛の破片か。断面形は扁平な紡錘形で、側縁は鋭く稜をもつ。面側から破損する。残存長4.54cm、残存短軸4.42cm、厚み1.0cm。20.7gを量る。

20797は扁平片刃石斧。刃部は一方がややまるく、刃面に付着物がある。結晶片岩製。

20798～20801はサヌカイト製の打製石器。20798は鏃。基部がわずかにくびれる。20799～20801は錐。いずれも周縁を調整して形作る。20801は断面三角形をなし、側縁よりやや稜があまい。

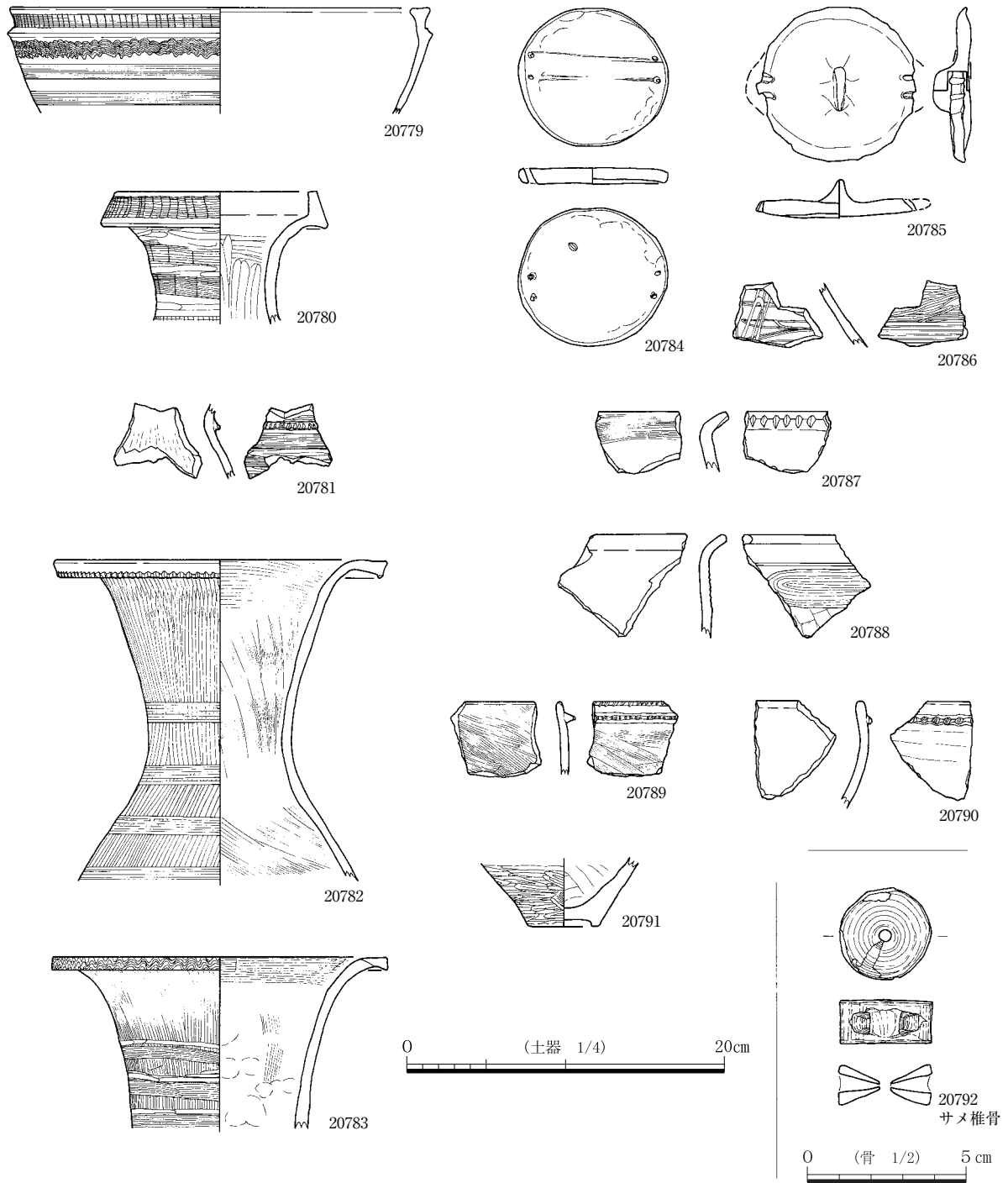


図179 03-1-2区第9-2層出土遺物(1)

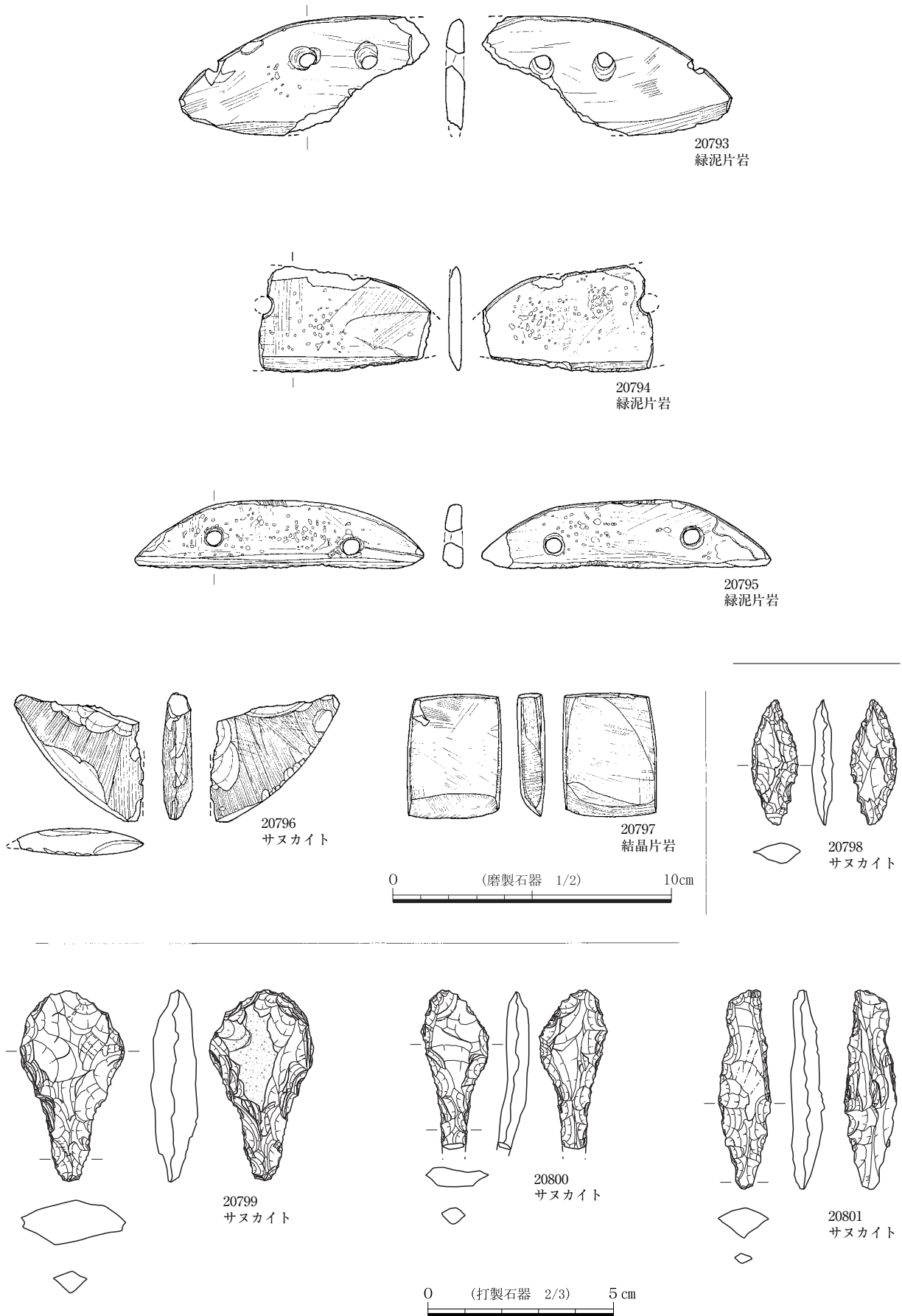


図180 03-1-2区 第9-2層出土遺物(2)

## (22) 03 - 1 - 2 区第10面の遺構と遺物 (図181~204 写真図版48~54・107・108)

黒っぽい盛土層の上面である。

面の高さはT.P.+1.1~1.5mで、調査区南東側が高い傾向にある。第6面や第8面と同様に、複数の比較的規模の大きな溝が西南西から東北東にはしる。調査区南部(第9面1382溝より南の高台部分)は特に遺構が密集している。遺構として、溝47条、木棺1基、石群1か所、土坑25基、ピット457個、落ち込み1か所、高まり6か所、計538か所(遺構番号431~486・542~1015・1045~1051・1428~1430)を調査した。

遺構に先立って、第10面上の遺物を報告する。

436高まり上から土器底部が、442高まり上から土器(20803)、サヌカイト剥片、長さ29cm・幅21cm・高さ15cm・重さ10.6kgの花崗岩大礫が、446高まり上(写真図版50)からも、土器(20802・20805)や礫などが出土した。

図181 - 20802~20805は壺。20802(写真図版107)は無文の広口壺。外面はケズリのち縦方向のミガキを施す。胎土白色で摂津系のⅡ様式。20803の胴部上半の貼り付け突帯には、布目圧痕のある刻み目と、布目のない細く鋭い刻み目がやや不規則に施される。また内面の器面は全体的に剥離する。Ⅰ-3~4様式。20804は大きく横に広がった体部をもち、削り出し突帯に沈線1条を施す。Ⅰ-3様式。20805も壺体部。残存器高9.4cm、底部径5.6cmの小形品。体部中央で張り、底部は台状に肥厚する。外器面は磨耗・剥離して調整等不明。頸部は破損面が磨耗しており、打ち欠きの可能性もある。Ⅰ様式か。

溝を47条調査した。

北から順に432・434・441・445・542溝の5条は、ほぼ平行して東北東-西南西を主軸とする。

432溝 調査区北部に位置する。第9面359溝の下層にあたる。幅220~395cm、深さ65cm。埋土は黄褐2.5Y5/4粗砂。出土遺物は、弥生土器10片(うちⅠ様式2片)のみ。

434溝 432溝の数m南に平行する。第9面328溝の下層にあたる。南西側で436高まりにさえぎられ、調査区を貫通してはいない。幅206~296cm、深さ53cm。埋土(図43)は、P11黒褐2.5Y3/1シルトで植物遺体を含む。出土遺物は、弥生土器64片(うちⅠ様式7片、Ⅰ~Ⅱ様式3片、Ⅱ様式2片)、サヌカイト剥片2点、中礫1個、ヒノキの板材1点、計68点である。

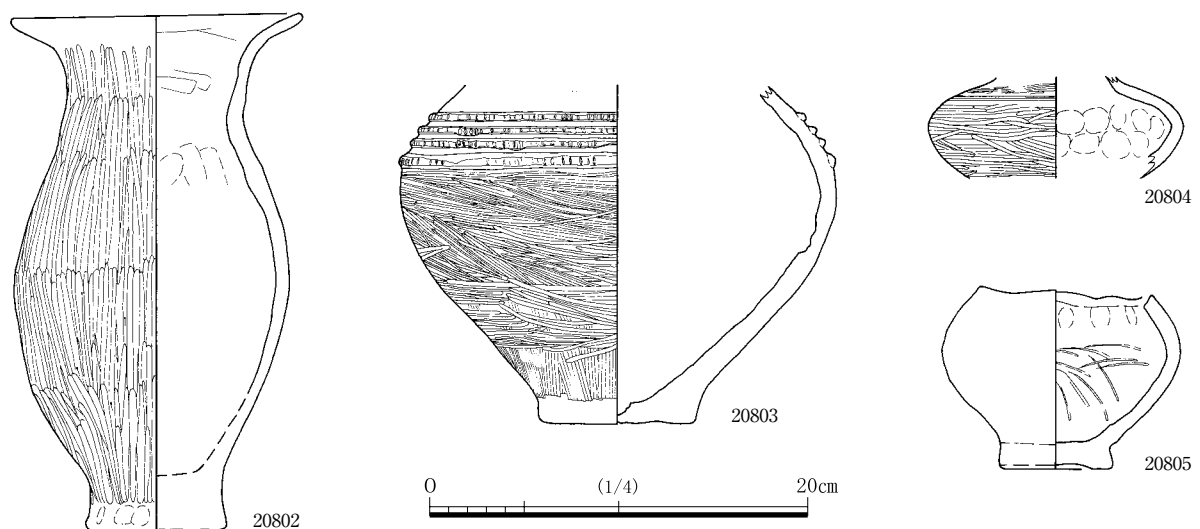


図181 03 - 1 - 2 区 第10面上出土土器





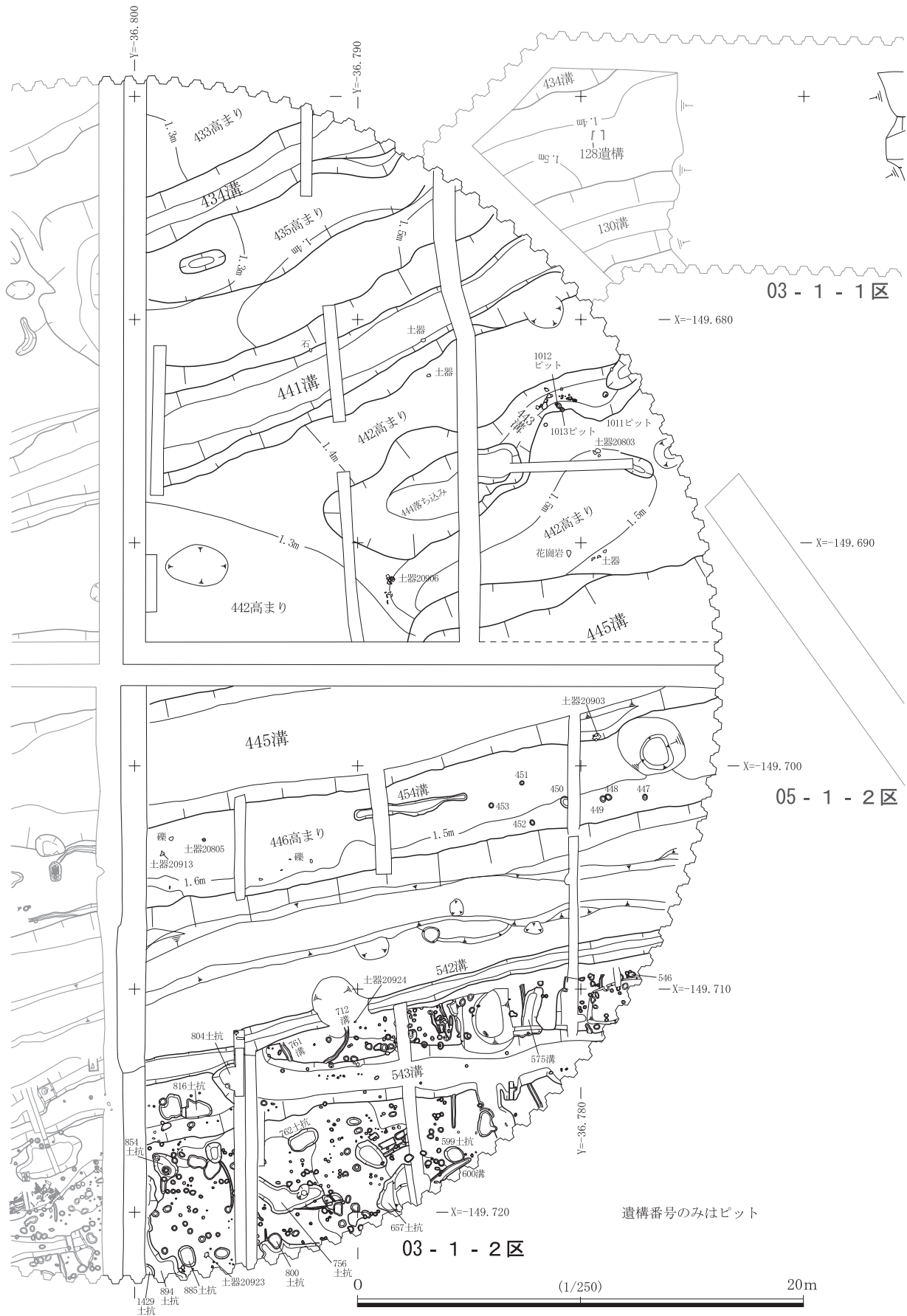


図182 03-1-2区 第10面

441溝 第9面330溝の下層にあたる。当03-1-2区のみならず、03-1-1区の130溝と61溝、03-1-3区の1407溝と一連の溝である。幅300～510cm、深さ36～89cmで東側が深い傾向にある。埋土は、南北断面（図43）で上半がO9黒10YR2/1シルト。植物遺体・木片を多く含む。下半O10黒褐色2.5Y3/1。植物遺体を含む。東西断面（図44）ではO'9オリーブ黒10Y3/1粘性のあるシルト。植物遺体・木片多く含む、ビビアンナイトが少量見られる。O'10黒2.5GY2/1粘性のあるシルト。暗緑灰10GY4/1のブロック、木片多く含む。

出土遺物は、弥生土器354片（うちI様式25片、I～II様式21片、II様式27片）、転用土製円板1点、磨製石斧1点、叩き石1点、打製石剣1点、サヌカイト剥片5点、中礫2個、木製ヤス4点、木片4点（うちヤナギ属の流木2点、ヤマグワ1点）、計373点と骨片である。

図183-20806は壺の体部。平行沈線の上に山形文を配する。I-3～4様式。

20807（写真図版107）はサヌカイト製の磨製石斧。側縁を歯潰ししたもので、被熱によって割れる。第9層の破片と接合した。残存長8.10cm、短軸5.64cm、厚み2.7cm、重さ170.1g。

20808はサヌカイト製の打製石剣。両側縁から粗く調整したもの。残存長軸7.21cm、短軸2.57cm、厚み1.0cm。重さ26.7gを量る。なお、441溝の埋土でも下層で出土した。

20809（写真図版92）は木製ヤス。長軸17.7cm、最大径0.6cm。全面を加工し、両端を尖らせている。モミ属を用いる。

445溝 調査区中部を東北東-西南西に貫き、03-1-3区の1409溝に連なる。第9面337溝の下層にあたる。幅505～755cm、深さ143cm以上。埋土（図43）は、N16暗緑灰5G3/1細砂を主体とするが、T.P.0.0m付近は第13層との攪拌である可能性がある。下半には植物遺体・木片が多い。

445溝の遺物は、上～中層と下層（底に近い黒色層）とに分けて取り上げた。

上～中層の遺物は、弥生土器600片（うちI様式49片、I～II様式44片、II様式35片）、転用土製円板3点、石庖丁2点、砥石1点、削器3点、楔1点、サヌカイト剥片9点、中礫1個、木2点（うち1点はブナ科）、計622点と骨・歯（イノシシ・シカ）である。

下層の遺物は、弥生土器461片（うちI様式27片、I～II様式30片、II様式49片）、転用土製円板2点、石錘1点、磨石3点、砥石2点、削器2点、石核1点、サヌカイト剥片3点、中礫2個、木製鋏2点、木片7点、クルミ1点、計487点と骨である。

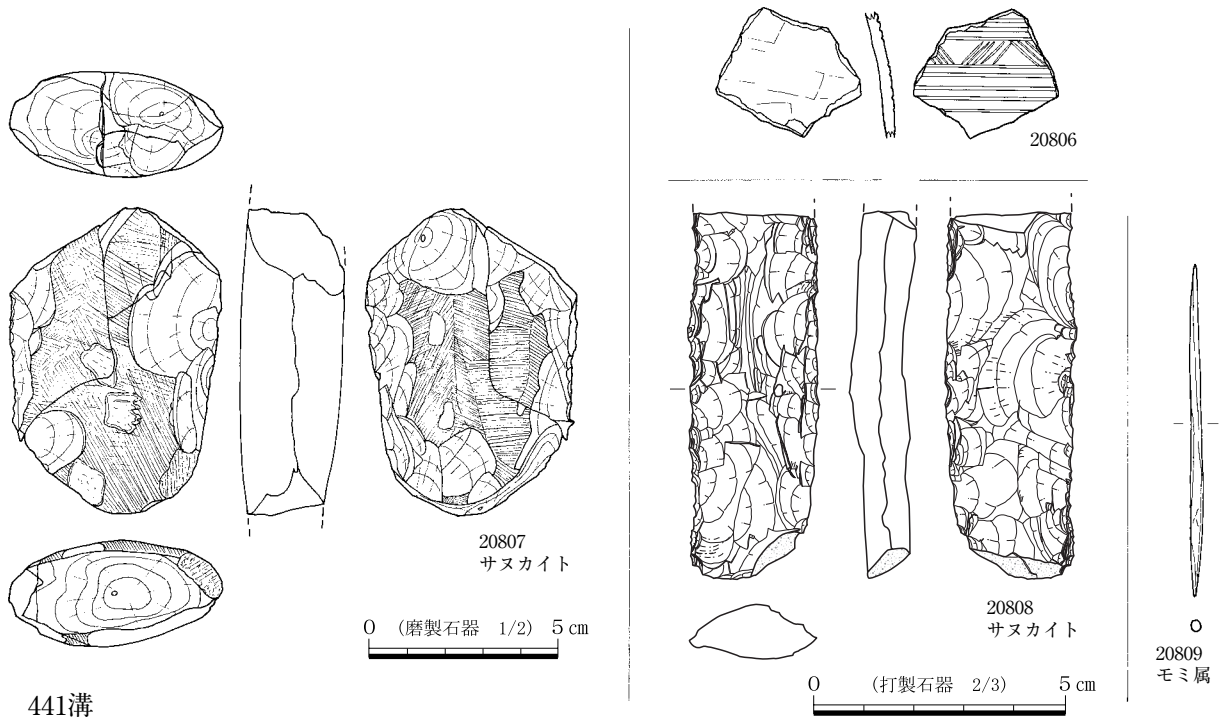
以上、445溝出土遺物の合計は、弥生土器1061片（うちI様式76片、I～II様式74片、II様式84片）、転用土製円板5点、石器類31点、木製鋏2点、木9点、クルミ1点、計1109点と骨・歯となる。

図184-20815は壺の口縁端部。端面にはヘラ描き斜格子文が描かれる。外面、口縁直下には縦方向に耳状の突起がつき、紐孔も一部残存する。瀬戸内系の土器と考えられる。

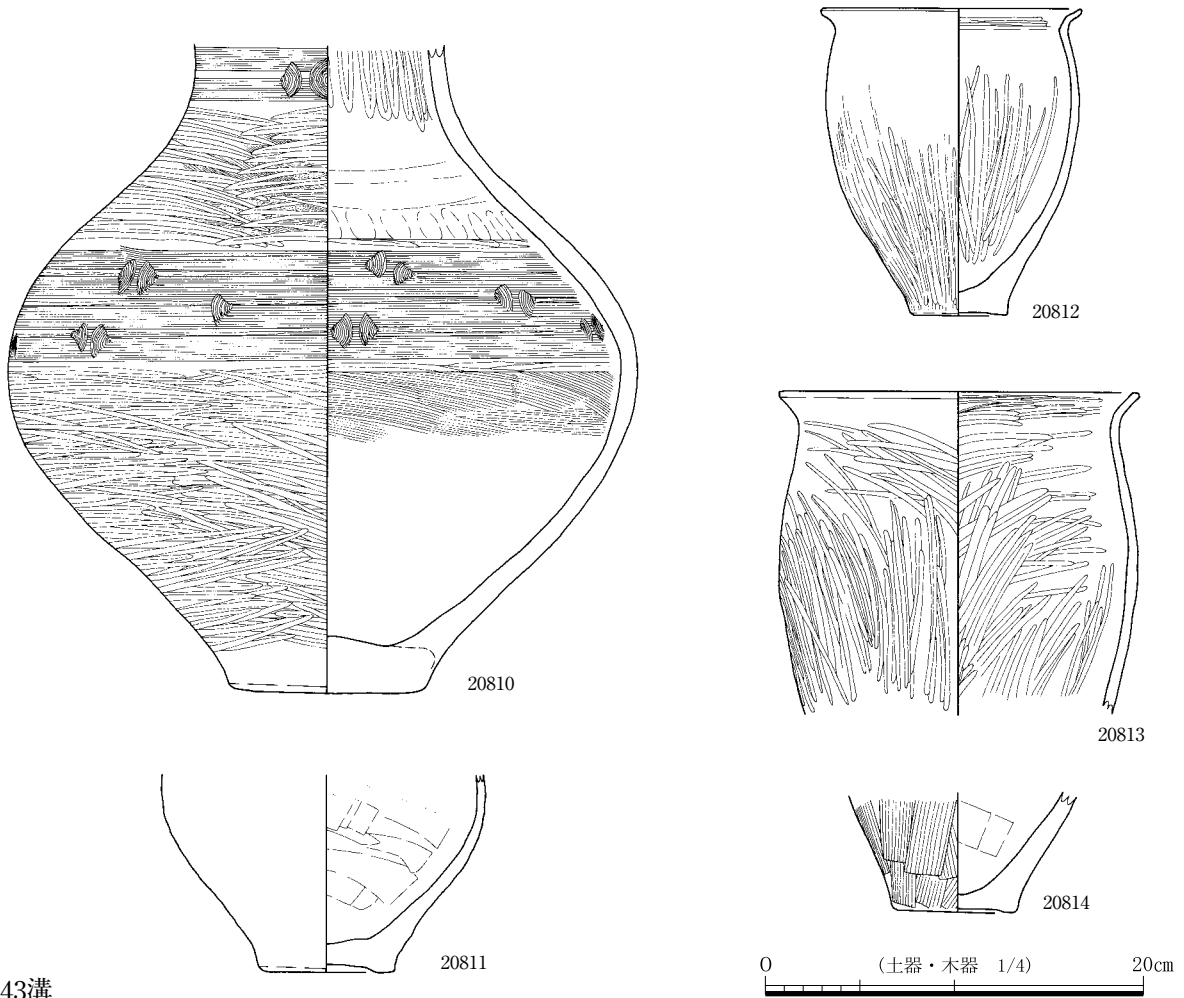
20816（写真図版107）は鉢。体部は外傾してクシ描き直線文4条が施される。直線文間にもミガキが入る。20817も鉢で、クシ描き流水文をもつ。いずれもII様式。

20818は壺の口縁。頸部はやや長く、ひらく。外面にはハケの条痕がはっきり残るが、内面口縁部は条痕があまり見られず、煤がわずかに付着する。口縁端部は内面側からかぶさった粘土によって中央がやや凹んでいる。頸部には沈線7条が残り、I-4様式に位置づけられるだろう。

20819（写真図版107）は鉢。体部は内湾し、口縁部はゆるくひらく。一部器面が剥離する。I様式。20820・20821は緑泥片岩製の石庖丁。20820は3分の1を欠損するが、直線刃半月形に復原される。片刃で、端部と紐部の間に縦方向の研磨痕が目立つ。20821は未貫通の紐孔が3つある。平面形は長方



441溝



443溝

図183 03-1-2区 第10面441・443溝出土遺物

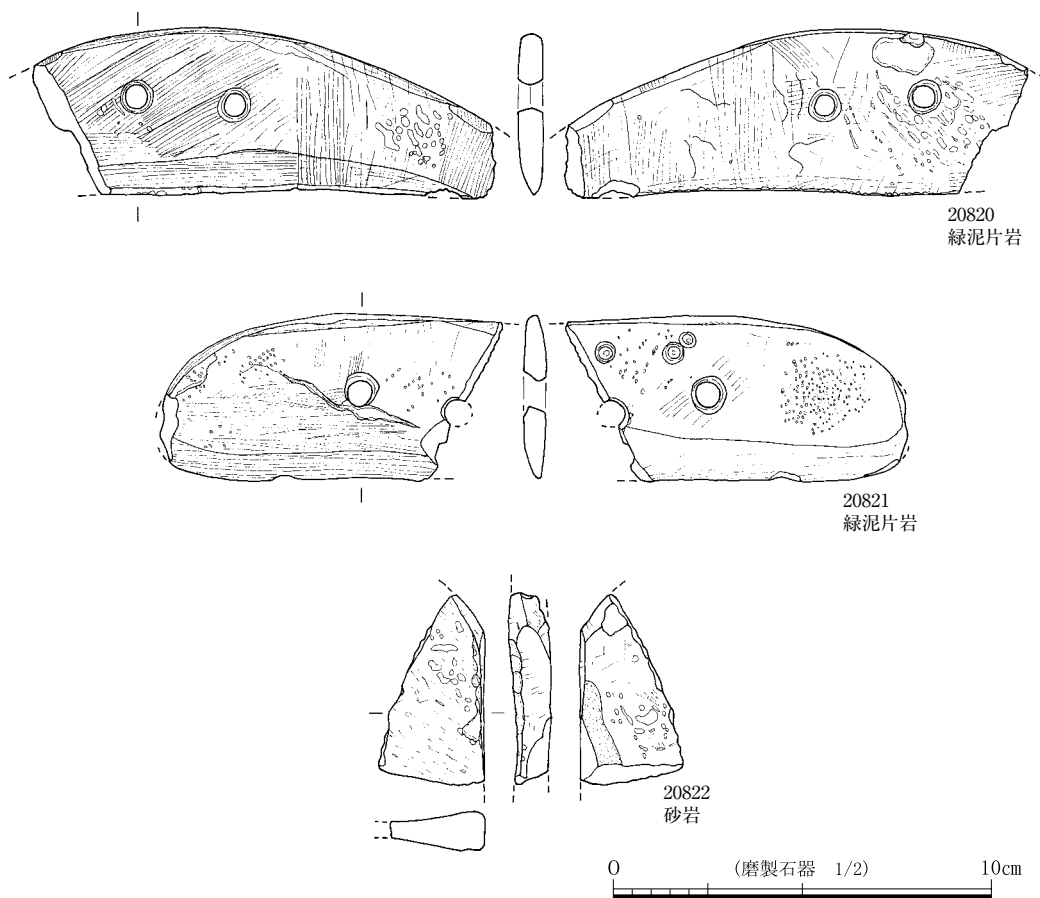
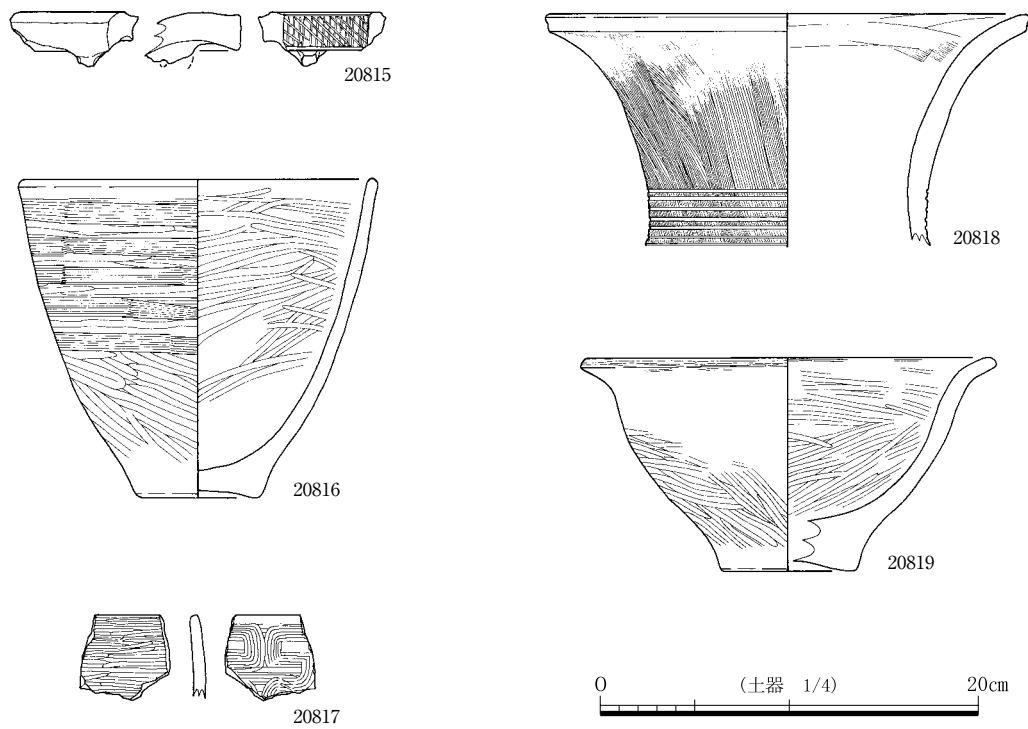


図184 03-1-2区 第10面445溝出土遺物(1)

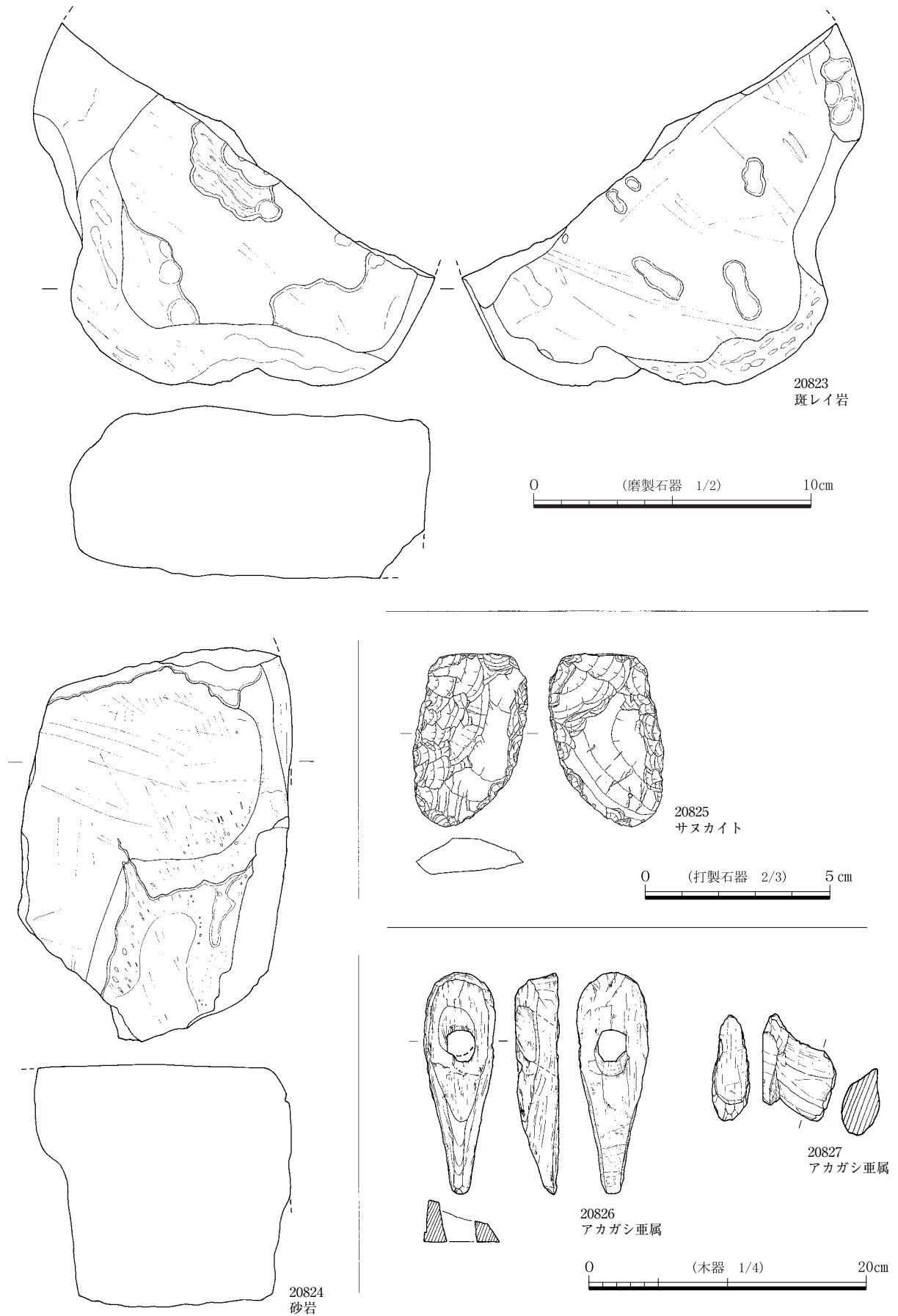


図185 03-1-2区 第10面445溝出土遺物(2)

形に近い。片刃で端部には敲打痕。

20822～図185-20824は砥石。20822は砂岩製で砥面中央が凹む。20823は斑レイ岩、20824は砂岩製。いずれも破損する。

20825は削器。一辺に原礫面を残して、周縁の調整は細かく行われている。石鏃の可能性もあろう。

木器は下層の黒色土から出土した。20826は直柄狭鋏。長軸16.0cm、幅5.0cm、最大高3.0cm。刃部は磨耗したか欠損したものだらう。柄孔は長軸3.0cm、長軸2.6cmの楕円形。20827は鋏の曲柄。握り部分や、台状部は欠損する。残存で台部長6.5cm、幅2.4cm。いずれもアカガシ亜属の柾目材を用いる。

542溝（図199） 調査区南部、第6面252大溝や第9面1382・1397溝よりも南側の高台部分の北縁を東北東-西南西に流れる。検出長37.6m。主軸方位を同じくする432・434・441・445溝に比べて幅は狭く62～139cm、深さ27cm。埋土は図199のように7層に分れる。出土遺物は、弥生土器1419片（うちⅠ様式280片、Ⅰ～Ⅱ様式140片、Ⅱ様式10片、Ⅲ様式1片）、磨製石斧1点、砥石1点、叩き石1点、石錐2点、削器5点、サヌカイト剥片30点、木片4点、計1463点と骨26点（イノシシ・シカ）である。穿孔のあるイノシシ下顎骨も出土している（612頁 写真7）。

図187-20833（写真図版108）は大形の細頸壺の体部。クシ描き直線文上に円形浮文を並べ、間に斜格子文を充填する文様構成を基本とする。上方にクシ描き直線文と波状文、下方にも直線文を配する。Ⅳ-1～2様式（Ⅲ様式新段階）。第9-2層、第10面951土坑出土の破片と接合している。

20834は復原口径29.4cmを測る大形の甕。粗いハケ調整が、口縁部に横方向、外面口縁下の一部に縦方向に施される。口縁端部には刻み目。外面は著しく煤が付着し、内面は剥離する。淀川水系に類例が多いⅡ様式。第6面255溝の20422、第9層、第9-2層の破片と接合。20835は鉢。口縁端部はわずかに面をもつ。ミガキは粗く、底部器面は内外面ともに剥離している。Ⅰ様式末からⅡ様式か。

図188-20836～20844の土器はおおよそⅠ-3～4様式に位置づけられるが、20840はやや古い様相をもつ。20836（写真図版108）は壺。体部は中央で張り、口縁部は大きくひらく。頸部11条、胴部上半12条の沈線がめぐるが、頸部の沈線帯最下部は沈線を入れた後、胴部側を低くして突帯状にする。20837は無文の広口壺。内外面ともに工具ナデののちミガキを入れる。20838は壺頸部。刻み目のある

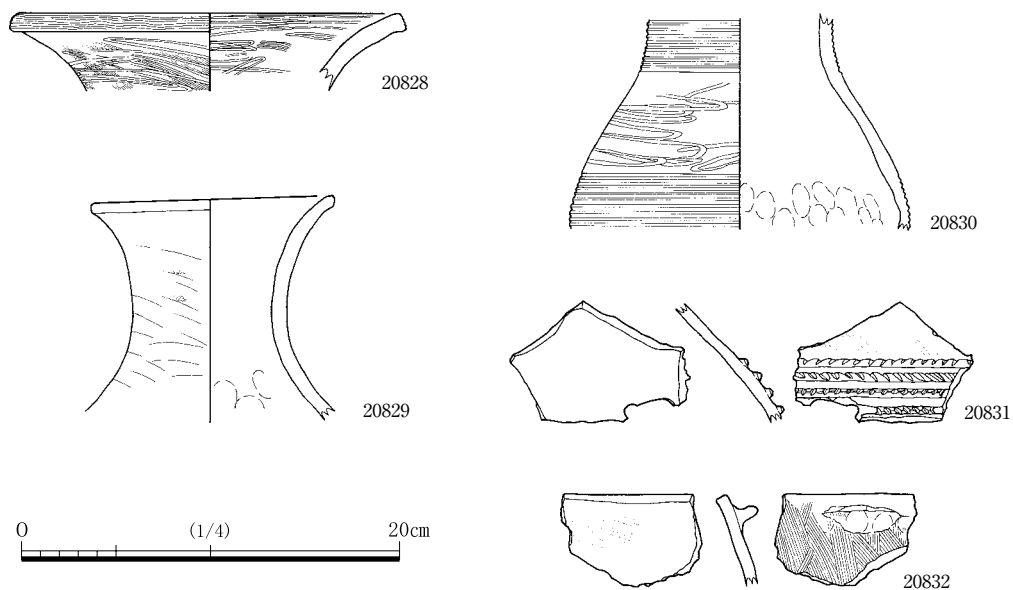


図186 03-1-2区 第10面473溝出土土器

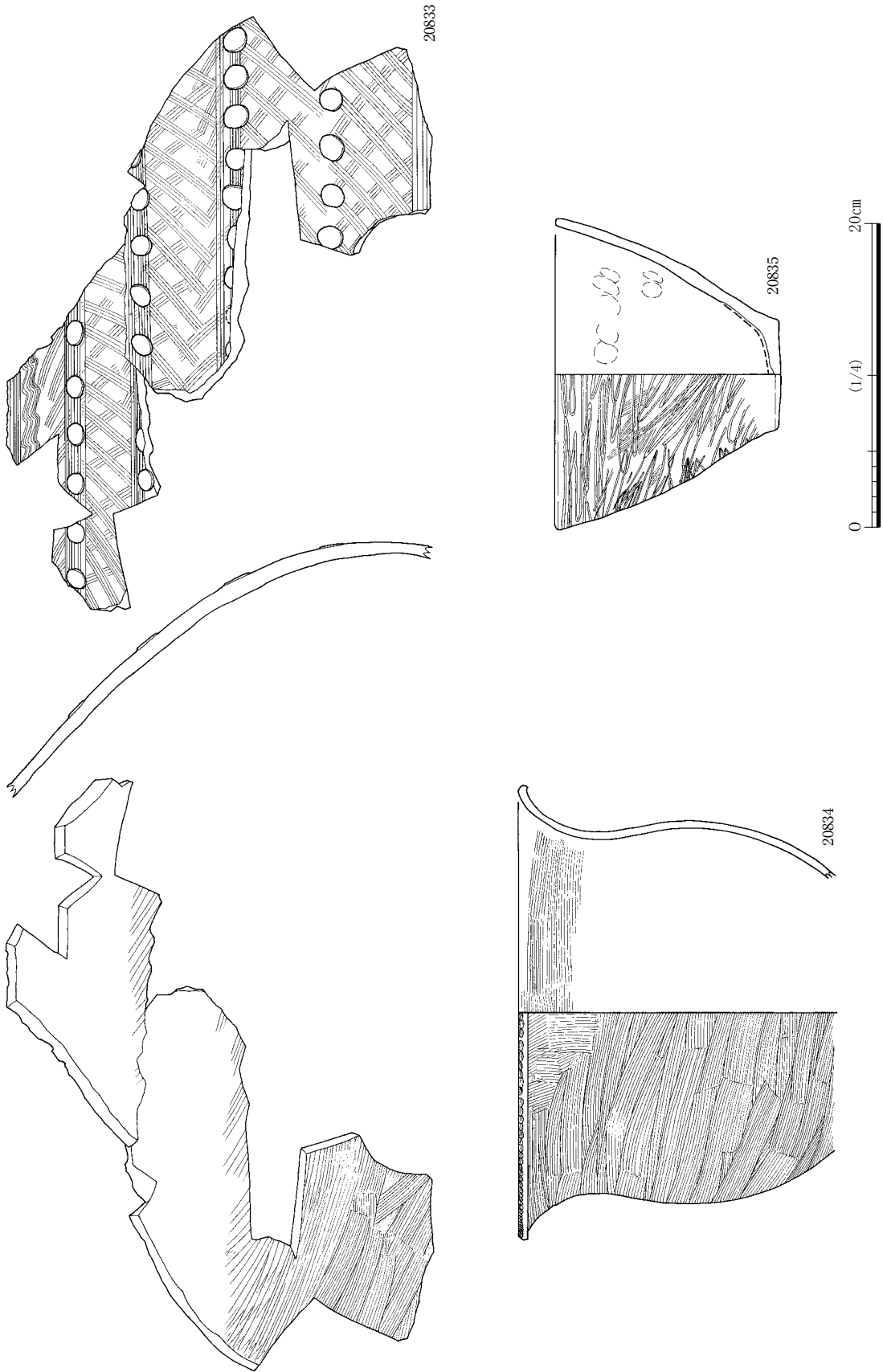


図187 03-1-2区 第10面542溝出土遺物(1)



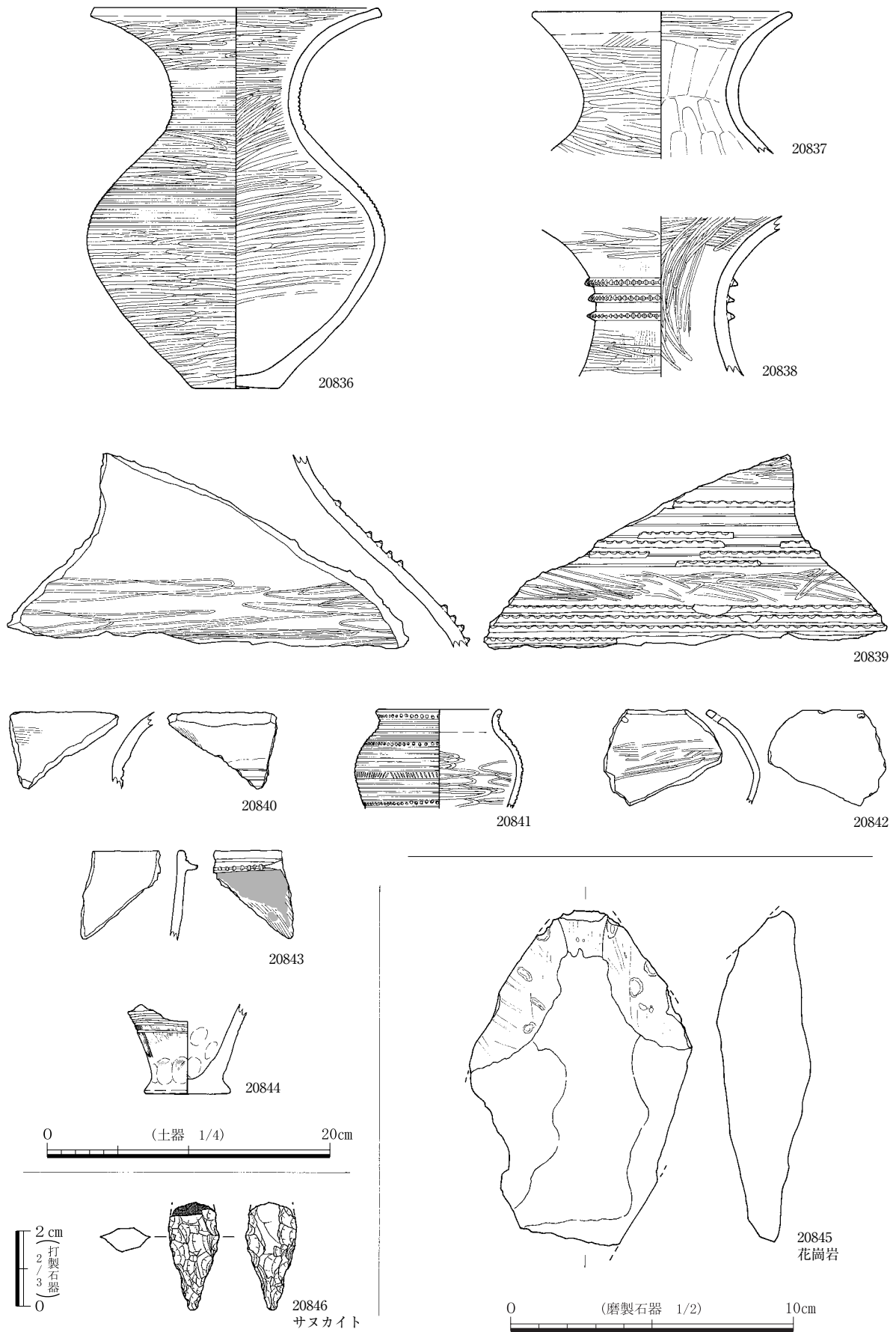


図188 03-1-2区 第10面542溝出土遺物(2)

貼り付け突帯3条がめぐる。I - 3～4様式。20839（写真図版108）は壺の体部。胴部が大きく横に張る器形。ところどころで貼り付け突帯が剥がれて、その下の沈線が露出するが、布目圧痕のある刻み目突帯2帯が確認できる。20840は壺の口縁。頸部には削り出し突帯が残る。突帯上方の縁に沈線を入れ、さらに指で押して器壁を整えている。I - 2～3様式か。

20841は無頸壺。短く外反する頸部をもち、沈線間に円形刺突文、刻み目を並べる。20842も無頸壺。強く内湾する口縁端部には、孔が1つ開く。

20843は瀬戸内系の甕か。口縁はほぼ垂直にたつもので、口縁から下がった部分に沈線をいれ、刻み目のある突帯を貼り付ける。内外面著しく煤付着。

20844は鉢。底部はやや横に張り出し、体部に沈線5条が残る。

20845は砥石。花崗岩製で風化が進み、砥面は先端にわずかに残るのみ。20846は石錐か。調整が側縁全体におよび石鏃の可能性もあるが、断面形から錐とした。

以下、個々のデータは表12にまとめ、主な溝に触れる。

440溝 調査区西部の矢板際に位置する。基本的に南北を指向するが、屈曲している。幅24～45cm、深さ6cm。埋土は黒褐2.5Y3/2シルト。出土遺物は弥生土器2片のみ。

443溝（図189・写真図版51） 調査区北東部に位置する。432・434・441・445・542溝などのように東北東-西南西を主軸とするが、長くは続かない。幅132～503cm、深さ38cm。埋土は、オリーブ黒5Y3/1シルトに、暗灰黄2.5Y3/1シルト～細砂のブロックや炭化粒が混じる。出土遺物は、弥生土器154片（うちI様式10片、I～II様式10片、II様式6片）、中礫2個、炭1点、計157点である。

図183 - 20810（写真図版107）は壺。頸部と体部には、クシ描き直線文と扇形文で擬似流水文を作り、文様帯を意識する。頸部の扇形文は2あるいは4か所、胴部には6～8か所に配されるものとなるだろう。II様式でも古い段階に位置づけられよう。20811は壺下半。外面は著しく磨耗してほとんど原形をとどめない。底部は上げ底状で、接地面に紡錘形の圧痕がある。I～II様式。

20812～20814は甕。20812（写真図版107）は外面にケズリを施した後、内外面ともに縦方向のミガキ。内外面ともに赤変、表面剥利する。20813は最大径が口縁にあり、太目のミガキが不規則に施される。20814は底部。条痕の弱いハケ調整が施され、下面には太い繊維状の圧痕や紡錘形の圧痕が残る。いずれもII様式であろう。

468～476溝 466高まりの上面および周辺にあり、多くは最大幅17～36cm、深さ7～16cmの比較的小規模な溝群。主軸方位は、466高まりと同様に東北東-西南西、またはそれと直交する。

473溝 466高まりの南法面にあり、466高まり周辺の溝のなかでは例外的に規模が大きく、幅83～153cm、深さ58cmを測る。主軸方位は東北東-西南西。埋土は、黒褐2.5Y3/1シルトに、黄灰2.5Y4/1シルトのブロックが混じる。出土遺物は、弥生土器95片（うちI様式11片、I～II様式13片、II様式3片）、サヌカイト剥片2点、計97点。

図186 - 20828は壺の口縁部。端部にクシ描き直線文を引き、内面の一部にクシ描き文が残る。20829は無文の細頸壺。頸部はゆるく外反し、端部はややまるみを帯びる。20830は頸部と胴部に、ヘラ描き沈線10条以上を施す。20831の貼り付け突帯の刻み目は向きを変えて綾杉文状に飾る。20832は把手付きの甕。これらの土器は、I - 4様式からII様式初頭に位置づけられるものである。

543溝 調査区南東部に位置する。おおむね第9面343溝の下層にあたるが、さらに東にのびる。主軸方位は東西。検出長15.3m、幅182～273cm、深さ48cm。埋土は上半黒2.5Y2/1シルトで下方に粘土ブロック、

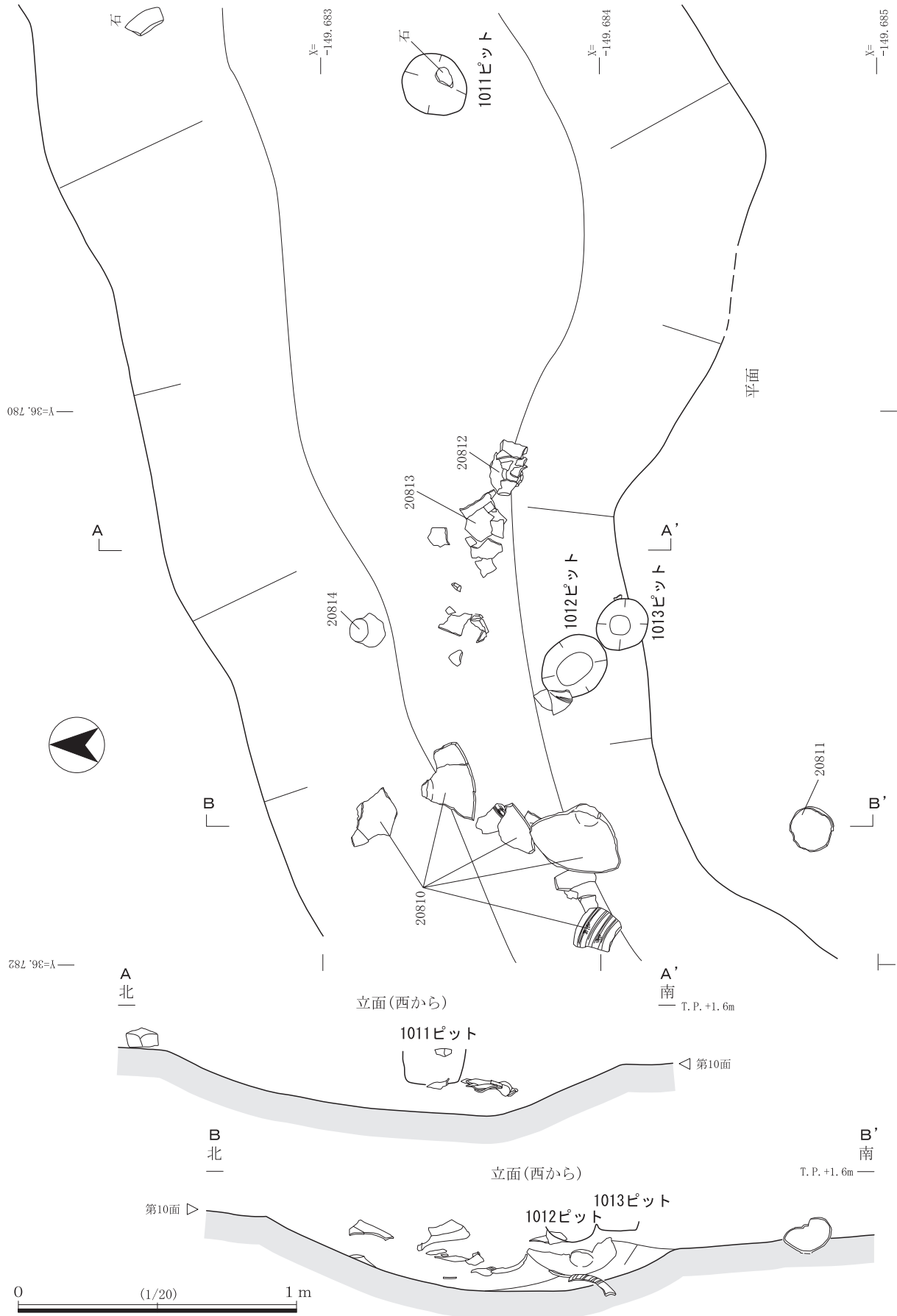


図189 03-1-2区 第10面443溝

表12 03-1-2区 第10面溝一覧(1)

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		弥生土器					その他	合計	
							I 様式	I Ⅰ Ⅱ 様式	II 様式	III 様式	不 詳			
432	9L-1h	東北東	(21.9)	220~395	65	黄褐2.5Y5/4粗砂	2					8		10
434	8L-10h他	東北東	(17.8)	206~296	53	黒褐2.5Y3/1、植物遺体含む	7	3	2			52	中礫1、サヌカイト剥片2、板1	68
437	9L-1h	東西	4.5	44~79	20	黒褐2.5Y3/2		1				3		4
438	9L-1i・1h	北	2.1	24~49	13	黒褐2.5Y3/2								0
440	9L-3i・3j	北北東	(8.6)	24~45	6	黒褐2.5Y3/2						2		2
441	8L-9i他	東北東	(51.3)	300~510	89	本文参照	25	21	27			281	転用土製円板1、磨製石斧1・打製石剣1・サヌカイト剥片5・叩き石1・中礫2、ヤス4、炭化木片1、木片3、骨1	374
443	8L-8i他	東北東	(16.1)	132~503	38	オリーブ黒5Y3/1、暗灰黄2.5Y3/1シルト~細砂ブロック混じる、炭化粒含む	10	10	6			128	中礫2、炭1	157
445	8L-8j他	東北東	(53.7)	505~755	143	暗緑灰5G3/1細砂、下半に植物遺体・木片含む	76	74	84			827	転用土製円盤板1、石庖丁2・石錘1・削器5・楔1・石核1・サヌカイト剥片12・磨石3・砥石3・中礫3、鍛2、薄板1(ブナ科)、木片7、枝1、種実(クルミ)1、骨5	1114
454	8M-9a・10a	東北東	5.15	18~66	10	オリーブ黒5Y3/2、細砂混じる	4					18		22
455	9M-1a	東西	(1.9)	15~30	6	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる						7		7
457	9M-1a	東北東	(3.2)	17~33	12	灰5Y4/1、細砂混じる								0
463	9M-1a・2a	東西?	(7.8)	17~186	10	黄灰2.5Y4/1、細砂混じる						13	サヌカイト剥片1、木片1	15
468	9M-2a	東北東	(1.6)	20~29	16	黒褐2.5Y3/1、ビビアンナイト含む						3	サヌカイト剥片1	4
469	9M-2a他	東北東	9.2	13~27	12	黒5Y2/1						7		7
470	9M-2b・2a	北東	(2.2)	18~26	7	黒2.5Y2/1								0
471	9M-2b・2a	東西	(0.7)	17	8	黒2.5Y2/1						3		3
472	9M-2b	東北東	(0.5)	36	15	黒褐2.5Y3/1	1					1		2
473	9M-2b	東北東	(7.45)	83~153	58	黒褐2.5Y3/1、黄灰2.5Y4/1シルトブロック混じる	11	13	3			68	サヌカイト剥片2	97
474	9M-2b・2a	北北西	2.8	18~26	12	黒5Y2/1	1					11	サヌカイト剥片1	13
475	9M-2a・2b	北北西	1.9	13~18	10	黒2.5Y2/1								0
476	9M-2a・2b	北北西	(1.9)	15~22	9	黒5Y2/1	1					4	植物遺体1	6
542	8M-10b他	東北東	(37.6)	62~139	27	図199参照	280	140	10	1		988	磨製石斧1・石錘2・削器5・サヌカイト剥片30・砥石1・叩き石1、木片4、骨(イノシシ下顎1)26	1489

表12 03-1-2区 第10面溝一覧(2)

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数					合計	
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		弥生土器						その他
							I 様式	I ~ II 様式	II 様式	III 様式	不 詳		
543	8M-9b他	東西	(15.3)	182~273	48	本文参照	399	192	58	1	1824	石庖丁1・打製石剣1・石鏃1・石錐1・削器3・楔1・サヌカイト剥片38、砥石1、紡錘車1、炭1、焼土塊1、骨21	2545
545	9M-1c	東西	(8.0)	71~162	28	黒2.5Y2/1、粗砂混じる、植物遺体含む	5	4	4		42	石鏃1・削器1	57
551	8M-8b	北	(32)	9~13	6	オリーブ黒7.5Y3/1					1		1
565	8M-9b・9a	北	(2.4)	(67~92)	9	オリーブ黒7.5Y3/1	6	4	1		30	削器1	42
567	8M-9b・9a	北	(1.1)	16	3	オリーブ黒7.5Y3/1							0
575	8M-9b・9a	北北東	(2.2)	62~78	16	オリーブ黒7.5Y3/1	3	1			8	石庖丁1	13
576	8M-9b	北北西	(1.2)	18	7	オリーブ黒7.5Y3/1							0
582	8M-9b	北北西	(2.8)	94~107	8	オリーブ黒7.5Y3/1						タコ壺1、骨1	2
598	8M-9b	北	(1.5)	14~17	6	オリーブ黒7.5Y3/1							0
600	8M-9b	北東	(2.5)	23~38	7	オリーブ黒7.5Y3/1							0
601	8M-9b	北	(1.1)	15	8	オリーブ黒7.5Y3/1							0
602	8M-9b	北北西	(1.7)	12~24	7	オリーブ黒7.5Y3/1	1				1		2
603	8M-9b	北西	(0.2)	15	8	オリーブ黒7.5Y3/1							0
608	8M-9b	北西	(1.1)	13~18	5	オリーブ黒7.5Y3/1					2		2
664	8M-9b	東北東	(1.2)	17~23	7	オリーブ黒7.5Y3/1							0
712	8M-10b	北東	(2.0)	8~17	7	オリーブ黒7.5Y3/1							0
751	8M-10b	東西	(1.4)	7~13	4	オリーブ黒7.5Y3/1							0
761	8M-10b	北北西	(0.9)	12~25	9	オリーブ黒7.5Y3/1					2		2
801	8M-10c	北東	(0.4)	11	6	オリーブ黒7.5Y3/1							0
802	8M-10c	北	(0.5)	6~8	6	オリーブ黒7.5Y3/1							0
810	8M-10b	北北東	(2.2)	9~13	5	オリーブ黒7.5Y3/1							0
925	9M-1b・1c	北	(0.8)	11	6	オリーブ黒7.5Y3/1							0
975	9M-1c	北北西	(1.2)	13~22	8	オリーブ黒7.5Y3/1							0
1014	9M-2a他	東北東	(8.6)	36~73								鍛未成品1、小礫1	2
1430	9M-2b	東北東			50		2	3			14	木20以上、楔1、サヌカイト剥片3	43

木片を含む。下半は灰7.5Y4/1細砂~粗砂。黒色のシルトブロック含む。出土遺物は比較的多く、弥生土器2474片(うちI様式399片、I~II様式192片、II様式58片、III様式1点)、紡錘車1点、石庖丁1点、砥石1点、打製石剣1点、石鏃欠損品1点、石錐1点、削器3点、楔1点、サヌカイト剥片38点、炭1点、焼土塊1点、骨21点(イノシシ・シカ・アオサギ?)、計2545点である。

図190-20847~20852はIII-1~2様式に位置づけられる。20847は屈曲のあまい受け口状の口縁をもつ壺で、口縁にはクシ描き波状文を飾り、頸部には直線文を施す。20848は細頸壺の頸部。頸部にはヘラ描き沈線、貼り付け突帯が1条、体部にはヘラ描き波状文を飾る。河内低地の土器か。以上2点は

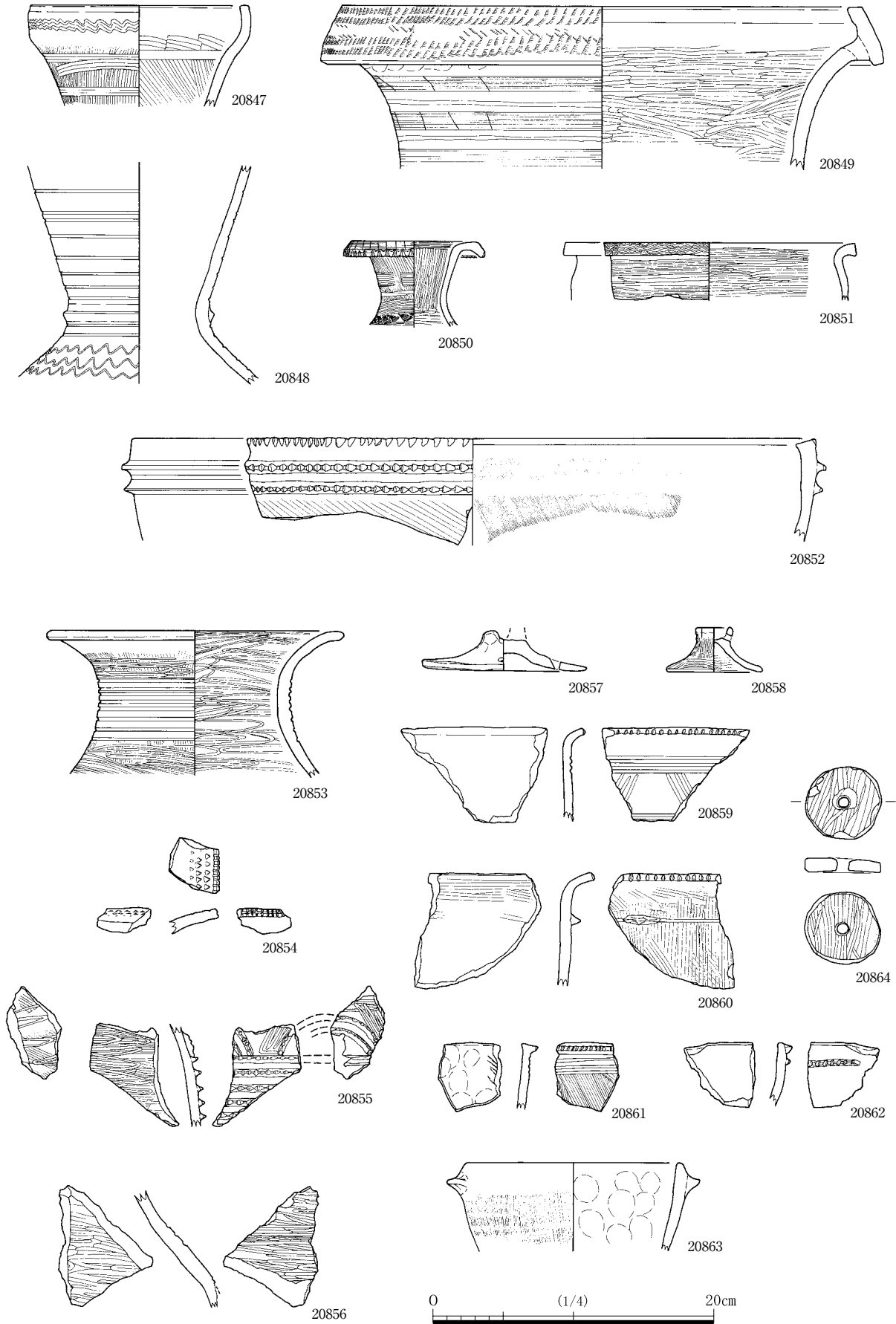


図190 03 - 1 - 2区 第10面543溝出土遺物 (1)

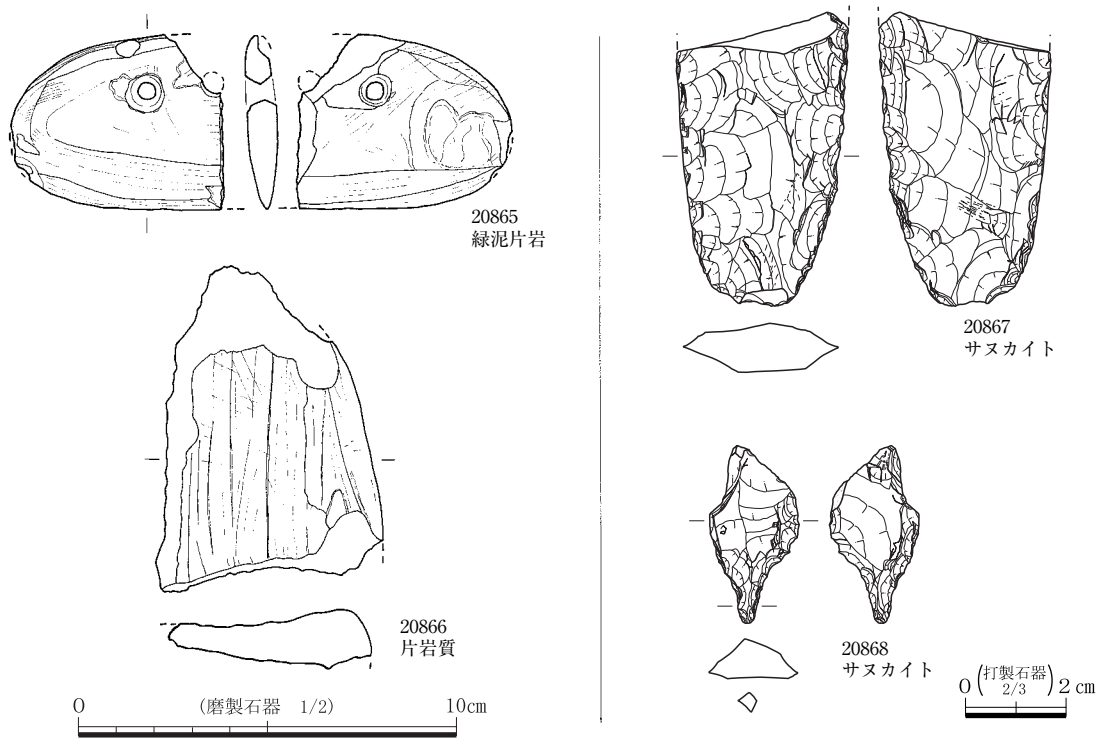


図191 03-1-2区 第10面543溝出土遺物(2)

Ⅲ様式でも新しい様相をもつ。

20849は受け口状口縁をもつ壺。口縁は上下に拡張し、やや内湾する。口縁部には列点文が2段にわたってめぐり、文様間には施文時の工具痕が残る。20850は口縁部を外へ折り、端部に刻み目を入れる。口縁部のみのクシ描き簾状文となる。両者とも生駒山西麓産の土器でⅢ様式(Ⅲ-b段階)。

20851は鉢。拡張した口縁部には波状文がめぐる。20986(第10-2層)と接合した。20852も鉢。口縁端部とその下の突帯2条に刻み目がめぐる。

20853~20863はⅠ-3~4様式の土器。20853は頸部に沈線8条をもつ。20854は大きくひらく壺の口縁。端部では、横方向に沈線をひいた後、縦方向の刻みを入れる。口縁上面には三角列点文を3重にめぐらしている。

20855は壺の体部。刻み目に布目圧痕が残る貼り付け突帯が横位に5条残り、その上位には2条を1単位としておそらく重弧文が描かれるものだろう。20856も壺の体部。胴部上半の沈線は3条。

20857・20858は小形の蓋。頂部に20857は2つ突起がつき、20858は2つ紐孔がある。

20859は甕あるいは鉢。体部には沈線によって、直線文間に山形文が配される。20929(第10層)と接合した。20860は把手付きの鉢。体部は深く、口縁はやや外傾する。粗い作りで、口縁は歪む。内外面とも煤が、内面には炭化物が付着し、器面もあれて一部剥離している。

20861は瀬戸内系の甕。口縁部の突帯下に沈線3条を入れる。20862(写真図版108)は甕あるいは鉢。口縁が片口状になるものと思われ、口縁下の刻み目突帯もそこで途切れている。20863は把手付きの鉢。外面には煤が付着する。20864は土器片を転用した紡錘車。両面にミガキが残り、側面はよく磨耗する。

図191-20865は緑泥片岩製の石庖丁。両刃で、杏仁形になるものか。20866は砥石。片岩質で砥面はよく使いこまれて中央が凹む。20867はサヌカイト製の打製石剣の基部。一方の側縁の直線的な部分は

研磨して刃潰しを行っている。20868は石錐。錐部を作りだしたもので、調整は体部の中央におよぶ。

なお、20849と20855は溝の下層から出土している。

545溝 調査区南部の矢板際に、ピット群に埋もれるように位置する。主軸方位はおおむね東西。検出長8.0m、幅71～162cmで西側が広い傾向にある。深さは28cm。埋土は、黒2.5Y2/1シルトに粗砂や植物遺体が混じる。出土遺物は、弥生土器55片（うちⅠ様式5片、Ⅰ～Ⅱ様式4片、Ⅱ様式4片）、石鏃1点、削器1点、計57点。

図192 - 20869はサヌカイト製の打製石鏃。基部を欠損し、残存長4.30cm、短軸2.36cm、厚み0.8cm、重さ8.8gと大形で調整は粗い。

575溝 調査区南東部に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西。長さ2.2m、幅62～78cm、深さ16cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1シルト。弥生土器12片（うちⅠ様式3片、Ⅰ～Ⅱ様式1片）と石庖丁1点が出土した。

図192 - 20870は石庖丁の破片。緑泥片岩製で、背部と紐穴が一部残る。

582溝 この溝も調査区南東部、575溝の南西側にあり、北北西 - 南南東を主軸方位とする。検出長2.8m、幅94～107cm、深さ8cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1シルト。出土遺物は、タコ壺1個と骨1点。

図192 - 20871（写真図版108）はタコ壺。丸底のコップ形で、口縁部に穿孔をもち、口径4.5cm、器高8.7cmを測る。色白で、内外面ともにナデ調整。弥生時代中期以降に類例が多い形態である。

712溝・761溝 調査区南東部、542溝と543溝にはさまれた範囲の西部に位置する。712溝は幅8～17cm、深さ7cm、761溝は幅12～25cm、深さ9cmと、規模は小さい。両者が一連のもので、内径2.8m程度の円形にめぐり、一見すると住居の壁溝のようではある。しかし、内径が小さいこと、713ピット以外に溝で囲まれた内部にめぼしい遺構がないこと、今回の調査で明確な竪穴住居が検出できなかったことから、住居としての可能性を指摘するに止める。

1014溝 調査区南西部、466高まりの北法面に位置する。主軸方位は、445溝や466高まりと同じく東北東 - 西南西。北肩は445溝により失われている。現存幅36～73cm。木製鋏の未成品と小礫1個が出土した。

図192 - 20872（写真図版108）は溝の下層から出土した直柄鋏の未成品。左右に切れ込みを入れて笠を作るが、柄孔と刃先は未加工である。軸部と隆起部は欠損し、残存で長軸18.4cm、最大幅9.4cm、最大厚1.4cmを測る。アカガシ亜属の板目材を用いる。

1430溝（図193・写真図版51） 調査区南西部、542溝の南側に位置する。木が多く出土したので当初はしがらみや柵と想定して調査を進めた。しかし、杭はあるものの縦に打ち込まれたものは図193の平面図中の西部にあるヤマグワくらいでしっかりとした構造とはいえなかった。そこで、木群は北に傾斜した緩斜面あるいは北肩が失われた溝底に貼り付いたものと推定し、遺構を1430溝と呼ぶ。主軸方位は、この面の比較的大きな溝と同様に、東北東 - 西南西。溝とした場合の幅は1.2m以上ではあるが不詳。深さも南肩から50cm以上あるとしかいいがたい。

出土遺物の主体は木で、樹種を同定したものが20点あり、その内訳はヤナギ属が6点、ヤマグワが5点とこの2種で半数以上を占め、コナラ亜属・アカガシ亜属・サカキが各2点、ケヤキ・カヤ・ノグルミが各1点であった。また、木と木の間から弥生土器19片（うちⅠ様式2片、Ⅰ～Ⅱ様式3片）、楔1点、サヌカイト剥片3点も出土した。

第10面検出の溝は47条あるが、この他の溝については表12を参照されたい。



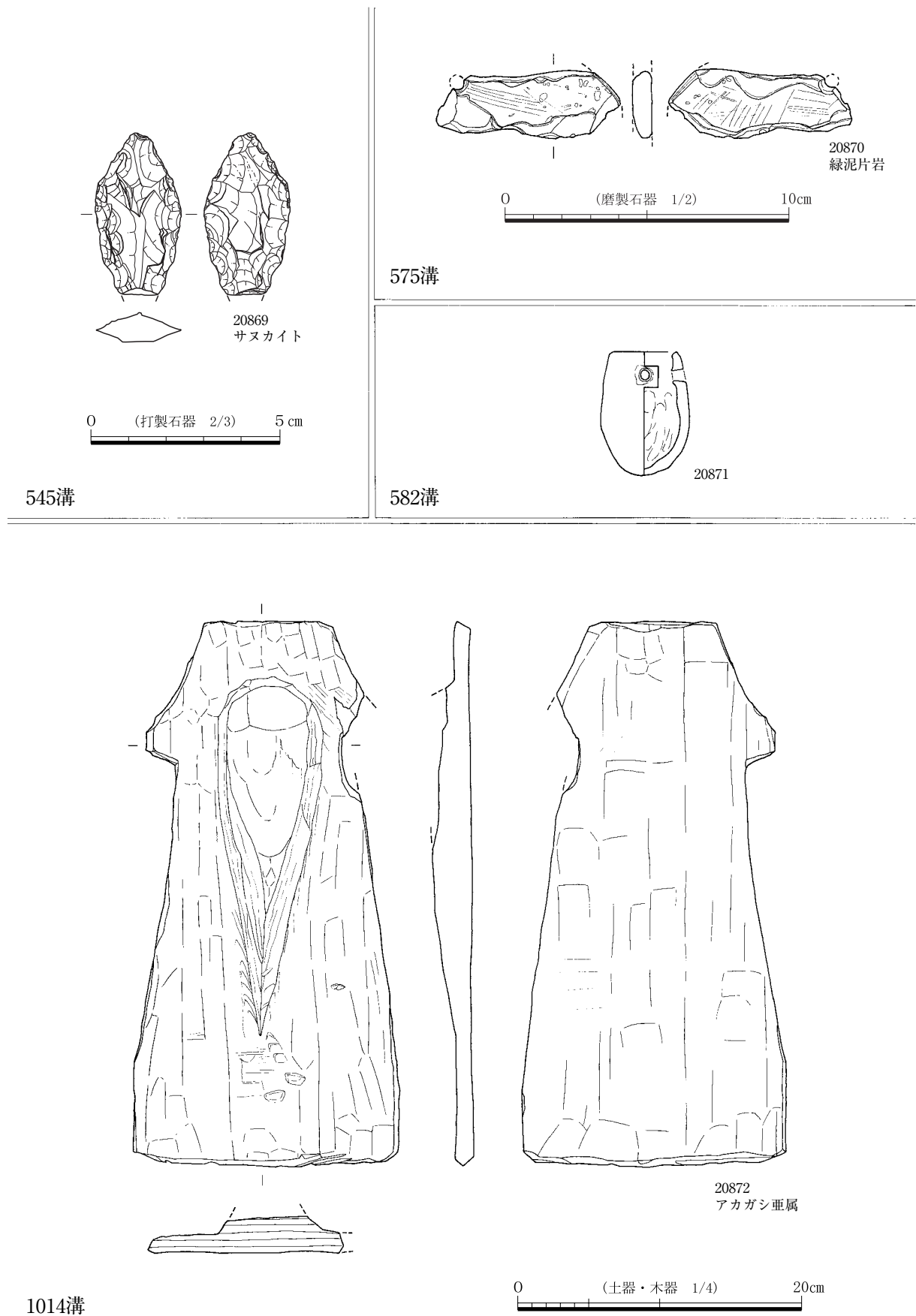


図192 03-1-2区 第10面545・575・582・1014溝出土遺物





木棺を1基検出した。

431木棺（図194・写真図版52） 調査区中央やや南、446高まり上に位置する。掘りかたの平面形は隅丸方形で北辺がやや突出し丸味を帯びる。長径87cm、短径52cm。木棺内法は、長さ36cm以上、幅25cm、深さ9cm。主軸方位はほぼ南北（北5°西）。

431木棺周辺の第9面および第9層で325・422・421木棺などが検出された。それらと比較すると、（小口穴ではなく）墓壙底のレベルが、325木棺はT.P.+1.76m、421木棺はT.P.+1.31m、422木棺はT.P.+1.58mなのに対し、431木棺はT.P.+1.22mと深い。

検出面から底板上面まで約25cmの深さがあるが、蓋板は存在しなかった。両側板は底板に載る。底板の小口部分は不明瞭。小口板も存在しない。北小口穴は板の断面に似た長方形で壙底から1cmと浅いのに対し、南小口板はほぼ円形で8cmと深い。棺材は、底板はスギ、両側板はヒノキ。

埋土は図194に示す通り。レンズ状に落ち込んだ「3層」が、蓋板の痕跡とも考えられる。しかし、土器片とともに人骨1片（長骨片）が「2層」から出土しているので、蓋はさらに上部に存在していた可能性もある。

棺内からは掘削時の検出と埋土の水洗とを合わせて、弥生土器11片（うちI様式3片、I～II様式1片）出土した。そのうち壺頸部の小片やI～II様式の甕口縁は骨の下からの出土である。他に、底板下の掘りかた内からI様式の甕片1片が出土した。

石群を1か所検出した。

1051石群（図195・写真図版52） 調査区南西部、466高まり上に位置する。第9層中検出の423木棺の南西下にあたり、レベルは423木棺の底がT.P.+1.70m、1051石群の石はT.P.+1.40～1.60mと近接してい

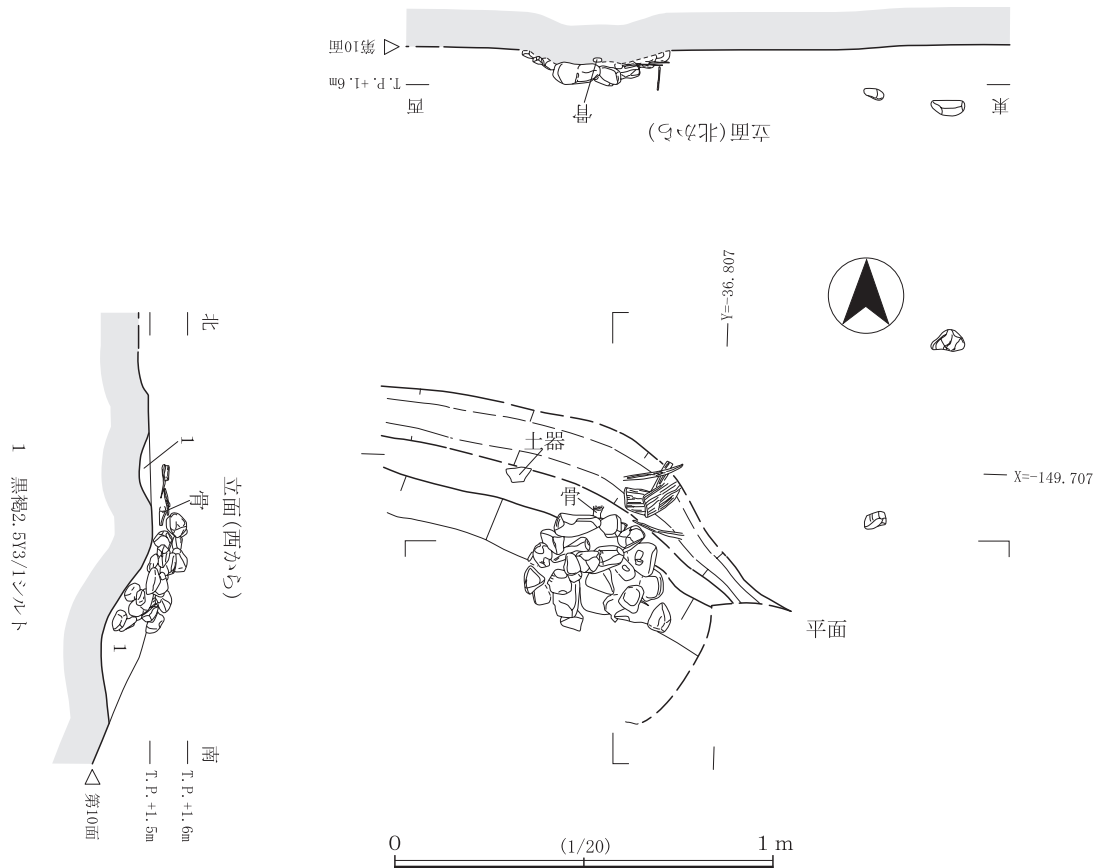


図195 03-1-2区 第10面1051石群

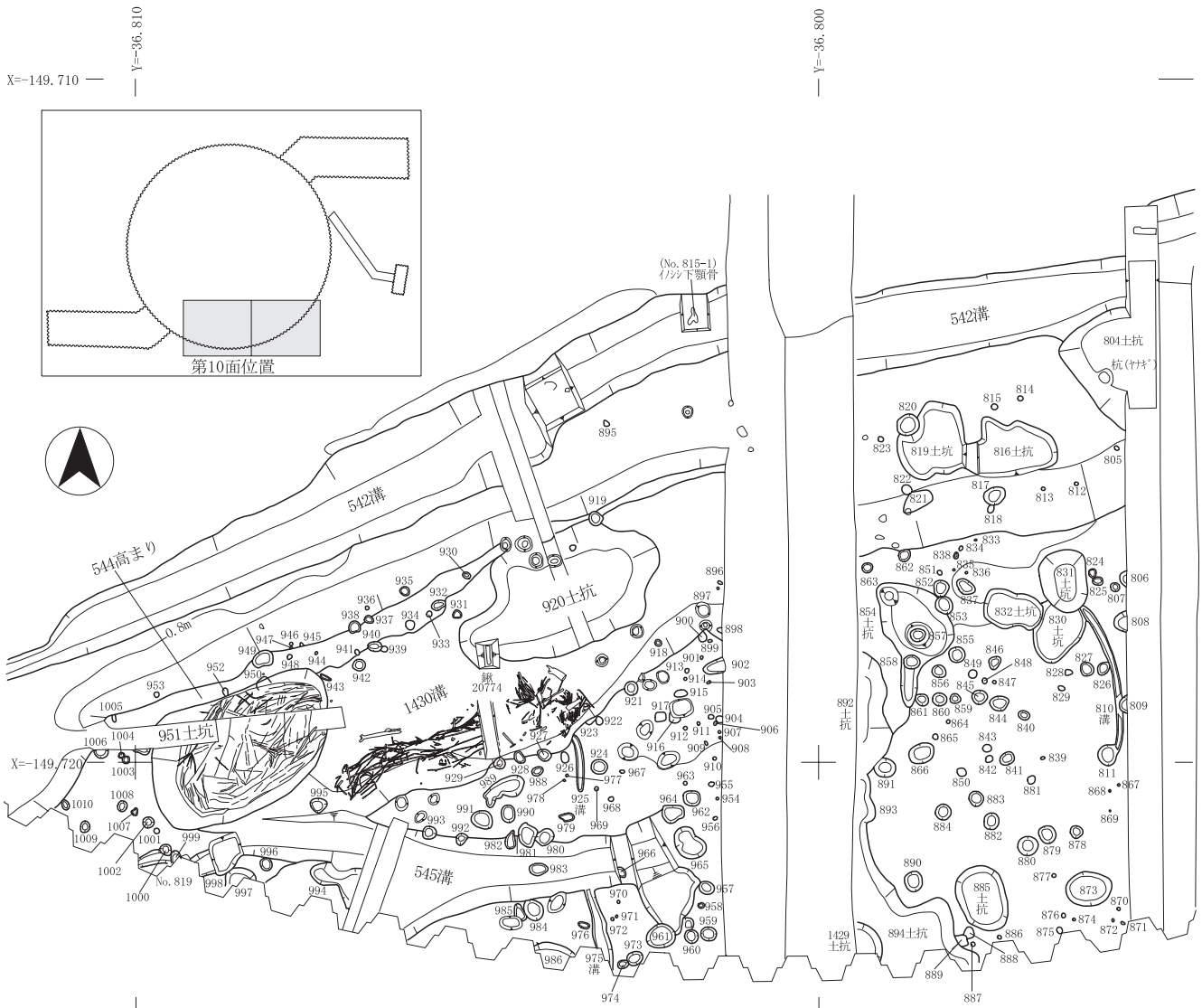
るが、断面観察の結果両者の直接の関係は認められなかった。27個の石が東西38cm、南北31cm、高低差20cmの範囲に積み上げられている。この周辺の第10面には西北西-東南東方向に溝状のくぼみがあり、黒褐2.5Y3/1シルトで埋まっているが、石群自体の掘りかたではない。

個々の石は、卵大から小児の人頭大だが拳大が多い。27個の総重量は10.6kg、その内訳は斑レイ岩20個（190～1020g、平均380g）と花崗岩7個（120～1300g、平均430g）である。このほかに北部の石下からシカ（左踵骨）1点が出土した。

以下、第10面の土坑、ピット、落ち込みを報告していくが、土坑とピットの多くは調査区南部に位置する。図182の03-1-2区全体図（1/250）では個々の遺構が小さいので、図196に調査区南部の拡大（1/100）を掲載する。

土坑を25基調査した。

456土坑（図197・写真図版53） 調査区中央やや南、446高まりの北法面に位置する。平面楕円形で、主軸方位は西北西-東南東。長径138cm、短径102cm、深さ66cm。埋土は、図197のように4層に分れるが、木片や小枝が目立つ。出土遺物は弥生土器146片（うちI様式19片、I～II様式11片、II様式10片）、



楔1点、計147点である。

477土坑 調査区南西部、466高まり上に位置する。平面楕円形で、466高まりなどと同じく東北東 - 西南西を主軸とする。長径344cm、短径190cmと大きく、深さは42cm。埋土は、黒2.5Y2/1シルトを基本とし、黄灰2.5Y4/1シルトのブロックや炭化粒を含む。出土遺物は、弥生土器318片（うちⅠ様式10片、Ⅰ～Ⅱ様式22片、Ⅱ様式7片）、打製石剣1点、石錐2点、削器1点、楔1点、サヌカイト剥片8点、サヌカイト原礫1点、焼土塊3点、炭1点、計336点と骨（イノシシ・シカ等）である。

図198 - 20873は高杯。浅い椀状の杯部をもつもので、体部にはクシ描き直線文が描かれ、内外面ともにミガキが施される。Ⅱ～Ⅲ様式初頭。

20874は甕。いわゆる「L」字型口縁をもつ瀬戸内系の甕。外面は赤変する。

20875は鉢の底部か。下面はつまみ出して高台状となる。体部には横位の沈線と山形文を飾る。山形文は沈線4条を一組として形成されるが、一部間隔を誤ったか2条一組となっている。Ⅰ - 3～4様式。

20876はサヌカイト製の石錐。調整は体部全体におよび、錐部は欠ける。20877は打製石剣。調整は粗く、先端、基部を欠く。残存長7.58cm、短軸3.08cm、厚み1.3cm、重さ32.7g。

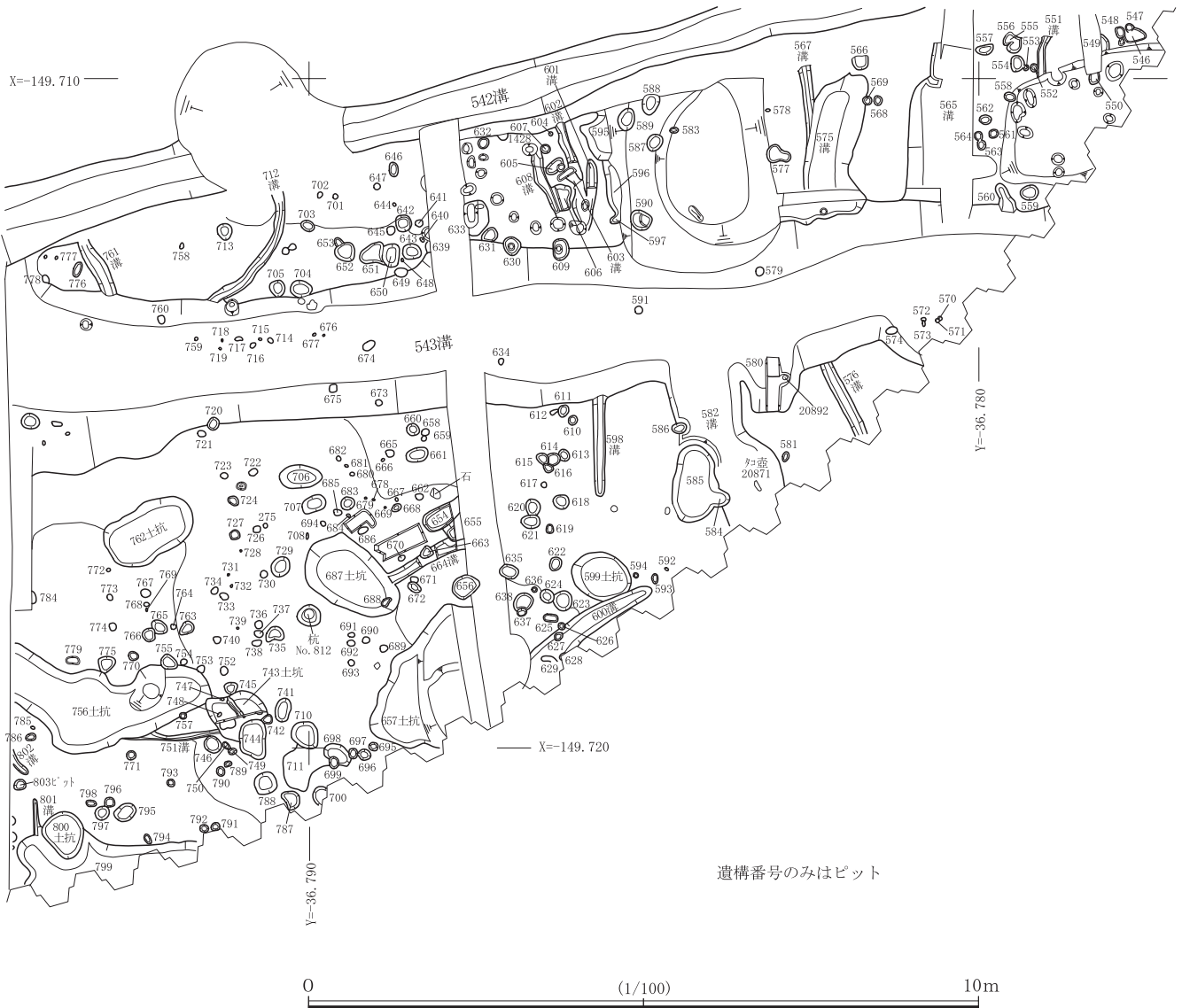


図196 03 - 1 - 2区 第10面南部

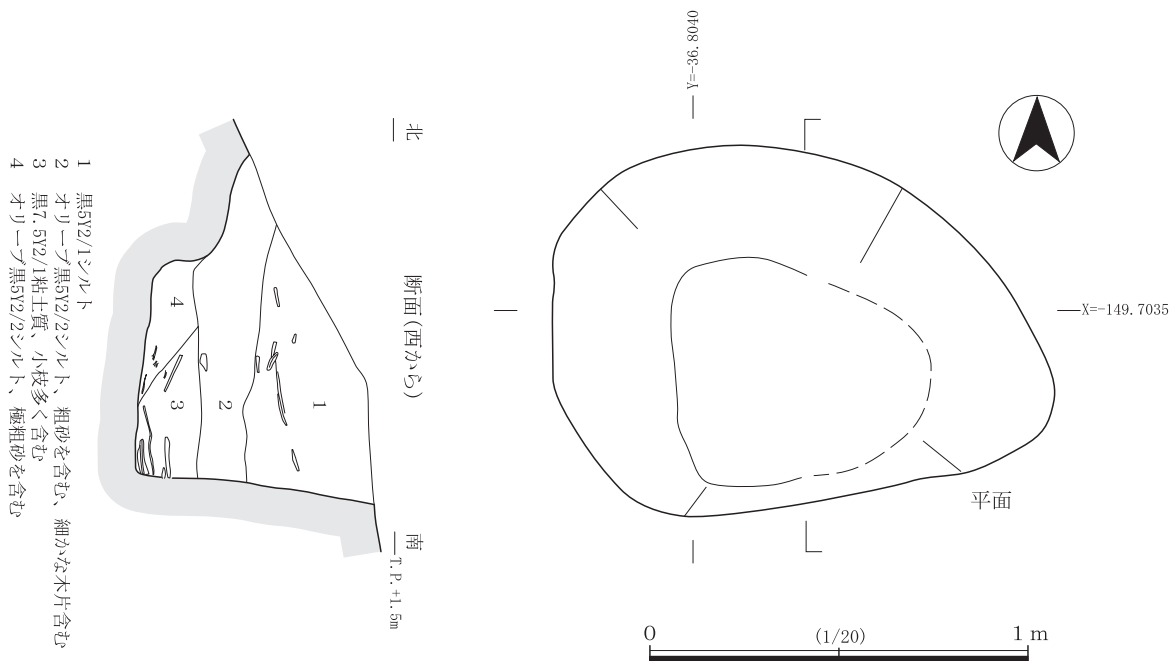


図197 03-1-2区 第10面456土坑

585土坑（図199・写真図版53） 調査区南東部、582溝の西肩部に位置する。平面形は楕円形ではあるが東部に出っ張りがある。主軸方位は北北東 - 南南西。長径116cm、短径69cm、深さ18cm。埋土は図のように3層に分れる。そのうちの「2層」は焼けたような層である。出土遺物は、弥生土器11片（うちI様式4片、II様式1片）およびシカ（基節骨）と少ない。

599土坑（図199） 585土坑の南西約1mに位置する。平面楕円形で、北西 - 南東を主軸とする。長径92cm、短径70cm、深さ17cm。埋土は黒褐2.5Y3/1シルト。弥生土器10片（うちI様式2片、II様式1片）のみ出土。

図198 - 20878は壺の口縁。頸部は屈曲してひらき、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部上端には刻み目をめぐらせる。頸部の屈曲から口縁部にかけて内外面ともに煤が付着する。II様式。

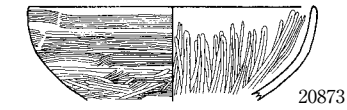
657土坑（図200・写真図版53） 調査区南東部、585土坑の南西約2mに位置する。平面不整形で、南東側は調査区外にのびる。北東 - 南西の径265cm、深さ48cm。埋土は黒褐色シルトを基本とし、図200のように5層に分れる。出土遺物は、弥生土器27片（うちI様式3片、I～II様式3片、II様式2片）、打製石剣1点、削器1点、サヌカイト剥片4点、計33点と骨。

図198 - 20879～20881は壺。20879は無文の口頸部。頸部はやや外傾気味にのびて、外方へ屈曲する。口縁端部はわずかに肥厚する。20880は口縁端部が肥厚し、頸部にクシ描き直線文が残り、全体が赤変する。II様式末。20881はヘラ描き沈線からI様式末に位置づけられる。

20882は甕。口縁端部の刻み目は木の小口の痕が明瞭に残る。I様式末。

20883はサヌカイト製の打製石剣。調整は粗く、側縁は波打つ。

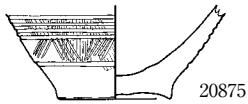
762土坑（図201・写真図版53） やはり調査区南東部、657土坑の北西約4mに位置する。平面楕円形で、北東 - 南西を主軸とする。長径138cm、短径80cm、深さ38cm。埋土は、図201のように7層に分れる。縦断面をみると「1～3層」からなる土坑と「5・6層」からなる土坑の2基を同時に掘りあげたものと考えられる。なお、「4層」と「7層」は、所属面は確定できず、762土坑との関係も不詳だが、杭痕



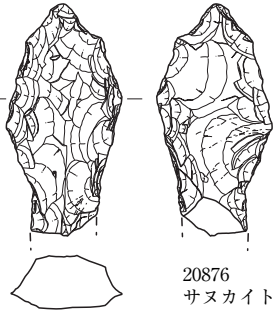
20873



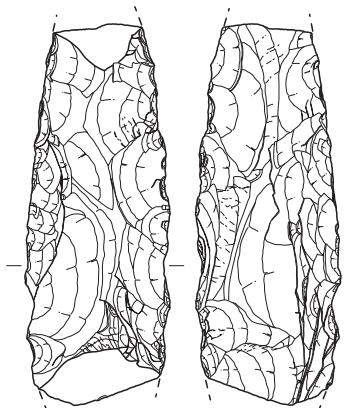
20874



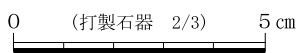
20875



20876  
サヌカイト

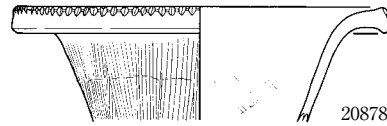


20877  
サヌカイト

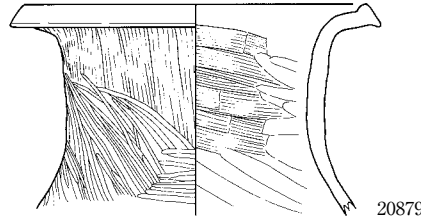
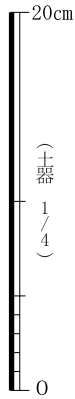


477土坑

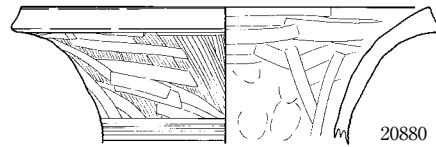
599土坑



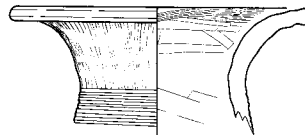
20878



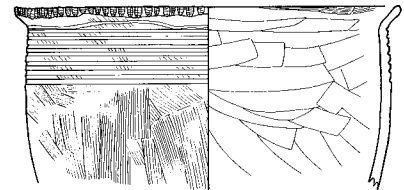
20879



20880

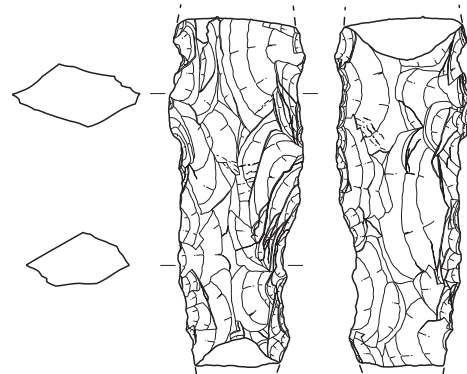


20881



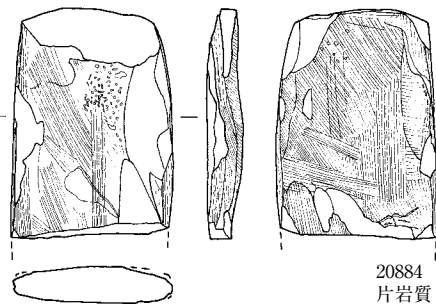
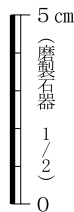
20882

657土坑



20883  
サヌカイト

804土坑



20884  
片岩質

図198 03 - 1 - 2区 第10面477・599・657・804土坑出土遺物



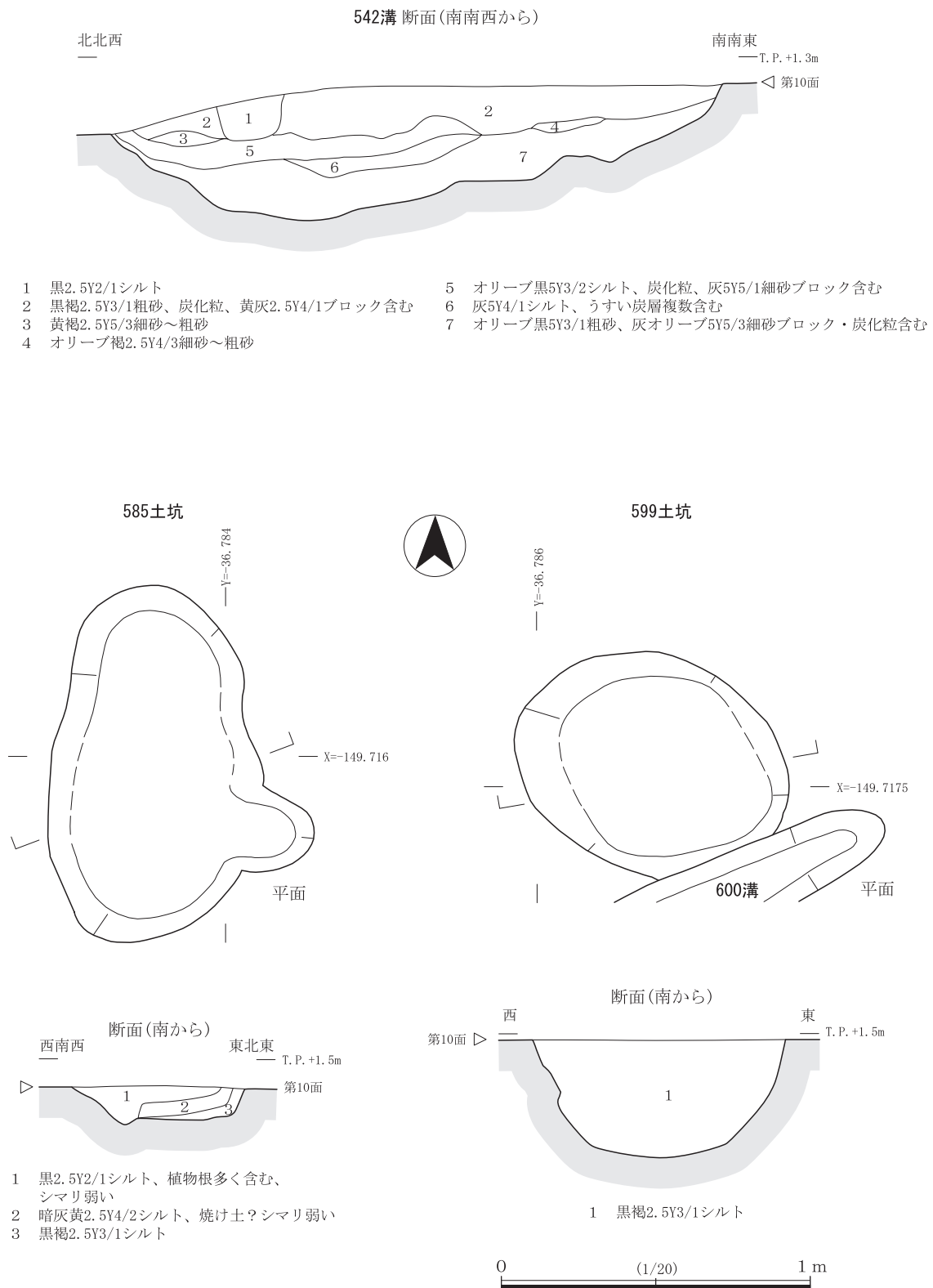
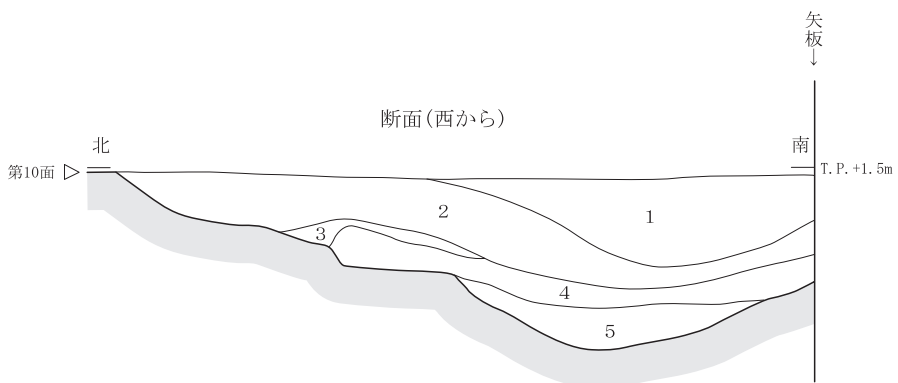
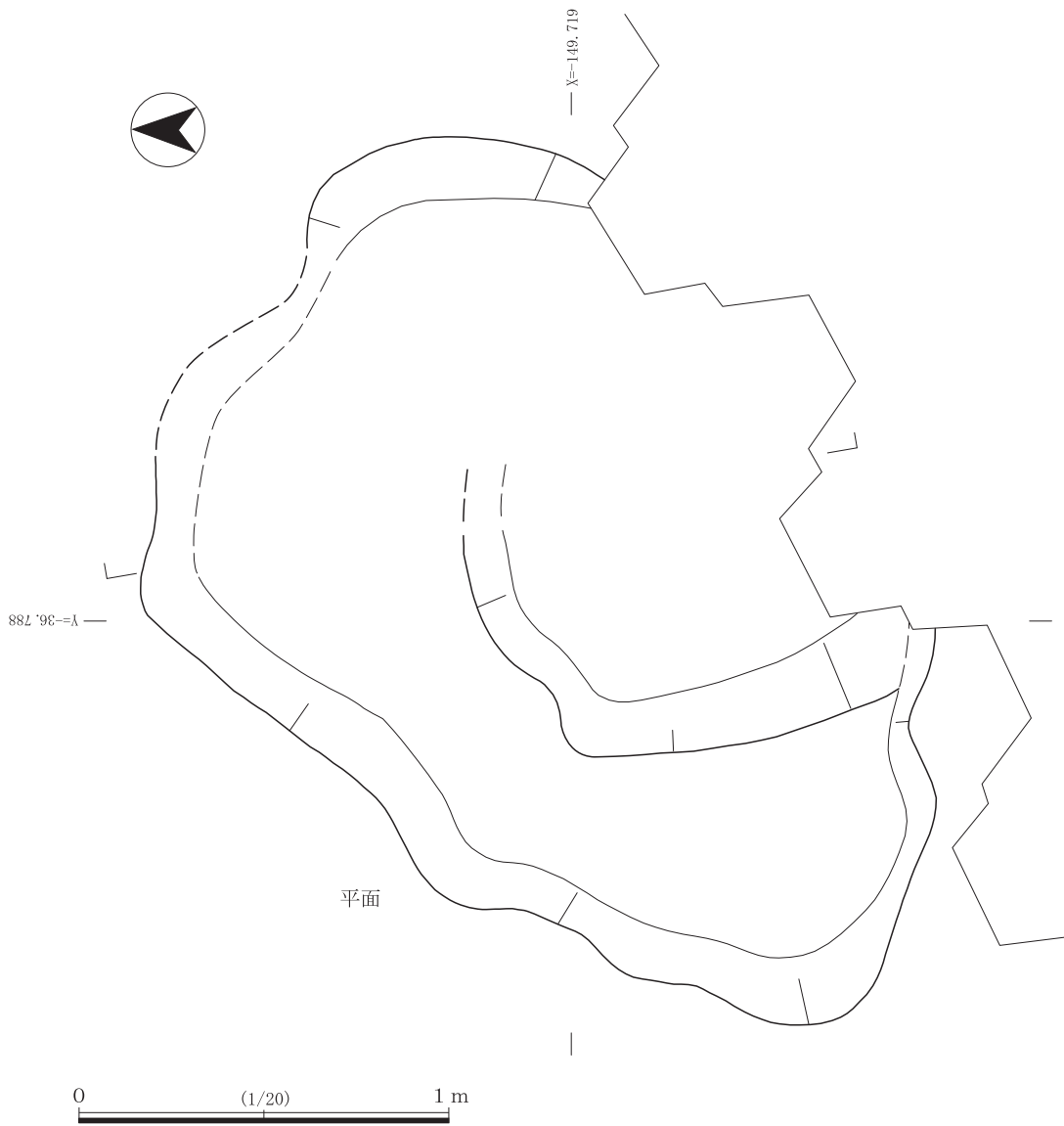


図199 03-1-2区 第10面542溝断面、585・599土坑



- 1 黒2.5Y2/1シルト、植物根多く含む、シマリ弱い
- 2 黒褐2.5Y3/1シルト、植物根含む
- 3 灰5Y4/1シルト
- 4 黒褐2.5Y3/1シルト
- 5 黒褐2.5Y3/1シルト、4よりシマリがある

図200 03-1-2区 第10面657土坑

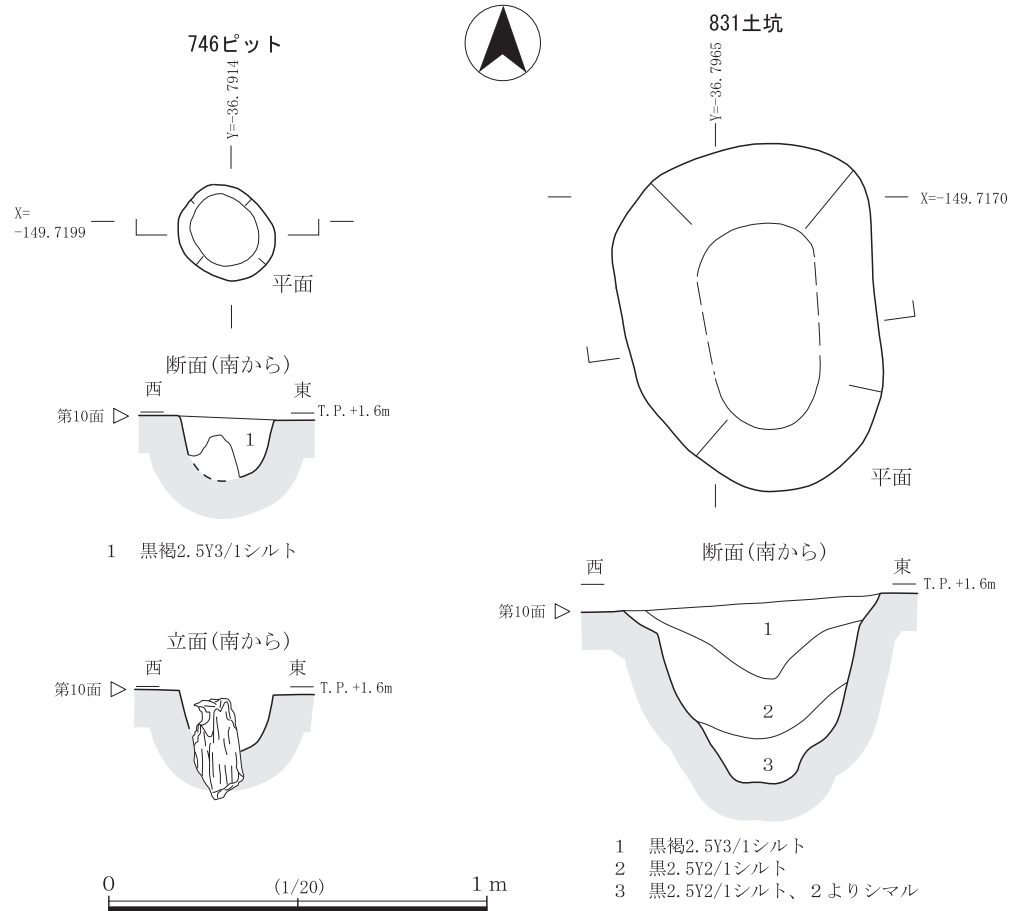
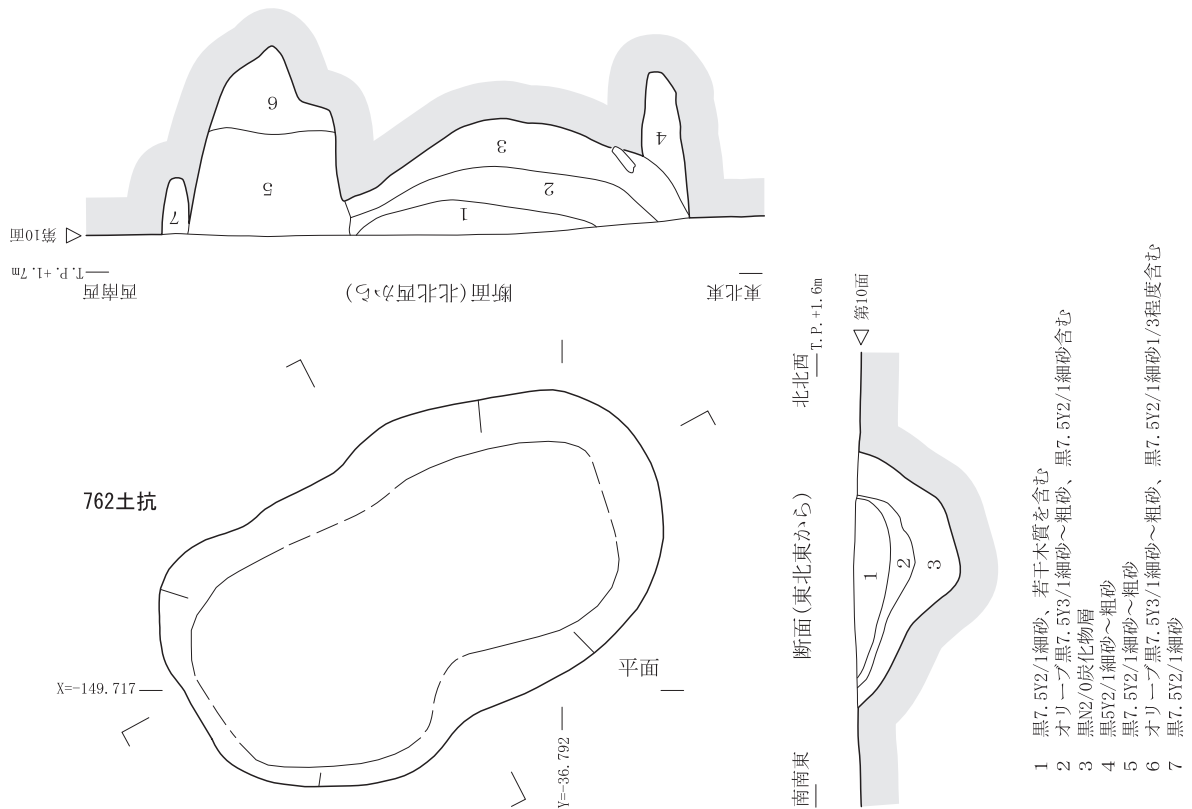


図201 03-1-2区 第10面746ピット、762・831土坑

の可能性が高い。出土遺物は、弥生土器26片（うちⅠ様式6片、Ⅱ様式2片）、サヌカイト剥片1点、イノシシ?下顎骨片1点、大型哺乳類骨片1点、計29点である。

804土坑 762土坑の北西約3mに位置する。東半はサブトレンチにより切られている。南北径180cm以上、深さ57cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト。出土遺物は、弥生土器59片（うちⅠ様式9片、Ⅰ～Ⅱ様式7片、Ⅱ様式1片）、石斧1点、サヌカイト剥片1点、木杭1本、計62点。

図198-20884は扁平片刃石斧か。片岩質で刃部を欠損する。側縁は研磨されて面をもつ。残存長6.10cm、短軸4.24cm、厚み0.95cmと薄く、石庖丁の転用品か。

831土坑（図201・写真図版53） 調査区南部、804土坑の南約2mに位置する。平面楕円形で、北北西-南南東を主軸とする。長径92cm、短径68cm、深さ43cm。埋土は、黒シルトを主体とし、図201のように3層に分れる。出土遺物は、弥生土器25片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式2片、Ⅱ様式1片）、削器1点、サヌカイト剥片1点、木3片、計30点と種子である。

920土坑 調査区南部に位置する。平面は楕円形に近い不整形で、東北東-西南西に長い。長径323cm、短径172cm、深さ32cm。埋土は黒褐2.5Y3/2細～粗砂。出土遺物は、弥生土器36片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式2片、Ⅲ様式1片）、サヌカイト剥片1点、計37点。

951土坑（図203・写真図版54） 調査区南部、920土坑の西南西約2mに位置する。平面はやや角張った楕円形で、主軸方位は北東-南西。長径306cm、短径192cmと920土坑とともに規模の大きな土坑である。深さは48cm。埋土は3層にわかれるが、埋土中位の「2層」中のほぼ土坑一面に厚さは1～5cm程度の植物遺体の薄層が広がる。試料分析の結果、ヤナギ属と判明した。その植物遺体層を取り除くと、ヤナギ属の大振りな枝と、ヤマグワやヤマザクラの細いが長めの枝とが押しつぶされたような状態で出土した。

以上のような構造から、ヤナギ属の大振りな枝を主に、ヤマグワなどの細長い枝も用いて小屋根または蓋の枠を作り、その上にヤナギ属の枝を敷き並べて、土坑内部の空間を確保したムロのような施設が推定できる。

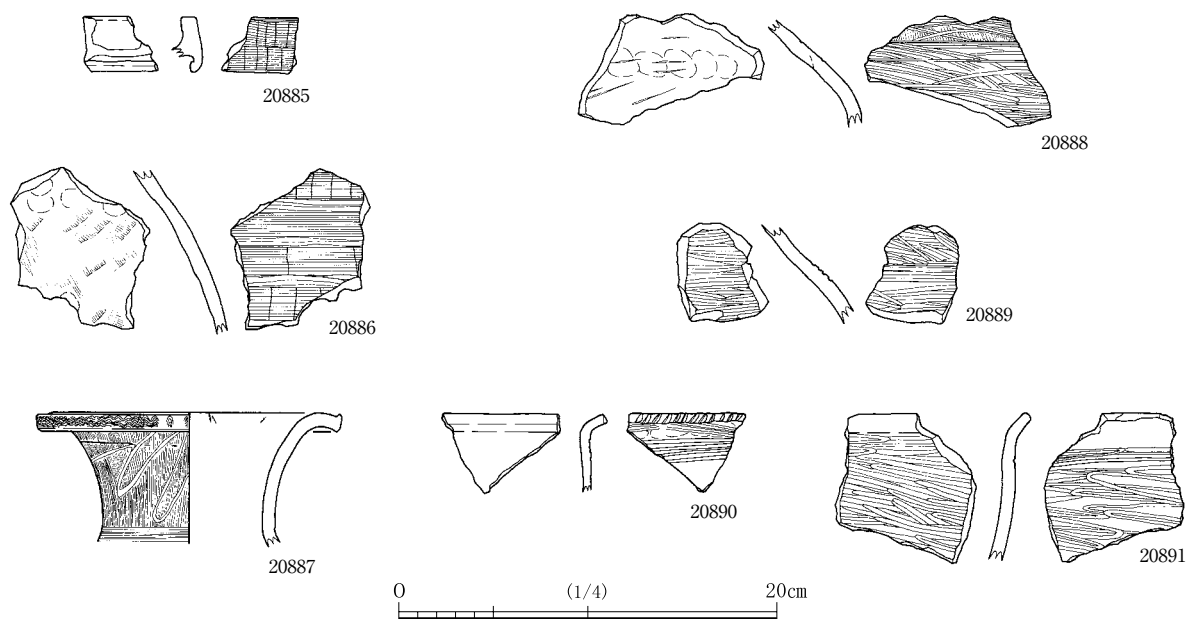
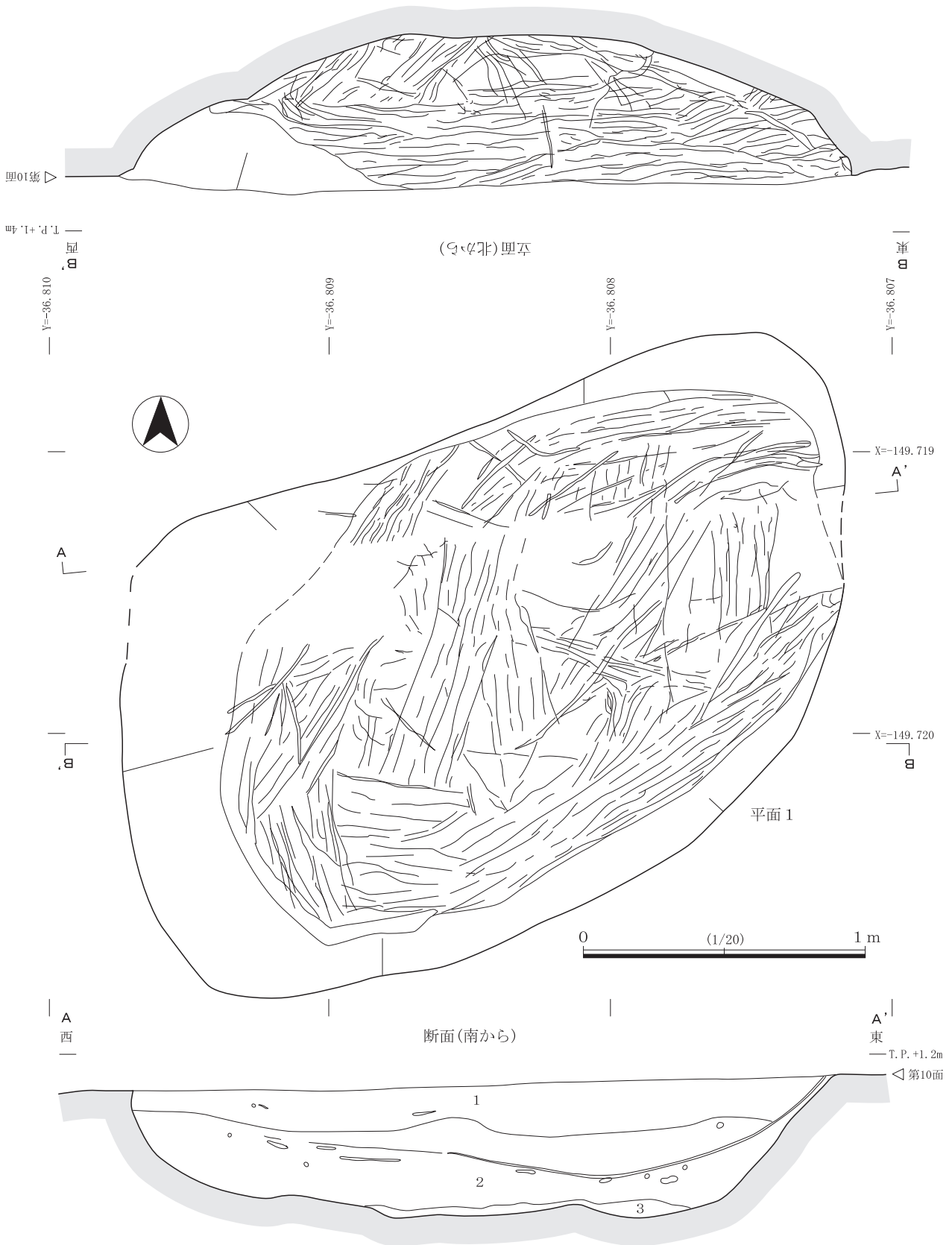


図202 03-1-2区 第10面951土坑出土土器



- 1 黒7.5Y2/1シルト、植物遺体を若干含む
- 2 灰7.5Y4/1細砂～粗砂、灰オリーブ7.5Y5/3砂をブロック状に若干含む、土器や植物遺体を含む
- 3 黒7.5Y2/1粘土、あまりシマリがない

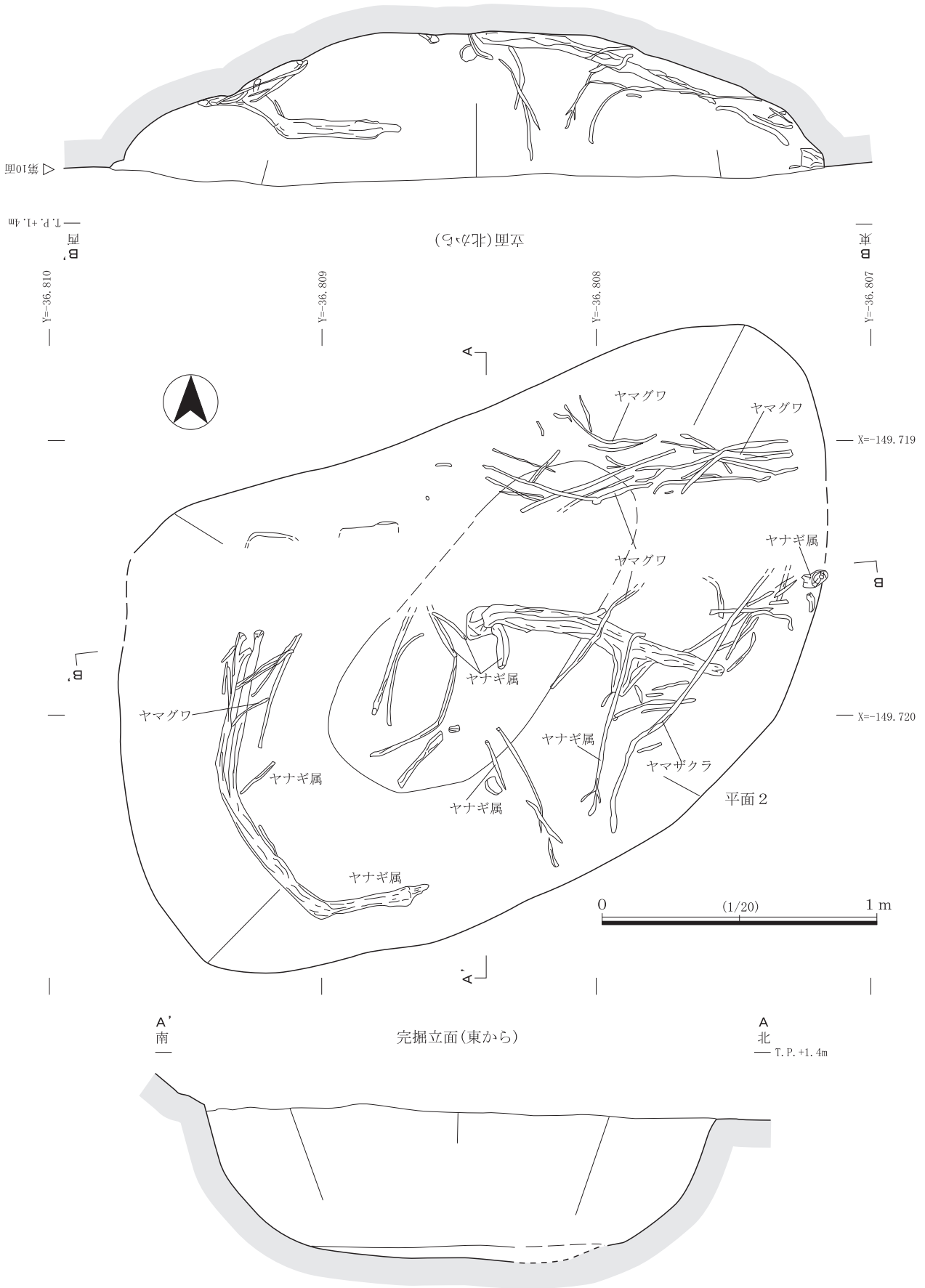


図203 03 - 1 - 2区 第10面951土坑

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数										
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイ		その他	合計		
								I 様式	I II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類				
439土坑	9L-3i・3j	楕円	北北東	277	125	12	灰オリーブ5Y4/2細砂へシルト						2					2
447ピット	8M-8a	楕円	北	26	21	23	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる											0
448ピット	8M-9a	楕円	北西	31	24	15	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる		1									1
449ピット	8M-9a	円		28	26	16	黄褐2.5Y4/1、細砂混じる					2						2
450ピット	8M-9a	楕円	北西	42	38	24	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる	2				5						7
451ピット	8M-9a	円		20	18	18	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる											0
452ピット	8M-9a	楕円	北西	26	21	21	黒褐2.5Y3/1、灰オリーブ5Y4/2細砂ブロック混じる		1			2						3
453ピット	8M-9a	円		23	22	19	黒褐2.5Y3/1											0
456土坑	9M-1a	楕円	西北西	138	102	66	図197参照	19	11	10		106	楔1					147
458ピット	9M-1a	円		12	10		黒褐2.5Y3/1											0
459ピット	9M-1a	楕円	東北東	28	21	30	黒褐2.5Y3/1							1				1
460ピット	9M-1a	円		7	6		黒2.5Y2/1											0
461ピット	9M-1a			13			黒褐2.5Y3/1											0
462ピット	9M-1a			16		4	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる											0
464ピット	9M-1a	楕円	東北東	68	36	19	黒褐2.5Y3/1、細砂混じる	1	2			7						10
465ピット	9M-1a	隅丸方		15	13	4	黒褐2.5Y3/1	1										1
467ピット	9M-2a	楕円	西北西	26	21	16	黒褐2.5Y3/1、炭化粒混じる					1						1
477土坑	9M-2a・2b	楕円	東北東	344	190	42	黒2.5Y2/1、黄灰2.5Y4/1シルトブロック・炭化粒含む	10	22	7		279	5	9	焼土塊3、炭1、骨5			341
478ピット	9M-2a・2b	不整円	東北東	48	45	18	黒2.5Y2/1					3						3
479ピット	9M-2b	楕円	北北東	18	14	15	黒褐2.5Y3/1		1									1
480ピット	9M-2b	隅丸方	北北東	38	33	25	黒褐2.5Y3/1					4						4
481ピット	9M-2b	楕円	北西	33	25	8	黒褐2.5Y3/1	1				3						4
482ピット	9M-2b	不整	西北西	18	13		黒褐2.5Y3/1					1						1
483ピット	9M-2b	円		14	12		黒褐2.5Y3/1											0
484ピット	9M-3b	楕円	北西	22	13	8	黒褐2.5Y3/1					1						1
485ピット	9M-3b	円	西北西	19	17	4	黒褐2.5Y3/1					1		1				2
486ピット	9M-2b・3b	円	東西		47	12	黒褐2.5Y3/1					6			骨			7
546ピット	8M-8a	楕円	東西	32	22	6	オリーブ黒7.5Y3/1					3			骨			4
547ピット	8M-8a	円		13	13	1	オリーブ黒7.5Y3/1											0
548ピット	8M-8a	円		17	14	1	オリーブ黒7.5Y3/1											0
549ピット	8M-8a					14	オリーブ黒7.5Y3/1											0
550ピット	8M-8a・8b				17	3	オリーブ黒7.5Y3/1											0
552ピット	8M-8a	円		13	12	6	オリーブ黒7.5Y3/1											0
553ピット	8M-8a	円		10			オリーブ黒7.5Y3/1											0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								合計	
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト		その他		
								I 様式	I II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類			
554ピット	8M-8a	円	北	24	20	17	オリーブ黒7.5Y3/1						3				3
555ピット	8M-8a	不整円	北東	28		3	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
556ピット	8M-8a	不整円	東北東	23		6	オリーブ黒7.5Y3/1										0
557ピット	8M-8a・ 9a	楕円	東北東	28	14	17	オリーブ黒7.5Y3/1			2			18				20
558ピット	8M-8b	楕円	北西	19	13	15	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
559ピット	8M-8b	楕円	東北東	28	22	9	オリーブ黒7.5Y3/1										0
560ピット	8M-8b	不整	北北西	44	23	17	オリーブ黒7.5Y3/1						2				2
561ピット	8M-8b	楕円	北東	17	13	7	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
562ピット	8M-8b・ 9b	楕円	東北東	18	14	11	オリーブ黒7.5Y3/1										0
563ピット	8M-8b・ 9b	円		15	13	10	オリーブ黒7.5Y3/1										0
564ピット	8M-8b・ 9b	円		13	12	10	オリーブ黒7.5Y3/1						4				4
566ピット	8M-9a			25		7	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
568ピット	8M-9b	円		14	12	9	オリーブ黒7.5Y3/1										0
569ピット	8M-9b	円		13	13	11	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
570ピット	8M-9b	円		7			オリーブ黒7.5Y3/1										0
571ピット	8M-9b	円		7	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
572ピット	8M-9b	楕円	西北西	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
573ピット	8M-9b	楕円	北	8	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
574ピット	8M-9a	楕円	東北東	17	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
577ピット	8M-9b	不整	西北西	37	28	6	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
578ピット	8M-9b	楕円	東西	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
579ピット	8M-9b	円		14	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
580ピット	8M-9b			73		12	オリーブ黒7.5Y3/1	1	2				12				15
581ピット	8M-9b	楕円	北北東	17	10	3	オリーブ黒7.5Y3/1										0
583ピット	8M-9b	楕円	東北東	13	8	4	オリーブ黒7.5Y3/1										0
584ピット	8M-9b			28			オリーブ黒7.5Y3/1										0
585土坑	8M-9b	楕円	北北東	116	69	18	図199参照	4		1			6		骨1		12
586ピット	8M-9b	楕円	東北東	23	16	6	オリーブ黒7.5Y3/1						4				4
587ピット	8M-9b	楕円	北北東	27	22	9	オリーブ黒7.5Y3/1	1					2				3
588ピット	8M-9b	楕円	北北東	32	25	14	オリーブ黒7.5Y3/1						6				6
589ピット	8M-9b	楕円	北北東	34	26	12	オリーブ黒7.5Y3/1		2				13	削1			16
590ピット	8M-9b	円		33	31	30	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
591ピット	8M-9b	円		11	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
592ピット	8M-9b	楕円	北西	7	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0



表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(3)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計			
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイ			その他		
								I様式	I・II様式	II様式	III様式	不詳	成品	剥片類				
593ピット	8M-9b	楕円	北	16	9	4	オリーブ黒7.5Y3/1											0
594ピット	8M-9b	円		8	7	4	オリーブ黒7.5Y3/1											0
595ピット	8M-9b	不整方	北北西	61		7	オリーブ黒7.5Y3/1	1	1	1								3
596ピット	8M-9b					7	オリーブ黒7.5Y3/1					3						3
597ピット	8M-9b	楕円	北東	13			オリーブ黒7.5Y3/1											0
599土坑	8M-9b	楕円	北西	92	70	17	黒褐2.5Y3/1	2		1		7						10
604ピット	8M-9b	円		7	6		オリーブ黒7.5Y3/1											0
605ピット	8M-9b	楕円	北東	32	17	21	オリーブ黒7.5Y3/1											0
606ピット	8M-9b	不整方		40			オリーブ黒7.5Y3/1											0
607ピット	8M-9b	楕円	西北西	16	13	13	オリーブ黒7.5Y3/1	1				2						3
609土坑	8M-9b	楕円	北	33	24	19	オリーブ黒7.5Y3/1					3						3
610ピット	8M-9b	円		15	13	15	オリーブ黒7.5Y3/1	1				5						6
611ピット	8M-9b	楕円	北北東	19	15	11	オリーブ黒7.5Y3/1	2				4						6
612ピット	8M-9b	不整	東北東	13	7		オリーブ黒7.5Y3/1											0
613ピット	8M-9b	円		18	16	17	オリーブ黒7.5Y3/1											0
614ピット	8M-9b	円		19		19	オリーブ黒7.5Y3/1					2						2
615ピット	8M-9b	楕円	北西	22	16	18	オリーブ黒7.5Y3/1					2						2
616ピット	8M-9b	楕円	北西	17	13	16	オリーブ黒7.5Y3/1											0
617ピット	8M-9b	不整円	北西	8	8		オリーブ黒7.5Y3/1											0
618ピット	8M-9b	円		24	22	18	オリーブ黒7.5Y3/1											0
619ピット	8M-9b	隅丸方	北	14	12	6	オリーブ黒7.5Y3/1											0
620ピット	8M-9b	円		26	23	25	オリーブ黒7.5Y3/1	1	2			2						5
621ピット	8M-9b	楕円	西南西	29	20	23	オリーブ黒7.5Y3/1				1	17						18
622ピット	8M-9b	楕円	北北東	22	17	11	オリーブ黒7.5Y3/1					2						2
623ピット	8M-9b	円		30	28	8	オリーブ黒7.5Y3/1					2						2
624ピット	8M-9b	円		22	20	2	オリーブ黒7.5Y3/1											0
625ピット	8M-9b	隅丸方	西北西	22	12	6	オリーブ黒7.5Y3/1					1						1
626ピット	8M-9b	円		12	12	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
627ピット	8M-9b	楕円	北東	16	11	6	オリーブ黒7.5Y3/1											0
628ピット	8M-9b			12			オリーブ黒7.5Y3/1											0
629ピット	8M-9b	不整		8			オリーブ黒7.5Y3/1											0
630ピット	8M-9b	円		28	27	21	オリーブ黒7.5Y3/1	1				1						2
631ピット	8M-9b	隅丸方	北東	27	19	24	オリーブ黒7.5Y3/1	2										2
632ピット	8M-9b	円		18	16	8	オリーブ黒7.5Y3/1											0
633ピット	8M-9b	不整円	北北東	54		27	オリーブ黒7.5Y3/1		2			4						6
634ピット	8M-9b	円		10	8		オリーブ黒7.5Y3/1											0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(4)

遺構 番号	グリ ッド	平 面 形	主 軸 方 向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数											
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器					サヌカイ		そ の 他	合 計			
								I 様 式	I Ⅰ Ⅱ 様 式	II 様 式	III 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類					
635ピット	8M-9b	楕円	東西	29	22	16	オリーブ黒7.5Y3/1	1					1						2
636ピット	8M-9b	円		8	8	5	オリーブ黒7.5Y3/1												0
637ピット	8M-9b	楕円	東北東	16	12		オリーブ黒7.5Y3/1												0
638ピット	8M-9b	楕円	北東	26		9	オリーブ黒7.5Y3/1												0
639ピット	8M-9b						オリーブ黒7.5Y3/1												0
640ピット	8M-9b	楕円	北西	8	6		オリーブ黒7.5Y3/1												0
641ピット	8M-9b	不整円	西北西	12	12		オリーブ黒7.5Y3/1												0
642ピット	8M-9b	隅丸方	北北西	26	23	20	オリーブ黒7.5Y3/1						5						5
643ピット	8M-9b	不整方	東西	27	24	26	オリーブ黒7.5Y3/1						1						1
644ピット	8M-9b	楕円	北西	6	4		オリーブ黒7.5Y3/1												0
645ピット	8M-9b	不整方	北	13	12		オリーブ黒7.5Y3/1												0
646ピット	8M-9b	楕円	北	22	13	10	オリーブ黒7.5Y3/1												0
647ピット	8M-9b	円		10	8		オリーブ黒7.5Y3/1												0
648ピット	8M-9b	楕円	北	6	3		オリーブ黒7.5Y3/1												0
649ピット	8M-9b	楕円	東西	20	13		オリーブ黒7.5Y3/1												0
650ピット	8M-9b	不整方	北	35	26	31	オリーブ黒7.5Y3/1	1					8						9
651ピット	8M-9b	不整	北東	42	38	9	オリーブ黒7.5Y3/1						2						2
652ピット	8M-9b	不整円	北北西	34	30	26	オリーブ黒7.5Y3/1	1	1				7						9
653ピット	8M-9b	楕円	北北西	13			オリーブ黒7.5Y3/1												0
654ピット	8M-9b	不整方	北東		32	25	オリーブ黒7.5Y3/1						2						2
655ピット	8M-9b	不整		33		14	オリーブ黒7.5Y3/1												0
656ピット	8M-9b	楕円	東北東	42	33	12	オリーブ黒7.5Y3/1						2		1				3
657土坑	8M-9b	不整		265		48	図200参照	3	3	2		19	2	4	骨				34
658ピット	8M-9b	楕円	北東	14	10		オリーブ黒7.5Y3/1												0
659ピット	8M-9b	円	北東	8	7		オリーブ黒7.5Y3/1												0
660ピット	8M-9b	円		21	18		オリーブ黒7.5Y3/1												0
661ピット	8M-9b	楕円	東北東	33	22	16	オリーブ黒7.5Y3/1	2		3		7			木片3				15
662ピット	8M-9b	不整円	西北西	12	10		オリーブ黒7.5Y3/1												0
663ピット	8M-9b	不整	東北東	20	17	15	オリーブ黒7.5Y3/1												0
665ピット	8M-9b	不整方	東北東	14	11		オリーブ黒7.5Y3/1												0
666ピット	8M-9b	楕円	北東	6	4		オリーブ黒7.5Y3/1												0
667ピット	8M-9b	楕円	西北西	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1												0
668ピット	8M-9b	楕円	北東	16	12	4	オリーブ黒7.5Y3/1												0
669ピット	8M-9b	円		3	3		オリーブ黒7.5Y3/1												0
670ピット	8M-9b	楕円	北東	12	8		オリーブ黒7.5Y3/1												0
671ピット	8M-9b	不整円	北西	13			オリーブ黒7.5Y3/1												0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(5)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト			その他	
								I 様式	I ↳ II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類			
672ピット	8M-9b	楕円	北西	22	13	8	オリーブ黒7.5Y3/1						2				2
673ピット	8M-9b	円		11	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
674ピット	8M-9b	楕円	北東	21	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
675ピット	8M-9b	隅丸方	東西	12	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
676ピット	8M-9b	楕円	北東	3	2		オリーブ黒7.5Y3/1										0
677ピット	8M-9b	楕円	北東	6	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
678ピット	8M-9b	楕円	東西	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
679ピット	8M-9b	楕円	西北西	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
680ピット	8M-9b	楕円	東西	8	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
681ピット	8M-9b	楕円	西北西	7	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
682ピット	8M-9b	円	北北西	8	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
683ピット	8M-9b	円	北西	22	19	11	オリーブ黒7.5Y3/1						2				2
684ピット	8M-9b	不整円	北西	7	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
685ピット	8M-9b	不整方	東西	12	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
686ピット	8M-9b	楕円	東北東	17	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
687土坑	8M-9b 他	楕円	北西	157	93	20	オリーブ黒7.5Y3/1										0
688ピット	8M-9b	楕円	北東	16	12	1	オリーブ黒7.5Y3/1										0
689ピット	8M-9b	不整	東北東	12	10		オリーブ黒7.5Y3/1										0
690ピット	8M-9b	楕円	東西	12	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
691ピット	8M-9b	楕円	東西	11	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
692ピット	8M-9b	楕円	東西	13	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
693ピット	8M-9b	円		10	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
694ピット	8M-9b	不整円	北西	9	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
695ピット	8M-9b・ 9c	隅丸方	西北西	14	13	4	オリーブ黒7.5Y3/1										0
696ピット	8M-9c	楕円	西北西	22	17	1	オリーブ黒7.5Y3/1						2				2
697ピット	8M-9c	隅丸方	北	16	12	2	オリーブ黒7.5Y3/1										0
698ピット	8M-9c・ 9b	楕円	北西	43	25	5	オリーブ黒7.5Y3/1		1				2				3
699ピット	8M-9c	楕円	北	18	14	2	オリーブ黒7.5Y3/1										0
700ピット	8M-9c			28		4	オリーブ黒7.5Y3/1										0
701ピット	8M-9b	円		8	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
702ピット	8M-9b	楕円	北北東	10	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
703ピット	8M-10b 他	楕円	西北西	22	16	24	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
704ピット	8M-10b	楕円	東西	33	27	17	オリーブ黒7.5Y3/1										0
705ピット	8M-10b	不整円	北北東		23	17	オリーブ黒7.5Y3/1	1	1				3				5

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(6)

遺構 番号	グリ ッド	平 面 形	主 軸 方 向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合 計		
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器					サヌカイト			そ の 他	
								I 様 式	I Ⅰ Ⅱ 様 式	II 様 式	III 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類			
706ピット	8M-10b 他	楕円	東西	64	35	19	オリーブ黒7.5Y3/1	5					10				15
707ピット	8M-9b 他	不整方	東北東	38	23	16	オリーブ黒7.5Y3/1	1					4			骨2	7
708ピット	8M-10b	楕円	北	10	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
709ピット	8M-10b 他	円		36	32	26	オリーブ黒7.5Y3/1	1					2			木杭1	4
710ピット	8M-10b 他	不整円	北西	46	38	8	オリーブ黒7.5Y3/1		1				2				3
711ピット	8M-10c 他	不整		52		5	オリーブ黒7.5Y3/1										0
713ピット	8M-10b	不整円	北北東	25	22	20	オリーブ黒7.5Y3/1										0
714ピット	8M-10b	楕円	北西	10	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
715ピット	8M-10b	楕円	西北西	6	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
716ピット	8M-10b	楕円	北東	11	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
717ピット	8M-10b	楕円	東西	12	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
718ピット	8M-10b	楕円	北	5	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
719ピット	8M-10b	楕円	北西	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
720ピット	8M-10b	隅丸方	北東	19	17	15	オリーブ黒7.5Y3/1										0
721ピット	8M-10b	楕円	西北西	13	10		オリーブ黒7.5Y3/1										0
722ピット	8M-10b	楕円	北東	13	10		オリーブ黒7.5Y3/1										0
723ピット	8M-10b	楕円	西北西	12	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
724ピット	8M-10b	楕円	北西	18	13	16	オリーブ黒7.5Y3/1										0
725ピット	8M-10b	隅丸方	北北西	7	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
726ピット	8M-10b	隅丸方	西北西	11	10		オリーブ黒7.5Y3/1										0
727ピット	8M-10b	隅丸方	西北西	16	14	16	オリーブ黒7.5Y3/1	1					6				7
728ピット	8M-10b	不整円	北北東	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
729ピット	8M-10b	円		32	27	21	オリーブ黒7.5Y3/1										0
730ピット	8M-10b	円		12	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
731ピット	8M-10b	楕円	北東	5	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
732ピット	8M-10b	楕円	北東	6	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
733ピット	8M-10b	楕円	西北西	13	11		オリーブ黒7.5Y3/1										0
734ピット	8M-10b	楕円	北東	13	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
735ピット	8M-10b	不整	東北東	28	21	26	オリーブ黒7.5Y3/1	1									1
736ピット	8M-10b	隅丸方	北北西	12	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
737ピット	8M-10b	楕円	西北西	13	10		オリーブ黒7.5Y3/1										0
738ピット	8M-10b	楕円	東西	13	9		オリーブ黒7.5Y3/1										0
739ピット	8M-10b	楕円	東西	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
740ピット	8M-10b	不整円	北西	11	11		オリーブ黒7.5Y3/1										0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(7)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイ			その他	
								I様式	I ↳ II様式	II様式	III様式	不詳	成品	剥片類			
741ピット	8M-10b	楕円	北北東	36	23	10	オリーブ黒7.5Y3/1	1	1				7		1		10
742ピット	8M-10b	不整		14		2	オリーブ黒7.5Y3/1										0
743土坑	8M-10b	不整		81		11	オリーブ黒7.5Y3/1										0
744ピット	8M-10b 他	不整方	北	58	40	11	オリーブ黒7.5Y3/1	1	1				3		1		6
745ピット	8M-10b	不整円	西北西	18	18		オリーブ黒7.5Y3/1		1				2				3
746ピット	8M-10b 他	円	北西	26	23	6	黒褐2.5Y3/1	1								柱材1	2
747ピット	8M-10b	円	東西	5	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
748ピット	8M-10b	楕円	北東	8	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
749ピット	8M-10c	楕円	東北東	13	9	4	オリーブ黒7.5Y3/1										0
750ピット	8M-10b 他	楕円	北西	15	8	5	オリーブ黒7.5Y3/1										0
752ピット	8M-10b	円	北北東	13	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
753ピット	8M-10b	不整円	北東	12	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
754ピット	8M-10b	楕円	北東	11	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
755ピット	8M-10b	不整	西北西	27	22	9	オリーブ黒7.5Y3/1										0
756土坑	8M-10b 他	不整	東西		123	24	オリーブ黒7.5Y3/1	2	4				10				16
757ピット	8M-10b	円		11	11	5	オリーブ黒7.5Y3/1										0
758ピット	8M-10b	楕円	北北東	9	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
759ピット	8M-10b	円		6	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
760ピット	8M-10b	隅丸方	北北西	13	10		オリーブ黒7.5Y3/1										0
762土坑	8M-10b	楕円	北東	138	80	38	図201参照	6		2			18		1 骨2		29
763ピット	8M-10b	不整	北東	23	19	18	オリーブ黒7.5Y3/1										0
764ピット	8M-10b	不整円	北西	8	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
765ピット	8M-10b	楕円	北西	27	19	16	オリーブ黒7.5Y3/1										0
766ピット	8M-10b	不整方	北北西	20	20	14	オリーブ黒7.5Y3/1						2				2
767ピット	8M-10b	楕円	東西	15	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
768ピット	8M-10b	楕円	東西	8	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
769ピット	8M-10b	楕円	北	5	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
770ピット	8M-10b	円		15	13	15	オリーブ黒7.5Y3/1										0
771ピット	8M-10c	円		15	13	5	オリーブ黒7.5Y3/1										0
772ピット	8M-10b	円		6	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
773ピット	8M-10b	円		10	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
774ピット	8M-10b	楕円	北北西	12	11		オリーブ黒7.5Y3/1										0
775ピット	8M-10b	不整	北東	27	23	17	オリーブ黒7.5Y3/1		1				2				3
776ピット	8M-10b	楕円	北北東	23	12	17	オリーブ黒7.5Y3/1										0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(8)

遺構 番号	グリ ッド	平 面 形	主 軸 方 向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								合 計		
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器					サヌカイ		そ の 他			
								I 様 式	I Ⅱ 様 式	II 様 式	III 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類				
777ピット	8M-10b	楕円	北東	6	4		オリーブ黒7.5Y3/1											0
778ピット	8M-10b	楕円	北東	7	4		オリーブ黒7.5Y3/1											0
779ピット	8M-10b	楕円	北北西		9		オリーブ黒7.5Y3/1		1				1					2
780ピット	8M-10b	楕円	東北東	7	4		オリーブ黒7.5Y3/1											0
781ピット	8M-10b	楕円	東西	15	8		オリーブ黒7.5Y3/1											0
782ピット	8M-10b	楕円	北	7	6		オリーブ黒7.5Y3/1											0
783ピット	8M-10b	円		27	23	27	オリーブ黒7.5Y3/1											0
784ピット	8M-10b						黒2.5Y2/1、粗砂混じる、植 物の地下茎含む											0
785ピット	8M-10b	楕円	北西	7	4		オリーブ黒7.5Y3/1											0
786ピット	8M-10b	楕円	東北東	16	6	4	オリーブ黒7.5Y3/1											0
787ピット	8M-10c	不整	北北西	28	25	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
788ピット	8M-10c	隅丸方	北東	32	32	10	オリーブ黒7.5Y3/1										石庖丁1	1
789ピット	8M-10c	楕円	東北東	12	8	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
790ピット	8M-10c	円		15	12	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
791ピット	8M-10c	円		13	12	6	オリーブ黒7.5Y3/1											0
792ピット	8M-10c	円		13	12	11	オリーブ黒7.5Y3/1											0
793ピット	8M-10c	円		12	12	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
794ピット	8M-10c	楕円	北北西	17	9	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
795ピット	8M-10c	楕円	北東	32	26	8	オリーブ黒7.5Y3/1						2					2
796ピット	8M-10c	隅丸方	東西	16	13	6	オリーブ黒7.5Y3/1											0
797ピット	8M-10c	円		23	21	8	オリーブ黒7.5Y3/1											0
798ピット	8M-10c	楕円	東西	16	10	6	オリーブ黒7.5Y3/1											0
799ピット	8M-10c	不整				12	オリーブ黒7.5Y3/1											0
800土坑	8M-10c	不整円	北北西	72	62	16	オリーブ黒7.5Y3/1						1					1
803ピット	8M-10c	不整円	北東	18	16		オリーブ黒7.5Y3/1											0
804土坑	8M-10b			180		57	オリーブ黒7.5Y3/1	9	7	1		42		1	石斧1、木杭1			62
805ピット	8M-10b	楕円	北西	8	5		オリーブ黒7.5Y3/1											0
806ピット	8M-10b			23		14	オリーブ黒7.5Y3/1											0
807ピット	8M-10b	円		13	13	2	オリーブ黒7.5Y3/1											0
808ピット	8M-10b			32		31	オリーブ黒7.5Y3/1											0
809ピット	8M-10b			27		11	オリーブ黒7.5Y3/1											0
811ピット	8M-10b 他	円		32	28	18	オリーブ黒7.5Y3/1					1						1
812ピット	8M-10b	楕円	東西	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1											0
813ピット	8M-10b	楕円	東西	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1											0
814ピット	8M-10b	円		8	7		オリーブ黒7.5Y3/1											0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(9)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計			
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト			その他		
								I 様式	I ↳ II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類				
815ピット	8M-10b	楕円	東西	11	8		黒2.5Y2/1、粗砂混じる、植物の地下茎含む											0
816土坑	8M-10b	不整	東北東	135	88	11	オリーブ黒7.5Y3/1	2	1				10					13
817ピット	8M-10b	楕円	北東	33	26	20	オリーブ黒7.5Y3/1											0
818ピット	8M-10b	楕円	北北東	13	9		オリーブ黒7.5Y3/1											0
819土坑	8M-10b	不整円	北北東	121	100	16	オリーブ黒7.5Y3/1											0
820ピット	8M-10b	円		34	31	10	オリーブ黒7.5Y3/1	1					2					3
821ピット	8M-10b	楕円	北東	48	27		オリーブ黒7.5Y3/1	1					7					8
822ピット	8M-10b	円		17	15		オリーブ黒7.5Y3/1											0
823ピット	8M-10b	円		8	8		オリーブ黒7.5Y3/1											0
824ピット	8M-10b	楕円	北北西	15	12	12	オリーブ黒7.5Y3/1											0
825ピット	8M-10b	楕円		16	12	16	オリーブ黒7.5Y3/1						3					3
826ピット	8M-10b	楕円	北東	23	17	14	オリーブ黒7.5Y3/1						1					1
827ピット	8M-10b	円		22	19	17	オリーブ黒7.5Y3/1						2					2
828ピット	8M-10b	楕円	西北西	12	9		オリーブ黒7.5Y3/1											0
829ピット	8M-10b	楕円	西北西	11	7		オリーブ黒7.5Y3/1											0
830土坑	8M-10b	楕円	北北東		72	13	オリーブ黒7.5Y3/1		2	2			13	削1				18
831土坑	8M-10b	楕円	北北西	92	68	43	図201参照	4	2	1			18	削1	1	木片3、種子1		31
832土坑	8M-10b	楕円	西北西	88	55	12	オリーブ黒7.5Y3/1	2		1			11					14
833ピット	8M-10b	楕円	東北東	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1											0
834ピット	8M-10b	楕円	北東	8	5		オリーブ黒7.5Y3/1											0
835ピット	8M-10b	楕円	北北東	11	7	5	オリーブ黒7.5Y3/1											0
836ピット	8M-10b	円		4	4		黒褐2.5Y3/1											0
837ピット	8M-10b	楕円	北西	31	21	14	黒2.5Y2/1	1					6					7
838ピット	8M-10b	楕円	西北西	4	3		オリーブ黒7.5Y3/1											0
839ピット	8M-10b	楕円	東北東	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1											0
840ピット	8M-10b	楕円	西北西	17	13	12	オリーブ黒7.5Y3/1						2					2
841ピット	8M-10b 他	楕円	北東	27	18	13	オリーブ黒7.5Y3/1											0
842ピット	8M-10b	楕円	北東	12	9		オリーブ黒7.5Y3/1											0
843ピット	8M-10b	円		13	12		オリーブ黒7.5Y3/1											0
844ピット	8M-10b	楕円	東西	28	22	12	オリーブ黒7.5Y3/1											0
845ピット	8M-10b	円		23	21	10	オリーブ黒7.5Y3/1	3					11					14
846ピット	8M-10b	楕円	北東	22	17	21	オリーブ黒7.5Y3/1						2					2
847ピット	8M-10b	円		6	6		オリーブ黒7.5Y3/1											0
848ピット	8M-10b	円		8	7		オリーブ黒7.5Y3/1											0
849ピット	8M-10b	円		13	12		オリーブ黒7.5Y3/1											0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(10)

遺構 番号	グリ ッド	平 面 形	主 軸 方 向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合 計		
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器					サヌカイト			そ の 他	
								I 様 式	I Ⅰ Ⅱ 様 式	II 様 式	III 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類			
850ピット	8M-10c	円		15	13		オリーブ黒7.5Y3/1										0
851ピット	8M-10b	円		8	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
852ピット	8M-10b	不整円	北北東	24	23	18	オリーブ黒7.5Y3/1	1					2				3
853ピット	8M-10b	円		28	24	27	オリーブ黒7.5Y3/1										0
854土坑	8M-10b	楕円	北西	137	93	21	オリーブ黒7.5Y3/1										0
855ピット	8M-10b	円		24	24	15	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
856ピット	8M-10b	円		22	18	15	オリーブ黒7.5Y3/1										0
857ピット	8M-10b	円		22	19	7	オリーブ黒7.5Y3/1										0
858ピット	8M-10b	円		24	20	10	オリーブ黒7.5Y3/1										0
859ピット	8M-10b	円		18	15	11	オリーブ黒7.5Y3/1						2				2
860ピット	8M-10b	円		22	19	17	オリーブ黒7.5Y3/1						1				1
861ピット	8M-10b	円		22	18	21	オリーブ黒7.5Y3/1										0
862ピット	8M-10b	円		20	17	31	オリーブ黒7.5Y3/1										0
863ピット	8M-10b	円		17	15	9	オリーブ黒7.5Y3/1										0
864ピット	8M-10b	円		6	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
865ピット	8M-10b	円		8	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
866ピット	8M-10b 他	楕円	北東	39	29	10	オリーブ黒7.5Y3/1		1				1				2
867ピット	8M-10c	円		5	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
868ピット	8M-10c	円		4	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
869ピット	8M-10c	円		3	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
870ピット	8M-10c	円		6	5		黒5Y2/1、粗砂混じる										0
871ピット	8M-10c	楕円	西北西	7	4		オリーブ黒7.5Y3/1										0
872ピット	8M-10c	楕円	北北西	7	3		オリーブ黒7.5Y3/1										0
873ピット	8M-10c	楕円	東北東	68	52	19	オリーブ黒7.5Y3/1	1					8				9
874ピット	8M-10c	円		5	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
875ピット	8M-10c	楕円	北北西	12	8		オリーブ黒7.5Y3/1										0
876ピット	8M-10c	円		7	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
877ピット	8M-10c	楕円	東北東	7	5		オリーブ黒7.5Y3/1										0
878ピット	8M-10c	円		19	19	7	オリーブ黒7.5Y3/1						1		1		2
879ピット	8M-10c	円		27	23	12	オリーブ黒7.5Y3/1	1	4				5		骨1		11
880ピット	8M-10c	円		31	28	12	オリーブ黒7.5Y3/1	1					3				4
881ピット	8M-10c	円		13	12		オリーブ黒7.5Y3/1										0
882ピット	8M-10c	円		26	23	16	オリーブ黒7.5Y3/1										0
883ピット	8M-10c	円		22	22	19	オリーブ黒7.5Y3/1		1								1
884ピット	8M-10c	円		23	23	15	オリーブ黒7.5Y3/1										0
885土坑	8M-10c	楕円	北西	99	72	26	オリーブ黒7.5Y3/1						6		骨2		8



表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧 (11)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト			その他	
								I様式	I・II様式	II様式	III様式	不詳	成品	剥片類			
886ピット	8M-10c	円		7	6		オリーブ黒7.5Y3/1										0
887ピット	8M-10c	円		7	7		オリーブ黒7.5Y3/1										0
888ピット	8M-10c	楕円	北東	17			オリーブ黒7.5Y3/1										0
889ピット	8M-10c	隅丸方	東北東	17			オリーブ黒7.5Y3/1										0
890ピット	8M-10c	円		31	27	11	オリーブ黒7.5Y3/1	1									1
891ピット	8M-10c 他	円		32	28	12	オリーブ黒7.5Y3/1					2					2
892土坑	8M-10c 他	不整	北北西			31	オリーブ黒7.5Y3/1	1				17					18
893ピット	8M-10c					11	オリーブ黒7.5Y3/1										0
894土坑	8M-10c	不整				5	オリーブ黒7.5Y3/1										0
895ピット	9M-1b	楕円	北西	11	8		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる										0
896ピット	9M-1b	楕円	北西	8	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
897ピット	9M-1b	楕円	北北西	4	3		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
898ピット	9M-1b	楕円	東西	8			黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
899ピット	9M-1b			7	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
900ピット	9M-1b		北北西			12	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
901ピット	9M-1b	楕円	北北東	6	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
902ピット	9M-1b		東北東		23	25	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む	4			2		1				7
903ピット	9M-1b	楕円	北東	7	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
904ピット	9M-1b			12			黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
905ピット	9M-1b	楕円	東北東	9	7		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
906ピット	9M-1b	楕円	北東	7	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
907ピット	9M-1b	楕円	北東	6	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
908ピット	9M-1b	円		4	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
909ピット	9M-1b	楕円	北西	7	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
910ピット	9M-1b	円		6	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
911ピット	9M-1b	円		6	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(12)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイ			その他	
								I 様式	I II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類			
912ピット	9M-1b	円		6	6		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
913ピット	9M-1b	楕円	北東	8	6		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
914ピット	9M-1b	円		6	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
915ピット	9M-1b	楕円	東北東	20	10		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
916ピット	9M-1b	円		19			黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
917ピット	9M-1b	隅丸方	東北東	17	14		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
918ピット	9M-1b	円		12	10	10	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む										0
919ピット	9M-1b	円		22	21	6	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる		1								1
920土坑	9M-1b	不整	東北東	323	172	32	黒褐2.5Y3/2細～粗砂	7	2		1	26			1		37
921ピット	9M-1b	円		21	21	12	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
922ピット	9M-1b	楕円	北北西	13	10		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
923ピット	9M-1b			21			黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
924ピット	9M-1c・ 1b	円		24	22	19	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる					3			1		4
926ピット	9M-1b	楕円	北	17	12		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
927ピット	9M-1b	円		21	17	20	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
928ピット	9M-1b	楕円	北西	21	14	11	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
929ピット	9M-1b・ 1c	円		18	17	8	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる					1					1
930ピット	9M-1b	楕円	西北西	13	9	5	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
931ピット	9M-1b	不整円		13	13	3	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
932ピット	9M-1b	楕円	東北東	22	15	5	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
933ピット	9M-1b	円		9	8		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
934ピット	9M-1b	円		15	13	4	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
935ピット	9M-1b	円		15	13	6	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0
936ピット	9M-1b	円		7	6		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰 5GY6/1シルトブロック混じる										0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧 (13)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計			
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイ			その他		
								I様式	I・II様式	II様式	III様式	不詳	成品	剥片類				
937ピット	9M-1b	楕円	西北西	14	11	3	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
938ピット	9M-1b	円		19	18	9	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
939ピット	9M-1b	楕円	東西		8		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
940ピット	9M-1b	楕円	西北西	21	15	7	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
941ピット	9M-1b	楕円	北北西	9	7		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
942ピット	9M-1b	円		19	18	5	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
943ピット	9M-1b	楕円	北西	18	7	7	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
944ピット	9M-1b	楕円	北東	6	4		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
945ピット	9M-1b			5			黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
946ピット	9M-1b	円		6	5		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
947ピット	9M-1b	楕円	北北東	5	3		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
948ピット	9M-1b	楕円	北東	8	6		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
949ピット	9M-1b	楕円	北東	32	23	9	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる	1										1
950ピット	9M-1b			22			黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
951土坑	9M-1b・1c	楕円	北東	306	192	48	図201参照	30	27	16	2	249		5	燃えた棒状木片1、加工木片(浮子?)1、骨1		332	
952ピット	9M-1b	楕円	北北西		8		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
953ピット	9M-1b	円		8	8		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる											0
954ピット	9M-1c	円		5	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む											0
955ピット	9M-1c	楕円	東北東	9	7		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む											0
956ピット	9M-1c	楕円	東北東	7	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む											0
957ピット	9M-1c	楕円	北西	28	19	4	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む	1										1
958ピット	9M-1c	楕円	東西	11	8	2	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む											0
959ピット	9M-1c	円		23	21	8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む					2						2

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧(14)

遺構 番号	グリ ッド	平 面 形	主 軸 方 向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合 計		
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器					サヌカイ			そ の 他	
								I 様 式	I Ⅱ 様 式	II 様 式	III 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類			
960ピット	9M-1c	円		22	21	8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む						1				1
961ピット	9M-1c	楕円	東北東	44	35	8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む						1				1
962ピット	9M-1c	隅丸方	東西	27	23	11	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む						2				2
963ピット	9M-1c	円		7	7		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
964ピット	9M-1c	不整方	東北東	33	27	12	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
965ピット	9M-1c	楕円	北西	52	38	21	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む						4				4
966ピット	9M-1c	楕円	北西	18		4	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
967ピット	9M-1c	楕円	西北西	8	5		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
968ピット	9M-1c	円		8	7		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
969ピット	9M-1c	円		7	7		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
970ピット	9M-1c	円		5	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
971ピット	9M-1c	楕円	北北東	5	3		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
972ピット	9M-1c	円		5	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
973ピット	9M-1c	円		25	21	8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む	1					1				2
974ピット	9M-1c	楕円	北東	17	12	6	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
976ピット	9M-1c	楕円	北西	17	9	6	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
977ピット	9M-1c	円		4	4		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
978ピット	9M-1c	楕円	西北西	4	3		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
979ピット	9M-1c	楕円	東西	23	12	3	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
980ピット	9M-1c	円		28		9	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
981ピット	9M-1c	不整	北北西	37	29	8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
982ピット	9M-1c	楕円	北北東	28	17	20	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
983ピット	9M-1c	楕円	東北東	28	18	5	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
984ピット	9M-1c	楕円	北西		28	9	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧 (15)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイ			その他	
								I 様式	I II 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類			
985ピット	9M-1c		北北西	27		8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
986ピット	9M-1c					10	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む	1				2					3
987ピット	9M-1c						黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
988ピット	9M-1c	楕円	北東	17	13	16	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
989ピット	9M-1c	不整	北東	64	32	20	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
990ピット	9M-1c	楕円		27	20	20	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む					1					1
991ピット	9M-1c	楕円	北西	33	27	12	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む					1					1
992ピット	9M-1c	不整円		18	18	20	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む					1					1
993ピット	9M-1c	円		22	20	22	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む					2					2
994ピット	9M-1c	不整			63	25	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
995ピット	9M-1c	不整円	東西	25	22	10	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
996ピット	9M-1c	円		19	17	15	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
997ピット	9M-1c			45		31	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
998ピット	9M-1c					6	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
999ピット	9M-1c	楕円	北北西	16		7	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
1000ピット	9M-1c	円		18	16	7	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
1001ピット	9M-1c	円		8	8		黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
1002ピット	9M-1c	円		18	17	6	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
1003ピット	9M-2b	円		12	11	3	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる										0
1004ピット	9M-2b	楕円	北東	11	8	3	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる										0
1005ピット	9M-2b	楕円	北北西	12	6		黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる										0
1006ピット	9M-2b	円		22		5	黒7.5Y2/1粘土、オリーブ灰5GY6/1シルトブロック混じる										0
1007ピット	9M-2c	不整	北北東	12	10	5	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0
1008ピット	9M-2c	円		17	14	8	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、植物遺体含む										0

表13 03-1-2区 第10面土坑・ピット一覧 (16)

遺構 番号	グリ ッド	平 面 形	主 軸 方 向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合 計			
				長 径	短 径	深 さ		弥生土器					サヌカイト			そ の 他		
								I 様 式	I ~ II 様 式	II 様 式	III 様 式	不 詳	成 品	剥 片 類				
1009ピット	9M-2c	楕円	北北東	18	14	9	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む											0
1010ピット	9M-2c	楕円	北北東	17	12	7	黒10Y2/1粘土、細砂混じる、 植物遺体含む											0
1011ピット	8L-8i	円		25	22	12	黒褐2.5Y3/2											0
1012ピット	8L-9i	円		27	22	8	黒褐2.5Y3/1											0
1013ピット	8L-9i	円		20	18	2	黒褐2.5Y3/2											0
1045ピット	9M-1a	円		22	19	27	黒2.5Y2/1											0
1046ピット	9M-1a	円		14	13	20	黒2.5Y2/1						2					2
1047ピット	9M-1a	円		18	17	13	黒2.5Y2/1	1					2					3
1048ピット	9M-1a	円		19	17	21	黒2.5Y2/1											0
1049ピット	9M-1a	円		16	15	14	黒2.5Y2/1											0
1050ピット	9M-1a	円		15	13	9	黒2.5Y2/1											0
1428ピット	8M-9b	円		20	15	23	黒2.5Y2/1		1									1
1429土坑	8M-10c	円				8	オリーブ黒7.5Y3/1	1					7					8

出土遺物は、弥生土器324片（うちI様式30片、I～II様式27片、II様式16片、III様式2片）、サヌカイト剥片5点、燃えた木1片、加工木片1点、計331点とシカ（中節骨）である。

図202-20885～20887はII様式末～III様式に位置づけられる。20885は壺の口縁端部。下方へ垂下してクシ描き簾状文が2段にわたる。20886は壺の体部で、弱いとめの簾状文で飾られる。20887は口縁端部にクシ描き波状文、頸部にクシ描き直線文を飾る。端部は肥厚し始めておりII様式末に位置づけられよう。外面と口縁上面は黒変する。

I様式の土器には壺と甕がある。20888・20889は壺の胴部で、頸部側を低く段状に削り、その下に沈線を入れる。I-3様式。20890・20891は甕。20891は内面が一部黒変する。ほかに浮子と思われる有孔の木片が出土している。ヒノキ製で5cm大のものだが、破損のため実測に耐えなかった。

第10面検出の土坑は25基、ピットは457個と多い。以上に記述できなかった土坑とピットについては、表13を参照されたい。

遺物を掲載した5個のピットのみ記述する。いずれも調査区南東部に位置する。

580ピット 調査区南東部、576溝と582溝との間に位置する。北部が543溝により切られており平面形は不明。東西径73cm、深さ12cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1シルト。出土遺物は、弥生土器15片（うちI様式1片、I～II様式2片）。

図204-20892は甕で、底部穿孔のあるもの。体部は外反気味に立ち上がる。内外面ともにナデの工具痕が残り、乱雑なミガキが施される。II様式か。

661ピット 580ピットの西約5mに位置する。平面楕円形で、東北東-西南西に長い。長径33cm、短径22cm、深さ16cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1シルト（9.5面の黒色粘土と同じ）。出土遺物は、弥生土器12片（うちI様式2片、II様式3片）、木片3片。

図204-20893は無頸壺の肩部。クシ描き流水文をもち、第10-2面1291土坑出土の20960(図220)と接合した。Ⅱ様式。20894も肩部。沈線5条が確認できる。Ⅰ-3~4様式。20895は端部に刻み目をもつ甕。外面は黒変する。

746ピット(図201) 661ピットの南西約5m、756土坑の南東側に位置する。平面はやや角張った円形で、北西-南東にやや長い。長径26cm、短径23cm、深さ6cm。埋土は黒褐2.5Y3/1シルト。前期の弥生土器1片と柱材が出土した。

788ピット 746ピットの南東70cmに位置する。平面隅丸方形で、一辺32cm、深さ10cm。埋土はオリーブ

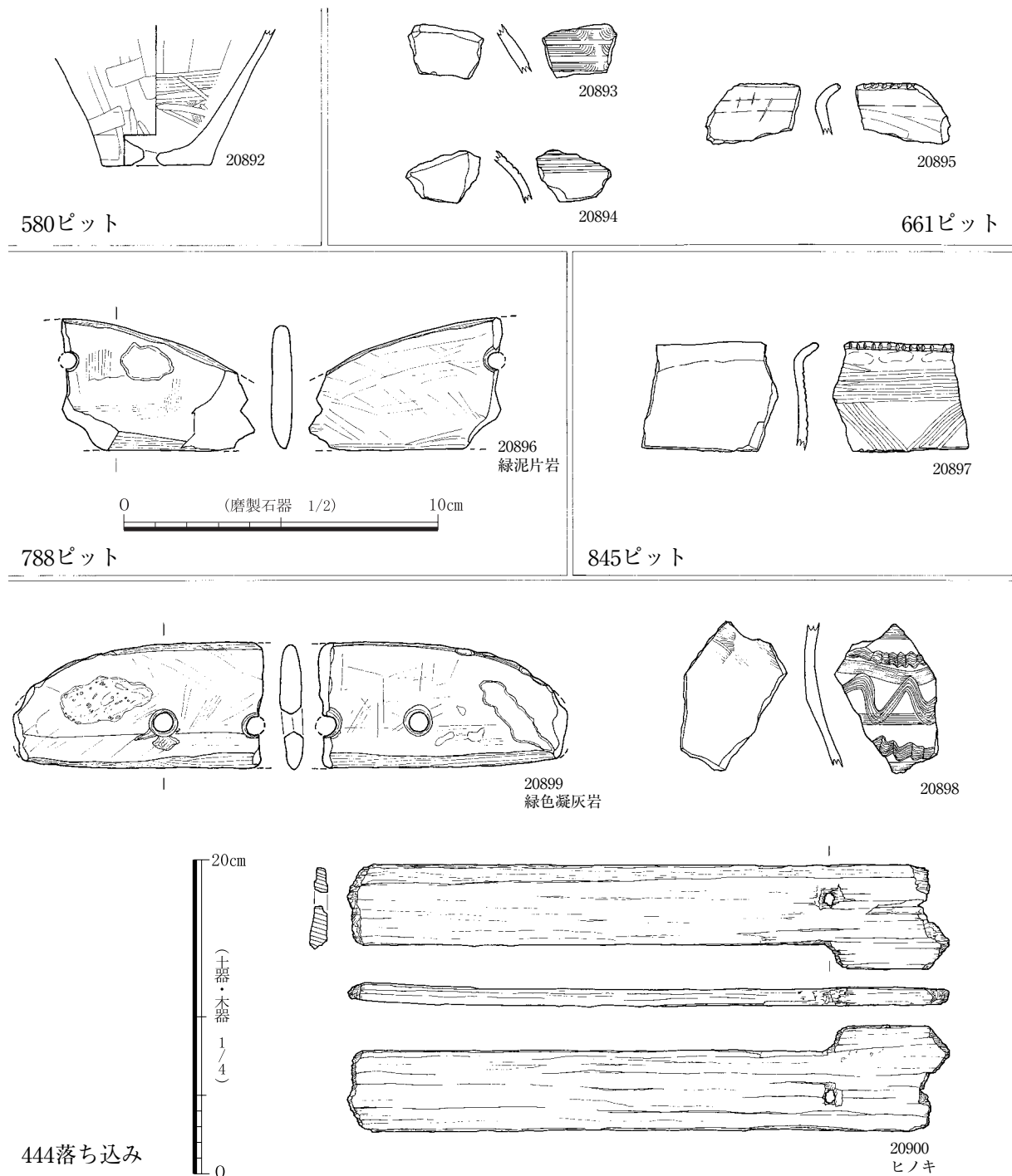


図204 03-1-2区 第10面580・661・788・845ピット、444落ち込み出土遺物

黒7.5Y3/1細砂混じりシルト。石庖丁が1点出土した。

図204 - 20896は緑泥片岩製の石庖丁。片刃で直線刃半月形のもの。

845ピット 746ピットの西約6mに位置する。平面円形で、直径21~23cm、深さ10cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1細砂混じりシルト。弥生土器14片（うちⅠ様式3片）出土。

図204 - 20897は甕。沈線によって山形文を描く。Ⅰ - 3~4様式。第10 - 2層の20988と接合した。落ち込みを1か所検出した。

444落ち込み 調査区北東部に位置する。北東側に443溝がつながり、その底よりもさらに20cmほど深くなる。平面不整形だが、主軸方向は東北東 - 西南西。長径約10m、短径5.1m、深さ50cm。出土遺物は、弥生土器80片（うちⅠ様式4片、Ⅰ~Ⅱ様式3片、Ⅱ様式8片）、石庖丁1点、削器1点、磨石1点、叩き石1点、木材1点、計85点とシカ（右上腕骨）が出土した。

図204 - 20898は長頸壺の頸部であろう。クシ描き直線文と波状文を交互に配するが、中央の波状文は単位が大きく一部直線文にかぶっている。Ⅱ様式。第9層の20740と同一個体である可能性が高い。

20899は緑色凝灰岩製の石庖丁。両刃で直線刃半月形。端部を打ち欠いている。

20900は有孔板。小口の両端を欠き、残存長34.3cm、短軸最大6.7cm、厚み1.0cmの柁目材。一端は「L」字状に突出し、短軸中央に1cm前後の方形孔があく。この突出部は、孔の部分で裂けた可能性もあるが、細くなった部分の側面は平滑である。突出部と反対側は両面ともに厚みを減らしやや段状となる。ヒノキの柁目材。

第10面の高まりについては、第6面以下と同様に、盛土による部分を図182のとおり、433・435・436・442・446・466高まりの6か所に遺構番号を付け、第10層の遺物を高まりごとに取り上げた。

### (23) 03 - 1 - 2区第10層の遺物（図205~209・写真図版109）

03 - 1 - 2区の第10層全体から出土した遺物は、弥生土器5999片（うちⅠ様式875片、Ⅰ~Ⅱ様式339片、Ⅱ様式77片）、転用土製紡錘車1点、転用土製円板5点、非鉄金属1点、糸巻状骨製品1点、石器類91点、礫3個、木器2点、木11点、炭1点、焼土塊1点、マクワウリの仲間の種子1点、計6117点と骨である。それらを第10面で名づけた高まりの範囲ごとにまとめると次のようになる。

調査区北部、第10面433高まり内からは、弥生土器111片（うちⅠ様式16片、Ⅰ~Ⅱ様式8片、Ⅱ様式2片）、転用土製円板1点、石鏃1点、木片1点、炭1点、計115点出土した。

図205 - 20911は打製石鏃。先端をやや欠き、側縁の一部は調整によるものか、抉れて左右対称とならない。凸基無茎式で残存長4.39cm、短軸1.55cm、厚み0.4cm、重さ2.8g。

調査区北部東寄りの第10面435高まり内からは、弥生土器177片（うちⅠ様式21片、Ⅰ~Ⅱ様式5片）、楔1点、サヌカイト剥片3点、計181点出土した。

図206 - 20912は広口壺の頸部。大きく広がるだろう頸部に刻み目のある貼り付け突帯で文様を描く。横方向の11条の下、胴部側には、縦位の直線3条と蕨手状の意匠が残る。Ⅰ - 4様式~Ⅱ様式初頭。

調査区北西部、第10面436高まり内からの出土遺物は、弥生土器305片（うちⅠ様式34片、Ⅰ~Ⅱ様式13片、Ⅱ様式4片）、削器2点、サヌカイト剥片1点、スギ片1点、計309点である。

調査区中部に東西に広がる第10面442高まり内の出土遺物は、弥生土器1660片（うちⅠ様式173片、Ⅰ~Ⅱ様式55片、Ⅱ様式38片）、転用土製紡錘車1点、転用土製円板1点、石庖丁1点、砥石2点、叩き石1点、緑泥片岩製磨製石鏃未成品1点、削器3点、研磨痕のある削器1点、楔4点、サヌカイト剥片



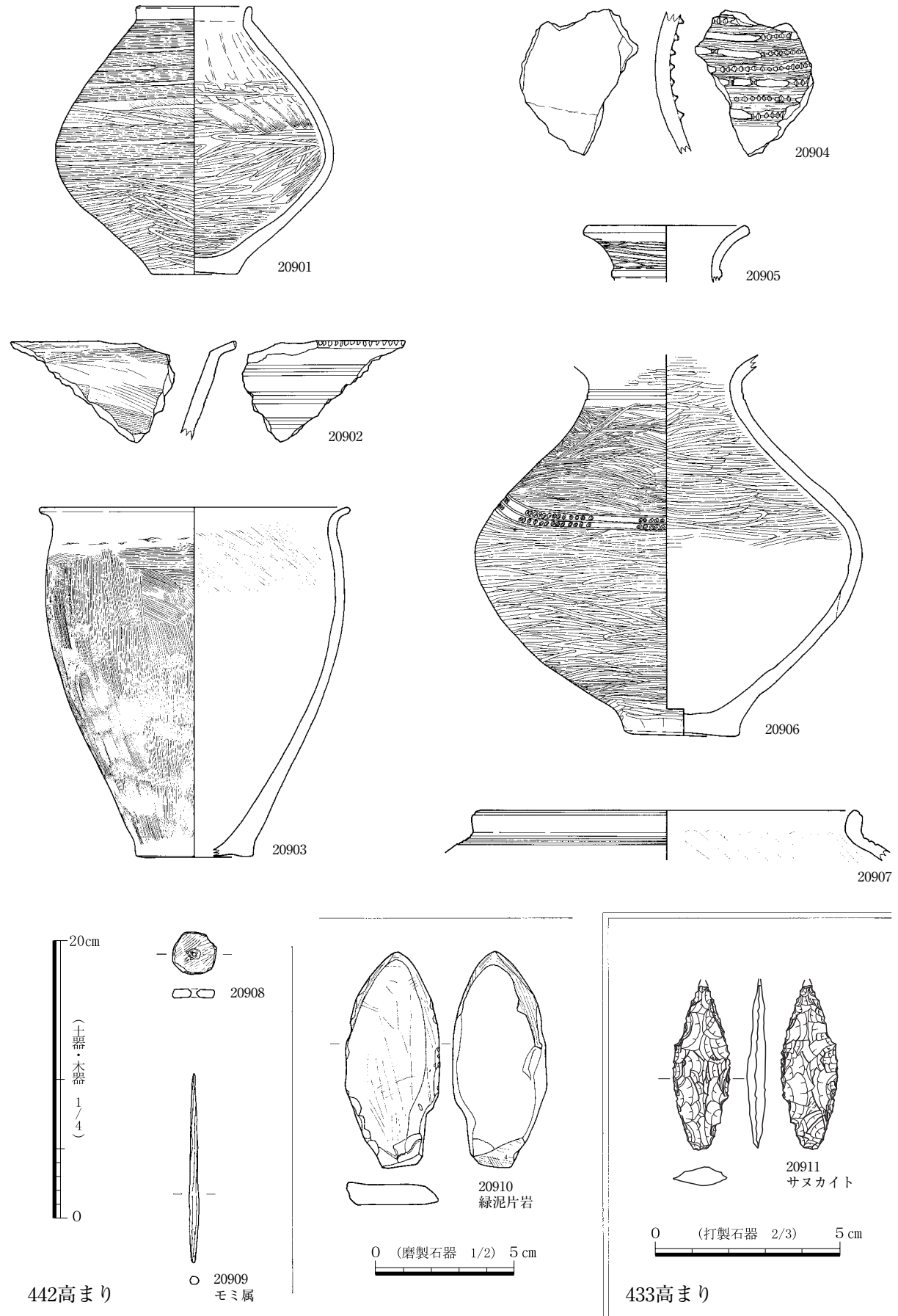


図205 03-1-2区 第10面442・433高まり出土遺物

14点、大礫2個、木製ヤス1点、木3点、焼土塊1点、計1696点と大型哺乳類骨片2点である。

図205 - 20901 (写真図版109)は無頸壺。口縁部は短く立ち上がり、体部にはクシ描き直線文が上下に分かれて施される。胴部下半にはケズリとハケの痕跡がミガキの下に認められる。20902は甕の口縁、胴部にはクシ描き直線文が施されている。いずれもⅡ様式に位置づけられる。

20903 (写真図版109)は甕。内外面ともにハケ調整で、胴部はやや張って口縁部でまろく屈曲する。

20904は壺の頸部。貼り付け突帯には白っぽい胎土を用い、突帯間にはミガキを施す。突帯は部分的に剥離している。20905は頸部の削り出し突帯が残り、口縁部はあまり広がらない。Ⅰ - 2様式。20906 (写真図版109)は頸部に沈線2条と、胴部上半に沈線2条とその間に円形刺突文が一定の間隔をあけてめぐらる。Ⅰ - 2様式。

20907は短頸壺。口縁部は分厚くまるみを帯び、沈線1条、頸部の屈曲に沈線3条がめぐらる。Ⅰ - 3 ~ 4様式。20908は土器片転用の紡錘車。

20909 (写真図版92)はヤス。長軸13.7cm、径0.7cmでモミ属を用いる。

20910 (写真図版109)は磨製石鏃の未成品。緑泥片岩製で、先端部を研磨するが、敲打のみの部分を多く残す。長軸7.77cm、短軸3.36cm、厚み0.8cm、重さ37.0g。

調査区中部やや南側を東西にのびる第10面446高まり内からの出土遺物は、弥生土器1278片 (うちⅠ

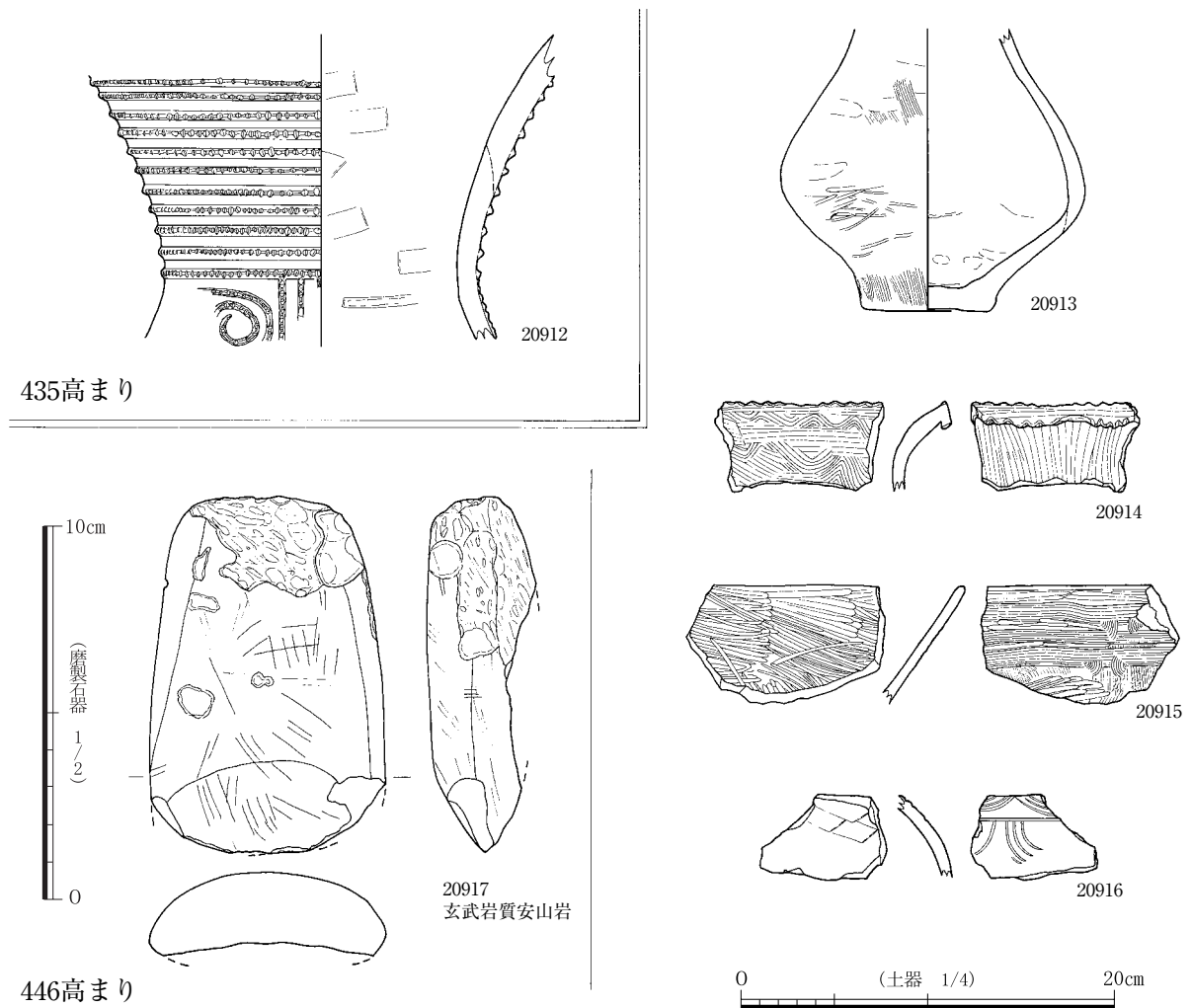


図206 03 - 1 - 2区 第10面435・446高まり出土遺物

様式136片、Ⅰ～Ⅱ様式65片、Ⅱ様式28片)、転用土製円板2点、蛤刃形石斧1点、叩き石1点、楔1点、サヌカイト剥片13点、木片1点、計1297点である。

図206-20913は無文壺の体部。胴部は下で大きく張り、横方向のミガキがわずかに見られる。20914は甕の口縁で、前述したように第9-2面488溝の20778と同一個体と思われる。淀川水系のⅡ様式。

20915は把手付き鉢の口縁。クシ描き直線文と扇形文による流水文で飾られる。欠損部に把手の剥離痕が残る。

20916はⅠ様式のうちでも古く位置づけられる。壺の肩部の破片には、ヘラ描き沈線によって直線文と重弧文による文様帯をもつ。Ⅰ-2様式か。

20917は蛤刃形石斧。基部側は敲打のみでほとんど研磨されず、片面は刃部側が大きく抉られたように欠ける。長軸9.48cm、短軸6.32cm、厚み2.9cm、重さ264.6g。玄武岩質安山岩製。

調査区南部、第6面の252大溝や第9面の1382溝よりも南の部分の第10層からは、弥生土器2437片(うちⅠ様式493片、Ⅰ～Ⅱ様式191片、Ⅱ様式5片)、転用土製円板1点、石庖丁2点、石斧1点、磨石1点、砥石3点、叩き石1点、石鏃未成品1点、削器7点、楔3点、サヌカイト剥片21点、小礫1個、木製鋏の未成品1点、木片5点、非鉄金属1点、糸巻状骨製品1点、マクワウリの仲間の種子1点、計2488点と骨が出土した。

図207-20918は無文の広口壺。口縁は緩やかに広がり、端部はまるい。Ⅱ様式か。

20919～20926はⅠ-3～4様式に位置づけられ、20919～20921は頸部に貼り付け突帯をもつ。刻み目は布目圧痕によるもの。20922は胴部中央に3条の刻み目突帯があり、白色の胎土をもつ。Ⅰ-3～4様式であろう。20923(写真図版109)は胴部上半に沈線による山形文をもつ。口縁部には紐孔があげられる。器面は珍しく磨耗する。胎土はチャートを含み、白っぽい。20924は胴部下半に穿孔をもつ壺である。頸部に沈線2条をもつのみ。外面は黒変するが、白い胎土をもつ。

20925は無頸壺の口縁。2つの紐孔をもつ突起をもち、沈線6条1帯を文様とする。

20926(写真図版109)は小形の壺。胴部は中央で屈曲し、底部が大きいことや扁平な印象を受ける。胴部上半を沈線で区画し、両蕨手(双頭渦文)状浮文を横に並べる。浮文には細かい刻み目を入れる。胎土は白色系統でチャートを含む。20927も口径6.8cmの小形の短頸壺で、頸部にクシ描き直線文を入れる。Ⅱ様式初頭か。20928も小形土器。口径2.4cm、器高7.4cm。細長い胴部が内湾して口縁にいたる。指ナデの痕がよく残る。

図208はⅠ-3～4様式の甕と鉢。20929～20933は甕。山形文をもつ20929は第10面543溝の20859と同一個体である。20932は沈線の間突帯1条をもち、口縁端部と同様、刻み目が施される。第6面252大溝下層の20145と似た個体である。20933はほぼ直立する口縁下に貼り付け突帯をもつ。瀬戸内系の甕か。口縁端部とともに刻み目が施される。

20934～20936は鉢。20935の口縁が屈曲して刻み目をもつほかは無文のハケ調整。端部はまるくおさめ、Ⅰ様式のうちにおさまるものであろう。20935と20936は胎土がよく似ている。

20937は流紋岩製の石庖丁未成品。片刃で穿孔途中の孔が残る。20938も流紋岩製。一面は平らだが、逆の面は凸面となる。厚み1.9cmを測る分厚いもの。研磨あるいは磨耗は側円の一部を除いてほぼ全面にわたる。石斧として捉えたが、石庖丁未成品の可能性を残す。長軸15.15cm、短軸5.40cm、168.5g。

20939は砥石。砂岩製で使用面が凹む。残存長5.83cm、残存短軸5.42cm、厚み1.6cm。

図209-20940は直柄の平鋏。隆起部は紡錘形で、柄孔がないことから未成品と判断できる。身部に

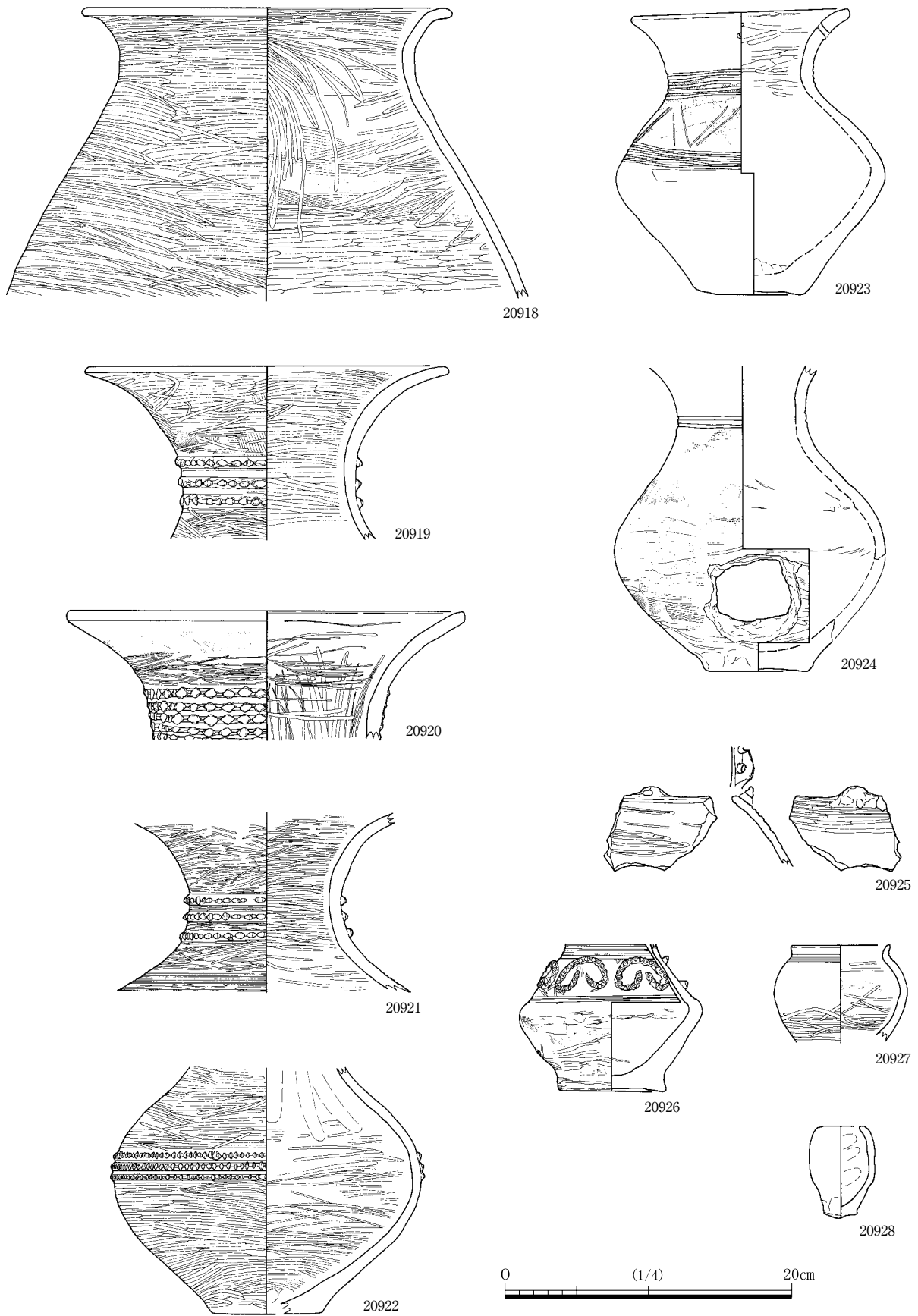


図207 03 - 1 - 2区 第10層出土遺物 (1)

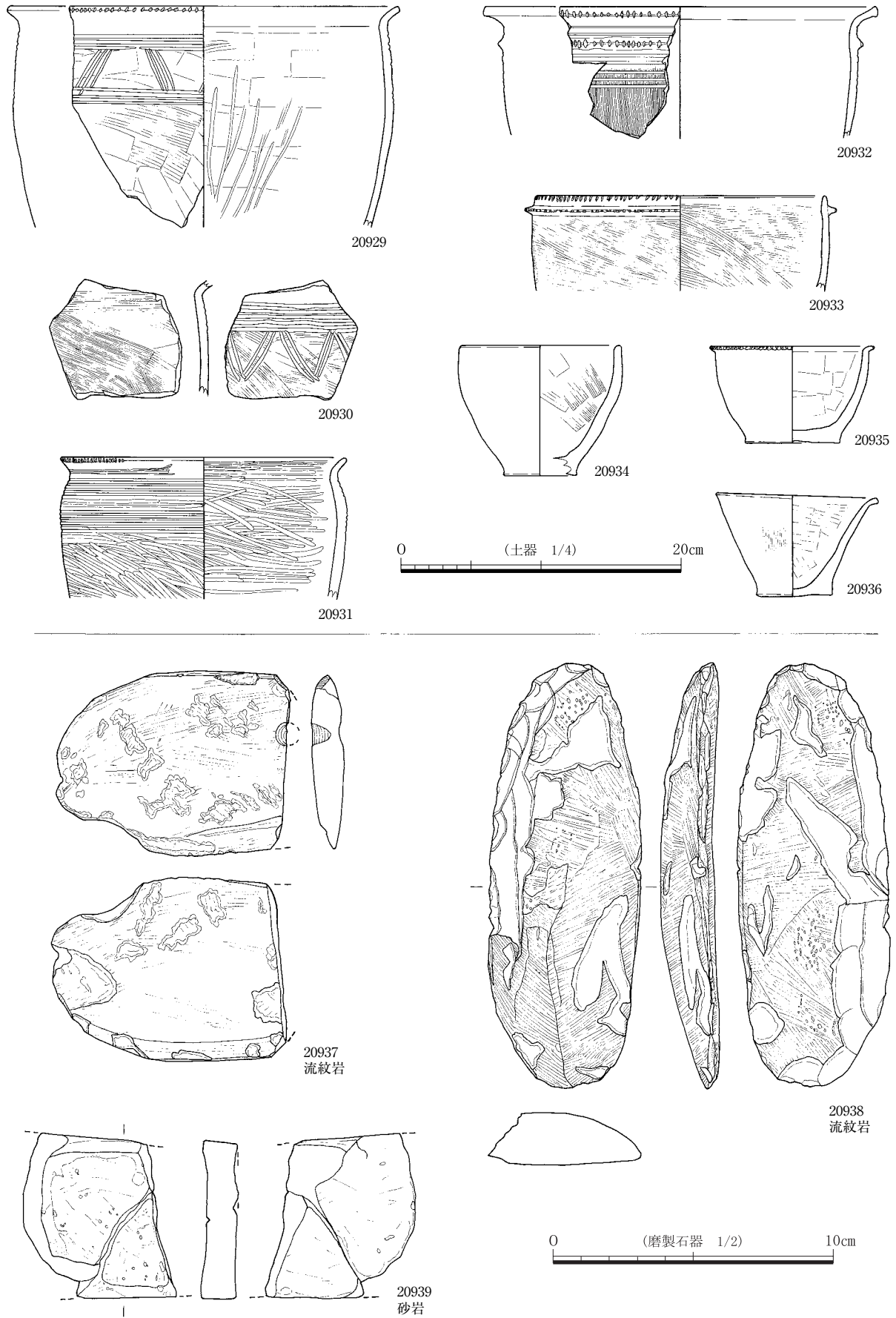


図208 03-1-2区 第10層出土遺物(2)

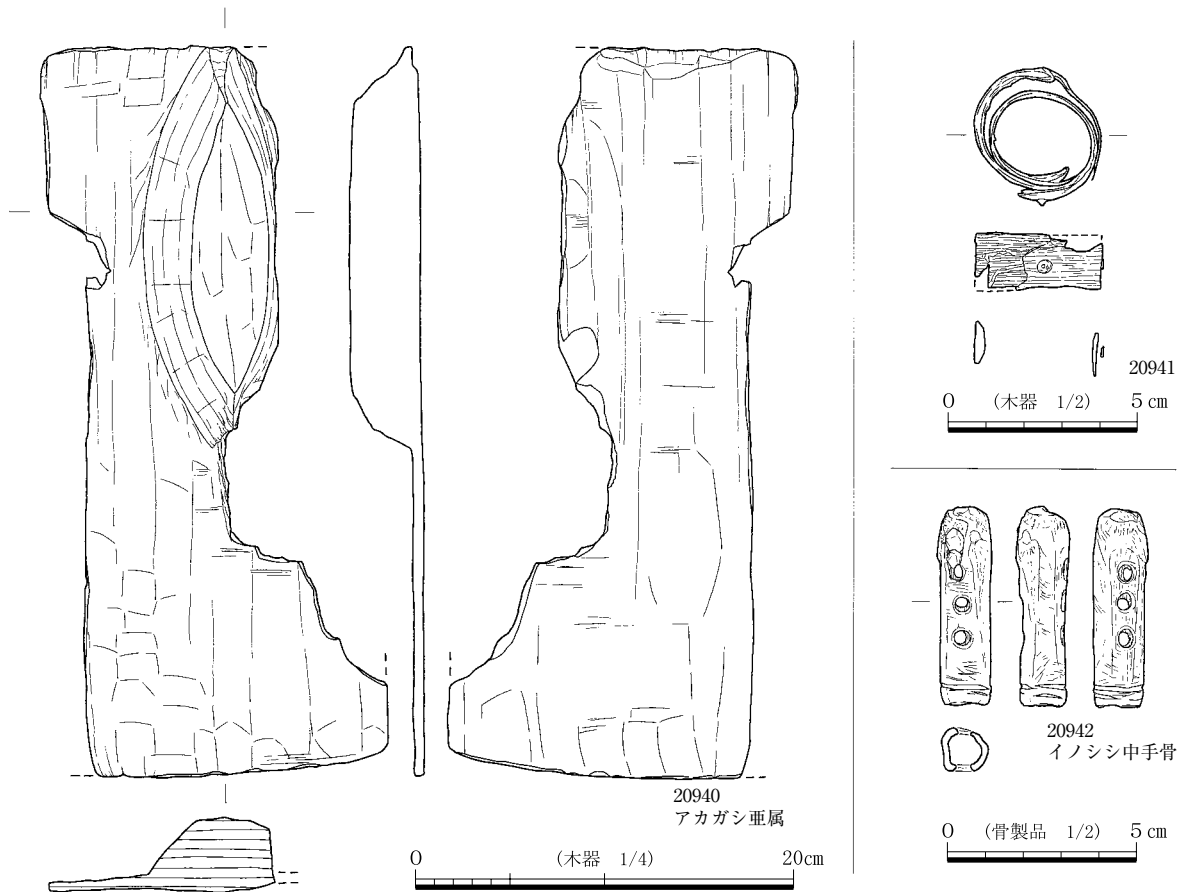


図209 03-1-2区 第10層出土遺物(3)

は木目と平行に削られた加工痕が残る。全長38.6cm、左右は欠けて残存幅18.4cm、最大高3.8cmを測る。アカガシ亜属。

20941は樹皮を巻いたもの。幅1.5cmの樹皮が、径約3.0cmでほぼ2周している。石器や木器の基部に巻いたものか。中央の突起部は自然のもの。

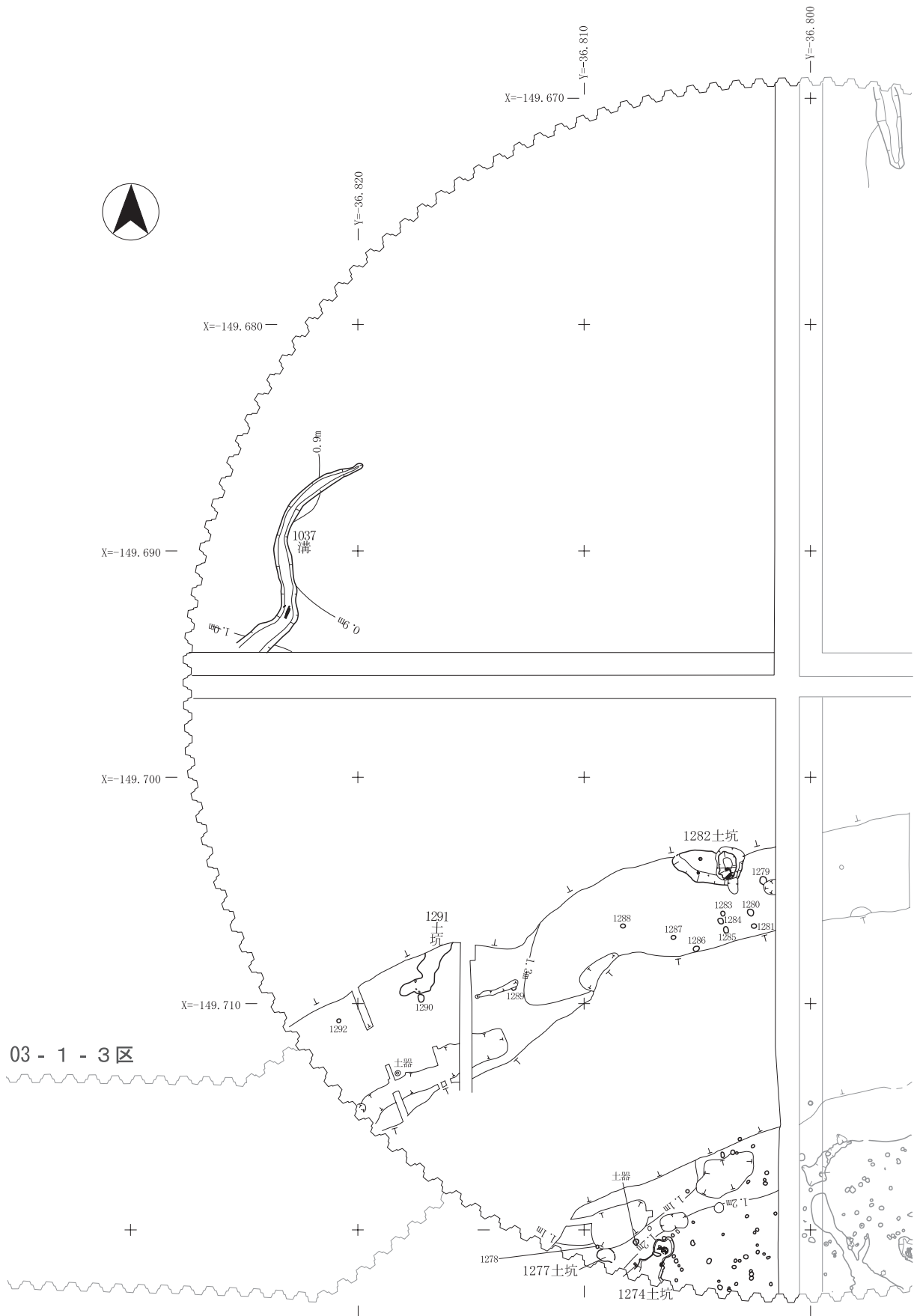
20942(写真4)は弓弭状骨角器。イノシシの第4中手骨を用いたもの(第9章 安部みき子「山賀遺跡出土の動物遺体」参照)で、両面にそれぞれ3孔がちょうど対面する形で貫通する。穿孔は外面側が大きく、稜をもって内面側へ小さくなる。上端は、まるく加工、下端を切り落として内部は空洞となっている。下端には線刻が1~2条めぐるが、所々で互い違いになり、細かい横方向の擦痕も目立つ。切り落とした端部に段が残っていることから、加工のための刻みと考えられよう。なお1孔は破損して、出土時には石英の小礫が2つはまっていた。

その他、北側溝の第10層部分(433・435・442高まり内)から、弥生土器31片(うちI様式2片、I~II様式2片)が出土した。

以上が、第10層出土の遺物である。

この他、第10・11層相当のセクションベルトとサブトレンチから、弥生土器56片(うちI様式9片、I~II様式1片、II様式1片)、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、計58点出土した。

第10~13層に相当するサブトレンチからは、弥生土器3片(うちI様式1片)と木片1点、計4点出土した。



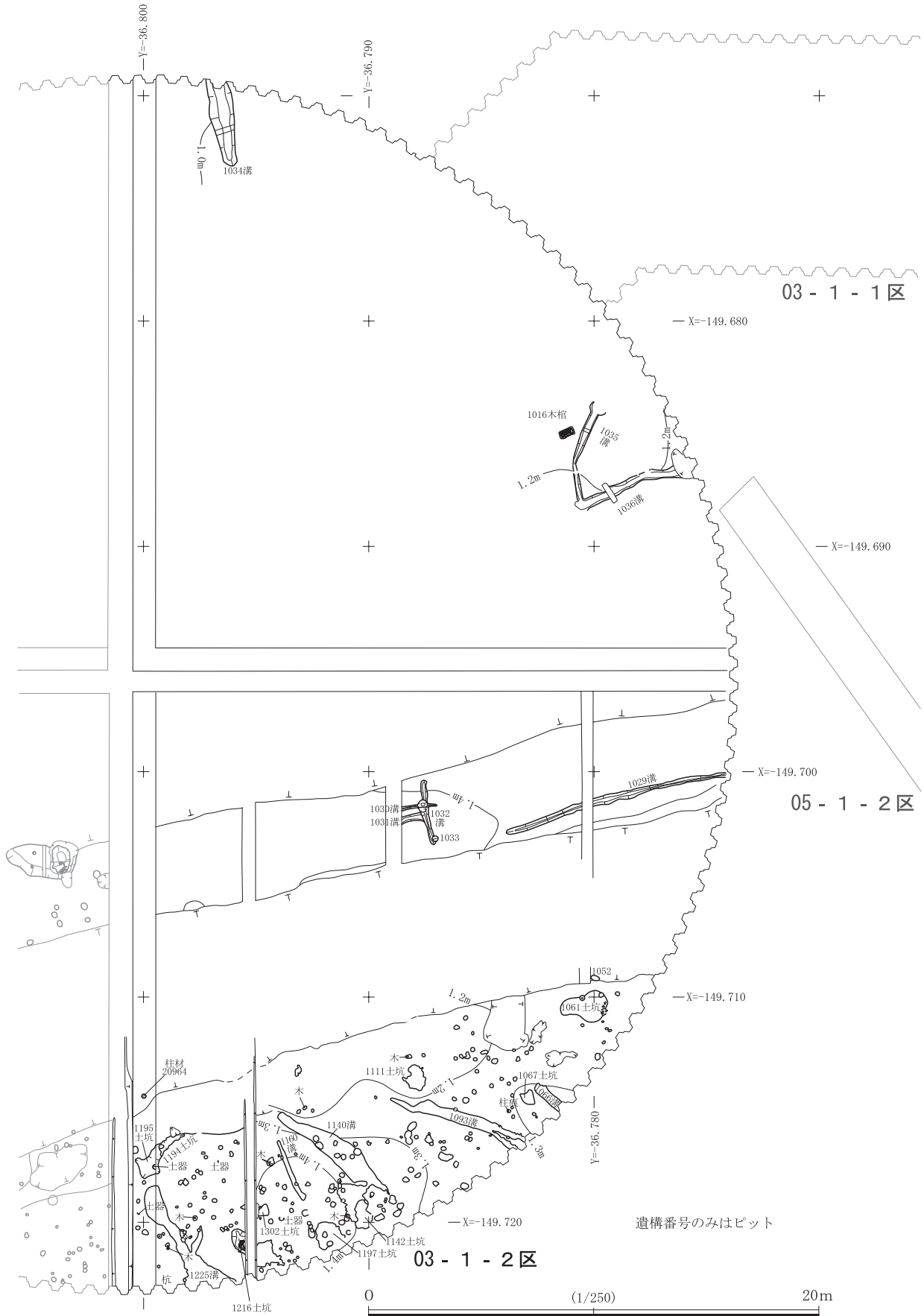


図210 03-1-2区 第10-2面





いずれも小規模な溝である。

1029溝 (写真図版57) 調査区東部に位置する。主軸方位は東北東 - 西南西。検出長は10.1mだが、東側は調査区外にのびる。幅20~43cm、深さ7cm。埋土は、オリーブ黒10Y3/1粗砂混じりシルトで、炭化物・ビビアンナイトを少量含む。出土遺物は弥生土器40片 (うちI様式7片、I~II様式2片)。

図213 - 20943は大形の鉢。外方へ大きく傾く器形で、口縁はゆるく外反する。上方には小ぶりの把手が1方向に残る。口縁端部に刻み目が施されるのみで、外面は細かいハケ調整、内面は単位の大きなハケ調整が観察される。体部外面は把手から下のほとんどが黒変する。I - 3~4様式。

1037溝 (図212) 調査区西部に位置する。S字状に屈曲するが、北北東にのびる。幅44~123cm、深さ16cm。埋土は黒褐2.5Y3/2シルト。弥生土器1片、スギ1点、ヒノキ1点、その他木片が出土した。

1093溝 調査区南東部に位置する。西北西 - 東南東を主軸とする。幅40~53cm、深さ8cm。埋土はオリーブ黒10Y3/1シルト。出土遺物は、弥生土器35片 (うちI様式3片、I~II様式2片)、サヌカイト剥片1点、計36点。

1140溝 調査区南東部、1093溝の西約5mに位置する。主軸方位は北西 - 南東。幅44~110cm、深さ14

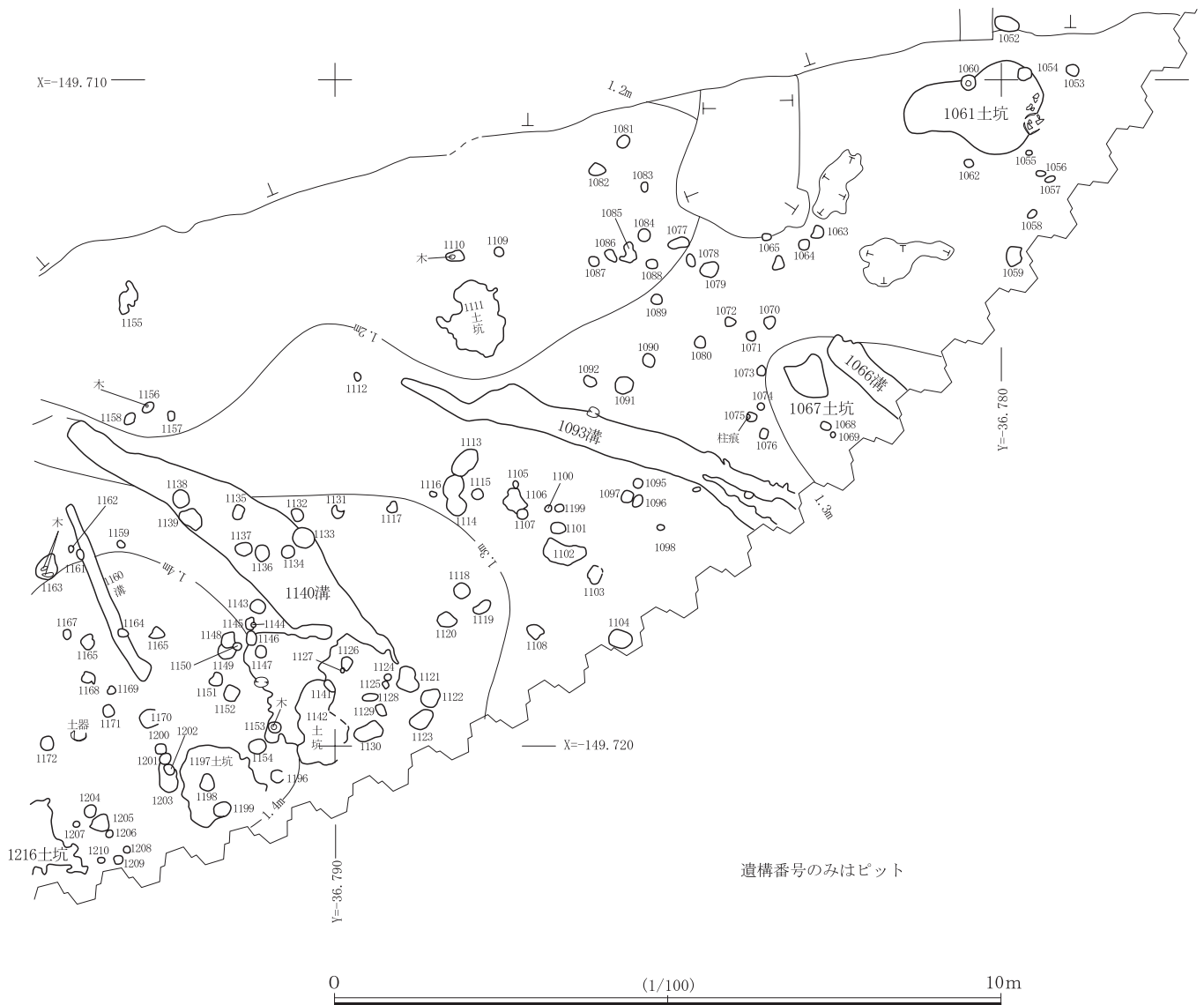


図211 03 - 1 - 2区 第10 - 2面南部

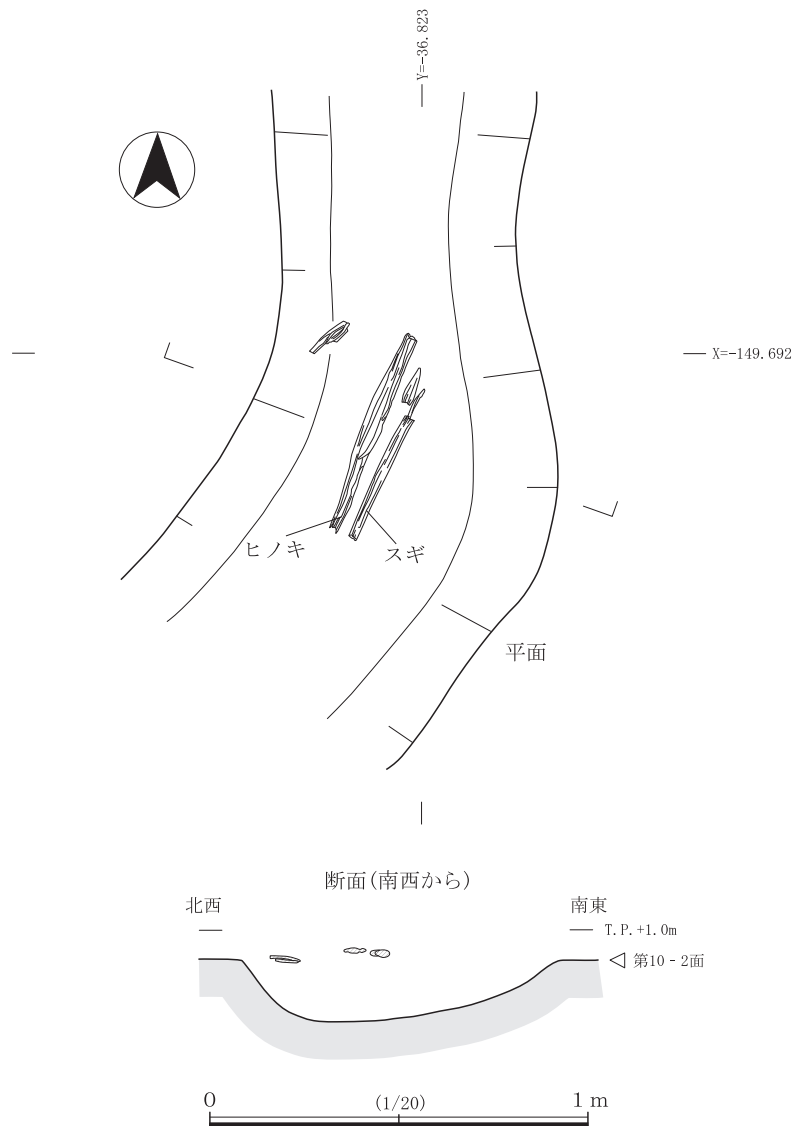


図212 03-1-2区 第10-2面1037溝

cm。埋土は、オリーブ黒7.5Y2/2シルトに細礫や黒7.5Y2/1シルトのブロックが混じる。出土遺物は、弥生土器83片（うちI様式16片、I～II様式7片）。

図213-20944は甕。口縁部は短く外反し、全体形は倒鐘形となるものだろう。胴部に沈線を1条入れ、沈線より上はやや器壁が薄い。口縁部は途中まで刻み目がある。I-2様式であろう。

1225溝 調査区南部、1093溝の西約7mにある。主軸方位は北西-南東。幅30～190cm、深さ24cm。埋土はオリーブ黒7.5Y2/2シルト。出土遺物は、弥生土器85片（うちI様式14片、I～II様式6片）。

図213-20945・20946は甕。いずれも口縁は「く」の字に外反し、肩は張らずにすぼまる。20945は刻み目が施される。沈線は5条でI-3～4様式に位置づけられよう。内外面とも煤付着。20946は口縁端部に刻み目はなく、胴部に沈線1条。やや古く位置づけられるか。外面に煤付着。

第6～10面では東北東-西南西を主軸方位とする比較的規模の大きい溝が存在したが、この第10-2面の南部では以上の1037・1093・1140溝に加えて1066・1160溝のように、北西-南東方向にのびる溝が目立つ。

その他の溝は表14にまとめた。

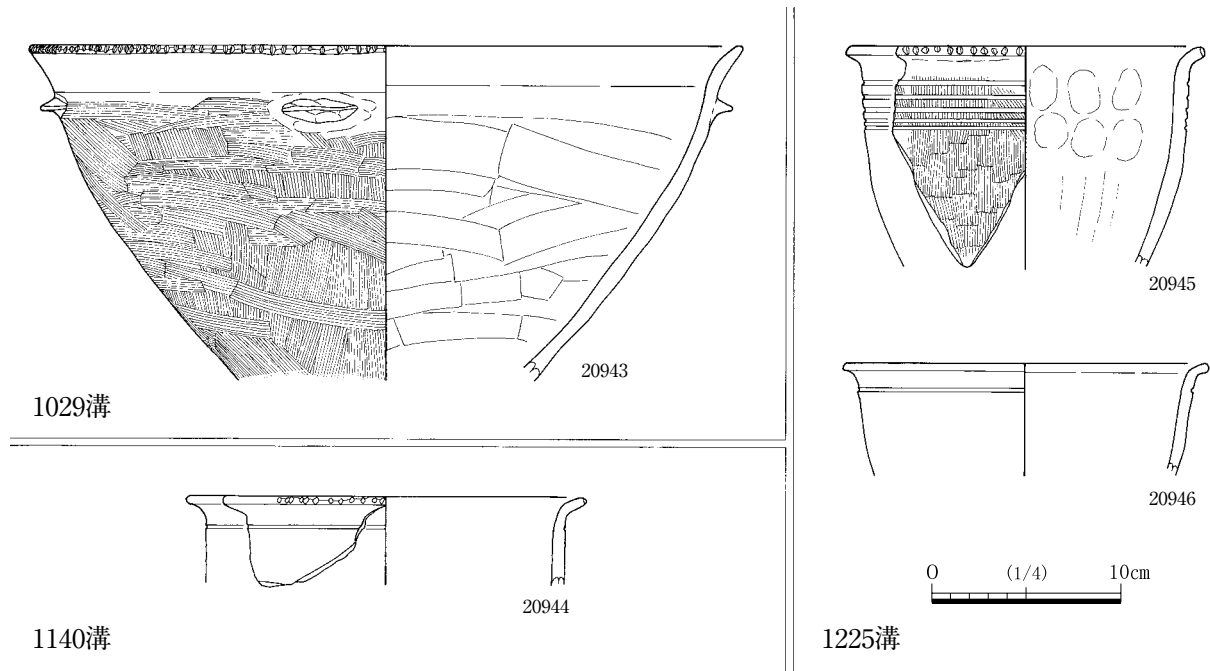
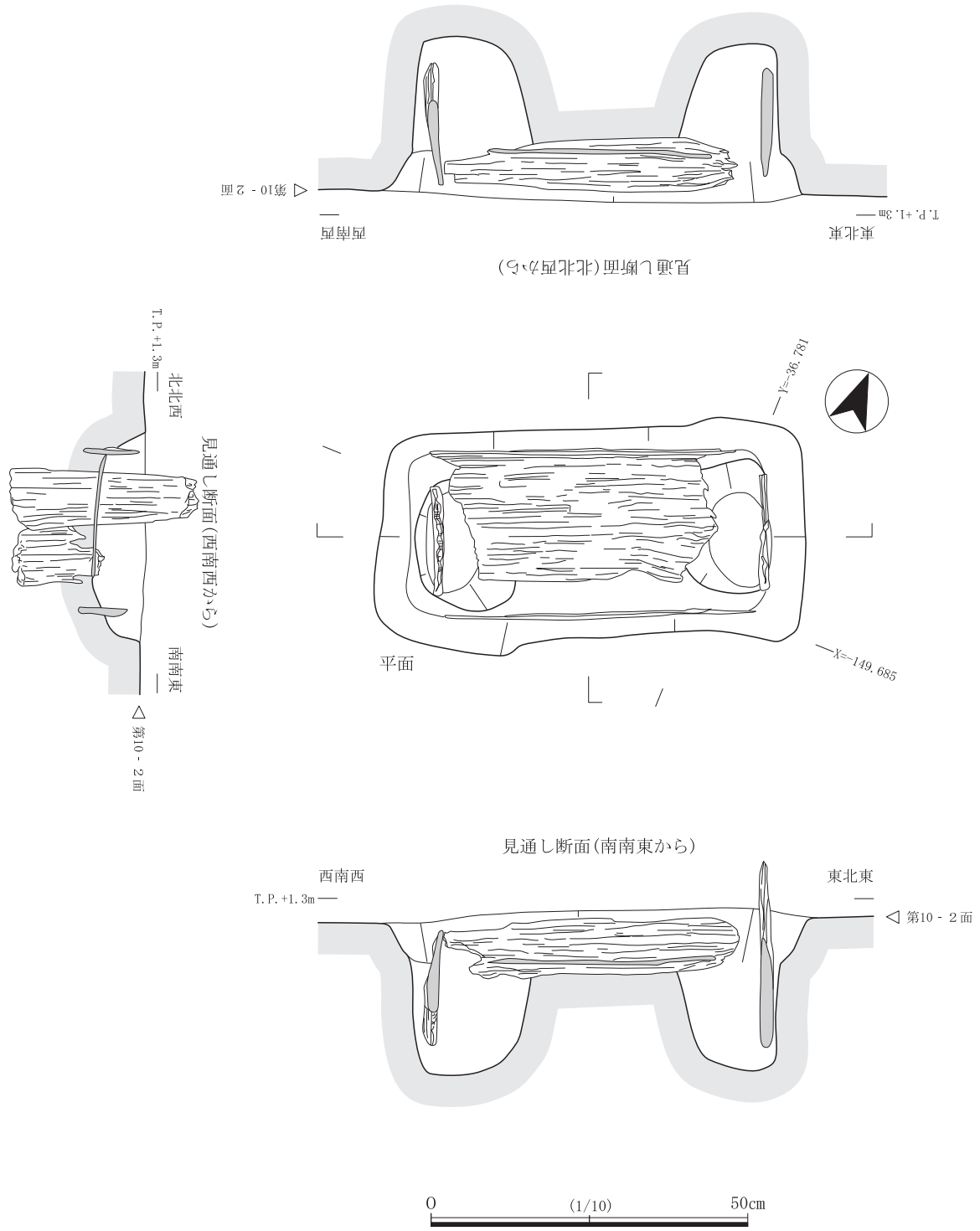


図213 03-1-2区 第10-2面1029・1140・1225溝出土土器

表14 03-1-2区 第10-2面溝一覧

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数					
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		弥生土器				その他	合計
							I 様式	I Ⅰ Ⅱ 様式	II 様式	不 詳		
1029	8M-8a・9a	東北東	(10.1)	20~43	7	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる	7	2		31		40
1030	8M-9a	東北東	(1.6)	15	3	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる				5		5
1031	8M-9a	東北東	(9.0)	25~36	3	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる						0
1032	8M-9a	北	2.9	17~32	3	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる			1	6		7
1034	8L-10h・10g	北北西	(3.8)	69~110	14	暗灰黄2.5Y4/2、細砂~粗砂混じる、炭化粒含む	6	1		15		22
1035	8L-9i・8i	北北東	(4.7)	16~36	23	暗灰黄2.5Y4/2		2		34		36
1036	8L-8i・9i	西北西	(4.6)	31~44	9	黒褐2.5Y3/2						0
1037	9L-3i他	北北東	(11.0)	44~123	16	黒褐2.5Y3/2				1	スギ1、ヒノキ1、木片1	4
1066	8M-9b	北西	(1.3)	41	6	オリーブ黒7.5Y3/2、炭化物含む						0
1093	8M-9b	西北西	(6.4)	40~53	8	オリーブ黒10Y3/1	3	2		30	サヌカイト剥片1	36
1140	8M-10b・9b	北西	(7.3)	44~110	14	オリーブ黒7.5Y2/2、細礫・黒7.5Y2/1ブロック混じる	16	7		60		83
1160	8M-10b	北北西	2.8	14~34	24	オリーブ黒5Y2/2	1			1		2
1225	8M-10c・10b	北西	(5.4)	30~190	24	オリーブ黒7.5Y2/2	14	6		65		85



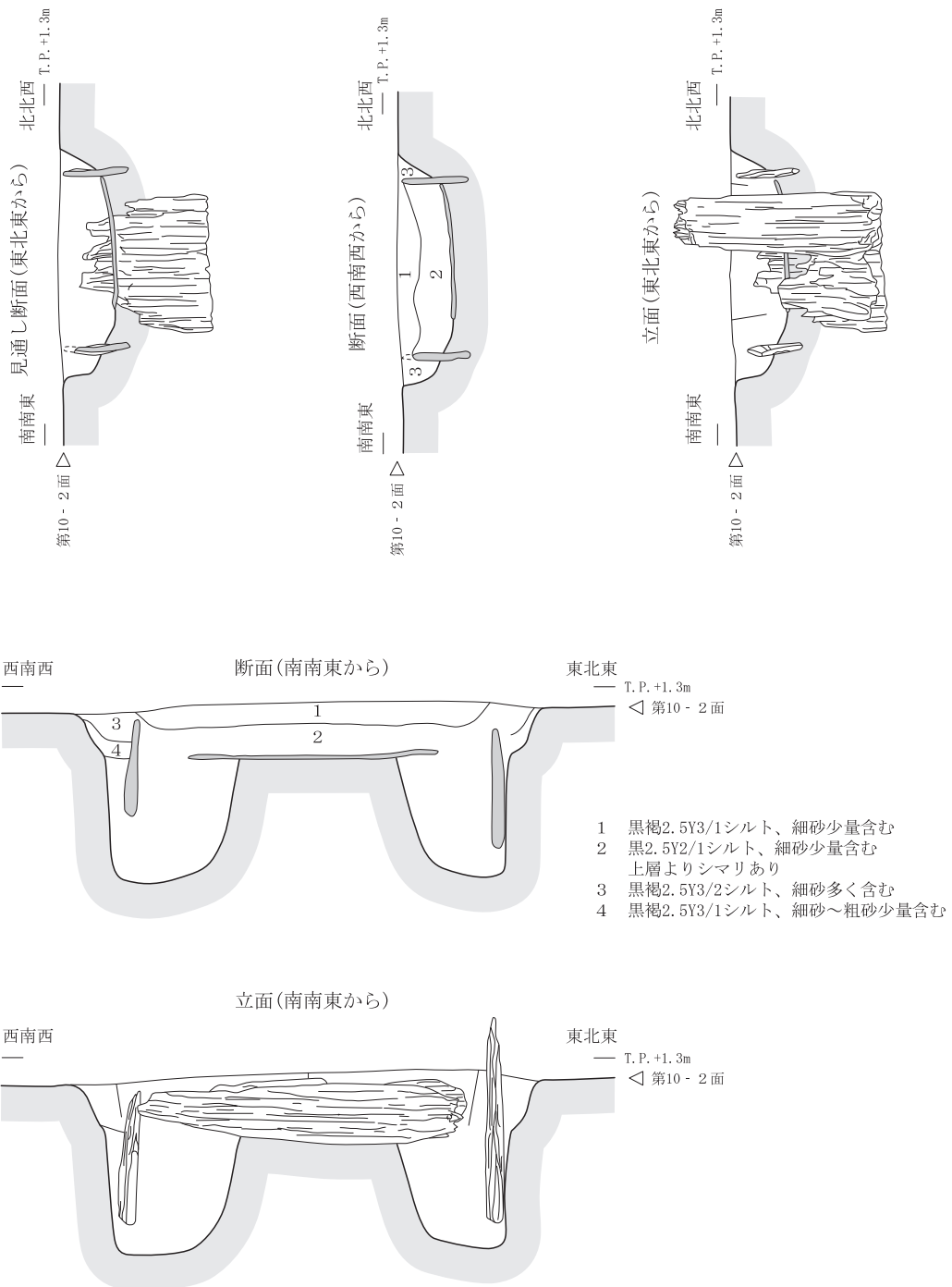


図214 03-1-2区 第10-2面1016木棺

木棺を1基調査した。

1016木棺(図214・写真図版56) 調査区北東部、1035溝の西側に位置する。調査時には写真図版56のように第11面1017土坑の近くで検出した。掘りかた平面形はやや不整の長方形で、長径68cm、短径35cm。両小口の部分がわずかに幅広になっている。木棺内法は、長さ50cm、幅24cm。主軸方位は東北東-西南西(北70°東)。

蓋板は失われていたが、底板と各2枚の側板・小口板はかろうじて残っていた。底板の平面形は不詳。小口板は底板よりも8~13cm下まで埋め込まれている。側板も底板に載らず掘りかたよりも下層に入り込んでいる。棺材は遺物としては取り上げられなかったがサンプリングの結果、底板・側板・小口板とも全てヒノキと判明した。

棺内上部の埋土は北東小口板の高さからみて失われたものと推定できるが、中部は黒褐2.5Y3/1シルト、下部は黒2.5Y2/1シルト。棺内の埋土は下部ほどしまりが強い。底板は墓壙底に直接置かれているように観察された。掘りかた内は基本的に黒褐2.5Y3/2シルト。いずれも細砂が含まれる。小口穴も含めて、これらの埋土は部位による差異が少ない。

棺内の遺物は埋土を水洗して検出したもので、弥生土器小片4片、サヌカイト剥片1点、炭化粒10数

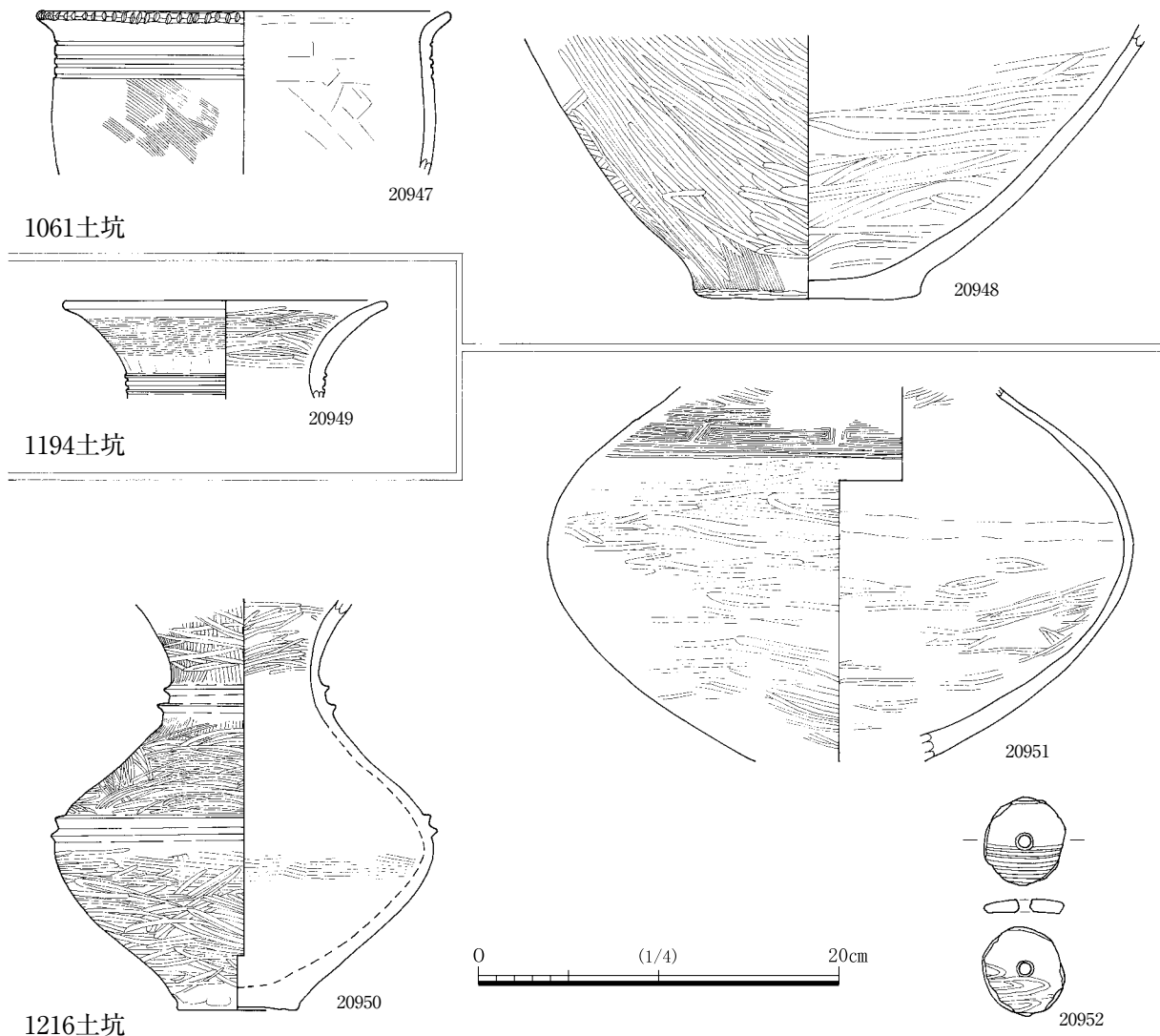


図215 03-1-2区 第10-2面1061・1194・1216土坑出土遺物

点である。掘りかた内からは、弥生土器10片が出土した。時期の判明するものはI様式4片で、内訳はヘラ描き沈線の施されたものが3片、貼り付け突帯のみられるものが1片である。

土坑を13基調査した。個々の土坑については、ピットとともに表15にまとめた。

1061土坑 調査区南東部、第9面1382・1397溝より南の高台部分の北東端に位置する。平面は瓢箪形に近い不整形で、東西に長い。長径213cm、短径134cm、深さ27cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/2シルト。弥生土器40片（うちI様式5片、I～II様式1片）が出土した。

図215 - 20947は甕。口縁は「く」の字に外反し、口縁端部に刻み目、胴部に沈線4条をもつ。外面は煤が付着する。I - 3～4様式。20948は大形の壺の底部。内外面ともにハケ調整後、粗めのミガキが施される。底部の調整はやや手を抜いて粗い。II様式であろう。

1194土坑 調査区南部に位置する。南西側の1195土坑を切っている。平面不整形で、北東 - 南西に長い。長径125cm、短径41cm、深さ15cm。埋土は、黒5Y2/1シルトに灰オリーブ5Y5/3シルトのブロックや炭化物が混じる。弥生土器13片（うちI様式2片）出土。

図215 - 20949は壺の口縁部。頸部にある幅広の削り出し突帯には、沈線2条が施される。外面はハケ調整のみで、突帯の上方には縦方向の工具痕を残す。内面のミガキの単位は太く不規則だが、密に施される。胎土・色調はにぶい黄橙色で長石を多く含む。I - 2様式。

1216土坑（図216・写真図版58） 調査区南部やや東側に位置する。平面不整形で、北西 - 南東に長い。

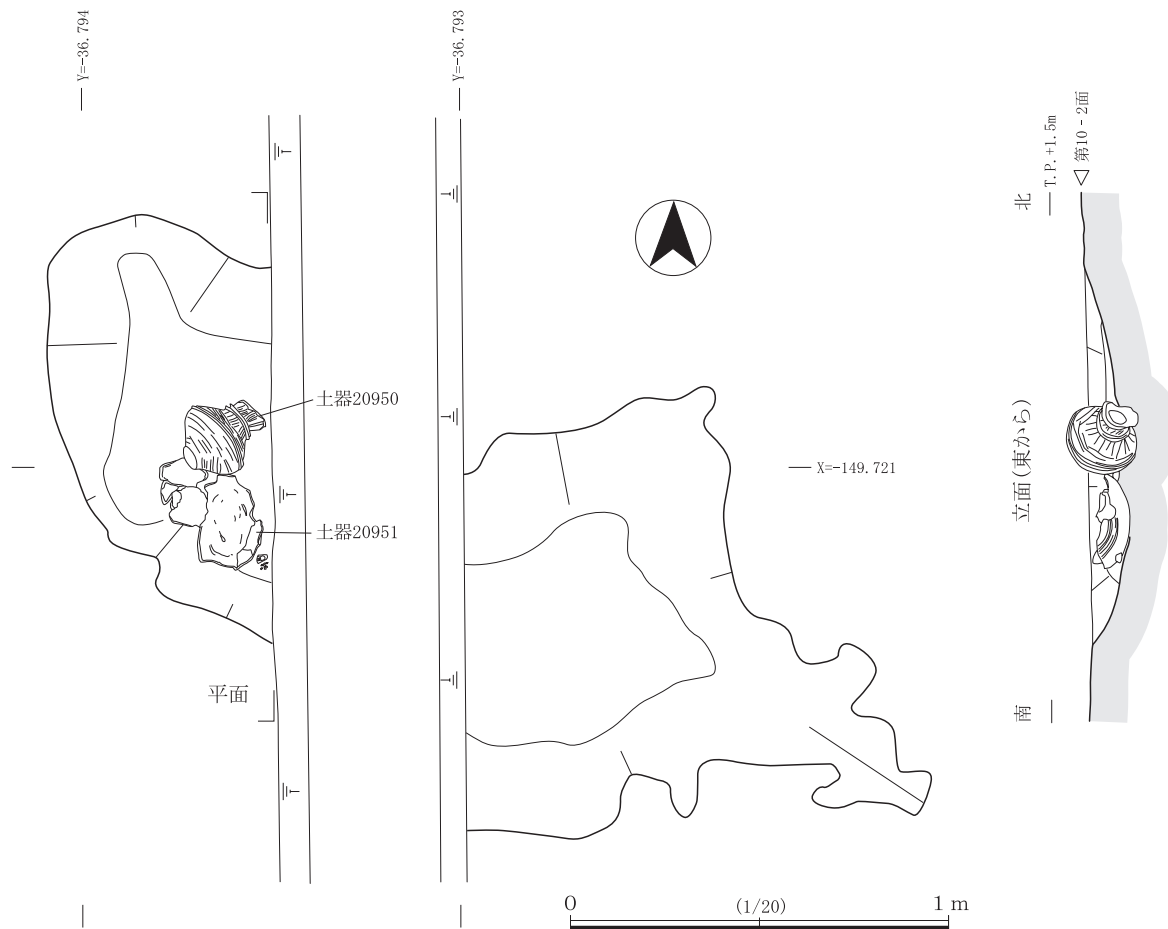


図216 03 - 1 - 2区 第10 - 2面1216土坑



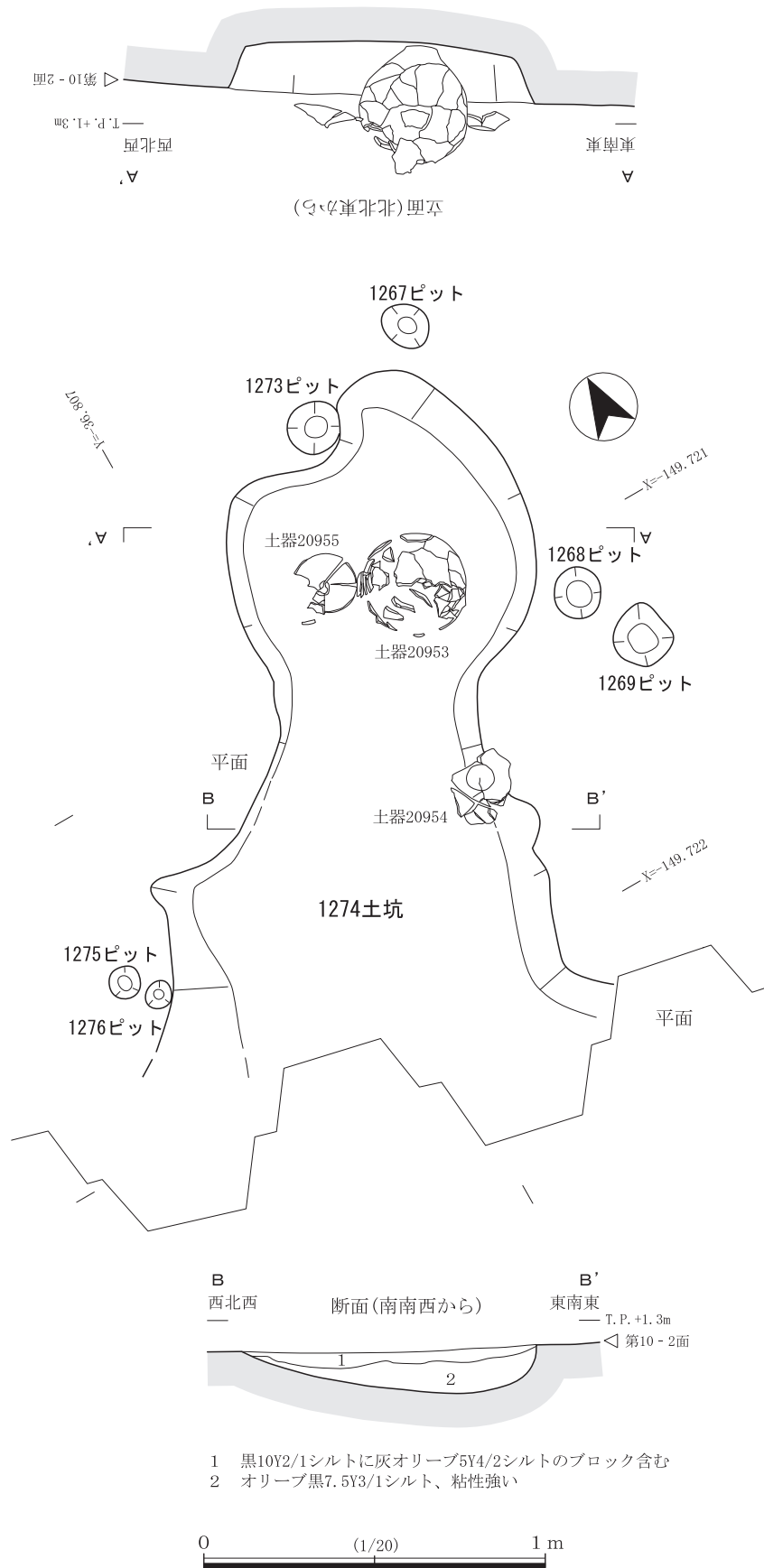


図217 03-1-2区 第10-2面1274土坑

長径271cm、短径134cm、深さ7cm。埋土は、黒5Y2/1シルトにオリブ黒5Y3/1シルトのブロックが混じる。弥生土器5片（うちI様式2片）、転用土製紡錘車1点、計6点出土した。

図215 - 20950（写真図版110）は壺。頸部に2条、体部中央に2条の稜の鋭い貼り付け突帯をもつ。外面のミガキの下に粗いハケ調整が見られ、胎土は白色系統である。20951も壺。胴部が強く横に張り、上半には沈線による流水文状の文様帯をもつ。I - 3様式か。

20952は土器片転用紡錘車。ヘラ描き沈線が片面に残る。

1274土坑（図217・写真図版58） 調査区南部やや西側に位置する。平面不整形で、溝状に北北東 - 南南西に主軸をもつ。検出長約2m、短径131cm、深さ19cm。埋土は2層に分れる。出土遺物は、弥生土器41片（うちI様式5片、I～II様式3片）と大型哺乳類の骨片である。

図218 - 20953は無文の壺。口縁部を欠くが、残存で器高33.7cmを測る大形品。胴部は中位よりやや下で張り、頸部は短く広がるものであろう。II様式後半か。20955の高杯と胎土がよく似る。

20954は壺の底部で、横方向のミガキが見られる。II～III様式。

20955は高杯の杯部か。外反気味にのびる体部から、端部は外へ屈曲し、粘土を継ぎ足して拡張される。全体、特に内面が被熱して器面が荒れているため明確ではないが、杯部とすれば口縁端部はさらに横方向にのびるものとなろう。脚部との接合は円板充填によって作られており、II様式末～III様式初頭に位置づけられる。なお、口縁はやや斜め下にのびており、脚部としても捉えられるか。内面の被熱から蓋として再利用されたものと思われる。

20956は甕。頸部の沈線は2条でI - 2～3様式であろう。

1277土坑（図222） 調査区南部やや西側、1274土坑の約1m西に位置する。平面の一部を欠くが、楕円形に近い。主軸方位はほぼ東西。長径約80cm、短径62cm、深さ26cm。埋土は上下2層に分れる。出土

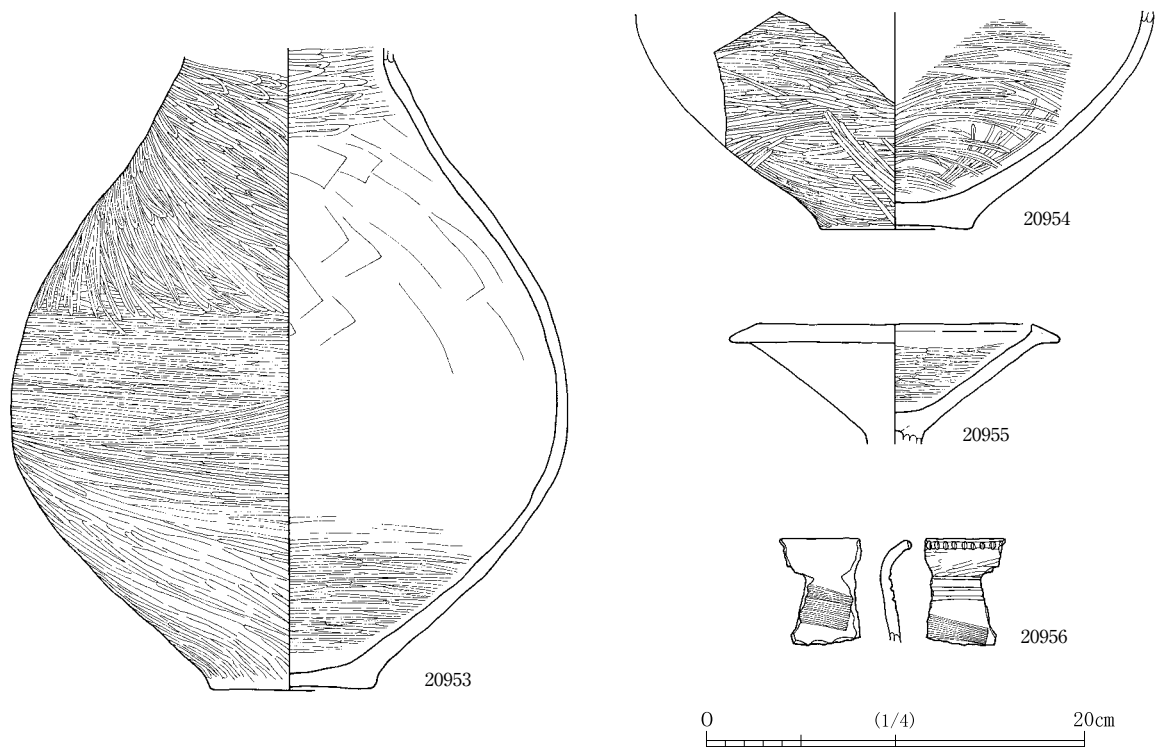


図218 03 - 1 - 2区 第10 - 2面1274土坑出土土器

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数									
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計		
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類				
1033ピット	8M-9a	円		26	26	15	オリーブ黒10Y3/1、粗砂混じる	1				1					2
1052ピット	8M-8a・9a	楕円	東西	36	25	29	①灰オリーブ5Y4/2 ②オリーブ黒5Y2/2		1			5					6
1053ピット	8M-8a	円		20	20	11	オリーブ黒7.5Y2/2、木片含む										0
1054ピット	8M-8a	円		22	21	12	黒7.5Y2/1、オリーブ黒7.5Y3/2 ブロック含む										0
1055ピット	8M-8b	円		8	7	4	オリーブ黒5Y2/2										0
1056ピット	8M-8b	楕円	西北西	16	11	6	黒7.5Y2/1										0
1057ピット	8M-8b	楕円		13	8	8	黒5Y2/1					1					1
1058ピット	8M-8b	楕円	北東	13	10	3	オリーブ黒7.5Y2/2					1					1
1059ピット	8M-8b	不整	北北東	26	21	9	灰オリーブ5Y4/2、オリーブ黒 7.5Y3/1粘性強いブロック混じる										0
1060ピット	8M-9b・9a	円		22	22	7	黒7.5Y2/1		1		1						2
1061土坑	8M-9b 他	不整	東西	213	134	27	オリーブ黒7.5Y3/2	5	1		34						40
1062ピット	8M-9b	円		16	13	10	黒7.5Y2/1					1					1
1063ピット	8M-9b	不整	北	23	21	7	オリーブ黒5Y3/1										0
1064ピット	8M-9b	円		18	17	8	オリーブ黒5Y3/1					1					1
1065ピット	8M-9b	円		13	11	10	黒7.5Y2/1、灰オリーブ7.5Y4/2 細砂ブロック混じる	1			1						2
1067土坑	8M-9b	不整	北西	57	53	7	オリーブ黒7.5Y3/1、粗砂混じる	1			5						6
1068ピット	8M-9b	円		14	12	18	黒10Y2/1、オリーブ黒7.5Y3/2 ブロック混じる										0
1069ピット	8M-9b	円		9	9	17	黒5Y2/1										0
1070ピット	8M-9b	隅丸三角	北東	17	15	11	黒7.5Y2/1、灰5Y4/1ブロック混じる										0
1071ピット	8M-9b	円		12	12	12	黒5Y2/1										0
1072ピット	8M-9b	隅丸三角	東西	18	15	11	黒5Y2/1、暗オリーブ5Y4/3細砂 が下層にたまる										0
1073ピット	8M-9b	円		14	14	12	黒2.5Y2/1、木片含む					3					3
1074ピット	8M-9b	円		11	11	7	黒5Y2/1					1					1
1075ピット	8M-9b	円		14	13	31	オリーブ黒5Y3/1、柱痕、黒 5Y2/1木片含む										0
1076ピット	8M-9b	円		14	13	11	黒10Y2/1					2					2
1077ピット	8M-9b	楕円	東西	30	14	10	オリーブ黒7.5Y2/2										0
1078ピット	8M-9b	楕円	北	19	12	11	オリーブ黒7.5Y3/2、炭化物含む	1				8					9
1079ピット	8M-9b	不整円		23	23	8	オリーブ黒5Y3/2					2					2
1080ピット	8M-9b	円		17	17		黒7.5Y2/1										0
1081ピット	8M-9b	円		19	19	16	黒5Y2/1										0
1082ピット	8M-9b	隅丸三角	東西	22	20	25	オリーブ黒7.5Y2/2					2					2
1083ピット	8M-9b	楕円	北	14	10	13	オリーブ黒5Y3/2										0

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計	
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類			
1084ピット	8M-9b	円		18	18		黒5Y2/1、木片含む									0
1085ピット	8M-9b	不整	北	31	24	11	オリーブ黒5Y3/2	1					2		1	4
1086ピット	8M-9b	楕円	北西	22	18	13	オリーブ黒5Y3/2									0
1087ピット	8M-9b	円		19	19		オリーブ黒5Y3/2									0
1088ピット	8M-9b	円		19	16	16	オリーブ黒5Y2/2	1				1				2
1089ピット	8M-9b	円		16	16	17	黒5Y2/1					3				3
1090ピット	8M-9b	円		23	19	5	オリーブ黒5Y3/1									0
1091ピット	8M-9b	円		30	25	11	オリーブ黒7.5Y3/1、20cmの礫混じる	1				4				5
1092ピット	8M-9b	不整円	北西	20	17	8	オリーブ黒7.5Y3/1					1		1		2
1094ピット	8M-9b	円		20	15	27	黒10Y2/1									2
1095ピット	8M-9b	円		17	17	6	黒7.5Y2/1	1								1
1096ピット	8M-9b	楕円	北北東	20	15	7	黒5Y2/1									0
1097ピット	8M-9b	円		18	18	15	黒5Y2/1		1	1		7				9
1098ピット	8M-9b	円		10	8		黒7.5Y2/1									0
1099ピット	8M-9b	円		16	13	10	黒5Y2/1					1				1
1100ピット	8M-9b	円		13	13	13	オリーブ黒5Y2/2									0
1101ピット	8M-9b	円		23	19	42	オリーブ黒7.5Y3/1	1				5				6
1102ピット	8M-9b	不整	東西	66	33	31	図221参照	1	1			5				7
1103ピット	8M-9b	楕円	北	30	25	20	黒5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる									0
1104ピット	8M-9b	円		32	26	19	黒7.5Y2/1					5				5
1105ピット	8M-9b	円		10	9	6	黒7.5Y2/1									0
1106ピット	8M-9b	不整	北	40	27	28	黒7.5Y2/1	1				6	楔1			8
1107ピット	8M-9b	円		15	15	14	黒7.5Y2/1									0
1108ピット	8M-9b	不整方	北西	23	20	9	黒5Y2/1									0
1109ピット	8M-9b	円		17	17	9	黒5Y2/1									0
1110ピット	8M-9b	不整	東北東	19	15	28	オリーブ黒5Y3/2、木片含む					2				2
1111土坑	8M-9b	不整	北北西	119	103	6	?	10	7	4	74		4	焼土塊1、骨1		101
1112ピット	8M-9b	円		15	12	10	オリーブ黒5Y2/2					2				2
1113ピット	8M-9b	楕円	北東	52	31	6	暗オリーブ5Y4/3、枝含む					2				2
1114ピット	8M-9b	瓢	北	62	30	26	図221参照	3	1			6		3		13
1115ピット	8M-9b	円		18	18	23	図221参照	1				1				2
1116ピット	8M-9b	楕円	東北東	18	12	9	黒5Y2/1									0
1117ピット	8M-9b	不整円		18	15	14	オリーブ黒5Y3/2									0
1118ピット	8M-9b	円		28	28	16	黒5Y2/1					2		小礫1		3
1119ピット	8M-9b	楕円	東北東	32	18	8	灰オリーブ5Y4/2、オリーブ黒5Y2/2ブロック混じる									0

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(3)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイト		その他	合計	
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類			
1120ピット	8M-9b	不整	東西	28	22	15	図221参照									0
1121ピット	8M-9b	不整	北	40	33	15	図221参照	1				1				2
1122ピット	8M-9b	不整	北東	28	26	12	黒7.5Y2/1					3				3
1123ピット	8M-9b	隅丸長方	北東	38	30	10	黒7.5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる					1				1
1124ピット	8M-9b	円		11	11	7	黒7.5Y2/1									0
1125ピット	8M-9b	不整円		11	11	14	黒7.5Y2/1									0
1126ピット	8M-9b	不整円		20	17	23	黒5Y2/1									0
1127ピット	8M-9b	円		7	7	17	黒5Y2/1									0
1128ピット	8M-9b	楕円	東西	24	16	11	黒2.5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる							骨2		2
1129ピット	8M-9b	楕円	北北西	22	13	17	黒2.5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる					錐1				1
1130ピット	8M-9b	隅丸方	東北東	37	27	18	黒2.5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる					3				3
1131ピット	8M-9b・10b	不整	北西	25	15	12	黒2.5Y2/1									0
1132ピット	8M-10b	円		23	19	15	黒2.5Y2/1									0
1133ピット	8M-10b	円		29	29	37	オリーブ黒10Y3/1、灰オリーブ5Y5/2細砂混じる	2				12		転用土製円板1、骨1		16
1134ピット	8M-10b	円		21	20	6	オリーブ黒5Y3/1									0
1135ピット	8M-10b	隅丸方	北北東	26	17	21	黒5Y2/1					1				1
1136ピット	8M-10b	円		26	26	1	オリーブ黒7.5Y3/2、暗オリーブ5Y4/3ブロック混じる									0
1137ピット	8M-10b	円		23	20	7	オリーブ黒7.5Y3/1、炭化物含む					2				2
1138ピット	8M-10b	円		27	27		オリーブ黒7.5Y3/2、炭化物含む									0
1139ピット	8M-10b	不整	北西	40	27		オリーブ黒7.5Y3/2、炭化物含む					1				1
1141ピット	8M-10b	楕円	北西	19	12	9	オリーブ黒5Y2/2、炭化物含む		1							1
1142土坑	8M-10b他	不整	北	136	75	15	黒2.5Y2/1	11	1		46			木片2		60
1143ピット	8M-10b	円		21	20	23	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1144ピット	8M-10b	円		8	8		オリーブ黒5Y3/2									0
1145ピット	8M-10b	不整円	北東	21	14	18	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1146ピット	8M-10b	楕円	北	22	17	21	オリーブ黒5Y3/2	1		1	3					5
1147ピット	8M-10b	円		19	18	19	オリーブ黒5Y2/2									0
1148ピット	8M-10b	不整円	北	24	20	33	オリーブ黒5Y2/2									0
1149ピット	8M-10b	円		27		9	黒5Y2/1									0
1150ピット	8M-10b	円		17	17	1	黒5Y2/1									0
1151ピット	8M-10b	不整円	北北東	24	20	12	黒5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる	1					1			2
1152ピット	8M-10b	隅丸方	北北東	24	23	14	黒7.5Y2/1									0

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(4)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計	
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類			
1153ピット	8M-10b	円		19	16	12	図221参照								柱材1	1
1154ピット	8M-10b 他	円		25	22	10	オリーブ黒7.5Y2/2					3				3
1155ピット	8M-10b	不整	北	48	28	5	オリーブ黒5Y3/2									0
1156ピット	8M-10b	楕円	東北東	22	16	6	オリーブ黒5Y3/2									0
1157ピット	8M-10b	楕円	北	17	13	6	黒5Y2/1									0
1158ピット	8M-10b	楕円	東北東	20	15	10	黒5Y2/1									0
1159ピット	8M-10b	円		16	13	6	黒5Y2/1									0
1161ピット	8M-10b	楕円	北北西	15	11	7	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1162ピット	8M-10b	円		9	8	17	黒5Y2/1									0
1163ピット	8M-10b	不整	北	36	29	34	黒5Y2/1、底に木片溜まる									0
1164ピット	8M-10b	楕円	北西	17	11	3	黒7.5Y2/1									0
1165ピット	8M-10b	不整	東西	27	21	22	黒2.5Y2/1									0
1166ピット	8M-10b	不整方	北西	20	19	11	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1167ピット	8M-10b	円		15	13	16	黒7.5Y2/1									0
1168ピット	8M-10b	不整	北西	21	18	9	黒7.5Y2/1、灰オリーブ5Y5/3ブ ロック混じる									0
1169ピット	8M-10b	不整円		16	13	1	黒7.5Y2/1									0
1170ピット	8M-10b	円		30			黒5Y2/1、オリーブ5Y5/4細砂ブ ロック・細礫混じる									0
1171ピット	8M-10b	円		22	18	28	黒7.5Y2/1									0
1172ピット	8M-10b 他	円		30	30	26	オリーブ黒7.5Y2/2					1				1
1173ピット	8M-10b	不整	北西	25	13	11	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1174ピット	8M-10b	不整	北北西	26	14	2	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1175ピット	8M-10b	円		18	18	37	オリーブ黒7.5Y2/2									0
1176ピット	8M-10b	円		17	14	6	黒2.5Y2/1					1				1
1177ピット	8M-10b	不整	東西		21	12	オリーブ黒5Y2/2									0
1178ピット	8M-10b	不整	北北東	20	15	11	オリーブ黒5Y2/2	1	1	1	8					11
1179ピット	8M-10b	円		14	12	16	黒5Y2/1									0
1180ピット	8M-10b	円		15	13	10	黒5Y2/1									0
1181ピット	8M-10b	不整円	北東	17	13	6	黒5Y2/1					1				1
1182ピット	8M-10b	不整円	北西	19	17	6	黒5Y2/1									0
1183ピット	8M-10b	円		20	20	8	黒5Y2/1									0
1184ピット	8M-10b	円		13	13	7	黒5Y2/1									0
1185ピット	8M-10b	楕円	東北東	18	13	5	黒5Y2/1					1				1
1186ピット	8M-10b	円		19	17	34	黒5Y2/1									0
1187ピット	8M-10b	円		20	19	5	オリーブ黒7.5Y3/2									0

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(5)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数						合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器		サヌカイ		その他				
								I様式	I・II様式	II様式	不詳		成品		剥片類	
1188ピット	8M-10b	円		18	18	11	オリーブ黒7.5Y3/2									0
1189ピット	8M-10b	不整	北北西	32	28	4	黒5Y2/1									0
1190ピット	8M-10b	楕円	北東	15	13	8	黒5Y2/1、にぶい黄2.5Y6/4植物質ブロック混じる									0
1191ピット	8M-10b	円		18	17	27	黒5Y2/1				4					4
1192ピット	8M-10b	楕円	東西	13	10	9	黒5Y2/1									0
1193ピット	8M-10b	円		21	18	3	オリーブ黒7.5Y3/2									0
1194土坑	8M-10b	不整	北東	125	41	15	黒5Y2/1、灰オリーブ5Y5/3ブロック混じる、炭化物含む	2			11					13
1195土坑	8M-10b	不整	北東		125	12	黒5Y2/1									0
1196ピット	8M-10c	円		24		14	黒7.5Y2/1				1					1
1197土坑	8M-10c	不整	北北西	111	110	5	黒7.5Y2/1	13	2		22					37
1198ピット	8M-10c	円		26	22	18	黒5Y2/1				3			骨3		6
1199ピット	8M-10c	円		30	24	28	黒5Y2/1、灰10Y4/1ブロック含む	3	1		3					7
1200ピット	8M-10c 他	隅丸方	東西	14	13	10	黒5Y2/1									0
1201ピット	8M-10c	円		16	15	14	黒5Y2/1									0
1202ピット	8M-10c	円		21	17	21	黒5Y2/1									0
1203ピット	8M-10c	楕円	北	48	19	17	黒2.5Y2/1	3	1		5					9
1204ピット	8M-10c	円		25	20	17	黒7.5Y2/1									0
1205ピット	8M-10c	隅丸三	北東	31	28	19	黒7.5Y2/1	1			1			加工木片1		3
1206ピット	8M-10c	円		14	12	17	黒5Y2/1									0
1207ピット	8M-10c	円		12	12	9	黒7.5Y2/1									0
1208ピット	8M-10c	円		13	13	11	黒7.5Y2/1									0
1209ピット	8M-10c	隅丸方	東西	16	15	16	黒7.5Y2/1									0
1210ピット	8M-10c	楕円	東西	12	8	16	黒7.5Y2/1、にぶい黄2/5Y6/4植物質ブロック混じる									0
1211ピット	8M-10c 他	円		11	10	12	黒7.5Y2/1	1								1
1212ピット	8M-10c	隅丸三	東西	18	15	21	黒7.5Y2/1				1					1
1213ピット	8M-10c	不整円		15	15	10	黒7.5Y2/1									0
1214ピット	8M-10c	円		12	12	13	黒7.5Y2/1									0
1215ピット	8M-10c	不整	北西	18	12	19	黒7.5Y2/1									0
1216土坑	8M-10c	不整	北西	271	134	7	黒5Y2/1、オリーブ黒5Y3/1ブロック混じる	2			3			転用紡錘車1		6
1217ピット	8M-10c	円		12	12	6	黒5Y2/1									0
1218ピット	8M-10c	楕円	北東	24	15	3	黒5Y2/1									0
1219ピット	8M-10c	円		16	16	10	黒7.5Y2/1									0
1220ピット	8M-10c	不整	東西	14	10	10	黒7.5Y2/1									0

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(6)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数									
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計		
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類				
1219ピット	8M-10c	円		16	16	10	黒7.5Y2/1										0
1220ピット	8M-10c	不整	東西	14	10	10	黒7.5Y2/1										0
1221ピット	8M-10c	不整	北	17	15	12	黒7.5Y2/1					1					1
1222ピット	8M-10c	楕円	北西	9	7	4	黒7.5Y2/1										0
1223ピット	8M-10c	円		11	10	4	黒7.5Y2/1										0
1224ピット	8M-10c	円		16	14	10	オリーブ黒7.5Y2/2		1		1						2
1226ピット	8M-10c	円		14	14	6	黒5Y2/1					2					2
1227ピット	8M-10c	不整	北西	16	11	10	黒5Y2/1										0
1228ピット	8M-10c	円		18	18	9	黒5Y2/1										0
1229ピット	8M-10c	不整	東北東	20	15	15	黒5Y2/1										0
1230ピット	8M-10c	楕円	北北東	14	10	24	黒7.5Y2/1										0
1231ピット	8M-10c	不整円	北西	12	10	16	黒5Y2/1										0
1232ピット	9M-1b	円		14	14	5	オリーブ黒7.5Y2/2										0
1233ピット	9M-1b	楕円	北東	23	16	4	黒5Y2/1										0
1234ピット	9M-1b	円		15	15	7	黒5Y2/1										0
1235ピット	9M-1b	楕円	東西	18	14	5	黒5Y2/1										0
1236ピット	9M-1b	円		17	14	12	黒5Y2/1					1					1
1237ピット	9M-1b	楕円	北西	16	12	?	黒5Y2/1										0
1238ピット	9M-1b	不整	北東	17	11	12	図222参照					2					2
1239ピット	9M-1b	円		10	10	9	黒5Y2/1						1				1
1240ピット	9M-1b	円		24	20	10	黒5Y2/1										0
1241ピット	9M-1b	楕円	北北東	24	13	6	黒5Y2/1	1									1
1242ピット	9M-1b	楕円	北東	15	11	15	黒5Y2/1					2					2
1243ピット	9M-1b	円		17	17	7	黒5Y2/1、炭化物含む										0
1244ピット	9M-1b	円		14	14	8	黒5Y2/1					1					1
1245ピット	9M-1b・1c	円		16	15	5	黒5Y2/1										0
1246ピット	9M-1c	円		15	12	3	黒5Y2/1、オリーブ5Y5/4ブロック混じる										0
1247ピット	9M-1c	円		10	10	10	図222参照										0
1248ピット	9M-1c	円		17	15	5	黒5Y2/1										0
1249ピット	9M-1c	円		15	15	8	黒5Y2/1										0
1250ピット	9M-1c	隅丸方	東北東	16	10	8	黒5Y2/1										0
1251ピット	9M-1c	楕円	北	17	13	17	黒10Y2/1										0
1252ピット	9M-1c	円		21	21	12	黒5Y2/1										0
1253ピット	9M-1c	不整円		14	14	7	黒5Y2/1										0
1254ピット	9M-1c	楕円	北	15	10	6	黒5Y2/1										0



表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(7)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数									
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計		
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類				
1255ピット	9M-1c	円		16	13	5	黒5Y2/1										0
1256ピット	9M-1c	円		15	15	6	黒7.5Y2/1、炭化物含む										0
1257ピット	9M-1c	円		18	17	9	黒7.5Y2/1、炭化物含む										0
1258ピット	9M-1c	円		18	17	8	黒7.5Y2/1、灰7.5Y4/1ブロック混じる、炭化物含む										0
1259ピット	9M-1c	円		10	10	8	黒5Y2/1										0
1260ピット	9M-1c	円		17	17	7	黒5Y2/1										0
1261ピット	9M-1c	楕円	西北西	11	8	4	黒5Y2/1										0
1262ピット	9M-1c	楕円	西北西	19	13	6	黒5Y2/1										0
1263ピット	9M-1c	円		8	7	15	黒5Y2/1										0
1264ピット	9M-1c	楕円	北西	22	20	12	図222参照								木片1		1
1265ピット	9M-1c	円		25	20	10	黒5Y2/1					1					1
1266ピット	9M-1c	不整円	北西	23	17	16	黒5Y2/1										0
1267ピット	9M-1c	円		16	15	11	黒5Y2/1										0
1268ピット	9M-1c	円		16	16	8	黒7.5Y2/1										0
1269ピット	9M-1c	不整円	北東	20	17	4	黒5Y2/1										0
1270ピット	9M-1c	円		12	12	7	黒5Y2/1										0
1271ピット	9M-1c	円		14	13	6	黒5Y2/1										0
1272ピット	9M-1c	円		17	15	17	黒5Y2/1										0
1273ピット	9M-1c	不整円		18	17	14	黒7.5Y2/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる										0
1274土坑	9M-1c	不整	北北東		131	19	図217参照	5	3		33				骨1		42
1275ピット	9M-1c	円		15	15	16	黒10Y2/1										0
1276ピット	9M-1c	円		9	8	18	図222参照								木片1		1
1277土坑	9M-1c	楕円	東西	80	62	26	図222参照				7				砥石1、木製品1		9
1278ピット	9M-1c	円		19	19	14	オリーブ黒10Y3/2				1						1
1279ピット	9M-1a	円		26		6	黒5Y2/1、細礫混じる、炭化物含む										0
1280ピット	9M-1a	円	北北東	20	17	21	黒5Y2/1				1						1
1281ピット	9M-1a	楕円	東西	17	11	17	黒5Y2/1										0
1282土坑	9M-1a	不整	東西	310	148	51	黒7.5Y2/1、黄灰2.5Y4/1粘性強ブロック混じる	21	8	9	188	錐1	5	転用土製円板1、骨3			236
1283ピット	9M-1a	円		18	18	31	オリーブ黒7.5Y3/1										0
1284ピット	9M-1a	円		20	16	33	オリーブ黒7.5Y3/1、灰オリーブ5Y4/2ブロック混じる				1				骨1		2
1285ピット	9M-1a	楕円	北	22	18	27	オリーブ黒7.5Y3/1				3						3
1286ピット	9M-1a	円		22	19	24	①黒7.5Y2/1 ②オリーブ黒5Y3/2、黒7.5Y2/1ブロック混じる		1								1
1287ピット	9M-1a	円		16	15	10	黒5Y2/1、炭化物含む										0

表15 03-1-2区 第10-2面土坑・ピット一覧(8)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイト		その他			
								I様式	I~II様式	II様式	不詳	成品	剥片類				
1288ピット	9M-1a	円		17	15	3	オリーブ黒5Y3/2										0
1289ピット	9M-2a	円		18		7	黒7.5Y2/1					2					2
1290ピット	9M-2a	円		32	25	7	オリーブ黒7.5Y2/2		1		2						3
1291土坑	9M-2a	不整	北北東	350	110	24	黒7.5Y2/1、オリーブ黒7.5Y3/2 ブロック混じる、炭化物含む	5	11	6	60	削1		石庖丁1、中 礫1			85
1292ピット	9M-3b	円		18	18	18	①オリーブ黒7.5Y3/2、黒 7.5Y2/1ブロック混じる ②暗オリーブ灰2.5GY3/1					4					4
1298ピット	8M-10b	楕円	北	18	14	14	黒5Y2/1				1						1
1299ピット	8M-10b	円		20	20	9	黒5Y2/1、灰5Y4/1ブロック混じる				1						1
1300ピット	8M-10b	円		22	19	13	黒5Y2/1、灰5Y4/1ブロック混じる				2						2
1301ピット	8M-10b	円		13	13	9	黒5Y2/1										0
1302土坑	8M-10b	不整	北北東		52	11	黒7.5Y2/1、灰7.5Y4/1ブロック 混じる										0
1303ピット	8M-10b	円		12	11	8	黒5Y2/1				1						1
1304ピット	8M-10b 他	円		22	20									柱材1			1
1305ピット	9M-1b	円		33		16	黒2.5Y2/1、灰5Y4/1ブロック混じる	3	2		4			骨1			10
1306ピット	8M-10b 他	円		17	16	12	黒5Y2/1										0
1307ピット	9M-1b	円		20	16	19	黒5Y2/1				3						3
1308ピット	9M-1c	円		20	18	7	黒5Y2/1		1		1						2
1309ピット	8M-10c 他	不整円	東西	30	24	13	黒5Y2/1				2						2
1431ピット	8M-10b	不整円	東西	21	18	11	黒5Y2/1	1			2						3

遺物は、弥生土器7片、砥石1点、木製品1点、計9点である。

図220-20957は玄武岩製の砥石。砥面は不明瞭である。

1282土坑(図219・写真図版58) 調査区中央やや南側に位置し、北側を第10面445溝に切られている。現状では東西に長い不整形で、東西310cm、南北148cm以上、深さ51cm。埋土は、黒7.5Y2/1シルトに黄灰2.5Y4/1粘性の強いシルトのブロックが混じる。出土遺物は、弥生土器226片(うちI様式21片、I~II様式8片、II様式9片)、転用土製円板1点、石錐1点、サヌカイト剥片4点、サヌカイト原礫1点、計233点とイノシシ・大型哺乳類の骨片である。

図220-20958は壺の肩部。分厚い体部には沈線6条をもち、I-3~4様式に比定される。外面には煤が付着し、一部断面におよぶ。頸部を打ち欠いたものか。

20959はサヌカイト製の石錐。頂部に原礫面をもち、調整は側縁におよぶ。

1291土坑 調査区南西部に位置し、1282土坑と同じく北側を第10面445溝に切られている。北北東-南南西に長い溝状の土坑で、検出長約350cm、短径110cm、深さ24cm。埋土は、黒7.5Y2/1シルトに黒7.5Y3/2シルトのブロックや炭化物が混じる。出土遺物は、弥生土器82片(うちI様式5片、I~II様

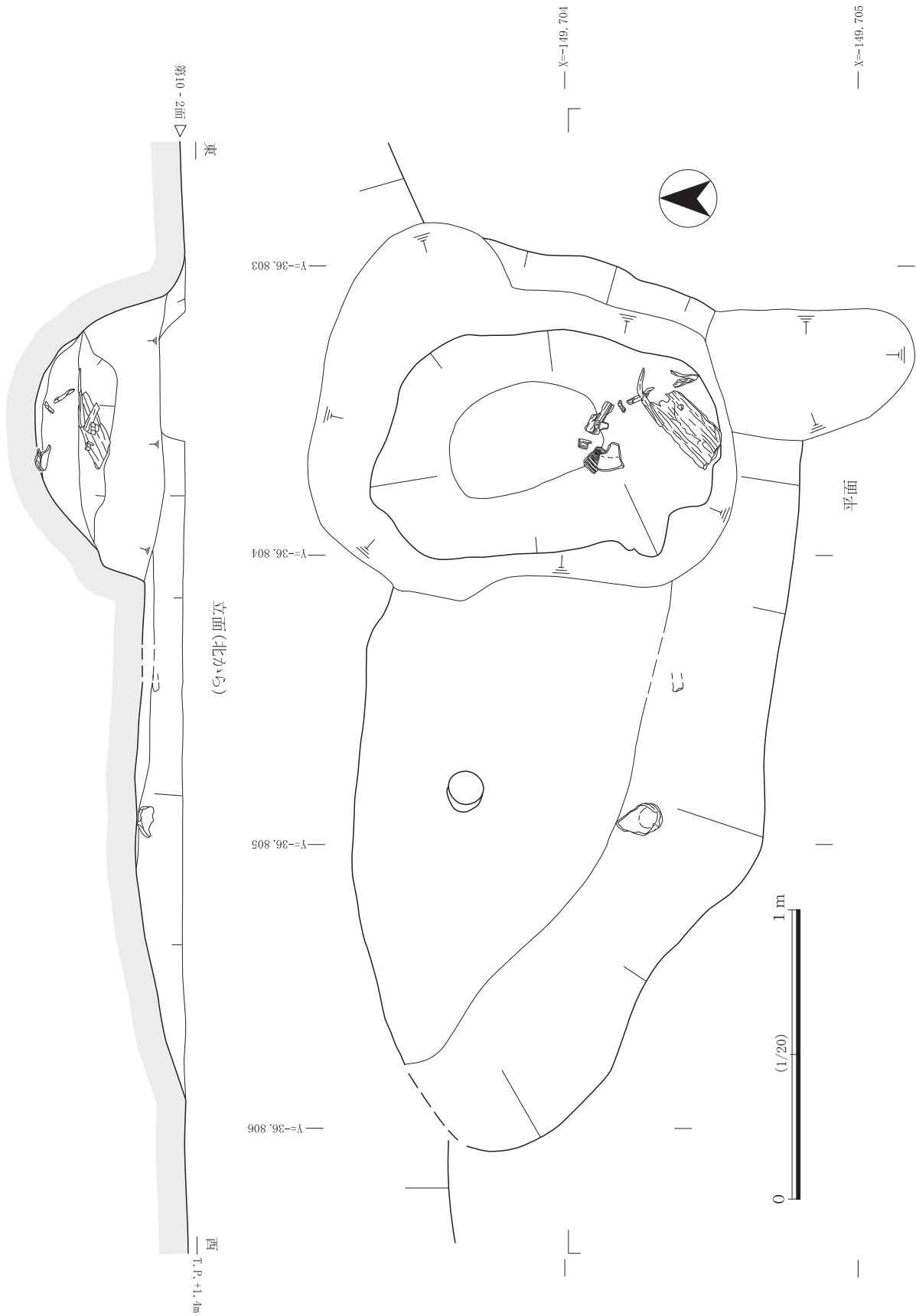
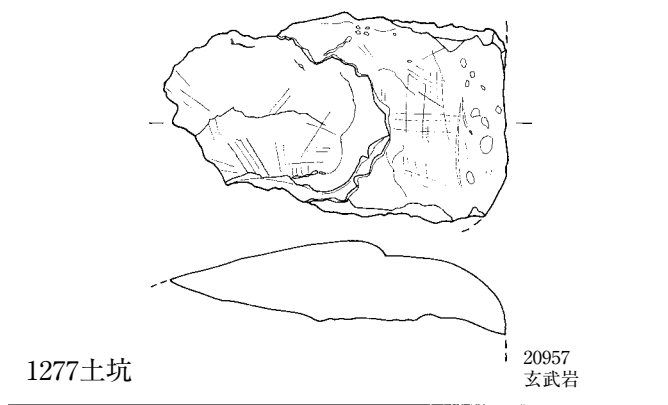
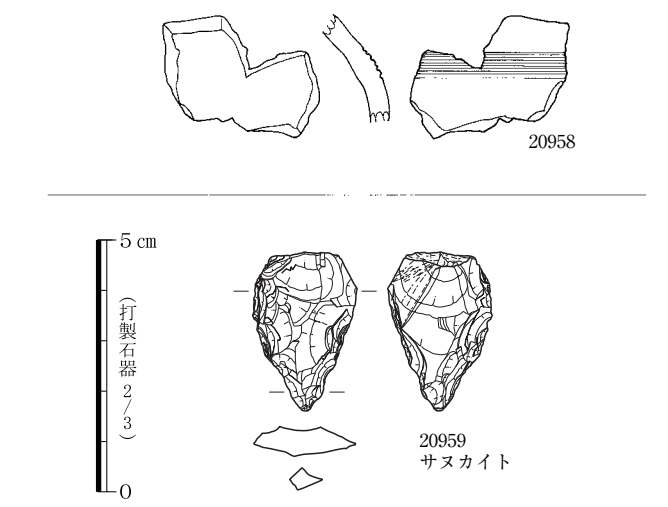


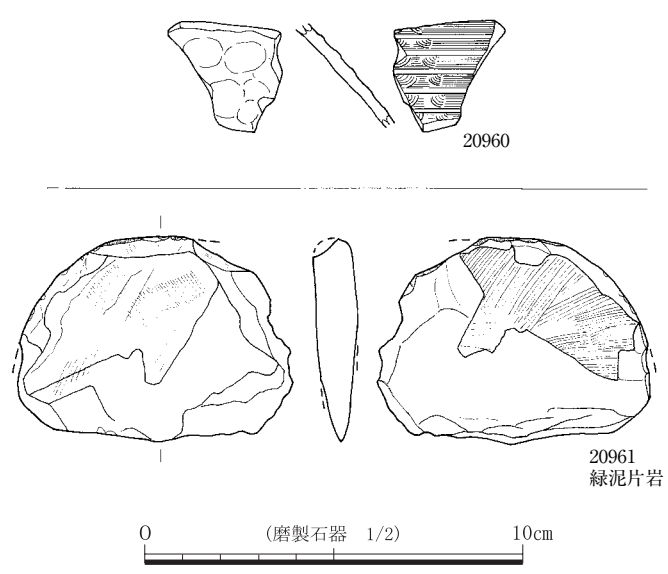
図219 03-1-2区第10-2面1282土坑



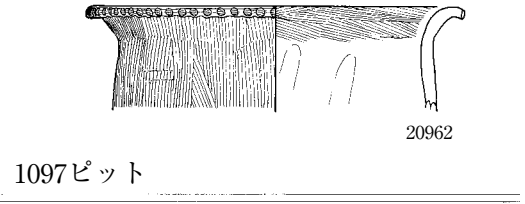
1277土坑 20957 玄武岩 20958



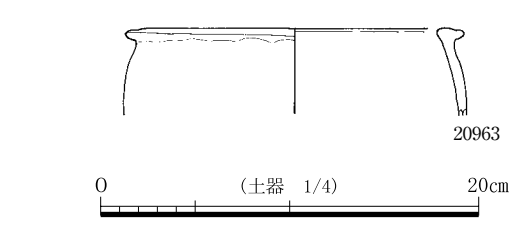
1282土坑 20959 サヌカイト



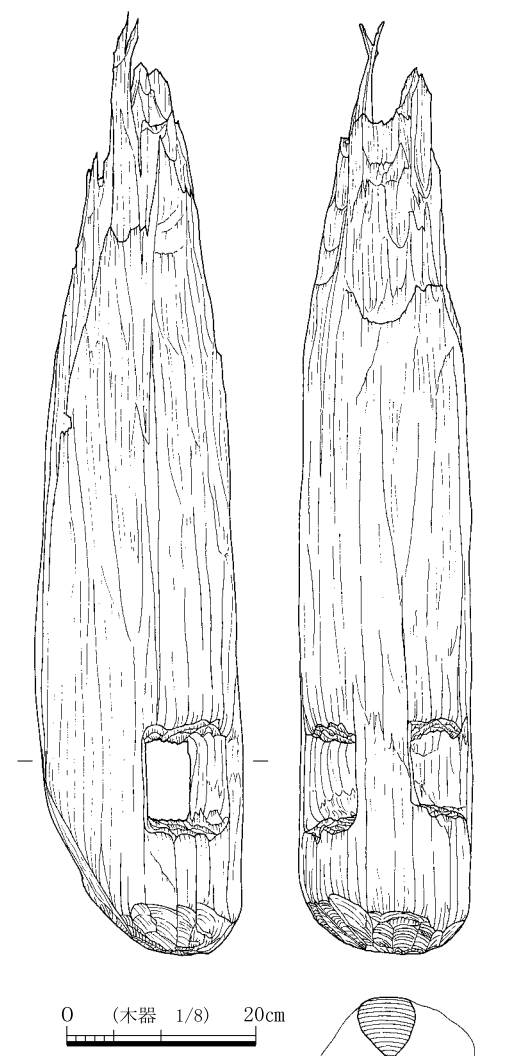
1291土坑 20961 緑泥片岩 20960



1097ピット 20962



1130ピット 20963



1304ピット 20964 スギ

図220 03 - 1 - 2区 第10 - 2面1277・1282・1291土坑、1097・1130・1304ピット出土遺物

式11片、Ⅱ様式6片)、石庖丁1点、削器1点、中礫1個、計85点である。

図220 - 20960は無頸壺の破片。クシ描き直線文と扇形文による擬似流水文を飾る。前述したように第10面661ピットの20893(図204)と接合している。Ⅱ様式。

20961は緑泥片岩製の石庖丁片。背部以外を打ち欠いており、円形に加工しようとしたものか。残存長7.16cm、短軸5.45cm、厚み1.1cm、重さ64.2g。

ピットを236個調査した。遺物出土のピットと埋土が特徴的なピットを取り上げる。以上の他の土坑と個々のピットは表15を参照されたい。

1097ピット 調査区南東部、1093溝の南に位置する。平面円形で、直径18cm、深さ15cm。埋土は黒5Y2/1シルト。弥生土器9片(うちⅠ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式1片)出土した。

図220 - 20962は甕。口縁部は外へ広がり、端部に刻み目を入れる。Ⅱ様式。

1102ピット(図221) 1097ピットの南西1.0mに位置する。平面不整形で東西に長い。長径66cm、短径33cm、深さ31cm。東側の底が階段状に浅くなっている。埋土は黒5Y2/1シルト。弥生土器7片(うちⅠ様式1片、Ⅰ～Ⅱ様式1片)出土。

1114ピット(図221) 1102ピットの北西1.3mに位置する。平面瓢形で、弁別できなかったが本来は2個のピットが切りあったものだろう。現状で、南北を主軸し、長径62cm、短径30cm、深さは北側が26cm、南側が12cm。埋土は黒褐2.5Y3/2シルト。出土遺物は、弥生土器10片(うちⅠ様式3片、Ⅰ～Ⅱ様式1片)、サヌカイト剥片3点。

1115ピット(図221) 1114ピットのすぐ東にある。平面円形で、直径18cm、深さ23cm。埋土は、オリーブ黒色シルトを基本とするが、上下で若干異なる。弥生土器2片(うちⅠ様式1片)出土。

1120ピット(図221) 1114ピットの南1.4mに位置する。平面は三角に近い不整形で、東西に長い。長径28cm、短径22cm、深さ15cm。埋土は上下2層に分れる。出土遺物はない。

1121ピット(図221) 1120ピットの南西0.8mに位置する。平面不整形で、南北に長い。長径40cm、短径33cm、深さ15cm。北部は狭くて深く、南部は広くて浅い。埋土は黒5Y2/1シルト。弥生土器2片(うちⅠ様式1片)のみ出土。

1130ピット 調査区南東部の矢板近く、1121ピットの南西0.6mに位置する。平面隅丸長方形で、東北東 - 西南西を主軸とする。長径37cm、短径27cm、深さ18cm。埋土は、黒2.5Y2/1シルトに灰オリーブ5Y4/2シルトのブロックが混じる。弥生土器3片出土。

図220 - 20963は瀬戸内系の甕。体部はやや内湾し、口縁下のやや下がったところに貼り付け突帯がめぐる。Ⅱ様式。

1153ピット(図221) 1130ピットの西1.1mに位置する。平面円形で、直径16～19cm、深さ12cm。中央に直径9cmの柱痕が残る。埋土は黒7.5Y2/1シルト。出土遺物は柱材のみ。

1238ピット(図222) 調査区南部、第10面920土坑の攪乱のすぐ南東にある。平面そら豆状の不整形で、北東 - 南西に長い。長径17cm、短径11cm、深さ12cm。埋土は3層に分れる。弥生土器2片出土。

1247ピット(図222) 1238ピットの南2.7mに位置する。平面円形で、直径10cm、深さも10cm。埋土は2層に分れる。出土遺物はない。

1264ピット(図222) 調査区南部の矢板際、1247ピットの南西1.6mに位置する。平面楕円形で、北西 - 南東に長い。長径22cm、短径20cm、深さ12cm。埋土は、基本的に黒5Y2/1シルトだが、中心部分のピット底にはホオノキの木片が残り、図222の「1層」が柱痕と推定できる。出土遺物は木片のみ。

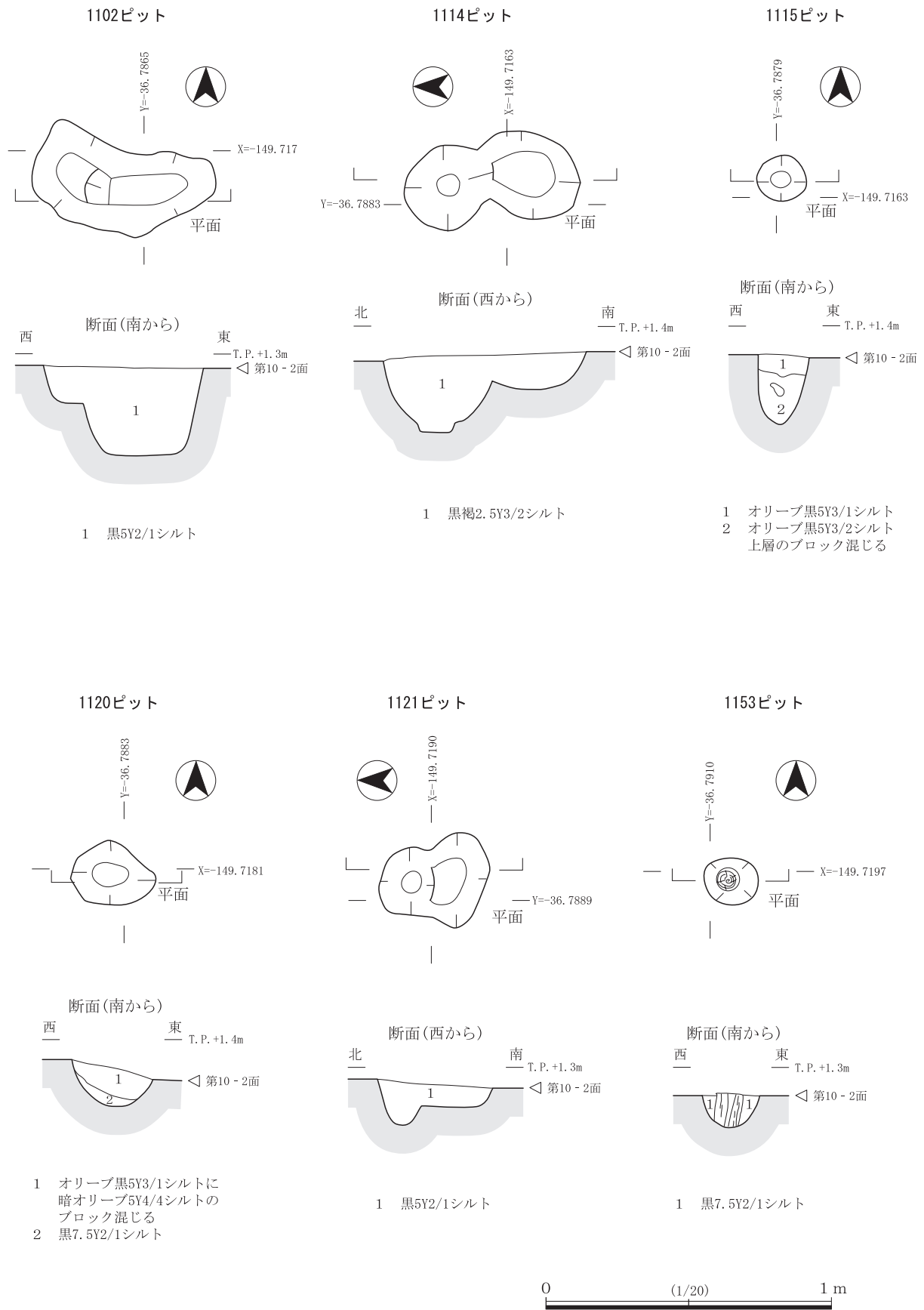


図221 03-1-2区 第10-2面1102・1114・1115・1120・1121・1153ピット

第5章 03-1-2区の調査成果

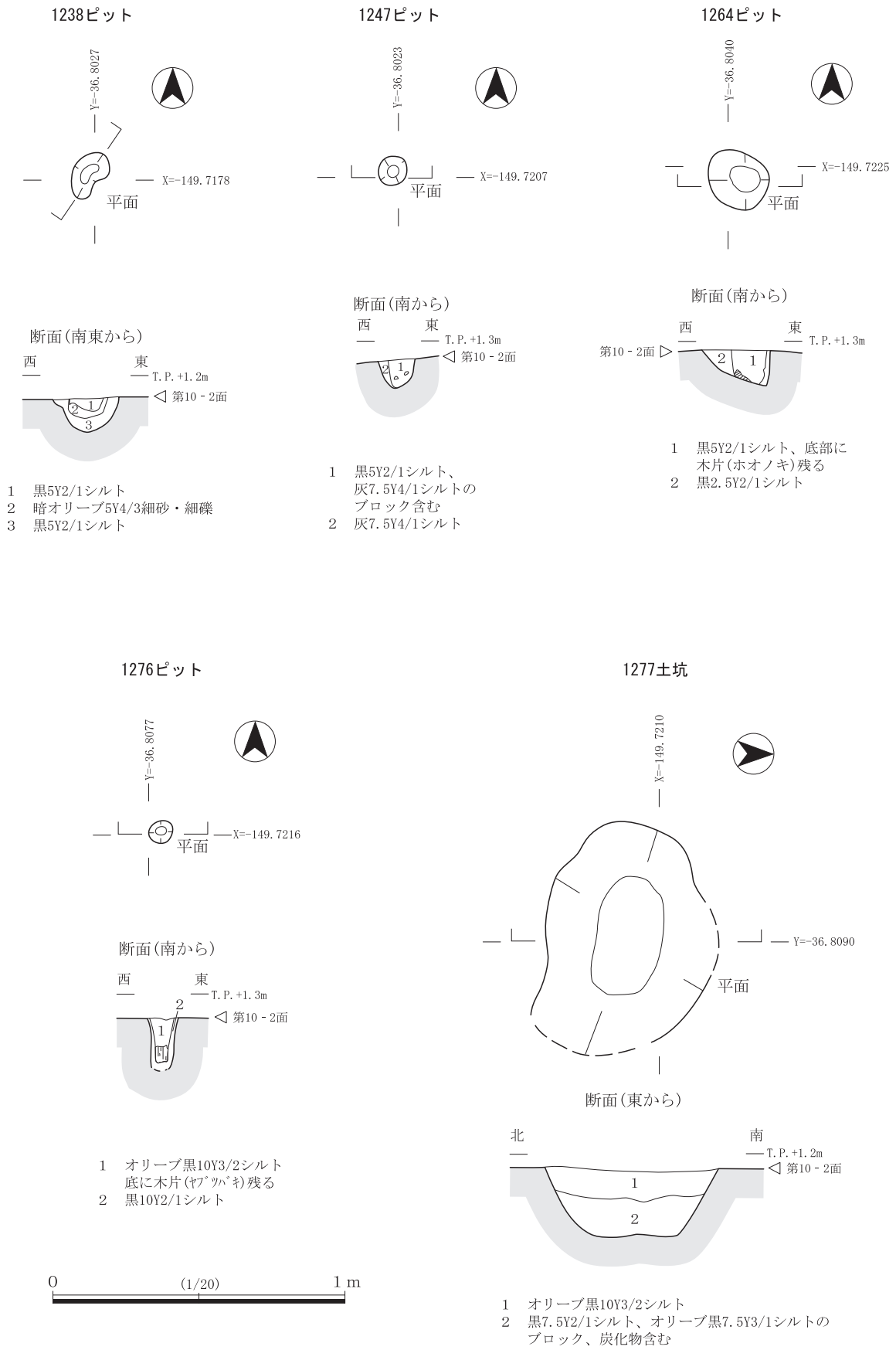


図222 03-1-2区 第10-2面1238・1247・1264・1276ピット、1277土坑

1276ピット（図222） 調査区南部の西側、1274土坑の西辺に接している。平面円形で、直径8～9cm、深さ18cm。中央のオリーブ黒10Y3/2シルト層の下部にヤブツバキの木片が残り、1264ピットと同様に柱痕と考えられる。出土遺物はこの木片のみ。

1304ピット 南辺側溝除去中に第10 - 2面で検出した。平面円形で、直径20～22cm。この内径ほぼ一杯に柱痕が残っていた。

図220 - 20964（写真図版110）は残っていた柱。直径20cm前後の心持ち材で、上方が腐朽しても残存長99.1cmを測る長大なもの。木芯の位置から、原木はより径の大きなものであったと推定される。先端は片側に偏って加工され、孔も材をほぼ半裁する位置で貫通する。孔は約8.5×10cmの方形孔。スギを用いる。

#### (25) 03 - 1 - 2区第10 - 2層の遺物（図223～225・写真図版110）

調査区北半では、第10面から第11面までの間を第10層として掘り下げ、その過程で1016木棺と1034～1037溝を検出したことは既述。したがって、基本的に第10 - 2層として登録した遺物はないが、例外として1016木棺周辺出土の甕体部1片を第10 - 2層の遺物として取り上げた。

調査区南半では第10 - 2面として調査した範囲の下層を第10 - 2層とする。第10 - 2層は、上面の溝により大きく3つの部分に分けることができる。

ひとつは、調査区西部、第10面442高まりの下層部分である。この部分から、弥生土器229片（うちⅠ様式29片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式1片）、転用土製円板1点、石棒1点、計231点出土した。

つぎに、調査区中央部やや南側、第10面の446高まりおよび466高まりの下層部分である。この部分から、弥生土器2845片（うちⅠ様式390片、Ⅰ～Ⅱ様式124片、Ⅱ様式9片）、転用土製円板4点、石庖丁2点、大型蛤刃形石斧1点、磨石2点、砥石2点、叩き石2点、不明磨製石器1点、打製石剣1点、石錐1点、削器9点、石核4点、サヌカイト剥片66点、サヌカイト原礫1点、小礫1個、木片5点、マクワウリの仲間の種子1点、計2948点とイノシシ・大型哺乳類・哺乳類の骨片が出土した。

最後に、調査区南部、第6面の252大溝や第9面の1382溝よりも南の部分である。この部分からの出土遺物は、弥生土器841片（うちⅠ様式145片、Ⅰ～Ⅱ様式41片、Ⅱ様式1片）、叩き石1点、削器1点、磨石1点、サヌカイト剥片9点、流紋岩原礫1点、木片4点、トチの果皮1点、計859点とシカ・イノシシの骨片である。

図223・224は調査区中央部やや南側からの出土遺物である。

図223 - 20965～20972は壺。貼り付け突帯や沈線の多条化を捉えるとⅠ - 4様式の様相が強い。20966は口縁端面に三角列点文が2段にめぐり、20967は口縁の下端に断面三角形突帯を貼り付け、その境目に沈線がひかれ、さらに突帯下端に刻み目がめぐり、頸部の突帯には布目圧痕による刻み目が施される。

20968（写真図版110）は壺の頸部。ヘラ描き沈線を横位にひき、刻み目を施すことによって格子状の文様帯を作る。体部側にも同様の文様を飾ったものと考えられ、文様帯間には縦方向の沈線2条と刻み目によって、縦位の文様を施している。チャートを含む胎土からは和泉地域の土器の可能性がある。

20969の体部も白色系統の胎土をもつ。20971は幅広で低い削り出し突帯上に沈線3条を施す。さらにその下には貼り付け突帯の剥離痕が認められる。20972は削り出し突帯に沈線1条が施され、Ⅰ - 2様式と古い様相をもつ。20973～20975はⅠ - 3～4様式の甕。20975は頸部に貼り付け突帯をもつ。

図224 - 20976・20977は甕蓋。外面は煤が付着する。20976は穿孔が1つ。20978～20980は壺の蓋。



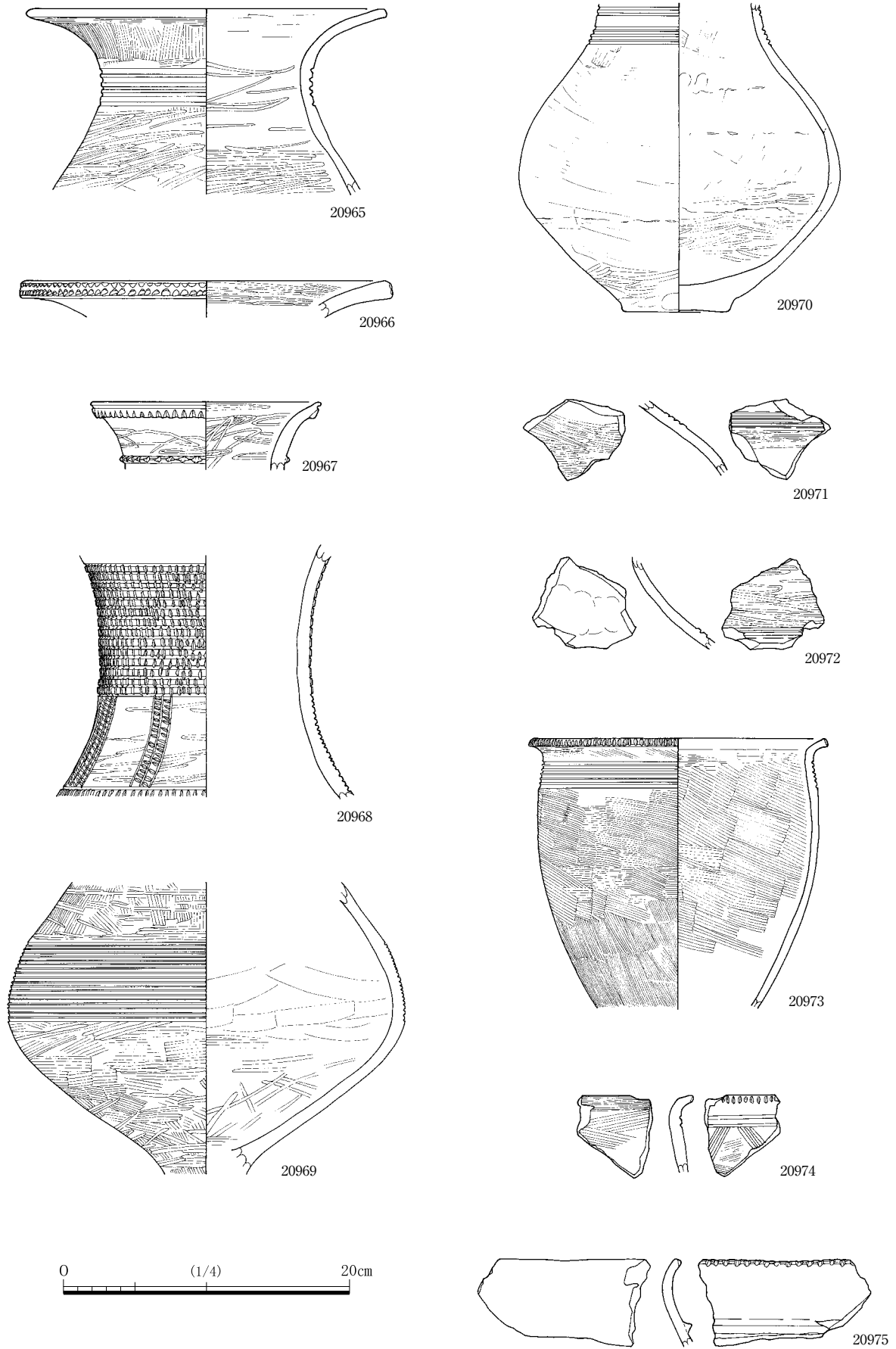


図223 03-1-2区 第10-2層出土遺物(1)

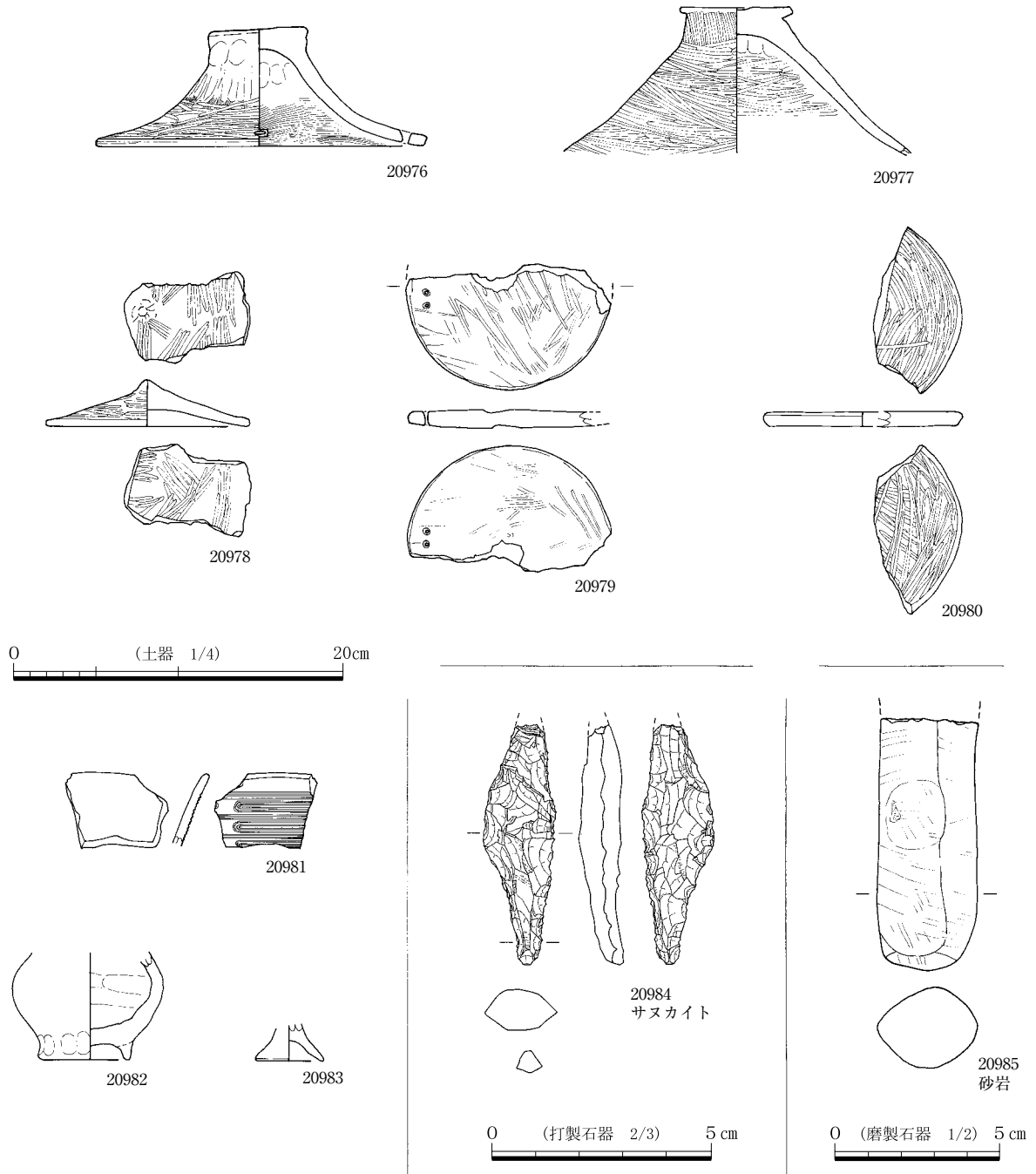


図224 03-1-2区 第10-2層出土遺物(2)

20979は中央に両面から抉られた痕があり、裏面には円形の刺突痕もある。穿孔途中で破損したものか。

20981は細頸壺であろう。口縁部は外傾して、ヘラ描き沈線による流水文を頸部に描く。I様式末か。20982は小形壺の体部。底部は指でつまみ出されて高台状となる。I様式か。20983は小形の土器であろう。高台部分のみが残ったもので時期不詳。

20984はサヌカイト製の石錐。錐部以外も調整して形態を整える。錐部は稜が摩滅してまろくなる。20985は石棒か。砂岩が円柱状に研磨されるが、先端部は敲打痕があり、やや荒れる。

図225は調査区南部からの出土遺物である。

図225-20986は鉢。拡張した口縁部には波状文がめぐる。Ⅲ-1様式(Ⅲ-a段階)。前述したよう

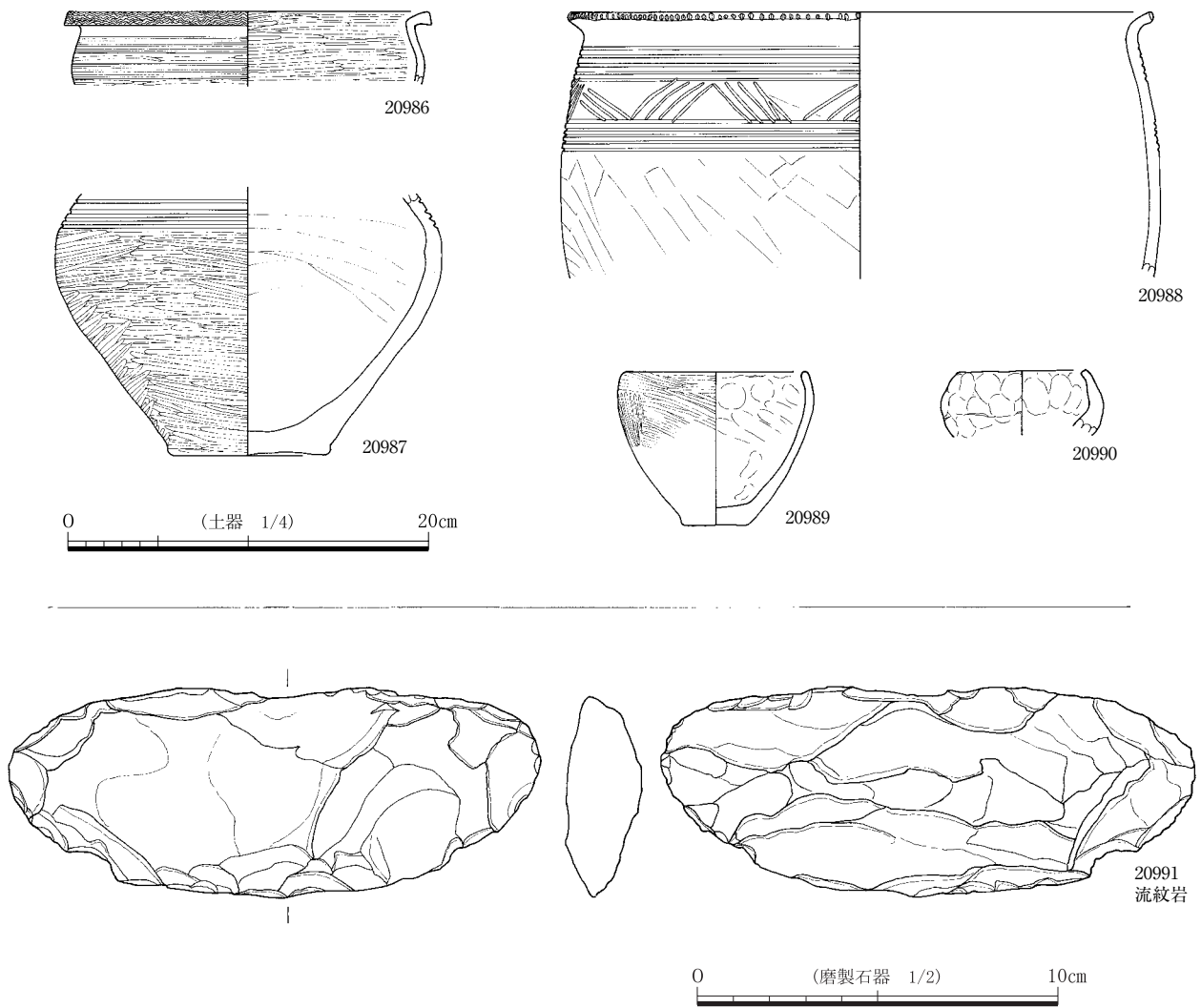


図225 03-1-2区 第10-2層出土遺物(3)

に第10面543溝出土の20851と同一個体である。

20987は壺の体部。ヘラ描き沈線4条を胴部上半に残して破損する。I-4様式。20988は甕。第10面845ピットの20897と接合したもの。20989は鉢。体部は内湾し、口縁端部はまるくおさめる。I様式か。20990は小形土器。成形・調整時の指痕が顕著に残る。

20991は流紋岩を長楕円形に整形したもの。石庖丁の未成品と考えられる。長軸14.38cm、短軸5.64cm、厚み2.15cm、重さ184.0g。

(26) 03-1-2区第11面の遺構と遺物(図226~239 写真図版59~63・110・111)

第10層の盛土層を除去した面であり、オリーブ黒ないし灰色シルトを主体とする自然堆積層の上面でもある。

第10面およびその上面から掘り込まれた溝などによる攪乱が各所にみられるが、第11面としての高さはT.P.+0.7~1.1mで調査区南東部が高い傾向にある。石列1か所、土坑10基、ピット50個、溝状落ち込み3条、落ち込み3か所、計67か所(遺構番号1017・1018・1038~1044・1320~1376・1506)を検出した。

第11面上で石を検出した。いずれも調査区東部に位置する。

1506石列(図226) 調査区東部の第11面上にある。3個の石がほぼ東西に並ぶ。東の石は長さ25cm、幅23cm、高さ16cm、重さ11.5kgの斑レイ岩。中央の石は長さ47cm、幅23cm、高さ17cm、重さ22.7kgの花崗岩。西の石も花崗岩で、長さ41cm、幅32cm、高さ7cm、重さ15.2kg。

この他、1506石列の南西約5.5mの第10層中から長さ43cm、幅21cm、高さ11cm、重さ18.2kgの斑レイ岩が、1506石列の東北東約5mの第11面から長さ32cm、幅15cm、高さ10cm、重さ6.9kgの斑レイ岩が、調査区南西部、1324土坑の西約1.5mの第11面上から長さ36cm、幅27cm、高さ14cm、重さ21.1kgの花崗岩などが出土している。

1018木棺(図228・写真図版61) 調査区北東部で検出した。検出時すでに小口板しか残っていなかったため、その高さで周辺を精査したが、掘りかたを認識できなかった。徐々に掘り下げ、小口穴を確認した。小口板の外側間で65cm、主軸方位は北70°東。東北東の小口板は、図228では2枚に見えるが、ヒノキの一枚板が割れたもの。西南西の小口板の樹種は不明。

土坑を10基調査した。

1017土坑(図229 写真図版56・61) 1018木棺の東北東約4.5m、第10-2面で検出した1016木棺の北西0.6mに位置する。平面楕円形で、長径146cm、短径66cm、検出面からの深さ13cmを測る。埋土は、黒

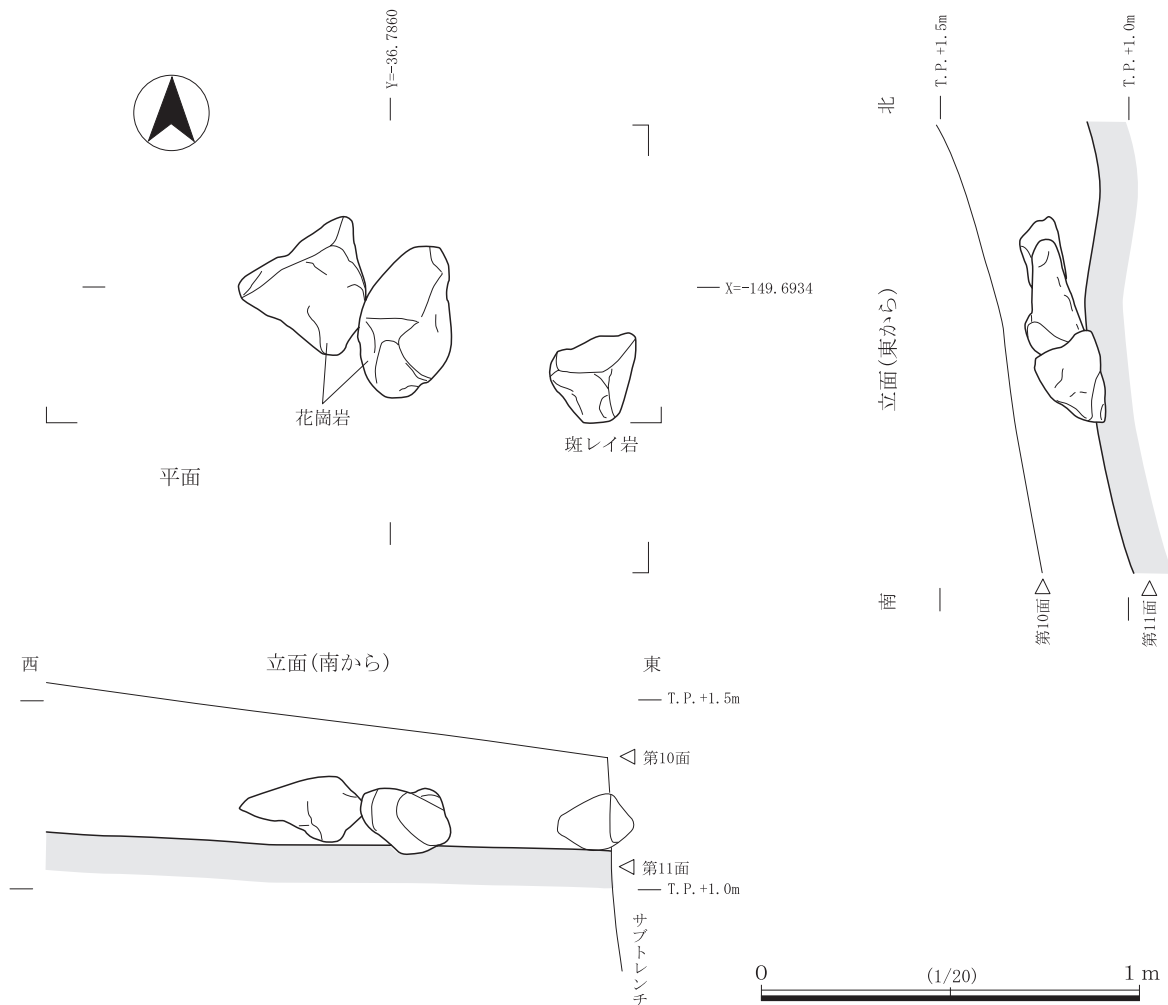


図226 03-1-2区 第11面1506石列



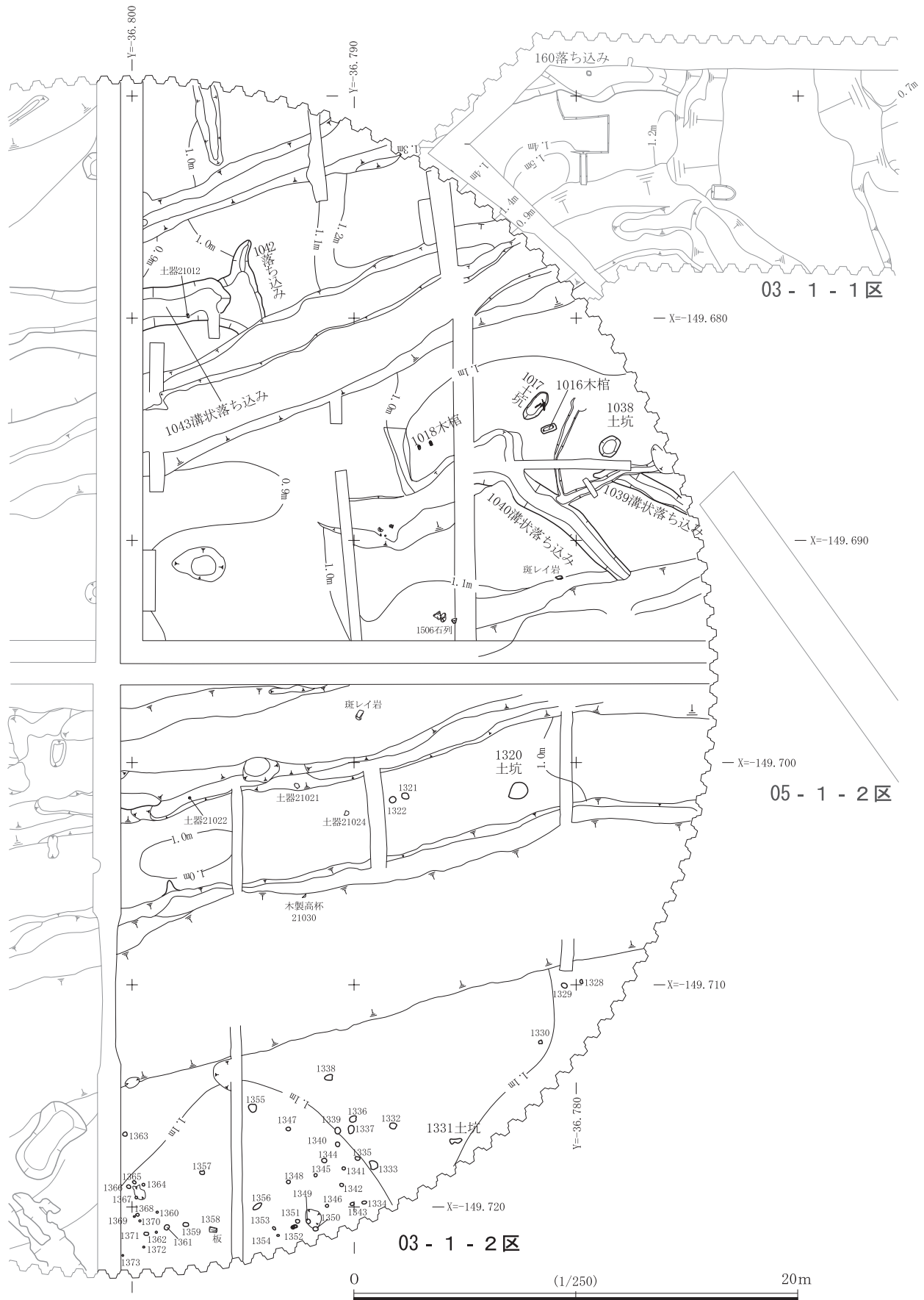


図227 03-1-2区 第11面

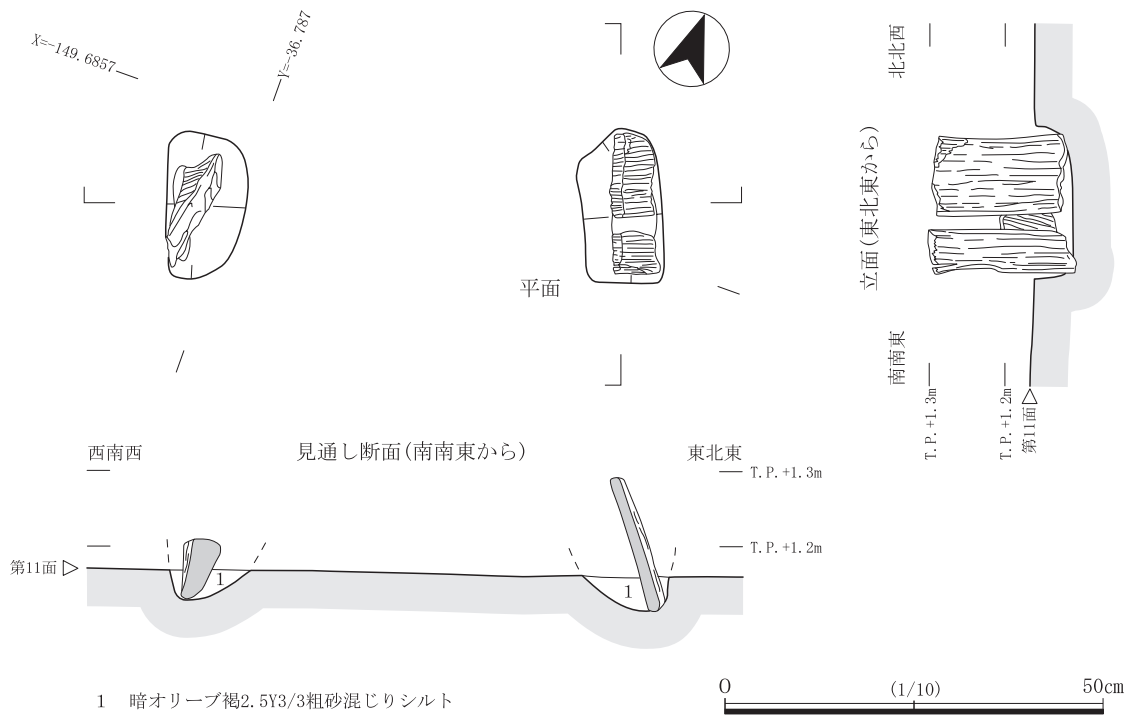


図228 03-1-2区 第11面検出1018木棺

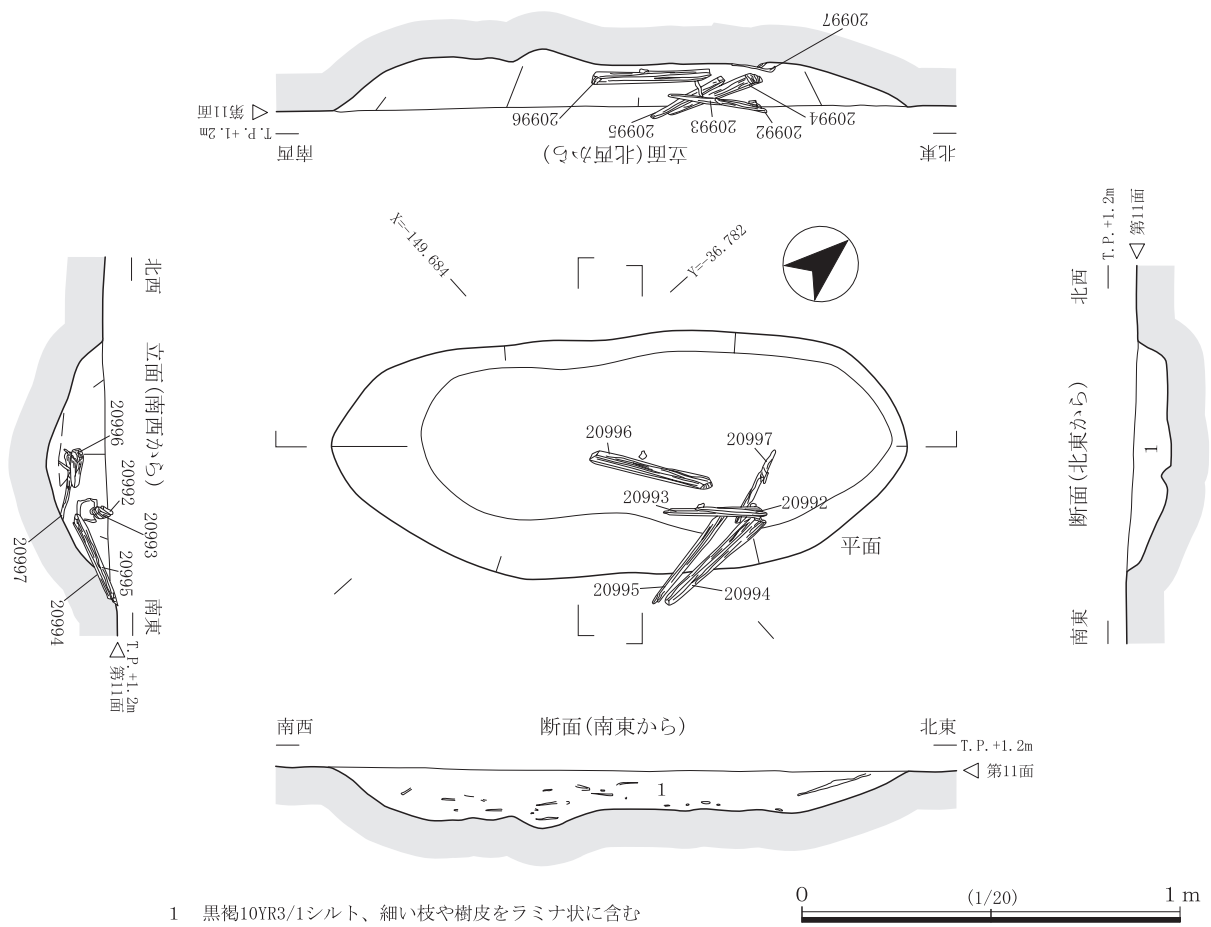


図229 03-1-2区 第11面1017土坑

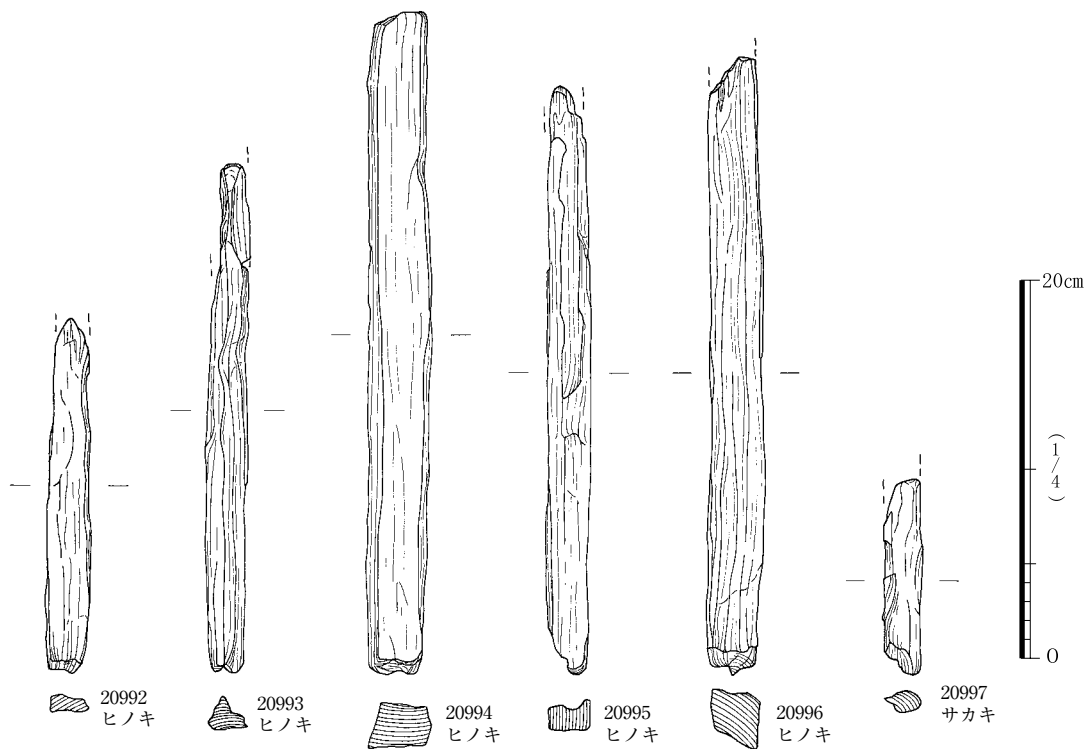


図230 03-1-2区第11面1017土坑出土木器

褐10YR3/1シルトに、細い枝や樹皮をラミナ状に含む。土器などはないが、土坑南東側から棒状の木が6本出土した。規模と形状から、土壙墓の可能性もある。

図230 - 20992～20997は残存長10.4～35.0cmの棒状の材。断面は一辺2～3cm前後の方形～長方形を基本とし、木取りは一定しない。残存長30cm前後のものが4点、20994を除いて片側を破損している。木材を割っただけのもので、未成品とも言いがたい。おおよそではあるが、大きさに統一性があるため意図的に集められた可能性はあろう。

1323・1324・1326・1327土坑は、調査区南西部に位置する。

1323土坑(図231・写真図版62) 平面不整形円形で、北北東-南南西に主軸を持つ。長径140cm、短径109cm、深さ53cm。埋土は3層に分かれる。弥生土器15片(うちI様式3片)が出土した。

1324土坑(図232・写真図版62) 平面ほぼ円形で、直径190～195cm、深さ58cm。埋土は5層に分かれる。出土遺物は、弥生土器68片(うちI様式11片、I～II様式2片、II様式3片)、木製鋏1点、木片1点、計70点。

図232に示すように、弥生土器の甕が坑口部南東側から、中層に木があり木製鋏がその北西側から、それぞれ出土した。

出土した土器はいずれもII様式である。図233 - 20998は壺。口縁端部は肥厚するが、直線的な面をなさずまるみを帯びる。クシ描き直線文は口縁端部と頸部に施される。内外面ともに表面をひどく剥離しており、内面調整は不明。

20999(写真図版110)はほぼ完形の甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、底部はやや上げ底となる。ミガキ調整は丁寧で、外面は口縁部から順に施される。上半は横～斜め方向、下半は縦方向を基本とする。口縁部内面にも丁寧なミガキが認められる。II様式でもやや新しい様相をもつか。外面煤



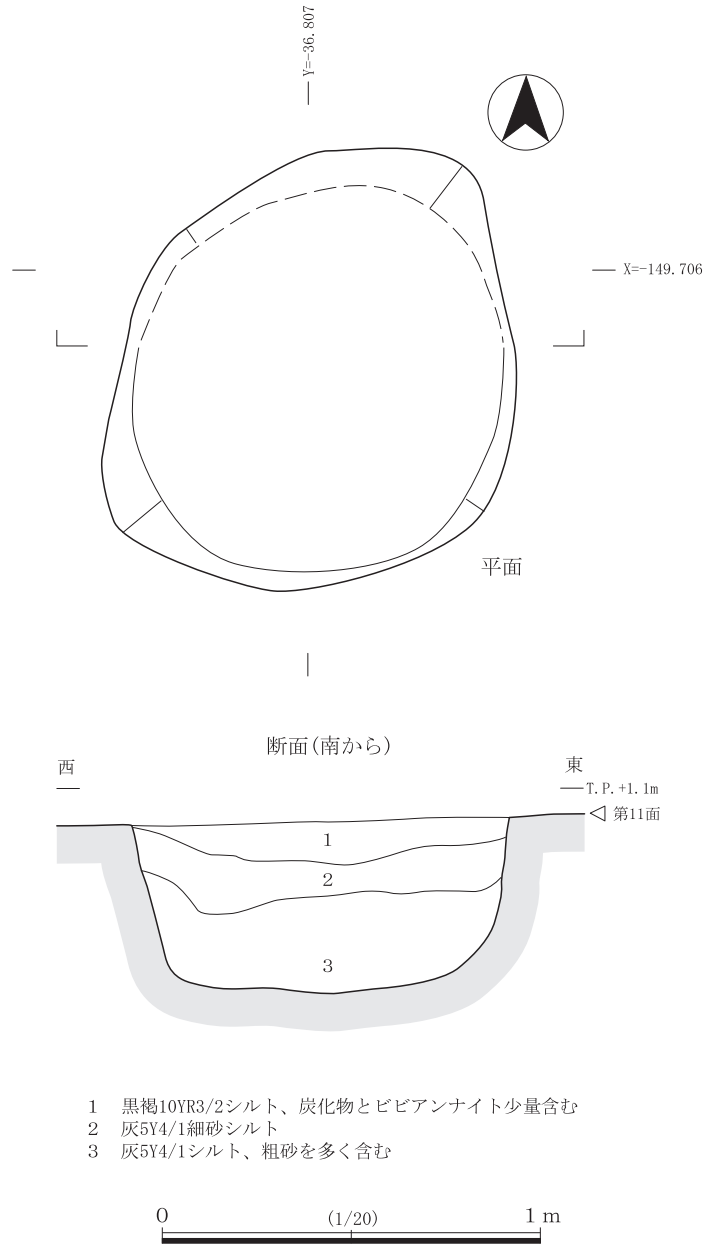


図231 03-1-2区 第11面1323土坑

付着し、特に底部近くで器面が剥離する。

21000は甕蓋。内外面ともに全面ミガキが施される。内外面黒変し、煤も付着する。特に内面は端部から2cmほどの部分に、炭化した付着物が帯状に観察できる。

21001(写真図版110)は鍬。全長は残存で22.5cm、身部幅7.8cm、身部厚0.8cm前後、最大厚2.6cmで、狭鍬と分類される範囲に入ろう。柄孔は径3.4cmで柄角は約70°を測る。前面・後面ともに長軸方向の加工痕が観察できる。アカガシ亜属。

1326土坑(図234・写真図版62) ひしゃげた三角形のような妙な平面形をしている。長径130cm、幅の狭い部分で40cm、深さは14cm。北北東-南南西を主軸とする楕円形の土坑に、南西側にのびる溝が接したようにも見える。その場合の交点に石が座っている。石は長さ34cm、幅18cm、高さ18cm、重さ18.4kgの花崗岩である。埋土は黒2.5Y2/1シルト。出土遺物は、弥生土器18片(うちI様式1片、II様式4片)

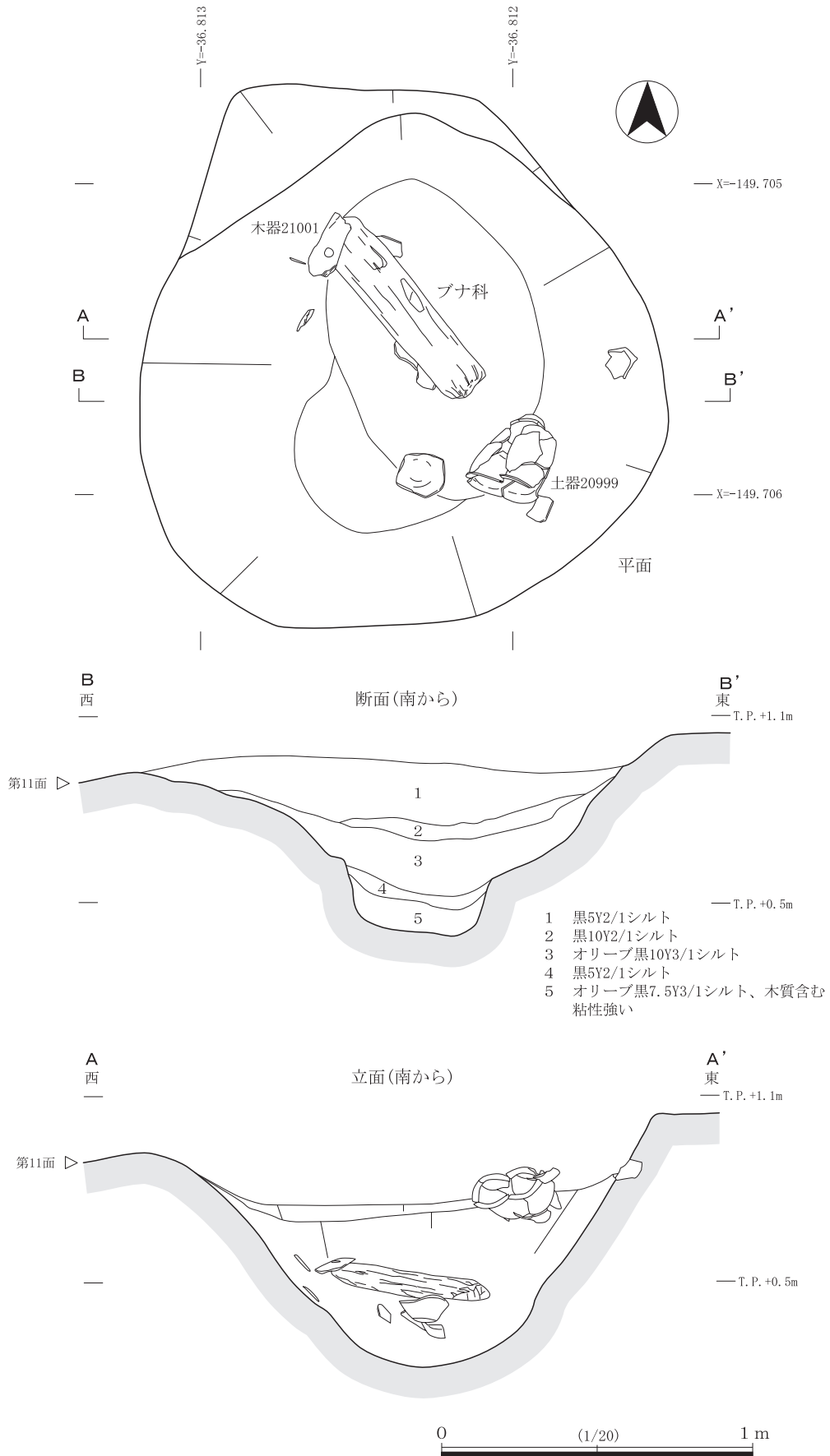
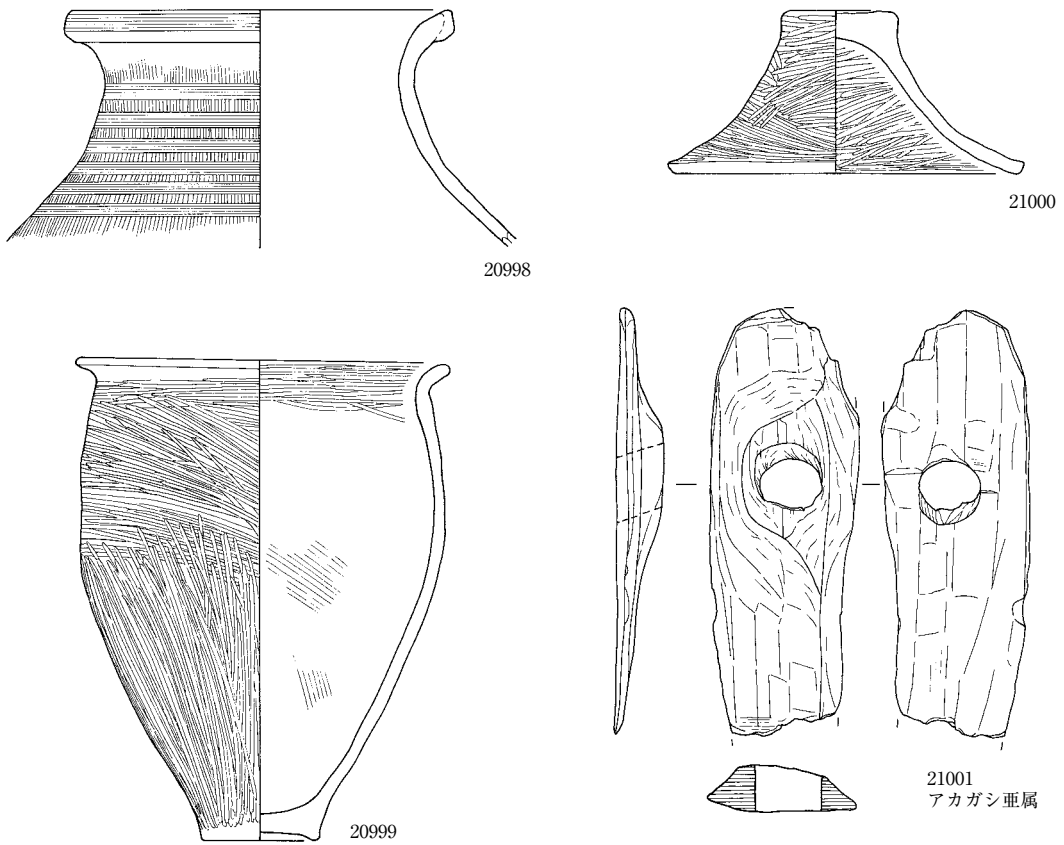
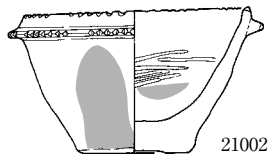


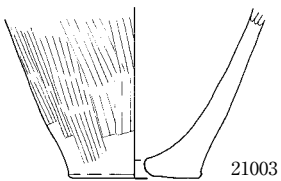
図232 03-1-2区 第11面1324土坑



1324土坑



1327土坑



1374土坑

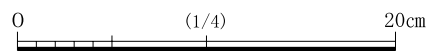
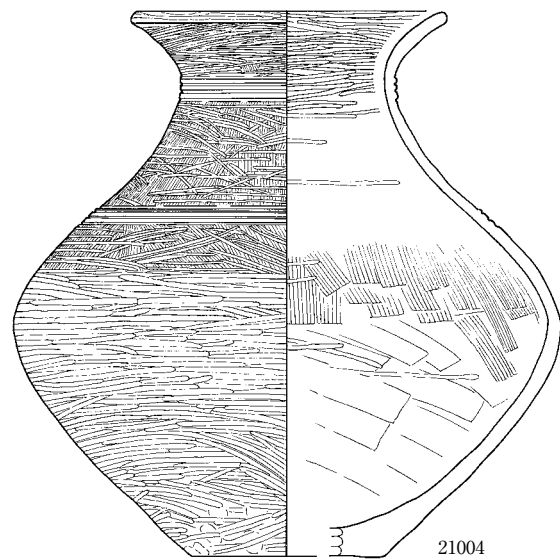


図233 03-1-2区 第11面1324・1327・1374土坑出土遺物

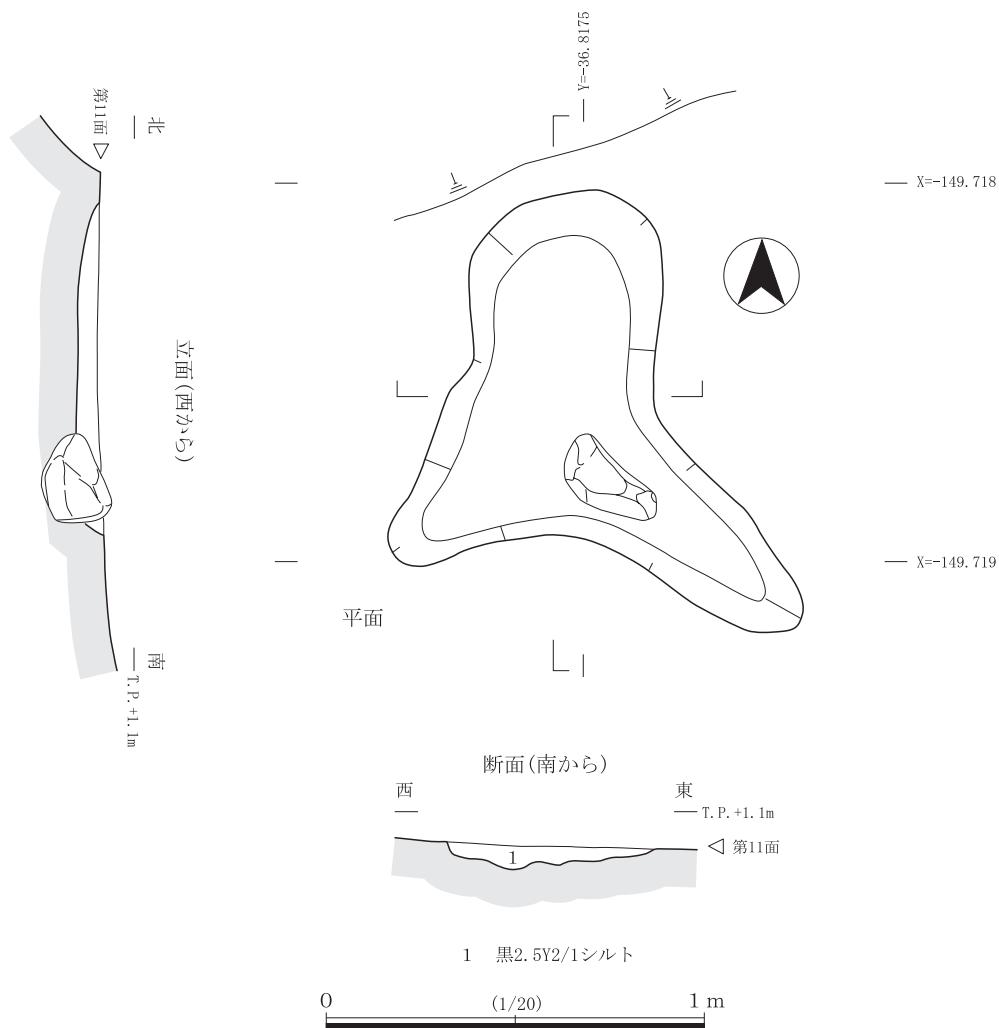


図234 03-1-2区 第11面1326土坑

である。

**1327土坑** 平面不整形で、長径240cm、短径140cm、深さ23cm。埋土は2層に分かれ、上層はオリーブ黒7.5Y3/2シルトで、オリーブ5Y5/4細砂ブロックを含む。下層はオリーブ黒10Y3/1シルト。全体にビビアンナイトや炭化物が含まれる。弥生土器18片（うちI様式3片）と木片が出土した。

図233-21002（写真図版110）はやや変わった鉢。体部はやや内湾気味にひらき、口縁からやや下がった所に貼り付け突帯がめぐる。口縁端部と突帯には6～8の刻み目を1単位として、ずれを生じさせながら刻み目が施される。I-3～4様式であろう。

**1374土坑**（図235） 調査区南部に位置する。平面は中央がくびれた楕円形で、北東-南西を主軸とする。長径366cm、短径214cmと大きく、深さも45cmある。埋土（写真図版62）には植物遺体が多く含まれ、シルトや砂とともに非常に薄く積層する。出土遺物は、弥生土器23片（うちI様式8片）、サヌカイト剥片2点、木片1点、計26点である。

図233-21003は甕の底部。外面には左上がりの断続的なハケ調整が施される。焼成後、底部穿孔がなされる。

21004（写真図版110）は壺。頸部と胴部上半には、削り出し突帯上に沈線2条が施される。I-2様式に相当しよう。外面はミガキが施されているが、密に施された下半部に比べ、胴部上半にはハケ調整

第5章 03-1-2区の調査成果



図235 03-1-2区 第11面1374土坑

表16 03-1-2区 第11面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイト		その他	合計	
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類			
1017土坑	8L-9i	楕円	北東	146	66	13	図229参照									
1038土坑	8L-8i	楕円	北東	104	80	5	暗灰黄2.5Y4/2、細砂～粗砂混じる					3				3
1041土坑	9L-1h	円		122		40	黒褐10YR3/1シルト～粗砂のラミナ、植物遺体含む									0
1320土坑	8M-9a	不整円	北東	90	75	14	灰10Y4/1、細礫混じる									0
1321ピット	8M-9a	円		35	28	11	黒10Y2/1、オリーブ黒7.5Y3/1ブロック混じる									0
1322ピット	8M-9a	円		30	30	11	オリーブ黒5Y2/2									0
1323土坑	9M-1a	不整円	北北東	140	109	53	図231参照	3				12				15
1324土坑	9M-2a	円		195	190	58	図232参照	11	2	3	52			狭楕1・木片1		70
1325ピット	9M-3a	円		20	19	8	オリーブ黒7.5Y3/2、細砂混じる	1								1
1326土坑	9M-2a	不整		130	40	14	図234参照	1	4		13					18
1327土坑	9M-3b	不整		240	140	23	①オリーブ黒7.5Y3/2、オリーブ5Y5/4細砂ブロック混じる、ビビアンナイト・炭化物含む ②オリーブ黒10Y3/1、粘性強い、ビビアンナイト・炭化物含む	3			15			木片1		19
1328ピット	8M-8a	不整	北北西	20	15	3	黒7.5Y2/1									0
1329ピット	8M-9b・9a	楕円	北西	22	18	4	黒7.5Y2/1									0
1330ピット	8M-9b	円		19	18		黒7.5Y2/1									0
1331土坑	8M-9b	不整	東西	51	19	3	黒5Y2/1	1			1					2
1332ピット	8M-9b	円		33	30	9	オリーブ黒5Y3/1				3		2			5
1333ピット	8M-9b	不整	北北西	35	26	11	オリーブ黒5Y3/2、黒5Y2/1ブロック混じる									0
1334ピット	8M-9b	楕円	東西	19	16	5	黒5Y2/1、炭化物含む				1					1
1335ピット	8M-9b	不整	東西	24	20	9	黒5Y2/1									0
1336ピット	8M-10b他	不整		37	29	6	オリーブ黒5Y3/1									0
1337ピット	8M-10b	楕円	北	39	27	12	オリーブ黒5Y3/1、細砂混じる				1					1
1338ピット	8M-10b	不整		35	24	5	黒7.5Y2/1	1			1					2
1339ピット	8M-10b	円		30	29	7	オリーブ黒5Y3/1				2					2
1340ピット	8M-10b	円		26	22	6	黒5Y2/1									0
1341ピット	8M-10b	円		19	19	4	黒2.5Y2/1									0
1342ピット	8M-10b	円		20	19	5	黒7.5Y2/1									0
1343ピット	8M-10b他	円		18	15	6	オリーブ黒5Y3/2									0
1344ピット	8M-10b	円		29	26	2	オリーブ黒7.5Y3/1	1			1					2
1345ピット	8M-10b	円		24	20	9	オリーブ黒5Y3/2									0
1346ピット	8M-10b他	楕円	東西	19	16		黒7.5Y2/1									0
1347ピット	8M-10b	円		19	19	6	オリーブ黒5Y3/1					2				2
1348ピット	8M-10b	円		24	23	9	黒7.5Y2/1、オリーブ黒5Y3/2ブロック混じる									0

表16 03-1-2区 第11面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイ		その他	合計	
								I様式	I・II様式	II様式	不詳	成品	剥片類			
1349ピット	8M-10c	円		22	18	3	黒7.5Y2/1				1					1
1350ピット	8M-10c	楕円	東西	24	19	7	黒7.5Y2/1				2					2
1351ピット	8M-10c	円		26	24	3	オリーブ黒7.5Y3/1									0
1352ピット	8M-10c	楕円	東北東	32	18	22	黒7.5Y2/1				1			木片2		3
1353ピット	8M-10c	円		19	18	3	オリーブ黒7.5Y3/1									0
1354ピット	8M-10c	円		16	16	10	黒7.5Y2/1				1					1
1355ピット	8M-10b	隅丸三		44	38	15	オリーブ黒5Y3/2、黒5Y2/1ブロック混じる	1			1			木片1		3
1356ピット	8M-10b他	楕円	北東	43	23	13	オリーブ黒5Y2/2、炭化物含む									0
1357ピット	8M-10b	不整		24	17	10	オリーブ黒7.5Y3/1									0
1358ピット	8M-10c													板		1
1359ピット	8M-10c	楕円	東西	25	19	8	黒5Y2/1、オリーブ黒5Y3/2粘土質ブロック混じる									0
1360ピット	8M-10c	円		12	11	14	黒5Y2/1									0
1361ピット	8M-10c	円		15	14	8	黒7.5Y2/1、細砂ブロック混じる									0
1362ピット	8M-10c	円		13	12	5	オリーブ黒5Y2/2									0
1363ピット	9M-1b	円		24	23	3	黒2.5Y2/1	1			1					2
1364ピット	8M-10b	円		13	12	3	黒5Y2/1、灰含む									0
1365ピット	8M-10b	楕円	北西	17	14	5	黒10Y2/1									0
1366ピット	9M-1b	楕円	東西	24	19	4	黒7.5Y2/1									0
1367ピット	8M-10b	円		16	14	1	黒5Y2/1									0
1368ピット	8M-10c	円		16	13	6	黒7.5Y2/1									0
1369ピット	8M-10c	円		11	11	1	黒7.5Y2/1									0
1370ピット	8M-10c	楕円	東西	11	8		黒7.5Y2/1									0
1371ピット	8M-10c	楕円	東西	23	13	1	オリーブ黒5Y3/1									0
1372ピット	8M-10c	円		11	11	16	黒7.5Y2/1									0
1373ピット	9M-1c	円		13	12	2	黒7.5Y2/1									0
1374土坑	9M-1b	楕円	北東	366	214	45	図235参照	8			15		2	木片1		26
1376ピット	9M-1c	楕円	北	39	30	14	オリーブ黒7.5Y3/1、粗砂混じる、炭化物含む									0

が残り、やや粗雑な印象を受ける。胴部内面屈曲部には工具をつきあてた痕跡がはっきりと残っている。

その他の土坑については、表16を参照されたい。

ピットを50個検出した。ピットは主に調査区南部に分布する（写真図版63）。

**1352ピット**（図236・写真図版62） 調査区南部東寄りに位置する。平面はそら豆に近い楕円形で、東北東 - 西南西を主軸とする。長径32cm、短径18cm、深さ22cm。埋土は黒7.5Y2/1シルト。弥生土器1片と木片2点が出土した。木片は棒状のものと板状のものがあったが、両者とも残りが悪く樹種鑑定などはできなかった。

1338・1344・1355・1364ピットなどからも弥生土器が出土しているが、時期の判明するものはいずれもI様式に属する。

その他、個々のピットについても、土坑とともに表16にまとめた。

1039・1040溝状落ち込みは、調査区東部に位置する。

**1039溝状落ち込み** 西北西 - 東南東を主軸とする。検出長約3.5m、幅0.6~0.8m、深さ17cm。埋土はオリーブ褐2.5Y4/4細~粗砂。出土遺物はない。

**1040溝状落ち込み** 1039溝状落ち込みの西側にあり、北西 - 南東を主軸とする。北西部は第10面444落ち込みにより攪乱されている。検出長約7m、幅0.7~1.3m、深さ24cm。埋土は黒褐2.5Y3/2シルト。出土遺物は、弥生土器41片（うちI様式15片、I~II様式4片）、木杭1本、木片1点、計43点。

図237 - 21005は壺。頸部に沈線3条、胴部に沈線3条以上が施される。頸部や胴部の段差は認められず、器厚もほとんど同じである。21006も壺。口縁のひらきは小さく、頸部の削り出し突帯上に沈線2条が施される。21007は壺の頸部片。貼り付け突帯4条が残り、布目のある圧痕が刻まれる。突帯の剥がれた痕には沈線がのぞいている。

21008（写真図版111）は復原径23.4cmを測る大形の甕蓋。端部には三角列点文がめぐらされている。胎土にチャートらしき礫を含む。

21009は瀬戸内系の甕。「L」字状口縁には刻み目、胴部にはヘラ描き沈線5条が施される。21010も甕。刻み目と沈線7条が施される。器壁が4mm前後とかなり薄い。外面剥離し、内面は煤付着。21011は無文の甕か。外面に斜め方向の断続的なハケ調整が施され、II様式的である。

これらの土器は21006の壺が古い様相をもつものの、全体的にはI - 3~4様式に位置づけられよう。  
**1043溝状落ち込み**（図238） 調査区北西部から北部にかけて、東北東 - 西南西にのびる。東端で1042落ち込みに接するが、1043溝状落ち込みの底の方が約20cm深い。検出長約32m、幅1.7~2.7m、深さ35cm。埋土は、黒褐2.5Y3/2シルト。出土遺物は、弥生土器31片（うちI様式3片、I~II様式1片）、叩き石1点、計32点と、骨片、木片。骨と木片は、図238のように溝状落ち込みの西部で、落ち込みの上面から出土した。骨は脆すぎて取り上げられなかった。木片は残りの良い2片を取り上げたところ、ヒノキとサカキと判明した。

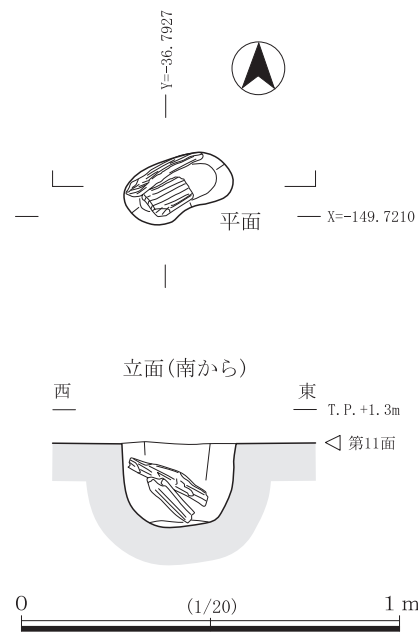


図236 03-1-2区第11面1352ピット



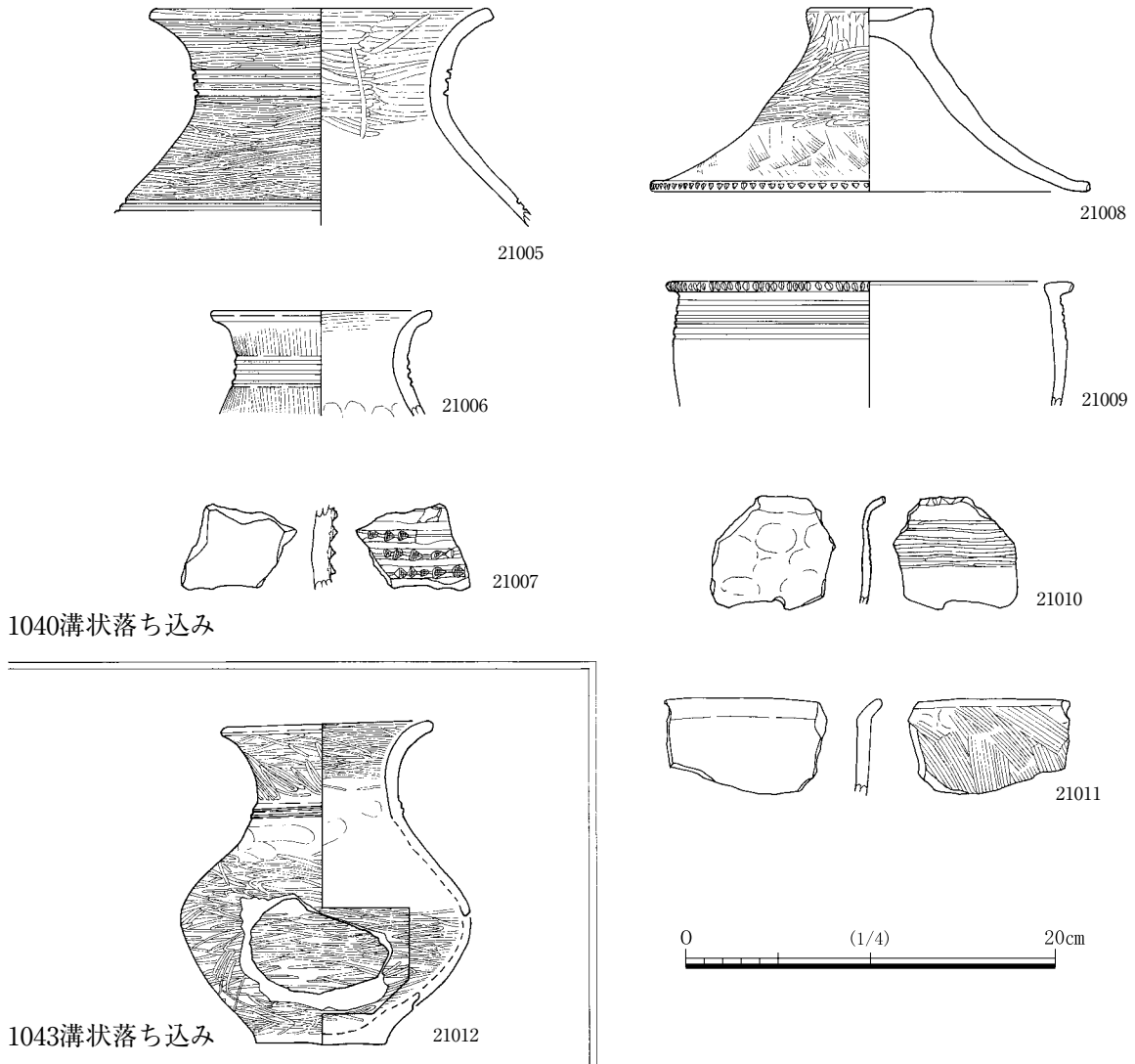


図237 03-1-2区 第11面1040・1043溝状落ち込み出土土器

図237 - 21012 (写真図版111) は口径10.9cm、器高12.6cmと小ぶりの壺である。頸部には低い貼り付け突帯をめぐらし、沈線1条を施している。突帯の上下は工具によって丁寧に縁取られる。I - 3 様式に位置づけられよう。ほぼ完形で出土したが、体部下半は大きく穿孔され、孔の周囲は磨耗・黒変している。なお、土器充填土内に遺物はなかった。

1044落ち込み 1043溝状落ち込みの南にほぼ平行している。平面では溝状に見えるが、深い部分で15cm程度と浅く、肩口も判然としないので、自然の落ち込みと判断した。ただし、出土遺物は比較的多く、弥生土器372片 (うちI様式44片、I~II様式22片、II様式1片)、転用土製円板2点、石庖丁1点、楔1点、サヌカイト剥片4点、計380点。

図239 - 21013は緑泥片岩製の石庖丁。刃先は残存している部分でも背部と同じようにまるみを帯びる。刃部は端で一旦くぼみ、中央では敲打によって潰される。穿孔途中の孔も残っている。

1042落ち込みは上述の1043溝状落ち込みの東に接し、1375落ち込みは調査区南部、大形の1374土坑の南にある。両者とも不整形で、出土遺物もない。

以上の溝状落ち込みや落ち込みは、自然地形と考えられる。断面観察の結果、第11層以下は基本的に自然堆積で、上面の第10面で人工的な溝などの掘削がはじまると判断できる。その時点では自然地形を

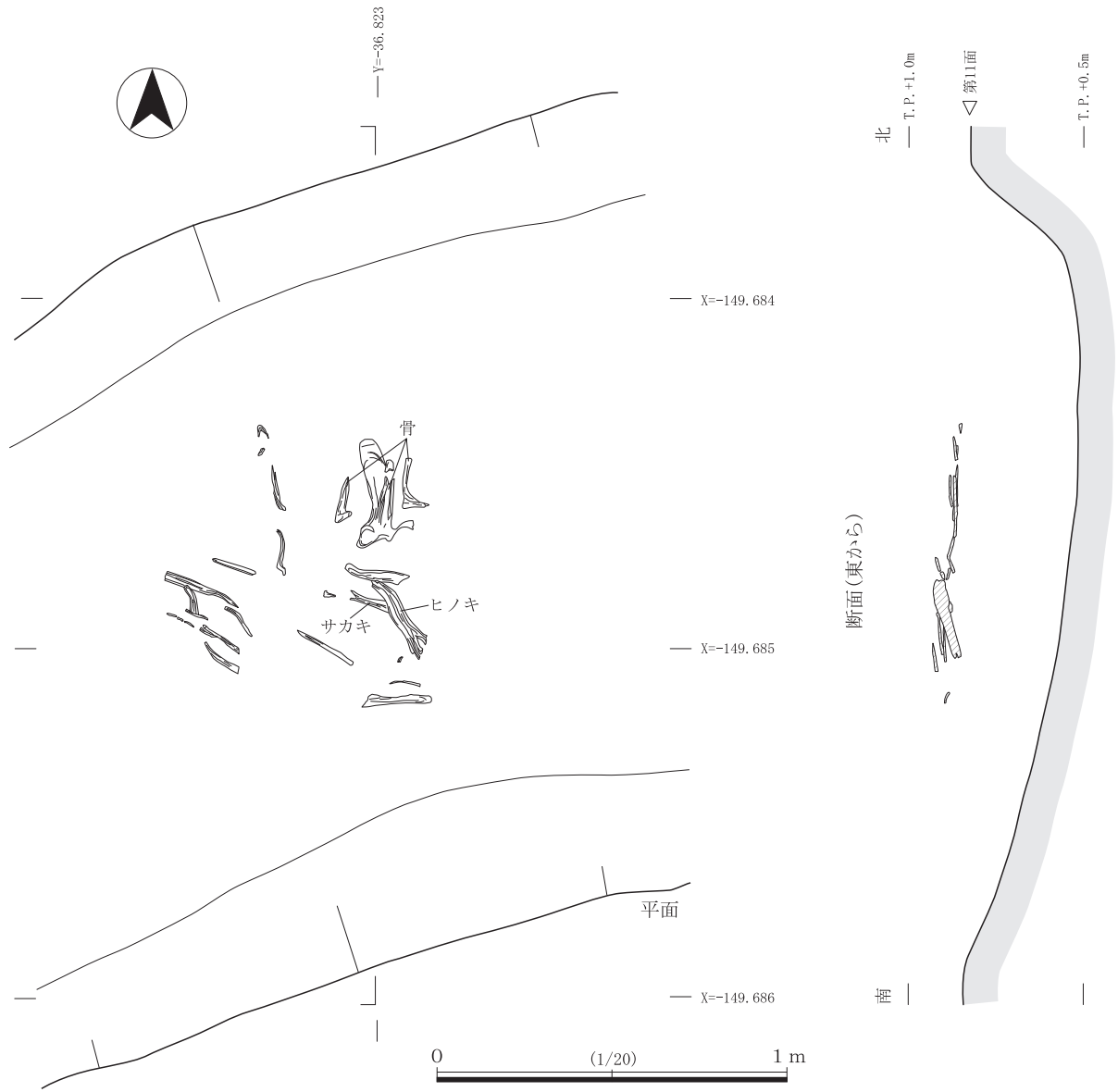


図238 03-1-2区 第11面1043溝状落ち込み

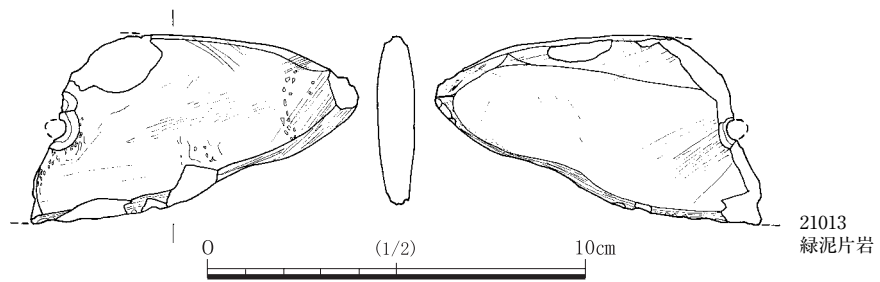


図239 03-1-2区 第11面1044溝状落ち込み出土石器

利用したと考えられるが、第10面の検出状況を見ると、これらの溝状落ち込みや落ち込みは第10面での人為的な遺構の整備には利用されていない。

(27) 03-1-2区第11層の遺物 (図240~245・写真図版111)

第11層以下は自然堆積層である。第11層もシルトを主体としラミナが顕著にみられる。詳しくは本章第2節の層序を参照されたいが、第11層は調査区の北~中部、中央部やや南側（第10面445溝より南、第6面252大溝よりも北の部分）、南部（第6面252大溝よりも南の部分）とでは堆積状況が異なる。そこで、遺物もそれらに分けて集計した。

調査区北~中部からは、弥生土器275片（うちI様式42片、I~II様式12片、II様式3片）、石錐1点、磨石2点、楔1点、サヌカイト剥片1点、中礫2個、計282点出土した。出土した土器、特に壺はI様式前半の古い様相をもつものが出土している。

図240-21014は壺。やや細長い胴部にヘラ描き沈線3条が施される。内外面ともにハケ調整で、粗くミガキが施される。I-3~4様式。

21015は磨石か。一部が凹むが長径4.31cm、短径2.4~3.4cmの長楕円形で、粗い砂岩製。短径に浅い溝状の凹みがめぐる。あるいは投弾の可能性もあるか。重さ440gを量る。

調査区中央部やや南側からは、弥生土器510片（うちI様式64片、I~II様式15片、II様式10片）、転用土製円板1点、石錐1点、サヌカイト剥片6点、木製高杯脚部1点、板1点、木片8片、植物の核5点、計533点出土した。

図241~243は、中央部やや南側からの出土遺物。図241-21016は壺。頸部には貼り付け突帯が剥離して、その下の沈線と、焼けのあまい色調の異なる部分が残る。胴部には蕨手状浮文の剥離痕が並ぶ。「C」の字の開口部を下に向け、両側を蕨手状に巻いた文様で、端に剥離をまぬがれた粘土が残る。I-3様式に位置づけられる。

21017は広口壺。頸部は短く外反し、端部は不安定ながら面をなす。内外面とも、上面から見える部分に横方向のミガキを施す。I様式後半であろう。なお、体部内面には煤が付着している。

21018は壺口縁。口縁部はやや開き気味で、焼成前穿孔が1個残る。内面はミガキを丁寧に施してい

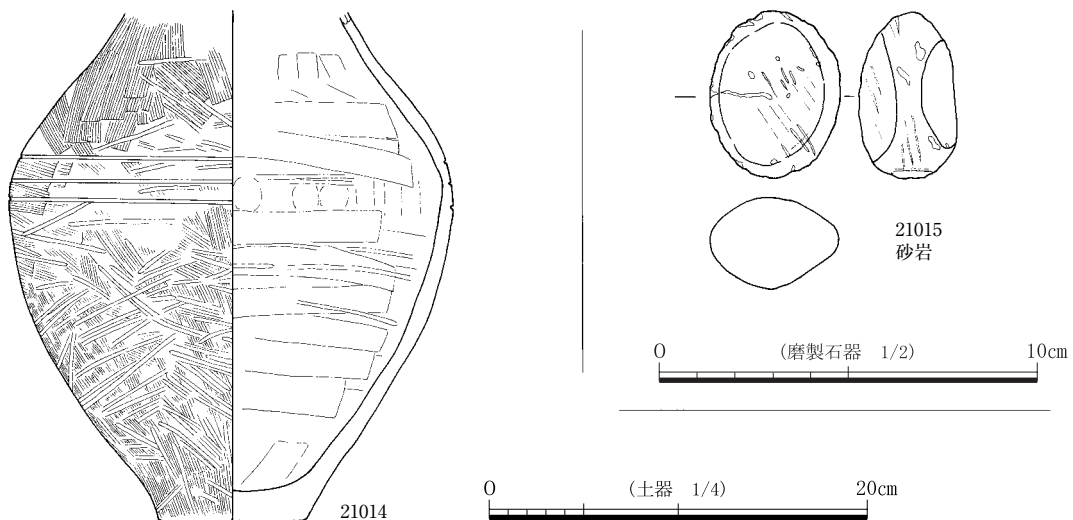


図240 03-1-2区 第11層出土遺物 (1)

る。頸部には幅の狭い削り出し突帯が見られ、I - 2 様式に位置づけられよう。21019は復原口径10.4 cmで、口縁部が直線的に上方へのびる。端部が薄く整っていることや内面のミガキから口縁部としたが、高杯脚部の可能性もある。

21020は壺の体部片であろう。沈線による無軸木葉文が飾られる。放射型か。I - 1 ~ 2 様式。

図242 - 21021~21025はI - 1 ~ 2 様式に位置づけられる壺。21021（写真図版111）は完形の壺である。頸部の削り出し突帯には刻み目が施される。胴部上半には器体成形時のカーブを残し、沈線3条がひかれる。

21022（写真図版111）の頸部は段を形成し、胴部上半の削り出し突帯に沈線1条が施される。体部は低くはり、口縁部は上方へ短く外反する。また削り出し突帯の下には、やや上部を欠くが楕円形の穿孔をもつ。

21023は、胴部上半に鈍い段を形成した後、段を縁取るように沈線を施す。ミガキ前に施されたハケ調整には単位の粗密が認められる。

21024は壺。頸部と胴部に段を形成して、胴部上半を低く作るが、頸部の段はやや不明瞭である。口縁部は端部に近いところで破損している。やや縦長のプロポーション。

21025は壺。注目すべきは胴部中~上半に描かれた沈線による文様である。胴部は半周ほどしか残っていないが、弧文を2・3重にした重弧文を基本とした文様がめぐる。上・下弧と斜位の弧文を組み合わせた目まつげのような形から、上弧、下・上弧の組み合わせ、縦に弧文を組み合わせて文様が展開する。また、胴部の破損部の磨耗から打ち欠きが行われたものと考えられ、底部にも焼成後に穿孔が施されている。特別な用途をもったものか。胴部破段面に、段あるいは沈線の痕跡があり、胴部はあまり張らない器形。

図243 - 21026は甕。肩がはり、沈線3条が施される。外面は煤の付着が著しいが、斜め方向のナデの痕跡が見られる。I 様式。21027も甕。口縁端部に刻み目と胴部に沈線4条。頸部は屈曲が強く、外面は縦方向のハケ調整を基本とする。ハケ原体の凹凸はほとんどない。I 様式後半に位置づけられるか。21028は甕底部。外面の調整が珍しい。横方向のナデを施した後、一部ではミガキ、空間をあけて一部ではハケを施す。内面に炭化物が3 mm前後の厚さで付着する。II 様式か。

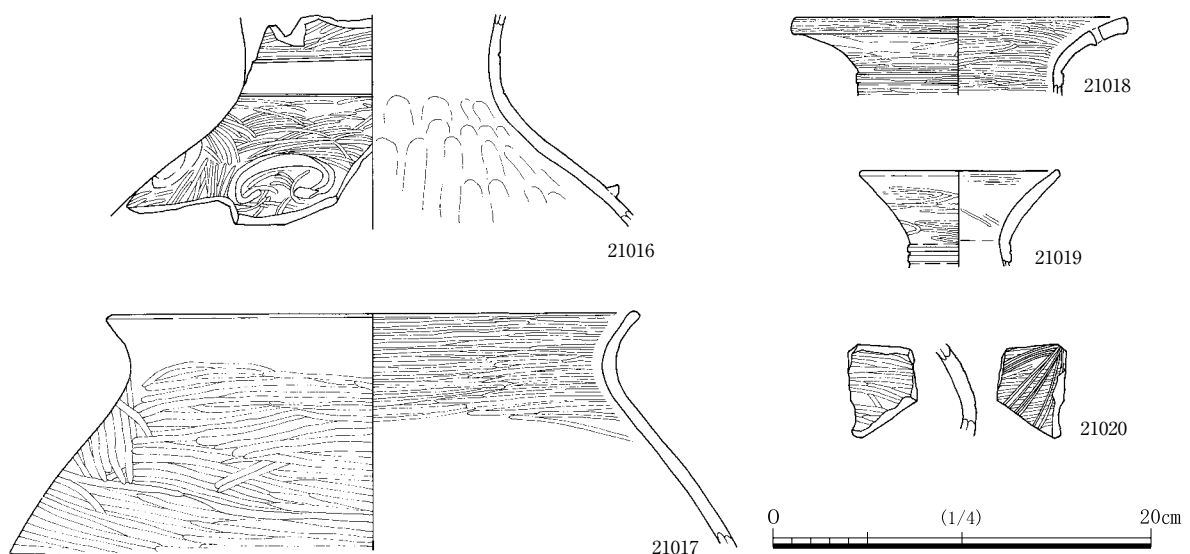


図241 03 - 1 - 2 区 第11層出土遺物（2）

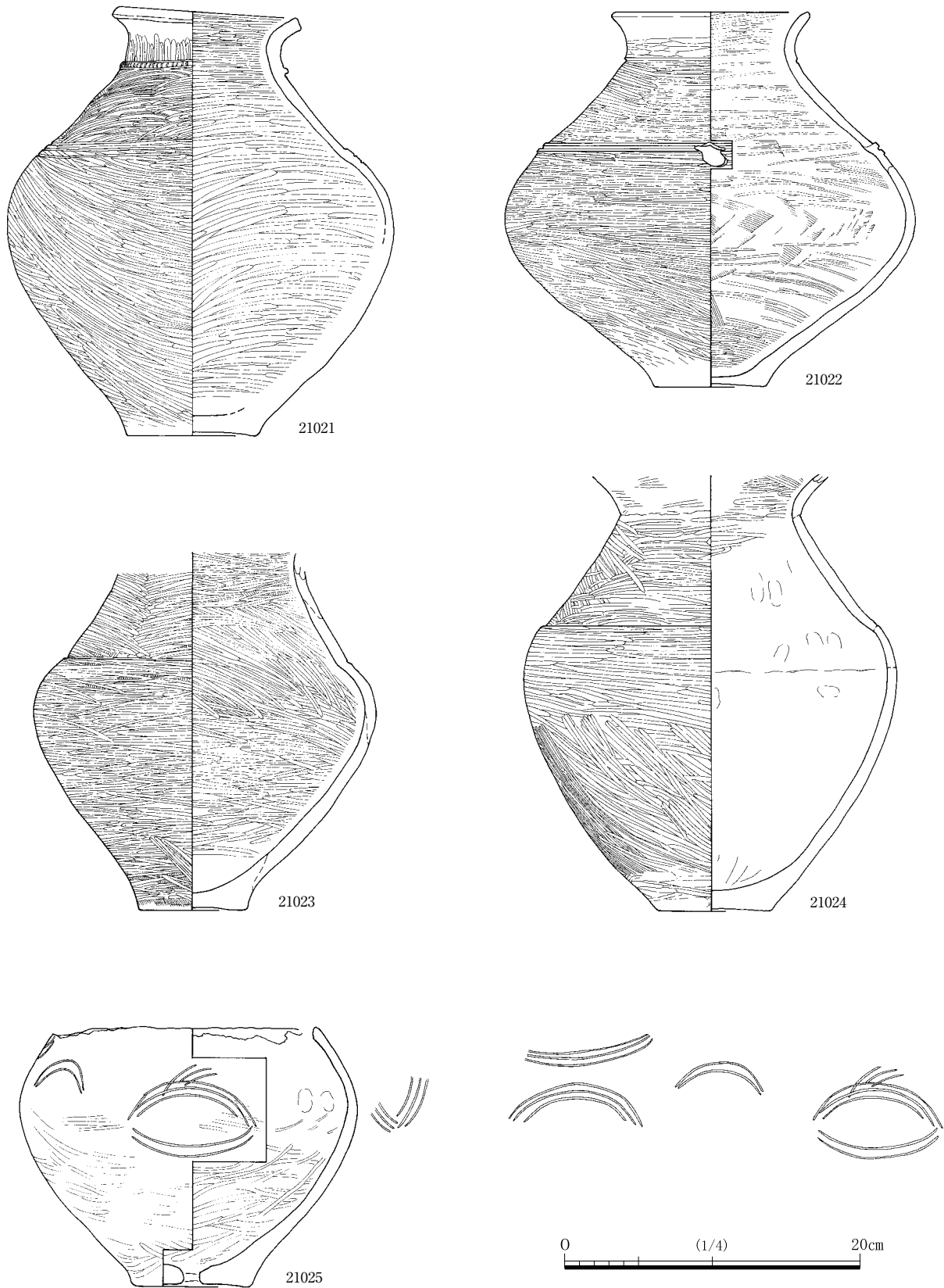


図242 03-1-2区 第11層出土遺物(3)

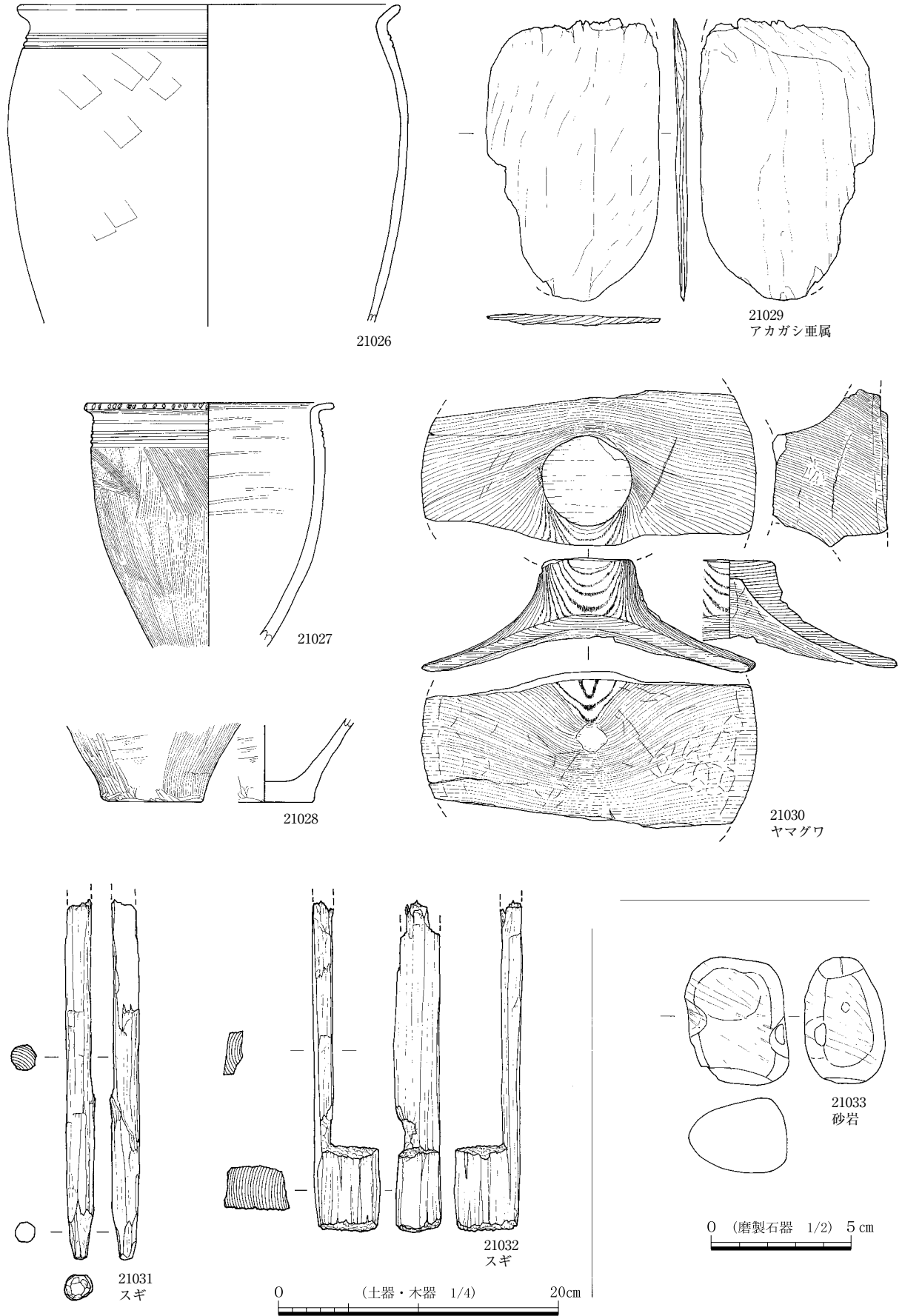


図243 03-1-2区 第11層出土遺物(4)

21029は板材。残存で長軸20.0cm、短軸12.4cm、最大厚み0.9cmの柾目取りの材である。木目にそって片側を破損する。アカガシ亜属を用い、平面形は先端がやや細くなり、厚みも薄くなっていることから鋤の可能性もある。

21030（写真図版111）は木製高杯脚部。底径23.9cmを測る裾部は、均質な厚みでハの字状に広がる。裾部の加工は、完全な円ではなく、所々で直線的となるため刎り物と判断される。残存高8.1cmで、脚柱部は低く終わるものであろう。横木取りの一木式で彩文等は施されていない。ヤマグワを用いる。

21031は杭か。残存長25.8cm、最大径2.0cmを測る棒状のもの。先端は潰れるが、鉛筆のように五角形に削っている。スギ。21032は材。残存長23.7cm、最大幅4.7cm、最大厚3.1cmの角材の一端を残して「L」字状に加工したもの。加工部分には抉ったような痕跡が残る。スギの板目材。

21033は石錘か。長径4.58cm、短径2.8～4.7cm、69.1gの砂岩。短径両端と、上端にくぼみがある。紐の痕か。21015と同じく、投弾の可能性もある。

調査区南部からの出土遺物は、弥生土器488片（うちI様式108片、I～II様式29片、II様式15片）、木片2片、石錐1点、サヌカイト剥片6点、計497点とイノシシ・哺乳類の骨片である。土器は、一部にII様式が認められるが、全体的にはI様式半ばの様相が強い。

図244 - 21034は壺。口縁端面にはクシ描き直線文が横・縦位に施され、頸部にもクシ描き直線文3条が残る。頸部内面は器面が剥離する。口縁端部は直立してやや垂下傾向にあり、II様式後半に位置づけられよう。

21035は壺の口縁。垂下した端面には、クシ描きによる同心円文が施され、わずかに残った頸部にもクシ描き直線文らしきものが見られる。II様式か。21036も壺の口縁。内面にはカーブをもった突帯が貼り付けられ、注口状に突帯をめぐるものか。突帯より外に、内側からの焼成前穿孔がある。突帯上面はきれいにナデが施されるが、下部は粘土の隙間や貼り付け作業時の沈線が残る。外面も粗く、ハケナデで仕上げられている。土器の上面を意識したものであろう。I様式末。

21037は壺蓋。径4mm前後の穿孔が1ヶ所破損部に残る。全面に煤が付着する。

21038は壺のやや細長い頸部か。断面三角形の貼り付け突帯は4条残り、布目圧痕をもつ刻み目が入る。しかし、最も上の1条には刻み目はなく、4条一帯として考えられる可能性がある。I様式後半。21039も壺の頸部。幅広く、低い削り出し突帯上に沈線3条が施される。I様式後半。21040の壺の胴部上半はわずかに屈曲し、段と沈線2条がめぐる。I - 2～3様式。21041は壺体部片。有軸羽状沈線が施される。沈線が左端にもわずかに残り、左右両方向に向いていたものと考えられる。I - 2様式。

21042・21043は壺の口縁部。いずれも頸部の削り出し突帯上に沈線1条がめぐる。21042には口縁端部に沈線1条を施しており、珍しい。I - 2様式に位置づけられよう。21044の頸部と胴部には、幅広の削り出し突帯と沈線1条がめぐる。胴部の削り出し突帯の下部には、調整がおよばず沈線となっている部分もある。器体の屈曲は認められず、I - 2様式か。

21045は壺底部。底部下面にまでミガキが及ぶ。I様式のものであろう。

図245 - 21046～21053は甕。21046は口縁のゆがみが大きい個体である。外面のハケは左上がり断続的に施される。I様式末。内面の上3分の2が黒変、以下は赤変する。21047の胴部沈線は2条と3条の2帯に分かれる。色調も他の甕と異なり、白黄色を呈する。21048の沈線は下の4条が途中で終わっている。断面にはやや凹凸が残っていることから、やや空間を空けて胴部をめぐると思われるが、磨耗のため明らかではない。21050の口縁のひらきは大きく、内外面ともに縦方向のミガキが施

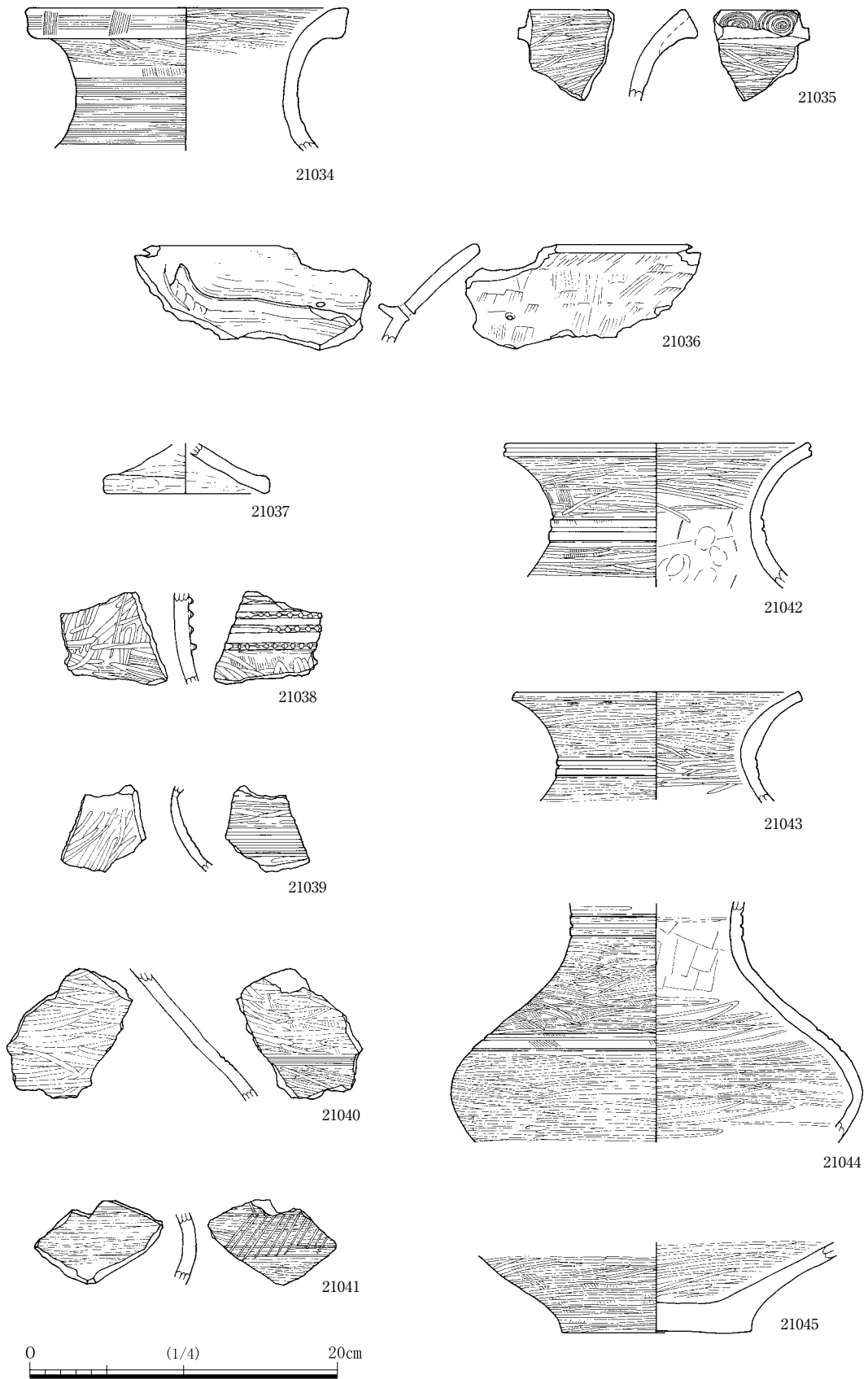


図244 03-1-2区 第11層出土遺物(5)



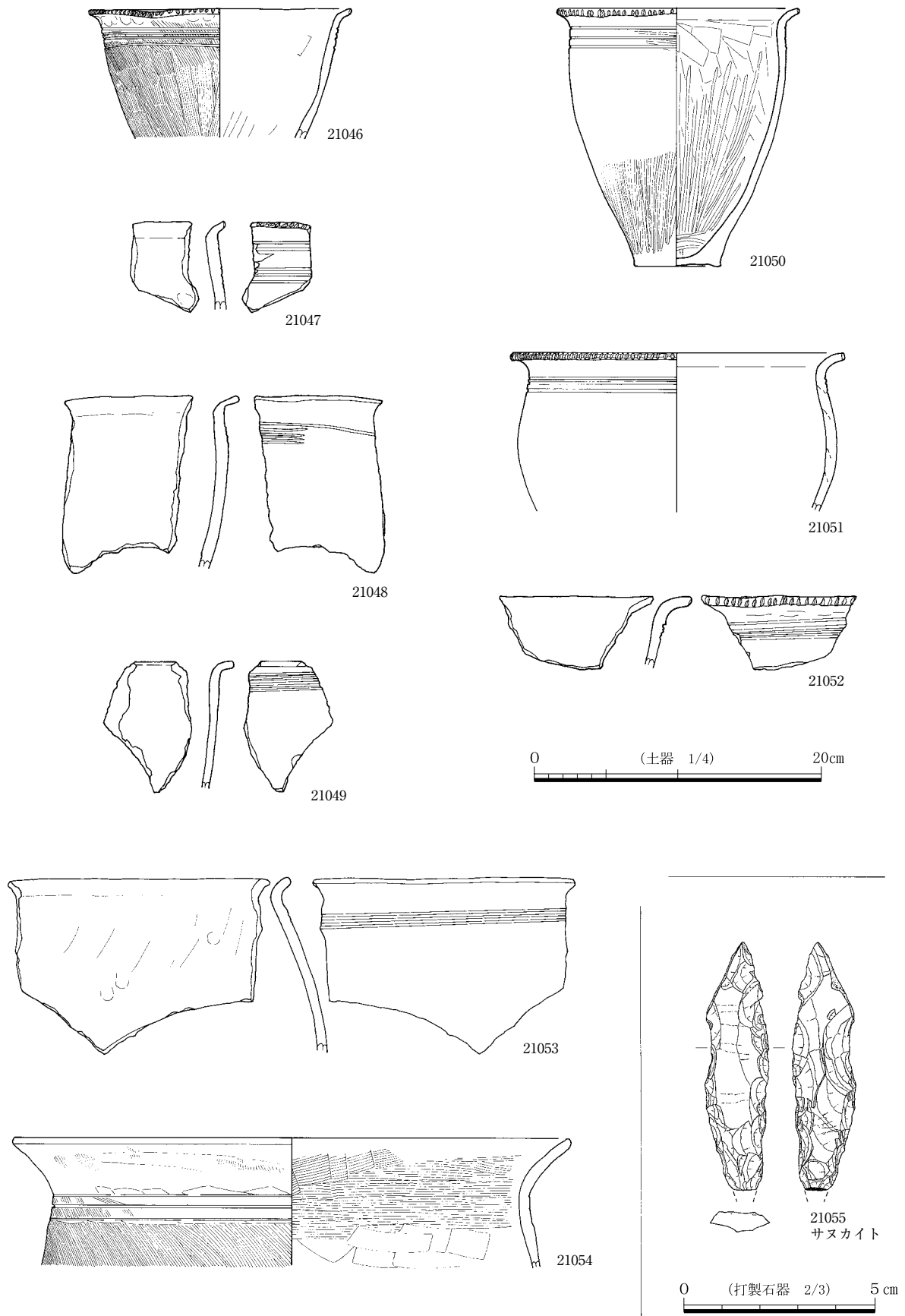


図245 03-1-2区 第11層出土遺物(6)

される。I 様式。外面は煤の付着が著しい。21051は内外面とも煤の付着が著しく、体部内面が荒れて、黄色物質が付着している。21052は沈線4条、21053は沈線3条をもつ。

21054は甕あるいは太頸の広口壺として分類されるもの。口径は復原で38.5cmとなる大形品。頸部の削り出し突帯上に沈線1条がめぐり、口縁端部の沈線はすでにない。I - 2 様式に位置づけられよう。体部内面には煤が付着しており、煮沸用の土器か。

21055は棒状石錐か。サヌカイト製で基部に原礫面を残す。錐部は破損するが、体部よりやや厚みを持ち、稜はあまく仕上げられる。長軸6.62cm、短軸1.71cm、厚み0.6cm、重さ8.2g。

#### (28) 03 - 1 - 2 区第11 - 2 面の遺構と遺物 (図246~257 写真図版64~67・111~113)

第11面は、03 - 1 - 2 区全域においてひと続きの面として検出できた。一方、下層の第12・13面は、調査区中央部から西部にかけての範囲で検出できたが、それ以外の範囲では調査限界のT.P.0.0mよりも下にもぐってしまう。その間にある、第11 - 2 面と第11 - 3 面は、第12・13面を検出できた中央部を境として、調査区の北部と南部とでは検出状況が異なる。北部では自然堆積の砂層内にみられる植物遺体層の上面を、南部（第6面252大溝よりも南の部分）では、弱いラミナがみられる黒っぽいシルト層の上面を第11 - 2 面とした。

第11 - 2 面の高さは、調査区北部でT.P.+0.5~0.9m、南部で0.5~0.7m、いずれも調査区東部が高い傾向にある。土坑6基、溝2条、計8か所（遺構番号1398~1405）、さらに南部では人・有蹄類の足跡を検出した。なお、調査区南部は、この第11 - 2 面で調査を終了した。

1398土坑(図247・写真図版65) 調査区東部に位置する。第11 - 2 層掘削中に遺物が出土したことにより、かろうじて残っていた北側の土層断面を観察し、第11 - 2 面から掘り込まれた土坑と認定した。

平面は楕円形、主軸は北西 - 南東と推定される。規模は、第11 - 2 面よりも30cm弱下がった第11 - 2 層中で長径124cm、短径77cm、深さは第11 - 2 面から47cm。埋土は2層に分れる。出土遺物は、弥生土器20片（うちI~II様式8片）、木製斧柄未成品1点、木製容器1点、板材1点、計23点である。

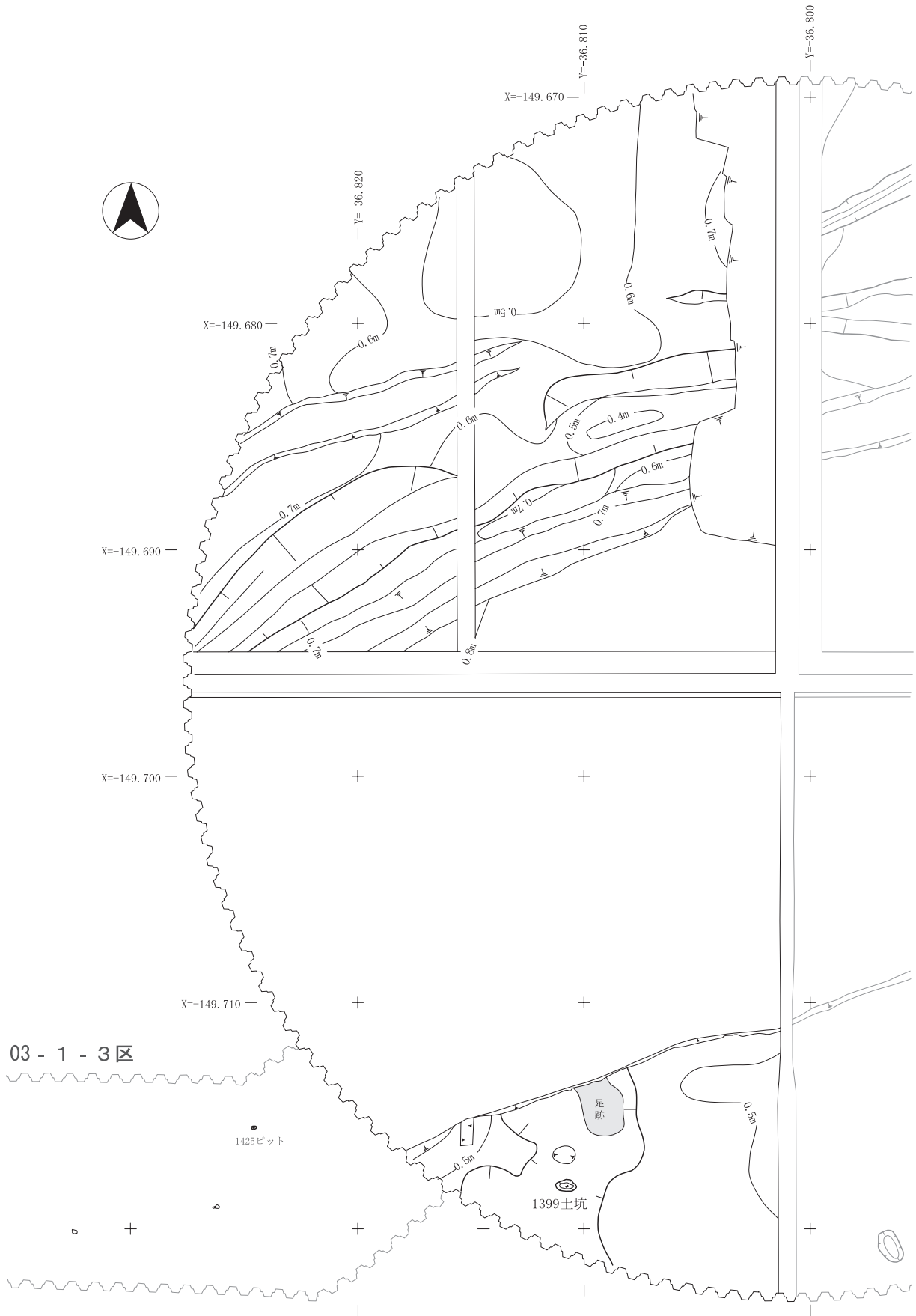
図248 - 21056は壺。口縁上面のみミガキが施され、頸部には沈線3条がめぐり。内外面ともに赤変する。I 様式。21057・21058は壺の体部。刻み目のある貼り付け突帯が、21057は6条、21058は5条めぐり。前者は器壁が薄く、外面にはミガキ前のハケ条痕が残る。I - 3~4 様式。

21059~21063は壺底部。21059の外面底から2~3cmと内面は表面剥離する。21060の外面はミガキを縦方向の後、横にも施す。I 様式。21061はミガキが施されるが一部成形時の指痕が残る。21062は内面に成形時の指跡が生々しく残り、下面も貼り付けた粘土が盛り上がり一部上げ底のようになっている。器壁は薄く、胎土中の砂粒も少ない。

21064~21067は甕か。21064の外面は縦方向の工具ナデの後、ミガキが施される。底部は接合痕を残したままである。内外面に煤付着するが、内面では底部から約7.5cm以上でのみ境界線をもって観察され、炭化物も薄く付着する。21065はハケ調整のある破片。21066の底部は中央へ薄くなり上げ底状になる。調整は丁寧だが、内面に煤付着、内外面ともに器面が磨耗する。21067の外面は剥離して、底の一部にのみハケ調整が残る。外面に煤が付着している。

1398土坑出土の土器は底部が多く、時期の確定が難しいものもあるが、21059や21064など新しい傾向を捉えて、I - 4 様式に位置づけておく。

図249 - 21068 (写真図版111) は斧膝柄の未成品。枝幹部分を利用して、枝側を柄に利用する。斧台



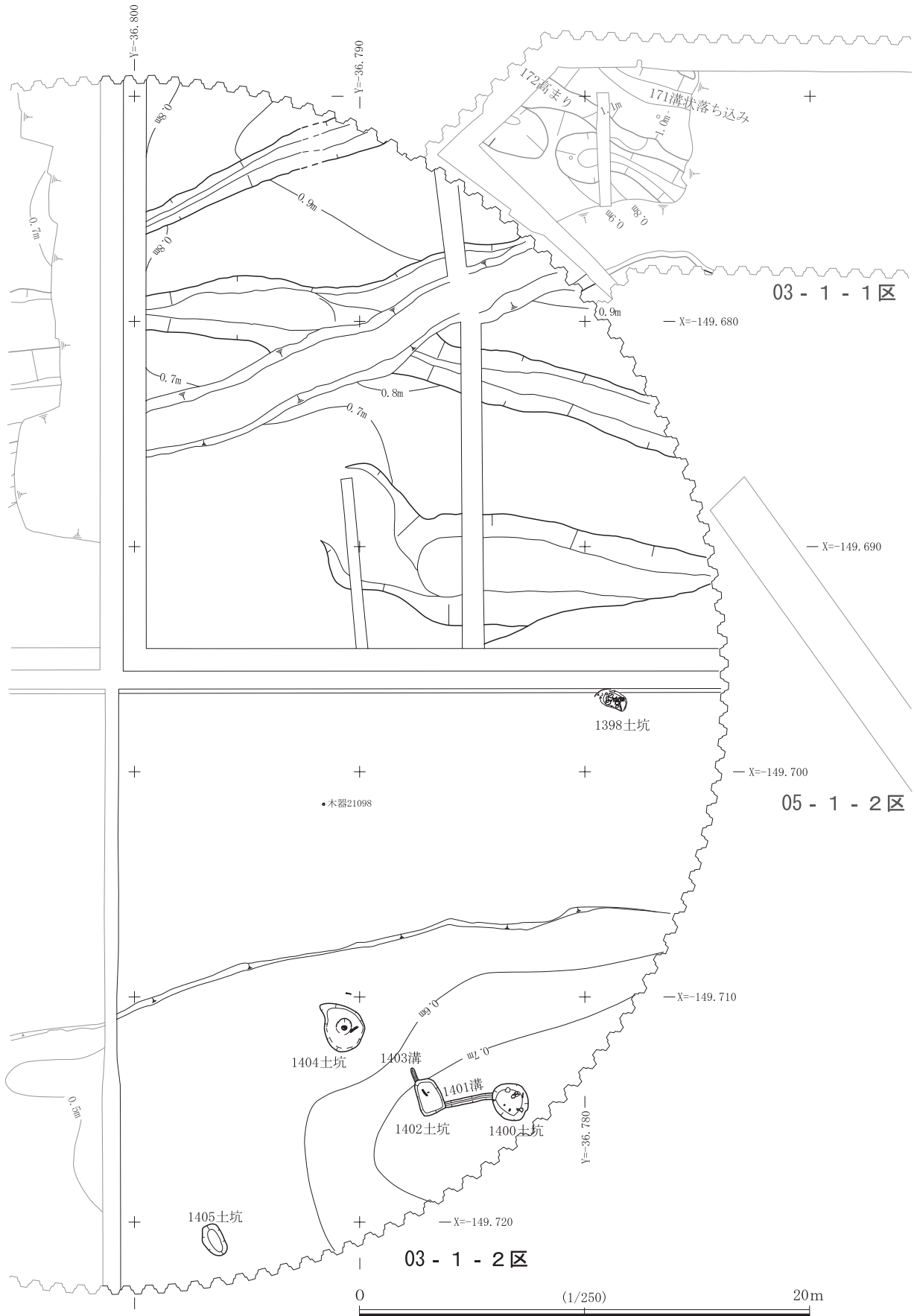


図246 03 - 1 - 2 区 第11 - 2 面

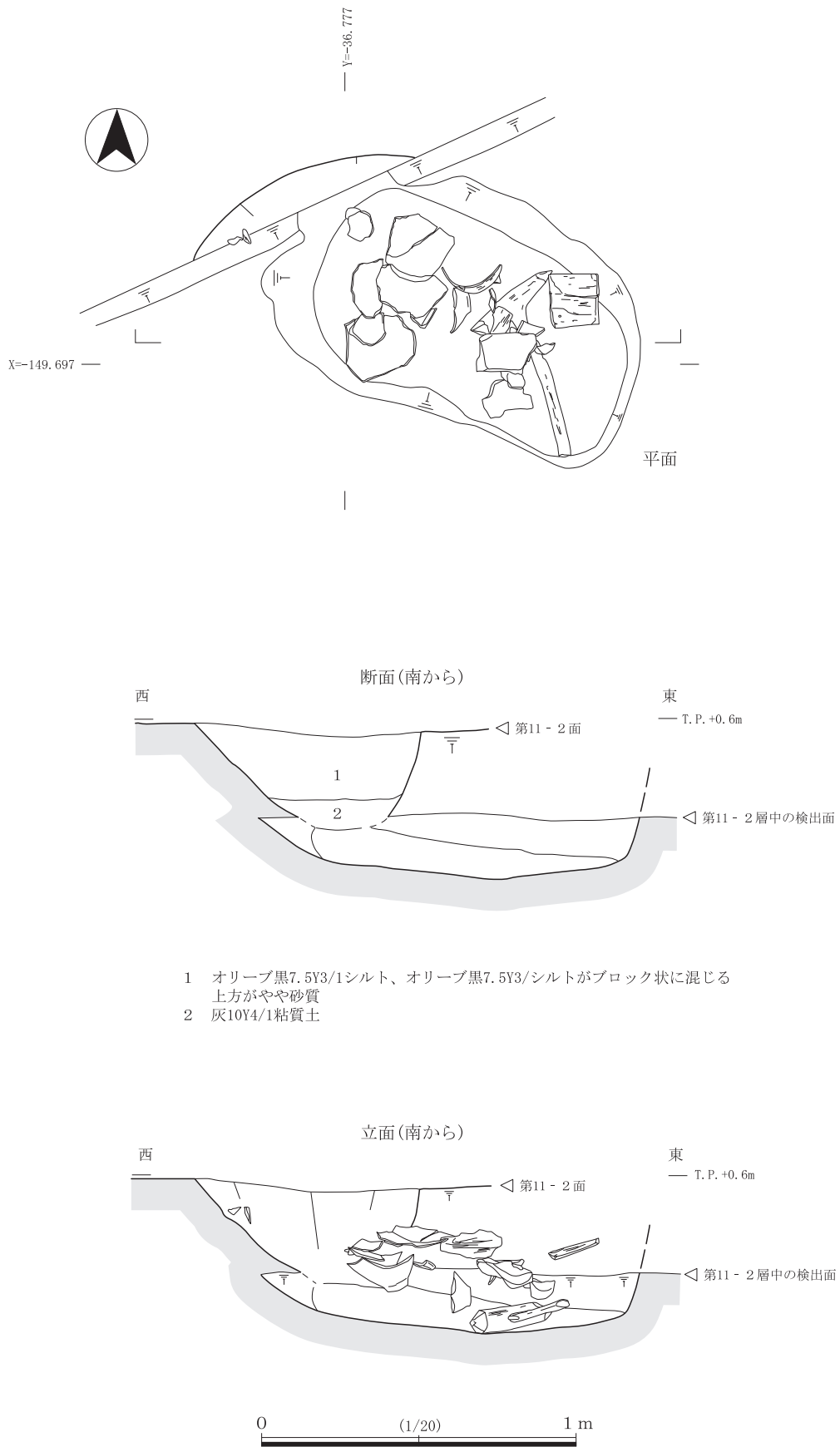


図247 03-1-2区 第11-2面1398土坑

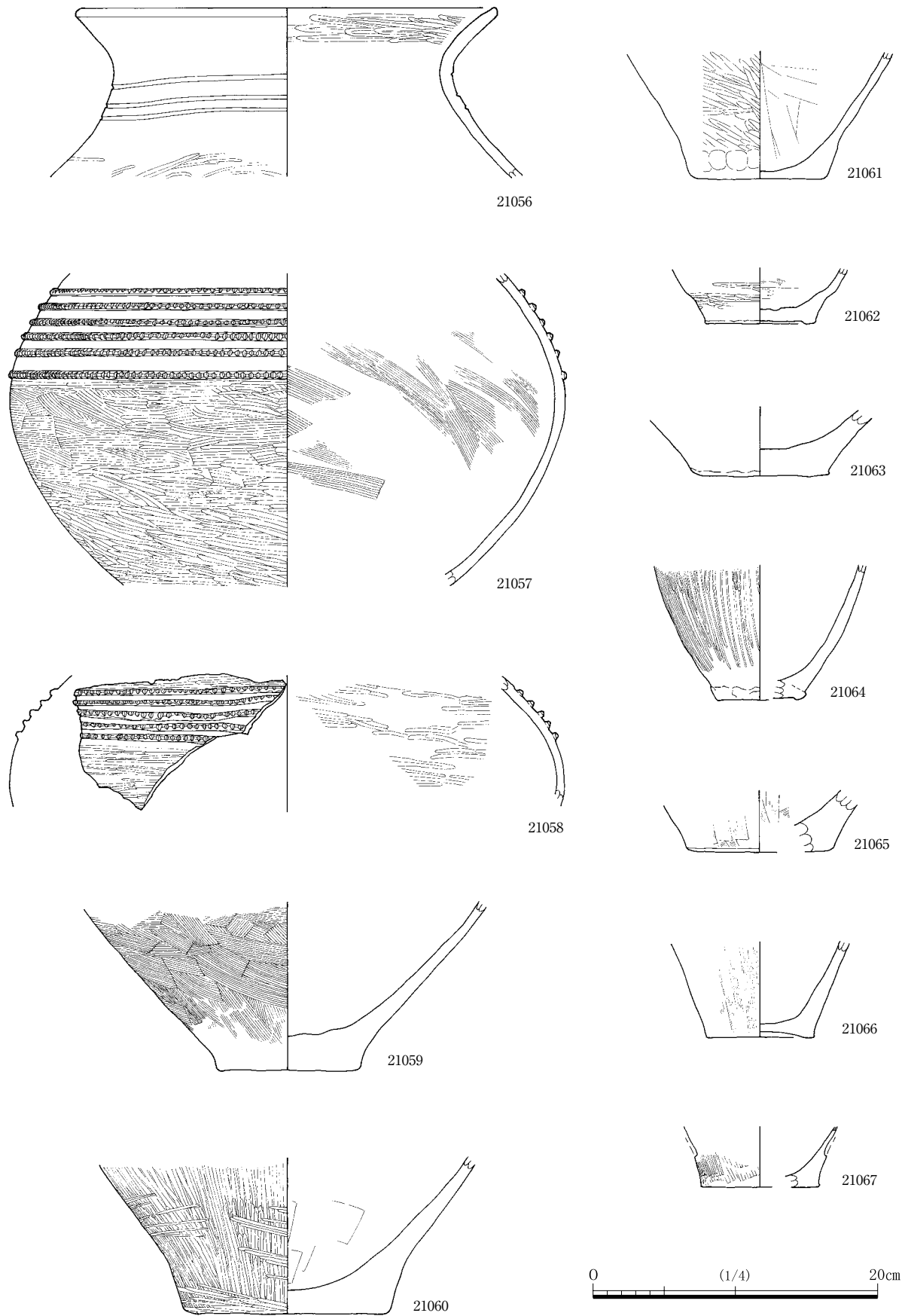


図248 03-1-2区 第11-2面1398土坑出土遺物(1)

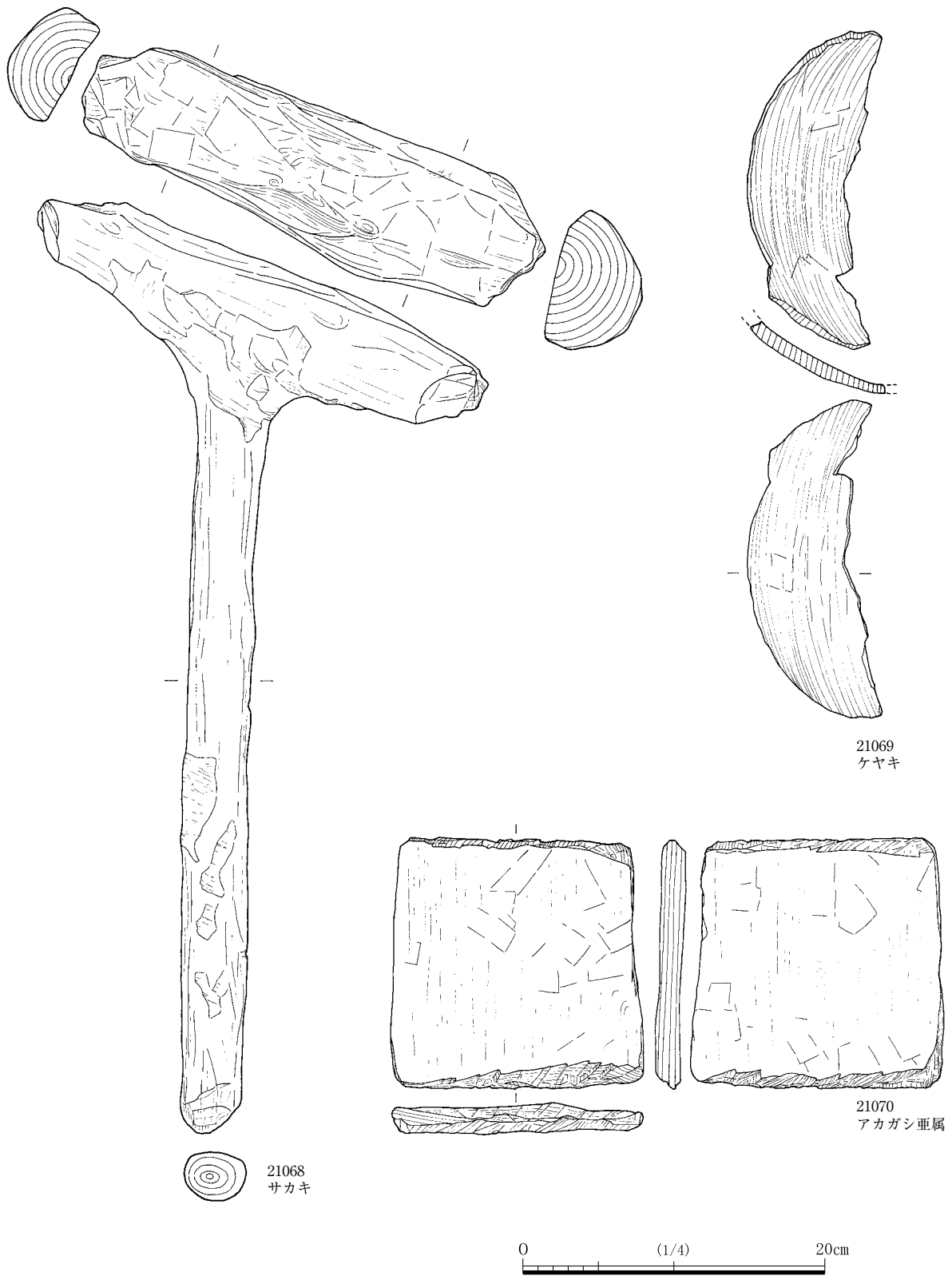


図249 03-1-2区 第11-2面1398土坑出土遺物(2)

には装着溝が穿たれておらず、先端も粗加工のままであるため未成品とした。全長63.3cmと長く、斧台厚6.4cm前後と分厚いもので、未成品であることと合わせて柱状片刃石斧の柄であると考えられよう。斧台長32.3cm、斧台幅9.6cm、柄部長47.1cm、柄部径4.0cmを測る。樹種はサカキ。

21069は用途不明の板材。長さ21.1cm、幅9.8cm、厚み約1.0cmの曲面をもつ板材。周囲はすべて破損するが、残存部分の最大径で26cmほどになるか。わずかに加工痕の見られるケヤキの柵目材。

21070も加工痕をもつ板材。平面形は約16cmの方形で、厚み2.0cmを測る。両辺には両面から斜めに加工していった痕が明瞭に残る。厚みもあり、未成品か。アカガシ亜属の柵目材。

1399土坑（図250・写真図版65） 調査区南西部に位置する。平面ほぼ楕円形で、東西を主軸とする。長径92cm、短径52cm、深さ8cm。埋土は3層に分れる。出土遺物は、土坑中央部の骨のみ。

1400・1402・1404・1405土坑は、調査区南東部に分布する。

1400土坑（図251 写真図版65・66） 平面ほぼ円形で、直径153～178cm、深さ72cm。埋土は6層に分れる。

「垂飾」形木製品（21071）を、図251の「1層」下部、植物遺体が層状に堆積する部分からやや膨らんだ面（後述するA面）が上、鈕状部が北東に向いた状態で検出した。壺2点（21072・21073）、壺の底部1点（21074）、甕の口縁部1点（21075）、鉢1点（21076）、高杯1点（21077）などの土器と木の棒2本（21078・21079）は、埋土中層の「3～5層」から出土した。

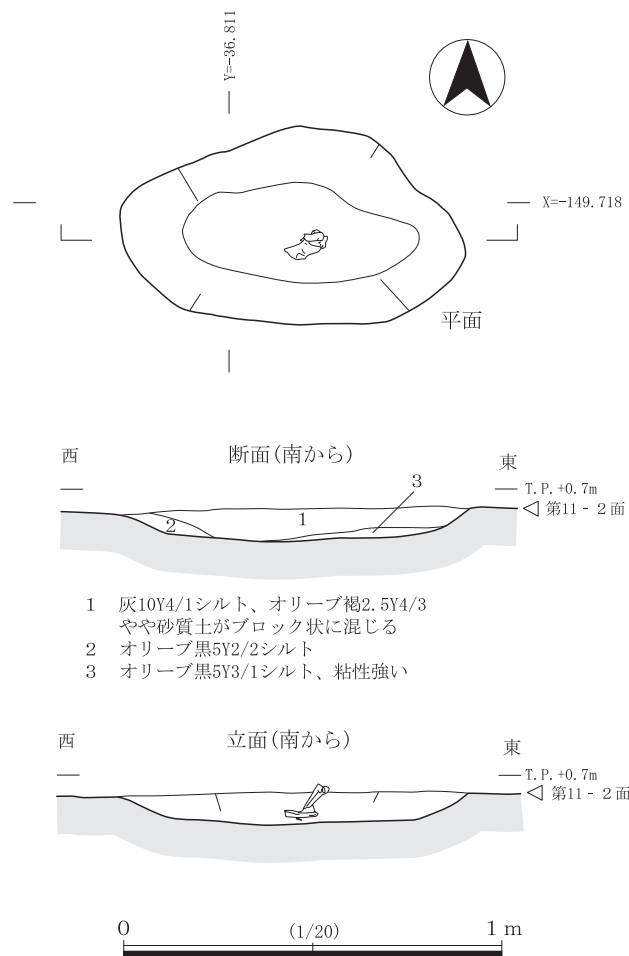
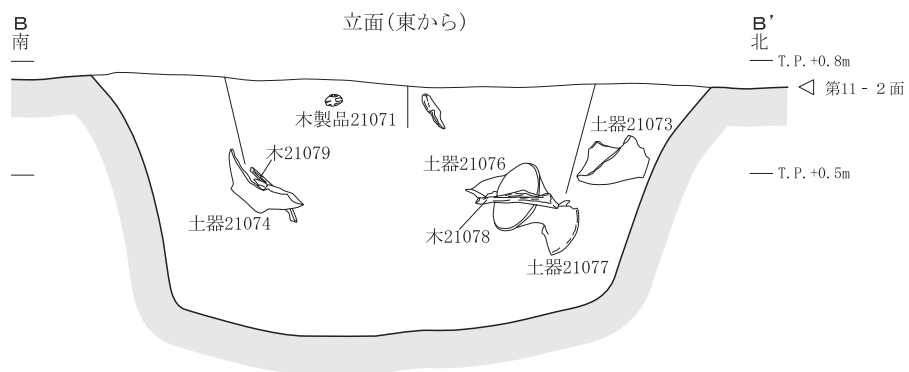
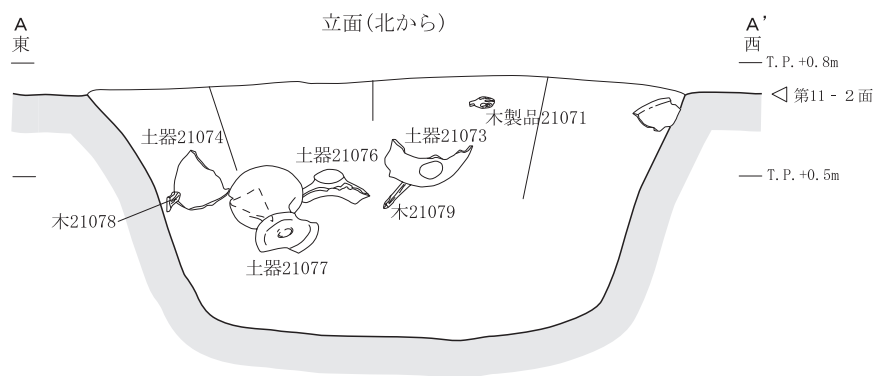
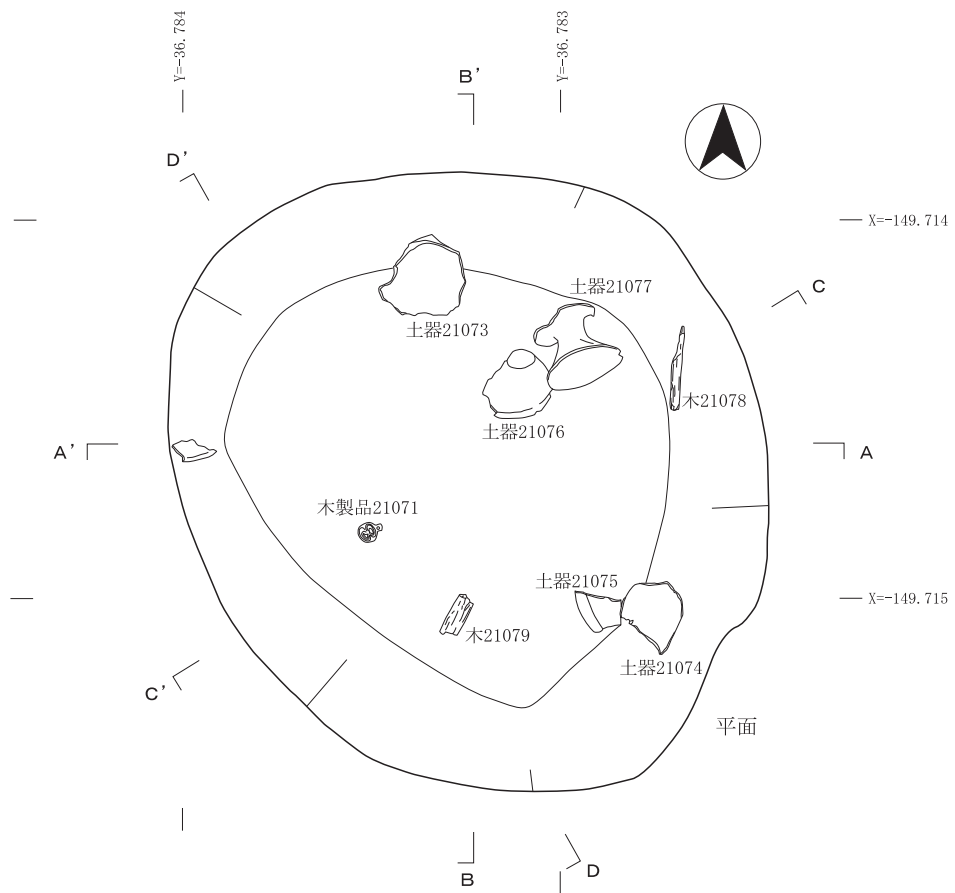
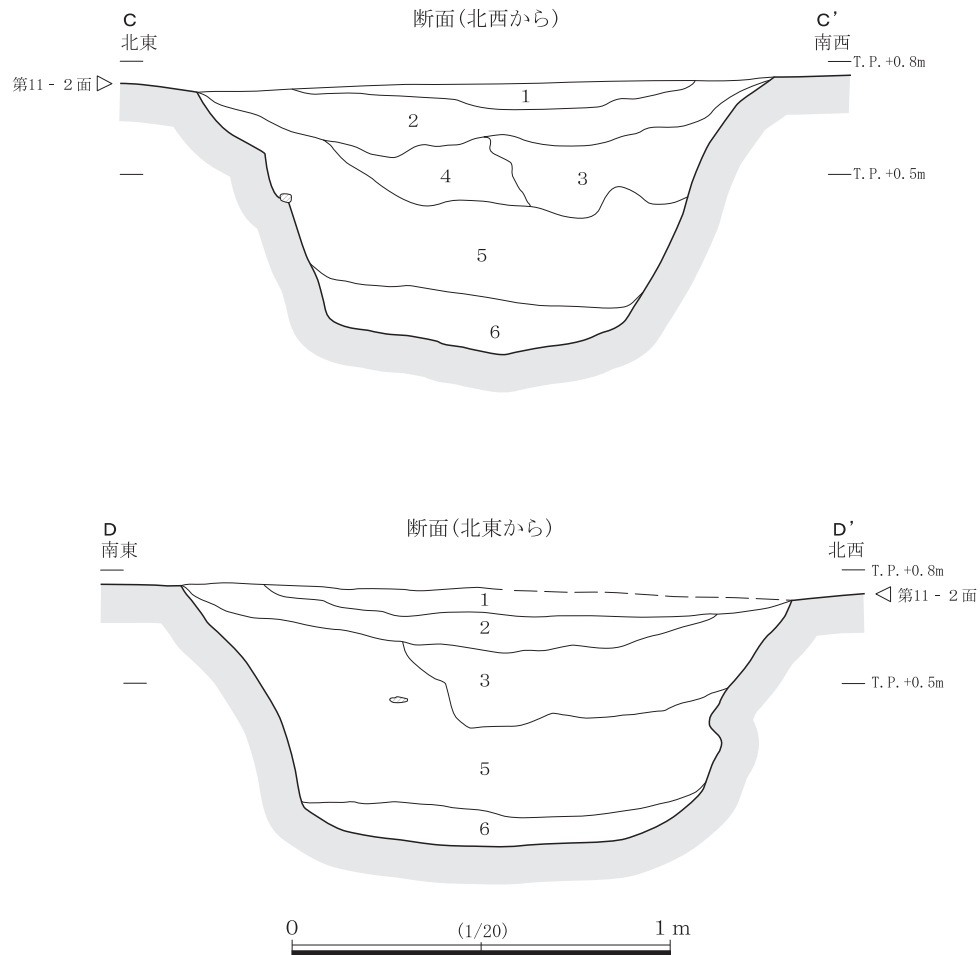


図250 03 - 1 - 2区 第11 - 2面1399土坑



第5章 03-1-2区の調査成果





- 1 オリーブ黒5Y3/1シルト、下層2cm程に植物遺体が層になってたまる、粘質土
- 2 オリーブ黒5Y3/1シルト(上層より細)、上層に炭酸カルシウムがたまる、植物遺体をやや含む(下層に多い)、ピピアンナイト多、粘質土、砂質土をラミナ状に含む
- 3 オリーブ黒5Y3/1シルトと灰オリーブ5Y5/2細砂が攪拌、植物遺体少量ピピアンナイト含む
- 4 オリーブ黒7.5Y3/1シルト、炭酸カルシウム少量含む、粘質
- 5 オリーブ黒5Y3/1シルトと灰オリーブ5Y5/2細砂、ラミナ、層の半ばと下層に植物遺体層状に堆積、粘質
- 6 オリーブ黒5Y3/2シルト(やや粗)、オリーブ黒5Y3/2粘質ブロック、灰7.5Y4/1シルト、暗オリーブ5Y4/4細砂～シルトがブロック状に入る、遺構形成時の崩落土か?

図251 03-1-2区 第11-2面1400土坑

図252 - 21071 (写真図版112) は「垂飾」形とした木製品。便宜的に出土時の上面であるふくらみのある面を「A」面、その逆の平らな面を「B」面とし、鈕状部を「上」、A面時の状態で向かって「右」「左」と呼称することにする。

一見するとカスタネットのように見えるこの木製品は、一体の削り物として作られている。縦5.0cm、横5.6cmの体部に長さ1.3cmの鈕状部が付き、体部の下半に深い切り込みが、両側面には左右に貫通する抉り孔がある。表面と側面には文様が刻まれ、全体的に黒い。この色は肉眼および顕微鏡観察によって生漆に由来することが判明した。木目は縦方向に密に観察され、柁目取りの製品である。木質は固く、広葉樹の可能性が高い。

鈕状部は五角形に近く、側面からみるとややA面にかたよって作り出され、径約0.5cmの紐孔が体部をかすめてあけられている。A面側、紐孔上部には、わずかながら磨耗している部分が観察できる。

体部は横から見ると中央やや下でA面側のふくらみが強く、最大厚2.6cmを測る。側面は幅1cm前後の面をなし、下半の切り込みは深さ0.8~2.5cm、幅0.6~0.8cm。切り込みの周辺には漆の塗布に伴う細かな皺が観察できる。

体部側面には下方にのびる4条の沈線と抉り孔がある。抉り孔は、縦1cmほどの不整な三角形に加工されている。X線写真と肉眼観察によると、孔は内部で縦0.3cm前後と細くなって、ごくゆるいV字状につながる。やや大きな右の孔から内部を観察すると、加工痕らしき左右に並ぶ凹凸や段がみとめられるため、抉り孔は両側からあけられたと推定される。

下部にある切り込みの奥には、円形のごく小さな穴が10数個、やや不規則ながら二列に並ぶ。内壁には、この穴の痕跡である凹凸が残り、開口部へ向かって放射状にひらく。穴の痕跡は奥へいくほど細く(径0.5mm)、開口部へ向かって太くなる(径3~4mm)。B面側の内壁、開口部近くになると薄く剥離している部分があり、その奥にも小さな穴が並んでいる。

両表面には突帯4本を基本として「8」の字状の文様が浮かし彫りされている。この文様は「8」の字のように中心で交差せず、工字文、流水文にも類似する。両面で多少の違いがあり、B面側で全体的に突帯の幅も広く、1帯がくびれた部分で途切れてしまっている。また、彫りこまれた部分には、細かな加工痕がわずかに観察される。

形状から「垂飾」形としたが、現時点では弥生時代前期あるいはその前後にこのような類例は見当たらず用途は不明である。ただし遺物に残された痕跡から構造だけでも推測しておきたい。鈕状部の擦痕からは紐や房飾りの存在が指摘できる。抉り孔は体部を貫通しているため、装飾のためだけにあけられたとは言い難く、機能的な意味をもっていた可能性が高い。さらに前述した切り込み内部に穴が並ぶ構造だが、奥の穴や、内壁に残る凹凸がきれいに残っているため、切り込みを入れるための加工とは考えづらい。細い棒や紐のようなものがはさまれ、それが放射状にひらいていた状況が復原されよう。

図253 - 21072~21074は壺。21072は肩部の削り出し突帯上に沈線3条が施される。21073は胴部上半部分で破損するが、沈線3条の上方は削り出されて段状になる。21074は壺底部。胴部へ向かって大きくひらき、分厚い底部下面にもミガキが施される。

21075は甕か。口縁部は弱く外反し、口縁端部はややまるみのある面をもつ。成形時の指痕が残るやや粗い作り。

21076 (写真図版113) は鉢。口縁部が外反するもので、内外面ともにミガキが密に施されて光沢をもつ。内面には成形時のナデ上げによる凹凸がよく残る。

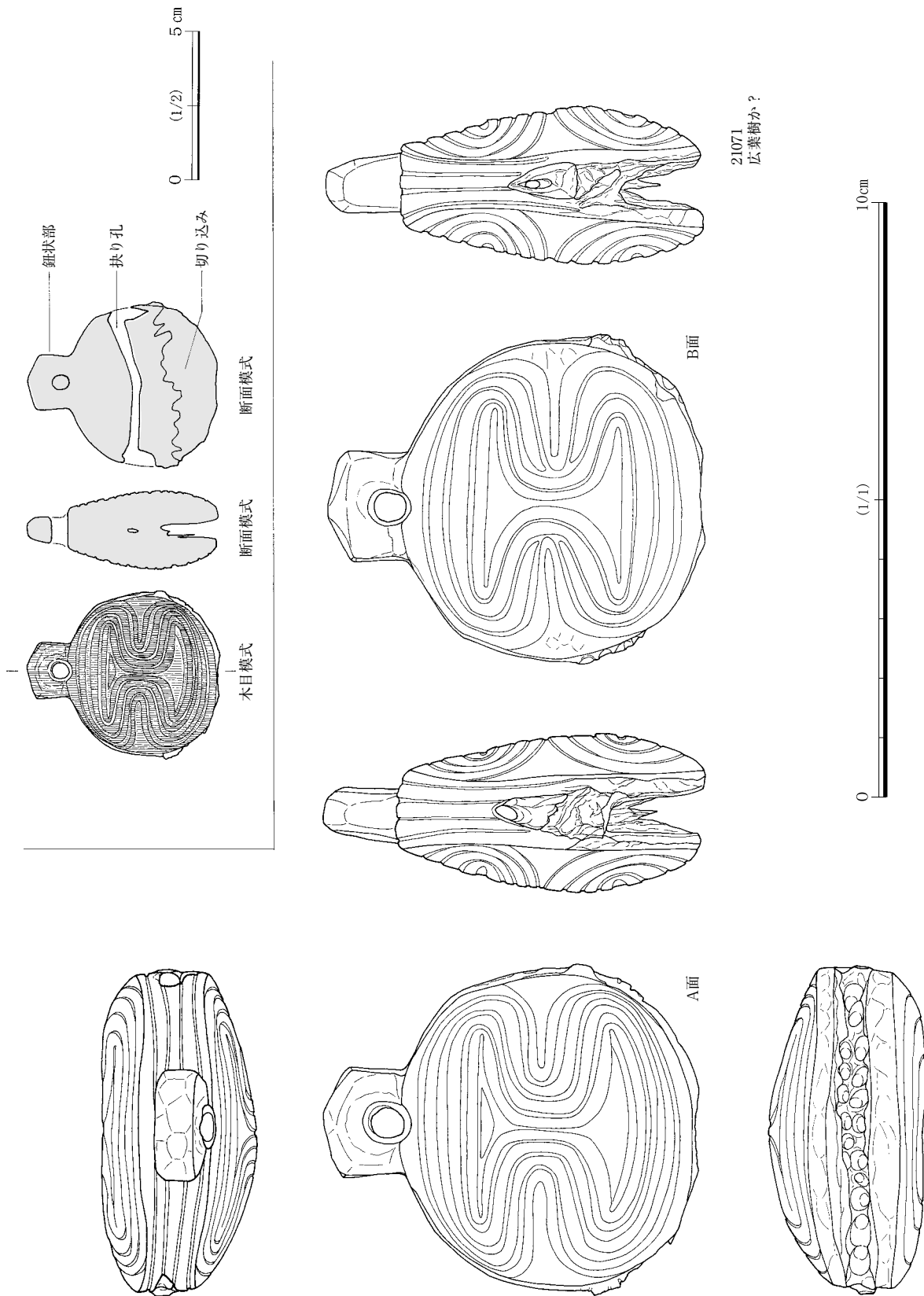


図252 03-1-2区第11-2面1400土坑出土遺物(1)

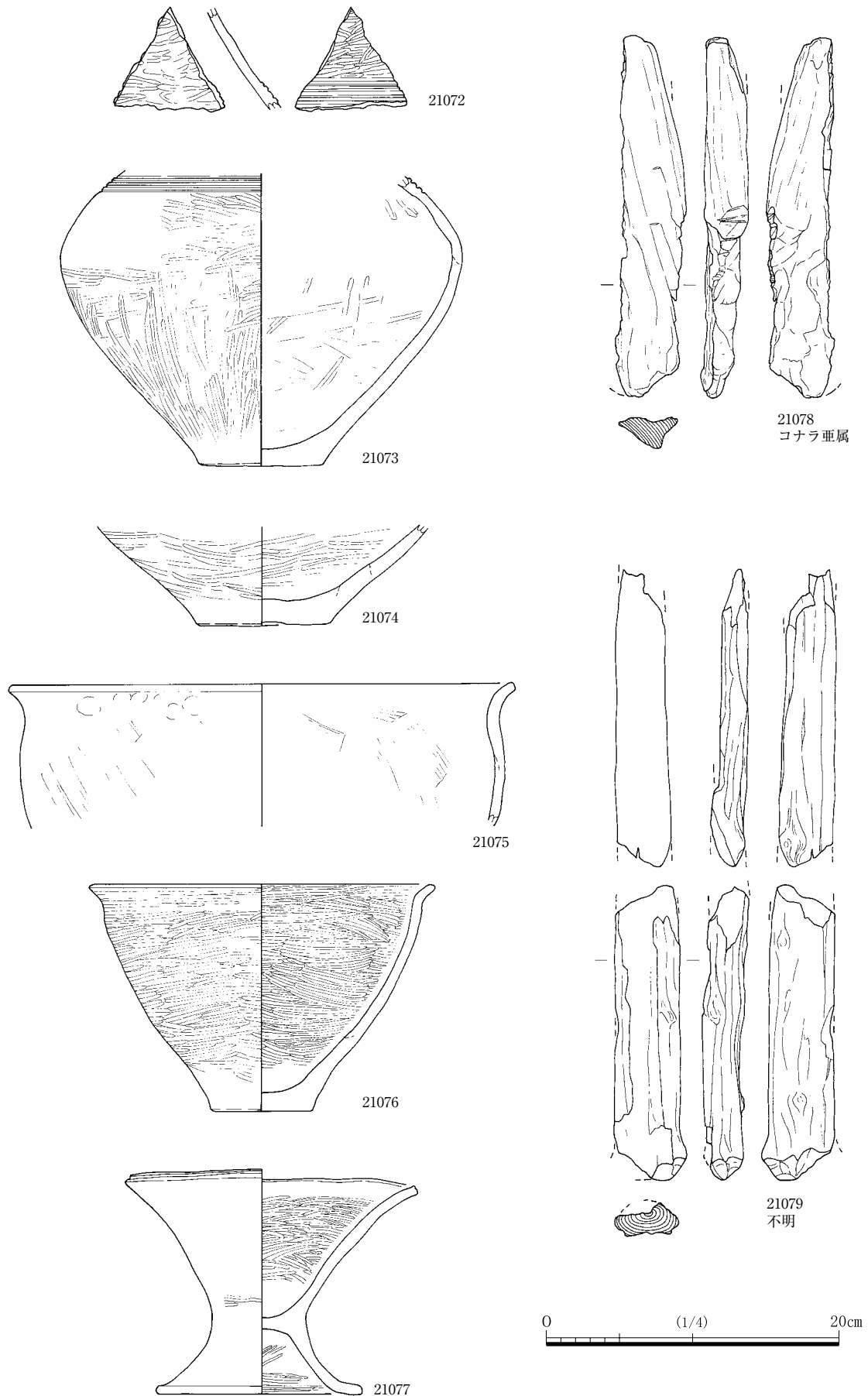


図253 03-1-2区 第11-2面1400土坑出土遺物(2)

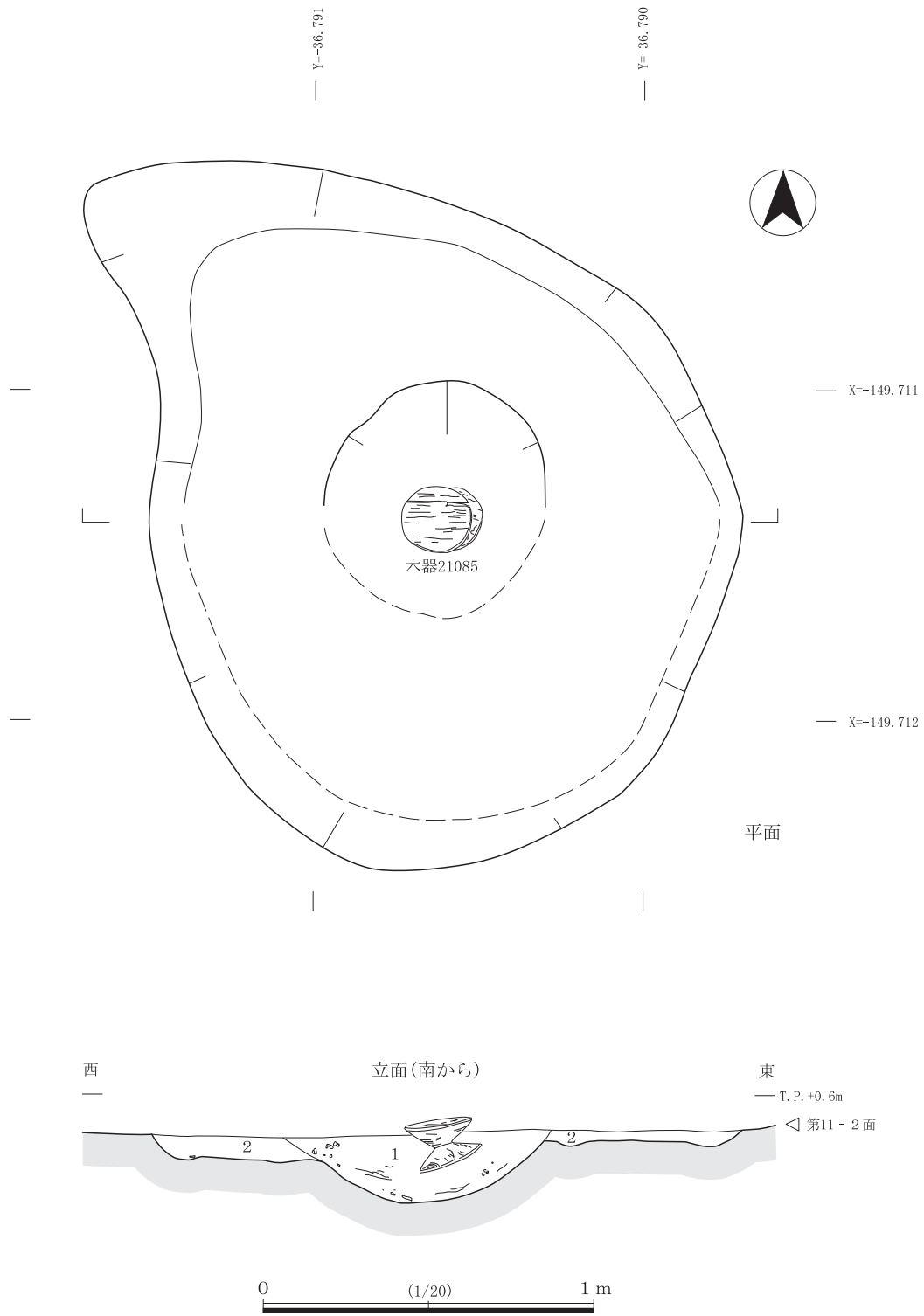
21077 (写真図版113) は高杯。杯部は深く、器高の約3分の2を占めるもので、杯・脚部とも外反して脚部は水平にやや長くのびる。文様としては、口縁端部にめぐる沈線1条のみ。器形は歪みが大きく、被熱によると考えられる器面の剥落が、外面はほぼ全面、内面は口縁部に著しい。

これらの土器は良好な一括遺物として取り扱うことができ、主に壺の形態からI - 3 ~ 4 様式に位置づけられるものと考ええる。

21078・21079は加工痕のある棒。21078には、長辺の中央に6段になった加工痕があり、全体に炭化する。柁目材ではあるが、長軸に対して斜めの木取りとなる。コナラ亜属。21079は扁平な材をほぼ原木のまま用いたもので、一方の端にのみ加工痕が見られる。2片に分かれるが、出土状況から同一材と判断できる。樹種不明。



図254 03 - 1 - 2区 第11 - 2面1402土坑



- 1 オリーブ黒7.5Y3/1シルト、ピビアンナイト少量と炭酸カルシウムを含む
- 2 オリーブ黒7.5Y3/1シルト、植物遺体含む

図255 03-1-2区 第11-2面1404土坑

1402土坑（図254・写真図版67） 平面隅丸長方形で、主軸方位は北北西 - 南南東。長径164cm、短径111cm、深さ38cm。埋土は3層に分れる。出土遺物は、弥生土器の小片3片と木2点、計5点。樹種は、大きいほうがアカガシ亜属、小さいほうは不明である。

1404土坑（図255・写真図版67） 平面は直径1.8mほどの円形を基本とするが、北西に突出している。したがって、北西 - 南東の径は243cm、北西 - 南東の径は182cm。検出面からの深さは43cm。埋土は基本的にオリブ黒7.5Y3/1シルトだが、土坑中央部のビビアンナイトと炭酸カルシウムが含まれた直径約65cmの範囲はやや深く、その中央から木製高杯の未成品が出土した。木製高杯未成品1点以外の出土遺物は、弥生土器12片（うちI様式4片）、木片1片で、計13点。

図256 - 21080は甕。口縁部は「く」の字状に外反し、頸部に沈線2条がめぐる。口縁部の刻み目は、端部というよりその下面にごく浅く施されている。内面はミガキ、外面は煤の付着が著しい。なお、同一グリッド11層出土の破片と接合した。I - 2～3様式。

21081は甕あるいは鉢の体部。外面に沈線3条が施され、横方向のミガキで調整される。破片に丸みがほとんどなく、径の大きさが窺われる。I様式。

21082は底部。おそらく甕であろう。外面は工具ナデによって平滑に仕上げられる。外面煤付着が著しい。胎土はI様式。なお、底部下面には朮かと思われる圧痕が付いている。形態・大きさは合致するが、特有の繊維状痕が見られないため、可能性にとどめておく。

21083・21084は壺蓋。21083（写真図版113）は焼成後、中央に穿孔が行われている。全面をミガキで仕上げるが、成形時の凹凸が残る。21084は前者と径がほぼ同じだが、より高さがある。全面ミガキ調整で光沢のある丁寧な作りで、焼成後穿孔が1孔残る。いずれもI様式であろう。

21085（写真図版113）は木製高杯の未成品か。図256の上下は出土時と同じ。径は上方で20.1cm、下方で18.5cm、器高は9.9～12.9cmと傾いている。横木取りで、側面にはくびれた部分に向かう加工痕が明瞭に残り、取りきれなかった凹凸がそのままにされている。上・下面ともに加工痕や削り込みはないきれいな面をもち、未成品と判断した。脚柱部が作り出されていないため高杯とすればやや珍しい形とな

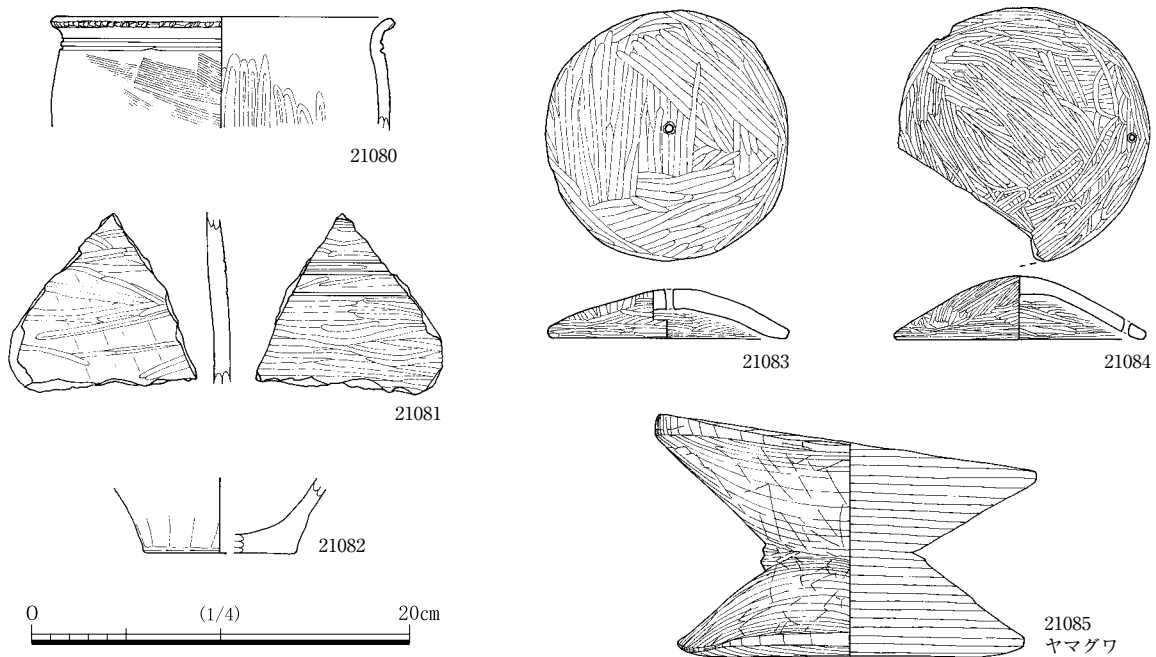


図256 03 - 1 - 2区 第11 - 2面1404土坑出土遺物



るだろう。なお、中央部で分割して容器とすることもできる。樹種はヤマゲワと鑑定されており、容器の可能性が高い。

1405土坑（図257・写真図版67） 平面楕円形。主軸方位は北北西-南南東。長径147cm、短径94cm、深さ27cm。埋土は6層に分れる。弥生土器の体部小片1片のみ出土した。

1401溝・1403溝は、調査区南東部、1402土坑の周辺にある。規模・底面のレベル（およそT.P.+0.65m）・埋土が共通するので、ほぼ直角に曲がる一連の溝であった可能性もある。いずれも土坑に比べて浅く、切り合い関係からみると土坑よりも古い。

1401溝 東の1400土坑と西の1402土坑をつなぐように、東北東-西南西にのびる。検出長2.1m、幅23~28cm、深さ9cm。埋土は黒褐10YR3/2シルト。出土遺物なし。

1403溝 1402土坑の北西角から北北西にのびる。検出長0.6m、幅16cm、深さ5cm。埋土は、1401溝と同じく黒褐10YR3/2シルト。出土遺物もない。

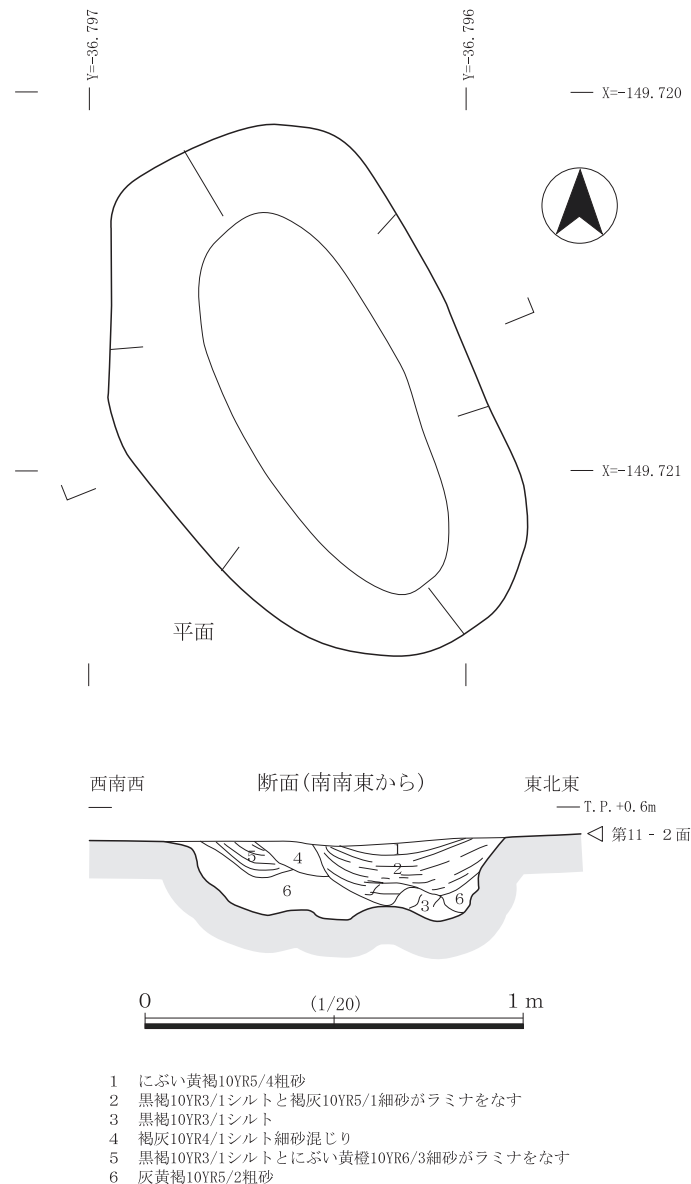


図257 03-1-2区 第11-2面1405土坑

(29) 03 - 1 - 2 区第11 - 2 層の遺物 (図258・写真図版113)

第11 - 2 層も第11層と同様に自然堆積層である。調査区の北～中部と南部 (第6面252大溝よりも南の部分) とでは堆積状況が異なるので、遺物も分けて集計した。

調査区北～中部からは、弥生土器108片 (うちI様式13片、I～II様式3片、II様式3片)、転用土製円板1点、サヌカイト剥片3点、木製品2点、木片3片、種子4点、炭1点、計122点出土した。

調査区南部からの出土遺物は、弥生土器12片 (うちI様式3片) のみ。

図258 - 21089・21090のみ南部出土で、ほかはすべて北～中部から出土した。報告する土器はほぼI様式前半に所属しよう。

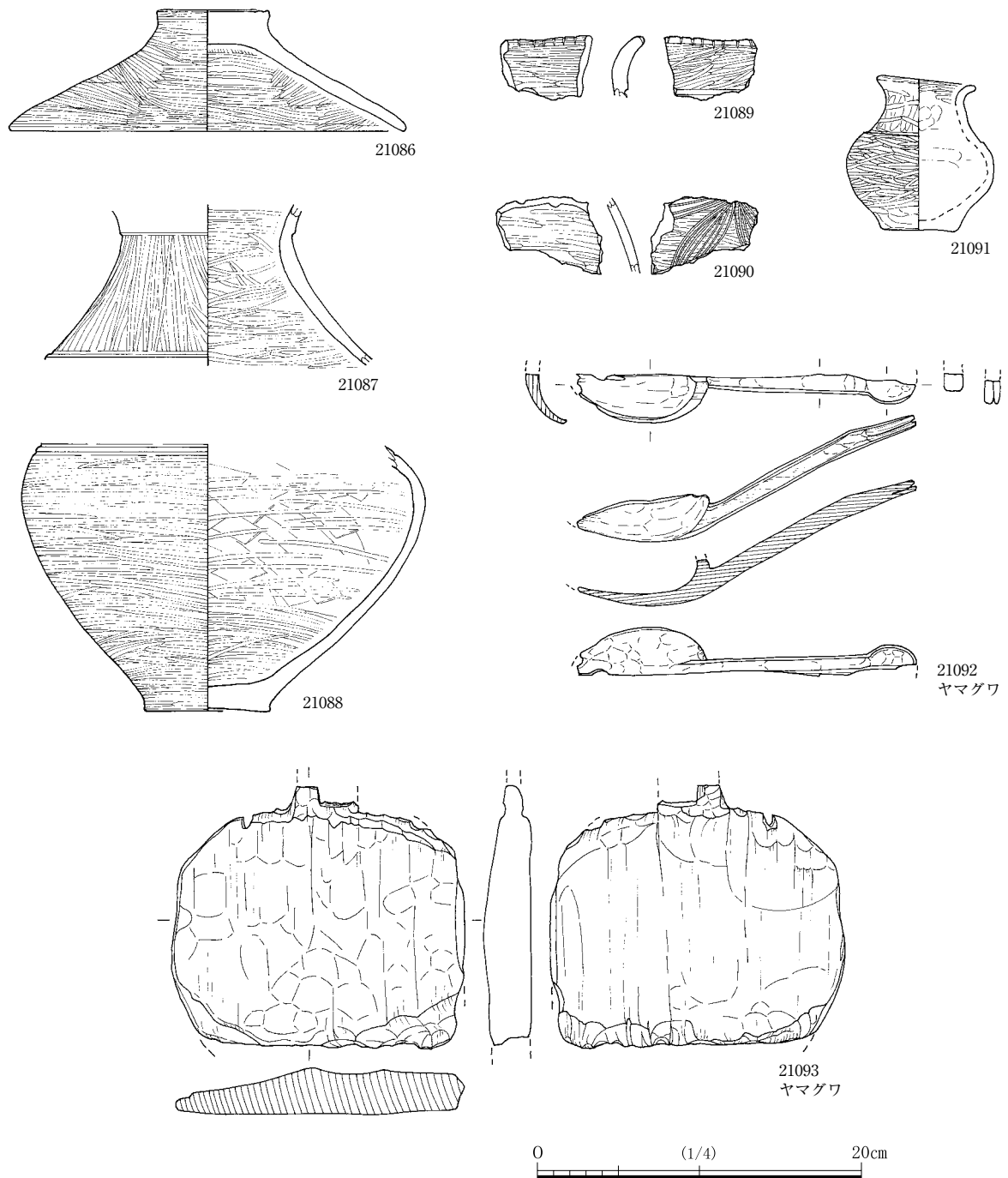


図258 03 - 1 - 2 区 第11 - 2 層出土遺物



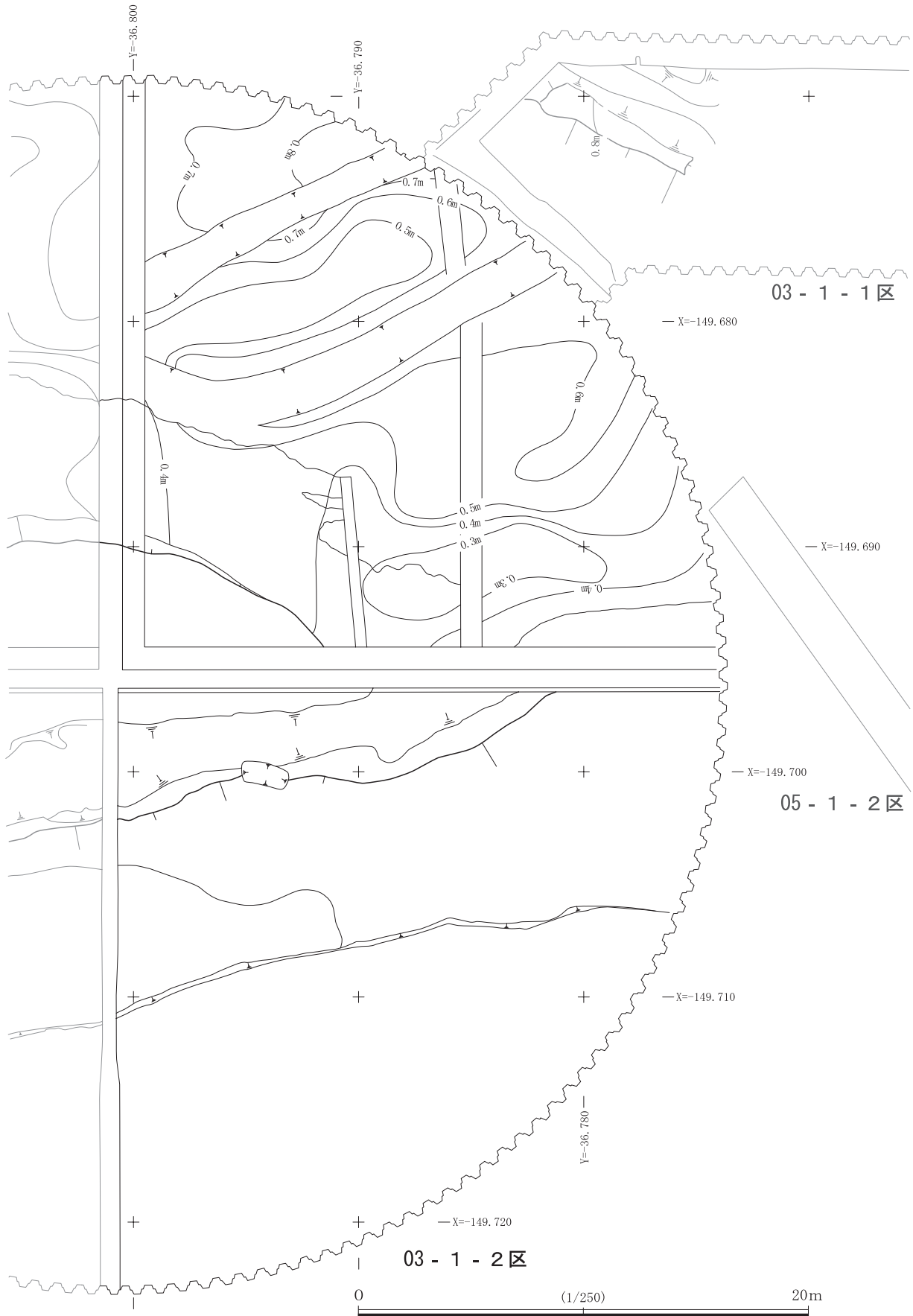


図259 03-1-2区 第11-3面

21086は甕蓋。内外面ともに細かくミガキが施される。外面下半と内面に煤が付着する。

21087は壺。口縁部は段を形成し、胴部は削り出し突帯で破断面には、沈線あるいは突帯の下端がころうじて残る。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキが施される。チャートを含み、灰白色を呈する胎土・色調は生駒山西麓産とは異なる。I-1~2様式。21088は壺の胴部から底部。胴部上半には削り出し突帯がめぐり、外面のミガキは底部下面までおよぶ。I-2~3様式であろう。

21089は壺の口縁。口縁は短く外反し、頸部には段を形成する。口縁端部には刻み目というよりも浅い沈線が内面にまで及ぶ。I-1様式。21090は壺体部片。有軸木葉文が沈線で描かれる。ミガキの方向と傾きから、斜軸のものであろう。I-1~2様式。

21091（写真図版113）は小形の壺。口縁部を一部欠くがほぼ完形。胴部上半に段をもち、頸部側には横方向の強いミガキを沈線のように施して段を強調している。I様式前半か。

ほか木器も良品が出土した。21092（写真図版113）は匙。掬い部の口縁を柄の付け根より高く作り、口縁と柄が鈍角に取り付く弥生時代前期に類例の多いもの。掬い部はおそらく紡錘形を成し、削りぬかれて深さのあるものであろう。柄の先端は角度を変えて、楕円形に作り出していたと考えられる。なお、先端部の切れ込みは新しく、現代の割れと思われる。ヤマグワの横木取りで縦半分を破損する。残存長20.9cm、掬い部の残存幅3.0cm。

21093は用途不明の木器。残存長15.9cm、幅18.0cm、最大厚2.8cmの板材で柄状の突出部が続いていたらしい。肩部はなで肩気味で、厚みを減じて柄状の突出部へ続く。平面形から判断すれば鋏・鋤の可能性も考えられるが、柄状の部分へと薄くなり、また横断面も片側へ厚みを減らす。力のかかる形態には不適ではないだろうか。また突出部とともに先端部も破損するが、あまり長く続かず、やや横長の形態になるように思われる。樹種はヤマグワで、容器の可能性もある。

(30) 03-1-2区第11-3面の遺構と遺物（図259・写真図版68）

調査区北部のみに分布する粗砂層の上面を第11-3面とした。

面の高さはT.P.+0.2~0.8mで、ゆるやかに起伏している。検出遺構はない。

(31) 03-1-2区第11-3層の遺物（図260）

弥生土器176片（うちI様式16片、I~II様式3片、II様式6片）、土玉1点、叩き石1点、サヌカイト剥片10点、小礫3個、加工木1点、木片6片、計198点出土した。

弥生土器は、今回の山賀遺跡の調査では残りが良く、表面・割れ口ともシャープな場合が多いが、第

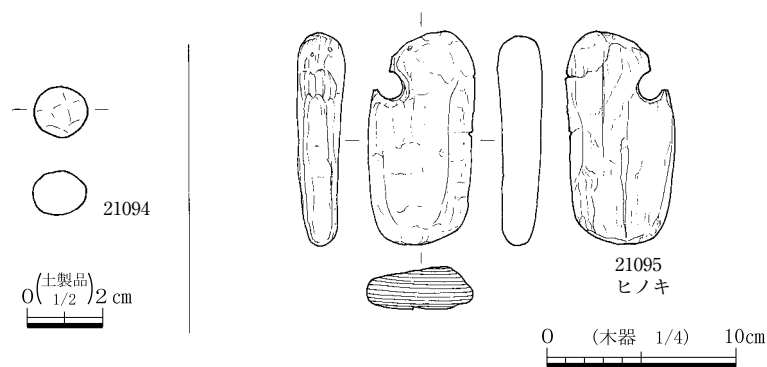


図260 03-1-2区第11-3層出土遺物

11 - 3層から出土した176片の弥生土器の3割程度は水流によるローリングを受けている。

図260 - 21094は土玉か。径1.2~1.5cmのややつぶれた球形で、2.3gを量る。表面は平滑で凹み等はなく、一部欠けるがほぼ完形。

21095は用途不明の木材。長さ11.2cm、幅5.6cmの長楕円形の板の端に、径1.5cmの円形孔が口をあける。厚み最大2.8cmとやや厚い。周縁はまるみを帯び、破損したようには見られない。孔のあることから浮子の可能性もある。樹種はヒノキ。

### (32) 03 - 1 - 2区第12面の遺構と遺物 (図261~264 写真図版69・70・114)

黒~オリーブ黒色のシルトを主体とする土壤化層の上面である。

調査区中央部から西部にかけての範囲でのみ検出した。その部分の高さはT.P.+0.2~0.8mで西が高い傾向にあり、東に向かうにつれて低くなり第12面は調査限界のT.P.0.0mよりも下にもぐる。

遺構として土坑1基(遺構番号1406)を検出した。

1406土坑(図262・写真図版70) 調査区南東部に位置する。平面不整形で、長径202cm、短径142cm、検出面からの深さ29cmを測る。埋土は4層に分かれる。出土遺物は、弥生土器14片(うちI様式3片)、高杯と考えられる木製品1点、木製鋤未成品1点、鹿角1点、計17点。

木製高杯(21101)は、土坑中央部から、杯部を上、脚部を下として出土した。杯部に溜まっていた土に少量のビビアンナイトがみられたが、遺物は含まれていなかった。

図263 - 21096(写真図版114)は壺。頸部の削り出し突帯上は楕円形の刺突文で飾られる。さらに胴部上半にも幅の狭い削り出し突帯がめぐり、突帯の上下を沈線で縁取る。頸部はややひらくが短く、胴部は上半で横に張る。21097は壺の肩部。削り出し突帯の下端と沈線2条が残る。

21098は底部。外面は底部下面までナデによって平滑に整えられる。内外面ともに煤付着。

21099は鉢。外反する口縁をもち、内外面ともにミガキが丁寧に施される。

これらの土器は主に壺の形態からI - 1~2様式に位置づけられよう。

21100は平鉢の隆起部と考えられる。残存長は10.8cm、最大厚3.9cm。アカガシ亜属を用いる。

図264 - 21101(写真図版114)は高杯の未成品か。口径33.2cm、底径25.4cm、器高18.0cmを測るもので、ずんぐりした形である。身の彫りは4cm前後(3.9~4.2cm)とごく浅く平らな面をもつ。さらに横木取りで、力のかかる中心に木心が位置しないため、臼としては不適である。下面は平坦に仕上げられるが、加工痕が残る。全体に加工痕が荒々しく残ったままで、未成品あるいは脱穀以外の臼の用途を考えるべきか。土器台との指摘もあった。樹種はケヤキである。

### (33) 03 - 1 - 2区第12層の遺物 (図265)

弥生土器45片(うちI様式1片、I~II様式1片、II様式6片)、石庖丁1点、サヌカイト剥片1点、計47点出土した。

図265 - 21102は大型石庖丁の破片であろう。薄く仕上げられ、体部には研磨痕がよく残る。残存長7.45cm、幅7.21cm、厚み0.55cm、重さ37.7g。

### (34) 03 - 1 - 2区第13面の遺構と遺物 (図266・写真図版71)

第12層の黒色土壤化層を除去した青灰色シルト~粗砂層の上面である。



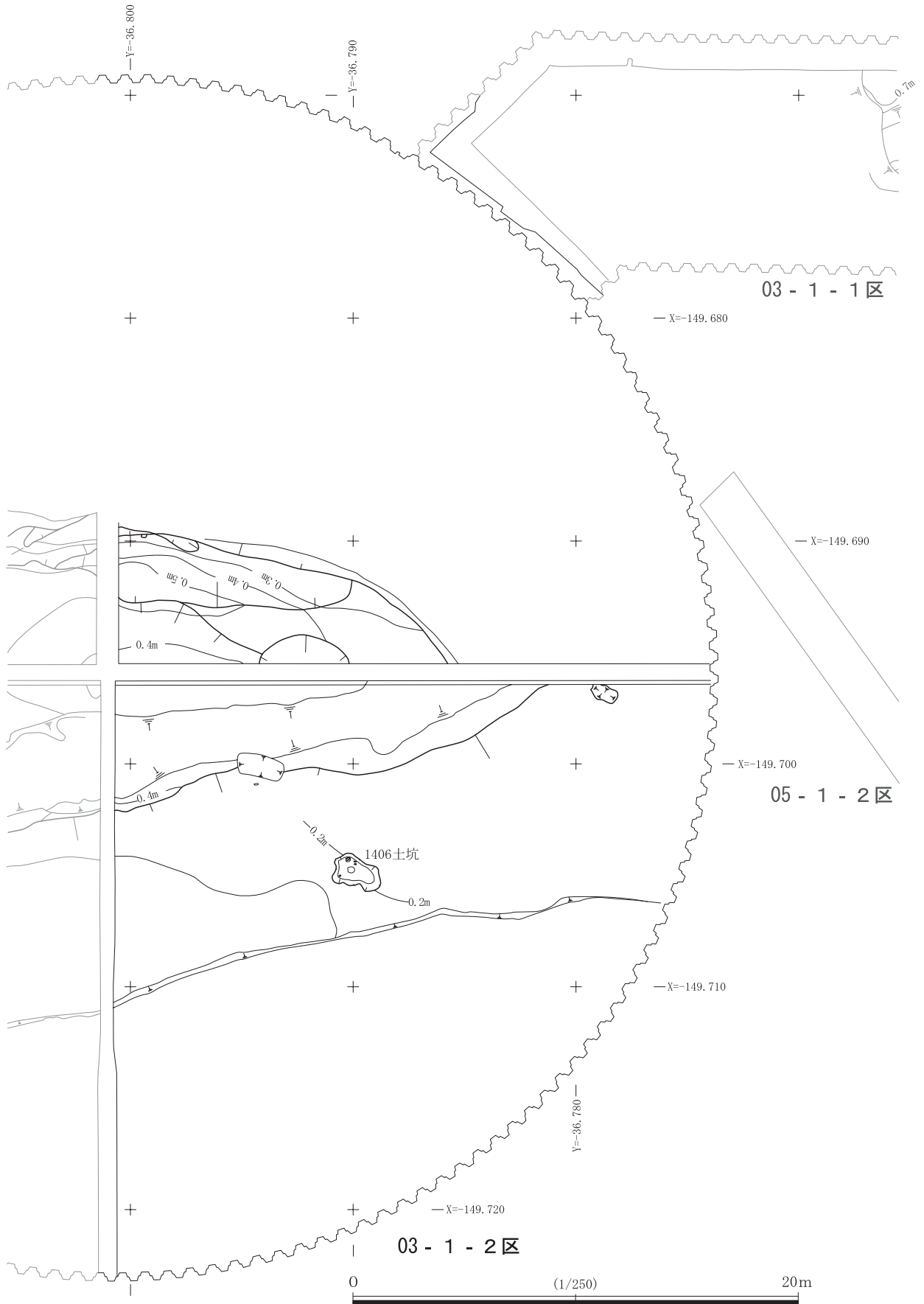


図261 03-1-2区 第12面



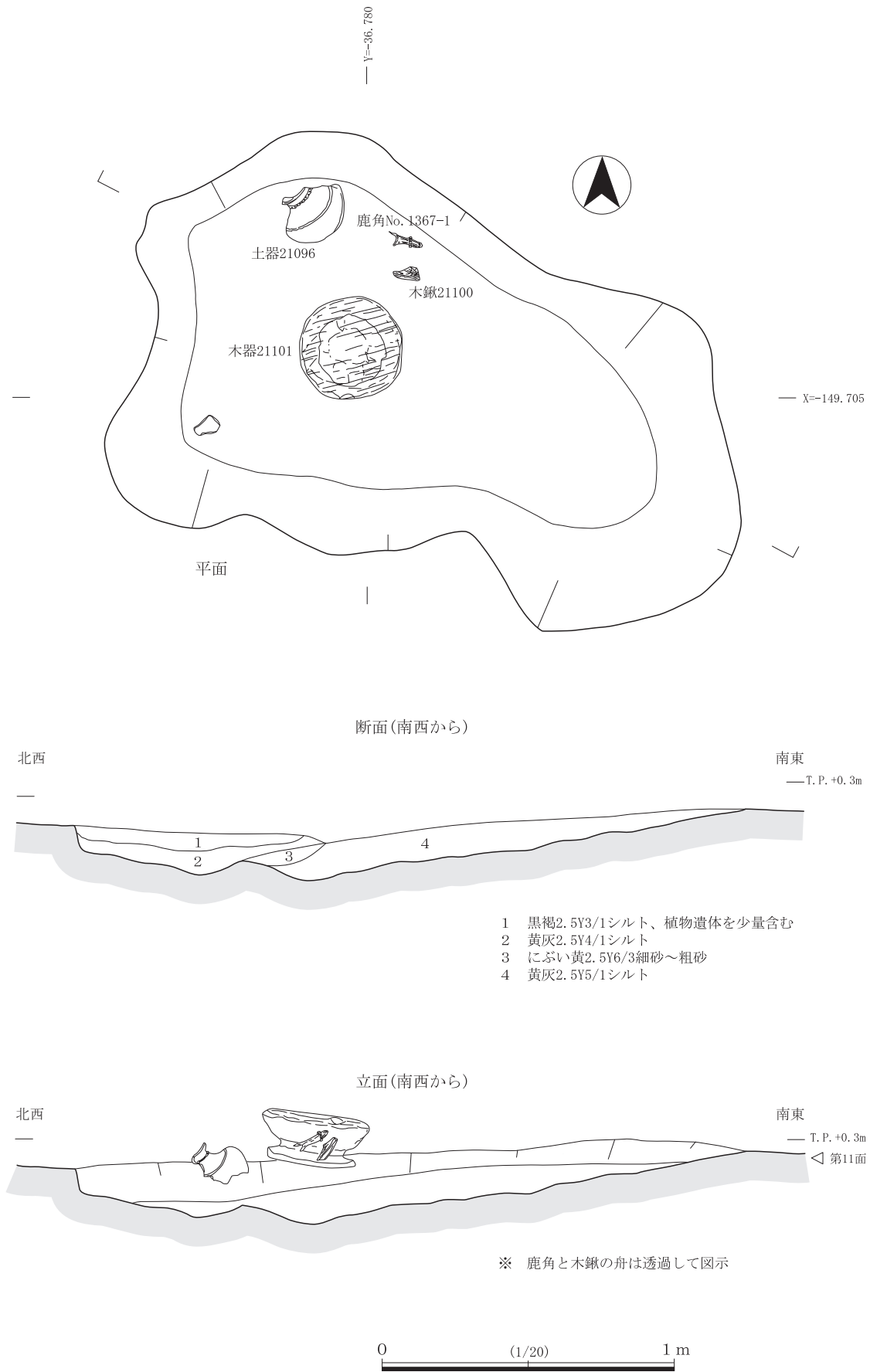


図262 03-1-2区 第12面1406土坑

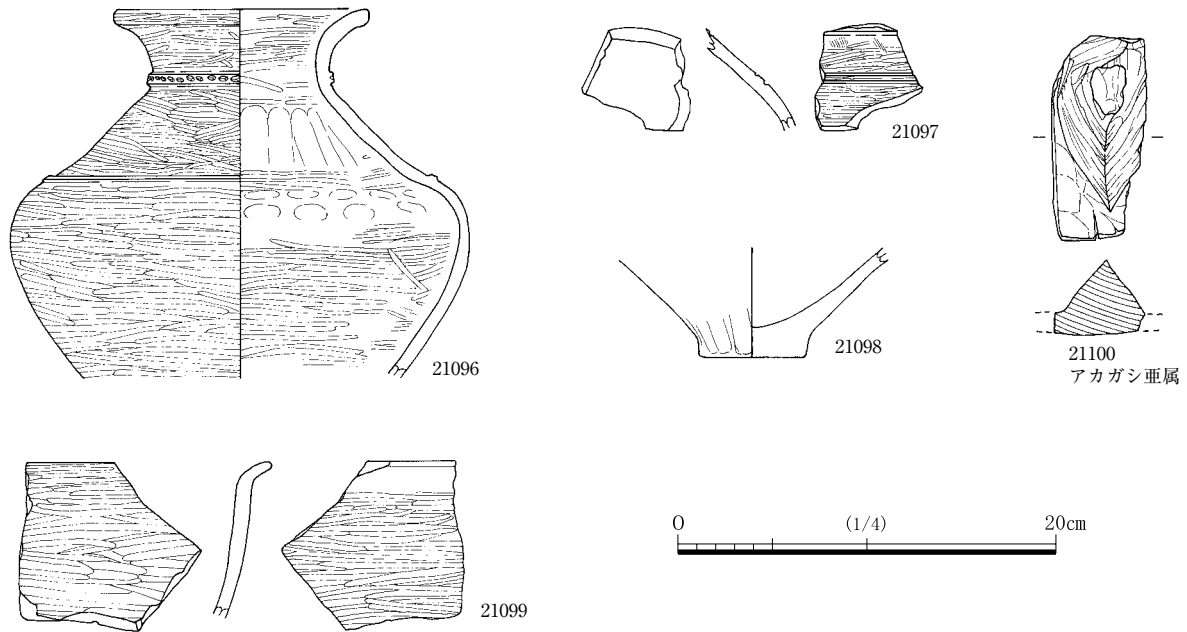


図263 03 - 1 - 2区 第12面1406土坑出土遺物（1）

第12面と同様に、調査区中央部から西部にかけて検出した。その部分の高さはT.P.+0.1~0.7mで西が高く、東に向かうにつれて低くなり調査限界のT.P.0.0mよりも下にもぐる。検出遺構はない。

(35) 03 - 1 - 2区第13層の遺物（図267）

弥生土器74片（うちⅠ様式7片、Ⅱ様式3片）、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、木杭1点、計77点とシカあるいはイノシシの骨が出土した。

図267 - 21103は甕。口縁端面に刻み目、頸部に沈線3条が施されるⅠ - 2~3様式。

21104は杭。柱目取りで、加工痕がよく残る。先端を削って尖らせているが、潰れている。残存長31.5cm、幅・厚みは1.8~3.4cmを測る。

(36) 側溝・サブトレンチ出土遺物（図268~270・写真図版114）

ほか、側溝やサブトレンチ掘削時にも良品が出土している。個別の出土層位については観察表を参照されたい。

図268 - 21105は大形の細頸壺の頸部。内湾する頸部と胴部の境に貼り付け突帯3段と簾状文を施す。Ⅲ~Ⅳ様式。21106は沈線によって、縦方向の綾杉文、その下に柵のような縦位の沈線を2段にめぐらせる。Ⅳ~Ⅴ様式。

21107は無頸壺。頸部に対面する形で孔があく。底部下面は黒変、外面は煤が付着し、内面には白色の物質がこびりついている。Ⅲ - 1様式。21108は無頸壺の底部。色白で、上げ底の左右には紐孔が2つあく。紐孔は焼成前の穿孔。Ⅱ様式後半。なお、21108と21116は第6面上調査時に出土した遺物であるが、出土位置やレベルから第4面176溝に伴う可能性が高い。

21109は無頸壺の体部。体部下が「く」の字状に大きく屈曲するもので、屈曲部がわずかに残る。文様はクシ描きの流水文が描かれ、文様間はミガキが施される。Ⅱ様式。

21110は壺の肩部で、器面をクシ描き流水文で飾る。Ⅱ様式。

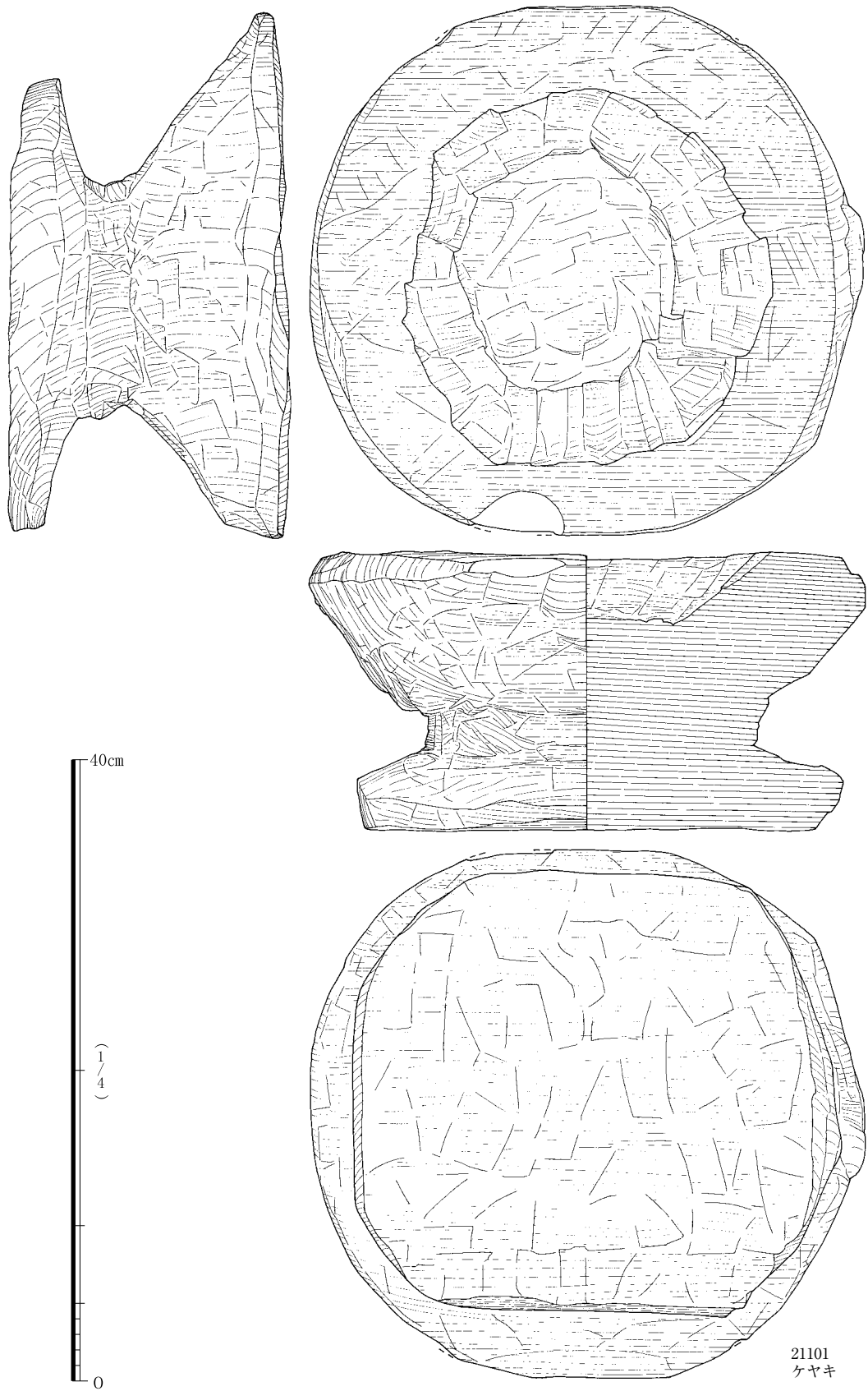


図264 03-1-2区 第12面1406土坑出土遺物(2)

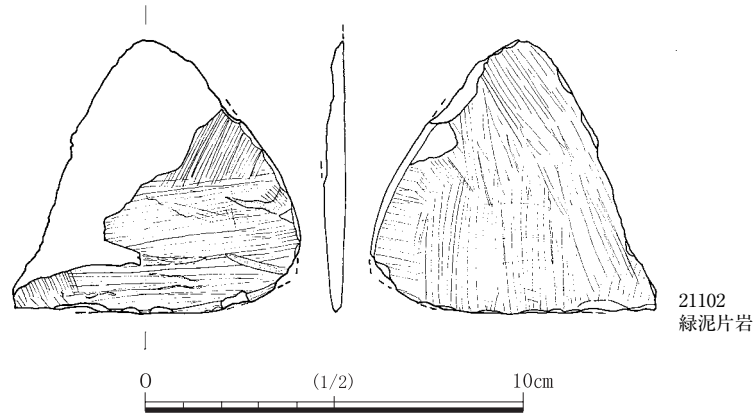


図265 03-1-2区 第12層出土石器

21111は壺の体部片であろう。文様は太目の沈線によって3区分されている。上部には2条一對の工具によって頂点の開いた菱形の文様が描かれ、少なくとも3単位の菱形が横に並ぶ。中央には4組8条の直線文、下部には三角列点文を横に配する。中央の直線文は太細併用沈線の一種と捉えることができよう。Ⅰ様式末からⅡ様式初頭に位置づけられるか。

21109～21111は南辺側溝の第3層以下から出土したが、出土レベルからすれば第6層に所属する可能性が高い。

21112は口径31.1cm、器高40cm以上を測る大形の甕。外面縦ハケ、口縁部内面を横ハケと波状文を施す淀川水系～近江系の土器。Ⅱ様式。内外面に煤が付着する。第6～8層のサブトレンチから大半が出土し、第9面1397溝の破片と接合した。

21113は甕。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。端部はしっかりとした面をもち、Ⅱ～Ⅲ様式初頭に位置づけられる。21114も甕。体部の沈線は6条でⅠ-3～4様式に位置づけられよう。外面は全体に煤付着、内面は磨耗し、体部上半を除いて口縁部と体部下半に煤が付着する。

21115は復原口径14.2cm、器高約13cmを測る小形の甕あるいは鉢。肩部は張らず、沈線1条がめぐり。全体的に赤変して器面が荒れ、煤も付着している。Ⅰ-3～4様式。

21116は把手付きの鉢。深いコップ形で、口縁部はごくわずかに内湾し、端部は水平に面をもつ。把手は丸く接合部を残すのみである。Ⅳ様式前半であろう。21108とともに第4面176溝に伴う可能性が高い。

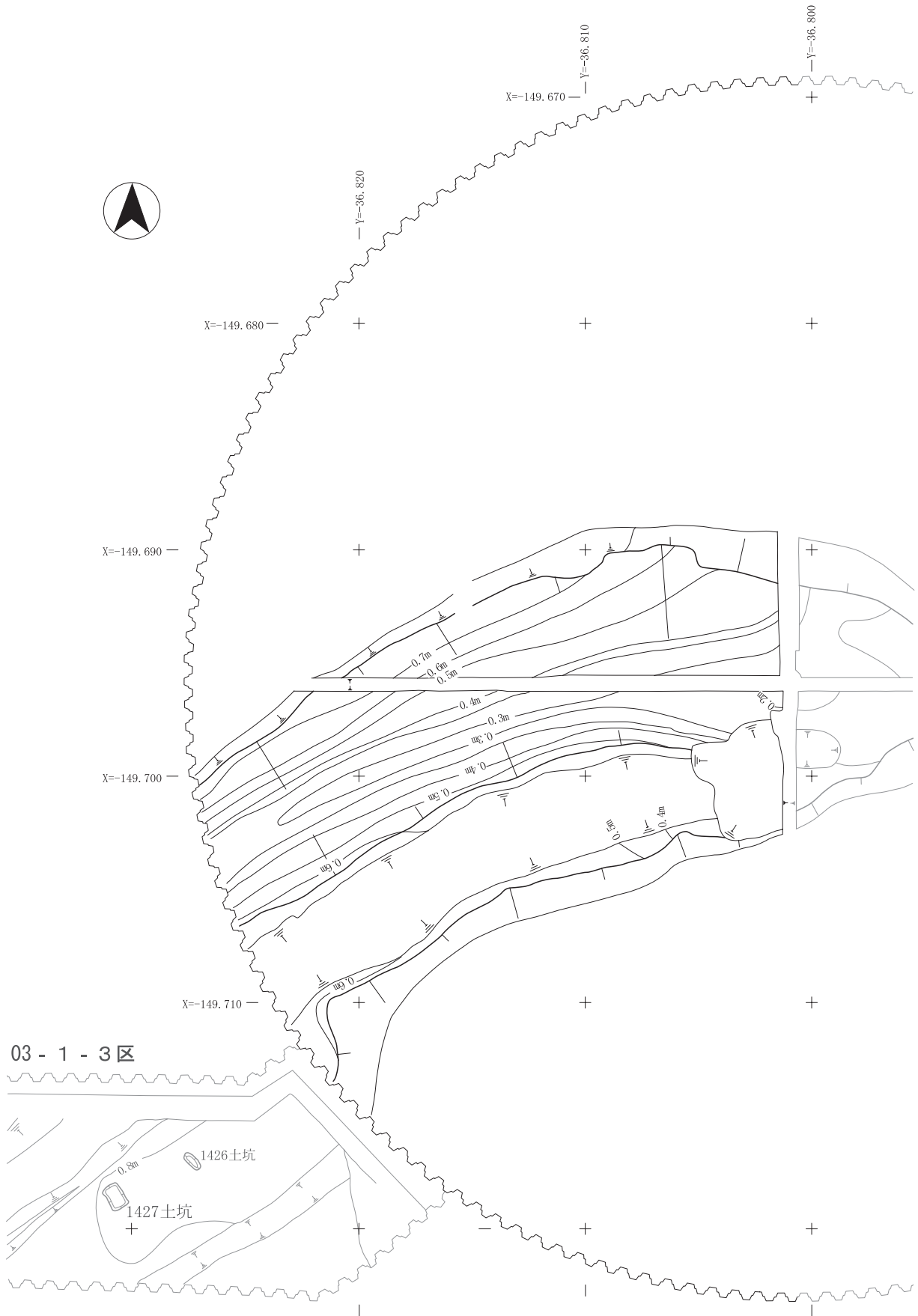
21117は台付鉢の脚台部か。全体はナデによって調整される。Ⅱ様式か。

図269-21118～21121は石庖丁。すべて緑泥片岩製。21118は一方の端部は破損するが、一方の端部は抉り状に加工される。刃部は端部側で両刃気味となるが、中央では片刃である。21119は片刃で、幅3.70cmしかない。体部には紐孔が残るのみで、背部には敲打痕が目立つ。大きさのわりに厚み1.0cmとやや厚い。21120は体部片。石質が悪く、所々で軽石状の細かな孔があく。破損部に穿孔が残り、未貫通の孔のある側の端部を研磨しているが、打ち欠きの凹凸が残る。21121は残存幅で7.91cm、厚み1.0cmを測る。体部は平滑に磨かれており、刃先には両面2cm前後の幅で光沢をもっている。

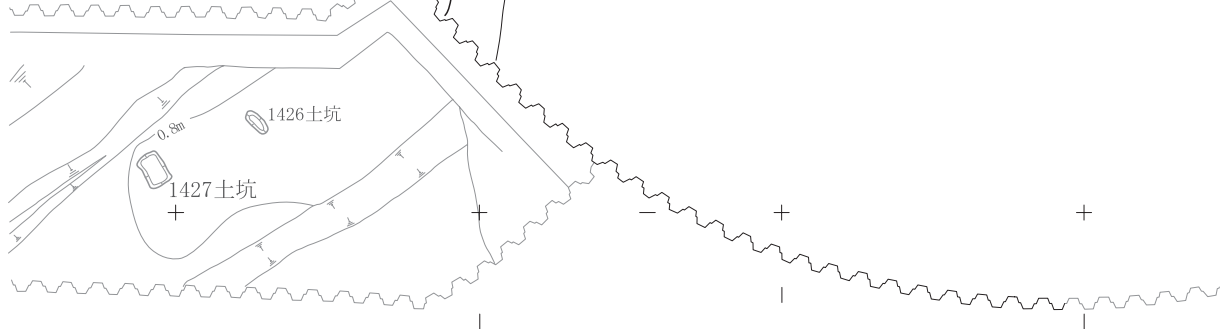
21122・21123はサヌカイト製の打製石鏃か。21122は基部に原礫面を残し、中央に稜をもつ。21123は未成品か。側縁を加工するが、基部側は破損、先端部に原礫面を残すもの。

図270-21124は鏃の隆起部で、柄孔をもたないことから未成品と判断される。残存長20.8cm、残存幅12.6cm、最大厚4.4cmを測る。21125は鏃・鋤の肩部か。破損が著しく、可能性にとどめざるを得ない。

第5章 03-1-2区の調査成果



03-1-3区



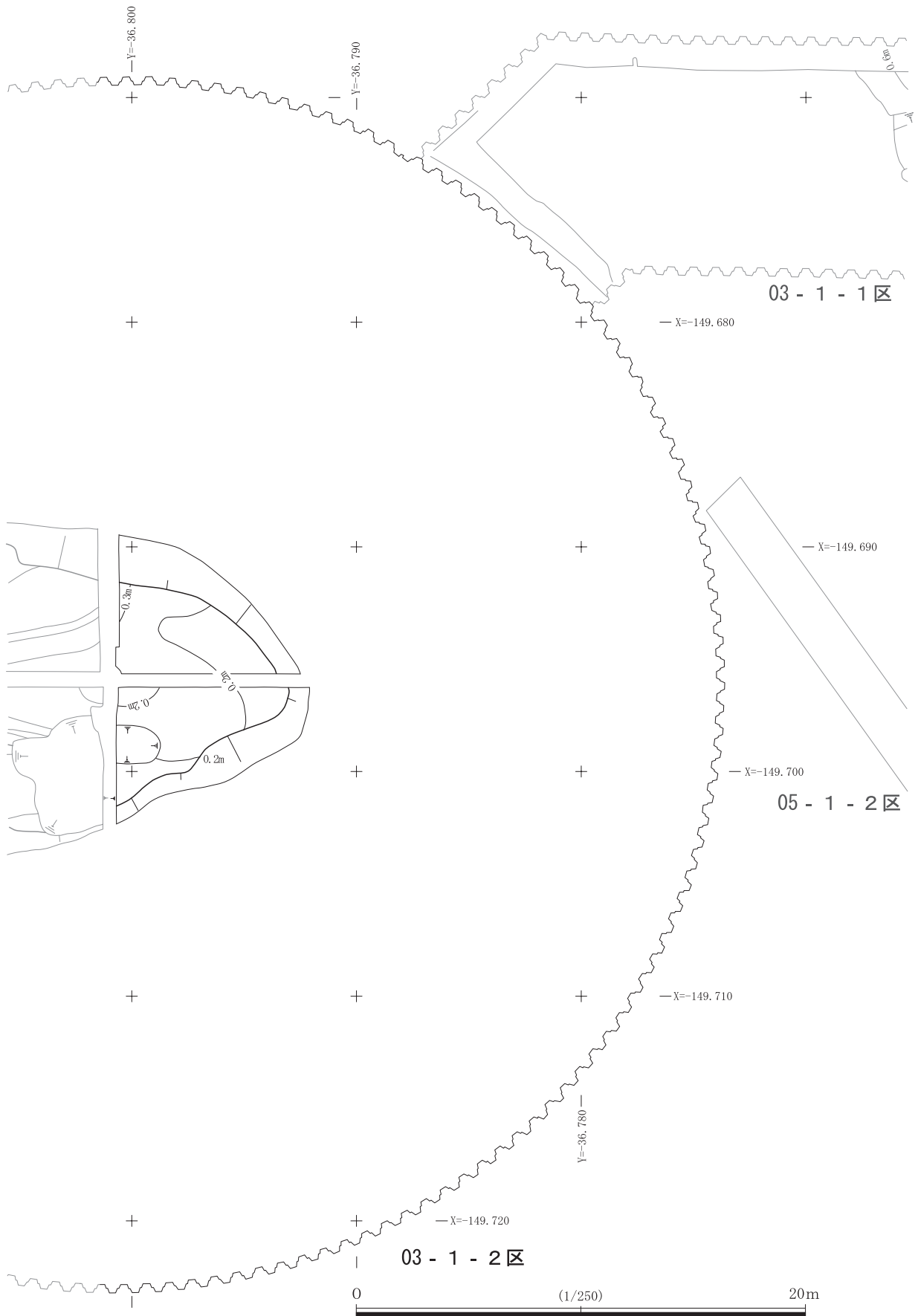


図266 03-1-2区 第13面

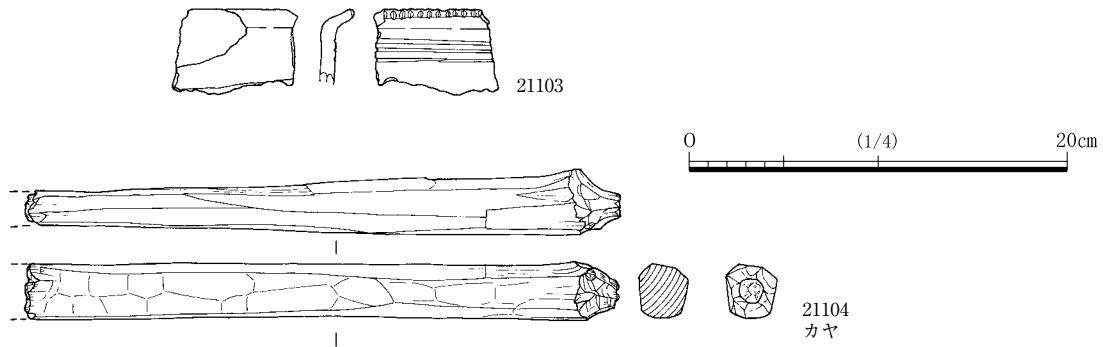


図267 03-1-2区 第13層出土遺物

いずれもアカガシ亜属の柁目材。

21126（写真図版114）は把手か。残存長56.8cm、幅2.7～3.9cm。破損部が対称形となると考えると、側面観は縦棒の長い「コ」字形となるだろう。端には中央に溝をめぐらせた頭部がつき、溝のない平らな部分に直径5mm程度の孔が2つあく。他の部材との留め孔と考えられよう。加工痕は認められず、表面は平滑に整えられていたものと考えられる。ヒノキの柁目材を用いる。

21127は部材か。残存で長軸53.4cm、短軸4.2cm、厚み1.6cmを測る。長軸の一端に節状となった木釘が残存し、反対側の端部にも釘孔が2つ残る。スギの柁目材。

21128（写真図版92）はヤス。残存長12.8cm、径0.6cmを測る。モミ属。

21129は用途不明品。心持ち材を縦位置にとり、一端をほぼ平坦に、もう一方は中央を尖らすように粗く加工する。平坦な面には軸のように中心が残る独楽のような形。杭の先端かとも考えたが、上方に続かないため否定される。樹種はカヤ。

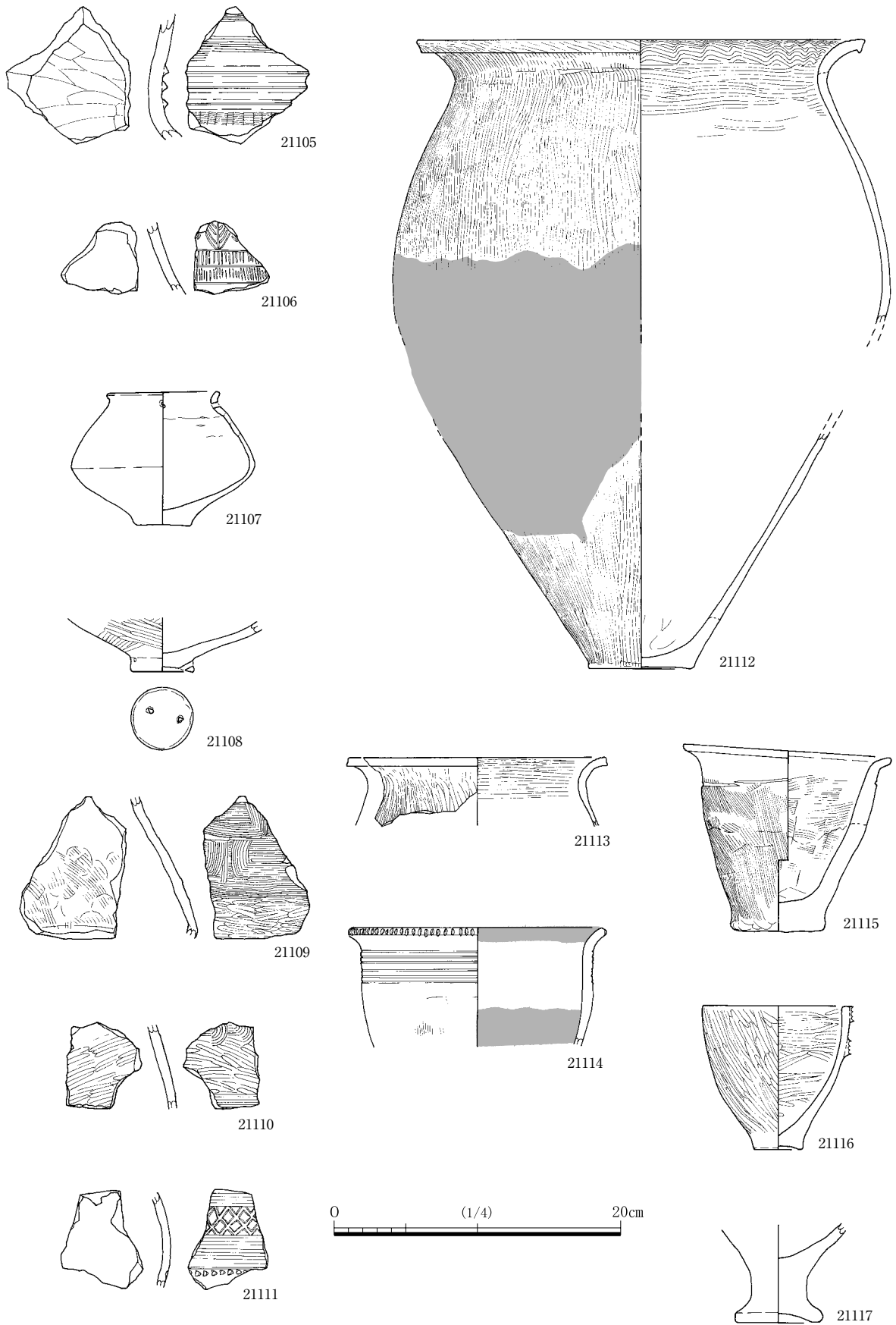


図268 断面・側溝出土遺物（1）



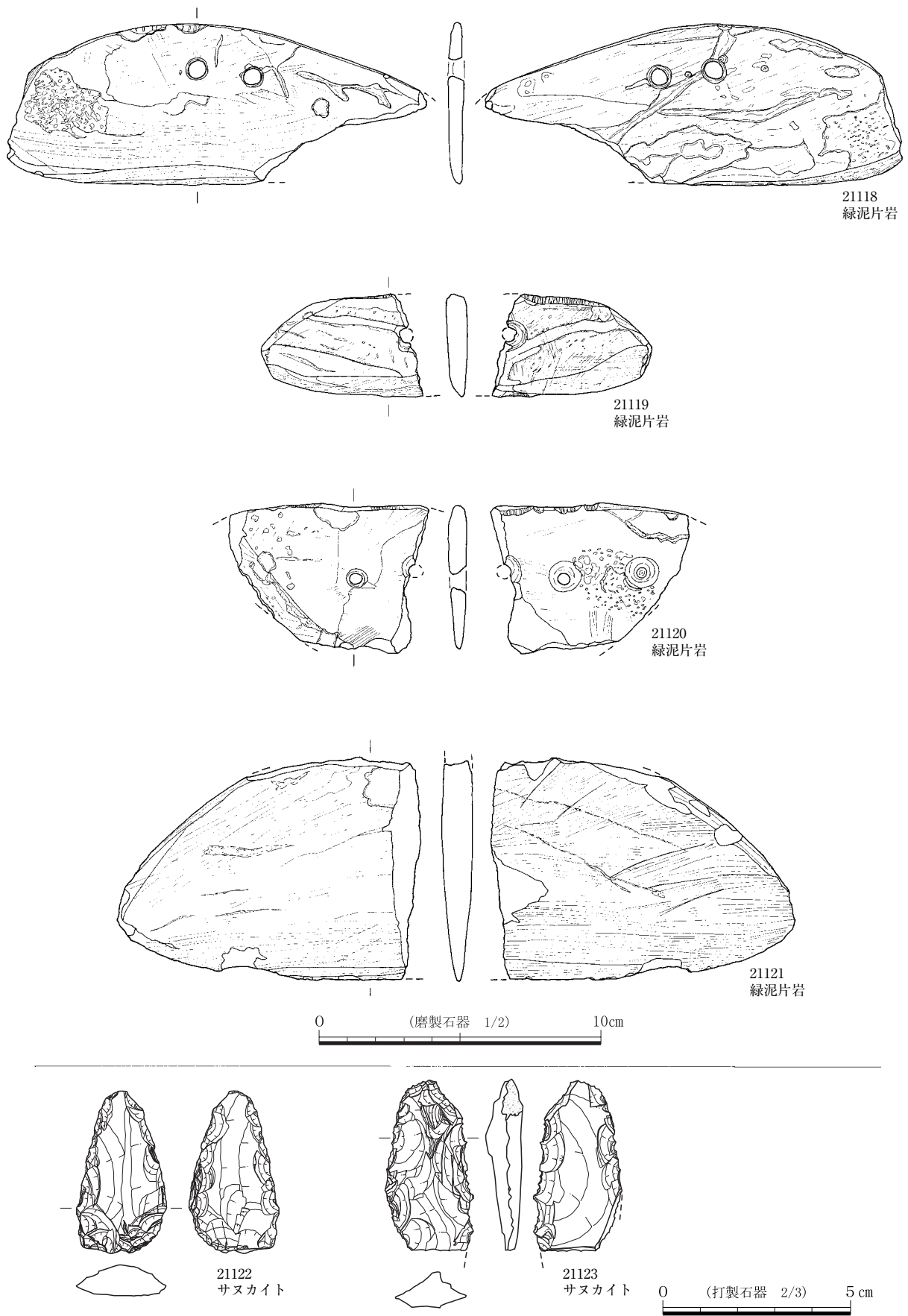


図269 断面・側溝出土遺物(2)

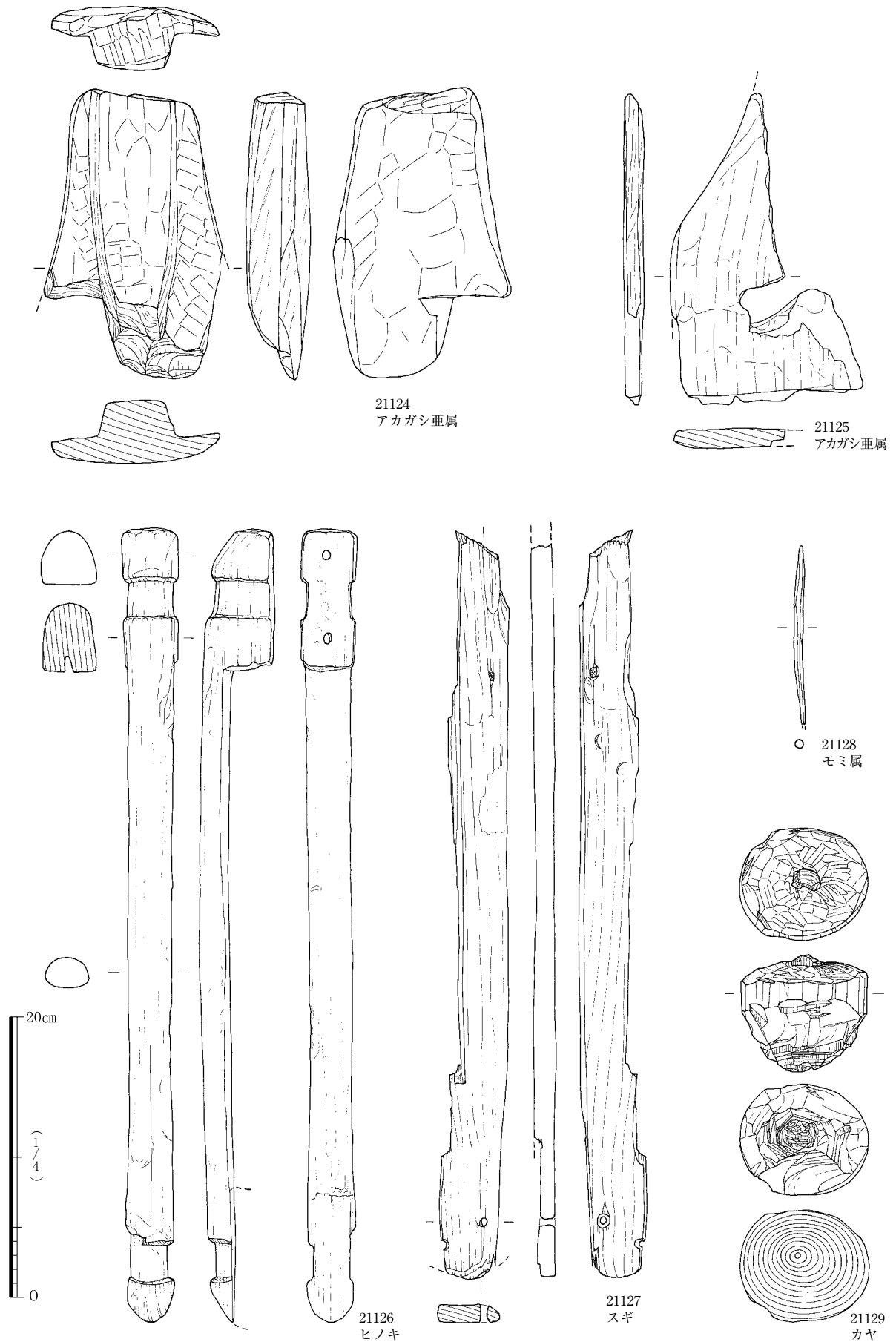


図270 断面・側溝出土遺物 (3)

## 第6章 03-1-3区の調査成果

### 第1節 概要

03-1-3区は、今回の調査範囲の南西部に位置する。調節池の給気塔建設に伴う調査で、東西約32m、南北9mと細長く、その面積は267㎡である。

調査前地盤高はおよそT.P.+4.6m。当初設計では、機械掘削0.8mの予定であったが、先に調査した03-1-1・2区の状況から、さらに数10cm下層まで盛土層が続くことが判明していた。そこで、堆積状況を確認しつつ重機で盛土層を1.2~1.4m除去し、T.P.+3.4~3.6mから調査限界のT.P.0.0mまでの包含層を人力掘削した。15面を調査し、124か所の遺構を検出した。第4-2面で、弥生時代後期の水田畦畔を検出できたことが、当03-1-3区の特筆できる成果である。

出土遺物は、土器類14410片、石・石製品286点、木片・木製品11点、種子1点、骨・菌1点、焼土塊3点、計14712点。うち弥生土器が14182片（96.3%）を占める。

### 第2節 層序

調査区の北東、北、西に側溝を設けて、機械掘削停止面のT.P.+3.2~+3.4mから掘削限界のT.P.0.0mまで断面観察、図化を行った（図271）。先行して調査していた03-1-1・2区とほぼ同様の層序であるが、特に第9面の溝の掘りこみ面が明確となった。

第0層（機械掘削停止・盛土層：①） ①暗灰黄2.5Y4/2シルト。植物の細い地下茎が縦方向に多数見られる。

第1層（オレンジシルト層：②） ②褐7.5Y4/4シルト。

第2層（砂層：③~⑤） 層厚30~40cmの流水堆積である。三層に分かれ、上から③暗灰黄2.5Y5/2シルト~細砂、ごく弱いラミナ、④黄褐2.5Y5/3細砂~シルト、水平方向のラミナ、⑤黄灰2.5Y5/1細砂・シルトのラミナ、が堆積する。下方粗粒化し、ラミナも明瞭化する。東へ粒径が粗くなる。

第3層（自然堆積層：⑥） ⑥褐灰10YR4/1シルト。層の上部には厚さ0.5cm程度の植物遺体層が堆積し、これは調査区全域で観察できている。

第4層（土壌化層・畦畔検出面：⑦⑧） 第4層が上下に別れる。上層は層厚5~10cmの薄い土壌化層で、一面に広がる。⑦黒褐10YR3/1細砂混じりシルト。よく攪拌され、上面で351畔検出。⑧黒10YR2/1シルト~細砂（下位に多い）・にぶい黄褐色10YR5/4・細~粗砂（中~上位に多い）・褐灰10YR5/1シルト（ブロックとなり中位に多い）が入り混じる。

第4-2層（畦畔検出面：⑨） 層厚は上層と同じかやや厚い。調査区西側は、層厚約20cmで土壌化が強い。⑨黒10YR2/1細砂混じりシルト。よく攪拌され、上面で350~357畔・349高まり検出。

第5層（洪水砂層：⑩~⑬） 溝からあふれた砂が第6面412高まりを境に、東西に分かれて堆積する。西半では3層あり、⑩灰7.5Y5/1細砂~シルト・灰オリーブ7.5Y5/2細砂、弱いラミナをなす。⑪暗灰黄2.5Y5/2細~粗砂。⑫灰7.5Y4/1シルト~細砂。東半では溝の上層で⑬にぶい黄褐10YR5/4細砂。ラミナ

不明瞭で第6面471高まり上ではラミナは水平方向に弱く入る。

第6層（土壌化層・溝底絶面：⑭） 一部でのみ確認したはっきりした黒色土で⑭黒褐2.5Y3/1シルト。

第7層（第6面基盤層・盛土：⑮～⑳） ⑮西辺に堆積する黒褐2.5Y3/1シルト。上部が薄く土壌化しているが明確に判別できなかったため、6・7共通層とした。⑯北東部に堆積する6・7共通層。黒褐2.5Y3/1シルト。シルト・細～粗砂ブロック混じる盛土。⑰北辺高台部の盛土。黒褐2.5Y3/2シルト。ビビアンナイトが見られる。⑱暗灰黄2.5Y5/2細砂。⑲暗灰黄2.5Y5/2細砂に黒褐2.5Y3/2シルトの小ブロックが混じる。⑳暗灰黄2.5Y4/2シルト。

第8層（黒色盛土層：㉑～㉒） 東辺、第9面1397溝上の肩口では、㉑オリーブ黒10Y3/1シルトに黒7.5Y2/1シルトブロックが混じる。㉒オリーブ黒5Y3/1シルト。炭化粒・ビビアンナイトを含む盛土層で高台上を覆う。㉓盛土の小単位。オリーブ黒5Y3/1シルトで暗灰黄2.5Y5/2シルト小ブロックが多く混じる。北辺高台上に盛られた盛土は㉔黒褐2.5Y3/2シルト。㉕オリーブ黒5Y3/2細砂混じりシルトで西からの盛土かと考えられる。細砂を全体に多く含み、ブロック状の細砂も見られる。西辺㉖は黒褐2.5Y3/2粗砂混じりシルト。粗砂を多く含み、攪拌著しい盛土層である。

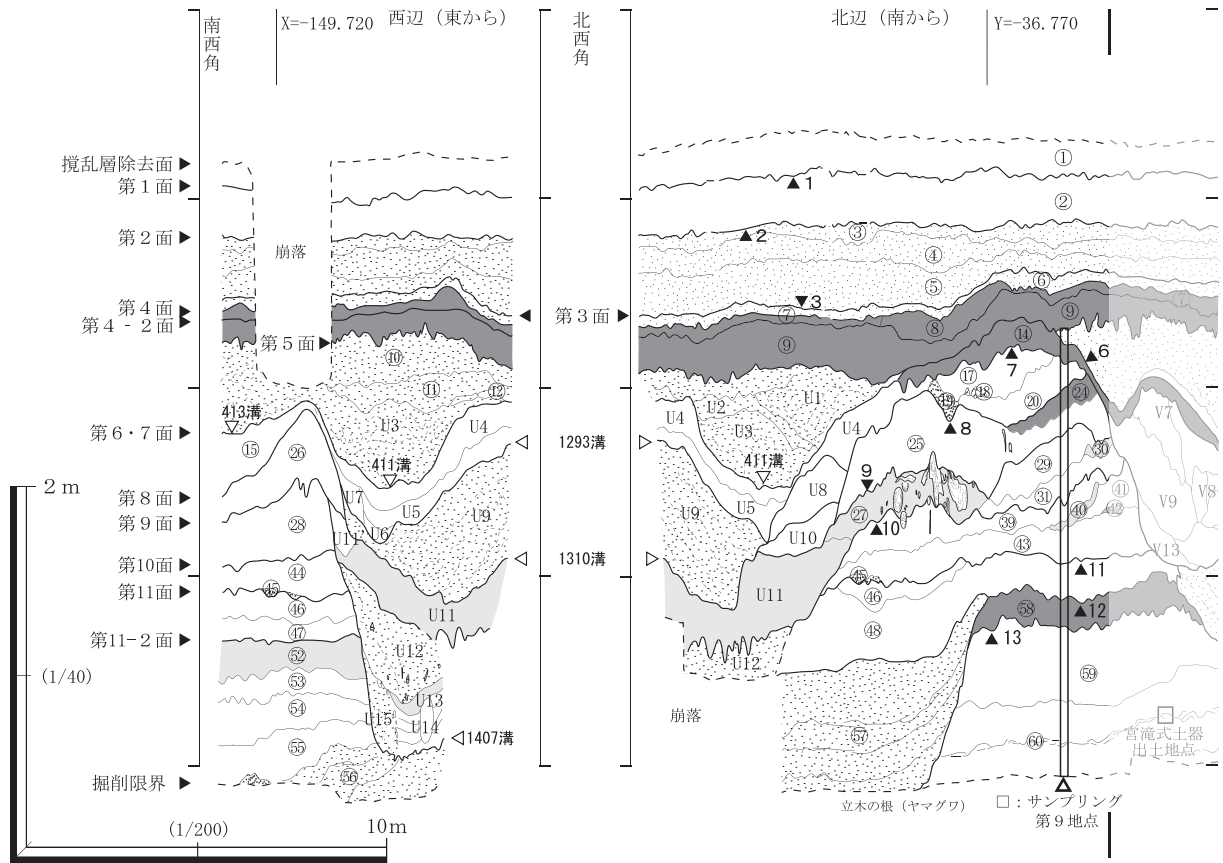
第9層（黒色盛土層：㉗～㉘） ㉗暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト。自然堆積層で立木の根が入る。㉘は西辺で高台を構成する攪拌された盛土。暗オリーブ灰2.5GY4/1細～粗砂混じりシルト。㉙～㉚は㉗の東の単位で㉙は暗灰黄2.5Y4/2細砂混じりシルトで攪拌されている。㉚の層終わりから攪拌された黒褐5Y3/2の土が西上がりに観察されるため、東からの盛土かと考えられる。㉛黒褐2.5Y3/2シルト。㉜黄灰2.5Y4/1シルトの盛土。中央高台部で観察される黒盛土は㉝～㉞である。㉝は黒7.5Y2/1シルトで炭化物が多く混じり、攪拌が強い。㉞黒褐2.5Y3/2シルトにオリーブ黒10YR3/2シルトブロック・炭化粒・粗砂と攪拌され、ビビアンナイトが観察される盛土である。㉟は黒褐10YR3/1粗砂混じりシルトで、炭化粒・ビビアンナイトが含まれる盛土である。

第10層（盛土層：㉟～㊱） 黒色盛土の下面から10層とした。中央高台部では㉟から㊱までが盛土である。㉟黒褐色10YR3/2シルト。炭化粒・粗砂・ビビアンナイトを含む。㊱黒褐2.5Y3/2シルト・黒褐2.5Y3/1シルト小ブロック、ビビアンナイト・粗砂を多く含む。㊲灰7.5Y4/1シルト。植物の地下茎が目立つ（10 - 2面か?）。㊳は暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト。シルトブロック・粗砂を含む。

北の高台部分では㊴～㊵が堆積する。中央高台部より攪拌が弱く、薄く土壌化した部分も散見される。㊴は東部ではオリーブ褐2.5Y4/3シルトで、西にいくほど黄味が薄くなり細～粗砂を少量含む灰オリーブ5Y4/2シルトとなる。中央部で薄く土壌化していると考えられる部分もあるが、はっきりとしない。㊶と㊷は黒褐2.5Y3/1シルト。土壌化部分か。㊸は黄褐色2.5Y5/3シルト。㊹はオリーブ黒5Y3/1シルト。炭化粒をまれに含み、青灰5BG5/1と攪拌されている。層の上位は薄く土壌化し、下位には炭酸カルシウムの結核が見られる。西辺では㊺暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂～シルト。第11層との層境には㊻黄褐2.5Y5/3細～粗砂が途切れ途切れではあるが一面に堆積している。西辺ではやや粒径小さい。

第11層（自然堆積層：㊼～㊽） ラミナの明瞭な自然堆積層。㊼暗緑灰7.5GY4/1シルト～細砂・暗オリーブ灰5GY4/1細砂がラミナをなす。㊽オリーブ黒7.5Y3/1シルト。細砂と植物遺体を少量含む。㊾は調査区東部に広く堆積する灰7.5Y4/1シルト。植物遺体を少量含み、第12層上層では黄味が薄く、上層細粒化し、ビビアンナイトもまれに見られる。東辺では㊿灰オリーブ5Y4/2細～粗砂と、ラミナが顕著に見られる①灰7.5Y4/1シルトが堆積する。

第11 - 2層（自然堆積層：②～③） 第11 - 2面は粘質土上面である。堆積環境に変化があったことが



示唆される。⑤①はオリブ黒5Y3/1粘土～シルト。植物遺体を多く含む。中位には炭酸カルシウムの結核が浮き、下位にはヒシの実が多く含まれる。層の西端では特に植物遺体が多く、第13層との層境でややブロックが含まれる。第12層を切る形で堆積しており、自然流路が存在していた可能性がある。西辺、⑤②～⑤⑤は植物遺体薄層や色調によって分けられるが、基本的に粘質シルトでラミナの弱い自然堆積層である。⑤②は黒褐2.5Y3/1。ラミナと上下の層境には植物遺体薄層が見られる。⑤③黒10Y2/1。炭酸カルシウムの結核・植物遺体を多く含む。⑤④オリブ黒10Y3/1。植物遺体薄層とラミナをなし、植物遺体を多く含む。⑤⑤オリブ黒7.5Y3/1。上層との層境に植物遺体薄層が見られ、上層より粘性が弱い。⑤⑥オリブ黒5Y3/1シルト・オリブ灰2.5GY5/1細砂がラミナを形成する。北辺では⑤⑦灰オリブ7.5Y5/2・オリブ黒7.5Y3/1・オリブ黒5Y3/2細砂混じりシルトで下層へ色が暗くなる。灰～暗オリブ5Y4/1～5Y4/4細砂・黒5Y2/1シルトとラミナをなす。第12層を切って堆積しており、⑤①と同様自然河川が存在した可能性がある。

**第12層 (土壌化層：⑤⑧) 黒褐2.5Y3/1シルト。**

**第13層 (自然堆積層・第12面基盤層：⑤⑨～⑥①) ⑤⑨暗緑灰5G4/1シルト。** 下方細粒化して、層の下部10cmほどにオリブ灰2.5GY6/1の細砂ラミナが形成される。北辺では東へラミナが弱くなる。層の中位に粒径のやや粗いラミナがあり、東辺では粗砂混じりとなる。⑥①暗オリブ灰2.5GY4/1シルト。オリブ灰2.5GY6/1細砂とラミナを形成し、東へいくほど弱くなる。オリブ黒7.5Y3/1の植物遺体らしき薄層が2枚確認される。薄層間は下へ細粒化し、粘土に近い。なお、上の薄層部分 (T.P.+0.3m) からは宮滝式土器がまとまって出土している。

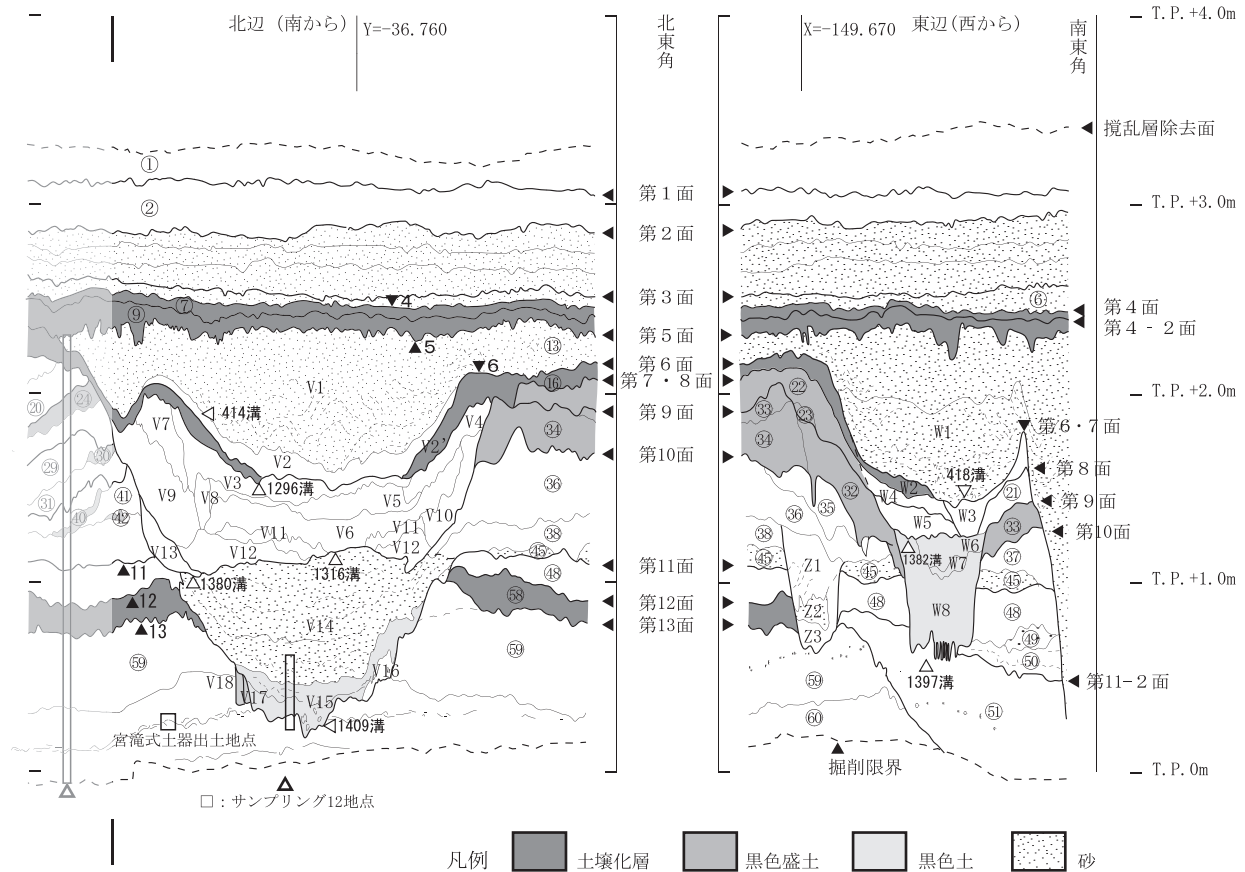


図271 03 - 1 - 3区 土層断面

### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 03 - 1 - 3区盛土層・第0層の遺物

現代の盛土層である。まずは、当初設計通りに、T.P.+4.6mの現地表面から盛土層を重機で0.8m掘り下げた。この過程で、磁器8片、陶器2片、瓦1片、須恵器4片、土師器1片、弥生土器29片、サヌカイト剥片1点、計46点出土した。

さらにその下層の盛土層を、先行調査した03 - 1 - 1・2区の成果と当調査区での堆積状況をみながら0.2~0.5m掘り下げた。この間の第0層からは、磁器26片、陶器18片、瓦12片、瓦器1片、黒色土器A類1片、須恵器59片、土師器47片、弥生土器24片、サヌカイト剥片1点、計189点出土した。また、第0層以下の側溝を掘削した際に、須恵器4片、土師器2片、計6片出土した。

#### (2) 03 - 1 - 3区第1面の遺構と遺物 (図272・写真図版115)

オレンジ色を呈するシルト層の上面である。

面の高さはおおよそT.P.+3.1mで、ほぼ平坦。溝を4条(遺構番号273~276)検出した。

273~276溝 調査区東端にある。東西方向を主軸とし、03 - 1 - 2区に続く。

273溝は幅20~22cm、深さ4cm。274溝は幅19~22cm、深さ3cm。275溝は幅22~31cm、深さ3cm。276溝は幅25~32cm、深さ10cm。いずれも埋土は、第0層と同じ暗灰黄2.5Y4/2シルト。出土遺物はない。

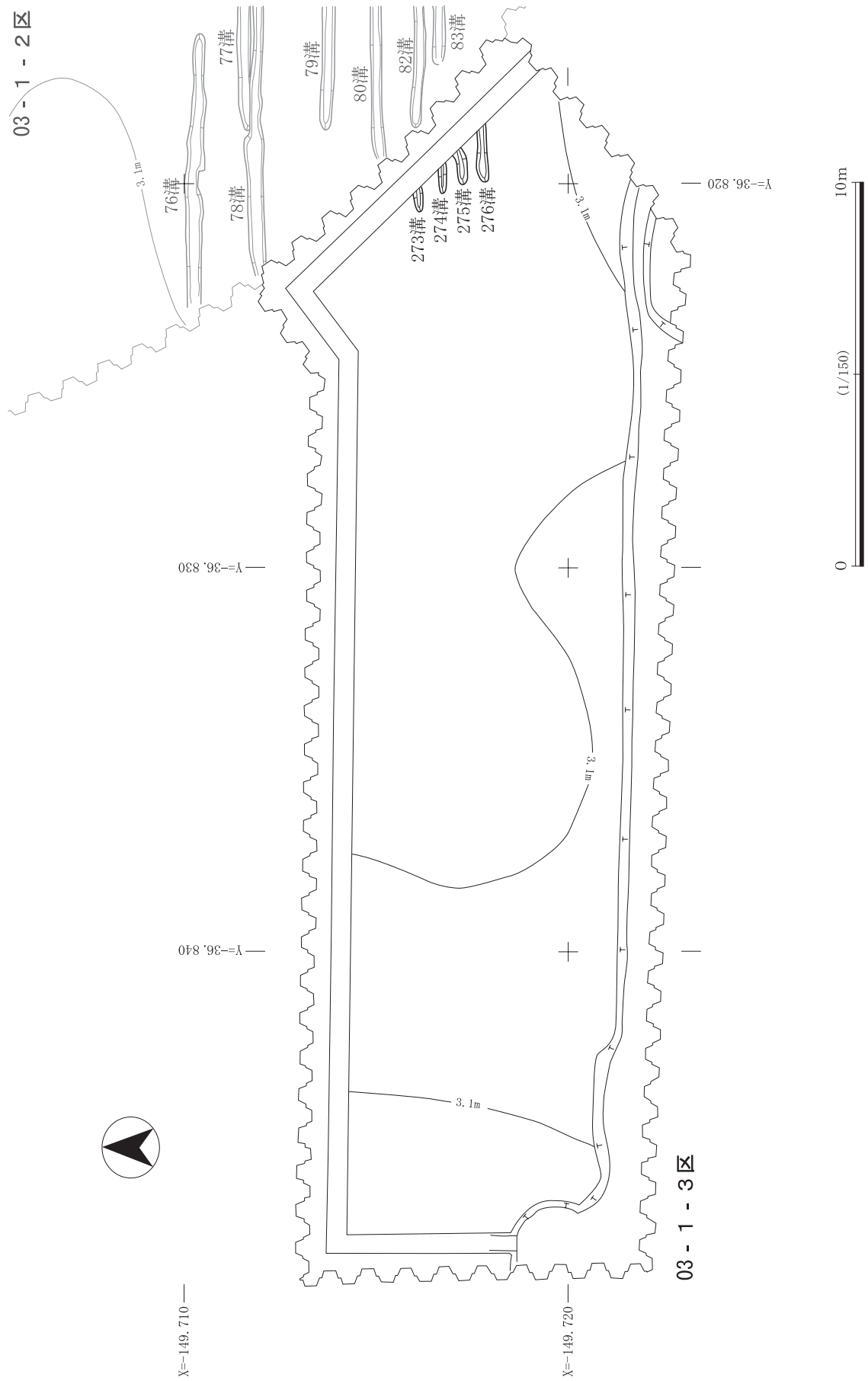


図272 03-1-3区 第1面

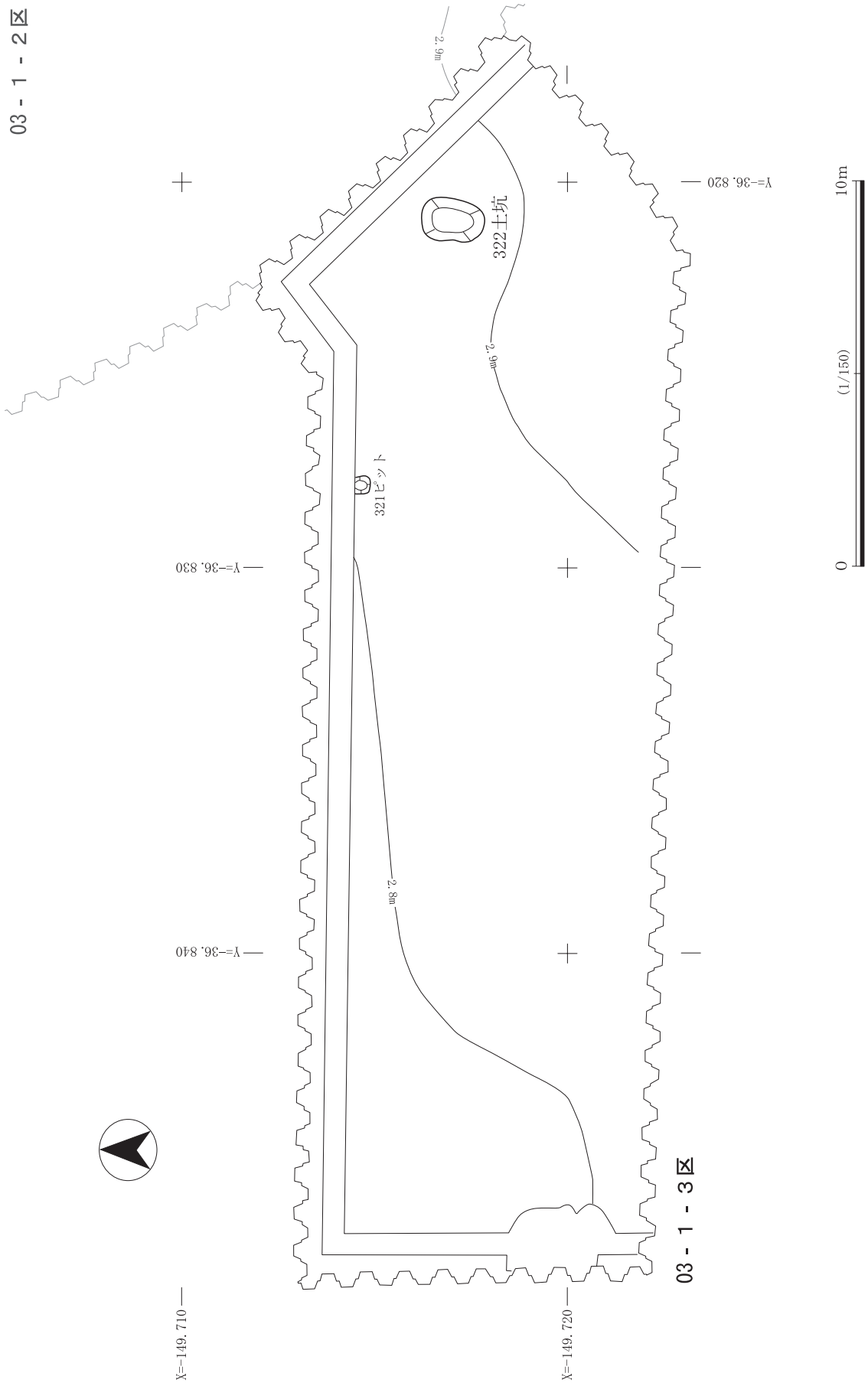


図273 03-1-3区 第2面



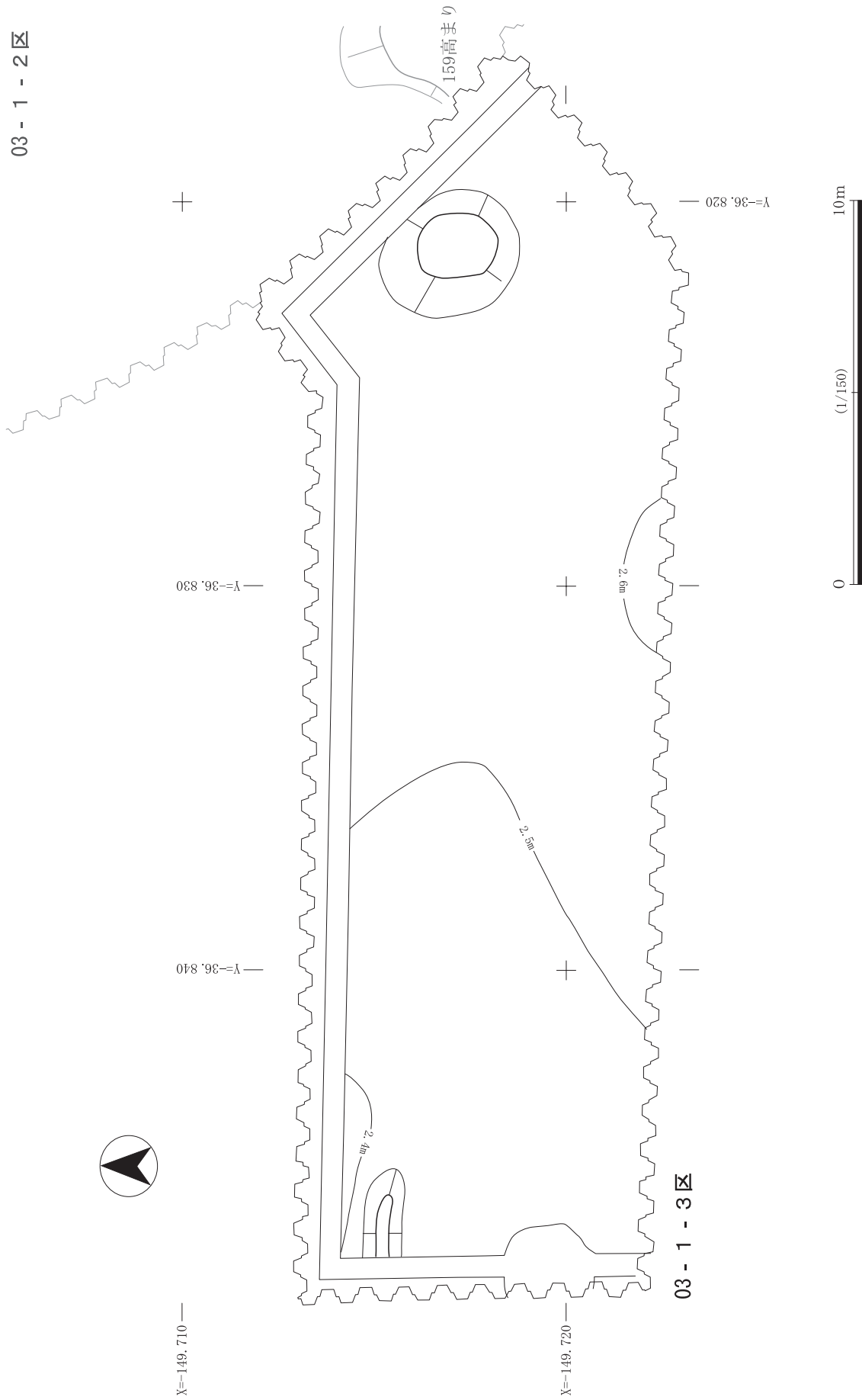


図274 03-1-3区 第3面

(3) 03 - 1 - 3区第1層の遺物

須恵器11片、土師器5片、弥生土器3片、計19点出土した。

(4) 03 - 1 - 3区第2面の遺構と遺物 (図273・写真図版115)

洪水砂層の上面である。

面の高さはT.P.+2.8~2.9mで、南東側がわずかに高い。土坑1基とピット1個(遺構番号321・322)を調査した。

322土坑 調査区東部に位置する。平面楕円形で、南北方向を主軸とする。長径145cm、短径111cm、深さ8cm。埋土は褐7.5YR4/3シルト。出土遺物なし。

321ピット 調査区北辺やや東寄りにある。北部を欠くが平面円形と推定でき、直径48cm、深さ14cm。埋土は灰黄褐10YR4/2シルト。出土遺物はない。

(5) 03 - 1 - 3区第2層の遺物

第2層からの出土遺物はない。

ただし、第2~4層相当の側溝を掘削した際に、弥生土器12片が出土した。

(6) 03 - 1 - 3区第3面の遺構と遺物 (図274・写真図版115)

第2層の砂層を除去した、自然堆積のシルト層の上面である。

面の高さはT.P.+2.4~2.6mで、南東側が高い。検出遺構はない。

なお、調査区東部の高まりは第4 - 2面349高まりの、西部の高まりは第4面1503畦をそれぞれ反映しており、当第3面の遺構ではない。

(7) 03 - 1 - 3区第3層の遺物 (図275)

土師器1片、弥生土器26片(うちI様式1片、II様式2片)、計27点出土した。

図示したのはV様式中葉の甕2点である。図275 - 30001は甕口縁部。口縁端面は横方向にややのびる。30002は肩がはる器形で外面をハケ調整する。

この他、第3~6層相当の側溝を掘削した際に、弥生土器54片(うちI様式2片、II様式3片)が出土した。

(8) 03 - 1 - 3区第4面の遺構と遺物 (図276・277 写真図版116・124)

水田土壌と考えられる灰黒い土壌化層の上面である。

面の高さはT.P.+2.4~2.5mで、ほぼ平坦。畦1条(遺構番号1503)を検出した。

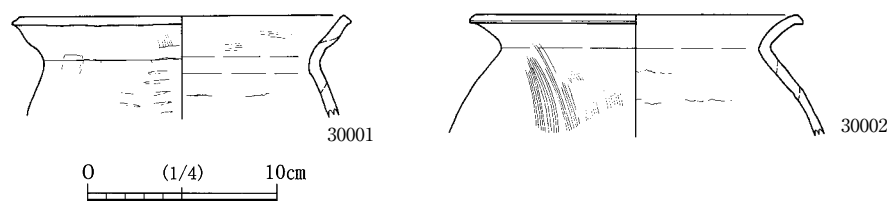


図275 03 - 1 - 3区第3層出土土器

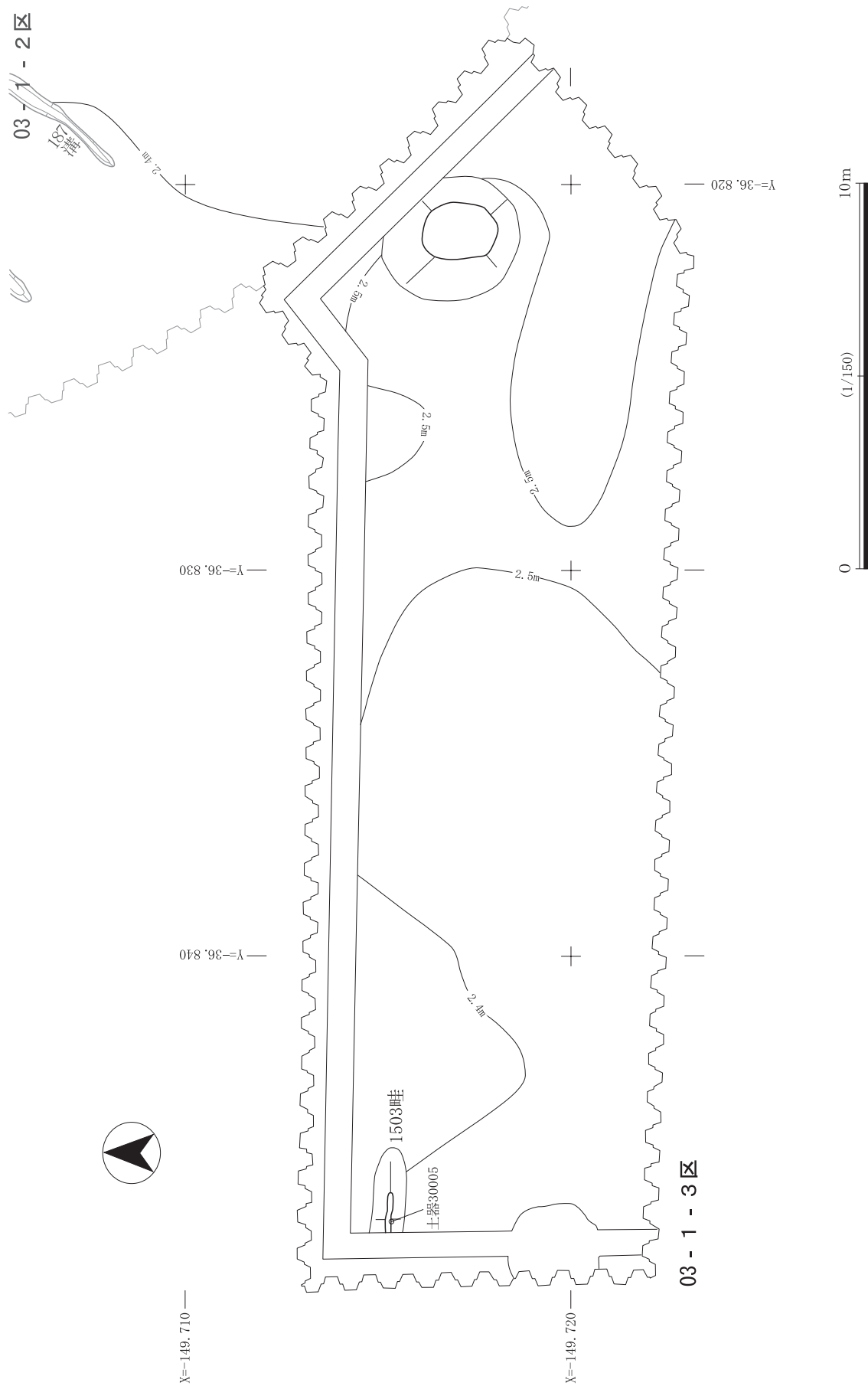


図276 03-1-3区 第4面

1503畦 (写真図版116) 03 - 1 - 3 区の北西部にある。基底部の幅約80cm。畦頂部はT.P.+2.55m。畦の北側はT.P.+2.35m、南側は2.45mと高低差があるので、畦の高さは、北側から20cm、南側からは10cmとなる。畦の中から弥生土器19片が出土した。

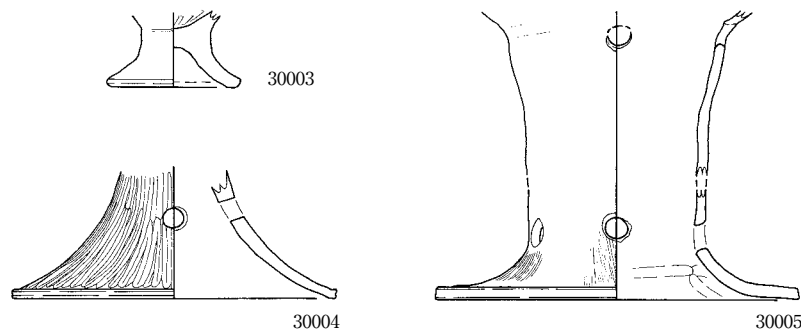
図277 - 30003 (写真図版124) は鉢の高台か。杯部内面と、高台部外面は工具ナデで調整されており、V様式と考えられる。

30004 (写真図版124) は高杯脚部。透かし孔は3方向に残る。裾部の広がりから、V様式中葉に位置付けられる。

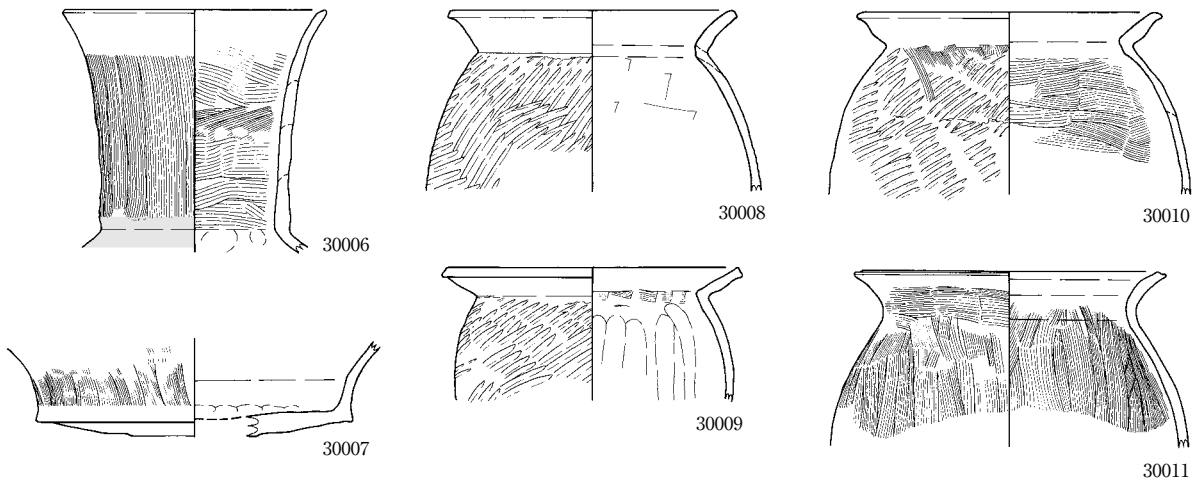
30005 (写真図版124) は器台。裾部が大きくひらき、受部との屈曲は明らかである。二段の円形透かし孔の上段は1方向、下段は3方向に残存する。V様式中～後葉。

なお、調査区東部の高まりは、第4 - 2面349高まりであり、当第4面の遺構ではない。

1503畦



第4層



第4 - 2層

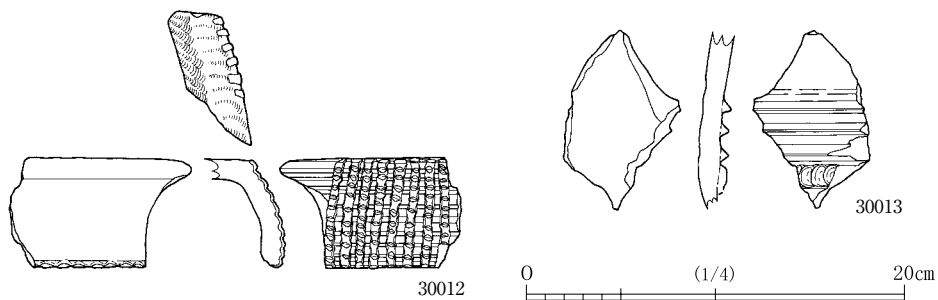


図277 03 - 1 - 3 区 第4面1503畦、第4層、第4 - 2層出土土器

(9) 03-1-3区第4層の遺物 (図277・写真図版124)

土師器4片、弥生土器233片(うちⅠ様式1片、Ⅱ様式3片、Ⅴ様式が多い)、計237片出土した。

図277-30006は長頸壺の頸部である。内外面ともにハケ調整で、屈曲の明瞭な体部との境目には赤色顔料が塗られる。Ⅴ様式前半。

30007は口縁端部を欠く有段高杯。杯部は水平にのびて、鋭く屈曲する口縁をもつ。外面はハケ調整のちミガキが施される。Ⅴ様式中葉。

30008~30011(写真図版124)は甕。右上がりのタタキが施され、30010は一部、30011は内外面とも全体にハケ調整を行う。いずれも外面に煤が付着する。Ⅴ様式前半に位置づけられよう。

(10) 03-1-3区第4-2面の遺構と遺物 (図278・写真図版116)

砂混じり黒色土壌化層の上面である。

面の高さは、調査区の西部でおよそT.P.+2.35m、中部以東でT.P.+2.45m。検出遺構は、高まり1か所、大畦1条と畦7条、落ち込み1か所、計10か所(遺構番号349~358)だが、水田畦畔は部分的な検出にとどまった。

349高まり 調査区東部に位置する。周囲の第4-2面の高さはT.P.+2.4m台半ばなのに対し、頂部はT.P.+2.73mで、第2面にまで突出していた。平面楕円形で、基底部の南北3.6m、東西3.2m。埋土は第4-2層と同じ黒10YR2/1細砂混じりシルト。出土遺物はない。

357大畦 調査区中央やや西に位置する。北北西から南南東を主軸方位とする。長さ8m以上、検出幅2.6~3.1m、高さは西側から10cm弱。畔の土質は第4-2層と同じ黒10YR2/1細砂混じりシルト。出土遺物はない。この大畦の西側がおおよそT.P.+2.35m、東側T.P.+2.45mと、高低差がある。

350~356畦(写真図版116) 357大畦の東側で検出した。この範囲は、調査区西側に比べ遺構面が約10cm高い。主軸方位が北東-南西のものを350~352畦、それにほぼ直交し北西-南東のものを353~355畦、輪郭が不鮮明ながら弧状に曲がるものを356畦とした。いずれも高さはほとんど検出できなかった。幅は20~40cm程度。埋土はいずれも第4-2層と同じ黒10YR2/1細砂混じりシルトで、いわゆる手畦であろう。350~356畦からの出土遺物はない。

畦同士の接続には様々な形態が認められる。ただし、水田として完結するものはない。比較的残りのよい350・351・354・355畦に囲まれた範囲の推定面積は7㎡程度と小さい。これらの畦から復原される水田は、いわゆる不定形小区画水田である。

358落ち込み 調査区北西部に位置する。さらに調査区外に広がり、形状不詳。東西8m以上、南北2m以上、深さ22cm。埋土は、黒10YR2/1細砂混じりシルト。出土遺物なし。

(11) 03-1-3区第4-2層の遺物 (図277・写真図版124)

弥生土器179片(うちⅡ様式18片、Ⅲ様式1片、Ⅴ様式10片)、削器1点、計180点出土した。

図277-30012(写真図版124)は広口壺、あるいは器台の可能性もある。大きく垂下させた口縁端部は凹線文と刻み目のある棒状浮文で飾られ、上面にも扇形文が施される。摂津系の土器でⅣ様式前半。30013も広口壺の頸部である。摂津からの影響を受けて断面三角形突帯の下、体部との境目に指頭圧痕突帯がめぐる。Ⅲ-2様式。

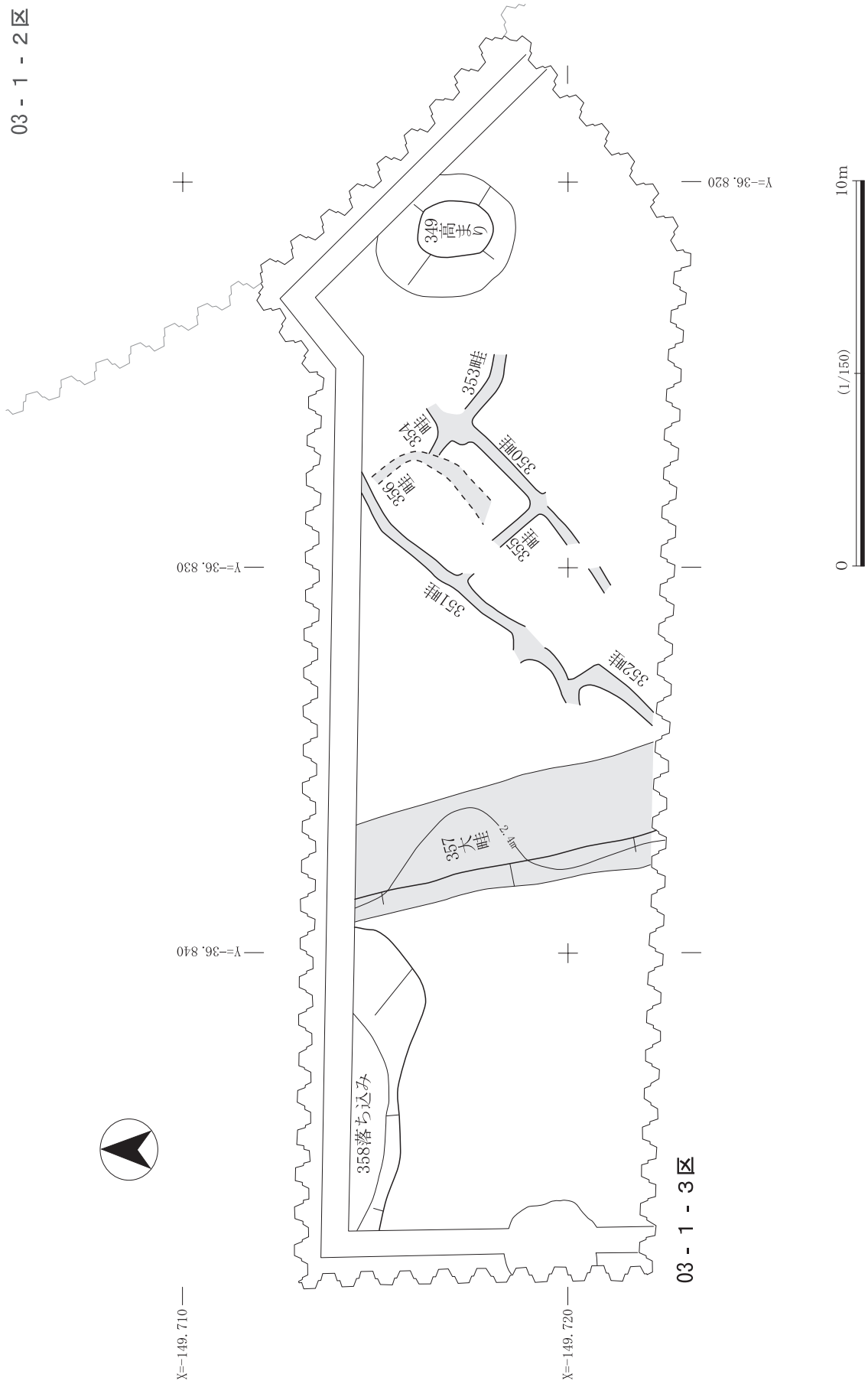


図278 03-1-3-3区第4-2面

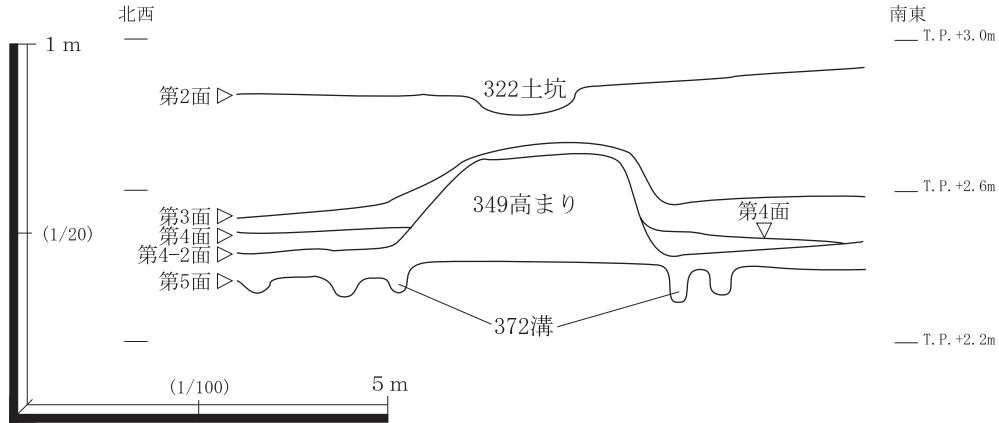


図279 03-1-3区 第2～5面断面模式

(12) 03-1-3区第5面の遺構と遺物 (図279～282 写真図版117・124・125)

第4-2層の砂層を除去した面である。

面の高さはおよそT.P.+2.3～2.4mで、調査区東部がわずかに高い。遺構として、溝10条、土坑4基、ピット21個、杭3本、落ち込み2か所、計40か所（遺構番号371～410）を検出した。

溝を10条調査した。

372溝（写真図版117） 調査区東部に位置し、隅丸方形に一巡する。溝の幅27～50cm、深さ10cm。埋土は、黒褐10YR3/1シルト～細砂。出土遺物なし。溝の外周は長径（北東-南西）4.8m、短径（北西-南東）3.9m、内周は長径4.1m、短径約3.2m。

この372溝の形状とサイズは、一見すると竪穴住居の壁溝や方形周溝墓の周溝にみえる。しかし、まず柱穴がみられないことと、さらには入口の部分の溝が途切れないことから、竪穴住居とはいいがたい。また、方形周溝墓とした場合、平面図を重ね合わせると、第5面372溝を周溝とし、第4-2面349高まりを墳丘、第2面322土坑を主体部とするような位置になる。しかし、図279に示すように第2～5面を

表17 03-1-3区 第5面溝一覧

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		弥生土器					サヌカイト			その他	
							I 様式	I Ⅰ Ⅱ 様式	II 様式	III 様式	不詳	成品	剥片類			
371	9M-3b	北東	(1.3)	28～42	5	黒褐10YR2/2、細砂混じる						8				8
372	9M-3b・2b	環状	13.9	27～50	10	黒褐10YR3/1シルト～細砂										0
373	9M-2b他	北北東	(4.6)	33～52	17	黒褐10YR3/1シルト～細砂						7				7
374	9M-2b・2c	北東	(3.1)	22～29	16	黒10YR2/1シルト～細砂										0
375	9M-3b	北東	(6.7)	17～33	6	黒褐10YR3/2、細砂混じる						3				3
376	9M-3b他	北東	7.2	21～32		黒褐10YR3/2、細砂混じる						9				9
377	9M-3c	北東	(1.6)	17～28	7	黒褐10YR3/2、細砂混じる										0
378	9M-3b・3c	弧	(7.5)	13～24	6	黒褐10YR3/2、細砂混じる						1				1
379	9M-3b・4c	北北東	4	13～17	8	黒褐10YR3/2、細砂混じる										0
409	9M-3b	北東	(1.8)		10	黒10YR2/1、細砂混じる										0

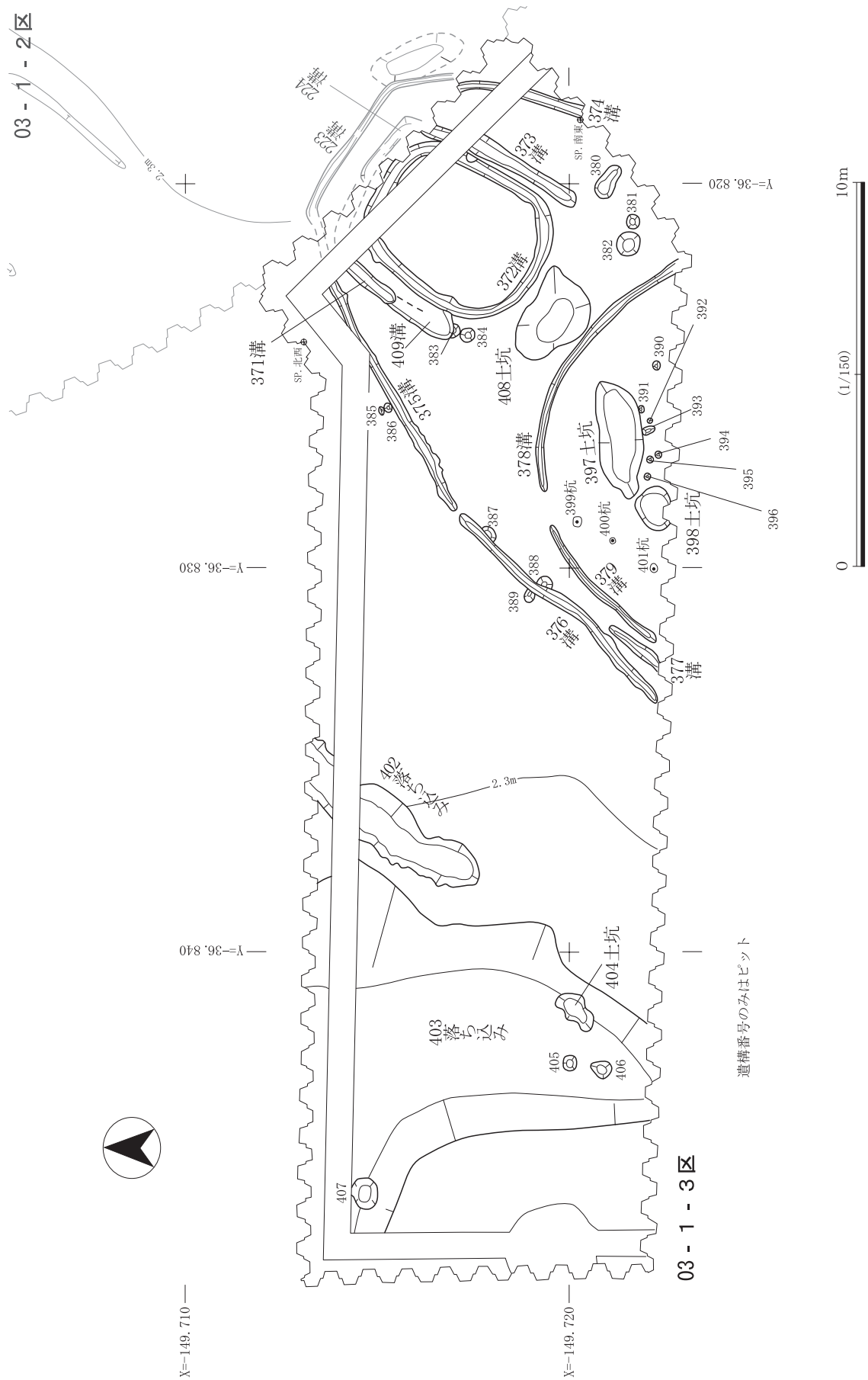


図280 03-1-3区 第5面



断面図にしてみると、まず溝群のみられる第5面があり、その上面の第4-2面に349高まりが存在し、その裾部分に第4層が堆積し、さらにそれらを覆うように第3層が形成され、その後、第2面で土坑が掘られた状況が見て取れる。つまり、溝と高まりと土坑は別時期のものである。したがって、方形周溝墓ともいいがたい。

371溝・373溝は、03-1-2区224溝とつながり、372溝の外縁北東側半周を囲むようにめぐる。

371溝 主軸方向は北東-南西。検出長1.3m、幅28~42cm、深さ5cm。埋土は黒褐10YR2/2細砂混じりシルト。弥生土器8片（うちV様式3片）が出土した。

図281-30014（写真図版124）は椀形の杯部をもつ高杯。挿入付加法で作られ、脚部に透かし孔はあけられない。裾部はやや広がり始めており、V-1~2様式に位置付けられる。脚台端部のごく一部に

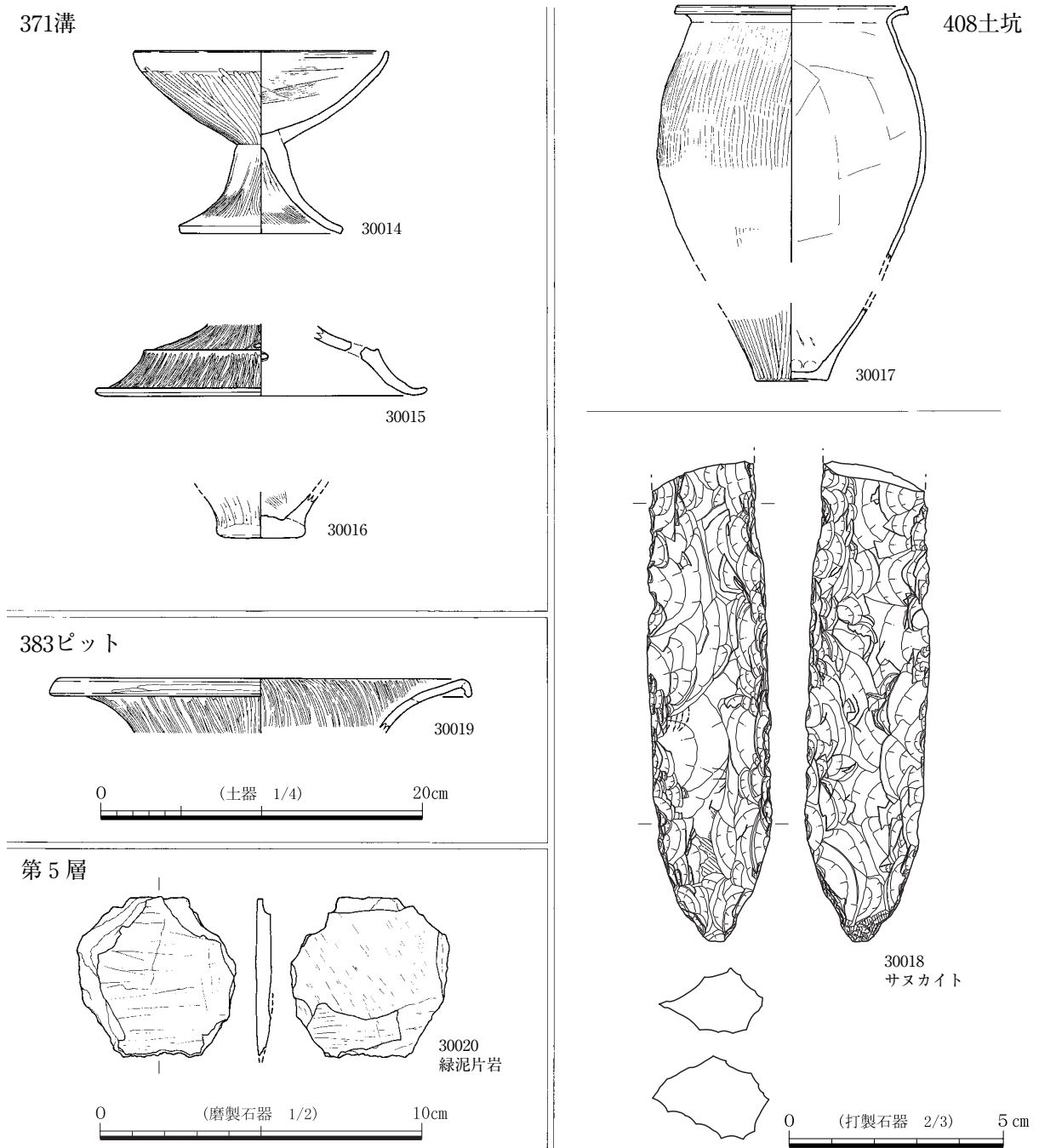


図281 03-1-3区 第5面371溝、408土坑、383ピット、第5層出土遺物

煤が付着する。30015は高杯脚部。二段に開く脚部をもつ有段口縁高杯と思われる。透かし孔は1つのみ残存。V様式後半。30016は壺底部。体部にはケズリが施される。底部は不安定だがまだ大きく、赤色粒の多い胎土と合わせてV様式前半に位置づけられる。

373溝 主軸方向は371溝と同じく北東 - 南西。検出長4.6m、幅33～52cm、深さ17cm。埋土は黒褐10YR3/1シルト～細砂。弥生土器7片（うちⅣ～Ⅴ様式の高杯1片）が出土した。

378溝と379溝は、調査区南東部に位置し、直径約10mの円周上に半円形に連なる。埋土は、両者とも黒褐10YR3/2細砂混じりシルト。

374溝・375溝・376溝は、03 - 1 - 2区223溝とつながり、上記溝群のさらに外側を囲む。

表18 03 - 1 - 3区 第5面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器					サヌカイト			その他	
								I様式	Ⅰ Ⅱ様式	II様式	III様式	不詳	成品	剥片類			
380ピット	9M-2c・3c	不整	北西	95	50	12	黒褐10YR2/2、粗砂混じる						1				1
381ピット	9M-3c	円		35	33	8	黒褐10YR3/1、細砂混じる										0
382ピット	9M-3c	円		68	64	11	黒褐10YR3/1、細砂混じる						3				3
383ピット	9M-3c	円		31		7	黒褐10YR3/1細砂～シルト		1				3				4
384ピット	9M-3b	円		39	37	3	黒褐10YR3/1細砂～シルト						1				1
385ピット	9M-3b	楕円	北東	24	15	3	黒褐10YR3/2細砂～シルト										0
386ピット	9M-3b	円		22	20	3	黒褐10YR3/2細砂～シルト										0
387ピット	9M-3b	円		43		1	黒褐10YR3/1、細砂混じる										0
388ピット	9M-4b	円		44		5	黒褐10YR2/2、細砂混じる										0
389ピット	9M-4b	円		23		14	黒褐10YR2/2、細砂混じる										0
390ピット	9M-3c	円		22	19	7	黒褐10YR3/1、細砂混じる										0
391ピット	9M-3c	円		14	13	4	黒褐10YR3/1、細砂混じる										0
392ピット	9M-3c	円		18	17	6	黒褐10YR3/1、細砂混じる										0
393ピット	9M-3c	不整	北北西	32	28	7	黒褐10YR3/2、細砂混じる										0
394ピット	9M-3c	円		13	13	6	黒褐10YR3/2、細砂混じる										0
395ピット	9M-3c	円		17	16	7	黒褐10YR3/2、細砂混じる										0
396ピット	9M-3c	円		16	16	9	黒褐10YR3/1、細砂混じる										0
397土坑	9M-3c	不整	東北東	310	117	16	黒褐10YR3/2、細砂混じる										0
398土坑	9M-3c	不整円	北東	108	92	8	褐灰10YR4/1シルト～細砂										0
404土坑	9M-5b・5c	不整	北東	112	68	7	黒10YR2/1、細砂混じる										0
405ピット	9M-5b・5c	円		40	36	14	黒10YR2/1細砂～シルト										0
406ピット	9M-5c	楕円	北東	62	40	3	黒10YR2/1細砂～シルト										0
407ピット	9M-5b	円		78	68	25	黒10YR2/1細砂～シルト										0
408土坑	9M-3b・3c	不整	北西	232	154	12	黒N2/、細砂混じる、微細な炭含む						3	剣1			4
410ピット	9M-2b						(373溝と一緒に掘られた)										0

377溝は、溝群の南西部、376溝と379溝との間にある。

個々の溝のデータは表17にまとめた。

土坑を4基検出した。

397土坑と398土坑は、調査区南東部、378溝・379溝に囲まれた内側に位置する。

397土坑 平面不整形で、東北東-西南西を主軸とする。長径310cm、短径117cm、深さ16cm。埋土は黒褐10YR3/2細砂混じりシルト。出土遺物なし。

398土坑 平面不整形円形で、長径108cm、短径92cm、深さ8cm。埋土は褐灰10YR4/1シルト～細砂。出土遺物なし。

408土坑 372溝と378溝との間に位置する。平面不整形で、北西-南東を主軸とする。長径232cm、短径154cm、深さ12cm。埋土は、黒N2/細砂混じりシルトに微細な炭を含む。弥生土器3片（うちIV様式1片）、打製石剣1点、計4点出土した。

図281-30017は甕。上方に拡張して内傾する口縁端面には、凹線を施す。体部はハケ、底部はミガキ調整。IV-1～2様式（Ⅲ様式新段階）に位置づけられよう。30018（写真図版125）はサヌカイト製打製石剣。先端を欠いている。基部先端は稜が潰れてまろくなる。調整は細かく、断面形はややまるみをもつ。

個々の土坑のデータは表18を参照されたい。

ピットを21個調査した。うち17個は、溝群と同じく調査区東部に分布する。検出状況からみて、溝群と大きな時期差はないと考えられるが、先後関係をみると、383ピットが409溝に、388ピットと389ピットが376溝にそれぞれ切られており、ピットよりも溝の方が新しい。

図281-30019は383ピットから出土した器台口縁部。端部が大きく垂下し、内外面ともにミガキが施される。Ⅲ-2様式。

個々のピットのサイズや埋土は表18にまとめた。

399～401杭（図282・写真図版117） 調査区南東部、378・379溝に囲まれた部分に位置し、北北東の399杭から南南西へと直線上に並ぶ。杭間の芯々距離は、399杭と400杭が102cm、400杭と401杭が128cm。399杭は現存長21cm、径7cm、樹種はクリ。400杭は現存長34cm、径6cm、クリ。401杭は現存長43cm、径8cm、サカキで、先端は尖るように加工されている。

なお、これら399～401杭は、水田面である上面の第4-2面に伴う可能性もあるが、その位置を投影

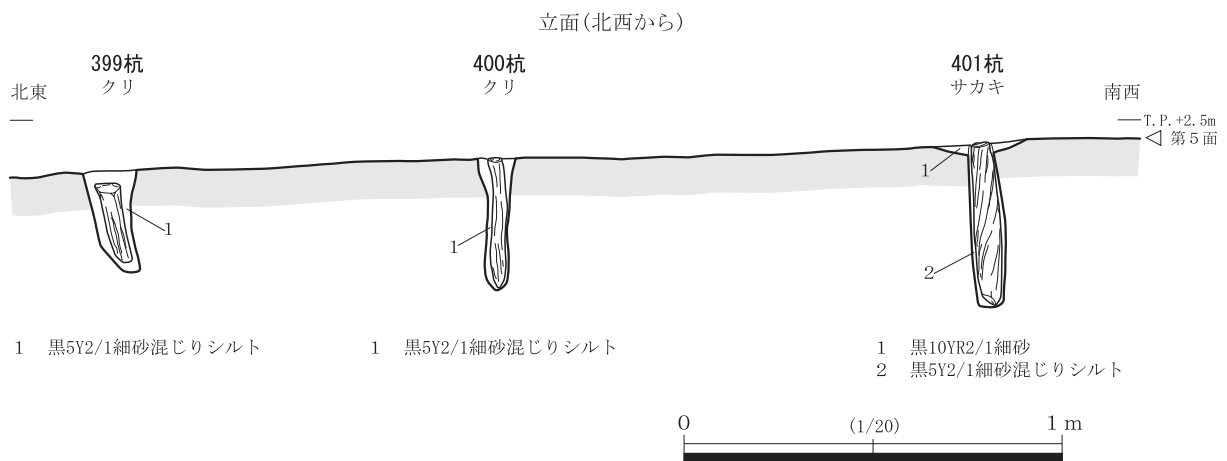


図282 03-1-3区 第5面399～401杭

してみても畦との有機的関係を認めにくい。

402落ち込み 調査区北側やや西に位置する。北東 - 南西を主軸とする。長さ5 m以上、幅0.9~1.4m、深さ10cm。埋土は黒10YR2/1シルト。足跡状の踏み込みの集積にみえる。弥生土器9片が出土したが、いずれも細片で時期は特定できない。

403落ち込み 調査区西部に位置する。長さ9 m以上、幅は南端で2.5m、北端では10m以上、深さ8~28cm。埋土は、上層と同じく黒10YR2/1細砂混じりシルト。弥生土器14片（中期が主体。タタキの施された甕の体部も）が出土した。落ち込みの底で、先述の404土坑、405~407ピットを検出した。

(13) 03 - 1 - 3区第5層の遺物 (図281)

須恵器1片、弥生土器104片（うちI様式7片、I~II様式1片、II様式3片）、石庖丁1点、サヌカイト剥片1点、計107点出土した。

図281 - 30020は石庖丁片。円板状に再加工する途中のものか。厚みは4 mmしかない。17.0 gを量る。

また、第5層以下の側溝を掘削した際に、弥生土器263片（うちI様式19片、II様式15片）、転用土製円板1点、打製石剣1点、削器1点、サヌカイト剥片3点、計269点出土した。

(14) 03 - 1 - 3区第6面の遺構と遺物 (図283~286 写真図版118・125)

黒色土壌化層の上面である。弥生時代中期の溝群が展開する。

面の高さはT.P.+2.0~2.2mで、調査区東部が高い。遺構として、溝5条、高まり3か所、ピット1個、計9か所（遺構番号411~419）を検出した。

第6面の上面で図283 - 30021（写真図版118・125）をほぼ完形で検出した。ハケ調整の施された体

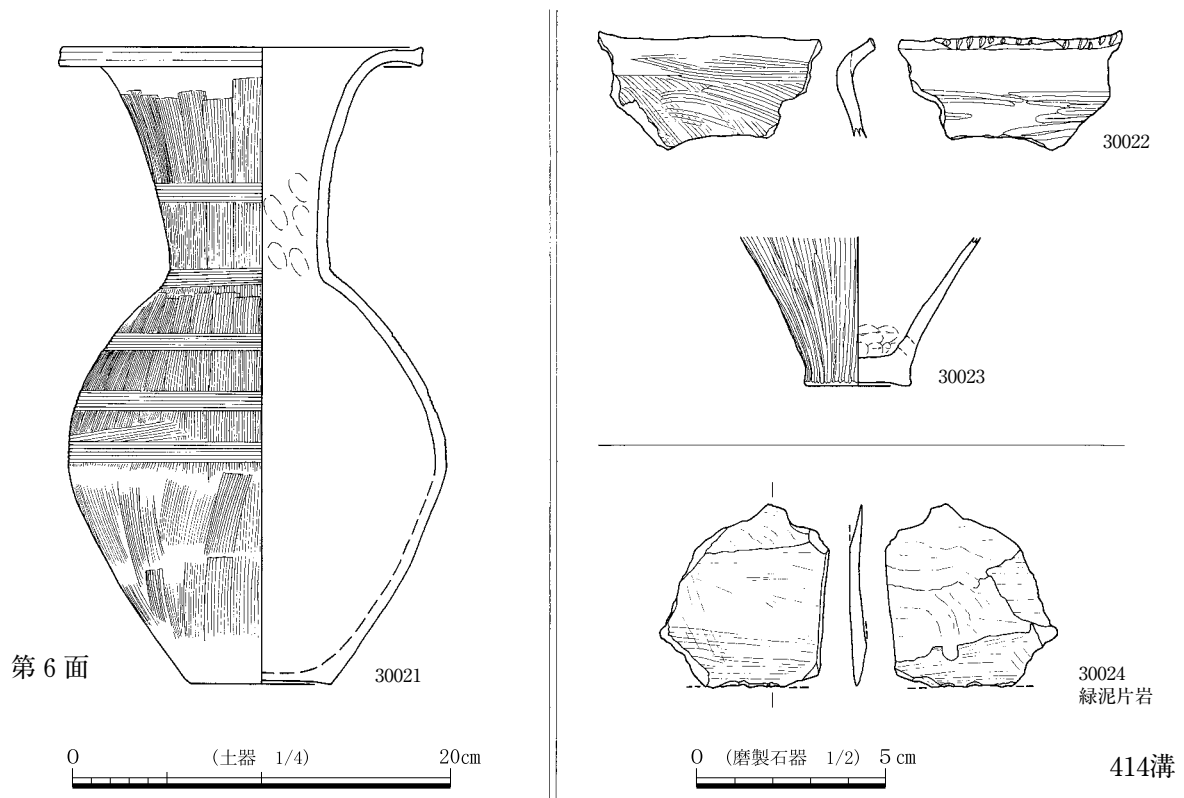


図283 03 - 1 - 3区第6面、第6面414溝出土遺物

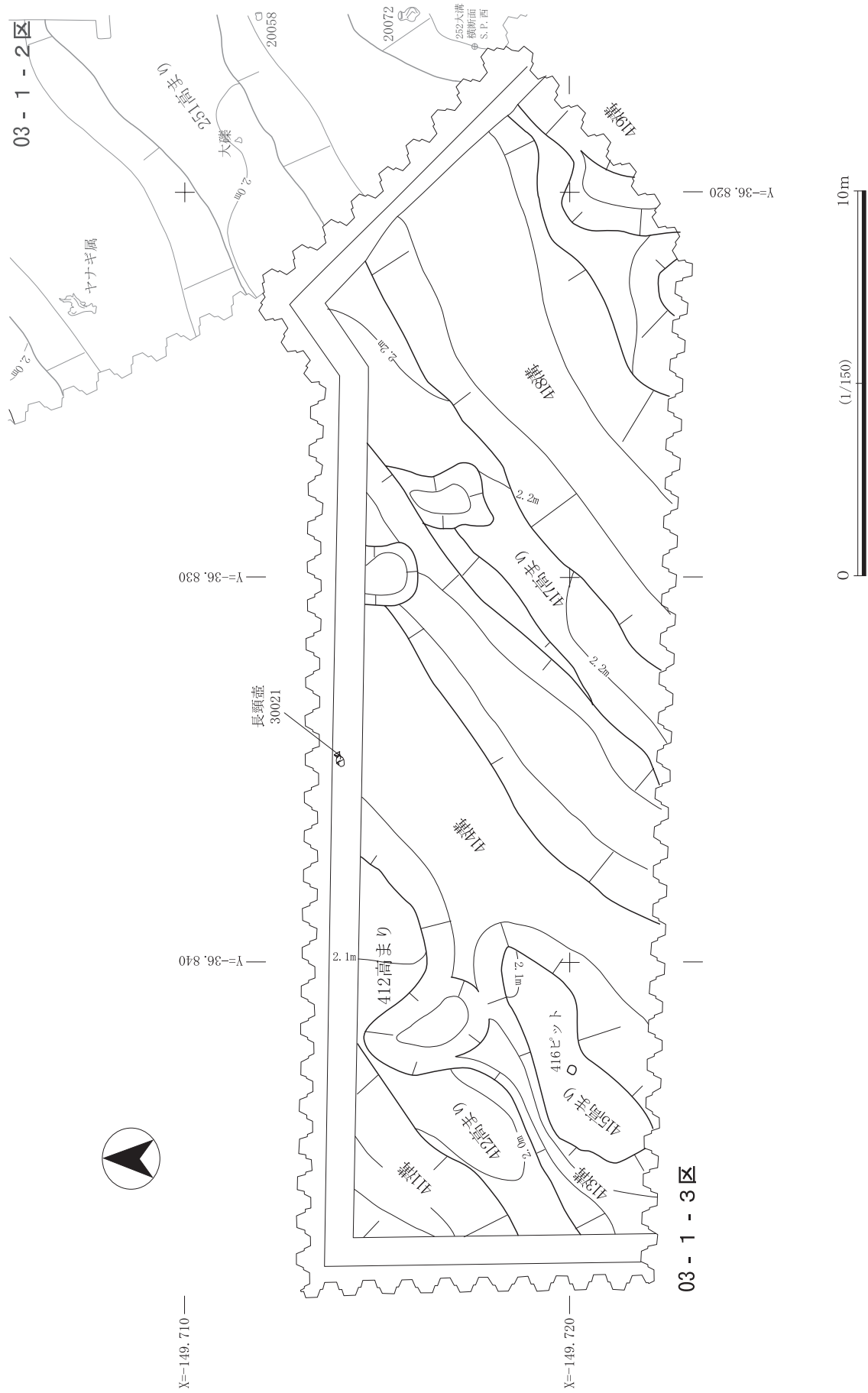


図284 03-1-3区 第6面

部から頸部にかけてクシ描き直線文が5条めぐる。頸部と体部の境目は明瞭で、頸部は長めに立ち上がった後、水平に外反して口縁端部は凹線状となる。Ⅱ様式後半か。

411溝 調査区北西部に位置する。当03-1-3区での主軸方位は北東-南西と推定されるが、東北東-西南西を主軸とする03-1-2区の237溝や03-1-1区の21溝と一連の溝と考えられる。幅3m以上、深さ52cm。埋土(図271)は大きく3層に分かれ、ラミナが顕著。U1黄褐2.5Y5/3細~粗砂。U2灰黄2.5Y6/2細~粗砂。U3灰オリーブ5Y5/2細砂・灰黄2.5Y5/1細砂・黄灰2.5Y4/1シルトがラミナをなし、下半に植物遺体を多く含む。弥生土器9片(うちⅠ様式1片、Ⅱ様式1片)が出土した。

413溝 調査区南西部に位置する。北東-南西を主軸方位とし、北東端で414溝につながる。幅60cm以上、深さ21cm。埋土は、第5層と同じにぶい黄褐10YR5/4細砂。出土遺物は弥生土器2片(うちⅢ様式1片)のみ。

414溝 調査区中央を北東-南西に流れる。03-1-2区の247溝に続く。幅5.7~7.0m。底は南東側が深くなっており、その深さ43cm。埋土(図271)は2層に分かれる。上層V1灰黄2.5Y6/2細砂・黄灰2.5Y5/1シルト~細砂がラミナをなす。下層はV2灰5Y4/1シルトで植物遺体を多く含む。出土遺物は、弥生土器84片(うちⅠ様式1片、Ⅱ様式7片)、石庖丁1点、削器2点、計87点。

図283-30022は甕口縁部。口縁部は刻み目があり、ハケで整形されるいわゆる大和型だが、外面をミガキで調整する折衷型となっている。Ⅱ様式。30023は甕底部。底部は接地面までミガキがおよび、体部は外反してのびる。Ⅲ様式(Ⅲ様式前半)に位置付けられる。

30024は片刃の石庖丁片。残存で長軸4.86cm、短軸4.42cm、厚みは0.4cmで11.2g。

418溝 調査区東部に位置し、03-1-2区252大溝の西部北側に続く。当03-1-3区での主軸方位は北東-南西。幅5.4m以上、深さ52cm。埋土(図271)は、W1灰黄2.5Y6/2細砂・黄灰2.5Y5/1シルト~細砂がラミナをなす(414溝上層V1と同色・同質)。弥生土器72片(うちⅠ様式3片、Ⅱ様式4片、Ⅲ様式1片)、サヌカイト剥片1点、計73点出土した。

図285-30025(写真図版125)は壺の体部。頸部との境で破損しており、列点文が施される。直下には文様をつける際に利用した補助具の痕跡がみられる。体部にクシ描き直線文がめぐる。Ⅱ~Ⅲ様式初頭。30026は無頸壺あるいは鉢の底部。外面のミガキは横方向に無作為に、内面はやや粗いが放射状に施される。器壁は薄く、横に張り出す。ミガキの様相からⅢ様式と考えられる。

30027は壺。頸部には沈線4条がめぐる。摩滅のため器面調整はハケ目がわずかに観察される程度である。Ⅰ様式後半に位置づけられよう。30028は甕口縁。端面に刻み目、体部にはヘラ描き沈線が施される。Ⅰ~Ⅱ様式初頭。30029は甕蓋。外面はハケ調整される。紐孔は1つ残存する。

さらに、第8面調査時にこの溝の下層を(第8面1318溝として)精査した。埋土は3層でいずれも植物遺体を含む。W2灰5Y4/1細砂混じりシルト。W3黄灰2.5Y4/1シルト。W4暗オリーブ灰2.5GY3/1シルト。出土遺物は弥生土器149片(うちⅠ様式6片、Ⅱ様式30片、Ⅲ様式1片)、打製石剣1点、削器1点、サヌカイト剥片2点、砥石1点、計154点。うち弥生土器3点、石器2点を図示した。

30030は口径46cmを測る大形の甕。口縁部は水平に折れ曲がり、端部で肥厚して、ナデによって凹線状にへこむ。Ⅲ-1様式に位置づけられる。30031(写真図版125)は鉢の体部。貼り付け突帯下に、棒状浮文を縦位に3条貼り付ける。間にはミガキが施される。Ⅳ様式後半。30032は甕蓋。調整は大和型の甕を思わせ、外面は縦方向、内面は横方向のハケ目が施される。外面は煤付着が著しい。

30033は砂岩製の砥石で5面を砥面として利用する。広い面は石皿状にくぼんでいる。

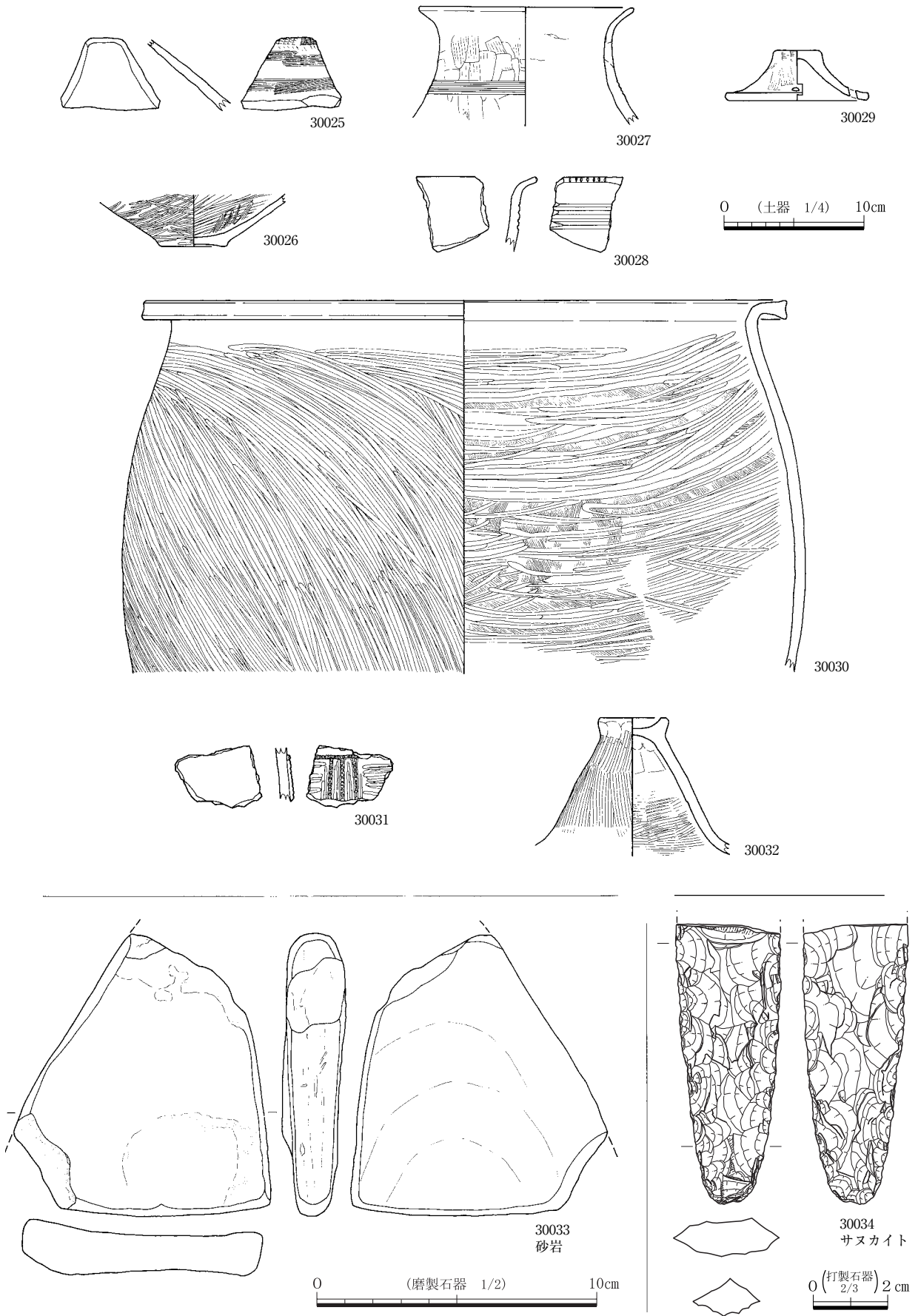


図285 03-1-3区 第6面418溝出土遺物

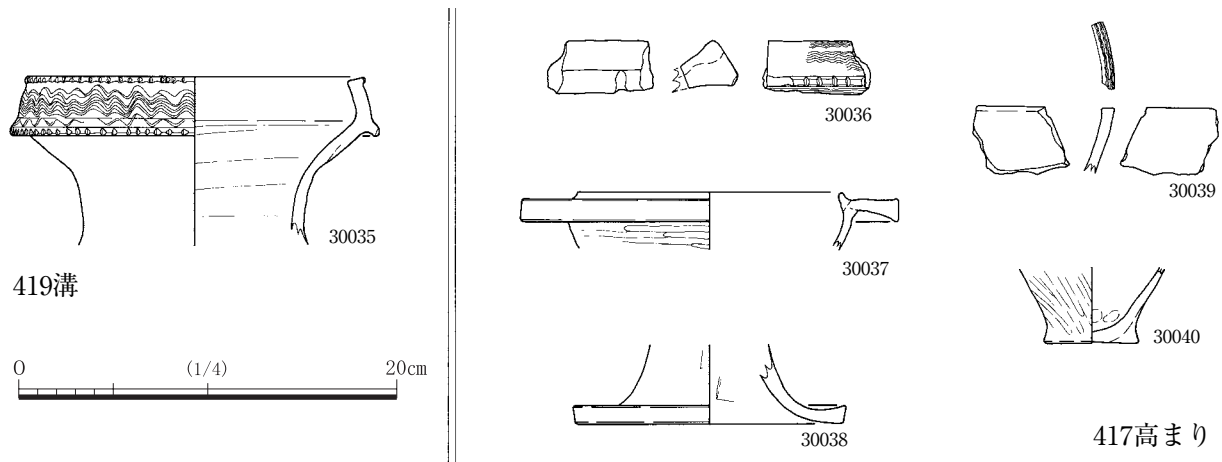


図286 03-1-3区第6面419溝、417高まり出土土器

30034 (写真図版125) はサヌカイト製の打製石剣の基部。小形で、調整を細かく施して両面ともにまるみをおびる。側縁の稜は鋭い。

419溝 調査区南東隅、418溝の南東側に位置する。418溝よりさらに深く、03-1-2区252大溝の西部南側の深い部分に続く。幅は不詳、深さ50cm以上。埋土は崩落のため不明だが、黄色の粗砂が堆積する。出土遺物は、弥生土器30片 (うちⅡ様式3片)、転用土製円板1点、オナモミ種子1点、計32点。

図286-30035は有段口縁の広口壺。受口部は下方にもわずかに拡張する。波状文と刻みで飾られるⅢ様式。

416ピット 調査区南西部、415高まりの上面で検出した。平面円形で、直径25~27cm、深さ6cm。埋土は暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂混じりシルト。出土遺物なし。

412・415・417高まりの内の遺物は、第6層で報告する。

#### (15) 03-1-3区第6層の遺物 (図286)

弥生土器99片 (うちⅠ様式1片、Ⅰ~Ⅱ様式1片、Ⅱ様式9片)、サヌカイト剥片1点、計100点出土した。そのうち、第6面検出の高まり内からの出土遺物は次の通り。

調査区西部、411溝南東側の盛土部分である412高まり内からの出土遺物は、弥生土器29片 (うちⅠ様式1片、Ⅱ様式2片) である。

調査区南西部、413溝と414溝とはさまれた415高まり内からの出土遺物はない。

調査区中央やや東、414溝と418溝にはさまれた417高まり内 (写真図版118) からは、弥生土器53片 (うちⅡ様式6片) が出土した。

図286-30036は壺の口縁端部。肥厚した端部には、波状文と刻み目が施される。下面にはミガキがみられ、焼成後に紐孔があげられている。Ⅱ-3~Ⅲ-1様式に位置づけられよう。

30037は水平口縁をもつ高杯。杯部は内湾して、水平口縁の端面は肥厚する。Ⅲ様式初頭。30038は高杯脚部。外湾して裾がひらく形態で、端部はやや肥厚する。内面のしぼり痕と、長石の多い胎土からⅡ様式末~Ⅲ様式初頭に位置づけられる。30039も高杯である。口縁端部は内面側にわずかに肥厚して面をもち、クシ描き波状文が施される。Ⅱ様式。

30040は甕の底部である。器壁は薄くⅢ様式的だが、斜め方向にミガキが施される。Ⅱ様式末~Ⅲ様式初頭。



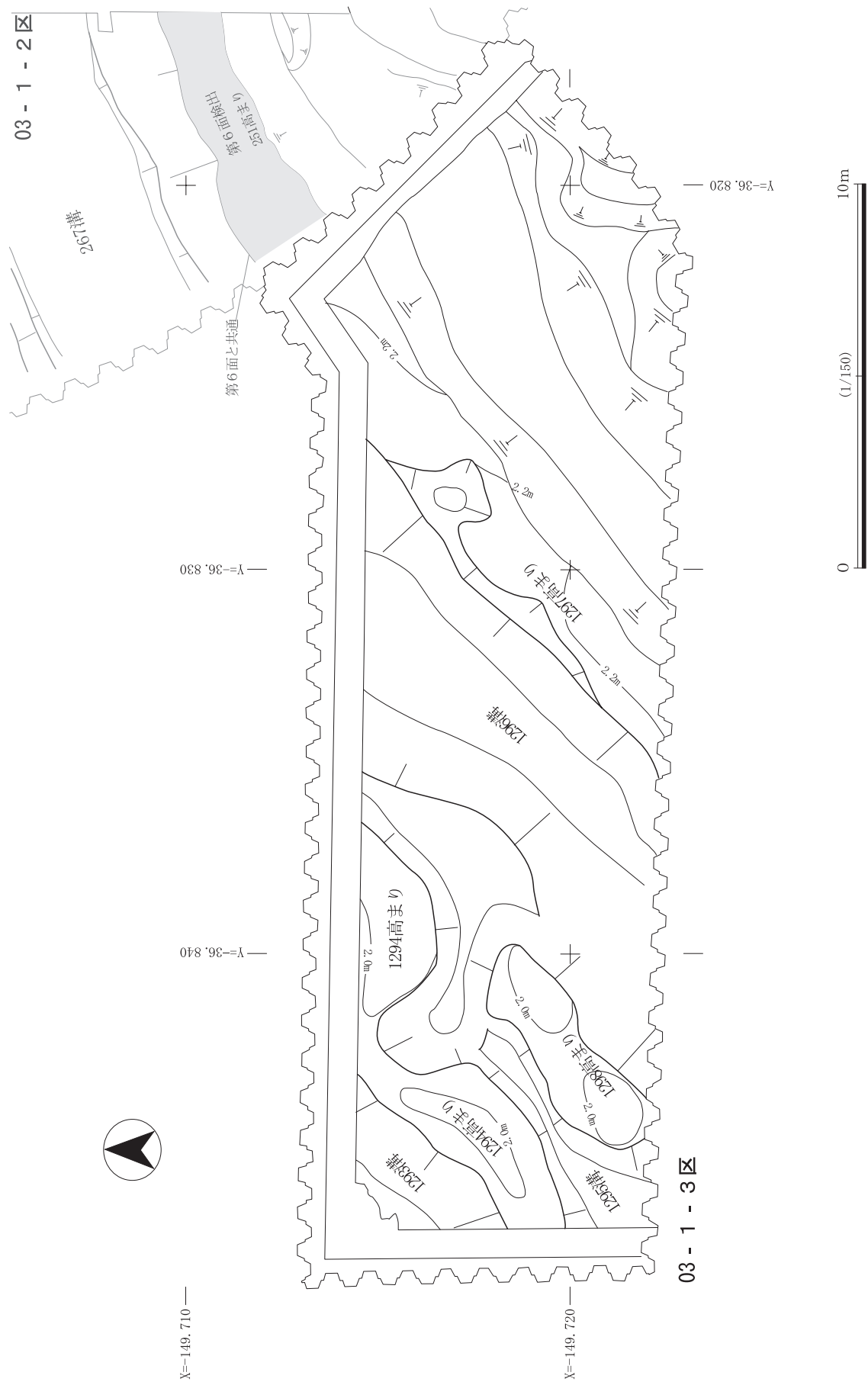


図287 03-1-3区 第7面

また、第6層以下の側溝を掘削した際に、弥生土器306片（うちⅠ様式32片、Ⅱ様式31片）、サヌカイト剥片3点、計309点出土した。

さらに、第6～10層相当のサブトレンチを掘削した際に、弥生土器54片（うちⅠ様式9片、Ⅱ様式7片）が出土した。

(16) 03-1-3区第7面の遺構と遺物（図287・288 写真図版118）

第6層の黑色土壌化層を除去した面である。

調査区東部、1297高まりの南東側以東は第6面と共通する。面の高さは、調査区西部でおよそT.P.+2.0m。遺構として、溝3条、高まり3か所、計6か所（遺構番号1293～1298）検出した。

1293溝 調査区北西部に位置する。北東-南西を主軸とすると推定できる。03-1-2区および03-1-1-1区の264溝と一連の溝と考えられる。幅3m以上、深さ45cm。埋土（図271）は、U4暗緑灰5G4/1シルト。U5暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト～細砂。U6はオリーブ黒7.5Y3/1シルト。植物遺体を含む。U7暗緑灰10GY4/1シルト・細砂のラミナ。出土遺物なし。

1295溝 調査区南西部に位置する。北東-南西を主軸とし、北東端で1296溝につながる。幅58cm以上、深さ24cm。埋土は上層と同じ。出土遺物は、弥生土器3片（うちⅠ～Ⅱ様式1片）のみ。

1296溝 調査区中央を北東-南西に流れる。03-1-2区の267溝に続く。幅およそ6～7m、深さ50cm。埋土は、黒褐2.5Y3/1細砂混じり細砂～シルトで弱い流れを想定できる。

出土遺物は、弥生土器18片（うちⅠ～Ⅱ様式1片、Ⅱ様式2片）、石庖丁1点、サヌカイト剥片2点、計21点。図288-30041は緑泥片岩製の石庖丁。片刃で直線刃半月形に復原される。両面とも端部側に敲打痕が観察される。長軸6.18cm、短軸3.29cm、厚み0.7cmで25.1gを量る。

1294・1297・1298高まりの内の遺物は、第7層で報告する。

(17) 03-1-3区第7層の遺物（図288・写真図版125）

弥生土器634片（うちⅠ様式23片、Ⅱ様式49片）、砥石2点、叩き石1点、石鏃1点、削器1点、サヌカイト剥片12点、小礫1個、計652点出土した。それらを、第7面検出の高まりごとに分けると次の通り。

調査区西部の1294高まりまたは1298高まり内からの出土遺物は、弥生土器93片（うちⅠ様式5片、Ⅱ様式10片）、砥石2点、石鏃1点、サヌカイト剥片1点、小礫1個、計98点である。

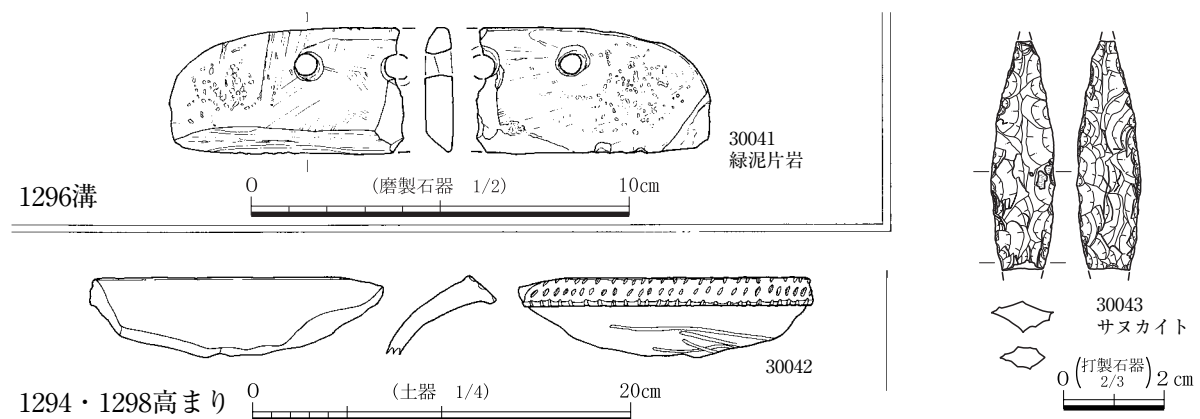


図288 03-1-3区第7面1296溝、1294・1298高まり出土遺物

図288-30042は壺の口縁。やや拡張させた端部の上下に刻み目を施し、その間も斜めの刺突文で飾る。刻み目や刺突文には、木の小口状の痕跡が残り、同一工具で施されたものと考えられる。端部の肥厚からⅡ様式に位置づけられよう。30043(写真図版125)はサヌカイトで、凸基無茎式の石鏃。先端と基部を欠損するが、残存長4.55cm、短軸1.30cm、厚み0.5cmを測る。重さは3.2g。

調査区中央やや東、1296溝の南東側の1297高まり内からの出土遺物は、弥生土器541片(うちⅠ様式18片、Ⅱ様式39片)、叩き石1点、削器1点、サヌカイト剥片11点、計554点である。

#### (18) 03-1-3区第8面の遺構と遺物(図289・290 写真図版119・126)

黒色を呈する盛土層の上面である。

調査区東部、1317高まりよりも南東側は第6・7面と共通する。面の高さはT.P.+1.8~2.1mで、調査区東部が高い傾向にある。遺構として、溝3条、高まり3か所、ピット2個、計8か所(遺構番号1310~1317)を検出した。

1310溝 調査区北西部に位置する。主軸方位は北東-南西と推定される。03-1-2区で東北東-西南西を主軸とする288溝、さらには03-1-1区の62溝・61溝と一連の溝と考えられる。幅3m以上、深さ97cm以上。埋土(図271)は、U9灰オリーブ5Y5/2細砂・オリーブ黒5Y3/1シルト~細砂・にぶい黄2.5Y6/4細砂~粗砂のラミナを主体とする。それ以前に東肩には崩落土、あるいは高台へU8が堆積する。U8灰オリーブ5Y5/2細砂・暗オリーブ灰5GY4/1シルト~細砂・暗灰N3/シルトブロックなどが混じり合う。

弥生土器10片(うちⅡ様式2片)とサヌカイト剥片1点、計11点出土した。

1316溝 調査区中央に位置する。主軸方位は北東-南西。03-1-2区の297溝に続く。幅4.2~6.1m、深さ77cm。埋土(図271)は細かく分かれ、シルト~細砂が主体となる。V3灰5Y5/1シルト。植物遺体を少量、灰10Y6/1細砂を含む。V4灰10Y4/1シルト。灰オリーブ7.5Y4/2細~粗砂・暗オリーブ灰2.5GY4/1シルトブロック混じる。V5灰7.5Y5/1シルト。V6灰5Y5/1シルト植物遺体を少量含む。V7~V9は崩落土で、V7・9は暗灰黄2.5Y4/2シルトを基調とし、黄褐2.5Y5/4細砂・灰N4/シルトブロックを含む。V7は下層よりシルトが多く、V8はオリーブ黒7.5Y3/1シルトで灰10Y5/1シルト小ブロックを含む。V10は東肩の崩落土で浅黄2.5Y7/4細砂・黒褐2.5Y3/2シルトブロック・植物遺体が混ざり合う。V11・V12は東西に薄く堆積し、一時期の溝底と考えられる。V11オリーブ灰シルト、明オリーブ灰2.5GY7/1細砂を含む。V12オリーブ黒5Y3/2シルトで植物遺体を多く含む。

1316溝の出土遺物は、弥生土器288片(うちⅠ様式8片、Ⅱ様式33片)、土製円板2点、石庖丁1点、叩き石1点、スギの木片1点、計293点。図示したのは4点である。図290-30044は広口壺。上下に拡張した口縁部には簾状文が飾られる。内面のミガキは屈曲部まで施される。Ⅳ様式前半(Ⅲ様式末)。30045は長頸壺。頸部下端はしぼられ、口縁外反して端部をまるくおさめる。Ⅱ-2様式。外面は煤付着して、一部赤変している。30046(写真図版126)は紀伊系の甕か。外面の調整は上へケズリ後、横方向にナデ。Ⅱ様式であろう。

30047は片刃の石庖丁片。緑泥片岩製でほとんどを欠損するが、残存長4.10cm、幅3.86cm、厚み0.6cmで12.5gを量る。

1312落ち込み 調査区西部に位置する。基本的に北東-南西を主軸とするが、北東部で東に転じ、1316溝につながる。幅1.3~2.9m、深さ29cm。埋土は、上層と同じで黒褐2.5Y3/1シルト。弥生土器40片

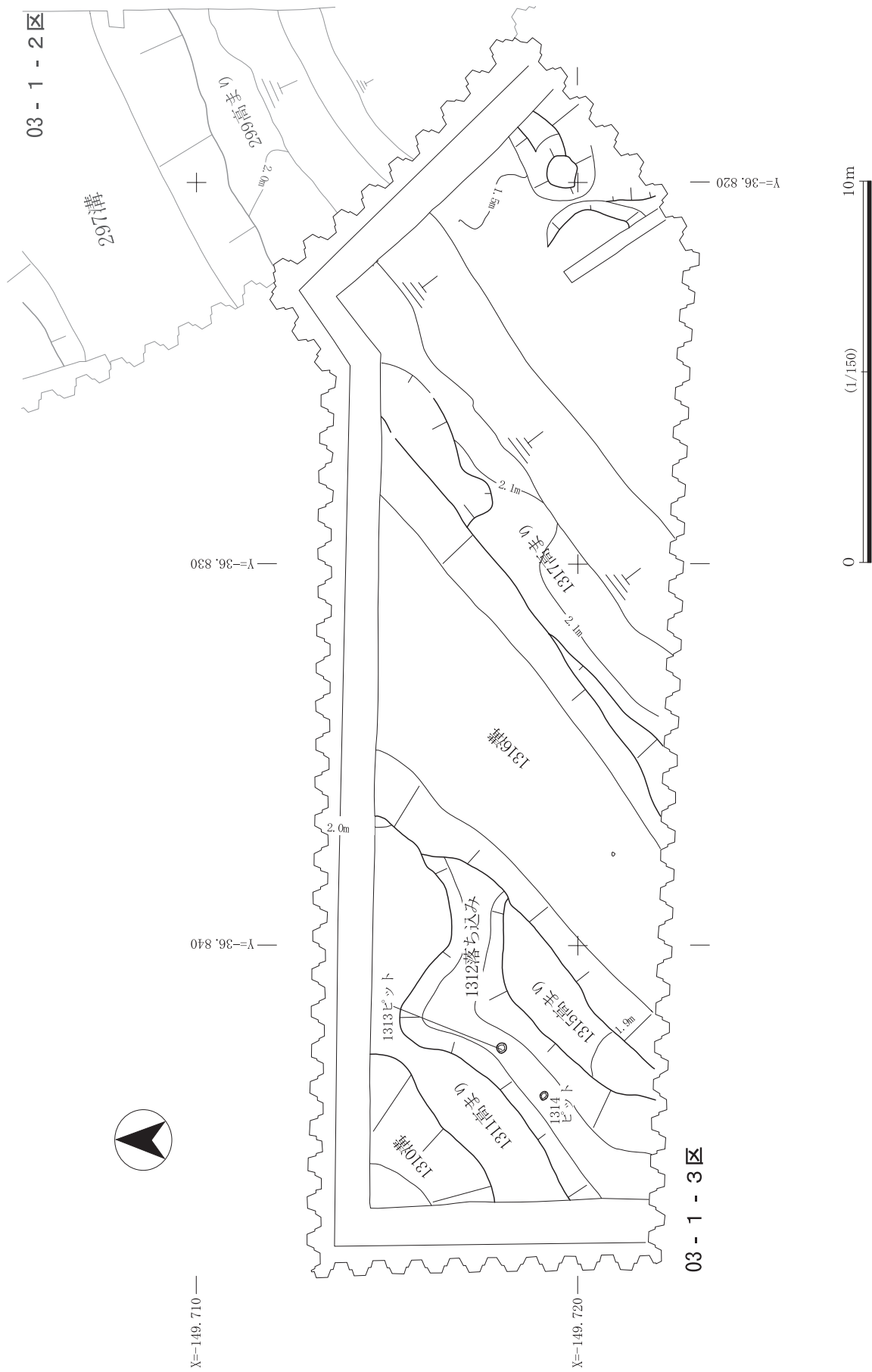


図289 03-1-3区 第8面

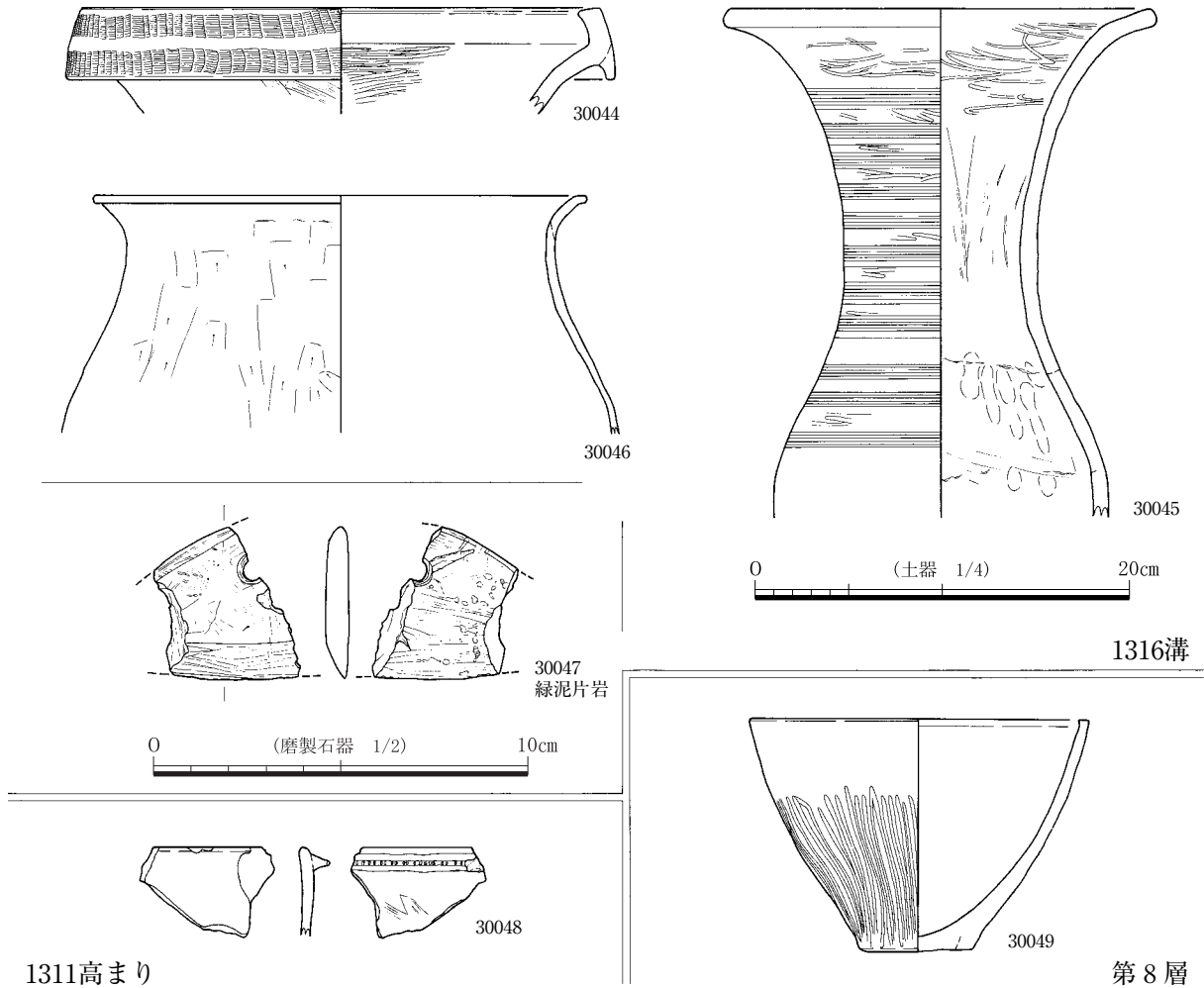


図290 03-1-3区第8面1316溝、1311高まり、第8層出土遺物

(うちⅠ様式2片、Ⅱ様式2片)が出土した。

この1312落ち込みの底でピットを2個検出した。

1313ピット 平面円形で、直径24~25cm、深さ8cm。埋土は、黄灰2.5Y4/1シルト。出土遺物はない。

1314ピット 平面楕円形で、西北西-東南東に主軸をもつ。長径26cm、短径19cm、深さ6cm。埋土は黒褐2.5Y3/1シルト。出土遺物なし。

1311・1315・1317高まりの内の遺物は、第8層で報告する。

なお、調査区東部、1317高まりよりも南東側の範囲は、第6面418・419溝の下層として、この第8面で精査した。418溝の下層部分から、弥生土器149片(うちⅠ様式6片、Ⅱ様式30片、Ⅲ様式1片)、砥石1点、打製石剣1点、削器1点、サヌカイト剥片2点、計154点を取り上げた。

(19) 03-1-3区第8層の遺物(図290・写真図版126)

弥生土器1003片(うちⅠ様式93片、Ⅰ~Ⅱ様式41片、Ⅱ様式42片)、転用土製円板3点、削器2点、サヌカイト剥片7点、小礫6個、計1021点出土した。

第8層出土遺物のうち第8面検出の高まり内からの出土遺物は次の通り。

調査区西部、1310溝南東側の1311高まり内から、弥生土器160片(うちⅠ様式8片、Ⅰ~Ⅱ様式3片、Ⅱ様式7片)、転用土製円板3点、小礫3個、計166点出土した。

図290 - 30048 (写真図版126) は瀬戸内系の甕である。口縁から少し下がったところに刻み目突帯がつく。Ⅰ～Ⅱ様式。

調査区南西部、1310溝と1316溝とにはさまれた1315高まりからの出土遺物はない。

調査区中央やや東、1316溝南東側の1317高まり内からの出土遺物は、弥生土器739片 (うちⅠ様式78片、Ⅰ～Ⅱ様式33片、Ⅱ様式20片)、削器2点、サヌカイト剥片5点、小礫3個、計749点と、面積約30㎡、層厚約10cmにしては多い。

高まりに属さない第8層からの出土遺物は、弥生土器104片 (うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式5片、Ⅱ様式15片)、サヌカイト剥片2点、計106点である。

図290 - 30049 (写真図版126) は鉢。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面をなす。外面は下半にのみミガキで、口縁下は横方向になでる。内外面に煤が付着する。Ⅱ様式に位置づけられよう。

#### (20) 03 - 1 - 3 区第9面の遺構と遺物 (図291～295 写真図版119・120・126・127)

第8層の粗砂混じり黒色土を除去した面である。

面の高さは、調査区西部でT.P.+1.6～1.7m、東部ではT.P.+1.9～2.0mと、東が高い傾向にある。遺構として、溝4条、高まり2か所、落ち込み1か所、杭14本計21か所 (遺構番号1377～1397) を検出した。

1377溝 調査区北西部に位置する。当03 - 1 - 3区での主軸方位は北東 - 南西と推定される。03 - 1 - 2区および03 - 1 - 1区の330溝と一連の溝と考えられる。幅4m以上、深さ79cm以上。埋土 (図271) は、肩口に残るのみでU10暗オリーブ灰5GY3/1シルト・暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂のラミナ。上層第8面の1310溝の掘削により埋土の大半が失われており、出土遺物はない。

1380溝 調査区中央に位置する。主軸方位は北東 - 南西。03 - 1 - 2区の297溝に続く。幅5.2～6.2m、深さ74cm。埋土 (図271) は、V13暗灰黄2.5Y4/2シルトを基調とし、黄褐2.5Y5/4細砂・灰N4/シルトブロックを含み、上層V9より細砂が多い。この溝も、上層第8面の1316溝の掘削により埋土の大半が失われており、出土遺物はない。

1382溝 (写真図版119) 調査区東部に位置する。主軸方位は北東 - 南西。幅3.9～5.0m、深さ31cm以上。埋土は、W5暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト。出土遺物は、弥生土器852片 (うちⅠ様式47片、Ⅰ～Ⅱ様式40片、Ⅱ様式84片、Ⅲ様式6片)、転用土製円板2点、石庖丁2点、紡錘車1点、石錘2点、砥石1点、打製石剣基部1点、サヌカイト剥片8点、小礫6個、計875点である。

図示したのは土器4点と石器6点。図292 - 30050 (写真図版126) は壺口縁部。端部は欠けるが、簾状文が2段にわたることから、下方にも同程度拡張していると考えられる。内面のミガキは屈曲部までおよび、Ⅲ - 2～Ⅳ - 1様式 (Ⅲ様式新段階)。30051 (写真図版126) は広口壺。口縁端部は下端に刻み目が施され、上端も一部に浅く刻み目が残っている。上面はクシ原体による扇形文で飾られる。淀川水系の影響が示唆される。Ⅱ様式に位置づけられよう。

30052は無頸壺の底部である。粘土をつまんで上げ底を作り、貫通孔を向かい合わせに2つあける。一方の孔は1mmに満たないほど狭い。Ⅱ - 3様式。30053は大和型の甕。外面は縦位、内面は横位のハケ調整。

30054・30055 (写真図版126) は石庖丁。30054は片面に敲打痕、反対側の面には研磨痕が認められる。緑泥片岩製で残存長6.68cm、幅6.15cm、厚み1.0cmで53.0g。30055は刃部を打ち欠いたもの。泥岩製

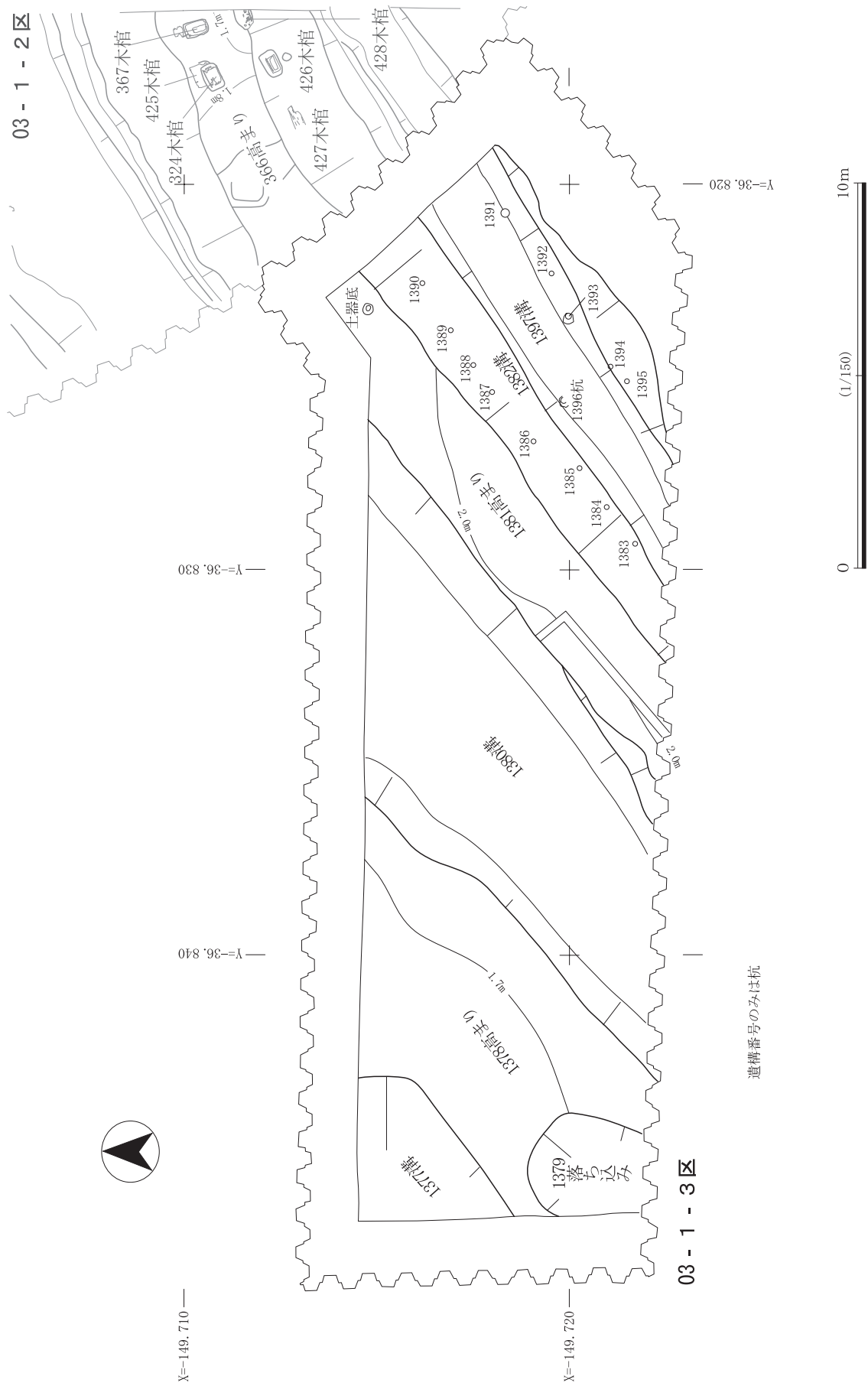


図291 03-1-3区 第9面

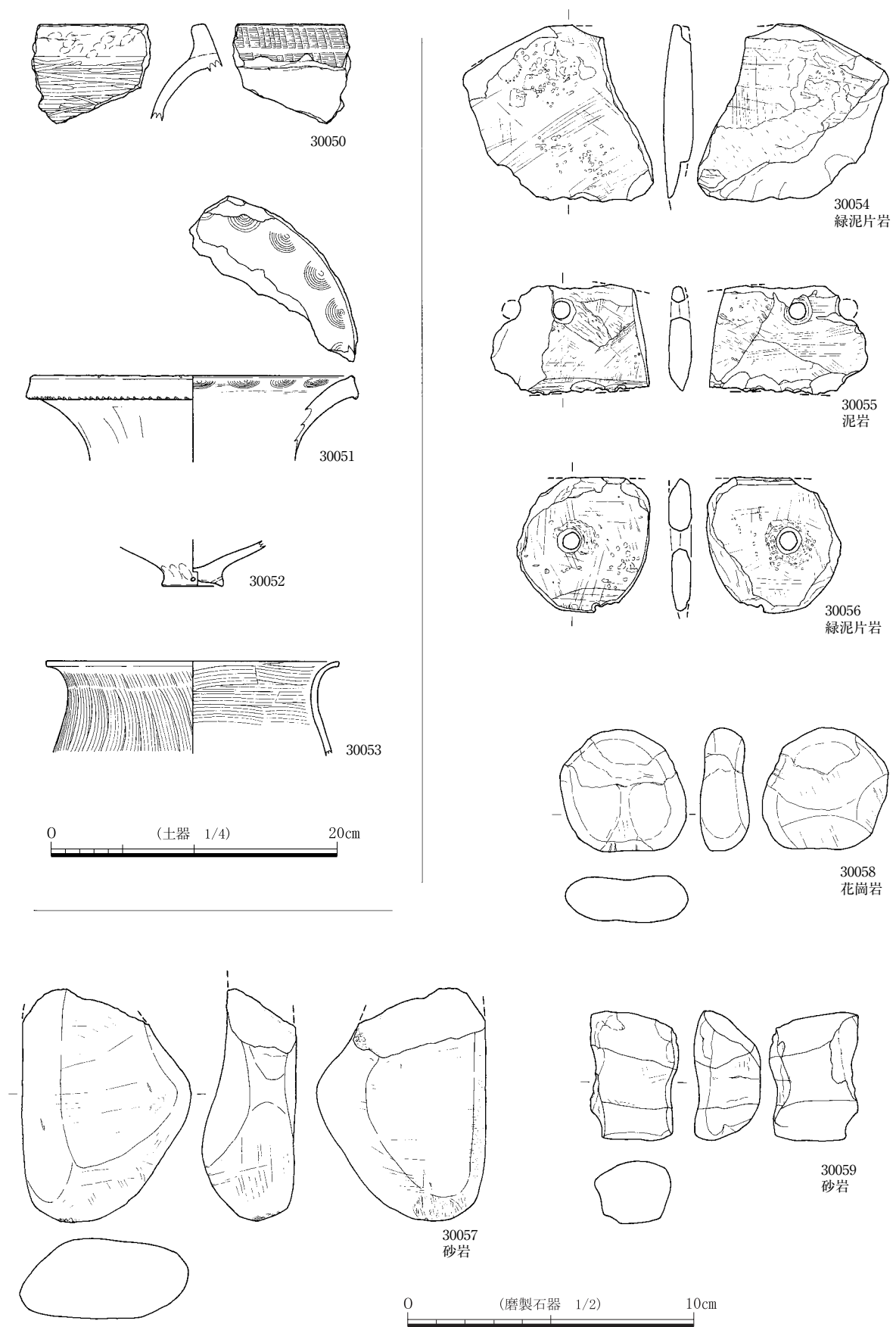


図292 03-1-3区第9面1382溝出土遺物



で残存長5.42cm、幅3.72cm、厚み0.8cmで19.6gを量る。30056（写真図版126）は緑泥片岩製の紡錘車。両面に敲打痕や研磨痕が観察される。周縁部の研磨は不完全で、図の上部が直線的であることから、石庖丁転用品の可能性はある。

30057は砂岩製の砥石。横方向の擦痕が目立つ。上部を欠損するが、残存長8.18cm、短軸5.85cm、厚みは2.8cmを測る。

30058・30059は石錘。30058の平面形はほぼ円形で、「Y」字状にくぼみがはしる。長軸4.33cm、短軸4.28cm、厚み1.6cm、重さ43.4g。30059は砂岩製で、横位の紐痕が残る。長軸4.42cm、短軸3.06cm、厚み2.2cmで39.9gを量る。

1397溝（写真図版120） 1382溝の下層にあたり、03-1-2区へと続く。北東-西南西を主軸とする。幅1.8~2.5m、深さ86cm。埋土（図271）は黒色土を主体とする。W6暗オリーブ灰5Y3/1シルト、植物遺体を含む。W7灰7.5Y4/1シルト、植物遺体を含む。W8黒5Y2/1シルト、植物遺体を含む。

出土遺物は多く、弥生土器2549片（うちI様式295片、I~II様式134片、II様式141片）、転用土製円板4点、磨石1点、砥石1点、叩き石3点、打製石剣基部2点、削器2点、サヌカイト剥片21点、中礫1個、小礫5個、計2589点と骨（表44参照）である。

図示したのは土器12点と石器1点である。図293-30060は壺。口縁端部はやや垂下して、下端に刻み目が施される。刻み目は切れこみを入れたあと、指で間を広げて三角形状につくっている。頸部にはクシ描き直線文がめぐり、間にはミガキが暗文状に入る。II様式。30061は壺口縁部。頸部と口縁端面にはクシ描き直線文が施される。口縁は垂下し、下端は大きく刻んで指で押し広げる。II-2~3様式。30062（写真図版127）は口縁部と体部を欠く長頸の広口壺。頸部にクシ描き直線文と扇形文を施す。II様式。上端と下端は意図的に打ち欠かれ、特に下端はまるく研磨されている。逆位で安定して接地しており、器台として再利用か。30063（写真図版127）は壺口縁。やや肥厚した口縁端部には、沈線が横位に4条、その後、刻み目が上下2帯ずつに分けて施される。内外面にはミガキが施されるが、やや散漫である。I-4~II様式。

30064（写真図版127）は大形の甕である。口縁は縦方向の工具ナデによって外反し、端部はまるみを帯びておさまる。口縁直下、目立たない位置に沈線状の溝が1条めぐっている。体部はハケ調整後、内外面ともに横方向に区切りながらミガキを施す。II様式。30065（写真図版127）は鉢。体部はクシ描き直線文と波状文、間はミガキで飾られる。口縁端部までミガキが施される丁寧な作り。II様式。30066は鉢。内湾する体部をもつ。II様式。

30067は壺頸部。貼り付け突帯8条以上が頸部をめぐり。I-4様式。30068は壺の体部。上半にめぐる削り出し突帯上には沈線4条がめぐり。胴部は横に張り、扁平な器形となる。I-2様式。30069は壺の口縁部。頸部の削り出し突帯上に、沈線2条が確認できる。I-2様式。

30070は突起付きの鉢。1つのみ残存した突起は、先端が磨耗しているため、外にのびる可能性をもつ。口縁は突起の上でやや波うっており、他の部分より薄くなる。成形時の歪みか。口縁から突起までは内外面ともに煤けている。I-3~II-1様式。30071（写真図版127）は小形の鉢。ケズリによって成形される。口縁はつまみあげて作られ、ところどころ波うつ。端部は工具ナデによって面をなす。外面下半は器面が剥落する。

30072は砂岩製の砥石である。隣接する2面を利用し、擦痕は横と縦の異なる方向に見られる。長軸8.93cm、短軸7.47cm、厚み4.2cm。

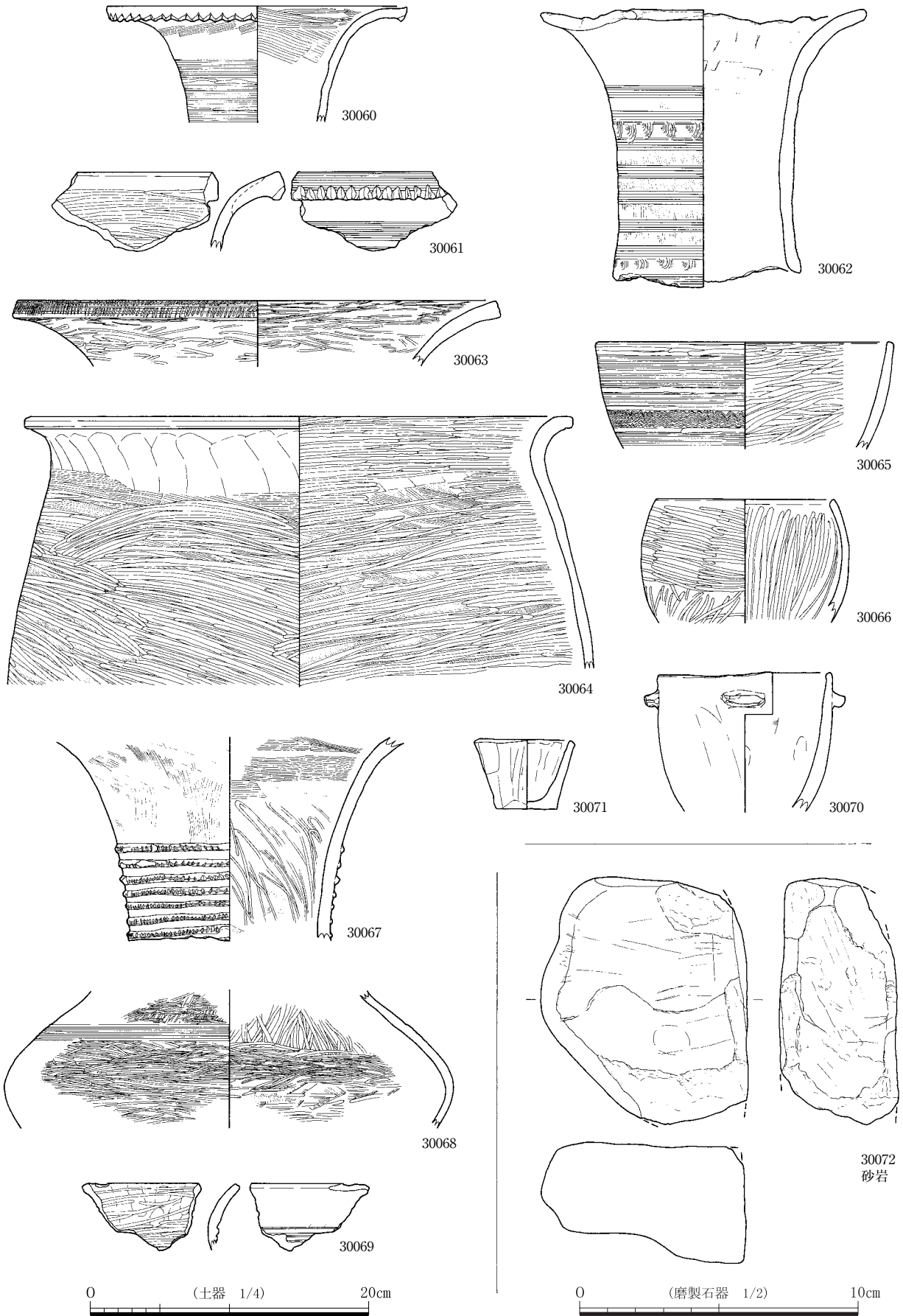


図293 03-1-3区第9面1397溝出土遺物

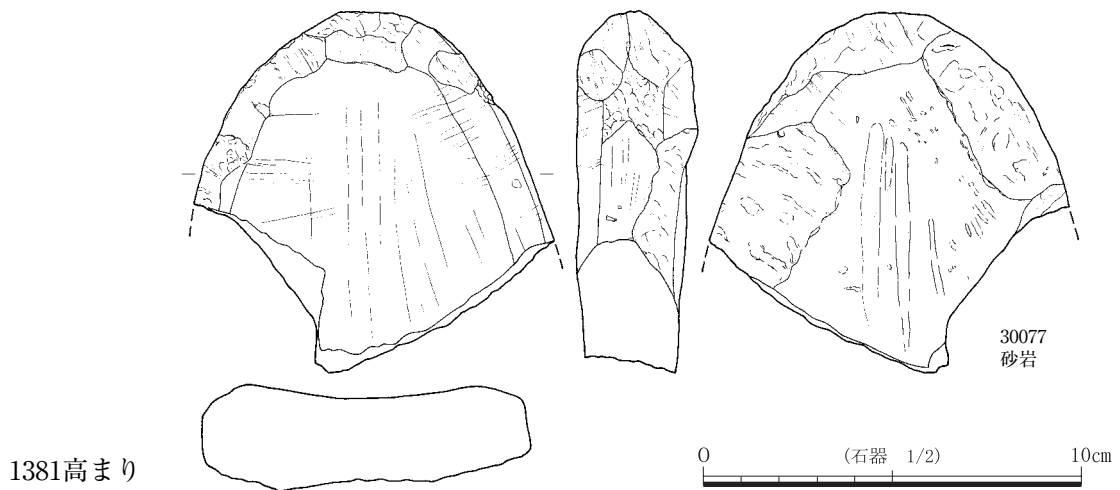
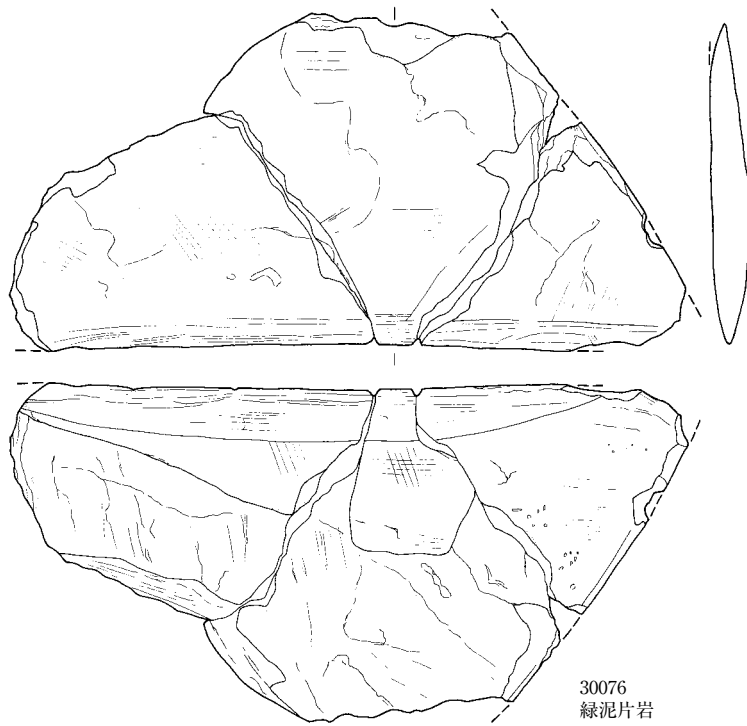
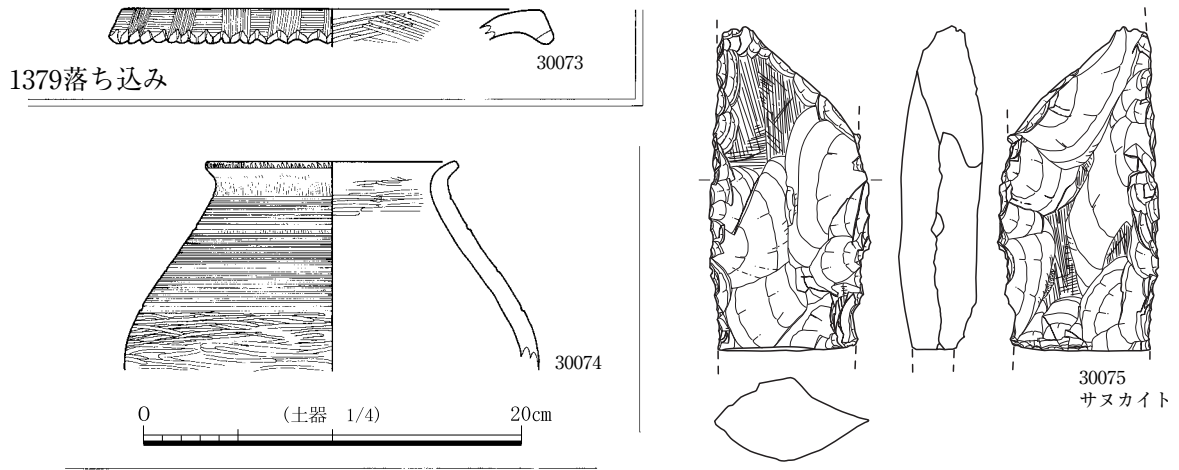


図294 03-1-3区 第9面1379落ち込み、1381高まり出土遺物

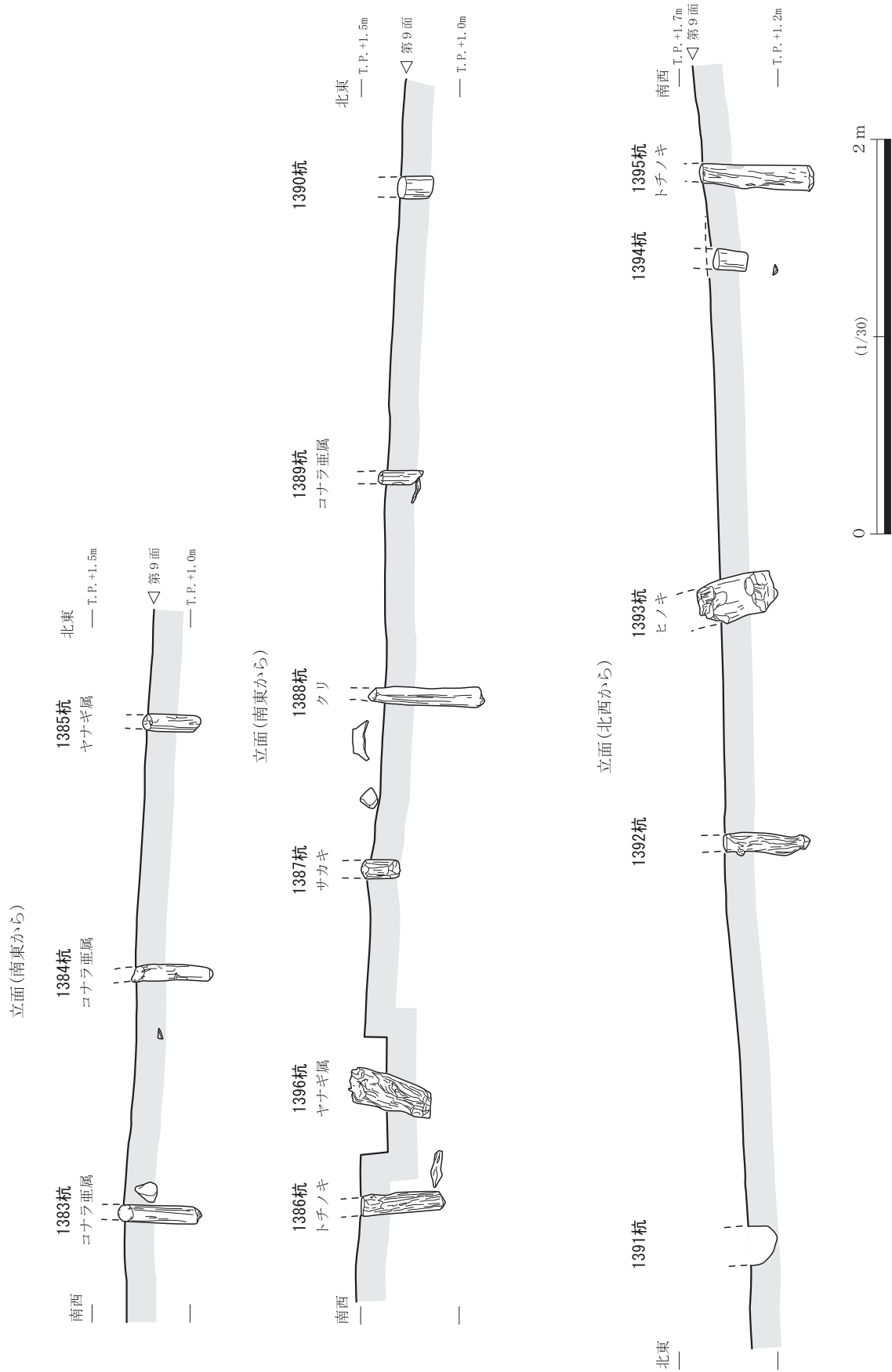


図295 03-1-3区 第9面検出1383~1396杭

1379落ち込み 1378高まりの南西部に位置する。平面不整形と推定され、東西2.7m以上、南北3.3m以上、深さ47cm。埋土は第8層と同じ。

出土遺物は、弥生土器76片（うちⅠ様式4片、Ⅰ～Ⅱ様式2片、Ⅱ様式8片、Ⅲ様式1片）、小礫1個、花崗岩1個、計78点である。

図294-30073は壺の口縁。垂下させた端部に刻み目を入れ、さらにつまんで三角形状に作り出す。口縁端部には、クシ描き直線文が横方向に、その後縦方向にも施される。Ⅱ様式。

1383～1396杭（図295 写真図版119・120） 調査区東部、1382溝の底、あるいは1397溝の岸近くに打ち込まれている。平面図（図291）に示すように、1383～1385杭と1386～1390杭がわずかに並びを違えて、1397溝の北西側に、北東-南西に並ぶ。

1383～1385杭の検出レベルはT.P.+1.24～1.36m、ほぼ垂直に、先端はT.P.+0.89～0.94mまで打ち込まれている。いずれも直径8～9cmの丸太で、先端が尖るように加工されている。芯々距離で、1383杭と1384杭が122cm、1384杭と1385杭が127cm。樹種は、1383杭と1384杭がコナラ亜属、1385杭はヤナギ属。

1386～1390杭は、1383～1385杭よりも1382溝の北西側法面のやや上方、T.P.+1.31～1.50mで検出した。ほぼ垂直に打ち込まれているが、先端のレベルはT.P.+0.87～1.30mと一定しない。いずれも直径7～9cmの丸太で、先端の加工痕はあまり先鋭ではない。芯々距離で、1386杭と1387杭が170cm、1387杭と1388杭が89cm、1388杭と1389杭が110cm、1389杭と1390杭が146cm、平均129cm。樹種は、1386杭がトチノキ、1387杭がサカキ、1388杭がクリ、1389杭がコナラ亜属、1390杭は取り上げ不能であった。

一方、1391～1395杭は1397溝の南東側に並ぶが、その並びは1383～1390杭と同様に北東-南西である。ちょうど1397溝の南東側肩部に並び、その傾斜に合わせT.P.+1.34～1.60mで検出された。1383～1390杭がほぼ垂直に打ち込まれていたのに対し、若干傾いているように見える。太さと先端のレベルから、直径20cm程度で先端のレベルT.P.+1.20mの1393杭と1394杭と、直径10～12cmで先端のレベルT.P.+1.02mの1392杭と1395杭の別がある。なお、1391杭は痕跡のみ。いずれも先端の加工痕は明瞭ではない。芯々距離で、1391杭と1392杭が205cm、1392杭と1393杭が122cm、1393杭と1394杭が175cm、1394杭と1395杭が44cm、平均は137cmだが、ばらつきが大きい。樹種は、1393杭がヒノキ、1395杭がトチノキ、1391・1392・1394杭は不明である。

また、1396杭が1397溝の中にみられる。頭部が南東に傾いた状態で、頭部T.P.+1.56m、先端T.P.+1.14m。太さ18cm、樹種はヤナギ属。配置から、1386杭、1394杭とともに、1397溝を横断する杭列を構成するようにも見える。1394杭と1395杭との間隔が44cmと他に比べて狭いのも、これら3本の杭が、1397溝を横断する杭群を構成していたためと考えることもできる。

#### (21) 03-1-3区第9層の遺物（図294・296 写真図版128）

第9層からの出土遺物は多く、弥生土器2316片（うちⅠ様式231片、Ⅰ～Ⅱ様式160片、Ⅱ様式129片）、紡錘車1点、転用土製円板1点、柱状片刃石斧1点、石庖丁1点、磨石5点、砥石3点、叩き石1点、石剣1点、削器2点、石錘1点、サヌカイト石核1点、サヌカイト剥片36点、緑泥片岩剥片6点、礫13個、木杭3本、焼土塊1点、クルミ属核3点、計2396点である。

それらは、第9面の1378高まり内、1381高まり内、第9面1383～1390杭周辺の第9層、その他の第9層部分に分けられる。

調査区西部の1378高まり内から、弥生土器295片（うちⅠ様式29片、Ⅰ～Ⅱ様式16片、Ⅱ様式18片）、転用土製円板1点、磨石3点、中礫1個、計300点出土した。

調査区中央やや東の1381高まりは、下層の第10面まで20～40cmの厚みがあったので、特に層理面は認められなかったが、掘削作業に合わせて遺物も上下に分けて取り上げた。

出土遺物は、1381高まり上半で、弥生土器473片（うちⅠ様式45片、Ⅰ～Ⅱ様式26片、Ⅱ様式16片）、石庖丁1点、磨石1点、砥石1点、削器1点、サヌカイト剥片11点、小礫4個、計492点。高まり下半では、弥生土器674片（うちⅠ様式43片、Ⅰ～Ⅱ様式42片、Ⅱ様式62片）、砥石1点、叩き石1点、石剣1点、削器1点、サヌカイト剥片18点、小礫1個、計697点。上半・下半合わせて、弥生土器1147片（うちⅠ様式88片、Ⅰ～Ⅱ様式68片、Ⅱ様式78片）、石庖丁1点、磨石1点、砥石2点、叩き石1点、石剣1点、削器2点、サヌカイト剥片29点、小礫5個、計1189点であった。

図294 - 30074（写真図版128）は無頸壺。胴部上半は太い沈線の間を細い沈線でうめる和泉地域に特有の「太細併用沈線」で飾られる。短く外反する口縁には刻み目を施す。Ⅰ様式末。胎土中にチャートを含んでおり、和泉からの搬入土器かと思われる。

30075（写真図版128）は石剣の基部で先端を欠くが、調整が加えられている。部分的に研磨が観察される。残存長8.52cm、幅4.15cm、厚み2.2cm。30076（写真図版128）は緑泥片岩製の大型石庖丁。1孔をもつ二等辺三角形に復原されるだろう。赤変しており熱を受けて破損したものか。残存長17.80cm、幅8.77cm、厚さ1.0cm。165.1gを量る。30077は砂岩製の砥石。砥面は2面にあり、側面以外は石皿状にくぼむ。残存長9.90cm、幅9.32cm、厚み2.6cm。

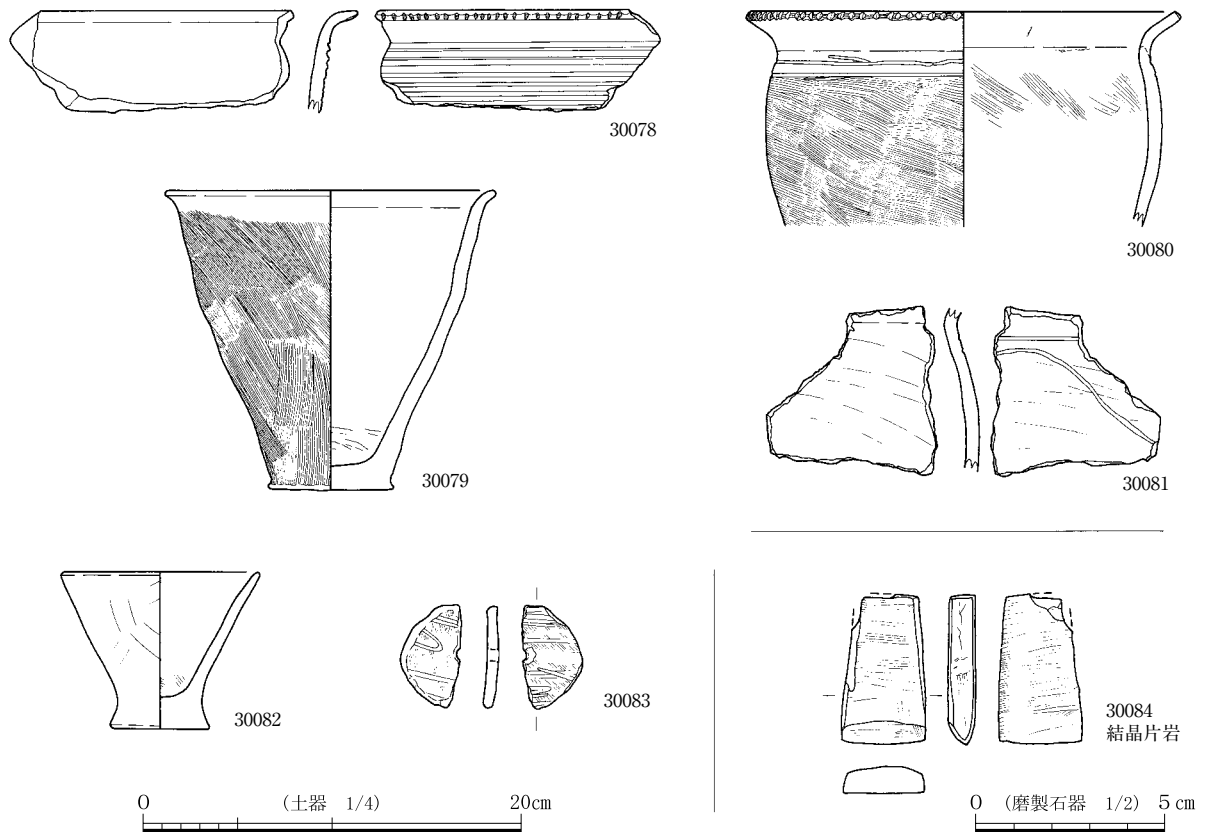


図296 03 - 1 - 3区 第9層出土遺物

第9面1383～1390杭周辺の第9層から、弥生土器47片（うちⅠ様式16片、Ⅰ～Ⅱ様式3片）、砥石1点、サヌカイト剥片3点、小礫1個、木杭3本、計55点出土した。

図296-30078～30081は甕でⅠ様式後半に位置づけられる。30078の口縁端部の刻み目には、木の小口状の痕跡がよく残る。体部の沈線は9条以上。30079（写真図版128）は小形の甕。頸部は横方向のナデによって外反し、肩部は張らない。外面は左上がりの断続的なハケ調整が施される。30080の口縁端部は横方向のハケ調整が残り、その後刻み目が入る。やや張った肩部の沈線は2条と少条で、口縁はゆるやかに外反する。30081（写真図版128）は文様のある体部片。頸部にはヘラ描き直線文がひかれ、やや膨らんだ胴部には右下がりの曲線が描かれる。山形文や波状文との関連を考えさせられる。

30082（写真図版128）は1385杭周辺から出土した小形の台付き鉢である。外面はランダムに、内面は横位にナデ整形され、一部に工具痕が残っている。Ⅰ～Ⅱ様式か。30083は土器転用紡錘車。孔の内側はよく摩耗されている。

その他の第9層部分からは、弥生土器827片（うちⅠ様式98片、Ⅰ～Ⅱ様式73片、Ⅱ様式33片）、紡錘車1点、柱状片刃石斧1点、磨石1点、石錐1点、サヌカイト石核1点、サヌカイト剥片4点、緑泥片岩剥片6点、小礫6個、焼土塊1点、クルミ属核3点、計852点出土した。

30084（写真図版128）は柱状片刃石斧。横位の研磨痕が顕著である。長軸3.92cm、幅2.20cm、厚み0.7cm。重さは11.9g。石材には長軸方向に縞が観察される。

## (22) 03-1-3区第10面の遺構と遺物（図297～304 写真図版121・129～131）

黒褐色ないし灰オリーブ色を呈する盛土層の上面である。

面の高さは、調査区西部でT.P.+1.2～1.5m、中央部～東部でT.P.+1.6～1.8mと東に向かって高まる。遺構として、溝5条、高まり3か所、土坑1基、ピット2個、杭3本、計14か所（遺構番号1407～1420）を調査した。1410高まりの上面で、土坑1基とピット2個を検出した。

1407溝 調査区北西部に位置する。主軸方位は北東-南西と推定される。03-1-2区の441溝、さらには03-1-1区の129溝・130溝と一連の溝と考えられる。幅3m以上、深さ68cm以上。埋土（図271）は、黒色土層U11、砂層U12とさらに黒色土層U13以下に大きく分けられる。上層の黒色土はU11' 暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂混じりシルト。U11黒2.5Y2/1粘質シルト。その下には、U12暗灰黄2.5Y4/2粗砂を主体に、暗オリーブ灰2.5GY4/1シルトの小ブロックなどが混じる。木片が多く含まれ、肩口はラミナが乱れ崩落している。中位にはオリーブU13黒10Y2/1シルトをはさむ。下半中心部にはU14黒5Y2/1シルト・オリーブ黒10Y3/1シルトがラミナを形成し、オリーブ黒10Y3/1粗砂混じりシルトブロックが大きく入る。U15下半肩口には暗オリーブ5Y4/4粗砂がラミナを形成し、層境には黒10Y3/1シルトブロックが堆積する。

出土遺物は、弥生土器38片（うちⅠ様式4片、Ⅱ様式2片）、小礫1個、木材2点、計41点である。図298-30085（写真図版129）は鉢の体部。クシ描き直線文と扇形文で擬似流水文が施され、一部、扇形文の間はナデ消される。口縁端部は横ナデによって面を作る。Ⅱ様式。

30086は直径7.2cmほどの割材で、外面には樹皮が残る。木材繊維と平行に加工を行って、木心部を除去している。削り抜きの器や把手の可能性が考えられる。なお、木心部にのみ炭化が見られ、加工時のものかと考えられる。短辺の一方は破損する。30087は柁目取りの板材で、短辺両側を削って段差を作り出している。箱の部材が可能性として考えられる。いずれもスギ材を用いる。





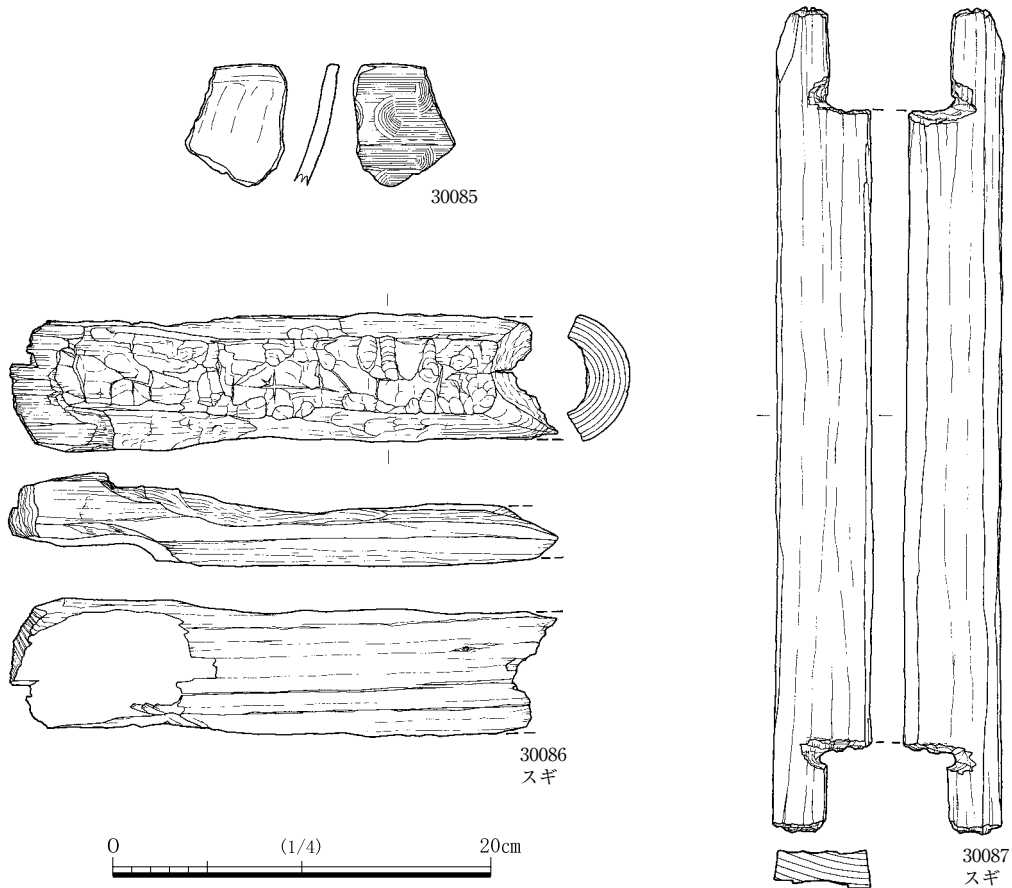


図298 03-1-3区 第10面1407溝出土遺物

1409溝 調査区中央に位置する。主軸方位は北東-南西。03-1-2区の445溝に続く。幅4.3~5.6m、深さ136cm。埋土(図271)は、上~中層の砂、下半の黒色シルトに大きく分けられる。V14浅黄5Y7/3粗砂~中礫を主体とし、オリーブ黒7.5Y3/1シルトを薄くはさみ、下部はやや細粒化する。V15上半にオリーブ黒7.5Y3/1細砂ラミナ、植物遺体薄層をはさんで、下半は黒5Y2/1粘質シルト・暗オリーブ灰5GY4/1シルトがラミナを形成し、中央部にはブロック、また植物遺体を多く含む。V16崩落土。暗緑灰5G4/1・オリーブ黒7.5Y3/1ラミナにブロックが混じる。また、V17・18は10面以前の遺構の可能性を示す黒層である。V17オリーブ黒5Y3/2シルトでブロックを含む。V18暗緑灰7.5GY4/1シルト。オリーブ黒5Y3/2の粘質シルトブロックを含む。なお、下半の黒色土V15はサンプリングを行っている。

1409溝では、出土遺物を3層に分けて取り上げた。上~中層の砂層からは、弥生土器794片(うちI様式60片、I~II様式60片、II様式67片)、打製石剣基部1点、削器2点、楔1点、サヌカイト剥片5点、叩き石1点、小礫2個、木製高杯2点、木製容器1点、木1点、焼土塊1点、小計811点。下層の黒色土層からは、弥生土器218片(うちI様式11片、I~II様式9片、II様式15片)、サヌカイト剥片1点、中礫1個、計220点。1409溝全体では、弥生土器1012片(うちI様式71片、I~II様式69片、II様式82片)、石剣1点、削器2点、楔1点、サヌカイト剥片6点、叩き石1点、中礫1個、小礫2個、木製品・木片4点、焼土塊1点、合計1031点となる。

図示した5点は全て砂層出土である。図299・30088(写真図版129)は壺。頸部から体部にかけてクシ描き直線文が施される。口縁端部は肥厚し始めている。30089(写真図版129)の広口壺は、頸部にクシ描き直線文、わずかに肥厚させた口縁端面に波状文を施す。いずれもII様式に位置づけられる。

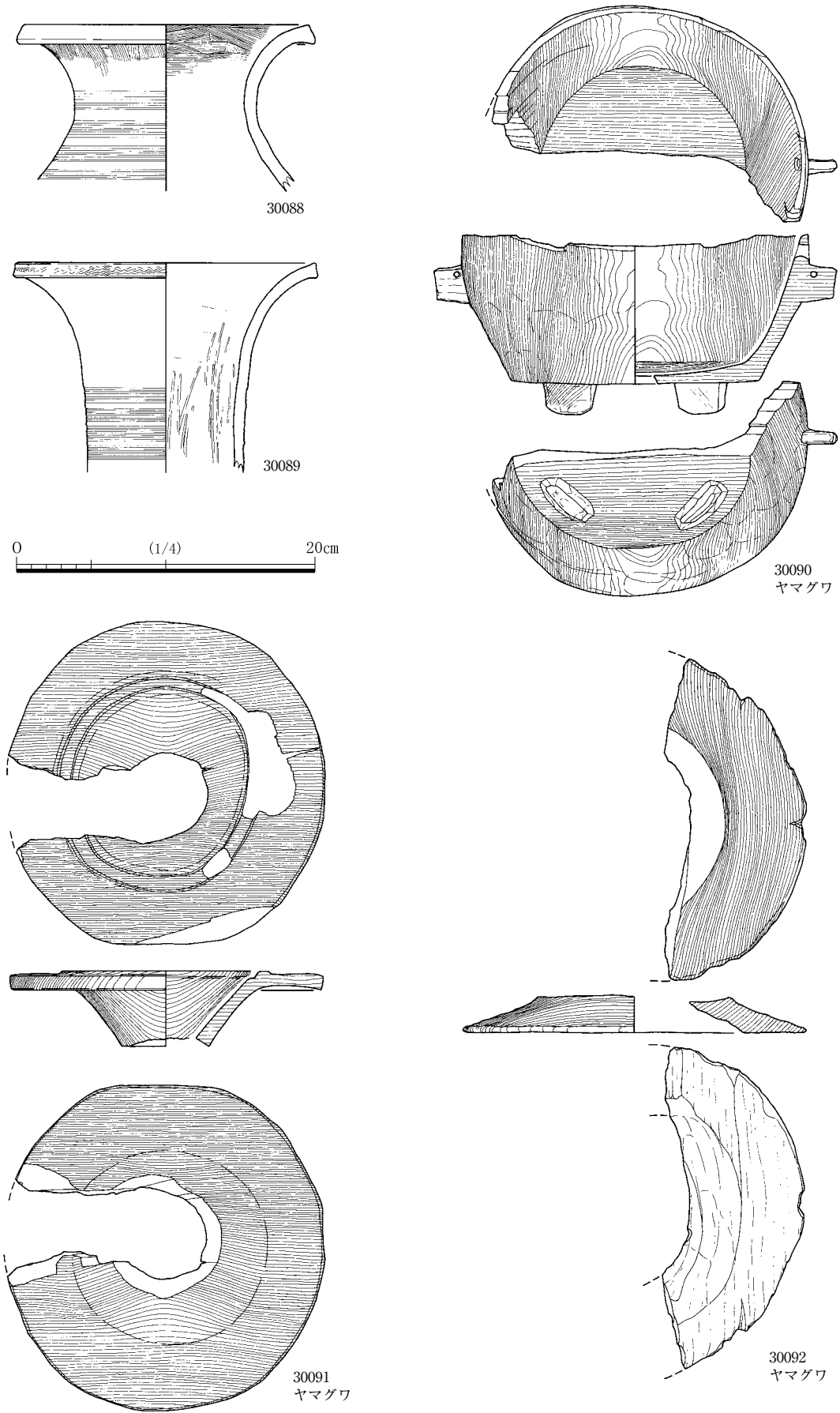


図299 03 - 1 - 3区 第10面1409溝出土遺物

木製品は良品が出土している。30090（写真図版129）は一木式の合子の身。平面形は円あるいは楕円になるだろう。通常、鍋の把手のように口縁と水平に付く紐孔突起は、垂直（縦）方向に作られ、その直上の体部にも孔があげられる。底部の2脚はカーブをもった長方形でハの字に付き、4脚に復原される。紐孔突起の方向の違いと、身部の紐孔は対応関係にあると思われ、蓋の閉じ方にバリエーションがあったことを示唆する。

30091と30092は同一個体の可能性のある高杯である。30091（写真図版129）は復原口径21.0cmの水平口縁をもった高杯杯部。口縁部は水平に伸び、端部はわずかに厚くなる。平面形はほぼ正円だが、直線的な部分をもつ。杯底部から脚部にかけて破損しているため、一木式か組み合わせ式かは不明である。30092（写真図版129）は復原底径22.4cmの高杯脚部。残存する裾部はやや厚く（1.5cm）、均質な厚みで「ハ」の字に広がる。これらの木製品はすべてヤマグワを用いて作られている。

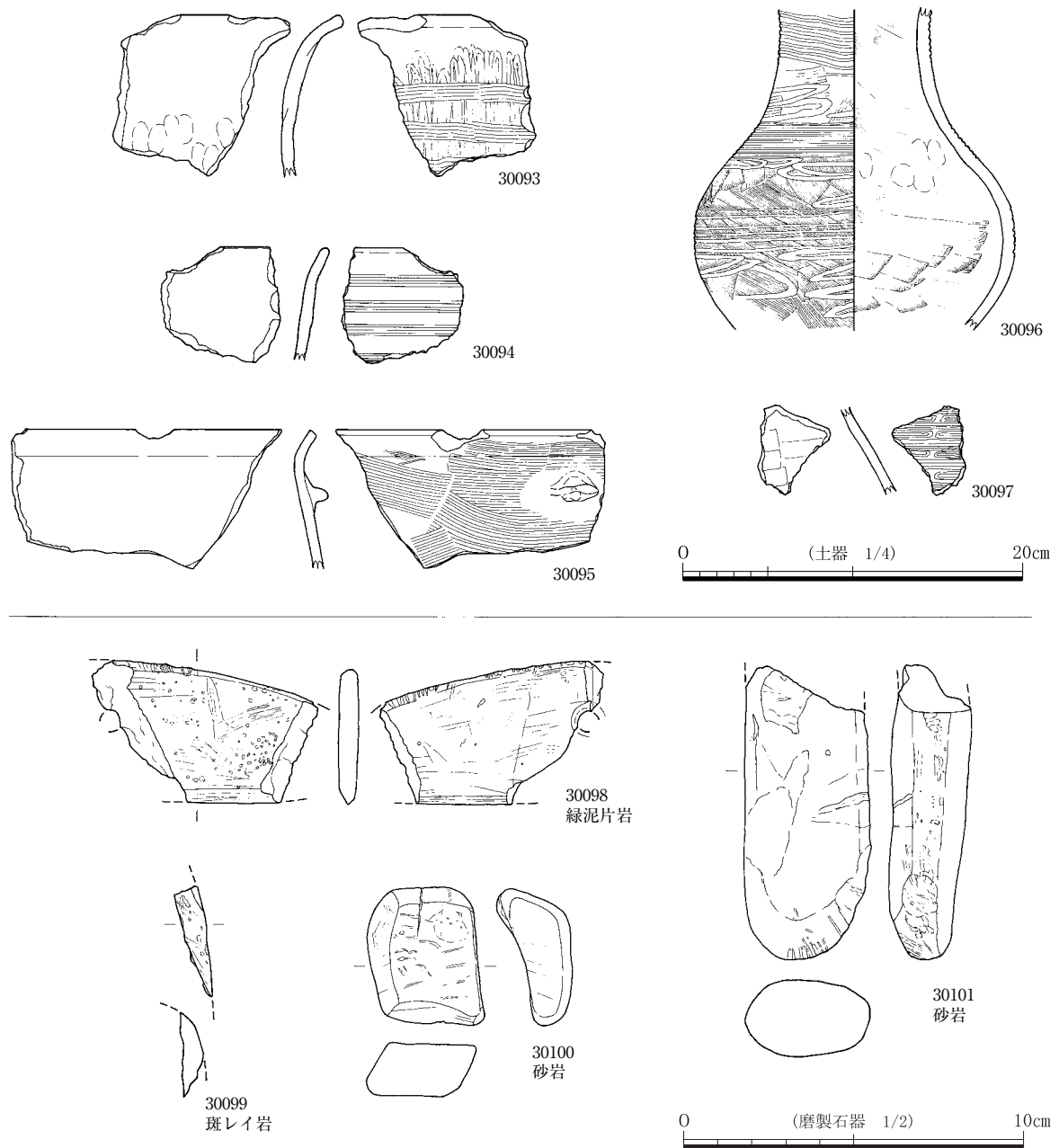


図300 03-1-3区 第10面1414溝出土遺物

1414溝 調査区東部に位置し、03 - 1 - 2区に続く。主軸方位は北東 - 南西。幅3.9~5.8m、深さ93cm以上。底の中央部は、第9面の1397溝により攪乱されている。埋土は、第9層の32層とよく似ており、黒7.5Y2/1シルト。

出土遺物は、弥生土器1163片（うちⅠ様式99片、Ⅰ~Ⅱ様式87片、Ⅱ様式90片）、石庖丁1点、太型蛤刃石斧1点、石錘1点、磨石1点、砥石1点、叩き石1点、削器6点、サヌカイト剥片9点、中礫2個、小礫10個、焼土塊1点、計1197点。うち土器5点、石器4点を図化した。

図300 - 30093は壺口縁部。クシ描き直線文で飾られ、端部ごくわずかに肥厚する。Ⅱ様式。30094は口径およそ11cmの細頸壺の口縁部である。クシ描き直線文で端部まで飾られ、やや外傾する。Ⅱ - 3様式。30095（写真図版130）は溝の北東部出土の鉢。瘤状突起は小さく船底状を呈する。器壁は薄く、口縁端部は面をなしつつある。胎土細かくⅡ様式か。30096（写真図版130）は壺。頸部と体部には多条沈線を3帯施す。長頸化傾向にあるⅠ様式末~Ⅱ様式初頭。30097（写真図版130）は壺肩部。頸部との境目で破損する。ヘラ描き沈線を描き、曲線でつないで流水文をつくる。Ⅰ様式末。

30098は緑泥片岩製の石庖丁。片刃で、両端を欠くが直線刃半月形となろう。背部には敲打痕が観察できる。残存長6.53cm、幅4.18cm、厚み0.5cmで重さ22.1g。30099は太型蛤刃石斧の基部片。残存長3.25cm、幅0.60cm、厚み2.6cm。30100は砂岩製の石錘。縦横に紐痕が観察される。擦痕が顕著で砥石の転用品か。一部赤変する。長軸4.13cm、短軸3.13cm、厚み1.6cm。29.4gを量る。30101は磨石。棒状の砂岩を研磨している。残存長8.62cm、短軸3.61cm、厚み2.2cm、重さ106.1g。側面には一部敲打痕が残る。

1419溝 調査区南東部、1418高まりの上面にある。主軸方位は北東 - 南西。幅46~71m、深さ29cm以上。埋土は、第9層と同じ黒7.5Y2/1シルト。弥生土器65片（うちⅠ様式15片、Ⅰ~Ⅱ様式4片）、サヌカイト剥片1点、計66点が出土した。

1420溝 調査区南東隅に位置し、03 - 1 - 2区に続く。幅は不詳、深さ37cm以上。崩落のため埋土の

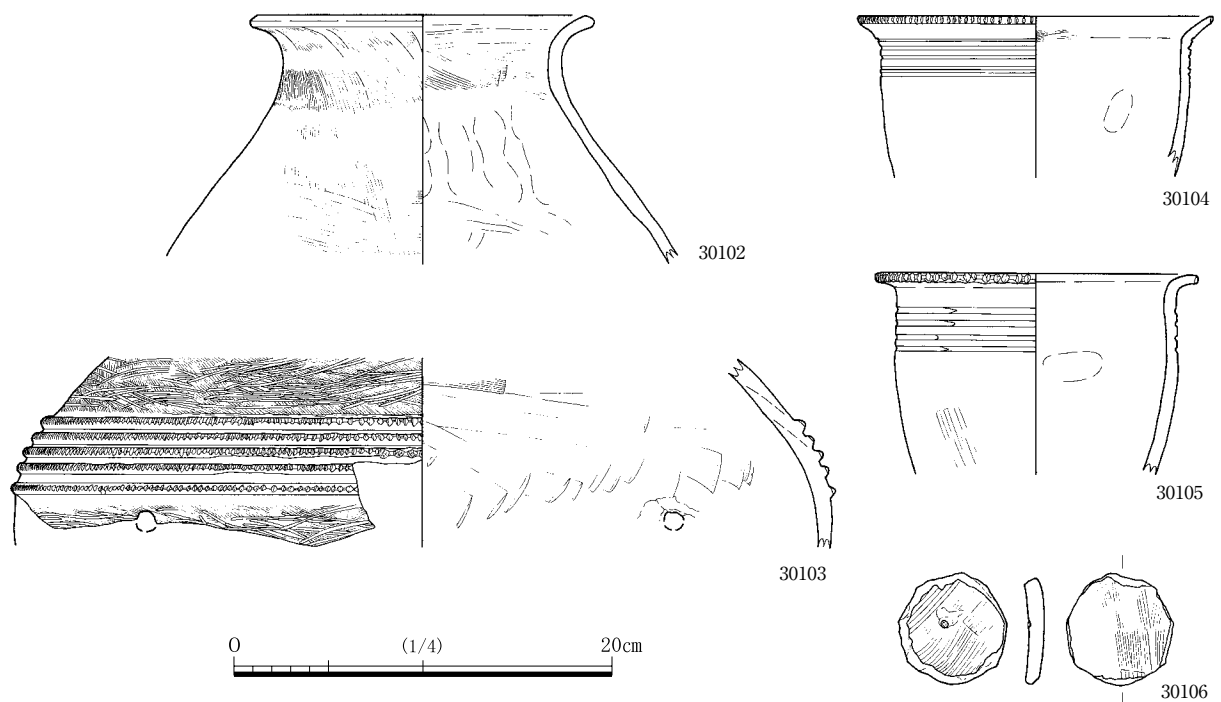
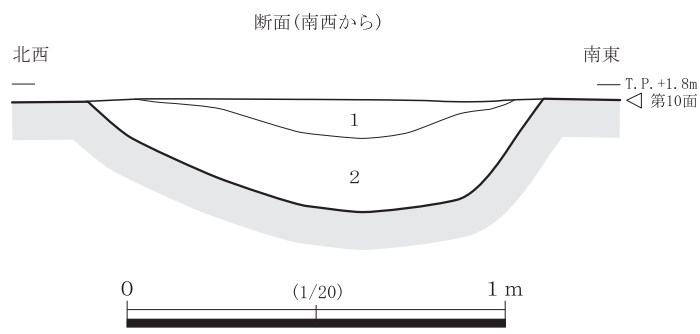
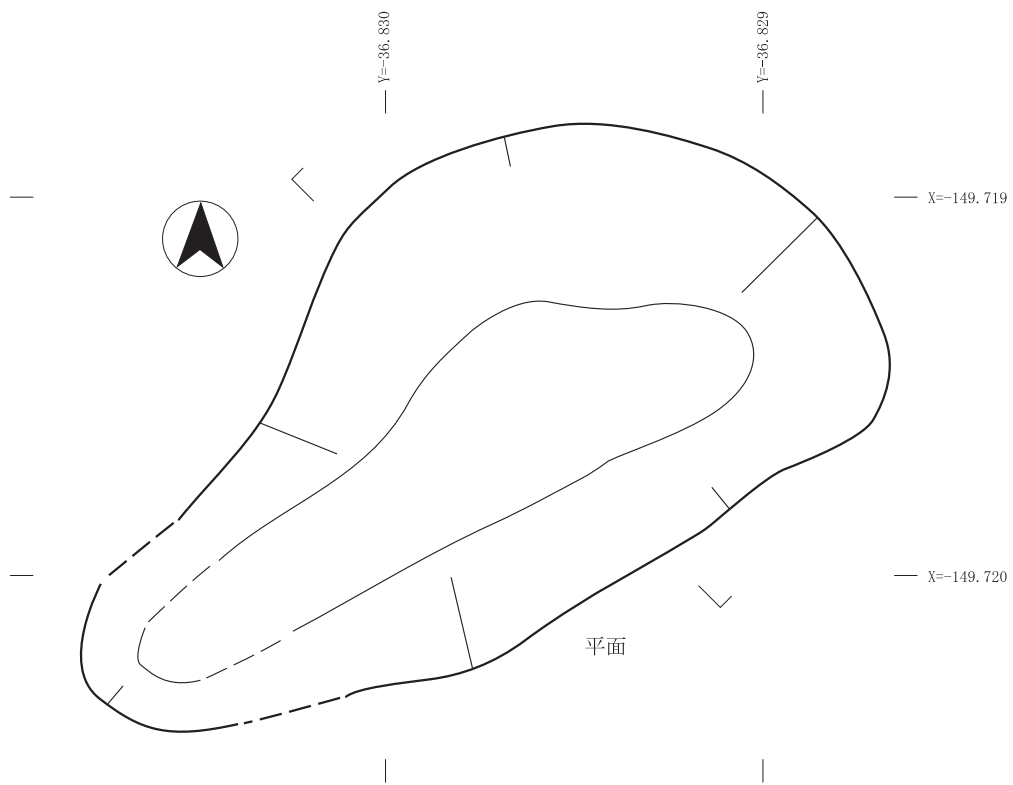


図301 03 - 1 - 3区 第10面1420溝出土土器



- 1 黒褐2.5Y3/2シルト、細砂含む
- 2 黒褐2.5Y3/1シルト

図302 03-1-3区 第10面1411土坑

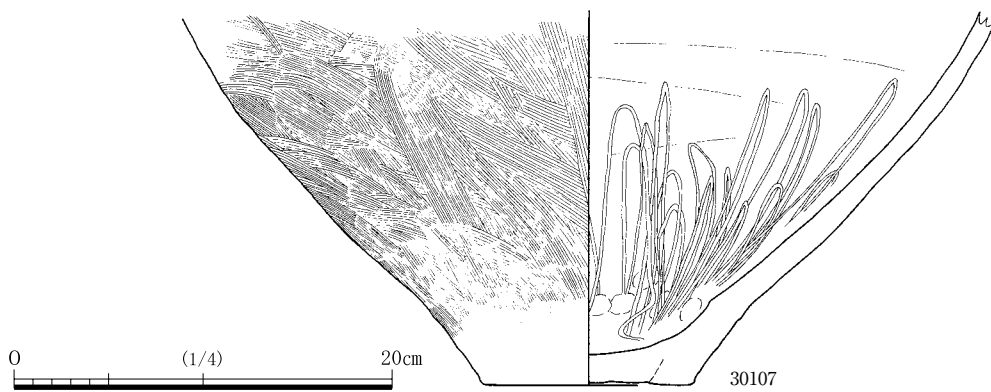


図303 03-1-3区 第10面1411土坑出土土器

詳細は不明だが、黄色の粗砂層が続く。弥生土器57片（うちⅠ様式7片、Ⅰ～Ⅱ様式6片）、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、計59点出土した。

図示したのは5点である。図301 - 30102は無文の広口壺。内外面ともにハケ調整。口縁部は横方向のナデで整形されて外反し、端部をまるくおさめる。Ⅰ様式末～Ⅱ様式初頭に位置づけられる。30103（写真図版130）は壺の体部。肩部には刻み目のある突帯が5条めぐり、3条目の一部に布目棒圧痕が残っていた。また、刻み目にも布目を確認できるものとできないものがある。突帯下には焼成後の穿孔が1か所ある。Ⅰ - 4様式。30104・30105は甕。両者とも口縁端部に刻み目、頸部に沈線を施す。外面には煤が付着し、胎土は粗い。30104は口縁部を「く」の字状に外反、30105はより屈曲が強い。ほとんど肩の張らない形態になり、Ⅰ様式末～Ⅱ様式初頭に位置づけられよう。30106土器転用円板。両面にハケ目が残し、内面には孔をあけようとした痕跡がある。

1410高まりは、調査区中央やや東の盛土部分で、03 - 1 - 2区の466高まりに続く。上面の高さはT.P.+1.6～1.8m。この1410高まりの上面、中央部で土坑1基、北東部でピット2個を検出した。

1411土坑（図302） 平面不整楕円形で、北東 - 南西を主軸とする。長径230cm、短径122cm、深さ34cm。埋土は2層に分かれる。出土遺物は、弥生土器76片（うちⅠ様式9片、Ⅰ～Ⅱ様式8片、Ⅱ様式3片）、サヌカイト剥片1点、計77点である。

図303 - 30107（写真図版131）大形の壺底部を図示した。厚い底部からやや内湾気味に立ち上がる外面には左上がりの粗いハケ、内面は放射状のミガキ調整。底部は表面がうすく剥離した下にハケ調整が見えるため、作り直しがあったと考えられる。Ⅰ様式末～Ⅱ様式初頭。

1412ピット 平面楕円形で、北東 - 南西に主軸をもつ。長径30cm、短径23cm、深さ9cm。埋土は、第9層と同じ黒7.5Y2/1シルト。弥生土器の小片2片のみ出土した。

1413ピット 主軸を北東 - 南西とする平面楕円形と推定されるが、北東部を欠く。長径不詳、短径21cm、深さ41cm。埋土は、1412ピットと同じ。出土遺物は、弥生土器の小片5片（うちⅠ様式1片）と焼土塊1点。

1415～1417杭（図297・304） 調査区南東部、1414溝の南東側法面で検出した。平面図（図297）で見ると一直線ではなく、3本が「く」字形に並ぶ。検出レベルはT.P.+1.35～1.46m、先端はT.P.+0.98～1.21mまで打ち込まれている。いずれも直径7cm程度の丸太で、先端の加工は不明瞭。芯々距離で、1415杭と1416杭が74cm、1416杭と1417杭が56cm。樹種は、1415杭と1417杭がクリ、1416杭はヤマグワ。

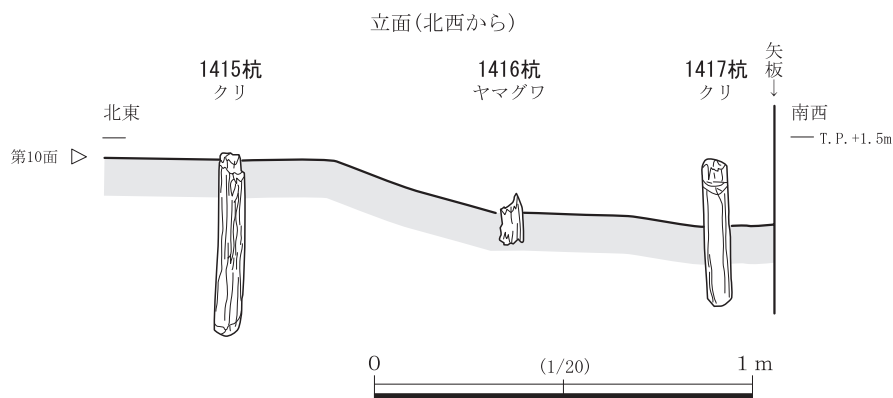


図304 03 - 1 - 3区 第10面1415～1417杭

(23) 03-1-3区第10層の遺物 (図305~309 写真図版130・131)

第10層からの出土遺物は、弥生土器1459片 (うちI様式223片、I~II様式92片、II様式12片)、石庖丁1点、石錘1点、砥石3点、叩き石1点、磨石1点、石剣2点、打製石斧1点、削器4点、楔1点、サヌカイト剥片12点、礫5個、計1491点である。

それらは、第10面の1408高まり内、1410高まり内、1418高まり内と、高まりに属さない第10層部分に分けられる。

調査区西部の1408高まり内からの出土遺物は、弥生土器221片 (うちI様式34片、I~II様式7片、II様式2片)、砥石1点、石錘1点、楔1点、サヌカイト剥片1点、小礫1個、計226点である。

図305-30108 (写真図版130) は壺口縁部。外面は工具で粗くナデが施され、口縁端部はまるみをおびる。大きく開いた口縁内面に突帯をつける。突帯が口縁の内周にそってめぐり、一箇所でひらいて注口状になるか。I様式末。30109は砂岩製の石錘。ひょうたん形になった側面には斜め方向の紐痕が観察される。長軸7.27cm、短軸3.46cm、厚み2.0cm。52.4gを量る。

調査区中央やや東の1410高まり内からの出土遺物は、弥生土器701片 (うちI様式97片、I~II様式52片、II様式6片、発泡土器1片)、石庖丁1点、砥石2点、叩き石1点、打製石剣未成品1点、削器3点、サヌカイト剥片4点、中礫1個、小礫2個、計716点と比較的多い。

図306-30110は無文の広口壺。頸部がしまり、口縁部は横方向のハケとナデによって短く外反する。体部は左上がりのハケ調整後、縦方向を基本として不規則にミガキを施す。II様式。30111 (写真図版131) は壺。外面は縦方向、内面は横方向にハケが施され、一部に横方向のミガキ。口縁部外面は横方向にナデられ、端部はやや肥厚してまるみを帯びる。頸部は沈線と刻み目で飾られ、刻み目には木の小口が観察される。I-4~II-1様式。なお、頸部は打ち欠かれており、やや擦れてまるくなる。正位で30062と同様に器台として転用か。2区第6面252大溝に類似する体部が出土している。30112 (写真図版131) は無頸壺。口縁部を刻み目、体部を沈線と刻み目で飾る。紐孔は2個一対が残っている。口縁は短く外反し、まるくおさめる。I-4様式。30113は広口壺。頸部の削り出し突帯上に沈線1条を施す。I-2様式。30114は壺底部。左上がりの粗いハケ調整後、ミガキを底部下面まで施す。器壁は薄くII様式的である。30115は壺底部。工具ナデの後、ミガキを底部下面まで施す。分厚く、体部へと広がる器形からI様式と考えられる。

30116は小形の甕。端部に刻み目を施す。内面は板状工具によって斜め方向にナデが施される。外面は被熱による剥離と煤の付着が著しい。外面は底から5分の2ほどが赤変、内面はその線から上が黒く

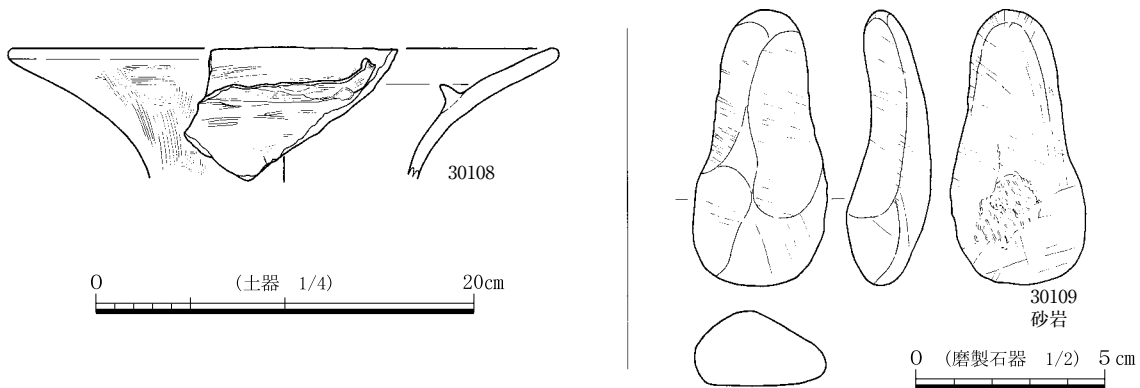


図305 03-1-3区第10面1408高まり出土遺物

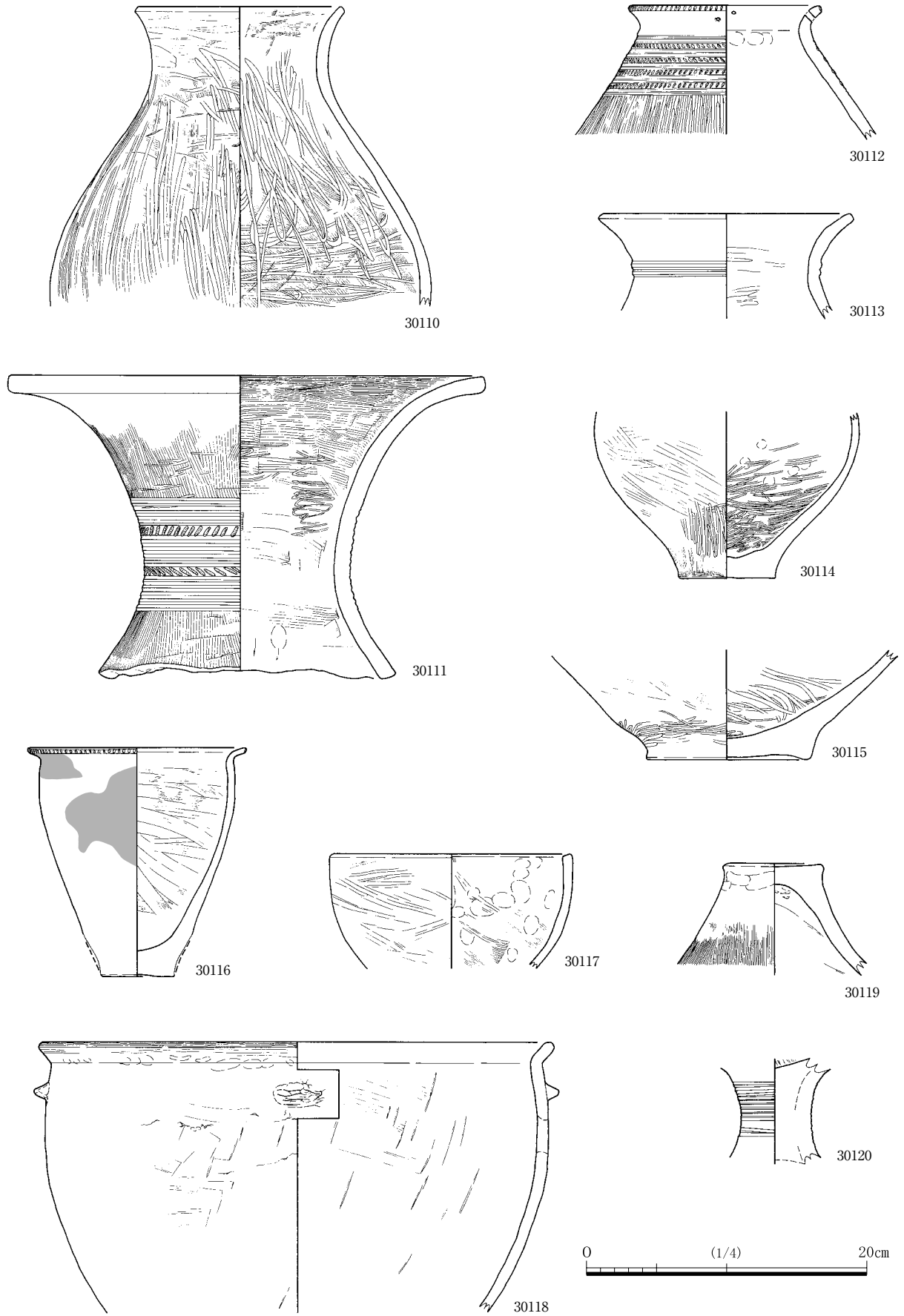


図306 03-1-3区 第10面1410高まり出土遺物(1)



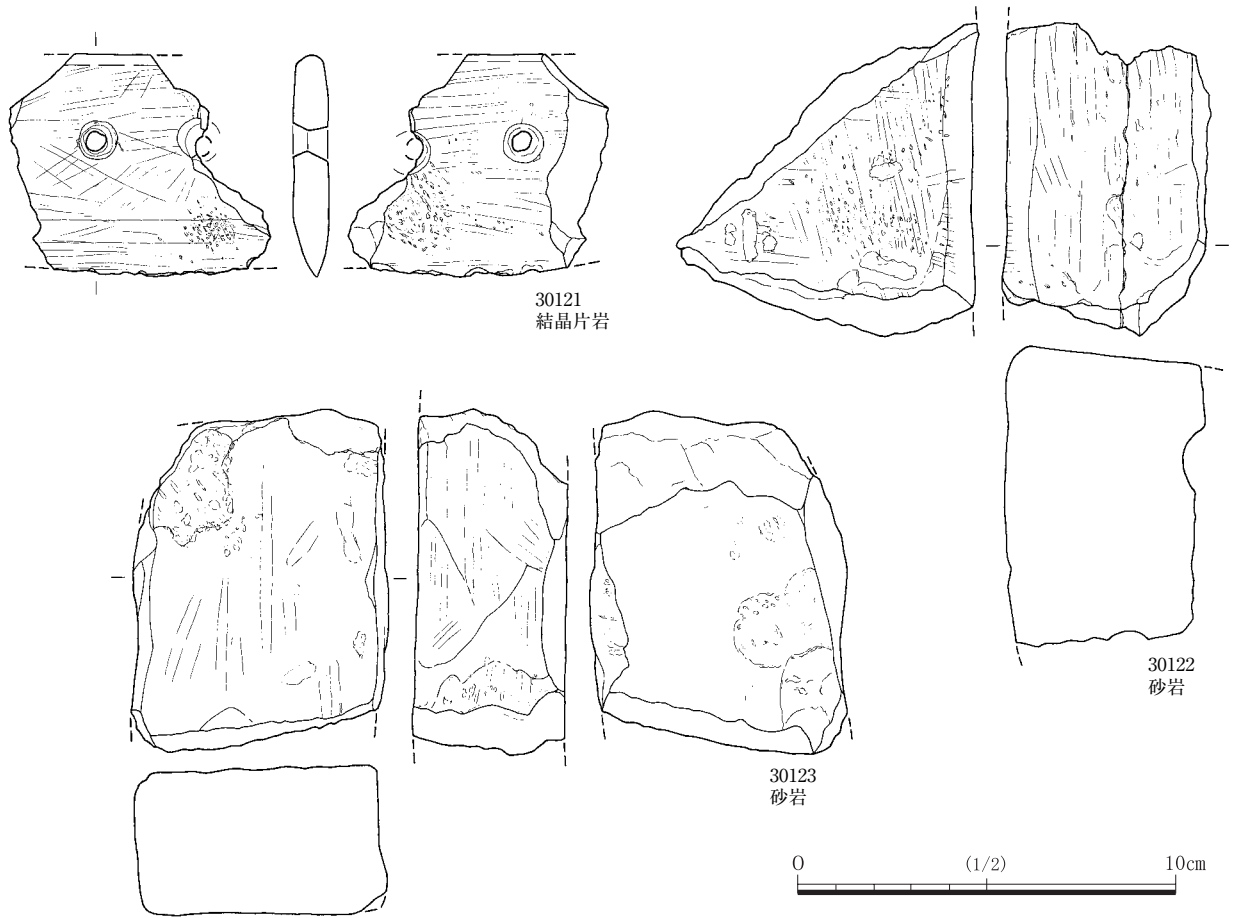


図307 03-1-3区 第10面1410高まり出土遺物(2)

なる。I様式後半であろう。

30117は鉢。作りが粗く、外面には粗い工具ナデが、内面には指頭圧痕が多く残る。端部の形態は一定せず、面をなす部分と丸くおさめる部分がある。I～II様式。30118は大形の鉢。内外面とも左上がりのハケ、口縁部は横ナデで整形される。まるみをもった体部につく瘤状突起はごく小さく、実用的ではない。I様式末か。内外面とも黒斑・煤が観察され、外面は黒斑の縁が赤変している。

30119は大形の甕蓋。外面はハケ調整し、つまみ部分は指頭圧痕がのこる。器壁に煤が付着するとともに、内面は被熱のため赤変している。30120は高杯。中実の脚柱部には、磨耗のため一部不明だが、沈線12条が確認できる。わずかに残存する杯部内面にはミガキが見られる。多条化の進んだI-4様式。

図307-30121は片刃の石庖丁。両端を欠き、刃部も欠けが著しい。両面に敲打痕と横位の研磨痕が見られる。残存長6.85cm、幅5.83cm、厚み0.9cm、重さ47.7g。石材は結晶片岩。

30122・30123は砂岩製の砥石。30122は被熱により欠損するが、砥面は2面残る。残存長8.40cm、幅7.91cm、厚み5.3cm、354.6g。30123の砥面は3面で基本的に長軸方向に擦痕がはしる。残存長9.05cm、幅6.62cm、厚み3.9cm。507.9gを量る。

調査区南東部の1418高まり内からの出土遺物は、弥生土器445片(うちI様式78片、I～II様式29片、II様式2片)、打製石斧1点、削器1点、サヌカイト剥片1点、中礫1個、計449点である。

図示したのは土器4点と石器1点である。図308-30124は大形の鉢。外面は左上がりのハケで整形され、口縁部は指押さえと内面のハケによって外反する。体部内面は横方向のナデの後、乱雑にミガキ

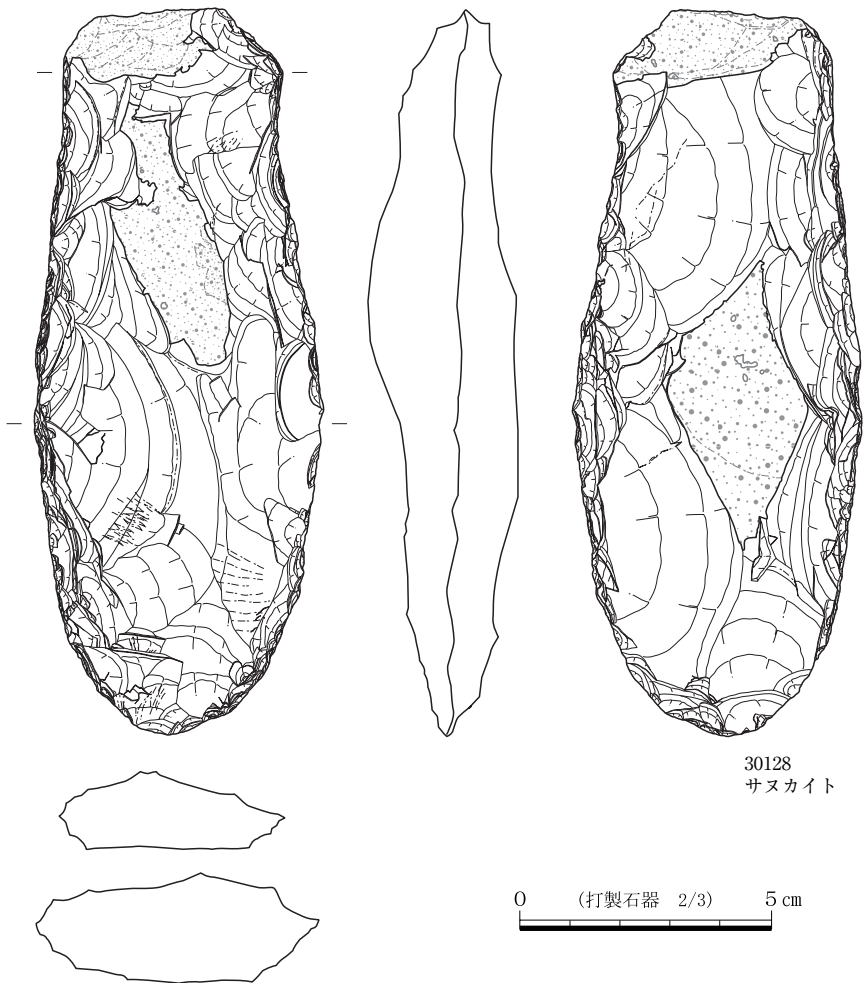
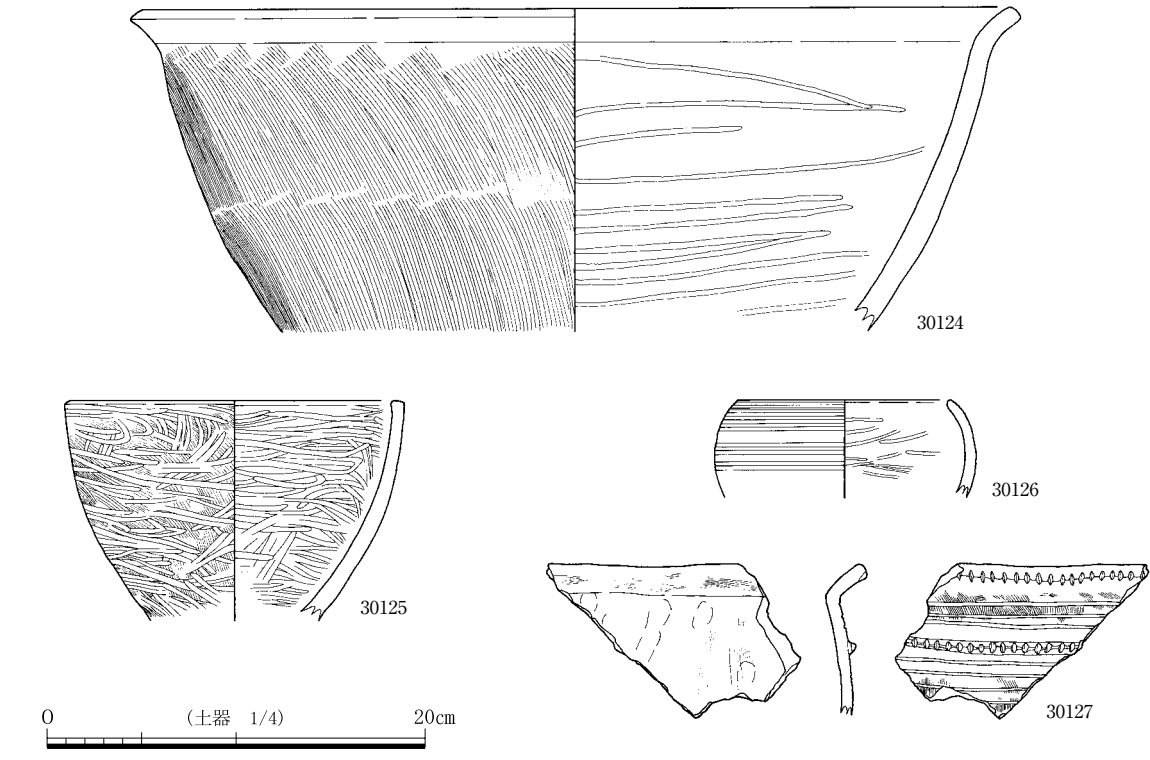


図308 03-1-3区 第10面1418高まり出土遺物

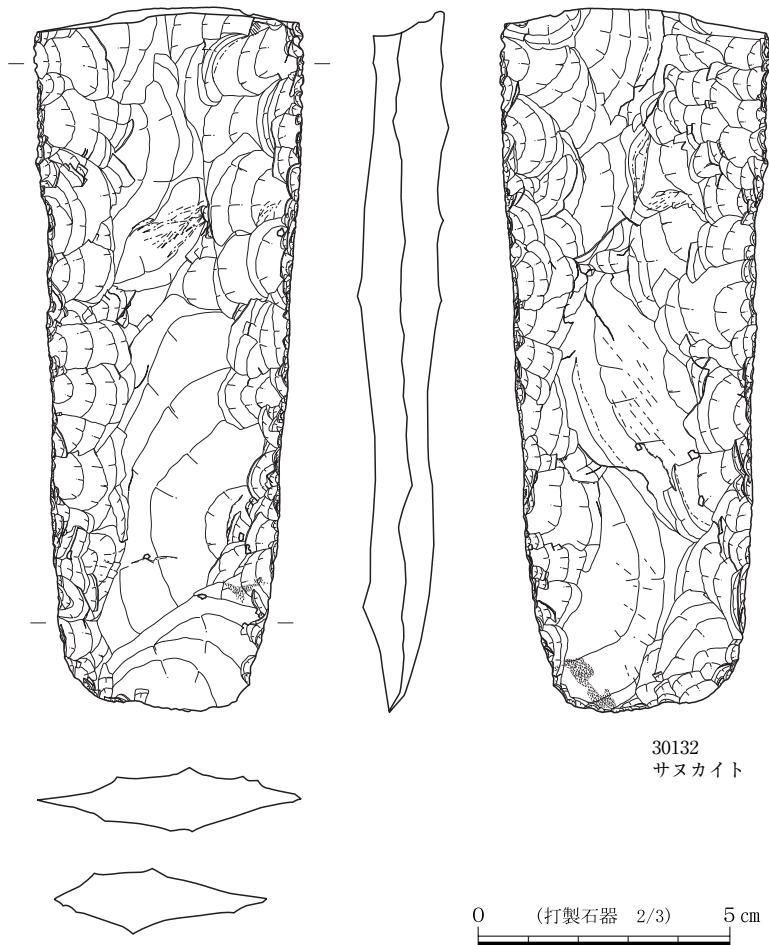
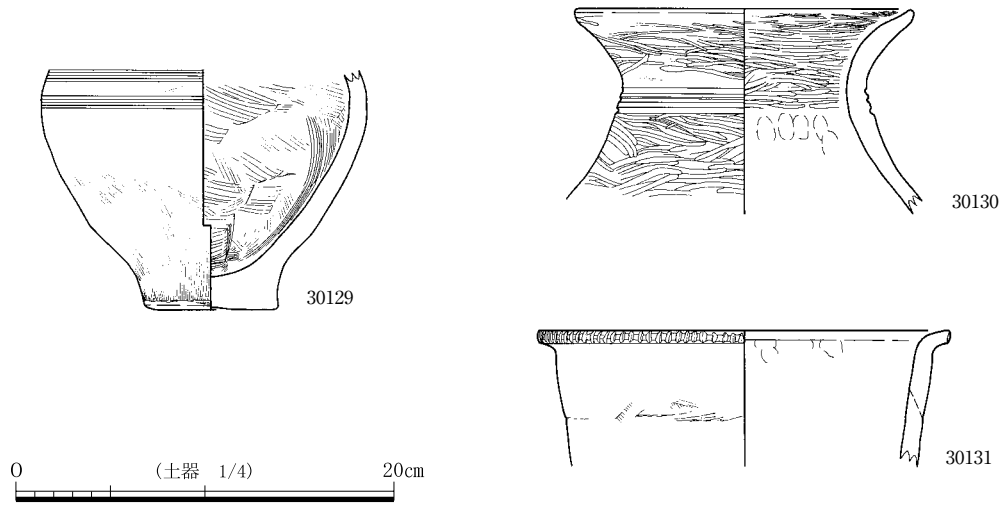


図309 03-1-3区 第10層出土遺物

が施される。Ⅱ様式。30125は口縁がやや内湾する丈高の鉢。口縁端部はややまるみを帯びる。Ⅰ様式末～Ⅱ様式初頭。30126は無頸壺。体部には沈線10条と7条が確認できる。下半が剥離しているため、間の沈線の有無がはっきりせず、文様帯が1帯になる可能性もある。胎土の粗いⅠ-4様式。30127は甕。口縁部はハケ調整によって「く」の字状に外反し、下端に刻み目が施される。体部は縦方向のハケ。沈線の間刻み目貼り付け突帯がめぐるのが珍しい。Ⅰ-3～4様式。

30128は、サヌカイト製の打製石斧か。原礫面を残す基部よりがくびれ、側縁は刃潰しされて鋭い稜をなさない。刃部先端は稜があまく、若干の光沢が観察される。長軸14.45cm、短軸6.05cm、幅2.4cm、重さ243.5g。

高まりに属さない第10層部分から、弥生土器92片（うちⅠ様式14片、Ⅰ～Ⅱ様式4片、Ⅱ様式2片）、磨石1点、打製石剣1点、サヌカイト剥片6点、計100点出土した。

図309-30129は壺の下半。胴部にはクシ描き直線文が2条めぐる。外面のハケは、横方向のナデによってきれいに消されるが、内面は粗いハケ目が残る。底部は厚く、器形はやや腰高になろう。Ⅱ様式。30130は壺。口縁部はあまり開かず、横方向のナデによってやや薄くなる。頸部には段は残らず、沈線3条が施される。Ⅰ-3様式。口縁部外面には煤の付着が著しい。30131は甕。口縁は横方向のナデによって水平気味に折れ曲がり、端部に刻み目がめぐる。胴部には器体成形時の段がごくわずかに残る。Ⅰ-2様式か。

30132（写真図版131）は、サヌカイト製の打製石剣。先端を欠くが、残存長14.12cm、短軸5.41cmを測る。厚みは1.4cmと薄く、石質に含まれる小礫の部分で割れたものと思われる。基部側も薄く、丁寧に調整が及ぶ。

この他、第10層以下の側溝を掘削した際に、弥生土器14片（うちⅠ様式2片、Ⅰ～Ⅱ様式1片）が出土した。

#### (24) 03-1-3区第11面の遺構と遺物（図310・311 写真図版121・122）

オリーブ黒色ないし灰色のシルトを主体とする自然堆積層の上面である。

面の高さはT.P.+0.9～1.4mで調査区南東部が高い傾向にある。矢板列1か所、ピット1個、溝状落ち込み1か所、計3か所（遺構番号1421・1423・1424）を検出した。

1421矢板列（図311 写真図版121・122） 調査区東部に位置する。北東-南西に並ぶ。検出延長は6.4m。矢板上部のレベルT.P.+1.04～1.10mで、先端はT.P.+0.78～0.99mに達している。個々の板材の残りは悪く、遺物としては取り上げられなかった。比較的残りの良い物を選んでサンプリングを行った。結果は図311に示す通り、クリが多く、ヤマグワもみられる。打ち込まれた矢板列の西側では、カヤ材の板と石2点ほぼ同レベルで検出された。北側の石は斑レイ岩で、長径13cm、短径11cm、高さ4cm、重さ1.4kg。南側の石は花崗岩で、長径20cm、短径12cm、高さ8cm、重さ3.1kg。

この第11面では、顕著な遺構の掘り込みは認められない。しかし、この位置は、第9面1382溝北西側法面の1386～1390杭よりもやや南東側、あるいは第10面1414溝北西側法面の下層にあたり、これら上層の溝の護岸であった可能性が高い。

1423ピット 調査区西部に位置する。平面円形で、直径36～38cm、深さ10cm。出土遺物はない。

1424落ち込み 調査区南東部に位置する。03-1-2区に続く溝群はこの第11面では掘り込まれていないが、この1424落ち込みの範囲は上層とは形状が異なっており、第10面以上の溝に先行する落ち込み

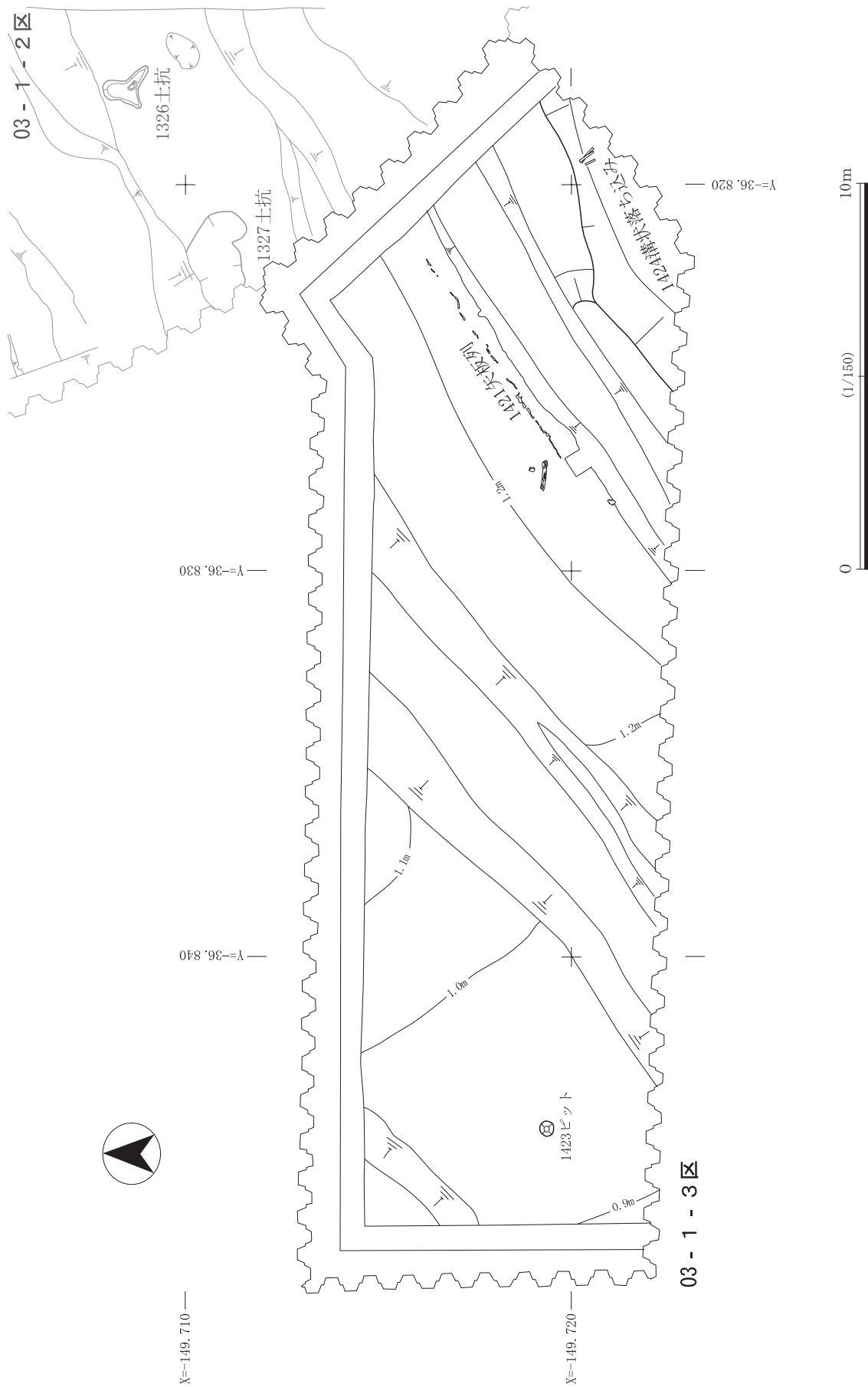


図310 03-1-3区 第11面



であったと考えられる。弥生土器62片（うちⅠ様式10片、Ⅰ～Ⅱ様式8片）、ヒノキの棒2本、カヤの棒1本、計65点出土した。

(25) 03-1-3区第11層の遺物（図312・写真図版132）

第11層からは、弥生土器511片（うちⅠ様式85片、Ⅰ～Ⅱ様式35片、Ⅱ様式2片）、土錘1点、石庖丁1点、太型蛤刃石斧1点、サヌカイト剥片3点、中礫4個、高師小僧1点、木片3点、計525点出土した。うち土器11点、土錘1点、石器2点を図示した。

図312-30133（写真図版132）は大形の壺口縁部。端部はやや肥厚して沈線1条と刻み目によって綾杉文が飾られ、頸部には刻み目のある突帯2条が残る。条痕のほとんどないナデが外面は縦方向、内面は横方向に施される。Ⅰ-4～Ⅱ-1様式。30134は壺。頸部に削り出し突帯とその上に沈線4条がめぐり、口縁部はやや開き、面をもつ新しい傾向を併せ持つ。30135（写真図版132）は壺口縁。頸部には削り出し突帯がめぐり、その上に竹管文が施される。30136は壺の体部上半。肩部には段が作られ、沈線3条が施される。内面はごく細い条痕の見られる横方向のナデが見られ、その上からミガキ。

30137・30138は壺の肩部片。30137（写真図版132）は低い削り出し突帯が2帯あり、上は沈線2条以上、下は3条が突帯上に施される。30138は壺肩部。胴部上半に沈線3条と、その下の削り出し突帯上に沈線2条を施す。

30139（写真図版132）は壺底部。厚い底部には沈線2条がめぐり、下端にはハケ調整が残り、底部下面は指ナデによって凹む。Ⅰ様式。

30140（写真図版132）は甕。口縁端部に刻み目、肩部に口縁部側が低くなる段が作られ、その下に沈線がめぐり、外面は特に煤が付着する。Ⅰ-2様式。30141（写真図版132）も甕。口縁部は横ナデによってやや外反し、胴部には横ナデによって接合される貼り付け突帯がめぐり、また、内面には突帯接合時のものと考えられる爪痕が見られる。突帯以下はケズリが施され、突帯文系土器の特徴を有する。ただし内面のミガキは2段におよび、口縁部の突帯もなくなっており、突帯文系と遠賀川系土器の折衷様を呈する。胎土は典型的な生駒山西麓産ではないが、在地のものと考えられる。Ⅰ様式。

30142（写真図版132）は鉢。口縁部には刻み目が空間をあけて施される。等間隔に刻み目があったと仮定すると、口縁の約半分に残存する4単位に加えて2単位、計6単位あったと考えられる。胴部上半には沈線が8条あるが、一部で最下段に一条、ごく弱い線が加えられ9条になる。なお、沈線は口径の4～5分の1を1ストロークで描く様子が見て取れる。Ⅰ-3～4様式に位置付けられよう。30143の小形鉢は、第11-2面1425ピット周辺で出土した。内外面とも剥離著しく、口縁部内面の横方向のナデが確認できる程度である。胎土粗くⅠ様式か。

これらの土器は30133がやや新しい傾向をもつが、これらの壺形土器はおおよそⅠ-2～3様式の様相をもつものと思われる。

30144は円柱状の土錘。焼成前に作られた貫通孔はまっすぐ均一に通る。長石の多い粗い胎土で表面磨耗する。一部欠損するがほぼ完形。155.7g。

30145（写真図版132）は緑泥片岩製の石庖丁。片刃で約2分の1を欠損するが、直線刃半月形となろう。敲打著しく、残存長8.84cm、幅5.19cm、厚み0.8cm、53.8g。30146は太型蛤刃石斧の頂部片か。残存長4.43cm、幅7.01cm、厚み4.5cm。165.4gを量る。

このほか、第11～13層相当の側溝等掘削時に、弥生土器22片（うちⅠ様式6片）が出土した。

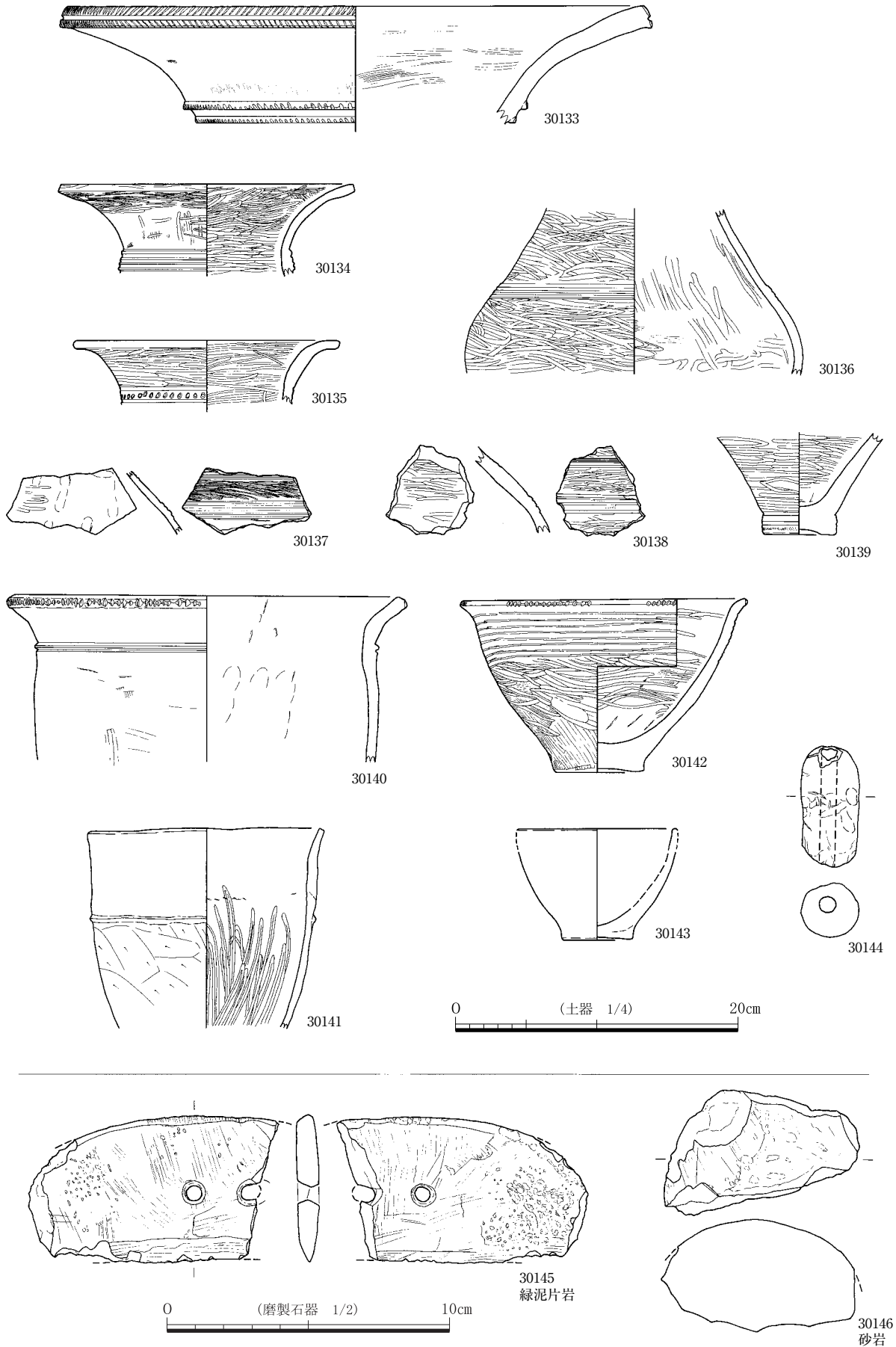


図312 03 - 1 - 3区 第11層出土遺物



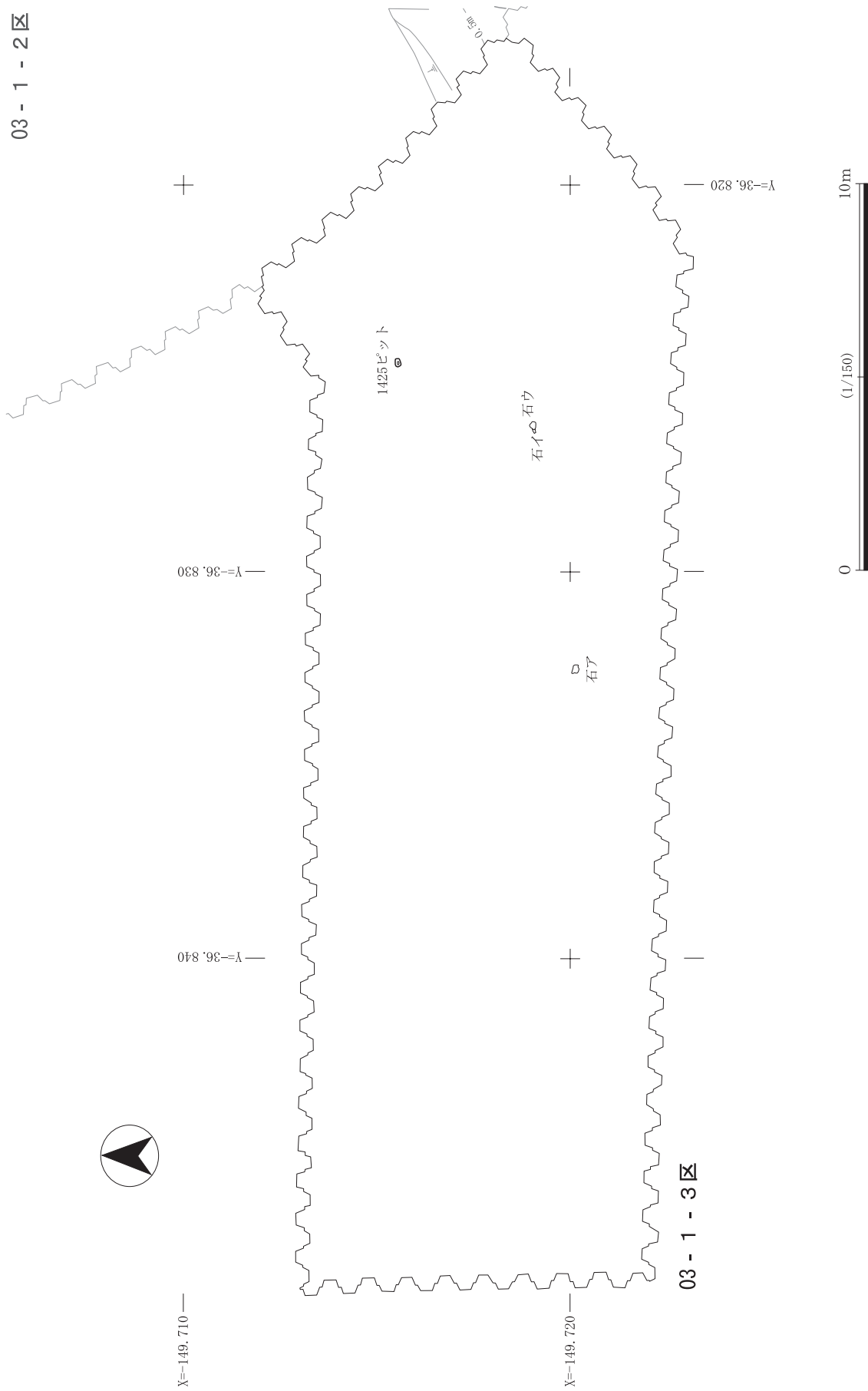


図313 03-1-3区第11-2面

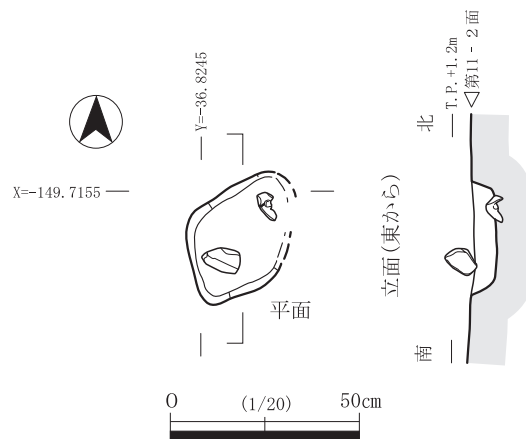


図314 03 - 1 - 3区 第11 - 2面1425ピット

## (26) 03 - 1 - 3区第11 - 2面の遺構と遺物 (図313・314 写真図版122)

03 - 1 - 2区南部に分布する、植物遺体が薄く堆積する粘質シルト層の上面である。

当03 - 1 - 3区では面としては調査しなかったが、調査時に第11層中で検出した1425ピットと石3点を第11 - 2面に該当するものとして報告する。

1425ピット (図314・写真図版122) 調査区北東部に位置する。検出レベルはおおよそT.P.+1.15m。平面不整形で、北東 - 南西を主軸とする。長径39cm、短径27cm、深さ7cm。埋土は暗灰黄2.5Y4/2シルト。出土遺物は、骨1点と大礫1個。

石アは、調査区中央部に位置する。石下面のレベルはT.P.+1.03m。長径22cm、短径12cm、高さ13cm、重さ5.1kg。斑レイ岩。

石イと石ウは、調査区東部に位置し、東西に隣接している。石下面のレベルはT.P.+0.80m。西側の石イは、長径19cm、短径7cm、高さ5cm、重さ0.6kg。東側の石ウは、長径11cm、短径11cm、高さ8cm、重さ1.0kg。石イ、石ウとも斑レイ岩。

## (27) 03 - 1 - 3区第12面の遺構と遺物 (図315・写真図版122)

近畿自動車道大阪線の調査で「第1黒色粘土層」と呼ばれた土壌化層の上面である。

調査区西部と東端では、調査限界のT.P.0.0mより下へもぐる。したがって、調査区中央部から東部にかけて検出し、その範囲の高さはT.P.+0.7~1.1mで、調査区中央部が高い傾向にある。検出遺構はない。

## (28) 03 - 1 - 3区第12層の遺物

弥生土器39片 (うちI様式6片、I~II様式3片)、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、高師小僧1点、計42点出土した。

## (29) 03 - 1 - 3区第13面の遺構と遺物 (図316・317 写真図版122)

第12層を除去した青灰色シルト層の上面である。第12面と同様に、調査区中央部から東部にかけて検出できた。

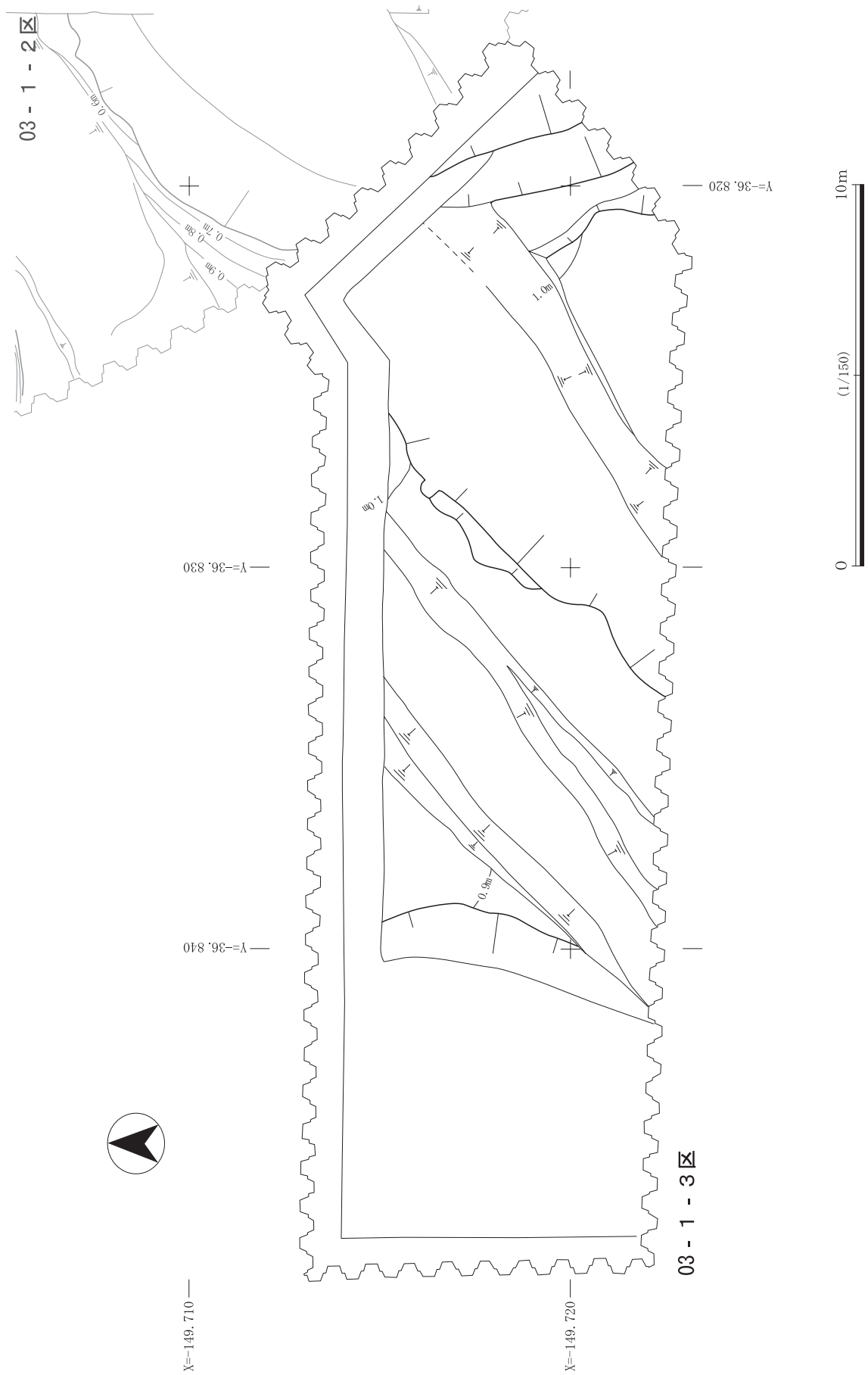


図315 03-1-3区 第12面

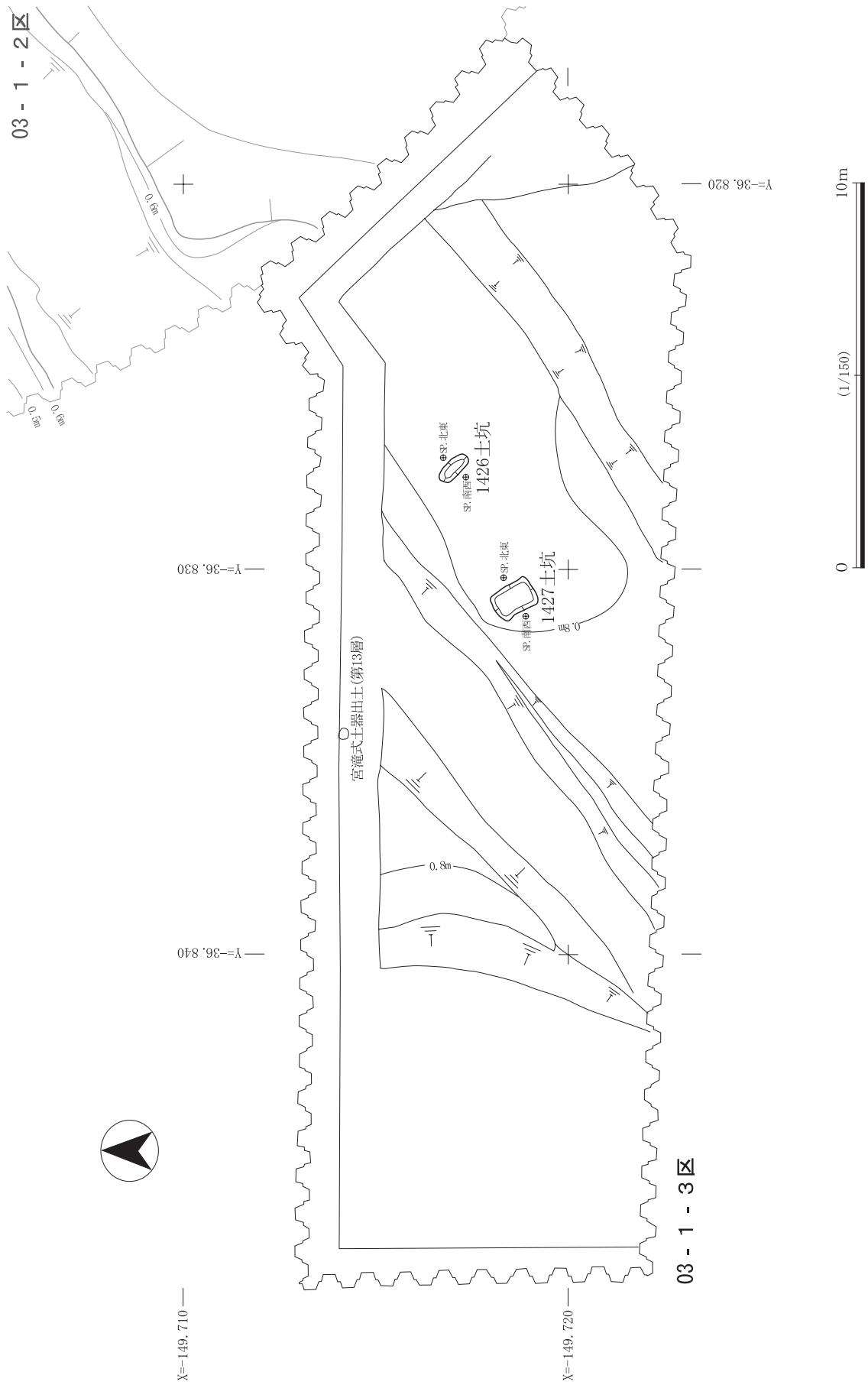


図316 03-1-3区 第13面

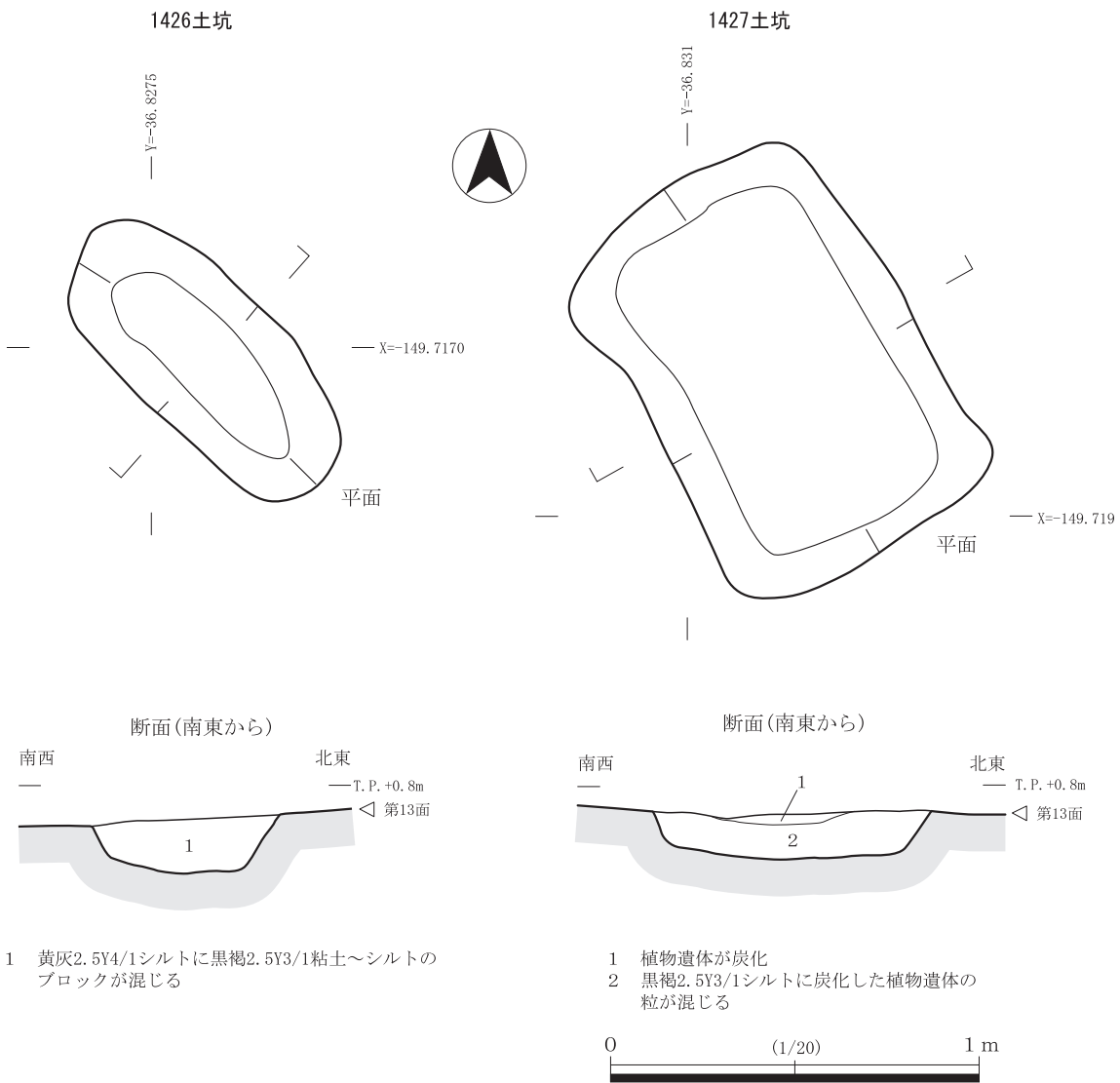


図317 03-1-3区 第13面1426・1427土坑

その部分の高さはT.P.+0.7～0.9mで、調査中央部がわずかに高い。遺構として土坑2基（遺構番号1426・1427）を検出した。

**1426土坑**（図317） 調査区北東部に位置する。平面楕円形で、主軸方位は北西-南東。長径92cm、短径40cm、深さ15cm。埋土は、黄灰2.5Y4/1シルトに黒褐2.5Y4/1粘土～シルトのブロックが混じる。ローリングを受けたI様式の壺の小片1片のみ出土した。

**1427土坑**（図317） 1426土坑の西南西約3.5m、調査区中央部に位置する。平面隅丸方形で、1426土坑同様に北西-南東を主軸とする。長径115cm、短径77cm、深さ14cm。埋土は2層に分かれる。出土遺物はない。

(30) 03-1-3区第13層の遺物（図318～321 写真図版133）

第13面調査後、掘削限界のT.P.0.0mまで掘り下げた。

調査区北辺で第11面以下の側溝を掘削した際、図316に示した地点で、南北40cm、東西数10cm程度、高さT.P.+0.3mあたりの高低差数cmの範囲から、縄文時代後期末の宮滝式土器が21個体分以上折り重な

るように出土した。この直近の第13面はT.P.+0.87mなので、それよりも60cm程度下層にあたる。したがって、第12層よりも上層からの混入は考えにくい。

その後、第13層を掘削する際に、特にT.P.+0.3m付近では、側溝の南北両面を精査するとともに、慎重に包含層を掘削したが、一片の土器も出土しなかった。

図示したのは有文深鉢13個体、無文の深鉢8個体である。ほか体部片4点（有文1点、無文3点）と、小破片数10片が出土している。すべて平縁の口縁をもち、胎土は5mm大の角閃石・長石などを多量に含む。磨耗、赤変も目立つ。

図318 - 30147（写真図版133）は唯一、口縁部に半円形突起が確認できたもの。巻貝圧痕は非常に浅いが、頸部の圧痕周辺にはわずかに粘土がはみ出しており、粘土を貼り付けてから押捺したものと考えられる。30148（写真図版133）は、胴部の凹線だけが非常に鋭く「V」字状である。細い原体による反時計回りの施文が想定される。30147と同様、巻貝圧痕の周囲は低く盛り上がる。胴部には補修かかと考えられる焼成後の穿孔が残る。

30149・30150は頸部の屈曲の強い個体。30149の口縁部は内外面から連続してミガキを施し、端部を平滑に整えている。30150は口縁部、頸部の凹線内にスジがはっきり確認できるが、胴部の凹線は光沢をもつ。30151（写真図版133）は巻貝の殻頂による刺突を凹線上にもつ。

図319 - 30152（写真図版133）は頸部直下の外反が強く、頸部と胴部の凹線に距離がある。巻貝圧痕は押捺のみの施文。30153は頸部に巻貝圧痕が残る。内面は圧痕のため凹み、直接押捺によるものと判断される。外面はミガキが残り、内面は頸部の屈曲部に条痕がわずかに確認される。30154（写真図版133）は赤変が強く、器面も軽石状に穴があく。他の個体に比べ角閃石の割合が少ない。30155は口縁部に凹線をもたない。30156は頸部の屈曲がごくわずかで、全体的に外傾する器形。凹線の断面は非常にゆるく、凹線内にスジが確認できる。頸部直下にはケズリとミガキが確認できる。

図320 - 30157～30159は小片で30157・30158は口縁部。後者の凹線内にはスジが残る。30159は口縁部近くの破片である。凹線には巻貝のスジが残り、巻貝圧痕の周囲はナデ上げによって周囲の凹線と条痕が消されている。器面調整後にナデ上げ、巻貝の押圧を行ったものと推測される。深くしっかりした圧痕の内面は凹んでおり、直接押圧によるものであろう。

図320・321に図示した無文の深鉢は有文深鉢に比べて器体の屈曲が弱く、30160・30161の頸部がわずかに張るほかは、ほとんど器形に差はない。しかし、調整方法には3種類の系統がある。30160・30161・30166（写真図版133）は器面が粗いもの。外面にミガキを施すが、条痕やケズリの凹凸が器面に粗く残る。また、頸部内面の屈曲部に条痕をもつ。

次に30162・30163（写真図版133）は器面が平滑に整えられるもの。外面はミガキ調整。内面は条痕が認められず、ナデが施されているか。ただし、30163では外面胴下部の内湾部にケズリの痕跡が残り、粗く仕上げられている。なお、30163は口縁部に焼成後穿孔をもつ。

30164・30165の調整は折衷的。口縁部から頸部の屈曲にかけては平滑に整えられるが、胴部には粗いケズリ、あるいは条痕の後にミガキが施され、凹凸がよく残る。内面調整は、30165の頸部に条痕がわずかに認められるだけである。30167はいずれにも所属させられない小破片。

以上の有文・無文の深鉢は、出土状況からセットとして捉えることができる。さらに凹線内にミガキを施さない資料が多い点や、巻貝圧痕以前に粘土を貼り付けるものが少ないことから、宮滝式の中でも新しい様相をもつものであろう。

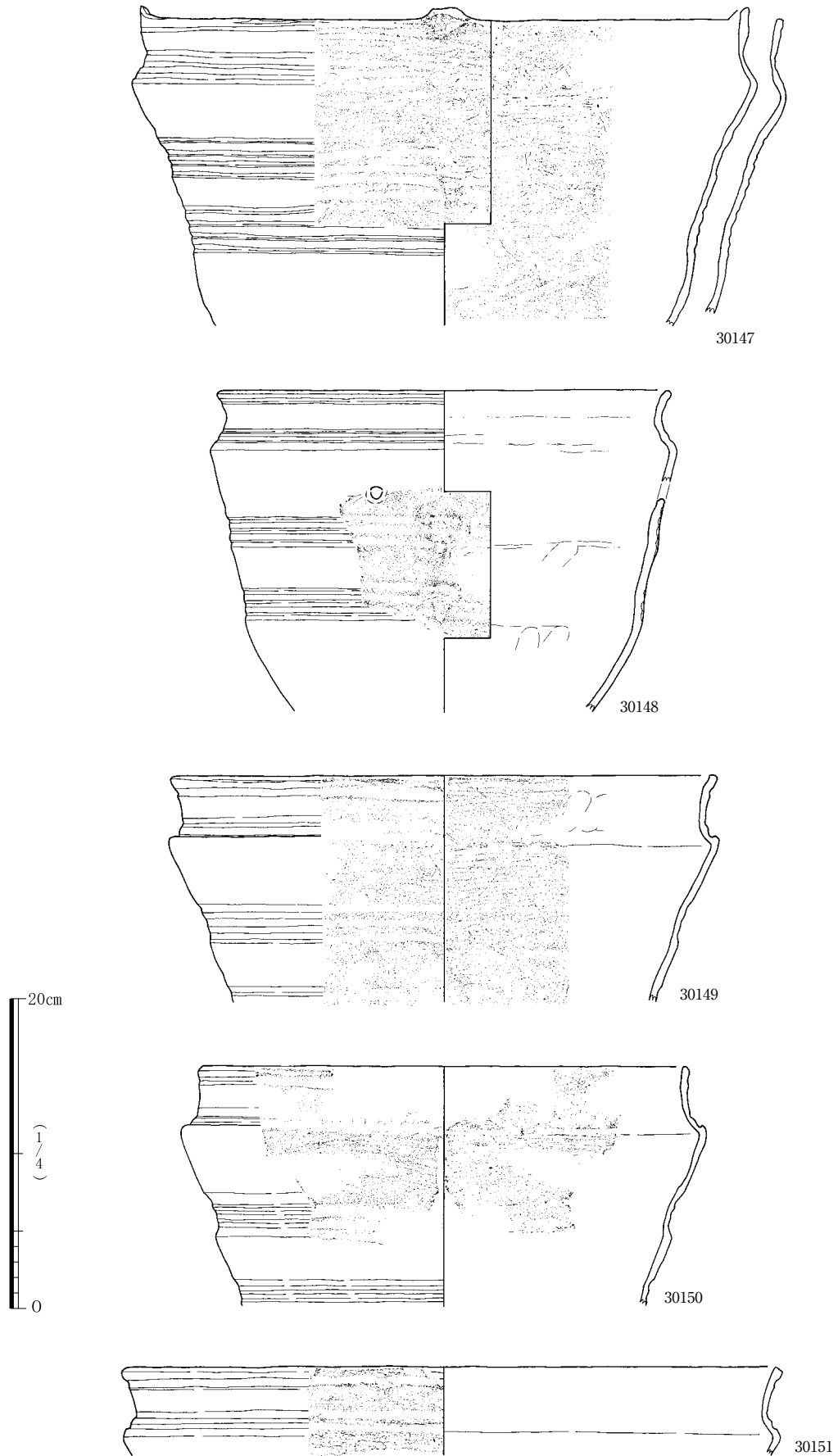


図318 03-1-3区 第13層出土土器(1)

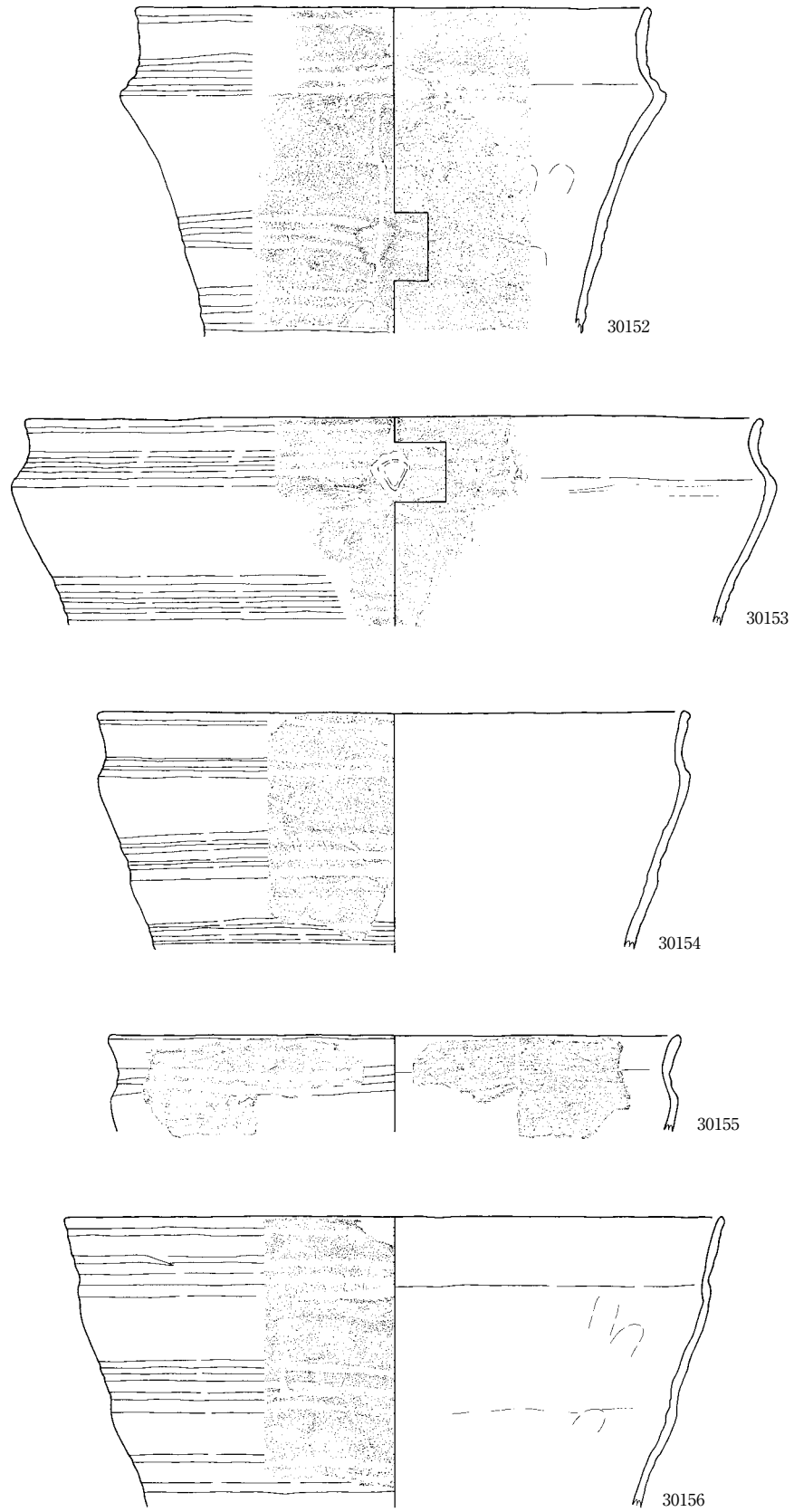


図319 03-1-3区 第13層出土土器(2)



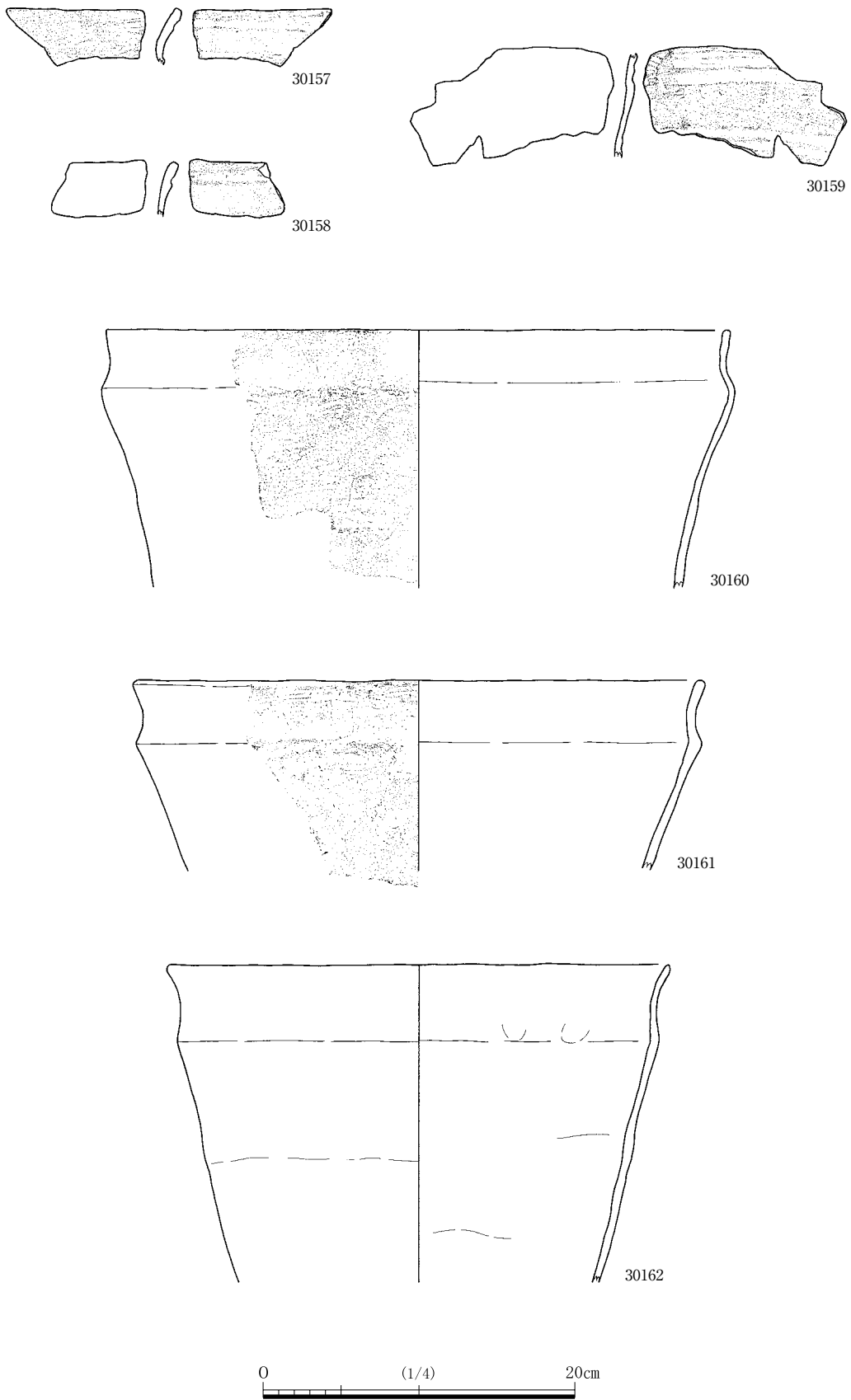


図320 03-1-3区 第13層出土土器(3)

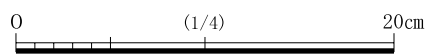
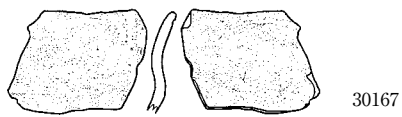
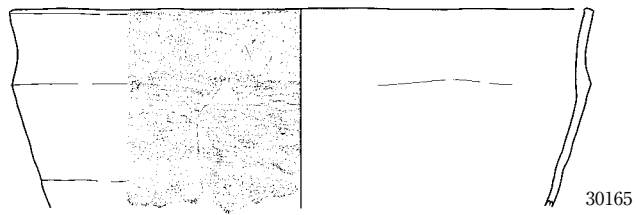
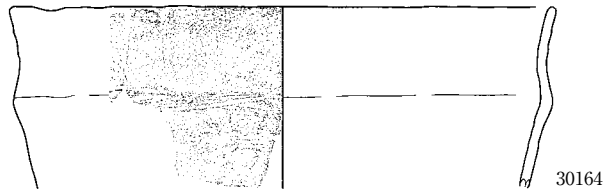
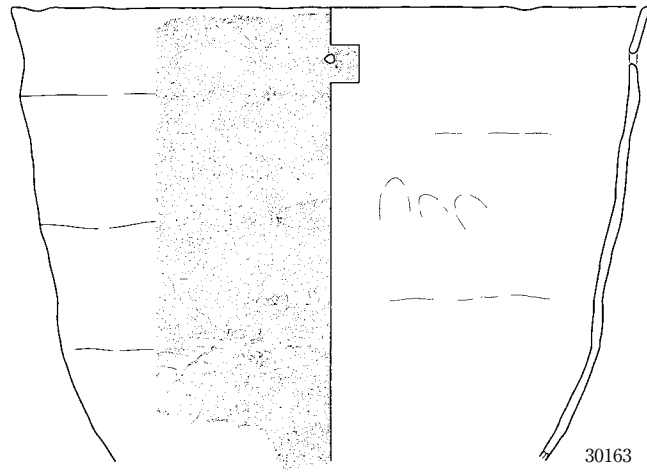


図321 03 - 1 - 3区 第13層出土土器 (4)

## 第7章 05-1-1区の調査成果

### 第1節 概要

05-1-1区は、今回の調査範囲の東部に位置する。発進立坑掘削に伴う調査で、南北7.6m、東西3.2m、面積は24.3㎡である。

調査前地盤高はおよそT.P.+4.6m。盛土層を重機でおよそ1.2m除去し、T.P.+3.4mから調査限界のT.P.0.0mまでの包含層を人力掘削した。13面を調査し、74ヵ所の遺構を検出した。

出土遺物は、土器類2925片、石・石製品41点、木・木製品24点、骨・歯44点、焼土塊4点、計3038点。うち弥生土器が2699片と、88.9%を占める。

### 第2節 層序

調査区の東・南辺、T.P.+3.4mからT.P.0.0mまでの観察・図化を行った（図322）。層序は03-1-1区南半、第11-3層までと基本的に同様に、第6層から第10層までの黒色の盛土層が特徴的である。ただし、第8・9層は図化した部分では分層できず、黒色盛土層として一括している。なお、当05-1-1区では、第12層以下を検出していない。

第1層（オレンジシルト層：①） 層厚20cm前後の現代の盛土である。①暗灰黄2.5Y4/2礫混じりシルト。

第2層（砂層：②～⑤） いずれもラミナの顕著な砂層で層厚は40～80cm。②オリーブ黄5Y6/4粗砂を主体とし、ラミナが顕著。礫を含む。南側では粒径が小さくなり、③・④は灰オリーブ5Y4/2細砂。⑤灰10Y4/1細砂。中に植物遺体薄層を2層含む。

第3層（自然堆積層：⑥～⑧） 層厚20～50cm。南西部には⑥上から黒7.5Y2/1シルト、灰10Y4/1細砂混じりシルト、黒7.5Y2/1シルトが厚く堆積する。下層は全面に堆積し、⑦灰10Y4/1シルト・黒7.5Y2/1シルトがラミナを形成し、下位に炭酸カルシウムの結核と植物遺体を含む。⑧オリーブ黒7.5Y3/1～下位は灰7.5Y4/1粘質シルト。炭酸カルシウムの結核を多く含む。

第4層（土壌化層・畦畔検出面：⑨～⑩） 層厚5～25cmの土壌化層である。⑨黒10Y2/1シルト。細砂をやや、植物遺体を多く含む。⑩オリーブ黒7.5Y3/1細～粗砂。

第5層（第4面基盤層・砂層：2002溝・2004溝） 第5層は溝からオーバーフローした灰10Y4/1粗砂・オリーブ黄5Y6/4粗砂・灰オリーブ5Y4/2粗砂～細砂で埋められる。

第6層（土壌化層・溝廃絶面：⑪～⑫） 層厚最大で約30cm。南では⑪黒7.5Y2/1粗砂混じりシルト。2004溝の下層では溝の埋土がマーブル状に混ざる。⑫は同色同質だが、黒5Y2/1シルトブロックを多く含む。

第7層（第6面基盤層・盛土：⑬～⑮） 層厚10cm前後。⑬オリーブ黒10Y3/1粘質シルト。炭化粒や下層⑰（黒色シルト）のブロックを含む。⑭は⑬と同色・同質だが炭化粒が少ない。⑮オリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト。炭化粒が混じり、2002溝の肩口では木片が多く含まれる。

第8・9層（(黒色)盛土層：⑩～⑰） 05-1-1区では第8層と分離することができなかった。⑰の下位がそれにあたる可能性もあるが明瞭ではない。層厚は40～30cmで攪拌が著しい。土器片が大量に含まれる。⑩黒7.5Y2/1シルト。オリーブ黒10Y3/1細砂を含む。⑰黒5Y2/1細～粗砂混じりシルト。オリーブ黒10Y3/1シルトブロックを、特に南東部に多く含む。炭化物はまれに含むが、2002・2004溝の間では下位に炭化物が多く、やや黒くなる。

第10層（黒色盛土層下：⑱～⑳） 層厚最大40cm。オリーブ黒色を基本にブロックの目立つ攪拌土が盛られる。8・9層と同じく土器片が大量に含まれる。⑱オリーブ黒7.5Y3/1細～粗砂混じりシルト。黒～オリーブ黒のブロックを含む。炭化物をやや含む。㉑黒5Y2/1シルト・オリーブ黒7.5Y3/1シルトが混じり合う。㉒暗オリーブ灰2.5GY4/1粗砂。㉓オリーブ黒10Y3/1～7.5Y3/1シルトで㉔に細砂をマール状に含む。炭化粒、粗砂ブロックを含む。㉔溝肩口で、オリーブ黒7.5Y3/1シルトが粗砂やブロックで攪拌される。㉕オリーブ黒7.5Y3/1～10Y3/1シルト。下層へ行くほど色調が暗くなる。細砂ラミナが部分的に残るが、弱く攪拌されている。植物の地下茎やビビアンナイトが多く見られる。第11層との層界には、㉖オリーブ黒10Y3/1細～粗砂が一面に堆積する。

第11層（自然堆積層：㉗～㉘） 層厚20～30cm。㉗オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト。炭化物を含み、層中位には植物遺体薄層がとぎれながら堆積する。㉘オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト（㉗と同）。灰オリーブ5Y5/2細砂（東辺）/粗砂（南辺）ラミナが見られ、ところどころでマール状に乱れる。下層との層界も大きく乱れる。上層からの踏み込みを反映するものと考えられる。

第11-2層（自然堆積層：㉙～㉚） 層厚約50cm。層界が薄い黒色土で区切られた自然堆積層で、下層

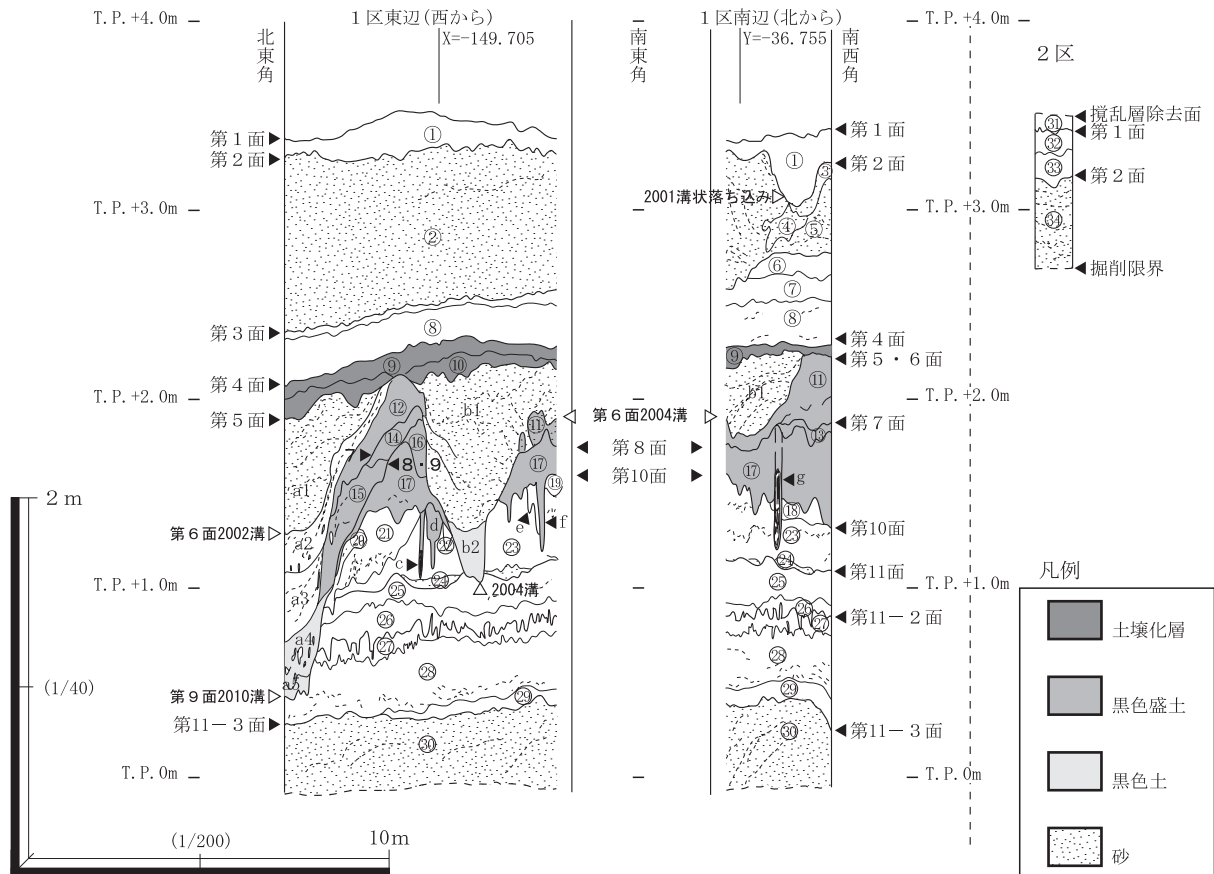


図322 05-1-1・05-1-2区 土層断面

へ粗粒化する。⑳オリーブ黒7.5Y3/1細砂混じりシルト。土壌化している可能性もある。上下層との層界が乱れる。東辺は粗砂が多く、植物遺体薄層が部分的に見られる。㉑粘質シルト。上から、オリーブ黒5Y3/1～7.5Y3/1へと変化する。植物遺体薄層も下位ほど明瞭に見られる。㉒オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト（上層）と灰オリーブ7.5Y6/2細～粗砂（下層）がラミナ形成する。植物遺体の薄層も見られる。

第11-3層（自然堆積層：㉓） 層厚20～30cm以上。ラミナの顕著な砂層である。㉔灰オリーブ7.5Y6/2粗砂。南西側でやや粒径が細かく、北へ粗粒化する。T.P.0.0m付近で灰色がかかる。

### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 05-1-1区盛土層・第0層の遺物

現代の盛土層である。先行調査した03-1-1区・2区の成果と当区での堆積状況を見て、重機でおよそ1.2m除去した。磁器2片、須恵器2片、土師器14片、弥生土器1片、計19点出土した。

この他、第0～2層相当の側溝から、瓦器1片、須恵器2片、土師器14片、弥生土器1片、計18点が出土している。

#### (2) 05-1-1区第1面（図323・写真図版134）

オレンジ色を呈するシルト層の上面。面の高さはT.P.+3.3～3.5mで、東が高い。検出遺構はない。

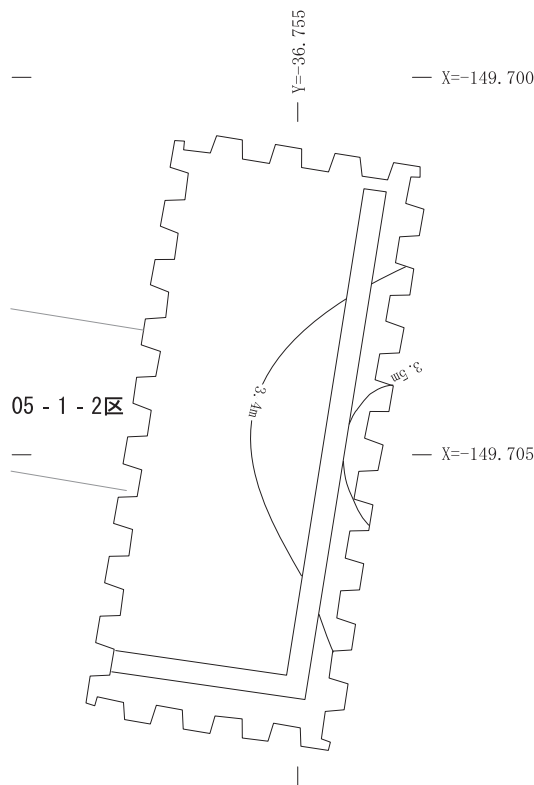


図323 05-1-1区第1面

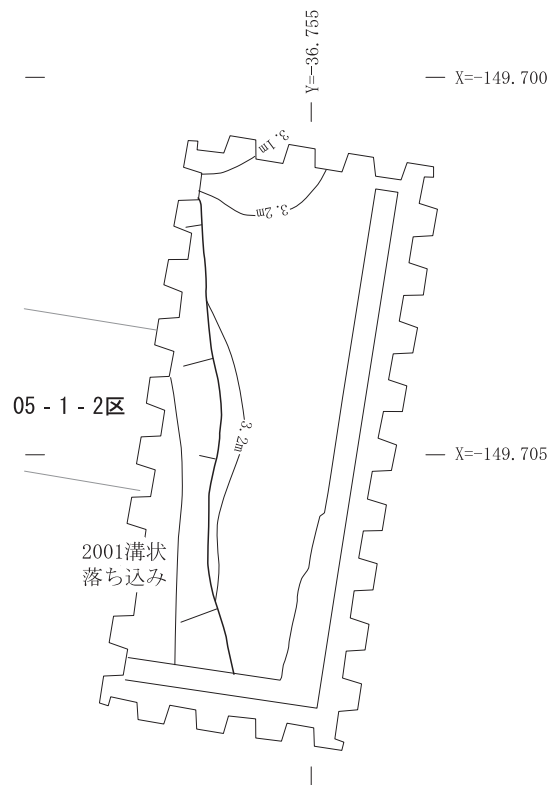


図324 05-1-1区第2面

(3) 05 - 1 - 1 区第1層の遺物

丸瓦1片、瓦器・瓦質土器4片、須恵器68片、土師器90片、計163片出土した。丸瓦以外いずれも細片であるが、須恵器からおおむね6～7世紀の包含層と考えられる。

(4) 05 - 1 - 1 区第2面の遺構と遺物 (図324・写真図版134)

砂層上面。面の高さはT.P.+3.1～3.3mで、東側がわずかに高い。溝状落ち込み1か所(遺構番号2001)を調査した。

2001溝状落ち込み 調査区西側に位置し、西接する05 - 1 - 2区に続く。主軸方位は南北で、検出長12.5m、両区合わせて幅約1.2～1.4m、深さ34cm。埋土は、第1層と同じく暗灰黄2.5Y4/2礫混じりシルト。出土遺物は須恵器4片のみ。

(5) 05 - 1 - 1 区第2層の遺物

土師器24片、サヌカイト剥片1点、計25点出土した。

(6) 05 - 1 - 1 区第3面 (図325・写真図版134)

第2層の砂層を除去した、自然堆積のシルト層の上面。面の高さはT.P.+2.3～2.7mで、南西側が高い。検出遺構はない。

(7) 05 - 1 - 1 区第3層の遺物

第3層としての出土遺物はない。

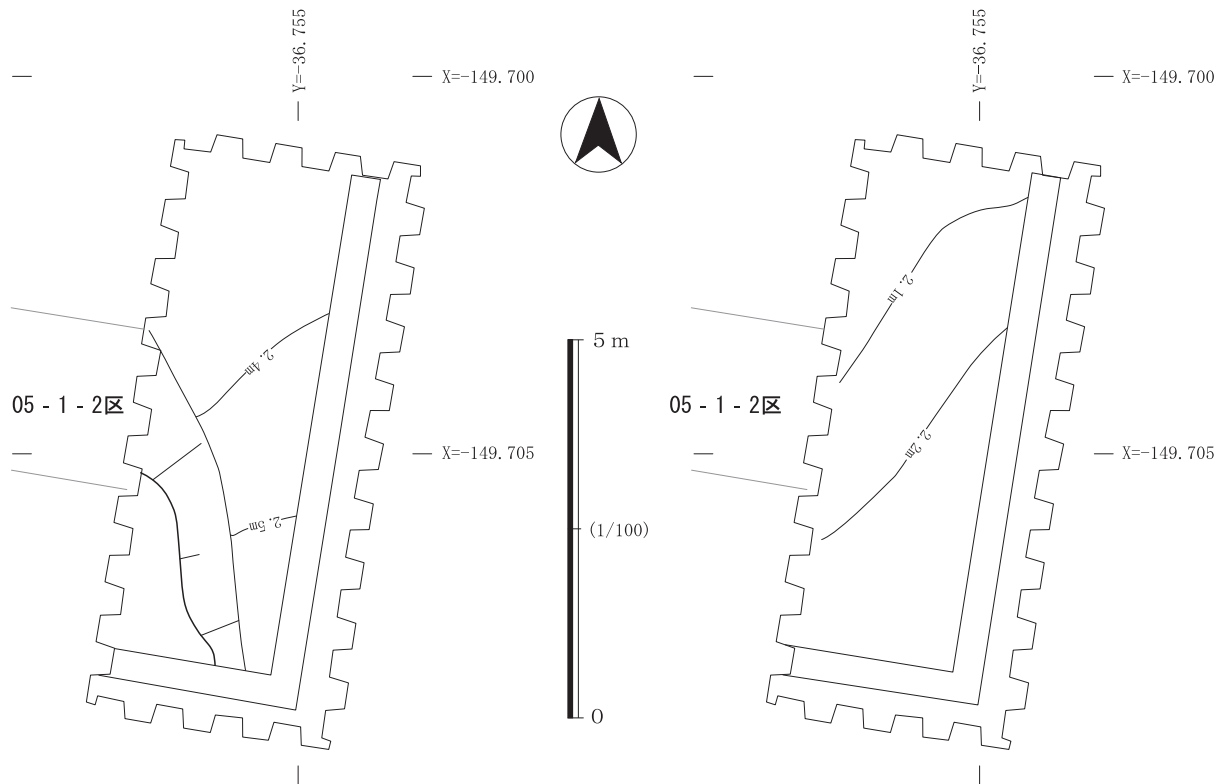


図325 05 - 1 - 1 区 第3面

図326 05 - 1 - 1 区 第4面

ただし、第3・4層相当の側溝を掘削した際に、弥生土器が1片出土した。

(8) 05-1-1区第4面 (図326・写真図版135)

土壌化した黒色シルト層の上面。面の高さはT.P.+2.05~2.25mで、南東側が高い。他調査区での成果から水田土壌と考えられるが、畦などの遺構は検出できなかった。

(9) 05-1-1区第4層の遺物

弥生土器41片 (うちI~II様式3片、後期が主体) が出土した。

他に、第4・5層相当の側溝を掘削した際に、須恵器杯身1片、土師器1片、弥生土器28片 (小片ばかり)、サヌカイト剥片1点、計31点出土した。

(10) 05-1-1区第5面 (図327・写真図版135)

第4層の黒色土壌化層を除去した面で、砂層の上面でもある。面の高さはT.P.+1.8~2.2mで、南側が高い。検出遺構はないが、調査区中央部で下層第6面の2003高まり頂部が東西方向に露出している。

(11) 05-1-1区第5層の遺物

第5層としての出土遺物はない。

ただし、第5~8層相当の側溝を掘削した際に、弥生土器74片 (うちI様式7片、I~II様式4片、II様式3片)、転用土製円板1点、サヌカイト剥片1点、計76点出土した。

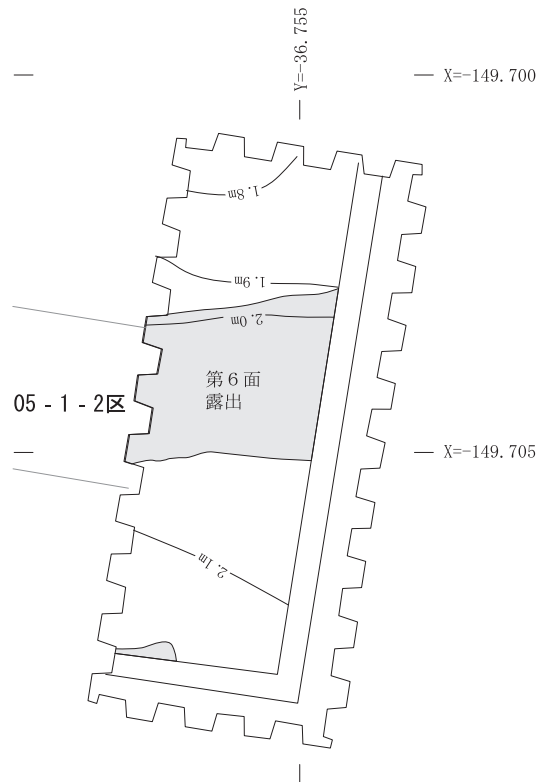


図327 05-1-1区第5面

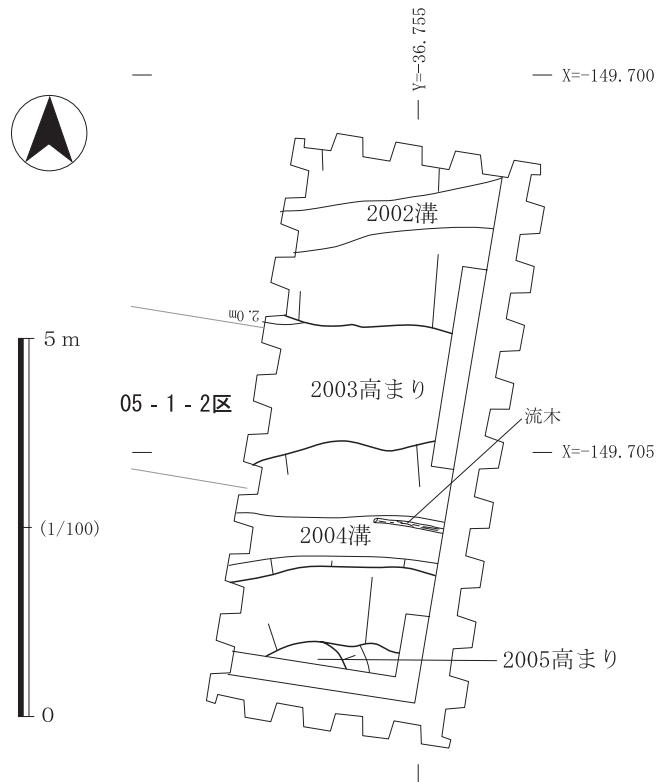


図328 05-1-1区第6面

(12) 05 - 1 - 1 区第 6 面の遺構と遺物 (図328~331 写真図版135・140)

土壌化した黒色シルト層の上面である。03 - 1 - 1 ~ 3 区で、弥生時代中期の溝群が展開する状況が明らかになっている。面の高さはT.P.+2.0~2.1m。遺構として、溝 2 条、高まり 2 か所、計 4 か所 (遺構番号2002~2005) を調査した。

2002溝 調査区北部に位置する。当05 - 1 - 1 区での主軸方位は東北東 - 西南西と推定される。03 - 1 - 2 区の252大溝とつながる可能性が高い。当区での幅は 5 m 以上、深さ116cm。埋土 (図322) は a 1 粗いラミナを形成する灰10Y4/1粗砂・オリブ黄5Y6/4粗砂・灰オリブ5Y4/2シルトで、下層に植物遺体がたまる。

出土遺物は、弥生土器213片 (うち I 様式17片、I~II 様式 7 片、II 様式12片、III 様式 1 片)、石庖丁 1 点、打製石剣 1 点、サヌカイト剥片 3 点、木片 1 点、計219点とイノシシ骨である。

図示したのは弥生土器 3 点と石器 2 点。図329 - 40001・40002は甕である。40001は内外面ともにハケ調整。体部はまるみを帯びて、「く」の字に外反する口縁に続く。口縁端部は横方向のハケによって上下にやや拡張する。40002は甕下半で、40001と同一個体の可能性がある。外面はハケ調整の後、下半部にのみミガキを施す。外面もミガキがまばらに見られる。両方とも III 様式に位置づけられる。

40003 (写真図版140) は長頸の広口壺。頸部にはクシ描き直線文がめぐり、直線文間にもミガキが施される。他の調査区の例と同様、頸部下を打ち欠いて調整している。器台として再利用したのか。II 様式。

40004 (写真図版140) は緑泥片岩製の石庖丁。片刃の直線刃半月形である。長軸9.77cm、短軸3.23cm。31.9 g を量る。背部・刃部ともに敲打し、中央でくびれる。石錘として転用した可能性もあろう。

40005 (写真図版140) は石剣基部か。基部に原礫面が残る。両側縁に弱い敲打痕が見られるため、楔の可能性もある。長軸は残存3.54cm、短軸3.03cm、厚み0.8cm。重さ11.3 g。

2004溝 調査区南部に位置する。主軸方位は2002溝と同様に東北東 - 西南西。幅5.1~5.4m、深さ93cm。

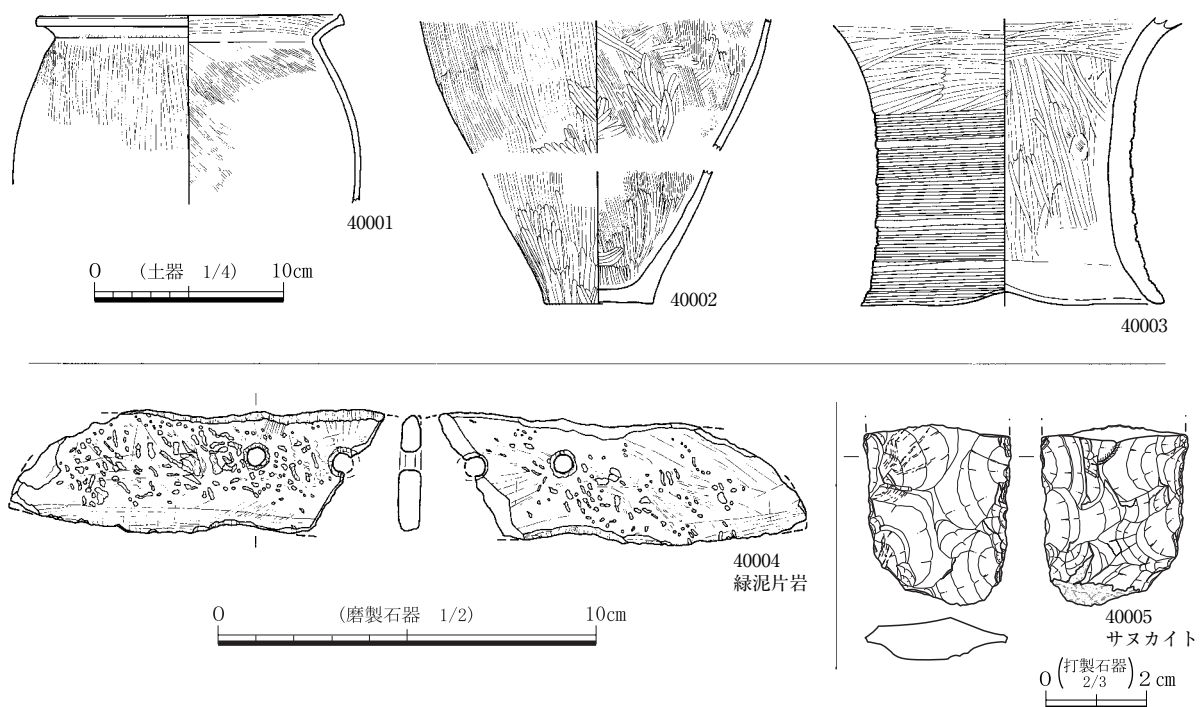


図329 05 - 1 - 1 区 第 6 面2002溝出土遺物



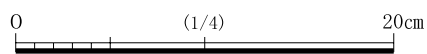
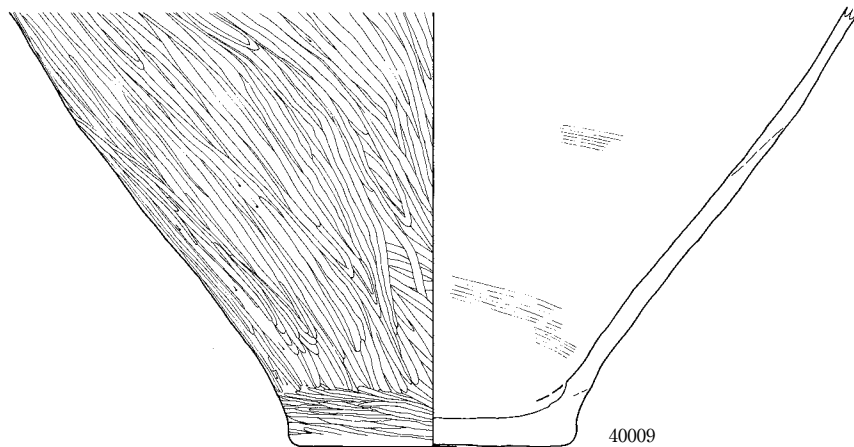
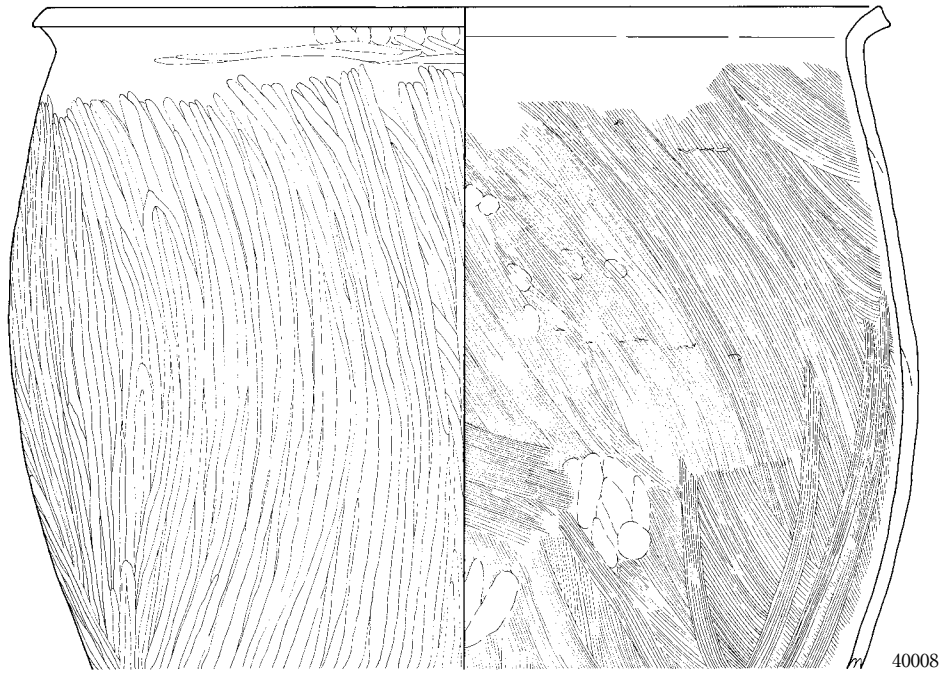


図330 05-1-1区 第6面2004溝出土遺物(1)

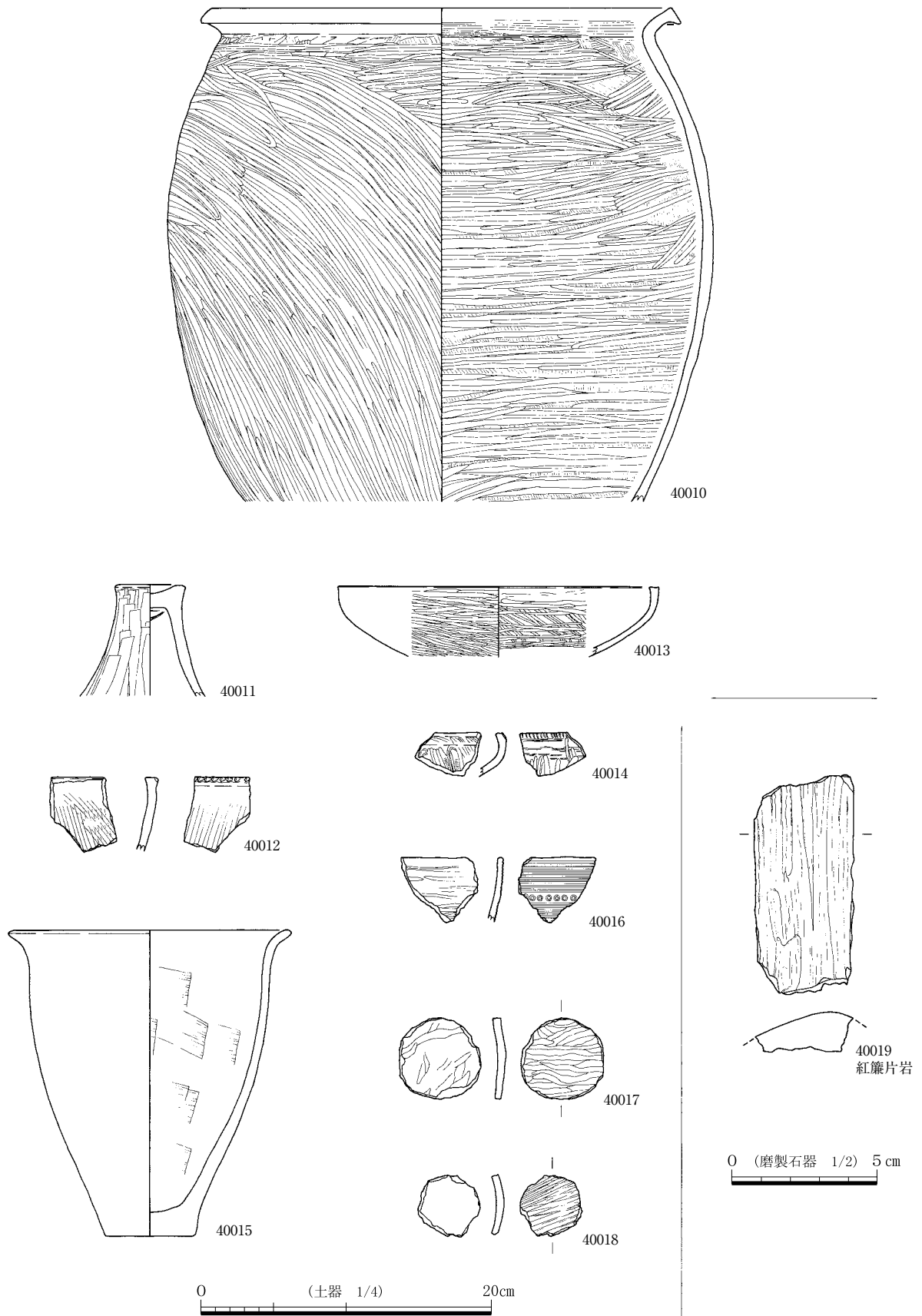


図331 05-1-1区第6面2004溝出土遺物(2)

埋土(図322)は粗砂と黒色土に分かれる。b1オリーブ黄5Y6/4粗砂を主体に、灰オリーブ5Y4/2シルト～細砂とラミナを成し、底部には木片が堆積する。下層はb2黒2.5Y2/1粗砂混じりシルト。植物遺体を多く含んでいる。

出土遺物は、弥生土器484片(うちI様式33片、I～II様式23片、II様式28片)、転用土製円板2点、砥石1点、サヌカイト剥片5点、木片2点、骨2点、焼土塊1点、計497点である。このうち木は、コナラ亜属の炭化材一括と、溝底から約10cm上方から溝の主軸方向に平行に出土した直径6～8cmのヤマゲワである。

図330-40006(写真図版140)は壺の口頸部。口縁端部は肥厚して、下端に刻み目を施す。外面は黒変、内面は剥離しており、被熱の痕跡か。40007は無頸壺。頸部は短く外反し、やや面をもつ。体部にはクシ描き直線文が施され、焼成前の穿孔が2孔確認される。以上2点はⅢ様式の様相をもつ。

40008・40009は大形甕。同一個体の可能性もあるが、接合関係にはない。40008は口径44cmを測り、端部を横ナデによって拡張する。外面は縦方向の太いミガキ、内面はハケ調整を施す。40009は外面を斜め方向、場所によっては縦方向に、底部のみ横方向のミガキを施す。内面は一部ハケ調整が残る。底部内面は器面が剥離して凹んでいる。大形品の出現するⅢ-1様式に位置づけられよう。図331-40010は口径31.8cmでやや大形。外面は斜め方向のミガキが目立ち、煤が付着する。口縁端部は垂下しており、内面も丁寧な横方向のミガキが施される。Ⅲ-1様式であろう。

40011は甕蓋。頂部はまるくなでて凹ませる。外面は縦位の工具ナデ、内面は煤が付着し黒変している。40012は鉢。口縁端部は面をもち、刻みが施される。内外面ともに縦方向にハケ調整、口縁下は横ナデ。Ⅱ様式～Ⅲ様式初頭であろう。40013高杯杯部。杯部上半で屈曲して立ち上がり、口縁端面はや

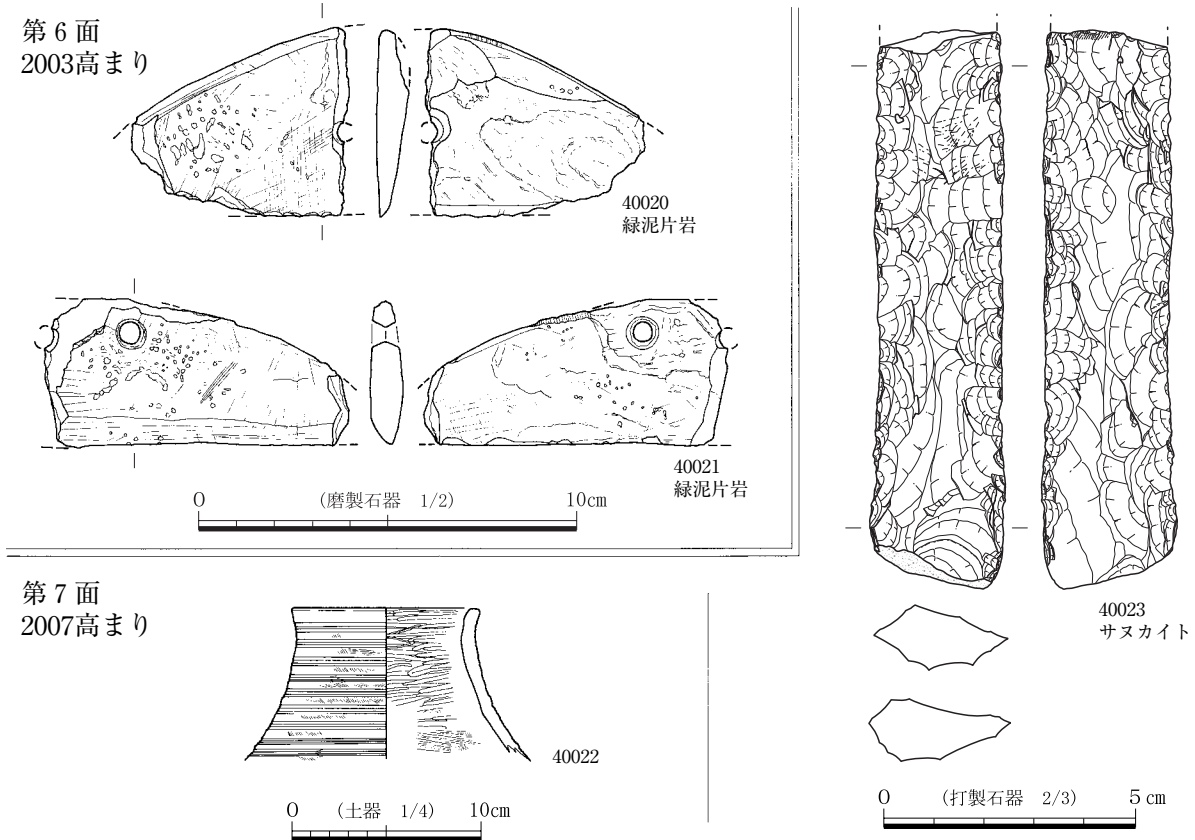


図332 05-1-1区 第6面2003高まり、第7面2007高まり出土遺物

や肥厚して面をもつ。内外面ともにミガキ調整。Ⅲ - 1 様式。40014と40015は上層の粗砂層から出土している。40014は高杯。口縁端部に刻みがめぐり、杯部は屈曲して浅く内湾する。

40015は無文の甕。肩が張らず、逆台形となる。外面はハケ後ナデ調整、内面は工具ナデ。底部下面には一部ミガキが残る。下半は被熱して表面が剥離しており、上半は煤付着。Ⅰ - 4 ~ Ⅱ 様式前半。40016 (写真図版140) は鉢。2帯の沈線文帯の間を竹管文で飾る。上の沈線は11条と多条で、口縁端部はまるくおさめる。Ⅰ - 4 様式。

40017・40018は土器片転用円板。40018は白色で粗いハケ調整。搬入品か。

40019 (写真図版140) は紅簾片岩製の砥石片。長軸7.52cm、短軸3.55cmが残存し、一面のみ長辺方向に利用される。重さ55.3g。

なお、2003・2005高まり内からの出土遺物は、第6層で報告する。

#### (13) 05 - 1 - 1 区第6層の遺物 (図332・写真図版141)

弥生土器365片 (うちⅠ様式25片、Ⅰ~Ⅱ様式19片、Ⅱ様式11片)、石庖丁2点、サヌカイト剥片3点、木片4点、焼土塊1点、計375点出土した。そのうち、第6面の高まり内の遺物は次の通り。

調査区中央部の2003高まり内からの出土遺物は、弥生土器244片 (うちⅠ様式16片、Ⅰ~Ⅱ様式10片、Ⅱ様式8片)、石庖丁2点、サヌカイト剥片2点、計248点である。

図332 - 40020・40021は緑泥片岩製の石庖丁。40020 (写真図版141) は残存で長軸5.67cm、短軸5.07cm、重さ30gを量る。背部と片面に敲打痕が観察されるが、刃部は破損が著しい。杏仁形に復原されよう。40021 (写真図版141) は直線刃半月形で、かろうじて2孔が残る。孔の周りと背部に敲打痕があり、横方向の擦痕が目立つ。残存長軸7.99cm、短軸3.91cm、重さ43.7g。

調査区南端の2005高まり内からの出土遺物は、弥生土器58片 (うちⅠ様式7片、Ⅰ~Ⅱ様式3片、Ⅱ様式1片)、焼土塊1点、計59点である。

他に、第6~10層相当の側溝を掘削した際に、弥生土器142片 (うちⅠ様式17片、Ⅰ~Ⅱ様式7片、Ⅱ様式4片)、サヌカイト剥片2点、焼土塊1点、計145点と骨が出土した。

また、第6~11層相当の側溝を掘削した際にも、弥生土器65片 (うちⅠ様式6片、Ⅰ~Ⅱ様式5片、Ⅱ様式1片) と骨が出土した。

#### (14) 05 - 1 - 1 区第7面の遺構と遺物 (図333・写真図版136)

第6層の黒色土壌化層を除去した面である。面の高さはT.P.+1.7~1.9mで、南側が高い。調査区の大部分は上層第6面の2002溝・2004溝により攪乱されており、調査できたのは、高まり2か所 (遺構番号2006・2007) のみである。

2006高まり 調査区中央部、第6面2003高まりの下層にあたる。上面の高さはおよそT.P.+1.75mで、北側はゆるやかに傾斜している。

2007高まり 調査区南端に位置する。第6面2005高まりの下層にあたる。上面の高さはT.P.+1.8~1.9mで、2005高まり同様にゆるやかに東に下がる。

2006・2007高まり内からの出土遺物は、第7層で報告する。

(15) 05-1-1区第7層の遺物 (図332・写真図版141)

弥生土器129片 (うちI様式10片、I~II様式7片、II様式8片)、打製石剣1点、サヌカイト剥片2点、計132点出土した。そのうち、第7面の高まり内の遺物は次の通り。

調査区中央部の2006高まりから、弥生土器10片 (うちI様式1片、I~II様式2片) が出土した。

調査区南端の2007高まり内の出土遺物は、弥生土器64片 (うちI様式4片、I~II様式4片、II様式4片)、打製石剣1点、計65点である。

図332-40022は細頸壺の頸部。口縁端部はやや面をもち、外面は斜め上がりのハケ調整の後、時計周りでクシ描き直線文が施される。内面はハケ調整後、口縁部近くにミガキ。II様式。40023 (写真図版141) はサヌカイト製の打製石剣。基部には原礫面が残る。基部の側縁は2~3cmほど稜があまくなる。先端側は欠損し、一部に擦痕が残る。長軸11.08cm、短軸2.77cm、厚み1.4cm、重さ61.7g。

(16) 05-1-1区第8面の遺構と遺物 (図334・写真図版136)

黒色を呈する盛土層の上面である。面の高さはT.P.+1.6~1.9mで、南側が高い傾向にある。第7面同様に、第6面の2002溝・2004溝により攪乱されている範囲が広く、高まりを2か所 (遺構番号2008・2009) 検出したに止まった。

2008高まり 調査区中央部、第7面2006高まりの下層にあたる。上面の高さはT.P.+1.5~1.7mで、ゆるやかに北に下がる。

2009高まり 調査区南端に位置する。第7面2007高まりの下層にあたる。上面の高さはおよそT.P.+1.8mで、ゆるやかに北に傾斜している。

2008・2009高まり内からの出土遺物は、第8層で報告する。

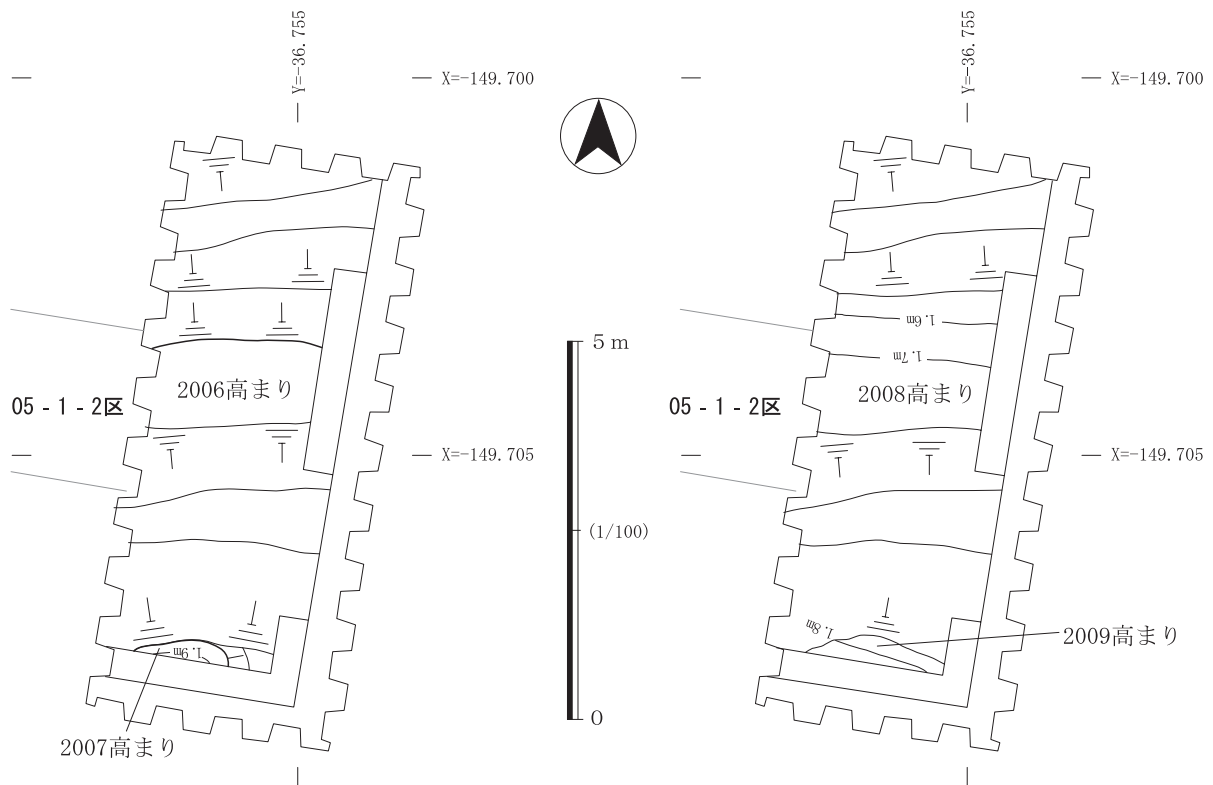


図333 05-1-1区第7面

図334 05-1-1区第8面

(17) 05 - 1 - 1 区第 8 層の遺物

弥生土器299片（うちⅠ様式15片、Ⅰ～Ⅱ様式17片、Ⅱ様式 8 片）、サヌカイト剥片 1 点、計300点と骨・歯が出土した。そのうち、第 8 面の高まり内の遺物は次の通りである。

調査区中央部の2008高まり内からの出土遺物は、弥生土器93片（うちⅠ様式13片、Ⅰ～Ⅱ様式 9 片、Ⅱ様式 6 片）、サヌカイト剥片 1 点、計94点と骨・歯である。

調査区南端の2009高まり内からは、弥生土器36片（うちⅠ様式 2 片、Ⅰ～Ⅱ様式 4 片）が出土した。

他に、上述のように、第 8 層を含む側溝を掘削時に、弥生土器をはじめ、サヌカイト剥片、骨などが出土している。

(18) 05 - 1 - 1 区第 9 面の遺構と遺物（図335・337 写真図版136・141）

第 8 層の黑色盛土層を除去した面だが、第 9 面も黑色盛土層の上面である。面の高さは、調査区中央部でT.P.+1.55m、南部ではT.P.+1.6m強と、わずかながら南が高い。遺構として、溝 1 条、高まり 2 か所、計 3 か所（遺構番号2010・2011・2013）を検出した。

2010溝 調査区北部に位置する。主軸方位は東北東 - 西南西。03 - 1 - 2・3 区の1397溝とつながる可能性が高い。当区での幅は 4 m 以上、深さ66cm。埋土（図322）は黒色を基本に 4 層に分かれる。a 2 黒7.5Y2/1粘質シルトを主体とし、灰7.5Y4/1シルト～細砂ラミナを上から中位にはさむ。下部には木片がたまる。a 3 オリーブ黒7.5Y3/1シルト。細砂とラミナを形成し、木片多く含む。a 4 黒2.5Y2/1細～粗砂混じりシルト。オリーブ黒5Y3/1のブロック含む。最下層 a 5 オリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト。

出土遺物は、弥生土器150片（うちⅠ様式18片、Ⅰ～Ⅱ様式 4 片、Ⅱ様式 6 片）、サヌカイト剥片 1 点、

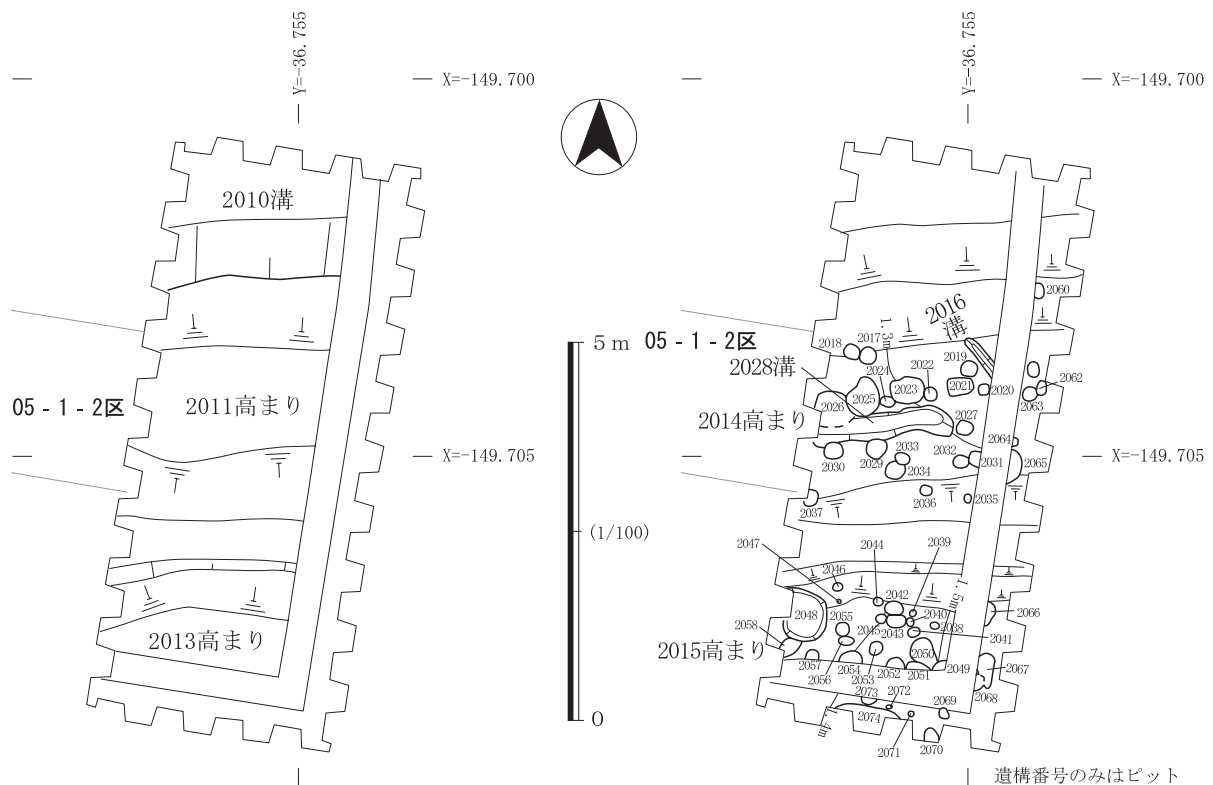


図335 05 - 1 - 1 区 第 9 面

図336 05 - 1 - 1 区 第 10 面

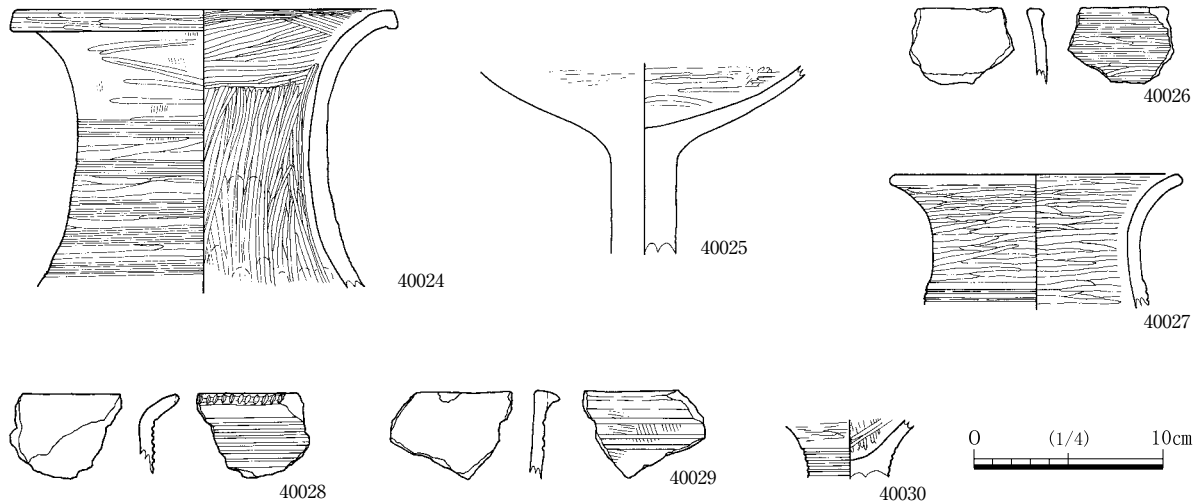


図337 05 - 1 - 1 区 第9面2010溝出土土器

木片3点、骨1点、計155点である。

図337 - 40024 (写真図版141) 広口壺。頸部は太く外反し、クシ描き文が施される。口縁端部はやや下垂する。外面は磨耗して不鮮明だが、ミガキはほぼ全面にわたると思われる。Ⅱ様式前半。40025は高杯。脚部は中実で長く伸びる。ミガキは杯部内面でランダムに施され、外面にも確認される。全面に煤が付着して磨耗しており、転用蓋としても利用されたと考えられる。Ⅱ様式～Ⅲ - 1様式。40026 (写真図版141) は鉢の口縁部。端部はやや内湾して面をもつ。クシ描き直線文の間と、内面にミガキが施されている。Ⅱ様式。

40027 (写真図版141) は広口壺。頸部の削り出し突帯上に沈線2条が確認される。Ⅰ - 2様式。40028 (写真図版141) は甕。口縁端部に刻み目を施し、胴部に沈線をもつ。沈線多条化しており、Ⅰ様式前半からⅡ様式初頭に位置づけられる。40029 (写真図版141) は逆「L」字状口縁をもつ甕だが、突帯上に刻みをもたない。Ⅰ - 4様式～Ⅱ様式初頭。40030は高杯の脚柱部。杯部と脚部の境には沈線が5条以上ひかれ、内外面はミガキが施される。沈線の多条化するⅠ - 3～4様式か。

2011高まり 調査区中央部に位置する。上面の高さはおよそT.P.+1.55m。

2013高まり 調査区南部にある。上面の高さはT.P.+1.6m強で、2011高まりよりわずかに高い。

2011・2013高まり内からの出土遺物は、第9層で報告する。

なお、2011高まりと2013高まりとの間は、第6面2004溝による攪乱である。

#### (19) 05 - 1 - 1 区第9層の遺物 (図338・写真図版142)

弥生土器506片 (うちⅠ様式56片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式14片) が出土した。そのうち、第9面の高まり内の遺物は次の通りである。

調査区中央部の2011高まり内から、弥生土器384片 (うちⅠ様式45片、Ⅱ様式11片)、打製石剣の未成品1点、楔1点、サヌカイト剥片7点、骨・歯3点、計396点出土した。

図338 - 40031 (写真図版142) と40033は壺。40031の口縁端部は縦に、上面は山形文状にクシ描き文を施して飾る。外面はハケ調整で口縁直下には、粗い工具痕が残る。Ⅱ様式。40032は甕。口縁はやや外反し、頸部の突帯には布目圧痕が刻まれる。横方向のハケ調整後、ミガキ。Ⅰ様式後半。40033

(写真図版142)は壺の口縁部内面に突帯が付く。貼り付け突帯は3条で、布目圧痕が刻まれる。I - 3 ~ 4 様式。

40034 (写真図版142)は打製石剣の未成品か。片面へカーブし、原礫面や瘤状の突起が大きく残る。長軸14.53cm、短軸4.45cm、厚み2.1cm、重さ137.4g。40035 (写真図版142)は両側縁の調整が下部にまで及ぶため、打製石剣の基部とした。側縁の稜はまるく潰れる。先端の欠損は被熱によるものか。残存長軸5.46cm、短軸4.32cm、厚み1.2cm。重さ36.7gを量る。

調査区南部にある2013高まり内からは、弥生土器の細片10片が出土した。

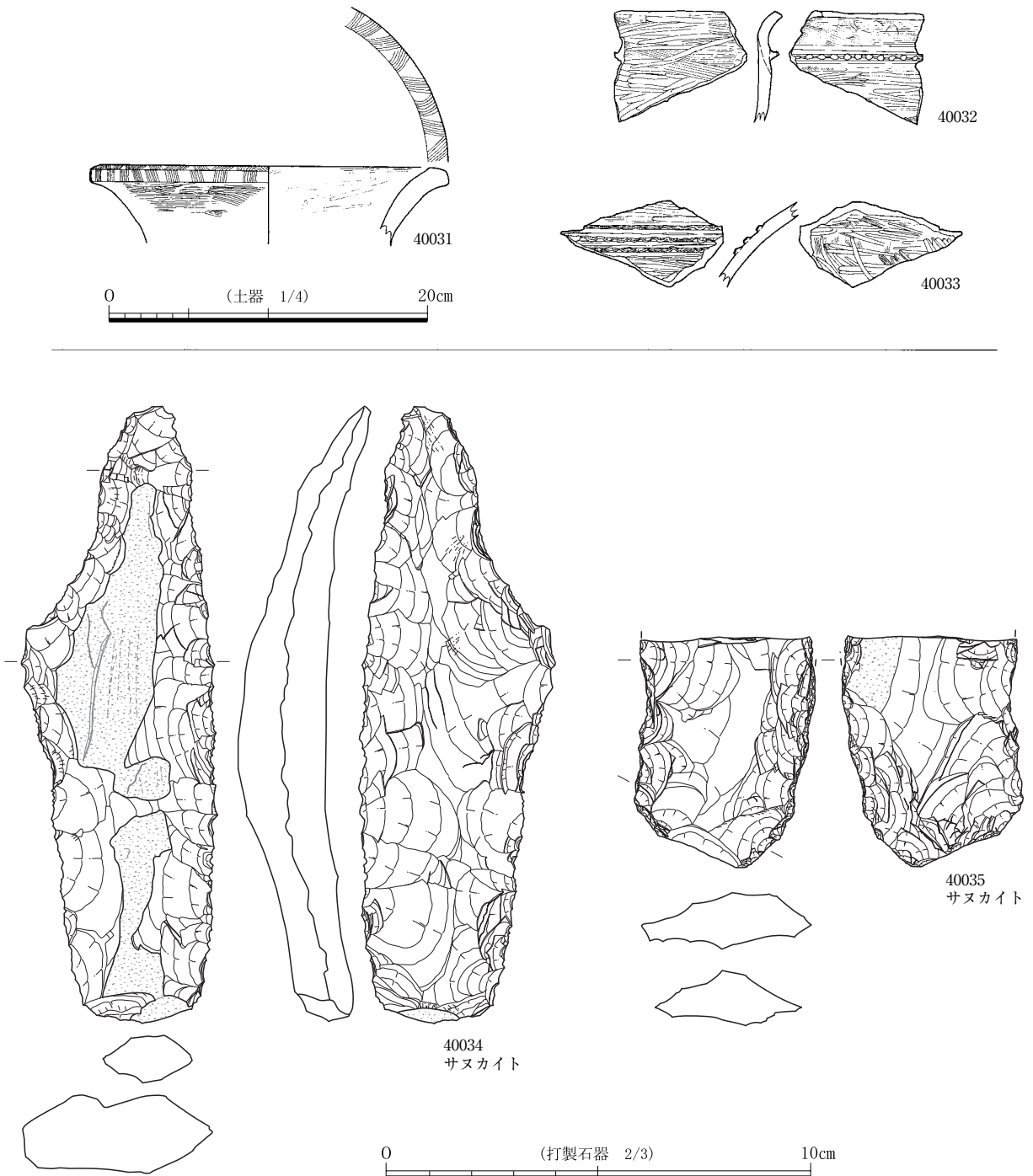


図338 05 - 1 - 1 区 第9面2011高まり出土遺物



(20) 05-1-1区第10面の遺構と遺物 (図336・339 写真図版137・138)

黒褐色ないし灰オリーブ色シルト層の上面である。面の高さはT.P.+1.3~1.5m、南東側が高い傾向にある。遺構として、溝2条、高まり2か所、ピット56個、計60か所 (遺構番号2014~2058・2060~2074) を調査した。ピットをはじめとする遺構が錯綜する状況は、03-1-2区第10面と共通する。

2014高まり (写真図版137) 調査区中央部に位置する。北側は第9面2010溝に、南側は第6面2004溝に切られている。上面の高さはおよそT.P.+1.3mで、東側がわずかに高い。

この2014高まり上面の幅1.8m程度、検出長3.2mの狭小な範囲とその周辺で、溝2条とピット26個を検出した。

2016溝 2014高まりの北東部に位置する。主軸方位は北西-南東。幅10~16cm、深さ4cm。埋土は第9層と同じ黒5Y2/1細~粗砂混じりシルト。弥生土器細片1片とサヌカイト剥片1点が出土した。

2028溝 2014高まりの西部に位置する。東西方向を主軸とする。幅29~42cm、深さ7cm。埋土は第9層と同じ黒5Y2/1細~粗砂混じりシルト。出土遺物は、弥生土器18片 (うちI様式2片、I~II様式2片) である。

2023ピット 2014高まり中央やや北西よりに位置する。平面不整円形で、長径47cm、短径35cm、深さ4cm。埋土は、暗オリーブ灰2.5GY3/1シルトにオリーブ黒7.5Y3/1シルトのブロックが混じり、炭化物も

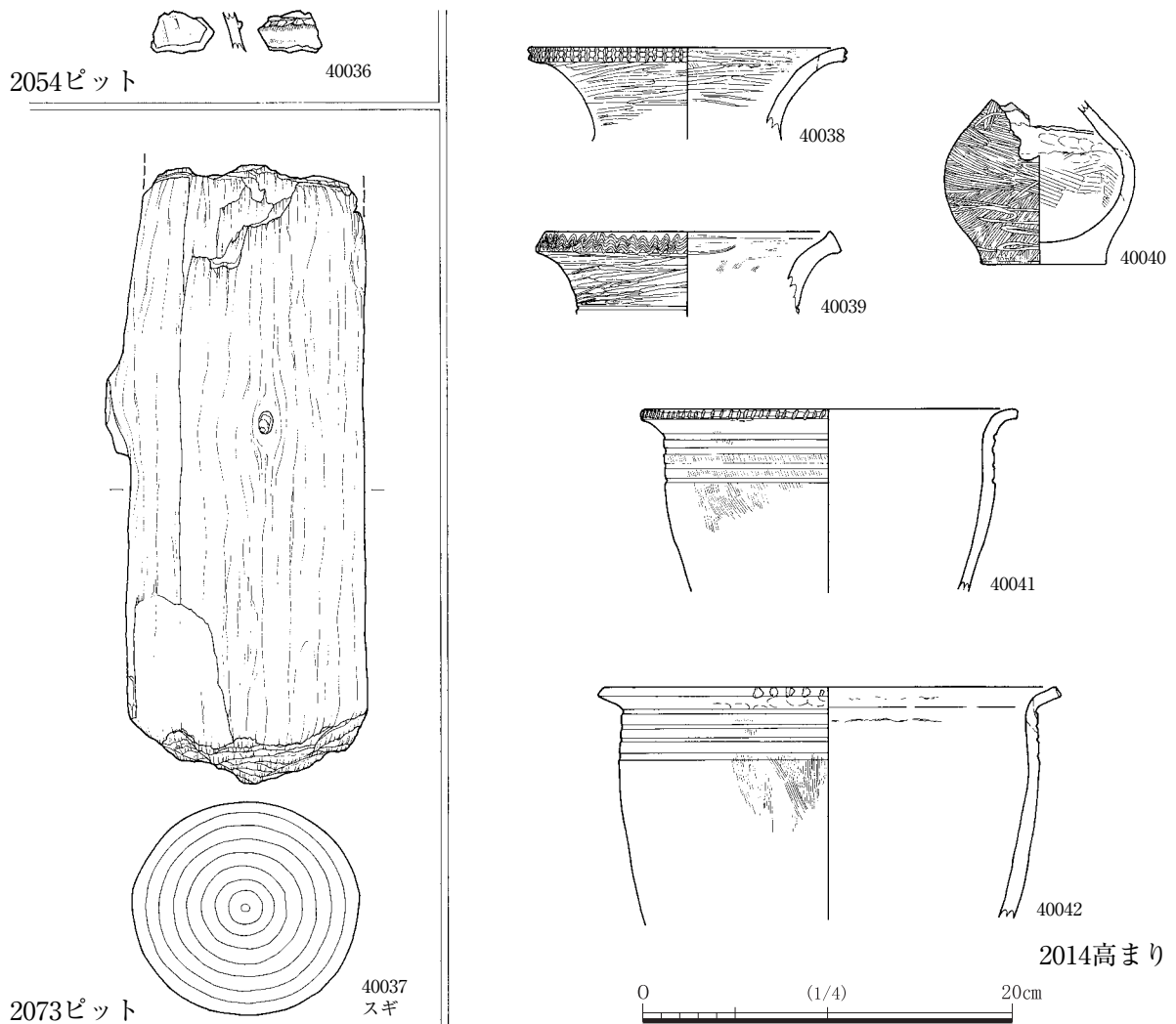


図339 05-1-1区第10面2054・2073ピット、2014高まり出土遺物

表19 05-1-1区 第10面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数								
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイト		その他	合計	
								I 様式	I s II 様式	II 様式	不詳	成品	剥片類			
2017ピット	8M-6a	円		28	24	41	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる					3				3
2018ピット	8M-6a	円		17	15	5	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2019ピット	8M-6a	円		24	23	6	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2020ピット	8M-6a	円		16	14	8	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2021ピット	8M-6a	楕円	東西	39	28	39	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる	1		2	6					9
2022ピット	8M-6a	円		14	14	7	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2023ピット	8M-6a	不整円	東西	47	35	4	暗オリーブ灰2.5GY3/1、 オリーブ黒7.5Y3/1ブロック 混じる、炭化物含む		1		9					10
2024ピット	8M-6a	円		19	17	9	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				1					1
2025ピット	8M-6a	不整円	北	47	40	29	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる	4	1		11					16
2026ピット	8M-6a	円		50		24	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2027ピット	8M-6a	円		25	21	33	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる			1	2			骨片1		4
2029ピット	8M-6a	円		24	21	12	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				1					1
2030ピット	8M-6a	円		24	21	30	①黒7.5Y2/1 ②黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				2					2
2031ピット	8M-6a	円		19		9	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				3					3
2032ピット	8M-6a	楕円	東北東	20	15	34	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2033ピット	8M-6a	円		19	17	5	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる							骨片2		2
2034ピット	8M-6a	円		29	28	2	9層中に木(柱痕あり)黒 5Y2/1(中心部)樹種不明									0
2035ピット	8M-6a	円		14	13	4	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2036ピット	8M-6a	円		14	14	5	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2037ピット	8M-6a	円		20		14	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2038ピット	8M-6a	円		11	10	8	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				1					1
2039ピット	8M-6a	円		8	8	4	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2040ピット	8M-6a	円		9	9	4	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2041ピット	8M-6a	円		16	14	7	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2042ピット	8M-6a	円		22	17	5	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2043ピット	8M-6a	楕円	東西	26	18	4	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2044ピット	8M-6a	円		11	10	6	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2045ピット	8M-6a	円		15	15	4	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2046ピット	8M-6a	円		10	9	5	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2047ピット	8M-6a	円		4	3		黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0
2048ピット	8M-6a	円		65	63	5	オリーブ黒7.5Y3/1、暗オ リーブ灰2.5GY3/1ブロック 混じる、炭化物含む		2		6					8
2049ピット	8M-6a					8	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる						1			1
2050ピット	8M-6a	不整円	北西	39	27	8	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる									0

表19 05-1-1区 第10面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物点数							合計		
				長径	短径	深さ		弥生土器				サヌカイト		その他			
								I様式	I~II様式	II様式	不詳	成品	剥片類				
2051ピット	8M-6a			40		22	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2052ピット	8M-6a			23		13	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2053ピット	8M-6a	円		21	17	20	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2054ピット	8M-6a	円		29		28	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				2						2
2055ピット	8M-6a	円		19	19	9	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2056ピット	8M-6a	楕円	西北西	16	9	6	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				2			骨片12			14
2057ピット	8M-6a			20		15	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2058ピット	8M-6a			21		3	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2060ピット	8M-6a	円		19		11	柱痕										0
2061ピット	8M-6a	円		19	18	3	粗砂混じる										0
2062ピット	8M-6a	円		19	12	3	炭粒含む										0
2063ピット	8M-6a	楕円	北北東	20	21	9	炭粒含む										0
2064ピット	8M-6a	円		10		32	柱痕										0
2065ピット	8M-6a	円		38		22	10層のブロック含む				3						3
2066ピット	8M-6a			23		19	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				3						3
2067ピット	8M-6a	楕円	北	34	23	15	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				3						3
2068ピット	8M-6a	円		23		35	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる				1						1
2069ピット	8M-6a	楕円	北西	17	13	16	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2070ピット	8M-6a	円		20		21	粘質シルト										0
2071ピット	8M-6a	円		9	8	9	炭粒含む										0
2072ピット	8M-6a	円		8	7	8	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる										0
2073ピット	8M-6a	円		15		18	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる							木杭(スギ)1			1
2074ピット	8M-6a	円		82		15	黒5Y2/1、細砂～粗砂混じる、炭粒多く含む	3			5			炭化材1、流木片3、骨片1、焼土塊1			14

多い。弥生土器10片（うちI～II様式1片）が出土した。

2030ピット 2014高まり南西部、2028溝の南側にある。平面円形で、直径21～24cm、深さ30cm。ピット西寄りの部分が、柱痕と思しき黒7.5Y3/1シルトである。弥生土器の小片2片のみ出土。

2034ピット 2014高まり南部に位置する。平面円形で、直径28～29cm。この第10面からの深さは2cmしか検出できなかったものの、第9層中に柱材が残っていた。サンプリングの後、鑑定を行ったが樹種は不明であった。

2060・2064ピットでも、柱痕が認められた。しかし、遺存状況が悪く取り上げ不能であった。

その他大半のピットの埋土は、第9層と同様の黒5Y2/1細～粗砂混じりシルトであった。

その他、2014高まりとその周辺から検出された2017～2027・2029～2037・2060～2065ピット個々のデータは、表19にまとめた。

2015高まり（写真図版137） 調査区南部に位置する。北側は第6面2004溝に切られている。上面の高

さはT.P.+1.35～1.5mで、東側が高い傾向にある。2015高まりの上面で調査できた範囲も狭小だが、その周辺も含めてピット30個を検出した。

2048ピット 2015高まり北西端に位置する。平面円形で、直径63～65cm、深さ5cm。埋土は、オリーブ黒7.5Y3/1シルトに暗オリーブ灰2.5GY3/1シルトのブロックが混じり、炭化物も多い。弥生土器の小片8片（うちⅠ～Ⅱ様式2片）が出土した。

2054ピット 2015高まり南部にあり、その南半分を側溝により破壊されている。平面円形と推定され、東西径29cm、深さ28cm。埋土は、第9層と同じ黒5Y2/1細～粗砂混じりシルト。弥生土器2片が出土した。図339 - 40036は壺あるいは甕か。刻み目貼り付け突帯のある破片である。Ⅰ様式。

2073ピット 調査区南端、側溝よりさらに南のセクションベルト上で検出した。平面円形と推定され、直径約15cm、深さ18cm。木杭1本が出土した。

図339 - 40037は樹皮をほぼ全面に残し、原木を切断しただけの木材である。木材繊維に対して斜交して切断され、段差をもった加工痕が残る。樹種はスギ。

2074ピット 2073ピットのさらに南側にあり、調査区南側の矢板に切られピット北部のみの検出に止まった。平面円形と推定され、径82cm以上、深さ15cmと、当05 - 1 - 1区第10面では最大規模である。埋土は、第9層と同じ黒5Y2/1細～粗砂混じりシルトを主体とするが、炭化粒が多く含まれ、細砂も混じる。出土遺物も、弥生土器8片（うちⅠ様式3片）、木片4点、骨1点、焼土塊1点、計14点とピット群の中では多い。

その他、2038～2058・2066～2074ピット個々のデータも、表19にまとめた。

2014・2015高まり内からの出土遺物は、第10層で報告する。

#### (21) 05 - 1 - 1区第10層の遺物（図339・写真図版142）

弥生土器185片（うちⅠ様式24片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式8片）、サヌカイト剥片3点、焼けた中礫1個、木片7点、計196点と骨が出土した。その内訳は以下の通り。

調査区中央部の2014高まり内からの出土遺物は、弥生土器168片（うちⅠ様式23片、Ⅰ～Ⅱ様式12片、Ⅱ様式7片）、サヌカイト剥片3点、焼けた中礫1個、木片7点、計179点と骨である。

図339 - 40038（写真図版142）・40039（写真図版142）は壺の口縁。40038は口縁端部には横位の沈線の後、縦位にも刻み目を施す。内外面ともにミガキが細かく施される。Ⅰ様式後半～Ⅱ - 1様式。40039の口縁端部は肥厚し、クシ描き波状文が施される。頸部にはクシ描き直線文が残る。Ⅱ様式。

40040（写真図版142）は小形の壺で頸部を欠く。外面はハケ調整後、下半は斜め方向、上半は横方向を基本としてミガキを施す。内面は粗いハケ調整で、粘土の接合痕や指頭圧痕がのこる。打ち欠き、あるいは破損の後、再利用する。内面と断面の一部に赤色顔料が付着しており、特に濃い部分が器体を横にして溜まるような形で残っている。また、その部分を下にした時に傾きが安定する。Ⅰ - 3様式～Ⅱ様式であろう。

40041・40042は甕。40042の口縁端部は刻み目の施された部分と無文の部分がある。体部はハケ調整。内外面被熱して煤付着。Ⅰ - 3様式～Ⅱ様式。

調査区南部の2015高まり内からは、弥生土器17片（うちⅠ様式1片、Ⅱ様式1片）が出土した。

(22) 05-1-1区第11面の遺構と遺物 (図340・341 写真図版138)

シルトを主体としラミナもみられる自然堆積層の上面である。砂層除去面。面の高さはT.P.+0.9~1.1mで、南側が高い。遺構として、溝1条と落ち込み1か所(遺構番号2059・2090)を検出した。

2059溝 調査区中央に位置する。主軸方位は北北西-南南東。幅10~15cm、深さ2cm。埋土はオリーブ黒7.5Y3/1シルト。出土遺物はない。

2090落ち込み 2016溝の北側に接する。幅0.6~0.8m、検出長2.2m、深さ8cmの浅い落ち込みがある。その北肩から長径40cm、幅25cm、高さ16cm、重さ22.8kgの花崗岩が出土した。

石周辺の第11面で、図340-40043壺下半、40044・40045底部、40046木製品を検出した。

40043は体部の張った部分に沈線2条が残る。外面は粗いミガキで、一部ハケ調整が残る。内面にはナデの工具痕が確認できる。I-4様式。体部は水平に割れて粘土帯の単位を示唆する。40044は壺の底部か。粗いミガキの下にはハケ調整が確認できる。胎土の粗いI様式か。40045は甕の底部か。体部は粗いハケで調整される。底部には焼成後穿孔。I~II様式。外面には煤が付着する。

40046は1.5cm角の方形孔の残る破片で、穿孔は両面から行われている。図面上の上が破損する。形態から、浮子や器の把手などが類推されるが、不明である。

(23) 05-1-1区第11層の遺物 (図340・写真図版142)

弥生土器42片(うちI様式7片、I~II様式5片)、炭化材1点、計43点出土した。

図340-40047(写真図版142)は壺蓋。沈線3条2帯が時計回りにめぐる。頂には孔が両面からあけられる。I様式であろう。

(24) 05-1-1区第11-2面(図342・写真図版138)

第11層の砂層を除去した面で、03-1-2区南部に分布する、植物遺体薄層を含む自然堆積層中のわずかに土壌化している層の上面。面の高さはT.P.+0.7~0.9mで、南側が高い。遺構は検出しなかったが、全面に足跡が多くみられる。

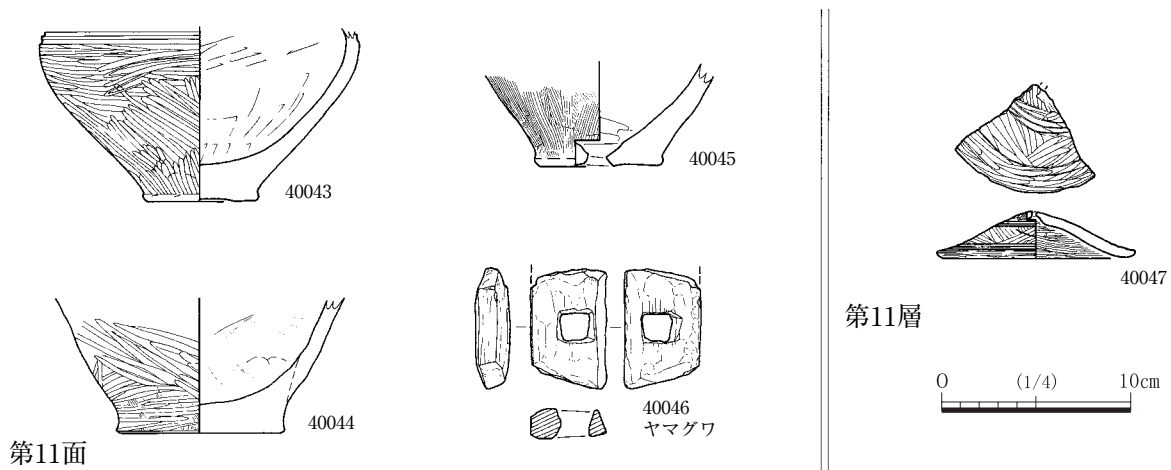


図340 05-1-1区第11面、第11層出土遺物

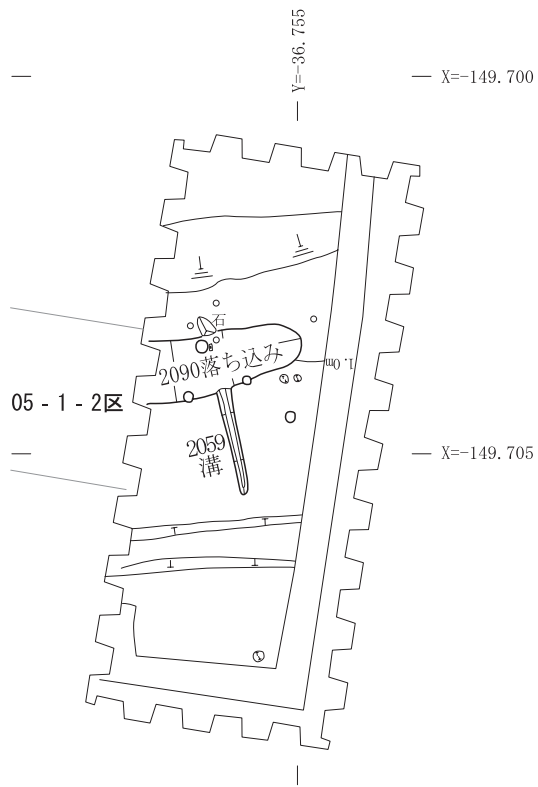


図341 05 - 1 - 1 区 第11面

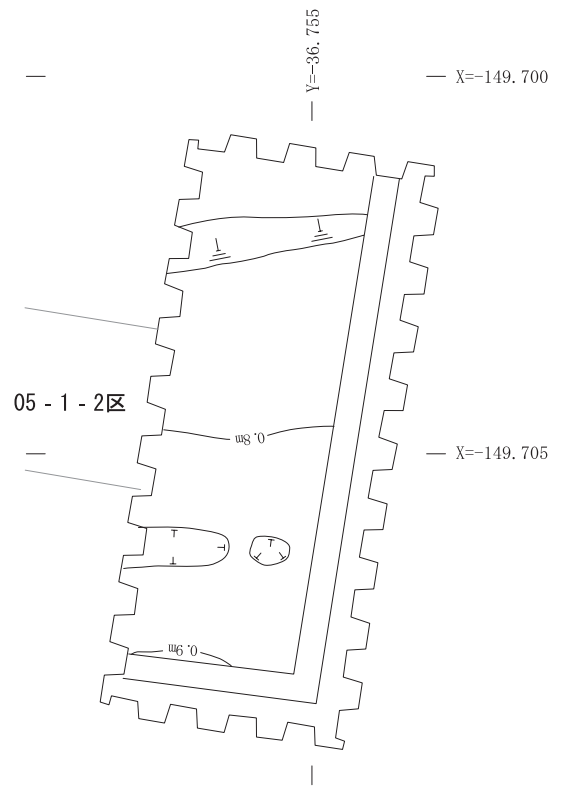


図342 05 - 1 - 1 区 第11 - 2面

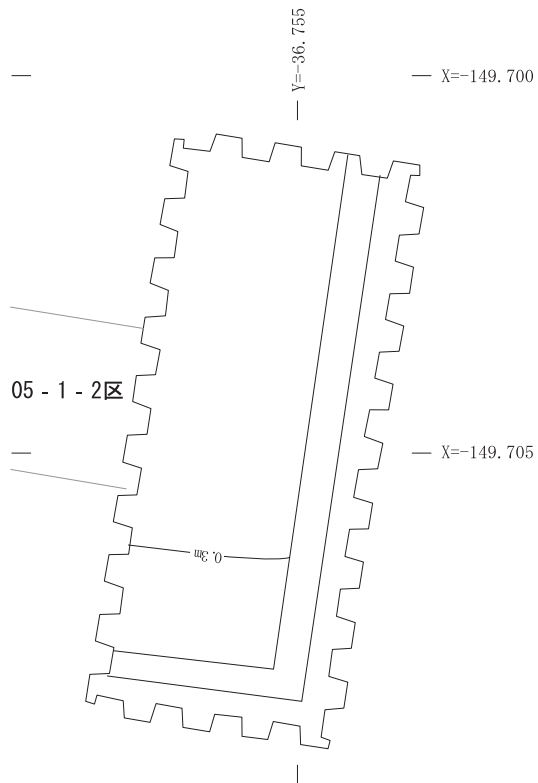
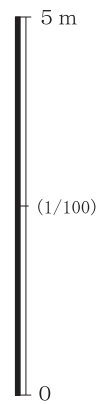


図343 05 - 1 - 1 区 第11 - 3面



(25) 05 - 1 - 1 区第11 - 2 層の遺物

弥生土器 3 片のみ出土。いずれも細片のため時期不詳である。

(26) 05 - 1 - 1 区第11 - 3 面 (図343・写真図版138)

砂層の上面。面の高さはT.P.+0.25~0.4mで、南側が高い。検出遺構はない。

(27) 05 - 1 - 1 区第11 - 3 層の遺物

第13面調査後、掘削限界のT.P.0.0mまで掘り下げた。しかし、遺物は出土しなかった。

## 第8章 05 - 1 - 2 区の調査成果

### 第1節 概要

05 - 1 - 2 区は、今回の調査範囲の東部、03 - 1 - 2 区と05 - 1 - 1 区との間に位置する。圧送管部掘削に伴う調査である。当05 - 1 - 2 区以外の4調査区は全て矢板で囲まれた調査区であったが、当区は途中で屈曲する延長約25mのオープンカットであった。したがって、調査対象面積は、現地表面では幅3.35mなので面積84㎡、掘削限界面では幅1.45mなので面積36㎡となる。

調査前地盤高はおよそT.P.+4.6m。盛土層を重機で1.1m程度除去し、T.P.+3.5mから人力による調査を開始した。調査限界は、他の4調査区がT.P.0.0mであるのに対し、当区ではT.P.+2.7mなので、調査は第2面まで、検出遺構は15か所であった。

出土遺物は、土器類1079片、石1個、焼土塊1点、計1081点である。

### 第2節 層序

05 - 1 - 2 区の掘削は第2層までで、調査区内で堆積状況が共通していたため柱状図を示す（図322）。他調査区とほぼ同一である。

第0層（機械掘削停止・現代の盛土層：③）暗オリーブ灰2.5GY3/1礫混じりシルト。

第1層（オレンジシルト：③～④）層厚約20cm。2層に分かれ、上層③灰褐2.5YR4/2シルト。上位には少量の礫が混じり、下位にはマンガン斑が含まれる。下層④にぶい黄褐10YR4/3シルト。

第2層（砂層：④）層厚50cm以上。④黄褐10YR5/6細砂を主体とし、灰黄褐シルトとラミナをなす。水平方向のラミナが明瞭である。

### 第3節 遺構と遺物

#### （1）05 - 1 - 2 区盛土層・第0層の遺物

現代の盛土層である。先行調査した03 - 1 - 1 - 2 区の成果と当調査区での堆積状況を見て、重機でおよそ1.1m除去した。その後、人力により3～23cm掘り下げ第1面を検出した。

機械および人力掘削による出土遺物は、瓦5片、瓦器・瓦質土器2片、須恵器30片、土師器24片、弥生土器1片、計62片である。いずれも細片であった。

この他、第0～2層相当の側溝を掘削した際に、須恵器8片、土師器52片、弥生土器1片、計61片出土した。こちらも細片ばかりであった。

#### （2）05 - 1 - 2 区第1面の遺構と遺物（図344～347 写真図版143）

オレンジ色を呈するシルト層の上面である。



面の高さはT.P.+3.3~3.4mで、南東が高い傾向にある。検出遺構は、井戸1基、溝1条、ピット2個、計4か所（遺構番号2075~2078）である。

2078井戸（図345・写真図版143） 調査区中央やや南東寄りに位置する。検出レベルは調査区法面のおよそT.P.+3.5mで、地上にあったであろう井桁部分は失われていた。掘りかたは直径約1.3mの円形で、その内側に直径77~82cmの瓦積みの井戸側（井筒）が設えられている。井戸側は井戸瓦9枚で1段が構成されている。上から2段まで取り上げ、3段目の存在を確認した。3段目の上部が掘削限界のT.P.+2.7mだったので、それ以下の構造や、水溜（まなこ）の部分がどの層に達しているのかは確認できなかった。

井戸掘りかたの埋土は、灰オリーブ5Y4/2シルトを主体とし、そこに黒褐2.5Y3/1やオリーブ黒7.5Y3/1粘質シルトブロック、あるいは、オリーブ黒7.5Y3/1粗砂ブロックが混じる。井戸側内の埋土は、黒オリーブ7.5Y3/1粗砂混じりシルトで、しまりが無い。

出土遺物は、磁器1片、須恵器2片、土師器7片。加えて、井戸側を構成する井戸瓦2段分18枚

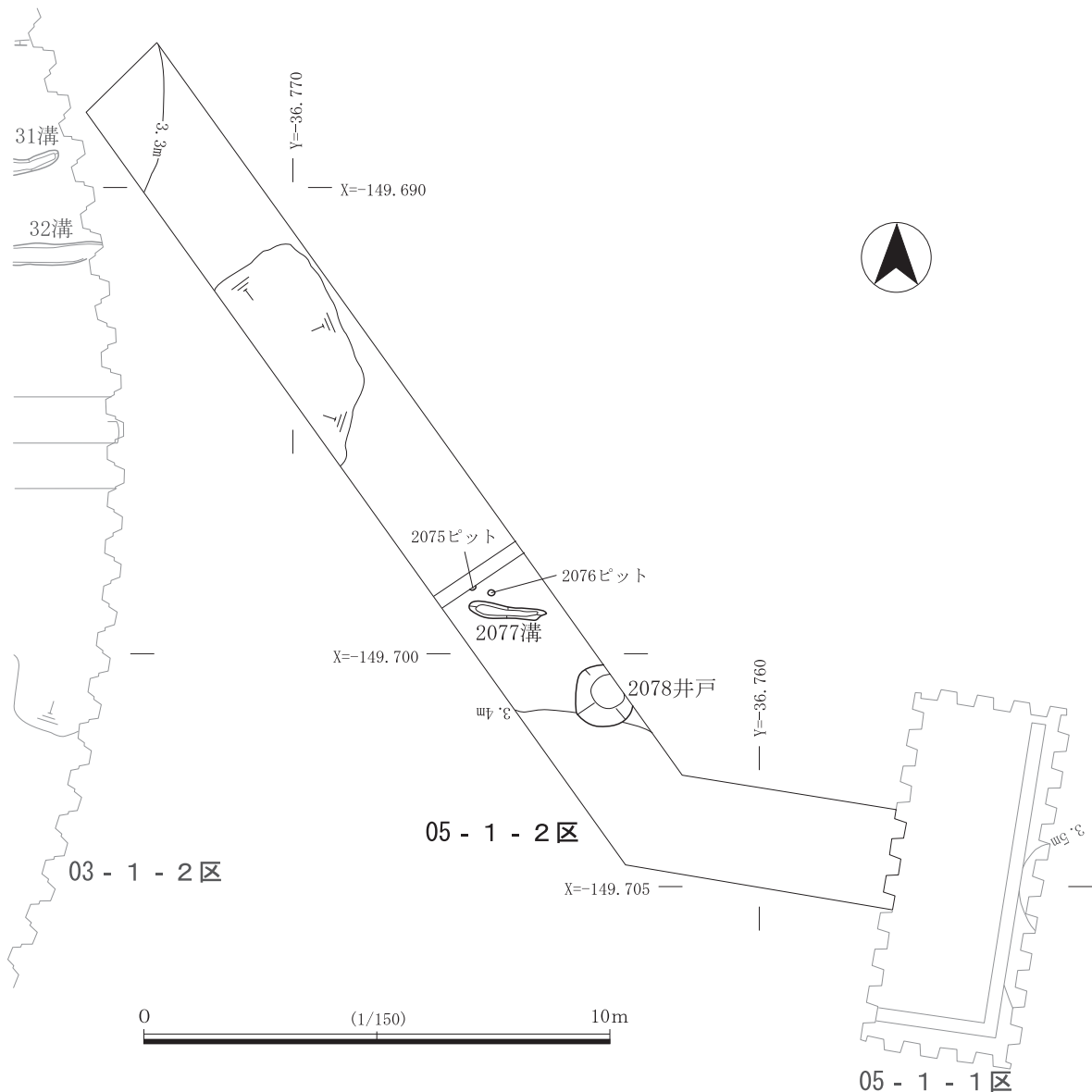
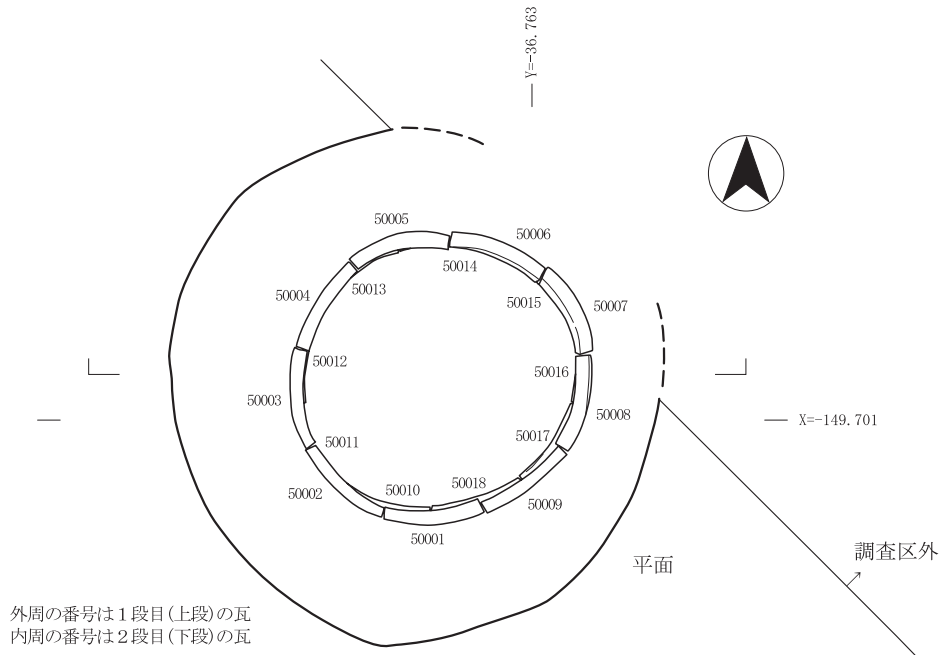
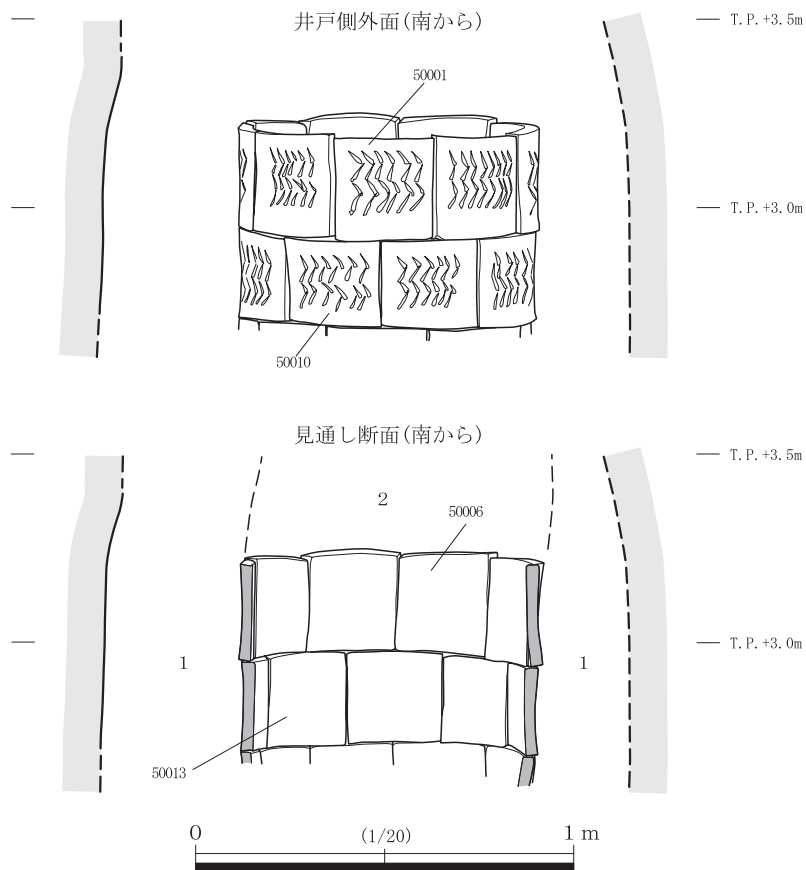


図344 05-1-2区 第1面



外周の番号は1段目(上段)の瓦  
内周の番号は2段目(下段)の瓦



- 1 灰オリーブ5Y4/2シルトに黒褐2.5Y3/1粘質シルトブロック混じる  
灰オリーブ5Y4/2シルトにオリーブ黒7/5Y3/1粘質シルト・粗砂  
ブロック含む
- 2 オリーブ黒7.5Y3/1粗砂混じりシルト、シマリなし

図345 05-1-2区 第1面2078井戸

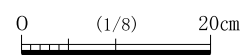
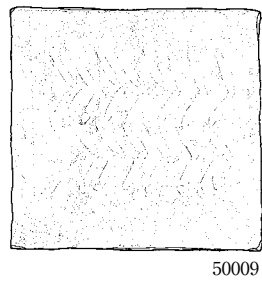
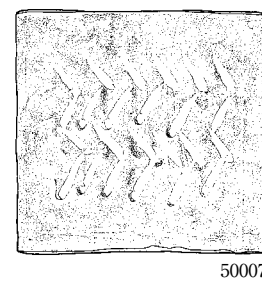
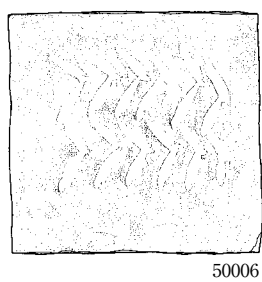
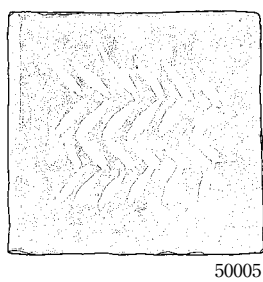
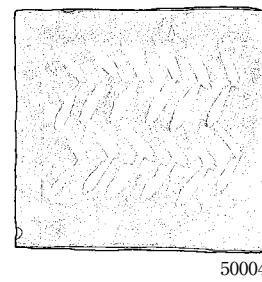
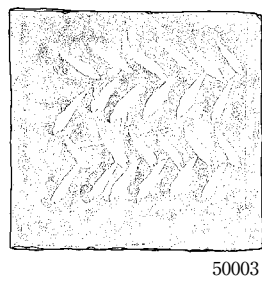
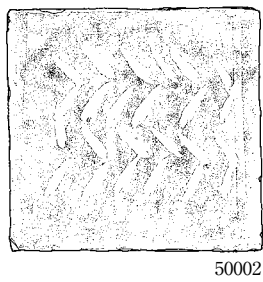
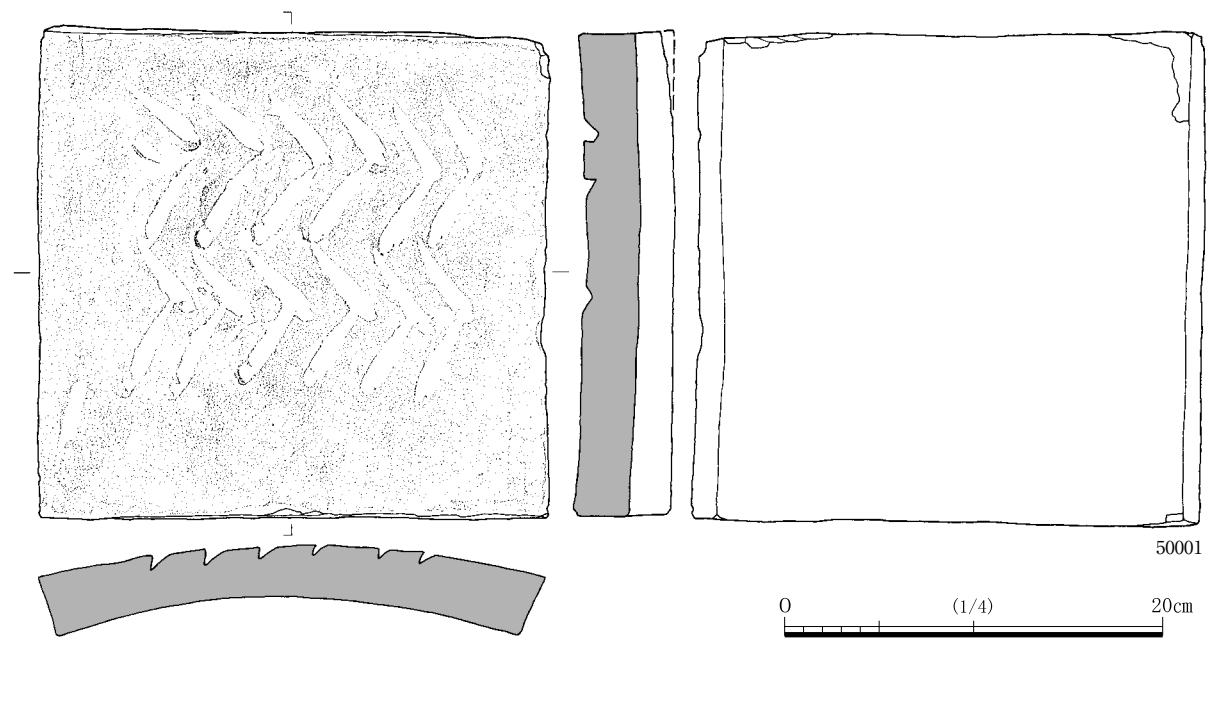


図346 05-1-2区 第1面2078井戸瓦(1)

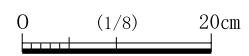
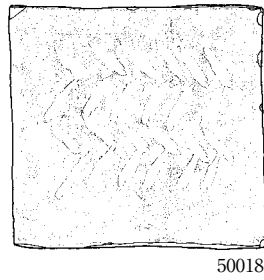
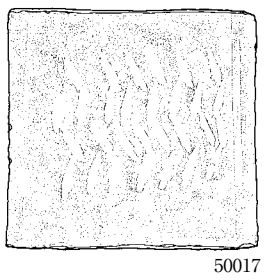
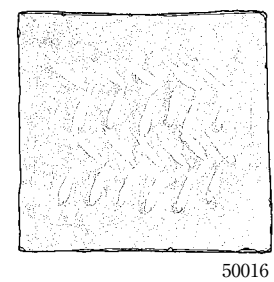
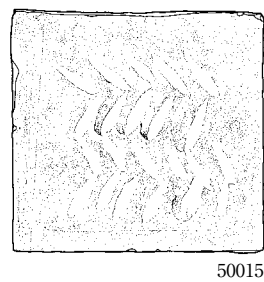
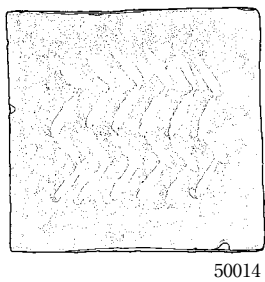
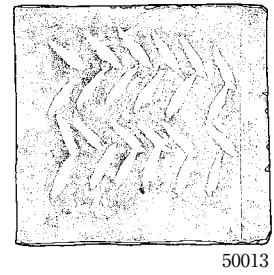
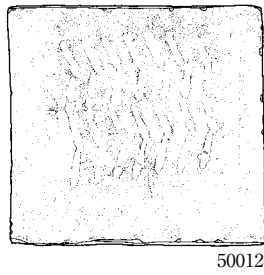
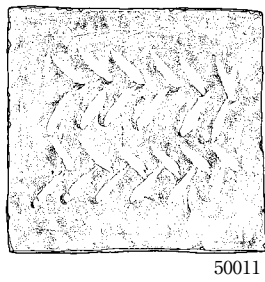
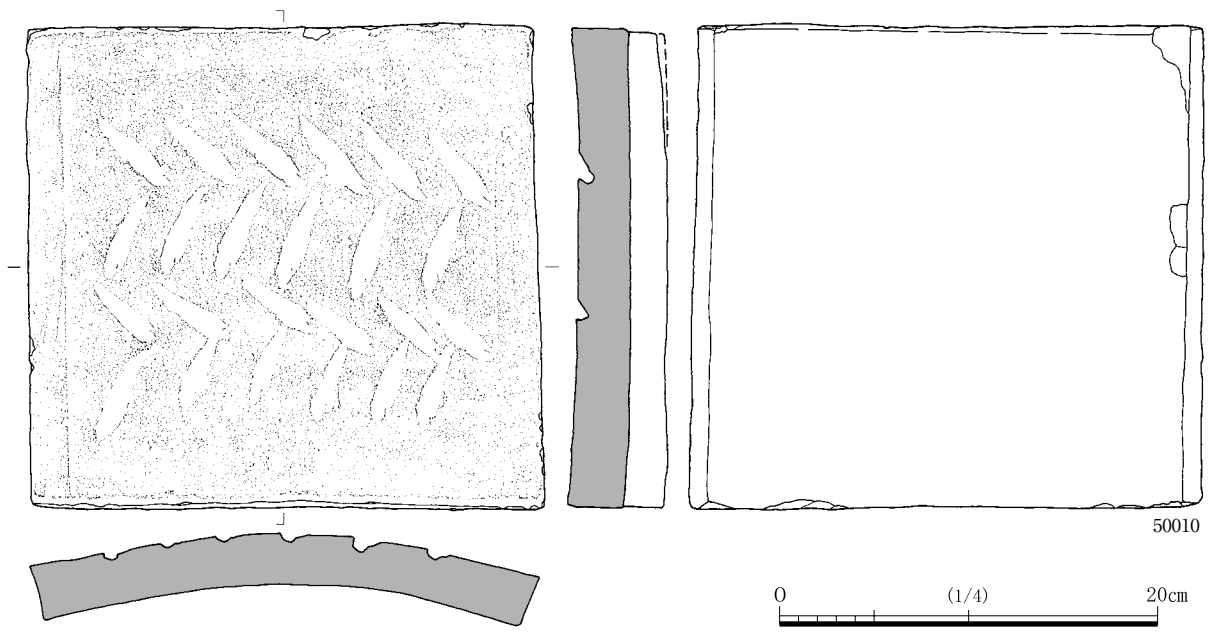


図347 05 - 1 - 2区 第1面2078井戸瓦 (2)

(50001～50018)を取り上げた。

井戸瓦を積み上げた構造から、近世以降の井戸と位置づけられる。

図346・347-50001～50018(写真図版143)の18点は井戸瓦で、ほぼ同じ形態と文様をもつ。法量は縦25.1～26.1cm、横26.2～27.2cmでやや横長、厚み2.7～3.6cm。重さは3.06～3.53kgだが、50008のみ4.30kgとやや重い。凸面の文様は、2本一対の刻みを、左右6列縦2段に配するものを基本としている。50009はそれが8列、50012は7列、50015は上から刻み5・5・6・7本、50016は5・6・6・6本、50017は6・8・8・7本とややバリエーションがあり、刻み目の位置がずれるものもあっておもしろい。

2077溝 調査区中央部に位置する。主軸方位は東西で、長さ1.6m、両区合わせて幅22～37cm、深さは3cmと浅い。埋土は灰オリーブ5Y4/2粗砂混じりシルト。出土遺物なし。03-1-2区第1面でも多数検出されたいわゆる素掘り小溝であろう。

2075・2076ピットは、調査区中央部、2077溝の北西側数10cmにあり、およそ30cmの間隔で東西に並ぶ。

2075ピット 北西側を側溝で破壊されたが、平面円形と推定される。直径19cm、深さ32cm。埋土は灰オリーブ5Y4/2粗砂混じりシルト。出土遺物はない。

2076ピット 直径19cmの平面円形。深さ30cm以上。埋土は2075ピットと同じ。出土遺物もない。

### (3) 05-1-2区第1層の遺物

磁器2片、陶器1片、瓦2片、瓦器・瓦質土器7片、須恵器128片、土師器425片、弥生土器8片、滑石原礫1点、焼土塊1点、計575点出土した。

磁器・陶器は現代のもの。須恵器・土師器はほとんどが細片であるが、古墳時代～古代の所産と考えられる。

### (4) 05-1-2区第2面の遺構と遺物(図348・写真図版144)

砂層上面である。

面の高さはT.P.+3.1～3.2mで、北西部がやや低いが、その他大部分はほぼ平坦である。検出遺構は、土坑1基、ピット8個、落ち込み2か所、計11か所(遺構番号2079～2089)と05-1-1区から続く2001溝状落ち込みである。

2001溝状落ち込み 調査区東端に位置し、東接する05-1-1区に続く。主軸方位は南北で、検出長12.5m、両区合わせて幅約1.2～1.4m、深さ34cm。埋土は、第1層下層と同じくぶい黄褐10YR4/3シルト。当05-1-2区での出土遺物は、須恵器2片、土師器5片、計7片。05-1-1区と合わせると、須恵器6片、土師器5片、計11片となる。

2085・2086落ち込みは、調査区南部に位置する。範囲の広い2085落ち込みの中に、さらに深い2086落ち込みが存在する。

2085落ち込み この落ち込みの北辺はほぼ東西に、東辺は南北にのび、一見すると方形を呈する。しかし、仔細にみると、肩口は直線ではなく、人為的な痕跡は認めにくい。規模は東西5m以上、南北2m以上、深さ13cm。埋土は、第1層と同じくぶい黄褐10YR4/3シルト。出土遺物は、瓦器1片、須恵器11片、土師器137片、弥生土器2片、計151片。細片が多いが、古墳時代から古代の所産と考えられる。

2086落ち込み 2085落ち込みの中でさらに落ち込んだ部分である。東西1.9m、南北1.1m以上、深さ19cm。埋土は、第1層と同じにおい黄褐10YR4/3シルト。出土遺物は、須恵器1片、土師器149片、弥生土器2片（2片ともV様式）、計152片。

2089土坑 調査区南東部、2001溝状落ち込みと2087落ち込みとの間に位置する。平面不整楕円形で、東北東-西南西を主軸とする。長径92cm、短径73cm、深さ5cm。埋土は暗灰黄2.5Y4/2シルト。出土遺物は、瓦器1片と須恵器1片のみ。

ピットを8個調査した。

2079ピット 調査区中央部に位置する。北東側は調査区外だが平面隅丸方形と推定され、南北97cm以上、東西75cm以上、深さ4cm。埋土は、暗オリーブ褐2.5Y3/3シルト。出土遺物は、土師器8片。高杯脚部を1片含むが、いずれも細片で時期は特定できない。

2080～2083ピット（写真図版144） 調査区中央から北西寄りにある。2080ピットから南東に向かって、心々距離1.4mで2081ピットが、次いで1.1mで2082ピットが、そこから向きを南西に変えて1.1mで2083

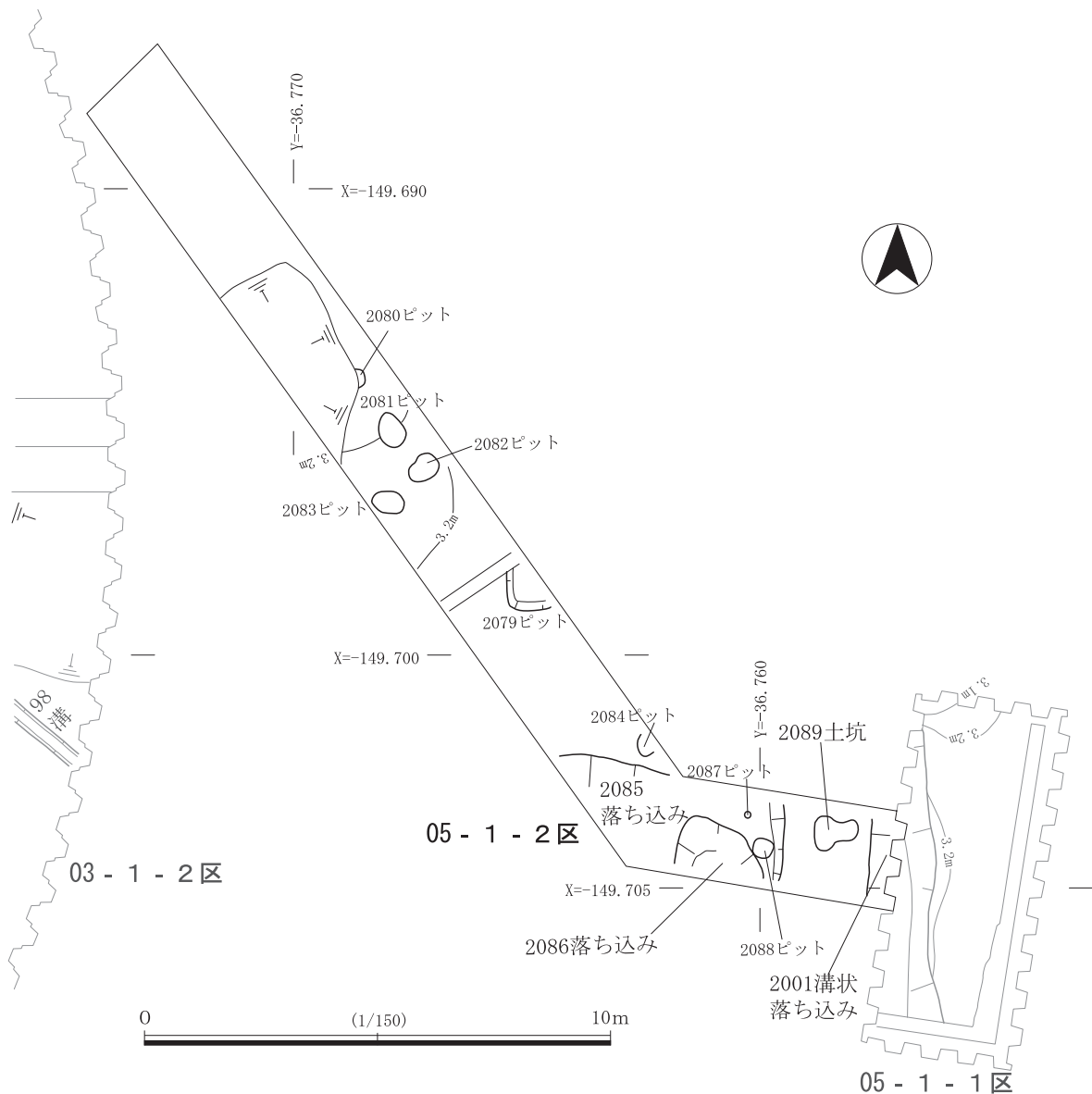


図348 05 - 1 - 2区 第2面

表20 05-1-2区 第2面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土 (土質の注記なしはシルト)	出土遺物点数					
				長径	短径	深さ		瓦器・瓦質	土師器	須恵器	その他	合計	
2079ピット	8L-7j	隅丸方	北	97	75	4	暗オリーブ褐2.5Y3/3		8				8
2080ピット	8L-7j	円?		36		13	灰オリーブ5Y4/2、細砂混じる		1				1
2081ピット	8L-7j	不整円		66	57	9	灰黄褐10YR4/2、細砂混じる						0
2082ピット	8L-7j	楕円	北東	86	52	11	灰黄褐10YR4/2、細砂混じる		5				5
2083ピット	8L-7j	楕円	東西	62	43	11	灰黄褐10YR4/2、細砂混じる		1				1
2084ピット	8M-7a	円?		44		13	オリーブ褐2.5Y4/3、黒褐2.5Y3/1のブロック混じる		2				2
2087ピット	8M-7a	円		17	15	4	灰黄褐2.5Y4/2細砂						0
2088ピット	8M-7a・8M-6a	円		46	41	11	黒褐2.5Y3/1		3				3
2089土坑	8M-6a	不整	東北東	92	73	5	暗灰黄2.5Y4/2	1		1			2

ピットが並ぶようにも見える。ただし、いずれも平面規模が比較的大きいわりには、深さがなく柱痕なども検出できなかった。

2084ピット 調査区南西部、2085落ち込みの北側に位置する。北東側は調査区外だが平面円形と推定され、直径44cm、深さ13cm。埋土は、オリーブ褐2.5Y4/3シルトに黒褐2.5Y3/1シルトのブロックが含まれる。土師器細片2片が出土した。

2087・2088ピット 調査区南東部、2085落ち込みの東部にある。

以上8個のピット個々のデータは、表20にまとめた。

#### (5) 05-1-2区第2層の遺物

第2面調査後、掘削限界のT.P.+2.7mまで掘り下げた。土師器23片が出土した。

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第163集

## 山 賀 遺 跡

—本文編—

寝屋川水系改良工事（一級河川寝屋川 新家調節池）に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2007年 9月28日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号



